KAIZO

改造

特別增大號

十月號

ヴァン・ダイン作・武田晃譯（最新刊）

僧正殺人事件

四六判四三五頁
定價壹圓五拾錢
送料貳拾錢

近代官能獵奇に疲れた讀書界に贈る此の清新、精鋭無比なる叡智の探綺。現代の古典探偵小説の最高峰！全歐を震撼させた大事件の描破!!

第二次黄金時代を世界探偵小説界に將來せんとする鬼才S・S・ヴァン・ダイン。氏は現代科學の精粹を携げて、E・Aポウを脚下に、彼のヂュパンを壓死せしめ、歐米百萬の讀者を唸らせて悠々、渡來した。夜來の煙草の煙りの中でさへ犯人を掌中一塊にする、靜かなスマートな現代の天才的英雄だ。最早彼の大作に「探偵小説」の制限を置くの要はない。現下總文壇に異常なる衝戟を與へ變革を迫るだらう。

□「僧正殺人事件」に到つて漸く圓熟を示せる作者の構想、計畫の巧緻は腹立たしい迄に讀者を引摺る。歐米犯罪史上不朽の名を殘した彼の「クリップン事件」「引裂きヂャック」「青髯鬼」にも比す可き、大胆、周到の順次的殺人の紛然錯然たる跡をたどるヴァンスの冷靜なる推理。衒學とまで紛ふ博學、天文學、美術、相對性原理、非ユークリッド幾何學、フロイドの分析、そして俄然意表に出づる決論。

□原著者ヴァン・ダインの巨作は「キャナリー事件」「ベンスン殺人事件」「グリン家殺人事件」「スキャラブ殺人事件」等悉く歐米に於て十萬、數十萬の讀者を持つた。且つ之の内の二・三は發聲映畫として日本にも來たことは未だ記憶に新らしい所であるが、飜譯としては唯一つ「グリーン」が某誌に連載されたことあるのみでそれすら完譯とは言へず、映畫も亦失敗に終つたのは原著者の筆致の周到複雜は終に抄譯や脚色を以つては窺へないと言ふことの爲餘りにも驚嘆す可き此作者の名が日本讀者の一部にしか知られてゐないのは遺憾である。

□原著者ヴァン・ダインは此の日本譯の出版に多大の興味を持ち譯者に衷心からなる十數言を寄せ完全な譯者を得て完譯の出づるを悦んでゐる。

發行所　改造社　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二

コロンビア大學教授 ボッフォード著・竹林熊彦譯

西洋古代史概說

定價参圓五十錢
送料二十六錢

最新刊

本原書はボッフォード氏獨特の鋭き史眼を以て多方面の史實を基礎として詳述せる點、史壇に一新味を加へたものとして、目下英米一般社會殊に學生間で盛に持囃されて居るもの。譯文平易流暢、誰が讀んでも面白いが分けても文檢受驗者・學生に取つては此れ程適切な參考書は一寸他に無からうと思ふ。

（内容大要）第一編東方諸國民。第二編ヘラス。第三編ローマ。附錄 重要事項年表。

京大教授 經濟學博士 本庄榮治郎著
日本交通史の研究
定價三・五〇 送料・二六

農學博士 澤村康著
中歐諸國の土地制度及土地政策
定價五・〇〇 送料・二六

農學博士 小野武夫著
日本農民史語彙
定價三・五〇 送料・二四

文學博士 松本亦太郎著
諸民族の藝術
定價七・〇〇 送料・三六

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番



改造十月號目次

最後の五分間

秋晴れの澄み切つたる空に見入る。胸がスーッとする程爽快だ。何故さうか。此天を指して何處迄行つても遮ぎるものがない自由豁達の心持ちが愉快なのだ。

海岸の突鼻に立つて、目の屆く限りの海を眺める。飽くことを知らず、貪り眺める。矢張、何處迄行つて遮るものがない所が吾々を魅惑するのだ。

吾々は平和の世界に憧がれて、海軍々縮條約を締結せしめた。それが日本に來ると、海軍々令部が反對し、樞密院が文句を付け、折角の條約が成立するか否か、今はそれさへ判らなくなつた。何たる暗礁の多き日本の政海ぞや。

吾々は金解禁から、經濟の立て直しをなさんと志して出發した。すると不景氣風が吹き起つて、金解禁の逆戻り迄唱へられる。其不景氣の過程に怪しからぬ事があつたと聞く。日本の財閥の或るものは此不景氣襲來を見込んで、生糸の先物を安く賣崩し、莫大無限の儲けをしたと云ふ。得意先きである米國の絹織業者は必ずしも原料の暴落を喜ばない。彼等の商賣が出來ないからである。日本は何故さう生糸を賣り崩すかと抗議を申込む程であつた。併し日本の資本家は、そんな抗議には耳を傾けなかつた。日本の養蠶家と製糸業者が如何に苦しむかを顧慮しなかつた。只賣崩して大に儲けた。不景氣は他にも原因があらうが、かうした資本家の利己的活動が日本の不景氣を深刻にした。

曾て大隈重信は、彼れが樞密顧問官であつたとき、自由黨の板垣退助と會見し、其爲めに免官になつた。樞密顧問官ともあらうものが政黨員と會見するのは不謹愼だと云ふのである。今は時勢が變つた。まさか政黨員と會見した位で免職には出來まい。だが、人物の流動が容易になるのは時勢の進歩だが、固定し切るのは動脈硬化だ。だから、度々、物が引つかゝる。これは外科手術を必要とする。尤も彼等、樞密院の老人連は大低七十を越してゐる。自然の壽命から云へば、勝利は吾々のものだ。吾々は悲觀しない。

不景氣も不健全な産業に對する外科手術だ。外科手術を始めて、患者が悲鳴を舉げるから中止するのは愚だ。或は答へて云ふ。手術はよいが、患者が死んでは、元も子もなくなるではないかと。そんなに痛ければ中止もよからう。だが、最後の五分間だ。茲に日本の國民性が試驗されてゐる。そして吾々は悲觀しない。



經濟危機の成熟

猪俣津南雄

一

あの歴史的な昭和二年も終りに近づいて、日本資本主義經濟はパニツクの混亂から一先づ回復し、物價の落勢も頓挫の傾向を見せた頃に、『物價はもう底を入れた』との見地から、景氣の立直りを豫言する諸論說が現はれた。吾々はその時、『經濟危機は克服されたか』といふ問題を根本的に提起して、斷じて否なと答へたのであつた。この解答は正しかつた。事實に於いて、日本ブルジョアジーがその意圖する如く經濟危機を克服し得るか否かは、はつきりと指摘したやうに、先づ金解禁の成否にかゝつてをり、特に解禁以後の發展にかゝつてゐたのである。

世界資本主義が沒落期に入り込んだ世界大戰末において、日本資本主義のうちに激成された深大矛盾は、大正九年恐慌となつて爆發して、一九二〇——二一年の世界恐慌の導火線の一をなした。日本ブルジョアジーは、九年恐慌の進展を最小限度に喰ひ止めはしたが、それは畢竟、恐慌の暴力作用によつて解消

せらるべき矛盾を解消せずに、その矛盾をたゞ潜在化して持ち越すことにすぎなかつた。かうして持ち越されて絕えず恐慌へと爆發せんとしつゝあつた深大矛盾は、爆發を抑止し矛盾そのものを克服せんと意圖するブルジョア的手段・方法——わけても金輸出禁止＝インフレーションの諸方策——の本質の故に、却つてます〳〵擴大再出產されざるを得なかつた。かゝる諸矛盾の不可避的な爆發として金融恐慌が荒れ狂つてからは、矛盾の或るものは一應は稍々緩和したけれども、再び恐慌の進展を阻止せんとしたブルジョアジーの諸方策——即ち「特融」等、等——はまたもや新しき矛盾をつくり出し、その作用を通じて古き諸矛盾をも更に激化せしめずにはゐなかつた。即ち、生產力對市場の矛盾（生產過剩となつて現はれる基本的な矛盾）はなほ一層の深大化を見たし、この基本的矛盾から派生した矛盾——生產資本の利得能力喪失と擬制資本膨脹との間の矛盾——はます〳〵尖銳化した。

——恐慌に爆發せんとする深大矛盾は絕えずそこにあつたのだ。そして爆發はたゞ金輸出禁止＝インフレーション政策によつて辛うじて喰ひ止められてをつたのだ。が、はじめは爆發を抑止する手段たり得たところのこのブルヂョア的方策は、それ自身がもつ矛盾の故に、やがては爆發を促進するものに——即ち反對物に——轉化せずにはゐなかつた。かゝる轉化とともに、インフレーション政策の諸破綻は前面に押出され、デフレーション政策への轉換は不可避となつてきた。昭和二年の金融恐慌は、ブルヂョアジーによる意識的な政策轉換の企てを導火線として爆發した。（ブルヂョアジーの意識的な企圖に對する資本主義の盲目的な×××の勝利！）。この爆發によつてインフレーション政策の破綻は完結し、矛盾の激成によつて金解禁はもはやブルヂョアジーにとつて命令的なものとなり切つた。金解禁への公然の決意と準備とその決行とともに資本主義日本を襲つた現在のこの恐慌は、必然に爆發すべきものがたま〳〵金解禁を契機として爆發したものに外ならぬ。かくして、デフレーション恐慌の一變種たるこの解禁恐慌は、その本質においてはまさしく生產過剩恐慌で——基本的矛盾の爆發——あらねばならぬ。

以上の諸點は、吾々が本年四月末から五月末にかけて書いた一論文（改造）六・七月號所載「沒落への轉向期に立つ日本資

本主義」)において詳論されてゐる。同じ論文において吾々はまたかう書いた。――『解禁恐慌は、若干の「準備」の下に「意識的」になされた金解禁を契機として發展し、從つてその發展は多かれ少なかれ豫期されてゐたゞけそれだけ、然らざる場合の恐慌に比して尖鋭さを減ずる傾きはあらう。恐慌(クライシス)は必ずしも×××を伴ふとは限らない。が、しかしまた、一の恐慌が××××をもつて始まらなかつたとしても、それが發展して一定の深度に達してから××××を持つことはあり得る』。『解禁恐慌が尖鋭さを缺くかも知れぬといふことは、此の恐慌は深刻なものではない、といふことには決してならぬ。まさにその××である』。

吾々は、かゝる一般的な見透しの下に、當面の恐慌過程を分析し、『――物價の關する限り……（また）生産の觀點より見ても、解禁恐慌はすでにかなりの深度に達してゐるに拘らず、どん底まではなほ大なる距離がある』といふ結論に到達した。そして吾々は更に次の諸點を強調したのであつた、――『全面的なデフレーションの進行は、諸矛盾を激化せしめ、……支配的金融資本は、解禁恐慌の衝撃から金融機構を防衛すべく、一切の努力を傾注し、あらゆる犧牲を強ひつつあるに拘らず、矛盾はまさに金融部面に成熟しつつある……』。『解禁恐慌に處するブルジョアジーの意圖は、金融機構の安全を保持しつつ、自己の利害中心の整理を徹底せしめ、合理化による資本利潤の高率化を實現せんとするにある。そして恐慌の負擔をすべて勞役者大衆の肩に轉嫁せんとするにある。がそれに對して、デフレーションの矛盾の展開は、彼等の打克ち難き障害をつくり出しつつある……』。『金融資本が、金融機構防衛のために、あらゆる犧牲を他の經濟諸部面と勞役者大衆とに強ひつゝある間に、金融資本支配下の重工業……の受ける打撃もますます強まつて來た。金融資本の商業部門も、これに劣らない、――いかに今それが辛辣な投機で儲けてはゐるにもせよ！』。『だが、最も重大な矛盾は階級對立の形態をとつて尖鋭化しつつある。小生産者の大量的沒落、農民の窮乏化と反抗、特に失業者軍の加速度的增大。』

二

當時において吾々が論定したやうに、現在の解禁恐慌は、

(一)金輸出禁止＝インフレーション政策の下に擴大再生產されて異常に深大化した諸矛盾を、暴力的に解決せんとするものであり、且つ(二)解禁による正貨流出といふ異常なモメントの作用があり、しかも(三)相對的安定化の時期を終つて「第三期」に轉入したる沒落資本主義を襲ふところの世界經濟恐慌と合流する。從つて此の恐慌の過程は、恐らくはなか〳〵長期にわたつて多くの曲折を持ち、その營む作用は、全體として、經濟的にも社會的にも極めて××でなければならぬ。

解禁恐慌の暴力作用は、人工的につくり出されてゐた市場を、現實の消費力・購買力にまで收縮せしめ、且つ「不自然」に膨脹した生產及び生產設備をも、その水準にまで切下げやうとする。この作用は、先づ急テンポの物價下落を通じて起つた。

(一)急激な物價下落、(二)解禁による急激な金流出、(三)世界恐慌及び支那印度動亂による海外市場の崩壞――この三つの主要モメントの作用は、日本資本主義の流通・生產・信用の各部面にわたる全般的な急收縮を押進めた。かゝる過程は、それ自身すでに經濟危機成熟の過程でなければならぬ。だが、さうした急收縮と、そこに生ずる矛盾の尖銳化は、經濟の諸部面に、一樣に同時的に生じはしない。物價の下落や株價の下落には曲折があり、金流出には中斷が生じた。が、それにも拘らず、かの四・五月頃に徵候として端緒的に金融部面に現はれてきたところのデフレーションの諸矛盾は、その後加速度的に激化した。八月末から九月初にかけての諸狀況によれば、解禁恐慌の過程は、まさに恐慌深度の深まりによつて今や質的に新らしい段階に入り込んでゐる。

三

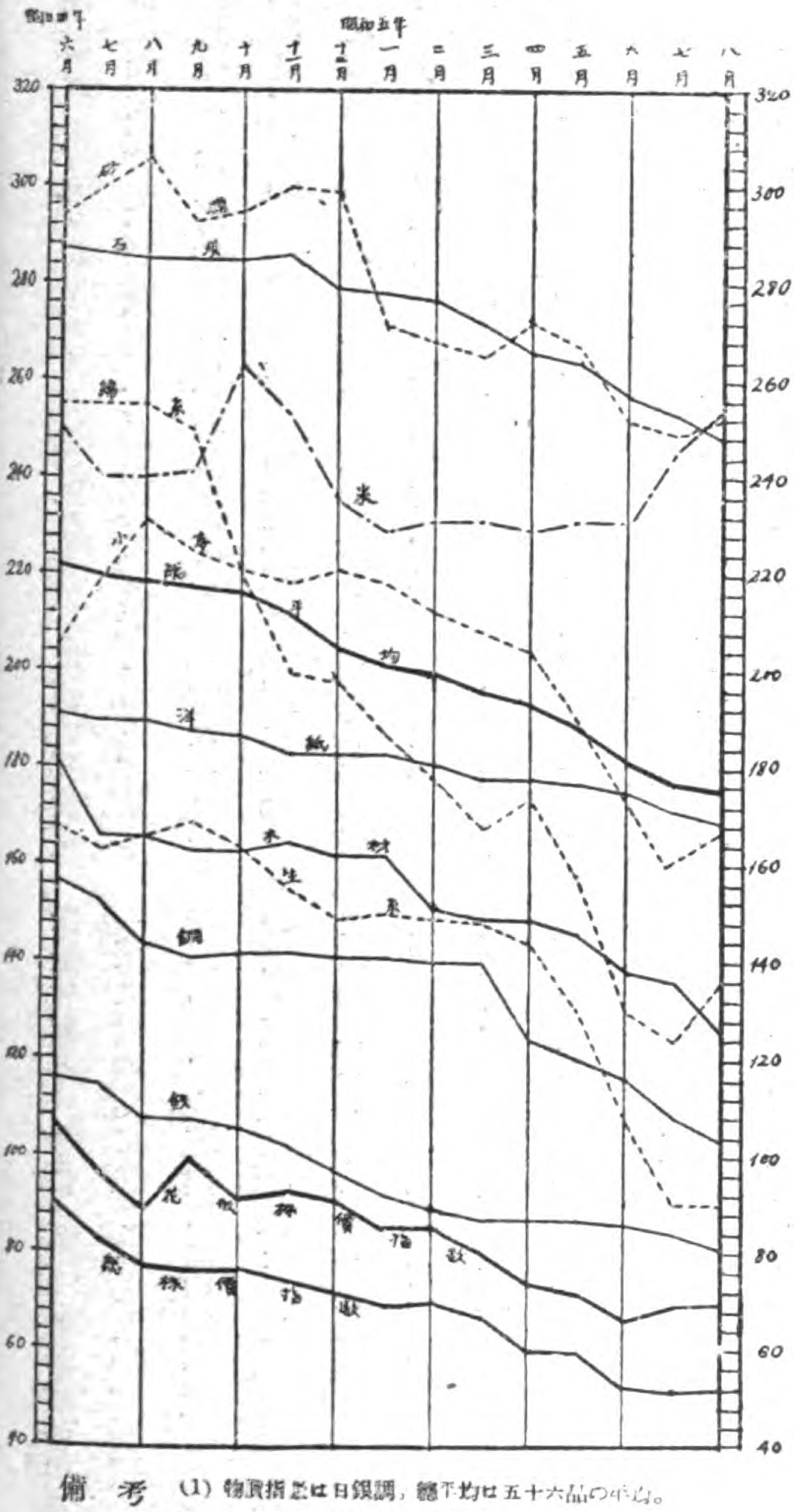
先づ物價を見よう。

日銀の物價指數は、昨年六月から本年四月末までにすでに一三%の下落を示し、同じ期間における爲替相場の騰貴率を凌駕して、ブルジョアジーの期待――即ち金解禁による物價下落は爲替の騰貴率以上に出まいといふ期待――を見事に裏切つたが、その後も更に下落を續け、特に六・七月の暴落(六%)により、八月末指數は昨年六月に比して遂に二一%の低落を見た。但し、八月の下落率は微弱であつた(〇・六%)この「下げ足」

鈍り」は、一般的には六・七月の下げ足が非常に早かつたことの小反動であり、特殊的には米、小麥、砂糖、綿糸その他十五品の反騰に負ふてゐる。これらの商品のうち、米の騰貴は主として季節的なそれであるし、砂糖、小麥、綿糸その他は七月までの下落のテンポが最もひどかつたものである。(グラフを見よ)。

八月における物價の落勢頓挫の傾向に對し、ブルヂョア的觀點から觀察する者の意見が餘りにもまち〳〵なのは、特徴的である。或者はそれを生産制限・販賣協定等の價格調節策の奏功に歸し、海外物價の立ち直りによつて或は國内物價の低落もおよそこの邊で喰止められるのではないかといひ、或者は貿易關係から見て日本物價はそれからまだ餘程下落する可能性があるといひ、或者は全く見當がつかないといふ！

物價及び株價の下落
(指數による)



備考　(1) 物價指數は日銀調，總平均は五十六品の平均。
(2) 株價指數は東京株式取引所調。

生産制限その他のブルヂョア的價格對策が或る程度まで物價下落を阻止してゐることは言迄もない。グラフを見ても分るやうに、下落のテンポの最も緩漫である石炭、洋紙、鋼等は、金融資本の直接支配下に最も強固なカルテルをもち、八月に反騰した砂糖、紡績、毛織、モス、

等は、最も强度の生產制限を遂行したものである。けれども、生產制限によつて物價下落に對抗し得るのは、或る程度までのことであり、且つ一時的のことである。過剩の生產設備・生產能力を現實の社會的消費力にまで切下げる恐慌の强制作用が强ければ、生產制限カルテルそのものが破壞される。その危險に脅えたればこそ、ブルヂョアジーは懲り性もなくインフレーション政策に走つたのだ。だが今となつては、インフレーション政策への逆戾りは致命的である。しかも、前記の諸部門こそは、まさに、國內的にも世界的にも驚くべき生產設備過剩に陷つてゐるのだ。生產制限や販賣協定ぐらゐで、この世界的な物價下落を喰ひ止め得ると思ふのは、逆上したブルヂョアジーの幻覺である。

解禁恐慌過程が進行しはじめて以來、商品の生產と供給は、操短や棚上げや「賣止め」や販賣協定やによつて相當減少したけれども、生產設備・生產能力はまだ殆んど減少してゐない。主要諸產業の多くの會社は增產計畫の實現によつて却つて生產能力を增してゐる！

が、それだけではない。日本の物價は、國際的に見てまだなか〳〵高い。七月における日本の金物價は一三九で、米國の一二〇を超えることなほ一九ポイントである。日本の金物價は到底米國の物價水準にまでは低落し得ないであらう。（そこに日本資本主義經濟の最大弱點の一つがある）。しかし、本年七月を前年六月に比較して、米國物價の下落率は一七％に及んだのに、日本の金物價の下落率は一一％に過ぎない。金輸出の自由が續く限り、そして物價の國際的平準作用が行はれる限り、日本物價は、少くとも今後この作用による六、七％の下落は不可避的である。

四

吾々は前の論文において、昭和五年から六年の解禁恐慌期における重要商品の生產の減退は平均一五％以上にのぼり、日本資本主義はこの恐慌期を始點として停滯的テンポの發展段階に轉入するであらうことを論定した。

生產に關する最近の數字はまだ不明である。しかし五月乃至七月の統計においても、生產の減退はすでにはつきり現はれた。その頃には、銅、鐵、鋼の生產は前年同期に比してなほ多かれ少なかれ增加してゐたし、石炭、洋紙、綿布の生產の減退

第一表　生産の減退と滯貨の增加

	本年		前年同期	比較
綿絲の生産(梱)	一七七、三八八	(七月)	二三四、七〇七	(減)二三%
同　輸出	四、一一九	(六月)	四、六〇四・五	(減)一一%
同　滯貨	一〇、七七一・五	(七月)	一一、六三〇・五	(増)八五%
綿布の生産(千平方碼)	一一九、一九七	(六月)	一二四、六四五	(減)四%
同　輸出	一一八、〇八九	(七月)	一五四、八五九	(減)二四%
洋紙の生産(千磅)	一一三、七五〇	(六月)	一一八、一三五	(減)五%
同　滯貨	二〇六、三三〇	(六月)	一九〇、五九四	(増)八%
洒粉の生産(千瓩)	三、三三五	(六月)	四、四八二	(減)二六%
同　輸出	一五一	(六月)	二〇九	(減)二八%
洋灰の生産(千樽)	一、八一六	(六月)	二、二三五	(減)一八%
同　滯貨	一、三九二	(六月)	一、三一八	(増)六%
銅の生産(噸)	六、六七四	(四月)	五、六三〇	(増)一九%
銑鐵の生産(瓩)	一三八、八七九	(五月)	一二八、七六八	(増)七%
鋼の生産(瓩)	二一〇、六九一	(五月)	一九七、六三二	(増)七%
鋼の滯貨(瓩)	一八一、五〇八	(七月)	一六五、七二〇	(増)九%
石炭の生産(千瓩)	二、四三四	(六月)	二、五四一	(減)四%
同　滯貨(千瓩)	二、八二〇	(六月)	二、三八八	(増)一七%

はなほ僅かであつたが、綿糸、洒粉、セメントの生産減退は一八%乃至二六%にのぼり、紡績會社以外の小企業家による綿織物の生産は前年に比して半減した。生糸の生産額は不明だが、その輸出(數量)は三〇%減少した。

だが、以上のところでは、一般に、生産の減退はまだ充分に現はれてはゐない。市場收縮と物價下落の作用は、生産の減退よりも先づ滯貨の增加を惹き起した。前年同期に對する滯貨の增加は、綿糸二一%、洋紙八%、石炭一七%、等、いづれも生産減退の率よりも大きい。銅や鋼の僅かばかりの生産增加は、直ちに滯貨の激增となつて現はれた。更に、綿布、洒粉、(恐らくはまた生糸)にあつては、生産の減退はまだ輸出の減退よりも少なかつた。かうした事態は、ヨリ以上の價格の下落と、それによる生産のヨリ以上の減退とを、必然ならしめる。さればこそ、カルテルを持つ重要産業部門はこぞつて高率の操業短縮を繼續し、紡績、絹紡、洋灰、過燐酸、等は種々なる形態で操短を擴張し、砂糖は大量の棚上げを、硫安は「賣止め」を、餘儀なくされたのだ。まつさきに輸出向輕工業を襲つた恐慌の浪は、最近に至つて全く重工業——石炭、鐵、造船——を呑みつ

くした。ヨリ以上の物價下落によつてます〳〵生産の減退を來たすのは、むしろこれからでなければならぬ。

こゝで吾々は、重要商品を生産する諸産業が、いかに恐慌と戰つて敗れたかを一瞥しておかう。

いち早く恐慌に襲はれていち早く絲價補償法をものにした製糸資本家は、價格下落による損失負擔の大部分を、養蠶農家に轉嫁することによつて恐慌を切り拔けようとした。お陰で養蠶農家は非常な窮境に陥つた。がしかし、糸價の下落は止まず、四月からまた釣瓶落しに落ち込んだ。この賣崩しの立役者は、アメリカ投機師のジヤーリーだと、宣傳されてゐる。たが、彼に對して日本のために防戰買ひをでもやるかのやうに期待されてゐた日本の大投機師三井物産は、逆にジヤーリーと轡を並べて賣崩しの尖端を行き、近頃のボロい儲けを懷に入れたのだ。おかげで賃銀不拂ひに悩み拔いた揚句、製糸工女は大量的に失業し、「歸農」した。繭は更に暴落し、農家は窮乏のドン底に沈んだ。製糸資本家に一億圓餘を融通した銀行は、正金銀行を筆頭に、巨額の回收不能に陥つた。そのうちどれだけ多く政府の負擔――即ち國民大衆の負擔――に轉嫁すべきかが、いま資本家諸公によつて「研究」されてゐる。糸價の下げ足は八月に入つて鈍つたが、これは歐洲向輸出の增加傾向と、米國のストックの減少傾向とに負うてゐた。が、九月に入つて米國消費高が豫想を裏切つて少いことが判明するや否や、糸價は再び下げ始めた。日本生糸の生産能力は內外の平均的需要に對して八萬釜の過剩を持つと言はれてゐる。無數の小製糸家を「豫備軍」として持つこの産業部門は、彼等の沒落を犧牲として市場の收縮に順應する殘忍な能力を比較的多く持つのだが、しかし、それだけにまたこの部門の大資本家は絶えず膨大な增産計畫の實現を焦つてゐる。最近數ケ月の米國の生糸ストックは、前年同期に比しても減つてはゐるが、熱病的な投機景氣をもつた昨年に比すれば實際の社會的消費量そのものが激減したのをどうすることも出來ない。おまけに、米國市場への支那糸の進出が目立つ。日本の蠶糸業は、まだ危機を脱したとは思はれぬ。

他方には、人絹の競爭が激烈だ。巨大金融資本の投資による新興の人絹工業のみは、この恐慌のまつただなかに發展をつゞけ、盛んに生糸の領域を蠶食しつゝある。

紡績資本家は、操短一點張りで押通して來た。七月には、二

第二表　世界各國紡績の操短

國別	四年下半期	五年上半期
イギリス	七・〇九週	一〇・七七週
ドイツ	二・三六	二・〇七
フランス	一・三七	二・四一
ベルギー	一・三二	二・一九
イタリー	三・九三	一・六〇
オーストリア	八・一九	五・四四
日本	三・〇九	八・五六
支那	二・一三	三・五一

(備考)、半ケ年二十六週のうち休機せる週數を示す。
一週の操業を四十八時間と計算す。

割七分五厘のカルテル操短に追加して、自由操短が決行された。この生産制限に、銀塊相場の落付きや米綿減收の豫想などが加つて、八月の綿糸價は反騰し、資本家の採算は、四五月頃のやうな採算割れのひどさはなくなつた。今までのところ、紡績カルテルは恐慌の衝撃に耐えてゐる。しかし、紡績生産能力の世界的過剩は餘りにも著名である。第二表のやうに、昨年六月以來世界のどこでも、大量の生産設備を故意に立ち腐れにさして來たにも拘らず、綿製品の價格は底拔けの暴落を續けたのだ。だから、日本においても、採算の僅かばかりの回復がすぐに供給過剩(八月)となり、九月初にはまたもや綿絲價を崩してゐる。そこでまた、紡績カルテルは二割七分二厘の操短を更に三割五分にまで擴張することは餘儀なくされた。けれども、内外の——非常に制限された——社會的消費力の實際の少なさに適應しようとすれば、三割五分操短の生産制限ぐらゐで足る筈はない。しかも紡績カルテル加盟會社の少なからざるものは、すでに三割五分の操短にすらも堪えかねてゐる。ストックの値下り損と換算割れと生産制限とは、加盟會社六十社のうち二十四社の上半期決算に損失を計上することを餘儀なくさせた。この決算に現はれた各社配當平均率は九分だが、これは明治四十三年下半期の平均配當率以下であり、大正七年上半期のそれの六分の一に落ち込んでゐる。損失を計上しなかつた大會社の配當も、實は蛸配當にちがひない。最近には特に金融難が深刻化して來た。弱小諸會社が「淘汰」される危險線が近づけば近づくほど、紡績カルテルの動揺は免かれぬ。

紡績會社以外の小機業の手で生産される綿織物は、多數機業の沒落によつて生産が激減し、八月の生産減少は前年同期に比して五割二分五厘に及んだ。しかし、モスリン工業は、有名な

「洋モス」の整理その他によつて過剩の生産能力が切下げられたのに加へて恐慌期における需要品質の低下に幸されて、不況の影響外に立つてゐる。

砂糖も世界的生産過剩――。國内だけについて見るも、砂糖の消費量は恐慌期に入つて減退をつゞけ、砂糖會社は、大量の棚上げのみならず、防戰買ひ――賣るべきものを自分で買ふ（！）こと――をまでやつて、辛うじて八月に糖價暴落を喰ひ止めたが、その後外國糖の下落と、一大會社の破綻の徴候が見えたことのために、糖價はまたも崩れてきた。そこで九月からは更に分蜜糖二十萬ピクルの棚上げをやつてゐる。主要諸會社は、昨年頃から急激に「合理化」をやりはじめ、甘蔗原價を切下げて生産費低下の負擔を臺灣農民に轉嫁し、激烈な××××を惹き起してゐた。今や世界恐慌＝解禁恐慌の暴風に吹きまくられて尚ほも生産費切下げを强行せんとしてゐるが、農民搾取の最大限度は既に到達されてゐる。

小麥も世界的生産過剩。最近の情報によれば、一九三〇年度における北半球主産地の小麥實收高は、昨年度とほゞ同額だが、南半球主産地における收穫豫想は前年度よりも二億ブッシエルの增收で、しかもアメリカ、カナダ、ロシア、濠洲、アルゼンチン、等の主産地の輸出餘力は十一億ブッシエルに達する。この小麥は、去る六月にすでに戰後の最低價格（八〇仙臺）に落ち込んでゐたのである。

人肥も世界的生産過剩。最近における肥料市價の下落は、前年同期に對し、豆粕は二五％、硫安は三〇％といふひどさである。豆粕の下落は、近時の農民購買力の激減にも拘らず、上半期の輸入が激增（一二％）したことによる。硫安の下落は、周知の如く昨年以來外國品のダンピングがあつたのに加へて内地資本家までが增産したからである。硫安資本家は、二月から五月の急角度の下落に驚いて、關稅引上げの策動をやつたがものにならず、外國硫安會社と呼應して「賣止め」（！）を決議し、實行した。だが、こんな「對策」は、たゞ恐慌の激流に押流される運命だけを持つ。恐慌の進展によつて金融が否應なしに逼迫梗塞し、「銀行屋さん」の眼が光れば光るほど、「賣り止め」にする資金難は致命的となる。すでに代表的な肥料會社の一つは、膨大な社債の償還期を切拔けかねてゐる。過燐酸の市價はまだ前年同期の位置を保つてゐるとはいへ、本年上半期の輸入

は前年同期よりも四二%の激增を來たしてゐる。

五割一分五厘の操短をやつて生産制限の「トップを切つた」セメント・カルテルは、それ自身早くも崩壞狀態におちいつた。その最大會社は、自己の競爭會社の背後にある銀行の一味から「きれいに見放され」、自己の關係銀行（一大銀行）と共に××の××に立つてゐる。

二大金融資本コンツエルンの統制下にある强固な洋紙カルテルは、輸出プレミアムを拂つて、過剩製品を海外市場に捨賣りしつゝ、二、三割の生産制限によつて、國內市價の下落率を平均物價の下落率以下に喰ひ止めて來た。だが、こゝにも夥しい生産設備過剩がある。（洋紙の生産能力は最近六年間にほゞ二倍に增大したが、平均的需要の自然增加はその半分にも達しない）。おまけに恐慌期に入り込んでからは、需要の絕對的減少が生じさへした。しかるに今やまた增産計畫が實現して、新工場の操業が開始され、新らたに月額五百萬封度の供給が加增されやうとする！　こゝでもまた、××に瀕した大企業はもはや銀行側から見放されてゐる。彼等はますます手持品の投賣りをやらずにはゐられなくなるだらう。

五

上記の諸產業は、比較的早く恐慌に襲はれたゞけに、八月には一見小康を得たかの如き外觀を呈したものも少くなかつたが、重工業の狀態は恰度その頃から格段に惡化した。

重工業の打擊が比較的おそく現はれたのは、（一）日本の重工業諸部門は國內市場を主たる市場としてゐるからであり、（二）石炭の外は高率の保護關税で防衞されてゐるからであり、且つ（三）高度の獨占を持つからである。

石炭は、關税を持たぬ代りに、安くて質のいい撫順炭の輸入を制限してゐる。三井・三菱の二大コンツエルンが八〇%の支配權を握る此の產業はインフレーション時代において早くも合理化を遂行し、一方では生産費を切下げ、他方では生産能力を增大させた。しかし彼等の獨占は、炭價を釣上げることに成功し、他のすべての產業の犧牲において、獨占利潤をあげてゐた。昨年十一月の平均物價の指數は二一一に下つたのに、炭價の指數は二八六の高位を維持し、この七月においても、平均物價指數の一七七に對してなほ二五三を保つてゐる。恐慌期に入

つてからは、更に、一割の送炭制限と、南支・南洋方面へのダンピングとによつて、炭價の下げ足を緩漫化することに成功してゐたが、しかしストツクは累月増加した。「東洋經濟新報」は八月末のストツクが三百萬噸にのぼるであらうと推定して炭業不況の深刻化を論じてゐたが、七月末のストツクは早くもこの推定數量を突破して三百七萬二千噸に達した。これは、前年同期の貯炭に比して殆ど三〇%の激増である。不需要期の頂點たる八月末の貯炭は更に增大してゐるにちがひない。需給のバランスはもう完全に破れてゐる。カルテル內の小炭坑は「任意操短」（！）をやつて沒落へと追ひやられるであらう。獨占資本は、獨占利潤を失ふであらう。石炭業の近狀は、恐慌の全面的な深刻化を、集中的に表現する。わけても、海運と鐵道とが深い不況に沈んだことを、はつきりと反映する。

古河・住友兩コンツエルンの獨占下にある銅鑛業は、ずつと前から慢性的不況に襲はれてをり、たゞ、恐ろしく高い關稅に防衛されて合理化をやることが出來たのだ。銅資本家は、恐慌が來てからも、獨占價格から引出した利潤の一部をさいて歐洲その他でダンピングをやり、三月までは銅市價を維持してきた。しかし、米國の銅の崩落のためにダンピングが利かなくなるや否や、銅價は急角度の下落をやり、三月末から八月末までの五ケ月間に二六%も低落し、なほも下落をつゞけてゐる。

鐵鋼業も、銅と同じく、早くから國際的不況に襲はれてゐた。むろん世界的な生產過剩からである。日本の鐵鋼業は、周知の如く、國家資本が壓倒的優位を占めてをり、それと結びついた三井・三菱・大倉・滿鐵の資本の獨占下にある。この部門も、關稅や補助金の手厚い保護の下にいち早く合理化を遂行した。

銑鐵は絕えず印度銑鐵の競爭に惱まされて來たが、恐慌期に入つて後は特に甚だしく、不況の全般的深刻化と相俟つて內地銑鐵のストツクは激增し、八月末のストツクは四十萬噸（！）に達した。かくて、「八月上旬にはすでに、本溪湖製鐵所が百五十噸爐の火を消したが、更に東京日日（九月五日）によれば『現狀のまゝで推移せんか、年末には各社ともに鎔鑛爐を半減せざるを得ぬ苦境にある』。『當業者間には此際むしろ共同的に或程度の鎔鑛爐の火を消すと同時に、インド銑と妥協提携し、市價釣上げの方法をとる以外に方策なしと、提携說を力說するものが現はれるに至つた』。

が、此の事態の直接的な原因は、鋼材の世界的暴落にある。鋼の内地價は、これまで、五割の減産と關税と八幡の獨占力とによつて急落を免れてきた。が、しかし、ヨーロッパ製鋼カルテルを破壞するまでに暴落した鋼鐵の國際相場は、日本關税のハンデキャップを蹴飛ばすほどの安値に落込んだ。ために、日本の鋼獨占は、暴落の外鋼が侵入し得ぬやうに鋼價格を設定すれば、いくら關税を織り込んでも、ひどい採算割れを免れなくなつたのだ。鋼材拂下値段に關する官民協議會は、すでに二回まで決裂し、八月十五日以來、鋼は全く「暗相場」の混亂におちいつてゐる。鋼獨占の見事な崩壞！

吾々は、「國産品愛用」の宣傳が、關税引上げの前提にすぎないことを指摘したが、鋼關税の引上げと銑鐵關税の設定は、たゞ時日の問題になつてしまつた。この鐵鋼關税をめぐつて金融資本と商工業資本の對立が激化するだらう。

かうした鐵鋼業の不況に、解禁恐慌＝世界恐慌後の一般的原因の外に、震災後の復興建築があらかた終つたことや、デーゼル船の建造が一段落を告げたことに基づいてゐる。造船界の不況は、七、八月の繋船續出を見た海運界の極度の惡化によつて、また一段と深まつた。各造船所は、新船舶の建造が激減した上に修繕さへも滅多になく、採算を無視した注文爭奪戰をやつてゐる。三菱造船所は數千人の職工を馘つた。川崎造船は「アイドル・システム」を言ひ渡した。同時に一方、政府を先頭に、造船所の大合同がもくろまれたが、二三の大經營のバランスシートの大穴のために纏まらぬ。金融資本は「時機を見て」積極的に動くであらう。

海運界についても同様である。『窮餘の合同談が進んでゐる』。減配の郵船株は三十圓を割り、無配の商船株は二十圓を割つた。七月の繋船は三百六十七隻八月中旬の繋船は三百八十お隻、十七萬七千噸そして九月初旬の繋船は實に四十萬噸に達した。言ふまでもなく、船舶の過剰はつとに世界的として知られてゐる。戰前から最近までの間に、世界の貿易は僅か七％しか増加してゐないのに、世界の船舶數は六〇％近く増加した！

海運＝造船の發展こそは、日本金融資本が最後的にかけた期待であつた。今の井上藏相は、曾つてこの期待……それはわけても郵船會社と造船業と鐵鋼業とを支配する三菱コンツェルンの期待であつた──を、巧みに代辯して斯う言つた──、

『今後日本の外國貿易は輸出超過とはならぬ。海外放資も不可能である。貿易外の受取勘定も段々減る。斯う言ふ國際金融の現狀の下に、如何なる方法によりて之れを改善して三億圓の金を捻出し得るかと言ひますと、日本の海運業を奬勵するより外に其の途はないと考へます。……四億五千萬圓といふ……可成巨額の金を、日本は、船に放資してゐるのであります。さうしてこの船は、現在においても殆んど繋船してはをりませずに皆相當に活動してゐるのであります。……日本は、海運業をもつて世界に活動し得ると致しましても、その根本となります造船業がこれに連れなければならぬのでありますが、……日本の造船術は決して世界に劣りませぬ。……造船所に投資してある金は、總計致しますと三億五千六百萬圓といふ高でありまして……もしこれに各海軍要港の造船設備に費しました金を入れましたならば、日本で一番大きい工業と言つて宜いやうなものになるのであります。……日本に海運業が盛になれば、從つてこの造船業も盛になる。……造船業の性質は、綜合工業といふべきものであります。……一千萬圓の軍艦を拵へますれば、造船そのものは僅かに三百萬圓であつて、七百萬圓といふものは他の工業を盛にして繁昌させる意味になるのであります。……工業を保護します場合には、集中して保護するといふことが非常に必要である。……(造船業が)すでに綜合的の工業である以上は、これを保護するといふことは即ち日本の工業の保護にもなるのであります。……』(「我國際金融の現狀及改善策」二四〇——二四八頁)。

此の最後的な期待と夢は、はかなくも裏切られたのだ。たゞに、海運と造船とが容易に脱け出せぬ不況のドン底に落ち込んだといふだけではない、井上藏相を立役者として遂行された金解禁を契機としての恐慌そのものが、今や日本金融資本の中心的弱所を暴露するものとなつたのだ。彼等は、一切の障碍を押しのけて重工業の保護を強行するではあらう。だがそれは、今ははや×××な××への直接的準備の一に過ぎない。

六

一企業の總資本中の固定資本の割合が多ければ多いほど、スタンデング・コストは大きい。スタンデング・コストが大きければ大きいほど、企業は、操業短縮＝生産制限に耐へる力が減

する。日本において、いま、カルテルによる生産制限をもつて此の恐慌期を切り抜けやうと試みてゐる諸企業は、たいがい高率の固定資本を持つてゐる。輕工業と言はれる紡績でさへ、(エコノミスト誌によれば)、運用資本中に固定資本が占める割合は大戰直後の四割七分から現在の六割五分に高まつてゐる。日本の諸カルテルが、現行の操短率乃至はそれ以上の操短率の生産制限を長くつゞけることを餘儀なくされゝば、既成カルテルの多くのものは崩壞するであらう。現在のカルテルのやうに、多數の加盟會社を持ち、少なからぬ「弱體會社」を含む場合には、なほさらさうである。崩壞への徴候はすでに現はれてゐる。

上半期における殆どすべての事業部門の利益率は激減した。東京株式取引所調の利益率指數によれば、昨年下半期と比較した本年上半期の利益率は、洋灰業は六八%の低下を來たして首位を占め、海運・造船業は五〇%、紡績業は四九%低下してこれに次ぎ、その他食料品工業四三%、製紙業四二%、金屬鑛業四一%、化學工業三六%、等、等、殆ど例外なしに低下した。これほど低下はひどいのだが、しかし實際の利益率低下はもつとひどかつたのだ。右の利益率算出の基礎とされた帳簿面の利益金は、多くは「假裝益金」(エコノミスト誌)だつたからである。上半期末には、減配がやかましく言はれ、また事實において諸會社の壓倒的多數は減配乃至無配を決議したが、しかし配當率の減少は、利益率の減少よりも餘程少い。諸會社が假裝益金の假裝を剝がれ、蛸配當の必然的な行詰りに當面して、「軒並み」に損失暴露を餘儀なくされるのはこれからである。

敏感な株界は、これらを見越して崩落を續け、特に四月、六月、七月がひどかつた。(前掲のグラフを參照)。

が、むろんその間にも「波瀾」はあつた。そしてその波瀾のたわいのなさが面白い。六月中旬――政策轉換の聲に上放れ直ちに失望的反落。七月初――對策に期待し一齊高、對策を見くびつて一齊安。七月中旬――環境高に買氣をそゝる、賣物續かず軟化。賣戾人氣に一段安。七月下旬――政變見越しに買氣を呼ぶ。穩健な歩調で昂進をつゞく、漸く買疲れ、環境安で崩れる。八月初旬――紡績を中心に諸株引しまる。八月中旬――惡材料重なり株式またも崩る、手掛りなく、一高一低。八月下旬――日糖暴落で一齊に軟化、買氣地を拂ひ諸株更に低落。雜

株安一巡して小康。九月初――金融梗塞から暴落。等、等……

吾々は、前の論文において主張した――『解禁恐慌は、擬制資本そのものが激減せしめられて生産資本の利得能力相應の量に近づくまでは、擬制資本價格――株價――の壓迫を續けんとするであらう』。

吾々はまだこの見解を修正する必要を認めない。いかにも、主要株の大多數はひどい額面割れをやり、利廻りも恐ろしく昂騰した。だが、それらすべての異常性は、吾々がいま恐慌過程裡にあるといふ事實によつて説明される。そして、擬制資本そのものが激減せしめられて生産資本の利得能力相應の量に近づくまでには、前途なほ「整理の徹底」か、大量的な××かがなければならぬ。日本資本主義經濟は、いまその方向への一路を進んでゐる。

日本の財界が、八月の物價、八月の株價を底として次第に好轉するといふ見解は、最も主觀的なブルヂョア的觀察者でさへも、まだ公然と口にしてゐない。あらゆる現象が、恐慌深度のヨリ以上の深まりを指示してゐる。

物價についてはすでに述べた。八月の株價指數は微騰したが、九月一日現在の株價總價格は前月に比して二億二千四百萬圓の下落（一八％）をきたした。最近七月の不渡手形の前月に對する增加、八月の手形交換高の前月に對する減少は、恐慌期に入つてからのどの月の增加、減少よりもずつと激しい。計畫資本の減少は加速度的にひどくなつて來たが、八月の減少は段違ひにひどい（前月に比し四〇％の減少）。吾々は前の論文で、鐵道の減收が本年度内に三千萬圓を突破するかもしれぬといふ豫測はむしろ過小に失すると書いたが、果してその三ケ月後の八月末に早くも二千萬圓を突破した。今や、年度内の減收總額は五千萬圓以上と推定される。

だが、なかんづく、金融部面を見よ――

七

金融部面には、危機のモメントがはつきりと現はれて來た。わけても、この解禁恐慌の强制作用による特殊の金利昂騰と、同じくこの恐慌の强制作用による特殊の公債下落だ。

吾々が解禁恐慌過程の展望を書いた五月末には、これらのモメンにはまだ徴候的にしか現はれてゐなかつた。しかしそれら

は、デフレーションが金融部面につくり出した根本的な矛盾を形成することを吾々は指摘した。金利について吾々は言つた――

『解禁恐慌がつくり出したところの矛盾は、恐慌にうち克つために豐富な貨幣資本の必要が最も切實となつた恰度その時に、その最大源泉たる預金は否應なしに減少し、貸出の回收と手持證券の資金化とが不可能となつたことにある。』『現在の如き不況期に處するブルヂョアジーの常套手段は、低金利政策であり、その必要はます／＼死活的となりつゝある。英・米の中央銀行はすでに金利を引下げた。しかるに、日本ブルヂョアジーは、金利低下の要求がます／＼熾烈化してきた恰度その時に、「特融」六億の貸附に縛られた中央銀行を持ち、且つ正貨流出防止のために却つて金利を高めねばならぬといふ矛盾に陷つてゐる。市中金利は恐慌の强制作用によつて高まつて來た』。

東京コール翌日拂ひは年初以來ずつと一錢一厘で、期末の六月には一錢四厘に昂騰したけれども、七月には再び一錢一厘に下つた。しかるに八月末には、金融市場の閑散期としてコールの崩落を見るのを常とするに拘らず、一錢三厘に騰貴した。これはコール市場の特殊事情によるものではない。なぜなら、商業手形の割引歩合も同樣に昂騰した。この方は、一月から五月までは一錢一厘、六月から七月は一錢二厘であつたのに、八月末にはつひに一錢三厘に騰貴した。しかも九月に入つてからも金利はゆるまない。

この金利昂騰は、先づ第一に、解禁による金流出といふ異常な要因の作用によつて生じたのだ。

金解禁以來の正貨流出は、八月二十日までに二億四千萬圓に達した。この間に約四千萬圓の正貨流入があつたから、正貨準備は差引二億圓の減少を來たし、九月初の正貨準備高は八億六千五百萬圓に低下した。これに伴つて通貨は著しく收縮した。八月中の兌換券發行高は遂に十億二千萬圓臺にまで減少した。一月に比すれば約三億一千萬圓の收縮である。(かゝる顯著な收縮にも拘らず、日銀は、正貨準備の著減と巨額の特融とのために、一億四五千萬の限外發行をやつてゐる。)

正貨流出＝通貨收縮の金利への影響は、事の性質上、一定の期間をおいてはじめてはつきりと現はれた。正貨流出＝通貨收縮につれて次第に減少傾向を辿つてゐた日銀民間預金は、七月

末にはまだ二億圓臺を保つてをつたのに、八月末には俄然七千九百萬圓に激減した。この現象は、前記の金利昂騰とともに、恐慌期における特異の金融逼迫の始まつたことをはつきりと示す。

日銀民間預金の激減に相應じて諸銀行の手持現金がすつかり減つた。全國普通銀行は、六月末から七月末の間に二億一千萬圓の手持現金を失つた。東京社員銀行の八月末の手持現金は、六月末に比して約一億圓を減じてゐる。

かやうに日銀の民間預金の激減といふ事實にするどく表現された最近の金融逼迫は、二重の要因によつて激成されたのだ。一方には銀行預金の減少、他方には貸付の增大。

全國普銀及び東京社員銀行の預金は、それ〲、第三表の如く減少した。(上半期の初めには、預金減少は主として他方の小銀行に生じたが、下半期には却つて大きな銀行の方が目立つて來た)。こんなに預金が減るほどまでに、生産と取引と利潤と收入が萎縮しつゝある際に、ひとり資金の需要のみが增大する筈はない。しかるに、事實、東京社員銀行の貸付は却つて膨脹した(第三表)。このために、七月末の貸付は、預金一〇〇に對し

第三表　預金減少と貸附增加

全國普通銀行

	預金(百萬圓)	貸附	預金對貸附率	有價證券(百萬圓)	金銀在高
六月	八、九五五	七、二九五	八一・四%	三、一三九	六二〇
七月	八、七七八	七、二四三	八三・八%	三、一五九	四〇九
增減	一七七(減)	五二(減)	—	二〇(減)	二一一(減)

東京社員銀行

	預金(百萬圓)	貸附	預金對貸附率	金銀在高(百萬圓)
六月	二、二五四	二、二六二	一〇〇%	二五八、〇二〇
八月	二、〇四三	二、一六二	一〇六%	一五八、〇五七
增減	二一一(減)	一〇〇(減)	—	九九、九六三(減)

て一〇六に達した。この貸付の膨脹は全く貸付金の回收不能に原因する。即ち、貸付が次々と回收不能になつて固定し氷結したからに外ならぬ。從つて、この膨脹は、銀行の利益可能性ではなく損失可能性の增大を表現する。かくして今や、損失と共倒れの見透しにおいて産業資本と銀行資本の「融合」が深まつて來た。これは危險千萬な事態でなければならぬ。だから、金利はぐつと上つたのだ。

最近における金利の昂騰は、危險プレミアムが昂騰したので

ある。昂騰した金利は警戒的金利に外ならぬ。事實において、八月末には、大阪の大きな銀行の一つが急に×××××××××××市場をひどく緊張させた。これよりさき、同じ大阪の一銀行に對しては、×××・××××××さへが行はれてをつたのだ。事業會社が社債を起して資金を手に入れることは前から絕望化してゐたところへ、近頃の銀行はまた、社債の代りをつとめてゐた單名手形の回收を急ぎ、新しいものは殆ど取らなくなつた。しかるにまた、前からの社債や手形の償還期限は容赦なく迫つて來る。樺太工業や大日本人肥のやうに借替へも出來ず、拂込徵收も出來ないものがめつきり殖えて來た。日清は、最近、拂込徵收をやりかけて完全に失敗した。「買入減資」をやらうとした淺野セメントは、勸銀その他の銀行に融資を拒絕されて完全に行詰つた。一巨大銀行の東京本支店勘定における預金對貸出の割合は、××××といふ驚くべき高率にのぼつてゐる。等、等……。そこへまた、東京のシンジケート銀行が、——大阪のことに驚きでもしたかのやうに——突然、當座貸越日歩を引下げて、『何か特別の理由でもあるのかと、餘計な心配をさせてゐる。』

産業資本家と銀行資本家とが、否應なしに追ひこめられて來た金融梗塞の窮地の全場面に、誰れが經濟危機の成熟を見ずにゐられやう!?、産業資本家と銀行資本家、——この平常の紳士的友人達は、いま、貸せろ貸せぬ、返せ返さぬの爭ひを、命がけでやつてゐる。それが金融梗塞なのだ。彼等の眼中にはたゞ資本と利潤だけがあるといふ誰でも知つてゐることが、金融梗塞の根抵なのだ。×××××の資本主義は、その矛盾を爆發させる一時期には、すべての人間を原始的・自然力的な存在に還元せんとする——。

八

だが、今後さらに金利が昂騰し、金融困難が尖銳化するかどうかは、主として三つの事情にかゝる。(一)預金のひきつゞく減少と、(二)回收不能貸付の增大、——この二つは、諸物價と諸事業とに關して前段に書いた吾々の見透しが間違つてゐない限り、必然的に生ずる。さうすれば、銀行の融通能力がますます減少するのと、危險プレミアムがます〳〵高まるのとによつて、金利は更に昂騰せざるを得ない。(三)正貨のひきつゞく流

出もまた、もちろん、銀行の融通能力を減少させる。しかるに、海運不況の深刻化は、貿易外の受取勘定を激減せしめるし、貿易それ自體は非常に惡い。正貨はどうしても流出せずにはゐない。

貿易の減少は、三月——一五%(對前年同期)、六月——三三%、八月——四〇%、とますますひどくなりつゝある。上半期における入超は、前年に比して二〇%の減少に過ぎなかつたのに、下期の出超は、前年より四一%も減つてゐる。本年の總入超は——植民地を除いても——八月末までの差引累計で、一億八千萬圓にのぼつてゐる。おまけに、下期の出超は八月中旬を頂點として早くも遞減し始めた。(八月上旬千二百萬圓、中旬千七百萬圓、下旬八百萬圓、九月上旬千五百萬圓)。今後の出超はますます細り、十月一杯で止まるであらう。海外市場は、實際、少しもよくなつてゐない。秋の景氣は立直るといふ米國ブルヂョアジーの宣傳がまた頻りに入電されてゐるが、何でも大きく樂觀したがるフォードに言はせると、十月といふ月は景氣を直すのに一番いゝ月だがしかし今年はまだいけないさうである。——貿易關係の正貨流出は、十月から十一月にかけて復た始まるであらう。

出超期にも拘らず日銀正貨準備の減少を惹き起したところの海外放資による正貨流出は、ずつと續いてゐる。この異常な金融逼迫の中に獨占的金融資本はわざと外債を買ひ、金を流出させて『世間を騷がせてゐる』といふことは、資本主義の矛盾と××××を餘りにも特徴的に暴露する。この特徴的な正貨の流出は、『東京市内某有力信託會社の調査によれば』(八月二九日時事)、解禁以來八月末までにすでに八千萬圓(!)に達し、九月に入つてからも續いてゐる。そこで、××××は「不可解の經路」によつて正貨の兌換と現送の役割を引受けてゐるナショナルシチーその他の外國銀行當事者に逢つて懇談した、と「東京日日」は報導した(九月六日)。しかし、もしさうなら、どの道餘りよくないことだから、××としては打消さねばなるまい。今では、單に「財界」がひどく金流出に神經を尖がらせるといふだけではなく、一部の者が持ち始めた、×××××××、すでに表面に現はれてきた。九月二日の新聞は書いてゐる——、年初以來の外債投資は『如何なる程度まで國内財界の不安を懸念する資本逃避の意味を含んだものであるかは判明しな

かつたが數日前某外國銀行大阪支店に對して、某富豪より百萬弗の弗幣定期預金を申込んだ』。この妙な預金者は、日本の銀行のやうに四分五厘の預金利子ではなく、外銀の二分の預金利子に滿足したのであつて、これは全然利廻り採算を無視したものだ——と。

御用銀行の正金は、解禁以來、爲替相場を正貨現送點以上に釣上げて金流出を喰ひ止めやうとしてゐるが成功しない。八月初以來、やつきになつてやり出した賣出動が、成功しない。爲替相場が正貨現送點より半ポイントか一ポイント低いために、妙な金流出が止まないのだ。これは、畢竟、正金の資力の行き詰りから來る。製糸資本家その他への融資の巨額の氷結を持つ正金は、在外資金に行き詰り、爲替銀行としての大事な武器を失つた。おまけに、政府・日銀の在外正貨は、利拂ひその他退つ引ならぬ經常的必要を充たす最小限度にまで涸渇して、正金に拂下げる餘力を失つた。しかるに、正金が向ふに廻す外國銀行は、豐富な在外資金を持つて、正金よりもよい條件で爲替をとる。そこで、外債放資をやる三井・三菱・住友等の「民間」爲替銀行は、外銀と結んで、正金の防戰賣りに立ち向ふ。だから、爲替は正貨現送點以下に低迷し、金流出は止まないのだ。この事態のうちに、米國金融資本の金獨占の「横暴」な姿と、日本金融資本の利口で馬鹿な姿とが、浮彫的に現はれてゐる。正貨流出はつゞくであらう。

だが、三月程前に吾々が力說したやうに、『ヨリ以上の正貨流出は低金利政策を全く絕望的ならしめるのみでなく、×××××××××××××××××。——今や、ます〳〵さうである。

九

最後に公債の下落がある。

吾々は、公債についてはかう言つた——『一般に、今の銀行の手元が、僅かな貸出增加や預金減少によつて、異常に逼迫し易いのは、金融恐慌以來、銀行資金の著大な部分が有價證券に注ぎ込まれたことによる。今や、株券は暴落し、公債の市價は、非募債主義や政府・日銀の買出動などの有らゆる手段によつて辛うじて維持されてゐる』。そして『公債市價維持こそが、金融機構防衛策の一大支柱なのだ。』(拙著「沒落資本主義第三

期」一一四一――一四四)。その後も、民政黨内閣は、特に巨額の公債を持つ金融資本家のために、公債市價を維持することにあらゆる努力を注いできた。けれども公債は下落した、――五月の九二圓から八月の八九圓へ。(第四表を見よ)。

第四表　公債市價の下落（甲號五分利國債）

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
最高	92.8	92.3	92.4	92.5	92.5	92.4	91.9	91.7
最低	92.2	92.1	92.0	92.2	92.0	90.1	91.1	89.5

公債市價維持の最も有效な――しかも殆んど唯一の手段たる日銀の防戰買ひは、なぜ效がなかつたらうか？　思ひきつて買ひ得ないからである。徹底的に買ひ煽つて公債市價が高まれば、公債利廻りが低下する。利廻りが低下すれば、資本家は内國債を賣つて外國債に乘り換へる。

海外放資――金流出！　だから日銀は思ひきつて買へないのだ。だが、かくして公債市價が下つて行けば、銀行・會社は増擔保と資産評價の切下げを餘儀なくされ、一直線に××恐慌へと押しやられる。

國内金利が高まれば高まるほど、公債は下落せざるを得ない。地方銀行は、もう公債を賣り始めたかもしれぬ。さうならますます低落する。今までのところでは、米國の金利の異常に安かつたことが、公債下落と金流出の矛盾を緩和してをつた。だが、米國金利が上り始めるや否や、この矛盾は急速に展開するだらう。

その上にもし、民政黨内閣が金看板の非募債主義の放棄を餘儀なくされるとすれば、公債の下落は火を見るよりも明らかである。しかも、實質上の放棄はすでに始まつてゐる。恐慌過程の進行による國家財政の破綻は非募債主義の放棄を迫つてゐる。

金流出と金利暴騰と公債下落と――、この××の三位一體は、同時に××の三位一體でなければならぬ。かくして今や、すべてが經濟危機の成熟の畫面である。(一九三〇・九・一〇)

分配論の諸型

——或る日のＡＢの對話——

堀經夫

一　問題の在處

Ａ　僕は近頃經濟學に興味を覺えて、少しばかり經濟理論に關する書物を漁つて見たのだが、どうも腑に落ち兼ねる節が次々に出て來るので、只今一寸停頓の狀態にあるのだ。で今日は、其の中の一つについて君の教へを乞ひ度いと思つて態々やつて來た次第だ。忙しからうが暫く時を割いては吳れまいか？　素人臭い質問で甚だ恐入るが。

Ｂ　いやさう言はれると、實際僕も耻しいよ。僕だつて何も知りやしないんだ。

Ａ　まあさう謙遜するな。兎に角僕の疑問とする所を聞いて、果してそれが質問らしい質問であるかどうかをだけでも、判斷して吳れ給へ。

Ｂ　宜敷い。その程度のことならば、僕にも出來さうだ。で、その疑問といふのは？

Ａ　では尋ねるが、……笑つてはいけないよ……

Ｂ　笑ふどころか、大いに傾聽するよ。

Ａ　……一體、君、經濟總論とか經濟原論とかで通常取扱はれて居る分配論といふのは、あれで可いのかね？

Ｂ　これは大きく出たね。だが、分配論はあれで可いのか、といふ君の質問の意味は？

Ａ　はゝあ、君の問返しは尤もだ。實は自分でもこの質問の趣意を簡單に何う言ひ表せば一番良いのかが分らないから、漠然とこのやうに切出して、君がこの間から受ける印象を先づ探はうとしたのだ。

Ｂ　いや、これは中々質が悪い。油斷がならないぞ。だが僕にも、

君が分配論はあれで可いのかと問ふその眞意が那邊に在るか、を全く領會し得られないでもない。察するに君は、經濟原論に於ける一つの篇の題目としての分配論といふものと、其の中に說かれてある內容、卽ち勞賃、利潤、利子、地代に關する諸々の說明とに、何かしらぴつたり合はない所があるので、分配論はあれで可いのかと切出したのであらう。え？

A　圖星だ。全く君の言ふ通りだ。言ひ換へると、所謂分配論の中には、分配の過程及び分配の各形態──各種の所得と言つても宜敷いのかな？──は取扱はれて居るけれども、肝腎の分配の意味及び其の總括的結果の考察といつたやうなものは全く論ぜられてゐないやうに僕には思はれるのだ。僕はこの點──さうだ、今良い言葉を思ひ付いた、「分配を論ぜざる分配論」と言つたらどうだらう？──僕はこれが氣にかゝつて仕方がないのだ。だが、こんなことは專門家にとつては何でもない問題なのかね？　彼等にはそれは全く氣にかゝらないのかね？　若しさうだとすると僕の問は愚問だといふことになるのだが。

B　いや、どうして、どうして。君の質問の趣旨がこのやうに明かになつて見ると、それは實に立派な質問なのだ。愚問どころか大した質問だ。實を言ふと僕もこの點を少しばかり考へて見たことがあるのだ。僕が君の圖星を指したといふのも、身に覺えがあるからだ。

A　成る程、それで萬事氷解。

二　キャナン教授の分配論

B　おいおい、未だ萬事は氷解しないぞ。氷解したのは問題の在り處だけさ。

A　では聞くが、昔から僕等──これからは僕等と言つてよからう──僕等の疑問と同じやうな疑問を懷いた學者があつたかね？

B　あつたともさ。

A　多數あつたかね？

B　いや多數あつたわけではない。若し多數あつたとすれば、君が勉強して讀んだといふ書物中の少くとも分配論の部分は、もつともつと違つた內容を盛られてある筈であり、君や僕に疑問の餘地を殘さなかつたであらう。

A　成る程さうに違ひない。では誰か斯かる疑問を出した學者の所說を先づ聞かせて與れ給へ。

B　宜敷い。君は英國の經濟學者キャナンといふ人のことを知つて居るかね？

A　あゝ知つて居る。あの『富』といふ題目で邦譯されて居る書物の原著者だらう。

A　さうだ。彼はなほ其他に『經濟原論』(Elementary Political Economy)——この本の邦譯もあるといふことだ——、『生産論及び分配論の歷史』(A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848.)——この本の後半も『キャナン分配論』といふ表題で邦譯されてゐる——、又最近(一九二九年)には『經濟學說評論』(A Review of Economic Theory)などの名著を出してゐる。で、日本には可なり前から紹介されてゐる學者なのだ。僕も滯英中オクスフォードに一日彼を訪れたことがある。へはロンドン大學の經濟學名譽教授だ。

A　そのキャナン教授がどうしたといふのだ?　矢張り僕等と同じやうな疑問を懷いたとでもいふのかね?

B　正にその通り。教授は英國經濟學史に造詣の深い人だが、この豐富なる學說史的知識を用ひて、先きに述べた各種の著書の中で「分配らしい分配論」——とでも言ふかね——それを樹立しようと努力して來たのだ。僕等の疑問の解決にとつて、教授のこの努力の跡を辿ることは大いに參考になるよ。

A　『富』といふ書物の初版が出たのは確か一九一四年だつたと記憶するが、もう一つの『經濟原論』が最初出たのは何年かね?

B　それは古いことで一八八八年なのだ。

A　そんなに古いのか。で、その本の大さは?

B　これは百五十頁位の小版の本だよ。

A　そんな小さな本で『經濟原論』は恐入るね。さうさう、君は其の原名をElementary Political Economyとか言つたが、それから見ても又本の大さから見ても、『經濟學初步』と言つた方が良いのではなからうか?

B　所が必ずしもさうではないのだ。その本の第二版(一八九七年)の序文の中に、そのことがちやんと斷つてあるのだ。「自分が本書にelementaryといふ言葉を冠したのは、子供や受驗生の爲めの手解きの本であるといふことを示すためではなくて、elementaryといふ文字を本來の意味に使つて經濟學の本質的部分(the essential parts of political economy)が其の中に含まれて居るといふことを示すためである」、といふ意味のことかね。だから僕は簡單に『經濟原論』と言つたのだ。

A　それは分つた。して、その本の中に既に僕等の問題が取扱はれてゐるのかね?

B　話は少々逸れたが、未だ若かりしキャナン教授は、この入門書ならざる原論を出版することによつて、「經濟學說の大部分の論じ方を變更しよう」——これは彼が近著『經濟學說評論』三〇〇頁で述べて

居る言葉なのだが——と勇敢に出て來たわけなのだ。しかも彼が其の取扱ひ方を改めなければならないとした主要なる部分が、分配論であつたのさ。まあ、言つて見れば、若き青年學徒の經濟學改革の野心といふ奴だね。

A　では、その野心の內容はどんなものであつたか、又教授の野心は成功したのか、それが聽き度いものだ。君の言ふやうに、僕にとつて大いに參考になりさうだ。

B　御希望によりそのことを少しばかり述べるとしようか。それに就ては教授自身の告白を述べるのが一番近道だ。

A　何でもよい。一つ分り易く話して吳れ給へ。

B　宜敷い。先づ教授の野心の成否を一口にいふと、只今までの所、それは未だ成功したとは言ひ得ないのだ。言ひ換へると、學界は未だ教授の主張を受容れないのだ。

A　變だね。何故なんだ？

B　變だかどうかは早急に判斷出來ないが、兎も角も一つには傳統の力に、又一つには分配論そのものを經濟原論の中より除き去らんとする一派の學者の出現に、禍せられて、教授の主張は中々認められないでゐる。教授は近業の中でそのことを歎いてゐるよ。少し長くなるかも知れないか、まあ辛抱して聽いて吳れ給へ。

A　謹聽するよ。

B　キャナン教授は、其の最初の著作『經濟原論』の中で、分配論なるものを、「私有財產及び交換の制度が行はれて居る限りに於て、個々人の所得の相對的又は比較的大さは如何なる原因によつて決定されるか、を研究するもの」、として居る。其の意味は、分配論は、例へば勞賃なら勞賃、利潤なら利潤の大さは如何にして決定されるかといふことを、孤立的又は絕對的に研究するものではなくて、（一）或る勞働者が他の勞働者に比してより多くの勞賃を得る原因如何、と言つた小さい問題から始めて、次に（二）一國の全年生產物が勞働を基礎とする所得と財產を基礎とする所得とに如何なる割合で分割されるか、と言つた大きな問題にまで及ぶものでなくてはならない、といふにあるのだ。「廣く言ふと、吾々は分配論によつて何故或る人々又は或る階級は富んで居り他の人々又は他の階級は貧しいかを知らんと欲するのである」、といふ意味のことを教授は述べて居る。つまり、相對論であり比例論であるのだ。

A　成る程、それは面白い。それで甫めて分配論が分配論らしくなつたといふものだ。僕も經濟原論に關する書物を勉強して分配論に及んだ時に、何かしら題名が內容にそぐはないやうに思はれたのだが、今キャナン教授の主張を君から聽いて、やつと其の本體を掴み得たや

うな氣がする。だが、キャナン教授のこの主張を學界は殆ど承認しなかつた、と君は言つたねえ。

B うんさうだ。教授は其後も同じ主張を繰返したのだが、自身で言つて居るやうに、「經濟理論を改造しようとするこの野心的な試みは殆ど注目を惹かなかつた」のだ。

A 其後教授はこの主張をどういふ風に展開させたのだね?

B それを詳しく述べると大變な時間をとるから、單簡にしておくが、教授は大に著した『生產論及び分配論の歷史』（初版は一八九三年）の中でもこのことを主張して居るのだ。この書物は、少くとも分配論に關しては、寧ろ教授の學說をより強く表現する爲めに古い學說を檢討する必要から書かれたものである、といつて差支ないのだ。教授は、ジョン・ステュアート・ミルに至るまでの多くの學者が主として力說した分配論の內容——それは、教授の言葉に從へば、頭割り勞賃、百分比利潤、及び英町當り地代（wages per head, profits per cent, and rent per acre）のみを取扱ふのだ——それは似て非なる分配論（pseudo-distribution）であつて眞正の分配論（distribution proper）ではない、と言つて居る。眞正の分配論は「一社會の總生產物又は總所得が諸階級及び諸個人に分割されるその割合を決定する原因を取扱ふものである」と教授はいふんだ。

A 明快だ。至極同感だ。

B 仍でキャナン教授は、この眞正分配論の內容を二つに分けて、「全生產物の總勞賃、總利潤、及び總地代への分割」、即ち全生產物の諸階級間への分割、を取扱ふものと、「各種勞働者への勞賃の分配、各種資本家への利潤の分配、及び各種地主への地代の分配」即ち全生產物の諸個人間への分割、を取扱ふものとになしたのだ。無論、前に言つたやうに、この書物は學說史を取扱つたものであるから、今述べたやうな眞正分配論の二つの內容についても、たゞ從來の諸學者がこれ等を如何なる程度に論議したかを檢討したに止まり、體系的に自說を開陳することをしなかつた。だが、自說が出來てゐなければ、この檢討は不可能な筈だから、この書物を良く玩味すれば教授自身の分配學說も自ら分るといふもんだ。

A 然り、然り。所で、この檢討に當つて教授は先輩の學者の中に多少は自說を支持すべき學說を懷いてゐる者を發見したのだらうか?

B 無論發見したよ。

A それは誰だね?

B 誰といつて或る一人の學者の學說の中に自說を全部見出したわけではなくて、數名の學者の學說中の處々に之を見出したのだ。

A でその數名の學者といふと?

B　其の筆頭はかのディギド・リカアドウさ。

A　ははあ、出た出た、君の御得意のリカアドウか。

B　まあさう冷かすなよ。だが、何と言つたつて、リカアドウは偉いんだから仕方がない。僕だつて何も根據なしにリカアドウを擔いで居るわけではないんだ。

A　僕は素人だから良くは分らんが、吾々の問題についてもキャナン教授や君が引合に出す以上、リカアドウといふ人は餘程偉い人に違ひあるまい。

B　僕はさう思ふよ。所がね、餘談になるが、英國の經濟學界では英國の生んだこのリカアドウの評判がかのジェヴォンズ以來餘り良くないんだ。勿論それ以後も「リカアドウの復位」を要求する學者も出たには出たのだが、一般には良くないんだ。最近にも、王立經濟學會(Royal Economic Society)の總會――それは去る五月廿八日に開かれたが――その席上で、同會長H・S・フォクスウェル教授が「リカアドウ學派が英國經濟學に及ぼした不祥なる影響の二、三」("Some of the Unfortunate Effects on English Economics of the Influence of the Ricardians.")と題する講演をやる筈になつてゐたんだ。後報によれば、それはフォクスウェル教授病氣の爲め延期されたやうだが。何れこの講演は印刷されると思ふから、それを手にしたら讀んで御話しても良いが、兎も角も一部の學者はリカアドウ一派の學說は英國經濟學會に「不祥なる影響」を及ぼしたものと考へてゐるんだ。

A　で君はその點をどう考へる?

B　僕には今の所或る決定的な返答をこれに與へ得るだけの力がない。だが、少くとも今僕等及びキャナン教授の間で問題になつて居る點については、リカアドウは可なり徹底した見解を有つてゐたものと言はなければなるまい。殊にキャナン教授が第一に問題にした點、即ち「全生產物の總勞賃、總利潤、及び總地代への分割」といふこと、については、教授自身の認めて居るやうに、リカアドウ以前には勿論のことそれ以後に於ても、彼れの如く詳しくこれを論じた者は未だ無いんだ。

A　ではリカアドウの說は?

B　今これを詳しく述べると話が進まないから、それは後日のことにして欲しいが、要するに、リカアドウは、社會の進步につれて地代が益々大なる分前を取得するに至るから、勞賃及び利潤には益々小なる分前しか殘らないやうになること、及び勞賃及び利潤に對する分割の中、勞賃が益々大なる分割を取得するに至るから、利潤の分前が益々減少するやうになることを、かの勞働價値論から出發して理論的に結論しようとしたのだ。無論、この結論が正しいかどうかは問題だ。

併し何も角も、勞賃、利潤、及び地代の三所得形態を絶對的に又孤立的に論ずることなく、これ等を相互相對的に又比例的に論じたこと、及び其の爲めに價値理論を用ひたことは、リカアドウの最大特徴であり又最大功績であると言はなければなるまい。

A　リカアドウの名は、經濟原論の中で地代が論せられる場合に、屹度出て來るが、僕は彼が地代學說だけでなく一般分配論の根本問題についてもそのやうな獨特の說を吐いたとは知らなかつた。で、彼は良いにせよ惡いにせよ大なる影響を英國經濟學に及ぼしたさうだが、この分配論の影響はどうだつたんだ?

B　無論多少はある。併し彼れの直弟子たるジェイムズ・ミルやラムゼイ・マカロクでさへ、この點を殆ど受繼いではゐない。況んや之を展開させることに於てをや、だ。彼等は、矢張り師と同じやうに、「一國の全年生產物が勞働者、資本家、及び地主の間に分割されるその比例を取扱ふのが、分配論の役目である」、といつた意味のことを、分配論の冒頭には述べてゐるけれども、併し殆ど其の實を擧げてゐないんだ。

A　その邊の詳しいことは後日緩くり敎へて貰ふことゝして、さて眞正分配論の第二の問題、即ち各階級に屬する各人への分配、についてはどうなんだ?

A　これについては、リカアドウよりも寧ろアダム・スミスなどの方がより多く觸れてゐるやうだ。

A　さうか。だが今日は、分配論の構成を極く概括的に質すのが目的なんだから、其の一々の內容を聽かなくても可い。で、要するに、キャナン敎授は、眞正分配論の二大內容を一應學說史的に檢討し、其の中にこれの萌芽があることを說示し、さうして自說の中でこの萌芽を生長せしめようとしたわけなんだな?

B　先づさうだ。尙ほ、この『生產論及び分配論の歷史』は、其の出版當時は左程でもなかつたらしいが、一九〇三年に第二版を出した頃から、經濟學說史に關する名著の一として專門家の間に大いに注目を惹き始めた。而も分配論に關する敎授の檢討や態度が特に學界に認められたわけではないのだ。そこで敎授は、新興のアメリカ經濟學界に新分配論を提唱すべく、ハアバアド大學の『經濟學雜誌』(The Quarterly Journal of Economics) の一九〇五年五月號の卷頭に、「所得の分割」(The Division of Income) といふ論文を寄せた。これは今手許にあるから詳しく紹介してもいいが、其の內容は、要するに、前の『經濟原論』と『生產論及び分配論の歷史』とに盛られてあるものを一つに纏めたといふ程度のものであつて、即ち、一地代や利子や勞賃に關する現行のアカデミクな取扱ひ方は、世人が正に重要であると考

へて居る諸問題の解答に對して、少しも役に立つてゐない」ことを論評し、さうして尤に前の「經濟原論」に於ける總所得の分割に關する議論——それは前に言つたやうに二部分に分たれるのだが——を繰返して居るのだ。今この論文の結論だけを意譯して讀上げて見よう。

「勞働及び財產への分配並びに個々の勞働者及び個々の財產所有者への分配に關する二個の研究が、經濟理論中に適當な地位を占めるやうになると、經濟理論の一部門としての分配論は勿論現在の型とは餘程違つたものになるだらう。……一般勞貨や利子率や地代に關する研究、即ち各所得形態の性質又は大さに關する個別的研究は、分配論より除外されるだらう。これ等の個別的研究の大部分は本當は生產論に屬すべきであり、其の殘部は價値論に屬すべきである。尤も便宜上當分は分配論の後に置かれてもよろしからう。但し、一般勞貨や利子率や地代絕對量の諸變動は、必ずしもこれ等三つの範疇への所得の比例的分配に於ける變化とは一致對應しないのである、といふことさへ完全に明かになるならば、個々の所得に關する絕對的議論を經濟原論中の何處に置くかといふことは、大して重要な問題ではない。」

A　キャナン教授自身の學說の詳しい內容は分らないとしても、其の根本的機構は大體飲み込めたやうだ。で、次に出版されたあの『富』といふ書物も同じ根本方針に從つて書かれたといふわけなんだらう？

B　左樣、正にその通りだ。たゞ『富』に於ては教授の學說が一層積極的に若しくは建設的に說かれてある、といふ特色があるのだ。

A　それは面白い。幸ひ僕はあの譯本を有つて居るから、その積りで讀んで見よう。大いに得る所があるだらう。

B　さう爲給へ。だが、僕は何もキャナン教授の分配論の內容が完全無缺であると考へて居るわけではなく、又君に之を信奉しろと奬めて居るわけではないのだから、その點は誤解のないやうに願ふよ。僕はたゞ君のいふ「分配を論ぜざる分配論」に對して僕等同樣の疑問を發したる唯一の——寡聞なる僕だけにとつて唯一なのかも知れないが——學者としてのキャナン教授を紹介したに過ぎないのだから。

A　それは良く分つてゐる。だが、經濟學に入門したばかりの僕を捉へた最大疑問の一つ——僕にとつては確かに最大疑問の一つだつたんだが、實は君に一笑に附せられて仕舞ふだらうと思つて恐る恐る出した質問——それが、四十年以上も前にではあるが、英國有數の學者を捉へたと聞いただけで、僕は赤面を免れ得たと內心大いに嬉しくつてゐるんだ。その意味で僕はキャナン教授に感謝し敬意を表するよ。

B　はゝあ、それは君の勝手さ。

三　分配論の諸型

A　キャナン教授の分配學說はこれから一層深く勉强するとして、さて序でに、從來經濟原論中の一篇としての分配論に於て如何なる內容が取扱はれたか、又分配論そのものは最近如何なる取扱を受けつゝあるか、といふやうなことについて、もつと話しては吳れまいか？　問題からして分配論だ。少しは君の知識を分配して吳れてもよからう。

B　妙なしやれを言ふねえ。僕も未だこれ等の點を十分研究してはゐないんだ。生産あつての分配だ。十分の知識が生産されてゐないのに之を分配することは出來ないよ。偉大なる疑問を提出した君こそ、所謂分配論の內容を良く知つて居る筈ではないか。

A　いや僕の知識は淺薄極まるものだよ。僕はたゞ、最近或る書物の中の分配と題する篇を讀み始めた所、其の冒頭に分配と所得との意義が書いてあつて、それに、「自給經濟の下に於ては交易もなく分配もないが、分業が行はれ交易が頻繁となるにつれて自ら分配といふ現象が起り、既に社會に存在し又は新たに生産せられた財が社會の各員に分配せられる分量の多少は、專ら各自の購買力に依存するに至る。そして各自の購買力は主として其の貨幣所得の大小によつて定まる」、といふ意味のことが述べられ、さうしてそれに引續いて各所得形態、卽ち勞賃、地代、利潤、及び利子が個別的に取扱はれてあるのを見て、君のいふ「偉大なる疑問」を起しただけなのさ。卽ち僕は、分業と交易とが行はれはじめれば各個人の享受し得る財の分量が其の貨幣所得の大小に依存すべきことは無論認めるけれど、併し交易經濟が行はれるにつれて自ら分配といふ現象が起るといふことをどうもはつきり會得し得ないんだ。勿論著者の意味は、交易經濟の下に於ては、各生産者は或る財を自己の消費に充てる爲めにではなくて他人に分配する爲めに生産するのであるから、こゝに分配といふ現象が初めて生ずる、といふわけなんだが、さうだとすると、僕には分配といふ文字が——さあ、何と言つたらよいか？——つまり、餘りに狭く或は餘りに私的（といふと一寸變だが）であり過ぎるやうに感ぜられるんだ。尤も、一應かくの如く狭く考へておいて、次いで個々の小さい分配を綜合して社會の富の分配といふ大きな問題を論ずるのであるならば、異存はないんだが、その書物では分配そのものゝ說明はそれつきり出て來ないで、後は各所得形態の孤立的說明のみといふわけなんだ。何故もつと大きな分配卽ち社會の總所得の分配といふやうなことを進んで論じないのか？　と僕は疑ひを起したよ。

B　君の言ふことは良く分つた。これは君の言ふ「分配を論ぜざる分配論」の一つの而も最も普通の型なのだ。

A　他にもつと違つた型があるのか？　有ればそれを一つ話しては呉れまいか？

B　いや僕も分配論の型を各學者について調べ盡したわけでは毛頭ないが、一つ二つ思ひ出して見よう。一つ「分配論を取扱はざる經濟原論」といふのを述べよう。

A　分配論を取扱はないといふと、それは分配論の一種の型といふことにはならないではないか？

B　まあさう急がないで緩くり聽き給へ。成る程、「分配論を取扱はない經濟原論」には、その文字の示す通りに分配論はない。併しかゝる經濟原論を書く學者にも種別があつて、徹底的に分配論を排除する者と、篇別の中からは之を排除するけれども事實上分配を論ずる者とに分れる。前者は、勞賃とか利子とか地代とかいふもの——尤も利潤だけは別だが——それ等を總て價格に關する法則を以て說明しようとするのであつて、これによると、勞賃論以下各個の理論は、普通の商品の價格を取扱ふ一般價格理論に對する、特殊價格理論なる篇を構成することになるのだ。從つてこの種の學者の經濟原論中には分配論らしいものは全く見出され得ない。所が後者になると、所謂分配論を單に所得論といふ名目に改めるだけか、或はかく改めたものを更に流通論といふ非常に廣い範圍のものを含む一つの篇の中に編入するか、其の何れかの方法に出るのだ。第一の態度は、分配らしい分配を取扱はない點に於て、君の例示した學者の態度と殆ど變りないが、麗々しく分配論と銘打たないだけそれだけ正直だといへやう。次は第二の態度だが、これによると、「今日の社會に於ては一定の生産高が定まつて然る後に分配が起るのではなくて、一切の財は一方に於て生産せられつゝあると同時に、他方に於て分配されつゝあるのである。故に分配は生産物が流通の作用によつて社會各員の手に歸著するその行程をいふに外ならない」、との理由によつて、所謂分配論或は所得論は流通論の中に包含されなければならないことになるのだ。

A　所が、かくの如く流通論に編入された分配論或は所得論はこれ以上に分配そのものを論じようとしない、といふんだらう？

B　正に其の通り。

A　なほ其他に型はないかね？

B　有ることはあるよ。だが經濟原論と題した書物の中での分配論の型はそれ位にして置いて、次に分配論と題し分配を專門に取扱つて居る書物でこれがどう取扱はれて居るかを一瞥するとしよう。

A　それは一層面白い。

B　併し、僕等の問題については、それ等の書物も矢張り面白い解答を與へてゐないんだ。昔から分配論と題する書物を著はした人は、

英米の學者に特に多いやうだ。オリイム・トイスン(一八二四年)、リチャアド・ジョーンズ(一八三一年)、ジョウジ・ラムゼイ(一八三六年)などは古い方だし、ジョン・ベイツ・クラアク(一八九九年)、キリヤム・スマアト(一八九九年)、トマス・ニクスン・カアバア(一九〇四年)などは新しい方だ。何を分配論の眞正なる內容となすべきかといふ問題を別にして、以上の學者の個々の學說の內容を研究するならば、それは餘程面白いと思はれるが、この問題を標準にして考察すると、今言つたやうに、殆ど數へる所がないのだ。無論、分配論の本體は何かと問ふならば、彼等は、他の人々と同じやうに、それは年々の生產物又は富の社會各員への分割狀態を取扱ふものである、と答へたであらう。併し彼等の多くは、分配の行程卽ち流通を論じ、さうして分配の結果たる各所得形態をそれぞれ孤立的に說くだけであつて、或る國の年々の生產物又は富の全體がそれぞれの階級なり個人なりに如何なる割合で分割されるかといふことを國民經濟全體の立場から鳥瞰すると共に、これについて或る理論を說く、といつたやうなことを、殆ど試みてゐないやうだ。

A　君の擧げた數名の學者の中の誰か一人の研究態度を簡單に紹介しては具れまいか?　特に新しい學者の方を。

B　では、アメリカのクラアク教授のそれを約說しよう。彼れの『分配論』(The Distribution of Wealth)は邦譯されてゐるから、詳しいことはそれについて研究して具れ給へ。さてクラアク教授は勞賃、利子、及び利潤に關する限界生產力說の創始者として非常に有名なのだが、もつと一般的にいふと、限界生產力說といふ言葉が既に示して居るやうに、分配論を生產論と不可分離の關係に置いた點が、彼れの特色なのだ。さうして分配論を生產論に密接せしめた以上交易論をもこれに密接せしめたことは言ふまでもない所であつて、つまり彼れによると、生產はそれ自體の中に交易と分配との兩者を抱擁する所の一つの行程であり、それに對立する行程が消費であるといふわけになるんだ。尤も人と人との關係を觀るならば、生產は集團的作用であるに反し、消費は個人主義的作用であるから、兩者は同一平面上にないが、併し人の自然に對する關係から考へるならば、兩者は對立的であり等位的である、といつてゐる。

A　すると、クラアク教授は、先きに君が擧げた「分配論を所得論として流通論の中に包含せしめる」學者よりも、更に一歩を進めて、この流通論そのものを生產論に合體せしめた、といふのだな?

B　先づさうだ。だが、今分配論と生產論とだけについて觀るならば、クラアクはこれ等兩者を合體せしめたといつても、矢張り生產論を綜合的研究と解し分配論を分析的研究と解した點に於て兩者の區別

を立てゝゐるのであることを、忘れてはならないよ。

A　生產論は綜合的研究であり分配論は分析的研究であるといふ意味は？

B　それはからだ。卽ち、或る社會の全生產は各種產業の寄與によつてなされ、而して各產業は勞働者と資本家と企業者との合力によつて實行される。而もこれ等三種の合力者のそれぞれが寄與した分量を個々別々に秤量することが出來る——何故出來るかの說明及びそれに對する批判は、後日の問題にしよう——し、自由競爭が完全に行はれて居る限り、勞働の創造するものは勞働者に、資本の創造するものは資本家に、そして企業の創造するものは企業者に分與される傾向がある。かくて、三種の合力者の寄與を綜合的に觀る時に生產論が生じ、之を個別的又は分析的に觀る時に分配論が成る、といふのだ。又これと同じ意味のことを「分配論は畢竟特殊生產の研究である」といふ句で言ひ表はしても居る。

A　まだ腑に落ちない點もあるが、分配と生產とを聯結して考へた點は卓見らしい。だが併し、クラアク教授の說明及び證明を假りに全部認めるとしても、察するに、それによつて明かにされるであらう所のものは、個々別々の產業部門內に於ける各關係者への分配量及び分配比例を律する法則のみであつて、一般勞働者階級、一般資本家階級、一般企業者階級、及び——教授は何等かの理由によつて擧げないのだらうが——一般地主階級へのそれを律する法則ではなささうだね？

B　さうだ、さうだ。僕は今そのことを說明しようとしてゐたんだ。やゝ詳しく述べるならば、クラアク教授は、次の三者。卽ち（一）それぞれの生產群(producing groups)——例へば、綿布製造に關係せる總ての種類の人——、（二）第二次群(sub-groups)——例へば、綿糸紡績又は綿布機織に關係せる總ての種類の人——、及び（三）第二次群內に於ける勞働者や資本家や企業者、これ等三者への大中小の分配を各々論じたけれども、併し勞賃、利潤、及び利子といふやうな形で分配されたものを綜合的に且つ相對的に考へるといふことをしなかつたのだ。

A　それでクラアク教授の說の要領は分つた。他の諸々の學者の分配論については、又他の機會に講釋を拜聽することにして、今日はこれ位で失禮しようと思ふが、最後に所謂「分配論らしい分配論」卽ちキャナン教授の目論んだやうな分配論——理論的構成に關する君の意見を聞かせては吳れまいか？

B　それは僕にとつて中々の難問だ。だが……

四　むすび

Ａ　一寸待つて呉れ給へ。君の話を中斷してすまないが、その前に少しばかり尋ねて置きたいことがあるんだ。と言ふのは、現實の現象のみを考へると、分配論を流通論の一部に編入したり、或は又クラアクのやうに之を生産論に聯結せしめたりするだけで、十分說明はつくと思はれるんだが、其の上になほ「分論論らしい分配論」を設けようといふのは、如何なる理由によるのであるか、といふ疑問が發せられさうだからだ。僕だつてこれに答へ得るやうに思ふんだが、いざとなると明答に苦しみさうだ。

Ｂ　それは大して六ケ敷い問題ではないよ。かう答へれば宜敷いんだ。即ち、分配を一つの行程として動態的に考へようとするならば、之を流通の中で論じたり、或は又生産と聯結せしめて考へたりする方が、從來のやうに之を別個の篇で說くよりも、一層切實であるだらう。併し、假ひ今日の交易社會では生産された物が總て一旦中央に集められて然る後に各人に配合されるといふやうなことはないにしても、一體或る國で一年の間に新しく生産された物は如何なる割合で各階級なり各個人なりに總分割されたことになつてゐるのであるか？といふことを、吾々は知り度く思ふ。言ひ換へれば、分配の結果を綜合的に且つ靜態的に觀察し度く思ふ。玆に分配論獨自の使命があるのだ、と。これでどうだね？

Ａ　いや、明答、明答。言はれて見れば造作もないことだね。その造作もないことが僕にはどうしても言へなかつたんだ。では、この意味の分配論の理論的構成に關する君の意見を述べて呉れ給へ。

Ｂ　今も言ふ通り、これについては僕にはまだ定見はないんだ。だが、少くとも次のことだけは言へる。即ち、一國の全年生産物の各階級なり各個人なりへの分割比例を、たゞ單に統計的數字によつて實際的に示すこと——これは所謂リカアデイアン・ソウシヤリストがよくやつたのだが——このことを以て足れりとせず、更に進んで之を理論的に又は抽象的に說明しようとならば、——又か、といつて君は笑ふかも知らんが、——矢張りリカアドウの辿つたやうな道をとり、さうしてそれを更に進めて行くのが良い、と。リカアドウの達した結論については前に一言したが、今彼れの採つた方法を概說して見よう。それには僕が曾て試みた講義の一節を朗讀するのが近道だ。良いかね、讀むよ。

「若し吾々が分配に關するリカアドウの態度を詳細に觀るならば、彼れの分配論が二種に區別され得ることを發見するであらう。第一種は富の分配に關するものであり、第二種は價値の分配に關するものである。前者は勞働者、資本家、及び地主の三階級の各〻について其の絕對的生活境遇を左右する事情を說き、後者はリカアドウの價

値論より直接に推理されこれ等三階級の相對的生活境遇を左右する事情を述ぶ。曰く、『吾々が地代、利潤、及び勞賃の騰落について判斷する場合には、或る特定農場の全土地生産物の地主、資本家、及び勞働者への分割を標準とするのである。』『吾々が正しく利潤、地代、及び勞賃の比率について判斷することが出來るのは、各階級によつて取得される生産物の絶對的分量によるのではなくて、その生産物を取得するに入用とされる勞働の分量（即ちその生産物の價値）によるのである。』さてリカアドウは、勞賃論については、勞働者の生活に直接的且つ絶對的影響をもつものとしての勞賃、即ち富の一分配部分としての勞賃、を可なり詳しく取扱つたのであるが、併し全體として觀れば、彼れの分配論に於ては價値の分配に關するものが主たる地位を占めて居るのである。三つの所得形態を價値論を通して相互關的に說くのがリカアドウの分配論の特徴である。」

これだけでは一寸分りにくからうが、これ以上のことはリカアドウの著書に就て研究して呉れ給へ。又キャナン教授の分配學說についても、殊に彼が眞正分配論の提唱者である點から敬意を表して、もつと詳しく研究して呉れ給へ。

A　御蔭で今日は大いに學問をした。これからもつと勉强して一層「偉大なる質問」をもつて來るよ。

B　いや、非常に大ざつぱな御話で恐縮の至りだ。まだ言ひ足りないことやもつと研究しなければならないことが澤山ある。殊に、斯くあるべきの分配論を如何に構成し如何に理論づけるかといふことについては、その感が深い。だが今日はこれぐらゐで勘辯して貰はう。今日の分配論の諸型を一通り瞥見したといふ所だね。

A　どうも色々有難う。左樣なら。

B　では失敬。

フーヴァーとアメリカ恐慌

阿部勇

一、アメリカ恐慌の根因とその必然性

資本蓄積の理論は曰ふ

『生産の、それ故に又國内市場の發展は主として生産手段を目當てとして生ずるものであると云ふことは逆説的に見え、疑ひもなく一つの矛盾を包藏して居る。これこそ生産のためにする現實の生産であり、消費の適當なる擴大を伴はない生産の擴大である。しかしこれは學説の矛盾ではなくして現實生活の矛盾であり、まさに資本主義の性質とかくの如き組織を持つ社會經濟の其の他の諸矛盾とに對應する。消費の適應した擴大を伴はざる、生産の斯くの如き擴大こそはまた資本主義の使命とその社會的機構とに適應するものである、その使命は社會の生産諸力の發展の中に存在し、その機構はこれらの技術的成果の利用をば大衆より除外する。資本主義の本質をなすところの、生産の擴大への際限なき努力と大衆の制限せられたる消費（その無産階級たる地位の結果として制限せられたる）との間にこそ疑ひもなく一つの矛盾が介在する。』（「ロシヤにおける資本主義の發達」、ドイツ版二〇―二一頁）

『あらゆる現實の恐慌は究極において、絶對的な消費力のみが限界を構成して居るかの如くに生産諸力を發展せしめて行くところの資本家的生産の推進力に對して、大衆が貧困でありその消費を制限せられて居ることに基因することは常に變りがない。』（資本論第三巻第二、二十一頁）

アメリカ合衆國において一九二九年十月に爆破した取引所恐慌は、それが一般的恐慌へと進展し得た限り、合衆國戰後における資本主義的諸矛盾の擴大再生産の結果であつた。商品生産社會の再生産行程の可能性を保障するものは決してフーヴァーのいはゆる「自然の宮殿」で

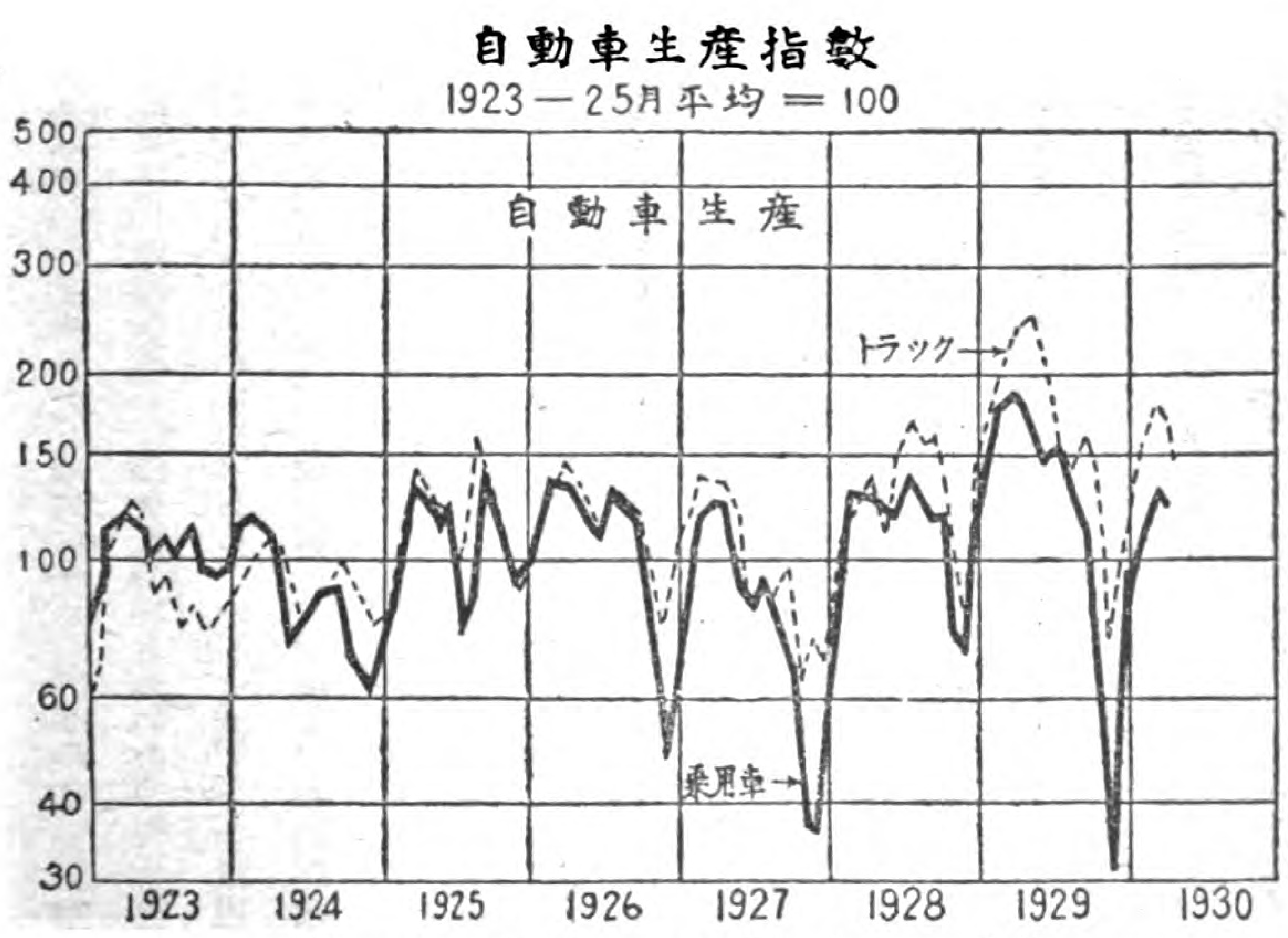
もなければ、合理化による個々の工場內部の組織化でもない。何となれば「ここで問題となるのは、『**勞働者と資本家とは何處からその消費資料**を購買するか、資本家はその生產手段をば何處で作り出すか、生產せられた生產物は如何樣にしてこれらの諸要求をすべて滿足せしめ、擴大再生產を可能ならしめるか、』(「ロシヤにおける資本主義の發達」、ドイツ版一六頁)と云ふことであるから。單なる自然的富源の存在の問題がこの解決に一步も近づき得ないことは明かであるが、直接搾取の條件も亦この解決を與へ得るものではない。蓋し社會再生產行程の問題は價値實現の問題であるから。『直接の搾取の條件は社會の生產力の發展にのみその制約を見出すものであるが、實現の條件は種々なる生產諸部門間の均衡と社會消費力とによつて制約を受ける。だがこの後者は社會の絕對的生產力によつて決定せられるものでもなければ、絕對的消費力によつて決定せられるものでもなく、社會大衆の消費をば兎に角制限せられた限界の內で變更し得べき最少限度に縮少するところの、敵對關係の上に築かれた消費力によつて決定せられる。それは更らに蓄積の推進力、卽ち資本を增大し、擴大した規模において剩餘價値を生產せんとする推進力によつても制約せられる。これこそは生產方法それ自身における不斷の革命によつて齎されるところの、資本主義的生產の法則であり、この革命こそはそれに常に伴ふ既存資本の減價と一般的競爭と、生產を改善しその規模を擴大することをば沒落より免るるための生存條件として課して居るのである』(資本論第三卷第一、二二五―二二六頁)。かくてアメリカ合衆國戰後の金融資本政策、合理化政策は、金融資本が自己を維持するための、獨占資本主義の一般的法則としてあらはれたのである。從つて甚しき生產規模の擴大も關稅政策による農業、特に小農の窮乏、沒落も、合理化政策による著しい就業人員の減退、繁榮時においてさへ吸收せられざる絕對的失業者の存在も、植民地の收奪も、アメリカ資本主義にとつては避け難き宿命として、資本主義を維持すべき必然的なるものとして恐慌を準備したのである。それ故恐慌は必然的であつた。消費の著しい減退、しかも合理化による生產規模の飛躍的なる擴大、特に生產手段工業部面(就中新興產業部門)における一九二九年まで繼續した擴大再生產の過程と消費資料生產部面における慢性的不況とはニューヨーク取引所破綻を引起しそれをば一般的恐慌へと導く充分なる基礎を準備して居たのである。恐慌こそは常に(商品生產社會における)かゝる現存の諸矛盾を一時暴力的に解決するものである(資本論第三卷、第一、二三一頁)。このことは現在においては既に客觀的事實がその確認を迫つて居る。そして特に一九三〇年に入つて益々明白となつて來た。我々は合衆國恐慌の基礎としての生產と消費との不均衡の擧證として左に恐慌後一

九三〇年におけるアメリカ合衆國自動車工業の趨勢を例示しよう。
　アメリカ合衆國自動車工業は、昨秋恐慌以來ひたすらに收縮の途をたどつて居る。今最近合衆國自動車工業生産數を示せば左の通りである。

	一九三〇年	一九二九年	一九二八年
一月	二八五七六二	四二二五三八	二四〇一九一
二月	三六二四八八	四九七七〇五	三三六三〇〇
三月	四二二〇四三	六二六〇七六	四三〇七八三
四月	四六七〇九二	六六三八一一	四三四三一五
五月	四四一八二六	六三六二五〇	四五九七二五
六月	三四三〇〇〇	五六七四二四	四二五一九五
六ケ月計	二三二二二一一	三四一三八〇四	二三二六五〇九

(ペルリーナー・ターゲブラット、一九三〇年八月八日)

そして一九二八、九年における貨物自動車の生産指數の著しい増大と一九三〇年におけるこれに適應した著しい減少の傾向とは生産手段の過剩生産としての自動車工業の役割りをも特徴づける。
　注目すべきことはこの生産數の激減に際してフォード——そしてこれについでゼネラルモータース——が全自動車生産數中の絶對壓倒的地位を獲得したことである。今、次に全アメリカ生産數中にこの兩者及び其の他の占める百分率を掲げる。



Survey of Current Business July, 1930.

	フォード工場 一九三〇年	フォード工場 一九二九年	ゼネラルモーターズ工場 一九三〇年	ゼネラルモーターズ工場 一九二九年	其他の全工場 一九三〇年	其他の全工場 一九二九年
一月	三五、三	三六、二	三七、二	三〇、二	二七、四	三三、六
二月	四〇、八	三一、一	三四、八	三五、二	二四、四	三三、七
三月	四一、三	二八、七	三二、二	三五、二	二六、五	三六、一
四月	四四、四	二九、九	三二、二	三四、三	二三、四	三五、八
五月	四三、四	三二、五	三三、五	三四、六	二三、一	三二、九
六月	三〇、八	三四、三	二七、七	三五、三	二一、五	三〇、四
六ケ月平均	四二、九	三一、九	三二、八	三四、三	二四、三	三三、八

（ベルリーナー・ターゲブラット、一九三〇年八月八日）

これらの統計は本研究の關する限りアメリカ資本主義の發展傾向についての三つの重要な事實を示して居る。第一には生産手段工業部門と消費資料生産部門との間の、一九二九年に至る迄の不均衡なる發展が恐慌によつてその解決を見ようとするに至つた點である。（自動車全生産高中、特にトラック生産高の急速なる發展はこのことを特に雄辯に語つて居る。）第二には消費力の著しい減退が益々顯著となつてあらはれて來たことである。しかも特に興味あることは廉價な自動車を求むる趨勢が絶えず増大して居ることである。左にアナリスト所載の合衆國自動車新規登錄數を掲げよう。（季節的變動を除きたる日平均（休日を除く）」

	合計。	フォード、	シェヴォレー、	其他全部
一九二九年				
第一四半期	一二九三九	四二〇一	二五四八	六一九〇
第二〃	一二九一七	四一〇九	二五三九	六二六九
第三〃	一三三一九	四八三一	二六五四	五八三四
第四〃	一一一〇六	四一三二	二三一八	四六五六
一九三〇年				
第一四半期	一〇八一四	四四二三	二五一〇	三八八一
第二〃	九三六六	三八八〇	二一三一	三三五五

（アナリスト、一九三〇年七月十八日）

この現象が、金融資本の諸政策、特に關税政策、合理化政策等々による大衆の、非獨占生産部門の購買力制限を伴ふ合理化政策の結果であることは看過すべからざる點である。

第三に注目すべき事實は、この過剩生産はフォード等の大コンチェルンにおける合理化による生産規模の擴大に基くものであり、しかもこの生産規模擴大の犧牲は大部分中小企業の負擔に歸して居ると云ふことである。フォードとゼネラル・モーターズとはその恐慌の眞中において中小企業をば四六・六％犧牲とすることによつてその全小賣總數への百分率をば一九二九年の六三・八六％より一九三〇年の七五・七八％まで高め得たのである。

自動車小賣賣却數。

	一月より四月まで 一九三〇年	一九二九年	全小賣數中の百分率 一九三〇	一九二九
フォード自動車會社	四二九九二九、	四二五〇九五、	四一・〇四%	三一・七四%
ゼネラルモータース會社	三六四〇〇三、	四三六六三八、	三四・七四%	三二・三七%
其の他の全會社	二五三六九五、	四七五〇九四、	二四・二二%	三六・一四%

註（ペルリーナー、ターゲブラット、一九三〇年八月八日、）

クライスラー會社は一三三九二九より七九〇七七臺へ（三〇・五九%の減退）

ウィリイス・オーヴァーランド會社は八七九四〇より二七九九四臺へ（六八・一六%の減退）

ステュードベーカー會社は二九二九三より一九五四七臺へ（三三・二七%の減退）

ナッシュ會社は三九二六四より一七六三五臺へ（五五・〇八%の減退）

ハドソン會社は一〇二三七七より四四二一九臺へ（五六・八〇%の減退）。

だが合衆國取引所恐慌はそれが一般的恐慌。生産部面に根ざす恐慌であると云ふのみには止らない。それは繁榮時の資本主義的恐慌には見るを得ない諸々の深刻な矛盾を伴つて居るものであり、この矛盾が資本主義的發展（?）の法則として必然的なものであることを考慮しなければならない。合衆國資本主義もこゝにその華かな隆盛期を去つて、陰鬱な沒落期資本主義時代に足を踏み入れたのである。嘗て平和の樂園にたりし南部諸洲にさへも闘爭に滿ちた空氣が漲つて居る。「一切の利益を簒奪し獨占する大資本家の數が益々減少すると同時に、窮乏や壓迫や奴隷状態や頽廢や搾取の量が益々増大して來る。がこれと同時に又資本制生産行程それ自身の機構に依つて訓練せられ統一せられ組織せられた勞働者階級の益々増大する醱酵が増進する。資本獨占はそれと共に、又その下に、開花繁榮した生産方法の桎梏となる。生産機關の集中と勞働の社會化とは、その資本主義的の外殼とは一致し難き點に到達して居る。資本主義の外殼は破裂する」（資本論第一卷、七二八頁）。今やこれを告げる鐘が鳴つて居るのである。

かゝる危機に當面して、この危機が資本主義最後の段階たる帝國主義時代における金融資本政策の必然的歸結に非ることを強調し、この極めて必然的なる破綻をば再び金融資本の諸政策によつて安定せしむることが如何にして可能であるだらうか？ 我々はかゝる方策としてのフーヴァーの代表するアメリカ金融資本の恐慌對策を檢討してその歷史的意義を明かにせねばならぬ。

二　フーヴァーは如何に恐慌を克服せんとしたか？

フーヴァーは先づこの情勢を如何に特徴づけたか？　我々は一九二九年十二月三日議會における彼れの演説を引用しよう、

「…永年に亘つて上向線をたどつて居た、基本的なる發展が利潤についての過度の樂觀説を生み出し、これが證劵の解き放されたる投機の浪となり、資本をば事業界より株式市場へと移らしめ、遂に不可抗的な恐慌となり終つたのである。その當然の結果として贅澤品並びに半必需品の消費はこれらの損失を蒙つた人々において減退し、多數の人々は一時就職より投げ出された。大市場において取引きさるる農業生産品價格は株式恐慌のお蔭を蒙ることとなつた。

しかし幸運にも聯邦準備制度は投機の破綻の日に夙に備へてその地位を鞏固ならしむるに努めて居たことが、全銀行の確呼たる地位と相俟つて、信用組織を恐慌中を通じて支障なく完うするを得しめたのである。爾來株式市場に投機資金として吸收せられて居た資本は今や正常なる事業の進路へと還流しつゝある。物價にはインフレーションなく、剩餘滯貨も存在しない、外國貿易は發展し産業上の活動並に就業に確呼たる刺戟を與へて居る。…」

かくてフーヴァーによれば「過度な樂觀説」がこの破綻を生み出した**ものであり、永年に亘る金融資本の諸政策が結果した生産と消費との**不可避的な不均衡に根ざすものではない。從つて株式投機による損失を負擔したもののみの贅澤品並に半必需品の消費が減退するのみであり、就業人員の減退も亦一時的現象である。そして聯邦準備制度並に銀行の確固たる地位は信用組織を完全に維持し、アメリカは今や正常なる發展の道をたどりつゝあると云ふ。それでは消費の一大要素たる農業は如何。フーヴァーは特に「農業」なる項目の下に辯護して曰ふ、

「農業の狀態は改善せられて居る。農務省によつて一九二六・七年穀物年度における農園の所得推定額は一二一億弗、一九二八・九年は一二三億弗、一九二八・九年は一二五億弗であり、一九二九・三〇年間の推定は一二六・五億弗以上に上る。過ぐる二三年間の一般物價の輕微なる下落は農業經營者の購買力を支持したことは當然である。農業經營者の破産數は現實に過去數年に比して甚だしく減少した。土地價格の下落は阻止せられたらしく、農村より都市への移動率は減退した。責任ある農村指導者は余に確言した、農業は多大の信用を回復し、樂觀的な感情は當産業に漲りつゝある」と。

（以上、アナリスト、一九二九年十二月六日より）

フーヴァーはかくて緊急關稅法案、マクネリー・ハウゲン法案、ジョン

ズ・ケチャム法案、スムート・ホーレー法案と一九三〇年に至る迄幾氏の窮狀を救ふための法案が議會において猛烈に論議せられ金融資本の利益のために、否決或は改竄せられた後に、農業は改善せられ、希望に滿ちて居ると云ふ驚く可き結論に到達したのである。

そしてフーヴァーの召集の下に一九二九年十二月五日に國家實業諮問會議なる、財界重要人物七十二人より成る委員會をば四百人の財界有力者が組織した。その席上においてフーヴァーは財界を安定せしめる對策として三つの方向を指示した。

第一には聯邦準備局並びに銀行の鞏固な地位に基く利率の引き下げである。フーヴァーはそれによつて貨幣の流通を國内に潤澤ならしめ、延期せられた起債市場を刺戟するに足ると考へたのである。

第二の對策はフーヴァーが勞資双方に折衝して成功した産業平和會議である。その聲明は次の如し、(本條令は十一月二十一日に勞資双方のフーヴァーとの會見によつて決定した。)

『大統領は今朝の會議に出席したる傭主達の名によつて彼等の利益のために次のことを聲明する權利を授與せらる、卽ち彼等傭主は賃銀切り下げの運動を毫も發意せず、期くの如き態度が合衆國全體によつて繼續せらるると云ふことを。…

大統領は更らに勞働代表達によつて次のことを聲明する權利を賦與せらる、卽ち現に折衝中以外の賃銀增額の運動はいかなるものも發意せらるべからざるものであり、勞働は産業の問題についてあらゆる協力を惜しまざるを要すると云ふことを。

これらの聲明の目的は、現在の情勢においては、事業の繼續に影響を與へる爭鬪は惹起するべからざるものであることを確信せしめ、就業を安定せしむることにある。』(フィナンシァル・クロニクル、一九二九年十一月二十三日)

A、F、Lの首領グリーンは同じくこの會議の結果について聲明を發して曰ふ、

『…勞働代表達は、現下において賃銀の引き上げの要求を行ふことにより事態を惡化することの不明なることを彼等の個人的並ひに團體的意見として發表した。斯樣な意見の基礎は明瞭であり周知である。

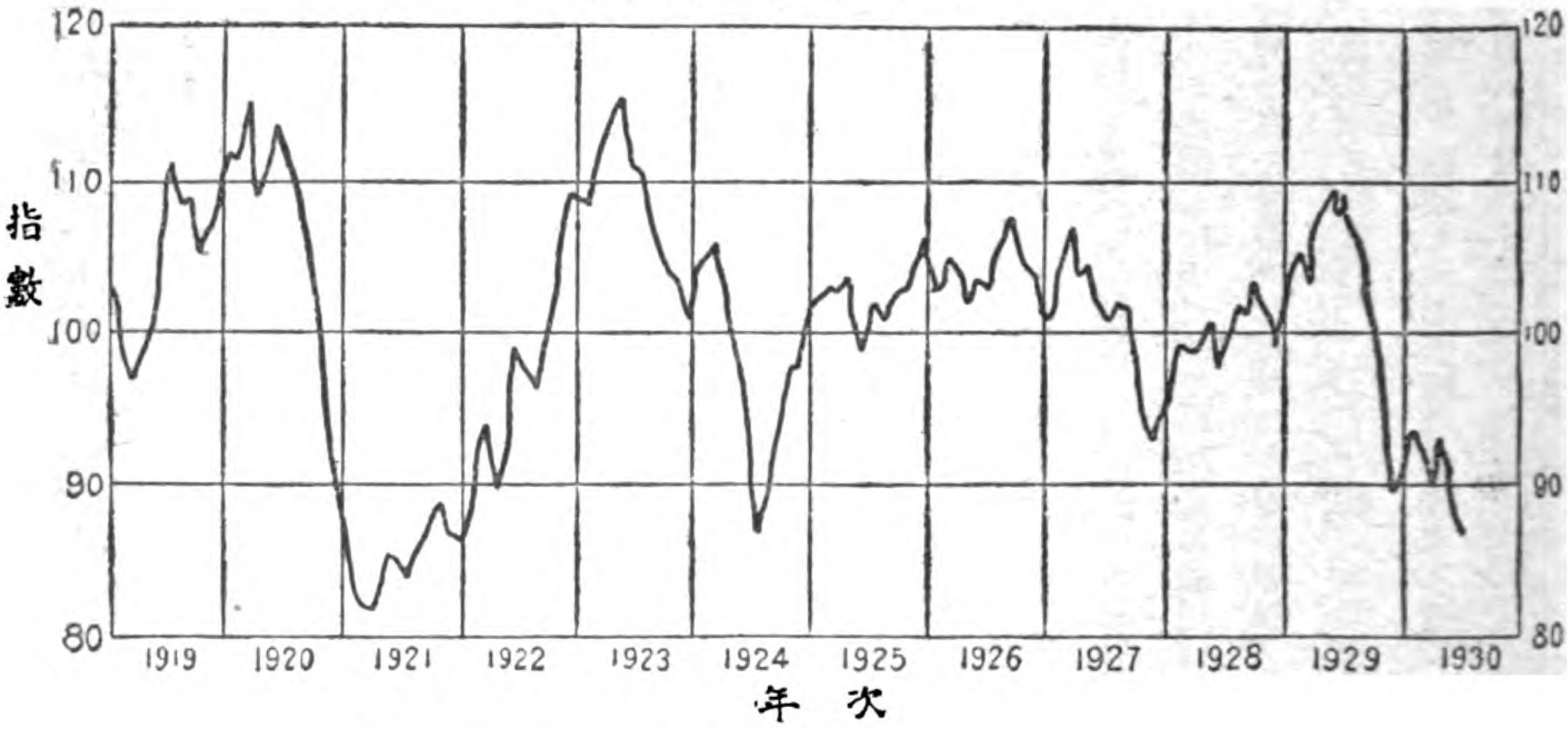
數ケ月の後産業狀態が正常に復し、産業並びに金融における信賴と安定とが齎された曉において、勞働は强力に、攻勢的に、ヨリ高い賃銀とヨリ多くの休養とを要求し確保するに備へるであらう…』

(フィナンシァル・クロニクル、一九二九年十一月三十日より)

第三の對策はヨリ恒久的性質を持つ。大統領の言を借れば、それは『公私を通じて土木建築事業があらゆる健全なる方面に擴大せられ、

失業の不活潑さを補償するにある。」…數多の工業の吟味の結果は、「一九三〇年度の土木建築事業は一九二九年をさへ凌駕し得る』と云ふ。(フィナンアルクロニクル、一九二九年十一月二十三日より)蓋しフーヴァーに、よれば、合衆國賃銀勞働者の極めて大なる部分は直接間接に建築業並びにその修繕業、建築材科運般に從事して

アナリスト生產指數



The Annalist July 18, 1930

	1930年						1929年			
	6月	5月	4月	3月	2月	1月	12月	11月	10月	9月
銑鐵生產	95.9	95.5	95.3	95.0	96.0	89.9	91.7	103.7	112.9	119.7
鐵鋼生產	87.5	83.1	92.8	91.7	99.3	86.7	78.6	89.3	105.0	117,6
貨物輸送量	87.5	89.8	92.4	88.8	92.3	91.8	92.3	92,1	98.0	101.7
電力生產	*92.1	94.2	96.2	94.0	95.7	98.1	97.1	98.9	103.0	102.0
瀝靑炭生產	81.2	82.4	89.0	79,3	84,3	90.9	97.3	91.7	93.5	96.0
自動車生產	88.0	95,7	101.2	98.4	106.6	100.3	72.7	105.3	122.0	123.0
棉花消費	76.7	76.7	90.8	84.2	86.5	92.9	85.8	93.8	108.7	103.6
羊毛消費	—	71.7	82.0	78.1	81,0	86.3	85.7	97.0	117.8	114.6
靴生產	—	93.1	102,2	95.2	95.6	99.8	92.9	102.2	110.6	111.1
亞鉛	79.6	75.7	76.9	82.5	81.2	87.1	82.9	89.3	100.8	101.3
總合指數	*86.5	88.3	93.3	89.6	92.7	93.3	89.6	94.2	103.6	105.8

*暫定數　　The Annalist, August 1 .1930.

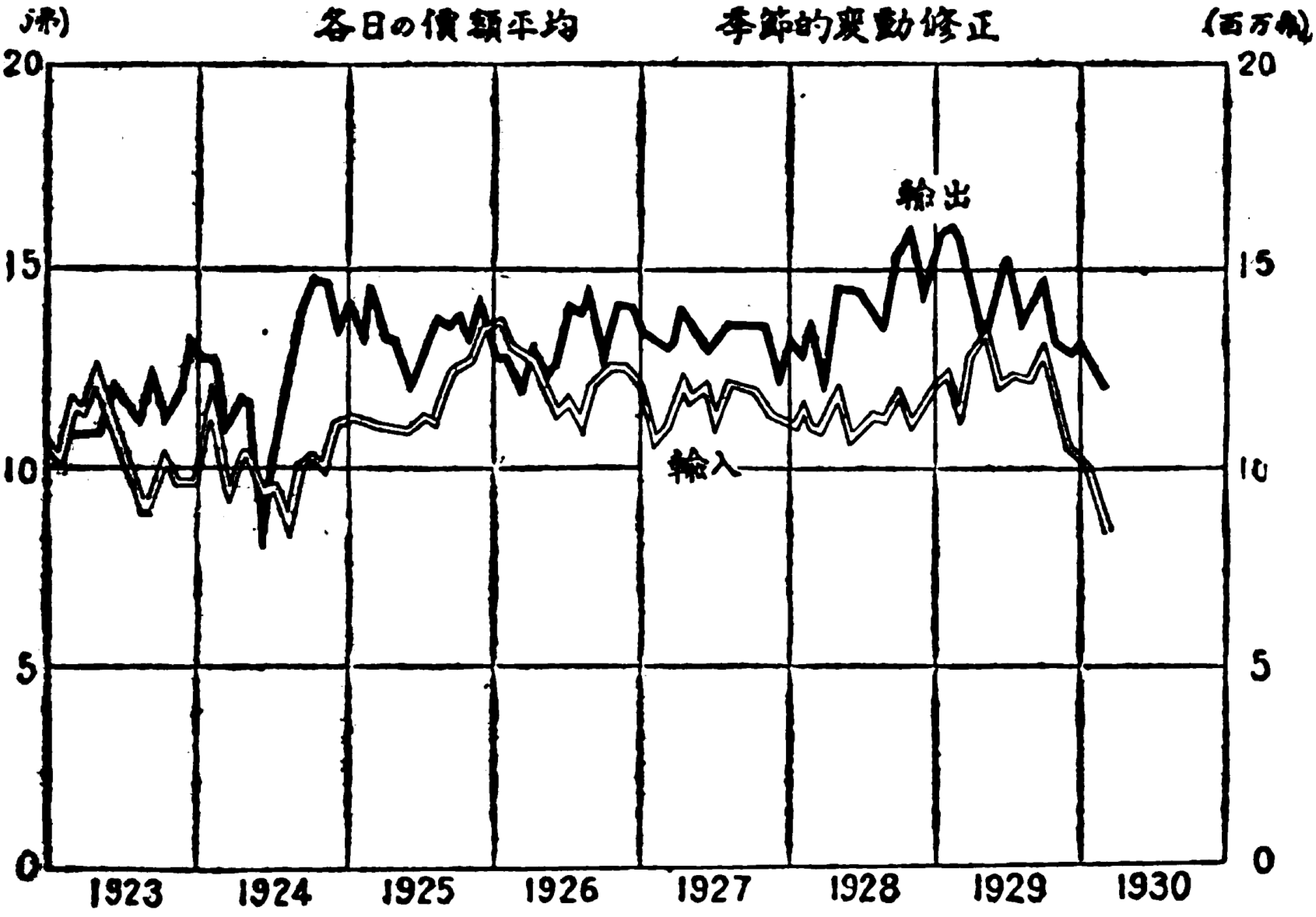
居るのであるから。（フィシャー、株式市場の破綻と其の後より）

三　フーヴァーの錯覺

我々はフーヴァーによる客觀的情勢の評價並びにその對策の効果を檢討すべき場合に到達した。合衆國取引所恐慌の根源については、當時並びに其の後の客觀的情勢の發展がその誤謬を確認せしめる。何となれば、合衆國取引所恐慌は今や一般的恐慌として益々その深刻さを加へて居るから。然る以上、これについての理論的檢討は既に一において盡きて居る、それ故我々は左に合衆國における取引所恐慌後の一般的恐慌への推移の過程を顧みよう。自動車工業の例證により既に我々は一般的結論を導いておいた。それ故こゝにはこの結論を更らに確證するためにアナリストの景氣指數を掲げておく。（前頁參照）

アメリカ合衆國の景氣は全くフーヴァーの聲明を裏切つて、益々深刻な一般的恐慌に推移し、可能なる最近の報告によれば、一九三〇年六月には一九二四年の最低位へと沒落したのである。生產の減退はフーヴァーの聲明せる如き、直接の損失を蒙つた人々による贅澤品、半必需品の消費のみではない。あらゆる生產部門、そして特に生產手段工業部門をも深刻に襲つて居ることは、それが一般的恐慌であることを典型的に示して居る。アナリストは曰ふ、

アメリカ外國貿易



The Annalist April 25, 1930

「六月に入つての綜合指數の減退は電力生産及び貨物積載量の二要**素における激減の結果である。鋼塊生産調節指數の相當な減退もか**これに預つて力がある。……」と。

かくてアナリストは不景氣より好景氣への轉換における唯一のバロメーターと考ふる鋼生産部門における沈滯を特に擧げ、生産に關する限り、合衆國が近き將來において景氣を好轉すべしと考ふる何等の根據も存在しないと結論して居る。(アナリスト、一九三〇年七月十八日より)

他方フーヴァーの頼みとする外國貿易は一路衰弱の傾向を示して居る。(前頁圖表參照)

そしこゝに留意すべきことは、沒落的傾向を示しつゝも、工業完成品の輸出は原料品、食糧品、そして特に農業生産品の犠牲において、その割合を著しく増大して居ることである。一九二九年と比較したる一九三〇年の工業完成品の輸出百分率は次の數字に上つて居る。

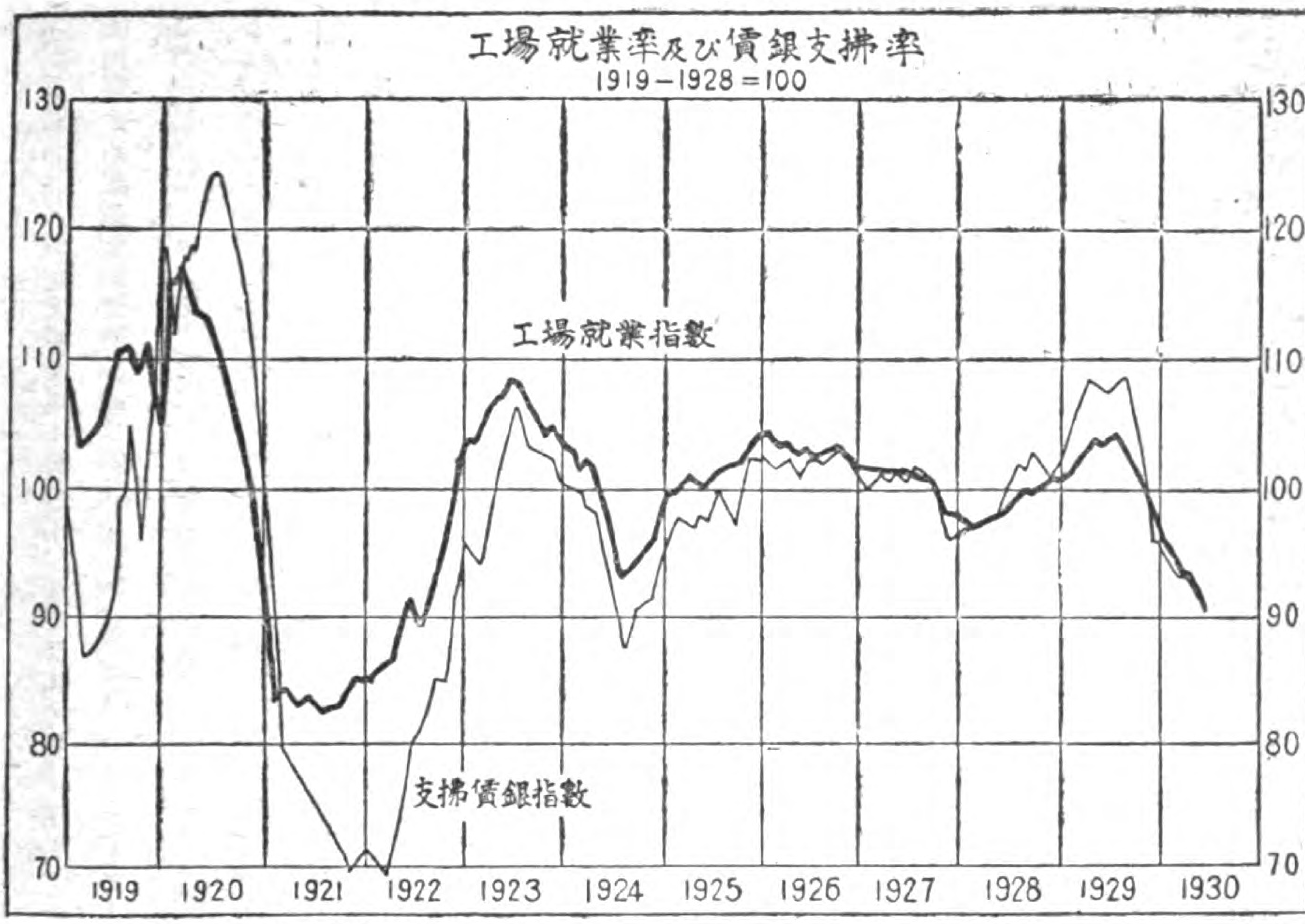
全輸出價額中に占める工業完成品の割合

年度＼月	一月	二月	三月	四月	五月
一九二九年	四四、七	五〇、〇	五四、七	五四、五	五三、七
一九三〇年	四七、五	五三、四	五五、〇	五七、九	五七、二

(サアヴェー、オブ、カーレントビジネス一九三〇年七月より計算)

生産の減退は當然原料品の輸入額を減少せしめ、その價格は昨年に比して五月は半減に近づいた。斯樣にしてフーヴァーによれば利益を與ふべき筈の(?)外國貿易の萎縮の結果(?)産業の萎縮はやがて六月における就業率並びに賃銀支拂率の一九二四年を凌駕する最低位への陷沒となつてあらはれた。アナリスト所載の指數によれば五月の就業率は九二・四(一九一九――二五年を一〇〇とす)、賃銀支拂率は九三・九(同上)となつて居る。左にこの趨勢を示さう。

	就業率			賃銀支拂率		
	1930		1929	1930		1929
	6月	5月	6月	6月	5月	6月
鐵及び鋼	90.0	92.7	100.8	90.8	95.5	109.9
機械	100.1	103.6	120.8	102.7	108.3	131.6
纖維製品	83.6	86.8	96.3	77.8	82.7	97.8
纖維	83.7	85.6	97.6	77.4	80.7	99.5
衣服	83.3	89.8	92.8	78.5	86.7	94.4
食糧品	95.6	94.5	99.2	102.3	100.7	105.6
紙及び印刷	101.5	102.4	103.2	111.9	113.3	113.6
材木	71.7	73.4	90.0	70.9	73.2	92.2
交通用具	80.2	84.0	97.6	83.8	91.1	107.9
自動車	88.8	95.3	120.6	89.2	101.7	130.9
皮革	84.5	86.8	89.4	73.8	75.6	89.8
セメント陶土,ガラス)	80.4	81.7	93.8	76.1	76.9	92.5
有色金屬	80.2	81.2	102.9	85.0	84.4	117.0
化學製品	101.8	104.6	107.9	105.3	106.6	111.2
石油	114.0	114 1	116.4	121.7	120.5	120.0
ゴム製品	88.0	88.3	115.0	88.3	95.4	120.6
タバコ	89.2	89.4	91.4	84.4	82.1	88 5
計	88.2	90.4	101.2	90.3	94.1	109.2



Annalist

我々はこれによつて「一時就職より投げ出された」人々の運命が如何なるものであるかをはつきりと知ることが出來る。

農業に關するフーヴァーの意識的な虚構は更らに注目に價する。彼れは農業全體の所得額の增進よりして、農業全體の繁榮を結論せんとするものである。しかし農業全體の所得額の增進は決して小農の沒落を妨げるものではない。資本の集積の法則は常に中小企業のプロレタリア化の過程と並行するものであることは今も昔も變りがないばかりか、獨占資本主義時代にはこの過程が一段深刻に行はれて居る。何となれば、沒落期資本主義時代において價値總額に餘り變化なく、しかも超過利潤(單なる平均利潤のみではない)が問題たる場合、この超過利潤は弱小企業の犧牲においてしか行はれ得ないから。見よ、フーヴァァーの賴みとする農務省の同一の統計はまさにフーヴァーと正反對の結果を言ひあらはして居るではないか！　この統計によれば穀物の一ブッシェル當り純生產費は一九二九年に至るまで增騰こそして居れ、決して減少して居ない。そしてこの費用が大小農場の平均であることを知るならば、小農の費用は更らに高位にあることは、西北中部等のトラクター、コムバインの最も多く用ひられて居る地方の費用が遙かに平均以下であることから結論し得られる。(一九二五年の國勢調査の結果によれば、最も費用の低廉な西北中部ではトラクター使用農

場は全農場の一三・七％を占めて居るが、最も費用の高い南アトランティクでは僅かに二・六％に過ぎない。）

一ブッシェル當り純費用。（單位セント）

年度＼地方別	玉蜀黍 北アトランチク	玉蜀黍 南アトランチク	玉蜀黍 東北中部	玉蜀黍 西北中部	玉蜀黍 南中部	玉蜀黍 西部	玉蜀黍 合衆國平均	小麥 北アトランチク	小麥 南アトランチク	小麥 東北中部	小麥 西北中部	小麥 南中部	小麥 西部	小麥 合衆國平均	大麥 北アトランチク	大麥 南アトランチク	大麥 東北中部	大麥 西北中部	大麥 南中部	大麥 西部	大麥 合衆國平均
一九二四	一〇三	九七	七五	七〇	八八	八八	八二	一四二	一六〇	一二五	九七	一二八	一二〇	一二三	六五	七五	四四	四四	五八	六五	五〇
一九二五	八七	九六	五六	五九	九九	八五	六九	一三二	一五〇	一二九	一三五	一四九	一一九	一三三	六一	七六	四五	四六	七七	六五	五一
一九二六	九一	八四	六二	六八	七四	九五	七〇	一二八	一三一	一〇二	一二六	九八	一二〇	一一三	六四	七〇	四六	五六	四七	六五	五三
一九二七	八五	八五	六八	五七	八一	八四	七〇	一二九	一五一	一二五	一二五	一四八	一〇六	一一八	六四	七二	五一	五〇	六七	五五	五四
一九二八	八八	八七	六五	五六	九二	八二	七三	一五一	一四二	一五四	九九	一四九	一〇四	一二四	六六	七〇	四四	四四	五九	五四	五〇
一九二九	八五	八七	六八	六一	八四	八〇	七三	一三二	一五五	一一九	一一四	一三五	一一七	一二四	六六	七四	五五	四八	六一	五六	五四

（クロップス・アンド・マーケット、一九三〇年六月）

一ブッシェル當り農場受取價格（推定）

年月日＼穀物種類	小麥	大麥	玉蜀黍
年　月　日	セント	セント	セント
1924.5.15	96.8	46.3	78.6
1925 〃 〃	149.1	54.4	107.5
1926 〃 〃	142.1	39.5	67.1
1927 〃 〃	123.2	45.4	73.0
1928 〃 〃	144.3	62.0	102.5
1929 〃 〃	90.1	44.6	86.2
〃 6.15	86.8	42.5	86.9
〃 7.15	102.4	42.9	91.2
〃 8.15	110.7	42.7	95.9
〃 9.15	112.1	44.1	97.2
〃 10.15	111.5	44.8	91.9
〃 11.15	103.4	43.1	81.0
〃 12.15	108.1	43.6	78.0
1930. 1.15	107.5	43.1	77.3
〃 2.15	101.3	43.0	77.4
〃 3.15	91.9	41.4	74.5
〃 4.15	93.4	42.4	78.3
〃 5.15	87.5	40.9	77.7

（クロップス・アンド・マーケット、一九三〇年六月）

然るに他方慢性的な農業恐慌は周知の如くに穀物價格を「輕微なる一般物價の下落」よりも更らに急激に下落せしめ、殊に取引所破綻以來一九三〇年に入つてはこの下落の趨勢は農民を滅亡的に脅かして居る。小農民が永く、そして今や一層生產費以下の價格を強制せられて居ることは、右に示す農務省の、農產物生產者受取推定價格を前記の生產費と比較することによつて確證せられる。

この結果農業生產物に對する受取額は著しく減少し、工業生產品に對する支拂價格との開きは益々增大して居る。

農場受取價格並びに支拂價格指數。

年度	農產物賣却による受取價格の指數	支拂額に對する受取額の百分率
1924年	134	87
1925年	147	92
1926年	136	87
1927年	131	85
1928年	139	90
1929年	138	89
1930年1月	134	87
〃 2月	131	86
〃 3月	126	82
〃 4月	127	83
〃 5月	124	81

(1910—1914年=100)

(Crops and Market,1930. June)

斯くてフーヴァーが農業の危機を陰蔽せんと努力して居るとき、クリーヴランドの大銀行ユニオントラストは卒直に聲明して曰ふ、

「農村を棄てて都會へ移ることは、そして粗惡な土地に見きりをつけることは論理的且健全な經濟的整理法であり、それは疑ひもなく費用の高い農業經營が清算し盡されるまで止むことがないであらう。

アメリカの農業經營者達は往々役に立たぬ穀物耕作地積を節減せよと忠告せられて來た。そして彼等が自ら進んで行はないところのものは經濟的必然性の冷酷なる力がこれを強制するであらう。いはゆる限界地即ちヨリ粗惡な土地は棄てさられつゝあり、破產は多數の生產者を襲つて居る。農村人口は減退する。しかし農場よりの移住は何等驚くべきことではない、それは健全な國民經濟には必要な事柄である。……農民を政策をもつて無理に救ふことは害あつて益なきことであらう、基本的な解決は能率と經濟との進出にある』と。(トレード・ウィンヅ所載、フィナンシアルクロニクル、一九三〇年五月三十一日)

農業生產品價格をば工業製產品と同樣の地位まで保障せんとすることを元來の目的としたスムート・ホーレー關稅案は遂に工業關稅の過重となり終つた。ダグラス、フィッシャー、グラハム、パターソン、クーガー、タウシック等を先頭とする一〇二八名の大統領否認權行使請願團の聲明は農民の不利益を明かにして居る曰く、

「農場經營者の大部分も亦損失を被るであらう。彼等の棉花、豚肉、

ラード、及び小麥は輸出品であり、世界市場で賣られる。彼等は國内市場においては競爭者を持たぬ。それ故彼等はその主要生產品への關稅賦課によつて利益を得ることが出來ぬ。彼等は却つて工業生產品關稅への增進によつて二重に損失を受けるであらう。即ち彼等は先づ消費者として、織物、化學製品、鐵、鋼等より成る生產物の購買により高い價格を支拂はねばならぬのであらうし、次に生產者として彼等は、彼等に工業生產品を賣らうと考へて居る外國人によつて設けられた牆壁によつてその販賣能力を一層制限せられるであらう。……』(フィナンシアル・クロニクル、一九三〇年五月十日)

そこで我々は知らねばならぬ。合衆國農業に對する「樂觀的な感情」を抱くものはフーヴァー自身であり、金融資本家のみであり、決して農民ではあり得ないと云ふことを。

四　フーヴァーの經濟的效果

斯くの如きフーヴァーの客觀的情勢認識の誤謬若しくは意識的虛構も鐵の如き恐慌の必然性を蔽ひ得なかつた。それは安定政策の破綻となつてあらはれた。聯邦準備各銀行は數回に亘る利下げを斷行した。しかし基本的な生產と消費との不均衡、生產諸部門間の不均衡の回復せられざる限り、そして消費力を制限することによつて安定を齎さんとする合理化政策の遂行せらるる限り、低金利も景氣の回復を齎し得ないことは當然である。そこで現在においては、資本主義繁榮期の理論をもつてすれば一見不可解な現象、即ち金利の低下と共に益々不景氣が深刻化すると云ふ一見矛盾した現象が合衆國、イギリスを支配して居る。アーヴィング・フィシャーはこの時代後れなフーヴァー政策を讃美することによつて、完全に俗流經濟學者たる資格を克ち得たのである。(フィシャー、「株式市場破綻とその後」)。この現象こそは、流通行程によつて生產行程を常に支配し得るとする理論、流通行程を過重評價する通貨調節理論の完全な克服を宣言して居る。

フーヴァーの第二の對策たる產業平和會議の結果は如何に遂行せられたか？會議終了後如何にしてアメリカ國民の購買力を高むべきかと云ふ問ひに對して、財貨の品質を高めるか若しくは價格をその現實の價値まで引き下げることと、一般賃銀水準を引き上げることを提案したフォードは言つた、『合衆國においては何でもみな價格が高すぎる。合衆國で高い價格を主張して差支へのない者は働く人間のみである。賃銀は低下してはならない、それは現在の水準にさへも滿足してはならぬ、それは高められねばならぬ』と。(フイッシャー、「株式市場破綻と其の後」)しかし正直な俗流經濟學者フィシャーは眞面目にこれを考へて否定した、曰く、『總べての產業がフォード君の場合の樣に集約

化せられた經營とその結果たる單位當り費用の迅速な節減に惠まれて居ると云ふ都合のよい境遇にあるわけではない。問題は大小を論せず、小賣業に至るまでの、そして石炭や織物業等の退歩的な産業をも含むあらゆる職業に從事せる全アメリカ工業賃銀勞働者を如何にして向上せしめ得るかと云ふことである。斯樣な一般的な刺戟が如何にして行はれ得るか?』と。(フィッシャー、同上)。フィッシャーの目的とする所はおそらく『賃銀の源泉は勞働の生産性にある、然るが故に工場における無駄を省いて能率を上げ、もつと賃銀を勞働者自ら增加せよ』と云ふグリーンの陳腐な理論の提案にあつたのであらう。だがフォードの不可能事の提案の眞意は直ちに明かにせられた。フォードは初任給を五弗より六弗に引き上げ、六年勤務工の最低賃銀を六弗より七弗に引き上げたと云ふ美名の下に、そして工場を新型製造のために改造すると云ふ口實の下に數萬人の勞働者を街頭に投げ出した。そしてこれこそ全勞働者を常に初任給をもつて傭ふための常套手段なのである。一九三〇年七月に入つてフォードは二週間工場休止の約束の下に勞働者八萬人を街頭に投げ出した。彼等は七月二十八日に再び吸收せらるべき筈であつた。しかしフォードは過剩生産と市場購買力の減退とを過少評價して居た。そこで彼れは勞働者にこの「休暇」を八月四日まで延期することを通告した、勿論工場を再開すると云ふ口約を與へずに。かくて八月四日に工場は再開せられた。そしてそこには週四日の勞働日が勞働者を待つて居た。他方彼れは販賣店の犧牲においてその自動車を値下げした。

これが「アメリカ産業平和會議」の全結果である。失業は益々增大し、賃銀はフォードにおいてさへいはゆるシトローエン式方法によつて切り下げられてゆく。而かも他方フィッシャーによつて爭議の減少が愛國心の發露として讃美せられて居る。しかしアメリカ勞働者も今やこの全機構を教へられた。そこでこの方面においても新しい時代が開けようとして居るのだ。一九三〇年三月六日の失業反對鬪爭國際デーにおける合衆國勞働者階級の歷史的な躍進はこのことを暗示して居る。

經濟情勢に對する評價の誤謬は同時にフーヴァーの恐慌轉換策の切り札たる土木建築奬勵の破綻をも示して居る。(土木建築奬勵と云ふことが恐慌の克服と云ふ方向についての根本的な政策であり得ず、寧ろ生産規模の擴大と云ふ意味において過剩生産を深刻化することがあり得ることは別として)商務省のこれについての一九三〇年初四ケ月の統計は建築契約は數においても價格においてもフーヴァーの聲明を裏切つて、一九二九年に比して著しく低位にあることが示されて居る。ドッヂ會社の報告によれば一九三〇年初五ケ月の契約價格總額は一九二九年の同期に比して二〇%の減退である。フーヴァーと雖も恐慌の

必然性には抗し得べくもないのだ。左に商務省の統計を示さう。

	契約數		價格總額	
	1929	1930	1929	1930
1月	10190	7587	409.967.900弗	323.975.200弗
2月	9749	8560	361.273.900 〃	317.053.000 〃
3月	15944	12421	484.587.500 〃	456.119.000 〃
4月	19348	14686	642.060.500 〃	482.876.700 〃

Survey of Current Business, July 1930.)

そして斯くの如き全政策の破綻にも拘らずなほ得々としてその政策の成功を民衆に說く大膽さを持つ者はフーヴァー大統領以外にはあり得まい。彼は曰ふ、『恐慌は漸く六ヶ月以前に始つた許りではあるが、我々は既にその危機を克服し、絕えざる一致の協力により急速に回復するであらうと確信する。……そして次の如く確言し得ると信ずる、我々の共同の事業は大部分に互つて成功を克ち得たと云ふことを。我々は信賴と勇氣とを維持することに成功した。我々は金融恐慌と信用逼迫とを避けることを得た。……重大なる不況時に當面して我々は始めて賃銀の大した引き下げもなく、これに關連するストライキ又は閉出しも經驗せずに濟むことを得た。』(一九三〇年合衆國商業會議所における演說。フィナンシアルクロニクル、一九三〇年五月三日)(この演說の當否は直ちに起つた新たな取引所恐慌によつて簡單に片づけられた。)

だがフーヴァー政策の破綻はフーヴァー個人の無能力による破綻であるだらうか？　モロウによるモルガンの獨裁制が來るべき合衆國の政治形態となることは極めて可能性に富む樣である。しかしモルガンの獨裁制がこの資本主義の破綻を救ひ永久の繁榮を確立し得ると考へるものは金融資本家乃至利子依食者の捉はれたる見解であらう。社會化せられたる生産力と交換形態との間の矛盾こそは基本的た解決を求めて已まぬものであり、この解決こそは金融資本家的政策とは對蹠的な性質を持つ。フーヴァーの對策こそは金融資本家達の對策の本質が何處にあり、彼等の意志に依存せざる、必然的な資本主義的商品生産諸關係をば組織化せんとする努力の效果が結局何處に結果するかを示すものである。我々はこゝにフーヴァーの恐慌對策の歷史的意義を見る。

(一九三〇、八、三)

どうして我財界を更生させるか

勝田貞次

「どうです、近頃の財界は」

「全く、慘憺たる光景ですね。井上準之助氏なんか、まさか、これほどに惡くなりはしまい、と考へて、金の解禁をやつたんだつてんだから、驚くぢアありませんか」

「一體、こんな狀態で進んで行つたら、どうなるんでしようか」

「インフレーション政策でもやつて、財界の穴を將來に延期しない限り、××××××××××」

「××××になるとすれば、どう云ふ徑路で、××××××××××」

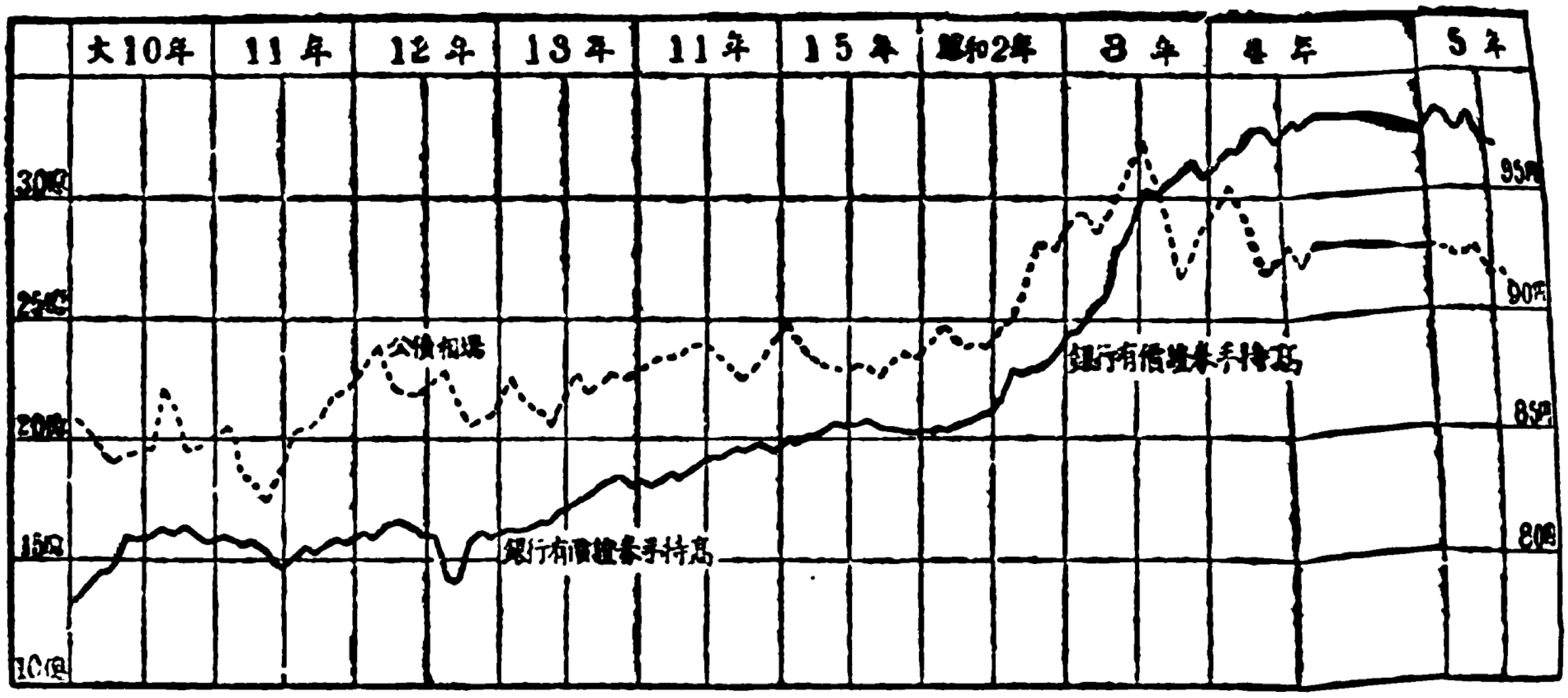
「結局、どこかの銀行に預金の×××××でも起るか、交換尻で銀行が足を出すか、××××××××××××」

「その銀行預金の××又は交換尻の足出しは、何に依つて起つてくるでしようか

「事に依つたら、公債の値下りと、社債償還の不能なんかから銀行の手許が苦しくなつてぢアありますまいか」

「株券の値下りは？」

「何と云つても、株券は、掛を多く見て居るし、賣却も、比較的、容易ですからして、世間の心配するほど、株券の値下りでは、銀行も困らないようです。銀行の困るのは、公債社債の値下り、並に、社債償還の不能ですね。何と云つても、銀行の手持有價證券は、表に見る如く、非常な增加であつて、今日では、ザツト、四十九億圓に達して居りますが、その大半が社債なんですからね。殊に、二流社債を、高利廻に釣られて、銀行が買込んだことは著しいものがありますからね。大體、銀行は、馬鹿でしたよ。無暗に株券を恐れて、手持有價證券を公社債に限つたのが、今になつて考へて見る、手落ちでしたね。尤も、之は、銀行ばかりが惡いのではなく、大藏省から日銀に至るま



で、銀行が株式を**所有することを樂**觀した事も、大いにあります。何れにしても公債か社債かの外は銀行が持たなかつた爲めに、金融緩慢にせめられて、銀行といふ銀行は、殆んど二流三流をいとはずに、高利廻の社債を買つたものです。現に、合同毛織の社債などを、三井銀行が引受けたのでも分るではありませんか。だから、××××××、×××××××××、思ひやられますね」

「×××××問題ですね」

「さうです。どこの會社でも、どこの銀行でも、値下り損や食込みばかりなんですから、夫が積ると、大變な嵩になりますからね」

「然し、×××問題が起らないのが不思議ですね」

「不思議と云へば不思議ですがね、結局、一種のモラトリアムが、不知不識の間に行れて居る爲めでしようかね。よく、世間で借金の盥廻しとか申しますが、そんな處ですよ。誰れも彼れも、借金だらけだから、お互に、借金を返さないで、延べつこして居るんでしよう。それだからして、×××問題が起りそうで起らんのです。然し夫も程度のものでしてね。殊に、銀行に、預金の減退が起ると、手持證券の値下りや、不良貸付の多い場合には、モラトリアムなんて云ふ譯に行かないから、夫で、問題が起るんですよ」

「だとすると、政府も、これ以上、默視することは出來ないことになりますね」

「×××××××今日の政府としては、勿論、默視することが出來ないでしよう。現に、近頃、幾分とも、緊縮政策をゆるめ出したではありませんか。だから、世間でも緊縮政策をゆるめるのには、公債増發の外ないもの、と見て採つて、公債を悲觀し出したので、公債の値

段も近頃は、大分に降坂に向ひ出したのです。が、公債市價の下落は、案外、大きな惡影響を銀行界に與へますからして、この點から行つても、行詰りですね」

「ぢや、結局、どつちを向いても、駄目なんですか」

「さうです。天から、金でも降つて來て、財界の穴埋めが自然と出來ない限り、このまゝで押して行けば、少し位ゐの政策轉換ぢア、追つ付きますまいて」

「內閣が變つても」

「內閣が變つても、徹底的な膨脹政策が行れない限り、駄目でしようう」

「內閣が變つて、政友會內閣にでもなつたら、徹底的な膨脹が行れそうでしようかね」

「こんど、徹底的な膨脹政策を行ふのには、それこそ、平價切下でもやつて、貨幣價値に革命を來させるほかないでしようが、果して、そんなことが、政友會の力で行れますかね。疑問ですね」

「何故ですか」

「何故つて、さうぢアないですか。今日の資本主義經濟の中心をなすものは、結局は、金持であり、就中、債權者なんですからね。從て、その資本主義を擁護しようとする政友會としては、債權者を擁護する必要がありましよう。從て、また、債權の基礎をなす貨幣價値を、妄りに、下落させるようなことはしないでしようて」

「然し、膨脹政策を徹底的にやるのには、どうしたつて、貨幣價値を引下げる處まで行かなくつちアならんでしよう」

「さうですよ。だからして、今日では、膨脹政策も思ひ切つて出來ないし、と云つて、夫をしないで居れば財界が行詰つて、モラトリアムが暴發しよう、と云ふものです。日本の財界を、今日、苦るしめて居るものは、實に斯うした矛盾なんです」

「今の內閣は、この矛盾を自覺して居るでしようか」

「居ませんね。何とかなるだらうとか、どうにかしよう、と考へて居るだけです」

「そんなんですか」

「さうですよ。實際今の大臣なんて、甘いもんですからね。一種のイデオロギストで、現實を直視するだけの苦勞をして居ないんだから駄目です。そこへ行くと、××××××××××、×××××××××××××××××××××、×××××××××××××××、×××××××××××××××××。今度の非常に若い獨逸の總理大臣が『どうにかなるだらう』とか『將來が過去の模型である』とかと考へるのは、無能の反映だ、と云つたそう

だが、確かに、そうに相違ないでしよう。日本の首腦者達にしても、以上の様な無能者らしい考へをやめにして、將來のことを、將來のことゝして、よく考へて、英斷に出るようでなくては、目下の難關は、容易に切拔けられまい、と思ひますね」

「そうですね。今の內閣、今の政界ばかりでなく、一般の實業家が、どうも、難局の自覺が足りないようですね」

「結局、シッカリした人物が、今の政界や、實業界に居ないからでしよう。シッカリした人物は、新興社會に向ふものであつて、シッカリした人物の少くなつた社會は、下り坂に向ふものとすれば、今日の政界も、今日の實業界も、已に改造期に這入つた譯でしよう。要するに、財界の不況を呪ふ人はあつても、財界改造の時代をば自覺する人のないのは、困つたものですね。」

「なるほどね。そこが、問題ですね。然し、考へて見ると、今日では、ボツ〳〵乍ら、財界改造の時代が用意されつつあることに氣が付き出した者もあるようです。が、どうも、また、財界が、どんな目標に向つて、改造されるのかに就ては、ハッキリした意見が立たぬようですが、どうでしよう」

「それは慥かですね、問題は、一に懸つて、財界改造の目標如何にあります」

「その目標は、何でしようか。あなたの御意見を伺ひたいものですが」

「そうですね。可成り、困難な問題ですが、マア、私の考へに依りますと、日本財界改造の目標如何に關しては、五つの說があるようですね。一は、財界の根本である資本主義制度が、日本では、可成り、濫用されて居つたから、今後は、その濫用を一掃して了つて、日本の資本主義制度を淸淨なものにしよう、と云ふのであります。卽ち、資本主義淸淨を目標として、日本の財界を改造して行かう、と云ふのです。その二は、日本の資本主義は、封建的で、統制力を缺き、極めて低級なものであるからして、今後は、日本の資本主義をば、高度化して行かう、と云ふのでありまして、從て、この說は、日本財界改造の目標をば、資本主義の高度化に求めるものであります。第三は、日本の資本主義のみならず、世界各國の資本主義は、自發的に、自己を組織化し、統制化し、合理化して行きつゝあるものであつて、その結果は、『奉仕資本主義』(Service Capitalism)となる傾向があるものであるからして、資本主義をば、奉仕資本主義へと導いて行くのが、日本のみならず、世界各國の財界改造運動の目標である、と云ふ說であります。第四の說は、資本主義は行詰るに從つて、自然と外壓を蒙りその外壓を通じて、管理化され出し、資本主義が社會主義の原理を

利用し借用し出すことになるものであると、考へるものであり。且つ、資本主義が、そうなるにつれて、所謂「民衆資本主義」(Democratic Capitalism) が生れてくるのであつて、この民衆資本主義に導くことが、日本のみならず、世界各國共通の財界改造目標である、と云ふのであります。處が、第五の説は、資本主義の行詰は、資本主義をして社會主義原理を借用せしめた位ゐでは、一掃されるものでなく、寧ろ、ロシアの如く、先づ以て、資本主義を廢止して、社會主義にして了つた上で、改めて、社會主義をして、資本主義原理を借用せしめることに依つてのみ、資本主義の行詰は解決し得られるものである、と主張し、從て、また、この説は、財界改造の目標をば、社會主義の實行に求めんとするものであります。だから、結局財界改造の目標に關する學説としては、(一)、資本主義淸淨化説、(二)、資本主義高度化説、(三)、資本主義奉仕化説、(四)、資本主義民衆化説、(五)、資本主義社會化説の都合五種となる譯です」

「では、その五種の説の中で、どれが日本の場合に、最も、適當するものでしよう」

「そこが六ッか敷い點ですが、私としては、第一の資本主義淨化説と、第二の資本主義高度化説と、第四の資本主義民衆化説との三者を、一緒にしたものを以て、日本財界改造の目標と認めたらよい、と思ひます。だから、結局、私の考へから致しますと、財界を淨化し、財界を高度化し、財界を民衆化するのが、日本財界改造の目標だと云ふことになります」

「ぢア、三ッの目標に向つて、同時に、財界を改造して行かうと云ふのですか」

「そうです。慾が深いようですが、日本の様に、過去に於て、財界が濫用されて、高度化を阻止されて居つた處では、財界に社會主義原理を適用せしめる前提としてでも、財界の淨化と財界の高度化とは、必要となつて來ますからね」

「なるほど、そうですか。目下、日本の財界が行詰を遁れるために、自然と、淨化運動や高度化運動を起そうとして居るのも、全く、日本の財界を改造しようとするその第一歩なんですね」

「そうです。日本財界の行詰が、自然の生理作用でもつて、日本の財界に、淨化運動や、高度化運動や、社會化運動を起しつゝある譯です」

「ぢア、その結果はどうなるんでしようか」

「勿論、資本主義が民衆化されて、民衆的な財界が生れてくる譯です」

「一體、その資本主義の民衆化だの、民衆的な財界だのと云ふのは、どう云ふ狀態を意味するんでしようか」

「それは、詰り、今迄の樣な貴族的な本資家が存在性を失つて、民衆的な資本家が幅を利かし出す狀態です」

「貴族的な資本家とか、民衆的な資本家とか云ふのは、一體何です」

「貴族的な資本家と云ふのは、搾取や資本をば、自分のためばかりに利用せんとし、社會の多數を壓迫して、小數資本家階級が雲上人のような壯嚴な生活を續ける時代の資本家です。反之、民衆的な資本家と云ふのは、搾取を行ふ場合にしても、夫に依つて得たる資本を運行する場合にしても、はた、また、私有權を行使する場合にしても、一般民衆の利益の增進を第一目標とし、自分は、民衆資本の代表者たらんとするものを云ふのです。だからして、貴族的な資本家は、民衆を奴隷化すが、民衆的な資本家は、民衆を開放することになりますね。何れにしても、民衆を壓迫するのと民衆を代表するのとの違ひが、貴族資本家との間に認められましよう。世人は、この違ひに、今迄氣附きませんでした。殊に、社會主義者などに於てそうです。が、然し財界改造の實際問題からすると、この區別は、看過することの出來ないものなのです。」

「何故ですか」

「蓋し、財界と云ふものは、一足飛びに社會主義に行くものではなく、先づ、財界の機能を、徐々に、社會化すことに依つて、社會主義時代の準備をすることが必要だからです。詰り、中間改造ですね。內閣でも、よく、中間內閣と云ふものが出來るではありませんか。そんな樣に、財界の改造にだつて、中間改造と云ふのがあつても良いではありませんか。財界を否定しないで、財界の機能を社會化することが、その中間改造に當るんです。例へば、同じ所有權にしましても、その所有權をば、貴族的に行使するのと、民衆的に行使するのとでは、その間に、大變な相違があるではありませんか。同樣にしてまた、今迄は資本主義の制度や、構造にばかり注意を惹かれて了つて、資本主義の運營や作用や機能の變化と云ふことに注意を怠つて居つたのです。然し、御覽なさい。同じく搾取でも、搾取して得た餘剩をば、貴族的に濫用するのと、民衆的に善用するのとでは、その間に、非常な相違を見るではありませんか。だから、問題は、利用の如何です。財界機能の如何です。そこで、そこに着目して、財界改造の目標を考へたのか、例の奉仕化說でありますが、然し、此の奉仕化說に依れば、財界が、自から自覺し、自から進んで、財界機能の民衆化を訓るが如くに主張するのでありまして、こゝに不滿があるのであります。」

「何故でしよう」

「蓋し、奉仕化論者の云ふように、實際家が自覺して、今迄の貴族的

な行爲をくい改めたり、財界が組織者なき所謂自主組織を作つて、自ら進んで、民衆化の機能をば發揮しようとすると云ふが如きは、夢物語にあらずんば、僧侶の說教か、道學者の寢言に外ならぬからです」

「なぜですか。その理由がよく分りません」

「分らんと云ふ君に、一千萬圓の資本を持たして、君の自由にしたまい、と云つたら、君はどうします。結局、民衆の爲めに、その一千萬圓を利用するよりも、君自身の幸福の爲めに、その一千萬圓を利用しようとするでしよう。假令、君が、その一千萬圓で、民衆の幸福を增進し得るような立派な仕事を始めたにしても、その動機たるや、矢張り、君が、社會的に認められたい、と云ふ一種の利己心に外ならんでしようからね。人間は自由を欲するだけ、左樣に、また、利己的ですよ。だから、利己的な人間に、倫理的行爲や宗敎的行爲を自發させようとするのが、非常な間違ひですね。倫理的行爲や宗敎的行爲も社會生活から離れて、各個人が、氣まぐれにやる場合は、勿論、問題外ですが、社會生活の上に於て、倫理的行爲を各人に自發させようと、思つたら大きな間違です。現に、かう云ふことがあります。獨逸人は、決して、他人の惡口を云はないから、私は、何故、他人の惡口や評批を、獨逸人は云はないのか、と聞いたら、その答へに曰く『他人の惡口なんど下手に云はうものならひどい目にあうから、今迄ひどい目にあつたその經驗が積り積つて、習慣となり、今日では、獨逸人は、他人の惡口など、滅多に、云はなくなつたのだ』と。だから、他人の惡口を云はないと云ふ獨逸人の美點も、決して自から進んで、倫理的意識からやつた美德ではなくして、そうしなければ損だから、そうしたに過ぎない處の利己心の發露に過ぎなかつた譯であります。一事は萬事です。社會生活に於て、倫理など考へたつて、始りませんからね。とすれば、我利々々盲者の集合所とも云ふ可き財界に於て、倫理を說いても駄目なことは分らうぢアありませんか、だからして、私は財界が、自から、自發的に、民衆化されるなどと云ふ所謂「奉仕化說」には承服出來ないのですよ」

「なるほど。ぢア、財界はどうして、民衆化されるんですか」

「勿論、外壓の力に依つてです。現に、昨今でも、財界行詰と云ふ外壓力でもつて、財界も、いや〱乍ら、民衆化しようとして居るではありませんか。勿論、外壓の原因なり種類なりには種々ありましよう。然し、外壓の結果、夫から免れようとして、やむを得ず、財界が社會主義の原理を幾分づつ取入れ出したことは、之を、充分、認め得るではありませんか。斯くの如く、外壓の力でもつて、資本主義が管理されて、そこに、資本主義の社會化が起つて來て、資本家と雖も、今迄の樣に勝手なまねは出來なくなり、民衆を代表する資本家となる

これを稱して、民衆資本主義と云ふんです」

「では、民衆資本主義は、外壓の力で、自然に、資本主義が管理されることに依つて生ずるものなんですね」

「さうです。だから、民衆資本主義は、管理資本主義とも云へるでしよう。そして、資本主義が管理されるに從て、資本主義の亂用が一掃され、資本家も勝手なことが出來なくなるからして、資本主義が、漸次、計畫立つて來ます」

「ぢア、管理すると云ふことは、どう云ふことなんですか。統制することなんですか」

「管理と統制とは非常に違ひます。管理すると云ふのは、公正なことをしなければ痛い目にあうので、それを恐れて、公正な態度をとるように、さように、仕向けることでありますが、統制すると云ふのは、公正もなにもなく、只、權力でもつて、押へ付けて統一を作るようにすることなのであります。だから、管理と統制とは非常に違ひます。統制は、貴族資本主義時代の産物であつて、その統制を否定して公正な道を辿らしめようとする處にこそ、管理の特質があるのであります。故に、一寸考へると似たようですが、その實、この管理と統制とは全然、性質を反對にしたものであるとも云へます」

「なるほど、考へて見ると、管理と統制とは違ひますね。管理は、外部から、壓力を與へて、公正な道を辿らしめようと云ふことだし、統制は、内部から、權力の發動で、統一化することですからね」

「さうでしよう。だから、精神に依つて資本主義を統一しようと云ふ社會主義は、當分、駄目ですね。私は、今度歐洲を廻り、ロシアを見て、つくづく、人間と云ふものは、利己的なものだからして、利己を否定する處の社會主義は、實行の上に於ては、空想に過ぎない、と思ひましたよ。早い話が「お前のものは己のもの」「己ののはお前のもの」として錢勘定なしにして了ふと、自他の別がなくなるからして、却つて、不便になるではありませんか。だから、社會主義の實行は、人間性から見ると、當分、空想でしようね。資本主義の弱點を指摘したマルクスの理論は、一々尤もで、あれに、少しの穴もありませんが、然し、資本主義の根本は、利己主義であつて、從て、人間性そのものが資本主義的根性を宿して居るのですから、社會主義を、今直ちに實行することはどうか、と思ひます」

「なるほど、さうも考へられますね。然し、さうなると、今日の資本主義が、あなたの云はれるように、果して、管理化されて、民衆資本主義になり得るや否やですね」

「然し、その心配はありませんよ。少くとも、歐洲の財界を見て來た私の眼には、ボンヤリながら、民衆資本主義の姿が浮びますからね」

「そうでしようか」
「そうですとも。近頃、歐洲邊りで、新資本主義運動と云うて居るのが夫ですからね。今日、聲の高い合理化運動なるものも、歸する處は新資本主義運動をば目指せるものではありませんか」
「新資本主義運動つて何ですか」
「新資本主義運動とは、資本主義の量的行詰をば、資本主義の質的改善に依つて解決せんとする運動なんです。例の社會主義運動は、資本主義の量的行詰を以て、資本主義自體の絶對的な行詰と考へ、資本主義の存在を否定するんですが、夫は餘りに、從來の資本主義現象に囚れ過ぎた狹い考へぢアないでしようか。蓋し、資本主義なる人類生活の樣式は、まだ〳〵新らしい樣式へ變化して行き得る可能性を澤山にもつてるものだからです。だから舊來の資本主義をば、新らしい資本主義へ變化させようとする新資本主義運動は、決して、馬鹿には出來ますまい。例の合理化運動は、こゝを目指して居るんです。少くとも資本主義の量的行詰からして資本主義が革命の形を取るのは不自然であつて、質的改善に依つて、發展の形を取るのが自然である、と云ふのが、社會主義運動と合理化運動との間に横る意見の相違でせう」
「なるほど。そうすると、貴族資本主義が民衆資本主義へ轉化するのが新資本主義運動であつて、今後は、日本も、そうなる運命にあると云ふんですね」
「そうですよ。そして、そうした理解は、ロシア其者が、自から、與へたんですね。學者が、近頃、そう云つてますが、尤もですよ」
「そうですか」
「現に、カール・ミユーズ教授も『ロシアは、社會主義運動の尚早と、新資本主義運動の必要とを實證した』と云つて居るではありませんか。カール・ミユーズ教授のこの叫びは、恐らく、食堂車なしの汽車に乘つて、シベリアを走り、物資缺乏と壓迫加重のモスコウを見た人々の、等しく實感する處ではないでしようか。シベリア旅行者が、等しく、皆な、ロシアの國境を越えて、ポーランドのストルプッチエに着くや、まるで、天氣でも變つた樣に明るい感じに打たれるのは、何故でしようか。夫は、要するに、ロシアの統制加重と、物資缺乏との實感に外ならぬのではないですか。全く、現在のロシアでは、分配よりも生産が少い爲めに、物資の缺乏が痛感されて居る樣です。モスコウ市内が、修繕も出來ずに、クレムリン宮殿の城壁が、見る影もなくなつて居ることから見ても、モスコー市内に、乞食のウヨ〳〵して居ることから見ても、一般に、盜難のロシアに多いことから見ても、白パンの缺乏、商品の賣惜みから見ても、現在のロシアが、うまく行つて居ないことだけは確かですからね。從て、また、夫を目撃した世界

が、社會主義運動から一轉して、合理化運動に向ひ出したのも當然なことでしよう」

「一體、どうして、ロシアは、そんなにうまく行かたいのでようか」

「そうですね。夫は、恐らく、ロシアが、資本主義の爛熟を通じて、自然に、社會主義に發展しなかつたからでしよう。日本の學者論客の中には、ロシア先般の變革運動を目して、マルキシズムに依る理路整然たる革命であるかの如くに考へるものもありますが、事實はその反對でありまして、先般のロシアの革命は、單なる暴動に過ぎなかつたのですからね。成功したる暴動に過ぎなかたのですからね。」

「何故に、ロシアでは、暴動が成功したのですか」

「想ふに、ロシアには、大工業組織とか、大商業組織とかがなかつたからです」

「なるほど」

「モット端的に申しますと、ロシアには、資本主義組織がなく、封建主義組織のみだからですよ。現に、ロシアには革命前まで、封建時代に見るように、領地の占有を通じて少數の地主貴族が、大多數の無智な農民をば、ムチを以て脅迫し、重税を以て壓制して居つたからして歐洲の混亂に乘じてなされたる共產主義的宣傳は、無智な大多數の雷同を得て、共產主義の大暴動は成功するに至つたのではありませんか。だからして、先般のロシアの暴動が成功し得ましたのも、(一)、ロシアが工業國であり、(二)、資本主義國でなくして、封建主義國であり、(三)、國民の大多數が無智野蠻な人間であり、(四)、國民の少數が地主貴族であつて、露骨な搾取を、公然と、慘酷に、實行せること等にあるのであります」

「それでは、ロシア先般の革命が、マルキシズムなどの云ふ資本主義爛熟に依るものではないのですね」

「そうです。ロシアの革命は、資本主義機構上の矛盾に原因せるものでなくして、封建主義機構上の矛盾に原因したものだ、と云へましよう。ロシアでは、封建主義機構上の矛盾をば資本主義機構上の矛盾と結び付けて、巧みに、共產主義者が利用した迄です。從て、ロシアの場合は、全く、成功した佐倉宗五郎の暴動に過ぎなかつた、と云へましよう。革命後のロシアが、生產力の不足に惱まざるを得ざるに至つたのも、當然のことであります」

「そうすると、現在のロシアに於ては、實狀と夫を收拾せんとした政策(共產主義政策)とが相容れない關係にある、と云へますね」

「勿論です。私共が、ロシアの前途をあやぶまざるを得ない理由が、玆にあるのです。寔に、先般の大革命をば、單なる暴動でなく、資本主義の弱點に基くものである、と誤認して、その上に立てる處に、ロ

シアの現制度、ロシアの現政策の弱點はあるのです」

「すると、共產主義時代などを、今から考へるのは、尚早ですね」

「そうです、尚早の觀がありますね。共產主義の完成は、資本主義が極度に發達してからのことなんですから、この二十世紀は、まだ、資本主義文明が、更に人類に依つて、世界的に練られなければならぬ時代に屬するのです。現に、資本主義文明は、今日、やうやく、盲目的讃美時代を脫して合理化的修正時代に入らんとしつゝあるに過ぎないのではありませんか」

「どうして、そう云ふことが云へますか」

「蓋し、資本主義は、世界的に見て、未だ、その自己矛盾を現すまでに、爛熟して居ないからです」

「果して、そうでしようか。目下の世界的大不景氣は、資本主義の矛盾の現れではないでしようか」

「少くとも、私は、そうではないと、思ひますね。何となれば、今回の世界的大不景氣は、勿論、資本主義の行詰に原因することは勿論ですが、然しその資本主義の行詰たるや、資本主義機構上の矛盾から原因したものでなくして、寧ろ、資本主義の制度を圓滑に運營せしめ得ない事情が出來たので、資本主義の作用が不圓滑になつたまでだからです」

「ぢア、今回の大不景氣は、資本主義の矛盾に原因しないで、資本主義の缺陷に原因する譯ですか」

「そうです。今回の大不景氣は、資本主義が外的事情の爲めに圓滑に作用しなくなり、それが、資本主義の缺陷となつて、景氣變動に惡影響を及ぼした爲めですから、資本主義の缺陷が、今回の大不景氣の根因でしよう。資本主義の矛盾ぢアないと思ひます。蓋し、資本主義の矛盾は、理論の上では指摘されましようが、實際上にはまだ、見られぬからであります。現に、その證據には、今回の生產過剩にしても、夫等は、皆な歐洲大戰に依る米國への債權偏倚に原因するものであつて、搾取の爲めに、消費力が減退した結果ではないではありませんか。結局、歐洲大戰で、資本主義を虐使したので、財界バランスが惡化し、資本主義の機能が鈍つて來たんですからして、之を以て、資本主義矛盾の現れである、とするは當らぬ、と考へます。だから、現在の資本主義制度は、合理的修正を要求するものでこそあれ、決して、否定運動を要求するものではないのであります」

「なるほど」

「だから、私は、また、世界は、未だ資本主義の時代に屬し、寧ろ、今後は、資本主義は合理化的修正時代に入り、質的向上を衒るものである、と思ひます。從て、また、資本主義文明も、將來、全世界を鍵

る隅なく支配するに至る可く、資本主義文明の崩壊は、寧ろ、その後**のことである、と考へざるを得ません。少くとも斯る漸進的變化の方**が、革命的變革よりも、人類社會の爲めによいことだけは明かでしよう。日本の樣に、資本主義制度の極度に不完全な處では、或は漸進變化が待遠しくて、××××××××限りませんが、理想から云つたならば、資本主義を、最後まで、發達せしめてから、生產力の充實を待つて、徐々に、變化を來さしめたいのです。少くとも、ロシアの實狀が、生產力の問題は經濟問題として極めて大切なものであつて、經濟發展の上から云つても、生產力が分配力よりは前に來なければならぬことを吾々に教へつゝあるに於てをやです」

「ぢや、問題は、生產力の增進ですね」

「そうです。人類社會に對して、資本主義の果す可き主要任務は、生產力の增進です。分配の公平は後のことです」

「然し、分配の公平を離れて、生產力の增進だけを期し得ましようか」

「或る程度までは、出來ますね。そして、或る程度を、出來るだけ、高くしようとする處にこそ、資本主義的努力が見られる譯でしよう」

「そうすると、所謂「合理化」なるものも、そうした資本主義的努力に外ならんのですね」

「そうです。常にそうです」

「ぢア、日本も、これから、大いに、合理化に務めなければならぬ譯ですね」

「そうですよ。然し、日本の場合は、一寸例外ですね。と云ふのは、日本では、資本主義制度が極度に濫用されて居るからして、合理化を實行するには、先づ以て資本主義の濫用を一掃してかゝる必要があるからです」

「と云ふのは」

「蓋し、資本主義が濫用されて居つて、資本主義の機能が消失して居るような處で、無暗に、合理化を實行すると、丁度、病人に激烈な運動を強ゆるようなもので、却つて、資本主義を破壞に導くの恐れなしとしないからです」

「ぢア、日本では、合理化を實行する前に、先づ、資本主義の濫用を矯正して、合理化を實行し得るだけの準備をば、やるの必要がある譯ですね」

「そうです。日本では、資本主義の民衆化や、資本主義の高度化やを計る前に、先づ以て、資本主義の淨化をするの必要がありましよう」

「然らば、資本主義の淨化は、如何にして、なし得るでしようか」

「惟ふに、資本主義を淨化しようと思ふならば、資本主義の根本をな

す富、並に、所得の純化を計るか一番です。金の解禁を斷行したことを促進し得るが故に、意義がある程なんですからね」
「ぢア、金解禁は、資本主義淨化の爲めに行れるものなのですか」
「そうです。金解禁は、資本主義を正道化し、資本主義を淨化するための一方策なんです」
「それ以外に、日本の資本主義を淨化する方策がありますか」
「勿論、あります。モット、切實な、モット積極的なものがあります」
「夫は何ですか」
「夫は、（一）、虚富虚業を否定したり、（二）、不勞所得發生の根因を一掃したり、（三）、惡質の營利活動を除去したり、（四）、薄弱な企業や逆バランスの企業を淘汰したり、（五）、財界バランスの逆調を一掃したりすることです。尤も、そうする爲めには、恐慌を恐れて居ては駄目です。恐慌が來ても、已むを得ない、としなければ駄目です」
「何故ですか」
「何となれば、資本主義の淨化は、一種の切開手術であつて、多少の痛さは我慢しなければならんからです。今日の我が爲政者の間違ひは、何等の犧牲をも、資本家階級に拂はせないで、資本主義を淨化させようとするにあります」
「資本主義の基礎は、資本家階級だから、夫れ仕方ないことでしょう」
「然し、資本主義の基礎が資本家階級だからと云つて、資本家階級だけを擁護するのは、却つて、ヒイキのヒキ倒しに了るのみでしよう。だから、資本家階級を眞に擁護せんとすれば、この處は、須らく、先づ、犧牲を資本家階級に拂はせることに依つて、資本主義の淨化を實行しなければウソです。從て、また、恐慌を、寧ろ、進んで出すに限りますね。寧ろ、その方が雨降つて地固るで、日本の資本主義の合理化に基礎を與へることになるから、日本の爲めにもよいのです」
「なるほど」
「だから、結局、恐慌は、日本では、合理化の第一條件だ、とも云へます。從て、また、その恐慌を避けて、日本經濟に、合理化の基礎を與へんとしても、駄目です。然るに、日本の財界人や政界人は、その不可能事を敢てなさんとして、徒らに、モガくので、却つて、財界を、ます〳〵、惡い處へ追ひ込んで了ふのです」
「なるほど」
「財界人や政界人が、今日、間拔けに見えるのも、その爲めです。結局彼等に、なす可きことを、痛さを我慢して、正々堂々となす處のその決斷力が足りぬからですね。要は、恐慌を自覺しての資本主義淨化

策の男らしい實行あるのみです。夫を避けて、徒らに、モガいて居ては、駄目です。處が、どう云つても、彼等はモガきたがる。そのモガきが、或は、不景氣緩和策となり、或は、整理延長策となり、或は、その日暮の政策となつたりするんです」

「ぢア、日本が斯くも、不徹底な政策を何時までも／＼やつて居つたら、日本は、一體、どうなるでしようか」

「日本の財界の樣に、濫用で行詰つて居る處では、ます／＼、資本主義の濫用を大にして、富、所得、營利、企業、信用等をいよ／＼不純にし、浮薄にして、遂には、合理化の基礎を失ひ、外國の合理化運動には遲れて了つて、内憂外患いよ／＼激しくなり、或は、第二の獨逸と化すやも知れません」

「第二の獨逸とは何を指すものですか」

「夫は卽ち、日本の圓貨の値段が、一九二三年頃の獨逸のマークの樣に、慘落して了つて、今迄の債權債務關係が無意味になり、一切の財界關係を御破算でやり直しすることです。詮り、財界破産ですね」

「財界破壞ぢアないんですか」

「財界破産と財界破壞とは、大違ひですよ、財界が破壞されるなんて云ふことは、社會主義でも、完全に實現されぬ限り、意味をなさん言葉です。私のこゝに使つて居る言葉は、貨幣價値がゼロになつて、舊來の債權債務關係（夫は財界の中心でする）が、一切意味を失ふことに外ならんのです。詮り、財界關係や貨幣價値の連續性の中斷ですね」

「なるほど、そうしたことですか」

「だから、大局から見れば、財界破産なんて、恐慌のヒドいようなもので、そう恐れるには足りませんが、債權者の身になつて見ると、これ程、恐ろしいことはないのです」

「ぢア、そんなに恐ろしいことが何故に、起るのですか」

「財界が行詰るからです。財界が行詰ると、恐慌が出て、財界の毒素を一掃し、財界を、もとの健康體にかへそうとします。處が恐慌の力で一掃することの出來ないほどに財界の毒素が大きかつたり、又は爲政者があらゆる方法を以て人爲的に恐慌を出さないようにして財界が行詰の厭迫を將來に延長して行かうとすると、財界は、遂に破産に見舞れて、財界毒素の大掃除が、自働的に行れます。處が、それでも、財界毒素の大掃除が行れないほどだと、そこに、財界は破壞して、資本主義は亡び、社會主義のような制度が出來ることにもなるんです」

「なるほど」

「だからして、恐慌や財界破産は、要するに、一種の自働的なる財界毒素の一掃作用に外ならんのです。從て、また、財界破産や財界恐慌

は、財界行詰の産物でありその安全瓣だとも云へましよう」
「さうすると、日本でも、財界が行詰つて居る以上、その何れかが出現しなければ納まらぬ譯ですね」
「さうです」
「然らば、問題は、日本の財界は、行詰つて居るかどうかですが、この點はどうですか」
「勿論、日本の財界は、行詰つて居ますよ。現に、日本の財界は、已に、失業者の續出と、營利の行詰と、米國資本主義の壓迫とで困り抜いて居るではありませんか。蓋し、合理化に依つて、外國の資本主義は進んだのに、濫用に依つて、日本の資本主義は墮落したからであります。そして、之は、具體的には、人口過剩の現象となつて現れて居ります。故に、日本に於ける過剩人口は、資本主義の濫用に基くもので、從て、吾々は、一日も早く、不勞所得の根源を斷ち、虚富虚業を一掃し、惡質の企業やたちの惡い營利を除去し、購買力の整理に務めねばなりますまいと思ひます」
「なるほど、では、そう云ふことをしないで、合理化だけをやつたら、どうでしようか」
「外國の猿眞似をして、周圍の事情を考へないで、合理化だけをやらうものなら、」それこそ、危險です。恐らく、大恐慌が來て、財界破産になりましよう」
「なぜですか」
「と云ふのは、日本には、商業銀行の數が多く、而も、夫等商業銀行は、互に、競爭ばかりして居つて、結局に於て、日本の金融界は、安定を缺いて居るからです。だから、無理な合理化をやらうものならば、遂には、大規模な銀行破産を惹起して、恐慌を過大にし、ゆゝしき大事を惹起すでしよう」
「なるほど」
「だから、要は、恐慌を輕くすることです。恐慌を避けるのも、良くないが、恐慌を過大にする必要はありませんからね」
「それはそうです」
「だから、要は、輕い恐慌でもつて、財界合理化の基礎を作るにあります。それには、一刻も早く、資本主義の濫用を一掃して、合理化の準備をとゝのへるにありましよう。眞の緊縮政策は、斯ることを目標とす可きです。國民の消費を節約せしめたり、對外貿易のバランスを正調化したり、正貨の流出を防止したり、物價の平準を引下げたり、收入を削減したりすることは、萎縮政策であつても、緊縮政策ではありませんからね。眞の緊縮政策は、不勞所得や、資本主義濫用や、救濟政策などに着目して、之等を一掃し、その反面には、眞の所得の増

加を刺戟し、正當な資本主義活動を促進せしめるものでなければなりません」

「そんなら、その具體的な政綱は？」

「今度、民間銀行でやりだした共同調査機關なんぞは、その一ですがその外に、株式制度の濫用を防止するような檢査機關を作つたり、信用制度の濫用を管理する法則なり、檢査機關なりを作るのも一方でしよう。或は、また、地價不動産の評價機關を作つて、不當なる評價を警めたり、株取引所の改善を計つて、人氣に偏した不當な思惑の起らぬようにしたり、その他、以上に類した、所謂「資本主義の管理機能」を、發揮するのが、緊縮政策の根本ですよ。不景氣に乘じて、金融資本家が踏みたほして、人の折角築き上げた事業を買收しようとすることを、ボンヤリと見て居るようで、どこに、緊縮政策がありますか。財政豫算の數字ばかり削減して見たつて、緊縮政策の効果はありませんからね」

「なるほどね」

「そうでしょう」

「慥かに、あなたの云はれる通り、緊縮の本髄は、管理にありますね。財界を眞に緊縮化しようと思つたらば、先づ以て、財界を管理化させなければなりますまい。管理機關を作つて管理を嚴重にすれば、自づから、資本主義の濫用が一掃されて、緊縮さる可きものが、緊縮されましようからね」

「そうでしよう。だから、私は、昔から、管理政策の必要を力說して居るんですが、日本の爲政者にして、この點に氣附ける人の少いのは殘念です。徒らに、消費計數や、財政計數や、物價指數や、輸入數量や、收入計數の減退を計ることを以て、主眼とするやうな今日の緊縮政策には、賛成することは出來ません」

「そうですかね」

「だつて、夫では、緊減政策になつてしまつて、緊張政策にはなりませんからね。殊に、恐慌を無暗に恐れるに於てをやです。その矛盾や、甚だしいぢアありませんか」

「全くですね。無暗やたらに、緊縮政策をやつておきながら、恐慌を恐れるのは、確かに、自己矛盾ですね」

「だから、私は、そうした自己矛盾を排して正々堂々と、我が財界の淨化政策を實行するのが、最も妥當な方策である、と考へるんです。

「そして日本の財界は、結局はこの淨化時代から高度化時代を經て、民衆化時代に這入つて行かねばならぬと思ひます」

「なるほど、そうすると、日本の財界などは、先づ以て、淨化時代に這入らなければならぬ譯ですね」

「そうです。然し、現在は、已に、淨化時代に這入つて居るぢアありませんか。盛に、惡重役がしばられたり、緊縮政策が行れたり、資本主義濫用機構に、世人が眼醒め出しつゝあるのが、その證據でしよう」

「なるほど。然し、問題は、その淨化時代の如何なる地點をば現在の我が財界は通過しつゝあるかですね。この點はどうですか」

「まだ、初期ですね」

「どうして、そう云ふことが云へますか」

「と云ふのはですね、この財界淨化時代は、企業の淘汰時代と組織の修理時代と機能の改良時代とに分れるが、目下の處は、依然として、企業の淘汰時代に屬し、組織の修理や、機能の改良は、その爲めに阻まれて居る現狀だからであります」

「そうすると、まだく\、不景氣時代の初期に屬する譯ですか」

「勿論です。尤も今回の不景氣は、所謂普通の不景氣ぢアないんでして、經濟維新運動に伴ふ財界の苦難時代なんです。處が、日本では、爲政者のやり方が惡いものだからして、不安が財界全體にみな切つて居ります。そして、財界を萎縮化さしてゐます。だから、一層、不景氣が深刻に感ぜられるのです。が、もう一つ、不景氣の深刻に感ぜられるのは目下、企業の淘汰時代に屬するからです。組織の修理時代から機能の改良時代になりますれば、漸次、不景氣の苦痛は輕くなる筈です。然し、何と云つても、財界淨化時代は、財界高度化時代を準備する處の消極時代なんですから、この時代に於て、不景氣なのは已むを得ますまい」

「一體、その企業淘汰時代は、何時まで續くんですか」

「業界にコンチエルンでも出來て、業界が統一化されるまでは、續きましよう」

「そうすると、企業淘汰時代を早く切上げさせるには、コンチエルンを作らせるに限る譯ですね」

「まあそうです」

「處で、そのコンチエルンと云ふのは何ですか」

「コンチエルンと云ふのは、簡單に云へば、組織化でしようね。自己の立場を失はないで、多くの企業なりカルテルなり、利益協同團體なり、聯合なりが、互に一つの統一に服して、一つの組織體内の細胞と化した場合に、夫をコンチエルンと云ふんでしよう。現に、リフマン教授の如きも、「コンチエルンとは、生産上、經營上、金融上、或は商務上に於て、自己の立場を保持し乍ら、一定の統一に服して、組織體を構成したものである」(Die Konzerne kann man definieren als eine Zusammenfassung rechtlich selbständig bleibender Unter-

nehmungen zu einer Einheit in Produktionstechnischer, verwal-tungstechnischer, kommerzieller und namentlich finanzieller Hin-sicht. Kartelle Konzerne und Trusts" S 275）と云ふ様なことを云つて居りますが、然し、結局は、コンチエルンは、獨逸に起つた一種特有のものでありまして、主として、金融資本家が、多くの企業やトラストやカルテルを買收して、夫等を統合化し統制化して、一個の組織にまで細胞化したものである、と云へましよう。だから、コンチエルンと金融資本系統網とは、同一のものなんです」

「日本に、そんなものがありますか」

「まだありません」

「財閥と云ふのがあるではありませんか」

「財閥とコンチエルンとは似て非なるものです」

「何うしてですか」

「蓋し、財閥には、金融資本網やコンチエルンに見るような統制力が缺けて居るからです、現に、御覧なさい。三井財閥のうちでも、三井銀行は三井銀行で意張つてゐるし、三井物産は三井物産で意張つてゐるし、王子製紙は王子製紙で意張つて居つて、結局、夫等は、資本系統を同うするのみではありませんか。三井銀行と三井合名とか云つたやうなものが、王子製紙や、三井物産を初め、多くの關係會社を完全に統制しては居ないぢアありませんか。だから、所謂財閥であつても、コンチエルンだとは云へませんね」

「なぜ、財閥とコンチエルンとの間をそんなに區別する必要があるんですか」

「統制關係の有無が、業界の整理に重大なる影響を持つて居るからですよ」

「その理由は」

「理由よりも、何よりも實際を見たら分るでしよう。現に昨今でも樺工が三井銀行に金を借りて居つて、三井銀行は、その爲めに困つて居るようですが、若しも三井銀行が、王子製紙を統制し得る立場にありとすれば、恐らく、樺工を安く買收して、王子製紙と合併させたでしよう。合併させない迄も、コンチエルンを組織させたでしよう、處が三井財閥は財閥であつて、コンチエルンではないのですから、權力が一所に集中化して居らぬので、そう云ふ譯に行かぬのです。だから、以上を以て見ても、財閥とコンチエルンとを區別して考へる必要があるではありませんか」

「なるほど、そうですかね。さうすると、財閥家と金融資本家とも違ふ譯ですか」

「勿論です。獨逸邊りでは、金融資本家がコンチエルンの統制力を握

つて居るんですからね。處が、日本の財閥家などは、單に、所有權をもつて居るだけであつて、所屬企業を經營上で統制する實力はないですからね」

「なるほど」

「だから、結局金融資本家は統制力を持つて居る財閥家だ、とも云へましよう。が、同時にまた、金融資本家の特色は、金融業者が、直ちに、工業家であつて、人格的に、同一者化して居る點ですね。だからして、日本でも、三井銀行の池田成彬さんが、直ちに、何々工業會社、何々トラスト、何々カルテルの社長と云ふのでなくては、眞の金融資本家現象は見られない譯です」

「そうすると、日本でも、企業界にコンチエルンが出來て、企業界の整理が出來上るのは、前途遼遠ですね」

「前途遼遠と云ふ譯でもないでしようが、兎に角、相當の期間を要すでしよう」

現內閣の經濟財政々策を評す

堀切善兵衛

一、特徴

現內閣の經濟財政々策は時代離れのした官僚思想に始終して居る。是れが大間違ひの根源であり、是れが一掃せられざる限り、國民經濟も、中央地方の財政も、照變するのみで決して立ち直る筈がない。內閣の中樞たる濱口、幣原、井上、安達、江木の諸君に就て見よ。孰れも官僚若くは準官僚ではないか。殊に經濟財政策は專ら濱口、井上兩君の方寸より割出さるゝのであるが、濱口君は官吏以外に經驗のない人、卽ち所謂世間知らずである。井上君は大學卒業以來トン〱拍子に日銀總裁大藏大臣等に經登つたる所謂苦勞知らずの人である。此世間も苦勞をも知らぬ兩君が生活難、就職難、失業難等々の日々に辛烈を極むる今日に處して行くのであるから、其爲す所誠に時代離れがして居る。濱口君は首相官邸の煽風器を全廢して扇子で間に合せよと謂つた相だ。恐らくは此冬期にはストーブを全廢し火鉢で間に合せよと命ずるだらう。井上君は日比谷公會堂三千の聽衆に對し諸君も公債の一枚や二枚持たぬものは有るまいと演說した相だ。公開演說會の聽衆の大部分が公債の所有者と信ずる程に井上君は苦勞が足りない。濱口君は歐米文明國の首相官邸の書記通が左手に扇子を使ひ、右手にペンを走らせて居ると考へて居るかも知れぬ。世間知らずと評しては多少語弊があるかも知れないが確かに彼は世界は知らぬのである。脚一度でも歐米の地を踏んだことがない、好男子惜むべし、智見が狹く經驗が乏しいから其思想が偏狹になり易い。然も多年官僚生活で鍛へただけに自負心は恐ろしく強く、一度主張した事は十年でも廿年でも變改しない、通貨收縮論で其經濟論は一貫否な固定して居る。レーニンは極端なる共產主義でソビエット政府を建立したが途中より共產主義の一本鎗では到底駄目な事に心附き所謂新經濟政策を採用して一部

共產主義を緩和した。夫れでレーニンに極力反對する外國の評論家も彼が過ちを改むるに吝ならざることを奬揚して居るのである。濱口君には此變通の才略が全然ない。現內閣の財政經濟政策は是等の思想性格に特色附けられて居ることは疑ない。其熱心は愛すべしだが大局に通ぜざるが爲め必ず行き詰るのである。事物の一方面のみを觀て他の一面を觀落して居るが故に全體の調和を失ひ角を矯めんと欲して牛を殺すに至るのである。

首相及び藏相の外に經濟界に最も重大な關係を持つは商工大臣であらねばならぬ。然るに俵君が內務畑の役人上りで商工界より見れば所謂山家育ち、心細き限りである。以下此人達に由りて實行せられる重要政策に付檢討を試みよう。

二、消費節約の大愚策

現內閣は我國多年の懸案たりし金解禁を斷行する其準備として、政府自身に於ては財政の緊縮を勵行すると同時に、國民全體に對しては所謂消費節約を強要した。政府が此宣傳に如何に熱心なりしかは濱口首相自ら檄文を草して全國戶々に配附したのみならず、ラヂオやトーキー迄も使用して消費節約の徹底に努めたのでもわかる。所で消費節約とは不可解千萬の熟語で諸外國には斯樣な熟語は存在しない。單に儉約とか、貯蓄とか云ふ文字ならばドコの國にも有り勝ちだが消費ーコンザムプションーに節約を結び附けた熟語は全く濱口內閣の新發明である。過る議會に於て井上君は米國にても消費節約を國民にやらせたと云ふから、夫れなら米國で消費節約と云ふ熟語を何と申すかと尋ねたら「知りません」と云ふ事であつた。知らない筈だ。ソンナ熟語は外國には無いのである、強ひて求むればエコノミー、ヲブ、コンザムプションであるがエコノミーは經濟であつて節約でない事は餘りに明瞭だ。殊に米國人の消費哲學はメーザーの論じて居るが如く近世米國經濟界の飛躍的大發展を來さしめたる原動力であつて、消費の擴大、社會化、健全化、是れが產業振興の源泉であり、消費卽生產、生產卽消費を離れては近代の社會經濟は成立たぬのである。何等の大愚策ぞ、現內閣は此大切なる消費を抑壓し減縮せしむることを其政策の隨一にしたのであつた。斯る大愚策を案出したのは要するに上述の如く、濱口、井上兩君が官僚出身で月給生活以外の社會を知らないが故である。月給取りの家計より云へば、成るべく買はず使はず、百圓の月給取りは九十圓で生活して殘り十圓は貯蓄することが賢いのであるが日本國民の大多數は月給取りではない。殊に經濟界の好況不況によりて收入に影響せざる官吏ではないのである。農、工、商其他經濟界に活動して居る人々の收入は官吏の月給の樣に固定しては居ない。商工業者の

收入は、餘計賣れば賣れる程增大するのである。農民と雖も其生產する物資の大部分はヤハリ賣却するのである。否今日の經濟組織は分業と交換賣買が基礎となつて成立して居るから、有らゆる人々は、其賣らんが爲めの生產をして居るのである。此實情を無視し、政府自ら全國民に號令して買ふな使ふなと宣傳するに至つては實に愚の程度を通り越して沙汰の限りと云ふ外はない。各人をして其得意の絕頂に於て働かしめ、其生產物の殆んど全部を他人に賣り、自己の所用の殆んど全部を他より購入するの制度、即ち分業と交換、賣買とが能率增進、國富增加、文明進步の原動力であるのに現內閣の政策は將に其正反對を行つたのである。是れでは經濟社會の破壞となり、滅亡とならざるを得ないではないか。少くとも社會生產總額の大減退、國民所得の大縮少を招徠せざる筈はないのである。古來世界孰れの國でも守錢奴や高利貸の類は卑められた。是れ彼等に社會的考がなく、只單に自分獨り財貨を貯へれば善しとしたからである。此種守錢奴や高利貸的生活を模倣する者少しは有るも妨げぬかは知れぬが、國民全體が一度に互に消費節約即ち買ふな、使ふなと出て來ては社會全體共倒れの外はない。メーザーは云つた「貯蓄は決して產業を興すものに非ず」と又曰く「節約は國民をして唯パンと水とに依りて生活せしむるに至る」と。全國民は過去一年、現內閣の主義主張に聽從し消費節約を勵行したる其結果や果して如何。初めより此愚策に反對し、攻撃したる吾人の主張と對比して今や正しき判斷を爲すべきの時である。今日極度の不景氣生活難を招徠したる最大の原因は消費節約の宣傳に依りて國內市場を破壞に導きたるに在る事は一點疑がない。而してかゝる大愚策を案出したのは要するに月給生活以外に經驗なき官僚政治家の錯覺より發したのである。

三、物を觀て人を觀ず

濱口、井上兩君は共に大學法科を出で大藏省と日銀で半生を送つた。故に濱口君は大藏省の事は詳しいが金融經濟の方面に暗い。井上君は金融方面には詳しいが產業界には素人だ。金を貸す經驗には富むが恐らく借りた事はあるまい。夫れで兩君とも經濟財政の大家の樣に自他共に許して居るが近頃のやり方を見れば諸方に其弱點が現はれて來る。兩君は頻りに諸外國に比較して我國の物價は尙ほ割高である、故に之を歐米並みに引下げねばならぬ、之を引下げねば我輸出は增進せず、從て貿易の權衡も回復せぬ、故に極力物價を引下げねばならぬと云ふのである。而して組閣以來今日まで諸種の低物價政策を採り來つた。但し減稅官業料金の引下げ等は未だ實行しないが金解禁、消費節約宣傳等に依り低物價政策を取つたものである。殊に通貨縮少に依り

て物價を低下せしむべしとは民政黨年來の主義にして、現内閣は解禁以來既に正貨を二億四千餘萬圓も外國へ現送せしめ、又昨年末に在外正貨三億圓を用意したりと公言せる其在外正貨も今や殆んど全滅の狀況であるから、彼れ是れ四億以上の通貨は收縮した譯であり、又現に輸出の最盛期なるに拘らず外銀は依然として正貨現送を繼續して居り更らに九月下旬よりは來期の輸入準備が始まる次第故、今後も少なからず正貨は流失し、從て通貨は收縮し、爲めに物價は低落するものと斷定せざるを得ない。然るに國民の大部分殊に農工其他物資の供給者側に在りては今日の物價でさへ最早氣息奄々の有樣である。繭、野菜果物、薪炭類より株式田畑其他の不動産に至るまで實に驚く可き低落振りだ。然も此低落は最早や停止した譯では決してない。今後通貨の收縮すると共に益々低落するに至るべきは云ふまでもない。即ち政府當局の希望するが如く物價は殆んど極端まで低落せんとして居るのである。此低落を喜ぶものは主として確定俸給に依りて衣食する三十萬人の官吏である。此低落の爲めに破產し、號叫し、生存權を脅威せらるゝものは農工商の大多數である、景氣の良否に依りて高低する勞銀取得者も漸次失業苦と低賃銀に苦まねばならぬ事になる。即ち物價は低落しても人間は尙ほ夫れ以上に低落するに至るのだ。

こゝが肝要な點である。抑も政治經濟の本領は人と物との關係を究明し、財物に對する人間の地位を高めんとするに在るのである。物資の供給を豐かにするは何が爲ぞ、人間に對して物資を安くせんが爲めに外ならぬ。物資の供給不足なる事が何故社會の不幸なりや、其物資に對し人間が安いからである。窮極する所、人間の爲めの物資であり人の生活を幸福にする爲めの物資である。故に物資を安くせんが爲めに人の値打ちを安くすることは許されないのである。換言すれば政治經濟の本領は人を高くして物を安くしなければならぬ、人を安くして物を安くするならば寧ろせぬ方が善い。此處に經濟政策の賢愚と良否とが別れて來るので、人と物とのレラテビチーを離れては經濟論は邪道に陷ち其經濟政策は經國濟民の本旨に背くに至るのである。人を安くすることを意とせずして物價を引下げんには社會を貧乏にするが一番近道である。愚なる政治家財政家が現はるれば現はるゝ程社會國家は貧乏になると同時に物價は低落すること疑ない。

眞の政治經濟は人を高くしながら物價を低下せしむるにある。米國の物價は歐洲戰爭終了後非常に低落したは何が爲めぞ。現内閣の諸公や民政黨の諸君は通貨收縮や緊縮政策や消費節約の外に物價を引下べき眞の方法在る事に心附かぬ樣であるが、米國の物價を低落せしめたる眞の原因は斯樣な手段方法ではない。即ちテーラーの科學的管理經營、フォードの能率增進、大量生產主義、フーバーの無駄排除、標準

化、單純化運動等、相結び相競つて積極的に生産費を安くし依て以て物價を低下せしめ同時に人價を引上げたのであつて二十年一日の如く通貨收縮一天張りで來て居る民政黨の經濟政策は餘りに時代離れがして居る事を知らねばならぬ。

發明發見、機械の利用、能率の增進、運輸交通の完備、無駄の排除是等は孰れも政友會の主張し來りたる所にして、人を高くすると同時に物を安くする所以の途たらざるはないのである。民政黨の經濟論は物は觀れども人は觀ないのである、物價を安くするが爲めには何事をも敢て辭せぬのである。夫れが爲めに遂には人を犧牲にして物を下げても怪まぬのである。玆に彼等の政策の一大缺陷が在る。由來民政黨の内閣出現すれば世間は不景氣になると云はるるは畢竟之が爲めだ。即ち彼等は人を忘れて物にだけ着目し、物を安くする事が政治經濟の殆んど全部なりと誤解し、一番大切なる人間其ものの値打ちの增減を考へない。而して此誤つたる政策は今回の金解禁に伴ふ諸般の準備若くは手段中に尤も露骨に現はれて居る。

四、最惡の時期に無準備の解金

「經濟界の現狀に於て金解禁を斷行するが如きは肺病患者にマラソン競爭をやらす樣なものだ」とは誰あらう、井上君が其藏相就任一箇月以前まで公會の演說に述べて居る名言である。此肺病患者に對し、井上君は藏相就任後然らば如何なる療法を施したか、政府に在りては極端なる緊縮政策、國民に對しては上記の大愚策消費節約の强要であつた。即ち肺病患者に極端なる絶食療法を施した。左れば肺病患者は益々衰弱して來た。恰も其時米國の財界に一大恐慌が起つた。昨年十月下旬より十一月の中旬にかけて米國株式の暴落は約九百億圓に達したと稱せらるゝ。之を見たる井上君は金解禁の爲めに所謂「天祐」と信じたのである。蓋し株式暴落の結果は米國の景氣は下り坂に向ひ、其金利は下落するに至るべく、延いて我國が解禁を斷行するも我正貨は米國に流出すること無かるべし、と誤信して、扨てこそ急遽一月十一日より解金を斷行すべきことを聲明するに至つたのである。

米國株式界の暴落を以て我國策の遂行上天祐なりと考へたるは何たる端見淺慮ぞや。我國の經濟界は米國と密接なる關係を有し、彼地の不況は直ちに我輸出貿易の上に一大打擊を與ふるは明々白々の事實ではないか。殊に今回の米國財界の大反動は上述の如き大規模のものでありたる以上は、我國に及す其影響も亦至大なるもの有るべきは、何人と雖も想像するに難からざりし所である。然るを單に之を金融技術の上のみより判斷し、解金の爲絶好の機會なりと速斷したるは實に取り返しの附かぬ失策であつた。即ち我國は暴風雨の眞唯中に肺病患者

をば、而も數箇月に渉り、絶食療法に依りて衰弱し切つたる此病人を推し出した結果となつたではないか。確かに解金の爲には最惡の時期であつた。而も一年半年急ぐに當らなかつた、爲替の回復に依る輸入增加を抑制する爲關稅を改正し、內國市場を確保し、限界的產業を保護し、國產愛用、產業合理化を實行し、其他萬般の準備を整へて然して之を斷行するも決して遲しとせぬのである。然し現內閣のやり方は總て倒行逆施であつた、否な非募債主義に依りて金融資本家の御機嫌を取り結ぶ以外には全然無策無爲に終つて居る。

井上君はあの際解金をして居なければ今日我國は世界的不況に際會して非常な目に遭うたであらうと主張する。左りながらこは確かに詭辯だ、爲替が下つて居た方が輸出に好都合で輸入に不利であることは三尺の童子も知るではないか。國內全生產額の二割弱の輸出貿易よりも其八割を占むる內國市場の方が國家經濟上重要なることは云ふ迄もない。政府は解禁に伴ふ愚策に依りて此內國市場を崩壞せしめたが之を健全に維持する方が爲替の安定などより遙かに國民に取り有意義であつたのである。井上君は又解禁を斷行せざりせば英貨公債の爲替が不可能であつたらうと云ふが詭辯も亦甚しい。不用意なる解禁の爲めにこそ我經濟界は大傷を受け、漸次歐米の信用を失墜せざるを得ないのである。況んや國辱公債と迄稱さるる高利のものに借替へたればこそ我資本の海外逃避正貨の流出は停止する所を知らざるに於てをや。

五、公債政策の破綻

政府は我國債の總額六十億に達するの事實を擧げ、是が爲國家が滅亡するに至るが如き叫びをなし、濱口君一流の偏狹なる宣傳を逞ふしたのである。今日世界列强中、六十億程度の公債に過ぎざる國家は他に一ッも無いではないか、獨逸は戰前迄公債額の最少を誇つた國であるが今や年々十數億の償金を數十年に渡つて支拂はるざ可らざる有様ではないか。英、米、佛の如き我國に十倍の國債を有することは今更ら云ふまでもない、況んや我公債の大部分は(外債を除き)生產的公債なるに於てをや。左れば公債を斷じて募集せずと云ふが如き主義は金融資本家に媚ぶるの外近代政治の上に於ては何等の意義を有せぬのである。現內閣は斯る不合理なる主義政策を標榜したる結果今更ら非常に困却してゐるのは笑止至極である。即ち不景氣深刻を極め失業者急激に增加すると共に、之を救濟するは內閣維持の爲にも最も肝要なるを自覺し、遂に自治體をして地方債を發行せしめ以て失業救濟の事業を起さしめて居るのである。

歐洲戰爭後地方自治體の財政頓に膨大し其膨脹率は遙かに中央の財政を凌ぐものなるは明白なるに拘らず、地方の財源不足して頗る困難

を極めつゝあるは周知の事實である。故に苟くも政府にして失業救濟の爲め事業を起すの必要を認むるならば何故に卒直に政府の手に於て公債を募集して自ら其事業を遂行せざるや。蓋し政府は非募債主義の看板の手前今更之を發すの不面目なるを顧慮する爲めならんも、コハ餘りに卑劣千萬のやり方である。殊に財政狀況の比較的不良なる地方自治體に此難問題を轉嫁せしめ益々將來の禍根を增加せしむるが如き至誠以て國家民人に接する政治家の態度とは斷じて目す可らざる所である。

無理なる政策は決して永續性を有しない。我六十億の公債が所謂放漫政策の結果無用に增加せられたるが如く宣傳したる現内閣も今や其鬼面は地に落ち、耳を蔽うて鈴を窃むが如き態度を以て地方自治體をして募債の責任に當らしむるが如き事實上に於ける非募債主義の破綻に非ずして何ぞ。而も尙非募債主義を棄てずと云ふが如きは世間を欺くの甚しきものである。

凡そ、近世の國家に於て數十百萬の失業者を出し、然も政府が我關せずと云ふ有樣では其國に政治ありと云ふ事は出來ない。英國の例を取つて見ても失業養老、傷害及び救貧事業等の爲め政府地方自治體、雇主、勞働者の支出する總額を合算すれば一年約十五億圓に達するのである。然も此巨額の經費は殆んど皆直接之を給與するものにして仕事を與へ之に依りて救濟せんとするものではない。是に比すれば從來我國に於て行ひ來りたるが如く治水、鐵道、道路其他の公共事業を起し、依りて以て人々に仕事を與へ間接救濟に當てたる方優ること萬々である、然るに非募債主義に囚へられたる現内閣は近代政治の本能さへ果す能はざるの窮狀に立つのである。此點に於て全く進退に窮したる政府は遂ひに最近に至り非募債主義を放棄して減債基金繰入れを見合すか或は或程度の募債を實行するかの孰れかの道を採るに非らざれば六年度豫算編成は不可能なるに鑑みて見苦しくも非募債主義の其大看板を撤廢する模樣なりと報ぜらるゝに至つた。果して然らば是れ明かに反對黨の軍門に降伏したるものにして内閣存在の意義消滅したるものと評するの外はない。殊に公債政策に付ては極端に反對黨を攻擊したる現内閣に於てをやだ。

六、自ら財政を破綻に導く

非募債主義と極端なる緊縮政策は政府事業を繰延べ、打切り、或は之を縮少して徒らに失業者を激增せしめ、消費節約の宣傳は直ちに生產の減退を來さしめ、國内市場を崩壞せしめ、國民多數の收入を激減せしめ其業を奪つて、而して政府の收入のみ減少せしめざるの魔術は有るべき筈がないのである。卽ち國民の窮苦に陥るも同時に政府は未

だ何等の減税、値下げ等を實行せざるに拘らず其歳入は日一日と減少し、五年度の實收は豫算に比し八千萬圓の減少を來し更らに六年度に於ては二億圓に達する減收を見るに至るべしと稱せらる。是が爲め政府は將に四苦八苦の有樣にして世間早くも現内閣に豫算編成難に陷りて瓦解するの外なかるべしとまで評するに至つたのである。

殊に現内閣は倫敦會議の結果多額の餘剩財源を得べければ主として之を國民負擔の輕減に充つべき旨を公言したるに拘らず今回の條約に依る兵力量を以てしては國防上缺陷あること明瞭なるに至りたるを以て當然其補充計畫を樹つるの必要あり、是が爲め却て多額の財源を要し減税の如きは今日の場合殆ど期待すべからざるに至つたのである。

財源は日々に減縮し、公債は非募債主義の手前政府の手に於て發行すること困難である。然も豫算上の當然增、或程度までの新規事業の計上、農村救濟、失業對策等にはいやが應でも相當の豫算を計上せねばならぬ、今や全く政府は血眼の有樣だ。

其結果は恐るべき苛斂誅求である、東京市内の税務署では總員出動で早朝より徴税督促に當らしめて居る。殊に減收著しからんとする傾向見えて以來政府筋の誅求振りは未曾有の辛酷さを示すに至つた。是が爲め納税者の方では督促の最も急なる國税は比較的納入するが地方税の方は夫れだけ滯納となるのである。即ち政府の苛斂誅求は獨り納税者を搾取するのみならず、地方自治體の取り分を奪取しつゝあるのである。一面失業救濟事業の爲めの募債を餘儀なくせられて其負擔を加重稼るのみならず更らに税金奪取によりて苦めらるゝ地方自治體は全く滅茶々々の、狀態に陷らざるを得ない。現内閣の消極、緊縮、非募債、消費節約等の主義方針は先以て國民の大多數を窮乏に導き、延いて政府自ら大窮乏に陷り、歳入の激減を來し財政の破綻を暴露するに至つた。凡そ國家の財政は國民經濟の基礎の上に立つものたる以上は之れ自然必至の勢力であらねばならぬ。政府は昭和六年度の豫算なるものを此窮境裡より編成するのであるが、其出來上るものは必ずや唯數字を羅列したるに止まりて豫算と名くべきものなるや否やは疑問である。何となれば現内閣は後から後からと之を勝手に改變するのだから其豫算なるものは有るも無きも同然で我國に大藏省有つて以來今回の如く出鱈目の豫算を編成した事は曾てない。

七、債權債務の權衡を破壞す

消費節約、極端なる緊縮政策、時期を誤つたる金解禁の結果は内國市場を破壞し、有價證券、不動產其他物資の暴落を來さしめ、今後も正貨の流失すると共に經濟界は益々疲弊して其回復殆んど期待すべからざる現狀に於ては、債務者と債權者との關係に一大變動を與ふるに至りたるは明白なる事實である。即ち從來の債務者は依然其債務を倍加せられたると同樣になつた。例へば株券又は不動產を擔保に銀行又は私人より融通を受けたりし者は今日其同一債務を支拂ふ爲に、少くとも二倍以上の株式不動產等を賣却せざれば皆濟不可能となつた今日

地方農民は約五十億の負債を有するのであるが、此負債は孫子の代まで返濟見込なき有様である。其心理狀態は全く絶望である。而して世**界中には借金の無くなつた國もあると云ふ様な事を段々聞き知るに及**んでは彼等は果して如何なる思想に投ずるであらうか眞に恐るべき現狀である。近代政治の特徴は國家の力に依りて社會の弱者を保護し强者が之を其足下に蹂躙することを防止するに在るのである。然るに現內閣のやり方は弱者を飽くまで虐げて强者に不當の利益を提供するのである。

數年以前に他より一萬圓の負債を爲したる者ありとせよ。彼は決して直接其一萬圓の通貨其物を必要としたるに非ず、其一萬圓の購買力を借り出し、其購買力を使用したのである。故に公正の理論より判斷して同一の購買力に適當の利子を附して返還すれば善いのである。然るに現在の有様では其一萬を返す爲めに二倍以上の購買力を返還せねばならぬ不公正が伴ふのである。政府が極めて不用意に我國の貨幣價値を暴騰せしめたる其結果は、單に弱肉强食の勢を助成するのみならず、社會公正の原則を破壞したるものと云はざるを得ない。而して此間より生ずる凡百の社會相の惡化を豫想せざりしは駭くべき端見である。畢竟政府當局が功を急ぐの餘り社會の各方面に對し周到なる觀察と用意とを缺きたる其爲めと斷ぜざるを得ない。

八、之を要するに

偏狹なる官僚式經濟思想が最も露骨に働き出したのが現內閣の財政經濟政策である。メーザーは米國の消費哲學と歐洲の消費哲學とを比**較して歐洲流の考へ方では到底經濟の發達は不可能なる所以を力說し**たが我濱口內閣の消費哲學に至りては將に印度哲學に近い。濱口君は扇風器もストーブも無用とするのである。井上君は日本人が夏の浴衣を一枚づゝ節約すれば一箇年に全國で數千萬圓が貯蓄せらるると宣傳した。安達君は洋服は裏返しにして使用すべし、帽子は一ツ物を何年でもカブルが宜しいと演說して廻つた。夫れで、分業と交換、賣買とが近代經濟社會の根帶であり、共存共榮が國民全體の繁榮の途である事に心附かざりし府縣の小役人小學敎員、可憐なる地方農民などは此印度式消費哲學に隨喜の淚を垂れたのであつた。其結果は官も民も共仆れだ。

消費節約の宣傳唯一ツだけでも國民經濟を崩壞するに充分である。況んや世界不況の眞唯中を目懸けて解金を斷行し、正貨は滔々として流出して停止する所を知らざるに於てをや。「役人には經濟が解らぬ」とは多年民間で口にせる所であつたが果然此俗諺は適中した。我經濟界は役人上りの經濟財政家に指導せられて居ては眞に立ち直る事が不可能である。國民は須く金貨本位の經濟政策を棄てて產業本位の經濟政策を樹立すべく、政治家は物資の高低にのみ着眼せずして人間の高低に注意する様にならなければ駄目である。

敗北主義者の解消論

大阪に於ける勞農黨解消運動の擡頭およびその行方

大山郁夫

一　勞農黨は攪亂されたか？

八月下旬に入つて、いはゆる勞農黨解消運動が、突如として大阪地方の一角に烽火を擧げた。各新聞紙は一齊に筆をそろへて、大がかりに事件の内容および經過を報道し、折柄の夏枯れの紙面を賑はした。一般世間の注意は、忽ちそれに吸ひつけられて行つた。中にも、豫てから左翼戰線に於て特殊の一陣地を占めてゐる勞農黨に事あれかしと待ち構へてゐた連中は、——支配階級および直接それに隷屬する反動的諸分子は言ふに及ばず、一聯の左右社會民主主義者から、ウルトラ・リンケンや、×××の『背教者』たる所謂解黨派の面々に至るまでも、——單に異常の興味を以て、事件の成行を眺めてゐたばかりでなく、それ〴〵に鷄の眼鷹の眼になつて、それへの働き掛けの切ッ掛ケを狙つてゐたかのやうに見えた。

かくてこの解消運動は、その進行過程に於て全國的に一大センセーションを卷き起すべく約束づけられてゐるものとして、——特に『危機に立てる』(!)勞農黨を繞つて容易に收拾のつかない大混亂の渦卷の中に陷沒せしめるべき形勢にあるものとして、各方面から息づまるやうな關心を以て眺められてゐた。これに力を得た解消派の諸君は、それだけで既に勞農黨内部の徹底的攪亂に成功し得たかのやうに妄想し、勝ち誇れるもののやうに、傲然たる態度に於て自己の主張と行動とを鳴物入りで宣傳した。眼先きの早いジャーナリズムは、このニュース、ヴァリューに充ちたる事件を見逃がさう筈はなく、早速餓

虎の勢でそれに飛びかゝつて行つた。かくして騷ぎは一層擴大されて見えた。

ところで、その結末はどうなつたか？ 勞農黨解消運動は、結局大阪方面で瞬間的に線香花火の如き閃めきを見せたきりで、やがて餘りにもあッけなく無限の闇に消え去りつゝある。『颱風一過』とは眞にこの事だ！ わが勞農黨の基礎は、それがために微動だもしない。

二　我々の立場

とはいへ、この解消運動は、何といつても勞農黨の內部から表面に押し出されたものであり、しかも多數の黨員ならびに黨を支持する大衆に、よしホンの一時的にもせよ、或る程度の驚きと不安とを與へたものである以上、我々はそれを全然對岸の火災視することは出來ない。少くとも我々はその責任が我々の不明に歸せしめられ得る限りに於て、あくまで虛心坦懷に大衆諸君の前に陳謝しなければならぬ。特に本文の筆者の如きは、結黨提案者の一人として、更らに結黨以來黨員大衆によつて黨の重任を托されて來た一人として、心の底からその責任の重大さを痛感し、罪を大衆諸君に待つものである。更らにまた、我々は今後常に、解消運動問題を中心としては、過去數年間同じ陣營內にあつて苦難を共にして來た若干の同志たちに對して、必然に對立的立場を取らなければならないのである。それは、我々にとつて如何に必要なことであるにもせよ、決して愉快なことではない。少くとも我々は、何よりも先づ、かゝる好ましからぬ事態を生ぜしめたことについて大衆諸君の寬容に訴へることなくしては、斷じてこの問題に關して口を開くことが出來ないのである。

しかも我々は他方に於て、今回の事件が黨の基礎の上に何等の影響を及ぼさなかつたことについて、大衆諸君と共に心から喜びを頒たなければならない。今回の事件が我々の立場から見てかくも滿足すべき終局に急轉したのは、何よりも殊に、その勃發に際して、黨員および黨を支持する大衆の壓倒的多數が、逸早く黨本部に向つて熱烈なる聲援を與へたためであり、更らに黨本部がそれに勵まされて、直ちに百パーセントの自信と、決意を以て斷乎として機宜を得た處置を取つたためであるに相違ないのだ。我々はこの新たなる經驗からも、今後の我々の實踐のための教訓を十分に攝取しなければならぬ。と同時に、我々は更らに一歩を進めて、今回の事件を黨の今後の發展のために打つて附けの契機として役立たしめるやうに、お互ひに一層緊密に協力しなければならないのだ。そして、そのために我々に取つて最も必要なことは、この際我々が斷然として假借なき自己批判を行ひ、且つそれに卽して、內に向つては益々組織の整備と活動力の充實を圖り、外に

向つては一層強力なる闘爭を展開して行くことであるのは無論である。苟くも我々がかゝる用意を怠らない限り、よし向後幾分かは豫想し得られる『餘震』が幾たび不意に我々の陣營内部のそこかしこに襲ひ來るやうなことがあらうとも、我々はそのために寸毫も平靜を失ふ必要を持たないのだ。何故なれば、それは却つてその度毎にわが黨の地盤を固めて行くための動力以外の何物でもないであらうから。

三　解消論は大衆の間から起つたものでない

勞農黨解消運動が、上に述べた通りに、突如として來り突如として去つたことの直接原因の今一つは、解消運動そのものの中に求められる。すなはち解消運動は、斷じて解消派の諸君が言つてゐるやうに、戰鬪的勞働者農民大衆の底からモリ〳〵と湧き上つて來たものではなく、一部少數のインテリ諸君とその雷同者たちの無責任なる觀念の遊戯の産物に外ならないものである。今假りにそれが戰鬪的勞働者農民大衆の底から湧き上がつて來たものだとすると、それは單に、今頃は必然に燎原の火の如く四方八方に燃え廣がり、「無産階級の全戰野を風靡してゐるべき筈であると言へるだけではなく、更らにまた、解消し行く勞農黨の跡に屹然として聳え立つべき、より高度な、より強力な勞働者農民の闘爭組織が、少くとも我々に展望し得られる間近の距離に迫つて來てゐなければならない筈である。ところが、事實は全然これに反して、さうしたものは影も形も見せてゐないのだ。解消派の諸君は、唯漫然と勞農黨に對して内部から惡罵を放ちつゝその無條件的即時解體の要求をわめき立ててゐるだけで、解體後の黨員大衆の行くべき道を、明示どころか、暗示さへもしないのだ。この點は、最近解消派の諸君のイニシアティーヴの下に開催された勞農黨大阪府支部聯合會の擴大執行委員會に於て、その司會者さへもが明確に指摘したところである。解消派の諸君は、彼等の自己滿足のために勞農黨を奇麗サッパリと地上から拭ひ去らうとする一念から、そのあとに何等の組織をも殘さない結果になるであらうことを少しも意としないのである。かくて彼等は、彼等のさうした輕擧妄動によつて無意義に左翼戰線を攪亂し、殊に戰鬪的勞働者農民大衆が多年の惡戰苦闘を通じて勞農黨の上に蓄積して來た左翼的エネルギーを擧げて浪費しつくすことを敢てしようとしてゐるものだと批難されても、何等の辯解の辭をも持たないのである。それは疑ひもなく、一つの重大なる階級的犯罪だといはねばならぬ。戰鬪的勞働者農民大衆は正當にも、今や彼等のさうした無責任な非階級的態度に對して、燃ゆるが如き憤激の聲を擧げてゐるのである。

數日前までわが勞農黨の大阪支部聯合會の幹部の地位にあつた小岩

井浄君外數名が、同聯合會の青年部の諸君と相謀つて、豫てから黨內に勞農黨解消同盟の一分派を結成して、その主唱の下に最近擴大執行委員會を開き（八月二十九日）、その場で勞農黨の即時解體を決議し、次いで勞農黨大阪府支部聯合會の名に於て『解消宣言』を發表したまでの約一ケ月間の言動に關しては、我々は既にその詳細なる情報を得てゐるが、しかし我々はまだその內容を我々の手で精細に調査し檢討してゐないから、それを茲に持ち出すことを差し控へるであらう。我々は茲では唯、それらの解消派の諸君が右の擴大執行委員會を中心とする前後の數日間に發表した聲明書や檄の如き諸文書について、——殊に『解消宣言』を基本的資料として用ひて、——彼等の解消論の本質、その理論的根據、ならびに彼等のそれを主張する態度、等々を批判的に究明し、尙ほそれとの對照に於て、この問題に對するわが勞農黨の對策、態度、方針を出來るだけ明確に記述するであらう。

四　勞農黨本部の態度聲明

勞農黨本部は、八月三十日に常任委員會を開いて、愼重に解消運動の問題を討議し、黨の立場からそれに嚴重なる批判を加へ、尙ほそれに對して黨として取るべき根本的態度、方針を決定し、それを全國の勞働者、無產市民大衆の前に公表すべく、一の『聲明書』を發表した。

この『聲明書』はまづ簡明直截に解消派の勞農黨即時解體の要求に答へて、『勞農黨本部は當面の客觀的狀勢下に於けるわが黨の確乎たる存在を絕對に必要であると確信する』と宣言してゐる。

『聲明書』は次に、當面最も重要なる問題とされてゐる勞農政黨——二つの異つた階級であるところの勞働者と農民の政治的結合の一形態としての——存在價値の問題に觸れてゐる。今、その『簡潔第一』の筆法で書かれた說明を多少擴充していへば、その論旨は詰まりかういふことになる。——即ち、かゝる勞農政黨は、無論無產階級政治組織の基本的形態でないから、それは當然、如何なる客觀的狀勢の下に於ても普遍的に正しき階級的存在價値を持つと言へる性質のものではなくて、一般原則としてはその存在價値は絕對に否定されるべきものであり、また如何なる場合にも決して望ましきものだとはいへないものであるが、たゞ一つ、それが例外的に肯定され得る場合は、或る極めて狹く限られたる異常に特殊的な客觀的狀勢の下に於てのみ生ずるのである。無論、この場合に於ても、當該勞農黨の本質內容および形態がどんなものであつてもいゝといふ譯ではなく、殊に全黨が小市民的指導の下に置かれ勝ちになる傾向が嚴重に避けられなければならぬ。（この點に關聯して、下掲の、勞働者農民の戰鬪的同盟としての勞農黨の本質に關する項參照。）

右の見地から、わが勞農黨の場合について推論して、それの『確乎たる存在の絶對に必要であること』が主張され得るのは、徹頭徹尾、戰術に當面の客觀的狀勢の其極めて異常なる具體的特殊性との聯關に於てのみである。從つて、同じことを其反面から見れば、當面の客觀的狀勢のその極めて異常なる具體的特殊性が一旦『解消』して行く曉には、それにつれて如何なる意味に於てかの勞農黨の『解消』の必要もまた起り得るものであり、從つてその『解消』の過程および方法、並に解消後の黨の實體の行方等々に關する見通しの如きも當然問題になり得るし、また問題にされなければならないのである。そこで、『聲明書』は、さうした點に關して『現在の如き客觀的・主體的狀勢とは全然別個の狀勢が展開されるに至つた場合に於ては、戰鬪的大衆に依つて構成されてゐる勞農政黨は、徐々に、若しくは急速に、その政黨的任務を解消して、純粹の「勞農同盟」に轉化するか、若しくは一應それ自體の組織を全く解消せしめるべき必然性を持つてゐるものである』と規定し、尙ほそれに附け加へて、如何なる場合に於ても、『勞農黨の解消は、自己の鬪爭形態の、より高き段階への發展以外には斷じてあり得ない』ことを强調してゐる。そこにこそ、全問題の焦點があるのだ。だが如上の意味に於ける勞農黨の『解消』は、解消派の諸君が今日までやつて來たやうに、客觀的狀勢の正しき把握や、無産階級的な鬪爭の實踐とは何等の交渉を持たない無責任・無方針な口先きだけの論議とか、或ひは紛々たる小刀細工的、セクト的・朋黨的『小會派』的政策とかを通じては、斷じて實現されるべきものでもなく、され得るものでもなくて、それは必然に、『客觀的・主觀的條件の變化に照應して、實踐的鬪爭の過程に於て、責任ある方針の下に解決されるべき問題である。從つて……この問題は勞農黨の旗の下に最後まで決死的鬪爭を戰ひ拔き得るもののみが解決し得るものであつて、』斷じて敵の攻勢の前に腰はずして勞農黨の旗をおろさうと提議することを恥としないやうな解消派の諸君ではないのだ。

『聲明書』は尙ほ進んで、解消派の諸君の態度を批判して、『この問題を口先きの論議に於て解決せんとするが如きは、明かに小ブルジョア的敗北主義以外の何物でもない』と斷じ『特に黨の規律を無視し××的言辭によつて自己の怯懦を蔽はんとするが如きは、責任ある階級鬪士のなすべきことでは斷じてない』ときめつけ、こゝに一轉して黨本部の態度を闡明すべく、『黨本部は、黨内の一部にさうした傾向の現はれたことを遺憾とし、速かにそれを克服して、この問題を飽くまで實踐的にプロレタリアート的に解決せんとする決意を有するものである』と高らかに喝破してゐる。

以上によつて我々は、勞農黨本部が當面の解消論に對して與へた評

情、およびそれに對して取つた態度・方針が白日の下にさらけ出されたやうに明かになつたものと確信するものである。ところで、黨本部のかくの如き態度・方針は、決して黨本部が今更ら解消運動の勃發に驚き慌てて早急に決定したものではなくて、それはわが勞農黨の本質そのものの中に含まれてゐるものを黨本部が眼前の必要に應じて精確に抽出して來ただけのものに過ぎないのだ。もしくは今少し詳しくいへば、それは實に、勞農黨結成當時に於て黨を繞ぐつて存してゐた諸事情、およびそれに卽して結黨大會に於て規定――少くとも示唆――されて、全黨員によつて暗默のうちに諒解されて來た筈の、黨の本質から來る當然の歸結である。それ故に、それの全意義は、全黨員によつて容易に『主體的に』把握されなければならない筈のものである。果然、その『聲明書』の發表直後、全國各地の支部から黨本部に寄せて來た通信は、いづれも皆それに言ひ現はされてゐる黨本部の態度、方針を熱烈に支持してゐないものはなく、更らに態々その趣意を强調した聲明書を發表して大衆の前に極力黨本部を聲援した支部も、今までのところでさへ、既に可なりの多數に上ぼつてゐるのである。(九月十一日附の『勞働農民新聞』參照)。

　そこで、以下解消論者の主張や、態度を批判するに際しては、我々は單に嚴重に右の黨本部の態度方針を基準とするのみならず、同時にまた、解消論者の主張や態度との對照に於てそれをの中にクッキリと映出せしめ、尙ほ又個々の具體的事象との接觸に於てそれに潑剌たる生命を與へる事を努めようとしてゐるものである。

五　解消派の諸君の黨規蹂躪

前に述べた通りに、勞農黨本部の『聲明書』は、一般に解消派の諸君の態度に關して、それは『明かに小ブルジョア的敗北主義外の何物でもない』との一語を下した。それは單なる言葉の綾ではなく、正確に事實に卽した立言であり、一點一劃をも動かせない適評である。我々は彼等の主張を檢討して行く間に、その點をも併せて明確に論證するであらう。だが、我々はその前提として、茲で暫らく立ち留まつて、彼等の實際行動の非階級性の一端を何よりも有力に暴露してゐるところの次の一事を指摘しておかねばならぬ。

　解消派の諸君は初めから、彼等の前に厳然として存在する黨の正式の機關を無視して彼等の策動に着手し、彼等の解消意見の遂行のために私かに朋黨を驅り集めて『解消同盟』と稱する一個のセクト的集團を結成し、ほしいまゝに黨中黨を樹つるが如き不忠實なる行動に出ることを憚らなかつた。しかもその目的とするところは、明かに黨をその內部から破壞することにあつた。かうしたことは無論、黨員の行動

としては言語道斷のことであるが、さらにその中心人物の幾名かゞ黨の機關に直接に參加してゐた幹部の人達であつたといふに至つては、それは層一層事態を重大ならしめたのである。そしてかうした關係から、この解消運動が投じた一石は、大阪府支部聯合會の内部に於て無意義極まる暗鬪の因をなし、一波は萬波を呼び起して、遂に解消派對非解消派の感情的對立にまで高潮し、その間に黨としては最も忌むべき兩者間の泥仕合が演ぜられた。かくて當然支配階級に向けられねばならぬ我々の陣營の鬪爭エネルギーが、よし全體から見てホンのわづかの部分にすぎなかつたにもせよ、かうした內部抗爭のために無意味に消散せしめられただけに止まらず、尙ほその間の經緯が、八月二十九日の擴大執行委員會――解消派の諸君は黨本部が事前に發したその延期の命令に違反してその開催を強行したのだ――を通じて、一から十まで外間に暴露された。それは無論、全國の黨員大衆が一齊に立黨以來の最大痛恨事として憤激措く能はざるところであるが、前後の事情から見て、その最後の責任の歸着點は自ら明らかである。

殊に勞農黨として斷然默過することが出來ないことは、解消派の諸君が、終始一貫して黨の規律を蹂躪して却つて得々としてゐた一點である。しかも彼等は、彼等のこの階級的非行を『大衆の要求』の名に於て合理化しようとさへ試みるまでの無恥を示してゐるのだ。だが若し彼等の解消意見が眞に大衆の要求を反映してゐたものならば、それだけに彼等は益々黨の正式の機關を通じてそれを名實兼ね備はつた大衆討議に移さなければならなかつた筈であつたし、又移し得た筈でもあつた。ところが事實は全然反對に彼等は決してそれをなさなかつた。否、精確にいへば、彼等はそれをなし得なかつたのだ。これこそ彼等の主張が彼等の實踐によつて完全に裏切られてゐるものでなくて何だ！

更らに問題を一層具體的に事件の推移の全過程の上から見ても、我々は毫も右の斷案を改める必要を見ないのだ。我々が今までに得た情報は、いづれも皆、彼等の解消論が何等大衆の間に根を持つてゐるものでないことを確言してゐる。私は前約に從ひさうした情報を本文中に掲載することを見合はすが、しかしその代りに、その一二の例として、讀者諸君の注意を、九月十一日附の『勞働農民新聞』の第四面に出てゐる大阪からの二つの通信に向けたい。それらの通信の一つは、紛爭の渦中から全然かけ離れた立場から極めて精細なる注意を以て事件の成行を觀察してゐた第三者から發せられたものであるが、それは解消運動の中心勢力（？）が如何に『眞實の解消論者（極少數）と勞農黨の活動にさへ落伍せざるを得ない一部指導者――これは自己の活動の不充分さを左翼的言辭によつて胡麻化さんとするもの――』と

の結び附きにすぎないかを語り、更らにまた、『彼等〔解消論者〕は今回の解消運動を大衆からのモり上りだと稱するが、……彼等は自己保存のため如何に盲動したか』の事實を述べ、さうした諸點を一々活きた具體的實例について的確に證明してゐるものである。他の一つの通信は、問題の眞相を主として組合側の狀勢から見てゐるものであるが、それも前者と略ぼ同じ結論に到達してゐる。

いづれにせよ、彼等が黨の機關を無視し、黨の規律を蹂躪したことは、黨員としては固より、同時にまた階級鬪士としても、斷じて許すべからざる非階級的行動である。それだけでさへ既に彼等の行動が階級的糺彈に値するに充分であるのに、彼等は尙ほその上に、大衆の名を僭して自己のその非を掩はうと試みたに至つては、明かに二重の階級的罪惡を犯したものである。

彼等は或ひは言ふかも知れない、勞農黨の如き大衆的組織には、前衞黨に於て見られる鐵の如き規律訓練が要求されるものではないと。固より大衆的組織と前衞黨との間には、その規律訓練の上に於て多大の差異があるべきは當然であるが、しかし如何なる大衆的組織にもせよ、その全成員によつて遵守されるべき一定の規律が存するのでなければ、決して一日もその團體的存立を保つことが出來るものではない。時に、わが勞農黨の如き、支配階級に對する××××を目指して居る大衆的組織の場合にあつては、その內部に於て相當程度に峻嚴なる規律訓練が保持されなければならないものであり、しかも、それは大衆的組織として可能な極限にまで押し擴められなければならないものである。況んや、既に戰鬪的勞働者農民を主導力とするわが勞農黨の黨員大衆によつて正式の手續を通じて決議採用され、黨の規約の上に嚴として高く標榜されてゐる規律訓練に關する諸條項に至つては、それが無條件的に全黨員によつてあくまで嚴守されなければならないものであることは、餘りにも當然な全黨員の常識であらねばならぬ。

六　大衆的組織に於ける規律の階級的意義

假りに解消派の諸君が、彼等は勞農黨そのものを否定するが故にその機關を無視し、その規律を蹂躪することを意としないのだと主張してみたところで、苟くも彼等が黨員として黨內に踏みとまつてゐた限りは、それは寸毫も辯解にはならないのである。固より彼等は隨時任意脫黨の自由を有してゐるから、彼等が彼等の勞農黨否定の立場の故に斷乎として即時脫黨してしまへば、彼等が黨外に於て何をしようと、それは全然彼等の勝手次第だ。そして無論その場合には、黨機關無視とか黨規蹂躪とかの問題が持ち上がらう譯はない。だが、さうでない場合には、成る程彼等は如何なる意見をも懷き得る絕對自由をこ

そ持つてゐるが、しかし若しその意見が黨の既定方針に反するものであるならば、その限りに於て、その發表は必ず黨の正式の機關を通じてなされなければならないものである。それ以外の方法は絶對に取られてはならないのだ。しかも、彼等のその意見が然るべき黨の正式の機關によつて最終的に決議採用されるまでは、彼等は如何に獨自の意見の正しさを確信してゐようとも、尙ほ依然として黨の既定方針によつて、外部に對する自己の言動を律しなければならないのだ。これはまさしく、黨の規律が各黨員にその服從を嚴命してゐる鐵則である。

更らにまた、若し解消派の諸君が、彼等の黨機關無視、黨規蹂躪の行動は單に勞農黨に對してだけの問題たるに止まるものだと考へてゐるならば、それこそ彼等が大衆的組織に於ける規律の階級的意義に對して全然無考察であることを表示するものに外ならないのである。彼等はかくて、口に組織の必要を唱へながら、その行動に於て組織を蔑視するアナーキストの跡を追うてゐるものである。

試みに實際上の問題として、彼等が黨の機關を無視して解消運動を進めてゐたそのセクト的行動が、如何に全無產階級戰線攪亂の危險性を藏してゐたかを考へて見よ！　さすれば、この點に關する一切の疑問は、直ちに氷解するであらう。

假りに解消派の諸君が、彼等一派の解消意見を階級的に正しいものと確信して、初めから例の解消同盟の如きセクト的集團を結成して運動を進めることなく、直ちにそれを黨の正式機關を通じて提案して大衆的討議に附託する手續を取つてゐたものとすると、少くともその原因だけからは、大阪府支部聯合會の內部に於けるあのやうな望ましからざる兩派の感情的對立は決して發生しなかつたであらう。そして若し彼等一派の解消意見が眞に大衆の要求となり得るものであつたならば、彼等の提案は、よしその途中に於て幾たび否決の運命に會はうとも、時日の經過のまに〵〵その趣意が次第に大衆の間に浸透して行つて、窮極に於て必ずその成功的實現を見、しかもその間に何等の混亂を惹き起すやうなことがなしに濟んだであらう。これこそが、黨の既成方針に反しながら然かも階級的に見て正しき意見の貫徹のために、各人が黨員として取るべき唯一の正しき方法である。そして、本來黨內デモクラシーの上に組織的基礎を置いてゐるわが勞農黨に於ては、さうした道が各黨員に開かれてあるのだ。わが勞農黨が、如何なる危機的瞬間にも、黨內批判の自由をすら毫も犯さない態度はその最近の一例證として、たとへば前書記長細迫兼光君の除名に關する理由書を一讀しただけで、何人にも容易に理解し得られるであらう。ところが、解消派の諸君は、黨員としての彼等の前に開かれてゐるさうした正規の道に依らないで、黨規が斷じて許さない別個の運動方法を取

り、しかも早急にも大衆の要求にもなつてゐないものを大衆の要求たとして高く掲げたのだ。彼等は勞農黨の無力を鳴らしながら、その原因を除かうとしないで、それを一層強めた。彼等は勞農黨の組織上の缺點を鳴らしながら——さうだ！　たゞ鳴らしながら、毫もそれを改革しようとは努力しないで、その缺陷ある組織さへもが彼等に利用を許してゐる機關を利用しようと考へる前に、先づその組織の全部的破壞を企てた。にも拘らず、彼等はあくまで洒然として、黨員としての特權を利用しつゝ、彼等のセクト的運動を進めてゐたのだ。そして、その結果が如何なるものであつたかは、我々が既に見て來た通りである。彼等としても、彼等の解消意見の達成のためには何等の得るところなく、却つて彼等の豫想しなかつた失敗を見ただけに止まつたのである。だが萬一何かの機みで、彼等の解消運動が、彼等が期待してゐたであらう通りに、全國的に一大センセーションを卷き起こして、今頃わが勞農黨の基礎の上に一大龜裂を生ぜしめてゐたと假定するならばその後の狀勢は果してどう轉換して行つたであらうか？　その時には、わが勞農黨が受けた大打擊は唯それだけの問題として終らずに、その餘波が必然に全無產階級戰線——特に全左翼戰線——の上に及んで、そこに何等かの大混亂狀態が出現したに相違ないであらう。

更らに彼等の解消運動が百パーセント成功して、わが勞農黨の全組織が一擧にソツクリそのまゝ地上から拭ひ去られて行つたものと假定すれば、どういふ狀勢がそれに續いて現はれたであらうか？　その場合には、勞農黨の全黨員のうち、或る僅かな部分は非合法運動に向ひ得たかも知れないし、或る他の部分は樣々の動機から嫌々ながらも已むを得ず社民黨や大衆黨などへ暫しの腰掛けの積りで轉落して行つたかも知れないであらう。だが爾餘の大部分は全然行き端を失つて途方に暮れたに相違ないであらう。解消派の諸君は頻りに『勞働組合へ！農民組合へ！』のスローガンを叫んでゐるが、それは、わが勞農黨が『勞働組合、農民組合の擴大强化と』いつてゐる意味と符合する範圍內に於てのみ、我々も非常に結構なことだと思ふのであるが、しかしそれならば態々勞農黨を解消することによつて、より以上の好結果が得られようなどゝは、我々には到底考へられないことである。のみならず、それは斷じて問題の全部的解決ではあり得ない。『勞働組合へ！農民組合へ！』のスローガンは、明かに勞働組合、農民組合に加入し得る地位にありながら實際上まだ加入するに至つてゐない大衆に對しては、効果的にその加入を促進する力を持つといふ點だけでも大に意味があることであるに相違ないが、しかし同時にそれだけでは、旣にそれ〳〵に勞働組合、農民組合に加入してゐる大衆に對しては解決済みの問題であり、これに反して、或ひは職業上の、或ひは個人的の、

或ひは地方的の諸事情によつて勞働組合、農民組合へ加入する便宜を持つてゐない大衆に對しては何等問題の解決にはなり得ないのだ。だが、さうしたことのすべてよりも、まづ第一に解消派の多くの諸君は、一體何處へ行かうとしてゐるのであるか？　諸君は記憶せねばならぬ、新聞紙などを通じて『俺は非合法活動へ進むのだ』などと公言することは、現實に非合法活動へ、進むこととは譯が違ふ、といふことを。否、さういふ公言をすることこそは、寧ろ現實にさうしようとする意志を持たないことを自白するのと同じ譯になるのである。いづれにせよ、解消運動が全部的に成功したといふ假定が萬が一にもせよ現實の事實となつた場合に於ける全無產階級戰線上の一般的動搖は到底免れられないであらう。が、一體それでいゝのだらうか？　解消派の諸君は、或ひはその時になつても、尙ほ依然として觀念の遊戲に耽りつゞけて、『さうなつてこそ始めてわが左翼戰線も擴大强化するだ』などと言つていゝ氣持になつてゐたかも知れないが、しかし支配階級は蔭で手を拍つて喜んだであらう。

上來の論述から、我々は玆に一應かういふ結論を引き出すことが出來る。卽ち解消派の諸君の今回の行動は、その結果に於て、大衆的組織の內部に於ける規律の階級的意義の問題を、恰度いゝ時機に我々に提供してくれたことになつた。かうしたことは、少くとも舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營に於ては、全く始めて起つたことである。我々はこの機會に、それについて深く考へさせられ、且つそれを通じて我々の今後の實踐に對する樣々の有益なる教訓を得た。たゞしかし、この事の起りが過去數年間に亙つて雨に嵐に共に固く腕を組み交はして進んで來た若干の同志諸君の行動から來たといふことは、何ともいへぬ淋しさと諦め切れないやうな氣持を我々に殘さないでは濟まなかつたのである。

七　階級鬪士に要求される確乎たる定見と節操

解消派の諸君の實際の行動上に現はされた態度に關しては、尙ほ言ひたいことが盡きないが、しかし何時までもさうして居れないから、我々は次に、彼等が最近發表したビラ、ニュース、檄、聲明書、宣言、等々の諸文書について、彼等の主張が如何なるものであつたかを見てそれを批判的に檢討しようと思ふ。

實をいふと、解消派の諸君は、今までのところ、彼等の主張に對して、幾らかでも纏つた理論的體系を與へるといふやうな大切な仕事をしてゐないやうである。それは或ひは我々の寡聞のためかも知れないが、ともかく我々は、まだ彼等がさうしたものを發表したことを知らない。そこで我々としては、已むを得ず、彼等が發表したところの、

如上の、その性質上系統的によりは寧ろ斷片的に、漫然と秩序次第もなく諸論點を羅列したに過ぎない諸文書に就かない譯には行かないのだ。

尤も、それらの諸文書を通じても、解消派の諸君の對象の認識、思惟の動き、問題の取扱ひ方、等々の諸要項に關しては、大體その方向を見定めることが出來るのであるが、しかもかくして得られた我々の印象の總決算は、彼等の全主張が單に、決して一貫した理論の基礎の上に置かれてゐるものではないといふだけでなく、一體に問題の理論的討究が過度に未熟であり粗漏であるといふ點に歸着する。それらの諸文書中の比較的にまとまつた部類に屬する解消聲明や解消宣言を讀んでも、結論は同じことである。

見よ、彼等の物々しく發表した聲明書や宣言には、我々が後に場合々々の必要に應じて指摘するであらう通りに、何等具體的事實による擧證を伴はない獨斷論、漫罵のための漫罵、放言のための放言、等々が口を衝いて出で、次から次へと繋がり合つて現はれて來るではないか！　しかも彼等はかゝる支離滅裂なる論據から出發して、輕々にも、勞農黨の即時解體といふが如き、當面の客觀的狀勢の下に於て全無産階級戰線の上の絶大なる影響を及ぼすであらうことが容易に豫想され得る一重大問題を提出してゐるのだ。これが果して責任ある階級鬪士のすべきことといへるであらうか？

さうした言論も、黨の外部から何かなしガムシヤラに黨を攻撃してゐる徒の口から出たものならば、我々は別にそれを問題にしないであらうし、一々それに拘はり合つてゐないであらう。だが、解消派の諸君は、ツイ最近まで我々と共に勞農黨の旗の下に共に生死を賭して戰ふことを誓つた同志であつた。しかるに彼等は今や、突如として勞農黨の内部から矛を逆まにして黨に向つて立ち上がり、『見よ！　合法黨の悉くが選擧のための機關であり、議員病者、改良主義者の養成所であり、組合ボスの温室と化してゐる事實を！』と大見えを切つて、わが勞農黨の即時解體要求を決議したのである。彼等が彼等の態度の上にかゝる大轉換を遂げるまでになした決意の底には、客觀的に首肯し得られるそれ相當の明確なる一大論據がなければならない筈であるが、

しかし少くとも彼等が責任を以て公表した聲明書や宣言の上に現はれてゐるところでは、彼等の態度豹變の論據は、遺憾ながら粗雜極まる俄か細工にすぎないのである。これでは、態度豹變の決意が先づなされて、その論據が後から持つて來られたといはれても仕方があるまい。かうしたことが階級鬪士にあつていゝものだらうか？

階級鬪士だから確乎たる定見や節操がなくてもいゝといへる譯は斷じてない。否、階級鬪士だからこそ、特に普通の水準以上の確乎たる

定見や節操が、一層痛切に要求されるのだ。我々は特に、解消派の諸君の中にはツイ最近まで勞農黨内に於て指導的地位を占めてゐた人々が含まれてゐるが故に、この點を取り立てゝ強調する。彼等が今や何等の動かすべからざる一大論據を示さずに、漫然勞農黨に向つて罵詈雜言を無制限に放つてゐるのは、今日の彼等が昨日の彼等を攻擊してゐるのと同じことになるのだ。彼等はそれが全無產大衆の上に如何に好ましからざる影響を投げ與へたかを知つてゐるか？ 彼等は『工場に農村に勞農黨即時解消の聲は湧きあがつて來た』と言つてゐるが、しかしわが勞農黨はそれと全然反對に、全國的に見渡して、工場に、職場に、農村に、彼等の無定見、無節操に對して正當な憤激を爆發させてゐるものが數限りなくあることを知つてゐる。

だが、我々は解消派の主張の檢討に於て、いつまでもかうした概論の上をウロツイてゐるべきではない。我々は今や一進んで、少しく問題の細部に立ち入らねばならぬ。

八　彼等は如何に歪曲したか

勞農黨は立黨以來、勞働者農民の戰鬪的同盟として自己を規定し、それが當面の客觀的狀勢の下に於て過渡的に政黨的任務を帶びしめられてゐるものとして自己を諒解して來た。この點、勞農黨は同じく勞農政黨といつても、他の勞農諸政黨——特に議會主義中心の——とは根本的にその本質を異にするものである。尤もこの本質上の特徵は、現在の勞農黨の組織形態の上にまだ完全に表現されてはゐないが、しかしそれは黨の今後の必然の發展過程に於て、その組織形態の上にも段々と明確に表はされて行くべきものである。そして、この點に關する前途への見通しは、結黨大會に於て決議採用された黨の組織方針の中にも、極めて概論的にではあるが、それにも拘らず可なり明確に揭げられてある。今後全黨員の努力は意識的にその方向に向けられねばならぬものであり、また向けられるであらう。

以上の根本的要點から生ずる當然の推論は、第一に、勞農黨の本質は舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の過去の歷史の基底に立つて、そこから不定の將來への必然の進轉の展望を見失はずに、固定的にでなく、發展的に把握されなければならないものである。第二に、現在のやうな政黨的任務と組織形態を持つ勞農黨の存在價値は、嚴密に當面の極めて特殊な客觀的狀勢との聯關に於てのみ肯定されるべきものである。

解消派の諸君は、その聲明や宣言に於て、不思議にもかうした、諸關係に對して、完全なる無理解を示してゐる。彼等は殊に、本來當然、當面の客觀的狀勢との聯關に於てのみ評價されなければならない勞農

黨の生成、存在、——およびその『解消』までを含めての——の根本條件を無視し、毫もこの根本問題に論及することなくして、たゞ單に茫漠たる抽象的、觀念的見地から勞農黨の本質を規定してゐる。若しくは、精確にいへば、それを歪曲してゐる。かくて彼等は、勞農黨を『合法主義政黨』『左翼社會民主主義政黨』として性質づけ、それによつて彼等が『合法政黨』と『合法主義政黨』とを觀念的に混同してゐるものであることを自證し、更らにさうした思惟の混亂から出發して、彼等は『一切の合法政黨は社會民主主義政黨以上に出でず』といふ見方を支持してゐることを表示してゐる。彼等はまた『勞農黨はその本質上一切の非合法組織と對立するものである』ことを示唆する獨斷的口吻を弄し、それに關聯して、勞農黨の『獨自の指導部』の本質およびその構成員の特質に對しても、事實に即しない概括的な解釋を捏つち上げて、その點からも勞農黨にケチをつけてゐる。彼等がかくの如く勞農黨の本質を歪曲して兎や角言つてゐることのすべては、從來左翼の陣營の一隅に於て行はれて來た偏見の一系列であり、そしてそれは、問題を眼前當面の客觀的狀勢の具體的特殊性との聯關に於て把握し得ない硬直なる公式論的解釋として、——更らにまた現實の大衆的鬪爭の組織に交渉のない、實踐意志を缺いだ一種の超越的理論として、わが勞農黨の見地から明快に批判され排撃されて來たものである。そして、解消派の諸君もまた勞農黨のこの見地に立つてゐたればこそ、勞農黨の旗の下にあくまで勇敢に戰ひ進むことを誓つてゐたものであつた筈だ。しかるに今や、彼等は依然として一ト思ひに全然反對の見地に走つて行き、昨日は全幅的に肯定したものを今日は全幅的に否定してゐるのである。では、彼等はその態度の電光石火的な轉換に對して、せめて彼等の今の立場から見てなりとも何か筋の通つた理論的根據を示したかといふに、事實は全然その反對である。彼等はこの問題に關して、何ほも轉々として獨斷から獨斷へと移つて行き、その極つひに『勞農黨は勞働者農民の戰鬪的同盟と稱するが、その實勞働者農民小市民の寄合世帶であり、合成雜炊黨で、勞働者の要求を小市民の要求にまで引き下げて行く政黨である』等々——注意！勞農黨の現在の活動にも堪へないで左翼的言辭のヴェールの下にそれから逃げ出さうとしてゐる黨內での最も小市民的な人々によつて、これが言はれてゐるのだ！——といつたやうなことを言ひ出すまでに、へンに發展して行つたものだ。彼等はかくて、彼等の各自が黨員として黨に對して持つ責任——特に勞農黨をさういふ政黨になり下らせないやうにお互ひに常に努力して行かなければならない各黨員の責任を——何處かに置き忘れて來たやうな態度を示して、得々としてゐるのである。しかも記憶せよ、彼等の中にはその時にはまだ勞農黨內の

指導的地位を占めてゐた人々さへもが交じつてゐたのだ。にも拘らず、彼等は、自己が屬してゐる黨のことを丸で餘所事のやうに見てその掛卸しを始め、最後に『勞農黨はその組織上の缺陷の故に無力なのだ』といふ例の『虎の兒』を持ち出し、萬事をその『組織上の缺陷』に押ッつけ、それを彼等の勞農黨不必要もしくは有害論の根據としてその即時解體の要求を高唱してゐるのである。

玆で序ながら言ひ添へておくが、解消派の諸君のかゝる無定見、無節操とその輕薄な態度が、如何に無産大衆の間に左翼全體に對する不信任の種を播いたかについては、既に可なり顯著な徴候が現はれてゐる。我々は無論、我々の今後の行動によつて、かゝる好ましからぬ傾向を完全に克服してしまはねばならぬ。だが、それはそれとして、我々は今この點を、先きに述べた大衆的組織の內部に於ける規律の階級的意義との聯關に於て注意し、この事からも、それが持つ實踐上の教訓を十分に攝取しなければならないのである。

九　誰れが退却者か？

上述の如く、解消派の聲明書や宣言によれば、彼等の勞農黨否定論は、當面の客觀的狀勢との最密なる聯關に於て見られたる勞農黨の存在價値といふ根本問題の究明を怠り、それに對して何等の斷案をも與へてゐない。もとより、それらの聲明書や宣言は世界的金融恐慌や、産業合理化の進行や、切迫や、（十字削除）賃銀値下、失業、立禁、土地取上、等々の如き當面の客觀的狀勢の一面の諸現象を列擧し、それとの聯關に於て勞働黨は無力だから不必要だといふ意味の事を言つてゐるが、併しそれはたゞ彼等がさう言つてゐるだけの事であつて、毫も右の根本問題の解答にはなつてゐないのだ。第一、さうした客觀的狀勢との聯關に於ける主體的條件——特に左翼陣營內の諸鬪爭組織——の現勢が一言も述べられてゐないから、假りに勞農黨が彼等のいふ様に無力だとしても、(イ) 一體現在の左翼陣營內に於て、たゞ勞農黨だけが無力なのか？ それともそこに勞農黨以上に現實に强力なる鬪爭組織が、現實に確立されてあるのか？ ないのか？ (ロ) 勞農黨がなくなれば、現在勞農黨の旗の下に行はれてゐるだけの、大衆鬪爭を行ひ得るものが他にあるのか？ ないのか？ 等々の問題が少しも明かにされてゐない。第二に彼等が勞農黨は無力だといつてゐるのは、(イ) 必ずしも今日現實に各方面に於て勞農黨の旗の下に行はれてゐる勞働者農民の鬪爭の進行を全國的に見渡して言つてゐることではないらしく、(ロ)、更らに彼等が指摘する『勞農黨の無力』といふのは、一體、黨の本質から來てゐるものであるか？ 或ひはその他の原因から來てゐるものであるか？ の問題が毫も考察されてゐない。尤も彼

等は『勞農黨の無力なのは、その組織上の缺陷から來たのだ』といつてゐるが、しかしそれとても、答へにならない答へである。即ち彼等はその組織上の缺陷なるものが勞農黨そのものの本質から來た必然的なものであるか？　或ひは單に偶然的なもの、過渡的なものであるか？　といふやうな、この問題の核心にはチットモ觸れかけもしてゐない。前者の場合には、それは勞農黨の組織內では改革できないものであるが、後者の場合にはそれは勞農黨の組織內で改革できるものである。で、勞農黨の結黨大會は、それは後者の場合に屬するものであり、勞農黨の發展過程に於て改革できるものであると認識し、その立場から勞働者農民の戰鬪的同盟としての勞農黨の組織の改革の前途への見透しを載せた黨の組織方針を殆んど原案のまゝ決議採用した。だが、我々は、解消派の諸君の側からは、それについて何等かの具體的意見が出されたのをツイぞ聞いたこともない。その間に、諸君はその缺陷を含めたまゝの組織そのものをまで即時その根柢から瓦解してしまへと我鳴り出したのだ。

勞農黨の無力か？　諸君の無力か？　諸君は敢然として（！）左翼的言辭——さうだ！『言辭』だ——を用ひつつ後足で砂を蹴るやうに勞農黨の壘をその現在の苦難——無力といはゞいへ——の瞬間に見すてようとするに當つて、この際勞農黨の旗を死守しようと決意してゐるものを右翼への轉落者、階級鬪爭の退却者の名を以て呼ばうとしてゐる。果たして誰れが退却者か？

一〇　大衆への反逆

若し我々が今しばらく立ち留まつて、勞農黨結黨前後の事情を振り返つて眺めるならば、當面の小ブル的敗北主義者の解消論が、わが左翼陣營の戰鬪的勞働者農民大衆への反逆以外の何物でもないことを、我々は一層ハッキリと理解することが出來るのである。私は今それを少しばかり試みて見たい。

一昨年末に、勞働者農民黨の結黨大會は、その開會第三日の朝、支配階級の暴虐なる手によつて解散された。この事件を通じて、舊勞働農民黨時代以來終始一貫してわが左翼陣營を忠誠に死守して來た戰鬪的勞働者農民は、プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ないとの原則を學び取り、合法的勞農政黨が決して正當な無產階級政治組織の形態でないことを自覺するに至つた。それと共にそれらの戰鬪的勞働者農民は、全國各地方に於て、大衆動員組織としての、半非合法的な、獨自の指導部を持たない、一種特異の形態に於ける政治的自由獲得勞農同盟を結成し、刻一刻益々酷烈になりつゝあつた支配階級の彈壓に抗して、尙ほも執拗にあくまで果敢な大衆鬪爭を展開して行つた。だ

が、そのうちに、段々とその勞農同盟の進路も支配階級によつて抑壓されて行き、特に四・一六事件以後に至つては、その下に於ける大衆鬪爭は完全に停頓した。それは先づ第一には、全左翼陣營に於ける百戰練磨の階級鬪士の壓倒的大多數が引ッ浚らはれて行つたからであり、第二には、獨自の指導部を持たない勞農同盟の如き鬪爭體が敏活にその機能を果たし得るためには、強力に統一的政治的指導を行ひ得る別個の無産階級政治組織が何處かに儼存してゐることを必須なる前提條件とするものであるが、さうした事情が、四・一六事件の嵐のために全然地を拂つた形になつたからである。主體的條件は極度に不利な形勢を現出した。全左翼陣營は殆んど潰滅狀態に陷つた。

　しかるに、他方に於ては、今日無産階級の全陣營に於て一般的に認められてゐる通りに、資本の攻勢の激化、産業合理化および× ×××××の精力的な進行、都市に於ける失業者群の大量生産、農村に於ける立入禁止、立毛差押、土地取上、等々の下に、大衆の窮乏とその鬪爭欲求の昂進、政治の加速度的反動化、白色テラーの跳梁、等々々の間に於ける動反動が到る處に渦卷いて全社會を不測の動搖の淵に投げ込み、その間に無産階級の分野に於ては唯ひとり一聯の社會民主主義組合、政黨幹部のみが帝國主義ブルジョアジーの侍女として立ち働きつゝ漁夫の利を占めてゐた。かゝる大勢を前にして、戰鬪的勞働者農民が再び全被壓迫大衆の先頭に立つて、その日常利益の擁護伸張および政治的自由獲得のために、工場に、農村に、街頭に、新たに強力なる大衆鬪爭を卷き起さなければならないといふ欲求が、わが左翼陣營に潮の如く盛り上がり、それにつれて、當面の客觀的狀勢下に於てさうした大衆鬪爭の遂行のために殘された唯一條の血路として、合法政黨への陣形の轉換の問題が次第に深刻に考へられ始めた。

　結局、合法的勞農政黨はよし常軌の場合に於ては肯定できないものであるにもせよ、當面の極めて特殊的な客觀的狀勢との聯關に於ては、それは或る適當たる形態を取る限り正當視されるべきものであるとして、その組織に着手せよとの要求が、段々と各地の大衆から我々に持ち込まれるやうになり、そしてその熱度も刻一刻に加はつて來るやうになつた。

　昨年の八月八日を期して私たち（上村、細迫、大山の三人）の名に於て發せられた勞農黨結成の提案は、わが左翼陣營に於ける戰鬪的勞働者農民大衆のかゝる要求を反映してなされたものであつて、斷じて提案者たちが頭腦の中で勝手にこね上げたプランに從つてなされたものではない。更にまた、その結黨の提案が一旦提案者たちの手を離れてからは、それは全然大衆討議に附託されたのである。そしてその結果、該提案の趣旨に贊成した戰鬪的勞働者農民大衆は、數ヶ月間に亘

る異常の努力の後に、自らの手によつて、勞働者農民の戰鬪的同盟の實體としての勞農黨の組織を築きあげたのだ。この意味に於て、わが勞農黨は、名實共に完全にそれらの戰鬪的勞働者農民大衆のものである。それ故に、何人と雖も、それらの戰鬪的勞働者農民大衆の要求を無視して勝手にその組織を跡方もなく破壞し去らうと試みるものは、階級的に見て許すべからざる犯罪を企てるものに外ならないのだ。

二　勞働者農民の戰鬪的同盟の實體とその政黨的任務

わが勞農黨は、既にその結黨大會に於て、自己を勞働者農民の戰鬪的同盟として規定した。これは、舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の歷史的發展の當然の歸着點である。ただ前に言つたやうに、わが勞農黨が勞働者農民の同盟として持つ本質を、黨の組織形態の上に完全に表現するには結黨當時に於ては時機がまだ熟してゐなかつたために、その點に關する前途への見通しが、黨の組織方針の中に書き記されただけに止められたが、しかしこの問題は直ちに次の時期に於ける、全黨員間の大衆的討議の最も重要なる題目の一つとされる運びになるであらう。

さらにまた、この勞働者農民の戰鬪的同盟の實體が、「勞農黨」の名を取つて生れたのは、當時の客觀的狀勢の下に於てそれが政黨的任務を行ふことが、それの最も重大なる存在理由をなしてゐたからである。即ち左翼陣營に於ける戰鬪的勞働者農民大衆が最も熱烈に要求したところの、全國的に統一された組織および活動方針の下に於ける大衆鬪爭の展開は、當面の客觀的狀勢の下に於ては、合法政黨の形態による以外に絕對に途がなかつたのである、そしてこれがさしづめ、勞農黨の生まれ出る動機となつたのだ。かくて勞農黨は、始めから當面の客觀的狀勢の下に於て政黨的任務を行ふことをその最も重大なる使命として帶びしめられて生まれた勞働者農民の戰鬪的同盟の實體である。しかも結黨當時から現在に近づくほど、勞農黨その政黨的任務は益々重要性を加へて來たものである。それにしても、もともとその政黨的任務は特殊の客觀的狀勢との聯關に於て勞農黨に帶びしめられたものであるから、一方に於ては、さうした客觀的狀勢が去つてしまへば、その政黨的任務もまたそれにつれて解消され得るものであるが、他方、その場合に、よしその政黨的任務が解消されてしまつても、勞農黨は依然として勞働者農民の戰鬪的同盟として、苟くもその必要が存續する限り、窮まりなく存續し發展し得るものである。かゝる本質こそは、あらゆる我が國の勞農諸政黨中に於て獨りわが黨のみを特徵づけてゐるものであり、それはまた我々が當面の解消派の諸君の主

張を批判するに際しても、常に我々の視野から離してはならないものである。

二　解消か？　發展か？

上述の如く、結黨當時――現在も同じことだが――わが勞農黨が合法的勞農政黨の形態を取つて現はれたのは、或る極めて特殊的な客觀的狀勢の下に於ける或る極めて特殊的な必要に應じてのことであつて、斷じて『合法主義』を抽象的原則的に是認し肯定してのことではない。この意味に於て、勞農黨は『合法政黨』でこそあれ、決して『合法主義政黨』ではないのだ。それ故に勞農黨は斷然、未だ曾て合法的勞農政黨を以て無產階級解放のための唯一の鬪爭組織だと主張したことはなく、從つて如何なる非合法組織でも、苟くもそれが單に口先きだけでなく、その行動に於ても眞に無產階級の利益に立脚してゐる限りは、勞農黨は無論本質上決してそれに對立するものではないし、また對立しようと考へてもゐない。のみならず、勞農黨は始めから『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ眞理の原則的確認から出發して、勞農黨そのものが決して無產階級政治行動の基本的組織ではないことを規定し、同時にそれが合法政黨として持つ任務が客觀的狀勢の下に於てこそ如何に至重至大のものであれ、それには畢竟或る限界がおかれてあるものであることをも明かにしたのである。」

かくてわが勞農黨は、初めから自己を發展的に見て一個の過渡的存在として意識しつゝ出現し成長したものだといふことは事實である。だが、戰鬪的勞働者農民が一旦苦心慘憺して築きあげた組織は、それを何等かの形態に發展せしめることなしに、全然無一物の狀態に還元せしめるべきものではないことは無論である。それ故に、かつて勞農黨の出現を必要とした客觀的狀勢が將來の或る時期に於て去つてしまつた曉には、その時こそ勞農黨は當然その現在帶びてゐる政黨的任務を解消して、それをその時までには必ず確立されてあるべき筈の純正な無產階級政治組織の手に引き渡し、そして黨自體をば、より高度な、より強力な勞働者農民の鬪爭體たる、たとへば勞農總評議會ともいふべき形體にまで發展せしめて行くであらう。かうした發展を伴ふべき解消以外の單純な解消は、わが勞農黨の場合には、全然考へられないことである。結黨大會の宣言に、勞働者農民の戰鬪的同盟としてのわが勞農黨は『脈々として窮まりなき發展を遂げようとしてゐるものである』ことを言つてあるのは、まさしくその點を指してゐるものに外ならないのだ。

結語――積極的鬪爭へ

我々はあくまで、當面の客觀的狀勢の下に於て、わが勞農黨の確乎たる存在の絕對的に必要なことを確信するものである。そのためにこそ我々は、わが黨の組織に缺陷がある限り躊躇なくそれを改革し、わが黨が無力である限り容赦なくその原因を除去することが、全黨員に課せられた不可避的任務であることを主張する。解消派の諸君は自ら黨の內部にゐながら、毫もさうした努力を試みようとはせずに、いきなり黨の無條件的卽時解體を要求したのだ。これこそ自己の無活動を通じて、戰鬪的勞働者農民大衆が積年の惡戰苦鬪の末に蓄積した左翼的エネルギーを徹底的に無意味に浪費しつくさうとしてゐるものでなくて何だ！

解消派の諸君は更らに、全協刷新派や×××の『背教者』たる解黨派の出現までをも、勞農黨の無力の證左だと言つてゐる。彼等はかくして、支配階級の分裂政策の成果をもわが勞農黨の責任に歸せしめようとしてゐるものであると同時に、更に切言すれば、彼等の言動そのものまでが、彼等がそれを意識すると否とに拘はらず、同樣に支配階級の分裂政策に基因するものであることを自證してゐるものである。

我々は斷々乎として『小ブルジョア的敗北主義』の產物以外の何物でもない當面の解消論を脚下に蹴散らして進み、更らにこの際わが勞農黨の旗を一層高く揭げて、その下に生死を誓ひつゝ、勞働組合・農民組合の擴大强化、全無產階級大衆の日常利益の擁護伸張、無產階級戰線の統一、全被壓迫民衆の政治的自由獲得のために層一層積極的に鬪爭を進め、刻々わが黨の實體をなす勞働者農民の戰鬪的同盟の前途の脈々として窮まりなき發展に强力なる拍車を加へて行くことを誓ふものである。

勞農黨解消すべし

細迫兼光

一、ことはりがき

元來、大衆的運動に於ては個人的意見の發表は差し控へらるべきである。殊に運動の出發に際して、個人的意見の發表を以て先登を切るが如きは許され難きことである。此の原則を犯す罪を、私は既に去る八月二十九日に勞農黨解消意見を個人的に發表したことによつて犯したのである。このことは正に責められなければならぬ。そのことに就いては後に一言釋明の機會を得ることを許してもらうつもりで居るが、私は今また此所に、再び同じ禁を犯さうとしてゐるのである。此筆を執る現在に於ては未だ勞農黨解消論が一體何を主張してゐるかが全然ハッキリせられてゐない。從つて全國の同志諸君は之れに對する批判の材料を全然もつて居ない狀態に置かれてある。然かも勞農黨常任中央委員會からは解消反對の聲明書が既に全國に發送せられてゐる。尙ほその機關紙は次々に反對論を掲載するであらう。かゝる不利な狀況に包まれながらも、猶は私は雜誌等への個人的意見の發表は之れを差し控へようと思つてゐた。然し、一つには此の小論が世に出る頃は、既に東京神奈川地方の戰鬪的勞働者諸君によつて解消運動の東京地方の主體たる解消同盟が組織せられ、それの名によつて正式な、解消論の主張が世に公にせられた後であらうといふ見透しを確實に持ち得るが故に、又二つには今月の諸雜誌の上に、必ずや反對論は公然とその姿を現すに違いない。その際解消論が鋭き對立に於て姿を現はして居ないことは、一かたならぬ階級的損失であるが故に、といふ二つの理由を以て、是非私に筆を執れと命ずる同志等の切なる言に從ひ、此所に私はこの小論を試みるに至つた次第である。

そこで私は先づ一言お斷りをしておかなければならない。それは、私の今後の解消運動に關する行動は一切、現に組織されつゝある解消同盟によつて律せられることであるから、私のこの小論における意見乃至は主張は一切、解消同盟が正式に決定する意見乃至は主張に完全

に從屬するように訂正せられるといふことである。このことを豫めお斷りしておく。

二、「突如」解消意見を發表するに至つた經過

私は、新勞農黨樹立の提案者の一人として特殊な重大責任を持つ立場にある。その責任を果す方法に就いて、等々、云ひ度いことは山ほどある。だが紙面の都合もあるし、又、事個人的事情に關するが故に、この點に就いては只一言、私は最後の『一人になるまで勞農黨の旗を死守する』といふ古武士的な態度ではなくて、私の進むこの道が、正しき階級的な道である、ことをひそかに確信してゐるといふことを述べるに止め、又その他云ひ度き色々のこと、或は多年行動を共にして來た大山氏その他の多くの人々と對立のやむなきに至つた無量の感慨、等々、に觸れることの一切を差し控へる。が、ただ、私が去る八月廿九日に解消意見を『突如』個人的に發表せざるを得ざるに至つた經過についてだけ、簡單に釋明することを許して貰い度い。何となれば、それは純然たる個人的事情ではないからである。

私が勞農黨の存在意義について疑を懷き始めたのは實は今に始つたことではなかつたのである。私は、かの合同問題の勃發の當時、自ら勞農黨に對する深き反省を要求せられた。その反省に於て勞農黨樹立の提案後に生起した總ての事象に對する批評は、ひそかに一抹の疑念を私の胸に懷かせるに至つたのである。その後の運動の實踐の進行に伴つて、その一抹の疑雲は凝結してハツキリした一つの形を持つに至つた。此の頃からである、私が大山氏に解消意見の開陳を始めたのは。蓋し、勞農黨の書記長としての私の地位に於ては、先づ常任委員會に自分の意見の採用を求めて、夫々の機關を通して一定方針を全黨に及ぼす爲めの努力を爲すべきであり、而してそれが爲めには委員長と書記長とが意見を一致せしめて、共に一定の原案を持つて常任委員會に提出すべきであるからである。即ち反面から云へば、未だ黨の正式の意見とならない意見は、之れを正式機關外の何人にも傳へるべきではないからである。かくして私は、常に机を並べて仕事に從つてゐる黨本部の書記の人々にすら、私の意見を漏らすことを敢てしなかつたのである。ひたすら委員長と意見を交換した。再三再四それが爲めに訪問した。大阪問題が起る直前にも、又大阪問題が起つてから後にも。然し終に意見の一致を見ることは不可能に終つた。かくして委員長と意見の不一致のまゝ私は大阪問題に關する常任委員會に臨まねばならなくなつた。八月二十六日のことである。私は意見を開陳した。激烈な討論が交された。大體の空氣は解消反對が壓倒的であつた。私は猶ほ、常任委員會の招電によつて上京するであらう大阪南派の代表を固

んでの常任委員會の開かれるのを待つた。突如二十九日朝刊の新聞紙上に大山委員長の解消反對意見が載つて居るのを發見した。大阪の擴大委員會はその廿九日の夜に差し迫つてゐる。私はその大山委員長の反對意見の大阪に及ぼす重大影響を考へるとヂッとして居ることが出來なかつた。私は決意した。是が非でも今夜の夕刊に間にあはせなければならぬ。私は東京へ飛んだ。新聞社を驅け廻つた。

私は、私が意見を發表をした行爲に對して、常任委員會からは『機關の外に意見を發表した』といつて責められた。他の人からは『我等に一言の相談もなく』と責められた。私はこの相矛盾する二つの詰問に對しては、むしろその後者の詰問の鞭の前に身を投げ出さなくてはならぬ。

私が大山、河上兩氏及び常任の諸氏以外の何人にも解消意見に對する批判を仰ぐことなくして『突如』解消意見を發表するに至つた事實は正に右の如き經過の結末であつたのである。

要約すれば、それは私が勞農黨の統制、規律をあまりにも嚴重に遵守した結果である。然しこの統制の遵守は何も讃めらるべき行爲ではない。それはただ、私の馬鹿正直と、眞の階級的方法を採り得ざりし怯懦とを證明する、わらふべき事實たるのみだ。何となれば勞農黨の如き、必然的に反動的役割を果すのみの組織における統制に從ふことは、反動に協力すること以外の何物でもないからである。僞せ無産黨の統制よ、呪はれてあれ。

勞農黨の統制に從へば、正論を大衆化することは不可能だ。

勞農黨解消運動は勿論のこと、その他の階級的事業は『勞農黨の旗の下にではなくて『勞農黨の旗に對して』ではなくしは不可能だ。

三、解消論の主張

勞農黨解消論は一體何を主張し要求してゐるのか。先づそれが最も明確にせられなければならない。東京の解消論は大阪の同志のそれと、その根柢に於て全然同一であることは勿論だが、解消運動の押し進め方に於て異る點があるようだ。これは勿論東京の運動と大阪の運動とが緊密な連絡を缺いで居た結果である。然しそれも遠からず統一せられるであらう。

勞農黨解消論は勿論勞農黨を解消すべしと叫ぶ。だが、無用黨の現在に於て、又未だ大衆的運動の何等起されてゐない東京の現在に於て今即刻、解消せよと叫び、自ら脱退しようとするものではない。解消論は、本年十一月に開かるべき勞農黨大會に於て『遲くとも一九三一年六月までには解消を實現すること』を明確に決議し、この大方針の上に、解消準備の巨歩を即時踏み出すことを主張する。即ち勞働組合、

農民組合の再建、擴大、强化への決死的奮鬪。黨員の勞働組合農民組合への强制的再編成の强行、勞農黨に對する大衆の信頼の打破——勞農黨の本質に對する徹底的暴露の即時開始。勞働組合、農民組合の勞農黨より絕緣のための鬪爭の即時開始。全協への左翼勞働組合戰線統一のための鬪爭即時開始。勞農黨が解消せざるべからざる理由の大衆への徹底のための鬪爭即時開始。等々を叫ぶ。

かくして、我々の希望は勿論、勞農黨全體として解消へ邁進することにある。然しながら實際に於ては『飽くまで勞農黨を死守する』といふ者や『未だその時期にあらず』と主張する者が百年經つても存在することを豫想し得るが故に、我々が全體としての一致を持つことは、結局非解消論への屈服を意味するものである事を知る以上、解消同盟はあくまで勞農黨との對立物として發展させられ、自ら以上の如き鬪爭を即時開始する事が解消同盟の根本態度でなければならぬ。

四、解消意見の物質的基礎

此のたびの解消論に於て注意すべき特徵は、新勞農黨結成當時の反對論が、主として理論的主張と罵りざん謗との混成物であつたのと違つて（結局その理論的結論は正しかつたのだが）、實踐の中から生長したものであることである。この點に關する具體的敍述は後に讓る。が、總ての事象に於てそうであるように、このたびの勞農黨解消論も、決して一二人の人々の頭で考へ出されたものではなくて、それは確乎たる物質的基礎の上に立つてゐる。解消論の物質的基礎とは何か。それは要約すれば大衆の成長である。勞農黨の下の大衆の成長である。始め勞農黨の階級的意義を疑はず、或は之れを信頼した勞働者、農民、靑年が、鬪爭の實踐を通じて成長し、又鬪爭の實踐を通じて勞農黨の反動性を見拔いたのである。かくして戰鬪的勞働者、農民、靑年が勞農黨の殼を破つて脫出せんとして擧げて居る歡呼の聲が勞農黨解消論に外ならぬのである。戰鬪的勞働者諸君は既にく以前から、勞農黨の殼内から脫出を試みるに至るまでに成長した戰鬪的勞働者、農民、靑年が力强く、大衆的に立ち上つてゐるかは、全農第一主義の漸次の進展、及び關西並に關東に於ける勞農黨解消同盟の力强き發展が直ちにそれを證明するであらう。

五、戰鬪的勞働者農民は何故勞農黨に贊成したか

新勞農黨樹立當時のあの喧々ごう〳〵たる非難攻擊の嵐の中に、戰鬪的勞働者農民は何故勞農黨の樹立に贊成し、若しくは之れを支持したか。その理由は勿論當時の客觀的狀勢が勞農黨を必要だと考へさせ

るに充分な物質的根據を包藏してゐたことに在る。（デヤや原則理論のふり廻しで勞農黨が潰れない理由は此所にある。）然し多くの人々が理論的に、若しくは意識的に贊意を表した所以のものは次の諸點に要約せられ得る。

(1) 提案書も『だが、そのうちに、我々の陣營の內外の情勢は刻一刻、餘りにも顯著に變化して行き、特に四・一六事件を契機として急轉直下に一大轉換を劃するに至つた。即ち四・一六事件は——もし我等の觀測に間違ひがなければ——わが國の無產階級の前衞がそれまでに萬難を排して築きあげた全陣地を殆んど潰滅に歸せしめたばかりでなく、更らに我が全左翼戰線の上に容易ならざる一大打擊を蒙らしめた』云々と述べてゐる。戰鬪的勞働者農民は主として、かゝる狀勢に於ける一時的、便宜的な存在として勞農黨を是認した。

(2) 提案書は『新勞農黨の樹立は「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ理論と矛盾しないか？』といふ疑問に答へて、『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ原則を、眞理として明確に是認した上で、新勞農黨の樹立は絕對に之れと矛盾せざる所以を强調してゐる。戰鬪的勞働者農民は、むしろ此の原則の爲めに勞農黨の樹立は貢獻し得るものだ。少くとも之れと對立はしないものだと信じた。幹部がどうであらうと自分等の鬪爭は必ず對立を避けて進み得ると考へた。

(3) 提案書も、勞農黨の綱領も、勞働組合、農民組合の再建、擴大、强化を重要任務として强調してゐる。これは戰鬪的勞働者農民が無條件的に贊意を表し得る程切實な要求として持つて居た考と一致した。

(4) 勞農黨は他の社民黨や大衆黨が「解放を期す」云々といつてゐるに反し「日常利益の擁護伸張の爲めに鬪ふ」といひ、自ら階級黨にあらざることを自覺してゐる。

(5) その他、提案書その他で云ひ現し得ない「善良な意圖」の存在を認め得られた。

六、事實は如何に進展したか

我々は現在に於ても、勞農黨幹部諸氏が善良な意圖を持ち續けて居るであらうことを、敢て疑はうとはしない。然し『善良な意圖』は問題たり得ない。安部磯雄氏や賀川豐彥氏でも『これが無產階級解放のために最善の道である』と信じ切つて居るかも知れないのである。問題は運動の實踐か、客觀的に、無產階級解放の爲めに役立ち得て居るか否かである。勞農黨の場合に於ては、運動の實踐が、その『善良な意圖』に沿ふて進行してゐるか、否か、が問題であるのだ。然かも特に注意しなければならぬことは、勞農黨の場合に於ける『善良な意圖』

は、提案に於ても『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ理論に關する長い說述を必要としたこと、連關して、ただ『無產階級のためになる』といつたような漠然たるものではなくて、もつと具體的なことを意味してゐる、といふ點である。

然らば、事實は如何に進展したか。

(1) 勞農黨が、その擴大强化の一つの目標としてゐる農民組合は、勞農黨の樹立によつて如何なる影響を受けたか。昔は全農に於て、少數の日勞黨系に對して、舊勞農黨系の左翼が壓倒的勢力を以て力强く押し進んで居た。然るに新勞農黨樹立は、この左翼を二分せしめて、全農全體としての力を弱めた。この事實に對しては何人も疑をさしはさむ餘地はない。勿論、縣内に對立のない長野、靜岡等は縣聯合會としては順調に進展してゐる。だが、例へば千葉、新潟の如きに於ては、所謂ウルトラとの鬪爭に不當な精力が費された。或は千葉の如きは事實上、農民組合の分裂の危期を導いたことすらあつた。そして、それ等の地方に於ては特に對立派に對する對立意識を大衆に植ゑ付ける結果を持つたことは當然である。これ等は然し、後にも述べられるであらう如くに同地方の指導者が惡いのでも何でもなく、ただ一圖に勞農黨に熱心であるところから來る必然なのである。

(2) 勞働組合方面に於ては如何。勞農黨樹立の當初、大阪金屬、大阪木材、東京市從はそのために分裂した。然し、その後各地の鬪士の獻身的奮鬪によつて、大阪、神戶、京都、東京、神奈川等の地方に勞働組合は再建、擴大せられて來た。然しながら問題はそれ等の組合が如何なる傾向を示し始めてゐるかである。全協の極めて無力なる地方、もしくは極めて嚴重に善良な意圖を確守せる指導者の下の組合を例外として、多くは全協絕對排擊の傾向を示し始めてゐるのである。大阪金屬、大阪木材の如きは、例へば岸和田紡績の爭議の例に於けるが如く、爭議の應援、指導の依賴を受けても、其所の從業員の中に全協系の者がゐるからといふ理由で應援を拒否したるが如き態度を示すに至つてゐる。これ等の傾向の發生も、根本的には、ただ勞農黨に熱心なる餘りから出て來る結果である。

(3) 黨内デモクラシーは何處へ行つたか。私の除名問題は形式上、手續上の問題として問題とされたが、これは只表面の理由で、實質は意見の相違に根ざしてゐることは、私の發表した意見が本部と同一意見であつたなら、手續上、大山委員長の如く、同じく常任委員會の承認を經ないでも問題にはならなかつたであらうこと、或は、常任委員會の要求に從つて私が提出した謝罪聲明案中に『私の解消意見そのものは撤回出來ませんが』といふ表現があることを以て結局除名の理由としてゐることと等によつて明瞭である。

かくして本部の意見に反する意見を大衆的規模に於て論議することは事實上不可能にせられてゐる。大衆的討論の壓迫である。

七、今や勞農黨は大衆の成長の桎梏である

大衆は成長する。鬪爭の實踐を通じて成長し、又鬪爭の實踐を通じて勞農黨の本質を見究め得るに至つてゐる。始め勞農黨の旗の下に出發した勞働組合でさへ、今では既に勞農黨の旗の下に縛り付けられてゐることをいさぎよしとしない狀態に立ち至つてゐる。この事實は解消運動が勞働組合大衆によつて如何に力強く押し進められるかを見るときに、直ちにうなづけることである。

農民組合に於ける同じ傾向は全農第一主義の形をとつて漸次大衆化しつゝある。農民組合をその組織實體とする勞農黨長野縣聯は既に解消賛成を聲明した。

さきにも述べたる如く解消運動は、此等戰鬪的勞働者農民が勞農黨の桎梏から脫出せんとして擧げてゐるところの歡聲に外ならぬ。勞農黨の最初の意圖は、かくして大衆が成長して勞農黨の桎梏から脫出するに至るものの一人でも多からんことを希望した筈であつた。勞農黨は彼等の雄々しき門出を祝福しなければならぬ筈であつた。然るに現在の事實が雄辯に示してゐるように勞農黨は今や逆に大衆討論を壓迫して、一人でも脫出を喰ひ止めようとして血眼である。かくして今や勞農黨は大衆の成長を阻止し、勞働者農民を永久に僞無産黨の下に縛り付けて置かうとする反動的正體を曝露しつゝあるのである。

八、分裂・反動化の必然性

前述せるが如き、勞働組合、農民組合の分裂、眞正左翼への對立傾向の生長、大衆の成長に對する桎梏化、等々の勞農黨の反動化は、勞農黨幹部の指導方針が惡いが故に起つて來る結果であらうか。もしそうならば戰鬪的勞働者農民は『解消』ではなくて『改造』を叫ばねばならぬ。然し期せずして戰鬪的勞働者農民が『解消』を叫ぶ所以のものはこの勞農黨の反動化が、勞農黨の本質に深くも根ざしてゐる必然であることを見拔いてゐるからである。さうだ勞農黨の反動化は必然である。

九月一日號の勞働農民新聞が引用してゐるように、コミンテルン第五回大會に於てジノヴィエフは勞働組合問題に關して次の如く論じてゐる。

『勞働組合の問題に關するレーニン主義の見地については、何よりも先づ、レーニン主義の實踐が之を說明する。……あらゆる政治上の分裂にもかゝわらず、吾々はたゞ一つの組合をも分裂せしめたことはな

い。革命以前にもさうであつたし、革命の最中にもさうであつたし、革命の後にもさうである。……しかも勞働組合の領域においては、我我が少數であつた場合にも、また多數であつた場合にも、曾てたつた一つの組合をも分裂せしめたことはない。これがロシヤの革命の歴史およびロシヤのボルシエヴイズムの歴史における一つの基礎的事實である』云々

正にさうでなければならぬ。苟しくも社會民主々義でないことを以て自ら任じてゐる勞農黨に於て、又『勞働組合の擴大强化を重要なる任務とする』勞農黨に於て、自ら一時的の便宜的の存在たることを自覺する勞農黨を、若干の勞働者農民にハツキリ支持せしむるために、勞働組合、農民組合を分裂せしむるが如きことは、如何なることがあらうとも許され難きこととして取り扱はれなければならぬ筈である。それこそ黨の基本精神に反するものとして除名問題であるべき筈である。

ところが、勞農黨の中央委員といふ最高の席に列する人が眞先かけて、さきに述べたやうな、大阪金屬、大阪木材、東京市從等の分裂を指導したのである。然かも右翼との分裂ならまだしも（それでも責められなければならぬが）相手はプロフインテルンを支持すると、少くとも稱してゐる者との分裂である。勞農黨本部は之れを責めたか。否。止むを得ないこととして容認せざるを得なかつた。或は勞農黨に對して極めて忠誠なるものとしてその『ウルトラ』との奮鬪は稱讚さへした。そんなことがあり得るかと疑はれるほどだが、事實は世間周知の通りである。此等の事實に對し私も明かに共犯だ。

農民組合、勞働組合に於ける前述の如き分裂が引き起されたのみならず、勞農黨の旗の下の組合は、前述の如く、少數の例外を除いては全協絶對排撃の傾向を示し始めつゝある。九月一日號の勞働農民新聞一枚だけ見ても思なかばに過ぎるものがある。

然らば、左樣な傾向を示し初めた組合の指導者は反動的本質を持つて居るのかといへば決してさうとは限らない。その人々の多くが如何に『善良な意圖』の持主であるかは、それらの總ての場合の態度に於て、明かに『今までは遠慮に遠慮をし續けて來たが、もう我慢がなり切れぬ』と宣言してゐることが證明するに充分である。かゝる善良な意圖を持つ勇敢な指導闘士でも、彼が、ただ一つ、勞農黨存續論者であるといふことのみによつて、彼は彼の意圖に反して反動的傾向に向はざるを得ざるに至るのである。

例へば、こゝに勞農黨の旗の下に出來た組合に於て、大衆の意識が生長し、若しくは全協のフラクシヨンが出來た場合、彼等はコミンテルンの方針を支持し、その方針の實現のために身を以て之れに當るこ

とを使命とすることは當然だ。而して今コミンテルンの勞農黨に對する根本的態度は『勞農黨を潰滅せよ』といふにあることは隱れもない事實である。然らばその組合に於けるコミンテルンの方針を支持せんとする者は、必ず勞農黨潰滅のために、その組合內に於て活動することを彼の一の使命とすることは又當然である。

現在に於ては、この勞農黨潰滅のための彼等の活動は極めて拙劣にして小兒病的であると謂はれなければならぬ。例へば徒らに人身攻擊のビラを最初から撒き散らすとか、爭議の先頭に立たずして見境もなく幹部攻擊をするとか。然し彼がその勞農黨潰滅の使命を、遂行するために如何に巧妙に立ち廻らうとも、あらゆる機會に於て、彼の口からは、例へば勞農黨の反動性の曝露、或は勞農黨の幹部攻擊の言葉が吐かれ組合を勞農黨の下から引き離さんとする行動が表はれるに違いないのである。このことは勞農黨に熱心な人にとつては堪え得ざることである。何となれば組合が勞農黨の旗の下を去ることは勞農黨の根底を奪はれることに外ならぬから。即ち必然に兩者の間に激烈な摩擦が生じ、勞農黨に弓を引く者を双葉の內に刈り取る、即ち戰鬪分子の除名、或は分裂といふことが必然に引き起されるに至るのである。

或は大阪金屬、大阪木材、東京市從或は千葉の農民組合の場合の如きでも、組合の分裂を避けんとすれば、幾分でも勞農黨としての運動を手控へねばならぬのだが、それよりも例へ少數になつてでも、ハッキリ勞農黨支持の組合を結成した方が、勞農黨として力強くなる所以であつて歡迎せられるのである。かくして如何なる『善良な意圖』をその人が持つてゐようとも、彼が勞農黨に熱心であるといふ一事からだけで、分裂の結果を引き起すには充分である。

抑も勞農黨が勞働組合の擴大強化といつたのは、何も勞農黨支持の組合の擴大強化をいつた筈ではなかつた筈である。左翼勞働組合の擴大強化をいつた筈である左翼勞働組合であるが爲めには、何も勞農黨支持でなくてもよい筈だ。否、むしろ勞農黨支持でなかるべき筈である。然るに一旦勞農黨の下に入つた組合は戰鬪分子の除名や、分裂の犧牲を拂つても勞農黨の下に永久に縛りつけんとするに至るのである。

かくして勞働組合、農民組合の分裂、弱化、全協との對立、勞農黨への縛りつけ、大衆の成長に對する桎梏化は、その意圖の如何に拘らず、勞農黨をやつて行かうとすることから必然的に生起する現象であることを我々は知るのである。

九、あらゆる僞瞞を曝露せよ

既に豫定の紙數を超過してゐる。觸れられなければならぬ點は多々

あるが結末を急がねばならぬ。

(1) 勞農黨本部の解消問題に對する聲明書は『現在の如き客觀的、主體的狀勢とは全然別個な狀勢が展開されるに至つた場合』には、轉化、もしくは解消する、といふて居るが、左樣な狀勢が何時來るといふのか。その時まで、その反動的役割を益々深刻ならしめようとするのだ。

(2) 同じ聲明書は又『勞農黨の解消は自己の鬪爭形態より高き段階への發展以外には斷じてあり得ないことである』と大見得を切つてゐるが、一體、『より高き段階』とは何を謂ふのか。勞農黨はその素質上、如何に發展しても『より高き段階』などに發展し得べきものでは斷じてあり得ない。むしろ、それは勞農黨として發展すればするほど反動化するばかりである。

その他、彼の聲明書は誤謬と僞瞞に滿ち〳〵てゐるが、今は一一それに觸れて居る餘裕を持たぬ。

(3) 『時期尙早論』こそは最も惡性の勞農黨第一主義である。それは時に勞農黨の框內を脫出せんとする戰鬪的大衆を、より遠距離まで觸手を延して、之れを反動陣營に引きもどさんとする以外の何ものでもない。我々は日和見態度が結局如何なる役目を果すかといふ一般原則の典型を此處に見出すであらう。

(4) 初め、勞農黨を基礎づける組織運動として日本勞働組合總評議會結成の運動が起された。然し最近この運動は、所謂『解黨派』によつて喰ひ込まれて、最近では總評議會結成の運動は、勞農黨第一主義と『解黨派』との共同事業となつて居る。總評議會が、よし『解黨派』に乘り取られて勞農黨第一主義ではないものとして結成せられようとも、その組織は××的勞働組合としての全協と相對立した組織であることは一見して明瞭である。かくして總評議會は、勞働組合戰線に於ける新勞農黨である。如何に善良な意圖から出發しようとも、それは結局反動的役割をなすに終ること、勞農黨の場合と同樣である。かくして、總評議會結成の運動は、勞農黨下を脫出したる戰鬪的勞働者を、第二の勞農黨に收容せんとするものに外ならぬ。

(5) 『自分等が正しいのだ。コミンテルンが間違つてるのだ。正しいものが讓步すべき理由はない』といふ者がある。勞農黨や『解黨派』が正しくないことほど明瞭なことはないのだが、一體、この自分等をコミンテルンと同列に置き得る資格があるかのように考へるところの思ひ上つた考へ方が、總ての誤謬と僞瞞と反動との溫床である。

十、勞農黨解消後は如何に

(1) 勞農黨がなくなつたら、組合は組合主義に陷る、と誠しやかに

云ふ者がある。然し勞農黨を支持することによつて組合主義でないと安心して居ることは、丁度、總同盟が社會民衆黨を支持してゐるから組合主義でない、と威張るのと何等撰ぶ所がない。僞せ無産黨を支持して居るよりも、むしろ組合主義の方が始末し易い。

(2) 勞農黨がなくなつたら政治鬪爭が出來なくなるだらうと逆宣傳するものがある。然し現在勞農黨がやり得る の政治鬪爭位は勞働組合、農民組合で結構やり得る。現在勞農黨の政治鬪爭といつても、その最先端に立つて、動員、ビラ貼り等の具體的活動の任に當るのは勞働組合、農民組合ではないか。その政治鬪爭に於ける、勞働組合と農民組合との方針、活動等の連絡、統一の如きは、それが爲めの兩者の協議會を以つてやればよいのである。

(3) 勞働者と農民の同盟は如何にするかといふ疑問が起る。勞農黨を勞働者、農民の同盟と規定して、コミンテルンの日本に關するテーゼなどまで引張り出して勞農黨の永久性を强辯する者があるが、右のテーゼには何處にも勞働者と農民とを恒久的な一つの同盟體として結成せしむることを容認した文字は一つも見當らない。勞働者と農民は同盟しなければならぬ。然し恒久的同盟體ではあり得ない。(2)に云へるが如き勞働者と農民との代表者の協議會に依つて、連絡、統一せられた共同の鬪爭を捲き起すそのことが勞働者と農民の實踐上の同盟に外ならぬのである。

(4) 『勞農黨がなくなつたら何所へ行けばよいか』。この心配は、ただ勞働組合、農民組合へ所屬して居らぬ者にのみ起る心配である。未所屬のものは夫々の組合に加盟すればよい。

(5) 農民組合は皆、全農に入つてゐるのだから問題はない。正しき意味に於ける全農第一主義へ。勞働組合は何所へ行くか。全協への左翼勞働組合の統一へ。

× × × × ×

おもふに勞農黨は、戰鬪的勞働者農民をして、體驗を以て、勞農政黨その他一切の尤もらしいマガヒ物が結局は反動であることを、シミ〴〵と自覺する機會を與へたこと以外には、何等の階級的貢獻をなし得なかつた。否むしろ逆だけしか行はれなかつた。かゝる反動的なマガヒ物は、出來るだけ速かに消えて無きものにしなければならぬ。

勞働者、農民の桎梏を卽時取り除け！
大衆を成長するだけ成長せしめよ！
勞農黨を解消せよ！
一切の勞農政黨を解消せよ！
黨內批判の自由・解消運動の自由
勞働組合農民組合の擴大强化！
全協への左翼勞働組合の統一！

——(昭和五年度)——

現代思想・評論家總覽

改造編輯局編纂

(五十音順)

編纂に就て

一本欄の編纂は、學位氏名及雅號、生地、生年月、學歴、閲歴及外國留學地、專攻科目及主張、著書及最近發表論文、現在職業、現住所等を調査編纂したものである。

一思想家、評論家と云ふ範圍を多數の學者、思想家、文藝家、及操觚者の中から定めることは、頗る難事なので、大體に於て最近發表の著作及評論を標準とし、更に社會評論に比較的縁由の多い人々だけを揭出することにした。種々なる事情で調査洩れの人も少くない。

(記者)

靑野季吉

明治廿三年二月四日新潟縣佐渡ヶ島に生る。佐渡中學を經て、大正四年早稻田大學英文科卒業。讀賣新聞、大正日日新聞、國際通信社等に記者生活を送ること八年。十二年六月より自由文筆にて立ち今日に到る。現在『文藝戰線』『勞農』の同人。「無産政黨と社會運動」「社會は何故に惱むか」の著の外「資本主義最後の段階としての帝國主義」「鬪爭に赫く光」「蒼ざめたる馬」「國富論」「マルクス・エンゲルス傳」「何を爲すべきか」「自己暴露」等の反譯あり。又、プロレタリア文藝評論多く「解放の藝術」「轉換期の文學」「マルクス主義文學鬪爭」等の著に之を收む。(東京市外代々木西原九三七)

赤神良讓

明治二十五年十月二十二日新潟縣三島郡寺泊に生る。大正八年東京帝國大學文學部社會學科卒業、大正十二年同法學部政治科卒業。大正十年明治大學教授となる。大正十五年、佛、英、獨、露、米に研究在留。社會學、政治學專攻。著書は「社會學入門」、「社會學」、「金の社會問題」、「人種問題」、「キッスとダンスと自殺の學說」、「思想生活の暴露」「モダンの心理」、「宗教問題」「新ロシヤ經濟學」、「社會學の誕生」等。明治大學教授。(相州大磯町淸水山)

赤松克麿

明治二十七年十二月四日山口縣德山町に生る。明治四十五年二月德山中學を半途退學し同年第三高等學校に入る。大正八年東京帝大法科を卒業。在學中新人會を組織し學生社會運動の先驅をなす。卒業後雜誌「解放」次いで「東洋經濟新報」の記者となり、一方勞働總同盟に關係し、更に日本農民組合に關係す。大正十五年社會民衆黨の創立に參畫し、現在書記長にして組織部長、機關紙部長を兼ぬ。著書「社會革命史論」「日本勞働運動發達史」「轉換期の日本社會運動」「社會運動に於ける現實主義」「解放運動の指導理論」。(東京市外巢鴨町二ノ一一)

淺野晃

明治三十四年八月十五日滋賀縣大津市に生る。東京府立第一中學校、第三高等學校を經て、大正十四年東京帝國大學法學部卒業、引續き同大學經濟學部大學院に在學せり。「哲學の貧困」「マルクス的方法の形成」の著譯書あり。三・一五事件に連座す。(東京市外野方町上高田三八)

麻生久

明治二十四年五月廿四日大分縣玖珠郡東飯田村に生る。辯護士、大正六年東京帝大法科卒業、大正八年五月まで東京日日新聞記者、雜誌『解放』を主宰せしことあり。同八年六月より友愛會へ入會、出版部長、主事、大正九年全日本鑛夫總聯合會を創立し、全日本鑛夫總聯合會顧問、日本勞働總同盟政治部長として活躍せしが、大正十五年十一月總同盟が勞農黨を脫退せる直後、「日本勞働組合同盟」を組織して總同盟と分裂し、「日本勞農黨」を結成し、書記長となり本年七月全國大衆黨なるや中央委員會議長となる。著書「勞働運動者のひとり言」「濁流に泳ぐ」「生きんとする群」「黎明」「人生を横ぎる者」「無産政黨の理論と實際」「無産政黨とは何ぞ」。(東京本鄕駒込林町一九〇)

阿部勇

明治三十五年六月大阪市に生る。大阪府立今宮中學校より第三高等學校を經て、東大

經濟學科に入學し大正十四年卒業し同學部助手任命。昭和四年法政大學教授就任。專攻科目、財政學。著書、有澤、阿部共著「產業合理化」。法政大學教授。(東京市外洗足町田園都市西港八四一)

安部磯雄

慶應元年二月四日福岡市新大工町に生る。明治十二年より十七年まで京都同志社に學ぶ、明治二十四年より二十七年まで米國 "Theological Seminary, Hartford, Conn. U. S. A." に留學す。廿七年七月より十二月まで歐羅巴旅行、明治廿年より廿四年まで及び廿七年より三十年まで岡山市にて基督教傳道に從事、三十年より三十二年まで同志社の教師となり三十二年五月早稻田大學教授となる。昭和三年三月辭職。昭和三年二月東京市第二區より普選に無產黨より打つて出で當選、社會民衆黨々首たり。社會問題を專攻し「社會問題解釋法」「應用市政論」「都市獨占事業論」一社會問題概論」「理想の人」「婦人の理想」「子供本位の家庭」「產兒制限の理論と實際」「社會主義の時代」「土地國有論」等の著あり。(東京市外高田町三四四)

阿部賢一　經濟學博士

明治二十三年八月二十八日德島縣板野郡神宅村に生る。同志社中學より早稻田大學に學ぶ。經濟學並に財政學を專攻し、現に東京日日新聞論說委員、兼ねて早稻田大學教授たり。著書に「財政學」「國民經濟原論(上)」「租稅の理念と共分配原理」あり。(東京市外中野町上ノ原七六四)

阿部次郎

明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村大字山寺に生る。第一高等學校を經て、東京帝國大學文科大學哲學科卒業(明治四十年七月)大學では哲學及哲學史を專攻し、斯學の評論の外、文藝評論、社會評論等多し。「倫理學の根本問題」「美學」「合本三太郎日記」「ニイチエのツアラツストラ解釋並に批評」「北郊雜記」「地獄の征服」「人格主義」等の著あり。大正十一年文部省海外研究員として渡歐、同十二年十月歸朝。東北帝國大學法文學部教授。(仙臺市土樋町二四五)

安倍能成

明治十六年十二月愛媛縣松山市小唐人町に生る。第一高等學校を經、東京文科大學哲學科を明治四十二年に卒業、西洋哲學を專修し、「西洋古代中世哲學史」「西洋近世哲學史」「オイケン大思想家の人生觀」「カント道德哲學原論」「山中雜記」の著譯の外評論多し。歐洲を巡遊し大正十五年歸朝す。現京城帝國大學法文學部教授。(京城倭城臺三號官舍)

荒畑勝三　(寒村)

明治二十年八月横濱市永樂町一丁目八番地に生る。高等小學校卒業以外學歷を持たず外國商館のボーイ、横須賀海軍造船工廠の職工、社會主義書類の傳道行商、本屋の小僧、新聞記者、雜誌「近代思想」月刊「平民新聞」「勞働組合」「青服」等の發行經營等具に苦難を嘗め、主義の爲めに活動して幾度か官權の壓迫を蒙り、囹圄の人たること四回「谷中村滅亡史」「ショウ警句集」短篇小說集「逃避者」「光を掲ぐる者」ウェッブ氏著「勞働組合運動史」ロイド著「勞働組合論」ボール・ラファルグ著「財產進化論」フイッシャー著「石油帝國主義」(反譯)の著あり。日本勞働新聞を主幹して長く京阪地方に宣傳に從事す。現に雜誌「勞農」の同人

なり。（東京市外大久保百人町三〇七）

生田弘治（長江）

明治十五年三月二十一日鳥取縣日野郡根雨町に生る。三十九年東京帝國大學文學部卒業。「圓光以後」「環境」「最近の小説家」「最近の文藝及び思潮」「徹底人道主義」等の評論集創作集の外に譯書「ニイチエ全集」「ニイチエ傳」等あり。目下長篇「釋尊傳」數百枚執筆中。（東京市外代々木山谷三一四）

石川三四郎

明治九年五月二十三日埼玉縣兒玉郡旭村字山王堂に生る。哲學館及び中央大學の前身法學院に學ぶ。爾來社會主義運動に投じ明治四十年日刊『平民新聞』の創立に參加す。數回投獄さる。大正二年三月一日秘かに日本を脱走し白國、英國、佛國、モロッコ國等前後九年漂浪す。九年十一月漂然歸國す。「哲人カアペンター」「西洋社會運動史」「放浪八年記」「古事記神話の新研究」「非進化論と人生」其他の著書及びコント「實證哲學」、「プルウドン」「勞働階級の政治的能力」クロポトキン「叛逆者の言葉」ルクリュ「地人論」ドオデエ「アルヽの女」ミルボオ「惡指導者」其他多數の譯書あり。（東京市外千歳村八幡山）

石橋湛山

明治十七年九月東京に生る。甲府中學を經て明治四十年早稲田大學文學部哲學科卒業。東京毎日新聞記者となり、後明治四十四年東洋經濟新報に入社し、「東洋時論」を編輯せしことあり、現に『東洋經濟新報』主幹、横濱高工經濟學講師。隨時發表せる論文千何百篇にも及ぶが、單行本に「新農業政策の提唱」「金解禁の影響と對策」「金融六十年史」等あり。（神奈川縣鎌倉町大町七〇五）

石濱知行

明治廿八年三月廿六日淡路島洲本町に生る東大卒業、歐洲に二ケ年間留學。大正十四年歸朝、九州大學教授たりしが昭和三年五月辭職す。社會思想同人。專攻科目經濟史。「經濟史概論」、「資本主義の成立とその後に於ける經濟の發展」（經濟學全集）、「ドイツ經濟史」（經濟學全集）、「アメリカ資本主義發達史」「社會變革過程の諸問題」および「歐洲紀行（鬪爭の跡を訪ねて）」等の著作あり。（東京市外杉並町高圓寺五五〇）

石原純　理學博士

明治十四年一月十五日東京本郷に生る。明治三十九年東京帝國大學理科卒業。同四十四年より大正十年迄東北帝國大學助教授及教授在職。明治四十五年三月より二年間獨、瑞西、英國に留學。專攻科目理論物理學。著述書名「アインスタイン全集」の譯述、「相對性原理」「物理學の基礎的諸問題」「人間相愛」「戀愛價値論」「歌集靉日」等。（東京市外杉並町高圓寺一、〇二六）

板垣鷹穗

明治二十七年東京に生る。東大文科在學中に東京美術學校講師となり、學席を去つて西洋美術史の講義をはじむ。（大正十年）其後、諸方の學校に美術史と歷史哲學とを講じ、大正十三年の秋、文部省在外研究員として外遊す。（歐洲各地の視察）專攻は、藝術史、及び、藝術批評（一般）。「機械と藝術との交流」、「新しき藝術の獲得」等は最近著。慶大文科、其他數校に於ける教職、但し、原稿生活が努力の中心となつてゐる。（東京市外上落合五九九）

猪谷善一

明治三十二年二月十五日富山市に生る。東京本郷湯島小學校、錦城中學を經て大正十二年東京商科大學を卒業、爾來同大學助教授並に附屬專門部教授として今日に及ぶ。專攻科目經濟史、明治經濟史。主張新自由主義、著書に「經濟學說の相對性」「明治維新經濟史」「日本資本主義」「朝鮮經濟史」あり。巴里に留學し昭和五年六月歸朝。(東京市外西大久保四〇)

市川房枝

明治二十六年五月十五日愛知縣中島郡朝日村明地に生る。小學校教員名古屋新聞記者を經て上京、勞働總同盟婦人部に關係した後大正八年末新婦人協會を平塚明子氏と創立、爾來婦人運動に奔走す。大正十年七月渡米婦人運動を視察し、大正十三年一月歸京後、國際勞働局東京支局に入り、昭和二年末迄在勤、此間國際勞働協會婦人委員會を組織し、幹事として婦人勞働者の勞働狀態を調査す。一方大正十三年婦選獲得同盟創立に加はり、同會理事たり。昭和三年八月ハワイの汎太平洋婦人會議へ同會代表として出席し、後米國に再び渡り、大統領選擧及公民教育の視察に赴く。昭和五年七月同會總務理事に就任。(東京市四谷區仲町三ノ四六)

出井盛之

明治二十五年七月廿八日栃木縣安蘇郡葛生町に生る。大正五年早稻田大學政治經濟科卒業、大正六年米國市俄古大學に留學、大正九年歸朝引き續き母校に教鞭を執る。專攻科目經濟學、工業經濟問題。「行動經濟學の立場より」「近代經濟組織と學說」「足袋の話」の著書あり。昭和四年國際聯盟役員となり瑞西に赴任す。

出隆

明治二十五年三月十日岡山縣津山市に生る東大哲學科卒業。東京帝大助教授英國に留學、專攻科目希臘哲學。著書「哲學以前」「西洋哲學史」等。(東京市小石川區小日向臺町一ノ五一)

稻村順三

明治三十四年十二月三十日新潟縣に生る。東京帝大文學部中途退學。農業問題特にマルキシズムの農業問題解決策としての土地××を研究しつゝあり。(東京市四谷區大番町五六)

稻村隆一

北海道俱知安町に生る。大正十二年早稻田大學、政治經濟學部卒業、早大在學當時大正九年より農民運動に關係、現在全國農民組合新潟縣聯合會書記。經濟學を專攻し主張マルクス主義。著書に「農村問題の現在と將來」「農民の歷史」「農民運動の政治的經濟的基礎」「日本に於ける農村問題」「農村は何處へ行く」あり。(新潟縣三條町字東裏館町)

猪俣津南雄

明治二十二年四月二十三日新潟市に生る。長岡中學を經て、早稻田大學卒業後大正四年九月早大留學生として米國ウィスコンシン大學、大學院に經濟學を專攻し、ドクトル・オヴ・フイロソフイの學位を得、後シカゴ大學、コロンビア大學に研究を續く。大正十年十月歸朝し、早大に經濟學史と農業政策を講ず。大正十二年六月の共產黨事件に連坐して早大講師を罷め現在著述に從事

す。昭和二年十二月雜誌『勞農』の創刊に盡力し、指導論客と目せらる。專攻科目經濟學。「金融資本論」「經濟學批判」「特權階級論」「新思想の普遍化」「現代日本ブルジヨアジーの政治的地位」「帝國主義研究」「現代日本研究」「沒落資本主義の第三期」の著、其他評論多し。(東京市外代々幡町笹塚一、一六九)

上田貞次郎　法學博士

明治十二年五月東京麻布德川侯爵邸內に生る。明治三十五年東京高等商業學校專攻部を卒業して商學士となる。爾來今日に至るまで同校敎職にありて經濟學を研究す。明治三十八年より四十二年に亘り文部省留學生として英獨兩國に留學す。大正八年第一回國際勞働會議に際し政府代表の顧問として米國に赴き、昭和三年國際經濟會議に日本を代表して出席す。「外國貿易原論」「商業史敎科書」「株式會社經濟論」「戰時經濟講話」「英國產業革命史論」「社會改造と企業」「商業政策」「商工經營」其他の著書あり、東京商科大學敎授。(東京府下雜司ケ谷一、二二二)

宇野弘藏

明治三十年十一月十二日岡山縣倉敷市に生る。大正十年東京帝國大學經濟學部卒業。大學卒業後直に囑託として大原社會問題研究所に入る。大正十一年十一月より約一年半伯林滯在。その間に研究所囑託を辭す。大正十三年秋歸朝して現職に就く。經濟學を專攻し、大學では經濟政策論を講義す。東北帝國大學助敎授。(仙臺市北一番丁二八)

大內兵衞

明治二十一年八月廿九日兵庫縣淡路松帆村に生る。大正二年東京帝大卒業、大正八年まで大藏省奉職六年、爾來東京帝大經濟學部敎授たり。大正五年——六年紐育、大正十、十一、十二年獨、英、佛に遊學す。專攻科目は財政學、飜譯「マルサス人口論」「ミル婦人解放論」、著書「俸給生活者の沒落とその運動」「勞働黨內閣の財政策」「現代英吉利の政治過程」「財政學大綱(上)」其他數種あり。(東京市牛込區市ケ谷河田町一一)

大塚金之助

明治二十五年五月二十五日東京市に生る。大正五年東京高等商業學校專攻部卒業同校就職、大正八年留學、紐育・倫敦・ローザンヌ各地の大學を經て主に伯林大學に數年在學。大正十二年歸朝。東京商科大學敎授。專攻學科、經濟原論及び經濟學史。東京社會科學研究所の設立に參加したれど、本年六月辭任。ヴアルガ「世界經濟年報」にも助力したり。改造社版マル＝エン全集のなかの二三の飜譯。(東京市外吉祥寺一九〇)

大森義太郎

明治三十一年九月生。東京市立余丁町小學校東京府立第四中學校より第一高等學校を經て大正十一年東京帝國大學經濟學部を卒業す。東大經濟學部助手より助敎授となりしが昭和三年四月「大學事件」の爲餘儀なく敎職を去る。專攻は經濟學、「勞農」の同人たり。最近病氣の爲文筆以外には餘り活動せず。「唯物辯證法」(經濟學全集)「剩餘價値學說史」(マル＝エン全集)等の著譯あり。(神奈川縣鎌倉町塔ノ辻一七〇)

大宅壮一（おほや）

明治三十三年九月十三日、大阪府三島郡富田町に生る。大阪府立茨木中學半途退學、檢定試驗、三高を經て東京帝國大學文學部社會學科半途退學。文筆的放浪をなし、文藝・社會評論をなす。「文學的戰術論」「モダン層とモダン相」「モンテ・クリスト伯」「赤い星」「共產部落の研究」その他著譯あり。(東京市外吉祥寺五六九)

大山郁夫

兵庫縣赤穗に生る。明治卅八年早稻田大學政治經濟科卒業の上、引續き同校に敎師となり留學生として米國に二年ドイツに二年滯在。歸朝後同校に敎授たりしが、大正六年辭職後大阪朝日新聞に入社論說記者たり、大正七年之を辭し長谷川如是閑櫛田民藏氏等と雜誌『我等』同人、後再び早大敎授となる。「民衆文化」「社會敎育」「政治の社會的基礎」「民族と階級」「現代日本の政治過程」「大衆に呼びかける」「鬪爭の跡」「大衆は動く」等の著の外社會評論時事評論等頗る多し。大正十五年三月舊勞農黨々首となるに及び早大敎授を辭す。昭和三年四月舊勞農黨解散さるゝや新黨準備會を組織し準備會解散後、勞農同盟を經て昭和四年八月現勞農黨組織され執行委員長となる。昭和五年二月東京第五區より勞農黨代議士として當選。(東京府下戶塚町上の臺六九一)

岡澤秀虎

明治三十五年五月十三日山口縣下關市に生る。山口縣立長府中學より早大露西亞文科卒業。ロシヤ文學一般並びに文學理論を專攻、マルクス主義に立脚して「文藝科學」の樹立を主張す。著書「ソウエートロシヤ文學理論」最近の論文「文藝科學に於ける社會學的方法」。(早大「文學思想研究」)早大文學部講師兼高等學院敎授。(東京市外戶塚町諏訪八四)

緒方竹虎

明治二十一年一月福岡市に生る。東京高等商業中途退學、早稻田大學に轉じ卒業。學校生活を卒ふると共に朝日新聞入社、今日に至る。新聞及び戰後の諸問題研究の爲ロンドンに三年留學。東京朝日新聞編輯局長。(東京市外大久保百人町三三一)

小倉金之助 理學博士

明治十八年七月山形縣酒田町に生る。東京物理學校卒業。東北帝國大學理學部助手より大阪醫科大學敎授、鹽見理化學研究所員となる。留學地フランス。數學を專攻す。「數學敎育の根本問題」「統計的研究法」「數理統計」(改造社版經濟學全集の內)、その他專門的諸論著、及び數學の歷史性・階級性に關する諸論文あり。鹽見理化學研究所長。(大阪府下池田町室町十番丁)

奥むめお

明治二十八年十月二十四日福井市に生る。福井高等女學校を經て、大正五年日本女子大學家政科を卒業す。爾來婦人運動に參加し今日に及ぶ。月刊「婦人運動」を主幹し職業婦人社及び婦人セトルメントを同人と共に經營す。「婦人問題十六講」の外にパンフレット「婦人と消費組合運動」「婦人と姙娠調節」「婦人問題とは何か?」の著あり。(東京本所區林町二ノ七十八)

小野清一郎

明治二十四年一月十日盛岡市に生る。大正

六年三月東京帝國大學法科卒業後、司法官試補となり大正七年十一月東京地方裁判所檢事となる。大正八年一月東京帝國大學助敎授、大正十二年八月同敎授。フランス、パリ法科大學を主としドイツ、アメリカ等に留學す。專攻科目は刑事法。「刑事訴訟法講義」「犯罪の時及び所」「法理學と文化の概念」の著あり。(東京市本郷區弓町一の二五)

小野武夫 農學博士

明治十六年八月三日大分縣大野郡百村村大字川邊に生る。明治三十四年大分縣立農學校卒業、日露戰役に出征し陸軍步兵少尉たり、明治四十二年以來農商務省勤務、傍ら硏學を續く、明治四十五年法政大學卒業、大正二年より六年迄帝國農會、大正九年迄海外興業株式會社調査課長、大正九年より十三年迄農商務省囑託、主として專ら小作制度の調査に從事す。專攻科目、農政學殊に農民經濟史にして「黎明期の農村」「農民經濟史硏究」「永小作論」「農民運動の現在及將來」「鄕土制度の硏究」「農村硏究講話」「日本農民史語彙」「農村社會史論講」「農村機構の分裂過程」「百姓一揆叢論」「日本村落史考」「舊佐賀藩の均田制度」「維新農民蜂起譚」の著あり。(東京市外小金井村上山谷二、七七三)

織本貞代

明治三十七年六月、島根縣飯石郡掛合村に生る。島根縣松江市高等女子家政女學校卒業。大正十年一月より三年間島根縣鍋山村尋高小學校代用敎員奉職。現在勞働婦人の解放を念願す。勞働女塾主事。(東京府下龜戶町七ノ二二四)

賀川豐彥 パチエラー・オブ・デヴニチー

明治二十一年七月十日神戶市島上町一〇八番地に生る。德島中學卒業(明治三十八年)明治學院高等科二年修業(明治四十年)神戶神學部卒業(明治四十三年)後米國プリンストン大學神學校(一九一六年)に學び學位を受く、神戶貧民窟に雜居したことあり、獻身的に貧民傳道に從事す。心理學、哲學、神學、生物學を修め、主觀經濟の上に立ちたるギルド・ソシアリズムを主張す。「貧民心理の硏究」「精神運動と社會運動」「人間苦と人間建築」「主觀經濟の原理」「基督傳論爭史」「淚の二等分」(詩集)「死線を越えて」(小說)「地殼を破つて」(散文詩)「預言者エレミヤ」「友情」「イエス傳の敎へ方」「太陽を射るもの」「星より星への通路」「生存競爭の哲學」「雷鳥の目醒むる前」「空中征服」「苦難に對する態度」「雲水遍路」のその他四十種の著あり。(大阪市此花區四貫島セツルメント)

笠信太郎

明治三十三年十二月、福岡縣福岡市に生る。中學修猷館、東京高商を經て大正十四年東京商科大學を卒業す。卒業後硏究科に在籍の後、大原社會問題硏究所に入り、今日に及ぶ。專攻は貨幣金融。著書「シュペングラーの歷史主義的立場」、譯書「金と物價」其他。大原社會問題硏究所員。(大阪市外羽衣、三一〇)

嘉治隆一

明治二十九年八月三日生。第一高等學校より東京帝國大學法學部を卒業す。後二年間同大學院にて法理學を專攻す。現在滿鐵東亞經濟調査局員たり。社會思想同人。著書「マルクスとエンゲルス」「近代ロシヤ社會史硏究」譯書「獨佛年誌抄」等あり。(東京市外高圓寺五四八)

加田哲二

明治二十八年十一月十六日東京市本郷區湯島三組町に生る。東京京華商業卒業後大正八年三月慶應義塾大學理財科卒業、直ちに同大學助手兼豫科教授となり、大正十二年四月より十五年三月まで獨逸へ留學、社會學を專攻す。著書「經濟價値論」「國家學説と社會思想」(以上絶版)「ウイリヤム・モリス」「近世社會學成立史」「社會學概論」、譯書エンゲルスの「住宅問題」(マルクス、エンゲルス全集改造社版) マックス・ベエヤア「英國社會主義史」。現に慶應義塾大學經濟學部教授として社會學及び獨乙經濟學説を擔當す(神奈川縣藤澤町鵠沼柳小路)

片山潜

マスター・オブ・アーツ。バチエロル・オブ・ジヴイアニチ。

岡山縣津山に生る。アメリカの大學を卒へたる後、日本に於て、キングスレーホールを設立し『平民新聞』に關係したる事あり。其間熱烈なる勞働運動、社會主義運動を試みたるが、政府の壓迫酷烈の爲に遂に米國に逃る。東洋經濟新報記者たりしことあり夙に社會主義に共鳴し、日本に於ける社會主義者の最長老たり。ボリシエヴズムを奉ずるや米國を追はれ入露し、目下ソヴイエット・ロシヤにありて第三インターナショナルの常任執行委員の一人なり。"Labour Movement in Japan."(シカゴ發行)「自傳」の著あり。

勝田貞次

明治二十六年十月二十七日靜岡縣濱名郡濱松市神明町に生る。慶應義塾理財科大正六年卒業。ハーバード大學統計科に一ケ年研學(大正十一年大正十二年)後野村證券調査部に入り罷てベルリン景氣研究所研學(昭和五年四月同七月)、經濟動學を專攻す。著書に「景氣變動の研究」(上中下)「季節變動の研究」「日本經濟の基礎構成」「日本經濟の方向轉換とその徑路」「國際經濟現象の研究」等あり。時事新報社景氣研究所長。(東京市外千駄ケ谷三九七)

勝本清一郎

明治三十二年五月東京日本橋區茅場町に生る。大正十二年慶應義塾大學文科卒業、其後二年間同大學院に在學す。大正十五年四月『三田文學』復活に際し編輯に當り昭和二年十月辭任。主として評論を發表し小説も作る。評論集「前衞の文學」の著あり。「近代生活」同人。目下獨逸遊學中。

加藤勘十

明治二十五年二月二十五日愛知縣丹羽郡岩倉町に生る。錄すべきほどの學歴なし。丁稚、小僧、自由勞働等々、獨學獨行大正八年『勞働世界』記者。大正九年全日本鑛夫總聯合會書記となり以降今日まで勞働組合戰線に一兵卒として參加す。「階級戰の先頭を往く」の著あり。全國勞働組合同盟關東金屬産業勞働組合執行委員長。(東京府下碑衾町大岡山三八)

兼常清佐

文學博士

明治十八年五月山口縣萩町に生る。京都大學文科卒業。ドイツ、ベルリンに留學す。音樂の研究家。著者に、「音樂概論」「ヴェートベンの死」「音樂巡禮」「シューベルト」等あり。(東京市外雜司ケ谷金山三三〇)

神川彦松

(五適) 法學博士

明治二十二年十二月廿三日三重縣渡會郡田丸町に生る。東京帝國大學法學部卒業。佛國獨逸國、英國及米國に留學し、外交史、

政治學を專攻し國際聯盟主義を主張す。「國際聯盟政策論」「外交使節の階級及位次論」「國際聯盟と世界法の建設」「軍縮會議私觀」の著あり。東京帝國大學法學部教授。(神奈川縣鎌倉小町三五九)

神近市子

明治二十四年六月六日長崎縣北松浦郡佐々村大字佐々に生る。長崎市活水女學校を經て東京女子英學塾を卒業す。婦人運動の先覺者にして、女學校教師、新聞記者、語學教師等の閲歴あり。現在はマルクス主義を奉じ、「女人藝術」「戰旗」その他の雜誌新聞に執筆す。著譯書「神と資本家」「人類物語」「未來をめぐる幻影」等。(東京市外落合町上落合四六九)

河合榮治郎

明治廿四年二月東京府下千住町に生る。東京府立第三中學校第一高等學校を經て、東京帝國大學を大正四年卒業。大正七年より大正八年に亘り米國に滯在勞働問題を研究す、農商務省參事官たりしも議合はずして辭職す。「勞働問題研究」「社會思想史研究一」「在歐通信」「トマス・ヒル・グリインの思想體系(上)」「英國勞働黨のイデオロギー」の著の外社會評論多し。東京帝國大學教授(東京府大井町四、九四八)

河上肇　法學博士

明治十二年十月山口縣岩國に生る。東京帝大卒業後農科大學實科、學習院等に講師たり。後教員をやめて讀賣新聞記者となり、讀賣退社後は日本經濟新誌の創刊に與かり其の主筆となる。明治四十一年以後京大教授たりしが、昭和三年五月大學問題の際自ら教職を拋ち、爾來著述に沒頭す。個人雜誌「社會問題研究」を發行し學界に獻與する所大なり。「貧乏物語」「祖國を顧みて」「社會問題管見」「唯物史觀研究」「近代經濟思想史論」「社會組織と社會革命」「資本主義經濟學の史的發展」「人口問題批判」「資本論入門」「マルクス主義經濟學」「第二貧乏物語」等多くの著作あり。(東京市外西大久保一三三)

河田嗣郎　法學博士

明治十六年四月山口縣玖珂郡伊陸村に生る。明治四十年京都帝國大學法科大學卒業、四十年より四十一年迄國民新聞社に奉職、四十一年京都帝國大學講師囑託、四十二年同助教授に任ぜられ、大正元年より五年まで獨英佛米に留學、大正七年京都帝國大學教授に任ぜらる。經濟學を專攻し「家族制度の發達」「資本主義的精神」「價値論」(共譯)「土地經濟論」「日本の經濟と佛教」「社會主義論」(經濟全書中の一卷)、「婦人問題」「穀價の研究」「農業倉庫論」「家族制度研究」「社會問題及社會運動」「經濟學要義」「農村問題と其對策」「農政四十三講」「家族制度と婦人問題」「農業經濟學」「社會問題綱要」の著あり。昭和三年大阪市立商大學長となる。(京都市上京區北白川追分町七七の一)

河津暹　法學博士

明治八年一月東京に生る。東京帝國大學法科卒業後同校に教授たり。卅三年獨逸に留學四十五年歐米を視察す。夙に經濟的見地より社會問題の解決に力め多くの著書と評論あり。社會政策學會員、東京帝國大學經濟學部教授。(東京府砧村喜多見成城)

河西太一郎

明治廿八年三月十八日生。大正九年東京帝國大學卒業。研究科目は農政學、立教大學

教授。「農業の社會化」「社會主義と農業問題」「農業問題研究」「土地問題論」等の譯著あり。（東京市外井荻町下荻窪三八四）

河村又介

明治廿七年、山口縣に生る。大正八年東京帝國大學法學部卒業、小野塚、吉野兩博士の下に助手として政治學を研究す。大正十一年以來ドイツ及びフランスに留學、歸朝後東北帝國大學法文學部教授に任ぜられ、國家原論の講座を擔任す。（仙臺市米ケ袋下町三三）

神戸正雄　法學博士

明治十年四月愛知縣一宮市に生る。明治三十三年、東京帝國大學法科卒業、直ちに同大學院に入り、三十五年、京都帝國大學法科大學助教授となり、三十七年八月、文部省留學生として歐米に渡り、特に獨逸ヴュルツブルグ大學シャンツ教授に師事して財政學を專修す、四十年九月、京都帝國大學法科大學教授となり、大正二年九月カーン財閥より歐米に派遣せられ三年十二月歸朝して今日に至る。一般財政經濟及社會問題、特に租稅論を專攻す。獨逸文著書三種邦文著書數十種に上る外幾多の社會評論あり。京都帝國大學教授。（京都市上京區淨土寺西田町七〇）

菊川忠雄

明治三十四年三月一日、愛媛縣越智郡波方村字小部に生る。大正十二年三月第一高等學校卒業、同十五年三月東京帝大經濟學部卒業。學生時代には一高社會思想研究會、帝大新人會、學生社會科學聯合會の運動に從ひ、大正十四年十二月より日本勞働總同盟本部に入り、大正十五年末の總同盟第二次分裂に際し日本勞働組合同盟本部に入り、現在全國勞働組合同盟中央執行委員、本部教育部長、關東重技工組合委員長、全國大衆黨統制委員。マルキシズム全般を研究す。譯書「プレブス經濟地理概論」其他。（東京市外杉並町阿佐谷四五九）

北澤新次郎

明治廿年二月二十一日東京市本所區菊川町一ノ一一に生る。東京府立第三中學校早稻田大學を卒へて北米ノースカロライナ大學（在學一年半）同上ヂョンス・ホップキンス大學（在學四年）同上サウス大學留學期間しケ年に及ぶ。社會問題及經濟學を專攻、社會評論頗る多し。「社會經濟論」「新社會の建設」「經濟學史概論」「產業組織論」「資本主義經濟と社會主義經濟」の著あり。早稻田大學教授（神奈川縣逗子町櫻山一、一一九）

北昤吉

明治十八年七月廿一日、新潟縣佐渡郡兩津町字湊に生る。早大哲學科を明治四十一年に出て茨城縣土浦中學、東京府第三中學教諭、早大講師を經て米國と獨逸に四年半留學し大正十一年十二月歸朝す。歸朝後大東文化協會研究所員、大東文化學院教授、日本大學講師たり、日本新聞に關與す。現在は帝國美術學校長、祖國主幹、大正大學講師たり。著書、「ロヂャース西洋哲學史」（譯）「ヘフディング近世哲學史」二卷「ベルグソン哲學の解說及び批判」二卷「哲學より政治へ」「光は東方より」「哲學行脚」「昭和維新」「哲學概論」「人間觀」等。（東京市外西荻窪上井草）

木村毅

明治二十七年二月十二日岡山縣勝田郡勝間田町に生る。早稻田大學英文科卒業大正十

五年雜誌『反響』を主宰編輯せしことあり。昭和三年五月歐洲へ留學、二ケ年滯在。歸朝後全國大衆黨教育部長たり。「文藝東西南北」「小說研究十六講」「兎と妓生」（短篇集）「明治文學の展望」、「日本社會主義史」等の著あり。（東京市外西大久保四七）

櫛田民藏

明治十八年六月十一日福島縣石城郡上小川村上小川に生る。大原社會問題研究所員大正元年京都帝國大學法科大學卒業、同二年—五年、東京帝國大學助手、同五年—同七年大阪朝日新聞記者及同志社大學教授、同八年—九年東京帝國大學經濟學部其他講師、九年—現在、大原社會問題研究所及『批判』社に關係す。九年大原研究所より歐米各地出張、十一年歸朝專攻は經濟學（東京市外淀橋町柏木九七六）

藏原惟人

明治三十五年一月東京に生る。東京外國語學校露語科卒業。二ケ年モスクワに學ぶ。「藝術と無產階級」「壞滅」の譯、其他ロシア文學の飜譯紹介、評論等がある。『戰旗』同人。（東京市芝區芝公園一二號ノ四）

小泉信三

明治廿一年五月四日東京市芝區三田四ノ二九に生る。小學校—慶應義塾普通部—同大學部卒業—同塾教授奉職現在に及ぶ。倫敦・伯林・劍橋（英國）—巴里に留學し、經濟學及び社會思想を專攻す、著書「價値論と社會主義」「改訂社會問題研究」「リカアドオ研究」等。（東京市外北品川宿三二三）

河野密

明治三十年十二月十八日千葉縣夷隅郡中川村に生る。大正十一年東大法學部卒業、東京朝日及び大阪朝日新聞外報部勤務、大正十二年夏同社を辭し爾來同志社大學の講師たりしが大正十五年十一月日勞黨結成を機會に辭す。日勞黨の中央執行委員、日本大衆黨の書記長等を經て現在全國大衆黨の常任中央執行委員たり。「神聖家族」「マルクス歷史、社會及び國家學說」「功利主義論」の反譯及び評論多し。（東京市牛込區富久町一〇五）

黒（コク）正（シヤウ）巖　經濟學博士

明治二十八年一月二日岡山縣上道郡に生る。大正九年七月京都帝國大學經濟學部卒業、大正十一年同學部講師就任、大正十二年より十四年迄歐米諸國に留學す。農業史を專攻し京都帝國大學教授たり。昭和四年五月京都帝國大學より經濟學博士の學位を受く。著書「經濟史論考」「封建社會の統制と鬪爭」「農業共產制史論」、「百姓一揆の研究」、「日本經濟史」、「百姓一揆史談」「マックス・ウエーバー社會經濟史原論」。（京都市鹿ケ谷法然院町一九）

小島精一

明治二十八年八月東京市牛込に生る。大正八年東大經濟學部卒業。九大助教授中、歐洲留學。經濟學—最近では特に世界經濟論を研究す。著書「鐵鋼業發展史論」、「企業集中論」「日本金融資本論」、「英國產業組織論」「工業政策」「產業合理化」其他數冊。最近は世界經濟論に力を注ぐ。法政大學、世界經濟研究所員。（東京府下砧村喜多見）

兒玉達童

明治二十六年六月四日神奈川縣足柄上郡清水村に生る。大正七年東京帝國大學文科哲學科卒業、大正七年八月より同八年迄文部

省に調査事務囑託、大正八年九月より同九年八月迄松本高等學校教授、大正十年一月より日本、立教、曹洞宗等諸大學、東京女子大學、東京女子高等師範學校に講師、現在は駒澤大學教授、日本大學講師、專攻科目は純正哲學。著譯書名「人智の原理及對話」(譯)「新理想主義哲學序論」(譯)「カントの生涯及性格」(譯)「哲學概論」(著)「カントの數學論の範圍に於いて外五篇」(著)。(神奈川縣鎌倉二階堂八〇四)

小林新

明治二十六年五月福井縣に生る。大正五年早稻田大學商科卒業。大正七年より歐米に早稻田大學留學生として派遣されコロンビア及びハーヴアード兩大學に學び同十一年歸朝す。統計學並金融經濟學を專攻す。著書「經濟統計學」。早稻田大學教授、商工省囑託(統計改善委員)。(東京市外淀橋角筈四一六)

小林秀雄

明治卅五年四月十一日、東京市神田區猿樂町に生る。東京帝大卒業。フランス文學專攻。文藝春秋に本年四月以來文藝時評を書く。昭和四年八月改造に「樣々なる意匠」十二月同誌に「志賀直哉」文藝評論を發表す。(東京府下瀧ノ川町田端一五五)

小林良正

明治三十一年三月一日東京市本郷區駒込西片町一〇に生る。東京帝國大學經濟學部大正十二年卒業。明治大學講師・專修大學教授たり。專攻は歐洲經濟史。「ドイツ經濟史要」、「經濟史論考」、「經濟史」(經濟學論集(專大)誌上)等の著がある。(東京市本郷區駒込曙町二一)

駒井卓　理學博士

明治十九年五月姬路に生る。東京高師、東大選科卒業。大正九年來京都帝大に勤務、大正十二年より二ケ年間歐米諸國留學、動物學專攻。著書「生物學叢話」、「純專門のもの少々。京都帝大教授兼東京帝大教授。(京都北白川伊織町)

小牧近江

明治二十七年五月十一日秋田縣土崎港に生る。著述業、曉星中學中途退學渡佛アンリ四世校を經て、パリ大學法科卒業。專攻科目及び法科、「クラルテ」「フィリップの死」、長篇「異國の戰爭」の著あり。國民新聞社員たりしことあり。本名近江谷駉。(神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎)

權田保之助

明治卅年五月十七日神田區今川小路一丁目河岸に生る。東京市商工中學校卒業、東京外國語學校獨逸語學科卒業、東京帝國大學文學部選科修了、第二高等學校にて高等學校卒業檢定試驗合格、東京帝國大學文科卒業(大正三年七月)美學を專攻。「活動寫眞の原理及應用」「和獨辭典及獨和辭典」「最新獨和辭典」「經濟的文明史論」「美術工藝論」「民衆娛樂問題」「民衆娛樂の基調」「娛樂業者の群」の著の外多くの社會評論あり。雜誌「獨語研究」を主宰す、大原社會問題研究所研究員、文部省囑託(東京市外中野町本郷五四九)

三枝博音

明治二十五年五月二十日廣島縣山縣郡本地村に生る。東京帝國大學文學部哲學科卒業。東洋・法政・立正大學・成蹊高等學校等に出講。哲學及社會科學を專攻す。「ディルタイ

精神科學序説（編譯）「認識論考」（著述）「ヘーゲル辯證法」（同上）月刊研究雜誌「ヘーゲル及辯證法研究」の編輯及執筆。目下は成蹊高等學校及立正大學教授。（東京市外吉祥寺六三〇）

堺　利　彦

明治三年十一月豐前國豐津に生る。小學校中學校、第一高等中學校豫科等に學び、爾後、小學教員、新聞記者、賣文社々長、社會主義運動、入獄數回等の生活を爲す。大正十二年震災の際には、第一次共產黨事件に連座して未決監に在り、爲に震災の難を免れたりと云ふ。我が社會主義の巨頭にして「社會主義倫理學」「マルクス傳」「人と超人」「女性中心説」「社會主義研究」「唯物史觀解説」「猫のあくび」「猫の百日咳」「樂天囚人」「當なし行脚」「社會講談一休和尚」「いかけ松」「男女戰貧富戰」等多くの著譯書あり。ペンネームの貝塚澁六、枯川等は近來使用せず。（東京市麴町八ノ二四）

坂　西　由　藏

明治十年十二月四日兵庫縣城崎町に生る。明治三十五年七月高等商業學校（東京）卒業三十七年七月同校專攻部卒業。明治三十七年八月神戸高商講師三十九年五月同校教授四十年三月乃至四十三年六月獨英米三國へ留學。大正十四年三月神戸高商教授を辭し同校講師となる、昭和四年四月神戸高商の組織變更により、神戸商業大學講師となる。經濟史及び理論經濟學專攻。著書「企業論」「日本經濟史論」（譯書）。「經濟生活の歷史的考察」「フックス國民經濟學」（譯書）。「企業理論」（改造社經濟學全集）。神戸商業大學講師。（經濟史擔當）。兵庫縣立第一神戸高女高等科講師（經濟學）。（神戸市坂口通七丁目六八）

向（サキ）坂（サカ）逸　郎

明治三十年二月六日福岡縣大牟田市に生る第五高等學校を經て、大正十年東京帝國大學經濟學部を卒業す。同學部助手たり。獨逸に留學し、大正十四年五月歸朝後九州帝國大學法文學部教授となり經濟學原論を擔任せしが、昭和三年四月辭す。專攻經濟學。（東京市外中目黑一、〇〇〇）

佐　々　木　惣　一　　法學博士

明治十一年三月二十八日鳥取縣鳥取市西町七〇番地に生る。明治三十六年七月京都帝國大學法科大學法律科卒業、同三十九年十月京都帝國大學助教授に任ぜられ、同四十二年九月出發、獨、佛、英三ケ國の大學に學び大正元年十二月歸朝、翌二年一月教授に任ぜられ、同十二月法學博士の學位を授けらる。行政法を專攻し、「行政學」「立憲非立憲」「此一票の捨てどころ」の著作の外多くの著述と政治評論あり。京都帝國大學法學部教授（京都市上京區下鴨泉川町）

佐　佐　弘　雄

明治三十年一月二十三日熊本縣熊本市新屋敷町に生る。東京富士見小學、府立四中を經陸軍士官學校の入學許可ありしも、五高に入る。東京帝大法學部卒業後同學部助手として小野塚、吉野兩教授の指導をうく。二年後獨・佛・英・米・に留學し政治學史を專攻す。歸朝後九州帝大法文學部教授として政治學講座を擔任したが、昭和三年五月共產黨事件の餘波を受けたる全國大學事件のため辭職す。爾來評論著述飜譯に從事し、社會科學大辭典にも參畫、今日に及ぶ。（東京市麻布區材木町六八）

佐野學

明治廿五年二月二十二日大分縣速見郡杵築町に生る。麻生中學校第七高等學校を經て大正六年に東京帝國大學政治科卒業、それより大學院に入り矢作博士につきて農政學研究、社會學、經濟史、農政學等を專修し社會評論多し。「解放」社同人、舊新人會同人、全日本鑛夫總聯合會相談役の外滿鐵東亞經濟調査局囑託たりしことあり。後早大教授たりしが大正十二年六月大學騷動及び共產黨事件に際しロシアに亡命、滯露一年半に及びしが、歸りて『無產者新聞』を創刊し之れを主宰す。「日本經濟史」「日本社會史序說」「農村問題」「鬪爭によりて解放へ」等の著あり。一九二八・三・一五事件に係り、未決中。(東京市外下澁谷三五〇)

澤村康　農學博士

明治廿六年八月廿九日東京市本所區緑町に生る。大正六年東大農學部卒業、大正九年東大法學部卒業、大正九年農商務省に就任、大正十年九州大學農學部助教授に轉任、大正十三年より同大學に教授たり。英國、獨逸及び佛蘭西に遊學し農業政策及び農業經濟學を專攻す。「小作法と自作農創定法」「中歐諸外國の土地制度及び土地政策」の著あり。(福岡市西新町新地九八)

汐見三郎

明治二十八年二月九日大阪市に生る。京都帝國大學教授。東京帝國大學卒業後獨逸ハイデルベルグ大學に學び財政學を專攻す。「日本財政特殊問題」「統計學」「經濟統計研究」の著あり。(京都市左京區淨土寺馬場町二八)

白柳武司（秀湖）

明治十七年一月七日、靜岡縣引佐郡氣賀町氣賀に生る。早稻田大學文學部哲學科卒業。明治三十七年、早稻田大學在學中、加藤時次郎氏の直行團に屬し、機關雜誌「直言」を主宰す。明治三十八年週刊「平民新聞」發行禁止となるや加藤氏「直言」を擧げて之に充つ。明治四十年同志と雜誌「火鞭」を發行す。同年步兵第三聯隊に入營し故陸軍大將田中義一の部下たり。軍隊内に危險思想を宣傳するものなりとして注意せらる。大正七八年中、社會講談を提唱し、自ら筆を執りて大衆文藝の爲に道を開く。大正十一年[illegible]。昭和以後人物評傳の專攻に復歸し史筆を專らとし、自ら「町の歷史家」を以て任ず。著書「[illegible]愁」「鐵火石火」「町人の天下」「親分子分三部作」「日本經濟革命史」「財界太平記」二部作「西園寺公望傳」等。(東京府大井町瀧王子四、五〇三)

新明正道

明治三十一年二月廿四日生。出生地臺灣臺北市。大正十年東京帝國大學法科卒業、關西學院社會學部教師より東北帝大法文學部教授に轉じ社會學を專攻す「社會思想」同人にして著書「社會學序說」「權力と社會」「群集論」「ソフイストの政治學研究」「形式社會學論」外に評論あり。目下獨逸留學中。(仙臺市木町末無一一)

末弘嚴太郎

明治二十一年十一月三十日、山口縣山口町に生る。(但し本籍は大分縣宇佐郡宇佐町)東京市本郷小學校から開成中學、一高を經て東京帝國大學法學部を卒業す。後三年程歐米に遊學す。東京帝國大學法學部教授たり。又社會思想家、評論家として論壇に活

躍す。「債權各論」「物權法」「噓の效用」「農村法律問題」「法窓閑話」等の著あり。（東京市小石川區竹早町一二三）

杉山元治郎

明治十八年十一月十八日大阪府泉南郡北中通村下瓦屋に生る。明治三十六年三月大阪府立農學校卒業後和歌山縣農會技手となる。明治四十二年三月仙台東北學院神學部卒業大正九年まで福島縣相馬郡小高町にて日本基督教會の傳道をなす。大正十一年四月日本農民組合創立せらるゝや組合長となり、分裂問題のあつた時暫らく引退したが全國農民組合の合同なるや委員長となり今日に至る。大正十三年三月歯科醫師の免許證を受く。次で大正十四年再建の勞働農民黨の最初の委員長となり一ケ年にして大山氏に代る。現在は全國大衆黨に屬し顧問となる。著書に「通俗福音物語」「農村經營の理想」「農家經營の實際」「五用論」「農民組合の理論と實際」「小作爭議の實際」「農村貧窮論」等がある。（大阪市外布施町三條通五五）

杉森孝次郎

明治十四年四月靜岡縣小笠郡南山村に生る。明治三十九年早稲田大學文科卒業、同校に教鞭を執り、大正二年十月より同八年三月迄文部省留學生として獨英に滯在修學す。The Principles of the Moral Empire「人類の再生」「新社會の原則」「國家の明日と新政治原則」「性意識の哲學化」「倫理學」社會進歩の純粹原則」「社會學」「綜合倫理學」「英雄論」等の著書あり。早稲田大學教授。（東京府下代々木新町一一）

鈴木茂三郎

明治二十六年二月七日愛知縣寶飯郡蒲郡町海岸に生る。大正四年早稲田大學專門部政治經濟科を卒業す。大正四年より八年迄報知新聞記者、大正八年より九年迄大阪大正日日新聞記者たりしが、兩社共に編輯ストライキにて退社、大正十一年より昭和三年五月一日迄、東京日日、大阪毎日新聞に記者たり。「思想國難」事件の飛沫を浴びて退く。大正九年より一ケ年を紐育に、一ケ年を歐洲並に革命直後のロシアに遊ぶ。經濟學を專攻し、現在では著述の傍ら全國大衆黨常任中央執行委員たり。「勞農ロシヤの國賓として」「國際經濟と日本資本主義の現段階」「世界經濟と國際資本戰」等の著あり。（東京市外杉並町阿佐ヶ谷六〇〇）

鈴木武雄

明治三十四年四月二十七日神戸市に生る。三高を經て東京帝大法文學部政治科より同經濟學部大學院に入る。曾て東京市政調査會研究員たり。經濟學及財政學專攻。「世界經濟と金解禁」（著書）「李朝末期に於ける朝鮮の財政」（論文「朝鮮經濟の研究」所收）。京城帝國大學法文學部助教授。（京城府崇四洞二〇八）

鈴木文治

明治十八年九月四日宮城縣栗原郡金成村に生る。明治四十二年東京帝國大學政治科を卒業し、曾て東京朝日新聞記者たりしことあり。夙に友愛會を組織し「勞働と產業」を發行して全國の勞働者聯合に力む。大正三四年に二回米國の勞働運動視察に赴き、大正七年巴里の國際勞働聯盟會議に臨み更に大正十三年以來國際勞働會議に勞働代表として數回列席す。「勞働問題早わかり」「工場法釋義」「日本の勞働問題」「國際勞働問題」の著作及評論多し。日本勞働總同盟會長。昭和三年大阪より社會民衆黨代議士に當選。（神奈川縣鎌倉町佐介通一四七）

住谷悅治

明治二十八年十二月十八日、群馬縣群馬郡國府村大字東國分に生る。前橋中學校、第二高等學校を經て、大正十一年東京帝國大學法學部政治科を卒業す。宇都宮歩兵第六十六聯隊に入營、豫備陸軍歩兵伍長。昭和二年同志社大學法學部教授となり今日に及ぶ。專攻科目、經濟學史。著書、「唯物史觀よりみたる經濟學史」、「社會主義經濟思想史」、「經濟學說の歷史性・階級性。」譯書(共譯)、ホブソン「近代資本主義發展史論」、(京都市左京區下鴨松ノ木町五)

孫田秀春　法學博士

明治十九年三月十三日、山形縣西置賜郡西根村草岡に生る。米澤中學、第一高等學校東京帝大法科卒業。大正四年乃至七年朝鮮銀行員、大正七年末より東京高商、次で東京商大奉職。自大正八年末至大正十二年初獨墺瑞國留學。專攻、民法及勞働法。著書に「法學通論」、「勞働法總論」「勞働法各論上」、「我國勞働法規及判決例」、「產業組合法」等がある。東京商科大學教授。(東京府下、井荻町上荻窪九〇三)

平貞藏

明治二十七年八月、山形縣東置賜郡に生る。第三高等學校を經て、大正九年東京帝國大學法學部を卒業。外國經濟史を研究し「社會思想」同人。現に法政大學經濟學部教授兼圖書館長なり。(佛國留學中東京市外高圓寺九一八)

高木八尺

明治廿二年十二月東京に生る。大正四年東大政治學科卒業。大正八年四月より約四年間米國諸地に遊學。同八年、東大法學部助敎授に任命、十三年に敎授。米國にては主としてハーバード大學に、其他、ワシントン、ミシガン、シカゴの諸大學に學ぶ。米國憲法及歷史、殊に米國の力の根源をなす同國民の精神と思想を考究攝取せんとす。東大敎授。(東京市外澁谷町櫻ケ丘六六)

高田保馬　文學博士

明治十六年十二月廿七日佐賀縣小城郡三日月村に生る。明治四十三年京都大學哲學科卒業、米田博士指導の下に大學院在學、大正八年より十三年まで東京商大、廣島高師教授、更に九州大學教授、京都帝大學教授。「社會學原理」「現代社會の諸研究」「社會と國家」「社會學概論」「現代社會の諸研究」「分業論」「大數法論」「階級考」「階級及第三史觀」「人口と貧乏」「經濟學研究」、「經濟學」「經濟學新講」其他(佐賀縣小城郡三日月村)

高野岩三郎　法學博士

明治四年九月二日長崎市に生る。東京帝大法科政治科卒業、明治二十八年七月外國留學——明治三十二年乃至三十六年東大敎授——明治三十二年乃至大正十年。現に大原社會問題研究所長たり。東大卒業後主として獨逸ミュンヘン大學に留學す。社會統計學社會問題を專攻。「社會統計學史研究」(四論文集)「本邦人口の現在及將來」の著書あり。(兵庫縣武庫郡住吉村花田一四〇五)

高橋龜吉

明治二十五年一月、山口縣德山町に、一船工の長男として生る。高等小學校を中途退學して、十五歲の時商人たらんとして大阪に上り、某袋物問屋に丁稚奉公す。居ること一年、翌年十六歲の時、朝鮮城津港に渡り、同地にて某店に四ケ年半を店員として

過す。此間獨學して、歸國後直ちに早稻田大學に入り大正五年卒業、久原鑛業に入社す。居ること一年九ケ月、退社して東洋經濟新報社に入り、此間、一ケ年半、戰後の歐米諸國を視察す。昭和二年六月、明治以降の日本經濟史研究のため、東洋經濟新報編輯長を辭して一介の著述業者となり今日に至る。此間大正十年頃より無產政黨運動農民運動等に關係す。著書の主なるもの「經濟學の實際知識」「金融の基礎知識」「實用經濟學」「明治大正產業發達史」「日本資本主義發達史」「明治大正農業經濟の變遷」「日本資本主義經濟の研究」「日本農村經濟の研究」「資本主義末期の研究」「日本財閥の解剖」「日本資本主義の合理化」等々。(東京市赤坂區青山南町五ノ三七)

高橋誠一郎

明治十八年橫濱市に生る。慶應義塾大學卒業後同校に教鞭を執り歐洲に留學して經濟學史を專攻す、歸朝後同校教授として今日に至る。「經濟學史研究」「歐洲經濟學史」の著作の外多くの評論と研究とを公にす。(相州大磯町王城山五二九)

高橋正雄

明治三十四年十一月二十一日仙臺に生る。大正十一年三月第二高等學校文科甲類、大正十四年三月東京帝國大學經濟學部卒業。專攻、經濟學、統計學。九州帝國大學助教授(法文學部)。(福岡市鳥飼草ケ江九七)

高柳賢三

明治廿年五月十一日埼玉縣熊谷町に生る。東京帝國大學法學部教授たり。震災後命を奉じて、歐米各國を巡遊し東大の爲めに圖書數十萬卷の蒐集に多大の效をおさむ「新法學の基調」「現代法律思想の研究」等の著あり。(神奈川縣逗子町水道路四三一)

瀧川政次郎

明治三十年五月廿六日大阪市に生る。大正十一年東大法學部獨法科卒業、同年中央大學、法政大學、日本大學講師受託、大正十二年司法官試補拜命、大正十四年任九州帝國大學助教授、昭和二年任同大學教授、同年罷、昭和三年再中央大學、法政大學、慶應義塾大學、東京商科大學講師受託、昭和五年任中央大學教授。專攻科目は日本法制史。著書「日本法制史講義案」「法制史上より見たる日本農民の生活」「法制史料古文書類纂」「日本法制史」「日本社會史」「日本奴隸經濟史」。(東京市小石川區宮下町一七)

瀧川幸辰(ユキトキ)

明治二十四年二月岡山市に生る。京都帝大法科卒業(大正四年)。卒業後、留學生として、ドイツ、フランクフルト大學に二年在學。刑法を專攻。「刑法講義」「刑法總論」「刑法各論」(法學全集)。京都帝大教授。(京都市外山科町日ノ岡二八)

田中九一

明治二十九年九月一日愛知縣に生る。大正十年東京帝國大學法學部を卒業す。爾來東亞經濟調査局に在り。著書「サヴエート聯邦の社會政策」(經濟學全集第十八卷)、譯書ボルハルト「マルクス經濟學大綱」ゾンバルト「奢侈と資本主義」トロツキー「ロシアは何處へ行く?」エンゲルス「家族・私有財產及び國家の起原」(マル・エン全集第十二卷)。(東京市外中野町打越二〇七八)

田中耕太郎 法學博士

明治二十三年十月二十五日鹿兒島市に生る。(佐賀縣出身)第一高等學校を經て、大正四年東京帝國大學法科大學を卒業す。大正四年內務省地方局に勤務し、大正六年東京帝大法學部助敎授に任ぜらる。大正八年より同十一年に至る三ヶ年英、佛、伊、獨の諸國留學、大正十二年東京帝國大學法學部敎授に任ぜられ、商法講座を擔任して現在に至る。著書、「合名會社々員責任論」「商法總論槪要」「會社法槪論」「法と宗敎と社會生活」「商法硏究」(第一卷)。(東京市外長崎町荒井一八八六)

田邊元　文學博士

明治十八年二月三日、東京市に生る。明治卅七年一高、四十一年東京帝大文科卒業、大正二年より大正八年まで東北帝國大學講師、大正八年京都帝國大學助敎授、昭和二年同敎授、今日に至る。伯林、フライブルク兩大學に留學、哲學を專攻し「最近の自然科學」「科學槪論」「カントの目的論」「數理哲學硏究」の著書あり。(京都市吉田中大路町一七)

谷川徹三

千八百九十五年五月愛知縣常滑町に生る。一高を經て京都帝大哲學科卒業。「感傷と反省」、「生活・哲學・藝術」等の著書あり、ほかに譯書數種。最近、文學に關する時論が三四ある。現、法政大學文學部敎授。(東京市外阿佐ヶ谷小山六〇)

谷口吉彥

明治二十四年三月廿四日和歌山縣東牟婁郡下太田村に生る。大正二年三月和歌山縣師範學校本科第一部卒業、大正七年三月まで五ヶ年間、鄕里に於て小學校敎師を勤め、此間に文部省檢定試驗に合格し、最後の一ヶ年を小學校長として奉職す。大正八年三月東京高等師範學校硏究科(一ヶ年)卒業。大正十一年三月京都帝國大學經濟部卒業。大正十年より大正十四年三月まで和歌山高等商業學校敎授大正十四年より京都帝國大學助敎授、十五年三月より昭和三年七月まで(二年三ヶ月、三ヶ月は私費延期)文部省在外硏究員として英、獨、佛、米に留學す。專攻科目―商業經濟學。商業に關する論文を隨時「經濟論叢」に發表しつゝあり。京都帝國大學助敎授。(京都市上京區河原町通廣小路上ル梶井町)

淡德三郎

明治三十四年八月十五日大阪市に生る。今宮中學校、第三高等學校を經て、京都帝國大學文學部哲學科に入る。大正十四年三月卒業、同大學院に入り社會學を專攻す。大正十五年一月「日本學生社會科學聯合會」檢擧事件並に昭和三年三・一五事件に連座す。(東京市外小田原急行代々木八幡驛前)

千葉龜雄

明治十一年九月廿四日山形縣酒田町に生る。本籍宮城縣。仙臺市立第一中學、早稻田大學歷史科を半途退學、國民英學會卒業、日本、國民、時事讀賣等の社會部長より讀賣新聞編輯局長たりしが、目下東京日日編輯顧問及び立敎大學講師、文部省臨時國語調査會委員たり。外國文學婦人問題、新聞等に關する著書及び多くの評論あり。(東京府下荏原郡大井町字庚申塚四、八四二)

土田茂(ツトム)　(杏村)

明治二十四年一月新潟縣佐渡郡新穗村に生る。東京高等師範學校博物學部を卒へ、京都帝國大學文科哲學科卒業、京都帝國大學

大學院に學ぶ。哲學、その他の文化諸科學の理論的歷史的研究に從ふ。「文化主義原論」「日本支那現代思想研究」「文學論」「現代哲學概論」「戀愛論」「生產經濟學より信用經濟學へ」「マルキシズム批判」「國文學の哲學的研究」（既刊三卷）等の著あり。（京都市上京區新町頭）

土屋喬雄

明治廿九年十二月廿一日東京市牛込區に生る。宮城縣立第一中學校（大正四年）、第二高等學校（大正七年）、東京帝國大學經濟學部（大正十年）卒業。大正十年東京帝國大學助手、大正十二年助教授（經濟學部）に任命せらる。昭和二年春より二ケ年歐米諸國に留學。專攻、日本經濟史。著書「封建社會崩壞過程の研究」「日本財政史」（「經濟學全集」改造社版）。東京帝國大學助教授。（東京市外池袋九五一）

恒藤恭

明治二十一年十二月島根縣松江市に生る。松江中學校、第一高等學校を經て、京都帝國大學法科に入り、大正五年卒業。大正八年九月より同志社大學教授たりしも、十一年京都帝國大學助教授となり、十三年歐州に留學、昭和元年歸朝。四年教授となり、法理學講座を擔任す。著書「批判的法律哲學の研究」「社會と意志」「ジムメルの經濟哲學」「法律の生命」「價値と文化現象」等。（京都市下鴨森本町六）

暉峻義等 醫學博士

明治二十三年九月兵庫縣印南郡伊保村に生る。東京帝國大學醫學部卒業。東大生理學教室にて永井、橋田兩教授の許に生理學專攻。獨、英、佛に留學。著書「產業疲勞」「社會衞生學」「產兒調節論」最近發表論文、「產業合理化と勞働科學」其他合理化に關するもの二三。倉敷勞働科學研究所長。國際產業醫學常設委員會委員。國際職業病並產業災害委員會委員。（倉敷市字濱四一一）

土居光知

明治十九年八月二十九日高知縣長岡郡十市村に生る。東京帝國大學文科卒業。英文學專攻東北帝國大學教授。著書「文學序說」あり。（仙臺市北一番丁二八）

友岡久雄

明治三十二年十一月十四日福岡市博多一小路町に生る。大正六年中津中學卒業、同年第五高等學校入學大正九年卒業、同年東京帝國大學法學部政治科入學、大正十二年卒業同年東大經濟學部大學院入學大正十四年修了。專攻科目經濟學（貨幣論）法政大學經濟學部教授。（東京市外中野町打越二〇二四）

永井亨 經濟學博士

明治十一年十二月十四日東京市に生る。社會政策を專攻し、農商務書記官、鐵道省經理局長等の閱歷あり。退職後協調會常務理事就任、大正十五年辭任。著書、「社會政策綱領」「新產業政策論」「婦人問題研究」「社會思想父典」「勞働組合法論」「日本政黨論」「日本國體論」「日本民族論」「日本思想論」「社會讀本」「社會の話」外五篇。著述並に教育事業に從事す。（東京市小石川區原町一二六）

中川善之助

明治三十年十一月十三日、東京市神田區美土代町三番地に生る。金澤一中、四高、東大獨法（大正十年）大學院にて穗積博士の下に民法研究、日本大學に講師たること二

年、東北大學に法文學部の開設せらるゝや任ぜられて助教授となり、大正十二年八月留學に出で、獨、英、佛に二ケ年を學びて十四年歸朝。民法、殊に身分私法所謂社會法律學なるものの精確なる吟味、基礎付けの必要を高調する、著書「相續法」(大正十二年)、「古代家族」(大正十五年)「略說身分法學」(昭和五年)。東北帝國大學教授法文學部勤務民法學第三講座擔任。(仙臺市光禪寺通六四)

中澤辨次郎

明治二十四年七月七日埼玉縣兒玉郡丹庄村に生る。二十二才迄水呑百姓。上京後藏前高工附設專修學校、英數學院、正則豫備校國民英學會等を卒へ餘は獨學。大正五年讀賣新聞に入社三ケ年在職、後雜誌『食糧評論』の經營、猶友會等の設立に携る。大正十二年以來政治研究會中央委員、中部農民組合長(現任)勞農民衆黨及び中部民衆黨の各委員長、全日本農民組合會長(現任)を經て現在に到る。目下「日本農村問題研究所」の設立及び「農村協同組合」の準備中、著書「小作制度論」「農民生活と小作問題」「最近の小作問題」「岐阜縣に於ける小作問題の研究」「資本主義と農村問題」「小作問題の新展開」「農村問題講話」等。(東京市外荏原町戸越一、一九四)

中野重治

明治卅五年一月福井縣坂井郡高椋村一本田に生る。東京帝國大學文科卒業。日本プロレタリア作家同盟所屬。著書「藝術に關する走り書的覺書」「鐵の話」(創作集)。その他創作評論あり。(東京市外瀧野川町田端四四五)

中野登美雄

明治二十四年七月十三日札幌市に生る。早稻田大學教授。大正五年早大政治科卒業。同七年留學生として北米、佛國及獨逸に留學し歸朝後同大學教授たり。專攻科目は國法學にして Ordinance Power of the Japanese Emperor, Baltimore 1923「ケルゼン國家原理提要」、及び「國法及國法史の研究」等の著書あり。(東京府下西巣鴨町六六〇)

那須皓　農學博士

明治二十一年六月九日東京市本郷區に生る。東京帝國大學教授。明治四十四年東京帝國大學院入學、大正四年南洋諸島巡遊、大正七年東京帝國大學助教授、同年農務中央會の囑を受けて北米に渡り大正八年末歸朝、大正九年歐洲諸國に留學し同年ローマに開かれたる萬國農事協會總會に日本委員として參列、大正十年第三回國際勞働會議に勞働代表顧問として參列、大正十一年末歸朝、大正十二年東京帝國大學教授、大正十三年學位を受く。昭和四年招かれて米國シカゴ大學に於ける人口問題會議に列席講演をなし歐洲諸國を經て歸朝す。專攻科目は農政學。「農村問題と社會理想」「經濟政策學原理」「公正なる小作料」「中小農保護政策」(絕版)「國民高等學校と農民文明」(譯、絕版)。「人口食糧問題」「農村社會問題」「日本農業論」等の著あり。(東京市外世田ケ谷上町四一五)

成瀨清　(無極)　文學博士

明治十七年正月、東京に生る。東大獨文科出身。明治四十一年三高教授兼京大講師、後ち京大專任助教授、大正十年米獨へ滿二年間留學。獨逸文學を專攻し現代文學を中心としての溯源的研究。「東山の端より」

「東山夜話」、「四十歳」、「偶然問答」等の隨筆小品集及び「笑の研究」、「浪漫主義」等の論文、イプセン、ハウプトマン、ブレヒト、ショルツ等のドラマ飜譯。最近論文「疾風怒濤時代と現代獨逸文學」。京大助教授。（京都市室町丸太町下ル）

新居（ニヰ）格（イタル）

明治廿一年三月德島縣撫養町に生る。大正四年東大政治科卒業、曾つて讀賣、大毎、東朝の記者たりしことあり。目下著述に從事す。小說「月夜の喫煙」「近代心の解剖」「左傾思想」「風に流れる」「季節の登場者」「アナキズム藝術論」等。（東京市外高圓寺六六九）

二木保幾

明治二十五年六月二十九日長野縣南安曇郡明盛村に生る。大正三年早稻田大學政治經濟科を卒業し大正四年十月より大正七年一月まで東京朝日新聞に記者として勤む。大正八年十一月母校早大の留學生として米佛獨に留學し、大正十一年四月歸朝、直ちに同校の教職に就き今日に至る。專攻經濟學（東京本鄕區動坂町一二二）

西田幾多郎　文學博士

明治三年八月十日石川縣河北郡宇ノ氣村に生る。石川縣專門學校附屬初等中學より第四高等中學校に移り中途退學。明治廿七年東京文科大學哲學選科卒業の上、能登七尾中學、山口高等學校、第四高等學校、學習院等に教授たりしことあり。「善の研究」「思索と體驗」「自覺に於ける直觀と反省」「意識の問題」「現代に於ける理想主義の哲學」「藝術と道德」「働くものから見るものへ」「一般者の自覺的體系」等の著あり。前京大文學部教授。（京都市左京區田中飛鳥井町三二）

西雅雄

明治二十九年四月二十八日岡山縣勝田郡梶並町に生る。大正四年岡山縣高梁中學校卒業。大正五年七月まで朝鮮江原道廳に臨時雇を勤む。後鳥取步兵第四十聯隊に入營し除隊後小學校代用教員となる。後上京し牛込秀英舍の文選工などす。大正十年一月以來山川均氏の「社會主義研究」の編輯に當り、大正十二年六月の共產黨事件に連座す。後雜誌「マルクス主義」の編輯人となる。「マルクスの生涯と學說」「社會主義通史」「英國勞働黨發達史」の譯書あり。昭和三年三月の共產黨事件の爲未決中。（東京市外世田ケ谷代田一、一一五〇）

西脇順三郎

明治二十七年一月廿日新潟縣小千谷町に生る。慶應義塾大學オックスフォド大學等に學ぶ。英語學及英文學專攻。「超現實主義詩論」「Spectrum」の論著あり。慶大文學部英文科教員。（東京市麻布區富士見町四五）

野上俊夫　文學博士

明治十五年五月新潟縣佐渡郡相川町に生る。明治三十九年東京帝大文科心理學科卒業、大正二年八月より大正五年八月まで歐米に留學し獨逸ライプチッヒ大學に於てヴントの下に學び戰亂に遭ひて英、佛、瑞、伊各國を經て米國クラーク大學總長スタンレー・ホール博士の教室に學ぶ「歐米教育の印象」「青年心理講話」其他多くの著作と評論あり。京都帝國大學文學部教授（京都市下鴨膳部町）

野坂鐵

明治二十九年三月三十日生、東京帝大、[illegible]

生地、山口縣萩町。大正六年慶應義塾理財科を卒業直ちに友愛會に入る。その後二ケ年半、英、佛、獨、瑞、露に遊ぶ。歸朝後間もなく大正十二年六月の共産黨事件に關係し下獄せり。現在は產業勞働調査所主任にして雜誌『インタナショナル』を主宰し、同所よりの出版物多し。再び昭和三年三月の共産黨事件に關れ、未決にあり。(東京府下荏原町小山二六一)

野坂龍子

明治二十九年九月二十八日神戸市に生る。東京女子高等師範を卒業す。野坂鐵氏夫人にて、夫君と共に產業勞働調査所を起し、無產者運動に努力しつゝあり。三・一五事件に連座す。(東京府下荏原町小山二六一)

昇直隆（曙夢）

明治十一年七月十七日生。鹿兒島縣大島の人、陸軍教授及著述に從事す。明治三十六年正教神學校卒業、同時に同校講師となる。大正元年陸軍中央幼年學校講師に任命、同四年早稻田大學講師に聘せられ、同五年陸軍教授拜命陸軍士官學校附に補せらる。同六年外國語高等試驗委員拜命、同八年內務省囑託に任命、ロシヤに遊ぶこと前後四回に及ぶ。宗教、哲學及文學を專攻す。著述「露國近代文藝思想史」「露國現代の思潮及文學」「露國革命と社會運動」「トルストイ十二講」「ロシヤ藝術の勝利」「革命後のロシヤ文學」「露國民衆文學全書」(五卷)、「ロシヤ・パンフレット」(八卷)飜譯には「現代露國文豪傑作集」(六卷)「決闘」「虐げられし人々」「復活」「闇の力」「生ける屍」「フオマ・ゴルデーエフ」「熊の結婚」「リユボーウイ・ヤロワーヤ」「空氣饅頭」「トルストイとドストエーフスキイ」「プロレタリヤ文學」「マルクス主義藝術論」「藝術社會學」等あり。(神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎)

野村兼太郎

明治廿九年三月廿日東京市に生る。東京府立第三中學校を經て慶應義塾に入學、大正七年卒業、爾後同校に奉職現に教授たり。英國劍橋大學に留學す、經濟史を專攻し「英國資本主義成立史」「世界商業史」(古代篇)「近世商業史」「歐洲印象記」の著書あり。(神奈川縣藤澤町鵠沼)

野呂榮太郎

明治三十三年四月三十日北海道夕張郡長沼村に生る。大正九年北海中學を卒業し、慶應義塾大學經濟學部に入り、大正十五年卒業す。同年四月「日本學生社會科學聯合會」治安維持法違犯事件に連座す。著書「日本資本主義發達史」。(神奈川縣藤澤町鵠沼海岸、森新五郎方)

長谷川萬次郎（如是閑）

明治八年十一月東京市深川區に生る。明治廿一年東京法學院(中央大學)を卒業、日本新聞、日本及日本人記者たりし後大阪朝日新聞に入り幹部たり、大正七年退社後大山郁夫櫛田民藏氏等と『我等』を創刊し昭和五年同誌を「批判」と改題し引續き主幹として今日に至る。「額の男」「倫敦」「現代國家批判」「眞實は斯く佯る」「現代社會批判」「犬猫人間」「歷史を捻ぢる」等の著書の外多くの評論あり。(東京府下東中野九三七)

波多野鼎

明治二十九年三月三十日愛知縣東春日井郡篠岡村字大草に生る。愛知縣立第一中學校、第八高等學校を經て東京帝國大學法學部に入學、大正九年卒業。直ちに滿鐵東亞經濟

調査局に入り大正十一年まで在勤、後同志社大學に奉職し大正十四年まで同校教授たりしが、爾後九州帝國大學法文學部に轉ず。專攻科目、經濟學特に經濟學史、社會問題。著書「社會思想史」(大正十四年絶版)「社會思想史概說」(昭和二年)「新カント派社會主義」(昭和二年)、「價値學說史」第一卷「正統學派の價値學說」(昭和三年)、同第二卷「墺國學派の價値學說」(昭和四年)、同第三卷「折衷學派の價値學說」(昭和五年)、その他飜譯、論文十數種。(福岡市鳥飼町三丁目三三三番地)

波多野精一　文學博士

一八七七年七月長野縣松本市に生る。一八九三年第一高等學校に入學。一八九九年、東京帝國大學文學科哲學科卒業の後一九〇四年より六年迄獨逸國に留學す。一九〇〇年より一七年迄早稻田大學講師及教授たりしが、一九一七年以來、京都帝國大學教授となり現在に至る。哲學を專攻し、「西洋哲學史要」「基督敎の起源」「スピノーザ研究」「宗教哲學の本質及根本問題」「西洋宗教思想史」等の著あり。(京都市左京區田中西浦町八〇)

服部英太郎

明治三十二年四月和歌山市に生る。和歌山中學、第三高等學校を經て、大正十二年東京帝國大學法學部政治學科卒業。翌大正十三年四月東北帝國大學法學部助教授に任ぜられ今日に至る。社會政策及社會運動史講座擔任。「社會運動史論考」(近刊)並に改造社版「マルクス・エンゲルス全集」飜譯擔任。目下伯林留學中。

服部之總

明治卅四年九月廿四日島根縣那賀郡木田村に生る。濱田中學校、三高、東大卒業。東洋大學教授。中央公論社員たりしことあり東大での專攻は社會學。自分の立場はマルキシズム。著書「明治維新史・唯物史觀的研究」。飜譯にクノウ「婚姻及び家族の原史について」其他最近發表論文「觀念論の粉飾形態」其他。內外社員。(東京市芝區芝公園一四號ノ五)

馬場恒吾

明治八年七月十八日、岡山縣邑久郡長濱村に生る。同志社早稻田專門學校等に在學した後ジャパンタイムスに勤むる事十年、紐育で雜誌記者たる事四年、國民新聞記者たる事十年、大正九年巴里講和會議に新聞記者として行き、歸來普選實現の爲めに實際運動に參加す。普選法制定された後、社會民衆黨の結成に盡力、今尙同黨の顧問たり。政治評論人物評論に多く筆を執る。「改造の叫び」「勞働問題と普通選擧」「キップリング短篇小說」「現代人物論」等の著あり。(東京四谷區南寺町一〇)

林要

明治二十七年五月山口縣に生る。德山中學校、第一高等學校を經て、大正九年東京帝大獨法科を卒業す。卒業後、大原社會問題研究所に入り、大正十二年辭して同志社大學に移り、經濟學、社會問題を專攻し、現に同志社大學教授たり。ヒルファディング「金融資本論」、ゾンバルト「社會主義及び社會運動」、クラーク「分配論」等の譯著あり。(京都市下鴨北園町一一一)

林癸未夫　經濟學博士

明治十六年九月十七日、岡山縣高梁町に生る。早稻田大學教授、圖書館長、日本圖書

館協會理事長たり。專攻科目、社會政策、工業經濟。「產業民主主義運動」「國際勞働運動史」「社會と宗教と藝術」「社會政策新原理」「社會問題各論」の著書あり。（東京市外代々幡町幡ヶ谷二一〇）

林　久　男（鷗　南）

長野縣埴科郡坂城町に生る。上田中學、長野中學、第一高等學校、東京帝大獨逸文科卒業。第七高等學校、第二高等學校、第三高等學校教授、大正十一年より十三年まで、獨逸、佛蘭西、英吉利、亞米利加に在外研究員として留學。專攻は獨逸文學、ゲーテ研究、劇文學。戲曲集「狼火」、「藝術より生活へ」、「藝術國巡禮」、「ゲーテ研究」「ファウストの研究」（獨逸文學及理想）、その他演劇に關する論文數多し。第三高等學校教授。（京都市下鴨下川原町四六）

林　房　雄

明治三十六年五月大分市に生る。本名後藤壽夫。第五高等學校を經て東京帝國大學法學部に學ぶ。大正十五年一月『日本學生社會科學聯合會』檢擧事件に連座し退學す。本年七月、學生事件の刑期二年決定、目下受刑中。主としてマルクス主義の見地より文化的諸問題を研究し、雜誌『戰旗』同人として、無產文藝評論並に創作多く、創作集「牢獄の五月祭」「鎖」「鐵窓の花」「都會双曲線」「新選林房雄集」「繪のない繪本」飜譯「經濟科學概論」「インタナショナルの歷史」評論「都會の論理」等あり。（東京市外高圓寺四〇）

土　方　成　美　經濟學博士

明治二十三年七月十日生。出生地、兵庫縣姬路市。大正四年、東京帝國大學法科大學經濟科卒業。米、佛、英に留學し財政學を專攻す。東京帝國大學教授。著書「財政學の基礎概念」「日本經濟研究（全三卷）」「財政學講義」「我國民經濟と財政」「マルクス價値論の排擊」。現在獨乙に在りて產業合理化の研究中なり。（東京市麴町區一番町四一七）

平　林　初　之　輔

明治二十五年十一月八日、出生地、京都府竹野郡深田村字黑部。大正六年早大卒業。やまと新聞、國際通信記者、大正十五年より二年間雜誌『太陽』主幹たりしことあり。現在早稻田大學講師。著書「無產階級の文化」「近世社會思想講話」、「日本自由主義發達史」「文學理論の諸問題」飜譯「自然界に於ける人間の位置」「民約論」「エミイル」。（東京市小石川區水道端一ノ一二）

平　野　義　太　郎

明治三十年三月五日東京市に生る。東京帝國大學法學部卒業、同校の助教授となり教鞭をとる。民法及び勞働法を專攻し「民法におけるローマ思想とゲルマン思想」「法律における階級鬪爭」の著書あり。今春佛蘭西留學より歸朝。七月助教授を辭す。（東京市麻布區西町二三）

廣　濱　嘉　雄

明治二十四年一月二十日三重縣多賀郡神戸村大字上神戸に生る。明治四十四年三月京都府師範學校を卒業し、同校訓導並に教諭の職を奉じ、大正八年九月京都帝國大學法學部に入學し、十一年三月卒業、同大學助手に任ぜられ、後十三年一月より東北大學法學部教授たり。論理學特に私法原理を專攻し目下外遊中。（仙臺市東禪寺通り）

福本和夫

明治廿七年鳥取縣東伯郡下北條村字田井に生る。鳥取縣立倉吉中學、第一高等學校を經て、大正十年東京帝國大學英法政治科卒業後、島根縣廳に奉職し、松江高等學校助教授に轉じ、大正十一年文部省留學生として歐洲に派遣さる。法學研究の名目なりしも、專ら唯物史、經濟學の研究に沒頭した。大正十三年歸朝、山口高等商業に教授として奉職中、滯歐中の研究を纏め、逐次その發表に從つてマルクス主義の主張者たる事を明らかにし教職を去る。著書に「唯物史觀と中間派史觀」「社會の構成＝並に變革の過程」「經濟學批判の方法論」「無產階級の方向轉換」「理論鬪爭」あり。最近之等を「唯物史觀の爲に」「經濟學批判の爲に」の二著に纏む。個人雜誌『マルキシズムの旗の下に』を六號まで發行せり。三・一五共產黨事件に連座す。

藤枝丈夫（本名本鄕孝）

一九〇二年七月廿九日大阪市北區上福島に生る。學歷なく獨學。少年時代より、鐵道員・新聞配達・保險局員等の經驗あり、東京と滿洲との間を放浪す。一九二八年夏、勞農藝術家聯盟に加入、前衞藝術家同盟を經て現在は日本プロレタリア作家同盟員たると共にプロレタリア科學研究所員たり。マルクス主義に立脚する支那社會研究に從事す。著書「支那問題講話」論文「中國共產黨の現勢」「中國赤衞軍の偉大なる發展」戰旗社編輯部員（東京市小石川區雜司ケ谷町一一五）

藤森成吉

明治二十五年八月二十八日長野縣諏訪郡上諏訪町に生る。諏訪中學、第一高等學校獨法科、東京帝大獨文科卒業、後一年間第六高等學校講師を勤む。著述、創作集「新しい地」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」「その頃の追憶」「東京へ」。長篇「若き日の惱み」「煩惱」「妹の結婚」「舊先生」感想集「藝術を生む心」「大地の匂ひ」「狼へ（わが勞働）」「惱み笑ふ」其他「相戀記」「新選藤森成吉集」「光と闇」等。目下伯林滯在中。（東京市小石川區雜司ケ谷一一五）

細迫兼光

明治二十九年十一月二十八日山口縣厚狹郡厚狹町に生る。山口中學、第三高等學校を經て、東京帝國大學英法科を大正十一年に卒業す。直ちに大阪に於て辯護士を開業、勞働運動に參加し、總同盟、官業勞働、農民組合等の顧問たり。大正十五年十月舊勞働農民黨書記長となる。同黨解散後新黨組織準備會、政治的自由獲得勞農同盟の書記長たり。昭和四年八月大山氏等と共に新勞農黨の樹立を提唱し、結黨と共にその書記長となる。本年八月同黨の解消を主張し脫黨す。（東京市外池上市ノ倉四三五）

穗積重遠　法學博士　男爵

明治十六年四月東京市に生る。東京高等師範學校附屬中學校及び第一高等學校を經て明治四十一年七月東京帝國大學法科大學獨法科卒業、大正元年十月より五年二月迄獨「ボン」及び「ベルリン」佛「パリ」英「ロンドン」、米「ケンブリッチ」留學、民法殊に親族法相續法及び法理學を專修す。「戰爭と契約」「法理學大綱」「親族法大意」「相續法大意」「離婚制度の研究」等の著の外、專門的見地よりせる多くの社會評論あり。東京帝國大學法學部教授。（東京市牛込區拂方町九）

堀　經夫　經濟學博士

明治二十九年四月二十日北海道函館市に生る、原籍兵庫縣。廣島高師附屬中學校、第三高等學校を經て、大正九年京都帝國大學經濟學部を卒業し、同十一年まで同大學大學院に學ぶ。同年東北帝國大學助教授となり、翌年英國に留學し、獨佛米を經て大正十四年歸朝、東北帝國大學教授となり現在に及ぶ。專攻經濟學史。「リカアドウ經濟原論（譯）」「ボーレ資本主義と社會主義（譯）」「リカアド派社會主義」「經濟と自由」「リカアドウの價値論及び其の批判史」「ボナア、マルサスと彼の業績（吉田秀夫と共譯）」の著譯あり。（仙臺市北三番丁五一）

本位田（ホンイデン）祥男（ヨシヲ）

岡山縣英田郡大原町下町に生る。東京帝國大學卒業後、大正十二年より二ケ年歐米留學。農商務省に數年勤務の後、東京帝大經濟學部に轉ず。經濟史を專攻し、著書「歐洲經濟史」「英國經濟史要」「消費組合巡禮」「農村と協同組合」「協同組合論」「人間復興」「ロバアト・オウエン自叙傳」（五島茂共譯）「消費組合運動」（近刊）。（東京市外池上町久ケ原五六五）

本庄榮治郎　經濟學博士

明治廿一年二月廿八日京都に生る。京都大學を卒業す、大正十年歐米留學十一年十一月歸朝、京都大學經濟學部教授に任ぜらる。「日本社會史」「經濟史研究」「經濟史考」「近世農村問題史論」「近世封建社會の研究」「日本社會經濟史」「西陣研究」等の著あり。京都帝國大學經濟學部教授。（京都市吉田、中大路町二〇）

米田　實　法學博士

明治十一年十二月福岡縣久留米に生る。明治三十四年米國オレゴン州立大學卒業。加州々立大學院、アイオロ州立大學修學、マスター・オブ・アーツ及びバチユラ・オブ・ローズ等の學位を有す。倫敦クロチウスソサイテーの一員たり。大正十一年東京帝大より法學博士を受く。職業、朝日新聞社相談役、東京商科大學外交史講座擔任。著述「最近世界の外交」等。（東京市外高田雜司ケ谷九一五）

舞出長五郎

明治廿四年九月八日神奈川縣中郡伊勢原町に生る。郷里の中學、第一高等學校を經て大正六年東大政治學科を卒業、大學院にて研究の後、大正八年同大學經濟學部助教授となり、同九年より十一年迄經濟學研究の爲、英、獨、佛に留學、歸朝後十二年教授に昇進、經濟學説史の講座を擔當し今日に至る。經濟學上多くの論文を發表す。（東京市外高田町大原一、五二六）

牧野英一　法學博士

明治十一年三月二十日飛驒高山町に生る。第一高等學校に入り明治三十六年東京帝大法科卒業後同校の教職に就き、大正二年教授となる。明治四十三年より大正二年迄獨、伊、佛、英に留學、法律學殊に刑法を專攻し日本の刑法學に新局面を開く。法律學の教科書として「日本刑法」「刑事訴訟法」の外論文集として法律學叢書第一編乃至第二十五編、其他多くの評論あり。（東京市小石川區大塚坂下町一一〇）

牧野（マキノ）輝智（テルトシ）　經濟學博士

明治十五年熊本縣に生る。早稻田大學卒業。明治四十四年以來東京朝日新聞社に勤

む。「貨幣論及金融論專攻。「貨幣學の實證的研究」「金融論」「農業金融」。等の著あり。東京日日新聞編輯局主幹。(東京市外千駄ヶ谷五六二一)

三木清

明治三十年一月五日兵庫縣龍野町に生る。龍野中學校、第一高等學校を經て、京都帝國大學哲學科に入り、大正九年卒業。引續き同大學の大學院に學生となり、後二年にして外遊、ハイデルベルク、マールブルク、パリの各地に學ぶ。大正十五年歸朝。哲學一般の研究に從ひ、思想はなほ發展過程にあり。著書として「パスカルに於ける人間の研究」「唯物史觀と現代の意識」「史的觀念論の諸問題」「社會科學の豫備概念」あり。(東京市外中野町仲町六六〇)

美濃部達吉　法學博士

明治六年五月七日兵庫縣に生る。卅年東大法科卒業、卅二年比較法制史研究の爲め獨佛英に留學、歸朝後東大教授たり。憲法論の上より見たる多くの政治論社會評論あり。「日本憲法」「行政法撮要」「憲法撮要」「逐條憲法精義」「行政法判例」等の著述多し。東京帝國大學法學部教授兼、東京商科大學教授。(東京市小石川區竹早町一二四)

三宅雄二郎　(雪嶺)　文學博士

雪嶺と號す、萬延元年五月、石川縣金澤に生る。帝大文科哲學科卒業、曾て日本新聞記者たり、後『日本及日本人』主筆として多年健筆を揮ひしが震災後該誌を去り『我觀』の主筆となりて現在に至る。「宇宙」「世の中」等の著述の外多くの評論あり、論壇の最古參者の一人也。(東京市外代々木初臺五五四)

宮島新三郎

明治二十五年一月八日に東京市神田區和泉町に生る。但原籍地埼玉縣。私立東京中學を經て、大正四年早稻田大學文學部英文科を卒業。東京中學教師、文明協會編輯長、早稻田文學同人たりしことあり。大正十年、早稻田大學、同高等學院に奉職、大正十四年五月、早大文學部より英國に留學、昭和二年五月歸朝。英文學、特に英國文藝批評、英文學の社會學的研究。「近代文明の先驅者」、「藝術改造の序曲」「最近歐洲文藝思潮」「文藝批評史」「明治文學十二講」「大正文學十四講」「短篇小説新研究」「現代英國文藝印象記」等、その他飜譯「テス」等々。論文に「現代社會に於ける文藝の傾向」、「英米の思想戰」「英國プロレタリア文學」「文學に於ける藝術性と思想性」等。早大文學部助教授。(東京市外高井戸町松庵一四三)

三輪壽壯

明治二十七年十二月福岡縣糟屋郡席内村大字古賀に生る。中學修猷館、第一高等學校を經て大正九年東京帝大法學部卒業。辯護士を業とす。大正十五年勞働農民黨書記長同年日本勞農黨結成後同黨書記長たりしことあり、昭和五年七月全國大衆黨書記長に就任。飜譯カウツキー著「エルフルト綱領」(譯名「社會民主黨綱領解説」)の外評論等あり。(東京市外中野町中野一六一三)

室伏高信

明治廿二年神奈川縣湯ヶ原町に生る。錦城中學卒業後明治大學に入り半途退學直に記者生活に入り、時事新報(大正三年)東京朝日(大正五年)に政治記者たりしことあり。大正八年雜誌『批評』を創刊す、大正九年改造社特派員として歐米に遊ぶ。「社會

主義批判」「ギルド社會主義」「政友會罪惡史」「社會主義民主々義」及び「文明の沒落」「日本論」「土に還る」「共產主義批評」「アメリカ」「大衆時代の解剖」「日本はどうなる」「新英雄傳」「女性の創造」「結婚論」等の著作の外多くの評論を公にせり。（神奈川縣藤澤町鵠沼二、二一七）

森口繁治

明治二十三年三月二十五日神戸市に生る。大正四年京大法科卒業佛、英、獨に留學し大正十二年より京大教授たり。專攻は國法學にして「ルソー民約論」（市村博士と共著）「近世民主政治論」「立憲主義と議會政治」「比例代表法の研究」「婦人參政權論」「憲政の原理と其運用」の著あり。（京都市左京區田中里ノ内町二九）

森戸辰男

廣島縣に生る。東京帝國大學法科を卒業同校に教鞭を執り助教授となる。大正九年一月帝大經濟學部機關雜誌「經濟學研究」にクロポトキンの社會思想に關する研究を發表し、其筋の睨む所となり、遂に罪に問はる。大正十年二月末大原社會問題研究所より派遣されて英佛獨に赴き大正十二年歸朝す。多くの社會評論を公にし「社會主義思想史」「クロポトキンの片影」「青年學徒に訴ふ」「學生と政治」「思想と鬪爭」「大學の顚落」等の著其他譯書あり。大原社會問題研究所員。（兵庫縣蘆屋町字茶屋蘆屋）

八木澤善次

栃木縣那須郡佐久山町に生る。一高を經て東京帝國大學法學部政治科を大正九年卒業。同時に大原社會問題研究所に河上肇博士の紹介にて入る。大正十二年三月同所を辭し、同四月中央大學教授となり今日に及ぶ。農政學、經濟思想史論專攻。中央大學教授。（東京市外世田谷町下北澤八九〇）

矢代幸雄

明治二十三年十一月に横濱市に生る。第一高等學校東大文科卒業。第一回（一九二一—一九二五）歐米各國主としてイタリヤ、第二回（一九二七—一九二八）歐米各國に留學美術史、美術行政及教育、專攻。著書「太陽を慕ふ者」「西洋美術史講話古代篇」Sandros Botticelli（第一版、三卷、一九二五）第二版・一卷、一九二九）Medici Society, London. 受賞告知—その他二種。東京美術學校教授、帝國 美術院附屬美術研究所主任。（東京府大井町金子山六二一六）

矢内原（ヤナイハラ）忠雄

明治二十六年一月愛媛縣に生る。大正六年東京帝大政治學科卒業。英獨に留學、專攻植民政策。著書「植民及植民政策」「植民政策の新基調」「帝國主義下の臺灣」「人口問題」、最近論文「資本蓄積と植民地」東京帝大經濟學部教授。（東京市外大森八景坂上二、一九二）

柳宗悦

明治廿二年三月廿一日東京に生る。學習院、東京帝大哲學科卒業。ハーバード大學講師後英獨佛留學、昭和五年七月歸朝。宗教哲學、目下民藝問題專攻。著書「宗教と其眞理」「キリアム・ブレーク」「木喰五行上人研究」「朝鮮と其藝術」「信と美」「工藝の道」「工藝美論」等々あり。（京都市下鴨膳部町九二）

山川菊榮

明治二十三年十一月東京に生る。山川均氏

の夫人。東京麹町番町小學校、東京府立第二高等女學校を經て、女子英學塾を卒業す。均氏と共に『社會主義研究』の執筆經營に任じ、「戀愛の理想境」「婦人の勝利」「現代生活と婦人」「大戰の審判」（反譯）「女の立場から」「ベエベル婦人論」「女性の叛逆」「婦人問題と婦人運動」（飜譯）「社會主義と婦人運動」等の著あり。（神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎）

山川　均

明治十三年十二月二十日岡山縣都窪郡倉敷に生る。明治二十八年小學校卒業、三十八年—四十年藥種商店員、四十年日刊平民新聞に入社、四十三年郷里に近き僻村に藥種商を開業、大正四年鹿兒島に赴き牧羊業に從事、大正五年賣文社に入社、大正七年荒畑寒村と勞働者新聞『靑服』を出だし、勞働組合研究會を組織す、この間社會運動に關聯して刑を受くること數回、殆んど官權の壓迫下に其半生を投ず。大正八年病軀を押して月刊『社會主義研究』を大正十年『前衞』を創刊す。「デモクラシの煩悶」「歷史を創造する力」「井戸の底から見た日本」「資本主義のからくり」「無產階級の政治運動」「レーニンとトロツキー」「社會主義の社會觀」「勞農露國の研究」「敵陣を俯瞰して」「勞働組合組織論」「勞働組合の進化と職分」「無產階級の政治運動」「勞農ロシアの勞働」「無產政黨の研究」「無產者講話」「左翼の鬪爭」「社會主義ソヴエート共和國の現勢」「インタナショナルの歷史」「勞働組合と無產政黨」「勞働組合運動の新方向轉換」「私は斯う考へる」「無產者運動と婦人の問題」「事象を追うて」「社會主義の話」「勞働組合の話」等の著作と多數の評論を公にす。就中大正十一年雜誌『前衞』に發表せし「方向轉換」の一文は日本の左翼運動にとりての劃時代的文獻なり。大正十二年四月個入雜誌『社會主義研究』を『前衞』と合併して『赤旗』後『階級戰』となし、一寄稿家となる。大正十三年六月雜誌『マルクス主義』發刊さるゝに及び依然として指導論客なりしが、後この一派と對立を來し現在では雜誌『勞農』の支持者たり。（神奈川縣鎌倉町稻村ケ崎）

山口正太郎

明治廿七年三月大阪船場に生る。大正三年大阪高商を出で、同六年京都帝國大學を卒業し、同志社大學教授、京都帝大講師を經て、現に大阪商科大學教授なり。一九二四年より二七年まで、佛國ソルボンヌ大學に留學、經濟學史を專攻す。著書「純理經濟學の諸問題」「經濟學說史研究」「中世寺院法と經濟思想」「勞働法原理」「重農派經濟學の人々」譯書カール、メンガー「經濟學の基礎概念」。（兵庫縣芦屋大村）

山内得立　文學博士

明治二十三年六月十二日奈良縣高市郡天滿村奥田に生る。京都帝國大學卒業、獨逸ライプルヒ大學に留學し、歸朝後東京商科大學教授たり。哲學を專攻す。「認識の對象」の譯、「現象學叙說」の著あり。（東京市外代々木西原一〇〇一）

山室宗文

明治十三年十月二十一日熊本縣飽託郡芳野村に生る。明治四十年東京帝國大學法科大學政治科卒業、直ちに英・米に留學、三ケ年後歸朝す。三菱銀行紐育支店長、同行倫敦支店長を經て、大正十二年同行取締役に選任、同年歸朝して、同行大阪支店長となり昭和四年九月同行常務取締役に選任せられ現に其の職にあり。著書「[illegible]論」「英米銀

行事情」「英米財界近情」「我國の金融市場」「同續篇」。(東京府渋谷町向山一〇)

吉野作造　法學博士

宮城縣古川町に生る。東京帝國大學卒業後歐洲に留學し帝大教授として社會評論と政治論等を公にす。大正十三年大學を辭し、東京大阪朝日新聞社に入社す。後辭して現に東大講師たり。(本郷區駒込神明町三二七)

米田庄太郎　文學博士

明治六年二月奈良縣添上郡辰市村に生る。奈良英和學校を卒業したる後、米國ニューヨーク市ゼネラル・セオロジカル・セミナリー、米國紐育市コロムビア大學、佛國巴里市コレヅユ・ヅ・フランス其他二三の歐洲大學に於て社會學を修む。「輓近社會思想の研究」「新理想主義の歷史哲學」「現代人心理と現代文明」「經濟心理の研究」「現代文化人の心理」「リツケルトの歷史哲學」等大著を出し多數の社會評論と研究の結果とを公にす。京都帝國大學文學部教授たりしも目下は京大經濟學部及び法學部講師たり。(京都市上京區出雲路內河原町八の二)

蠟山政道

明治二十八年新潟縣に生る。大正九年東京帝大法科卒業。「無產政黨論」の編著あり。社會思想同人、東大法學部教授。(東京市外中野町桃園三、三四三)

我妻(ワガツマ)榮

明治三十年四月山形縣米澤市に生る。大正九年東大獨法出身。卒業後東大特選給費生―助教授―留學(米英獨佛)―教授。專攻は民法―私法の立場よりする資本主義社會の研究。著書「民法總則」、「物權法」。專攻課題につき二、三の斷片的論文あるも統一的のものは未完。東大教授、民法第三講座擔當。(東京府下石神井村田中一〇七一)

脇村義太郎

明治三十三年十二月和歌山縣田邊町に生る。第三高等學校を經て、東京帝國大學經濟學部を卒業。海運論研究のため大學院入學。同年より昭和三年迄東京帝大工學部聽講生となり、斯波工學博士、井口工學博士指導のもとに「船用機關學」「船舶工學」關係の諸學科を修む。後さらに伊木工學博士に就き「石油地質學」及び「石油採鑛學」を修む。大正十三年東京帝大經濟學部助手、十五年同助教授となり今日に及ぶ。專攻海運論及び燃料問題(特に石油)。ドイツ海運の復興に關する論文二三あり。(東京市本鄕區駒込富士前町四三)

渡邊鐵藏　法學博士

東京帝國大學法科卒業、引續き同校に教授たり。曾て社會問題としての都市問題に關して研究を發表し、都市改善の爲め都市研究會を起して宣傳と研究に力む。其他思想問題に關する評論多し。都市研究會理事、東京帝國大學教授より東京商業會議所書記長となる。(東京赤坂區青山南町一の二七)

和辻哲郎

明治二十二年三月一日兵庫縣神崎郡仁豐村に生る。明治四十五年東大哲學科卒業。著書「ニイチェ研究」「ゼーレン・キエルケゴオル」「偶像再興」「古寺巡禮」「日本古代文化」「日本精神史研究」「原始基督教の文化史的意義」、「原始佛教の實踐哲學」等あり。(京都市左京區若王子町二)

信用ある書店案内

改造案内

毎七分、縱一寸五分、一枠金五圓、指定料二割増

どんな本でも絶對安心して賣買の出來る店は

「神田神保町停留所前 **稲垣書店**（電話神田一三三九 振替東京四六六九〇）」

古本、種類不問、積極的高價買入
御雜誌次第即時參上、圓本歡迎

本の御用はすべて

本郷森川町 帝大正門前 **大橋書店へ**

電話小石川85 三七四六
振替東京三五八三六

◎新刊書籍 雜誌販賣
◎古本特別高價買入

御報直に參上

書架 御整理の際は是非當店を御利用あれ

種類不問 最高價買入!!

信用本位 **東書店**

神田區通神保町一
電話神田25 二九九三

御報直ニ參上

どんな本でも御照會は先づ「**大雲堂書店**」へ

神田、神保町、停留所際
電話神田(25)三六八四番

誠實本位

販賣は店内自信ある正札付、買入は御一報次第多少に不拘速時參上

古本の御用命は **成進堂書店へ**

神田區通神保町一
電話神田一三五六

和漢洋書類一般。特に新刊書は定評ある絶對高價買入、一報參上。古本の御註文は迅速に取計ひます。御不用本との交換特に歡迎致します。

古本 和漢、洋書誠實高價に御買受いたします

御不用の節は御通知次第遠近多少に不拘參上御評價申上ます（地方出張）

東京市本郷區森川町八十九番地 帝大正門前
南陽堂書店
電話小石川(85)一九四八

古本の御用は賣買共に弊店に御相談下さい

地方の方は書面で御問合せ下さるならば親切に返信申上げます

東京市小石川區白山上
古本屋 **窪川精治**

古本の花 七月一日發行詩歌書、俳書明治時代文學雜誌等の特種書類目錄實費五〇錢

新古書籍販賣 古本誠實買受

●賣買共に最も誠實なる弊店へ御用命を願ひます

東京神田通神保町
三光堂書店
電話神田(25)四四一〇番

古本買入 御報參上

●和漢洋書類●

前野書店

●誠實高價買入●

電話牛込二二四七番
振替東京五六八一四番
東京早稲田大學前

古本 買入、交換

―當店を信頼下さい―

東京早稲田（グラウンド上）
大觀堂書店
電話牛込三三五六番
振替東京五二三七一番

圓本全集販賣目錄
古書籍目錄
―送料共各拾錢―

本の御用は何なりとも仰せ付け下さい。極力御滿足を計ります。

東京神田神保町
森田屋書店
振替東京五八一九七番
電話神田一二一一番

内外新古書籍雜誌買入。販賣ε取次

市内。近郊、御一報次第參上。

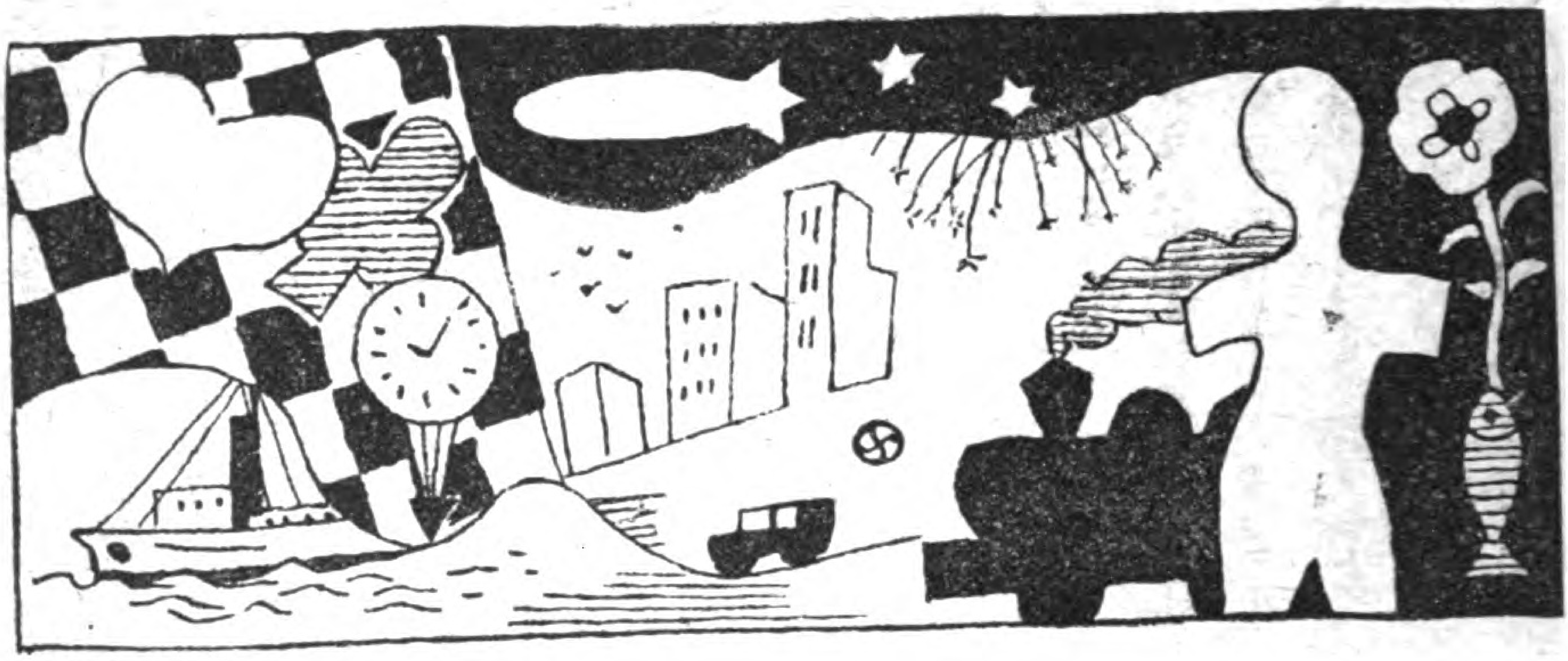
新古書籍

島崎書院

東京帝大赤門前
電話小石川二四〇二番

日、英、獨、佛其の他一般
社會科學文獻
古本誠實勉强買入

地方御註文は特に迅速勉强を旨とす



子供・子供・子供のモスクワ

中條百合子

さあ、ちよつと机のごた〳〵を片よせて
（――コップは窓枠の前へでものせといてください。）
モスクワ地圖をひろげよう。

市の西から東・南に向つて大うねりにのたくつてゐるのは、誰でも知つてゐるモスクワ河。その河が二股にわかれた北河岸に、不規則な三角形の城壁でとりまかれた一區廓は、全世界のブルジュアとプロレタリアートに一種の感銘をもつてその名を響かしてゐるところのクレムリ。

この頃は城壁内の青草が茂つて、ビザンチン式の古風な緣や茶色の尖塔はなか〳〵趣ある眺望だ。圓屋根に飜る赤旗は、まはりを古風な建物がとりかこんでゐるだけ却つて新鮮で、光る白い雲の下で夏の歡びにあふれてゐる。

クレムリの城壁が終つたところに細い通りがあつて――

ソラ！　こゝだ、勞働宮といふのは。

モスクヷ河岸をＡの電車にのつてぐるりと行くと左手に素晴らしく印象的な白い建物があつたらう。あれが勞働宮だ。組織と計劃の理性の明るさそのものでがつしり組んで來るやうた雄爽たる大建築の内部には、社會主義勞働の全組織機關が納つてるのだ。

ソヴェートの全勤勞者の祭日であるメーデーの前日からモスクヷ市は一切酒類を賣らせなかつた。

當日は全市電車がない。乘合自動車もない。赤旗と祝祭の飾りもの丶間に十數萬の勤勞者の跫音が漲いた。インターナショナルの高き奏樂と、空から祝ひをふりまきつ丶分列する飛行機のうなりがモスクヷ市をみたした。

夜一時近く赤い廣場は煌々たるイルミネーションと人出だ。

朝から夕方まで夥しい人間の足の下にあつた赤い廣場の土はもうぼく／＼になつてゐる。夜氣の中でもそのほとぼりと亢奮がさめ切つてゐないところどころで、臨時施設の飲料水道の噴水があふれて、小さい泥濘をこしらへてる。新手な群集は子供や年寄づれで、ぞろ／＼河岸へ河岸へとねつて行く。

國立百貨店の前、赤いプラカートの洪水だ。

──帝國主義とファッシズムの犧牲者に階級の兄弟プロレタリアートからの挨拶を！

又

──世界××。××!!

レーニン廟は修繕中だ。今は「レーニン留守」の感じを與へる。ひろい板圍ひの上は生産に從ふ勞働者と農民の鮮やかなパノラマ式畫でおほはれ、赤いイルミネーションが、こつち側の歩道を歩く群集からも讀める。

レーニズムノ旗ハ高ク

五ケ年計畫ヲ四年デ！

たなびく赤旗が强烈な夜の逆電光をうけるといかに感動的な効果をもたらすか。昔の首斬臺は一九三〇年のメーデーの夜さういふ忘られぬ赤旗の美しさと勞働者の力づよい群像で飾られてる。ラヂオ擴聲機の大ラッパは廣場ぢゆうへ活潑な行進曲を彈き出し、全景は赤い！　赤い！

黑い壁となつて河岸まで押し出した群集はカーメンヌイ・モストのたもとで一時ホッと息をいれた。河風は涼しい。遠くで夜空を燃してゐる光の家、勞働宮のイルミネーションが夜の河

面へとけ込んでゐる。クレムリの長い外壁は灯のけない暗闇だから、遠いそこだけ何とも云へず輝やかしい。

五色のイルミネーションは對岸のモスクヴ市發電所にもあつて、三百六十四日はむつつり暗いモスクヴ河の水を色とりどりにチラつかせてゐる。

モスクヴの群集はイルミネーションに對しては素朴だ。群集の中から滿足した笑ひごゑがし、或者はそのまんま橋の欄干にもたれた。或ものは更に暗いクレムリの外壁に沿つて勞働宮の方へ。

ソヴキノが照明燈を燃して勞働宮とそこへ向ふ群集を撮影してる。橋の下では二艘ボートが若い女をのせ、イルミネーションのとけ込んでゐる邊だけ小さく漕いでゐる。

一九二八年のＣＣＣＰを見た人は、今日もうＣＣＣＰは知らないと云ふしかない。最近の二年間はすべてを變へた。ソヴェートの生產興振の爲の五ケ年計劃は一一〇パーセントの全生產擴張プランとともに生活全線を社會主義再建設に向つて勇敢にねぢ向けてしまつたのだ。——

が、そのことは又別に話すとして、地圖にかへらう。我々はモスクヴ市の環狀ブルワールを見つけたいんだ。

一本はこれだ。クレムリを中心に一寸がたついたコムパスで大きく描いた圓みたいな環狀線。これは外の並木通で、絞りをずつと縮めてゆくともう一本やつぱりクレムリを遠巻きにして圓く——さう！　これが內の並木通だ。

並木通新聞といふ言葉がある。

先年、モスクヴ駐在の不幸な一日本海軍武官が神經の故障から何か個人的問題を起した。モスクヴの或新聞が社會面にそれを書いた。海軍武官はやがて日本の新聞もそれに倣ふであらうこと、其によつて失はれるであらう自分の名譽といふ強迫觀念によつて、古典的なサムラヒの手法をもつて生命を絕つた。當局者の一人がその時、事件に對するヨーロッパ人らしい意外の感じを外交的表現によつて云つた。——私共はあんな並木通新聞なんぞのぞいたこともないので——

並木通を歩くと云ふことがある。これはソヴェートで「私の知り合ひ」といふ言葉と同樣二重の意味をもつてゐる。

ホテルの臺所だ。正面に白樺薪で沸かすニッケルの大湯沸し

が立つてる。卓子がある。まだ洗はれない皿がそこに山と積んである。四邊は小ざつぱりしてゐるがそれ等の皿の上をのぼつたり下りたりして蠅がうんと這つてゐた。蠅は、電燈の下で皿が蠢くやうに黒くしづかに這ひまはつてゐる。

さういふ卓子の片隅で、日本女が砂糖のかたまりを胡桃割でわつてゐた。砂糖はパン、肉、茶、石鹸、石油などゝ一緒に人別手帳によつて一ケ月に一キロ半買ふことが出來る。けれども、かたまりが大きくてそのまゝ茶のコップには入れられない。胡桃割は割るべき胡桃とともに今モスクヴぢゆうの金物屋から姿を消してゐるから、ホテルの臺所で、ホテルにもたつた一つのその道具をかりて、日本にはない砂糖わりといふ仕事にとりかゝるのだ。

(大體ソヴェートのホテル住人ぐらゐ、臺所と、率直な家庭的關係を保つてゐるものはあるまい。(英語の通譯、ドイツ語の通譯が玄關を飛び交ふサヴォイやグランド・ホテルは例外だ。そこはソヴェートのたゞ狹い客間だ。)一九二八年代、どこのホテルの廊下ででも給仕男が大きな盆に茶や食物やをのつけ、汗だくで運んで行く形恰を見ることが出來た。背景地小劇場が巧な模倣でゴーゴリの檢察官を上演した。あの劇中でも金のないフレスタコフの宿部屋へ靴の裏みたいな焼肉をそれでも給仕が運んで來たぢやあないか。あの通りだつた。一杯十哥の茶でも、呼鈴を鳴らされると、給仕男は手にふりまはすナフキンとともにエレヴェーターのない四階までのぼつて來て、又降りて、盆にのつけて室まで屆けなければならなかつた。

五ケ年計劃による社會主義建設に入るとともに、モスクヴの人民營養勞働組合員たちは、勞力の合理化を實行した。一般のホテルでは室へ飲食物を運ぶことを全廢した。一九三〇年の給仕男はもう廊下で汗の匂ひをかゞれる存在ではない。食堂の周圍にだけ出沒する。そして、八十近くある室と食堂、臺所との間は別な者が歩くやうになつたのだ。——

朝八時と十時の間。夜は九時から十一時前後、ホテルの黒猫は廊下のエナメル痰壺のわきに香箱をつくつて種々雜多な色の靴とヤカンの行進を眺めてゐた。各々の足音が違ふやうに大小形恰の違ふヤカンを下げたホテルの住人が、汽車から驛の湯沸所へ通ふやうにホテルの廊下を往來するのだ。日本女は空色エナメルの丸いヤカンをもつてゐる。

廊下を曲つたところにいつも扉をあけつ放した一室がある。そこはホテルに働くもの丶爲の休息室、食堂、職業組合のメストコム、黨ヤチェイカで、一隅には赤布で飾つた小圖書部、赤い隅」がある。文盲者率の最も高い人民營養勞働者が彼等の文化革命と社會主義建設を達成すべき細胞だ。

廊下を通る日本女の空色ヤカンは「赤い隅」の赤い色をポッチリ鮮やかに映した。隣の出版從業員組合クラブからの赤旗の歌で響くこともある。

砂糖をわりながら日本女は皿洗女と喋つた。皿洗女はやせた髪の黒い女で灰色の上つぱりを着て働きながらよく唄を唄ふ。

——あゝあ！　もう直ぐいろんな實の時節だ。あなたの國でも櫻ん坊や黒苺出來ますか？　なんでもあるんでしよ？　あつちでは。

——日本に黒苺あるかしら。——見たことなかつた。——美味しいわね、黒苺。歯が眞黒んなつて閉口だけれど。

——砂糖さへたつぷり入れて煮ればね。

——一月いくら？　一キロ半？　やつぱり。

——どつから果實砂糖煮の分が出ます？

——あなたんところでは今砂糖でも煙草でもみんな外國へ出して機械になるんだからね。オデッサの港には砂糖の山があるつて。

——ほらね！　さうして「五年計劃を四年で」やりとげるのさ。こゝんところ少しひもじい目も堪へとけ、あとでよくなる

皿洗女は眞面目なやうな巫山戯たやうな目瞬きをして、首をふつた。彼女は臨時雇ひだ。五十七留貰つてる。

——本雇ひにして貰へばいゝのに。

——事務所で室女中にしてくれるかもしれないつて云つてたが、どうなるか。

——どこでも今人が足りなくて騒いでるぢやないの、集團農場や國營農場へとられちやつて。職業紹介所は空つぽですよ

——事務員は拂底してゐるんです。

ニッケル大湯沸のクランクからバケツへ熱湯を注ぎながら皿洗女は云つた。

——臨時でもなんでも、かうして働ければ結構ですさ。働いて

ゐりや並木通あるきをしないですむから……ねえ。

その外

並木道にはティモフェー・ティモフェーヴヰッチといふ態をつれた大道藝人がゐた。

三枚八十哥、三十分の早とり寫眞屋。菩提樹の茂つた樹かげに立てたペンキ畫の背景の前の椅子で、赤い布をかぶつた女が格子縞のスカートの皺をひつぱつてる。

並木通風景を眺めて晝間のベンチにゐるのは9/10までいろんな髪と目の色をした女、及び籐の乳母車だつた。

ゲルツェン通が並木通と交叉するニキートスキー門のところにはチミリャーゼフの記念像がたつてゐる。像の臺石のまはりには、赤、紫、白、夏の草花が植ゑこまれてゐる。一九一七年の「十月」こゝで激しい市街戰があつた。今、年はフント一留のトマト賣が出てゐる。葡萄賣も出てゐる。高いところでラヂオ擴聲ラッパが二十一度の明るい北方の夏空へギター合奏を流してゐる。ソヴェート十三年の音と光だ。ずらりと並んだ乳母車の裡では居る、居る！それ等の音と光に向つて薄桃色の臀、腹をむき出した夥しい赤ん坊が眠つたり、空氣を吸ひこんだりしつゝ、そろ〱未來の職業組合員手帳に向つて息をしてゐる。十九世紀の進化論者チミリャーゼフと夏の草花とに偏見なきソヴェートの赤ん坊の性を明らかにむけながら。

並木通には菩提樹の葉のかすほど赤ん坊がゐた。いや、モスクヷ市内の事務所役所のひける四時、四時後、九時頃まではよたよた歩きをする年頃からはじまつて小學校ぐらゐまでの幼童幼女で並木通は祭だ。その間を赤衛兵が散歩する。ピオニェールが赤いネクタイをひら〱させて通る。勿論いかさま野師もその間を歩いては行くのだが目につくのは並木のはてまで子供、子供だ。アルバートのゴーゴリ坐像の膝があいてるのが不思議ぐらゐな賑ひだ。

ソヴェート市民の大部分は日本と支那の區別を、地理的にも風俗史的にも頭の中にもつてない。日本が立憲政體であることを知つてゐる位の啓蒙者は、次に諸君に向つて必ず云ふだらう。

——日本はそれに非常な人口ださうぢやないですか。年にどの位づゝ殖えますかね？

——七八十萬です。

――アイヤイ、ヤイ！　何と澤山だ！

が、眞に驚くべきは生れる赤坊の數ではない筈なのだ。何故ならソヴェートは最近年に略三百萬人――總人口に對する三分の率で小社會人を增殖してゐるのだから。おどろくべきは、日本に於て年七八十萬人づゝの赤坊の九十パーセントが、社會的に何の保護を持たぬプロレタリアートを母として何等の生存權を主張すべき手がゝりを持たぬ嬰兒として此世に送り出されつゝあるといふ事實なのだ。

×××はこの一點だけでも人類としての歴史的使命を果した。ＣＣＣＰでは女性が市民、勤勞者としての權利に於て男性と全く對等である上に、プラス、母としての性の擁護を法律によつて完全に與へられてゐるのだ。

窓外はまだ零下十五度の嚴寒だ。凍つた雪あかりが室内の白い壁にチラ〱してゐる。

窓枠が少し古びて、すき間風が入る。頭から白い毛糸肩掛を被つた日本女が、唇の端から細いゴム管をたらして臥たまゝ横目で猫を見てゐた。

寢臺の横には楕圓形の卓子が置いてある。首がガクつくのをガーゼで卷いてある眞鍮の呼鈴、一緒に、アスパラガスに似た鉢植が緑の細かい葉をふつさり垂れてゐた。

日本でも猫が葉つぱをたべたりするのかしらん。――

床に黄色い透明な液體が底にたまつた大コップがある。膽汁だ。斑猫はそのコップをよけ、前肢をそろへ鬚をあをむけ、そつと葉つぱを引つぱつては食つてゐる。ふさ〱した葉が搖れるだけだ。音もしない。日本女はもう二時間さうやつて寢てゐるのだ。

猫は枕頭卓子へとびあがつた。これは日本女を不安にした。鉢植ゑの植物には薄青い芽が萠えたばかりだ。その瑞々しいのを猫は食ひたいんだ、きつと。

臥たまゝ手で卓子をガタ〱やつた。退かぬ。丁度いゝ工合に病室の扉があいた。

――あゝ、ターニャ！

――まだやつてらつしやるんですか。もう直き御飯ですよ。

眩しいやうな金髮で、赤い頰で、白衣をまくりあげた片腕いつぱいにうづたかくパンをかゝへたまゝ、ターニャは猫を卓子

の上から追つた。

──今日はどう？　あんたの小さんの御機嫌は。

──オイ！　此もさかんに體育運動をやつてます。

ターニャは笑つて七ケ月のたつぷり膨んだ自分の腹を輕くたたきながら出て行つた。

一月半ばかり前、日本女がモスクワ第一大學附屬病院へ入つて來て間もない或日だつた。風呂に入れといつて、脊の高くない、身持ちの、頬つぺたが赤い一人の媬母が車輪つき椅子をころがしこんで來た。日本女は體を動かすと同時に肝臓の痛みからボロ／＼涙をこぼし、風呂には入れず、涙の間から身持ちの若い媬母の白衣のふくらがりをきつく印象された。

それがターニャだつた。

媬母は通勤だ。六人が二十四時間を三交代の八時間勤務で働く。ターニャは夜の當直には來なかつた。二十才だ。彼女の夫は國立音樂學校でバリトーンをやつてる。ターニャは暇があると當直室の机へむき出しの腕をおつゝけて代數を勉強した。每晩六時から十一時まで彼女はブハーリンの名におけるモスクワ大學の勞働科で、××がブルジュアの獨占からプロレタリアートに向つて解放した文化を吸收してゐるのだ。

朝、床を濡雜巾でターニャが掃除してる。いろんな問答をした。

──ターニャ、勞働科はもう何年ですむの？

──今二年目だからもう一年です。

──女何人ぐらゐ居る？

──少いですよ、たつた九人。

猫が好きな例の鉢植の植物へ吸のみから水をやりながらターニャは考へぶかい眼つきで云つた。

──われ／＼んところでは、一般に云つてまだ女がどうしてもおくれてます。生産に働く勞働婦人の間でも、高い資格を持つてる女の數は、男より低いんですもの。それに勞働科は、大抵晝間働いてからだし、勉強も相當骨が折れるし、女はやり通せない場合もあるんです、家庭と子供を持つたりするとね。

──どう？　あんたにはやり通す自信がある？　さういふ體で晝間働いて、夜また勉強する、時々辛いこともあるでせう。

──何ともありません。辛いと思つたことは一遍だつてない。

勞働科ではほんとに勉強したいと思ふ者だけ勉強してるんです。たゞ、時々眠いことつてつたら！　どうしたつて目のあいてないことがあるんですよ、並んで順ぐり居眠りしてる形恰つたら！　オイ！　たまらない。

ターニャは自分でふき出しながら、頰つぺたの上から金髪をかきのけた。

——でも、みんないゝ青年たちなんです。CCCPに勞働科で勉強してる若い男がみんなで今（一九二八年）五萬人ばかり居ます。みんなソヴェート國家の爲に何かする人間だ。ルナチャルスキーが云つてたでせう？「ソヴェート國家にとつて最も必要なのは今勞働科で困難にうち克ちつゝ學んでゐる者達だ」つて。

（ロシア共和國内だけの勞働科に於ける女學生數は一九二七年一五パーセントだつた。

全CCCPで高等專門教育過程をふみつゝある女性は（一九二七年）二九・八パーセント、世界文明國中第六位を占めて居る。日本は略第十一位だ。）

また別な或雪の日のこと。

ひと仕事すんだターニャが日本女の室で、かけてのまだない安樂椅子に腰かけ、青リンゴを美味さうにかぢつてる。

——くたびれた？

——すこうし。

二つめのリンゴにかぶりつきながらターニャは如何にもたのしさうに、たのしさから足でもぱた〳〵やりたさうに云つた。

——もうぢき休暇になる！

ソヴェートの勞働法は姙娠した勞働婦人に出産前二ケ月、出産後二ケ月の給料全額つき休暇を與へるのだ。（知能勞働婦人は前後三ケ月、同じ條件で。）

雜誌をかりに來て喋つてゐたエレーナが、年若い糖尿病患者の、消耗性で輝やいた眼でターニャを見ながら

——お産の仕度にいくら貰へるの？　お前さん

と訊いた。

——誰でも月給の半分まで。………でも九ケ月牛乳代をくれるんです。

ターニャは窓の前に立つて裸の楡の木の枝々にドン〳〵降りつもる雪を眺めた。

――いゝこと！　休暇になつたら毎日毎日散歩しよう！
散歩するといふ動詞にターニャは我知らず複數をつかつた。
そしてその調子の優しさが光のやうに室をながれた。
彼女が、丸い體の重みで幾分踵をひくやうな歩きつきをしながら雪明りの室の中からそれより白い姿を消してしまふのを見送つて居たエレーナが、急に背中をのばすやうな身ぶりをし、灰色の病衣を片手できつく自分の高い胸へかき合はせた。

――これが我等の時代だ！

エレーナの心をふかく、つよく掴んで搖つてゐるものがある。暗い燃える眼で刺すやうに日本女の黒い眼を見つめてゐたが、囁て

――あなた子供もつたことがありますか？　と低い聲できいた。

――いゝえ。ない。

――私はもつたことがある。

――…………。

――でもそれは一九一九年、飢饉の年でね、彼女は自分自身にむかつて云ふやうに云つた。

――私を見た教授が、子供を生んで何で養ふつもりかと云ひました。我々に今必要なのは赤坊ぢやない、革命の完成だ、つて。――教授は白い髯のいゝ人だつた、眞面目な、ね。……我々はこんな事も生き拔いて來たんです。

ターニャは日に日にゆつくり歩くやうになり、碧い瞳や潤ひある唇に張りきつて重い大果物のやうな美しさを現した。寢たきりでゐる視野の前に三尺だけ展いてゐる廊下を横切つて、金髮を耀かせながらゆつくりターニャの白いふくらんだ姿が通ると、日本女は貞節、母にならうとする女の美と力とをおほふところなく感じた。

ヨーロッパ文明はマリア以來の宗教的感傷をもつて、東洋の文化は根づよい家族制度の傳統によつて、いづれも母にならうとする女を或程度まで聖なるものとした。だが、プロレタリアートの現實的な身持女が、何かの美感の對照となり得たことが嘗てあるか？「身持ちの神さん」は東西ともに既に古典的な貧の悲しき漫畫材料だ。ブルジョア社會制度の下のプロレタリアート數千萬の女性にとつて、母性は彼女等により生き易き權利を與へるどころか、明日に日々の勞苦の門だ。母性そのもの

をさへ脅かしてゐる。

ターニャを見ろ！

日本女は自分の中に眠つてゐる母性がそのために目覺まされ、同じよろこびで熱くうごくのをさへ感じた。彼女の全身をみたしてゐる深い安心、母とならうとする曇りなき期待はどうだ！ターニャの輝きは、とりもなほさずソヴェート社會がどうプロレタリアートの母性を護つて居るかといふことの照りかへしでなくて何であらうか！と。

勞働婦人が姙娠して五ケ月以上になつてゐる時、勞働法によつて工場、事務所は彼女を失業させることを許されない。生後十ケ月以内の嬰兒をもつて居る場合も。(まして、四ケ月の休暇期間は云ふをまたない)

相當の數、勞働婦人の居る工場、製作所で托兒所のないところは無い。托兒所は朝八時から五時まで。五時から十二時まで。或ところは無料で、或ところは親の收入に準じた實費で七才までの子供を保護し、食事、沐浴、初等の社會的訓練を與へてくれるのだ。乳兒のある母には三時間毎に授乳時間を與へられる。朝子供をつれて出勤し、退け時まで、女醫と保母の手もとにある子について何の心配がいらう。

子を産んでその男から捨てられるといふ悲劇もソヴェートでは女をセイヌ河や隅田川へは行かせない。國民裁判所へ彼女を行かせるだけだ。民法は、事情によつて父親が受ける月給の半額までの扶助料を子供が十八才になる迄支拂ふ義務を決定してゐる。

萬一、男が更に非ソヴェート市民的で、扶助料支拂ひをいやがり、行衛をくらました時、例へばターニャはどうするか。彼女ひとりの收入では迚も子供の養育はしきれない。法律によつて男の親が食糧品か金で子供を扶助する義務をもつてる。その親もない場合。

子供は、父と母とのどういふ關係によつて生れやうともターニャ一人の子ではない。生れた以上ソヴェート社會の嫡出子だ。いざといふ場合はソヴェート國家がその陣營に加へられた幼い一員に對して社會的連帶責任を負ふ。「子供の家」は最後の網となつて經濟能力弱い母の手から脫落しようとする子を社會の成員として受けとめるのだ。

女の中に擁護された母性の經濟的獨立を保證する爲、離婚法

は、女に職業能力がない場合、一年間（その間に女が職業を習得する）生活保證すべき義務を夫に示してゐる。

合法的人工流産は、これ等數種の積極的條件の最後にあつて、母性の擁護と秘密な罪悪の防止に役立てられて居るのだ。

金髪のターニャひとりが、何か彼女の特別な理由で、このやうに廣汎な社會連帶の上に、彼女の若き勤勞婦人としての獨立、戀愛の自由、母性のよろこびを獲得してゐるのだらうか？さうではない。ソヴェート全勤勞婦人がこの基礎に立つてる。プロレタリアートの「十月」は母性と私有財産制のみつともない結びつきを××××截斷し、かつちり社會主義社會連帶の間に母性を組みなほした。職業組合に屬さぬ勤勞婦人はない。生れて、彼を社會成員として受けいれる組織をもたぬ赤坊はない。

これだけのことを知つて、諸君、更に或る晴やかな夏の午後、並木通の楡の樹蔭をぶら〱歩いて、そこに眠つてる無數の赤坊を見なほしてくれ。

ソヴェートの赤坊だ。

工場の交代時間、托兒所からあふれる子供の歡聲と母親の笑ひごゑをきけ。ソヴェートの子と母だ。

（一九二八年から一九三三年に亘るソヴェート産業擴張五ケ年計畫は、プロレタリアート文化向上資金として三億五千萬留を豫定して居る。この資金の一部で五年計畫完成後には勞働者及下級勤人の子供百五十萬人が學齢以前の保護を受けるやうになるだらう。

＊一九二九年殆ど千五百萬人の子供がＣＣＣＰにゐた。

勤勞者によつて構成されてゐるソヴェート社會の實踐上、この幼兒保護教育の問題は重大な意味をもつてゐる。

	一九二七―二八	一九三二―三三	比率
幼稚園			
子供の庭	一〇七（千人）	二一七（千人）	一〇二・二パーセント
子供の遊場	二〇三（千人）	五〇六（千人）	一四九・三パーセント
固定托兒所	一〇〇八	一五九七	五八・八パーセント
（ソヴエート共和國）			
兒童健康保護醫員			六三・一パーセント

この頃盛に建つＣＣＣＰの新住宅は多くの場合その中に、特に居住者の子供のための廣場、室をわり出すことに注意してゐる。家のあるその場所に托兒所をもつ爲だ。これは目的そのものが至極當を得てゐるばかりでなく、面白いことには二重の役割を演じつゝも

る。元來家庭勞働者とともに政治的には最も後にのこつたものと認められてゐた家庭の主婦達が、この家屋の中まで進出して來た托兒所を中心とし、集團的行動の必要に訓馴されて次第に個人主義的なものゝ考へかたの習慣から脫離しはじめたのだ。）

その敎師には「鯱ちこばり」といふ綽名がついて居た。

彼はいつも膝まである長靴をはいて來た。そして入つて來ると、その長靴の踵をきつちり揃へ、脊のたかい腰を慇懃にかゞめ、下から何かを掬ひあげるやうな手つきで握手をもとめる。

日本女は二人で一室に住んでゐた。二年近くモスクヴではさうして暮して來た。「鯱ちこばり」の、靜脈の浮いた手を握ると、一人の日本女はドアの內側から外套をはづし、それを着て外へ出る仕度をした。「鯱ちこばり」は、室の中央の卓子の傍に立つてそれを見てゐる。

——どうしてお出になるんですか、ちつとも貴方は邪魔なさいませんよ。それどころか、一緒に勉強出來て一層愉快ではありませんか。全く無駄な遠慮です。

どつちみち、日本女は室から出る。一時間半三留を、もう一人の日本女が最も有益に利用出來るためだ。

モスクヴ河が凍つて、その上を絕間なく人や馬橇が通つてゐた。氷の穴から釣糸を垂れてゐる者がある。黑い外套の裾からいろんな色の木綿更紗のスカートを出した女達が五六人かたまつて厚い氷を破り、洗濯ものを籠から出しては濯いでゐた。何かの染色がとけて氷の中の水は綠つぽく見えた。

岸に上つて見渡すと氷の上にある人間の姿はどれも黑く小さく、遠くにちらばらスケートしてゐるものゝ顏だけぽつつり薔薇色だ。發電所の煙突からは黑い太い煙が眞直上つた。

日本女は凍つたモスクヴ河の景色を眺めてから、元へ戻り、或一つの建物の入口を開けた。

床が甃石張で、古代ロシア風のふくれた圓柱や重い迫持が正面階段のまはりにある。

事務室と書いてある戶をあけた。本。本。女。女。そして本！中央兒童圖書館なのだ。兒童文學は、ソヴェートの問題となつてから久しい。そして、それはまだ解決されず、雜誌「ピオニェール」の編輯局が中心となり、作家と小さき讀者との懇談會を開いたりした。

――こゝでは、子供たちに本を讀ますと同時に、いろ〳〵研究的な仕事をやつて居るんです。

監督の、おだやかな三十四五の婦人黨員が說明した。

――御承知の通り我々のソヴェート文化はまだ極めて若いんですし、我々の參考とすべき經驗といふものが、先にない。總て新しい。これは大變よいことだか、困難もあるんです。こゝの第一の仕事は、ソヴェートの子供にどういふ本を讀ませるべきかといふ研究です。幼稚園小學校で、どんなお話をきかせ、本をよませ、四十箇所もある子供の圖書館はどんな本を買ふべきか此處が中心になつて研究し、決定するんです。

彼女は日本女を本棚の方へ案內しながら云つた。

――今こゝに居る女の人たちは大抵小學校の先生たちですよ。地方からも出て來て研究して行きます。

特別な本棚が一つ傍にあつた。赤、黃、綠、紫、黑の紙片をはりつけた子供の爲の本が棚わけに並べてある。それは每週一度づゝ開かれる選考委員會が新刊兒童文學につけた成績票だ。

――赤いのが一番いゝ部です。紫、黑のになると他の圖書館へは買ひません。綠のは、私共自身にはつきりわからないのです、果して子供が面白がるか、理解するか、若しかすると私共はよくない思つても子供自身が何か發見するかもしれませんからね、一應與へて見るんです。

――アリョーシャの「三人の肥大漢」は何色を買ひました？　今藝術座が上演してゐるし、本も隨分贅澤な出版だつたが

――

若いパブツチキ(同伴者)の作家で、彼の小說の「感情」の「結社」がワフタンゴフ劇場に上演され、小說も劇も評判された。

――あゝ、見ましたか？　あなたも。

監督は笑つた。

――何色だつたか……あれは大人のお伽話ですよ、菓子の中から革命が擡頭したりするファンタジーは、少し困りますよ。

今赤色をはられてゐるのは、繪本だつた。東洋、西洋、地球上のいろんな民族のプロレタリアートが、獨特の服裝、風景、方法で、その民族獨特の生産に從つてゐるところを、明快な彩色畫で說明したものだ。綿花を栽培し、織工場で働く耳輪だけ大きい瘦せたインド人の後に、ヘルメット帽をかぶり、鼻眼鏡を

光らしたイギリス人がゐた。

ソヴェートの子供は、幼稚園で、或は小學校で、自然界と人間社會との關係を、日常のあらゆる活きた勞作の中から直接學びとる。今、もう雪の底に春が匂ひかけてる。春大人は何をするか？　子供たちは大人をどう助けるか？（一年生の數課プログラム）

田舍では種蒔時だ。

市の公園へは渡り鳥が來る季節だ。公園の樹の梢へつるす鳥の巢箱を小學校の子供は手工で拵へる仕度をし、中央兒童圖書館では、一つの本棚が五ケ年計劃、集團農場、國營農場、その他一般農作と春の動植物についての本でおきかへられた。

――これが我々に一番骨の折れる、大切な仕事なんです。ソヴェートの子供は大人と同じ社會の中に生活してゐる。たゞ理解が單純だといふだけの違ひです。彼等は五ケ年計劃についても集團農場についても知らなければならず、又熱心に知りたがるんです。複雜な今日の實際問題を簡單に、具體的にどう説明するか………。問題は迅速に次々移つて行きますしね、例へばソヴェート選擧の時には又それに應じた本を見出してやらなければなりません。

ソヴェートではいかに文字が實際生活の理解、建設に必須な武器かといふことは、一ケ月この驚くべく前進的で柔軟性に豐んだ多面な新社會の中に生活して見れば忽ちわかる。

例へば日本女は小説を書くのが本職だ。だから、未來に於てソヴェートの藝術が生れるだらう畑に興味を感じ、「鎚と槌」鐵工場の工場新聞出版室内の文藝研究部へ出かけたとする。

袋をかぶせたタイプライターが一臺ある。二脚の卓子といくつかの椅子があつて、鑄型職場、旋盤からの若者が四五人八時間の働きを終つて樂に坐つてる。初歩の文藝部員たちは多くの場合詩人だ。

――今日は誰が讀むね。

マツプからの指導者が、煙草をふかしつゝ一同を見渡す。

――君か？

白いさつぱりした襯衣の胸を濶達にひろげて着た縮毛のコムソモールは、ちよつと顏を赧らめ

――いや。

と云つた。

──何にもないんです。
──ポケットの中を見せ給へ。
どつと笑ふ。
──さあ、どうしたんだ? アーシャ! ぢやあ君讀んだ、讀んだ。
──なほしてないし……自信ないんです。
──こゝに自信なんぞ持つてる奴は一人も居ないよ。
笑ひ聲の中に立ち上つて、がつちりした體にコバルト色襯衣のアーシャが、抑揚は本ものゝプロレタリアート詩人らしい彈力で、原稿をよみ上げる。
「截られる鐵片の火花と音樂。様々な形で社會主義建設の骨格になり輪となり、起重機となり、鋲となる鐵の美しい力。篤志勞働團はその間から叫ぶ。──生産經濟プランを百パーセントに! 篤志勞働團は叫ぶ。──いや。生産經濟プランを一二〇パーセントまで! と。そして、新しい輝くトルクシブの軌道はトルキスタンの砂漠をシベリアへ向つて走り、北と南の生産を結びつけた。」
題材の摑まへかたの必然を文學的に理解するだけにも、日本女は先づCCCPの中心問題である生産擴張五ケ年計劃を吸收してなければならぬ。それを獲得するにはどうするか? 彼女は少くとも讀まなければならぬ。統計表と、數字とで一杯なパンフレットを。絶對にそれは讀まねばならぬのだ。若し散歩した時ソヴェート廣場にある電燈入り地圖の意味を知りたいと思ふなら。
CCCPで一九二六年に五千七十七萬千九百九十七人(四九・六パーセント)あつた文盲者が、一九三〇年には既に四千三百萬人前後に減り、五年計劃完成後は都會七パーセント、村落二〇・六パーセントまで減少するといふことは極めて自然なことだ。生活そのものが、文字はパン切符と全く同じに必要で、手にある鋤や鑢と同じ社會の道具だといふことを教へてゐる。ソヴェートでは大人もかうして育つのだ。
──ところで小學校の上級生ぐらゐの子供は主にどんな本をよみますか?
──第一參考書類、技術的なもの、次は文學です。
──現代の作家では誰が愛されます?
──さあ……。勿論、グラトコフや、リビディンスキー、セラ



烈を極めたる男性の詩である。苦悶する一つの時代のいきいきとした描寫である。革命の子金井半兵衛、丸橋忠彌。悪夢に追はるる戰國の人土岐丹後の宿命的な姿、その家來その娘の悲劇、秋天の星座の燦然たる有樣である。

現代人の胸底に衝迫する此の歴史的巨作を見よ!!

大佛次郎著

赤穗浪士 (上巻一一三版)(中巻一〇二版)(下巻一〇〇版)
各壹圓五拾錢 送料各廿四錢

ごろつき船 (上巻四十版)(下巻四十版)
上巻壹圓八拾錢 下巻壹圓 送料各廿四錢

からす組 (前篇二十版)(後篇最新刊)
各壹圓五拾錢 送料各二十二錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 電話芝(43)一一一一番 一一一二番 一一一三番 一一一四番 振替東京八四〇二番

改造社

フイモヴィッチなんか讀まれてゐるが――
女黨員は、考へた後
――近頃は古典を非常によみます。
と云つた。
――トルストイ、ゴーゴリ、なんかですか？
――プーシュキンなどもです、レルモントフも出る。
――國內戰を主題としたものは、一般に子供にどう受けいれられてゐますかしらん。
――特に、若いものによませるために書かれた國內戰、革命に關する文學は、一つ、共通な大きな誤謬を犯してゐたことを我々は感じてゐます。それは、革命の事業を全然機械的に見てゐる點です。「赤」はやたらに強くて、正義のかたまりで、賢く、成功の外何も知らず「白」はいつも卑怯で、馬鹿で、革命は玩具みたいに雜作なく完成するもののみたいに扱はれてゐる。大した間違ひです。革命の現實をまるで歪めてゐる。もつと有機的に、苦痛、困難、失敗の繰返しの裡から根氣よく勝ちとつた革命が描かれたければならないんです。第一、そんな赤白物語、つまりませんよ、讀んだつて！

彼女は快活に笑つた。階段を二階へのぼりながら、彼女は日本の兒童のための雜誌、本の印刷が非常にいゝと褒めた。
――技術的に實に進歩してます。でも、露骨に內容に歷史的要素を澤山とり入れてゐますね。この頁に、すつかりヨーロッパ風の裝をした日本の子供がラヂオ組立てで遊んでる畫があると、直ぐ次に、封建時代のサムラヒが出て來る。日本の子供は頻繁にさうやつて封建時代へ逆轉させらることを何とも感じないんでせうか。まだ……。
二階の讀書室の赤布で飾つた本棚の前で、十一二歲の少年少女數人が盛に本を漁つてる。
――アニュータ！　別なの下さい。
――どうして？　あんたまだそれを讀みきつてないよ。
コムソモールカの裝をした若い圖書掛がその少年に云つた。
――本はすつかり讀み終る癖をつけなさい。
――つまんないんだ。北極冒險のことでも書いたの下さい。
グランドピアノの置いてある、プラカートと棕梠の鉢で飾られた集會の廣間がある。奧の室で、年かさのピオニェール少

女が二人、色紙を切りぬいてボールへ貼りつけ何か飾ものを拵へてゐた。

——モスクヴは御承知の住宅難で、多くの子供は學校が退けてから落付いてゐるところがないんです。親は留守だし。みんなこゝへ來ます。こゝはこゝでいろんなクルジョークがあつて、この壁新聞もそこで出してます。

四つの、樹や鳥の繪で裝飾された室が、別に學齡までの幼兒のために設備されてある。小さい清潔な白塗の椅子卓子が、水鉢の上で芽をふきかけてゐるいろんな球根の載つた窓のまはりに配列されてる。今こゝに子供はゐない。

——阿母さんが少し長い時間買物にでも出かけたければならない。すると、こゝへよつて小さい子供をあづけてゆきます。

——本ものゝ幼稚園の仕事ですね。

——母親と子供のためにこれは必要だし、我々にも必要なんです。——子供の爲の仕事は生きてる子供對手でなしには一歩だつて進み得ませんからね。多くの阿母さんがこゝへ來て始めて子供の爲に買ふべき繪本の見わけかた、質問の答へかた、お話しのしかたを知りましたよ。

子供をぶつな!!
ぶつ前に子供の友に相談しろ。

モスクヴ市中の壁や廣告塔に近頃さういふプラカートが頻りに見えた。

——親も近頃は社會教育について違つた考へかたをするやうになつて來ました。然し我々のところにもまだ〳〵足りない點がうんとある。試つて見る。子供がよしあしを決める。それによつて我々は修正し更に前進する。

監督は再び少年少女達の横をしづかに通りすぎながら、日本女にねばりづよい熱情をもつて囁いた。

——御覽なさい、彼等はほんとにソヴェートの新人間です。なんと彼等が育つことか！

幼兒が圖書館に居る時間の割り當てが表にして掲げられてあつた。

掃除	一、一%	かけつこ	一、五%
木積	四、三%	切ぬき	四、五%
おもちや遊び	四、八%	辨當時間	五、五%
繪をかく	一〇、三%	唱歌	八、〇%
集團遊戲	一〇、三%	お話をよんで貰ふ	一二、〇%

内容が斯うしてかはるばかりではない。モスクヴ市は外觀も著しく變化した。外の並木道を越した市の外廓には、新工場のボンド式硝子屋根の反射とともに、新勞働者住宅のさつぱりしたコンクリート壁が、若い街路樹の彼方に、赤い布をかぶつた通行人を浮きあがらしてゐる。

モスクヴ河の岸に一區劃を占める大建築が進行中だ。黑い足場の間に人は夜業する照明燈の蒼白い強い光線を見、行き違ふ鐵骨の複雜な影の濃い錯綜から、これは巨大な何かゞ地からもり上つて來るのを、人間がたかつて或一定の大きさまで壓しつけ、まとめて、熱心にかためようと働いてゐると云ふ感じを受ける。全ソヴェート同盟中央執行委員會の建物だ。クレムリンを博物館とすべきための造營だ。

その他、何になるのかわからない大きな建築工事がいたるところにある。板圍から空へつき出した起重機の頂に赤旗を飜しながら煉瓦、石灰の俵、トラクターの重い轍が形恰をくづした泥の中で興味ぶかい未完成の姿を現してる。

だが、モスクヴそのものを本當にソヴェートの首都にふさはしい社會主義都市の根柢から更へることは可能だらうか？　モスクヴはモスクヴとして、歴史的な美しい寺院のいろ／＼な圓屋根を眞白い嚴寒の中に燦めかせればよい。そして、ストラスナーヤ僧院の城砦風な正面外壁へ、シルクハットをかぶつた怪物的キャピタリストに五色の手綱で操縦される法王と天使と僧侶との諷刺人形をつり上げ、ステッキをついた外國の散歩者の目を瞠らせればよい。――ところで、

一寸、――この小地圖を見る氣はないか。

勿論モスクヴでもミンスクでもない。雜誌「ピオニェール」が子供たちから「私達はどう暮さう」といふ題で募集した社會主義的都市計畫の一つだ。

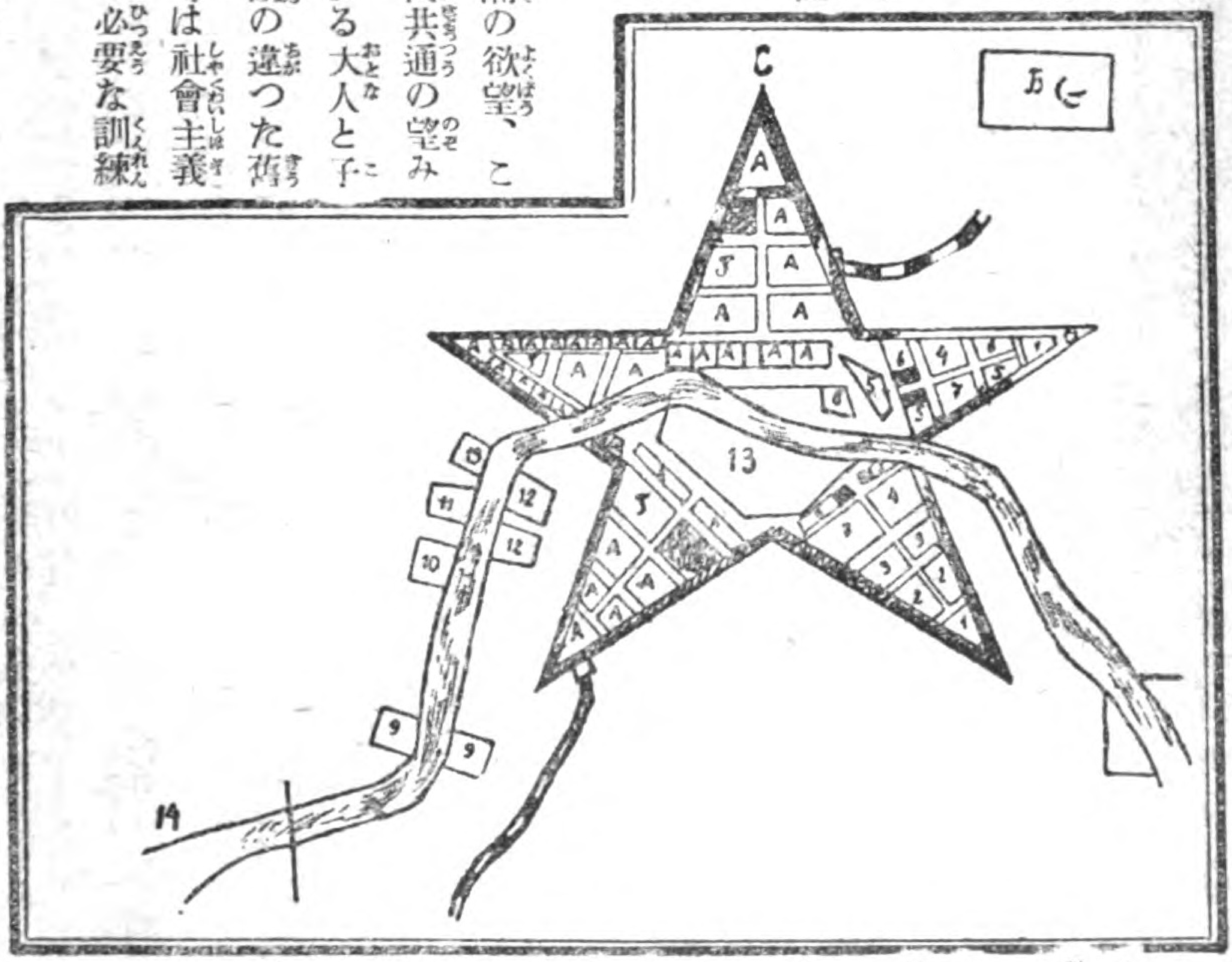
社會主義的都市建設はCCCPに於て計畫から實現の時代に移つてゐる。ウラル・ドンバッスその他、新興生産中心地では既にいくつかの新都市が生れた。そこにモスクヴより合理的な生活の新樣式があるのだが、このユージュ君のプランは、面白い。ソヴェートの少年が、彼の集團的生活、家庭に於ける生活の實際經驗から、社會主義的生活の理想のためにどんな都會を要求したか。

この「赤き星」形の樹木で圍まれた工業的都會は農村とどう

連絡してゐるかを、又市民の生産的社會勞働の核をなす種々な工場が、その性質にしたがつて、或ものは川岸に、或ものは住宅近く配置されてゐる點を注意してくれ。ユージュ君は托兒所について特別關心をはらつてる。大人の爲の勞働者クラブは住宅區域の内に、ピオニェールのクラブ、學校、子供の遊び場その他は東側の二隅に、すつかり分離されて居る。

大人の生活と子供の生活との間の或間隔の欲望、これは現在ソヴェートの意識ある若き時代共通の望みだ。ソヴェートで、或程度以上年齡の差ある大人と子供は大人子供といふより、根本的に世界觀の違つた舊人間と新人間の差である場合が多い。彼等は社會主義國家の働きてとして健康な集團生活の中で必要な訓練を安らかにうけることを望んでゐるのだ。

あゝ、それからユージュ君にはもう一つ望みがある。それは廣い學校の建物が、紫外光線ガラスではられてゐることだ。



A、勞働者住宅。
Б、ソヴェート農場「ピオニェール」
B、運動グラウンド。
Г、勞働者クラブ。
1、天文學校。
2、小學校(四年制)
3、〃　(七年制九年制)
4、職業學校。
5、托兒所。
6、子供の遊び場。
7、ピオニェールのクラブ。
8、レーニン記念像。
9、發電所。
10、紡績工場。
11、染工場。
12、皮革工場。
13、織物工場。
14、ピオニェール野營所。

「紫外光線ガラスは」彼は云つてる。「太陽の人間の體にとつて有利な光線を透す。だから、きつと子供たちは衰弱しなくなるだらう」と。

展覽會と洋畫家の生活

鍋井克之

葛飾北齋のやうな頭曲りで、金に屈服せず、赤貧で押通した作家でさへ、その作品は矢張りブルジョアの鑑賞を得て初めて金に換へられ、藝術的價値もそこで高揚された。どんな畫家に限らず、繪の仕事が、ブルジョアの附隨物である事は昔から決つてゐた。文學や音樂とは違ひ、繪畫は一人だけでも有力な保護者があれば、商賣は成立つ。在來の日本畫家の生活氣分にこの考へが無かつたとは云へないので、大家になる程保護者の數が正比例して增して行く丈のことである。今日の洋畫家もかう云ふ生活氣分を踏襲して行けば云ひ分は起らないのだが、今日の洋畫家にはまことに複雜な矛盾が生活の上にも、その制作態度の上にも生じて來てゐる。よるとさわると、よく洋畫家はかう云ふ種類の話題を持ち出す。これは繪かきでない人に聽いて貰つてもまんざら興味のない問題ではないと思ふ。

ブルジョアの寄生階級で安閑としてゐられる特權の餘光のやうなものを日本畫はまだ持つてゐるが、洋畫にはこれが少ない。又洋畫家にはつとめてかう云ふ附隨物的な生活氣分から離れやうとする傾向がある。トラックに大作を家のやうに積んで、消防夫がポンプへ昇降りするやうな、機敏さで繪を二科展へ運んで來る畫家は、へそまで露れるやうなシヤツ一枚で、フウ／＼と瀧の汗を流してゐる。日本畫の先生達なら先づこれを見た丈でも、これが繪かきであるとは思はないだらうと思へた。洋畫家の方でも日本畫家の從來の生活が自分に當て嵌るものとは思つてゐないし、日本畫を見るのに大多數の洋畫家は既に隣國の好みをさへ持つてゐない人が多い。國粹的に日本畫の精神を洋畫に取入れやうとする東洋主義の洋畫家はあつても、それは今日の日本畫に裨益され、それを直接研究の的にしてゐるものではない。却つて今日の日本畫そのものには緣がないものと云つていゝ。これは今日の日本畫に藝術的價値があるなしを論據にして云つてゐるのではない。昔のまゝの大雅や蕪村がそのまゝに今日生きてゐて、祖先の藏の中の寶物の數がもつと殖えるやうなことが現在あつたとしても、さう

云ふ意味では今日の吾々には新たに生れるべきものが感じられないので、幾ら傑作であらうが、今日の吾々からは日本畫の國と云ふものがもう過去の國になつて眼に映ると云ふのである。毎秋二科展は美術院と隣合せで開催されるので、時に一回位は美術院を私も覗いて來る。そして他の會員も恐らくさうらしいので、作品の優れた二三に就てはいつも皆が賞讃し合つてゐる話を聽く。然しその樣を見てゐると、さう話しながら、改めて日本畫をやり出す人もなければ、再三はそれ等の作品の前にも立現れないらしい。その癖自分達の方の入選畫の、材木に目鼻をつけた樣な裸婦の繪の前で小首を傾けてゐる。自家の藏の中には日本畫の古名畫を藏してゐても、油繪の展覽會へ見物に出かける青年の心理と同一なものであらう。横山大觀氏は伊太利に於いて日本畫の展觀を催したが、それが現代の洋畫家や、學級の新人間に新しい刺戟と、その効果の反響を期待する心持ちを與へなかつたのは、その出品畫がいくら優れたものにしても、最早過去の國の藏の中の作品であるからである。日本の美術の過去の優れた半面を伊太利に公示した横山氏は、あとの半面に伊太利の現在よりは秀れた新しい日本の洋畫があることを又彼地で發表しなければならぬ役目を洋畫家に振り當てゝ呉れたやうなものである。

これだけ日本畫をけなして置けばさつぱりとしたやうなものであるが、實は問題はこれ迄では結着らないのである。在來の日本畫家の生活氣分から離れやうとするところはいゝが、さりとて繪はやはり初めに云つた通り、どうしてもブルジョアとの交渉は絶ち切れないもので、そこに矛盾が起り、洋畫家の生活が宙ぶらりになる形となる。つまり洋畫はまだ社會的に完全な職業になつてゐない。みす〱ブルジョアに寄生的從隨物といふのは近代的神經が承知しないとしても、まるつきり繪が註文に依つて描かれることがなく、畫家の勝手のまゝに描くと云ふことは、これをさうでない日本畫とか西歐の制作の場合とかに較べると、その結果には複雜した相違が生じて來る。

展覽會の出品畫が追々と難解に傾くのも一つはこれが爲めである。これ等の作品はよく云へば藝道にかゝるまず精進したものであらうが、惡く云へば作家一人のお道樂となつてゐる。印象派勃興以來洋畫には革命がつきものゝやうに思はれてゐるが、ありもせぬ革命までをも裝つて見物にこびねばならぬ譯のものではない。今日の展覽會の出品畫にこの感がないとは云へない。革命、お道樂、無技巧のジヤズのやうな作品には、思はず顏をしかめなければならぬ。かう云ふと先きの日本畫にあたりつけた言葉と合はぬやうに思はれるかも知れないが、もと〱繪は他人の註文で描いていゝ筈のもので、人には必ず解るべきものであるのが本來のもちまへである。時代が早過ぎたと云ふことは

あつても、いつの時代になつても、絵に解らなかつたと云ふやうな名作はどこにもない。実人を描いて吳れと云ふ依頼があれば、結局それの描ける人が仕事にありつくし、描くだけの技巧を作家が心得て各自に備へるやうになり、技巧の拙い人は自然と勉強することになる。漸次洋畫の作品が無技巧になつて行くのは、あまり束縛を逃れすぎてゐる惡い方の現れである。註文で描いても上手な畫家は之を下手に描きやうがなく、いくら藝術的靈魂をうち込んでも、下手は上手に描きやうがないのが當然の道である。ものが解るやうに描くと、拙いことが同時にはつきりし、要するに繪にならないので、それで智恵のある人は新しく見えるやうなものを描いて誤間化してゐる。これは展覧會主催側にも責任があるが、と云つてみすく拙い繪を陳べられないから、こんなものが數の中へまじつて來る。こゝで私が繪が解るやうにと云ふのは、アカデミツクの説明臭を指してゐるのではない。通俗に描けてゐて、その實大衆とはだんく離れる方向にある作品もあり、新時代の尖端らしく見せて、内容は販千畫のやうなものもあることを思へば、こゝの了解はして貰へると思ふ。さうしたところで、こゝでゐまだ一つ洋畫家の生活には衝動がある。特別小數の人が、作家と同じ程に研究しなければ鑑賞が出來ないやうな藝術はほんの僅の人により迎へ入れられないで、個人が洋畫を所有しやうとする傾向はより減少するのではないかと云ふ憂ひである。然しこの疑問にはさう簡單に解決されないものが含まれてゐると思ふ。

二科展の出品受付日に、四千何百と云ふ作品が搬入されつゝある光景を見ながら、私は中川紀元氏と右の點に就いても語り合つた。中川氏はこれからの洋畫などは、筆觸がどうとか云ふやうなことは必要がなくなり、むしろ筆觸そのものがなくなつて了つて、たゞ數個の平面な色彩があるだけでも、美感を呼ぶだけの工夫が出來て、これで足りることになり、寫生の繪などは書生さんが描いて額にかゞげてもこれで用が濟むやうになるのではないかなどゝ大いに洋畫の技法の滅乏する前兆らしいことを語つた。が、賢明な氏はさう云ひながら、技巧を愛し、技法に享樂的な感情のある作品を現在は描いてゐるのであるから、この説もにわかに信ずることは出來ない。つまりこの如く洋畫家の生活が宙に浮いてゐることだけはこの談話の一例を見ても事實であらうと思ふ。最近の巴里畫壇の情報に依ると、今日の世界的不景氣は、巴里畫壇をも身動きのならぬものにしてゐるので、畫商は思案工夫盡きて、目下はコロオ、クールベー等それく古名家の個展のやうなものを開催して客を呼んでゐるさうであるが、これは觀衆がたかなか多いとの事である。これを綜合すると、まだ人間には名畫に接したいと云ふ藝術的な欲望は存して居るので、畢竟日本の洋畫と繪の價値と

どちらが高いかとの背くらべで、畫の方が今は負けてゐると云ふことになるのであらうと思ふ。(高名畫の世界市場での價は益々上つてゐる。それにしても現在日本の展覽會場での洋畫の價は一般に皆高價すぎてゐる。)かうなつて愈々金と作品とが較べられることになると、繪がそこに置いてあつても一寸それは取上げて一たん床の間の上の安全なところへでも納めてからでないと、危險でそこが歩けないと云ふ位でないと、金の値と競爭は出來難い事になる。つまりそれには技法が十分完全に備はつてゐる繪でないと、こんなコクと貫目はつかないことにある。が、かう云ひながら一方展覽會での作品は、これ等の方向とは、むしろその反對の側へ走るかのやうに見られる。で、私はそれは有閑階級の疲弊してゐる或る時代にこんな矛盾にこんがらがつた現象が見られるので、いづれは力のある作家の名作品は何かで報いられるところがあるやうになるものと信じてゐる。

それにしても、思ふやうに洋畫が世に入れられないと云ふことは、作家をむざ〱と難所につき落してゐる場合が多い。展覽會の出品畫のみがふえるが、實は洋畫家受難時代である。日本に洋畫と日本畫の二通りの集團のある事が何かに禍をしてゐるのは明である。木村莊八氏は何かの文章の中で、横山大觀と云ふやうな畫家と、自分等とが同一の時代に世にあることを思ふと、何かまともに考へられないやうな氣がすると云ふ意味のことが、うまい文句で書かれてあつた。そこで時代は洋畫に利がないとしても、展覽會はどんな内容で開かれてゐるかを考へてみよう。岸田劉生が生前、油繪を日本のものとしようとして努力した業績は、何人も認るところである。夭折する後年にあつては、あまり大酒するので、酒で頭を惡くすることを友人が注意すると、彼は少し位頭が惡くなつた方が反つていゝだらうと答へた。これは頭の明晰過ぎるのを持てあましての放言で、現代有數の大家とせらるゝ洋畫家は、皆この如く頭のみの明晰を持てあましてゐる作家はかりである。彼も宮家や華族さんからの依頼畫に殺到されてゐたら、頭の明晰も他に活用の途を得たことであらう。彼を知る畫人が、岸田も若し浮世繪の鑑賞に指を染めなかつたら、死期はあゝ迄急速には來なかつたかも知れない、と述懷した一言に、私は暗澹として胸をふさがれた思ひをした。彼が後年浮世繪の研究に依つて、その生活に酒色の暗影が射し、心身共に疲れしめたことを指したのであるが、木村莊八氏も彼の追悼の語の中に、どうせさう云ふ試みをしても、齒切れよく行く筈はなかつた、と云ふ意味のことを洩らしてゐるが、浮世繪の鑑賞に心を惹かれることは、最も日本趣味な情緒の世界に感動を寄せて行くことで、これがあつてこそ彼の晩年の作に爛熟せる玉のやうな腐爛味が加つたのであらう。かう云ふ藝術の心境にある洋畫家にとつ

ては、今の時世が惡かつたことだけがいけないので作家の罪ではない。南宋畫は支那の寫しであり、二科展あたりにある尖端的と云はれる新しい作品には、繪ではなくポスターか或は巴里畫壇の直譯でしかないものが多い。日本個有の純粹な作品として浮世繪に心を寄せたるがために、禍を招くが如きは、洋畫家の生活があまりにも社會的に獨立した安固な基礎を持つてゐなかつたがためである。岸田劉生と共に近頃の洋畫壇の傑物であつた萬鐵五郎は、前者よりも一層その作品は世に好遇されなかつた。この爲めに倘思ひ切りよく、あゝした主觀の外何物をも入れない我まゝな作品が描けたものと受取れる。しつかりした客觀的描寫の出來る技巧を持つた人が、嘘やしやれで、手の指先を杓子のやうにまるめ、五十女の裸身に少女の島田髷を結はせるなどは、想像もつかぬところである。これが漫畫にはならないので、笑ふことも出來ないのは流石に偉いものである。が、から云ふ作品が何のために作られて、これだけの底力の籠つた努力は、何に依つて生れて來たかを考へる時、あまりにも作家に報はれてゐるところがないので、この點ではこれ等の殘された作品がどんなことになつて行くのか、單に隱れた一人のものずきに拾はれると云ふ丈では、から云ふ興奮と命がけの仕事はあまりに犧牲が大きすぎる。萬鐵五郎よりも未完成で夭折した前田寛治も畢世の努力と藝術的興奮で其病生活を短く終へて了つた。有名無名この興奮を續けてゐる作家にはまだ／＼色々の展覽會に幾人陣んでゐるのか解らない。時代がどうであらうと、藝術的な血を擧げることを日本人は忘れることが出來ないのであらうか。

一方現代の洋畫展覽會の組織を考へると、これは洋畫家の職業としての立場とは無關係で、興行的に獨立したものである。美術館が出來たのと、巴里畫壇に範を取るのとなるべく解放的にと云ふので、入選の作品が數量共に漸次增大する。素人畫家と半成の畫家が無數に養成されて行く。半成の畫家も展覽會に出た以上は、食つて行けたければ、と云ひ出す。勿論買手はないから、無理押しつけの畫會があちこちに催される。石井柏亭氏が日本に作品公募の展覽會が多すぎることを述べた言説の中には、こんな半成の畫家の畫會の序文を澤山書かされるので、中には思はしくない分には、反つてそのことを戒めるやうな言葉を書いたが、それでもまだ何かの役にたつと見える、と云ふやうな事が書いてある。山本鼎氏は某美術雜誌の時評中に、洋畫家が無闇と多くなり過ぎて生活的に共倒れになることを憂ひ、誰かの調べによると、現在油繪を買取る需要者の經濟能力から見て、それに應ずる畫家の數は約五十人で足りるといふことであると報じてゐる。しかもこれ等の新進の作家を多數に世に生み出してゐるのは、二科展や春陽會展がその母體である（帝展もあるが）單に繪畫の鑑賞の方から見て

も、やつと辛々入選したと云ふやうな程度の作品が數限りなく會場に陳列されてゐることは面白い傾向ではないと思ふ。それは反つて大衆には展覧會の繪が解らないことになつて、迷はしめることになる。寫眞の代りに油繪をやらうとするやうな素人畫家を迎へてまで、入場者の數のみを神經にする、興行的なやり方が果して職業的な畫道のためにいゝことかどうかは頗る疑問とされる。一二回の入選に依つても新聞雑誌などでさわがれるので、半成の畫家の多く輩出するのは、日本人的な名譽慾の強い性格の現れであるかも知れない。洋畫が職業的に完全なものになつてゐないし、さりとて一流の作家は繪の押賣りもならず、皆副業、雜業を混合してやつと生計をたてゝゐる人が多い。それで展覧會出品を名譽慾の獲得と、世間がもつと面白いもの面白いものとおだてるのとに乘つて、題材にあて込みのものを撰ぶ傾向が見られてゐる。これも先きに云つた如く洋畫家の生活の浮腰の一つの現れである。さう云ふことは論外として、有爲な作家の氣味惡きまでの制作慾の熱度と、倦怠を知らない興奮は何かたゞのものではないと私は思ひ、そこに遠い將來をめがけての自信を抱いてゐる。さりながら今日素人に洋畫を試みる人が多くなつた事は、洋畫を技巧的に大衆が鑑賞する道となつてゐるのに相違ない。以上歎いてみたり、自信を語つてみたりして、煩雜な言説であるが、これが現在の洋畫壇の空氣であらうと思ふ。

樞密院の人々

馬場恒吾

近年の樞密院は内閣虐めの外に何の樂しみもなきかの如く行動してゐる。内閣虐めも時には一種の餘興たるを失はないが、それが常習になると、樞密院は内閣に對する脅威たると同時に、國民に對する脅威として見られる。現に輿論はさう見てゐる。それを自覺しないで、樞密顧問官が調子に乘り過ぎてゐるとすれば、其愚かや及ぶべからず、若し亦歴代の内閣を平身低頭さす事に依つて、彼等の優越感が滿足せしめられてゐるとすれば、其志の小なるに驚かざるを得ない。何となれば、内閣と智慧くらべをするやうな事は、國の大局を考へる人間のなすべき事ではないからだ。

誰れが樞密院をかうした形態に形づくつたか其志す所の經綸が餘りに小さくなつたが爲めに、吾々はそれは制度の罪か、人の罪かと考へさせられる。維新の元勳であつた伊藤博文、山縣有朋、西園寺公望などが樞密院議長をしてゐた時代には、樞密院は今ほど抱負が小さくなかつた。それは時代の變化にも依る事であらうが、此等の元勳は個人々々としては種々の缺點を有してゐたに關らず、彼等は其關心の重點を國家の利害に置いた。只内閣を苦しめて痛快がると云ふ程吝ちな仕事にこだわらなかつた。此所に變化の要點が發見される。

樞密院は其創設以來、幾多の變遷を經た。從つて其精神も亦變化するのも已むを得ないであらうが、其創設當初の使命は實に堂々たるものであつた。即ちそれは國會がまだ開かれざる前に、國會が依つて以て立つ所の憲法を議定する爲めに創設されたのであつた。樞密院議長は伊藤博文、書記官長井上毅、書記官伊東巳代治、金子堅太郎と云ふ如き顔振れであつた。

憲法を議定する樞密院會議は明治天皇の御前で開かれた。憲法の解釋に關して今でも一つのオーソリテーとなつてゐる所の『憲法義解』は樞密院議長伊藤伯著となつてゐるが、實は大部分井上毅が書いたも

のだ。其伊藤も井上も死んで其墓に苔が生へてゐる。だけれど其の時の書記官であつた伊東已代治と金子堅太郎が今尚ほ生き殘つて、樞密院に頑張る。何か問題が起る毎に、そもそも憲法制定の當時に於てはと、其所長講一席を缺かさない。彼等が口癖のやうに云ふのは樞密顧問は憲法の屏翰だと云ふ事である。屏の如く番をする意味であらう。新聞では之を通俗化して憲法の番人と書く。當時は微々たる書記官も今日は樞密院の巨頭になつた。尤も間に四十二年の歳月をはさんでゐるから、偉くなるのも不思議ではない。

　樞密院も初めの十年間は先づ其本來の使命を大過なく勤めた。だが明治卅一年に内閣を組織した所の山縣有朋は此樞密院の内容に多少の變化を加へた。山縣は當時自由黨を率ゆる星亨と妥協して、議會の方はどうかかうか切り拔ける事が出來た。然るに流石に或程度迄、時勢の流れを見るに敏感な彼れは、日本も將來は政黨に支配される時が來る。政黨嫌ひの彼れもそれ丈けは諦めなければならぬと考へた。然らば如何にして國家の重きに任ずる官僚の勢力を維持すべきか、其方法として此所でも彼れは星亨と交換條件を協定した。それは一方には議員の歳費を八百圓から二千圓に増してやる。其代りに政黨員に獵官運動をさせない爲めに、文官任用令を定める。それで官僚閥の勢力が濫りに外部から侵されないやうになつたものの山縣はそれでも尙滿足せず其文官任用令が容易に改廢せられぬやうにする方法を取つた、即ち彼れは陛下に奏請して樞密院に關する御沙汰書を戴いたのである。それは樞密院の權限を擴大する内容を有つた。今迄は樞密院に諮詢を必要としなかつた所の數個の項目が、其後は樞密院に諮詢されねばならぬ事になつた。此御沙汰書は世間に公表はされなかつたけれども政府部内では汎べて知られてゐる。親任官設置文官任用及分限、各省官制、諸學校令の改正に關する事は新たに樞密院の諮詢を要する事になつた。かうして山縣は樞密院を以て、藩閥官僚の最後の牙城たらしめる目的を以て進んだ。同時に、彼れは伊東已代治を樞密顧問官に推薦して樞密院に山縣系の勢力を張つたのである。山縣自身は戰爭のある時とか大臣になつてゐる時の外に大抵顧問官として、或は議長として樞密院に居た。

　所で山縣も後には寧ろ伊東に手を燒いた氣持ちになつた。何分伊東は一筋繩で制御出來る男でない。殊に彼れは金子堅太郎の外に今は死んだ菊池大麓、末松謙澄など一團となつて、盛んに憲法論と外交通を振り廻はす他の樞密顧問官は議論に於て、闘志に於て、伊東と太刀打ちの出來るものがなかつた。明治末期と大正初期の内閣がそれに苦しめられるのみならず、樞密院議長であつた山縣自身さへ、これではならぬと考へるに到つた。そして彼れは伊東と太刀打ち出來る政治家

を樞密院に入れて、それに依つて伊東の勢力を抑へんとした。即ち具體的に云へば、山縣は大隈内閣の内務大臣であつた一木喜徳郎が其人であると見込んで、一木を樞密顧問官(後の前議長)にしたのである。其結果として伊東は一時全く屏息して了つた狀態であつた。元よりそれは一木許りの力ではなく、背後に山縣が議長として、一木を後援したからでもあらうが、一木の學問と、物の見方が正しき事は樞密院を指導するに充分であつた。

所ろで大正十一年に山縣が死んで、清浦奎吾が議長になつた。大正十三年に清浦が出で内閣を組織した時、後任には平田東助がなりたかつたのだと察せられた。清浦が内閣を組織する事は後に護憲運動を喚起するほど不人氣なものであつた。それ故に清浦は大命を拜辭する積りで參内した所を、内大臣の平田に摑かまつて、内閣を組織する方がいゝと口說かれたのである。それで大命を拜辭する決心を有邪無邪にして華族會館に歸つて來た。そして不人氣な清浦内閣を組織したのである。所ろで平田が何故清浦に内閣組織をすゝめたかと云へば、清浦を總理大臣にし、自分が樞密院議長になる積りであると云ふ觀察が行はれた。清浦、平田共に山縣の子分であり、殊に平田は山縣の智慧囊であつた。それは故人の原敬も筆者に語つた事がある。山縣のする事で、善惡共に平田の献策に依らないものはないだらうと。樞密院の樞限擴張からそれを官僚の牙城にする迄、皆平田の智慧だと傳へられる。だから、平田が山縣の後繼者として樞密院議長になる事は、平田としては當然の成行きとしか考へられなかつたであらう。だが、平田に野心がある事が當時の新聞に素破拔かれた爲めに、後には平田も遠慮して、批難のない濱尾新が樞府議長になつた。

清浦内閣は半年の壽命で護憲三派の爲めに倒された。後は加藤高明の三派聯立内閣であつた。然るに此内閣の時に濱尾議長が自分の邸の中で、幃の下の焚き火の中に落ちて不慮の死を遂げた。其後任に矢張樞密院議長としては大物の政治家を持つてきたい。それには山本權兵衛か清浦奎吾がよいと云ふ連中があつた。薩派の連中は盛んに山本權兵衛の運動をした。今日樞密院で虐められてゐる財部海軍大臣は、其當時も海軍大臣であつたが、彼れは山本權兵衛は蓋し承諾はしないであらうが、一度は樞府議長をすゝめて見る方がよいと云ふ意見を述べた。

總理大臣の加藤高明は樞密院が政治的に活動するのは立憲政治の統制を紊る。だから、大物の政治家を樞府議長にすることは百害あつて一利なし、政治的貫祿に乏しき所の純眞な學者肌の人がよいと云ふ意見を固持した。それで元老の西園寺公とも相談して當時副議長であつた所の學者の穗積陳重を議長に推した。穗積は自分は政治上の經驗が

ないから、副議長には政治家が欲しい、それには岡野敬次郎博士を得度いと申し出た。岡野は今は故人になつたが、加藤友三郎内閣の司法大臣として副總理格に見られ、山本權兵衞内閣の文部大臣であつた人である。彼れが生きてゐる時、私は屢々彼れに接觸したが、當時の政治家で、彼れほど政治の動きに對して正しき視方をする人はないと思つた。大抵の政治家は意見を立てるに自分に都合のいゝやうに、我田引水の議論をするものであるが、岡野に限つては、凡べての問題と人物に對して、虚心坦懷に、依估贔屓なしの批判を下した。人間は親切であつたが、判斷は曲げなかつた。元老の西園寺と總理の加藤が總がゝりで岡野を說いて副議長にした。穗積議長よりは此副議長の方が光つて見えた。惜しい事には副議長になつて、三月を經たない内に病氣で死んだ。岡野が死ぬると、今の樞府議長である倉富勇三郎が其後任になつた。倉富は朝鮮の司法部長、寺内々閣の法制局長官をやつて、穗積とは學者仲間の友人であつた。倉富を副議長にする事は、穗積の希望に依つて、内閣が決定したのである。

大正十五年に穗積男も死んだ。其時は加藤高明も死んで、若槻禮次郎が憲政會内閣の首相であつた。そして樞府議長の後任を誰れにするかと云ふ問題を解決しなければならなかつた。例に依つて山本權兵衞、清浦奎吾と云ふ如き大物を推薦する運動があつた。憲政會内閣の方針は樞密院の貫祿を漸次に低下して、樞密院をして内閣の脅威たらしめないと云ふ事にあつた。然るに、此時分から樞府議長に純學者的の人物を持つて來る事にも又一つの弊害がある事が稍々明かになつた。樞密顧問の中には伊東伯子の如き古强者がある。議長の貫祿が穗くなると之らの老論客は恰も無人の地を行くかの如く切りまくる。殊に伊東を掣肘し得る一木喜德郎は前年から宮内大臣になつて、最早樞密院には居らぬ。それ故に現狀の儘で進めば、樞密院は内閣以上の内閣として、立憲政治の順調な發達を阻害しないとも限らぬ。それ故に茲に樞府議長の後任を定めるに當つて、有力にして公明正大な政治家を持つて來る必要があると云ふ意見が述べられた。若槻はそれを當時司法大臣であつた江木翼に相談して、それには一木宮相を樞密院に呼び戻して、樞府議長に据ゑるより外の方法はないと決した。そして若槻は其案を携へて元老西園寺の承諾を求めに行つたのである。所ろで西園寺はそれを承諾しなかつた。西園寺は宮内大臣に一木の如き正しい人物を得たと云ふので一安心してゐる所であつた。其一木を宮中から拔かれる事はとても承諾出來ないと云つた。西園寺が承諾しないが故に政府は仕方なしに倉富副議長を議長に、顧問官平沼騏一郎を副議長に、所謂繰登りの人選で我慢せざるを得なかつた。翌年若槻内閣は果して樞密院の爲めに潰された。平沼が委員長であり、伊東巳代

治が牛耳る所の、樞密院の精査委員が、臺銀救濟に關する緊急勅令案を否決したとき、樞密院の他の顧問官もそれに追從し、議長も亦それを壓へる事が出來ず、遂に內閣辭職、財界動亂に往つた。倉富勇三郎氏は蓋し善良な人だ。併し到底伊東などの敵ではなかつた。

伊東の努力は其精力と努力の結晶とも見られる。彼れは法制と外交に關する精密な智識と調査を所有する。そして彼れが組立てる議論には相當な條理がある。これ丈けでも大抵の人は敵はぬが、彼れは其上に樞密院の院議を纏めるには勞を厭はぬと云ふ風がある。彼れが何かの問題で意見を決めると、此の顧問官の處へ自分で電話をかけてこれ〳〵の問題に關して自分にお話し致し度い事があるから、一寸序の節に拙宅へ御立寄りを願ひ度いと云ふ。大抵の顧問官はそれを拒絕し切れない。さうして伊東の處に行くと、伊東に說得されて、伊東の說を持ち廻る役を買つて出る。堂々たる顧問官で、事實は伊東の使ひ走りをするものさへなきにあらず。省みてさうでないと云ひ得る顧問官は出色の人物である。

今回の海軍條約問題では、初めは伊東は乘り出す意志はないものと諒解されてゐた。自分は今度は精査委員にもならぬと云つて居つた。然るに或日平沼副議長と一時間半も會談した後、彼れは精査委員長になつた。それから直ぐ後に、倉富議長から、政府に對して、海軍巨頭の兵力量に關する奉答文を見せろと云ふ要求が來た。政府はそれを拒絕した。だが此奉答文の提出を要求すると云ふ案は伊東の智慧だと諒解されてゐる。樞密顧問は事實としては奉答文の內容を知つてゐる。だから、改めてそれを見る必要もない。只政府がそれを見せともなかるであらうと察して、故らにそれを見せろと要求した。此皮肉な掛け引きは伊東の性格を丸る出しにしてゐる。

伊東と相許るしてゐる如く見えるのは副議長平沼騏一郎である。

彼れの出世の初めは第四次伊藤博文內閣の時からだ。司法大臣金子堅太郎、次官波多野敬直の下に彼れは僅かに奏任級の司法官であつた。所ろが司法官增俸問題が起つて、それが司法官のストライキ（連袂辭職）迄進展した。後に貴族院の鬪士、桂（第三次）內閣と寺內內閣の農商務大臣になつた仲小路廉などが此ストライキ組の先達であつた。平沼は其時反ストライキ側の一方の旗頭であつた。今から云へば、ストライキ破りの先頭に立つたのである。ストライキ組が辭職した後に、彼れは民刑局長になり、第二次西園寺內閣に松田正久が司法大臣であつたとき、彼れは次官になり其次ぎの第三次桂內閣の時に檢事總長になり、大正十二年山本權兵衞內閣の司法大臣になつた。

彼れは政友系の政治家と見られて居た。其原因の一つは大隈內閣の

時の大浦事件の取扱ひ方にある。彼れは其時檢事總長であつた。今の政友會內の巨頭鈴木喜三郎が司法次官であつた。司法大臣は尾崎行雄であつた。政友會の村野常右衞門が大浦內務大臣を瀆職罪として告發した。大浦は自分には斷じてそんな事はないと云ふので、內閣は安心してゐた。併し平沼檢事總長、鈴木司法次官が、チヤツト取揃へて持つて來た證據には、最早大浦が動きの取れない罪狀が上つてゐた。ことに到つたのは、尾崎司法大臣が餘りに司法部內に無勢力であるからだと云ふ批難があつた。併し、勢力があつても、なくつても、かう證據が揃つては、司法大臣の力ではどうする事も出來ない。大浦は失脚して隱居になる。鈴木司法次官はそれで刑の目的は達せられてゐると云ふので、起訴猶豫にする事に盡力した。平沼と鈴木が政友系の棒組と見られる事は此事件に政黨的色彩が濃厚であつたからだ。

平沼は現在に於ても、民政黨よりは政友會に同情があるやうであるが、其主張は寧ろ政黨否認に近い。彼れは目下の日本は經濟國難に直面してゐる。此國難は擧國一致の結束努力を以てしなければ突破する事が困難だ。然るに現在の政情を見ると、政友會が內閣に居れば民政黨が邪魔をする。民政黨が內閣に居れば政友會が邪魔をする。天下を二分して、常に互に爭ふ。それでは國家が發展しない。だから此所に政局轉換を行つて、擧國一致の政府を作る必要があると云ふのである。それでは誰れに天下を取らす積りでゐるか、それは明かでないが、彼れの云ふ所には半面の眞理がある。併し、其積りで現在の濱口內閣を壞はす。後とは明白に犬養內閣になる。平沼が內閣倒壞の目的は其所になくとも、事實は政友會の爲めに民政黨內閣を潰してやると云ふふ事の外に出でない。

二三年前までは平沼を總理大臣候補者として擔ぐ連中もあつた。併し政黨政治の基礎が漸次鞏固になる如く見える今日では、其方の運動は下火になつた。平沼の希望は宮中の重臣となる事だと世上には傳はつてゐる。だが、元老の西園寺が健在である間は此希望は實現しさうにない。

平沼が現在の政黨の弊害に憤慨するのは一應の眞理なきにしもあらずで、それは誰れでも同感する。併し政黨に依る政治に代るに、或他のよりよき政治組織を築き上げる事は、大工が屋根をいぢる如く、政治機構の上の方に小細工を施す事に依つて成功するものではない。それは政黨政治が據つて以て立つ所の土臺を動かすこと、即ち無產階級から起る所の眞劍な政治運動の力に待たねばならぬ。それでなくして、反動的思想に出發する政黨否認運動はよく行つてムソリニのファシスト專制に墮落するのみだ。ファシスト專制は政黨政治以上に民衆の自由を窒息せしめる事は議論のない事である。

伊東已代治は平沼と結んでゐる。だが、政治上に於ける彼れの意圖は平沼のそれとは異つてゐる。伊東は元老の西園寺の死後を思つてゐる。西園寺が生きてゐる間は、元老が内閣更迭の場合の、後繼内閣の首相を推薦する。だが、西園寺が死ぬると、後繼内閣の首相を誰れが推薦するかと云ふ問題が起る。内大臣、宮内大臣などに御下問あらせられる場合には、樞密院議長副議長も其議に參加せしめられるかもしれない。さうなれば、樞密院を動かす力のある伊東はさしづめ今の西園寺程度の權威を有つに至る。これが伊藤の眞意だと恰も伊東の腹の底まで見透した如く云ふものもある。其眞僞は判らぬが、一般人民としての吾々は、小姑根性の樞密院に、吾々の政府を掌る内閣總理大臣を選定されては、それこそ助からないと觀念する。

金子堅太郎が侃々諤々の雄辯を振つたと屢々新聞に出る。彼れは樞密院書記官時代から伊東と競爭してゐた。政治的機略に於て其時も今も伊東の弟分であつた。伊東唱へて、金子和するとしか外觀は見えない。日露戰爭の時、彼れは日本の宣傳演説をしに米國に行つた。ルーズヴエルトの友人であつた。英語演説は實際に上手だ。日米親善が彼れの專賣特許であつた。若し彼れが今回の海軍條約に反對してゐるとせば、日米親善はどうしたのかと、世間は一寸戸惑ひするであらう。

今回の軍縮問題で、伊東の相談相手と見られてゐるのは、田健次郎である。これは寺内々閣の遞信大臣、山本震災内閣の農商務大臣であつた所の堂々たる政治家である。大隈内閣を潰した事に於ては彼れは殊勳者の一人である。大隈内閣の時の御大典に際して、政客が悉く京都に集まつたとき、彼れは平田東助、後藤新平などゝ謀つて、大隈内閣を倒壞する作戰計畫を定めた。本來ならば支那問題で攻擊するのであるが、外交問題で爭つては後が面倒である。だから、攻擊の題目は減債基金を三千萬から五千萬に還元せよと云ふ主張で、貴族院で戰ふ。それには元老山縣の諒解を得て、内閣を潰す所迄行くと云ふのであつた。此計畫が成功して大隈内閣が潰れて、寺内々閣が出來た。此陰謀に參加した連中は、此戰ひを還元の役と云つて得意になつてゐた。田は官僚政治家中の智慧者である。其元氣もまだ衰へない。だが、今の時代にかうした政治家が樞密院で活動する事は、現代人に採つては限りなき憂鬱の種である。

樞密院は以上述べた如く、伊東、平沼、金子、田と云ふ如き政治家の一團である。併し樞密院全部が政治家肌の人ではない。富井政章、山川健次郎、櫻井錠二と云ふ如き純粹な學者肌の人もある。富井は硬骨で、伊東から御立寄りを願ふと云つても立寄らない一人である。久保田讓、江木千之、石井菊次郎は何れも曾つては大臣をして居り、學者と云ふよりは寧ろ政治家であるが、各々獨立獨行の意見を有つてゐ

て何人にも頤使されない。だが樞密院が問題になるときは、何時でも前の政治家の一團が活躍するのである。

第一次山本權兵衞内閣が行政改革を企てた事がある。軍部大臣が現役大中將に限るとあるのを現役でなくともよいと云ふ事にし、文官任用令を改正して、法制局長官、警視總監、警保局長などを特別任用が出來るやうにする。此改革は最後には成功したのであるが、樞密院は一時これに反對せんとする氣勢を示した。其時内閣は若し樞密顧問官にして、政府の政策に反對するものがあるならば、總理大臣は上奏してそれらの顧問官を免職にすると脅かした。それで、樞密院は此行政改革に反對しなかつたのである。

内閣總理大臣は樞密顧問官の進退を上奏し得る。從つて政府の政策を阻止する顧問官を退職せしめる事が可能である。それ故に樞密院が跋扈するのは好ましからぬ事だと云ふが、それを跋扈せしめるのは内閣の決心が弱いからである。樞密院が歷代の内閣を苦しめて痛快がるのは、局外から見ても苦々敷き極だ。何時迄もかうした政治上の遊戲が許るさるべきでない。今度の條約問題は何の方面から見ても樞密院改革の絶好の機會を與へる。内閣が樞密院と正面衝突をすれば、内閣が強いか、樞密院が強いかの永年の問題が初めて解決される。さうした解決のある事は、日本の政治組織を簡明にする。だから吾々は今云つた正面衝突を何よりも歡迎する。只吾々の恐れる事は、内閣對樞密院の抗爭が新聞では業々しく傳へられてゐるが、内實は案外に泰山鳴動して鼠一匹に終りはせぬかと云ふ事である。これほど内閣に戰爭氣分を起さしてそして、樞密院がすら〳〵と海軍條約に贊成しようものならば、内閣の方が肩すかしを喰つた形で、甚だ器量を下げる。さうした相手の裏をかくやうな事は、今の樞密院が好きさうな作戰である。

樺太視察所感

松田源治

拓務省は昨年新設された許りの新らしい役所である。從つて如何なる事項を管掌する所か明瞭に知らない人も有るかと思ふが、――拓務省は朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳樺太廳及び南洋廳に關する事務を統理し南滿洲鐵道株式會社及南洋拓殖株式會社の業務を監督し、移植民に關する事務及海外拓殖事業の指導奬勵に關する事務を管理して居るところである。從來朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋群島等我が外地に關する事務は、內閣總理大臣の下にあつた拓殖局が掌つて居つたが其の組織が充分でなかつたため、此等地域の統治に關する大綱を統べ其の繁榮と福祉とを圖るに缺くる處少くなかつたのである。それで昨年特に一省を設けて主務の大臣を置き、以て中央に於て此等地域の利益を代表せしめ、一層之が統治事務の進展を圖ることと成り、私が昨年拓務大臣として大命を拜するに至つたのである。私は拓務大臣として就任以來、此の責貿を果すために奮勵しつゝある次第であつて、取り敢へず拓務行政の運用を圓滑ならしむる爲め、所管に屬する外地を順次視察することとし、昨秋は滿鮮地方の視察、又今回は樺太を約二週間に亘つて視察して來たので、其所感の概要を述べたいと思ふ。

先づ第一に樺太の產業並に拓殖の問題に付て述べるならば、同地に於ける最も主要なる產業は云ふ迄も無く林業である。然るに此の森林に關して確たる政策を樹てて其の永久保續を圖ると謂ふ事は、殆んど樺太領有以來忘れられ勝ちであつた。從つて領有當時は正確なる數字は不明だが、尠くも十億萬石を超えて居つたと思はるゝ森林蓄積も、其の後濫伐、山火事、虫害其の他の原因に依つて著しく減少した。そして現在では僅に四億六千萬石內外を殘すに過ぎないと謂ふ狀態である。今に於て森林政策を確立し、樺太の富源たる森林保續に關する方策を樹立するに非ずんば、將來由々敷大事を見ること無きを保し難いのである。今回私が實地に付き視察する所に依れば山火事の被害を

被むる所以外に於ては、天然更新の成績が極めて良好であるから、槪成ある施業案を編成し、伐採量を適當に制限し、尙天然更新の方針を立て、なほ足らざる所は人工植林をも加へて造林計畫を定むると共に、山火事の防止に務むれば、樺太森林の將來は決して憂ふるに足らないのである。當局も此點に留意し本年より新に林務省なる獨立の林政機關を新設したるのみならず、別に森林警察官の增設に關する官制改正も其の手續中である。斯くて林政の合理化と山火事防止との爲め一段の努力を拂ふと共に、一般民衆の覺醒をも促し、官民協力一致緊張せる精神を以て森林愛護の實を擧ぐることに力を盡して居る。幸ひ本年は山火事も著しく激減したので、誠に國家の爲喜ぶべき現象であると思ふ。

次に世界三大漁場の一たる樺太の水產業であるが、其の漁獲及製造額を合せて現在年額約二千萬圓の生產を示して居る。其の重なるものは鰊、鮭、鱒、鱈、蟹、昆布等である。尙此の外世界に唯三ヶ所の存在たる膃肭獸の繁殖地たる海豹島がある。膃肭獸に付ては日、英、米、露四國協約に依つて年々の捕獲高を制限して其增殖を保護して居る。

近時海流の變調に伴ふ魚の種類の變動に依り、漁業も舊來の常套を墨守するを許さゞる狀勢に至り、從つて之れに處するの途は漁獲の利用價値增進の問題と共に、甚だ重要であるが、專門的に一層研究を積めば將來漁獲の種類及數量を增すことを得ると信ずる。又遠海漁業の根據地として必要なる船澗並に漁港の修築改良を要するもの尠くないので、此方面に付ても財政の許す限り其實現を期する心要がある。

鑛山業としては石炭を以て第一とするが、其の埋藏量實に十二億噸に達するのである。尤も現在の所大部分は所謂封鎖炭田として留保してあつて、採掘して居るものは僅に其の一部分であるが、何れ內地の經濟狀態、石炭の需給狀況等を考慮し適當なる時期に至らば之を開放して、樺太の一大富源たらしむるに至ることは勿論のことである。

尙石油も其地質構成上、其の存在が豫想せられて相當の望みがある今試掘中に屬すけれども、一度油脉の探求に成功すれば、之れ又將來有望なる產業となることは疑ひなき次第である。

次に農業であるが、アイヌ人は樺太を稱して「サハリン、モジリ」と稱してゐる。其の意味は「平原多く波の起伏するが如き國」と云ふのであつて、地勢は概ね平坦にして七十二萬八千町步の農牧適地を有し、地味豐饒なる所は數ヶ年間無肥料にて作物の栽培をなすことも出來ると云ふ有樣である。夏期に於ける氣溫の相當に高いこと、及び日照時間の長いことは作物栽培上非常に良好なる條件となるもので、林木の如き永年植物の發育遲々たるに反し、一年植物に屬する各種農作物の生育の旺盛なることは、實に驚く程である。例へば丈六尺に餘る

菜種子、周圍に於ても長さに於ても麥酒瓶の二倍大に及ぶ大根、一丈に餘る蕗等を見ては何人も其の生育振りの旺盛なるに驚かぬものはないのである。

狀況斯くの如くであるが人口は粗にして、開拓の業猶未だ進まず、農作物栽培面積二萬町步、年產額僅かに四百萬圓を算するに過ぎない有樣である。

各種農作物中最も多く栽培せられて居るものは燕麥であつて、其の成績も頗る良く、島內の需要を滿して尙內地への移出を見つゝある次第である。又將來最も有望なるは製粉原料用の小麥である。樺太產小麥は收穫量に於ても相當の成績であるのみならず其品質に於ては本邦產品中の冠たるものであつて、組成に於ても其の製粉步留に於ても外國產優良品に比し毫も遜色なきものである。又精糖原料の甜菜は從來試作の結果に依ると、其の反當り生產額に於ても又含糖率に於ても優に北海道產を凌駕するものがある。

現在、世界的の生產過剩に依り、精糖界は多少沈靜の狀況にあるが、日進の勢を有する吾國人の砂糖消費量の增加に徵すれば、近き將來に於て臺灣及び南洋糖を以てしては供給不足を告ぐるに至る懼れがある。其際に於いては、樺太の甜菜糖は北海道產と相俟つて、吾國砂糖の自給自足上大なる貢獻をなすに至るものと信ずる。要するに小麥に於ける製粉事業、甜菜に於ける精糖事業の勃興は兩々相俟つて將來樺太に於ける重要產業の一たるべきことは疑ひなき所である。

此外食用として美味なる馬鈴薯は一面冬期に於ける家內工業として、澱粉製造の原料となり、又豆類、各種の蔬菜類は生食又は罐詰用として品質極めて優良なるものである。其他飼料作物又は亞麻等樺太の風土上最も適する農產が少くないのである。

理化學研究所の鈴木博士の發明になる合成酒「利久」は、全く米を用ひずして、馬鈴薯等の澱粉を主なる原料とし、之れに日本酒特有の甘味と芳香とを添加せるものであるが、相當の酒通でも普通の淸酒と識別することが困難な位の出來榮である。樺太の馬鈴薯は品質優良で食用として極めて美味であるが、若し供給に餘りを生ずる場合には『利久』の如き合成酒の原料とし、又酒精或はウオツカ等の如きものとして海外に輸出することとすれば、一つは食糧問題解決の一助となり、他は又國際貸借改善に資する所が少くないと思はれる。

尙水稻は目下試作中に屬するが、適種の選定と風土に適應せる栽培法の改良とに依つて、將來相當の見込あることは今迄の實績に徵して明である。

樺太天與の平原と植物の發育旺盛なるとを利用すれば、牧畜業も亦頗る有利に經營することが出來る。從つて酪農事業も起し得ることと

思ふ。

牧畜業として樺太に特筆すべきものに養狐業がある、加奈陀產を原種とする銀黒色の狐を飼養するもの現在一千頭に及ぶ。現に婦人裝身用として高價なるものは一枚千圓に値するものもあつて農家の副業としては極めて有利であるのみならず、其の得意先が英、米兩國に在る關係上、之亦國際貸借改善の上にも有望なる事業である。如斯樺太は其の自然の資源を利用して、他の追從を許さゞる獨特の農畜產業を營むことが出來る。樺太廳當局の推算に依ると所定の拓殖計畫完成の上は、農畜產の總額は優に二億圓を超ゆる見込なりとのことである。斯くの如き時機の到來するのも餘り遠くないと思はれる。

今申述べた如く、農林畜產水產及鑛業等原始產業の天惠を有する樺太は、現在に於ては其の富源を開發するに人力足らず、企業をなすに必要なる金融の機關をも缺く爲め「パルプ」工業を除くの外、凡ゆる產業は遲々として進まざる狀勢にあるが、之れは樺太領有の沿革に鑑み誠に遺憾に堪へない次第である。地に幾億の富源を藏して人の開拓するを待つこと既に久しく、要は健實勤勉なる移民を招致して、其の安住定着の途を講ずるを以て焦眉の急務とする。

其故に樺太廳は種々の方法に依つて、移住者の誘致並に保護獎勵に努めつゝある次第であつて、現に右の目的の爲め每年十二萬八千圓の豫算を計上して居る。

移民には二種類あつて、何等の制限なく任意に移住する自由移民と、一定の資格及條件に適合するを要するものとがある。此の後者に屬するものは樺太廳に於て選拔して一定の個所に集團移住せしむる集團移民である。

移民には移住に際し、又移住後に於て各種の保護獎勵の方法が講せられて居るが、移民に取り最も有利なることは、移住の當初無償を以て貸付せられた十町歩の土地が、一定の年限内に其の七割まで開拓すれば、無償で移住者に讓與せらるることである。即ち移住者は七八年間の勤勞に依つて十町歩の地主となり得る譯である。

要するに樺太將來の發達は移住民の安住定着に俟たねばならず、住民の安定は農業の發達に依る外はないのである。此の意味に於て樺太開發の鍵は農業の振興に在りと云ふも敢て過言ではないと思ふのである。

次に樺太の交通施設は相當發達して居るが、尙整備を要するものが多々あるは勿論であつて、東西兩海岸鐵道線の延長、東西兩海岸の連絡鐵道、道路の新設、路面の修理等は其の計畫を進捗せしむるの必要がある。又港灣の修築に付ても現在の狀態では不十分であるから既に港灣計畫あるものに付き、之が完成促進を要するもの、及び新に港灣修築に付き考慮を要するもの等も相當ある。だから其等は何れも其の緩急の度に應じ國家の財政狀態の許す範圍に於て之が實現を期せんとするものである。

抑も外地卽ち我が內地領土に對する統治方針に就ては、成る可く各

外地の特殊の歴史を尊重し、其の實狀に適應したる行政を行ふ事が最も必要であつて、我が新領土は皆何れも夫々特殊の事情があるから其の住民構成の狀態、各種產業上の條件、文化發達の程度等を充分考慮して、之が統治上の根本方針を樹つべきものである。

私が拓務大臣として就任以來、順次所管の外地を視察するのも主として右に述べたやうな各地方に適應せる統治方針を定めんとするためである。

樺太は最近の調査に依ると人口約廿五萬餘にして、內二千人を除けば他は凡て內地人である。從て市街の形態、生活樣式、風俗慣習等凡て內地に殆んど異なる所なく視察旅行者をして、決して身外地に在るの感を抱かしめないのである。右の如き事情であるから樺太統治に關しては、所謂內地延長主義が殆んど文字通りに當てはまるのである。唯現在の如き綜合行政と特別會計とは尙當分之を維持するの要あるは勿論であるが、各種法制上の見地等に於ては出來得る限り內地と同樣にすべきであつて、現に內地に施行せらるゝ法令は殆んど樺太に施行せられて居るのである。加之他の外地に施行せられざる裁判所構成法、陪審法、兵役法、行政訴訟法及訴願法、町村制等も樺太に行はれて居るから、樺太住居の年來の希望たる衆議院議員選擧法の施行に就ても充分考慮すべき價値ありと思ふのである。

世間往々樺太を誤解し、樺太と云へば森林以外としては利用極めて困難なる洲北の荒野であつて、而も其の森林も大部分は既に荒廢に歸し居ると云ふが如き誤たる感想を抱かれ勝であるが、事實は大に異るものがある。土地は極めて豐饒だから各種農作物も能く生育し、內地人の移住地として誠に適當である。而して住民も質實敦厚と認めらるるもの多く、其の教養の程度も亦決して內地に比して遜色はない。現に昨年施行せられたる普選に依る町村會議員の選擧の如きも買收僅に五件棄權率一割六厘と云ふが如き非常なる好成績を示したのである。斯くの如き各種の美點は將來も充分之を保持擴充せしめ自治の完成に務めしめんと欲するものである。

尙樺太にはアイヌ、オロッコ、ギリヤーク等の先住民族も現に約二千人居住して居るが、此等の民族は何れも文化の程度低く、又我が帝國に對し絕大の信賴と忠誠を捧げ居るものである。よつて此等弱小民族に對しては充分保護教養の施設を行ひ、之が生活の向上を計り克く我國としての責務を盡し度き意向である。

樺太の最北端卽ち日露の國境は、正に北緯五十度であつて、之は佛蘭西巴里と同一緯度である。潮流の關係にて氣候の差異はあるが、歐羅巴人は此の北緯五十度の所に巴里の如き雄大華麗なる大都會を建設した。我が國民も巴里と同緯度なる樺太を立派に開發し得られないと云ふ理由はない。我民族はよく大自然と戰つて已に臺灣に於て熱帶を征服した。今又樺太に於て更に亞寒帶を征服し、其の保有する富源を開發して、益々日本民族の進展を計ると共に依て以て世界の福祉に貢獻し大國民たるの實蹟を示さなければならない。

九條武子さん

柳原燁子

最初の會見

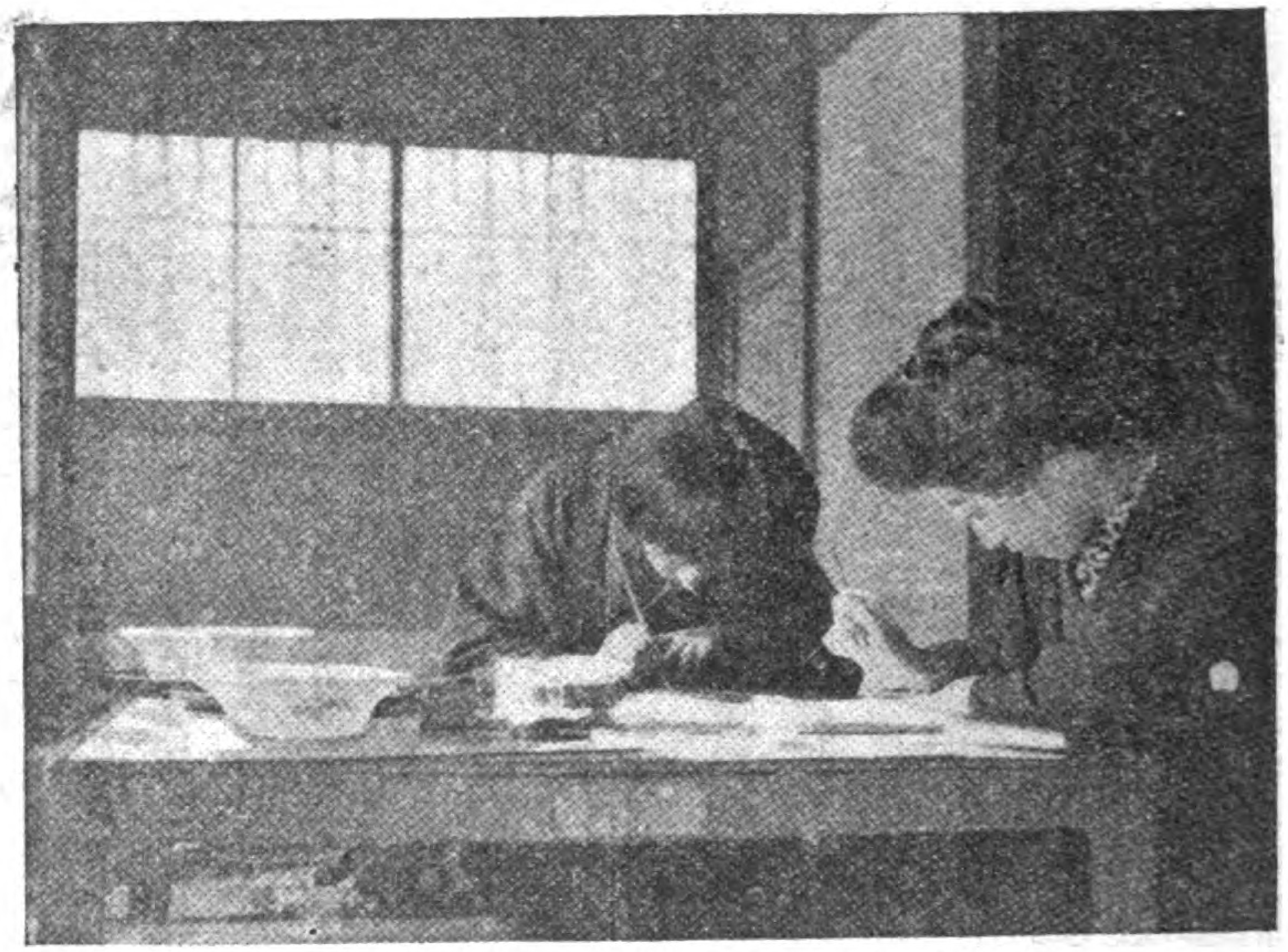
たあさん！私は斯う云つて彼女を呼び馴れてゐました。彼女はよくさう云つてゐました「貴女と私とは、いつも御神酒徳利見たいに並べられて――」と。年頃から、身分の生ひ立ちから、歌を作るといふことまで、よく似た二人として世間では一對のものゝやうに眺められてゐた時代もありました。私が彼女と最初に會見したのは、丁度夏の頃、折柄白い蓮の花がお池に咲いてゐる、あの西本願寺の奥殿の中でありました。その日早くから訪問することを定めてありましたので、どこから聞き知つたか新聞社員が寫眞班をつれてやつて來たりして、二人はその蓮の池の側に並べさせられて寫眞をとられたりしました。この日、私達は最初の會見でありましたけれども、彼女についての色々のことは、ずつと前からよく聞き知つてゐたのでした。彼女も亦、私の子供の時からの話を、よそながら聞いてゐたと云ひました。それは彼女の父光尊師は私の父の前光とも交友のあつた仲でしたし、彼女の父の家と、私の父の家とは、同じ流れの日野家の一族ではあり、そして彼女の父の弟の妻となつてゐるのが、私の父とは從兄妹同志の間柄でありましたから、どこかで縁はつながつてゐないこともありませんでした。それで彼女即ちたあさんから云へば義理の伯母さんから、私はよくたあさんの話を聞き傳へてゐました。それによると、たあさんは美しい人で、何でもよく出來る人、文字も美しく上手に書くし、茶の湯生花も長年その道の人についてゐるし、裁縫もやれば繪もかくし、編物も何でも器用に出來て、洋樂も一寸やれるし、謠曲も、いつか私も聞かされた事がありました。こんなにすべての藝能に達した人は珍らしいといふ話だつたのでした。

何でもそれは七月の頃だつたと思ひます、晝間は暑いので私は夕方かけてたあさんを初めて訪問したのでした。その時、御主人の良致氏

爵はかれこれ十年ばかりも御歸りがなくて、たあさんは一人淋しく本願寺の御殿の中に置き去りにされたやうになつてゐるといふ時でした。

昔々の古びた客殿、大きな襖が立てつけてあつて、大方何とかいふゆゐしよのやかましい何々の間とか、いふのでせう、古びたみすがかけ渡してあつて、その高麗べりの疊の上に、これは又無雑作に、椅子とテーブルとが置かれてありました。そこに袴羽織をきちんと着た家來の人がまるで護衛でもしてゐるかのやうに突立つてゐました。今でも昔風の大名の家庭なんかに行くと、次の間に家來がちやんとひかへてゐる處もあるのだと聞いてゐましたので、本願寺もやつぱりそのしきたりを壊さないでやつてゐるのだなと、思ひました。

丁度この少し前、彼女は彼女の處女歌集金鈴を出版したばかりの時だつたので、私は金鈴の話をし、彼女は私の歌集踏繪をよんだ事を互ひに話合ひました。兼ての豫備智識もあつた爲めか二人は初めて會つたやうにもなく、いとくつろいだ氣持ちにならうとはしてましたけど、そこに默つてまるで木像のやうに突立つてゐる家來の方を見ると、私も何だか四角にならないわけにはゆきませんでした。斯うした嚴格な家庭の中でも、彼女の兄君の夫人であつた籌子さんなんかは、とても砕けたことの好きな人で、夫光瑞師のお留守には侍女に三味線をひかせたり、お踊りを踊つたり、時には皆を集めて芝居をやつたりもするのだといふ話をよくきいてゐました。家來と云つてもこゝの家のは多く坊さんなんですが、本願寺の坊さんといふものはとても粋なのが多くて、役者の聲色もやれば、素人芝居の舞臺の背景の畫をかく器用人も居、三味線おどり



燁子夫人(右)と武子夫人(左)

の達者な女中も居るといふわけで、それは賑やかなものだといふことです。壽子さんも器用な方で、梅の春なんか敎へたお師匠さん格の女中よりも見事に踊つたといふ話もきゝました。だから今こゝに家來がいくら四角張つてはんべつてゐても、さう窮屈がることもないんですが、さう云へばたあさんだつて、其日は何となしによそ行きの顏をしてましたし、私は大して話合ふこともなしに本願寺を辭去しました。

この初對面のあつた後、大阪毎日新聞社から頼まれて、たしか二人の會見記見たいなものを、たあさんと私とは、書かされたやうに覺えてゐます。けれどたあさんのこの文章は、其後彼女が出版された書物の中にも入つてゐないやうでした。

それから京都へ行く度毎、私は彼女を訪れました。後ではあの四角張つた客間にも通されず、私はそのまゝ、たあさんの侍女に案内されて、彼女の居間の方に通されるのが常でありました。勿論そこには、木偶のやうに突立つてゐる家來の顏は見えませんでした。どうかして私等なんか行くと、それこそ追拂でも出さうな、しんとした淋しい廊下、庭の中を通りぬけて、離れ家になつてゐる彼女の部屋に行きつくのでした。こゝこそ彼女が十年忍苦とやらの侘住居だつたのでせう。

彼女の戀愛觀

或る日の夕方でした。京都は木屋町の料亭に、二人は食事をともにしたことがありました。その時初めて彼女の戀愛觀、否、人生觀といふものを聞かされました。二人が話合つたのはまあ、こんなものでありました。先づたあさんのいふのに、「私達二人のやうに、昔の因習道德に縛られて、手も足も出ないやうなのは、本當につまらない、短かかるべき一生を、こんな風にして終つてしまふのかと思ふと、何といふ情けない事だらうかと思へてしかたがないのだ」と、その時、私は又こんなことを訊ねて見ました。

「貴女、御主人樣の男爵から、ちよい〱お便りはあつて？」

「ちつともないの、もう久しいこと手紙一本來はしませんのよ、でも、私、彼の人を待つてはゐません、本當はいつそ離別してくれつて云つてやつたんですけど、何もそれについて返事はよこしません」

と云ふのです、私もそれは無理もないことだと思ひました。斯うして、ああ、何年となく離れ住んでゐて、どちらからも大して辛いとも、何ともない夫婦なら、さつさと別れてしまつた方が、いつそ、さつぱりとしてよかないかと私も相槌をうちました。あの人の身分として、身も世もあられぬ程に戀しい夫なら、後を慕うて外國へ行く位のこと、まさか旅費に行きつまるといふことも、いよ〱となれば、あの本願寺といふ大きな背景をもつてゐる人ですもの、そんなに苦勞し

なくたつてよい靜な人です。と云つて、家庭のわづらひに引かされる子供もとう〳〵一人も生まなかつた人ですし、一體何が彼女を、そんなに泣かせませう。と、斯ういふと、あの金鈴に出てくる切々たる思ひ、まるで想夫戀見たいな歌が問題ですが、私は何も云ひ度くはありません。たゞ世間では孤閨を守ること十年、如何にも男爵一人を戀ふ人のやうに傳へられてゐるのが、少しお氣の毒だと思ふのです。

あの人がもしや朝顏日記の深雪のやうに、夫戀しさにしゞふめそめそ泣いてゐるんでしたら、何の英國のロンドン位、あのどこか氣強い人のことですもの、飛行機でだつて飛んで行くにちがひありません。

そも〳〵夫君良致男爵といふ方は、兄嫁籌子夫人の弟さんなんです。この籌子夫人がとり分け愛しく思ふ弟さんなんです。この籌子夫人といふ方が、とても女としてはやり手らしかつたんです。一體九條家といふのは、男性よりも女性にしつかりした方が生れる家らしいんです。それにこの籌子夫人は九つ位の時から本願寺に來てゐて、本願寺は幼少の頃から育つた家なんですから、大きくなつてから嫁入つて來た人の氣分とはたしかにどこか違つてゐたにちがひありません。だから小姑のたあさんなど、鬼千匹どころか、むしろたあさんの方が、あれだけの才人でも、このお姉さんには頭が上らなかつたといふことです。それで籌子夫人が一條家に養子に行つて戻されて實家に歸つてこられた弟君を同情する餘り、美しいたあさんをめあはせ、弟さん御夫婦のすべてを、このお姉さんの力の及ぶ限りの羽翼で包んでお上げになりたいとお思ひになつたのかもしれません。

だが、このお姉さんも世を早うしてしまはれ、今は良かれ惡かれよりつくところはないのでした。そのことをいつか彼女は斯うも云つてゐました。

「亡つた姉はそれは責任觀念の強い女でした、私を十年もうつちやらかしにして、そして餘り仕合せでもないといふことを見てゐたら、決して默つてゐる人ではありません、きつと私の爲めに何とか良い方法をとつてくれたに違ひないと思ふのです」と。

そのうち私は今の宮崎と深い戀愛におちてしまつたのです。その頃人妻であつた私の煩惱も亦一通りではありませんでした。その心を親友のたあさんに打ち明けぬ筈はないのでした。そして私は怖る〳〵斯う云ひました。

「貴女の目から見たらばどんな大きな罪でせう、それは本當に、世にも人にも入れられぬ大罪なんです、決して私、いゝ事とは思つてはゐませんのです、第一親の名を汚すものですし、——でも、今更どうしようもないこの心をどうぞ貴女は、せめて貴女だけは怒らないできいて下さいましね」

と、初めて打ち明けましたとき、彼女は驚ろきの目に涙を一杯ためて、そして恨めしげに、

「貴女は、貴女までが私をそんな風に見ていらしつたのか――」

と、云ひながら、ほろ〱涙をこぼしたのには却つて私の方が呆氣にとられてしまひました。それは私の罪を許す、許さぬの問題ではなくして、自分自身から罪深い女なのだといふのです。佛の御經にはよく女人の罪障のことが書かれてありますが、彼女はそれを深く思ひ極めてゐてその事をいふのかどうかはしりませんが、私が自ら憎むべき罪人だと云つて卑下することをひどく嫌つたのです。

だが彼女は、あれで中々世間態といふ事に重きをおくたちでしたから、よしんば十年の空閑だつておとなしく、又、世間の人の口の端にかゝる様なはしたないこと等もせずに來た事は、本當に偉いことかもしれません。併しこの點は、私だつて同じ様な地位に生れた女です。世間態も何も考へないつていふのではさら〱無かつたんですけど。私、秘かに考へるのに、唯たあさんは私よりももう少し親切なよい兄君達があつたからだといふ感じがしてならないんです。その一例をあげていふと、あの東京の大震災の時のことです。彼女は丁度その頃御主人と倶に築地の本願寺内にある九條家の邸内にあつて、あの地震にあひました。すると、たあさんの兄君は、すぐにたあさんの安否を氣遣つて、長年忠義者の車夫を迎へに出したといふことを見ても解ると思ふのです。この迎ひの車は火の海、人の波をかきわけて、命から〲たあさんの一家族召使もろとも一人の負傷者もなく、兄君の御邸に避難をされたといふことです。それから思へば私なんか身内の人人からは野に捨てられたも同様の身分でした。震災の當時、本郷の元町の中野邸に、その前年からの一身上のイサコサで、預けられたまゝだつたのです。あの震災で中野邸もすつかり焼け落ちてしまひ、私は中野邸の人々と共に染井の松平邸に避難をしたのですが、二日たつても、三日たつても、私の實家の方からは人一人見舞になんか來やしませんでした。つまり私の身の生死なんか尋ねやうともしてくれなかつたんです。私がこの前の年に起した大事件、まさか勇敢だつたとほめる人もないでせうけど、斯うした兄姉をもてばこそ思ひ切つてやれたのだとも云へば云へる様なものです。

いふことがあとさきになつた様ですが、それからやがて良致男の歸朝と共に彼女の獨身生活も終了して、その男爵を神戸に御兄弟方と共に出迎へられた時の話でした。

「あの人ね、私が港まで出迎ひに行つて、船室に入つて見たら、まあ、どうでせう、荷物も何も片づけてはゐませんのよ、私びつくりしちやつて、大あはてにあはてゝ、側から荷物をまとめて上げたのよ、

そしてきゝましたの、何うしてもう港に船が入るのにお荷物をちやんとしてお置きになりませんでしたの？　つて、云ひましたら、あの人は斯ういふぢやありませんか、もしかたあさんが迎ひに來て下さらなかつたら、このまゝ船を下りずに又、もう一度外國の旅に出るつもりだつたのですつて、」

　私はその話をきいた時、たあさんよりもむしろ男爵に同情されました。

彼女の宗教

眞宗の總本山に生れた彼女のことですもの勿論眞宗の教義を信仰してゐたことは間違ひのないことですが、肉體の方の行事では、毎月々の宗祖の御命日に精進を守つてゐるのだと話されました。でも、常の日の食物などは、お坊さんの子に似合はないなまぐさもの、とり分け、鳥肉が好きだつたのです。食物の趣味は深い方で、しやれた京都風のお料理なんか好きでした。肉類が好きですから、西洋料理も好んで上つたのです。お坊さんの子としては馬鹿にハイカラ好みで、時には洋服も着たし、横文字もよめた。兄君の光瑞師など今の言葉でいふ尖端を走る人で、あの舊式な御殿をたゝきこわして西洋館を建てた人でした。

　この兄君にお仕へをしてゐる人の中にＨＳといふ人が居ました。眉目秀麗な一青年でした。あの才氣あふるゝ兄君の御寵愛の人なんですから、勿論人並優れて頭腦明晰の人だつたにちがひありません。この人が秘かにたあさんに思ひを寄せて居たんださうです。いゝえその秘かに思ひを彼女に寄せた人は、おそらく何人あつたかしれますまい。御當人のたあさんの全くしらぬうちに、暗から暗に流れ去つた人の思ひはどれ程だつたでせう、その中にこの青年は胸の思ひをたあさんに打ち明けたんださうです。勿論この時たあさんはまだ嫁せぬ前の、お姫様でありました。尤もこれが全くの下人に過ぎない男でしたら、どんなに、よしや狂ひ死をする程思ひ焦れたからとて、口に出してまで御當人にいふ事は出來る筈もないのですが、この青年は、少しばかりたあさんともゆかりのつゞく人だつたのです。

　その時のことをたあさんは斯う云つて私に話てくれました。

「夜、私の机の前にちよきんと座つて、何か少しばかり言つたかと思ふと、とう〱泣き出してしまひました。私、男の人の泣くのを初めて見たので、唯可哀想でならなかつたのよ、だけどこの時、私はまだ、何もしらない女でしたわ」

　併し、この男は、遂に彼女の愛嬌の笑顔さへ報いられはしなかつたのです。後年この男が無茶苦茶に身をもちくづしてしまつて、根が才

物だけに、その天性の美貌と共にありとあらゆる惡るいことばかりするやうになりました。遂に詐欺横領、さうした罪名のもとに鐵窓に繋がれる身となつて、彼の一生はめちや／＼になつてしまひました。貴族の出であつた彼の妻も、離別をしたのち病死をしてしまひ、未來の輝やく時代を、羨まれてゐた彼、その未來は全く誰も豫想しなかつた程全くの暗黒世界に、どこまでも／＼といふ風に墜ち込んで行つてしまつたのです。そのことを話したあとでたあさんは云ひました。

「あの男、本當は私への失戀の爲めだつたかもしれないわ、私、時時、そんな事を思ふ時があるの、考へて見ると罪が深いわね、女つていふものは――」

今の話で思ひ出したのはもう一つ、それは誠に幼い、他愛もない可愛らしい片戀の話です。たあさんがまだ小學校に通學してゐたころ、その頃は今の自動車はなし、平民的／＼とさうやかましく云はれた時代でもなし、むしろ貴族はなるたけ大袈裟にして勿體をつけた方がいゝ世の中でしたから、まして活佛様のお姫様のたあさんは、毎日二人乘の人力車に、丸髷に結つた年増の女中と相乘りで、學校に通つたものなのです。たあさんも可愛らしい稚子髷に結んで、長い袂の着物を着て、それはどんなに美しく可愛らしく、なほその上に犯しがたい上品さもどれ程だつたかしれません。道をゆく時途中で、田舍からのお上りさんのお婆さんにでも逢はうもんなら、それこそ數珠押もんで南無阿彌陀佛／＼つてこの人力車がとつくに通り過ぎて、たあさんが學校の教場に入つてしまつた頃までも、瞑目して拜かんでゐたといふのです。まして同じ學校に朝晝見てゐる生徒は子供ながらもその光榮を、どんなに有難いものに思つたかしれません。或日のことです、一人の男生徒は、たあさんの机の中に、一通の書きつけ、平たい言葉で云へば大人のする戀の附文、それをそつとしのばせておいたんです。何の氣もつかずに家へもつて歸つたたあさん、そのつけふみをお附の女中の知るところとなり、それが女ばかりゐる御殿の奧では、天下の一大事出來、と云つた程の大騷動、とう／＼たあさんはそれつきり學校を止めさせられたといふ話です。それからは家に先生を招いて家庭で學校だけの勉强をしたさうです。勿論高等女學校にも入らなかつたし、その當時の華族女學校に入る話もあつたけど、京都から東京へ彼女が來るとなると、中々面倒が多いので、これも遂にお流れとなつてしまつたといふのです。家庭學問と云つても、あの有名な兄さんの許なんですもの、本願寺で出來るだけの學者は皆こゝに集つてゐた時代です。新らしい時代の學問などもなま中外で習つてくるよりも充分な智識を得られた事だつたでせう。ですからたあさんの一寸した話の中にも天文地文はおろか、歐洲航路の船のことだつて、とてもくわしい

ものでした。それに、これは性質からでもありませうが、常識の發達してゐたこと、何につけよく知つてゐました。郵便局の一等局、二等局、三等郵便局といふものが、それ〳〵どんな仕事をしてゐて、どういふ能力をもつて居ることかつていふ樣な事でも、それはよく心得てゐたもんです。汽車の時間表さへろくに見られない私なんかとは大した相違でした。地方の婦人會や、色々の團體の會長であつたたあさんは御說教も中々上手にやりました。それは十代の頃から馴らされて來たのだといふことです。美しく可愛らしい少女が、佛樣の御道を傳へるので善男善女はみな隨喜の淚をこぼしたといふのも本當でした。行く先によつては、往々御利益をつけて有難がらせる術も、——これは主催者側の註文でせうが、そこは人々を喜ばせる爲めの——と云へば、やつぱりいゝことをしてやつたんです、あのたあさんは——。

彼女の社會觀

彼女の思想——は、あれで可なりに新らしかつたんです。どんな過激な思想問題だつて何うかすれば一緒になつて話の調子を合せてゆく位の智識の持ち合せもあつたのです。それは古い習慣や道德、とりわけ昔からのならはしで古典的な殿堂の中に人となつたたあさんです。又、それ故ならこそ多くの人々からも崇がめられ、尊ばれてゐるといふことを彼女自身がよくわきまへてゐたのです。ですからその古い傳統の衣をすつかり脫ぎ捨てゝしまつて、魂にぴつたりとつく新らしいものに着かへ度い？　さうした念願はありました。それは確かにあるにはあつたんですけど、考へてゐるだけでさて、實行までする氣には容易になれ切れなかつたのはあの人としてあたりまへのことでした。そこに彼女の煩悩もあつたし、煩悶もあつたのです。自分の境遇にだつて勿論滿足は出來なかつたし、それにはあの人の頭があんまりよすぎたせゐもあつたんぢやないかと思ふんです。で、新らしい社會運動、思想の動きと云つた樣なものに常に深い注意をはらふことを怠りませんでした。

「××にもしか××でも起るやうなことがあつたら——あの、×××の樣に、それこそ突然、誰もしらないうちに、この日本國中の人達が、やつと朝の目ざめから起き上つて見たとき、一夜のうちにすつかり世界が變つてしまつてゐた——と、まあ、そんなやうなことがもしかあるんだつたら、私、その一週間前に、一寸私にだけ誰かそうつと知らせて置いてほしいと思ふの——」

あんまり無邪氣な言葉に私はつい吹き出してしまつて、

「あゝ、いゝことよ、もしか私がどこからかそんな話を聞き出したら、貴女にだけそつと數へて上げますわ、一週間前にね、だがその一

週間前に知つて貴女に一體何うしようつて仰るの？」

私の戯談半分に云つてることを彼女は至極眞面目に、

「さうしたら私、――」

彼女はどんなにむづかしい過去の束縛からでも、亦、どんなにうるさい世間の視聽からでも、解放され、身も心も自由な世界を飛び廻ることが出來ると、まあ、そんな風にも考へられたのではなかつたでせうか。私はこの時の二人の會話を思ひ出す度、彼女が何を希ひ、何を祈つてゐたらうかと、それを思ふたんびに目がしらがつい熱くなつてくることがしば／＼あるのです。×××××天地が逆さになるより先に、彼女の肉體はもろくも解きほぐれてしまひました。

彼女の諧謔

たあさんは又よく滑稽なことを云つて人を笑はせる人でした。彼女が最後の病院に居た時ですらも、時々何か面白いしやれを飛ばして周圍の人を笑はせてゐたといふ話が、その時の看護婦の手記にも出てゐましたが、それは巧みな社交的才能のきらめきばかりではなく、どこか心の裡に晴れ／＼とした無邪氣な魂があつたのでせう。私共にあの如何にも可笑しさうに口をゆがめ、目を細めて何か物いふあの樣子を思ひ出します。或る日私の家の二階で、N夫人と三人して私の筑紫時代の話からして色々いひました。このN夫人といふのが九州で心易くなつた人であつたので、私があの家を出てしまつてから後の、あの家の樣子など話てくれた時のことでした。N夫人のいふのに、

「あそこの御主人も貴女がいらつしやらなくなつてから、とてもおとなしくいゝ方になりました。私共が行つても前とは雲泥の相違で、それはとても叮嚀になさいます。前には貴女のところへ伺つても、御主人が御在宅だと、まるでしのび男のやうに小さくなつてゐて、いつかなんか奥樣が旦那樣と御食事中を、私はそつと下僕の部屋で、萬事を心得てゐる女中さんからお結びをそつともらつたことさへありましたわね、それが今では一寸私が伺つても、さあ、御飯を食べて行けの、歸りは自動車で送らせて上るのと、それはやさしくおなりですのよ」

「あの人が、まあ、本當ですか、私はあの頃自分のお友達さへ心のままに優遇することも出來なかつた。それだけでも、どんなに苦勞したかしれなかつたのに、せめてもう少し早く、私の居る間に、それだけでもいゝから心もちをかへてくれゝばよかつたのにねえ」

と、私が云つたのをたあさんはすぐに横あひから引きとつて、

「今からでもいゝわ、お歸んなさいよ、Nさんに聞いて見たら大變優しいいゝ方になつたさうだから歸つて來ましたつてね、そしてお土産に私の子供も連れて來ましたつて、子供も一緒につれてゆくのよ」

その又云ひ方がどうも滑稽で、三人はお腹の皮のよれる程笑ひころげました。斯うした笑ひは、彼女をめぐる交友の間に常に彼女を中心として現れる平和であり喜びであつたのです。

彼女の文藝

前にも度々云つたやうにたあさんは何でも出來る人でした。それは兄君の光瑞師や尊由氏のやうに、頭の偉れてゐることはあの兄妹の血統らしいのです。和歌は初め御歌所の大口鯛二氏について學ばれたといふ話ですが、後、佐々木信綱氏の門に入られたのです。それはあの才人ですから、昔風のいつまでも、小笠原式に型のきまり切つた御歌所風の作歌が、あきたらなくなつた爲めではないかと考へられます。その頃、多少なりとも新しかつた佐々木信綱氏の指導をうけられたことは彼女としてあたりまへのことだつたらうと思ふのです。たあさんがどの位歌が出來たかといふことも、今では誰もが知つてゐることとです。繪畫の方は京都の松園女史について學ばれました、繪の方の名を松契と云ひました。その美人畫の方はどの位かけたか私はよく知りませんが、「たあさんの畫はあんまさん繪で、一人ぢや步けないんです、手引きがなくつちやあね」と、或る近親の方がたあさんの前で笑ひながら私に斯う話されたことがありましたが、併しその畫いたのを見るとどうして中々よく描かれてあります。



九條武子夫人

彼女と私

最後に私はたあさんとの交友について本當の事を話さなければならないと思ふのです。私は大正十年の秋に、あの戀愛事件を引き起して、誠に貴族の女にあるまじき行ひ、否、日本婦人の風上にも置けぬ女となり果てましたのです。そ

れ故に、社會の嘲罵の鞭も充分に受けました。その時に當つて一番迷惑をしたのは何と云つても、私の肉身の者達であつたことはいふまでもありません。が、この時たあさんもその大波のしぶきを臉一面に打ち被つた人だつたのです。私はその點に於て如何に友達とは云へ、すまないことだと思つて幾度詫たかしれませんでした。だが、彼女は心の底ではむしろ私の行爲を、少しも鞭打つては居なかつたのです。彼女は初め、私が山本安夫氏のところに逃げ込んだ時、この時こそ私の身邊は大嵐に卷き込まれてゐる樣な騷ぎの眞最中なのでした。新聞記者、雜誌記者は幾人となく押しかけてゐるし、そこいらには寄りつかうにも寄りつけぬ時でした。私の心を許した友達とて、本當にそれこそ戰陣の中に密偵に來るよりいやな思ひをしなければならないのでした。そのさ中にです、流石人目を憚つて自分自身では來られませんでしたけど、女中のたね子を使者にして、幾度私のかくれ家を見舞つてくれたことでしたらう。その度、親切な見舞の品々を添へられたのでした。普段着の着かへもなかろうからと云つて銘仙の、これは自分のに仕立たのだから寸法には合ふまいけれども、と云つてあの人は背の高い人なので袂の二尺一寸もあるやうな綿入、金巾の裏がついて、貴女は銘仙のきものより外着たこと無からうけれど、どうせ私の有合せでがまんして着るがいゝといふことでした。それにメリンスのコスモスの美しい模樣の長襦袢を添へてありました。そして又洗濯物など思ふに任せぬことだらう、遠慮なくこの使者に持たせてやるがいゝともいふのでした。實にこんなにまで心をこめてくれた人は私の友達にも兄姉にもありませんでした。ましてその當時、世間からはさんざんに惡口されてゐる私のところへ、誰がそんな優しい心を向けてくれる人がありましたらう。

それから後、山本氏の家を出て私は一時宮崎の家の近くに小さい家を借りて隱れ住むことになりました。其後は自分自身で逢ひに行き度いから、自分にだけはかくさずその隱れ家を教へてくれとも云つて來ました。で私は折角の好意、來て貰ふつもりで、貧しくとも座布團や器物などの用意も新らしく作つて見たりして居たのですが、日ならず東方の柳原の方へ連れて行かれてしまつて、それつきり、こんどは牢獄にも等しい待遇をうけて外との交通は全く遮斷されてしまひました。

それから丸一年、私は誰とも消息をしませんでした。その間、千葉に隱れてゐるの、京都の尼寺に尼僧生活をさせられてゐるのと、まことしやかな取沙汰は傳へられましたけれども、前に申たとほり丁度あの震災の時、私は本郷の中野家に居た爲め、火に追ひまくられて中野夫人と一しよに栗井の松平邸に避難しました。そこに一夜二夜、不安な日を重ねてゐましたが、實家の柳原の方からは誰一人見にも聞き

にも來る人はありませんでした。兄達の方から見れば私なんかはすでに社會的に葬り去れた人間として、その生死のほどは聞くにも及ばぬ沙汰だつたのでせう。併しそれが餘りの冷膽さだと云つて、第一に憤慨したのは中野夫人でした。中野夫人は私を柳原家とその親屬から賴まれ預つてゐるつもりで、何につけその方の意向のまゝに私に心をつけてゐた人でしたが、しみ／＼として私に同情されたのです。その時、あの震災のあつたと同時に宮崎の方では私の行くへをたづねました。そして翌日には私が築地に居ることを突きとめて早速に着かへの浴衣や其他のものをもつて見に來てくれました。丁度それ等の品々は、中野夫人を初め、その他親類の夫人達や、女中まで、誰一人着かへ一枚持たないところなので、皆して分けてきることにしました。包んで來た風呂敷一枚さへ返さないでとり上げてしまふ程、皆は何も無かつたのでした。それこそ一枚の古新聞さへ惜い時なのでした。皆の心も普段の思ひとはまるで違つてゐました。中野夫人のいふのに、「やつぱり人はいざといふ時眞實の心は解るものです。貴女の御兄弟達はあんまり冷酷すぎます。此後も貴女が兄様達のいふ通りになつてみたところで一生の幸福は到底得られさうな筈がありません。いつそもうこの際宮崎さんへ歸つた方がいゝでせう。宮崎さんは體も弱い方だ、貴女が行つて助けて上げなければなりません。私も本當は貴女の身内の方々から睨まれてお預りはしてゐたんだけど、もうあの方達の指圖など受ける必要はありますまい」と、斯う云つてくれたのですぐに私は高田の宮崎の許に歸つて行つたのでした。それが震災の四日目位の時でした。それ故たあさんはいつも私をからかつて、

「震災が仕合せになつたのは貴女ばかりよ本當に」

たあさんの方もあの震災で築地を燒け出され、暫らくは兄様の家に同居して居たのですけれど、早速に家を定めなければならなくなつたのです。そこで下落合の某畫家のあとを買ひ求めて住はれることになりました。たあさんは後で私にそのことに就いて斯う話されました。

「私、なるたけ貴女のお近くに住み度かつたからなのよ、主人の日々の出勤には少々氣の毒だつたんですけど

と、これから二人の睦び合ふ日は再びかへつて來ました。その點で私は仕合せでした。私のこの時の生活の激變には覺悟はしてゐても流石に困らぬでもありませんでした。第一宮崎はもう久しい間、幾年も快癒してゐた持病が一つは私の問題の苦勞も多かつた爲めでせうが、その實父の病死と共に再發して、すつかり病床に臥してゐましたし、家庭内は宮崎の母の外に、母の甥も居たし、また小さい弟の娘も母が引きとつて居ましたし、私の子供は小さくて手のかゝる最中でしたのに、宮崎の用事は一人の看護婦が充分にやつて足らぬ程に手數がか

かる時でした。私の子供は私が里で出産した爲め里で無理に母乳を離されてしまひました。それ故、今斯うして母子が同じ家に起居する樣になつても私に乳が出ないのでした。牛乳で夜晝育てなければならない子供の世話は一通りではありません。それこそ私は三度の食事も定り時間には食べられない時が多かつたのです。なほその上、一度の食事中にも何度箸を置いて立ち上らなければならなかつたかしれません。私はこゝで初めて知つたこと——食事といふものは、何もおいしく食べるばかりではない、唯、空いたお腹に何かしら滿しさへすればそれでいゝものだといふことを——。

でも、私としてあの、大騷ぎのあと、情愛のない兄姉の支配下から、又その以前には無情な夫から、斯うしてやつと我子と二人が落ちついた吾家なのです。なほ病床に呻吟してはゐる人でも宮崎は今まで私の見た周圍の男性の中では一番しつかりしてゐる人でしたし、人情味も私の兄や、昔の夫などには比らべものにもならぬものでした。それで私はすべてを夫に任かせてこゝに滿足の道を求めようと、思つては居ましたけれども、それでも、今もいふ樣な晝夜ない生活は、餘りに疲れ果てると「幸福とはそも、如何なるものぞや」といふ疑心の出ぬでもありませんでした。その時です、たあさんに會ふと一たまりもなくそんな心を打ち消されてしまふのです、それはたゞ、

「貴女は幸福なのよ」

その一言に、私は幾度勇氣づけられたことか、このやかましい社會に於て、どこの世界に人妻である女が、他に好きな人が出來て、その人と滿足に同棲し、しかも二人の仲に愛兒まで惠まれてゐるといふことがあらう、といふわけなんです。だが人間といふものはうつかりしてゐるとその、めつたにない幸福にさへはぐれてしまふ。まさしく幸福の中に呼吸してゐても、それを知らずに居ればその幸福は消えてなくなるものだといふのです。私はたあさんの前に出ると、自分が少しでもつまらぬことを考へたものだと秘かに恥ぢて歸るのがいつものことでした。

私が彼女の家を訪ねると必らず一度は食事を共にしたんです。これが忙がしい私のせめてもの休息の時間でもありました。實は私として生れてその時まで、御飯はきつと御給仕してもらつて食べなければ食事をした樣な氣のしないのでした。長い習慣といふものは馬鹿らしく怖ろしいものです。今もいふ通りその頃は時間通りの食事はおろかなこと、どうかすると皆のすんだあとのおかず一つない時だつて珍らしいことではありませんでした。朝のお味噌汁は温かいのを殆ど口にしたことすらありませんでした。そんな有樣である私として、たあさんと二人がたね子にお給仕をして貰らひながら、ゆつくりと食事をしてゐると、初めて我家の本當の棲家へでも歸つて來たやうな氣安さを覺えるのでした。これは餘りにもつまらない話ですけど、たあさんの情けはしみ〴〵と身にしみてゐることなんです。

が、併し、世間への體さいは、まだまだ世に入れられる私ではあり

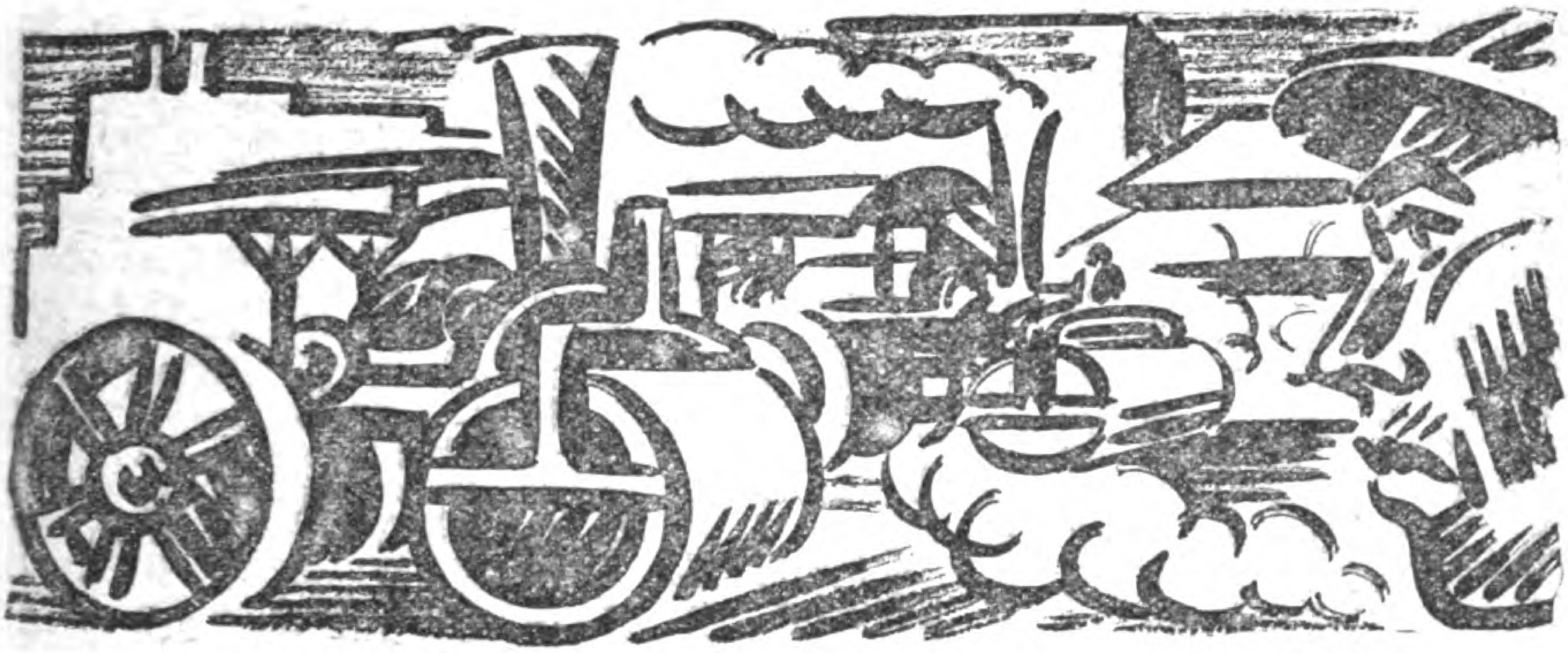
ませんでした。異端者の私は、まじめな貴婦人達と膝を交へて談笑するなんぞと、先方で大方逃げ出したかもしれなかつたんです。だからたあさんだつて多少の體さいも必要です。私と二人は全くあれ以來交際はしてゐない事に表面とりつくろはねばなりませんでした。でなくてさへ宮內省に勤めてゐる某氏は、「貴女のお近所に宮崎の家があります、もしやあき子さんに目白の驛あたりで偶然おあひになる樣なことはありませんか、お互ひに顏を合せるなり昔の御交際が復活する樣なことになりましては甚だ御身の爲めにおよろしくありませんから、とくと御注意申上げて置きます」と、おせつかいにも云ひ渡されたと笑つて話したこともあつたのです。私も彼女に、この上の迷惑はかけ樣とは思つて居ませんでしたから、たあさんと會ふ話はつとめて人には話ませんでした。時たまそれは宮內省のお役人の某さんが心配してゐた樣に、本當に目白の停車場で偶然出會ふこともありました。お互にその時はしらぬ顏してとぼけてゐました。そしてあとであの時の貴女のとぼけ樣は如何にも甘かつたとか、すましてゐたとかいうては、二人は笑ひ興じてゐたこともありました。賴み合うた友達の間柄には、斯うしたたあいもないことまでがどんなに幸福だつたかしれません。

今もいふ通り私の家庭が無茶苦茶に忙がしかつた時、私は到底裁縫なんかする暇がないのでたあさん手づから私の銘仙の綿入羽織と、たんぜんと、下に着る毛糸のシヤツとをこしらへて下さいました。衣類でも何でも足らぬものは自らが足して——。殊に私には姉妹でも斯うまで親切ではありませんでした。小さい私の赤ン坊にも洋服やら帽子やらを、自分の忙がしい合間にこしらへて下さいました。それから又遠方から珍らしいお客樣でもあるとなると、私が買物に出られぬのを代つて、自分の氣のつくまゝのものを、あれやこれやと買ひとゝのへてもたせてよこして下さいました。更紗の窓かけ、菓子器、フオーク、さうした品々は今もなほ殘つてゐて、たあさんの心やりを思出させてくれます。

その後、二人の仲のよそゆきも、大方の日數年數をへて、もういゝかげんに公けのことにしようではないかと、或る日話合つて二人が知り合つてゐるF夫人に、其後の初對面をさせて貰はふではないかと約束をしたのです。たあさんはその會合をF夫人の邸でさせて貰ふやうに、すでにF夫人にも賴んだといふことでした。その約束が出來ると、二人は又しても嬉しくなりました。來る日の面白さ可笑しさ、もうさん〱に會つてゐるくせにこの二人は、如何にもあの事件以來久〱の對面であるといふ風に、F夫人を前にして、先づ何ととぼけて挨拶をするものだらうかなど——それはすばらしい面白いことに違ひなかつたのでした。

その日はつい目の前に來て、たあさんはあの最後の發病でした。

どうせ私だつて、いつかはこの世を辭してたあさんの先に行つてゐる未來の國へ行く日があるんです、彼女は又きつと、私の居るべきところの近くに居を構へて待つてゐてくれることだらうと思ふのです。



世界情報

歐洲聯盟

いま、ヨーロッパには獨立國が三十餘ある。まさに、全世界の半數の國が存在する譯である。試みにその名を擧げるならば、——イギリス、フランス、ドイツ、イタリー、アイルランド自由國、ポルトガル、スペイン、ルクセンブルグ、ベルギー、オランダ、デンマーク、ノールウェースウーデン、フィンランド、エストニヤ、ラトヴィヤ、リトアニヤ、ポーランド、ルーマニヤ、ブルガリヤ、ギリシャ、アルバニヤ、ユーゴー・スラヴィヤ、ハンガリー、チェコス・ロヴァキヤ、オーストリヤ、スイス。これで二八。これだけは國際聯盟加入國である。この外、ロシヤ、

ドロコ、モナコ、またメメファイ等。」——

フランスはその『覺書』外務大臣ブリアンの名において、これを、ともかくも、統一することを提案した。

昨、一九二九年九月五日、ゼネヴァの國際聯盟の會議において、ブリアンは『ヨーロッパ合衆國』結成の提案をした。越えて九月九日、關係諸國二七ヶ國の代表者が、ブリアンと共に、『歴史的な』朝餐をとつた。この席では、しかし、なんらまとまるところなく、たゞ、これに關する覺書の作成がフランス政府に委任せられ、一年後の同じ頃、ヨーロッパ會議を開くべきことが決定されたにとゞまつた。

今年、五月一七日、フランスはブリアンの名において、『ヨーロッパ聯邦制の組織に關する覺書』を關係諸國およびその他のすべての國に送附した。七月五日におけるイタリーの回答を魁とし、八月七日のスイスの回答を殿として、回答はすでに出揃ひ、目下ブリアンの手許において整理中であるといふ。いふまでもなく九月の國際聯盟會議において討論される譯である。

覺書の前文には次の言葉が見出される、——

『ヨーロッパの二七國の政府の檢討に附されたこの提案は、政治的並びに經濟的、社會的にヨーロッパの平和を脅かす危險に當面し、ヨーロッパの一般經濟が陷つてゐる無秩序狀態の事實に當面して共同責任あることを極めて明確に意識してゐる點において、正當なものとされた。』……經濟の進歩、生産の發展、社會的政治的危機に對する保證が確保されて、ヨーロッパの住民に平和の生活を享けしめんがためには、各國の協調的行動に俟たねばならぬ。しかも、このヨーロッパの協働、聯邦組織、聯合、結合、調整、協商、道德的團結は、斷じて國際聯盟の組織と活動とに抵觸せぬ。人種的、文化的、地理的に共通のものをもつヨーロッパが、まづそのものとして和衷協同することによつて、聯盟はヨリよくその任務を果しうる。また、他の大陸或は他の國に對抗するものでもない。その意味で、關稅同盟の如きを作らんとするのでもない。さらに、加入國の主權と獨立を毫も侵害しない。——かくして覺書は、組織のこと、原則のことに觸れ、暫定的に、この聯盟において議せらるべき課題を列記してゐる。その一班を示すならば。國際カルテル等の統制、關稅の低下、國營各事業間の聯絡、空中、水上、陸路の交通機關の協調、電信、電話、ラヂオ。後進國のための信用授與を援助すること、ヨーロッパの市場、貨幣問題等。その外、移民、衞生、文化、議會間の交渉、等々。

各國の回答はどうか？　イギリスは、國際聯盟の外に、新な國際機關の必要を疑ひ、既存のものまたは他のもので充分だと云ふ、また、他の大陸と對立する危險を增す、と考へてゐる。イタリーは、殆んど

一々フランス案を排撃してゐるが、特に、ムッソリニの談と合はせて考へれば、眞の歐洲の平和は、ヴェルサイユ條約の改訂をなして始めて可能であるとの意見であつて、フランスの意見たるこの條約の結果を出發點となすことゝは相反してゐる。イタリーは、軍縮の問題を扱ふべきこと、ロシアやトルコの參加、委員は絶對に平等に選出すべきことを要求してゐる。ドイツのは可もなく不可もない回答であるが、現存の秩序――云ふまでもなく、ヴェルサイユ條約により作られた――と雖も、平等と正義と安全に反するものは變改すべきをほのめかしてゐる。他の二〇餘國のは、似たり寄つたりのものであるが、委員の平等分配が强調されてゐる。もつとも、一方にイタリー派のブルガリア、ハンガリー、オーストリヤ、他方にフランス派のユーゴー・スラヴイヤ、チェコ、ルーマニヤ、ポーランドの如きがあるが。

・言論機關の意見はいろいろである。平和と正義のために絶對支持。佛伊戰爭において伊を孤立せしめる政策。關稅報復とダンピング對抗のためにする對米聯盟。英、米の二大帝國主義に對立するフランス帝國主義の强化。對ソヴィエット・ロシアの團結、等々。

・最も興味あるのは、配所にあるトロツキーのコミンタンに對する敎示である、曰く敎へて云ふ、――

・歐洲ソヴィエット合衆國――のスローガンを掲げよ、」

總選擧を控へたドイツ政界

去る七月十八日ドイツ帝國議會は遂に解散を命ぜられた。この議會は一九二八年五月二〇日の總選擧によつて成立したものであり、當時における主なる政黨の勢力關係は次の如くであつた。

政黨名	一九二八年五月總選擧總得票(千票)	比率(%)	議席數	一九二四年十二月の選擧結果に比しての增減
共產黨	三、二六二	一〇・六	五四	(+)八
社會民主黨	九、一五〇	二九・八	一五三	(+)二二
民主黨	一、五〇四	四・九	二五	(-)七
中央黨	四、六五六	一五・一	七八	(-)一〇
國民黨	二、六七八	八・七	四五	(-)六
國權黨	四、三八〇	一四・三	七三	(-)三〇
經濟黨	一、三九五	四・五	二三	(+)五
ヒットラー黨(フアッシスト黨)	八〇九	二・六	一二	(-)二
その他の諸黨	二、九〇〇	九・五	二八	(+)一六
合計	三一、一六七	七五・六[1]	四九一	(-)二

1) 選擧資格者四一、二二四、〇〇〇に對する投票者數の比率

この結果についてみるもそこには再び左翼の擡頭、中間派諸黨の衰退、特に大地主の帝政派の慘敗が窺はれた。だが、この勢力關係の下に

政府はたゞ社會民主黨を中心として（社會民主黨國總理ヘルマン・ミュラーを首相として）、相も變らず民主黨、中央黨および國民黨を政府與黨とせるいはゆる大聯立內閣が出現したにすぎなかつた。ミュラー內閣は何をなしたか。まづ選擧のスローガンに掲げた缺食兒童給與案の代りにA級裝甲巡洋艦をつくつた。ヤング案成立による賠償輕減にもかゝはらず、藏相ヒルファディングは煙草税、ビール税の引上げを敢行すると共に、失業保險料金の引上げをさへ行ひ、四億マルクの負擔を大衆の上に重課した。だが、それにもかゝはらず、二八年夏以降におけるドイツ經濟の不況は、月の進むにつれて深刻となり、二九年秋世界恐慌の勃發と共にたちまち恐慌狀態を呈し、三五〇萬の失業者を記錄するにいたつた。また、從つて財政の均衡も全く失はれ、二九年末には一七億マルクの歳入不足を告げた。この大穴を塡めるためいはゆる『ヒルファディング綱領』が立案されたのであつたが、それは一方においてブルジョアジーには廿億マルクの課税輕減を約束すると共に、他方大衆の負擔を加重することによつて、財政難を切り拔けんとする『社會民主々義的手品』であつた。しかし、この手品は流石のヒルファディングにも少々金額が大きすぎた。時になによりも世界恐慌といふ時期が惡かつたたらう。四億五千萬マルクの融通をシャハトに拒絶されて、理論家的藏相はひとたまりもなく大臣の椅子から轉落した。

だが、ミュラー內閣は、すぐとイー・ゲー・コンツェルンの重役モルデンハウエルを拉し來たつて實際家の藏相を得た。

しかし、大コンツェルンの番頭もまた二九年度の歳入不足と三〇年の七億マルクに及ぶ歳入不足の補塡の途に窮してしまつた。內閣は三〇年三月二七日遂に世界恐慌の壓力に打ち負かされて崩壞した。後繼內閣は社會民主黨を除くブルジョア・ブロックをもつて成立した。中央黨を中心に（中央黨員ブリューニングを首班とし）ドイツ國粹黨が準與黨となつた。

恐慌の壓迫は依然として減退しなかつた。六月五日には居据り藏相モルデンハウエルは差し迫れる五億マルクの不足額の補塡策の失敗のために、骸骨を乞ふた。もはや非常手段に出るほかには、恐慌時にあつて歳入不足を補ふ資本家的方法はないやうに見えた。新藏相ディートリヒ（民主黨）はこの經濟國難に處するため非常處置に出でる決心をなした。官公吏は恐慌にもかゝはらず其地位の安全なる事の報償として俸給の二分五厘を獻納すべきである。獨身者は扶養すべき妻子をもたぬがゆゑに獨身税を負擔すべきである。地方自治體には飲料課税權を認むべきである。年所得八千マルク以上のものは五分の所得税附加税を支拂ふべきである。ドイツの當面する未曾有の經濟國難を切拔けるがため全國民の忍耐と反對黨の超黨派的諒解とを要求して、首相ブ

ブリューニングは七月十七日の議會にディートリヒ案を説明し、議會が議會主義と民主々義との確保のため政府案を承認するといふ責任ある態度に出でないならば、政府は歳入不足補塡のため最後の手段をとるであらうと、最後通牒をもつて威嚇した。議會主義とブルジョア民主々義との行詰りがこれほど公然と述べられたことがかつてあつたか。しかし、彼の案は否決された。ブリューニングは内閣を投げ出したか。否、彼は、いかなる後繼内閣が生れやうともかゝる議會主義の行詰りに面しては非常手段によるほかドイツ國家の破産を救ふべき道のないことを知つてゐた。ヒンデンブルグと協力して、彼は遂に憲法第四十八條にしがみついたのだ。憲法第四十八條は緊急勅令を規定してゐる。國家の公共の安寧秩序が危殆に瀕した場合には大統領はこれがために必要なる處置を講ずることができ、必要なる場合には武力を行使することさへできるといふ規定である。ブリューニングはこれを楯としてディートリヒ案を強行しようとする。財政難はかくて、ブルジョア・デモクラシーと議會主義とを一片の反故と化せしめ、ブルジョア・ブロック獨裁政治の赤裸々の姿を明るみにもち出した。共産黨はいよいよ出現したこのファッシズムの正體に痛撃を加へた。社會民主黨はこのあまりにもあからさまなファッシズムの相貌に狼狽した。ドイツ國權黨およびヒットラー黨は政府の面貌に自己の顏面を見出して茫然自失した。直ちに十八日の議會は緊急勅令の撤回を議題とし、激しい討論の後二三六對二二一の僅少なる多數をもつて之を可決した。ブリューニングはそこで議會の解散をもつてこれに答へた。いまや政治闘爭は單なる一財政問題に局限されない。さうではなくて、××××××か××××かの二者擇一の前に立つてゐるのだ。來るべき重大の時が遂に來たのだ。共産黨にも、社會民主黨にも、ブルジョアジーにも。

すでにチューリンゲンにおいてはドイツ國民黨はヒットラー黨と聯合して州政府を占領してゐるのだ。ザックセンでも同じ傾向が現はれてゐる。州から州に波うつてゐるファッシズム政治への移行が、いまや中央政府においても實現されんとしてゐるのだ。その成否は、一に、來るべき總選擧における結果にかゝつてゐる。ドイツは重大なる危機に立つてゐる。この意味において、この選擧戰は全世界のブルジョアジーにもプロレタリアートにも未曾有の意義をもつと考へられる。

議會解散後旬日を出ずしてブルジョア諸政黨間に離合集散が行はれた。民主黨員はドイツ國家黨を樹立して自由主義的ブルジョア要素の糾合を計つてゐる。ドイツ國民黨は保守的ブルジョア要素の右翼大合同を策してゐる。ドイツ國權黨は分裂し、フーゲンベルク派はヒットラー運動に合流せんとし、ウェスタルプ伯派は右翼大合同の傘下に走らうとしてゐる。また、中央黨およびそれより右翼の諸派はヒンデ

レブルク・ブロックの形成のもとに反動的要素のカルテルの結成をさへ目論んでゐるのである。いづれにしてもファッシズム獨裁政治の出現に際して、獅子の分前を確保せんとするブルジョアジー内部の個々の勢力の再結成にほかならない。

社會民主黨幹部はいよいよそのドタン場に來たのだ。ゾチアール・ファッシズムスとしての正體を暴露することなしに、いかにこの選擧戰を戰ひうるか。ファッシズムかソシアリズムか、ギリギリのところまで押しつめられたこの二者擇一の前には彼等はもはや第三の大衆欺瞞の途を發見しえないであらう。ブルジョア・ブロックは社會民主黨なくして獨裁政治を自力で行はうとしてゐるのだ。他方、××××××××直截明瞭なスローガンで大衆に叫びかけ、鬪爭を展開することができるのだ。ファッシジムの牙城ミュンヘンにおいてメムメレは五千の勞働者に呼びかけることができた。これはバイエルン・ソヴエート政府が粉碎されて以來の大成功であつた。一九三〇年初以來の工場委員選擧における×××××××に徴しても、社會民主黨の犧牲における×××ル××はほゞ確實であらう。しかも選擧は×××にとつては、××××の鬪爭ではない。それは××××における勢力の指標である。

選擧は來る九月一四日の日曜日である。ファッシズムかソシアリズムか。選擧の結果はこれにいかなる回答を與へるだらうか。特にドイツの勞働者は世界恐慌の眞只中において、これに何を答へるだらうか。我々は刮目して待たう。

ルーマニアにおける反ユダヤ運動

ルーマニア政府は、スーツァ教授およびその崇拜者達の反ユダヤ人運動を遂に抑止するにいたつた。同政府は、例へば、ベッサラビアにおける市場の開催を禁じ、これによつて多數のこの地方の都市に居住するユダヤ人に對する壓迫を防がうとした。しかし國内に蔓延せるユダヤ人憎惡に對するこの抑厭は、當時旅行不在中の内相代理の暗殺をもつて報いられるにいたつた。

ブダペストの一新聞紙は、その詳細を報じてゐる、——

當日午前一一時、八人の大學生が、内相官邸に、賜暇中の内相ヴァイダ・ヴォイヴォドの代理たる角書コンスタンチン・アンゲレスキを訪ねた。彼等は一時頃まで控室に待たされた。大學生達が角書の部屋に這入するや否や、八發の銃聲が聞えた。屬僚達がその室へ驅けつけた時、室内には、角書が血を浴びて床上に倒れてをり、一人の

大學生――ペッツァといふ名の『エポカ』紙の寄稿家――が、なほ烟の出てゐるピストルを手にしたまゝ立つてゐた。暗殺者は逃げ出さうとしたが、属僚連によつて廊下で逃路を斷たれ、他の大學生と一緒に逮捕された。身體檢査の結果、今一挺のピストルが出て來た。そして、ペッツァは恐るゝところなく次のことを自白してゐる。もし第一のピストルが故障を生じた場合には、直ちに第二のピストルを使用するつもりであつたと。なほ彼は總ての大臣を暗殺する計畫のある旨を告げた。一方アンゲレスキュは、頭部、肩、腕に各々一彈を受けてゐることが確められた。彼は病院に移され、三發の彈丸は拔きとられたが、よほどの重態である。首相マニウおよび內相は直ちにブカレストへやつて來た。暗殺者は、マケドニア大學生團のルーマニア代表の首領株であり、尙書アンゲレスキュの反ユダヤ主義者に對する態度をもつて、ルーマニアの國事を裏切つたものとして、右の政治的復讐を試みたものであるといふ。

北フランスにおける大ストライキ

社會保險の掛金の問題に端を發したフランス勞働者のストライキは、遂に、重大な結果を生んだ。八月四日北フランスにおいて宣せられたゼネラル・ストライキは、その參加人員二五〇、〇〇〇と註せられてゐる。同地方は殆んど戒嚴令下にあり、『戰時そのまゝ』であると通信された。この形勢は八月中旬にいたつても、激化こそすれなんら鎭靜の傾向を見せてゐない。

問題の社會保險は一九三〇年四月三〇日の法律によつて制定され、一九三〇年七月一日をもつてアルジェリヤを除く全フランスに施行されたものである。この社會保險は、政府の給與する金額を除いた部分を、資本家と勞働者とが折半して出すこと、勞働者の掛金はその賃銀から天引すること、等を骨子としてゐる。この法律はフランスの輿論によつて、正義と連帶と先見の權化として絕大の賞讃をうけた。正義。なぜなら政府は勞働者のために義をなすから。連帶、なぜなら資本家は勞働者のために出費するのだから。先見、なぜなら勞働者は自らの將來のために自ら備へるのだから、といふのである。

しかるに、この新しき制度を廻つて、資本家と勞働者とはそれぞれ獨自の道を步んだ。

資本家の側は社會保險の出費を理由として價格を高めた。その結果は、各種生産物の價格が急激に然も不當に騰貴したとの非難が起り、現にそれは公定相場に現はれはじめた。商工大臣は調査の結果、一定

標準から見て五パアセントの出費にすぎないのに、四〇パアセントだけ高く賣價に掛けた製造業者を發見した。七月三一日、大臣は反省を促すために、各資本家團に回狀を出すにいたつた。

勞働者の側は早くも七月四日西部のリモーヂュでは、フランス×××の指導下に、社會保險反對運動が起された。掛金と同額の賃銀引上を要求して罷業に入つた。同日、北方のダンケルクのドック人夫一、八〇〇人が罷業に入つた。日を經るにつれて罷業は擴大し、殊に七月二〇日以後は猛烈となつた。有名なシトローエンの自動車工場を初め、纖維、金屬、建築、衣服等の各種の産業に亙つた。罷業破りの意味で入國したベルギーの勞働者もストライキに加はつた。×××、C・G・T・Uの指導が進むと共に、政治的な性質を帶び、政府は軍隊、憲兵、警官をもつて鎭壓に努めてゐる。

總理大臣タルヂュに、法律改訂の意ありやに傳へられてゐる。

イギリスの失業遂に二百萬を突破す

イギリスにおける失業は一九二一年における戰後の恐慌以來の最高の數字を示すにいたつた。登錄された（職業紹介所）失業者の總數は七月二八日、二、〇一一、四六七に達した。

これは實に驚くべき數字である。しかも、これがイギリスにおける失業者の總てを示してゐないことを、我々は忘れてならない。といふのは、失業保險法の適用からは、全部の農業勞働者および家庭勞働者が除外されてゐて、それらの失業は上の數字に表はれてゐないのである。そして、農業勞働者だけについて見ても、その失業は一〇萬に及ぶであらうと、『タイムス』ですらが八月二日の記事で云つてゐるほどである。

この巨大な失業群の發生に對して、イギリスの朝野ではいまや喧々囂々たる論議が戰はされてゐる。

保守黨ならびに自由黨の諸言論機關は勞働黨政府が失業問題を解決する能力をもたぬことを指摘して、猛烈に非難してゐる。事實、勞働黨政府の組閣以來一四ヶ月であるが、この間に失業者數は九〇萬を増加し、殆んど二倍になつた譯で、勞働黨政府も甚だ具合が惡いのである。

これに對して、勞働黨の機關紙『デイリー・ヘラルド』は苦しい辯解にこれ努めてゐる。曰く、最近の失業は世界恐慌の影響であつて、勞働黨政府の責任でない、と。そして、一〇年前ロイド・ジョージが政權を握つてゐたときだつて形勢は今日より決してよくはなかつたで

はないかと逆襲してゐる。どうもこの辯解はどこかの國の政府の辯解と似てゐるではないか―

イギリスにおける經濟恐慌は月を追うて尖鋭化さんとするものゝ如くである。生産は萎縮し、輸出は減退しつゝある。その結果は、造船業、石炭業、鐵道、紡績業において大衆的解雇が續々として行はれてゐる。

これによつて見れば、イギリスにおける失業はまだまだ増加しさうである。勞働黨内閣は實際に到底この問題を解決しえないであらう。

アメリカ經濟の最近情勢

一九二九年一〇月の取引所破綻に始つたアメリカ合衆國の恐慌はいまや一般恐慌となつて、ますます深刻に全部面を襲つてゐる。

フーヴァーの召集した國家實業諮問會議による恐慌對策も單に恐慌を永びかす役割りを演じたにすぎない。一九三〇年五月初めに合衆國商業會議所において行つたフーヴァーの樂觀的演説は、すぐと起つた五月の株式市場の崩壞によつて無殘に一蹴し去られた。あらゆる經濟雜誌は合衆國における不景氣の深刻化を傳へる記事で充滿してゐる。『アナリスト』の景氣綜合指數は一九二九年九月の一〇五・八より一九三〇年六月の八六・五といふ、一九二四年の最低位まで低落した。合衆國三大重要産業部門たる鐵鋼工業、自動車工業、建築工業における不振は特に顯著である。鐵鋼工業の操業は前年間において全生産能力の九〇％を使用してゐたのに對して、本年は五六％を使用してゐるに過ぎぬ。しかも、なほこれ以上の低下が豫想される。なぜなら、恐慌中の鐵鋼工業の操業の最低位は實に三八％であつた。自動車工業についていへば、『ニューヨーク・タイムス』は一九二九年七月の此工業の生産指數の一四〇に對して、本年七月のそれをば六〇と計算してゐた。事實は、七月末にはこの指數は三七・九まで低落した。これはフォード、グラハムペイジ、オークランド、ポンティアク、パッカアドの工場閉鎖、ビュイク、クライスラー、デュランの著しい生産制限に基くものである。自動車の國内販賣額は、主なる國内市場を構成してゐる聯邦準備制度支配地域において、一九三〇年五月より六月にいたる一ヶ月間に二九・七％減退し、一九二九年六月以降の減退額は五〇・九に達してゐる。他方、スムート・ホーレー關税法案通過の結果は疑ひもなく原料品價格を騰貴せしめ、海外市場を著しく制限する效果をもつことは明かである。フランスの自動車および部分品の關税引き上げはこの一例である。自動車工業の前途はなほ暗澹たるものである。

最後に、フーヴァーの景氣回復の萬冶藥たる建築工業はどうか？　一

月以降の契約數並びに價格總額は共に一九二九年より低位にあり、七月にいたつては一九二九年の同期に比して四三%の減退を見た。合衆國建築市場の花形たるニューヨーク都市地域における建築契約數の如きはその低下實に六二%に及んでゐる。かくて、一九三〇年の建築數は一九二九年を凌駕するであらうといふフーヴァーの聲明は信ぜられうべくもない。

價格の急激な下落は恐慌時における一般的現象であるが、いまやそれは、たゞに自由競爭の支配する價格においてばかりでなく、獨占の支配する諸部門の價格――銅、人絹等々――においても見られるにいたつてゐる。此結果は、一方では、統制價格維持の困難のために國際カルテル、國內カルテルがその存在を脅かされ、他方では、價格の激烈な下落のために地方金融資本が却つてその力を著しく强大ならしめられるといふ現象を生じてゐる。しかしながら、獨占部門と非獨占部門との間の價格下落の不均等はなほ依然として大きい、――後者が犧牲とされてゐる。ためにそれらの犧牲とされた非獨占部門――農業、纖維工業――は一層速かに沒落せんとしつゝある。

かくして、最近アメリカにおいて農民は窮迫を極めつゝある。この農民を救ふために、少くとも農業生產物の輸入關稅をば工業生產品の域まで高めようといふ事が提案せられたのがスムート・ホーレー法案であつたことは、すでに多くの人の知るところであらう。しかし、この農業保護案は金融資本家の支配下にある議會を通過するうちに、いつのまにか、全く工業保護案に轉化されてしまつた。そして、工業生產品は過重に課稅せられ、農業はこの關稅の結果却つて非常な不利益を受けることになつたのである。加ふるに一九二九――三〇年間の小麥手持ちの增加は、いまや、農民を彌が上に壓迫しつゝある。これに對して金融資本家はいかなる態度を取つてゐるか？　ウォールストリートの機關紙『フィナンシャル・クロニクル』はユニオン・トラストの意見を掲げ、アメリカ農業を窮地に陷らしめたものはヨーロッパ大陸の合衆國農業よりも獨立によるものであり、現在合衆國農業の通過してゐる危機は工業の產業革命當時における惱みにも比すべく、農業合理化のためには小農の沒落も涙を呑んで放任するのが論理的であり、且つ健全な政策であると論じてゐる。アメリカ合衆國の小農は沒落に委されてゐる。これまたアメリカ經濟の最近の一樣相である。

外國貿易は？　これについて合衆國があまりにも神祕的であるとさへ云はれてゐるにもかゝはらず、その辿るところは依然として低落の一途である。人々は輸出における原料品並びに完成品の共通の甚しい減退の事實に、明かな世界恐慌の影響を看取し、同時に、スムート・ホーレー關稅法案の通過後一層激甚となつた內地市場防衞戰、關稅障壁戰

を想起することができる。カナダおよびフランスは直ちに關稅を引き上げた。イギリスの商業會議所は內地市場を防衞するために保護關稅の施行を熱心に論議し、民衆に訴へんとしてゐる。他方、輸入商品額の甚しい減退は南米諸國、日本等々の原料輸出國の危機を物語る。

資本輸出もまた甚しく減退した。一九二九年間の資本輸出は前年間に比して五億六千萬ドルの減少である。長期資本の輸出が七億八百萬ドルから三億八千三百萬ドルに減退したことは特に目だつてゐる。しかし、この點で我々の忘れてならないことは、アメリカ帝國主義がその恐慌切拔けの最後の對策のひとつとして、資本輸出に據らうとしてゐる事實である。合衆國は南米において其金融資本家としての地位を確立するに務めつゝあつた。そして最近には、戰前僅かに一二億ドルに過ぎなかつた其南米投資額は今や五十七億二千萬ドルとなり、遂にイギリスをその制覇を誇つた最後の地からも驅逐しようしてゐる。事實を背景として、アメリカ資本の前衞ラモントは次の如く聲明した。『合衆國より南米、東部アジアへの資本輸出の不足こそは、これらの地域より發して擴大しつゝある世界經濟攪亂諸要因を尖銳化した。それ故世界經濟の均衡と云ふ見地より見て、資本に富む諸國よりこれらの國々に資本を供給することは絕對に必要である』、と。（ベルリーナー・ターゲブラット、一九三〇、八月一五日）だが、この恐慌切拔けの最後策が國際葛藤——特にイギリスとの——となつて終ることは、我々に明かである。

最後に。かくの如き情勢のもとに合衆國の失業は一段と深刻さを加へた。我々は合衆國においても直接失業者を知るべき統計をもたぬが、しかし勞働局の指數にすれば工場就業人員は一九三〇年五月には一九二四年の最低位を凌駕し一九二九年の九九・二（一九二六年を一〇〇とす）より八七・七に低落してをり、賃銀支拂額は同じく一〇四・八より八七・六と低下してゐる。しかしこれは一三重要大工業就業人員についての調査であつて、なほこのほかに莫大な數に上ぼる農村失業者、小企業よりの失業者が存在することを知らねばならぬ。（A・F・L』のグリーンはその組合が加入人員の失業を二〇%と見てゐる。恐らくこれが正當な率であるとすればその數は夥しいものである。

これらの幾多の事實は我々にアメリカ經濟の最近の形勢を大體ながら明かにするであらう。永久繁榮の頂から最も深刻な恐慌の谷に突き落とされたアメリカ經濟は、今日もなほ、その嘗つての繁榮の曙光をすら見てゐない。

現代二大富豪の閨閥網

白柳秀湖

第二編　三菱閨閥網の卷（上）

『一』　山縣有朋の死、公式合體派の復活

唯物史觀の公式から云へば、閨閥の力などいふことは問題にならぬ。戰國時代の歷史に就いて考へても、例へば織田氏と武田氏、武田氏と今川氏、今川氏と德川氏、德川氏と豐臣氏と云つたやうに、次から次へと水も洩らさぬほど緻密に結ばれた閨閥網でも、一朝經濟的利害の相反するに遭へば、一片の反故よりも無造作に破棄されて顧られなかつた。古い血統の秩序が、まだ多量に人間を拘束する力を持つて居た時代でさへ、經濟的利害の人生、社會を支配する力の強さはそれ程のものであつた。それから三百年以上を經過して、土地經濟の上に打建てられて居た封建制度が倒れ、貨幣經濟を基とする近代國家の統一が成つて、『金錢は他人』といふ金融資本主義の鐵則が、大磐石の如く人間の生活を支配する現代にありて、今更らしく閨閥網の研究とは何事であるか。或る公式論者はこんなことを云つて筆者の迂濶を嗤つて居るかも知れぬ。

併し、世の中のことは却々學問の公式通りに行かぬ。婚姻政策を以て容易に經濟的利害關係を剋し得ぬことは、戰國時代に始まつたことでなく、既に藤原氏の失脚、平氏の沒落以來、餘りにも明白な道理である。それにも拘らず、現代人はまだ婚姻政策に執着を斷つことが出來ぬ。勿論、彼等の意圖は經濟的利害關係を剋する爲の婚姻政策にあるのでなく、經濟的利害關係を一層鞏固なものにする爲の婚姻政策にあるのかも知れぬ。又、或は經濟的利害關係から必然的に發生した社會的自然現象

としての婚姻網でもあらう。

『金錢は他人』の一語を以て遺憾なく盡される經濟上の公式は公式として、古來權力階級の常套手段として行はれて來た閨閥網支配の事實は尙ほ依然として現代に存する。

長閥の中で山縣有朋、井上馨の兩巨頭が、自家權力の消長に最も神經過敏であり、權門勢家の婚姻によつて生ずる政權の移動に關して死ぬまで笑止極まる焦躁を續けて居たことは人の善く知る所である。山縣が某重大事件として世に喧傳された晩年の大失態を演ずるに至つたのも要はその病が膏肓に入つて居たからである。それにしても、山縣の失脚と共に、十年逆境にもがいて來た民政黨がメキ〳〵と其勢力を伸し、政友會の壓倒的勢力を覆へして完全に政權を把握したといふ事實の底には、本篇の讀者に眼を皿のやうにして讀んで貰はねばならぬ節もある。如何に筆者がおしやべりであればとて、その邊の消息を何から何まで筆に上すことは出來ぬ。



農商務大臣時代の後藤象二郎伯

要するに山縣の失脚を一期として、明治、大正五十年の政治的舞臺から殆ど絕對に斥けられて來た公武合體派の公卿、大名及び幕臣等が、何かの形式で昭和の政治的舞臺に復活して居るといふことを觀察して貰へばそれでよいのだ。

公武合體派と云へば、維新史を讀んだほどのものは、誰でも直に靑蓮院宮(久邇宮)朝彥親王、島津齊彬、同久光、山內容堂、後藤象二郎等の名を想起すであらう。而も最後まで踏こたへて、公武合體主義の爲に氣を吐いたものは土佐藩である。さ

うしてその土佐藩こそ大三菱王國の母胎であり、土佐藩の家老で、老公山内容堂の公武合體主義を奉じ、二條城の大舞臺に立ち薩長の下士階級聯盟をアッと云はせるほどの大芝居を打つた後藤象二郎は、薩州の島津家と共に、三菱閨閥網の根幹を成すものである。

薩藩はその上士階級に就て云へば、公武合體主義に於いて、寧ろ土佐藩よりも古く、西郷、大久保等の下士階級が勢力を得て、長藩の桂（木戸）大村等と提携するまでは、會津藩と善く、薩會聯盟の力で、長藩を京都から驅逐し、元治元年にはそれが爲に御所九門の兇變をさへ惹起したほどの間柄であつた。之を要するに薩藩は一時その政權が西郷、大久保等の下士階級に移つたから、長藩と提携したやうなものの、西郷、大久保が相尋いで斃れ、下士階級の中心勢力が消え失せた後、それが自然に長閥と離れるに至るのは當然のことである。



坂本龍馬氏

昭和の政界は、明かに土佐藩と薩摩藩とを根幹とする三菱の閨閥網によつて支配されて居る。さうして其公武合體主義の歷史的色彩が、必要以上に德川氏や、會津藩や、その他の幕臣達に何等かの形式で、一味の春風を送りつゝある。かやうに考へて來ると、長藩下士階級の最後の支柱であつた山縣公の死に、今更のやうな重大な意義が發見されるではないか。

『二』 吉田東洋、後藤象二郎、阪本龍馬及び岩崎彌太郎

三菱閨閥網の根幹を成す土佐藩及び薩摩藩の天下、公武合體派の復活、筆者のこの觀察に對しては、讀者に一つの大きい疑惑の起ることが豫期せられる。疑惑とは何であるか。それは現に目まぐるしい歩度を以て衰頽への途をたど

りつゝある政友會の前身、自由黨が土佐藩の正嫡兒であつたといふことである。土佐藩の勢力が昭和の政界を支配してゐるといふに、土佐藩の正嫡兒である自由黨の後身、政友會の現狀は何であるか。甚だ辻褄が合はぬではないかといふ疑問である。此疑問は今の中に解決をして置かぬと、後に致つて叙述の妨げをなす懼れがある。

土佐藩には、後藤象二郎の義理の叔父に當る吉田東洋が、容堂に用ひられて仕置家老であつた時から、土佐藩を一大海運國として經營して行かうといふ理想があつた。土佐藩から南方洋上に船を出して無人島を手に入れ、其處に一大貿易場を開いて、盛に外國と通商し、その利得を財源として、大に天下の經綸を行はうといふのであつた。此理想は吉田東洋が、尊攘派の兇刃に斃れて後、後藤象二郎によつて繼承され、後藤が藩の長崎商法所に留守居として在勤中、坂本龍馬が商社及び海援隊としてその一端を實行し、後藤の拔擢を受けて安藝郡井口村の一鄕士から一躍長崎の留守居に出世した岩崎彌太郎が鬱陵島の探險としてその一端を實行した所のものである。若し坂本龍馬が無事で明治の初めに及んだとしたら、海援隊の延長として、三菱會社の仕事は、當然坂本に割振られたのかも知れぬ。



板垣退助氏

廢藩置縣の際、後藤が林有造と謀つて一藩の所有汽船十一隻と、大阪なる土佐商會の土地、建物及び附屬品一切を岩崎の所有に移し、三菱會社建設の素地を與へたのは、勿論、後藤がその長崎の留守居役であつた時代に、外商に負うた巨額の藩債を一切岩崎に肩がはりさせ、その尻拭ひをさせようといふ魂膽もあつたには違ひないが、岩崎に一大汽船會社を起させ、其處に土佐藩の政界に於ける活躍の資源を求めようとしたものに相違ない。

然るに三菱會社が追々に成長して、前途頗る有望なものになつて來て見ると、命がけで之を守り育てて來た岩崎の所有慾は

漸く猛烈なものとなり、後藤も際限なく三菱に迷惑をかけることの出來ぬ義理合となつて來た。其處で後藤も強て自ら經營して居た蓬萊社に力を入れ、高島炭坑を經營したりして、三菱に代るべきものを求めたが、經營の事にかけては無鐵砲極まる人であつたから、その結果が更に大に三菱を惱ますこととなり、明治十四年、板垣が國會開設期成同盟の同志を率ゐて起つ頃には、岩崎の信頼が全く後藤の上を去つて、明治七年の征蕃役以來、三菱にとつては育ての親ともいふべき大隈重信の上に移つて居た。

自由黨と改進黨とが、共に藩閥政府の打倒と立憲政治の樹立とを旗幟として起りながら、而も恐ろしく仲が惡く、初めから藩閥政府を前にして火水の如く相爭つたのは、その間に三菱があつて不和の原因を成したものと解するの外、說明の途はない。板垣の自由黨が土佐を母地として生れた關係から云へば、土佐藩の信用と共所有汽船とを初めの資本として生れた三菱は當然自由黨の兵站部でなければならぬ筈のものであつた。少くとも板垣、後藤の立場からはさやうに見られたものに相違ない。然るに自由黨が結成される頃までには、三菱會社も漸くべき勢力となり、政治家の喰物となつて甘んずるには、其背後が餘りにも組織立てられて居た。三菱會社は最早土佐藩の政治家の野心を充す爲に準備された私設大藏省ではなくして、反對にそれらの政治家を、自家の利益と特權との爲に驅使すべき政治的、社會的動力となり果せて居た。

殊に自由黨にはその立黨の根本に於いて三菱の利害と相容れぬ條件があつた。それは自由黨が藩閥の勢力に對抗する爲に、地方ブルジョア、即ち全國各地に於ける鄕士、豪農、酒造家、問屋商人等を糾合し、その勢力を土臺として立つて居たことである。之等の地方ブルジョアは明治の初年、全國の津々浦々に族生した汽船會社の資本主であり、若しくはそれらの汽船會社と聯絡ある問屋筋、地主筋であつた。然るに三菱は初めから之等の汽船會社と協調せず、飽くまでも海上獨占の方針で、競爭會社の剋殺に力めた。殊にその競爭會社を支持する問屋業者を倒し、生產業者を屈服させる爲に開始した、直爲替及び、地爲替の方法が、自由黨の立脚した地方ブルジョアを苦しめたことは非常なもので、それだけでも、自由黨がその發祥の地を同じくする三菱會社の攻擊に熱中しなければならなかつた理由は十

分である。

　だから岩崎彌太郎は初めから自由黨に出資せず、改進黨を援助したが、改進黨の中にも三菱の頤使に甘んぜざるものがあつて、何れも之を純粹の三菱黨として、その掌股の裡に置くことは出來なかつた。殊に國會開設の後も藩閥の勢力は容易に衰へず、當分は閥族の力に依るに非ずして、何事も成し能はざる情勢にあつたので、彌太郎の後を繼いで三菱會社の社長となつた彌之助は、三菱の大恩人である大隈を再び世に出し、閥族の中で最も醇良無私の稱ある伊藤と握手させて、聯立内閣を組織させることをその畢生の理想とした。彌之助の外舅、後藤象二郎は、彌之助の意を體して伊藤と大隈との間を奔走し、實質上の三菱内閣を組織しようと力めたが、其企圖は常に内にありては板垣と大隈との不和、外にありては山縣、井上等の伊藤牽制によりて失敗に終つた。

『三』　純三菱黨の成長

　かやうな事情で自由黨は土佐に起つたが、三菱とは初めから仲が悪く、それが憲政黨となり、伊藤の政友會に合流するに及び、彌之助も一時それに力を入れかけたが、間もなく伊藤が去り、明治三十九年西園寺公が起つて鐵道國有を斷行するに及び、三菱は全く政友會と絶ち、明治四十年以後、豐川良平を主謀とし、仙石貢、片岡直温、兩氏を中心とする新政黨樹立運動が起つた。當時、仙石、片岡の兩氏がその新政黨樹立運動を三菱の爲と云はず、『土佐派の勢力を中心とする政界縱斷運動』と稱へて居たのも面白い。

　仙石、片岡の兩氏によつて『土佐派の勢力を中心とする政界縱斷運動』が提唱されたことによつて考へても、明治三十九年鐵道國有策斷行以後の政友會が、如何に土佐派の勢力と分岐して、地方ブルヂョア黨化しつゝあつたかゞ立證せられる。政友會と三井との關係が濃厚になつたのも此頃からである。何故となれば、三井はその物産を通じて常に地方ブルヂョアとの協調を保つべき立場の上に置かれて居たからである。

　豐川を主謀とし、仙石、片岡の兩氏を中心として開始された新政黨樹立運動が、頗る複雜な委曲を經て桂の同志會となり、大隈の出馬となり、加藤高明の下に憲政會として十年間、血の滴るやうな激しい政戰を續けて來た結果、政友會の内訌に乘

と、遂に純三菱內閣ともいふべき第二次加藤內閣を完成するまでに急速の發達を遂げ、現に民政黨として政界に壓倒的勢力を振ひつゝあることは詳しく說くまでもない。

今は何と云つても三菱の天下だ。三菱の歷史と、三菱の資本網と、三菱の閨閥網とを知らずして現代を語るは虹を趁つて黄金の壺を求めんとするよりも愚だ。

自由黨は三菱會社と共に土佐を母地として產れた。然るに土佐は間もなく自由黨を見棄てた。後藤も板垣も何とかして、三菱と土佐との緣を繫がうとして力めた。併しその骨折は無益であつた。それに反して土佐は何處までも〳〵三菱を追かけて居る。三菱の天下は土佐の天下である。それは民政黨の構成分子を仔細に點檢することによつて傾人も首肯される筈だ。さうして偶然ではあつたが民政黨の擡頭と入れ違ひに、明治、大正五十餘年の政局を支配し來た長藩下士階級の最後の支柱、山縣有朋が卒然として失脚した。



岩崎彌太郎氏

三菱が維新後の產物で、公武合體主義との間に何等の關係もないことは勿論である。併し三井と薩長下士階級によつて主張された討幕主義との間には重大の關係がある。三菱が一歩進出する時は三井が一歩退却する時である。況んや長藩下士階級の最後の支柱であつた山縣が其時に臨んで失脚した。三井の退却と、山縣の失脚とは、明治、大正五十餘年の政治的中心勢

力から排斥されて來た公武合體派の進出を自由にした。而もその公武合體派こそ三菱閨閥網の根幹を成す、土佐藩と、薩摩藩とであり、嘉永、安政の昔、それが青蓮院宮（久邇宮）を奉戴し、會津、桑名その他の諸藩と提携して盛に活躍したものであることは茲に說くまでもない。

『四』岩崎家と小野家

岩崎家は岩崎彌太郎を祖とする本鄕切通町の本家と、彌太郎の弟、彌之助を祖とする芝高輪の分家とを根幹として成る。本家も分家も共に男爵で、本家の當主は彌太郎の長男、久彌氏、分家の當主は彌之助の長男で、現に三菱合資會社に社長の任に在る小彌太氏である。

岩崎家の閨閥網は彌太郎の母、お美輪の生家、小野氏に脈をひく豐川星座、彌太郎の妹婿藤岡氏に脈をひく志村星座、非田星座、並に各務星座、彌太郎の弟彌之助に繫る後藤星座、彌太郎の長男久彌氏に繫る保科星座、彌太郎の長女春治子に繫る加藤星座、同次女磯治子に繫る木内星座、同庶子富子に繫る早尾星座、同庶子雅子に繫る幣原星座、同庶子康彌氏に繫る松山星座、同庶子正彌氏に繫る能勢星座、彌之助の長男小彌太氏にかゝる島津星座、同長女繁子にかゝる松方星座、同次男俊彌氏に繫る蘆星座を根幹として、それから八方に枝をひろげて居る。

先づ彌太郎の父、彌次郎の素性から、始めて、母小野氏に脈を引く豐川系の諸星に及び、次に本家、次に分家と逐次その姻戚網の解剖に入ることとする。

岩崎彌次郎は土佐國安藝郡井口村一の宮の百姓であつた。勿論百姓と云つても、只の百姓でなく、由緒ある武家の成れの果として近隣に聞えて居たことは、その妻美輪が、安藝の五藤家（山内三家老の一）に出入した町醫者、小野敬藏の末子であることによつても察せられるし、又、岩崎氏の紋所、三階菱（現に三菱の徽章となつて居る人字形のものは、山内家の三つ柏に擬へて後に改作されたものである）が、四國に藩衍した他の岩崎氏と共通であることによつても知られる。かく云へば土佐の歷史に通じて居る人達は岩崎家を、山内家二代の祖、忠義の時に定められた輕格（註）即ち鄕士の一人と速斷するかも知れぬが岩崎家が輕格の株を買つたのに彌太郎の時で、（弘松宣枝著—

——岩崎彌太郎）それは恐らく彌太郎が藩士、奥宮周二郎の從者として、江戸に出る前後のことであつたと想像される。何れにしても彌太郎の時まで、岩崎家はまだ山内家から認められた郷士ではなかつた。

（註）土佐は人の知る如く、もと長曾我部元親の割據した南海の別天地で、其國境には魚梁ケ瀬、劍、東西祖谷、三傍示、白髪、別子甕ケ森、石槌、鬼城などの嶮山峻峰が屛風を立てた如く東から西に連亙して内地との交通を遮斷し、南は所謂九十九洋の荒海、遠淺で風波が荒く、海岸線に屈曲がないので、港灣らしい港灣は唯一つ高知の浦戸があるのみである。斯やうな國柄であるから土佐は攻めるに難く守るに屈強の要塞をなし、剰さへ嶮惡急峻な大自然の中にはぐくまれた土佐人の氣質はいやが上にも勇猛精悍で、之を屈することは容易の業ではなかつた。長曾我部元親が四國の中でも最も邊僻な、食糧に乏しい土佐を根據としてその威を全島に振ひ、殆ど之を平定せんとするの概があつたのは、全く此峻嶮なる土佐と、勇悍なる土佐人とのお蔭であつた。

されば關ケ原の戰後、徳川家康が、元親の子、盛親を京都に拘禁し、井伊直政を派して土佐を平定させた時でも、長曾我部氏の殘黨は所在の山々谷々に立籠り、主家の再興を嗷訴して止まず流石の直政も容易に之を鎭定することが出來なかつた。

此長曾我部黨を、根本的に鎭壓したのは、山崎闇齋から桀紂とまで評せられた山内氏二代の祖、忠義である。忠義は山内氏歴代の君主中、稀れに見る精悍活讓の人で、其信ずる所は何人の諫も容れず、斷々乎として之を實行し、一歩も讓らざるの概があつた。一方に於いて峻嚴苛酷な武斷政治を用ひ少しでも抗抵干犯の色あるものは、片端から刑戮を加へて假借しなかつたと同時に、歸順したものは之に士分の待遇を與へ、山内家の家臣として土着せしめた。茲に於いてか、所在の長曾我部黨は我も我もと相率ゐて山内氏に歸順し士分としての待遇を受けた。此時から土佐藩には『輕格』とか『下士』とかいつて、支配者の階級にも附かず、又、水呑百姓の階級にも屬しない、一種中間のものが生じた。山内家譜第の家來で、遠州から移つたものは『上士』と稱へ、高知に邸宅を持ち、城下生活をしてゐたが二代忠義の時、新に山内家の家來の内に編入された、長曾我部黨は、多く在來の土地に住み、在來の土地を領し、毎年正月二日に一度高知に出て、高坂城の馬場で、君前に馬術を演ずるだけで武士としての格式を繋いで居たが、平日は全く晴耕雨讀、世の所謂『郷士』と少しも變る所はなかつた。

然るに此上士と下士との間には格式の上に非常な懸隔があり、上士は下士に對して必要以上の侮辱と凌虐とを加へることを常習として居た爲に、下士の上士に對する階級意識の熾烈なことは他藩に例を見ぬほどで、幕末、尊王攘夷の說が天下を震蕩するや下士階級は結束して薩長下士階級の尊攘論に矢筈を合せ、上士階級の公武合體論に反對した。

初め山内家の二代忠義が輕格の身分を定めた時には之を百人に限つたものであるが、其後追々に人數も殖え、幕末に至ると、江戸に於ける札差、御家人等の株と同じく、金錢で賣買が出來るやうになつた。岩崎家が買つた郷士の株といふのは、此輕格、即ち下士の株を意味するのだ。此事實から考へても、岩崎氏の土佐に入つて歸農したのが如何に古いことであつたかといふことが知られる。

彌次郎は五六十石ほどの田地を持つて居たが、稼業には出精せず、常に鳥籠の桿心などを削つて居たといへば、その家道の振はなかつたこと推して知るべきである。平生は敦厚篤實の人であつたが、醉ふと誰彼となく人を漫罵垢辱し、傍若無人の擧動が多かつたと云はれて居る。

『五』　彌太郎の母お美輪の事

彌次郎の妻、美輪は安藝の町醫者、小野敬藏の末子である。安藝は三千石ほどの田舍町で、山内家三老職の一人である五藤家の領地であつた。土佐の山内家には、伊賀・深尾・五藤の三家老があつた。その中、伊賀家は西端の幡多郡宿毛で一萬石、深尾は高知の少し西にあたる佐川で同じく一萬石を領して居たが、五藤家は東端安藝郡の安藝で三千石を領するのみであつた。元來、山内家に對する功勞の上から云へば、五藤家は決して、伊賀・深尾の二家に劣らないのであるが、他の二家に比し入國が少しおくれた爲に、僅か三千石の小身に墜ちたのである。前にも述べた通り、安藝は土佐の東部にあつて大阪と交通の要衝にあたり、内地文明の影響の最も著しい部分であつたから、此地方の三千石は、或は西部の五千石にも一萬石にも當つて居たかも知れぬ。

敬藏は、五藤家などへも出入はして居たが、もとよりお茶坊主醫者でホントに脈を取つて居たといふわけではない。此の敬藏には四人の子があつて、長男を順吉といひ、次を德治といひ、次は女でおときといひ、之は儒者の岡本寧藏といふ人に嫁し、末が美輪と云つて井口村の百姓彌次郎の妻となつて居る。以上四人の兄弟の中で次男の德治は早くから五藤家に仕へ、匙のかはりに茶筅をひねくつて居た。豐川良平は此の人の長男である。

彌太郎の母、豐川良平氏の叔母、お美輪は文化十一年七月二十日生れで、彌次郎に嫁し二男二女を擧げた。非常な賢夫人であつたらしく、夫の彌次郎が酒癖惡く、農業をきらつて、徒らに日を送つて居るのを、女のかぼそい手一つに家政を引うけ、子女の教育には貧しい中にも少からず力を入れたものださうである。彌太郎が後に日本の海上王となり、天下に名を成したのは全く此母の賜と云はれて居る。

彌太郎の姉はは、つと云つて吉村勘次と云ふ人に嫁し、吉村可

時を生んだ。明治三十二三年頃、三菱の地所課長を勤めたことのある人である。又、妹は、、さきと云つて藤岡正敏と云ふ人に嫁し、明治四十二年頃、三菱の吉岡鑛山に所長をして居た藤岡正信といふ人を生んだ。次は彌之助で兄彌太郎の後を襲うて三菱會社の社長となり善くその難局に處して守成の大任を完うした。彌太郎は明治二年に、それまで郷里井口村に遺してあつた父母妻子を迎へて、大阪長堀なる舊藩邸に引取つて扶養することとしたが、父彌次郎は明治六年に世を去つて、母のお美輪だけが東京湯島切通しの本邸に移され、明治三十三年三月十四日八十七歳の高齢で身まかるまで頑固に土佐風に立通した。

『六』 彌次郎系の三大星座

(一)豐川順彌——氏は豐川良平氏の長男で、明治十九年九月に生れ、大正九年六月、父良平の死によりて家督を相續した。筆者と中學郁文館の同窓であると云つてくれた人もあるが、同級ではなかつたものか、筆者は順彌氏のことを少しも記憶せぬ。父、良平は小野敬藏の次男、徳治の嗣子で、幼名を小野春彌と云つた。少年の時、父徳治に伴はれて高知の城下に居たが、父がチブスを患ひ、變じて中風症となり、尋いで安藝の地に歿した後は、母の手一つに養育せられ、後、東京に出で姓を豐川、名を良平と改めた。一説によると、豐川の姓は豐臣の豐、徳川の川を取つたものであり、又良平の名は張良の良、陳平の平を取つて、自ら命じたものとある。良平初め藩校致道館に學び、後東京に出で慶應義塾に入り、福澤諭吉に識られ、翁と彌太郎との間にありて斡旋する所が多かつた。

明治八年彌太郎の意をうけて森下岩楠氏等と三菱商業學校を神田の錦町に創立し、尋いで馬場辰猪、大石正巳、千頭清臣、齋藤修一郎の諸氏と明治義塾を創立し、三菱の爲に大いに人材の養成に努めた。明治二十二年第百十九國立銀行の頭取に推され、同行が三菱合資會社銀行部と改稱せらるるに及びその部長となり、日露戰爭の後に及んだ。

豐川は性豪放不羈、醉へば傍ら人なきが如く、好んで古英雄を談じ、ひそかに己を以てその範疇に置いた。三菱の外務大臣を以て稱せられ、専ら、政客の操縱に任じたのは、明治三十九年第一次西園寺内閣が、三菱の利害に重大の關係ある

鐵道國有を敢行してから後のことである。

明治三十九年、第一次西園寺內閣が鐵道國有を敢行した後に初めて行はれた總選擧に（明治四十一年五月）大三菱の發祥地である土佐から打つて出た代議士には大抵、豐川良平の息がかかつて居た。仙石貢氏にしても片岡直温氏にしても、和田尊義氏にしても、富田幸次郎氏にしても、豐川良平氏と何かの形で何かの交渉があつた。此總選擧は政府反對黨の必死の努力にも拘らず、政友會の大勝利に歸した。さうして西園寺內閣の壽命は萬々歲と見えたにも拘らず、總選擧の後、幾何もなく、西園寺公はサラリと內閣を投出して、さまぐ\な噂の種を蒔いた。

當時豐川良平が或る宴會の席で口を極めて西園寺內閣の財政策を罵倒し、總選擧に大勝した西園寺內閣を裏面から物の見事に打倒したものは斯く申す豐川良平で御座ると放言したことは財界雀の間に專ら噂のあつたことであつた。

豐川良平が三菱の外務大臣として初めに手をつけたものは仙石、片岡の兩氏を中心とする土佐派の代議士と、澁澤、中野の兩氏を中心とする商業會議所系の代議士とを聯合させた戊申俱樂部である。

豐川氏はまた戊申俱樂部の分子が雜駁で多く恃むに足らずと見るや、憲政本黨（進步黨）の內部における犬養氏と大石氏との訌爭を調停し、之に、戊申俱樂部の土佐系（仙石、片岡氏等）を結びつけて國民黨を結成させた。

かゝる間にも政友會の勢力は年と共に强大を加へ、その地方地盤も、愈々鞏固となつて來たので、流石の山縣一派も、之に對抗するには、非政友的一大政黨の結成に俟つの外なきを覺るに至り、それが偶然にも豐川良平等の畫策と出會つたので桂と大浦とが山縣から或る特殊の使命を負はされて政黨の畑に乘出すこととなつた。立憲同志會の組織がそれである。

立憲同志會は成立しても、加藤高明がその黨首として立つにはまだ貫祿が足らず、桂の死後、一時大隈がその代理として引出され、時期が到來して加藤が同志會の後身である憲政會を率ゆることとなつた。

立憲同志會の成立した日は豐川の使命の略果された日であつた。桂から大隈へ、大隈から加藤へと、同志會の三菱黨た

る實質が完成されて行くにつれて、豊川良平の如き人物と、その策動とが漸く不必要なものになつて來た。彼の存在は冬を迎へた木の葉の枝を謝し去る如く、世の中から忘れられてしまつた。さうして、大正九年六月彼の死に對してさへ、人々は餘り多くの關心を持つことが出來なかつた。

豊川良平の夫人やす子は自由黨内の雄辯家として鳴らした馬場辰猪の姪女である。馬場辰猪は土佐人、馬場來八の子で彌太郎に識られ、北海道開拓使官有物拂下問題の沸騰した時には、大隈重信を援けて全國を遊説し、得意の熱辯を揮つて閥族の心膽を寒からしめたものである。爾來、自由黨と改進黨との中間に在りて去就に苦しんだものの如く、自由黨内に於ける言動頗る明瞭を缺き、明治二十一年十一月三日、三十九歳で米國に客死した。晩年は全く三菱の扶持人であるかの觀があつた。良平には三男、三女があつた。長女はちゑ（明治十七年三月生）次は順彌（明治十九年九月生）次は靜江（明治二十二年四月生）次は二郎（明治二十四年十二月生）次は貞三郎（明治二十六年九月生）次は良之助（明治二十八年四月生）次は三重（明治三十年三月生）次は齊（明治三十一年十二生月）次は良幸（明治三十七年七月生）である。

右の中、順彌は大正九年家督を相續し、五男齊は海軍大將、子爵齋藤實氏の養子となり、六男良幸は、各務幸一郎氏の養子となつて三菱王國の重要な閨閥網の一端を形造つてゐる。

又、二女靜江はお茶の水高等女學校を出て愛媛縣の人、鹿村眞吉の長男、美久氏に嫁し、三女三重は双葉高等女學校を出て法學士伊藤愛吉氏に嫁して居る。

（イ）子爵齋藤實——從二位勳一等、海軍大將齋藤實氏は、日本海軍の大御所と呼ばれて居る伯爵山本權兵衛氏の番頭さんで、豊川良平の五男、齊氏の養父である。齊氏は明治三十一年、長崎の三菱造船所が六千三百噸の常陸丸を進水した記念すべき日を以て生れ、日露戰爭の頃、齋藤家に養子したものである。

齋藤實氏は安政五年十月二十七日、岩手縣士族、齋藤耕平の長男に生れ、明治六年兵學寮に入り、明治十五年はじめて海軍少尉となり、同十七年米國に差遣せられ、爾來累進

して大正五年海軍大將に任ぜられた。此間參謀本部海軍部出仕、侍從武官、富士、和泉各艦副長、常備艦隊參謀、秋津洲、嚴島各艦長、海軍省軍務局長、海軍次官海軍總務長官等に歴任し、明治三十九年第一次西園寺内閣の時初めて海軍大臣に任ぜられてから、大正三年四月山本内閣の倒潰に至るまで、五代の内閣を歴仕してその任にあつた。島田三郎等によつて議會に海軍收賄事件の提起された時には、自らその矢面に立つて奮戰し、山本大御所の掩護に努めた。

　當時山本男は政友會と提携し、犬養毅氏と暗默の裡に諒解を遂げて居た。犬養氏は三菱の豊川氏と親善な關係があり、其海軍擴張論は、明治四十三年第二十七議會以來のことである。その犬養氏が桂の爲に三菱の株を横取されてしまつた上に、國民黨の大部分を拉し去られた事の行がゝりから、海軍豫算の全部を否決しようとして息まく、島田、尾崎の徒と歩調を一にして進まねばならぬと云ふ事は、何程か苦しかつたことであらう。

　犬養氏にも増して苦しかつたのは、同志會の總理加藤高明の立場であらう。海軍は三菱の大旦那である。その大旦那がフトした事の行がかりから、三菱には正面の敵である政友會と握手し、犬養氏と暗默の諒解を遂げて進まうとして居る。大正二年の第三十一議會に提出された山本内閣の海軍豫算案こそ、三菱としても、川崎としても願つたり叶つたりであつたらう。大正政變以來の行がゝりもあり國民の手前鵜呑みといふことも出來まいが、輕くあしらつて結局通過といふことになれば上々の首尾である。それを島田が思ひもかけぬシーメンス事件など擔出して、世間を騒がせ、事態を手もつけられぬものにしてしまつた上に、黨議を海軍豫算の全部を否決といふ所まで押詰めてしまつた。憎みても餘りあるものは島田であるが、それよりも呆れ果てた沒常識漢は片岡直温である。之が三十一議會に於ける加藤の腹の中であつたに相違ない。この腹の中を立割つて暴け出したものが、大隈内閣成立後に於ける島田の寂しい運命と片岡氏の非境とである。

　尚ほ、齋藤實男の夫人春子は舊薩摩藩の士で、維新前に米國に渡航して海軍の兵術を修めた子爵、仁禮景範中將の妹である。三菱と薩閥との深い關係が茲にもその一端を

見せて居る。

又、豐川家の當主、順彌氏の夫人孝子は、故男爵、神田乃武の二女で、明治三十二年十二月生れである。學習院女學部を出て、順彌氏に嫁し、男良吉氏を擧げて居る。法學博士河津暹、經濟學士松本兼次郎は、皆神田男爵家を通じて順彌氏の合婿に當つて居る。男爵高木喜寬氏の弟、兼二氏に嫁した孝子の姉百合子（明治二十五年七月生）は、寬二氏の死によつて今は淑しく暮して居る。

（ロ）各務幸一郎——氏は現に三菱の外務大臣といふ批評があり、豐川第二世を以て目されて居る各務鎌吉氏の令兄で、豐川良平の六男、良幸氏を養つて子として居る。弟の鎌吉氏は岩崎彌太郎の妹、さき子の嫁いだ藤岡正敏の四女しげを妻として居るので、各務家は岩崎と二重の姻戚關係を繋いで居ることになる。

各務氏は戸籍の上で東京府平民となつて居るが、もとは水戸の人である。父を各務省三といひ、幸一郎氏はその長男である。文久元年十一月二十四日に生れ、東京高等商業學校卒業後、日本郵船會社に入り近藤廉平氏の社長時代に重用された。現に日本郵船株式會社の社長で、九州炭礦汽船株式會社の專務取締役である。

（ニ）男爵、近藤滋彌——氏は故男爵近藤廉平の三男で、明治十五年九月に生れ、大正十年二月父の死により、其家督を相續した。廉平は阿波徳島在に住んだ近藤玄泉といふ醫者の次男で、嘉永元年十一月二十九日に生れた。初め徳島の新居與一助に學び、與一助が京都に於ける足利尊氏の木像梟首事件に連累して徳島の城下を逐はれてからは、塾頭柴秋村に學び、明治元年東京に出で、當時一橋の藩邸に勤めて居た秋村の世話で、藩校の世話方となり、傍ら大學南校に入り初めて英語を學んだ。間もなく藩の權大參事、星合常恕に知られたが、廢藩置縣の後、星合が片岡健吉の推薦で、高知縣知事に任ぜられたので、近藤は星合の護衞として高知に赴任することとなつた。それが明治五年三月、近藤が二十五歳の時の事であつた。玆に近藤と舊土佐藩との因縁が生じ、それがやがて近藤の三菱に抱へられる素地を成した。

近藤はかやうな關係から、星合の世話で岩崎彌太郎に用ひられることとなり、初めは無給で同社の東京支店に勤め、手

紙の受附役を命ぜられたものであるが、間もなく大阪の本店に轉じ當時岩崎家の邸内に設けられて居た英語學校の舍監となり、傍ら生徒として英語を勉學した。かくて明治六年五月には更めて社員に取立てられ、月給五圓を支給せられることとなつた。幾もなく彼はその文才を認められ、十月には川田小一郎の秘書役として吉岡鑛山買收の爲、備中に隨行し、同鑛山買收の後、其庶務係となり、事務部長に進み、大に其業績の見るべきものがあつたので、明治九年には二十八歳で同鑛山經營の全責任を負はされることとなつた。

近藤は人も知る如く、溫雅渾厚玉の如き美丈夫で、それが彼の才智力量と相俟つてその立身出世を援けた事は一通りでなかつたらしく、彼は曾て星合夫婦から我子の如く可愛がられたやうに、彌太郎の母、お美輪からも末賴母しきものに思はれ、常に眼をかけられて居たものと見え、明治十年三月には、彌太郎が西南戰爭で大阪の支店に出張滯在中、母お美輪の話相手といふ格で、吉岡鑛山から東京に呼び出され、三月三十日にはお美輪の指金で川田小一郎が口を利き、お美輪の手許に使つて居た當時二十一歳の從子（安政四年十月生）と呼ぶ土佐生れの美しい娘を妻として迎へることとなつた。從子は土佐の安藝から彌太郎の母お美輪に仕へ、明治六年には十七歳でお美輪と大阪の長堀の岩崎邸に引取られ、明治八年には十九歳で更に東京の岩崎邸に移つたものである。近藤に妻される時には彌太郎の從弟に當る豐川良平の妹といふことにしてその身分が取繕はれた。

結婚後、近藤は駿河臺のニコライ堂附近にさゝやかな新家庭を持つたが、更めて東京の本社詰を命ぜられ、尋いで社長直屬の調役に任じ各汽船は勿論、各地の支店に於ける荷物の受渡しから、故障荷物の調査、諸帳簿、諸目錄の檢閱、海陸冗員の陶汰、註文品の調節、消耗品の節約等頗る廣汎な範圍に亘る調査に任じた。此前後に彌太郎の下に調役として近藤と同僚であつたものに吉川泰次郎、末延道成、加藤高明等があつた。明治十四年には彌太郎が後藤象二郎から高島炭坑を引うけて經營することとなつたので、近藤はその事務長として拔擢をうけ、二十七歳でその任に赴いたが、彌太郎の鑑識に誤りなく大にその成績を擧げた。間もなく自由黨と改進黨との間に確執が生じ、自由黨の三菱攻擊、共同運輸會社の挑

戰となり、三菱は腹背に敵を受けて非常の苦境に陷つた。明治十六年一月二十六日、近藤は彌太郎の召命に接して高島炭坑から、三菱會社の橫濱支店長に轉じ、兩者の競爭の最も激烈を極めた部面に立つて、殆ど不眠不休の惡戰苦鬪を續けた。

明治十八年二月七日には彌太郎が三菱會社と共同運輸會社との協定が將に成らうとするのを前にして斃れ、合同は爲に一頓挫を來したが、西鄕從道を中心とする薩派の斡旋によつて兩社の協定が成り、明治十八年十月一日、日本郵船株式會社が成立した。此時三菱會社を代表して日本郵船會社に入つたのが、莊田平五郎、吉川泰次郎、內田耕作、近藤廉平、淺田正文等で、近藤は爾來累進して副社長となり、明治二十七八年の戰役には、社長吉川泰次郎を輔佐して軍隊軍需の輸送に盡悴したとの廉で、勳四等に叙し、旭日中綬章を賜り、續いで吉川泰次郎の後を襲うて社長の重任を負ひ、明治三十七八年の戰役には同じく軍事輸送の功によつて勳一等に叙し、旭日重光章を授けられた。

近藤が日本郵船會社に社長であつた前後約二十年間は同社の全盛時代で、航海獎勵法により、國庫の保險する一ケ年六百萬圓といふ世界に比類のない多額の補助金は、株主に對して每期一割以上の配當をした上に、連日連夜新橋築地の茶屋、待合に宴飮し、官吏、政治家、若しくは宮內省筋の有力者を酒池肉林の間に蠱惑するに十分であつた。會社はかくて或は陸上設備費と稱し、或は交際費と稱して百萬の資を折花攀柳の痴戲に蕩盡しつゝも、尙ほその決算報告に於いて、幾十百萬圓の利益金を隱蔽するに苦しんだものである。かくて明治四十四年八月には、累年海運の事に致した功により、華族に列し、男爵を授けられ、大正十年二月人生の榮耀榮華を極めて大往生を遂げた彼の幸福は、寔に一代の羨望措かざる所であつた。

(イ)**大久保利武**——氏は大久保利通の三男で侯爵大久保利和、伯爵牧野伸顯はその兄、大久保利賢はその弟である。夫人榮子は近藤廉平の女で、男爵近藤滋彌氏の姉に當る。三菱の閨閥網が薩派に濃厚である事實を見るべきだ。

(ロ)子爵、**松平賴和**——近藤滋彌氏の夫人信子(明治二十五年五月生)の生家である。賴和氏は舊伊豫國西條藩主、

松平頼英（三萬）の養嗣で、伯爵松平頼壽の叔父に當る。近藤夫人信子は、その長女である。

（ハ）子爵、東園基光――氏は東園基愛の長男で、夫人輝子（明治四年四月生）は子爵松平頼和氏の養妹である。基愛の夫人、基光氏の母堂は久邇宮邦彦王の御姉君にわたらせらる。久邇宮邦彦王が維新の際、公武合體主義の首腦として仰がれた青蓮院宮朝彦親王の御世嗣にて在すことは人の善く知る所である。

（ニ）子爵、黒田文紀――氏は舊薩摩藩士、黒田清綱の子、黒田清輝の養嗣である。清綱は維新の際山陰道鎭撫總督參謀小弼に任じ、後高等法院審判官、元老院議官、樞密顧問官等に歴任した。その華族に列し子爵を授けられたのは明治二十年である。長男清輝は本邦洋畫壇の先驅者として知られた。氏はその養嗣で、橋口孝の長男、近藤滋彌氏は其叔父に當る。大正十二年三月の生れで、同十三年八月家督を相續した。

（ホ）伯爵、眞田幸治――氏は舊信州松代藩主、眞田幸民（十萬石）の孫、母澄子（明治十二年三月生）は松平頼和の養妹に當る。松代の眞田家と薩摩の島津家との間には深い關係がある。其次第は幸民の室桝子（元治元年四月生）が、島津家の出で、公爵島津忠承の義理の叔母に當つて居るからである。又、幸民は侯爵伊達宗城の長男で、先代幸教の養子となつたものである。長男幸正が後を襲ひ、松平頼和の養妹澄子を迎へて室とした。幸治氏はその長男である。明治三十四年四月を以て生れ、大正六年家督を相續した。

尚ほ此外に近藤家の親戚には、廉平の女八重子の嫁いだ（ヘ）濱口擔、同富路子の嫁いだ（ト）橋本敏之、同清子の嫁いだ（チ）藤森雄平等の諸家があるが省略する。

（三）藤岡家――岩崎彌太郎の妹さき子は、大阪長堀の人、藤岡正敏に嫁いだ。さき子は天保九年七月三日生れで、藤岡氏との間に長男正信を始めとして數人の子女を擧げた。後、東京に移り、小石川金富町なる元豐川邸の前に住んで居たが、最近の消息は不明である。正信は安政九年三月十日生れで、明治四十一二年頃、三菱の吉岡鑛山に所長をして居たが、その經歷のことは本號の締切まで、報告すべき材料を手

に入れることが出來なかつた。明治三十二年に出版された弘松宣枝の『岩崎彌太郎』には、藤岡正敏が藤岡雄馬となつて居り、正信の名がなく觀次の名が擧げられて居る。同書によると、觀次は當時三菱深川出張所の主任であつたやうである。觀次と正信とは同一人であるか、それとも別人であるか。藤岡家の事情に通じて居る人の敎へを仰ぎたい。

(イ)莊田達彌――氏は三菱の重鎭、莊田平五郎の長男で、母は藤岡正敏の長女田鶴子である。田鶴子は安政五年正月十七日の生れで、明治十一年平五郎に嫁し、明治十四年一月達彌氏を生んだ。近藤廉平、豐川良平、莊田平五郎の三人が申合せたやうにその長男に岩崎家の『彌』字を襲名させて居るのに見ても、その自ら三菱の譜代を以て任ずるの意氣込みを察すべきである。平五郎は舊豐後臼杵藩の儒者莊田允命の長男で、弘化四年十月一日を以て生れ、夙に慶應義塾に學び、傍ら敎鞭を執つて居た。豐川良平がその人物の卓越にして才幹の凡ならざるを識り、明治八年之を彌太郎に推薦した。彌太郎が川田小一郎、豐川良平等の幕僚を率ゐて腹背の强敵に當り、惡戰苦鬪、一切萬事を放擲して三菱の爲に勝利を期する時、莊田は善く内を守り、常務を統べ、彌太郎をして後顧の憂なからしめた。彌太郎の死後、彌之助を助けて守成の任に當り、三菱の基礎を大磐石の重きに置いた。殊にその眞摯原愨の資を以て、彌太郎の嗣久彌氏に仕へ、勵精恪勤善く社務を統べ、信賞必罰克く部下を制し、三菱三代の功臣として内外に重きをなした。達彌氏の夫人百合子(明治二十六年六月生)は舊薩摩藩士、故陸軍中將、男爵伊知地幸介の女で、母は侯爵、西鄕從德の從妹に當る。三菱と薩閥との親みが此閨閥網にもよく現はれて居る。

(ロ)志村源太郎――氏は山梨縣南都留郡西村村の平民宇平の長男である。明治二十二年東京帝國大學法科政治部を首席で卒業し、藤岡正敏の次女久萬猪さんの婿がねとして採ばれたものである。從つて莊田平五郎とは合婿の關係にあつた。卒業後、駒場農林學校敎授となり、二十三年農商務省に入り、同省參事官、秘書官を經て法政局參事官となり三十年農商務省工務局長等に任じ、三十一年日本勸業銀行相談役となり、三十二年横濱正金銀行に轉じて、同行檢査

役、外國課長に昇任し、三十四年再び日本勸業銀行に入つて副總裁となり、四十四年山本達雄氏の後を襲つて總裁に任じ、同行に在ること前後二十一年、大正十年十月職を辭し、貴族院議員となり最近に及んだが、八月二十四日本稿執筆中那須の別莊に急逝した。三菱を代表する金融界の長老で、現内閣の財政計畫と經濟政策には三菱合資會社總理事、木村久壽彌太氏と共に重大な權威をなして居る。井上藏相の金解禁斷行には、此人の有力な支持のあつたことが傳へられて居る。勸銀總裁として自作農創設資金、耕地整理組合資金の貸付など農村の金融に盡力し、辭職後は專ら力を産業組合運動と蠶絲同業組合とに注ぎ、農林政策に關しては現農林大臣町田忠治氏の最高顧問格であつた。

（八）各務鎌吉——氏は豐川星座の一明星として擧げた各務幸一郎氏の弟で、現に三菱海上火災保險の取締役會長である。保險業に關する知識の權威で、莊田以來、とかく非社交的人物の多い三菱部内に稀らしい闊達の資を以て知られて居る。平生、善く交り善く談じ、三菱の外交方面を一人で脊負つて立つて居るやうな觀があるので、早くも豐川第二世を以て擬するものがある。その人物に就いては世間にとかくの批評もあるが、土佐人を首腦とする三菱部内に實力を以て押しも押されもせぬ牢乎たる地位を占め、昂然として獨り往くの概あるは凡庸人の能く爲し得る所であるまい。氏の夫人しげ子は、藤岡正敏の第四女である。從つて氏と莊田、志村の二長老とは合婿の關係に當る。彌次郎系の閨閥網は、以上を以てその大要を盡した。彌太郎系、久彌系、彌太助系、小彌太系は之を次號に讓る。

（三菱つゞく）

血管硬化を防ぐには

肥滿質又は多血質の中老人は一見して強壯に見えても常に血管硬化の脅威を感ずる。血管硬化すれば血壓昂進し、晴天の霹靂の如く突如として腦溢血・心臓破裂などに襲はれ或は腎臓の慢性障碍を受ける。その豫防には先づ血管硬化の原因となる飲酒・過勞美食などを節して心身の安靜を計るにあることは云ふまでもないが、同時に血管硬化を阻止するホルモン即ちアニマザを持薬として運用することも極めて重要である。これによつて動脈管の彈性を恢復し、血液の巡行を圓滑ならしめるから、肉體的にも精神的にも氣分を非常に良くする。

放送局内幕アナウンス

牧野健造

尖端！　ウルトラモダーンの傾向を指して尖端といふ。電波を賣る企業、いはゆる「尖端」を行く近代的文化企業がある。事業の縮少、閉鎖、産業合理化と、あらゆる企業が等しく經驗する苦悶喘息の絶對恐慌のうちに、ひとり向上線をたどるものは放送事業である。無數の世人、中でも資本家たちが焦燥してゐるのはその秘密の鍵の發見である。かゝる特殊現象の科學的究明は本稿の目的でないからこゝでは省略して、早速時代の人氣者、電波を賣る企業體へマイクロフオンを進める。現在月額七十餘萬圓の收益を確保するといふ社團法人日本放送協會は、五年前光線を賣るといふ映畫企業と同樣に時代をめがけた營利事業として萌芽した東京、大阪、名古屋の三放送局を母胎にしたものである。すなはち、當初先を爭つて二十餘の資本團體が放送事業許可願を遞信省當局に提出した時に、當時の犬養遞相の托宣は、營利方針を避けしめて之を公益法人組織たらしめた。そこに影あり。この時既に遞信官吏高給養老院はもくろまれてゐたのである。恩給年限にとゞいた遞信官吏はゾク〳〵と收容された。例へば年俸五千圓の局長も、一度こゝの常務理事に天降るやたちまち一萬餘圓となるといふ具合に。會長は岩原謙三、三井物産重役の頃時のシーメンス事件の立物で、今は芝浦製作所社長である。日本放送協會を統轄するものは彼である。これは三井資本の代理にほかならない。以下本部諸々の理事を初め、傘下の地方放送局理事長より一平理事に至るまでたとへば關東の門野重九郎、關西の松方正雄、東海の神野金之助ＥＴＣと云つたやうに夫々資本閥の一系列で占めてゐる。これらの人々が資本金一千萬圓の法人事業に投資する。そして毎月七十餘萬圓（月額聽取料一圓の納入聽取者數七十餘萬人）の收益から莫大な高歩を利益する。而もそれが恐慌のうちに獨り發展する獨占事業といふ安全無比のインヴェストメントである。このやうな發展は、漸次投下資本即ち帳面での借入金を剩餘金から急速に償還する結果となり、それは更に新計畫を展開せしめ、高歩の確保擴大に努めしめる所以となる。例を昭和四年度のＪＯＡＫ收支決算書にとれば、この剩餘金は全支出の約五割の百四十五萬七千圓を示してゐる。勿論このうちには次年度繰越金並びに積立金など含ま

れるのであるが、前述の投下資本の僅少と高歩の仕掛がその最高額を占めてゐるのである。この資本の急速な、確實な、高率の運轉は、現在までの東京、大阪、名古屋、廣島、熊本、仙臺、札幌等々の七局の上に、五年度計畫として既に金澤が開局され、その他新潟をはじめ五局が増設され、十年度までには更に三十餘局といふ膨大な數が新規に建設される。その設置地では、たとへば其處の商工會議所を掌握するところの大資本の支系に結びつく傾向がある。こゝに影あり。すなはち此の事實は、資本の擴大が必然に小資本の埋沒、一般出資者をして反比例的に單なる利貸資本家へと退化せしめ漸次大資本獨占へと趣かしめる。個々の工業資本で形成された最初の放送事業は、今日既に金融資本の制覇の端緒を證左してゐる。金融資本の前には、その監督當局も無力化し、法人組織も事實上トラストの一環として本質的に變則な營利組織に轉化されやうとしてゐる。まさに放送事業は、資本獨占時代に於ける公益法人の行方を示した好例といはなければならない。かくて下向線をもたずに月七十餘萬圓収益ある此の有望な利潤をめぐつて資本閥の暗鬪をもたらされるのは必然である。それが常務理事爭奪戰となつて現れる。

さて放送事業資本の秘密は一應スイッチを切つて、最も興味ある？へとマイクロフォンを近づけよう。

そこには、放送玉手箱「謝禮」金一封がある。謝禮とは放送料の謂ひ、これがまた助からぬガンなのである。この謝禮を愛宕山の決算報告に伺ひをたてると、全支出額三百十八萬三千圓から剰余金百四十五萬七千圓を控除した額の約五割の六十萬圓に當るといふオロ〳〵額である。これを日割に計算すると雜費を除き平均約千五百圓となる。ＪＯＡＫだけで一日平均千五百圓の種を電波にする譯である。この支拂謝禮は一人につき下は十圓より上は三千圓までに至るまでの等級に使ひ分けされる。その規準といふのが至極曖昧で、若し一朝外に洩らされゝば收拾すべからざる禍根を招くところから、絶對極秘の玉手箱とされてゐる。何故ならこの放送料は、決して出演者の市場價値に算出の基準をおくものでなく、それは放送局、放送ブローカー、放送出演者の間での一種の悪縁の度によつて定められる。この三角關係は、不斷に摩擦し、時に爆發する。そこで自己の藝術の商品價値の過重換算にあせつた揚句轉んだりするサンたる藝術家が登場したり、コンミッション問題が燃えたり、放送不出演問題が起つたりするのである。

いよ〳〵玉手箱の蓋を開ける。講演、講座の謝禮金一封は普通二十圓乃至百圓前後で、現金の取得を必要としない知名の士たとへば當局のエライお方といふなのには煙草入れと

いつたやうな三十圓程度の記念品を贈呈する習慣になつてゐる。童話などになると最低十圓位に落ちることがある。この時間では以前殆と定期的に飽きる程出演するうまくない某童話家があつた。また三十分宛の英語講座を毎年何回か二三ヶ月もの連續講義をもつ某氏は、一回三十圓で學校より放送の方が專門になつた觀があり、いづれも兎角噂されたものだつた。しかし此の放送部類では特別なブローカーは活躍しない。

ブローカーの舞臺は演藝である。講演、講座などより金一封が際立つて重くなる。そのレコードホルダーが長唄の吉住小三郎出演當初の金三千圓である。當時、大家に屬する琵琶の永田錦心、清元の延壽太夫の二人は千圓以下では絶對に出演しないと主張しつゞけ今日に至つたが、そのうち錦心は一回の放送もなしに黄泉の客となつてしまつた。三千圓の小三郎も某蓄音機會社との契約關係もあつてなか／＼安く出なかつたが、大切な華客の聽取者の壓倒的要望と局の沽券とから遂に巨額の犧牲をも顧ず彼をマイクロフォンに立たしめたのだつた。額で行くと、最高なのに歌右衞門一座の歌舞伎放送の四十數分五千圓といふレコードの歴史がある。これは尤も一座三十餘人の出演だつた。

新内の相場は、加賀太夫が百圓、これに次いで宮古太夫が八十圓、最近プロレタリア的和樂「左翼派新内」の創始で廣く注目を買つた岡本文彌が五十圓、其の他は平均三十圓といつた具合である。義太夫では、竹本綾之助、小清が別格の百圓、次はずつと降つて越喜美が六十圓でなく仕掛である。琵琶は、其のブローカーを擔當する高峰筑風が特別に百圓、あとは普通二三十圓程度である。浪花節は案外高額な取引で、東家樂燕の三百圓を筆頭に木村重友が百圓位で、雜輩はこれに較べてづつと落ちる。落語の方は、旣に引退した小さんは一席百圓以上を收めてゐた。これが漏れて他の落語家連は一時放送不出演同盟を組織して一齊値上を迫つたが、今日のやうに高座の沒落に遭遇しては放送が命の親であつたりすることから、裏切者が出たりして遂に間もなく崩壞してしまつた。現在では文治、三語樓、右樂などは先づ五六十圓臺にとゞまつてゐる。講談へ行くと落語の下席で、而も非常な差別がある。先づ伊藤痴遊代議士が百五十圓、神田伯山の百二十五圓がこれに續き、八十圓、七十圓、六十圓といふ順序で典山、貞山、伯鶴となる。主として素人の多い地方俚謠などは旅費と寸志で濟ませてゐる。

音變つて洋樂の領域を見ると、由來洋樂の享樂は高價なもので、その謝禮の使ひ分けも煩雜で、而も豫算を食ふ。であるから如何に世界的な音樂家が來朝しようと、其の妙なるトレモロを電波にかける譯には行かない

質が下つても入選は黄色趣味で押さゞるを得ない。その筆頭が關屋敏子と藤原義江で、先づ四五百圓見當である。義江は、その藝術において敏子より劣ること數等であるが、彼女と共にヴイクターの赤盤が物語る近代的ニツポン俚謠のエキゾテイシズム故の、珍奇の故の過重評價に影響された額なのである。たとへばサロンドートンヌへの日本畫の入選と云つた調子である。これでつい先頃の國粹歌謠主義者永井郁子の放送不出演問題は、つとに世人の耳をとらへたところである。その譯はと云へば多聞に漏れず謝禮の不平等に對する不滿、即ち日本人の最高額義江と同額でなければ、今後ともマイクには立たないと、自信まさに百と數パーセントの一老歌姫が宣言した事件である。されば他の歌姫の相場はといふに、五十圓が松平佐登子、次いで佐藤美子、立松房子の四十圓内外といふ關屋級に比しては全くいたましいカーヴを見せてゐる。

放送料で悶着といへば、やはり差別謝禮の暴露で、かつて映畫說明者の一群が放送出演問題を結成した歴史がある。その端緒になつた差別待遇なるものを覗ふと、最高五十圓を占める德川夢聲、次に四十圓の仙石芳溪、三十圓台の松井翠聲、山野一郎、大辻司郎である。また映畫說明の放送は、その內容と機會との關係に秘密があつた。その映畫は乾度封切前か或は封切中に屬するものであつた。そこには映畫會社宣傳部と放送局側某幹部級との結托があつたのである。

右のやうなからくり表、放送プログラムは何のやうに編まれるかといふと、先づ放送部長が骨子ともいふべき大體のプランを立て、報導、講演、講座の類を社會教育課、一般慰安演藝を文藝課、この兩者が協力して一ケ月分宛の具體的編輯をして、放送の十日前には既に當事者とも日時の交渉も濟み、監督局の檢閲も了し、地方局への中繼手筈も整つて確立することになる。このプログラム編成に當つてイザ入選となると、それが演藝の場合は入選の實權は、放送局の非公式のプログラム相談役である放送ブローカーの手にある。名人といふ格を持たない出演者は、豫めこの放送ブローカーのギルドに税金を以て參加してゐなければ、放送は殆ど不可能と見てよい位な關門を確保してゐる。すなはち、歌澤は寅右衞門、芝金といふ夫々の家元。義太夫は竹本綾之助。三曲は藤田鈴朗。琵琶は高峰筑風。謠曲はわんや。浪花節は向山庄太郎。俚謠は貝砂東樂といつた風な存在である。これらにまつはつて一時有名な插話がある。昨年のことである。某新聞が端なくも文藝課員某其他にからむ瀆職的收賄事件を摘發つた。ところが其の責任者である當時の某幹部が、かつて同新聞の關係者であるところから百方努力して隱蔽に努めた。然し及はず新聞がこれを特種トップ三段で摘發してしまつた。紙面半にわたつて謝禮一覽まで公表されたのである。當の擔當記者は翌日繃帶の身に臥さり呻吟しなければならなかつた。彼等には暴力團があつたのである。餘りよい玉手箱は開けられないものである。さて筆者も取敢ずこの位で蓋をかぶせておかう。（了）



きのこの話

水島爾保布

きのこに就いて何か話せといはれた。

別段菌に通じてゐるつてことを宇内に聲明した覺えはないんだが、どういふ氣紛れからか、彼樣な問題が持ち込まれた。持ち込んで來るところを見ると、そこに小生何かきのこつてものに絡る因縁、或は目安があるのらしい。もつとも世の中の下らない事なら大抵は心得てると心得てゐるゾン氣な男だから、――たとへば何んてえきのこのつけ燒で酒を飲ませれば、猛烈に醉つぱらはせた上、尚痛烈に醜態を演ぜしめる事甚だしく有効であるとか、何んてえのを油いためにして食はせると、とても素晴らしくシヤツクリが出るとか、南洋産何々てえ菌は女性に對して頗る偉効を有つたもので只その香をかがした丈でも彼女の道徳は忽如として轉換して了ふとか、そんな類のお座なり話なら、相當種がないわけでもないが、さて改まつてお話を……と切り出されて見ると、野郎ガラにもなくダチ〳〵と來た。だから、世の畫工なみに帝展製作にでも沒頭してゐるか、或はもう少し愉快なそして大に金になる仕事でも持ち合せてゐた際だつたら、無論おことわり申上げたんだらうが、差し當り用もない少しコンデイシヨンは惡いが、まア書き出しや何かにならうと、こゝに聊かヨタらうつてえ了見を奮起したわけである。

で、このきのこつて奴、どうやら當時流行のエロとグロとの標幟つてえ趣がある。現にフランスの原野至るところに散點する有毒菌の一種に小人の×をもつて名づけられてゐるやつさへある。眞紅の傘に白い點々を散らした乾菓子のやうなきのこだ。一名死菌といふから命取りの代物らしい。食慾さへ離れゝば色彩形狀共に美しく愛すべく頗るデコラティーブに出來上つてるといふ話、とにかく一寸法師×たア誠に愛嬌がある。

次に我等の松茸、こいつだつて一〇〇パーセント以上寫實的な奴がある。とても川柳的だ。これの鑑定法なんかを、レデーの前で公然と發表することは必ず憚つてよろしい。たとへヤンキー娘の前でバナナ、

を可愛がつても……である。

だが、こいつらは形狀と色彩の問題だが、食餌として、あの方に特別偉大な効果を齎らす随一のものとされてゐる奴も亦きのこなんだから實に造物主も中々の粹だ。四川雲南地方に産する木耳の一種で白木耳といふもの、菜單には銀耳と記されてゐる。五年ばかり前、奉天公記飯店といふ家で御馳走になつた時、張作霖からさし廻した厨夫と稱する黑痘痕のお叔父さんが、これも補精強腎の妙藥とされてゐる竹蓀と一しよに羹に仕立てゝ提供した。

座にゐた滿鐵公所長のK氏の說によると、この銀耳つてえのは、一匁の時價日本金で約十五六圓に當るつてえ代物なんださうだ。當時は奉天票ガタ落ちの際中で、日本の十圓が百五六十圓に相當してゐた。食つちやア何の變哲も無い。といふより、味もそつ氣もないつまらぬものだつたが、とにかく、箸の先で一百五十圓かとこつまんぢやア食べるんだから、豪快なものだ。義理づくでも遠來の珍客らしい顏をして見せにやア、ならないわけである。

竹蓀といふのはこれも四川の特産、或人の說では筍の根もとへ生ずる菌の一種だつて事だが、そいつを封じた箱のレッテルには、棕櫚竹のやうな竹の幹の中間から球狀網狀になつてブラ下つてゐるのを、子供が竹竿ではたき落してゐる畫がかいてあつた。色合ひのところは生のものを見ないから判然したいが、乾燥したのは長さ四五寸、どうやら京都の祇園通り、東山へ向つて左つ側、不可解なものばかりを賣つてゐる店のショーウインドで見た、肥後ずゐきつてえのにどこやら似て、頭の方には網狀の傘らしいものが乾からびついてゐる。こいつは齒ぎれがよくつて、誠に訝な味である。近頃は和風の吸ひものにも應用されて、海月の胡瓜揉みと同樣に、大に中日融和の實を示してゐる。

呂氏春秋によると、和味の美なるものに越駱の菌といふのをあげてある。又宋の陳仁玉は撰著菌譜の中に——なんていふが、僕はこの菌譜の方は閲微草堂筆記からの孫引きだ。——台菌すなはち台州産の菌をもつて上味随一としてゐるつて話だ。もつとも越駱の菌の方はある學者は筍だといふ註を加へてあるが、こいつも紀文達によると、此菌本來は蕈菌ではないんだが、往々蛇虺の犯すものがある。それに中るとどうにも止め度がなく笑ひたくなる。といふから、こいつはやつぱり文字通り菌であつて、どうやら浮世風呂の上方者が食つた笑ひ茸の類らしい。話はいやに支那にばかり關係してゐるが、これも支那の俗說傳說に、菌賣りの爺さんには、どうかすると、鬼——日本の鬼ぢやない。まア幽靈とか亡魂とかいつた類で、種類實に多士濟々たるものがある。その鬼族が、自身の代償を索めに假裝してゐるのである。つま

り、――彼等鬼界すなはち陰府の規約によると、何年何か月かの陰府づとめで業漸く盡きた奴は、再び人間界に轉生することを許される。

もつとも、この再生の順序にはいろ〳〵あつて、曾ての人間界で極惡非道を働いた奴になると、濕蟲冥蟲の類に轉生させられ、朝生暮死を何十何百年も繰り返させられた上、初めて蠻夷の地に生ぜしめられたり、或は牛馬羊豚の族に變生せしめられるのださうだ。支那の俗間道教の轉生說に就いては隨分奇拔なナンセンスがある。が、そいつは暫く預ることとして、さて、この人間に再生することを許された鬼だが、再生するに就いては別に自分の身代りを立てなければならない。といふところでその身代りとりを目的に菌を賣りに來たもので、賣るのは勿論毒菌だ。こいつを鬼菌と稱する。鬼は有毒菌の總名だ。土菌の一種に鬼蓋（きつねのからかさ）鬼筆（きつねのゑふで）と名乘るのがある。昔はこいつを陰干しにして外用癰瘡の塗布劑に用ゐたものださうだ。どこ迄行つてもきのこつて奴は下がゝつた事にのみ緣を惹く。

明の謝肇淛するところの五雜俎に、こんな話が掲げてある。宋の嘉定年間の事、德明といふ和尚さん、山で採つて來た菌で仲間の坊さん達を御馳走した。ところがそいつが毒菌で、一坐十餘人盡く七轉八倒の苦しみをはじめた。昔から毒消しの隨一は人糞だといふ。河豚の毒に中つた者でもこいつを嘗めて助かつた例がある。といふことを思ひついた。德明和尚をはじめ一山の大衆、苦しい息の下から糞た糞だとわめく。いやもう鼻持ちならぬ騷動だ。

排泄物の効驗は覿面に現はれて、中毒者の誰彼、何れもお互に苦々しくも臭い息と共によみがへつたが、その中に一人日本からの留學僧で定心といふのがゐた。寧死不汚口とばかり頑として彼等の妙藥を斥けた。さうして、遂に腑理を折裂して死するに至る。といふから或は自殺して了つたのかも知れない。この定心は相州元勝寺に僧籍を有つてゐたものだつてえ事だ。見る人によつては無名の菌を食つてその毒に中つたことによつて「日本魂」つてものを發揚した事になるかも知れない。

ところで、この德明和尚にかぎらず、昔から菌の毒に中つて死んだつてえ話は隨分多い。今に及んで尚一家六人晩餐の菜にした菌の毒に命を損したなんてニュースが絶えない。無論採集者の無智、或は誤認による災禍には相違ないが、一面こいつが菌つてものに對する或る迷信に起因してゐる場合も少くない。殊に支那では、明の世宗（嘉靖帝）つてえ人が無闇と道術に凝り、方士術師といつた手合を濫に優遇したおかげで、神仙方秘の說朝野を風動するといつた狀態になり、僞仙人僞道術者が矢鱈と輩出し、民間亦爭つて紫芝靈草内服醴劑の類を

貢獻するといつたやうな有樣、各方面ともにいやに神祕めかした事が凄まじい勢で流行した。取りわけ日常の食餌についてはそいつが著しく發達したのだか複雜化したのだか何か知らないが、とにかくいろ／＼の意味が附帶した。いはゞ支那料理の一エポックを劃したつて事にもなる。珍奇を野にあさり山に求め、江海深く探索した上句が、冬蟲夏草になり、鹿の袋角になり、白木茸になり、虎の骨の酒になり、海豹腎酒三蛇膽酒梧桐靑蛇酒になり、海燕の巣になり、果子狸胎仔になり、……とまアいつた次第で、ことに芝菌類になると……たとへば、飛節芝といつて千年の老松に生ずるものは皮の中に脂があつてそいつを服すると長生不老を得るとか、千年たつた黃蘗根下に生ずる黃蘗芝といふものの細根を食ふと地仙になるとか、千歲芝といふものは刻むと血色の液を出す。そいつを足に塗ると水上を行くこと平地の如く且自分の形を隱すことが出來るとか、白鹿芝といつて白鹿の腦頂に生ずるのをなめると天上仙宮に生ずるとか、とてもベラ棒な効能の云ひ立てを傳へてゐる。

　こいつがしまひには普通の菌類にまで傳染して、椎茸の傘の正しい圓形を有つてゐるものは、補血滋腎に効があるとか、革茸の良品はその効銀茸に似て七十の衰翁といへども能く×××××飽かしめない程の作用があるとか、いゝ加減な浮說を最もらしく傳へたものだ。つまりこいつが累をなして、僧德明に無名菌を採らしめ日本僧定心に「日本魂」を奮起させたつてわけらしい。日本にだつて長い漢方藥時代があつた。御他聞に洩れず、今に及んで尙いく多の犧牲的冒險家を出してゐる。といつた次第なんだらう。紙數超過……

文壇ウルトラ新進論

大宅壯一

一

近頃の文壇は「新進作家」に壓倒された形である。どこの文學市場も、近年漸く洋裝が板について來た日本の娘たちのやうに、少々安つぽくはあるが、それだけまたフレッシユた新裝を凝らした「新進作家」の派手な新柄模樣の洪水を來たしてゐる。

「大家」や「中堅」たちは、一體どこへ行つてしまつたのか？　明治以來の老大家藤村は、齡と共にヴイタミンを失つて乾物のやうになり、秋聲は色氣と共に衒氣も褪せ、弴の「一類者物」は次第に一般性を喪失して第二の鏡花たらんとし、最近天下の耳目を聳たしめた潤一郎、春夫の「夫人讓渡」事件は彼等のために「桐一葉」の感を深からしめる。

また自然主義の末期から世界大戰前後の好景氣時代にかけて粗製濫造されたところの「中堅作家」の多くは、プロレタリア派とナンセンス派の挾み擊ちにあつて、どこかへ姿を消してしまつた。その落ち行く先は、通俗小說であらうが、童話であらうが、はたまた禪宗寺であらうが、年頃の娘が家出したやうに、大騷ぎをして一々穿鑿する必要も興味も起らない。自然主義の畑で育つた年增作家までが、眉墨をひき、口紅を施し、厚化粧をして「新興藝術派でござい！」と名乘つて出る文壇だ。恐ろしい時代の力の前に戰慄させられるのは、あながち筆者一人ではないであらう。

ところで、最近全文壇の人氣を浚つてしまつたやうに見える「新進作家」とは一體何であるか？　恐らくこの「新進作家」といふ言葉ほど曖昧模糊として摑まへどころのない言葉はあるまい。年齡でいへば不惑を越えた「新進作家」もあれば、文壇的閱歷でいへば「文壇に出て十年」以上になる「新進作家」も少からずある。ましてや作品の藝術的價値や作家の文壇的功績によつて地位づけることは尙更困難であり、不可能である。これを要するに「新進作家」といふものは、定義



藤澤桓夫氏

を下すことの出來ない概念である。否、「概念」ではなくて「感じ」である。タッチである。ニュアンスである。模様である。柄である。

それにしても、近頃は新しい「新進作家」ばかりが次から次へと、まるで停車場の自動販賣器から押し出る入場券のやうに出て來て、新しい「大家」や「中堅」がちつとも出て來ないのはどういふわけか？ 日本の文學や文學志望者が質的にデゼナレートしたのだらうか？ 日本人一般の頭がいくら惡くなつたせいだらうか？ それともこれまた濱口内閣の緊縮政策の弊害の一つの現れであらうか？

「大家」や「中堅」が少ないといふことは、一面ではまた、今日の社會がそれを切に要求してゐないといふ事實を物語つてゐる。今日の社會は、地味で、澁くて、手のこんだ、高價な織物類よりも、安くて、丈夫で、派手でさへもある實用品を要求してゐるのだ。近頃の作家の書くものが、綿類か、人絹か、せいぜいモスリンか銘仙どまりであるからといつて、それは「文壇」だけの責任ではない。

今日のやうな社會及び文壇では、「萬年新進」で留つてゐるといふことは、やむを得ないばかりでなく、また必要でもあるのだ。近頃は「博士」號を獲得したゝめに、却つて客足が絶えて困つてゐる開業醫があるといふことだが、今に文壇でも、偉くなりすぎて失業したなどといふ珍現象が起らないとも限らない。否、さういふ實例がすでにもうあるのだ。

近頃各書店の店頭に氾濫してゐるさまざまな「新進作家」創作集の洪水を見よ！「菊池寛全集」の附錄のやうな形で現れた平凡社の「新進作家傑作集」から始つて、日本評論社の「プロレタリア文學傑作集」、天人社の「暴露文學全集」、新潮社の「新興藝術派叢書」等々を經て改造社の「新鋭文學叢書」にいたるまで、數へ立てれば隨分あるが、内容はすべて「新進作家」の作品集だ。



武田麟太郎氏

「現代日本文學全集」や「明治大正文學全集」が近代日本文學のダンピングであるとするならば、前記の全集、叢書類は、

いはゆる「新進作家」のダンピングだともいへないことはない。今日は「新進作家」の全盛時代であると共にその整理期だ。

「新進作家」なるものは、言葉の定義を下すことさへ困難なのであるから、現在日本の文壇でこの言葉を冠せられてゐるすべての作家をとりあげて一々月旦することは、よくこの小論のなしうるところではない。十一谷義三郎、横光利一、片岡鐵兵、岡田三郎、尾崎士郎、川端康成等々の人々を「新進」扱ひすることそれ自體が滑稽だ。それにまた葉山嘉樹、林房雄、村山知義、淺原六朗、池谷信三郎などにしたつて、今更「新進」でもあるまい。なぜつて、彼等はもはや或る程度までその才能を發揮し盡し、それに對する評價も大體固定してしまつて、今後いかなる飛躍的成長を遂げるか、いかにして現狀を維持するか、それともいつ落伍するかといふことに興味がかゝつてゐるだけではないか。



立野信之氏

だから、この小論においては、編輯者の註文に從つて「新進」の意味をもつて限定して、本當の「新進」、最新の「新進」、超「新進」、ウルトラ「新進」だけを取扱ふことにする。それには改造社の「新鋭文學叢書」がプロレタリア派と「藝術派」の兩派を比較的普遍的に採錄してゐて便利だから、大體これに基づいて、洩れたるは出來るだけ補ひつゝ、彼等の作家的並に人間的特色及び傾向について、簡單な批判を進めてみたい。「新進」の「新進」たる所以は、理研酒のやうに値段が安くて、水つぽくて、醉ひがさめる點にあるのではなく、彼等の魅力の大部分は、現在の得點よりも將來の得點の可能性、即ち「アルファ」にかゝつてゐると思はれるからだ。



黒島傳治氏

二

まつ彼等を例によつてプロレタリア派と、女流と、「藝術派」の三種

に大別して、プロレタリア派から始めよう。

改造社の叢書中には、男子プロレタリア派からは、「戰旗」の藤澤桓夫、武田麟太郎、立野信之と、「文藝戰線」の黒島傳治、岩藤雪夫の五人が選ばれてゐるが、そのほかに「戰旗」の小林多喜二、德永直、貴司山治、橋本英吉、「文藝戰線」の小島勗などは當然この中に入るべき作家だ。


岩藤雪夫氏

藤澤桓夫と武田麟太郎とは、どつちかといへば典型的なインテリゲンチヤ的プロレタリア作家で、前者には片岡鐵兵の影響の跡が著しく、後者は林房雄の血を引いてゐることが明らかである。藤澤は、病身のせゐでもあらうが、安全剃刀のやうに研ぎすまされた、薄く、鋭く、弱々しい神經と、感覺と、良心とをもつてゐる。その感覺が嘗つての彼を「新感覺派」に結びつけたのであり、その良心が今日彼をプロレタリア派の陣營に投ぜしめたのである。インテリゲンチヤ的にいつていかにも「藝術家」らしい作家であるが、プロレタリア的見地から見れば、まだ〳〵清算すべき多くのものをもつてゐる、少しもちすぎてゐる。鐵兵より出で、鐵兵より鋭い感はあるが、惜しいことには、プロレタリア作家としての鐵兵の最大の武器である勇敢な猪突性を缺いてゐる。健康と共にこれを獲得することを希望してやまない。

武田はその明るさと、簡潔で印象的な描寫と、巧妙なモンタージユとをもつて、今なほ自然主義的な、自然發生的な、經驗主義的なリアリズムの作家の多い現在の左翼文壇で特異の地位を占めてゐる作家である。文章が朗らかで、筋の運びに巧妙なトリックを使ふところは林房雄そつくりであるが、林ほど興味性と遊戯性とが強く表面へ出てゐない點からいつて、より「プロレタリア的」だといへないこともない。しかしそれだけまた「大衆性」が乏しいともいへる。いづれにしても、映畫からその「明るさ」と同時にルンペン性を多量に密輸入してゐる點が目につく。彼は藤澤と共に、林、片岡についで文壇に現れた百パーセントイ


小林多喜二氏



徳永直氏

ソテリ・プロの好パツテリーである。だが、インテリ性そのものが悪いわけではない。それどころか、インテリの大部分が、その特權と共に生活指導精神を失つて、集團的にルンペン化しつゝある今日、インテリ性をいかにプロレタリア的に有効に生かすかといふことは、興味もあり、重要でもある。切に清算と自重を望む。

立野信之と黒島傳治とは、思想的立場は異つてゐるが、作家的ニユアンスに一種、共通性をもつてゐる。從來二人とも主として「軍隊物」と「農民物」を取扱ひ、手織の木綿物のやうに、地味な手堅さを示して來た作家である。そして二人とも、今では題材の點でも手法の點でも、飛躍的成長の必要に迫られてゐる。黒島は、「渦巻ける烏の群」あたりが絶頂で、その後はずつと降り坂の感がある。立野も、もう少し大きなスケールと迫力とを必要とする。先月の「中央公論」に出た「アスフアルトの群」には、新しい題材と手法への努力はよく現れてゐるが、まだ十分に成功してゐるとはいへない。

岩藤雪夫は例の「代作事件」以來甚だ氣の毒な立場におかれてしまつたが、まだ若いのだから決して悲觀すべきではない。罪は岩藤個人にあるのではなくて、彼を包んでゐる雰圍氣にあるのだ。それがたまたま彼といふ一個人のスキヤンダルの形式をとつて社會に暴露されたのである。それは丁度、先年問題になつた久米正雄の「盜作事件」の責任が、彼個人にあるよりは、彼を取りまいてゐる「流行作家」群の生活に歸すべきであるのと同樣である。久米の場合はうやむやに葬り去られてしまつたが、


貴司山治氏

岩藤及び彼を取りまいてゐる人々が、何等かの點において、また何等かの量において「マルキシスト」であるならば、事件そのものゝ糊塗と隱蔽に力を盡さないで、事件の眞相とその因つて來るところを明らかにし、それに對する正しき批判と共に社會に發表すべきである。誤謬を全然犯さない人がマルキシストなのではなくて、犯した誤謬を

つとも正しく清算しうる人がマルキシストなのであるこの。際彼の正しき自己批判と捲土重來が望ましい。

小林多喜二、德永直についてはすでに定評がある。殊に德永の最近における飛躍的成長は驚くべきものがある。彼は自己に加へられた正しい批判を卒直に受けいれて、早速それを活かすことを忘れないところの、勞働者らしい素直さと素朴さとを具へてゐるが、これは非常な強味である。批判と清算のないところに成長はない。


平林たい子氏

貴司山治は、最近いゝ半面も惡い半面も完全に社會に曝け出してしまつた形である。たゞ誰にも氣づかれてゐて、しかもあまり知られてゐない彼の特色をいへば、彼の作品にはセンチメンタリズムも、ロマンチシズムも、リリシズムも、全然といつていゝくらゐに含まれてゐないことだ。そのいゝ惡いは別問題として、日本のインテリ作家には珍らしい傾向である。

橋本英吉も小島勗もこれからの作家だ。前者の巧緻さと後者の手堅さとは、將來の成長を期待させる。

三

女流作家で「新銳文學叢書」中に選び出されたのは、平林たい子、窪川いね子、中本たか子、林芙美子、岡田禎子の五人である。現在の文壇で活躍してゐる新しいところはざつとこんなものであらう。そのほか「戰旗」の松田解子などもすぐれた作家だと思ふが、まだ一般的なポピユラリテイを獲得するにはいたつてゐない。上田文子は、結婚を否定する文章をいくつも發表してゐたが、突然結婚すると共に、どこかへ姿を消してしまつた。


窪川いね子氏

平林たい子はもう「新進」ではない。女流作家といへば、大抵



中本たか子氏

十六ミリかパテー・ベビーだと思へば間違ひのない日本では、平林は中條百合子などと共に、珍らしい底力をもつた作家である。近頃はずつとスランプに陷つてゐるやうであるが、もちろん白粉や口紅が落ちるやうにこのまゝ沒落してしまふ作家でないことだけは明らかだ。

今度の「勞農藝術家聯盟脫却聲明」は、確かに時期を得て堂々としてゐたが、その後はすつかり尻きれとんぼになつてしまつた。いつかまた出戻り女のやうに「元の枝へ」收まるのではないかと危まれるくらゐだ。第一、彼女が脫退理由を「原理的對立ではない」と說明するに及んで、分裂の理論的根據がすつかり失はれてしまつた。原理的對立のないところにマルクス主義的分裂はありえない。彼女がもし現在の「勞農藝術家聯盟」の指導精神と原理的に對立してゐないなら、何も分裂を賭してまで闘ふ必要は毫もあるまい。分裂は最後の手段だ。どこまでも同盟の內部に留つて、同盟そのものゝ刷新を計るべきで、彼女の攻撃する點の因つて來るところは、同盟の據つて立つてゐるところの原理及びそれから派生した指導精神にあるといふことを悟つたとき、始めて分裂を賭して闘ふべきである。さもなければ、「ヒステリーから起つた痴話喧嘩」と本質的には何等選ぶところがなくなつてしまふ。

彼女は今作品的にも、思想的にも、また生活的にも岐路に立つてゐることは明らかだ。果していづれの道を選ぶであらうか、傍觀者には甚だ興味がある。



林芙美子氏

窪川いね子は、激しい闘爭やルンペン的な生活を描いても、どこかに母性的な溫か味がある、いかにも女らしいプロレタリア作家である。線は細くて質實だが、それだけにひし／＼胸に迫るところの、弱いやうで強い力をもつてゐる。「キヤラメル工場から」はこの傾向をもつ

ともよく現したもので、女流プロレタリア文壇の逸品である。

中本たか子は度胸百パーセントの女流作家だ。その大膽な猪突性は、時にはアブノーマルな感じをさへ抱かせる。彼女のイデオロギー的成長、といふよりも飛躍は、そのウルトラ・エロチシズムと共に、サーカス的な刺戟と興味とをもつて、讀者、といふよりは見物人をはらはらさせる。それも近頃はあまり見られなくなつたが、どこでどうしてゐるのだらう。



岡田禎子氏

林芙美子は、日本のやうな擦鉢の底のやうな島國では珍らしいジプシー・ガールだ。彼女の「放浪記」はいはゆる「創作」でないかも知れないが――「火の鳥」一派の好きさうな、ビーズかマクラメ的「創作」などは鬼にでもくれつちしまへ！――「創作」以上の魅力をもつてゐる。改造社の叢書の中でも彼女のものが斷然よく賣れるさうであるが、これは一面手藝的文學の「敗北」であると共に、彼女の特異性を實證するものである。



龍膽寺雄氏

封建的並にブルジョア的社會秩序や家庭生活に對する彼女の大膽な判逆は、今日のやうな過渡期には、或る程度の破壞的な進步性を具へてゐるが、それも度がすぎて極端なルンペンに墮すると、逆に反動性の方が強くなつて來る。



久野豐彦氏

彼女も「珍らしがられてゐる」間が花だ。日本人は飽き易い。何とかして「女辻潤」にならぬやうに用心する必要がある。

岡田禎子といふ人は、個人的にも知ら

たい、作品もあまり讀んでゐない。しかしいつか「改造」に出たものや、「正子とその職業」中に收められてゐるのを一二篇讀んだ印象に基づいて考へると、女性のアブノーマルな性慾描寫が得意らしい。作品は大部分脚本で、どこか舟橋聖一に似たところがある。もつとも、舟橋ほどの凄味はなくて、女性らしい丸味を帶びてゐる。ひどい駄作もあるが、大體において相當しつかりした表現力と構成力とを持つてゐる。しかし男でも女でも、かうした變態的な題材は比較的劇化し易いが、もつと普遍的な題材と取組んで、果して彼女がどの程度まで成功するか疑問である。

最後に、右に擧げた五人の女流作家の中で、岡田（この人の經歴を僕は知らない）を除いた四人までが、女給出身か、或は女給的な職業についた經驗をもつてゐるのは、甚だ興味のある現象である。これによつて、今日のいはゆる「自覺した女性」の多くがいかなる境遇におかれてゐるか、彼等の「文學」がいかにして生產されるか、また總じて女流作家の作品なるものが今日の社會においていかなる意義を有し、いかなる役割を演じてゐるかを、大體察知することが出來るであらう。



井伏鱒二氏



中村正常氏

四

最後に「藝術派」であるが、今頃殊更に「藝術派」など、名乘つて出るのは、少々滑稽で、まるで黒燒屋の本家爭ひのやうな感じを抱かせる。プロレタリア派だつて藝術をつくつてゐる以上は「藝術派」であることに變りはない。殊にそれに「新興」の名を冠さるにいたつてはます／＼滑稽で、意義をなさない。少しは身の程を知つて、同派に屬する尾崎士郎のやうに率直に「沒落派」とでもするか、或はせいぜい「最新流行派」ぐらゐに留めるべきである。しかしこの派は、近頃流行のレヴヰウの踊り子のやうに多士濟々で、容貌や脚の太さの點で頗る「藝術派ヴアラエテー」に富んでゐることは事實である。

この仲間では、何といつても龍膽寺雄が一番老巧でもあり、實力ももつてゐる。だから同じエロ・ナンセンス物（エロチック・ナンセンスの略）を書いても、そこへらにうよ／＼してゐる俄か仕込のワンサ・ボーイ

のやうにまづくはない。その代りにまた、どんなメーキ・アップをしても、時々自然主義的な古さがちよい〳〵裏切つて出る。

久野豐彦は「藝術派」といふよりはむしろ「錯覺派」とでもいふべき作家だ。彼の書くものは、この間の「新潮合評會」でも話題になつたことだが、よくわからないと云ふ人が「藝術派」の間にさへ少からずある。錯覺を理性で解釋しようとしても、わからないのがほんとうだ。要するに彼は、觀念の異常聯合の上に立つてゐる作家だ。折々奇拔なコンビネーションが出來て、部分的に興味を惹く點もないではないが、彼の作品の綿密や解剖や批判は、むしろ大槻憲次あたりの精神分析マニアのために、殘しておくのが武士の情であらう。

井伏鱒二の作品は、僕はこれまであまり讀む機會がなかつた。少しばかり讀んだ記憶に基づいて判斷すれば、山の中の泉のやうな、よく澄んだ、どつちかといへば童話的な傾向を帶びた作家だ。いつか林房雄が推賞してゐたが、さういへばこの二人にはどこか共通したところがある。それに川端康成的な、逃避的孤獨癖も少からず加味されてゐる。とにかく彼の作家的態度は頗る消極的ではあるが、透明な一種の獨自的氣圍氣を巧妙に構成しうる人である。それ以上の何者でもなければ、またそれ以下の何者でもない。


芹澤光治良氏


堀辰雄氏

中村正常は常にナンセンス派の代表として擧げられる作家である。だが、彼は決して百パーセント・ナンセンス作家ではない。非常に苦心して考へ出したやうな妙な名前の人物が登場するだけで、書いてゐることはちつとも面白くも可笑しくもない。藝術的ナンセンスではなくて、文字通りに無意味な人物と言葉の機械的羅列にすぎない場合が多い。背後から手を廻してわざと擽るやうなところが眼について、むしろ不愉快だ。

芹澤光治良は、彼がもし畫家であつたならば、早速二科會あたりで選ばれさうな作家だ。ブルジョアの客間におかれた林檎のやうな、一

病的な新鮮さをもつてゐる。骨の髄までインテリ臭い作家であるが、そのエキゾチツクな筆致には、若き日の有島武郎を想はせるところがある。一部分開いてみると、まるで飜譯小説を讀むやうな氣がする。近作「我入道」では、幾分プロレタリア的材料を取扱つてゐるが、彼は斷じてプロレタリア作家ではなくて、あくまでサロン作家である。但しサロン作家としては、教養も見聞も廣く、從つてトピツクも豐富でハイカラであるだけに、近頃やつとダンスを習ひ出した自稱モダン作家の上に、斷然頭角を見すときが來るであらう。

堀辰雄もやはりサロン作家である。しかし芹澤に比べればまだ著しく乳臭い。石井柏亭や西村伊作等のブルジョア的新しがり――文化學院的趣味から生れたやうな作品だ。しかも柏亭の油繪や伊作の建築を想はせるといふよりは、彼等の好みに從つてつくりあげられた文化人形――「ピノチオ」の著者を聯想させるやうな、ブルジョア的感受性と早熟性とが特に目につく。川端康成の作品によく見受けるやうな、感覺的にキラリと閃めくやうなところもないではないが、それも健康な青年のもつ感覺ではなくて、やはりブルジョア的感受性と早熟性から生れた、しかも多分に遊戯性を帶びた病的な感覺である。

そのほかいはゆる「藝術派」に屬する新しい作家としては、楢崎勤、吉行エイスケ、舟橋聖一、阿部知二、佐左木俊郎、嘉村礒多等・多分ゐるが、すでに豫定の枚數を突破したから、彼等についてはいづれまた別な機會に評論するであらう。

筆を擱くに臨んで一言附言したいことは、彼等「藝術家」にさまざまなメッキ・アップを施して、ブルジョア末期の社會に「華々しく」登場せしめたものは何であるかといふことである。それはいふまでもなく、彼等をリードしてゐるナンセンス的傾向が、たまたま指導精神を失つた大多數のインテリゲンチヤのデスパレートな生活感情に投じたのである。然るに、ナンセンス的傾向とは何であるかといふに、健康人の生活にも、甚だしく緊張を缺いた時に發作的に起るところの瞬間的精神病である。しかもこの精神病を慢性化せしめるための阿片的讀物に對する需要が今日急激に増大し、それを意識的に生産しようとするものが續出するにいたつたといふこの事實は、果して何を語るものであらうか？

最近の獨占資本カルテルの活動

鈴木茂三郎

一、恐慌を乘り切らんとする「獨占」資本

「世界的恐慌の波を乘り切らんとして資本主義は必死的な跪きをつゞけてゐる。產業資本、商業資本は勞働者と農民の搾取 强度化によつて、血路を開かんとして狂亂的な努力をつゞけ、金融資本は國家機構と堅く結び付いてかゝる動搖、混亂を通じて全產業と農村の上に支配の覇權を完成しようと、無慈悲的な行程を强行しつゝある。すべてこれらのことは產業合理化といふ資本主義の統一スローガンの下に其の政策を集結して勞働者、農民その他無產大衆の生活を極度に脅やかすと共に、無產大衆のなかに昂る不平、不滿、反抗、鬪爭に彈壓を加へ大衆の政治的自由を蹂躪に抑壓しつゝある。

今や無產大衆の生活は餓死線に在る。今や勞働者農民の不平、反抗は、餓死線に沿ふて×××に在る」九月一日の全國大衆黨「生活防衞鬪爭に關する指令」の一節）

ここに、これを引用せるはその起草にあたつて筆者自からも一容與を滿せる右の指令は、現段階の狀勢を正しく簡潔に說述してゐると考へたからであるが、日本資本主義現段階の特質は、まことに、國家機構と堅く結び付いたところの金融資本が動搖、混亂の恐慌期を通じて全產業と農村の上に無慈悲的な强行によつてその支配を擴大、强化して覇權を完成せんとするところに存する。そのことは、今日、もはや疑ひをさしはさむ餘地がない。我々は產業合理局が、未組織の產業分野に、合同によるトラストを形成せしめて金融資本の支配の下に從かんとする企てを知つてゐる。金融資本──それは階級的意義を持つ──といふ言葉は、最近はブルジョア・ジャーナリズムの寵兒となつた觀がある。金融資本の權威のもとに拜跪するもの、憎惡、恐怖の對立感情を爆發させるもの、產業、商業資本の利害の立場から、それらは金融資本の流行語をめぐつてヂャーナリズムを賑はしてゐる。

それにもかゝはらず從來、紙面の上に、つとめてこれを默殺し、隱蔽してきた東京朝日、東京日日のうち「東京日日」が九月四日の紙上に金融資本の戰線統一といふ報導をかゝげて「朝日」を一歩拔いたので

ある。さうしたことはもはや、これを默殺したり隱蔽したりすることの出來ないほどに、事實があまりにも明瞭になつて來たからであらう。そして覇權を完成せんがための金融資本の戰線の統一は、單なる平和的な統一ではなくて、産業資本、商業資本をぶつ倒し、勞働者、農民の餓死的犧牲を要求する戰鬪的戰線の統一であることも亦、明らかであらう。そして又、「獨占」の段階にある現在、金融資本の統一、統一を通じての制覇が「獨占」資本の「獨占」の形態たるコンチエルンとしての財閥的資本、トラスト、カルテル、シンヂケート、プールを通じて達成されることは必然であつて、從つて現段階の特質は「獨占」の深化過程である。

そこで、さうした高度に集積、集中された「獨占」資本のもとに、現在「獨占」の成立を條件づけてゐるものに從つてこれらを區分すると、法律的獨占、自然的獨占、法律的自然的獨占と異なる經濟的獨占に區分される。法律的獨占には國家資本トラストの一部門たる郵電トラスト、煙草トラストとマツダ電球トラスト、自然的獨占には三菱の錫とタングステン、三井の亞鉛や石炭カルテル、セメント・カルテル、製紙カルテル、製糖カルテル、製銅カルテル、製麻(亞麻)トラスト等自然的原料を獨占するところのものがある。自然的法律的獨占には、鐵道トラスト、電車、電燈、北洋漁業トラスト、また、それらのいづれでもない二たつの條件から獨立せる經濟的獨占としては、外國資本によるマツチ・トラスト、煉乳トラストのほか、鋼材カルテル、製肥カルテル、紡績カルテル、毛織カルテル、製粉カルテルなどがある。そしてかゝる一切の條件をそなへ、かゝる一切の「獨占」を統一、支配するものが、數個の財閥的コンチエルンである。

かくの如き「獨占」のうち、財閥的コンチエルンによつて直接的に指導される「獨占」カルテルこそは、「獨占」の深化過程に於ける當面の最も重要なる「獨占」であつて、それは現實的に無慈悲的行程を最も果敢に強行しつゝある「獨占」資本である。

二、重工業に於ける「獨占」カルテル

(一)金屬産業の「獨占」。わが金屬産業は國家資本による八幡製鐵トラストの支配と從屬のもとにある。トラストの支配と從屬のもとにあると言つても、國家機構を通じておこなはれる支配關係から言へば國家資本は財閥的金融資本の支配下に、從屬するもので、斷じて獨立的な存在ではあり得ない。そして金屬産業のうちの重要なるものの多くは、財閥的資本の直營産業である關係上、之れらの金屬産業が製鐵トラストへ依存することは、財閥的金融資本と國家資本との結合の發展段階を指示することである。

金屬産業（銅を除く）の財閥資本支配

三井財閥＝三井鑛山、日本製鋼、釜石鑛山、
三菱財閥＝三菱鑛山、三菱製鐵、東京鋼材、
淺野財閥＝日本鋼管（大川系）淺野造船、淺野小倉、
久原財閥＝大阪鐵工、
大倉財閥＝大倉鑛業、
澁澤財閥＝富士製鋼、
國家資本＝八幡製鐵所、滿鐵、神戸製鋼（臺銀系）川崎造船、

さうした關係にある八幡の製鐵トラストの生産は、全生産の銑鐵に於て五割九分、鋼鐵に於て四割八分を占めてゐる。だからこそ、組織されては崩れ、崩れては再建されてきたあらゆる金屬カルテルは、八幡を樞軸として展開されたのであつたが、その八幡の製鐵トラストも七月から五割乃至一割の操短を開始したのである。これに從屬するもろ／＼の金屬資本は、すでにトラストに先行して、カルテルの結成、强化に努力しつゝあつた。努力は鋼材の品種別による小グループの結成に向けられたのである。

▲薄板カルテル、（昭和五年八月成立）加盟五社、八幡製鐵トラスト（二〇）、川崎造船（九〇）、日本鋼業（三）、德山鐵板（七）、中山鐵板（一六）、生産と販賣の統制をなす（括弧内は月産割當て比率を示す單位千トン）

▲平付鋼板、參加會社、四社、製鐵トラスト　川崎造船、淺野造船、シャリング會社、未だ結成するに到らない。

▲アングル、參加會社八社、日本鋼管、釜石鑛山、富士製鋼、神戸製鋼、大阪製鐵、淺野小倉、住友伸銅、東海鋼業、不成立にをはつて自由操短に決す。

▲鋼材聯合會、（創立、昭和四年四月）これは丸鋼のカルテルで品種別の小グループ結成の方向と一致するもので、すでに年餘の歴史がある。加盟會社、日本鋼管（二二・〇七）、釜石鑛山（二〇・八六）、富士製鋼（一二・二四）、神戸製鋼（一四・八六）、大阪製鐵（一六・二二）、淺野小倉（一三・七五）、（括弧内は現在の生産割當高、單位千トン）

(1) 生産制限

	制限率	
昭和四年六月——四年一二月	——	年産二六〇千トン
五年一月——五年　五月	三割	同　一八二千トン
五年六月——	四割	自發制限一割擴張
五年七月——現在	五割	年産一三〇千トン

(2) 丸鋼販賣協定、關東三社には關東鋼材共販組合がつくられてゐるが昭和五年四月、關東、關西に區分してプール成立、

かくの如き鋼材の品種別に從つて小グループに結合しつゝあるものを、これを促進、助長しつゝ一とつの製鋼カルテルに集中的結合せしめんと意圖するものが製鋼懇話會である（創立、大正一一年一一月）製鋼懇話會は淺野と川崎の對立のために、さきには生産制限に失敗し現在は製鐵トラストからのビレットの共同購入、分配をおこなふにすぎないが、最近は集中方向へ努力しつゝある。

具體的手段は

(1)製鐵トラストを含む製鋼カルテルを組織し、カルテル内にてトラストと民間資本との生産の品種分野並に操短を行ふ。

(2)大部分は製鐵トラストの出資に基く製鋼カルテルの販賣會社——資本金一千五百萬圓——を設立する。

と言ふにある。トラストへの依存、從屬の關係を深めるにある。

金屬産業カルテルには、このほか銑鐵共同販賣組合と日本産銅組合がある。

▲銑鐵共同販賣組合(創立大正一五年七月)は原料銑鐵を消費する製鋼資本側の銑鐵共同購買組合と表裏する存在である。これは製鐵合同を企圖した鐵工協議會(大正一四年一二月)から變質、發展したもので、表裏する二たつの賣買組合は、馴合はせの密接な關係が結ばれてあると同時に——組合員外には原料銑鐵を賣らないといふ——また背なか合はせに對立した利害がある。

加盟會社五社、日本製鋼、釜石鑛山、大倉鑛業、滿鐵、三菱製鐵、

そして、この製鐵カルテルの當面の重要な目標は、印度銑鐵を驅逐することにある。そして又、これは次ぎ×××を準備しつゝある金融資本の目標である。

製鐵カルテルは、最近重要な發表をなした。それは一昭和五年度にはカルテルの消費高と八幡トラストへの供給減額をあはせて、銑鐵の市場供給力は三〇萬トンに達し、原料銑鐵の獨立は確保された」と、本溪湖の銑鑛爐一基の火を落したといふことはあるにしても、まことに、これは重大なる宣言でなければならぬ。

製鐵カルテル産出力(千トン)

	昭和四年	五年度
輪西(日本製鋼)	一一〇	一一〇
釜石(釜石鑛山)	八五	一四五
兼二浦(三菱製鐵)	一五七	一五七
本溪湖(大倉鑛山)	八四	一一〇
鞍山(滿鐵)	二三〇	二八〇
計	六六六	八〇二
增産高		一三六

▲日本産銅組合(水曜會)(創立大正九年六月)銅は大正六年が頂點である。大正一一年以來百斤七圓といふ高率の關稅障壁を設けて保護されてゐるが、米銅のために市場を強力に支配されてゐる。

	生産高	輸入高	輸出高
大正六年	一二二、三八四トン	一四、〇八一	七一、〇五二
昭和二年	六二、四六〇	九、六三七	七六
三年	六五、一七四	一五、〇四〇	一三五
四年	七五、八〇〇	——	八、二〇〇

大正九年古河、住友、藤田、久原、三菱の五社によつてカルテルを

組織したが、住友が退脱したので現在は四社で水曜會を形成しつゝ、米銅と住友に對抗してゐる。水曜會の活動は秘密にされてゐるが、生産の制限と市價の維持が主目的である。

そして藤田鑛業を除けば、水曜會カルテルの古河、久原(日本鑛業)三菱とカルテルとの對立する住友も、銅の加工製品を生産する一貫作業をなしてゐる。

粗銅會社　　同一資本の加工會社

古河鑛業(二千二百萬圓)—日本電線(二〇〇)日本伸銅(三〇〇)富士電機(一〇〇〇)古河電氣(二〇〇〇)

日本鑛業(五　千　萬　圓)—日立製作所(一〇〇〇)

三菱鑛業(一　　億　　圓)—三菱電機(一五〇〇)

住友銅山(千　五　百　萬　圓)—住友電線(一〇〇〇)住友伸銅(一五〇〇)藤倉電線(五〇〇)

(二)石炭鑛業聯合會(創立大正一〇年五月)全國の石炭會社、又は個人的石炭資本の九〇パーセントは石炭カルテルに加盟してゐる。重要炭田の各地方にはそれぞれ地方組織があつてカルテルはこれらの地方組織の聯合體である。聯合體の本部を構成する評議員會社が石炭カルテルの主體勢力である。

▲筑豐炭田——筑豐石炭鑛業組合

三井鑛山　三菱鑛業　住友炭礦　古河鑛業　大正鑛業(古河系)　貝島鑛業　大辻岩屋(貝島系)　藏內鑛業　三好鑛業　麻生商店　明治鑛業(安川系)　飯塚鑛業　久恒鑛業　大隈鑛業　宮尾炭礦　平山炭礦

▲北海道炭田—北海道石炭鑛業會

三井鑛山　北海道炭礦汽船(三井系)　太平洋炭礦(三井系)　三菱鑛業　雄別炭礦(三菱系)　住友炭礦　大倉鑛業

▲常磐炭田—常磐石炭鑛業會

大倉鑛業　入山採炭(大倉系)　古川鑛業　磐城炭礦(淺野系)　大日本炭礦(三井系)　磯島炭礦

▲佐賀炭田—佐賀鑛業會

三菱鑛業　杵島炭礦　大辻岩屋　古川鑛業

▲宇部炭田—宇部鑛業組合

大倉鑛業　沖ノ山炭礦　藤本閑作　高良宗七

▲糟屋炭田—糟屋鑛業會

明治鑛業　日本鑛業(久原系)　早良鑛業(三井系)

▲其他地方—會社單位加盟聯合會直屬

松島炭鑛(三井系)　九州炭礦汽船(三菱系)　基隆炭礦(三井系)　臺灣炭礦(三井系)　臺陽鑛業(三井系)　南滿州鐵道(撫順炭坑)　山東鑛業(滿鐵大倉系)

これらの炭田地方の地方組合に所屬する石炭會社の送炭高は、全送炭高の九四パーセントで、次表のやうに大正一四年の九六パーセントに比べて減退する傾向はある。即ちカルテル外の産炭が擴大する譯だが、完全カルテルだと言つて好い。何故なら製鐵所の二瀨、鹿町、稻築炭礦や海軍の新原炭礦などが、カルテル外に置かれるからである。

石炭カルテルの送炭比率

	全國送炭高	カルテル産高	比率%
大正一四	二五、七五七千噸	二四、八〇〇	九六・二八
昭和　元	二六、二三四	二五、一三二	九五・七九
二	二七、五八八	二六、四三七	九五・八二
三	二七、五三七	二六、三七一	九五・七六
四	二八、〇六九	二六、四五三	九四・一七

そしてカルテルの顧問は三井財閥の團琢磨、三井財閥の木村久壽彌太、仙石貢で、理事には三井鑛山、三菱鑛業のほか古河、淺野、大倉、住友、貝島の代表が選出されてゐることによつても明らかなるやうに、カルテルはこれらの片手ほどの少數な財閥資本の手に握られてゐる。

こゝに石炭カルテルの機關誌「石炭時報」がある。「時報」には幸ひにして全國重要炭山七〇炭礦の昭和四年度の産炭高が記載されてゐるこれをとつてみると、カルテルのなかに占めるこれら財閥資本の支配力がはつきりとわかる。それによると次表のやうにカルテルの送炭高に對して、三井財閥は三割五分、三菱財閥は二割四厘、貝島は七分六厘、安川は五分、この四つの財閥だけですでに九割九分の絶對數を獨占してゐるのである。

	石炭會社	重要炭礦(數)	出炭高(千噸)
三井財閥	七社	一七	九、三三二
三菱財閥	四社	一一	五、四一二
貝島財閥	二社	三	二、〇三〇
安川財閥	一社	五	一、三八五
古河財閥	二社	四	一、一四八
大倉財閥	二社	四	一、一三二
住友財閥	一社	四	一、〇一五
麻生財閥	一社	三	八二四
淺野財閥	一社	一	九二九
藏内財閥	一社	三	七〇八

石炭カルテルの採炭制限の過程は次ぎのやうである。常磐炭田には大倉、磐城、三井、入山、古河、大日本、福島七社によつて常磐木曜會が組織され、常磐炭田の操短を獨立的にもおこなつてゐる。

		操短率
第一〇回	四年四月―四年五月	二七二〇萬トンの五分制限
第一一回	四年六月―四年九月	五分擴張即ち一割操短
第一二回	四年一〇月―五年四月	年産二六四二萬一千三百トンを基準とする五分操短即ち二五一〇トンとす、
第一三回	五年五月―五年一二月	操短を五分擴張し一割とす。

（三）日本セメント同業會（創立大正一三年一〇月）セメント・カルテルのもとに結成するものは一五社である。

▲淺野系	資本金(千圓)	拂込金(千圓)	主要工場
淺野セメント	一〇六、三一〇	五三、九九〇	東京市門司(山口)上磯(北海道)川崎市高雄市大阪市

秩父セメント	一〇、〇〇〇	四、七五〇	秩父(埼玉)
日本セメント	一〇、〇〇〇	五、六八七	八代(熊本)佐伯 (大分)
▲三井系			
小野田セメント	三一、〇〇〇	一九、四七五	小野田(山口)大連平壤名古屋川内(朝鮮)八幡(福岡)
電氣化學	二八、〇〇〇	一七、五〇〇(四〇〇)	大牟田市
大分セメント	一一、〇六〇	八、五二二	德浦津久見(大分)由良(和歌山)大船渡(岩手)
▲三菱系			
磐城セメント	一〇、七〇〇	九、〇六二	東京市深(青森)四倉(福島)
日本窒素	四五、〇〇〇	二七、七五〇(五〇〇)	水俣(熊本)
▲其他			
豐國セメント	七、五〇〇	七、五〇〇	名古屋市門司(福岡)
土佐セメント	一〇、〇〇〇	六、四〇〇	高知市
大阪窯業	五、〇〇〇	四、五〇〇	大阪市
七尾セメント	五、〇〇〇	二、七五〇	七尾(石川)
宇部セメント	七、〇〇〇	五、〇七五	宇部(山口)
三河セメント	一、〇〇〇	六五〇	田原(愛知)
常陸セメント	七五〇	四五〇	助川(茨城)

備考、括弧内は兼營產業のセメント投資額

三井と淺野の財閥資本がずば抜けて優越的位置にある。さうであればあるほど小ひさいセメント產業資本との對立は必然にするどさが加はるのである。

輸出は全生產に對して一昨年の一割強から昨年は九分に一割を割つたのである、內地の消費比率は小口需要が三割〇四厘、建築用二割二分鐵道用一割三分六厘、發電用一割一分九厘、土木用九分一厘であつて、用途から言つても市場の狹隘化は免れ難い。セメント資本を擁護せんとして失業救濟を呼稱する土木工事をいかに政府がおこしたからとて、建築、發電、小口、鐵道の工事をふるひおこすことは出來ない。關東に五日會、關西に七日會といふ販賣協定機關があるが、市場は一とたまりもなく崩れたので、さうなると對立は更らに激化せざるを得ない。本年になつてからでも共販會社案、プール案、五社聯盟といふやうに市場統制案をめぐつて抗爭を續け、小野田、淺野の二社に市價と限產に關する絶對統制權を委ねたのであるが、一ケ月半で內部崩壞を遂げて七月一日からは一般的操短に復歸したものである。

財閥資本はつひにセメント・カルテルを指導し得ないのである。そして今や五割三分三厘の最高率の操短をおこなつてゐる。

セメント操短率の深化

第一〇回	四年一二月—五年二月	三割八分特別操短一〇萬樽
第一一回	五年三月—五年五月	四割五分普通四割三月は特別操短一割五分增
第一二回	五年六月—五年八月	五割一分五厘
第一三回	五年七月—五年八月	改正五割六分七厘、小野田淺野

第一四回　五年九月—五年一一月　兩社統制權を辭す
五割三分二厘、自然消滅したる補充生産の分三分五厘が控除さる
一頁作業休轉を認む

三、輕工業に於ける「獨占」カルテル

（一）大日本紡績聯合會（創立明治一五年）——これは古典的な史的發展を遂げたもので紡績カルテルとして强大なる組織體である。

カルテルの「獨占」段階

	社數	工場數	錘數（千錘）	織機（千臺）
協定會社	五九	二四七	六、六四八	七三
協定外會社	一一	一一	一八七	四
比率	・一八六四	・〇四四五	・〇二八一	・〇五四七

紡績カルテルは吹けばとぶやうな弱小會社十一社を協定外に從屬させた完全カルテルであつて、六大會社がカルテルの支配勢力である。

六大會社の生産設備（錘數）は全カルテルの五割一分九厘、生産高は四割九分一厘を占めてゐる。六大會社は産業資本の代表的な存在であつて、金融資本と産業資本との鋭い對立即ち金融資本の産業支配の過程のうちに、多くの産業資本は古木の倒れるやうにぶつ倒されたのであるが、彼等のみは金融資本の成熟するに先立つて、剩餘利潤を蓄積しつゝ拔き難い基礎を、紡績産業の上にがつちりと据ゑてゐたからこそ、今日の存在がある。

然し、今や金融資本の嵐は吹き荒れてゐる。六大會社の流通手形で一流物として、大手をふつて金融資本の關門を通過し得るものは少ない。

富士瓦斯の如きは、金融資本の手中にまさに引き倒されんとする古木の風情がある。

或は金融資本の附け入る摑手を窺へば、原料棉花の四割を供給するものは、國家資本トラストの正金系の日本棉花、三井財閥資本の東洋棉花であつて生産の助成材たる原料棉花を通じて、小中紡績の多くが支配されてゆくやうに、金融資本の支配はこゝからも六大會社に及ばんとしてゐるのである。

紡績産業資本は果してよく、戰ひ得るであらうか。

六大會社の生産力

	錘數	半期生産高（四年下期）
大日本紡績	七〇九（千錘）	一四九
東洋紡績	七八〇	一九八
合同紡績	四三六	一〇七
鐘淵紡績	六三三	一一九
富士瓦斯	四七八	七五

日清紡績	四一七	六二
合計	三、四五三	七一〇
加盟會社總計	六、六四八	一、四四四
比率	・五一九四	・四九一六

かく六大會社の支配する紡績カルテルのなかにも、激化しゆく資本の對立がある。六大會社に對する小、中、紡績資本の對立などはその一つであつて、無配當會社が一五社、二萬錘內外の小紡績が一六社、無配當會社はカルテルの全生產力の七分、小紡績の全生產力は、大日本紡績の神崎工場よりや丶大きいくらひのもので、これらは紡績午饗會を組織して、操短に特例を要求するなど憐れむ可き小紡績の存在を主張するのである。

午饗會に參加する小紡績

	工場數	錘數(千錘)		工場數	(千錘)
天滿紡績	一	一五	和歌山染	一	九
山本紡績	一	四	松太綿布	一	一六
小津武林	一	二〇	正織	一	五
大和田	二	二三	福山撚絲	二	四
北泉紡績	一	一〇	山積紡績	一	五
和泉織物	一	一三	平田製綱	一	四
寺田紡績	一	一三	川越紡績	一	二一
貝塚紡織	一	一〇	佐野紡績	一	二〇

細番手と太糸、綿糸と綿布、兼營產業の品種等の、いづれに生產の主力をそ丶ぐか、言ひ換へると現實的生產資本の活動方向によつて、對立した利害が生ずるのである。

かうした對立を內包しつ丶、紡績カルテルは獨占利潤を防衛するために、操短又操短、カルテルは歷史的な操短の記錄をつくりあげてきたのである。

昨年の七月に再開され、現在の深化された操短による紡績勞働者の失業は二萬八千人に及んでゐる。かくして操短により糸價の暴落を喰ひとめんとすることは、一面に於て、紡績カルテルの織布生產に對する強大なる對立物たる地方產業の織布工場に高い原料綿糸を供給してこれらを行き詰らせやうとするカルテルの意力がかうしたところにも動いてゐることが注意されねばならぬのである。

現在地方的な織布工場はすさまじく吹き荒らされてゐる。

最近の紡績操短

	昭和四年七月—五年一月	撤廢
第一七回	昭和五年二月—五年六月	一割及一ケ月二晝夜休業（一割七分二厘）休錘は工場別たるを要せず、三萬錘及七萬錘以下の會社に緩和す
第一八回	五年六月—現在	更らに二割七分二厘に擴張す、七、八月は更らに自由操短を擴張す

的解剖暴露

第四冊（第三卷第一册）

（二）絹紡、人絹、モスの「獨占」

生糸は蠶糸中央會の指導のもとに、全國的二割操短を斷行しつゝあるが、市場と製糸工場に對する統制力を喪失し、製糸産業は今や操短と休業の全國的氾濫がおこつたのである。斯く、生糸に對するほどの爆破力はないが、生糸製品に代位しつゝある絹糸、人絹、毛織の生産と市場も、かうした暴風に襲はれつゝある。

▲絹紡工業會（創立、昭和二年）——加盟社（一二社）

會社名	絹絲錘數	紬絲錘數	會社名	絹絲錘數	紬絲錘數
富士瓦斯	七七、九二〇	一九、六五六	鐘淵紡績	六二、三六〇	一〇、七二四
大日紡績	四七、三二〇	六、三九〇	東洋紡績	四〇、五六六	九、二四〇
日東紡績	二三、二〇〇	三、一八〇	關東紡績	六、八〇〇	、八四〇
日本絹絲	九、九〇〇	一、〇八〇	日本絹綿	三、二〇〇	二、〇二六
日本絹織	二三、四〇〇	一、三二〇	近江絹絲	五、七〇〇	—
信濃絹絲	三、〇〇〇	—	上州絹絲	三、〇〇〇	—

昨年市場が崩れ始めるや、年末から操短を開始した。操短の深度は深まりつゝある。

	期間	操短率	除外例
第四回	昭和四年一二月—五年六月	一割二分	自家用原絲は四分輸出向きは除外す
第五回	五年六月—五年七月	二割	一割二分の外二晝夜休業
第六回	五年八月—五年一二月	三割五分	自家用原絲は七分（三七萬錘のうち自家用一〇萬錘）

▲人絹聯合會（創立、昭和三年七月）——新興産業としての人絹は世界的な「人絹時代」を創造せしめたが人絹も到底、世界恐慌から安全であることは出來なかつた。わが人絹も「一五〇B」品は、昨年初の二百十三圓から年末には百三十圓に三割九分暴落したが、わが人絹カルテルを支配する臺銀、籐本系の帝國人絹、フエライニングテ・グランツシユトツフ・アー・ゲーの技術と日棉系資本の結合する旭絹織、三井財閥東洋レイヨン、東洋紡系の昭和レイヨン、大日本紡系の日本レイヨンなどの市價協定の破棄が暴落を助長したことは言ふまでもない。

そこで、カルテル組織は强化された。

	期間	操短率	除外例
第一回	昭和四年一二月—五年六月	五分	—
第二回	五年七月—五年九月	二割	義務輸出二割
第三回	五年九月—五年一一月	同	同

操短を輸出に振り向けるといふ斯うした國際市場への進出は、外國資本との競爭、對立と國際市場から受ける波動のなかへわが人絹カルテルを馳り立てゝゆくは必然である。

▲羊毛工業會（創立、大正九年）モスリン・カルテルであつて二つの大きな矛盾を孕んだまゝモス資本十一社を結成してきたが昭和四年一月操短協定は内部崩壞をとげたのである。

二つの大きな矛盾とは協定外に二〇社に及ぶモス資本をのこしたこと、日本毛織と其他との激化された對立をカルテルの內部へ持ち込んだことである。

日毛はまもなく同一のモス資本を引きつれて協定を脫退したが、日毛は合同毛織、東洋モスの工場賃借によつてカルテル生產の八割にあたる生產力をもつたので、そこで本年七月羊毛工業會は更生されたのである。卽ち日毛資本を中心とする更生――一九社、船舶、原料商等の決議權なき準構成員を含む――であつて日毛は悠々として理事長の椅子に就いた。

理事會社、伊丹製絨、新興毛織（舊合同）東京モス、東洋モス、中央毛糸、栗原紡織、日本毛織、大阪毛織

モスの閑散期に向つて更生せるモスカルテルは、徹底せる操短決行の必要に促迫されてゐる。

▲ラミー紡織聯合會（創立、昭和四年八月）日華紡織、東洋麻糸、第一ラミー、東京麻絲の四社參加す、

操短　昭和四年一二月―現在　三割

四、化學產業に於ける「獨占」カルテル

（一）「肥料の公平なる分配」の重要性に對して、民衆は無智なけと無闘むでゐるが、金融資本はこれが重大性を認識してゐる。

「肥料の公平なる分配」は、

(1) 現在進行しつゝあるが如く、肥料の配給網を通じて金融資本のもとに農村を支配し得る。

(2) 製肥產業は同時に爆發藥、醫藥、毒ガスなどの軍需品產業で、「公平な分配」によつて製肥產業の發達することは、同時に軍需品產業の規模の擴大である。

といふ重大性を、金融資本ははつきりと認識してゐる。

製肥產業には豆粕、硫安、過燐酸とあつて、豆粕は滿洲の獨占生產だが、過燐酸はカルテルからトラストへ、硫安はカルテル化の過程にある。

▲過燐酸同業會（創立、大正一一年）

カルテル加盟會社

	資本金（萬圓）	昭和五年上期生產高（千貫）		資本金（萬圓）	昭和五年上期生產高（千貫）
大日本人肥	五、六二五	三三、〇二四	日本硫曹	五〇	二、七六一
日東硫肥（人肥系）	二〇〇	五、四四五	新潟硫酸	二〇〇	五、〇七四
大阪アルカリ（同）	一五五	五、八二〇	ラサ燐礦	七五〇	一三、一一九
帝國人造（同）	五〇	二、七九九	東洋人造	―	二、二五九
臺灣肥料（同）	一〇〇	八四八	大阪グアノ	―	四、二四四
神島人造（同）	五〇	五、八四七	特許肥料	―	―

カルテル外對立會社

住友製肥	三〇〇	九、九七八
多木製肥	一〇〇	三、八七四

カルテルの對立資本の生産は、カルテルの二割九分であるが、住友が昭和二年一〇月操短を破棄して脱退してからカルテルは大川田中の人肥系資本の支配下に置かれ、今や産業合理局を通じて十一社の合同即ち人肥系の製肥トラストが形成されやうとしてゐる。

昭和二年一〇月——　操短破棄さる、
昭和五年一月—五年六月　三割　過燐酸として
五年七月—現在　三割　同

▲「硫安」販賣カルテル、過燐酸は原料——アンガウル島——と生産が國内資本によつて統一されてゐるが、その他は外國資本との依存關係が深いのである。

肥料＝國別——「生産」資本圖……………輸入商
豆粕＝滿州——三井其他製油資本…………三井物産
硫安——英國—アイ・シー・アイ・トラスト……プラナー・モント
　　└獨逸—イー・ゲー・トラスト……………アーレンス
硫酸加里——獨逸—イー・ゲー・トラスト……カールローガー
　　　├佛國…………………………三井、三菱
　　　└米國（鹽化加里）…………………三井其他
硝石＝智利＝米國グッゲンハイム・トラスト……三井、三菱

「今日は肥料、明日は爆發藥」の生産設備たり得る硫酸アムモニア（硫安）を原料とする窒素肥料産業が、外國資本に依存しなければならぬことは、次ぎの××を××するものにとつてはまさに××に値ひする。そこで窒素産業が不景氣風を蹴飛ばしてまきおこされた。政府が買ひとつたハーバー法特許は、三井財閥が「お貰ひ申して」次ぎのやうな形態で特許による獨占利潤をあげてゐる。

東洋窒素（三井）—ハーバー法特許—┬ファーザー式—大日本人肥
　　　　　　　　　　　　　　　　├エヌ・イー・シー式—住友
　　　　　　　　　　　　　　　　└クロード式—三井鑛山

そして又、一般的方法による硫安産業は、英、獨トラストの硫安ダンピング——昨年でさへ六回値下げした——の暴風を突いて、日本窒素（三菱）は朝鮮に朝鮮窒素をおこし「味の素」鈴木の昭和肥料と八幡製鐵トラストの洞岡工場は、最近、渦卷く市場へ硫安をはじめておくり出して來た。

かくして勃興せる硫安産業の王座的位置にあるは三井と三菱であつて、兩社は昭和四年に石灰窒素の共販を確立し、昭和五年二月混戰市場たる九州に硫安の市價協定を遂げたが、この販賣カルテルの硫安生産は全生産の八〇パーセントである。

	日本窒素(三菱)		電氣化學	
	生産設備(千トン)	生産高(千トン)	生産設備(千トン)	生産高(千トン)
昭和元年	二〇〇	七一	—	四二
二年	二四〇	八三	—	五〇
三年	二五〇	一二五	一四八	一〇六

(二)、大日本製紙聯合會——は王子、富士、樺太、三菱、北越、日本紙業、日本製紙、西野、乾製紙、の九社によつて結成されてゐるが、三井財閥の王子製紙と三井資本の支配に轉化されつゝある富士製紙の生産力は製紙カルテルの六〇パーセンを占める絶大な勢力がある。

カルテルの統制のもとに、新聞用紙の販賣トラストと原料のパルプトラストがある。このトラストを通じて、新聞産業資本の管理と言論に關與したり、全國に群生する小資本製紙の支配に參與したりする。

だが、トラストに對する脅威は、米國の新聞用紙とカナダ・パルプの輸入による外國の製紙資本との抗爭であつて、ザラ紙は根津嘉一郎の「國民」が米國用紙を使用するだけだが、カナダ・パルプのダンピングには惱まされるので、輸入をカルテルの意のまゝに調節するためにブリテイシ・コロンビアのパルプ販賣獨占權を東洋商會から、まきあげやうとしたが、つひに奏効しなかつたやうである。

洋紙操短表

		印刷紙	模造紙	新聞紙
第八回	昭和四年五月—四年七月	二割	二割	自由
第九回	四年八月—四年一一月	二割五分	二割五分	一割
第一〇回	四年一二月—現在	三割五分	三割五分	一割

備考、板紙は昭和二年度より引續き二割操短、

▲共同洋紙株式會社(資本四〇〇萬圓)明治三四年共同用紙會社より大正一四年六月現在に至る、イ、富士製紙、王子製紙、樺太工業を主力とし全生産の九割を占め、殘餘の一割は協定外の北越製紙が産出する。ロ、新聞用紙の價格並に生産協定を目的とする。

▲共同パルプ會社(資本金三百萬圓)大正十一年創立さる。イ、製紙原料パルプの販賣、生産カルテルである。ロ、製紙會社の持株は、王子製紙二六八〇〇株、富士製紙六〇〇〇株、樺太工業九六〇〇株、鴨緑江製紙三六〇〇株の割合である。

▲日本板紙聯合會。最も古い歴史を有する。西南役の頃おこり、板紙販賣會社、日本洋紙會社、共同販賣所等カルテルは倒れたりおこつたりして、大正十四年九月現在のものが成立した。イ、參加會社、日本製紙、北國製紙、岡山製紙、西成製紙、加賀製紙、高崎板紙、中津板紙、立山製紙、富士製紙、伏木板紙、西肥板紙、美作製紙、新川製紙、廣島製紙、日華製紙、日本紙業のほかその群小會社を參加せしめて七十余社を包括した完全カルテルである。ヘ、板紙の輸出奬勵、生産、價格協定を目的とする。二、現在の秘密覺書によれば、過剩を二割と算定し、自發的休轉に對し一トン十五圓を補給し、各社相互に監視人を特派して抄紙機の封印をなす等、紳士協定又は罰金制度に一歩をすすめたものである。

(三)晒粉聯合會(創立大正九年一月)——曹達晒粉同業會が生れて次いでカルテル聯合がつくられたのである。大正一一年六月操短率が

六割五分にまで擴張されたので協定は崩壞したが、大正一四年再建されて以來平均四割の操短をつづけてゐる。

		操短率			操短率
第一四回	昭和四年七月—四年九月	一割五分	第一五回	四年一〇月—五年一月	一割五分
第一六回	五年二月—	二割	第一七回	五年 三月	三割
第一八回	五年四月	三割五分	第一九回	五年 五月	四割
第二〇回	五年六月	四割五分	現 在		四割五分

（四）硬化油販賣カルテル——硬化油の支配的勢力をもつ合同油脂と旭電化との間には販賣協定が成立してゐる。産業合理局は、これに大阪酸水素、日本曹達、山桝硬化油、ベルベット石鹸を合同せしめて硬化油トラストを組織させやうとしてゐる。

五、食糖産業に於ける「獨占」カルテル

（一）糖業聯合會——大日本製糖が昭和二年末に朝鮮産糖を密輸入して砂糖カルテルに爆彈を投じたやうなことはおこつたが、歴史が古いだけに、また、國際商品として外國資本の壓迫が強いだけに、カルテルの結成力は固い。

日糖、臺灣、明治、昭和のやうな精糖會社資本と新高、帝國、臺南新興のやうな粗糖會社資本との對立もかもされるが、鹽水港の窮乏化や東洋製糖の沒落や、さうした大きな産業資本でさへ、容謝なくぶつ倒されてゆくやうに、日糖、明治（三菱）臺灣（三井）の諸産資本が有無を言はさないで締めあげていつてゐる。

昨年一月明治商店（明糖）阿部幸（鹽水港）三井物産（臺灣）の商業資本とそれ〴〵の産業資本との間に販賣協定が成立したが、本年はこれに日糖とその商務部と、帝國、新高が參加して砂糖市場に對する販賣カルテルの支配力は著るしく強まつたのである。

五年度の協定産糖高は一千三百十七萬八千ピクルと決した。

昭和四年度の産糖協定額と實收額（千ピコル）

	協定額	實收數量		協定額	實收數量
×明治製糖（三菱）	二、五四〇	二、六一三	×臺南製糖（三井）	三、〇八〇	三、九八〇
×鹽水港	一、六五〇	一、七八八	大日本製糖（藤山）	二、三二〇	二、三五五
×新高製糖（日糖）	五一九	五二一	×帝國製糖	一、一五〇	一、二三六
新竹製糖	一五六	一六〇	新興製糖	一三〇	一三三
沙轆製糖（臺灣）	七一	七七	臺東製糖	四九	六一
臺南製糖		一六五	昭和製糖	二三〇	二三四

備考、×印は、副産物たる酒精の酒精協定を組織（外に南部酒精を加ふ）してゐる。五年度は内地供給量を二割五分增加して八萬五千石を決定した。

（二）製粉共販組合（創立、昭和五年三月）——製粉産業は大正一三年七社を結成して製粉聯合會をつくり大正一五年六月から平均四割の限産協定をおこなつたそこまではよかつたが、昭和三年、日本製粉は非常し

日清の對立が激化して限產協定が破れ、兩社の賣値協定が破れ、つひに製粉カルテルは爆破された。

處が日本、日清、三井物產によつて强固な販賣カルテルが成つたのである。三井財閥の資本が對立せる兩社をくゝし上げたのである。

この百パーセントの三井財閥資本の販賣カルテルの生產設備は製粉資本七社の八七パーセントを獨占する紛もなき製粉トラストである。

	生產能力(バーレル)	生產高(四年上期)
日本製粉	一七、六〇〇	七、七〇〇千袋
日清製粉	二〇、一〇〇	八、七〇〇
計	三七、七〇〇	一六、四〇〇

(三) ビール協定——價格協定は成立したり破壞されたりして來たが昭和四年一〇月「特別賣出しをしないこと」といふやうした協定さえ破れて、需要期節を戰ひ拔いたから、現在、協定が準備されてゐる。

(數字は昨年度査定額を示す)

大日本ビール	四八八千石	キリンビール	二四六
ビール鑛泉	九二	サクラビール	六一
新カスケード	一八		

(四) 漁業カルテル——北洋に於て鮭の生產領海を獨占する露領水產組合も、國家を直接的な背景とする三菱財閥資本に指導される漁業カルテルである。また、その陸上工場と工船に生產される鮭罐詰產業は、販賣カルテル——共販會社——の成立によつて三菱資本の優位が決定的となつた。三井財閥の資本はみごとに北洋漁業から敗退したやうである。

三菱支配共販會社
- 日本工船—株式の六〇%共同漁業三〇%北海拓銀
- 富山工船—共同漁業系
- 昭和工船—株式の六〇%共同漁業、三〇%三菱財閥
- 日魯漁業—三菱系
- 林兼商店—三菱系
- 八木商店—三菱系

六、カルテルと國際資本鬪爭

「獨占」の深化過程にあつて、最も果敢に無慈悲的な行程を强行しつゝ、當面、重要な資本運動をつゞけつゝある「獨占」カルテルの形態を執るところの「獨占」資本の、最近の樣相とその活動の一般的狀勢を見た。かうした一般狀勢のうちに、見られるところのものは、崩壞を遂げたカルテルが再建されたり、新たなる結成組織がおこつたりしたやうにカルテルの强化、言ひ換ればカルテル資本が量的、質的に强まつたことである。——一方に於て生產設備を休止させ、他方に於て生產設備を增加しつゝあつた矛盾も一應は解決されたやうである。たゞ合理化のための資本の更新運動としては、今後こそおこるところの

費された問題ではある。そして强化を通じて、カルテルに對する財閥資本の支配が强化、擴大されたことである。次ぎには市場支配のための生產强制々限率が、徹底的に擴張されたことなどであらう。

さうしたカルテル資本の現實運動に現れたことのうち、たゞそれのみのためにカルテルが存するかにさへ思はれる生產の强制々限については、そのことの重要性から言つて見ても、ここに若干の檢討を試みる必要がある。事實また、カルテル製品の市場價格は昨年末を爆破點として、本月上半期を通じ、おしなべて釣瓶おとしに慘落を演じたので、そこで市場の强制支配のために徹底的に生產の强制々限をもつて對應するほかなかつたことはもちろんであるが、丸鋼は五割、セメントは五割三分、晒粉は四割五分、絹糸、洋紙は三割五分といふ素晴らしい生產資本が「獨占」資本の强制によつて休止資本として眠り込まされたのである。强制々限率は、多くは今や最高の段階にある。

生產制限率の深度の比較

	創立より昨年に至る期間の最高	最低	現在
丸鋼	二九萬トン(昭和四年)	二六萬トン(同)	五割
石炭	二七六五萬トン(昭和三年)	二四六〇萬トン(大正一五年)	二三七七萬トン
セメント	三割八分(大正一五年)	一割(昭和二年)	五割三分二厘
紡績	四割(明治三三年)	四晝夜(大正九年)	二割七分二厘
絹紡	二割二分(昭和三年)	六分(昭和二年)	三割五分
人絹	二割二分(昭和四年)	同(同)	二割
毛絲	二割五分(昭和三年)	同(同)	—
製紙	二割(大正九年)	六分(昭和三年)	三割五分
燐肥	全休(昭和元年)	二割(大正十一年)	三割
晒粉	四割五分(明治三三年)	一割五分(昭和四年)	四割五分
製粉	五割(大正一五年)	一割(同)	—

特殊利潤を生むカルテル資本の獨占利潤は吹き飛んだが、しかし、かくして一般的には平均利潤は喪はなかつたといふことは、必ずしも、我々の不當な豫斷ではない。なるほどカルテル製品の市場價格が慘落したことは確かだが、大體これまでの市價そのものが勞働の生產性の增大より、より遙かに不當な高値だつたのである。

手持原料と製品の市價から言つて、採算點を割つてゐる、と言ふものがある。そうして御丁寧にも現物相場から採算して例へば次ぎのやうな數字的根據をさへあげるのである。

綿絲廿番手　市價一二五圓　原價一五〇圓　損失二五圓

（備考、其の日の米、印棉相場を基礎とする。）

單純生產の場合に於てなら、右のやうな採算は、かなりの確實性を持つであらうが、それは原料の買付、製品の先物契約に於ける「思惑取引」を思惑しないところの計算であつて、資本家はもつと利口に道

つて除けてゐる。勞働の强度化によつて不引合ひな採算を引き合はせたではないか。

然し乍らカルテルの獨占資本が平均利潤を確保し、また特殊利潤のいくらかをでも恢復しやうとするには、内外の原料市場又は商品市場に出動して、他の產業資本か又はカルテル外の同一產業資本の利潤を直接、間接に奪ひとつてくること以外には現在與へられた手段は無い。

國内に於けるカルテル外の同一部門の產業資本に對しては、これを征服し得るであらう。現に征服しつゝある。だが國際的資本鬪爭に於ては、まつたく一變せる情勢のなかに在る。紡績の棉花、モスの羊毛の全部、小麥粉の小麥の大半は外國資本の原料シンヂケ！トの手にある。製紙原料のパルプ、窒素肥料の硫安、鋼材の銑鐵も亦、外國資本のために强力に支配されてゐる。またカルテル製品の全部と言つて好いほどのそれらは、狹隘化された國内市場の支配では足りなくて外國市場にさばけ口を求めねばならぬ輸出商品であり、とりわけ砂糖、小麥粉、人絹、綿糸布はいはゆる國際商品である。それ故に、わがカルテルは國際市場に於て外國の獨占資本と對立、抗爭するばかりでなく、いやが上にも關稅の障壁を高く築きあげたる內地の獨占市場をも强烈に脅やかされねばならない。伊太利の人絹トラスト・スニア・ヴイスコサや印度銑鐵のタタトラストや、イー・ゲー、アイ・シーの硫安は、ダンピングをもつて屢々、わがカルテル資本の本土を襲ひ來つた。生糸、棉花、銅、小麥粉、砂糖、羊毛は、海の彼方より來たる一電、一閃の支配するところである。かゝる國際資本鬪爭の火華は、必然にカルテルを震撼する、又カルテル內部の資本團の對立、矛盾を刺戟し激化せしめる。それこそはわがカルテルの憐れむ可き「獨占」である。

最近の獨占資本カルテルの活動

鈴木茂三郎

一、恐慌を乗り切らんとする「獨占」資本

「世界的恐慌の波を乘り切らんとして資本主義は必死的な跪きをつゞけてゐる。産業資本、商業資本は勞働者と農民の搾取〔強〕度化によつて、血路を開かんとして狂亂的な努力をつゞけ、金融資本は國家機構と堅く結び付いてかゝる動搖、混亂を通じて全産業と農村の上に支配の覇權を完成しようと、無慈〔悲〕的な行程を强行しつゝある。すべてこれらのことは産業合理化といふ資本主義の統一スローガンの下に其の政策を集結して勞働者、農民その他無産大衆の生活を極度に脅やかすと共に、無産大衆のなかに昂る不平、不滿、反抗、鬪爭に彈壓を加へ大衆の政治的自由を無虐に抑壓しつゝある。

今や無産大衆の生活は餓死線に在る。今や勞働者農民の不平、反抗は、餓死線に沿ふて×××に在る」九月一日の全國大衆黨「生活防衞鬪爭に關する指令」の一節)

ここに、これを引用せるはその起草にあたつて筆者自からも一寄與を齎せる右の指令は、現段階の狀勢を正しく簡潔に說述してゐると考へたからであるが、日本資本主義現段階の特質は、まことに、國家機構と堅く結び付いたところの金融資本が動搖、混亂の恐慌期を廻じて全産業と農村の上に無慈悲的な强行によつてその支配を擴大、强化して覇權を完成せんとするところに存する。そのことは、今日、もはや疑ひをさしはさむ餘地がない。我々は産業合理局が、未組織の産業分野に、合同によるトラストを形成せしめて金融資本の支配の下に從かんとする企てを知つてゐる。金融資本——それは階級的意義を持つ——といふ言葉は、最近はブルジョア・ジャーナリズムの寵兒となつた觀がある。金融資本の權威のもとに拜跪するもの、産業、商業資本の利害の立場から、憎惡、恐怖の對立感情を爆發させるもの、それらは金融資本の流行語をめぐつてヂャーナリズムを賑はしてゐる。

それにもかゝはらず從來、紙面の上に、つとめてこれを默殺し、隱蔽してきた東京朝日、東京日日のうち「東京日日」が九月四日の紙上に金融資本の戰線統一といふ報導をかゝげて「朝日」を一步拔いたので

ある。さうしたことはもはや、これを默殺したり隱蔽したりすることの出來ないほどに、事實があまりにも明瞭になつて來たからであらう。そして覇權を完成せんがための金融資本の戰線の統一は、單なる平和的な統一ではなくて、産業資本、商業資本をぶつ倒し、勞働者、農民の餓死的犠牲を要求する戰鬪的戰線の統一であることも亦、明らかであらう。そして又、「獨占」の段階にある現在、金融資本の統一、統一を通じての制覇が「獨占」資本の「獨占」の形態たるコンチエルンとしての財閥的資本、トラスト、カルテル、シンヂケート、プールを通じて達成されることは必然であつて、從つて現段階の特質は「獨占」の深化過程である。

　そこで、さうした高度に集積、集中された「獨占」資本のもとに、現在「獨占」の成立を條件づけてゐるものに從つてこれらを區分すると、法律的獨占、自然的獨占、法律的自然的獨占と單なる經濟的獨占に區分される。法律的獨占には國家資本トラストの一部門たる郵電トラスト、煙草トラストとマツダ電球トラスト、自然的獨占には三菱の錫とタングステン、三井の亞鉛や石炭カルテル、セメント・カルテル、製紙カルテル、製糖カルテル、製銅カルテル、製麻(亞麻)トラスト等自然的原料を獨占するところのものがある。自然的法律的獨占には、鐵道トラスト、電車、電燈、北洋漁業トラスト、また、それらのいづれでもない二たつの條件から獨立せる經濟的獨占としては、外國資本によるマッチ・トラスト、煉乳トラストのほか、鋼材カルテル、製肥カルテル、紡績カルテル、毛織カルテル、製粉カルテルなどがある。そしてかゝる一切の條件をそなへ、かゝる一切の「獨占」を統一、支配するものが、數國の財閥的コンチエルンである。

　かくの如き「獨占」のうち、財閥的コンチエルンによつて直接的に指導される「獨占」カルテルこそは、「獨占」の深化過程に於ける當面の最も重要なる「獨占」であつて、それは現實的に無慈悲的行程を最も果敢に強行しつゝある「獨占」資本である。

二、重工業に於ける「獨占」カルテル

（一）金屬産業の「獨占」。わが金屬産業は國家資本による八幡製鐵トラストの支配と從屬のもとにある。トラストの支配と從屬のもとにあると言つても、國家機構を通じておこなはれる支配關係から言へば國家資本は財閥的金融資本の支配下に、從屬するもので、斷じて獨立的な存在ではあり得ない。そして金屬産業のうちの重要なるものゝ多くは、財閥的資本の直營産業である關係上、之れらの金屬産業が製鐵トラストへ依存することは、財閥的金融資本と國家資本との結合の發展段階を指示することである。

金屬産業（鋼を除く）の財閥資本支配

三井財閥＝三井鑛山、日本製鋼、釜石鑛山、
三菱財閥＝三菱鑛山、三菱製鐵、東京鋼材、
淺野財閥＝日本鋼管（大川系）淺野造船、淺野小倉、
久原財閥＝大阪鐵工、
大倉財閥＝大倉鑛業、
澁澤財閥＝富士製鋼、
國家資本＝八幡製鐵所、滿鐵、神戸製鋼（臺銀系）川崎造船、

さうした關係にある八幡の製鐵トラストの生産は、全生産の銑鐵に於て五割九分、鋼鐵に於て四割八分を占めてゐる。だからこそ、組織されては崩れ、崩れては再建されてきたあらゆる金屬カルテルは、八幡を樞軸として展開されたのであつたが、その八幡の製鐵トラストも七月から五割乃至一割の操短を開始したのである。これに從屬するもろ〳〵の金屬資本は、すでにトラストに先行して、カルテルの結成、强化に努力しつゝあつた。努力は鋼材の品種別による小グループの結成に向けられたのである。

▲薄板カルテル、（昭和五年八月成立）加盟五社、八幡製鐵トラスト（二〇）、川崎造船（九〇）、日本鋼業（三）、徳山鐵板（七）、中山鐵板（一六）、生産と販賣の統制をなす（括弧内は月産割當て比率を示す單位千トン）

▲平付鋼板、參加會社、四社、製鐵トラスト 川崎造船、淺野造船、シヤリング會社、未だ結成するに到らない。

▲アングル、參加會社八社、日本鋼管、釜石鑛山、富士製鋼、神戸製鋼、大阪製鐵、淺野小倉、住友伸銅、東海鋼業、不成立にをはつて自由操短に決す。

▲鋼材聯合會、（創立、昭和四年四月）これは丸鋼のカルテルで品種別の小グループ結成の方向と一致するもので、すでに年餘の歴史がある。加盟會社、日本鋼管（二二・〇七）、釜石鑛山（二〇・八六）、富士製鋼（一二・二四）、神戸製鋼（一四・八六）、大阪製鐵（一六・二二）、淺野小倉（一三・七五）、（括弧内は現在の生産割當高、單位千トン）

(1)生産制限

	制限率	
昭和四年六月――四年一二月	――	年産二六〇千トン
五年一月――五年　五月	三割	同　一八二千トン
五年六月――	四割	自發制限一割擴張
五年七月――現在	五割	年産一三〇千トン

(2)丸鋼販賣協定、關東三社には關東鋼材共販組合がつくられてゐるが昭和五年四月、關東、關西に區分してプール成立、

かくの如き鋼材の品種別に從つて小グループに結合しつゝあるものを、これを促進、助長しつゝ一とつの製鋼カルテルに集中的結合せしめんと意圖するものが製鋼懇話會である（創立、大正一一年一一月）製鋼懇話會は淺野と川崎の對立のために、さきには生産制限に失敗し現在は製鐵トラストからのピレットの共同購入、分配をおこなふにすぎないが、最近は集中方向へ努力しつゝある。

具體的手段は

(1)製鐵トラストを含む製鋼カルテルを組織し、カルテル内にてトラストと民間資本との生産の品種分野並に操短を行ふ。

(2)大部分は製鐵トラストの出資に基く製鋼カルテルの販賣會社——資本金一千五百萬圓——を設立する。

と言ふにある。トラストへの依存、從屬の關係を深めるにある。

金屬産業カルテルには、このほか銑鐵共同販賣組合と日本産銅組合がある。

▲銑鐵共同販賣組合（創立大正一五年七月）は原料銑鐵を消費する製鋼資本側の銑鐵共同購買組合と表裏する存在である。これは製鐵合同を企圖した鐵工協議會（大正一四年一二月）から變質、發展したもので、表裏する二たつの賣買組合は、腹合はせの密接な關係が結ばれてあると同時に——組合員外には原料銑鐵を賣らないといふ——また背なか合はせに對立した利害がある。

加盟會社五社、日本製鋼、釜石鑛山、大倉鑛業、滿鐵、三菱製鐵、そして、この製鐵カルテルの當面の重要な目標は、印度銑鐵を驅逐することにある。そして又、これは次ぎ×××を準備しつゝある金融資本の目標である。

製鐵カルテルは、最近重要な發表をなした。それは一昭和五年度にはカルテルの増産高と八幡トラストへの供給増額とを合はせて、銑鐵の市場供給力は三〇萬トンに達し、原料銑鐵の獨立は確保された一と、本溪湖の銑鑛爐一基の火を落としたといふことはあるにしても、まことに、これは重大なる宣言でなければならぬ。

製鐵カルテル産出力（千トン）

	昭和四年	五年度
輪西（日本製鋼）	一一〇	一一〇
釜石（釜石鑛山）	八五	一四五
兼二浦（三菱製鐵）	一五七	一五七
本溪湖（大倉鑛山）	八四	一一〇
鞍山（滿鐵）	二三〇	二八〇
計	六六六	八〇二
増産高		一三六

▲日本産銅組合（水曜會）（創立大正九年六月）銅は大正六年が頂點である。大正一一年以來百斤七圓といふ高率の關稅障壁を設けて保護されてゐるが、米銅のために市場を強力に支配されてゐる。

	生産高	輸入高	輸出高
大正六年	一二三、三八四トン	一四、〇八一	七一、〇五二
昭和二年	六二、四六〇	九、六三七	七六
三年	六五、一七四	一五、〇四〇	一三五
四年	七五、八〇〇	——	八、二〇〇

大正九年古河、住友、藤田、久原、三菱の五社によつてカルテルを

組織したが、住友が退脫したので現在は四社で水曜會を形成しつつ、米銅と住友に對抗してゐる。水曜會の活動は秘密にされてゐるが、生產の制限と市價の維持が主目的である。

そして藤田鑛業を除けば、水曜會カルテルの古河、久原(日本鋼業)三菱とカルテルとの對立する住友も、銅の加工製品を生產する一貫作業をなしてゐる。

粗銅會社	同一資本の加工會社
古河鑛業(二千二百萬圓)	日本電線(二〇〇)日本伸銅(三〇〇)富士電機(一〇〇〇)古河電氣(二〇〇〇)
日本鑛業(五千萬圓)	日立製作所(一〇〇〇)
三菱鑛業(一億圓)	三菱電機(一五〇〇)
住友銅山(千五百萬圓)	住友電線(一〇〇〇)住友伸銅(一五〇〇)藤倉電線(五〇〇)

(二) 石炭鑛業聯合會(創立大正一〇年五月)全國の石炭會社、又は個人的石炭資本の九〇パーセントは石炭カルテルに加盟してゐる。重要炭田の各地方にはそれぞ〵地方組織があつてカルテルはこれらの地方組織の聯合體である。聯合體の本部を構成する評議員會社が石炭カルテルの主體勢力である。

▲筑豐炭田——筑豐石炭鑛業組合
三井鑛山　三菱鑛業　住友炭礦　古河鑛業　大正鑛業(古河系)　貝島鑛業　大辻岩屋(貝島系)　藏内鑛業　三好鑛業　麻生商店　明治鑛業(安川系)　飯塚鑛業　久恒鑛業　大隈鑛業　宮尾炭礦　平山炭礦

▲北海道炭田—北海道石炭鑛業會
三井鑛山　北海道炭汽(三井系)　太平洋炭礦(三井系)　三菱鑛業　雄別炭礦(三菱系)　住友炭礦　大倉鑛業

▲常磐炭田—常磐石炭鑛業會
大倉鑛業　入山採炭(大倉系)　古川鑛業　磐城炭礦(淺野系)　大日本炭礦(三井系)　福島炭礦

▲佐賀炭田—佐賀鑛業會
三菱鑛業　杵島炭礦　大辻岩屋　古川鑛業

▲宇部炭田—宇部鑛業組合
大倉鑛業　沖ノ山炭礦　藤本閑作　高良宗七

▲糟屋炭田—糟屋鑛業會
明治鑛業　日本鑛業(久原系)　早良鑛業(三井系)

▲其他地方—會社單位加盟聯合會直屬
松島炭鑛(三井系)　九州炭汽(三菱系)　基隆炭礦(三井系)　臺灣炭礦(三井系)　臺陽鑛業(三井系)　南滿州鐵道(撫順炭坑)　山東鑛業(滿鐵大倉系)

これらの炭田地方の地方組合に所屬する石炭會社の送炭高は、全送炭高の九四パーセントで、次表のやうに大正一四年の九六パーセントに比べて減退する傾向はある。即ちカルテル外の產炭が擴大する譯だが、完全カルテルだと言つて好い。何故なら製鐵所の二瀨、鹿町、稻築炭礦や海軍の新原炭礦などが、カルテル外に置かれるからである。

石炭カルテルの送炭比率

	全國送炭高	カルテル産高	比率%
大正一四	二五、七五七千噸	二四、八〇〇	九六・二八
昭和　元	二六、二三四	二五、一三二	九五・七九
二	二七、五八八	二六、四三七	九五・八二
三	二七、五三七	二六、三七一	九五・七六
四	二八、〇六九	二六、四五三	九四・一七

そしてカルテルの顧問は三井財閥の團琢磨、三井財閥の木村久壽彌太、他石貿で、理事には三井鑛山、三菱鑛業のほか古河、淺野、大倉、住友、貝島の代表が選出されてゐることによつても明らかなるやうに、カルテルはこれらの片手ほどの少數な財閥資本の手に握られてゐる。

こゝに石炭カルテルの機關誌「石炭時報」がある。「時報」には幸ひにして全國重要炭山七〇炭礦の昭和四年度の産炭高が記載されてゐるこれをとつてみると、カルテルのなかに占めるこれら財閥資本の支配力がはつきりとわかる。それによると次表のやうにカルテルの送炭高に對して、三井財閥は三割五分、三菱財閥は二割四厘、貝島は七分六厘、安川は五分、この四つの財閥だけですでに九割九分の絶對數を獨占してゐるのである。

	石炭會社	重要炭礦（數）	出炭高（千噸）
三井財閥	七社	一七	九、三三二
三菱財閥	四社	一一	五、四一二
貝島財閥	二社	三	二、〇三〇
安川財閥	一社	五	一、三八五
古河財閥	二社	四	一、一四八
大倉財閥	二社	四	一、一三二
住友財閥	一社	四	一、〇一五
麻生財閥	一社	三	八二四
淺野財閥	一社	一	九二九
藏内財閥	一社	三	七〇八

石炭カルテルの採炭制限の過程は次ぎのやうである。常磐炭田には大倉、磐城、三井、入山、古河、大日本、福島七社によつて常磐木曜會が組織され、常磐炭田の操短を獨立的にもおこなつてゐる。

		繰短率
第一〇回	四年四月—四年五月	二七二〇萬トンの五分制限
第一一回	四年六月—四年九月	五分擴張即ち一割繰短
第一二回	四年一〇月—五年四月	年産二六四二萬一千三百トンを基準とする五分繰短即ち二五一〇トンとす、
第一三回	五年五月—五年一二月	繰短を五分擴張し一割とす。

（三）日本セメント同業會（創立大正一三年一〇月）セメント・カルテルのもとに結成するものは一五社である。

▲淺野系

	資本金（千圓）	拂込金（千圓）	主要工場
淺野セメント	一〇六、三一〇	五三、九九〇	東京市門司（山口）上磯（北海道）川崎市高雄市大阪市

秩父セメント	一〇、〇〇〇	四、七五〇	秩父（埼玉）
日本セメント	一〇、〇〇〇	五、六八七	八代（熊本）佐伯（大分）
▲三井系			
小野田セメント	三一、〇〇〇	一九、四七五	小野田（山口）大連平壤名古屋川內（朝鮮）八幡（福岡）
電氣化學	二八、〇〇〇	一七、五〇〇（四〇〇）	大牟田市
大分セメント	一一、〇六〇	八、五二二	德浦津久見（大分）由良（和歌山）大船渡（岩手）
▲三菱系			
磐城セメント	一〇、七〇〇	九、〇六二	東京市湊（青森）四倉（福島）
日本窒素	四五、〇〇〇	二七、七五〇（五〇〇）	水俣（熊本）
▲其他			
豐國セメント	七、五〇〇	七、五〇〇	名古屋市門司（福岡）
土佐セメント	一〇、〇〇〇	六、四〇〇	高知市
大阪窯業	五、〇〇〇	四、五〇〇	大阪市
七尾セメント	五、〇〇〇	二、七五〇	七尾（石川）
宇部セメント	七、〇〇〇	五、〇七五	宇部（山口）
三河セメント	一、〇〇〇	六五〇	田原（愛知）
常陸セメント	七五〇	四五〇	助川（茨城）

備考、括弧內は窯業產業のセメント投資額

三井と淺野の財閥資本がずば拔けて優越的位置にある。さうであればあるほど小ひさいセメント產業資本との對立は必然にするどさが加はるのである。

輸出は全生產に對して一昨年の一割強から昨年は九分に一割を割つたのである。內地の消費比率は小口需要が三割〇四厘、建築用二割二分鐵道用一割三分六厘、發電用一割一分九厘、土木用九分一厘であつて、用途から言つても市場の狹隘化は免れ難い。セメント資本を擁護せんとして失業救濟を呼稱する土木工事をいかに政府がおこしたからとて、建築、發電、小口、鐵道の工事をふるひおこすことは出來ない。關東に五日會、關西に七日會といふ販賣協定機關があるが、市場は一とたまりもなく崩れたので、さうなると對立は更らに激化せざるを得ない。本年になつてからでも共販會社案、プール案、五社聯盟といふやうに市場統制案をめぐつて抗爭を續け、小野田、淺野の二社に市價と限產に關する絕對統制權を委ねたのであるが、一ヶ月半で內部崩壞を遂げて七月一日からは一般的操短に復歸したものである。

財閥資本はつひにセメント・カルテルを指導し得ないのである。そして今や五割三分三厘の最高率の操短をおこなつてゐる。

セメント操短率の深化

第一〇回	四年一二月—五年二月	三割八分特別操短一〇萬樽
第一一回	五年三月—五年五月	四割五分普通四割三月は特別操短一割五分增
第一二回	五年六月—五年八月	五割一分五厘
第一三回	五年七月—五年八月	改正五割六分七厘、小野田淺野

第一四回 五年九月―五年一一月	兩社統制權を辭す 五割三分二厘、自然消滅したる 補充生産の分三分五厘が控除さる 一買作業休轉を認む

三、輕工業に於ける「獨占」カルテル

(一)大日本紡績聯合會(創立明治一五年)――これは古典的な史的發展を遂げたもので紡績カルテルとして强大なる組織體である。

カルテルの「獨占」段階

	社數	工場數	錘數(千錘)	織機(千臺)
協定會社	五九	二四七	六、六四八	七三
協定外會社	一一	一一	一八七	四
比率	・一八六四	・〇四四五	・〇二八一	・〇五四七

紡績カルテルは吹けばとぶやうな弱小會社十一社を協定外に從屬させた完全カルテルであつて、六大會社がカルテルの支配勢力である。

六大會社の生産設備(錘數)は全カルテルの五割一分九厘、生産高は四割九分一厘を占めてゐる。六大會社は産業資本の代表的な存在であつて、金融資本と産業資本との鋭い對立即ち金融資本の産業支配の過程のうちに、多くの産業資本は古木の倒れるやうにぶつ倒されたのであるが、彼等のみは金融資本の成熟するに先立つて、剩餘利潤を蓄積しつゝ拔き難い基礎を、紡績産業の上にがつちりと据ゑてゐたからこそ、今日の存在がある。

然し、今や金融資本の嵐は吹き荒れてゐる。六大會社の流通手形で一流物として、大手をふつて金融資本の關門を通過し得るものは少ない。

富士瓦斯の如きは、金融資本の手中にまさに引き倒されんとする古木の風情がある。

或は金融資本の附け入る搦手を窺へば、原料棉花の四割を供給するものは、國家資本トラストの正金系の日本棉花、三井財閥資本の東洋棉花であつて生産の助成材たる原料棉花を通じて、小中紡績の多くが支配されてゆくやうに、金融資本の支配はこゝからも六大會社に及ばんとしてゐるのである。

紡績産業資本は果してよく、戰ひ得るであらうか。

六大會社の生産力

	錘數	半期生産高(四年下期)
大日本紡績	七〇九(千錘)	一四九
東洋紡績	七八〇	一九八
合同紡績	四三六	一〇七
鐘淵紡績	六三三	一一九
富士瓦斯	四七八	七五

日清紡績	四一七	六二
合計	三、四五三	七一〇
加盟會社總計	六、六四八	一、四四四
比率	・五一九四	・四九一六

かく六大會社の支配する紡績カルテルのなかにも、激化しゆく資本の對立がある。六大會社に對する小、中、紡績資本の對立などはその一つであつて、無配當會社が一五社、二萬錘内外の小紡績が一六社、無配當會社はカルテルの全生産力の七分、小紡績の全生産力は、大日本紡績の神崎工場よりやゝ大きいくらひのもので、これらは紡績午餐會を組織して、操短に特例を要求するなど憐れむ可き小紡績の存在を主張するのである。

午餐會に參加する小紡績

	工場數	錘數(千錘)		工場數	(千錘)
天滿紡績	一	一五	和歌山染	一	九
山本紡績	一	四	松太綿布	一	一六
小津武林	一	二〇	正織	一	五
大和田	二	二三	福山撚絲	二	四
北泉紡績	一	一〇	山積紡績	一	五
和泉織物	一	一三	平田製綱	一	一四
寺田紡績	一	一三	川越紡績	一	二一
貝塚紡織	一	一〇	佐野紡績	一	二〇

綿番手と太糸、綿糸と綿布、兼營産業の品種等の、いづれに生産の主力をそゝぐか、言ひ換へると現實的生産資本の活動方向によつて、對立した利害が生ずるのである。

かうした對立を内包しつゝ、紡績カルテルは獨占利潤を防衛するために、操短又操短、カルテルは歷史的な操短の記錄をつくりあげてきたのである。

昨年の七月に再開され、現在の深化された操短による紡績勞働者の失業は二萬八千人に及んでゐる。かくして操短により糸價の暴落を喰ひとめんとすることは、一面に於て、紡績カルテルの織布生産に對する強大なる對立物たる地方産業の織布工場に高い原料綿糸を供給してこれらを行き詰らせやうとするカルテルの意力がかうしたところにも動いてゐることが注意されねばならぬのである。

現在地方的な織布工場はすさまじく吹き荒らされてゐる。

最近の紡績操短

	昭和四年七月―五年一月	撤廢
第一七回	昭和五年二月―五年六月	一割及一ヶ月二晝夜休業(一割七分二厘)休錘は工場別たるを要せず、三萬錘及七萬錘以下の會社に緩和す
第一八回	五年六月―現在	更らに二割七分二厘に擴張す、七、八月は更らに自由操短を擴張す

募集

全五册

特製 一册 壹圓

並製 一册 八拾錢

改訂廉價版刊行に際して

代の思潮を樞軸的に轉回せしめて偉大なる役割を遂げ若くは遂ぐる道途にある。現代に生息する我々は其の如何なる職業、如何なる地位にあるとも、此資本論を一讀することによってのみ現代人たるの資格を克ち得る。資本論を以て單なる經濟學の一著とのみ見るは恥づべき半可通のことである。資本論は實に深刻に人生を知るの書だ。學徒も讀むべきであり、文藝に干與する人々も讀むべきであり、一般大衆も味讀すべきである。本社が廉價版を出す所以も其深意玆にあるのである。

飜譯

譯者高畠氏はマルクス學殊に『資本論』の研究に於ての第一人者。曩に滿六星霜の全身的沒頭を以て『資本論』全三卷八千枚を譯了し、其後之を改譯して理解し易き日本文として上梓したが、今回此良譯を更に綿密に原書と對照して加筆訂正し、些の飜譯的臭味を殘さず、實に此の學術的名著の邦譯として何人も激賞するところのものと

體裁

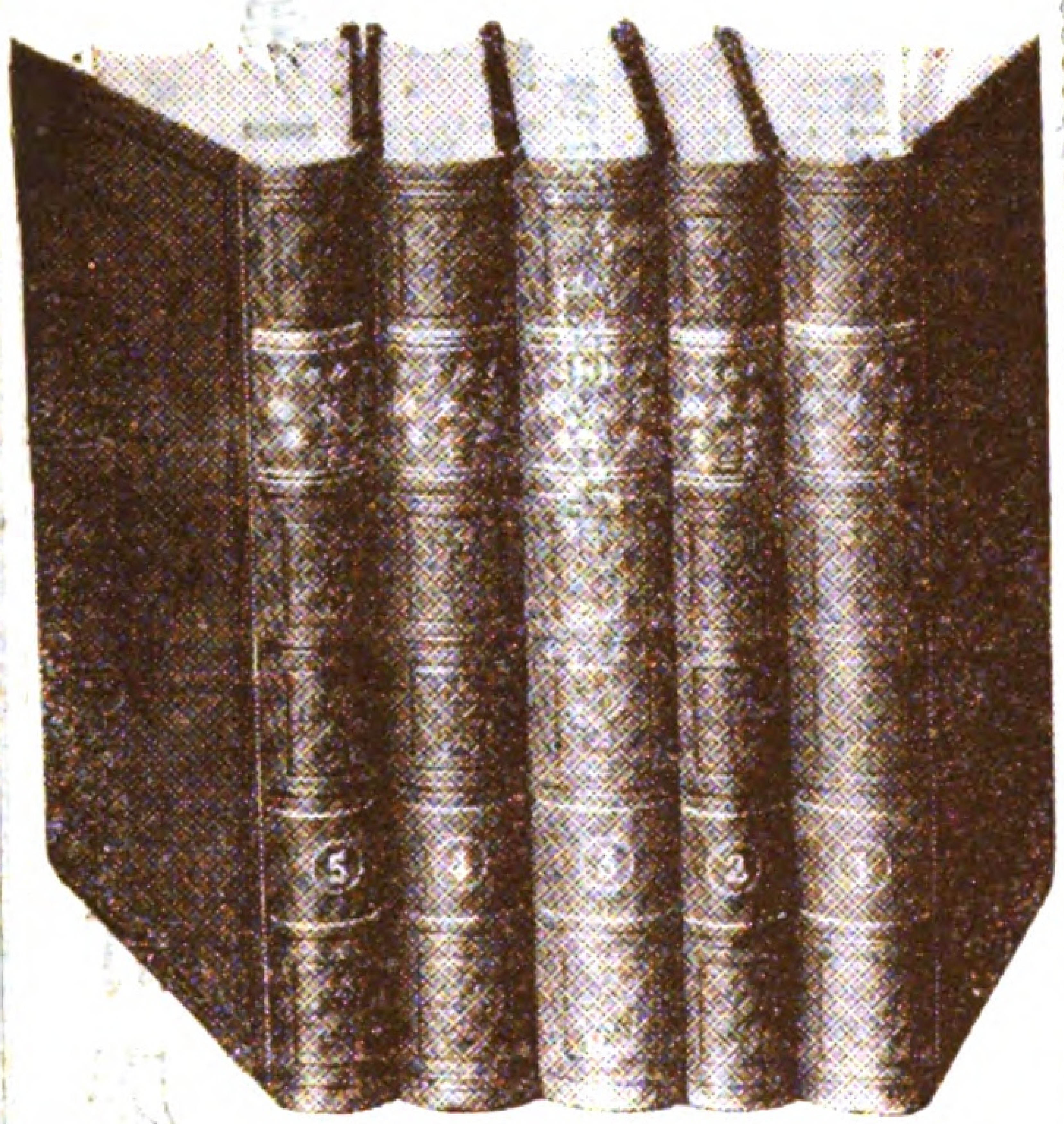
譯である。廉價版なりと雖も決して粗末のものにあらず。紙質の良好印刷の鮮明に十分の注意を拂ふと共に裝幀にも意匠を凝らし、尙、クロース表紙を以て堅牢瀟洒に裝幀したれば、永年の保存に堪ふるのみならず、書齋机上の飾たるに十分である。

資本論は何人の机上にも之を備ふべきものたるに拘らず、然らざりし

價格

所以は其の高價なるが一因をなしてゐた、邦譯第一版は全三卷にて六十五圓。改譯版は二十五圓五十錢に低落したが之でも普通の讀書子には一寸手が出せない之を吾社は全三卷五册を僅かに特製五圓（一時拂は四圓九十錢）、並製四圓（一時拂三圓九十錢）とした。今世界的の相場として獨逸原本は十三圓、英譯本十五圓七十錢で最も廉い佛譯本が八圓である。而も此佛譯は假製本であつて吾社のとは印刷製本に於て比すべくもない、吾社の資本論は實に世界一の廉價版として世に誇るべきものである。

特製裝幀見本



四六判・横四寸五分・縱六寸四分

各册紙數平均約四百五十頁

申込〆切 十月卅一日

全五册一時拂 特製 四圓九拾錢

並製 三圓九拾錢

全五册一時に御入用の方は御申込と同時に配本致します

東京市芝區愛宕下町

振替東京八四〇二

改造社

（的）解剖暴露

第四册（第三卷第一册）

第三卷　資本制生產の總行程

(二) 絹紡、人絹、モスの「獨占」

生糸は蠶糸中央會の指導のもとに、全國的二割操短を斷行しつゝあるが、市場と製糸工場に對する統制力を喪失し、製糸産業は今や操短と休業の全國的氾濫がおこつたのである。斯く、生糸に對するほどの爆破力けないが、生糸製品に代位しつゝある絹糸、人絹、毛織の生産と市場も、かうした暴風に襲はれつゝある。

▲絹紡工業會（創立、昭和二年）――加盟社（一二社）

會社名	絹絲錘數	紬絲錘數	會社名	絹絲錘數	紬絲錘數
富士瓦斯	七七、九二〇	一九、六五六	鐘淵紡績	六三、三六〇	一〇、七三四
大日紡績	四七、三三〇	六、三九〇	東洋紡績	四〇、五六八	九、二四〇
日東紡績	二四、二〇〇	四、一八〇	關東紡績	六、八〇〇	八四〇
日本絹絲	九、九〇〇	一、〇八〇	日本絹綿	三三、二〇〇	二、〇一六
日本絹織	二四、四〇〇	一、三二〇	近江絹絲	五、七〇〇	―
信濃絹絲	四、〇〇〇	―	上州絹絲	四、〇〇〇	―

昨年市場が崩れ始めるや、年末から操短を開始した。操短の深度は深まりつゝある。

	期間	繰短率	除外例
第四回	昭和四年一二月―五年六月	一割二分	自家用原絲は四分輸出向きは除外す
第五回	五年六月―五年七月	二割	一割二分の外二晝夜休業
第六回	五年八月―五年一二月	三割五分	自家用原絲は七分（三七萬錘のうち自家用一〇萬錘）

▲人絹聯合會（創立、昭和三年七月）――新興産業としての人絹は世界的な「人絹時代」を創造せしめたが　人絹も到底、世界恐慌から安全であることは出來なかつた。わが人絹も「一五〇B」品は、昨年初の二百十三圓から年末には百三十圓に三割九分暴落したが、わが人絹カルテルを支配する藥銀、籐本系の帝國人絹、フエライニングテ・グランツシユトツフ・アー・ゲーの技術と日棉系資本の結合する旭絹織、三井財閥東洋レイヨン、東洋紡系の昭和レイヨン、大日本紡系の日本レイヨンなどの市價協定の破棄が暴落を助長したことは言ふまでもない。

そこで、カルテル組織は强化された。

	期間	繰短率	除外例
第一回	昭和四年一二月―五年六月	五分	―
第二回	五年七月―五年九月	二割	義務輸出二割
第三回	五年九月―五年一一月	同	同

操短を輸出に振り向けるといふ斯うした國際市場への進出は、外國資本との競爭、對立と國際市場から受ける波動のなかへわが人絹カルテルを馳り立てゝゆくは必然である。

▲羊毛工業會（創立、大正九年）モスリン・カルテルであつて二つの大きな矛盾を孕んだまゝモス資本十一社を結成してきたが昭和四年一月操短協定は内部崩壞をとげたのである。

二つの大きな矛盾とは協定外に二〇社に及ぶモス資本をのこしたこと、日本毛織と其他との激化された對立をカルテルの內部へ持ち込んだことである。

日毛はまもなく同一のモス資本を引きつれて協定を脫退したが、日毛は合同毛織、東洋モスの工場賃借によつてカルテル生產の八割にあたる生產力をもつたので、そこで本年七月羊毛工業會は更生されたのである。即ち日毛資本を中心とする更生——一九社、船舶、原料商等の決議權なき準構成員を含む——であつて日毛は悠々として理事長の椅子に就いた。

理事會社、伊丹製絨、新興毛織（舊合同）東京モス、東洋モス、中央毛糸、栗原紡織、日本毛織、大阪毛織

モスの閑散期に向つて更生せるモスカルテルは、徹底せる操短決行の必要に促迫されてゐる。

▲ラミー紡織聯合會（創立、昭和四年八月）日華紡織、東洋麻糸、第一ラミー、東京麻絲の四社參加す、

操短　昭和四年一二月—現在　三割

四、化學產業に於ける「獨占」カルテル

（一）「肥料の公平なる分配」の重要性に對して、民衆は無智なほと無關心でゐるが、金融資本はこれが重大性を認識してゐる。

「肥料の公平なる分配」は、

(1)現在進行しつゝあるが如く、肥料の配給網を通じて金融資本のもとに農村を支配し得る。

(2)製肥產業は同時に爆發藥、煙幕、毒ガスなどの軍需品產業で、「公平な分配」によつて製肥產業の發達することは、同時に軍需品產業の規模の擴大である。

といふ重大性を、金融資本ははつきりと認識してゐる。

製肥產業には豆粕、硫安、過燐酸とあつて、豆粕は滿洲の獨占生產だが、過燐酸はカルテルからトラストへ、硫安はカルテル化の過程にある。

▲過燐酸同業會（創立、大正一一年）

カルテル加盟會社

	資本金（萬圓）	昭和五年上期生產高（千貫）
大日本人肥	三六二五	三三、〇三四
日東硫肥（人肥系）	二〇〇	五、四四五
大阪アルカリ（同）	一二五五	五、八二〇
帝國人造（同）	五〇	二、七九九
臺灣肥料（同）	一〇〇	八四八
神島人造（同）	五〇	五、八四七
日本硫曹	五〇	二、七六一
新潟硫酸	二〇〇	五、〇七四
ラサ燐礦	七〇〇	一三、一一九
東洋人造	—	二、二三九
大阪グアノ	—	四、二四四
特許肥料	—	—

カルテル外對立會社

住友製肥　三〇〇　九、九七八
多木製肥　一〇〇　三、八七四

カルテルの對立資本の生産は、カルテルの二割九分であるが、住友が昭和二年一〇月操短を破棄して脱退してからカルテルは大川田中の人肥系資本の支配下に置かれ、今や産業合理局を通じて十一社の合同即ち人肥系の製肥トラストが形成されやうとしてゐる。

昭和二年一〇月——　操短破棄さる、
昭和五年　一月—五年六月　三割　過燐酸として
　　五年　七月—現在　三割　同

▲「硫安」販賣カルテル、過燐酸は原料——アンガウル島——と生産が國内資本によつて統一されてゐるが、その他は外國資本との依存關係が深いのである。

肥料＝國別——「生産」資本圖…………輸入商
豆粕＝滿州——三井其他製油資本…………三井物産
硫安——英國—アイ・シー・アイ・トラスト…………プラナー・モント
　　└獨逸—イー・ゲー・トラスト…………アーレンス
硫酸加里——獨逸—イー・ゲー・トラスト…………カールローガー
　　　├佛國…………………三井、三菱
　　　└米國(鹽化加里)…………三井其他
硝石＝智利＝米國グッゲンハイム・トラスト……三井、三菱

「今日は肥料、明日は爆發藥」の生産設備たり得る硫酸アムモニア(硫安)を原料とする窒素肥料産業が、外國資本に依存しなければならぬことは、次ぎの××を××するものにとつてはまさに××に値ひする。そこで窒素産業が不景氣風を蹴飛ばしてまきおこされた。政府が買ひとつたハーバー法特許は、三井財閥が「お買ひ申して」次ぎのやうな形態で特許による獨占利潤をあげてゐる。

東洋窒素(三井)—ハーバー法特許—┬ファーザー式—大日本人肥
　　　　　　　　　　　　├エヌ・イー・シー式—住友
　　　　　　　　　　　　└クロード式—三井鑛山

そして又、一般的方法による硫安産業は、英、獨トラストの硫安ダンピング——昨年でさへ六回値下げした——の暴風を突いて、日本窒素(三菱)は朝鮮に朝鮮窒素をおこし「味の素」鈴木の昭和肥料と八幡製鐵トラストの洞岡工場は、最近、渦卷く市場へ硫安をはじめておくり出して來た。

かくして勃興せる硫安産業の王座的位置にあるは三井と三菱であつて、兩社は昭和四年に石灰窒素の共販を確立し、昭和五年二月混戰市場たる九州に硫安の市價協定を遂げたが、この販賣カルテルの硫安生産は全生産の八〇パーセントである。

	日本窒素(三菱)		電氣化學	
	生産設備(千トン)	生産高(千トン)	生産設備(千トン)	生産高(千トン)
昭和元年	二〇〇	七一	—	四二
二年	二四〇	八三	—	五〇
三年	二五〇	一二五	一四八	一〇六

(二)、大日本製紙聯合會——は王子、富士、樺太、三菱、北越、日本紙業、日本製紙、西野、乾製紙、の九社によつて結成されてゐるが、三井財閥の王子製紙と三井資本の支配に轉化されつゝある富士製紙の生産力は製紙カルテルの六〇パーセンを占める絶大な勢力がある。

カルテルの統制のもとに、新聞用紙の販賣トラストと原料のパルプトラストがある。このトラストを通じて、新聞産業資本の管理と言論に關與したり、全國に群生する小資本製紙の支配に參與したりする。

だが、トラストに對する脅威は、米國の新聞用紙とカナダ・パルプの輸入による外國の製紙資本との抗爭であつて、ザラ紙は根津嘉一郎の「國民」が米國用紙を使用するだけだが、カナダ・パルプのダンピングには惱まされるので、輸入をカルテルの意のまゝに調節するためにブリテイシ・コロンビアのパルプ販賣獨占權を東洋商會から、まきあげやうとしたが、つひに奏効しなかつたやうである。

洋紙操短表

		印刷紙	模造紙	新聞紙
第八回	昭和四年五月—四年七月	二割	二割	自由
第九回	四年八月—四年一一月	二割五分	二割五分	一割
第一〇回	四年一二月—現在	三割五分	三割五分	一割

備考、板紙は昭和二年度より引續き二割操短、

▲共同洋紙株式會社(資本四〇〇萬圓)明治三四年共同用紙會社より大正一四年六月現在に至る、イ、富士製紙、王子製紙、樺太工業を主力とし全生産の九割を占め、殘餘の一割は協定外の北越製紙が産出する。ロ、新聞用紙の價格並に生産協定を目的とする。

▲共同パルプ會社(資本金三百萬圓)大正十一年創立さる。イ、製紙原料パルプの販賣、生産カルテルである。ロ、製紙會社の持株は、王子製紙二六八〇〇株、富士製紙六〇〇〇株、樺太工業九六〇〇株、鴨綠江製紙三六〇〇株の割合である。

▲日本板紙聯合會。最も古い歴史を有する。西南役の頃おこり、板紙販賣會社、日本洋紙會社、共同販賣所等カルテルは倒れたりおこつたりして、大正十四年九月現在のものが成立した。イ、參加會社、日本製紙、北國製紙、岡山製紙、西成製紙、加賀製紙、高崎板紙、中津板紙、立山製紙、富士製紙、伏木板紙、西肥板紙、美作製紙、新川製紙、廣島製紙、日華製紙、日本紙業のほかその群小會社を參加せしめて七十余社を包括した完全カルテルである。ハ、板紙の輸出獎勵、生産、價格協定を目的とする。二、現在の秘密協定によれば、過剩を二割と算定し、自發的休轉に對し一トン十五圓を補給し各社相互に監視人を特派して抄紙機の封印をなす等、紳士協定又は罰金制度に一歩をすすめたものである。

(三)、酒粉聯合會(創立大正九年一月)——曹達酒粉同業會が生れて次いでカルテル聯合がつくられたのである。大正一一年六月操短絆が

六割五分にまで擴張されたので協定は崩壞したが、大正一四年再建されて以來平均四割の操短をつづけてゐる。

		操短率			操短率
第一四回	昭和四年十月—四年九月	一割五分	第一五回	四年一〇月—五年一月	一割五分
第一六回	五年二月—	二割	第一七回	五年 三月	三割
第一八回	五年四月	三割五分	第一九回	五年 五月	四割
第二〇回	五年六月	四割五分		現在	四割五分

(四)硬化油販賣カルテル——硬化油の支配的勢力をもつ合同油脂と旭電化との間には販賣協定が成立してゐる。産業合理局は、これに大阪酸水素、日本曹達、山桝硬化油、ベルペット石鹼を合同せしめて硬化油トラストを組織させやうとしてゐる。

五、食糧産業に於ける「獨占」カルテル

(一)糖業聯合會——大日本製糖が昭和二年末に朝鮮産糖を密輸入して砂糖カルテルに爆彈を投じたやうなことはおこつたが、歷史が古いだけに、また、國際商品として外國資本の壓迫が強いだけに、カルテルの結成力は固い。

日糖、臺灣、明治、昭和のやうな精糖會社資本と新高、帝國、臺南新興のやうな粗糖會社資本との對立もかもされるが、鹽水港の窮乏化や東洋製糖の沒落や、さうした大きな産業資本でさへ、容謝なくぶつ倒されてゆくやうに、日糖、明治(三菱)臺灣(三井)の銀行資本が有無を言はさないで締めあげていつてゐる。

昨年一月明治商店(明糖)阿部幸(鹽水港)三井物産(臺灣)の商業資本とそれぐの産業資本との間に販賣協定が成立したが、本年はこれに日糖とその商務部と、帝國、新高が參加して砂糖市場に對する販賣カルテルの支配力は著るしく強まつたのである。

五年度の協定産糖高は一千三百十七萬八千ピクルと決した。

昭和四年度の産糖協定額と實收額(千ピコル)

	協定額	實收數量		協定額	實收數量
×臺南製糖(三井)	三、〇八〇	三、九八〇	×明治製糖(三菱)	二、五四〇	二、六一三
大日本製糖(藤山)	二、三三〇	二、三五五	×鹽水港	一、六五〇	一、七八八
×帝國製糖	一、一五〇	一、三二六	×新高製糖(日糖)	五一九	五三一
新興製糖	一三〇	一三三	新竹製糖	三六	六〇
臺東製糖	四九	六一	砂轆製糖(臺灣)	七一	七二
昭和製糖	一三〇	一三四	臺南製糖		一五五

備考、×印は、副産物たる酒精の酒精協定を組織(外に南部酒精を加ふ)してゐる。五年度は内地供給技を二割五分增加して八萬五千石を決定した。

(二)製粉共販組合(創立、昭和五年二月)——製粉産業は大正一二年七社を結成して製粉聯合會をつくり大正一五年六月から平均四割の限産協定をおこなつたそ・まではよかつたが、昭和三年、日本(三井系)

日清の對立が激化して限産協定が破れ、兩社の賣値協定が破れ、つひに製粉カルテルは爆破された。

處が日本、日清、三井物産によつて強固な販賣カルテルが成つたのである。三井財閥の資本が對立せる兩社をくくし上げたのである。

この百パーセントの三井財閥資本の販賣カルテルの生産設備は製粉資本七社の八七パーセントを獨占する紛もなき製粉トラストである。

	生産能力(バーレル)	生産高(四年上期)
日本製粉	一七、六〇〇	七、七〇〇千袋
日清製粉	二〇、一〇〇	八、七〇〇
計	三七、七〇〇	一六、四〇〇

(三)ビール協定──價格協定は成立したり破壞されたりして來たが昭和四年一〇月「特別賣出しをしないこと」といふさうした協定さえ破れて、需要期節を戰ひ抜いたから、現在、協定が準備されてゐる。

(數字は昨年度査定額を示す)

大日本ビール	四八八千石	キリンビール	二四六
ビール鑛泉	九二	サクラビール	六一
新カスケード	一八		

(四)漁業カルテル──北洋に於て鮭の生産領海を獨占する露領水産組合も、國家を直接的な背景とする三菱財閥資本に指導される漁業カルテルである。また、その陸上工場と工船に生産される鮭罐詰産業は、販賣カルテル──共販會社──の成立によつて三菱資本の優位が決定的となつた。三井財閥の資本はみごとに北洋漁業から敗退したやうである。

三菱支配共販會社
- 日本工船─株式の六〇%共同漁業三〇%北海拓銀
- 富山工船─共同漁業系
- 昭和工船─株式の六〇%共同漁業、三〇%三菱財閥
- 日魯漁業
- 林兼商店
- 八木商店

（日魯漁業・林兼商店・八木商店）─三菱系

六、カルテルと國際資本鬪爭

「獨占」の深化過程にあつて、最も果敢に無慈悲的な行程を強行しつゝ、當面、重要な資本運動をつゞけつゝある「獨占」カルテルの形態を執るところの「獨占」資本の、最近の樣相とその活動の一般的狀勢を見た。かうした一般狀勢のうちに、見られるところのものは、崩壞を遂げたカルテルが再建されたり、新たなる結成組織がおこつたりしたやうにカルテルの強化、言ひ換ればカルテル資本が量的、質的に強まつたことである。──一方に於て生産設備を休止させ、他方に於て生産設備を増加しつゝあつた矛盾も一應は解決されたやうである。たゞ合理化のための資本の更新運動としては、今後こそおこるところの

設された問題ではある。そして强化を通じて、カルテルに對する財閥資本の支配が强化、擴大されたことである。大きには市場支配のための生産强制々限率が、徹底的に擴張されたことなどであらう。

さうしたカルテル資本の現實運動に現れたことのうち、たゞそれのみのためにカルテルが存するかにさへ思はれる生産の强制々限については、そのことの重要性から言つて見ても、ここに若干の檢討を試みる必要がある。事實また、カルテル製品の市場價格は昨年末を爆破點として、本月上半期を通じ、おしなべて釣瓶おとしに慘落を演じたので、そこで市場の强制支配のために徹底的に生産の强制々限をもつて對應するほかなかつたことはもちろんであるが、丸鋼は五割、セメントは五割三分、晒粉は四割五分、絹糸、洋紙は三割五分といふ素晴らしい生産資本が「獨占」資本の强制によつて休止資本として眠り込まされたのである。强制々限率は、多くは今や最高の段階にある。

生産制限率の深度の比較

	創立より昨年に至る期間の最高	最低	現在
丸鋼	二九萬トン(昭和四年)	二六萬トン(同)	五割
石炭	二七六三萬トン(昭和三年)	二四六〇萬トン(大正一五年)	二三七七萬トン
セメント	三割八分(大正一五年)	一割(昭和二年)	五割三分二厘
紡績	四割(明治三三年)	四卅夜(大正九年)	二割七分二厘
絹紡	二割二分(昭和三年)	六分(昭和二年)	三割五分
人絹	二割二分(昭和四年)	同(同)	二割
毛織	二割五分(昭和三年)	同(同)	—
製紙	二割(大正九年)	六分(昭和三年)	三割五分
燐肥	全休(昭和元年)	二割(大正十一年)	三割
晒粉	四割五分(明治三三年)	一割五分(昭和四年)	四割五分
製粉	五割(大正一三年)	一割(同)	—

特殊利潤を生むカルテル資本の獨占利潤は吹き飛んだが、しかし、かくして一般的には平均利潤は喪はなかつた。

といふことは、必ずしも、我々の不當な豫斷ではない。

なるほどカルテル製品の市場價格が慘落したことは確かだが、大體これまでの市價そのものが勞働の生産性の増大より、より遙かに不當な高値だつたのである。

手持原料と製品の市價から言つて、採算點を割つてゐる、と言ふものがある。そうして御丁寧にも現物相場から採算して例へば次ぎのやうな數字的根據をさへあげるのである。

綿絲廿番手　市價一二五圓　原價一五〇圓　損失二五圓

（備考、其の日の米、印棉相場を基礎とする。）

單純生産の場合に於てなら、右のやうな採算は、かなりの確實性を持つであらうが、それは原料の買付、製品の先物契約に於ける「思惑取引」を思惑しないところの計算であつて、資本家はもつと利口に違

つて除けてゐる。勞働の强度化によつて不引合ひな採算を引き合はせたではないか。

然し乍らカルテルの獨占資本が平均利潤を確保し、また特殊利潤のいくらかをでも恢復しやうとするには、內外の原料市場又は商品市場に出動して、他の產業資本か又はカルテル外の同一產業資本の利潤を直接、間接に奪ひとつてくること以外には現在與へられた手段は無い。

國內に於けるカルテル外の同一部門の產業資本に對しては、これを征服し得るであらう。現に征服しつゝある。だが國際的資本鬪爭に於ては、まつたく一變せる情勢のなかに在る。紡績の棉花、モスの羊毛の全部、小麥粉の小麥の大半は外國資本の原料シンヂケ！トの手にある。製紙原料のパルプ、窒素肥料の硫安、鋼材の銑鐵も亦、外國資本のために强力に支配されてゐる。またカルテル製品の全部と言つて好いほどのそれらは、狹隘化された國內市場の支配では足りなくて外國市場にさばけ口を求めねばならぬ輸出商品であり、とりわけ砂糖、小麥粉、人絹、綿糸布はいはゆる國際商品である。それ故に、わがカルテルは國際市場に於て外國の獨占資本と對立、抗爭するばかりでなく、いやが上にも關稅の障壁を高く築きあげたる內地の獨占市場をも强烈に脅やかされねばならない。伊太利の人絹トラスト・スニア・ヴイスコサや印度銑鐵のタタトラストや、イー・ミー、アイ・シーの硫安は、ダンピングをもつて屢々、わがカルテル資本の本土を襲ひ來つた。生糸、棉花、銅、小麥粉、砂糖、羊毛は、海の彼方より來たる一電、一閃の支配するところである。かゝる國際資本鬪爭の火華は、必然にカルテルを震撼する、又カルテル內部の資本團の對立、矛盾を刺戟し激化せしめる。それこそはわがカルテルの憐れむ可き「獨占」である。

¥1.20

"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

尖端的寵兒

流行の麻雀人は毎朝流行のバレーを使ふ
簡單にどんな髭でも早く理牌(リイパイ)して
見事な仕上げは正に滿歎(マンカン)

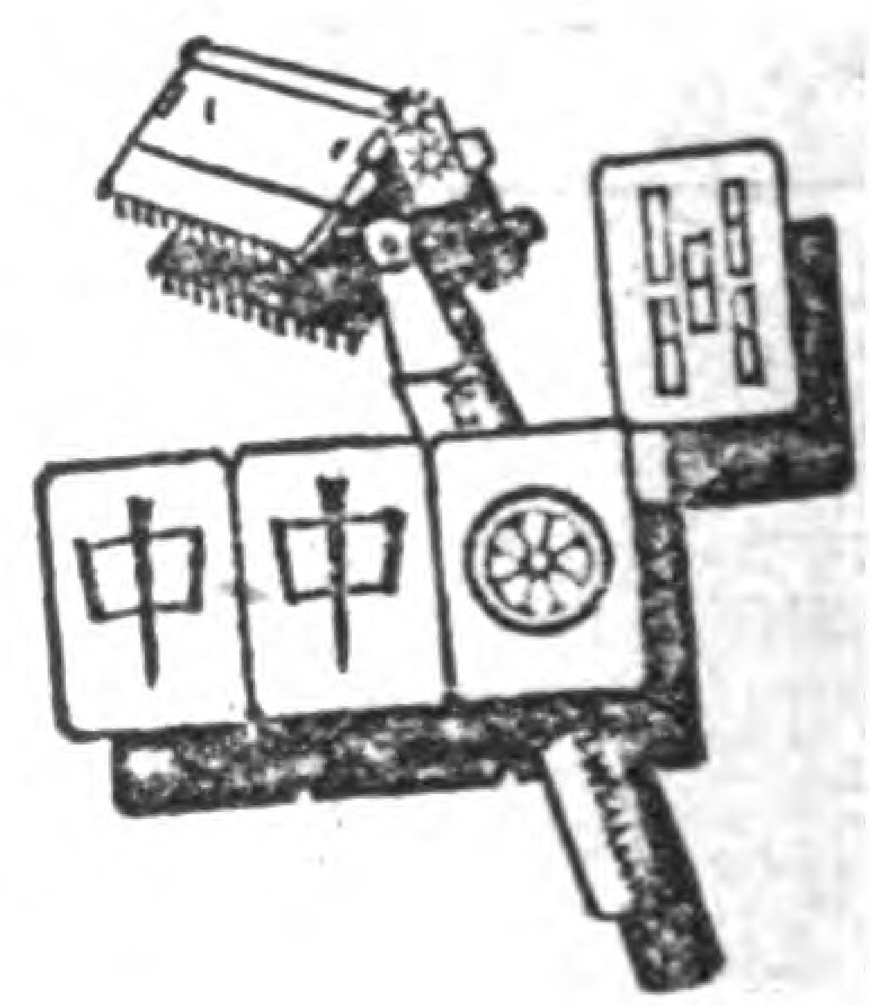
□■□■□■□■□■□

剃刀て研器を兼ね一枚の刄が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型 一三・五〇 二三・〇〇 二六・〇〇
C型 一・二〇 一・七〇 三・三〇 四・八〇
替刄利用ナイフ(刄一枚付)・八〇 送料各・一八(カタログ進呈)

販賣所 大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所



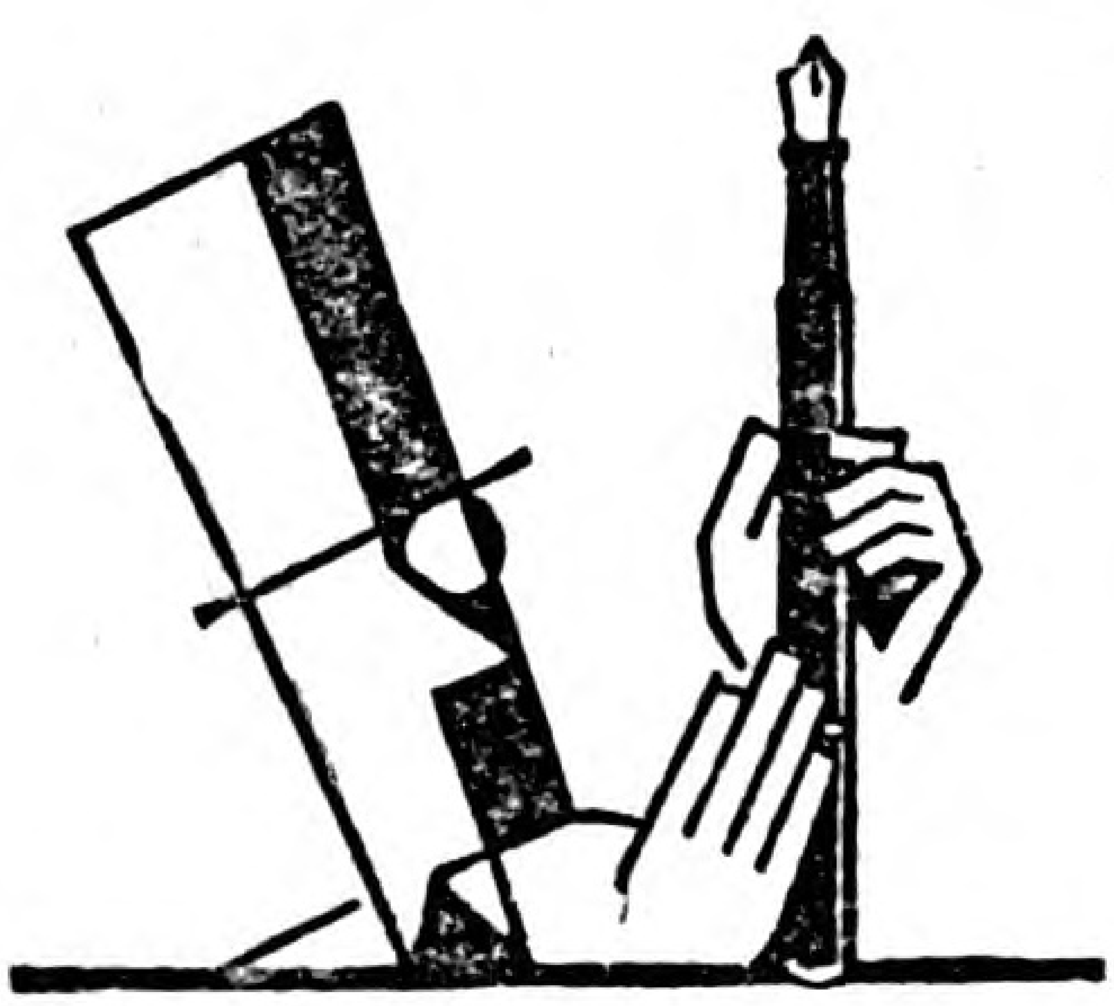
Athena the Pen

フルスピイド

國産アテナなら、フルスピイドの速記が出來る
ペン尖が强靭で、インキの流出が適度で長く
保つから、書ける書ける、迅く勢よく筆端に風を喚んで
使へば使ふ程書きよくなる

アテナ萬年筆 三圓五十錢以上
オノト萬年筆 七圓五十錢以上

萬年筆には國産アテナインキを御使用下さい
送料各十八錢(カタログ進呈)



東京日本橋通

丸善株式會社

大阪｜神戸｜京都｜名古屋｜横濱｜福岡｜仙臺｜札幌

東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

イェー・ベー・パシュカーニス著
山之内一郎譯

法の一般理論とマルキシズム

（四六判 四四六頁）

定價壹圓八拾錢
送料二十二錢

最新刊

法及び國家をそれ自體によつて、又は思辨の一般的發展によつて理解し、それ等の秘密乃至基礎を、從つてその本質たる階級性を飽くまでも隱蔽せんとするブルジョア法律學の果敢なる批判！ 是現在我等に課されたる主要緊急提題の一つである。本譯に說く所の法の一般理論の概念は正に此の提題を解決し、ブルジョア法學をして眞のプロレタリア法學の地位にまで批判昂揚せしむる所の法理的體型である。現露西亞に於て得らるべきマルクス法律理論の最高權威者の著たる本書を譯するに斯學に造詣深遠の俊毫を煩らはした。けだし本譯の出現は現下日本法律學界に對する一大貢献である。

法學博士 田中耕太郎著

法と宗教と社會生活

定價貳圓五十錢
送料廿四錢

發行所 改造社

東京芝區愛宕下町
振替東京八四二〇

マルクス＝エンゲルス全集

第十七回配本（九月下旬）

マルクス＝エンゲルス往復書翰集 IV

今回配本は本全集第二十巻で往復書翰集のⅣである。

本譯は原著往復書翰集第四輯の全譯である。即ち一八六八年よりマルクスの死に至る一八八三年までの間に取交されたる四百三拾餘通の書翰の全體を含むものである。すでに老齢の域に到達したる老社會主義者として兩者の深淵なる世界觀を窺ひ知る事の出來る好個の活資料である。譯者は夫々の英才を煩らはした。マルクス＝エンゲルスの裏面觀として見逃すべからざるものである。

次回配本豫告＝第十九巻（往復書翰集（III））

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

豫約募集

洒落本大系

全拾二冊

編輯顧問
文學博士 上田萬年
文學博士 關根正直
文學博士 藤村作
文學博士 尾佐竹猛

編輯賛助
飯島花月
大槻正二
加賀豊三郎
菅竹浦
千葉鉱藏
南木芳太郎
忍頂寺務
三村清三郎
安田善次郎
山口剛

解題
文學士 山崎麓

編輯校訂
文學士 高木好次
文學士 山本鉄藏
文學士 渡邊幸

大江戸の爛熟期、太平の餘澤を享け生活の單調に倦き、變つた刺戟から刺戟へ甘い露を求めて花から花へ、と江戸大阪を初めとして諸國に散在したあらゆる花街を、狂ひ戯れ、彷ひ歩いた人々、其處には戀愛、遊蕩、變態、情痴の活畫圖が展開された、夫を其儘在るが如くに描き出した短篇小説が此洒落本である。

通人、田舎武士、お店者、遊女、藝者は言はずもがな、衆生濟度の方便に隠れた僧侶の群、其他あらゆる階級の人物が躍如として描寫された。虚々實々の戀愛合戦、客と遊女と手管の魂膽、遊戯的な戀、眞劍な戀、客にいつはりあれば遊女にも眞情ある情痴の世界、都會人の得意な輕妙洒脱な舌戰、對話に五分の隙も見せぬ技巧。江戸時代の尖端を行くユーモア、ナンセンス、エロテイシズム、あらゆる人情風俗の機微が、纖細敏感如實に映し出されて居る。此洒落本から人情本へ、人情本から明治小説へ、文藝の流れは小やみなく走つて現代文藝となつた。即ち現代文藝の源泉は玆にある。

洒落本は比較的小冊子であつた爲め、散佚して完璧な叢書が未だ刊行されない。是れ特に今回多大の苦心努力を以て大成し、世に提供する所以である。江戸文藝愛好者は勿論、文藝史家、風俗研究家、言語研究家を問はず、いやしくもモダーニズムの尖端を歩まむとする人々は、是非本大系を座右に備ふべきである。

◇洒落本の原本で現存するものは約四百部ある。本大系はこれを年代順に一卷に三十餘部づつ全十二卷に收容するものである。

◇洒落本の蒐書家も可成あるが完全に蒐集して居る人はない。然も原本は書肆にも容易に現はれず、稀に現はれても一部十円位するのは普通である。平均十五円としても本大系は六千円の市價ある書籍の蒐集なのである。

◇本大系は原本の儘に翻刻する事を主眼として居る。（原本なきものは一部もとらない）假名遣ひ文法の誤り當字等皆原本通りにするは勿論口繪挿繪序跋題詠題跋等悉く收錄し校正は最嚴格に辭書同樣にする。

◇解題は年代順に收容する編輯と相俟つて、一大洒落本史を形成するこれ本大系のみのもつ誇りである。

内容見本
申込次第進呈

締切拾月廿日限り

規略
▲申込金二円▲毎月拂金二円▲一時拂金二拾二円外に送料を要す
▲申込金は最終の會費に充當す
▲送本十一月より毎月一冊十二ヶ月完了

體裁
▲六卄判・四號活字・美裝幀・天金・九ポイント組▲紙數平均約七五〇頁
▲毎冊挿繪・木版・凸版・數十葉挿入

發行所
申込所
東京日本橋
吳服橋二
六合館
振替東京二三七一
電話日本橋七七七

政友會内閣出現すれば

假說犬養内閣

山浦貫一

富士見から歸りの車中談で、吾輩は護憲運動以來倒閣運動といふものをしたことがない——が今度は此の未曾有の不景氣に際して、何とか考へねばならぬ、と、それが卽ち倒閣運動を起すべき前提を放送した所の、犬養政友會子が、いよ〳〵護憲以來の倒閣運動を起こしたのである。

倒閣運動の、手つ取り早い結論は、犬養内閣が、明日から出來るのである。噂による齋藤實が朝鮮から飛行機的に飛び出したり、伊東巳代治や平沼騏一郎やが、隱居所から迷ひ出して來てはならぬのである。倒閣運動は、目前の濱口内閣を倒すを目的として、後繼内閣が誰であらねばならぬことを、それとは言ひ得ぬ程に『大權私議』を遠慮するとはいへ、犬養政友會内閣に結論されなくては、一向に始まらないのである。

で、犬養老人は、内閣を組織したいと希ふ。「之が最後の御奉公」と思ふ。かるが故に、記念碑として立派な仕事を殘したいと思ふ。爲めには立派にして有力なる閣僚を選んで……と思ふ。

『立派にして有力なる閣僚』の中に割り込みたい者が、政友會の中にうよ〳〵してゐる。能ふべくんば、一時に三ッ位犬養内閣を組織しても、閣僚の選定には事を缺かないであらうけれど、獵官運動がうるさかつたり、同僚排斥がひどかつたりして煩雜なのよりも、一番弱るのは、閣僚の椅子が首相迄併せて十三ケ。内、陸海軍を除けば、十一ケ、中、一ッは、御大犬養のものとして、倒閣運動……否總裁就任の時からリザーブしてあるのである。殘り十ヶの椅子のふり當てが、倒閣運動最中にも、彼の小さい胸を往來するであらう大問題だ。

漫談、雜談は何時間でも雄辯だが、要談となると五分以上を決して要しない木堂、殊に、

一世一代の要談、犬養內閣組織に就ては、一切サイレント。だから、誰も、彼の肚裡をうかゞひ知らぬ。知つても證據が摑めぬ。筆者亦勿論木堂の胸中を窺ひ知る術もないのである。漫談程度のつもりで、氣輕に犬養內閣の顔觸を記して見るならば左の通りである。

總理大臣	犬養　毅
內務大臣	鈴木喜三郎
	床次竹二郎
大藏大臣	高橋　是清
	武藤　山治
外務大臣	床次竹二郎
	芳澤　謙吉
鐵道大臣	久原房之助
遞信大臣	中橋德五郎
	秦　豐助
農林大臣	三土　忠造
	秋田　清
商工大臣	山本条太郎
拓務大臣	森　恪
	前田　米藏
文部大臣	鳩山　一郎
司法大臣	嶋田　俊雄
陸軍大臣	南　次郎
海軍大臣	大角　岑生
書記官長	森、恪
	嶋田　俊雄
法制局長官	山崎達之輔
警視總監	長谷川久一
	長岡隆一郎
	河原田稼吉
朝鮮總督	水野錬太郎
同政務總監	井上　孝哉
臺灣總督	南　弘
滿鐵總裁	山本悌二郎

右に並べた所は勿論「あり相なウソ」と思つてほしい。といふのは、猟官運動者に憎まれるが恐ろしいのである。狂犬の如く眞劍な彼等は、書いた、書かぬと吠え立てる。政務官や秘書官をあさる其の取卷が又恐るべく眞劍だ。さういふ狀態の下に在る彼等は又驚くべくゴシップに對して神經過敏なのである。此の文章なども、彼等の神經を混雜に導く有力な材料になると思へば罪な氣もする。

扨て、並べ上げた顏觸れに就て一應の註釋を加へて見なければならぬ。犬養內閣の問題の中心點は、內務と大藏だ。其他は、どう差しくつても並び大名の領地更えで差し支へない。內務は副總理の椅子である。鈴木か床次かに爭奪される。新聞記事も近頃、多くは、鈴木床次といひ、床次鈴木といはぬ。語呂の關係かも知らぬが、實勢力の順位を、知らず識らずの間に現はして居るのだらう。鈴木は、田中內閣で失敗したと反鈴木系はいふ。ウケが悪いと宣傳する。が一方、田中內閣で「失敗した」のは、連帶責任である。鈴木は私利私慾をやりはしない。冗談も程々にせいとい

ふ。何れにも理窟はある。床次は、何分にも政界放浪がすきだ。選擧にも麾下の目星しい者は枕を並べて討死した。數も減つた。と數へ立てる。その又反對者はいふ。反鈴木系は反動的に床次を支持する。内務畑は床次を歡迎する。あのヌーボーは腕の喜三郎の様な凄い腕を振はないから穩健だ、といふ。かつて内務畑に一番うけのよかつた水野錬太郎は黨の爲めに何をしたか？ 蝮の様な安達内相はいかに世間態をつくろつたか。但し木堂は、何も言ひはしない。

中橋が油揚をさらふだらうと、一時噂された。兩方が競爭すれば自然油揚のさらはれる可能性はあつた。が、彼れは大磯に寢たきりである。油揚の噂はズンと下火になつた。

大藏大臣に最先名乘りをあげた山本悌二郎は、政治家としての最少限度である代議士を落ちた。三土忠造は、線が細く事務官的で、難局に處するには心細い。著書を出して井上と張り合つてゐる山本条太郎は、少々大風呂敷だから、高橋是清を、も一度拜み出して來るといふ説と、武藤山治が入黨して井上の反對的財政政策をやるといふ説とが耳を傾け得る眞實性を帶びてゐる。高橋は出たいとは勿論意志しない。が、難局だ。親友の犬養が頼みこめば、あの恬淡な老人だから、よし來たと、田中義一の時の様に引受けぬ事もあるまい。武藤は、選擧以前から、感情も、政策も政友會と共通である。井上と民政黨の因縁よりは自然である。

外務大臣に、犬養の女婿で佛國大使の芳澤謙吉は、あり相な説だが、木堂は、案外、かういふ所で遠慮する。駐英松平大使はどうか、これを採り得れば大いな力だと勘定する者もある。が、恐らく、將來宮中の人物として算へられてゐるから難かしからう。そこで床次外相説が生じる。強い味はないが、立派だ。外交向きだ。鈴木では到底はまらぬ役柄である。

犬養内閣に期待と興味のもてる所以は、田中男によつて表現せられた實助味が如何に面目を改めるか。野人木堂が、如何に政黨内閣の本質を如實に見せるか。格式や、經歴や地方關係や私情因縁を排斥して、どんな新鮮味を盛るか。更に、難局を處理すべく、如何に意志と實行力の強い組閣内容を人物的に表現するか等々である。

新鮮味と、強さとは、黨の中堅人物を中心とした組閣を意味する。數へられる顔ぶれは、鳩山一郎、秦豐助、秋田淸、嶋田俊雄、森恪、前田米藏等であるが、其の中森恪は、内閣の樞ともいふべき書記官長として、黨内閣の各系統の一致した觀測であり、嶋田、前田が、どういふものか、當選圏をぶら〳〵してゐる。秋田は強引に當選圏を獲得したらしい。

秦は、田中内閣の末期、拓務か農林かに補充される筈であつたが、意外の倒閣で果さな

いでゐる。知事をしたことのある男だが、少しも役人くさくない。少し間は拔けてゐるが、熱があつて、誰にも愛される。黨內の「大臣級」で敵の一人を持たぬは彼位だらう。鳩山の大臣は、誰いふとなく一致してゐる。あの人柄は書記官長よりも大臣に適してゐよう。義兄鈴木が副總理の內務にすはれば、氣の毒だが振り合上、伴食の文部か司法で我慢して貰ふか。又は鐵道遞信の實務練習所にもつて行くか、木堂の肚はよめぬ。山条は「中堅」以上だが、兎もすると昔、三井で働らいた事を洗ひ立てゝ邪魔する者があるけれど、犬養が彼れ程の熱と力に充ちた男を度外する程ヤソ坊主でもあるまい。

司法大臣は、黨色の薄い者を以てする慣例が田中內閣以前行はれてゐる。で、鵜澤聰明あたりを、貴族院から數へたいのであるが、たとへ、彼が政友會員であるにしても、代議士でないから、政黨內閣主義の木堂は、使はないと思はれる。下手なカモフラージは、木堂の最も嫌ふ僞瞞である筈だ。更に貴族院の研究會あたりから、閣僚や政務官を採つて、殿樣の御氣嫌をうかゞふ懸當は、木堂の到底なし得ない馬鹿〱しさであらう。

陸海軍は、黨の人々が算へ立てる中から適任を選んで見た迄である。

水野錬太郎は、用ふるとすれば朝鮮が一番向いてゐる。大臣の方は落第ずみだ。井上孝哉は溫厚の君子だから黨人にはなり切れぬ。憎まれぬ人で、經歷が內務次官止まりだから、親任官政務總監以下は使へない。代議士をやめて任官して、退いて勅選といふ所だらう。臺灣へ南弘。南はどうしても、政友會內閣が一度は親任官にしなくては義理が立たぬ程、黨の爲めに働らいてゐる。山本悌二郎は落選でもあるし、滿鐵なら滿洲の王樣だ。不服もいへまい。

何れにしても、犬養總理大臣候補者は、組閣の內容に就て絶對無言だ。胸中深く既に組閣を了して、大命降下と共に、一時間にして閣僚名簿を捧呈して、どさくさまぎれの獵官運動を排擊するだらうと傳へる者もある。――一時間はどうか知らぬが時間がのびたら大變なことになる位のことは、木堂ちやんと見拔いてゐよう。

（九月五日）

不景氣は何うなる

馬場恒吾

政友會が政府を取つたならば、現在の不景氣が直るか否か。これが問題の中心である。

然るに政友會が政府を取つたならば、如何なる政策を行はんとするか。それがまだハッキリ判つてゐない。政友會の代議士は地方に行つては金輸出の再禁止をすべしと演説してゐるやうであるが、これは黨として發表した政策ではない。前に政友會內閣の大藏大臣であつた三土忠造氏は金輸出の再禁止に關して『此問題は非常に重大にして、經濟上各方面の事情を考覈すると輕々に論議するを許るさぬ性質のものであるから、先ず金解禁のまゝ進むものと考へて置かねばならぬ』と云つて居る。政友會幹部の中にも、恰かも再禁止を行ふ意志があるかの如く暗示するものがあつた。若し再禁止が政友會の底意であるとすれば、それは日本の政治と經濟に決定的な運命を科するものとして、私は出來得る限り、各方面で其眞僞を確めんとした。併しハッキリした事は判らなかつた。或人は觀測して云つた。犬養總裁は內閣組織の大命を拜すれば、再び高橋是清子に大藏大臣となる事を交渉するであらう。そして高橋子は金輸出禁止論の元祖である。彼れは此議論を民族主義の上に立てゝ居る。卽ち日本人は黃色人種であるから、若し東洋に戰爭でも起らば、白人は黃色人種に金を貸さない。戰爭にならば、先立つものは金だ。だから日本は金を手離す事は出來ぬと、これは最も徹底した非解禁論者である。だから高橋翁を大藏大臣にしたら、再禁止の意志があると見てよいと。

然るに財界主腦部の觀察する所に依ると、高橋も金解禁以前には非解禁論者であつたが、已に一度解禁した後に於ては、再禁止を唱へる程、それほど經濟界の事に無智識ではない。金解禁で財界を動搖せしめ、再禁止で今一度其動搖を繰り返へす事は、日本の經濟が堪へ得る事柄でない。高橋とか三土とか、財界の事情を知つてゐる者が大藏大臣になる限り、再禁止の如き無謀な事は行はれないと。

然らば政友會が再禁止の意志あるかの如く暗示するのは、畢竟するに思はせ振りに過ぎない。腹の底では、再禁止の不可能を承知して居りながら、恰かも再禁止するかの如く匂はせて、世間の人氣を釣らんとしてゐる。若し此觀察が中つて居るとすれば、政友會のする事は罪が深い。

新聞に傳へられる所の政友會の經濟政策は、まだ確定してはゐないが、(一)公債を出して事業を起す、(二)關稅を高くする、(三)五千萬圓程度の減稅をすると云ふのである。所ろで、此等の政策は畢竟するに枝葉の問題である。何となれば、此三つの題目で、今の濱口內閣の政策に比較して、稍異つてゐると見られるのは、公債を出して事業を起すと云ふ點にある。然もそれは程度の差である。今の民政黨內閣ですら、失業救濟の爲めには地方債の發行を許るし必要の場合には中央政府

が公債を出す事をも辭さないと云ふ。其公債で得た金を何に費うかと云へば矢張事業を起すと云ふのである。事業を起す目的が民政黨のは失業救濟、政友會のは景氣恢復と云ふ差はあるが、それは言葉の差であつて、實質は同一物である。

只然し、此公債發行も發行額が非常に違へば實質の差を生ずる。民政黨のは失業公債と稱する故に、如何に多くとも一億か二億に止まるであらう。政友會が幾許の公債を發行する意志で居るか、其具體案は決定もせず、從つて發表もされてゐないが、一億か二億ならば失業緩和にはなるかもしれないが、景氣恢復の援助にはならない。現在の不景氣に對しては、一億二億の事業は燒石に水と云ふのが適評である。若し眞劍に景氣恢復の目的を以て公債政策を取る積りならば、發行する公債は十億若しくは二十億に上らなければならぬ。それ丈けの公債發行が可能であるか、否かは疑問であるが、假りに發行出來るとする。そして盛んに事業を起して中間景氣を煽るとする。其瞬間に物價が上り、輸入が增加し、正貨が流出して、政友會に其決心があると否とに關らず、金輸出再禁止の巳むを得ざるに到る。だから、公債政策は、それを有効に行はんとすれば、金輸出再禁止を覺悟しなければ行はれない。玆に問題は再び元に返つて、政友會は金輸出禁止の腹を決めるか否かと云ふ事に突き當る。

濱口內閣の主要政策は金解禁であつた。政友會が再禁止を主張するならば、玆に政策の劃然たる對立を見る。其外の枝葉末節を議論するのは、言葉の爭いであつて、眞劍の爭いでない。政友會が再禁止の腹を決めない間は、民政黨と政友會と其政策の本質に於て大なる差違はない。民政黨內閣で景氣が恢復しないならば、政友會內閣になつても景氣は恢復しない。少々の公債政策では中間景氣すら六ケ敷い。

政友會に金輸出再禁止の決心があるか、ないかに關しては政友會自身の云ふ所は曖昧模糊だが。決心があつて云はないのか、無くて云はないのか、それすらハッキリしない。吾々は其態度を甚だ慊らなく思ふ。此所に政友會が天下を取り得るか否かの問題が當然起る。

吾々は玆に政友會が天下を取つたならばと云ふ假定の下に議論してゐる。然るに現在の社會狀勢を虛心坦懷に見ると、社會は此不景氣に關聯して民政黨內閣を呪つてゐる、だがそれならば政友會內閣を樹立せよと云ふかと思へば、其叫びは少しも擧らぬ。何處にかまだ政友會內閣を恐れる心持が潛んでゐる。それは何故か。それには外にも原因があるだらうけれども、重要なる原因は政友會が自分の政策を明白に云はないからである。

例へば目下の政治問題になつてゐる樞密院と政府の關係に於てもさうである。政友會は

一體政府をよしとするのか、樞密院をよしとするのか、それが少しも明かでない。政友會は倫敦で調印されたる海軍條約を成立せしめ度いのか、破棄し度いのか。それも明かでない。犬養總裁の談として新聞に出た所を見ると、彼れは、濱口は强い事を云つてゐるが、見て居れ、今に樞密院に頭を下げるからと云つて居る。これは批評としては皮肉であるかもしれぬ。併しこれに依つては、彼れが政府をよしとするか、樞密院をよしとするかゞ、少しも明かにせられて居らぬ。政友會は特別議會の時に海軍條約の締結に對して、大聲疾呼する所があつた。だが併し、結論が條約に贊成なのか、反對なのかゞ明瞭でなかつた。今日に於てもそれが明瞭でない。海軍條約を破棄せよと云ふ說は、蓋し輿論の支持は受けないであらうが、議論としては成立つ。或は又、海軍條約には贊成する。だから、反對黨の政府だけれどもこれ丈けは助けると云ふ議論も成立つ。だから何方でもよい。政友會はどちらかに態度を決定して、それを天下に發表すべきだ。主張を明かにせずして、只模樣を眺めてゐる事は、甚だしく政黨の信用を害する。政權を取る便宜の爲めに、故らに主張を曖昧にしてゐるのだと云ふ所の、惡い印象を世間に與へるからである。

金輸出再禁止に關しても同じ事が云はれる。再禁止の覺悟がなくして大々的公債政策を唱へるのは一種の欺瞞である。何となればそれは再禁止以外の何處にも到着しないからである。再禁止の決心があつて、それを云はぬとすれば、これも亦別種の欺瞞である。何となれば、再禁止を云へは、財界が吃驚して、政友會内閣の成立を阻止する。それ故に、内閣を取るまでは默つてゐて、内閣を取つた後に再禁止をしやうと云ふ筋書と思はれるからだ。

簡單明瞭に云へば、政友會に對する世間の人氣の湧き立つて來ないのは、政友會が何んだか奧齒に物の挾まつたやうな云ひ方をするからである。自分の心を民衆の腹の中に置く。こちらで胸襟を開けば、向ふも胸襟を開く。それが軈て同情となり、支持となり、人氣となる。政友會はどうしてさうしないのか、局外から見ても齒痒く思はれる。

然らば金輸出の再禁止を行つたらどうなるか。爲替は暴落する。或は國際的には日本の經濟的地位が破壞されること、大戰後の獨逸若くは露西亞の如くなるかもしれぬ。そこが恐いか。玆に深刻な問題が潜む。

今の社會通念に依れば、民政黨は金融資本家を擁護し、政友會は産業資本家を擁護する。だから、政友會は爲替を下げて、物價を上げ、そして例令實現しない迄も、景氣をよくすると云つてゐるのだと、から諒解されてゐる。」所ろで、民政黨と政友會をから區別するのは事實に即してゐない。政友會だつて金融資本

ともよく現したもので、女流プロレタリア文壇の逸品である。

中本たか子は度胸百パーセントの女流作家だ。その大膽な猪突性は、時にはアブノーマルな感じをさへ抱かせる。彼女のイデオロギー的成長、といふよりも飛躍は、そのウルトラ・エロチシズムと共に、サーカス的な刺戟と興味とをもつて、讀者、といふよりは見物人をはらはらさせる。それも近頃はあまり見られなくなつたが、どこでどうしてゐるのだらう。


岡田禎子氏

林芙美子は、日本のやうな擦鉢の底のやうな島國では珍らしいジプシー・ガールだ。彼女の「放浪記」はいはゆる「創作」でないかも知れないが——「火の鳥」一派の好きさうな、ビーズかマクラメ的「創作」などは鬼にでもくれつちしまへ！——「創作」以上の魅力をもつてゐる。改造社の叢書の中でも彼女のものが斷然よく賣れるさうであるが、これは一面手藝的文學の「敗北」である


龍膽寺雄氏

と共に、彼女の特異性を實證するものである。

封建的並にブルジョア的社會秩序や家庭生活に對する彼女の大膽な判逆は、今日のやうな過渡期には、或る程度の破壞的な進歩性を具へてゐるが、それも度がすぎて極端なルンペンに墮すると、逆に反動性の方が強くなつて來る。


久野豐彦氏

彼女も「珍らしがられてゐる」間が花だ。日本人は飽き易い。何とかして「女辻潤」にならぬやうに用心する必要がある。

岡田禎子といふ人は、個人的にも知ら

たい、作品もあまり讀んでゐない。しかしいつか「改造」に出たものや、「正子とその職業」中に收められてゐるのを一二篇讀んだ印象に基づいて考へると、女性のアブノーマルな性慾描寫が得意らしい。作品は大部分脚本で、どこか舟橋聖一に似たところがある。もつとも、舟橋ほどの凄味はなくて、女性らしい丸味を帶びてゐる。ひどい駄作もあるが、大體において相當しつかりした表現力と構成力とを持つてゐる。しかし男でも女でも、かうした變態的な題材は比較的劇化し易いが、もつと普遍的な題材と取組んで、果して彼女がどの程度まで成功するか疑問である。

最後に、右に擧げた五人の女流作家の中で、岡田（この人の經歴を僕は知らない）を除いた四人までが、女給出身か、或は女給的な職業についた經驗をもつてゐるのは、甚だ興味のある現象である。これによつて、今日のいはゆる「自覺した女性」の多くがいかなる境遇におかれてゐるか、彼等の「文學」がいかにして生產されるか、また總じて女流作家の作品なるものが今日の社會においていかなる意義を有し、いかなる役割を演じてゐるかを、大體察知することが出來るであらう。



井伏鱒二氏



中村正常氏

四

最後に「藝術派」であるが、今頃殊更に「藝術派」などゝ名乘つて出るのは、少々滑稽で、まるで黑燒屋の本家爭ひのやうな感じを抱かせる。プロレタリア派だつて藝術をつくつてゐる以上は「藝術派」であることに變りはない。殊にそれに「新興」の名を冠するにいたつてはます／＼滑稽で、意義をなさない。少しは身の程を知つて、同派に屬する尾崎士郎のやうに率直に「沒落派」とでもするか、或はせいぜい「最新流行派」ぐらゐに留めるべきである。しかしこの派は、近頃流行のレヴュウの踊り子のやうに多士濟々で、容貌や脚の太さの點で頗る「藝術派ヴアラエテー」に富んでゐることは事實である。

この仲間では、何といつても龍膽寺雄が一番老巧でもあり、實力ももつてゐる。だから同じエロ・ナンセンス物（エロチック・ナンセンスの略）を書いても、そこへらにうよ／＼してゐる俄か仕込のワンサ・ボーイ

のやうにまづくはない。その代りにまた、どんなメーキ・アップをしても、時々自然主義的な古さがちよい／＼裏切つて出る。

久野豐彦は、「藝術派」といふよりはむしろ「錯覺派」とでもいふべき作家だ。彼の書くものは、この間の「新潮合評會」でも話題になつたことだが、よくわからないと云ふ人が「藝術派」の間にさへ少からずある。錯覺を理性で解釋しようとしても、わからないのがほんとうだ。要するに彼は、觀念の異常聯合の上に立つてゐる作家だ。折々奇拔なコンビネーションが出來て、部分的に興味を惹く點もないではないが、彼の作品の綿密や解剖や批判は、むしろ大槻憲次あたりの精神分析マニアのために、殘しておくのが武士の情であらう。



芹澤光治良氏

井伏鱒二の作品は、僕はこれまであまり讀む機會がなかつた。少しばかり讀んだ記憶に基づいて判斷すれば、山の中の泉のやうな、よく澄んだ、どつちかといへば童話的な傾向を帶びた作家だ。いつか林房雄が推賞してゐたが、さういへばこの二人にはどこか共通したところがある。それに川端康成的な、逃避的孤獨癖も少からず加味されてゐる。とにかく彼の作家的態度は頗る消極的ではあるが、透明な一種の獨自的氣圍氣を巧妙に構成しうる人である。それ以上の何者でもなければ、またそれ以下の何者でもない。



堀辰雄氏

中村正常は常にナンセンス派の代表として擧げられる作家である。だが、彼は決して百パーセント・ナンセンス作家ではない。非常に苦心して考へ出したやうな妙な名前の人物が登場するだけで、書いてゐることはちつとも面白くも可笑しくもない。藝術的ナンセンスではなくて、文字通りに無意味な人物と言葉の機械的羅列にすぎない場合が多い。背後から手を廻してわざと擽るやうなところが眼について、むしろ不愉快だ。

芹澤光治良は、彼がもし畫家であつたならば、早速二科會あたりで選ばれさうな作家だ。ブルジョアの客間におかれた林檎のやうな、一

病的な新鮮さをもつてゐる。骨の髓までインテリ臭い作家であるが、そのエキゾチツクな筆致には、若き日の有島武郎を想はせるところがある。一部分開いてみると、まるで飜譯小說を讀むやうな氣がする。近作「我入道」では、幾分プロレタリア的材料を取扱つてゐるが、彼は斷じてプロレタリア作家ではなくて、あくまでサロン作家である。但しサロン作家としては、教養も見識も高く、從つてトピックも豐富でハイカラであるだけに、近頃やつとダンスを習ひ出した自稱モダン作家の上に、斷然頭角を見すときが來るであらう。

堀辰雄もやはりサロン作家である。しかし芹澤に比べればまだ著しく乳臭い。石井柏亭や西村伊作等のブルジョア的新しがり——文化學院的趣味から生れたやうな作品だ。しかも柏亭の油繪や伊作の建築を想はせるといふよりは、彼等の好みに從つてつくりあげられた文化人形——「ピノチオ」の著者を聯想させるやうな、ブルジョア的感受性と早熟性とが特に目につく。川端康成の作品によく見受けるやうな、感覺的にキラリと閃めくやうなところもないではないが、それも健康な青年のもつ感覺ではなくて、やはりブルジョア的感受性と早熟性から生れた、しかも多分に遊戯性を帶びた病的な感覺である。

そのほかいはゆる「藝術派」に屬する新しい作家としては、楢崎勤、吉行エイスケ、舟橋聖一、阿部知二、佐左木俊郎、嘉村礒多等多數ゐるが、すでに豫定の枚數を突破したから、彼等についてはいづれまた別な機會に評論するであらう。

筆を擱くに臨んで一言附言したいことは、彼等「藝術家」にさまざまなメッキ・アップを施して、ブルジョア末期の社會に「華々しく」登場せしめたものは何であるかといふことである。それはいふまでもなく、彼等をリードしてゐるナンセンス的傾向が、たま〳〵指導精神を失つた大多數のインテリゲンチヤのデスパレートな生活感情に投じたのである。然るに、ナンセンス的傾向とは何であるかといふに、健康人の生活にも、甚だしく緊張を缺いた時に發作的に起るところの瞬間的精神病である。しかもこの精神病を慢性化せしめるための阿片的讀物に對する需要が今日急激に增大し、それを意識的に生產しようとするものが續出するにいたつたといふこの事實は、果して何を語るものであらうか？

最近の獨占資本カルテルの活動

鈴木茂三郎

一、恐慌を乘り切らんとする「獨占」資本

「世界的恐慌の波を乘り切らんとして資本主義は必死的な跪きをつゞけてゐる。産業資本、商業資本は勞働者と農民の搾取　强度化によつて、血路を開かんとして狂亂的な努力をつゞけ、金融資本は國家機構と堅く結び付いてかゝる動搖、混亂を通じて全産業と農村の上に支配の覇權を完成しようと、無慈悲的な行程を强行しつゝある。すべてこれらのことは産業合理化といふ資本主義の統一スローガンの下に其の政策を集結して勞働者、農民その他無産大衆の生活を極度に脅やかすと共に、無産大衆のなかに昂る不平、不滿、反抗、鬪爭に彈壓を加へ大衆の政治的自由を暴虐に抑壓しつゝある。

今や無産大衆の生活は餓死線に在る。今や勞働者農民の不平、反抗は、餓死線に沿ふて×××に在る」（九月一日の全國大衆黨「生活防衞鬪爭に關する指令」の一節）

ここに、これを引用せるはその起草にあたつて筆者自からも一寄與を爲せる右の指令は、現段階の状勢を正しく簡潔に說述してゐると考へたからであるが、日本資本主義現段階の特質は、まことに、國家機構と堅く結び付いたところの金融資本が動搖、混亂の恐慌期を通じて全産業と農村の上に無慈悲的な强行によつてその支配を擴大、强化して覇權を完成せんとするところに存する。そのことは、今日、もはや疑ひをさしはさむ餘地がない。我々は産業合理局が、未組織の産業分野に、合同によるトラストを形成せしめて金融資本の支配の下に擬かんとする企てを知つてゐる。金融資本――それは階級的意義を持つ――といふ言葉は、最近はブルジョア・ジャーナリズムの寵兒となつた觀がある。金融資本の權威のもとに拜跪するもの、産業、商業資本の利害の立場から、憎惡、恐怖の對立感情を爆發させるもの、それらは金融資本の流行語をめぐつてヂャーナリズムを賑はしてゐる。

それにもかゝはらず從來、紙面の上に、つとめてこれを默殺し、隱蔽してきた東京朝日、東京日日のうち「東京日日」が九月四日の紙上に「金融資本の戰線統一」といふ報導をかゝげて「朝日」を一歩抜いたので

ある。さうしたことはもはや、これを默殺したり隱蔽したりすることの出來ないほどに、事實があまりにも明瞭になつて來たからであらう。そして覇權を完成せんがための金融資本の戰線の統一は、單なる平和的な統一ではなくて、産業資本、商業資本をぶつ倒し、勞働者、農民の餓死的犧牲を要求する戰鬪的戰線の統一であることも亦、明らかであらう。そして又、「獨占」の段階にある現在、金融資本の統一、統一を通じての制覇が「獨占」資本の「獨占」の形態たるコンチエルンとしての財閥的資本、トラスト、カルテル、シンヂケート、プールを通じて達成されることは必然であつて、従つて現段階の特質は「獨占」の深化過程である。

そこで、さうした高度に集積、集中された「獨占」資本のもとに、現在「獨占」の成立を條件づけてゐるものに從つてこれらを區分すると、法律的獨占、自然的獨占、法律的自然的獨占と異なる經濟的獨占に區分される。法律的獨占には國家資本トラストの一部門たる郵電トラスト、煙草トラストとマツダ電球トラスト、自然的獨占には三菱の錫とタングステン、三井の亞鉛や石炭カルテル、セメント・カルテル、製紙カルテル、製糖カルテル、製鋼カルテル、製麻(亞麻)トラスト等自然的原料を獨占するところのものがある。自然的法律的獨占には、鐵道トラスト、電車、電燈、北洋漁業トラスト、また、それらのいづれでもない二たつの條件から獨立せる經濟的獨占としては、外國資本によるマツチ・トラスト、煉乳トラストのほか、鋼材カルテル、製肥カルテル、紡績カルテル、毛織カルテル、製粉カルテルなどがある。そしてかゝる一切の條件をそなへ、かゝる一切の「獨占」を統一、支配するものが、數個の財閥的コンチエルンである。

かくの如き「獨占」のうち、財閥的コンチエルンによつて直接的に指導される「獨占」カルテルこそは、「獨占」の深化過程に於ける當面の最も重要なる「獨占」であつて、それは現實的に無慈悲的行程を最も果敢に强行しつゝある「獨占」資本である。

二、重工業に於ける「獨占」カルテル

(一)金屬産業の「獨占」。わが金屬産業は國家資本による八幡製鐵トラストの支配と從屬のもとにある。トラストの支配と從屬のもとにあると言つても、國家機構を通じておこなはれる支配關係から言へば國家資本は財閥的金融資本の支配下に、從屬するもので、斷じて獨立的な存在ではあり得ない。そして金屬産業のうちの重要なるものの多くは、財閥的資本の直營産業である關係上、之れらの金屬産業が製鐵トラストへ依存することは、財閥的金融資本と國家資本との結合の發展段階を指示することである。

金屬産業（鋼を除く）の財閥資本支配

三井財閥＝三井鑛山、日本製鋼、釜石鑛山、
三菱財閥＝三菱鑛山、三菱製鐵、東京鋼材、
淺野財閥＝日本鋼管（大川系）淺野造船、淺野小倉、
久原財閥＝大阪鐵工、
大倉財閥＝大倉鑛業、
澁澤財閥＝富士製鋼、
國家資本＝八幡製鐵所、滿鐵、神戸製鋼（臺銀系）川崎造船、

さうした關係にある八幡の製鐵トラストの生産は、全生産の銑鐵に於て五割九分、鋼鐵に於て四割八分を占めてゐる。だからこそ、組織されては崩れ、崩れては再建されてきたあらゆる金屬カルテルは、八幡を樞軸として展開されたのであつたが、その八幡の製鐵トラストも七月から五割乃至一割の操短を開始したのである。これに從屬するもろ〳〵の金屬資本は、すでにトラストに先行して、カルテルの結成、强化に努力しつゝあつた。努力は鋼材の品種別による小グループの結成に向けられたのである。

▲薄板カルテル、（昭和五年八月成立）加盟五社、八幡製鐵トラスト（二〇）、川崎造船（九〇）、日本鋼業（三）、德山鐵板（七）、中山鐵板（一六）、生産と販賣の統制をなす（括弧内は月産割當て比率を示す單位千トン）
▲耳付鋼板、參加會社、四社、製鐵トラスト　川崎造船、淺野造船、シャリング會社、未だ結成するに到らない。
▲アングル、參加會社八社、日本鋼管、釜石鑛山、富士製鋼、神戸製鋼、大阪製鐵、淺野小倉、住友伸銅、東海鋼業、不成立にをはつて自由操短に決す。
▲鋼材聯合會、（創立、昭和四年四月）これは丸鋼のカルテルで品種別の小グループ結成の方向と一致するもので、すでに年餘の歴史がある。加盟會社、日本鋼管（二二・〇七）、釜石鑛山（二〇・八六）、富士製鋼（一二・二四）、神戸製鋼（一四・八六）、大阪製鐵（一六・二二）、淺野小倉（一三・七五）、（括弧内は現在の生産割當高、單位千トン）

(1)生産制限

	制限率	
昭和四年六月——四年一二月	——	年産二六〇千トン
五年一月——五年　五月	三割	同　一八二千トン
五年六月——	四割	自發制限一割擴張
五年七月——現在	五割	年産一三〇千トン

(2)丸鋼販賣協定、關東三社には關東鋼材共販組合がつくられてゐるが昭和五年四月、關東、關西に區分してプール成立、
かくの如き鋼材の品種別に從つて小グループに結合しつゝあるものを、これを促進、助長しつゝ一とつの製鋼カルテルに集中的結合せしめんと意圖するものが製鋼懇話會である（創立、大正一一年一一月）製鋼懇話會は淺野と川崎の對立のために、さきには生産制限に失敗し現在は製鐵トラストからのビレットの共同購入、分配をおこなふにすぎないが、最近は集中方向へ努力しつゝある。

具體的手段は

(1) 製鐵トラストを含む製鋼カルテルを組織し、カルテル内にてトラストと民間資本との生産の品種分野並に操短を行ふ。

(2) 大部分は製鐵トラストの出資に基く製鋼カルテルの販賣會社——資本金一千五百萬圓——を設立する。

と言ふにある。トラストへの依存、從屬の關係を深めるにある。

金屬産業カルテルには、このほか銑鐵共同販賣組合と日本産銅組合がある。

▲銑鐵共同販賣組合(創立大正一五年七月)は原料銑鐵を消費する製鋼資本側の銑鐵共同購買組合と表裏する存在である。これは製鐵合同を企圖した鐵工協議會(大正一四年一二月)から變質、發展したもので、表裏する二たつの賣買組合は、腹合はせの密接な關係が結ばれてあると同時に——組合員外には原料銑鐵を賣らないといふ——また背なか合はせに對立した利害がある。

加盟會社五社、日本製鋼、釜石鑛山、大倉鑛業、滿鐵、三菱製鐵、

そして、この製鐵カルテルの當面の重要な目標は、印度銑鐵を驅逐することにある。そして又、これは次ぎ×××を準備しつゝある金融資本の目標である。

製鐵カルテルは、最近重要な發表をなした。それは「昭和五年度にはカルテルの増産高と八幡トラストへの供給減額をあはせて、銑鐵の市場供給力は三〇萬トンに達し、原料銑鐵の獨立は確保された」と、本溪湖の鎔鑛爐一基の火を落としたといふことはあるにしても、まことに、これは重大なる宣言でなければならぬ。

製鐵カルテル産出力(千トン)

	昭和四年	五年度
輪西(日本製鋼)	一一〇	一一〇
釜石(釜石鑛山)	八五	一四五
兼二浦(三菱製鐵)	一五七	一五七
本溪湖(大倉鑛山)	八四	一一〇
鞍山(滿鐵)	二三〇	二八〇
計	六六六	八〇二
増産高		一三六

▲日本産銅組合(水曜會)(創立大正九年六月)銅は大正六年が頂點である。大正一一年以來百斤七圓といふ高率の關稅障壁を設けて保護されてゐるが、米銅のために市場を強力に支配されてゐる。

	生産高	輸入高	輸出高
大正六年	一二三、三八四トン	一四、〇八一	七一、〇五二
昭和二年	六二、四六〇	九、六三七	七六
三年	六五、一七四	一五、〇四〇	一三五
四年	七五、八〇〇	——	八、二〇〇

大正九年古河、住友、藤田、久原、三菱の五社によつてカルテルを

組織したが、住友が退脫したので現在は四社で水曜會を形成しつつ、米銅と住友に對抗してゐる。水曜會の活動は秘密にされてゐるが、生産の制限と市價の維持が主目的である。

　そして藤田鑛業を除けば、水曜會カルテルの古河、久原(日本鑛業)三菱とカルテルとの對立する住友も、銅の加工製品を生産する一貫作業をなしてゐる。

粗銅會社　　　　同一資本の加工會社

古河鑛業(二千二百萬圓)—日本電線(二〇〇〇)日本伸銅(三〇〇〇)富士電機(一〇〇〇〇)古河電氣(二〇〇〇〇)
日本鑛業(五千萬圓)—日立製作所(一〇〇〇〇)
三菱鑛業(一億圓)—三菱電機(一五〇〇〇)
住友銅山(千五百萬圓)—住友電線(一〇〇〇〇)住友伸銅(一五〇〇〇)藤倉電線(五〇〇〇)

(二)石炭鑛業聯合會(創立大正一〇年五月)全國の石炭會社、又は個人的石炭資本の九〇パーセントは石炭カルテルに加盟してゐる。重要炭田の各地方にはそれぞれ地方組織があつてカルテルはこれらの地方組織の聯合體である。聯合體の本部を構成する評議員會社が石炭カルテルの主體勢力である。

▲筑豐炭田——筑豐石炭鑛業組合
三井鑛山　三菱鑛業　住友炭礦　古河鑛業　大正鑛業(古河系)　貝島鑛業　大辻岩屋(貝島系)　藏内鑛業　三好鑛業　麻生商店　明治鑛業(安川系)　飯塚鑛業　久恒鑛業　大隈鑛業　宮尾炭礦　平山炭礦

▲北海道炭田—北海道石炭鑛業會
三井鑛山　北海道炭汽(三井系)　太平洋炭礦(三井系)　三菱鑛業　雄別炭礦(三菱系)　住友炭礦　大倉鑛業

▲常磐炭田—常磐石炭鑛業會
大倉鑛業　入山採炭(大倉系)　古川鑛業　磐城炭礦(淺野系)　大日本炭礦(三井系)　福島炭礦

▲佐賀炭田—佐賀鑛業會
三菱鑛業　杵島炭礦　大辻岩屋　古川鑛業

▲宇部炭田—宇部鑛業組合
大倉鑛業　沖ノ山炭礦　藤本閑作　高良宗七

▲糟屋炭田—糟屋鑛業會
明治鑛業　日本鑛業(久原系)　早良鑛業(三井系)

▲其他地方—會社單位加盟聯合會直屬
松島炭鑛(三井系)　九州炭汽(三菱系)　基隆炭礦(三井系)　臺灣炭礦(三井系)　遼陽鑛業(三井系)　南滿州鐵道(撫順炭坑)　山東鑛業(滿鐵大倉系)

　これらの炭田地方の地方組合に所屬する石炭會社の送炭高は、全送炭高の九四パーセントで、次表のやうに大正一四年の九六パーセントに比べて減退する傾向はある。即ちカルテル外の産炭が擴大する譯だが、完全カルテルだと言つて好い。何故なら製鐵所の二瀬、鹿町、稻築炭礦や海軍の新原炭礦などが、カルテル外に置かれるからである。

石炭カルテルの送炭比率

	全國送炭高	カルテル産高	比率%
大正一四	二五、七五七千噸	二四、八〇〇	九六・二八
昭和　元	二六、二三四	二五、一三二	九五・七九
二	二七、五八八	二六、四三七	九五・八二
三	二七、五三七	二六、三七一	九五・七六
四	二八、〇六九	二六、四五三	九四・一七

そしてカルテルの顧問は三井財閥の團琢磨、三井財閥の木村久壽彌太、他石賀で、理事には三井鑛山、三菱鑛業のほか古河、淺野 大倉、住友、貝島の代表が選出されてゐることによつても明らかなるやうに、カルテルはこれらの片手ほどの少數な財閥資本の手に握られてゐる。

こゝに石炭カルテルの機關誌「石炭時報」がある。「時報」には幸ひにして全國重要炭山七〇炭礦の昭和四年度の産炭高が記載されてゐるこれをとつてみると、カルテルのなかに占めるこれら財閥資本の支配力がはつきりとわかる。それによると次表のやうにカルテルの送炭高に對して、三井財閥は三割五分、三菱財閥は二割四厘、貝島は七分六厘、安川は五分、この四つの財閥だけですでに九割九分の絶對數を獨占してゐるのである。

	石炭會社	重要炭礦(數)	出炭高(千噸)
三井財閥	七社	一七	九、三三二
三菱財閥	四社	一一	五、四一二
貝島財閥	二社	三	二、〇三〇
安川財閥	一社	五	一、三八五
古河財閥	二社	四	一、一四八
大倉財閥	二社	四	一、一三二
住友財閥	一社	四	一、〇一五
麻生財閥	一社	三	八二四
淺野財閥	一社	一	九二九
藏内財閥	一社	三	七〇八

石炭カルテルの採炭制限の過程は次ぎのやうである。常磐炭田には大倉、磐城、三井、入山、古河、大日本、福島七社によつて常磐木曜會が組織され、常磐炭田の操短を獨立的にもおこなつてゐる。

		操短率
第一〇回	四年四月―四年五月	二七二〇萬トンの五分制限
第一一回	四年六月―四年九月	五分擴張即ち一割操短
第一二回	四年一〇月―五年四月	年産二六四二萬一千三百トンを基準とする五分操短即ち二五一〇トンとす、
第一三回	五年五月―五年一二月	操短を五分擴張し一割とす。

(三)日本セメント同業會(創立大正一三年一〇月)セメント・カルテルのもとに結成するものは一五社である。

▲淺野系

	資本金(千圓)	拂込金(千圓)	主要工場
淺野セメント	一〇六、三一〇	五三、九九〇	東京市門司(山口)上磯(北海道)川崎市高雄市大阪市

秩父セメント	一〇、〇〇〇	四、七五〇	秩父（埼玉）
日本セメント	一〇、〇〇〇	五、六八七	八代（熊本）佐伯（大分）
▲三井系			
小野田セメント	三一、〇〇〇	一九、四七五	小野田（山口）大連平壤名古屋川内（朝鮮）八幡（福岡）
電氣化學	二八、〇〇〇	一七、五〇〇（四〇〇）	大牟田市
大分セメント	一一、〇六〇	八、五二二	徳浦津久見（大分）由良（和歌山）大船渡（岩手）
▲三菱系			
磐城セメント	一〇、七〇〇	九、〇六二	東京市湊（青森）四倉（福島）
日本窒素	四五、〇〇〇	二七、七五〇（五〇〇）	水俣（熊本）
▲其他			
豐國セメント	七、五〇〇	七、五〇〇	名古屋市門司（福岡）
土佐セメント	一〇、〇〇〇	六、四〇〇	高知市
大阪窯業	五、〇〇〇	四、五〇〇	大阪市
七尾セメント	五、〇〇〇	二、七五〇	七尾（石川）
宇部セメント	七、〇〇〇	五、〇七五	宇部（山口）
三河セメント	一、〇〇〇	六五〇	田原（愛知）
常陸セメント	七五〇	四五〇	助川（茨城）

備考、括弧内は兼營産業のセメント投資額

三井と淺野の財閥資本がずば拔けて優越的位置にある。さうであればあるほど小ひさいセメント産業資本との對立は必然にするどさが加はるのである。

輸出は全生産に對して一昨年の一割強から昨年は九分に一割を割つたのである。內地の消費比率は小口需要が三割〇四厘、建築用二割二分鐵道用一割三分六厘、發電用一割一分九厘、土木用九分一厘であつて、用途から言つても市場の狹隘化は免れ難い。セメント資本を擁護せんとして失業救濟を呼稱する土木工事をいかに政府がおこしたからとて、建築、發電、小口、鐵道の工事をふるひおこすことは出來ない。關東に五日會、關西に七日會といふ販賣協定機關があるが、市場は一とたまりもなく崩れたので、さうなると對立は更らに激化せざるを得ない。本年になつてからでも共販會社案、プール案、五社聯盟といふやうに市場統制案をめぐつて抗爭を續け、小野田、淺野の二社に市價と限產に關する絕對統制權を委ねたのであるが、一ヶ月半で內部崩壞を遂げて七月一日からは一般自由操短に復歸したものである。

財閥資本はつひにセメント・カルテルを指導し得ないのである。そして今や五割三分三厘の最高率の操短をおこなつてゐる。

セメント操短率の深化

第一〇回	四年一二月—五年二月	三割八分特別操短一〇萬樽
第一一回	五年三月—五年五月	四割五分普通四割三月は特別操短一割五分増
第一二回	五年六月—五年八月	五割一分五厘
第一三回	五年七月—五年八月	改正五割六分七厘、小野田淺野

第一四回　五年九月―五年一一月	兩社統制權を辭す 五割三分二厘、自然消滅したる補充生産の分三分五厘が控除さる一貫作業休轉を認む

三、輕工業に於ける「獨占」カルテル

（一）大日本紡績聯合會（創立明治一五年）――これは古典的な史的發展を遂げたもので紡績カルテルとして强大なる組織體である。

カルテルの「獨占」段階

	社數	工場數	錘數（千錘）	織機（千臺）
協定會社	五九	二四七	六、六四八	七三
協定外會社	一一	一一	一八七	四
比率	・一八六四	・〇四四五	・〇二八一	・〇五四七

紡績カルテルは吹けばとぶやうな弱小會社十一社を協定外に從屬させた完全カルテルであつて、六大會社がカルテルの支配勢力である。

六大會社の生産設備（錘數）は全カルテルの五割一分九厘、生産高は四割九分一厘を占めてゐる。六大會社は産業資本の代表的な存在であつて、金融資本と産業資本との鋭い對立即ち金融資本の産業支配の過程のうちに、多くの産業資本は古木の倒れるやうにぶつ倒されたのであるが、彼等のみは金融資本の成熟するに先立つて、剩餘利潤を蓄積しつゝ抜き難い基礎を、紡績産業の上にがつちりと据ゑてゐたからこそ、今日の存在がある。

然し、今や金融資本の嵐は吹き荒れてゐる。六大會社の流通手形で一流物として、大手をふつて金融資本の關門を通過し得るものは少ない。

富士瓦斯の如きは、金融資本の手中にまさに引き倒されんとする古木の風情がある。

或は金融資本の附け入る搦手を窺へば、原料棉花の四割を供給するものは、國家資本トラストの正金系の日本棉花、三井財閥資本の東洋棉花であつて生産の助成材たる原料棉花を通じて、小中紡績の多くが支配されてゆくやうに、金融資本の支配はこゝからも六大會社に及ばんとしてゐるのである。

紡績産業資本は果してよく、戰ひ得るであらうか。

六大會社の生産力

	錘數	半期生産高（四年下期）
大日本紡績	七〇九（千錘）	一四九
東洋紡績	七八〇	一九八
合同紡績	四三六	一〇七
鐘淵紡績	六三三	一一九
富士瓦斯	四七八	七五

日清紡績	四一七	六二
合　計	三、四五三	七一〇
加盟會社總計	六、六四八	一、四四四
比　率	・五一九四	・四九一六

かく六大會社の支配する紡績カルテルのなかにも、激化しゆく資本の對立がある。六大會社に對する小、中、紡績資本の對立などはその一つであつて、無配當會社が一五社、二萬錘內外の小紡績が一六社、無配當會社はカルテルの全生產力の七分、小紡績の全生產力は、大日本紡績の神崎工場よりやゝ大きいくらひのもので、これらは紡績午饗會を組織して、操短に特例を要求するなど怖れむ可き小紡績の存在を主張するのである。

午饗會に參加する小紡績

	工場數	錘數(千錘)		工場數	(千錘)
天滿紡績	一	一五	和歌山染	一	九
山本紡績	一	四	松太綿布	一	一六
小津武林	一	二〇	正　織	一	五
大和田	二	二三	福山撚絲	二	四
北泉紡績	一	一〇	山積紡績	一	五
和泉織物	一	一三	平田製綱	一	一四
寺田紡績	一	一三	川越紡績	一	二一
貝塚紡績	一	一〇	佐野紡績	一	二〇

細番手と太糸、綿糸と綿布、兼營產業の品種等の、いづれに生產の主力をそゝぐか、言ひ換へると現實的生產資本の活動方向によつて、對立した利害が生ずるのである。

かうした對立を內包しつゝ、紡績カルテルは獨占利潤を防衛するために、操短又操短、カルテルは歷史的な操短の記錄をつくりあげてきたのである。

昨年の七月に再開され、現在の深化された操短による紡績勞働者の失業は二萬八千人に及んでゐる。かくして操短により糸價の暴落を喰ひとめんとすることは、一面に於て、紡績カルテルの織布生產に對する强大なる對立物たる地方產業の織布工場に高い原料綿糸を供給してこれらを行き詰らせやうとするカルテルの意力がかうしたところにも動いてゐることが注意されねばならぬのである。

現在地方的な織布工場はすさまじく吹き荒らされてゐる。

最近の紡績操短

	昭和四年七月—五年一月	撤廢
第一七回	昭和五年二月—五年六月	一割及一ヶ月二晝夜休業（一割七分二厘）休錘は工場別たるを要せず、三萬錘及七萬錘以下の會社に緩和す
第一八回	五年六月—現在	更らに二割七分二厘に擴張す、七、八月は更らに自由操短を擴張す

…的解剖暴露

第四册 （第三卷第一册）

（二）絹紡、人絹、モスの「獨占」

生糸は蠶糸中央會の指導のもとに、全國的二割操短を斷行しつゝあるが、市場と製糸工場に對する統制力を喪失し、製糸産業は今や操短と休業の全國的氾濫がおこつたのである。斯く、生糸に對するほどの爆破力はないが、生糸製品に代位しつゝある絹糸、人絹、毛織の生産と市場も、かうした暴風に襲はれつゝある。

▲絹紡工業會（創立、昭和二年）――加盟社（一二社）

會社名	絹絲錘數	紬絲錘數	會社名	絹絲錘數	紬絲錘數
富士瓦斯	七七、九三〇	一九、六五六	鐘淵紡績	六三、三六〇	一〇、七二四
大日紡績	四七、三三〇	六、三九〇	東洋紡績	四〇、五五六	九、二四〇
日東紡績	二三、二〇〇	三、一八〇	關東紡績	六、八〇〇	八四〇
日本絹絲	九、九〇〇	一、〇八〇	日本絹綿	三三、二〇〇	二、〇一六
日本絹織	二三、四〇〇	一、三三〇	近江絹絲	五、七〇〇	―
信濃絹絲	三、〇〇〇	―	上州絹絲	三、〇〇〇	―

昨年市場が崩れ始めるや、年末から操短を開始した。操短の深度は深まりつゝある。

	期間	繰短率	除外例
第四回	昭和四年一二月―五年六月	一割二分	自家用原絲は四分輸出向きは除外す
第五回	五年六月―五年七月	二割	一割二分の外二晝夜休業
第六回	五年八月―五年一二月	三割五分	自家用原絲は七分（三七萬錘のうち自家用一〇萬錘）

▲人絹聯合會（創立、昭和三年七月）――新興産業としての人絹は世界的な「人絹時代」を創造せしめたが人絹も到底、世界恐慌から安全であることは出來なかつた。わが人絹も「一五〇B」品は、昨年初の二百十三圓から年末には百三十圓に三割九分暴落したが、わが人絹カルテルを支配する臺銀、藤本系の帝國人絹、フェライニングテ・グランツシュトッフ・アー・ゲーの技術と日棉系資本の結合する旭絹織、三井財閥東洋レイヨン、東洋紡系の昭和レイヨン、大日本紡系の日本レイヨンなどの市價協定の破棄が暴落を助長したことは言ふまでもない。

そこで、カルテル組織は強化された。

	期間	繰短率	除外例
第一回	昭和四年一二月―五年六月	五分	―
第二回	五年七月―五年九月	二割	義務輸出二割
第三回	五年九月―五年一一月	同	同

操短を輸出に振り向けるといふ斯うした國際市場への進出は、外國資本との競爭、對立と國際市場から受ける波動のなかへわが人絹カルテルを馳り立てゝゆくは必然である。

▲羊毛工業會（創立、大正九年）モスリン・カルテルであつて二つの大きな矛盾を孕んだまゝモス資本十一社を結成してきたが昭和四年一月操短協定は内部崩壞をとげたのである。

二つの大きな矛盾とは協定外に二〇社に及ぶモス資本をのこしたこと、日本毛織と其他との激化された對立をカルテルの内部へ持ち込んだことである。

日毛はまもなく同一のモス資本を引きつれて協定を脱退したが、日毛は合同毛織、東洋モスの工場貸借によつてカルテル生産の八割にあたる生産力をもつたので、そこで本年七月羊毛工業會は更生されたのである。即ち日毛資本を中心とする更生――一九社、船舶、原料商等の決議權なき準構成員を含む――であつて日毛は悠々として理事長の椅子に就いた。

理事會社、伊丹製絨、新興毛織（舊合同）東京モス、東洋モス、中央毛糸、栗原紡織、日本毛織、大阪毛織

モスの閑散期に向つて更生せるモスカルテルは、徹底せる操短決行の必要に促迫されてゐる。

▲ラミー紡織聯合會（創立、昭和四年八月）日華紡織、東洋麻糸、第一ラミー、東京麻絲の四社參加す、

操短　昭和四年一二月―現在　三割

四、化學產業に於ける「獨占」カルテル

（一）「肥料の公平なる分配」の重要性に對して、民衆は無智なほど無關心でゐるが、金融資本はこれが重大性を認識してゐる。

「肥料の公平なる分配」は、

(1) 現在進行しつゝあるが如く、肥料の配給網を通じて金融資本のもとに農村を支配し得る。

(2) 製肥產業は同時に爆發藥、煙幕、毒ガスなどの軍需品產業で、「公平な分配」によつて製肥產業の發達することは、同時に軍需品產業の規模の擴大である。

といふ重大性を、金融資本ははつきりと認識してゐる。

製肥產業には豆粕、硫安、過燐酸とあつて、豆粕は滿洲の獨占生產だが、過燐酸はカルテルからトラストへ、硫安はカルテル化の過程にある。

▲過燐酸同業會（創立、大正一一年）

カルテル加盟會社

	資本金（萬圓）	昭和五年上期生產高（千貫）		資本金（萬圓）	昭和五年上期生產高（千貫）
大日本人肥	三、六二五	五二、〇二四	日本硫曹	五〇	二、七六一
日東硫肥（人肥系）	二〇〇	五、四四五	新潟硫酸	二〇〇	五、〇七四
大阪アルカリ（同）	一五五五	五、八二〇	ラサ燐礦	七五〇	三、一一九
帝國人造（同）	五〇	二、七九九	東洋人造	―	二、三五九
臺灣肥料（同）	一〇〇	八四八	大阪グアノ	―	四、二四四
神島人造（同）	五〇	五、八四七	特許肥料	―	―

カルテル外對立會社

住友製肥　三〇〇　九、九七八
多木製肥　一〇〇　三、八七四

カルテルの對立資本の生産は、カルテルの二割九分であるが、住友が昭和二年一〇月操短を破棄して脱退してからカルテルは大川田中の人肥系資本の支配下に置かれ、今や産業合理局を通じて十一社の合同即ち人肥系の製肥トラストが形成されやうとしてゐる。

昭和二年一〇月――　操短破棄さる、
昭和五年一月―五年六月　三割　過燐酸として
　五年七月―現在　三割　同

▲「硫安」販賣カルテル、過燐酸は原料――アンガウル島――と生産が國内資本によつて統一されてゐるが、その他は外國資本との依存關係が深いのである。

肥料＝國別――「生産」資本圏…………輸入商
豆粕＝滿州――三井其他製油資本…………三井物産
硫安―┬英國―アイ・シー・アイ・トラスト………プラナー・モント
　　　└獨逸―イー・ゲー・トラスト………アーレンス
硫酸加里――獨逸―イー・ゲー・トラスト………カールローガー
　　　┬佛國…………三井、三菱
　　　└米國(聯化加里)………三井其他
硝石＝智利＝米國グツゲンハイム・トラスト……三井、三菱

「今日は肥料、明日は爆發藥」の生産設備たり得る硫酸アムモニア(硫安)を原料とする窒素肥料産業が、外國資本に依存しなければならぬことは、次ぎの××を××するものにとつてはまさに××に値ひする。そこで窒素産業が不景氣風を蹴飛ばしてまきおこされた。政府が買ひとつたハーバー法特許は、三井財閥が「お買ひ申して」次ぎのやうな形態で特許による獨占利潤をあげてゐる。

東洋窒素(三井)―ハーバー法特許―┬ファーザー式―大日本人肥
　　　　　　　　　　　　　　　　├エヌ・イー・シー式―住友
　　　　　　　　　　　　　　　　└クロード式―三井鑛山

そして又、一般的方法による硫安産業は、英、獨トラストの硫安ダンピング――昨年でさへ六回値下げした――の暴風を突いて、日本窒素(三菱)は朝鮮に朝鮮窒素をおこし「味の素」鈴木の昭和肥料と八幡製鐵トラストの洞岡工場は、最近、渦巻く市場へ硫安をはじめておくり出して來た。

かくして勃興せる硫安産業の王座的位置にあるは三井と三菱であつて、兩社は昭和四年に石灰窒素の共販を確立し、昭和五年一月混戦市場たる九州に硫安の市價協定を遂げたが、この販賣カルテルの硫安生産は全生産の八〇パーセントである。

	日本窒素(三菱) 生產設備(千トン)	日本窒素(三菱) 生產高(千トン)	電氣化學 生產設備(千トン)	電氣化學 生產高(千トン)
昭和元年	二〇〇	七一	—	四二
二年	二四〇	八三	—	五〇
三年	二五〇	一二五	一四八	一〇六

(二)大日本製紙聯合會——は王子、富士、樺太、三菱、北越、日本紙業、日本製紙、西野、乾製紙、の九社によつて結成されてゐるが、三井財閥の王子製紙と三井資本の支配に轉化されつゝある富士製紙の生產力は製紙カルテルの六〇パーセンを占める絶大な勢力がある。

カルテルの統制のもとに、新聞用紙の販賣トラストと原料のパルプトラストがある。このトラストを通じて、新聞產業資本の管理と言論に關與したり、全國に群生する小資本製紙の支配に參與したりする。

だが、トラストに對する脅威は、米國の新聞用紙とカナダ・パルプの輸入による外國の製紙資本との抗爭であつて、ザラ紙は根津嘉一郎の「國民」が米國用紙を使用するだけだが、カナダ・パルプのダンピングには惱まされるので、輸入をカルテルの意のまゝに調節するためにブリテイシ・コロンビアのパルプ販賣獨占權を東洋商會から、まきあげやうとしたが、つひに奏効しなかつたやうである。

洋紙操短表

		印刷紙	模造紙	新聞紙
第八回	昭和四年五月—四年七月	二割	二割	自由
第九回	四年八月—四年一一月	二割五分	二割五分	一割
第一〇回	四年一二月—現在	三割五分	三割五分	一割

備考、板紙は昭和二年度より引續き二割操短、

▲共同洋紙株式會社(資本四〇〇萬圓)明治三四年共同用紙會社より大正一四年六月現在に至る、イ、富士製紙、王子製紙、樺太工業を主力とし全生產の九割を占め、殘餘の一割は協定外の北越製紙が產出する。ロ、新聞用紙の價格並に生產協定を目的とする。

▲共同パルプ會社(資本金三百萬圓)大正十一年創立さる。イ、製紙原料パルプの販賣、生產カルテルである。ロ、製紙會社の持株は、王子製紙二六八〇〇株、富士製紙六〇〇〇株、樺太工業九六〇〇株、鴨綠江製紙三六〇〇株の割合である。

▲日本板紙聯合會。最も古い歴史を有する。西南役の頃おこり、板紙販賣會社、日本洋紙會社、共同販賣所等カルテルは倒れたりおこつたりして、大正十四年九月現在のものが成立した。イ、參加會社、日本製紙、北國製紙、岡山製紙、西成製紙、加賀製紙、高崎板紙、中津板紙、立山製紙、富士製紙、伏木板紙、西肥板紙、美作製紙、新川製紙、廣島製紙、日華製紙、日本紙業のほかその群小會社を參加せしめて七十余社を包括した完全カルテルである。ハ、板紙の輸出奬勵、生產、價格協定を目的とする。二、現在の秘密覺書によれば、過剩を二割と算定し、自發的休轉に對し一トン十五圓を補給し各社相互に監視人を特派して抄紙機の封印をなす等、紳士協定又は罰金制度に一歩をすすめたものである。

(三)晒粉聯合會(創立大正九年一月)——曹達晒粉同業會が生れて次いでカルテル聯合がつくられたのである。大正一一年六月操短準が

六割五分にまで擴張されたので協定は崩壞したが、大正一四年再建されて以來平均四割の操短をつづけてゐる。

		操短率			操短率
第一四回	昭和四年七月—四年九月	一割五分	第一五回	四年一〇月—五年一月	一割五分
第一六回	五年二月—	二割	第一七回	五年三月	三割
第一八回	五年四月	三割五分	第一九回	五年五月	四割
第二〇回	五年六月	四割五分		現在	四割五分

(四)硬化油販賣カルテル——硬化油の支配的勢力をもつ合同油脂と旭電化との間には販賣協定が成立してゐる。産業合理局は、これに大阪酸水素、日本曹達、山桝硬化油、ベルペット石鹸を合同せしめて硬化油トラストを組織させやうとしてゐる。

五、食糖産業に於ける「獨占」カルテル

(一)糖業聯合會——大日本製糖が昭和二年末に朝鮮産糖を密輸入して砂糖カルテルに爆彈を投じたやうなことはおこつたが、歴史が古いだけに、また、國際商品として外國資本の壓迫が強いだけに、カルテルの結成力は固い。

日糖、臺灣、明治、昭和のやうな精糖會社資本と新高、帝國、臺南新興のやうな粗糖會社資本との對立もかもされるが、鹽水港の窮乏化や東洋製糖の沒落や、さうした大きな産業資本でさへ、容赦なくぶつ倒されてゆくやうに、日糖、明治(三菱)臺灣(三井)の精糖資本が有無を言はさないで締めあげていつてゐる。

昨年一月明治商店(明糖)阿部幸(鹽水港)三井物産(臺灣)の商業資本とそれぞれの産業資本との間に販賣協定が成立したが、本年はこれに日糖とその商務部と、帝國、新高が參加して砂糖市場に對する販賣カルテルの支配力は著るしく強まつたのである。

五年度の協定産糖高は一千三百十七萬八千ピクルと決した。

昭和四年度の産糖協定額と實收額(千ピコル)

	協定額	實收數量		協定額	實收數量
×臺南製糖(三井)	三、〇八〇	三、九八〇	×明治製糖(三菱)	二、五四〇	二、六一三
大日本製糖(藤山)	三、三三〇	二、五五五	×鹽水港	一、六五〇	一、七八八
×帝國製糖	一、一五〇	一、三三六	×新高製糖(日糖)	五一九	五二一
新興製糖	一三〇	一三三	新竹製糖	三六	六〇
臺東製糖	四九	六一	砂糖製糖(臺灣)	七一	七三
昭和製糖	三三〇	三二四	臺南製糖		一六

備考、×印は、副産物たる酒精の酒精協定を組織(外に南部酒精を加ふ)してゐる。五年度は内地供給量を二割五分增加して八萬五千石を決定した。

(二)製粉共販組合(創立、昭和五年三月)——製粉産業は大正一三年七社を結成して製粉聯合會をつくり大正一五年六月から平均四割の限産協定をおこなつたそ〻まではよかつたが、昭和三年、日本、三井系し

日清の對立が激化して限産協定が破れ、兩社の賣値協定が破れ、つひに製粉カルテルは爆破された。

處が日本、日清、三井物産によつて強固な販賣カルテルが成つたのである。三井財閥の資本が對立せる兩社をくくし上げたのである。

この百パーセントの三井財閥資本の販賣カルテルの生産設備は製粉資本七社の八七パーセントを獨占する紛もなき製粉トラストである。

	生産能力(バーレル)	生産高(四年上期)
日本製粉	一七、六〇〇	七、七〇〇千袋
日清製粉	二〇、一〇〇	八、七〇〇
計	三七、七〇〇	一六、四〇〇

(三) ビール協定——價格協定は成立したり破壞されたりして來たが昭和四年一〇月「特別賣出しをしないこと」といふさうした協定さえ破れて、需要期節を戰ひ抜いたから、現在、協定が準備されてゐる。

(數字は昨年度査定額を示す)

大日本ビール	四八八千石	キリンビール	二四六
ビール鑛泉	九二	サクラビール	六一
新カスケード	一八		

(四) 漁業カルテル——北洋に於て鮭の生産領海を獨占する露領水産組合も、國家を直接的な背景とする三菱財閥資本に指導される漁業カルテルである。また、その陸上工場と工船に生産される鮭罐詰産業は、販賣カルテル——共販會社——の成立によつて三菱資本の優位が決定的となつた。三井財閥の資本はみごとに北洋漁業から敗退したやうである。

三菱支配共販會社
- 日本工船—株式の六〇%共同漁業三〇%北海拓殖
- 富山工船—共同漁業系
- 昭和工船—株式の六〇%共同漁業、三〇%三菱財閥
- 日魯漁業
- 林兼商店
- 八木商店
（日魯漁業・林兼商店・八木商店）—三菱系

六、カルテルと國際資本鬪爭

「獨占」の深化過程にあつて、最も果敢に無慈悲的な行程を強行しつゝ、當面、重要な資本運動をつゞけつゝある「獨占」カルテルの形態を執るところの「獨占」資本の、最近の様相とその活動の一般的狀勢を見た。かうした一般狀勢のうちに、見られるところのものは、崩壞を遂げたカルテルが再建されたり、新たなる結成組織がおこつたりしたやうにカルテルの強化、言ひ換ればカルテル資本が量的、質的に強まつたことである。——一方に於て生産設備を休止させ、他方に於て生産設備を増加しつゝあつた矛盾も一應は解決されたやうである。たゞ合理化のための資本の更新運動としては、今後こそおこるところの

費された問題ではある。そして强化を通じて、カルテルに對する財閥資本の支配が强化、擴大されたことである。大ぎには市場支配のための生産强制々限率が、徹底的に擴張されたことなどであらう。

さうしたカルテル資本の現實運動に現れたことのうち、たゞそれのみのためにカルテルが存するかにさへ思はれる生産の强制々限については、そのことの重要性から言つて見ても、ここに若干の檢討を試みる必要がある。事實また、カルテル製品の市場價格は昨年末を爆破點として、本月上半期を通じ、おしなべて釣瓶おとしに慘落を演じたので、そこで市場の强制支配のために徹底的に生産の强制々限をもつて對應するほかなかつたことはもちろんであるが、丸鋼は五割、セメントは五割三分、晒粉は四割五分、絹糸、洋紙は三割五分といふ素晴らしい生産資本が「獨占」資本の强制によつて休止資本として眠り込まされたのである。强制々限率は、多くは今や最高の段階にある。

生産制限率の深度の比較

	創立より昨年に至る期間の最高	最低	現在
丸鋼	二九萬トン(昭和四年)	二六萬トン(同)	五割
石炭	二七六五萬トン(昭和三年)	二四六〇萬トン(大正一五年)	二三七七萬トン
セメント	三割八分(大正一五年)	一割(昭和二年)	五割三分二厘
紡績	四割(明治三三年)	四晝夜(大正九年)	二割七分二厘
絹紡	二割二分(昭和三年)	六分(昭和二年)	三割五分
人絹	二割二分(昭和四年)	同(同)	二割
毛織	二割五分(昭和三年)	同(同)	―
製紙	二割(大正九年)	六分(昭和三年)	三割五分
燐肥	全休(昭和元年)	二割(大正十一年)	三割
晒粉	四割五分(明治三三年)	一割五分(昭和四年)	四割五分
製粉	五割(大正一五年)	一割(同)	―

特殊利潤を生むカルテル資本の獨占利潤は吹き飛んだが、しかし、かくして一般的には平均利潤は喪はなかつた。

といふことは、必ずしも、我々の不當な豫斷ではない。

なるほどカルテル製品の市場價格が慘落したことは確かだが、大體これまでの市價そのものが勞働の生産性の增大より、より遙かに不當な高値だつたのである。

手持原料と製品の市價から言つて、採算點を割つてゐる、と言ふものがある。そうして御丁寧にも現物相場から採算して例へば次ぎのやうな數字的根據をさへあげるのである。

綿絲廿番手　市價一二五圓　原價一五〇圓　損失二五圓
（備考、其の日の米、印棉相場を基礎とする。）

單純生産の場合に於てなら、右のやうな採算は、かなりの確實性を持つてであらうが、それは原料の買付、製品の先物契約に於ける「思惑取引」を思惑しないところの計算であつて、資本家はもつと利口に遣

つて除けてゐる。勞働の强度化によつて不引合ひな採算を引き合はせたではないか。

然し乍らカルテルの獨占資本が平均利潤を確保し、また特殊利潤のいくらかをでも恢復しやうとするには、內外の原料市場又は商品市場に出動して、他の產業資本か又はカルテル外の同一產業資本の利潤を直接、間接に奪ひとつてくること以外には現在與へられた手段は無い。

國內に於けるカルテル外の同一部門の產業資本に對しては、これを征服し得るであらう。現に征服しつゝある。だが國際的資本鬪爭に於ては、まつたく一變せる情勢のなかに在る。紡績の棉花、モスの羊毛の全部、小麥粉の小麥の大半は外國資本の原料シンヂケートの手にある。製紙原料のパルプ、窒素肥料の硫安、鋼材の銑鐵も亦、外國資本のために强力に支配されてゐる。またカルテル製品の全部と言つて好いほどのそれらは、狹隘化された國內市場の支配では足りなくて外國市場にさばけ口を求めねばならぬ輸出商品であり、とりわけ砂糖、小麥粉、人絹、綿糸布はいはゆる國際商品である。それ故に、わがカルテルは國際市場に於て外國の獨占資本と對立、抗爭するばかりでなく、いやが上にも關稅の障壁を高く築きあげたる內地の獨占市場をも强烈に脅やかされねばならない。伊太利の人絹トラスト・スニア・ヴイスコサや印度銑鐵のタタトラストや、イー・ピー・アイ・シーの硫安は、ダンピングをもつて屢々、わがカルテル資本の本土を襲ひ來つた。生糸、棉花、銅、小麥粉、砂糖、羊毛は、海の彼方より來たる一電、一閃の支配するところである。かゝる國際資本鬪爭の火華は、必然にカルテルを震撼する、又カルテル內部の資本國の對立、矛盾を刺戟し激化せしめる。それこそはわがカルテルの憐れむ可き「獨占」である。

青野季吉著

社會は何故に惱むか

（四六判四百五十二頁）

定價壹圓五拾錢　送料二十錢

社會は何故に惱むか？　如何にして此の苦惱を脱すべきか？　此の問題に對し只だマルクス主義者のみ正當な解答を與へ得る！　今論壇の雄青野氏最近の社會評論を集め、改めて之を世に問ふ。　無產政黨、サラリーマン層、新聞紙、出版事業等は、特に氏得意の論題、其の純左翼の立場よりする明暢なる論策は、多大な示唆と反響が期待される。

最新刊

〔目次〕

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

政友會内閣出現すれば

假說犬養内閣

山浦貫一

富士見から歸りの車中談で、吾輩は護憲運動以來倒閣運動といふものをしたことがない――が今度は此の未曾有の不景氣に際して、何とか考へねばならぬ、と、それが即ち倒閣運動を起すべき前提を放送した所の、犬養政友會子が、いよ〳〵護憲以來の倒閣運動を起こしたのである。

倒閣運動の、手つ取り早い結論は、犬養内閣が、明日から出來るのである。噂による齋藤實が朝鮮から飛行機的に飛び出したり、伊東巳代治や平沼騏一郎やが、隱居所から迷ひ出して來てはならぬのである。倒閣運動は、目前の濱口内閣を倒すを目的として、後繼内閣が誰であらねばならぬことを、それとは言ひ得ぬ程に『大權私議』を遠慮するとはいへ、犬養政友會内閣に結論されなくては、一向に始まらないのである。

で、犬養老人は、内閣を組織したいと希ふ。「之が最後の御奉公」と思ふ。かるが故に、記念碑として立派な仕事を殘したいと思ふ。爲めには立派にして有力なる閣僚を選んで……と思ふ。

「立派にして有力なる閣僚」の中に割り込みたい者が、政友會の中にうよ〳〵してゐる。能ふべくんば、一時に三ッ位犬養内閣を組織しても、閣僚の選定には事を缺かないであらうけれど、獵官運動がうるさかつたり、同僚排斥がひどかつたりして煩雜なのよりも、一番弱るのは、閣僚の椅子が首相迄併せて十三ケ。内、陸海軍を除けば、十一ケ、中、一ッは、御大犬養のものとして、倒閣運動……否總裁就任の時からリザーブしてあるのである。殘り十ヶの椅子のふり當てが、倒閣運動最中にも、彼の小さい胸を往來するであらう大問題だ。

漫談、雜談は何時間でも雄辯だが、要談となると五分以上を決して要しない木堂、殊に、

一世一代の要談、犬養內閣組織に就ては、一切サイレント。だから、誰も、彼の肚裡をうかゞひ知らぬ。知つても證據が摑めぬ。筆者亦勿論木堂の胸中を窺ひ知る術もないのである。漫談程度のつもりで、氣輕に犬養內閣の顏觸を記して見るならば左の通りである。

總理大臣	犬養　毅
內務大臣	鈴木喜三郎
	床次竹二郎
大藏大臣	高橋　是清
	武藤　山治
外務大臣	床次竹二郎
	芳澤　謙吉
鐵道大臣	久原房之助
遞信大臣	中橋德五郎
	秦　豐助
農林大臣	三土　忠造
	秋田　淸
商工大臣	山本条太郎
拓務大臣	森　恪
	前田　米藏
文部大臣	鳩山　一郎
司法大臣	嶋田　俊雄
陸軍大臣	南　次郎
海軍大臣	大角　岑生
書記官長	森　恪
	嶋田　俊雄
法制局長官	山崎達之輔
警視總監	長谷川久一
	長岡隆一郎
	河原田稼吉
朝鮮總督	水野錬太郎
同政務總監	井上　孝哉
臺灣總督	南　弘
滿鐵總裁	山本悌二郎

右に並べた所は勿論「あり相なウソ」と思つてほしい。といふのは、獵官運動者に憎まれるが恐ろしいのである。狂犬の如く獰猛な彼等は、書いた、書かぬと吠え立てる。政務官や秘書官をあさる其の取卷が又恐るべく貪慾だ。さういふ狀態の下に在る彼等は又驚くべくゴシップに對して神經過敏なのである。此の文章なども、彼等の神經を混雜に導く有力な材料になると思へば罪な氣もする。

扨て、並べ上げた顏觸れに就て一應の註釋を加へて見なければならぬ。犬養內閣の問題の中心點は、內務と大藏だ。其他は、どう差しくつても並び大名の領地更えで差し支へない。內務は副總理の椅子である。鈴木か床次かに議論される。新聞記事も近頃、多くは、鈴木床次といひ、床次鈴木といはぬ。語呂の關係かも知らぬが、實勢力の順位を、知らず識らずの間に現はして居るのだらう。鈴木は、田中內閣で失敗したと反鈴木系はいふ。ウケが惡いと宣傳する。が一方、田中內閣で「失敗した」のは、連帶責任である。鈴木は私利私慾をやりはしない。冗談も程々にせいとい

ふ。何れにも理窟はある。床次は、何分にも政界放浪がすきだ。選擧にも幕下の目星しい者は枕を並べて討死した。數も減つた。と數へ立てる。その又反對者はいふ。反鈴木系は反對的に床次を支持する。內務畑は床次を歡迎する。あのヌーボーは腕の喜三郎の様な凄い腕を振はないから穩健だ、といふ。かつて內務畑に一番うけのよかつた水野錬太郎は黨の爲めに何をしたか？ 蝮の様な安達內相はいかに世間態をつくろつたか。但し木堂は、何も言ひはしない。

中橋が油揚をさらふだらうと、一時噂された。兩方が競爭すれば自然油揚のさらはれる可能性はあつた。が、彼れは大磯に寢たきりである。油揚の噂はズンと下火になつた。

大藏大臣に最先名乘りをあげた山本悌二郎は、政治家としての最少限度である代議士を落ちた。三土忠造は、線が細く事務官的で、難局に處するには心細い。著書を出して井上と張り合つてゐる山本條太郎は、少々大風呂敷だから、高橋是清を、も一度拜み出して來るといふ說と、武藤山治が入黨して井上の反對的財政政策をやるといふ說とが耳を傾け得る眞實性を帶びてゐる。高橋は出たいとは勿論意志しない。が、難局だ。親友の犬養が頼みこめば、あの恬淡な老人だから、よし來たと、田中義一の時の様に引受けぬ事もあるまい。武藤は、選擧以前から、感情も、政策も政友會と共通である。井上と民政黨の因緣よりは自然である。

外務大臣に、犬養の女婿で佛國大使の芳澤謙吉は、あり相な說だが、木堂は、案外、かういふ所で遠慮する。駐英松平大使はどうか、これを採り得れば大いな力だと勘定する者もある。が、恐らく、將來宮中の人物として算へられてゐるから難かしからう。そこで床次外相說が生じる。强い味はないが、立派だ。外交向きだ。鈴木では到底はまらぬ役柄である。

犬養內閣に期待と興味のもてる所以は、田中男によつて表現せられた雲助味が如何に面目を改めるか。野人木堂が、如何に政黨內閣の本質を如實に見せるか。格式や、經歷や地方關係や私情因緣を排斥して、どんな新鮮味を盛るか。更に、難局を處理すべく、如何に意志と實行力の强い組閣內容を人物的に表現するか等々である。

新鮮味と、强さとは、黨の中堅人物を中心とした組閣を意味する。數へられる顏ぶれは、鳩山一郎、秦豐助、秋田淸、嶋田俊雄、森恪、前田米藏等であるが、其の中森恪は、內閣の樞ともいふべき書記官長として、黨內閣の各系統の一致した觀測であり、嶋田、前田が、どういふものか、當選圈をぶら〱してゐる。秋田は强引に當選圈を獲得したらしい。

秦は、田中內閣の末期、拓務か農林かに補充される筈であつたが、意外の倒閣で果さな

いでゐる。知事をしたことのある男だが、少しも役人くさくない。少し間は抜けてゐるが、熱があつて、誰にも愛される。黨內の「大臣級」で敵の一人を持たぬは彼位だらう。鳩山の大臣は、誰いふとなく一致してゐる。あの人柄は書記官長よりも大臣に適してゐよう。義兄鈴木が副總理の內務にすはれば、氣の毒だが振り合上、伴食の文部か司法で我慢して貰ふか。又は鐵道遞信の實務練習所にもつて行くか、木堂の肚はよめぬ。山条は「中堅」以上だが、兎もすると昔、三井で働らいた事を洗ひ立てゝ邪魔する者があるけれど、犬養が彼れ程の熱と力に充ちた男を度外する程ヤソ坊主でもあるまい。

司法大臣は、黨色の薄い者を以てする慣例が田中內閣以前行はれてゐる。で、鵜澤聰明あたりを、貴族院から數へたいのであるが、たとへ、彼が政友會員であるにしても、代議士でないから、政黨內閣主義の木堂は、使はないと思はれる。下手なカモフラージは、木堂の最も嫌ふ僞瞞である筈だ。更に貴族院の研究會あたりから、閣僚や政務官を採つて、殿樣の御氣嫌をうかゞふ藝當は、木堂の到底なし得ない馬鹿〱しさであらう。

陸海軍は、黨の人々が算へ立てる中から適任を選んで見た迄である。

水野錬太郎は、用ふるとすれば朝鮮が一番向いてゐる。大臣の方は落第ずみだ。井上孝哉は溫厚の君子だから黨人にはなり切れぬ。憎まれぬ人で、經歷が內務次官止まりだから、親任官政務總監以下は使へない。代議士をやめて任官して、退いて勅選といふ所だらう。臺灣へ南弘。南はどうしても、政友會內閣が一度は親任官にしなくては義理が立たぬ程、黨の爲めに働らいてゐる。山本悌二郎は落選でもあるし、滿鐵なら滿洲の王樣だ。不服もいへまい。

何れにしても、犬養總理大臣候補者は、組閣の內容に就て絶對無言だ。胸中深く既に組閣を了して、大命降下と共に、一時間にして閣僚名簿を捧呈して、どさくさまぎれの獵官運動を排擊するだらうと傳へる者もある。──一時間はどうか知らぬが時間がのびたら大變なことになる位のことは、木堂ちやんと見拔いてゐよう。

（九月五日）

不景氣は何うなる

馬場恒吾

政友會が政府を取つたならば、現在の不景氣が直るか否か。これが問題の中心である。

然るに政友會が政府を取つたならば、如何なる政策を行はんとするか。それがまだハッキリ判つてゐない。政友會の代議士は地方に行つては金輸出の再禁止をすべしと演說してゐるやうであるが、これは黨として發表した政策ではない。前に政友會内閣の大藏大臣であつた三土忠造氏は金輸出の再禁止に關して『此問題は非常に重大にして、經濟上各方面の事情を考査すると輕々に論議するを許るさぬ性質のものであるから、先づ金解禁のまゝ進むものと考へて置かねばならぬ』と云つて居る。政友會幹部の中にも、恰かも再禁止を行ふ意志があるかの如く暗示するものがあつた。若し再禁止が政友會の底意であるとすれば、それは日本の政治と經濟に決定的な運命を科するものとして、私は出來得る限り、各方面で其眞僞を確めんとした。併しハッキリした事は判らなかつた。或人は觀測して云つた。犬養總裁は内閣組織の大命を拜すれば、再び高橋是清子に大藏大臣となる事を交渉するであらう。そして高橋子は金輸出禁止論の元祖である。彼れは此議論を民族主義の上に立てゝ居る。卽ち日本人は黃色人種であるから、若し東洋に戰爭でも起らば、白人は黃色人種に金を貸さない。戰爭にならば、先立つものは金だ。だから日本は金を手離す事は出來ぬと、これは最も徹底した非解禁論者である。だから高橋翁を大藏大臣にしたら、再禁止の意志があると見てよいと。

然るに財界主腦部の觀察する所に依ると、高橋も金解禁以前には非解禁論者であつたが、已に一度解禁した後に於ては、再禁止を唱へる程、それほど經濟界の事に無智識ではない。金解禁で財界を動搖せしめ、再禁止で今一度其動搖を繰り返へす事は、日本の經濟が堪へ得る事柄でない。高橋とか三土とか、財界の事情を知つてゐる者が大藏大臣になる限り、再禁止の如き無謀な事は行はれないと。

然らば政友會が再禁止の意志あるかの如く暗示するのは、畢竟するに思はせ振りに過ぎない。腹の底では、再禁止の不可能を承知して居りながら、恰かも再禁止するかの如く匂はせて、世間の人氣を釣らんとしてゐる。若し此觀察が中つて居るとすれば、政友會のする事は罪が深い。

新聞に傳へられる所の政友會の經濟政策は、まだ確定してはゐないが、(一)公債を出して事業を起す、(二)關稅を高くする、(三)五千萬圓程度の減稅をすると云ふのである。所ろで、此等の政策は畢竟するに枝葉の問題である。何となれば、此三つの題目で、今の濱口内閣の政策に比較して、稍異つてゐると見られるのは、公債を出して事業を起すと云ふ點にある。然もそれは程度の差である。今の民政黨内閣ですら、失業救濟の爲めには地方債の發行を許るし必要の場合には中央政府

が公債を出す事をも辭さないと云ふ。其公債で得た金を何に費うかと云へば矢張事業を起すと云ふのである。事業を起す目的が民政黨のは失業救濟、政友會のは景氣恢復と云ふ差はあるが、それは言葉の差であつて、實質は同一物である。

只然し、此公債發行も發行額が非常に違へば實質の差を生ずる。民政黨のは失業公債と稱する故に、如何に多くとも一億か二億に止まるであらう。政友會が幾許の公債を發行する意志で居るか、其具體案は決定もせず、從つて發表もされてゐないが、一億か二億ならば失業緩和にはなるかもしれないが、景氣恢復の援助にはならない。現在の不景氣に對しては、一億二億の事業は燒石に水と云ふのが適評である。若し眞劍に景氣恢復の目的を以て公債政策を取る積りならば、發行する公債は十億若しくは二十億に上らなければならぬ。――それ丈けの公債發行が可能であるか、否かは疑問であるが、假りに發行出來るとする。そして盛んに事業を起して中間景氣を煽るとする。其瞬間に物價が上り、輸入が增加し、正貨が流出して、政友會に其決心があると否とに關らず、金輸出再禁止の已むを得ざるに到る。だから、公債政策は、それを有効に行はんとすれば、金輸出再禁止を覺悟しなければ行はれない。玆に問題は再び元に返つて、政友會は金輸出禁止の腹を決めるか否かと云ふ事に突き當る。

濱口内閣の主要政策は金解禁であつた。政友會が再禁止を主張するならば、玆に政策の劃然たる對立を見る。其外の枝葉末節を議論するのは、言葉の爭いであつて、眞劍の爭いでない。政友會が再禁止の腹を決めない間は、民政黨と政友會と其政策の本質に於て大なる差違はない。民政黨内閣で景氣が恢復しないならば、政友會内閣になつても景氣は恢復しない。少々の公債政策では中間景氣すら六ケ敷い。

政友會に金輸出再禁止の決心があるか、ないかに關しては政友會自身の云ふ所は曖昧模糊だが。決心があつて云はないのか、無くて云はないのか、それすらハッキリしない。吾々は其態度を甚だ慊らなく思ふ。此所に政友會が天下を取り得るか否かの問題が當然起る。

吾々は玆に政友會が天下を取つたならばと云ふ假定の下に議論してゐる。然るに現在の社會狀勢を虚心坦懷に見ると、社會は此不景氣に關聯して民政黨内閣を呪つてゐる、だがそれならば政友會内閣を樹立せよと云ふかと思へば、其叫びは少しも擧らぬ。何處にかまだ政友會内閣を恐れる心持が潜んでゐる。それは何故か。それには外にも原因があるだらうけれども、重要なる原因は政友會が自分の政策を明白に云はないからである。

例へば目下の政治問題になつてゐる樞密院と政府の關係に於てもさうである。政友會は

一體政府をよしとするのか、樞密院をよしとするのか、それが少しも明かでない。政友會は倫敦で調印されたる海軍條約を成立せしめ度いのか、破棄し度いのか。それも明かでない。犬養總裁の談として新聞に出た所を見ると、彼れは、濱口は强い事を云つてゐるが、見て居れ、今に樞密院に頭を下げるからと云つて居る。これは批評としては皮肉であるかもしれぬ。併しこれに依つては、彼れが政府をよしとするか、樞密院をよしとするかゞ、少しも明かにせられて居らぬ。政友會は特別議會の時に海軍條約の締結に對して、大聲疾呼する所があつた。だが併し、結論が條約に贊成なのか、反對なのかゞ明瞭でなかつた。今日に於てもそれが明瞭でない。海軍條約を破棄せよと云ふ說は、蓋し輿論の支持は受けないであらうが、議論としては成立つ。或は又、海軍條約には贊成する。だから、反對黨の政府だけれどもこれ丈けは助けると云ふ議論も成立つ。だから何方でもよい。政友會はどちらかに態度を決定して、それを天下に發表すべきだ。主張を明かにせずして、只模様を眺めてゐる事は、甚だしく政黨の信用を害する。政權を取る便宜の爲めに、故らに主張を曖昧にしてゐるのだと云ふ所の、惡い印象を世間に與へるからである。

金輸出再禁止に關しても同じ事が云はれる。再禁止の覺悟がなくして大々的公債政策を唱へるのは一種の欺瞞である。何となればそれは再禁止以外の何處にも到着しないからである。再禁止の決心があつて、それを云はぬとすれば、これも亦別種の欺瞞である。何となれば、再禁止を云へば、財界が吃驚して、政友會内閣の成立を阻止する。それ故に、内閣を取るまでは默つてゐて、内閣を取つた後に再禁止をしやうと云ふ筋書と思はれるからだ。

簡單明瞭に云へば、政友會に對する世間の人氣の湧き立つて來ないのは、政友會が何んだか奧歯に物の挿まつたやうな云ひ方をするからである。自分の心を民衆の腹の中に置く。こちらで胸襟を開けば、向ふも胸襟を開く。それが軈て同情となり、支持となり、人氣となる。政友會はどうしてさうしないのか、局外から見ても歯痒く思はれる。

然らば金輸出の再禁止を行つたらどうなるか。爲替は暴落する。或は國際的には日本の經濟的地位が破壞されること、大戰後の獨逸若くは露西亞の如くなるかもしれぬ。そこが恐いか。玆に深刻な問題が潜む。

今の社會通念に依れば、民政黨は金融資本家を擁護し、政友會は産業資本家を擁護する。だから、政友會は爲替を下げて、物價を上げ、そして例令實現しない迄も、景氣をよくすると云つてゐるのだと、かう諒解されてゐる。」所ろで、民政黨と政友會をかう區別するのは事實に卽してゐない。政友會だつて金融資本

家に助けられ、民政黨だつて產業資本家を援助する。政友會は三井、民政黨は三菱と云つても、三井と三菱を產業資本家と金融資本家に區別する事は出來ない。彼等の據つて以て立つ所は何れも資本家階級であつて、何れか烏の雌雄を知らんやである。彼等は共に資本家全體に關心を有つて、彼等が無關心で居り得るのは、都會の勞働者、地方の農民に對してのみである。

資本家的政黨の目的は現狀維持である。もしくは今の資本家を資本家として保存せんとする。大正八年以來十年間、政友會と民政黨は何れも內閣を取つて、金融資本家と產業資本家を擁護して來た、金輸出を禁じて、物價を釣り上げて來た。併し其間に不景氣は無かつたか、民衆は苦まなかつたか、其結果が今日の不景氣ではないか。資本家は保護される時もあるが、民衆は保護される時を有たない。資本家が今少しく苦しむでも、民衆は容易に同情の淚を流さないであらう。

不景氣の恐るべきは、不景氣それ自身の恐ろしさよりも、民衆がそれに對する態度に恐るべき要素が含まれてゐる。若し全國の人がよし！俺等の力で此不景氣を克服してやらうと奮發するならば、不景氣が却つて將來の發展の基礎になる。だが若し、民衆が不景氣になつたのは俺等の知つた事ではない。誰れかゞ、何うにかして助けて呉れるべきものだと考へるならば、此社會は行き詰りだ。そして今は此氣分が勝つてゐる。だから問題は誰れが此民衆を奮ひ立たして、民衆自身の力で此不景氣に克つと云ふ心を起さしめ得るかと云ふ事に歸する。それは民政黨も政友會も兜を脫いで、民衆の前に降參する事に依つて始めて期待し得られる事柄である。そしてそれ以外に現在の不景氣に打ち勝つ方法はない。民政黨が政府に居たならば、或は政友會が政府を取つたならばと云ふのは、政府の力を餘りに大きく見る所の、過去の迷信の一つに過ぎない。

暴力地獄蟹工船の勞働者

熊谷正男

四月始めのオホーツク海は未だ一面の流氷だが既に嚴冬を去つた徵(しるし)には、其の純白の疊の上に鷗の群が餌をついばみ、流氷と流氷の裂け目には、底知れぬ北海の水が脈々と群青の胸を膨ます。

この頃に、今まで一艘の船影を見なかつた洋上に、急に大きな汽船が姿を現はす。其の煙が北に消えると、又次の船が現れる。戰場に臨むやうに競ひ立つた之等の船はまつしぐらにカムチヤツカの漁場に向ふのだ。大きいのは七千噸小さいのは千噸ぐらゐ。

これ等は日魯、昭和工船、日本工船等の鮭、鱒、蟹工船と、露國々營の漁場送込船なのだ、斯くて東西兩岸に愈ゝ深刻且つ激烈な火花を散らす日露の國際漁業戰が展開される。

現在カムチヤツカに於ける「工船蟹漁場」とは、陸上に於ける罐詰工場を船內に移した移動工場だ。最も進步した理想的な近代科學的漁業であるこの蟹工船は大正十五年から三ヶ年間、東京水產講習所教授丸川久俊氏が練習船雲鷹丸を使用して、オホーツク海の生物調査の傍ら試驗的に罐詰製造を行つたのが最初で、次で大正九年、富山縣水產講習所の練習船呉羽丸(今回漁雜夫虐待事件を起したエトロフ丸幹部はこの船の幹部だつた)が、カムチヤツカ西海岸において稍大規模な船內罐詰製造に着手し、好成績をあげ、漸く斯界の注目を惹いた。大正十年には和島貞二氏が百五十噸の帆船に工船設備を施して二百八十函の蟹罐詰を製造し、民間における先鞭をつけた。

以後資本家は斯業の有望に着目した。當時海運界の不況による船價の暴落を利用して彼等は汽船を蟹工船に改造し、資本を投下して、カムチヤツカをめぐる漁區爭奪戰を開始した。かくの如く蟹工船の前途多端になつたので、農林省は大正十二年「工船蟹漁業取締規則」を制定し、出漁船舶數及び製造高を制限して漁場の荒廢防止に努めた。

× × ×

優秀な漁撈術は海國民たる日本人に與へられた天賦の技能だ。故に露國々營と雖も、優秀な漁夫は日本人に求めねばならぬ。

極北の洋上に出稼する漁雜夫は、日本側の漁場及び工船で働くもの凡そ二萬人。ソヴエート聯邦の國營アユ其他に傭れてゆくもの約七千人と云ふ夥しい數だ。彼等は主として北海道、青森、秋田、山形、岩手、宮城、富山縣等から募集されるものが多く、平常は漁業若しくは農業に從事してゐる者が九分を占めてゐる。

彼等の賃銀は一漁期（五十日と見て）、漁夫は百五十圓乃至百八十圓、雜夫は七十圓乃至八十圓と見れば大差ない。この外漁獲高による割増金九一制度と云ふものがある。これは以前、資本主と勞働者が利益を、前者九割後者一割とつてゐた制度の名殘りで、罐詰一箱につき十四錢といふことになつてゐる。九一金は漁期が終り函館に歸つてから渡される。一人當り三十圓見當である。

漁雜夫の募集は、數年前まで請負人の手で行はれたが、弊害が多かつた。近年は各町村に供給組合が組織され、町村長が組合長となつて、一纏めに申込みを引受け、給金の受渡等も一切この手を通じて行はれる。自然、役場や警察と密接な連絡がとれ、身元不確實なものや、所謂危險思想を持つてゐるのはオミツトされる。だからカムチヤツカに出稼を許可されるものは善良な勞働者ばかりだ。

その上、小林多喜二氏の「蟹工船」や、今回暴露されたエトロフ丸事件のやうに、暴力專門の命知らずが、各工船の幹部として、資本家に忠勤を示すから、カムチヤツカに於ける勞働問題に關する限り、資本家は枕を高うしてゐられる。

哀れな漁雜夫！　彼等は差迫つた年末の窮乏から逃れたいのだ。正月には餅の一片でも家族に與へたいのだ。だから若干の金で、半年の長期間を犧牲にして、奴隷よりも劇しい海上勞働に身賣りするのだ。

蟹工船の幹部として、一般の生命を支配するものは事業部長、工場長、機械監督等である。更に准幹部として大船頭、漁撈長、職長、漁撈長心得があり、稍下つて船頭、小頭等々の外、漁夫百三十名、雜夫百名、職工六十五名其他船員約四十五名ぐらゐで、總噸數二千五百噸乃至四千噸の工船一隻を構成する。

工船の准幹部たる船頭、小頭等の所謂命知らずは愈々現場に到着して、漁にかゝると、其の野獸性を遺憾なく發揮しだす。彼等は「勞働者より製品が大切」といふ、カムチヤツカ的資本主義のモツトーを遵奉して、漁雜夫の人間性を無視し、暴力によつて酷使虐待する

ことによつて能率の増進を計る。それが彼等の呪はれた意識的觀念だ。

彼等幹部達は、切場後の僅かな九一金と、暴力に對する賞與が欲しいばかりに、半狂亂に船内を駈廻つて、漁雜夫を片つ端しから怒鳴り散らし、躊躇する者は蹴飛す。少しでも命令に不服さうな顔をするものには、革の鞭や青竹で、顔の造作が歪む程擲きのめす。或は兇器で威嚇し廻るといふ。

彼等は人間ではない。鬼畜に等しい。彼等には血も涙もない。況んや憐愍の情をやだ。起き上れないやうな病人でも、鞭でなぐつて絕對的に服從させる。まことに正邪善惡を超越した暴力地獄である。蟹工船は司法權を遠ざかると幾百哩、極北の公海に浮ぶ監獄船だ。今回暴露されたエトロフ丸の眞相を新聞で讀んだ人は、無條件で此の言葉を首肯さるゝであらう。

エトロフ丸事件に就て、農林省監視船金剛丸が現場に出張取調べをしたのに、眞相が判明しなかつた。

以上のやうに暴狀極まる工船幹部が一度監視船に見舞はれると、漁雜夫に早く仕事を終(しま)はせ、食物を與へて好遇してゐるやうにごまかし、病人のないやうに報告する。そして監視員を饗應して歸す。今回のエトロフ丸事件の眞相を金剛丸が容易に摑めなかつた原因もその邊にありはせぬか。

さて漁雜夫の勞働時間だが——

多の半ケ年、夜の闇に閉された極北の世界は、四月頃には晝夜相半し、六七月になると、午後九時頃漸く太陽が沈む、沈んでも暮れ切らぬ薄明のうちに、午前三時にはもう仄明い黎明がおとづれる。

四時を告げる八點鐘の音慌しく、漁雜夫は鞭で叩き起されて、五時には就業して、午後九時まで人體の可能範圍を越えた十六時間の能率一點張りの機械的勞働を強要されるのだ。エトロフ丸の如きは十八時間から二十時間にも及んだといふ。この長時間勞働制が社會問題として呼ばれるに對して當業者は言ふ。

「漁業は仕事が機械的でなく、生物の捕獲と

いふスポーツ的興味があるから、漁雜夫達は我を忘れて自發的に長時間勞働に從事する。加之、九一といふ割增制度があるから、彼等は慾と興味から勞働時間の長いことを苦痛としない」。

だが、漁雜夫達にしてみれば、蟹を見ること石塊の如く、何のスポーツ的興味があり得やう。十八時間も暴力的威嚇の下に無理な勞働を强制されるのだ。九一金だつて幹部の氣に入らなければ貰へないのだ。彼等は全身綿のやうに疲勞して、只もう猛烈な睡魔に襲れるばかりだ。陸地の監獄なら眞水の風呂も沸く。だが工船では飲料水と燃料の節約から、石鹸の利かぬ海水風呂で臭い身體を洗ふにすぎぬ。それもいゝ。非道いのになると三ヶ月間一度も入浴させない工船がある。

漁雜夫は通風採光の不完全な、臭氣と濕氣が鬱結した甲板下の床に、疲勞した身體を投げると、もう泥のやうに眠りこける。そして翌朝、棒が頭上を見舞ふまでは、船體が時化で三十度に傾斜して、棚の上から轉落しても判らないのだ。

食物は、出漁後一ヶ月を經たぬうちに、野菜は缺乏する。味噌もなくなる。あとはワカメか鹽鱒をぶち込んだ鹽汁だ。飲料水は錆びて赤く變色してゐる。時々、仲積船がやつてきて少しばかり野菜類の補給をするが、それは幹部級のもので、漁雜夫は不相變鹽汁だ。主食物の米や麥も船艙の設備不完全のため、變質してしまふ。

過激な勞働。粗食。不自然な寢所寢具。その結果は當然のことゝして病人が續出する。工船勞働者の八九割までは脚氣に患されてゐる。ひどい胃腸病に惱んでゐる。

病氣だからといつて囑託醫はなかなか休業を許さない。それのみならず、第一藥品が缺乏してゐる。あつても變質してゐる。

胃腸病、脚氣が昂じて愈々働けなくなると、日光も換氣も不充分な暗い蓙敷の病室に、碌々手當もうけずに、狂氣のやうに故郷の幻影を追ひながら空しく消えてゆくものが少くない。死ぬと死骸はキャンバスに包まれて、錘りと共に泡立つ極地の海中に抛込まれる。

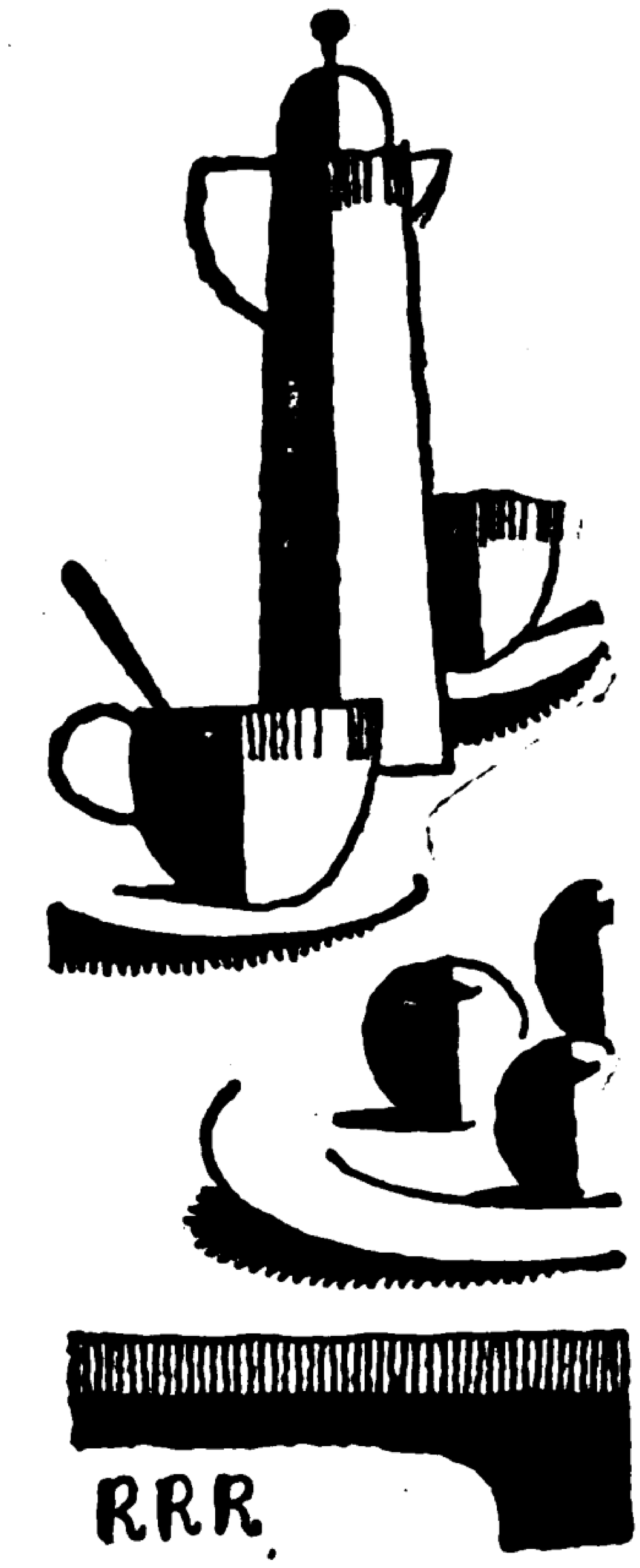
オゼルナヤの國營アコ會社や國營工船には、ダンス用のラヂオの設備があり、娛樂機關も完備してゐる。勞働時間も長くない、醫療の手當ても行屆いてゐるといふ。さうでなければならないのだ。

カムチヤツカの海は極度のヒステリー症である。見る間に煙幕のやうな濃霧が海上一面に垂れ下り、何の豫報もなく、カムチヤツカ名物の突風が襲來する。母船の所在を知らせる微な氣笛を目的に、濃霧の中、漁艇を進めるうち、狂亂する怒濤と咆哮する暴風雨。航行の自由を失ひ、木の葉の如く飜弄された漁艇は、母船を見失つて、迫り來る闇と、寒氣に慄へ、雨と波に骨髓まで濡れそぼち、神に祈る時は、もう生死のけじめがない。翌日或は翌々日、母船の煙を發見して、始めて「俺達はまだ生きてゐる」らしいことを思ふのである。

これが蟹工船勞働者の實狀だ！

文筆派出婦

村井文子



オフィス

去年の今頃だつた、遠い國の少女から來た手紙に「貴女の御生活をお知らせ下さい」と書いてあつた。何と書けばよいのか？ 私は改めて私の周圍を見まわし、そして書いた。

「今度私達十人許りのヤングガールスが集つて、日本で有名な或小說家の御親切で、彼の雜誌社の片隅で新しい仕事を始めました。私達に出來る限りの仕事がその雜誌の廣告で集つて參ります、私は今或人の手傳ひ、謂はゞスペシアル・セクレタリーになつて居ります。貴女の御國にこんな仕事がありますか……」

彼女がこれを見てどんな想像をしたか、毛筆で字を書く日本ムスメを想つたか、丸い肥つた重役の可愛いがるセクレタリーを聯想したか、それは私は知らない、が兎に角次に來た手紙には、「ハウ・インタレステイング！ 私ならエンヂオイしますわ」とあつた。私は唯有の儘を極く大ざつぱに述べたに過ぎない、それに私の小さい和英辭典には、「臨時＝スペシアル」と記されてあつたのだ。

併し私の同胞の前にはも少し細い說明をせねばならないだらう。所謂私達のオフィスは、莊麗とゆかぬ迄も淸潔な大阪ビルの四階、文藝春秋社の一番隅に置かれてある。東と北に窓が一つ宛、隣りが重役室、向ひにずらりと並んだ編輯室の机を隔てゝ社長室、應接室。この忘られた樣な小室に私達は家賃を拂はずに住つてゐる！ 應接間の傍の入口から重役の目の前を通つてこのタダの室に入る娘達が、若し圖々しくなるか、でなければ畏縮したとしてもそれは餘り當然な事ではないだらうか。

ガラスに「重役室」と同じ大きさに書かれた「文筆婦人會」の字に菊池先生の好意を感じ乍ら、閉りの悪い戶をギチ・ギチンと止め、私達は二つの窓から外を見る。それは二つ共半分の窓だ。北のを重役室と東のを編輯室と分け合つてゐるのだから。私達の當番は本を讀み乍ら、隣室の將棊の音を聞き乍ら、辻待の俥屋の樣に丸くなつて仕事を

待つてゐる事が多い。

環　境

！

これは至極主觀的な私達のオフイスの外貌である。ではその中に入つて來るものは？　餘り役に立たない教育を眞面目に授ける所、女の專門學校が私達の多くの母校である。卒業して一年、二年、この小さい窓から私達の覗いた萬華鏡は、年老つた人が荒波など云ふ言葉で想像させる人生の冒險ではなくて、生活の小さな影や色が色々な形を作つてゐるのを見せて吳れた、そんなに私達の豫期出來ないものは現れなかつた。具體的に示して見れば—

或は、留置場で「横川を張られた彼女」中本たか子さんが元氣に氣持よく話してゆく、午後、レインボーで瘦せた話しよい川端氏、誰にも悪口を云はれない横光氏、「栗鼠の樣に狡く速さう」と誰かの評した池谷氏、美しいささき夫人、浪人の樣な直木氏、扨は誰、扨は彼を瞥見する。又××省囑託が仕事を賴みに來て某重大事件に關するから絶對祕密にと口止めをする。變態性慾みたいな手紙も時々來た、新聞社の人が來る、求職者が來る、試驗間際になれば大急ぎで學生の間をまわるらしいノートの寫しが來る……そしてまだ〳〵多くの事が日常生活の平凡さを被つて私達の視界に入つて來る。そしてこの會が開かれてからもう一年半。

私達は偉い人に逢つてもさう興奮する事もなく、人扱ひもいくらか上手になつたかも知れない。が私達の一心がこの室に安住所を見出してゐるなど決して云へない。私達にもなやみがある。

嗟　嘆

第一のなやみは生活である。半分の窓だ。チヨビ〳〵した煩はしい仕事だ。自分の勉強に專心出來ない樣に、一つの仕事のエクスパートにもなれない。中途にブラ下つて不安になる。私達は努力をしてねぢ込まれた樣な感じさへして來る隙で、半分の窓から青空を見る。アーと手足をのばしたい。伸び〳〵とした氣持になりたい。

「宣傳が足りないのですよ。殆んど存在を忘れられてゐますよ。」或新聞記者は忠告して吳れた。菊池先生も度々さう云はれる。が私達は飽迄、執拗に下を向いて歩いて來た。宣傳費がないのだ。保險勸誘員の樣に戸別訪問をする勇氣がないのだ。どうしても半分の窓である、思想の合の子である、明け開いて裸になつて飛び出す事は私達には出來ない。

私達の間

今は會員でないが、鹽川氏も中本氏も前には私達の仲間だつた。夫から子供から逃げて來た彼女、學生と結婚してゐる彼女が居た。仕事の依賴者に悲しい思ひをさせられた彼女が居た。彼女がポツとした熱

靜的な顏を床に捧げてゐた頃、蒼白い顏を見て私達は馬鹿らしい事と思つたものだつたけれど、親姉妹を離れて只一人ぼつちの彼女には、彼が代へ難い寶だつたのかも知れない。その後彼女の行方は數ケ月、會には不明だつた。所が先日誰かゞ銀座で元氣に何處かに働いてゐる彼女に會つたと云ふた。私はこれを聞いてふと、「罪なき九十九人の者よりも、悔ひ改めた一人」の句を思ひ出した。轉んだ彼女が私達の知らない何かを掴んで立ち上つたのであれ……併し彼女の「罪」を求め樣と私は思はないのだが。又或人と一緒に「散歩」してゐるから友愛結婚？ と思ふ間に赤ちやんの出來た彼女があつた。彼女は今どうしてゐるだらう。

けれど大體に於て、私達は、或人達が考へるかも知れない樣な變り者の集りではない、私達は平凡な女である。皆がそれ〴〵異つてゐるとしても、それは電車に乘り合せた人々が異つてゐる樣に異つてゐるのだ。若し會の中に不平があるとする――そして可成事實あるのだが――それも個人的なものである間は大した問題ではない。一番厭やがられるのが、會の仕事に對する無責任、利己的な態度で、さうした事があれば彼女の後には絶えず惡口がとぶ！ 會員の誰彼がどんな戀愛をしやうと、結婚をしやうと、又はセンチメンタルな戀文を貰つて内心喜んでゐる人があらうと、それが仕事に差し支へない限り、私達の關に迄も立たなければ、風俗紊亂など云ふ事實も惹起しない。何故なら「氣が知れない」と批評する事があつても、誰も他人の眞似をしやうとする者はないから。

要するに私達は仕事で結びつけられた、そしてその中に小さい友情の環を持つた、大きな環である。そして會員の或人達は、時々笑ひ乍ら「亡びゆく階級」とこの環を呼ぶ事がある。

彼等の印象

愛犬家にとつては彼等の犬を賞める人が善人であり、私達には仕事を、而もよい仕事を下さる人が有難い。けれどその善人達をも私は二種に大別する事が出來る。即ち虫の好かぬ人と好く人と。これは私達に對する理解の程度による樣に思はれる。

偉い有名な人達は大抵親切だつた、例へば某老代議士、○○電氣の重役の樣に。會社員は少數の例を除けば親切な時は狎れ易く、さうでない場合はつゝけんどんだ。矢張り私達が一番安心して物を言へるのは藝術家の範疇に入る人達だらう。

私が今でも一層滑稽だと思つてゐるのは、會に入つた許りに訪れて來てKさんに清書を頼んだ紳士、彼は長々と、如何に彼が××××第何代何々××の裔に當る者であり、熱心な友人の勸めに動かされてそれを宮内省に提出する所であるかを述べた。Kさんが原稿をとりに行

くと彼の旅宿は人形町近くの待合であつた。そしてこの原稿によると彼はその家の養子であつた。が遂に淸書の出來榮えが宮内省に出す程立派でない爲、會は彼に收入の半分を返却しなければならなかつた。

或日、××新聞の能率增進協會とか云ふのから矢張り淸書の問合せがあつた。何でも豫算が足りないから半分の値段でやつて呉れと云ふ。私はそれが大分澤山あるらしいので四分の一位なら割引出來るかも知れませんと答へた。がそれでも駄目なので他の人に相談する事にして電話を切つた。何と云つても私達の仕事は勞力だけが資本である。ロスト・レイバーだと思つても、他に仕事がなければ欲しいと云ふ人がある。その時も誰かゞやつてもよいと云つた。それで私は再び電話をかけた。向ふでてんで相手にしないらしく豫算〱と云ふのを暫く聞いてから、一番最後に私は「では仰言る通りでさせて下さい」と云つた、すると向ふでは笑つた。

「實はね、市役所にかけると此方の豫算の半分で喜んでやりますのでね、又何かお願ひします。お金持のお孃さんに似合ひ相な……」

「いゝえ」私は受話器を大急ぎでかけたが、涙が出さうだつた。何故私達の仕事がそれ迄遊び半分に見えるのだらう。

日比谷近くの或會社の社員の小さい仕事を手傳つた事があつた。二度目に仕事を持つて訪ねるとまだ早いのにお午の御馳走になつた。三度目にはサンド・ウイッチ、四度目はお茶だつた、私は可笑しくなつた。彼は又大抵の人がする様に「失禮ですが幾歳」であるか、何故お嫁に行かないかを聞いた。かうした間は殆んど慣れつこにはなつてゐるが、彼の動機のほんの少し許り違つてゐるのは、彼が小說愛好家である爲なのだらう、文藝春秋社へ通ふ程の者には彼には新しい戀愛が、或は戀愛氣分があると思つてゐるらしい事だつた。

「直き結婚なさるんでせう。」

「いゝえ」

「本當？　僕が若し若かつたら、貴女に直ぐプロポーズするんだがな」と冗談らしく。

私はゲッとしながらお茶の上で默つて笑つた。何も云へなかつた。併し若し彼が若かつたら、それこそ私の意志が彼の横面へ飛んで行く所かも知れなかつたのに。

新聞紙半面位の廣告は出せる「虫くだし」の妙藥の原料の專賣權を持つてゐるお婆さんがあつた。旅行から歸るとその留守の手紙など整理などを手傳ひに行つた。彼女が「キタイの御申込しは」など口述した。私がペンを止めて考へて見ると「貴台」と云ふ古い代名詞たつた。又、自分はお饅頭を食べながら「例の事ならぬ、曉は、死も覺悟にござります」等書かせて、ひやりとさせた。所がこのお婆さんも遂

に「お嬢」の世話がしたくなつたのである。如何にもそれは熱心な若い嬢に示す感謝の印であり、同じ感謝を以つて受けらるべき贈でもあるかの樣な顏をして。聞かない先に斷ると彼女は「何故」と聞いた。何故？あの人達にはそれが何故かも少しも判らないのだらうか。

かうした仕事の後で山本有三先生の所へ伺つたのは嬉しかつた。先生はお友達の樣に話して下さつた。此方を內心見下してゐると云ふ心配のない人の爲に仕事する時、私の可哀さうな萎れかけた自信、自尊心は生々と甦つて來る。

そしてあの人、この人の思ひ出がある。けれど若しかこの後、會の仕事が、今も殆んど絕え〴〵になつてゐる會の仕事が、この上少くなつたとしたら、苦勞性な私は、それをこの女の責任にせねば氣が濟まなくなるだらう。私はこれで止めなくてはならない。

最後に私は獨語する。私達の職業は今迄これを試みた人々の多くが云はれた樣に、まだ〳〵多くの試みない人々にも「便利で」、「役に立つ」事が出來る筈だ。若し半分の窓が二つだとしても、それには二方の光を入れると云ふ長所があるのではないか。

美容院とは？

ささきふさ

諸兄は銀座の或地點に、全く同一といつていい看板が向き合つてゐるのを目に止められたことがありますか。三日月形のクリーム地に朱字で、

"Beauty Salon――Madam Miha"

その眞向ひに、やはり三日月の弧線に添うて、勿論朱字で、

「美川美容院。」

ネオン・サインの目まぐるしい現在では、此看板はあまり行人の目を惹かないかも知れません。が此風變りな、しかし近代的俗惡さは事缺かぬ看板が、十六間道路の左右から袖を出してゐるところは、異樣といつてもいいでせう。尤も此看板は時間的には同時に出現したわけではありません。霸氣滿々のマダム・ミハが三日月と共に銀座街頭へ進出したのは今からおよそ一年前、それまでどこか目立たぬ隅にゐた美川女史がマダム・ミハの向うを張つて another crescent を掲げたのはそれから數ケ月の後でした。だからマダム・ミハはいふのです。

「看板屋にも看板屋の良心があると見えましてね、全く同じものを二

つ造るわけにはいかないとお答へしたのださうですが、——」が優先權と獨占權とは同日には論じられない場合があります。どの社會に於ても獨占獨歩は至難だとみえます。

十六間道路を中に向き合つた雙方の二階で、美川女史とマダム・ミハとは美容の秘術を盡してゐるわけです。生きた工藝品の加工場、——が素材のなまじ生きてゐる爲か、兩女史の腕にも拘らず、傑作らしいものはまだあまり現れないやうです。それとも諸兄は、向き合つた戸口のどちらからか、さうした傑作の吐き出されるのを御覧になつたことがありますか。或ひは、秘術のありたけを自らに施してゐる筈のマダム・ミハや美川女史を、絶世の美女だと思つたことがおありですか。

整形美容が外科醫の手中にある以上、美容師の技術の分野は知れたものであるのに違ひありません。曰くシャムプー、曰くマニキュア、曰く附睫、曰くパーマネント・ウエーヴ、——不變の形容詞をつけたウエーヴさへ、斷然不變とはいへないらしいのです。では何の要あつて一錢三拾圓を投じ、その上長時間人形になつて鏝をあててもらはなければならないのでせう。本質的な美は、それに、さうした局部的扮飾によつて得られるものではないのに違ひありません。

かくの如き信條を持つてゐる私が、何で“Beauty Salon”の扉を排したかといふと、髪を刈つて貰ふ必要があつたからです。委しくいへば、湘南から東京に移つて、他の何處の床屋へ行つたらよいか判らなかつたからです。それに其處へ行きつけの大森夫人が、待たされたことはないと仰しやつたからです。それよりも何よりもマダム・ミハがひどく如才なかつたからです。

「どうか是非お遊びに。」と彼女は私の頭を見る度にいふのです。のみならず彼女は、さういふと直ぐ、

「お遊びにだけね。」といひ直すことも忘れないのです。商賣氣拔きのお愛想に對して、私は他の床屋へ行つてはすまない氣持になつたのです。

いつもは“gogo”な銀座が、美容院に入るとなると急にぎごちないものに感じられ出しました。その前まで無理にも平然をよそほひながら歩いてきた私は、不意に掏摸でもする氣持で、素早く扉の中に身を隠しました。赤い安絨氈の階段の下に眞新しい履物が十數足。待たされさうだな。待たされるなら引返すまでだ。——私はとにかく狹い階

段を上つて行きました。

「ようこそ。」

「お忙しい？」

「いいえ、ちつとも。」

かひがひしい仕事着のマダム・ミハは、しかし、手に鋏を持つたままなのです。それに映畫雜誌を滿載した洋卓の周圍には、――

「おや、――」

長椅子の一隅には、待たされたことのない筈の大森夫人まで、ちやんと待たされてゐるのです。で私はミハ女史にいひました。

「お忙しいやうなら又。」

「いいえ、直ぐ。」

直ぐが直ぐでないのは判つてゐるのですが、かうなつたら私の方で、歸りたくも歸れなくなつてしまふのです。電鈴一過、左右に並んだ仕切の中からひよこりひよこりと首が出て、

「あら。」とX婦人記者。

「あら。」とZ婦人記者。彼女等は此處が次號の口繪の、或ひは次の季節の流行拈出の共同作業中らしいのです。

やつと仕切の一つに案内された私は、鏡の中に映畫女優えふ子さんの反影を見付けました。鏡の中のえふ子さんの目に私は微笑の挨拶を送りました。

「これからどちら？」

えふ子さんの聲は背後に聞えるのです。

「別に、――あなたは？」

私はやはり鏡の中のえふ子さんを見つめたまま答へました。えふ子さんは演舞場のさうでした。流行兒のえふ子さんにも此處へ寄る暇はあるとみえるな。すると閑な夫人達の退屈しのぎの爲には美容院もあつていいわけだな。

手を拂ひながら仕切を出ると、

「もうお歸り？」と一つの鏡の中で大森夫人が目をくるりとさせました。シャンプーをすませたばかりの夫人は、しつとりと黒い髮をホット・エーアのパイプの下で乾かして居られるのでした。

「お先に、――」

すげなく通り過ぎるのも惡い氣がしたので、私は大森夫人の椅子の背後にちよつと立ち止まりました。が忽ち私は立ち止つて惡いことをしたと思ひました。ときおろした黒髮の中央には、直徑一寸以上もあらうといふ禿が、妙に蒼褪めた感じの光りを放つてゐたのです。

野球ベンチの秘策

新田恭一

ベンチ秘策と云ふと何か特別な秘手でもあるやうに思はれますが別に變つた特別な秘策があるわけではなく野球にも碁の定石の如くたしかに基本となるべきシステムがあります。たゞ碁と異ることは非常に野球には運がともなふことです。でありますから正しい定道をやつても失敗する場合もあり反對に無茶なことをして成功をする時もあるわけです。たゞ常道は成功率が多く無茶は成功率が少ないのは勿論です。ですから野球ベンチの秘策と云つたら原理を知つてゐて時々無茶をすることです、無茶と云ふより奇手と云つた方が適當でせう。此奇手を用ひる事は、何れのチームにも同じとは云へません、相手のチームを知り味方の選手の各特長を利用しなければなりません。故に此奇手はチームによつて異ると云へるでせう。然し野球は碁などと違つてさう變つた場面が數多くあるわけでありませんから大體に於て此奇手もチームとしては或る點まで共通することゝ思ひます。

それでは此野球のセオリーは何んなものか、これを説明するには餘りに専門的になり長くなりますで、それよりこんなことがあつたと實際にあつたことを御話をした方が良いと思ひます。それには、現在の米國の大リーグのセオリーとしてゐる大體の事が何時頃日本に輸入されたかと云ふ事を御話してそれから現在までの我國(主にリーグ戰)の野球の變化進歩して來た過程を御話して比較説明した方が判り安いと思ひます。

此米國の野球セオリーが我國に輸入されたのはマグロー將軍幕下のジエーフエー、トンムプソン兩ジヤイアントの選手が來朝して塾の選手を親しくコーチした時と云つても過言ではないと思います。

そして此セオリーが最近たゞボールの變化(飛ぶやうになつた)或はベーブルースのやうなプレーヤーの出現によつて幾分の變化はしてゐてもセオリーの根本は殆ど變化はなく、此シエーフアー、トンムプ

ソンに受けたセオリーが丁度現在の樣にバランスの取れたチームに依つてそれが實際に實行されるやうになつたと云つてよいでせう。

最近の野球と昔の野球とがいちゞるしく變つて來た事は、誰でも感じる事と思ひます。今私が云はんとしてゐる野球が違つて來たと云ふのは、設備とかリーグの組織とか云ふのでなく各選手のプレー振りチームの戰い方が變つて來たと云ふ意なのです。勿論設備、リーグの組織等は私共が云々するまでもなく餘りにも變り私等が現在の若い選手の方々の樣に毎日學校が終ると運動場に行くのを樂しみにしてゐた頃十年も前に想像だも出來なかつた程立派なグランドが、關西にも東京にも出來て、考へも及ばなかつた多數のファンを收容してゐます。此四五年大變な變り方です。また此秋から神宮は改増工事に着手せんとしてゐます。リーグの組織もシーズンごとに改革され二十年の間とけなかつた早慶戰も今では立派にリーグ戰の模範とされて人氣を呼んでゐます。

こんな點の變化進歩は誰れにでも直ちにうなづかれますが、今私の云はんとしてゐる選手のプレー及チームとしての戰ひ振りが何んなに變化或は進歩してゐるかと云はれると、これは多少野球に經驗のある、又昔も今も野球に直接關係してゐる人でないと大體のことは判つても詳細のことは判りにくいと思ひます、

又昔と今と云つても、ずつと昔、極端に云へば昔の早慶戰時代と、現在のそれとを比較すればあまりにかけはなれてゐます。私の昔として語らんとしてゐる、即ち現今のベースボールと比較せんとしてゐるのは、塾で云へば三宅腰本君時代と(私が塾であつた爲め塾のことについて一番判り安いのでこれによつて御話します)現在のチームとについて話をして見たいのです。此三宅腰本君時代は塾の野球史に於てたしかに一時代を劃してゐます。其以前に塾がニューヨークジャイアントのシエーファー、トムプソンの兩氏を招いて親しくコーチを受けたのが菅瀬石川兩氏頃から漸く此時代に効果をもたらして塾のシステムを完成したと云つて良いからです。

そして此時代から、前述の如く塾のチームについて云へば故松田、森秀雄君兩キャプテン時代は三宅腰本兩君時代の續きと見て差支へないと思ひます。それから私のキャプテン時代が變化の起り始めで桐原、山岡青木君時代は此變化の眞最中と云へるでせう。そして現在のやうなチームが出來たのです。

話は餘談に渡りますが此野球上の變化が丁度學生の生活と云ひますか、思想氣質上と云ひますか、それもこれと同じ時代に變化の道をたどつてゐる樣に思はれます。或は又世間一般の生活思想もこれと同樣の過程を進んでゐると云ひ得ると思ひます。

三宅腰本君並に故森茂樹君の全盛時の塾のチームは非常に強く現在の塾のチームに比して優るとも決して劣つてゐないと思ひます。現在の大學の選手が中學から大學に入つて選手になるまでの經路と昔の選手の生立ち」と非常に異つた處があります。それで現在のチームの優れた點「もあれば昔の（今此處で云ふ昔とは十年一と昔と云ふから十年以上になるが塾の三宅君時代の事を云ふ）チームの勝つた點もあります。

昔と今のチームの異つた點は、現在のチームの選手の第一階段とも云ふべき中學校の野球が全國的に隆盛になつたので、從つて大學の選手となるべき優秀なる選手を數多くの内からピックアップ出來るので、大學チームの各ポジションが平均して上手になり選手の數が多くなつたのでチームに余裕の出來たことであります。

それでは昔のチームの優れた點はと云ふと、前にも述べた樣に時代の變遷或は中學の野球の隆盛等の原因によつて現在の選手が割合に樂に大學の選手の列に加はることが出來るようになつた結果丁度角力が昔の横綱と現在の横綱と比較して何處かに現在の横綱に物足りなさがある樣に、何處かにある物足りなさを感じさせられます。それは昔の選手の各自が現在の監督位のアイデイヤをもつてゐました、丁度前述の如くセオリーの基礎の出來た時分のこととて各選手が既に議論を戰はして研究に沒頭しました。ですから試合のとき各自がピンチに際しても如何に處すべきかよく心得て居り、たゞチームを統卒してゐるキヤプテンの一指を待てばよかつたのです、此點はたしかに其當時のチームの強みであつたように思はれます。

現在のプレーヤーでも少數の人は心得てゐてプレーしてゐる人もあります、たゞ全體として比較して云つてゐるのです。ピンチに際するとなかなか監督一人では全部に注意する暇がありません。例ば自分のチームが守つてゐて味方の投手が弱つて來てゐる、そして一死走者一壘、三壘などの場合どうしても監督の頭は投手に主に注意され壘手及外野手がインニング、得點の關係によつて如何に守備すべきか迄注意する暇がない場合があります。こんな場合私が審判をしたり見物してゐて現在の選手が迷つてゐられるのを良く見受けます。それが再三同じチーム同じプレーヤーに見かけると前述と同じことが云へると思ふ樣なわけです。此頃の試合でよくピンチになるとプレーヤーが何んの爲めかあつちに行つたりこつちに行つたり傳令が飛んでなかなかプレーが進行しません。こんな場合全部のプレーヤーが各自爲すべきことを心得てゐてたゞ監督のサインをまてば良い所までいつてをればピンチに際してもチヤンスに際しても落ついてプレーが行へると思ひます。よくプロフエショナルの試合振りを見ると餘りに試合が早く進行するので初めて見た人は、此連中は、餘り考へず大マカに試合をしてゐるよ

うに思ふ人が多い樣です。私も實際、ある相當野球の專門家がこんな話をしてゐるのを聞いて、なるほど普通のフアンがさう云ふのは無理もないと思ひました。彼等は一つ一つ頭をつかつてゐるのです。たゞ全部のプレーヤーが、其差こそあれ、自分のすべきことを知つてゐて監督のサインによつて動いてゐるから、プレーが無雜作に行はれるのです。フアンの多くは、こんな時に際して傳令が飛んだりコーチが蠻つたりするのをほんとうに愼重に試合をしてゐるように考へますが、こんなことをしたら良い試合は出來ません。

それについてよい例があります。私がサインを出すことになつてゐて、味方が七回目にパスボールのどさくさまぎれに二點勝越して、一死倆走者があつてスクキーズプレーするにもつて來いのチヤンスでした。私はパスボールがバツクストツプに達し三壘の走者が本壘に向つて走り二壘の走者が三壘に達した時はもうすでに、自然のまゝにスクキーズのサインをしてゐました。其處で誰れも知らん顏をして平靜でプレーにうつれば意外のことで相手は面喰つたことゝ思います。なぜかと云へばインニング七回で二點勝越してゐれば普通打つ場合が多いのです。それを今一點取つて二點より三點より確實にする爲にと思つたのです。殘りの回數が少い故スクキーズプレーは一般に一點取れば勝つとか對になる時に用いますがこれは相手が警戒するので非常に危險で前述の樣な場合殊に今のべてゐるようにどさくさして、フアンも騷ぎプレーヤーも落ついてゐない時がもつて來いの時なのです。丁度此時に私がすでにまだ誰れもが次のプレーのことを考へてゐない時にサインを出してゐると、得點の喜びから我に歸つた味方のプレーヤーがわざわざ私の立つてゐる所に飛んで來て今度バンドした方がよくはないかと云つて來ました。たしかに其人の考へはよかつたのです。あの場合スクキーズプレーの絕好の場合だつたのです。處が萬事休す、其プレーヤーが私の處へ飛んで來たばかりに私に氣をつけさせることが相手にも氣をつけさせることになつたのです。こうなつてしまへばスクキーズする事は非常に危險です。なぜかと云へば、スクキーズプレーは、投手のモーションと同時に三壘の走者は本壘に向つて突進するので投手が豫期すれば打者の打てない所に投げます。(これをウエストボールと云ひます)ですから豫知されたらあたら三壘走者を無駄死をさせてしまひます。

こんな豫知される恐れがあつたら打たせた方が得策なのは勿論です。此話の時も前述の樣なわけで味方のプレーヤーがうれしさのあまり私の所に注意に來た爲め其處に間があつて敵にも注意する機會を與へてしまつたので、次の打者に打せました。そして其時は試合には勝ちましたがチヤンスをそれだけで終つてしまひました。こんなのは良

い例で、あの場合全部のプレーヤーが心得て居れば三壘の走者に注意を促がす必要もなければ打者に傳令の飛ぶ必要もないのです。パスボールの生じた時に次のプレーに移つてゐるのです。そしてたゞキヤツプテンなり監督なりの最後のバンドか打つかと云ふ指示を誤らないように待てば良いことになるわけで其處に少しの間もないわけです。

ですから如何によい策を監督がたてゝも一寸したプレーヤーの不注意から反對の惡い結果に終ることがあります。此頃のチームはベンチに監督がゐて打者に對してよく色々と注意してゐます。打者はチヤンスに際すると必ず打つべき場合と云つても良い場合でも自分の考へでは誤らないように見えて監督に賴り自己信念がうすい樣に見受けられる場合が多い樣に思ひます。それは監督の爲さんとすることを打者自身の方から考へないからではないかと思います。これはプレー上に非常なる影響をもたらすことは勿論です。

試合後の批評によく投手を變へたから惡かつたとか、後の投手を先に出せば良かつたとか結果から云々されることが多い。結果が現れてからなら勝手なことが云へるが、其當時內部に入つて見れば色々と事情があり、又其時直面して見ると餘程熟練した人でないとプレーヤーと共にエキサイトしてしまつて、平靜であれば色々と氣のつくべき處が氣がつかずに終り、又反對に餘りに神經過敏になり過ぎて何の選手を見ても不安に感ずる樣なことがある。

ベンチとして一番に困難なことは投手を何時交代させるかと云ふことであります。勿論ベンチコーチは各投手のコンデイションを知つての上のことです。多くリードしてゐて次の試合に餘力を殘して置く爲めに投手を交代させることはさして難事ではないのですが、一人の投手では危險であるから二人或は三人の一番良い部分のみを組合せて對抗させる、或は二回戰三回戰に備へる爲めに交代させるとなると大變にベンチは頭をなやまします。必ずしも投手が出來が良いときまつてゐません、必ず運が供なひます。第二投手が出てゐて危ないからもうそろ〳〵正投手を出してと思つて出して案外正投手が打たれて敗けるようなことがあります。こんな時評者は投手を替へなかつたらなどゝ勝手なことを云ひます。又反對に正投手が出てゐて打たれます、正投手の方が餘程リーフ投手より優れてゐるのでついベンチは今少し今少しと正投手に投げさして、リーフ投手を送つた時は取り返しの出來ない得點を與へてしまつてゐるようなこともあります。そして此第二投手が後に少しも得點を與へなかつた場合早く投手をかへればと云はれることもありコーチ自身後で考へることもあるでせう。結局速すぎてもおそ過ぎても結果は惡いのですから難かしいわけです。勝負事ですから非常に其日の運が影響します。然し其處になにか方針のあるべ

きです。まあ大體に於て次の様に考へたら一番よいと思ひます。投手を變へなくて濟めばこれに越したことのないのは判りきつた事ですが、變へなくてはならないと不安を感じた時さて何時變へようかと用意してゐる時敵或は味方に變化のあつた時に變へるのが一番良い時と思ひます。例へば第二投手を出してゐる場合敵が良く當てゐるが安打が割合に少なく又出ても散發し或は味方の守備が非常に調子が良くゲームが平凡に進んで行く時、こんな時は未だ第一投手と云ふ切り札があつてもうつかり變ると折角味方の調子が乘つてゐて相手がハードラックに行つてゐるのを良い投手を變へたにも拘はらす此平調を破つて失敗する場合が度々あります。ですからこんな場合試合が終りに近づいて正投手が最後の守りを堅くしたい時でも、味方に得點があつた其後とか、また敵に一點を入れられたとか、或は非常なるピンチにおそはれたと云場合の外、前述の如くゲームがなだらかに進行してゐる時投手を變るのは非常に危險です。

其他に敵の打者も考慮に入れるは勿論です。

投手がノックアウトされる場合、打たれたり四球を多く出したりする外に、運惡く味方にエラーが出て安打は稀にしか出ないで其投手は退かねばならない場合が度々あります。こんな場合ベンチは其投手に對する人情がからんでは取り返しのつかないことをして其試合をロストしてしまふことがあります。誰れでも折角よい投球しながら他のプレーヤーのエラーから投手を變へるのは情に於て忍びません。處がこんな時は前にも度々述べた様に運が惡いので何時迄も見切りが惡いと深海にはまつて最後のものをなくしてしまいます、果斷が必要です。實際私が長く投手をしてゐたので此經驗を持てゐます。運の惡い日は、打者を最後迄追つめて遠いボールになるカーブで振らせてやらうと思つて投げると、思ふ處に球が投込まれ打者も思ふ壺にはまつてボールに手を出して呉れ凡打して呉れたと思ふと、これがテキサスになつて立派に相手に得點されてノックアウトの浮き目を見た事が度々ありました。これが反對に行くと良い當りが野手の正面をついて呉れて、却つてダブルプレーなどのチャンスを作つて呉れて打者ばかりでなく壘にゐる走者まで殺して呉れるようなことがあります。

運と云へば昔私が投手をしてゐる時こんなことがありました。私は三宅君、平井君時代から時々スピットボールを投げてゐました處、私が一夏一生懸命にスピットボールを練習してやつと自信が出來、これによつて其秋の初めに來た强打者揃ひのカリホルニアを日本に於て敵のチームのみ敗かした事がありました。其當時早稻田は米國遠征で留守で明大は渡邊君、法政は砂澤君が投手でした。明大法政共皆十點以上も得點されて敗けました。敵のチームも私が第一回戰にスピットボール

を使はずにやつた處十三對二で目茶々々に打たれて敗けました。處がどうしてスピツトボールを使はなかつたかと云ふと、スピツトボールに用ゐるエルムバツクと云ふ口に入れてカムものがなかつたのです。所がコツケイなことに相手にもスピツターがゐてエルムバークを持てゐるのが判つたので、早速と第一回戰に敗けた夜ホテルにエルムバークをもらいに出懸けました。すると其投手が其を呉れた上色々と親切に說明してスピツトボールはこんな風に投げるのと云つて呉れます。さて明大法政の大敗した後勢との二回戰になると先方もスピツトボール投手私も勿論其もらつたエルムバークによつてスピツトボールを投げました處が、第一回戰に目茶々々に打たれた私が三振を十四も取つて六對一で美事に勝つてしまいました。其一點もエラーで得點されたので危くシヤツトアウトにする所でした。そしてこれによつて三回戰四回戰と勝利を得ました。其頃小野君がゐて全盛時代のダイヤモンドも遂いに勝てず、勢に敗けた以外全部カリホルニアが勝ちました。其頃の勢は大して良いチームではありませんでした。

メンバーは、投手新田と濱野1B長谷川、2B高須、3B高木、SS桐原、LF高濱、OF山岡、RF松村、こんなメンバーで良く勝てたと思います。

其頃明大は渡邊君の元氣な頃で梅田君谷澤君稻葉君時代でした。自分で云ふのもおかしい事ですがたしかにスピツトボールの御蔭だと思いました。さて此カリホルニアとのセリースが終つて早稻田も歸つて來て秋のリーグ戰が始りました。そして明大との試合の時に私がプレートに立つてスピツトボールを使ふと、明大のキヤプテン稻葉君が抗議を申込んでスピツトボールを投げてはならないと云つて來られました。此スピツトボールは其春の規則改正によつて此ルールが出來る以前から使つてゐた投手は差つかへないが、今後新しくスピツトボールを練習して用ゐることは出來ぬと云ふことになつたのです。私は其以前松田君の主將時代明大の小西君安藤君時代に盛んに使つてゐたので當然差つかへなかつたのです。たゞ其頃餘り自信もなく効果もありませんでした。處が突然試合の時になつて問題になり兎も角試合後會合することになつて試合を終り、明大の人々と逢つて話して見ると、其頃は今の樣にリーグの規約が完全に出來てゐないのでルールは米國のリーグのを使用するがスピツトボールを使つては試合をしないと、がんばられました。勢は使いたし相手は使つては試合をしないと云はれるので結局水かけ論でスピツトボールを使はないことにしました。所がおかしなことに此時は秋のシーズンでありましたが、其春にスピツトボールを使つてはいけないと抗議された明大の岡田君（現在監督の）が時々投手をしてスピツトボールを使はれてゐたのですから變なものでした。ですから結局勢の申出てゐるスピツトボールを使用すること

は規則違反ではないが、使つては困る且つ試合をしないと云ふことによつて私は泣き寢入りをさせられてしまいました。これが又法政との試合の日にグランドで明大と同様法政にがんばられたのです、實際私泣きたくなりました。折角一生懸命に練習して手に入れたと思へば其を使ふ事も出來ず、そうかと云つてスピットボール練習の爲め普通のカーブに自信がありません。ですから其法政の試合當日、もうどうにでもなれとしやくにさはるので打たれてもかまふものかといゝかげんにフラフラと投げてゐるとかへつて少しも打たれず、結局樂に勝つてしまつたことがありました。其時つくづく投手なんて運が餘程手傳ふものだとつくづく感じました。米國には現在でもスピットボール投手が今尚活躍してゐます。

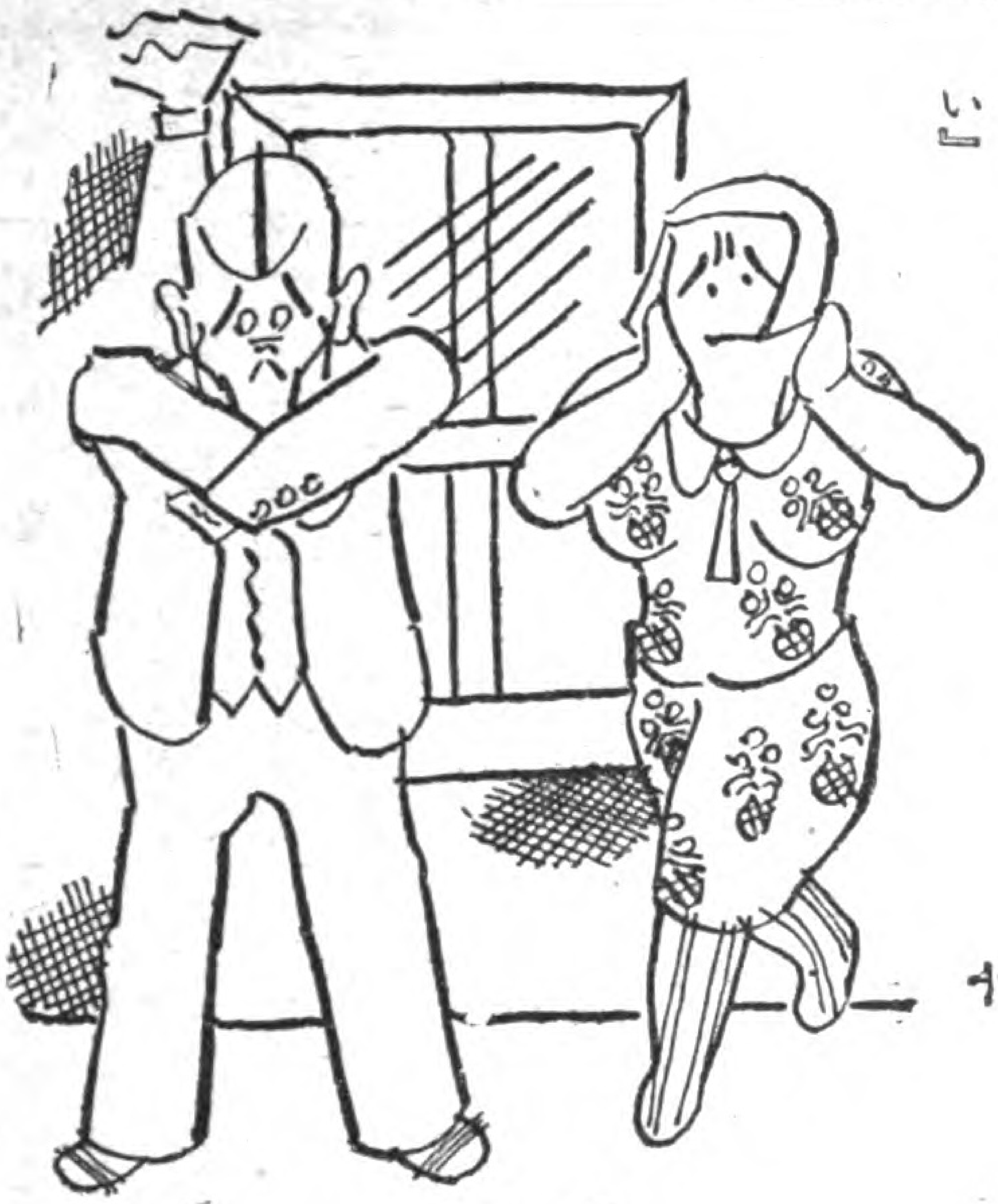
私が卒業する前キヤプテンの時夏滿州に遠征して天津でオリンピツクに優勝したヒリツピンのチームに尚二三優秀な選手を加へたチームと試合した事がありました。敵の投手は濱崎君で私は捕手をしてゐました。

相手のバツテリーは有名なピルチユルボ、プラトンでした。そして濱崎君の出來が素晴らしく良く又こちらは相手のピルチユルボの球が打てず一對一のまゝ十八回迄で戰つて遂いにピルチユルボに二壘打を打たれて二對一で敗けたことがありました。此時餘りに打てず又壘に出ても捕手の球が良くて盗壘出來ず最後の手段として、一死でも走者が一壘に出ると普通なら盗壘して打つべきであるのを裏をかいてスクキーズと同じ様にバンドさせ走者を走らせ、それも一氣に二壘を越へて何んでも三壘に突進させるようにして置いて、打者に三壘に向つてバンドさせ三壘手があわてゝ一壘に投げる時のスローのエラーと、又一壘手が三壘に投げ返す時のエラー、及び三壘手が此一壘よりの送球を受けるにはバンドを處理した後なので急ぎ壘にバツタしながら處理せねばならないので非常にエラーするチヤンスがあるので、これを見込んでこんな最後の手段も試みたことがあつた。相手も打てず盗壘が出來なかつたので同じように一死でバンドで送つたり、一壘からの走者が無茶と思ふ位に一擧に三壘迄突進して來た。實際に走者が思はぬ無茶をして來ると余裕があり過ぎてあはてゝ暴投することが多い。タイカップなどが人の出來ない盗壘をしてゐたのはこれを利用して隨分目茶と思ふ盗壘を試みてゐた、そしてこれが前述のような理由でよく成功してゐたのであります。

肩のこらぬモダン風景

和田邦坊

(一) ラヂオ



秋風立ちそめて窓を閉めたら夏中樂んだ隣りのラヂオが聞えなくなつた、

妻『詰んないわねえ』

夫『ウム詰んない』

(二) 斷髪



斷髪の細君と月を見に行つて話してゐた彼が急に頭へ手をやる、

細君『どうかしたの』

彼『いや、あの影がどつちのかと思つて』

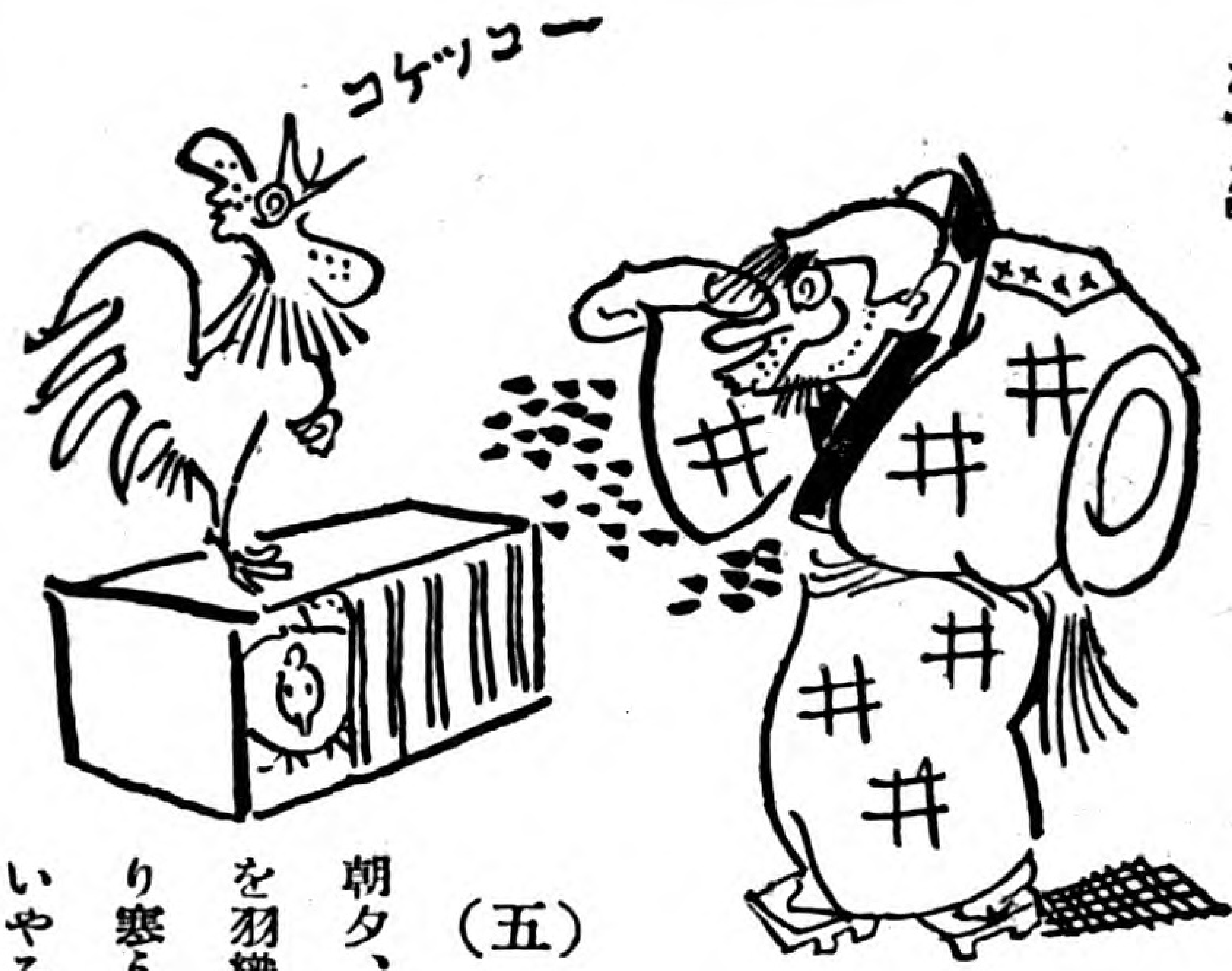
(三) 洋裝



『彼女の洋裝は夏のだけしか持つてないんだ、だからホラ寒くなつたから彼女は和服に着更へただろう、だから僕がラブレターを袂へ入れるんだ、どうだ』

（四）朝寝

朝寝坊で遅刻ばかりするので馘首(くび)になつた男が暇潰しに鶏を飼つたら毎朝早くから起されて寝られない、男『こんなことならもう少し早く鶏を飼へばよかつた』



（五）袖なし

朝夕、急に寒くなつて洋裝の上からお婆さんの袖なしを羽織つたらお婆さんに『そうれ見なはれ、やつぱり寒うなるとモダンやいふたかて昔のものが良ろしいやろがな』と言はれてゐる。



（六）マッチ

夏中通つて來た客と所帶を持つた女給『まあ、こんなに寒くなつて來るのに何んにも無いのね』するとと男が『そのかわり、そこにカフエーのマッチが澤山あるだらう』。



邦坊画

私が愛誦する秋の歌と句

○ 齋藤茂吉

ゆふされば小倉の山に鳴く鹿の(は)こよひは
鳴かずいねにけらしも(舒明天皇)

朝に行く雁の鳴く音は吾がごとくもの思へか
も聲のかなしき(讀人不知)

○ 柳原燁子

ぬば玉の夜は更けぬらしたまくしげ二上山は
月かたぶきぬ(憶良)

○ 堺利彦

先づ思ひうかぶは例の

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音に
ぞ驚かれぬる

○ 前田河廣一郎

最近とくに記憶するほどの愛誦歌もありませんが、秋が來るとシエレーの詩やブライヤントの詩などを思ひ出します。その一句は——

『The melancholy days are come
The saddest of the year——』

でありますが、あとまでは口誦みません。

○ 室生犀星

あきふかきとなりはなにをするひとぞ
(註、秋深き隣は何をする人ぞ、翁)

○ 小澤碧童

一寸『猿蓑』より拜借

栗稗と目出度なりぬはつ月よ (半残)
上行と下くる雲や秋の天 (凡兆)

○ 中村憲吉

萬葉集より二首

夕されば小倉の山になく鹿の今夜は鳴かず寐
宿にけらしも(舒明天皇)

君待つとわが戀ひをればわが宿の簾うごかし
秋の風吹く(額田女王)

○ 深尾須磨子

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

來る秋毎におのづから誦まれるものの一つです。殊に纖細なわが國の夏から秋への推移が、この一首によつて遺憾なく味はれます。

○ 吉田紘二郎

義朝の心に似たり秋の風

あかあかと日はつれなくもあきの風　（芭蕉翁）

○ 西村陽吉

秋立つは水にかも似る洗はれて思ひことごと新しくなる　（石川啄木）

木々のかげまだらに落ちてわが肩に秋の日重し林に死なむ　（若山牧水）

○ 吉植庄亮

馬追虫の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

黃昏の霧たちこむる秋の田のくらきが方へ鴫鳴きわたる

右長塚節氏の歌に候

○ 櫻井忠溫

秋の空廓家として影もなしあまりに淋し鴉など飛べ　（啄木）

○ 荻原井泉水

雨はれて淸く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき　（大伴家持）

○ 堀口大學

秋の田の穗向のよれる片縁に君によりなな言痛かりとも　（但馬皇女）

男。秋の夜の千夜を一夜に擬へて八千夜し寢なば飽く時のあらん

返し。秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鷄や鳴きなん　（伊勢物語）

○ 吉井勇

歌——

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりける　（若山牧水）

句——

死にもせぬ旅寝のはてよ秋のくれ（芭蕉）

自分の歌——

秋の風馬楽ふたたび狂へりと云ふ噂などつたへくるかな

○ 佐佐木信綱

楫取魚彦の歌

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

多くのすぐれた人の出た縣居の門下で魚彦は歌人としては最もすぐれてをる。この一首のごとき、同じく秋の雲を多く詠じた上田秋成の作よりもまさつてをる。

○ 若山喜志子

此の宵はこほろぎ近し厨なる笊の栗などにゐてか鳴くらむ　（長塚　節）

國の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの日の靜けかりけり。（若山牧水）

○ 藤澤桓夫

何かないかと頭を捻つてゐたら、ひよつくり大塚金之助さんの歌が、別に愛誦してゐるわけではないのですが、浮んで來ました。何年か前の露西亞革命記念日の夜、大塚さんはマニフエストを懐中にして淺草の人混みのなかを放浪し、この歌をよんだ、と僕に話された。露西亞革命記念日が秋だと言ふ理由でこの歌を秋へ入れることが許されるなら——

國境追放はれしカルル・マルクスは妻におくれて死ににけるかな

○ 尾上柴舟

心こそあくがれにけれ秋の夜のよふかき月をひとり見しより　（源　道濟）

秋風のさむき夕べに津の國のさび江の橋をわたりけるかな　（香川景樹）

○ 龍膽寺雄

徹底的な春の禮讃者なので、春の愛唱歌句なら數知れず持合はせてゐますが、秋のはまことに寥々たるもの也。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

など隨一。　（芭　蕉）

○ 高濱虚子

特に愛誦する一二句といふものは無之候。古き俳句にて愛誦するものは數百句に上り候。新らしき俳句も亦た之に準じ候。故具

新刊批評

小野武夫博士編著「維新農民蜂起譚」

土屋喬雄

一

エンゲルスの有名な「ドイツ農民戰爭」の書かれたのは、一八五〇年であり、彼が資料的に專ら利用したチムメルマンの「大農民戰爭の歷史」の初版が公けにされたのは一八四一——三年であつた。その後もドイツでは續々として農民戰爭に關する勞作が公けにされてゐる。かくの如くドイツにおいては農民戰爭に關する科學的研究は、既に前世紀の前半において行はれたが、社會史研究においてもドイツに比し半世紀以上の後進國たる我が國では、百姓一揆がやゝ科學的に研究され始めたのは、大體において十年來のことである。

瀧本博士、佐野學氏等の研究は、大正十年前後に發表されたと記憶するが、その後小野武夫博士、木村靖二氏、黑正巖氏、田村榮太郎氏等の研究もしくは資料の編輯刊行が行はれて、百姓一揆特に德川時代のそれは、今日ではかなり明かになつた。(尤も、黑正氏の綜合的研究において二十數件を擧げられたに過ぎぬ越後、佐渡のそれが、最近新潟縣內務部の綿密なる調査によれば、およそ五十件を數へる例もあるから、德川時代のそれの研究も、事實的な方面に限つても、未だ充分とは云へないであらう。)

しかし維新以後の農民一揆の研究は、その重要さにもかゝはらず、德川時代のそれよりも今のところ一層不充分である。それに關しては從來個々的な研究があつたのみで、多くの件數につき詳細な記述を提供するものは、最近公けにされた小野武夫博士編著「維新農民蜂起譚」を以て嚆矢とする。

二

この書は、博士の嘗て編輯せられた「德川時代百姓一揆叢談」(昭和二年)とほゞその成立の事情及び體裁を同じうするもので、地方史家の勞作十一篇を集錄し、それに博士の「解題」及び「維新農民一揆の研究資料」なる文獻目錄を加へられたものである。これら諸篇のうちには既に故人となられた人の舊い文獻もあるが、博士が新たに執筆を請うて得られたものもある。今各篇の件名及び執筆者を列擧すれば、次の如くである。

第一篇、三河の僧侶一揆(故田中長嶺氏)、

第二、備後の簡知事引留騷動（平戸市兵衞氏）、第三、土佐の脂取一揆（武市佐市郎氏）、第四、越後の分水騷動（石井清吉氏）、第五、甲斐の大切小切騷動（水上文淵氏）、第六、日向の佐土原一揆（故長友政治氏）、第七、筑前の竹槍騷動（伊東尾四郎氏）、第八、越中の小作一揆（高島幸吉氏）、第九、相州地主の燒打故伊東市太郎氏）、第十、上野の秣場騷動（田村榮太郎氏）、第十一、伊豫一揆（西園寺源透氏）

右の各篇につき簡單な概觀を試みる餘白をも有たぬが、これらは何れも、鄕土史家一流の周到な考證と豐富な資料とによつて成るもので、その各の叙述方法の特質によつて、一、暴動そのものを詳細に記述したもの、二、事件の指導者の性格、行動等を特に詳述したもの、三、事件を詳述すると共に指導者の性格、行動をも叙述せるものの三種類に大別し得る。從つてなかには、特に故人の筆に成るものには、聊か小說風に過ぎる叙述もないではないが、何れも事件の顚末を傳へること詳細であつて、資料的價値は甚だ大である。

そしてこれらは、件數において必ずしも多くはないが、特に複雜なる現象形態をもつ明治初年の一揆の種々の形態のものを網羅し、その何れもがその種のうち重大なるものであるから、今後本書が明治初年農民一揆の硏究者にとつて、必讀の書、基礎的參考文獻の一たるべきことは、云ふまでもない。

三

右の如く本書は、「中央史家」たる小野博士が多くの「地方史家」の勞作を綜合せられたものであるから、我々は第一に各執筆者の篤學に敬意を表すべきであるが、博士の綜合の勞をも亦多とすべきである。蓋し、「地方史家」の手に成る史的硏究の珠玉は、往々にして地方史壇に埋藏せられ、甚だしきは、空しく篋底に藏せられ終るものなしとしない。かかる珠玉を集め之を中央に紹介することは、社會史學の發達上頗る重要である。かかる意味において「解題」に博士の試みられた各篇の筆者其他の地方史家についての懇切な紹介は、地方史家と中央史家との結合に資すること大である。ともかくこの種の事業は、特に農民一揆等の硏究には必要なることいふまでもなく、我々は博士によつてこの種の編著がなほ續々として公けにさるゝことを希望して止まぬものである。

なほ最後に、卷末に掲げられた綿密なる「維新農民一揆の硏究資料」も、この方面の硏究者にとつては、頗る便利なる手引であることを指摘して、簡單なる紹介の筆を擱く。

（一九三〇、九、五）（東京市芝區愛宕下町改造社發行・定價四圓五十錢）

今和次郎、吉田謙吉兩氏編著の「モデルノロヂオ」

川端康成

「モデルノロヂオ」（考現學）とは、この「學」

の開拓者である今和次郎氏等が、「現代風俗或ひは現代世相研究に對して採りつつある態度及び方法、その仕事全體」を、「考古學」と對向的に名づけた名稱である。つまり、現代人の生活振りの「採集、調査、集計、考察の仕事」を指すのである。考古學と同じやうな方法で現在を取り扱ひ、考古學が史學と交渉するやうに、考現學は社會學の補助として働かうといふのである。「現代人の生活振りの僞らざる繪入りの報告書」——今度出版された「考現學」の第一卷を、吉田謙吉氏はさう呼んでゐるが、考現學そのものの現狀を現すにもまた適切な言葉ではないかと思ふ。

私は考古學者ではない。また風俗學者でもなければ、社會學者でもない。しかし、少しづつはそれらのいづれでもあるところの一作家として、三四年前に吉田謙吉氏の「考現學採集手帳」を見て以來、考現學に非常な興味を寄せてゐたと云ふに過ぎない。從つて、その「第一卷」に對しても門出を飾るに足る言葉を贈ることは出來ない、またこれまで類のない新しい仕事だから、比較すべき標準もない。ただ、この「學」の今後の無限の發展と、無限の困難とを、おぼろげに想像するばかりである。「社會學や、心理學や、能率學や、或は地理學やへの資料の役を果す」に到るのであらう未來の發展を、期待するばかりである。

けれどもしかし、少くともこの「第一卷」は、「學」と呼ぶよりも、寧ろより多く「作家的」である。つまりその採集が斷片的であり、卽興的であり、隨筆的であり、またスケッチ的である。「考現學」の方法の見本であり、通俗案內書である。だから、「學」を期待する人には勿論物足りないであらうが、畫家達の仕事であるだけに、「繪入りの報告書」として、微笑ましい親しさと魅力を持つてゐる。われわれの身のまはりの風俗圖だからである。なにげなく見過してゐるものが、ここに拾ひ上げられてゐるからである。例へば多くの人々は、マッチを用ゐながらマッチ・ペエパアを見はしない。マッチ・ペエパアの展覽會へ行つて、初めてその美しさに驚くのである。この本の風俗蒐集も、その展覽會のやうな美しさを持つてゐると云はうか。

「考古學」の困難はその材料の少なさにある。しかし「考現學」の困難はその材料の餘りの多さにある。いかに多くの費用と、いかに多くの人を使つたとしても、「考現學」の材料を完全に集め得ることは、想像も出來ない。この本だけの材料の採集にも、著者の一人の吉田謙吉氏が、いかに蒐集狂的な努力を惜まなかつたかを、私はよく知つてゐる。廣漠に、そして複雜に、刻々に生れ、また消えて行く、現代世相風俗に對して、「考現學者」が今後よりよく戰ふことを、私は切に希望する。かういふ本が作家にとつてもいかにありがたいものであるかを知るからである。後年これらの仕事がいかに貴い資料となるかは無論として、また今日の一般の人々にもいかに新しい「趣味」として愛されるかは、目次を一見すれば明らかである。（東京市日本橋區通三丁目春陽堂發行・定價參圓八拾錢）

ソヴェート映畫記

衣笠貞之助

一

モスクワの驛へ着いたのは、かれこれ正午に近い頃だつた。ソヴェート・ロシアの新しい首都としてのモスクワは、私が長いシベリヤの汽車の中で、あれやこれやと頭に描いてゐたものとは、すつかり違つて、思ひの外に、おちついた靜かな町だつた。街を歩いてゐると、あたりがへんに靜まり返つてゐるだけに、かへつてあらゆる公館に一九一七年以來そのまゝ飜つてゐる赤い旗や、赤地に白の大きな字で書かれた、この國獨特のいろんなスローガンや街を歩いてゐる快活さうな青年少女達の若々しい顏が、强い刺戟になつて、私の心をうつた。

ロシア滯在の短い期間內に、何か一つの專門のことについて、少しは組織立つた見聞を得やうとするには、まづ何よりソヴェート同盟對外文化連絡協會（ＢＯＫＣ）の世話にならなくてはならない。このウオクスが、ソヴェートと諸外國との文化の連絡機關であること、そのいろんな仕事等については、日本を發つ前に二三の人が注意をしてくれたので、私は、旅の疲れが直りきらない翌朝、早速その事務所を訪れた。帝政時代には將軍が住んでゐたと云ふ立派な建物の中で働いてゐるのは、殆んどすべて若い女の人達で私が訪ねて來た用向を傳へると、丁度居合せた會長のカアメネヴア夫人が「よく遠くからわざわざやつて來てくれた」と云ふ意味の歡迎の言葉をのべた後、映畫の事を見たいのならと、映畫部長のミルマン夫人に紹介してくれた。そこで私は、たづねられるまゝに、滯在日數と、會ひたい監督、見たい映畫、見學したい個所とを云ふと、夫人は、すぐに私のロシア滯在中のプランを立てゝくれた。二年前に私が日本を發つた頃には、ロシアの映畫界の事情は殆んど知られてゐないで、たゞエイゼンシュテインの「ポチョムキン」とプドフキンの「母」とがすばらしい作品であると云はれてゐた位で、ロシアの映畫界については、フランスの批評家のムウシナツクの「ソヴェート映畫旅行記」などに頼るより他はなかつ

た。私はとにかく、エイゼンシュテインとプドフキンの二人には是非會ひたいと思つてゐることを述べた。

エイゼンシュテインは丁度「全線」のロケーションに行つてゐなかつたが、プドフキンには、ミルマンが電話をかけてくれて明日の夕方に會ふと云ふことになつた。

二

クレムリンの城壁に添うて下りて行くと、モスクワ河の橋に出る、この橋を渡るとプドフキンの家がある。その五階建の一番上の部屋に彼が住んでゐるのだつた。この部屋は、かつてある畫家がアトリエにしてゐたと云ふだけに、非常に感じのよい部屋で、その窓からモスクワ河とクレムリン一帶が全部見わたせるやうになつてゐる。

「母」「セント・ペテルスブルグの最後」「アジアの嵐」等で知られてゐるこの若い監督は、初對面の外國人である私に、熱心にロシア映畫の根本的な傾向を説明してくれた。プドフキンの話しの仕方は、巧な表情と手まねとで、どこまでも對手を説服しなくてはおかないと云つた風で、話に夢中になつてくると「卓をたゝいて談ずると」云つた調子であつた。

まだロシア映畫を殆んどみてゐなかつた私は、自然アメリカやドイツの映畫から話を始めなければならなかつた。プドフキンは私のいろんな問に快く答へてくれた。

――ドイツの映畫は嫌だが、アメリカ映畫は必ずしも排斥すべきではないと思ふ。實際吾々はアメリカ映畫に學ぶところが多かつた。今、吾々と一緒に働いてゐる若い監督達の多くは、大抵一度は、アメリカ映畫の再編輯（國内上映のための）の仕事をやつて來た。さうすると、今まで氣がつかなかつたいろんなことが判つて來る。その時分のグリフイスの映畫等には感心したものだ。しかし、一齣一齣見て行くとなると、何と無駄と不注意が多いことだらう。吾々の仕事はこゝから新しく初めなくてはならない。

――アメリカの映畫がなぜそんなに無駄が多いか。「お話」や「作りもの」に力こぶを入れてゐるからだ、映畫のいたるところにスターが大きな顔を出すからだ。――僕は、映畫の構成は、音樂に學ぶべきところが多いと思つてゐる。たとへば、ピアノのキイはそれ〴〵一つの音をもつてゐる、それを組合せると一つのメロデイーになる、このメロデイーとその變化から、あるテーマをもつた編曲が出來上がる。

――それと同じやうに、映畫では一齣一齣が、組立の材料になる。だから一齣といへどもおろそかには出來ないわけだ。僕達はカメラの

位置には特に注意を拂つてゐる。映畫の俳優がメイク・アップをすることは、もつての他だ。僕は今まで、自然をその生きてゐるまゝに、映畫に取り入れて來た。……

私は、こゝで初めて映畫の「組立」と云ふ言葉を聞いたわけだつた。そればかりではなく、その時まで私が日本でやつてゐたことが、全くその出發點から考へ方が違つてゐたのではなかつたかと云ふことが、おぼろげながら考へられた。

それから、シナリオについて、映畫の内容について、撮影について、いろ／＼話はつきなかつたが、プドフキンはたびたび、こんなことはいくら言葉で云つても駄目だから、作品と實際の仕事を見てくれといふことをくりかへした。

いろいろ話はつきなかつたが、再會を約してホテルへ歸つて來たのは、もう、夜中の一時に近い頃だつた。

三

メシユラブポムの撮影所を訪ねた時には、丁度都合よくプドフキンが「アジアの嵐」を撮影してゐるところだつた。彼の監督振りで特に目立つたのは、俳優に芝居をさせると云ふ風なやり方ではなく、云つてみれば、俳優の一人一人を必要な場所に配置してゐると云ふ感じだつた。

このスタデイオは、以前ミユジツク・ホール・レストランだつた建物を利用したので、中央の大きなホールがアトリエに、又その帝政時代の豪奢な一室がそのまゝ試寫室に改造されてゐる。さう云へば、磨大理石の厚い壁にむざうさに穴をあけたのを立派な柱からロープをはり渡したのが、昔のまゝに殘されてゐる天井の大きなシヤンデリアと面白いコントラストをしてゐたこのアトリエの樣子を今でも思ひ出すことが出來る。こゝの試寫室でプドフキンの「母」と「セント・ペテルスブルグの最後」の二本を見た。云ふまでもなく、この映畫は、それぞれロシア革命史から題材を取つたものだが、たとへばエイゼンシユテインの「十月」が歷史上の革命の事實をそのまゝ示してゐるのとは違つて、壓迫・鬪爭の中から鍛え上げられてゆく人間を描くことによつて、同時にまたその背景になつてゐる時代の生き生きとした姿を現はしてゐる。從つて手法の上から云つても、私達には全然新しい方法が用ひられてゐることがわかつた。そして、プドフキトが云つたモンタアジユと云ふ言葉を思ひ出した。燈がついてみると、こゝでもスクリーンの上にスローガンの一つが書いてあつた。

休日には酒を飲んで遊ぶより、家にゐて新聞を讀め—

四

ロシアの映畫事業は云ふまでもなく、すべて國營事業になつてゐる。製作はよく知られてゐる通り、ソフキノ、メシユラブポム、ブウスク等が主にやつてゐるのであるが、映畫の全聯邦への配供の仕事は一般にソフキノによつて行はれてゐる。全聯邦での上映設備はその當時（二八年）で八千と云ふ莫大な數に上ると云ふことだつた（日本の常設館數は約一千三百）。その內四〇〇はモスクワに一〇〇はレニングラードに。云ふまでもなく、ロシアでは特に農村及び勞働者クラブでの上映に力を注いで居て、この八千の內、工場のクラブに屬してゐるものが二、三〇〇を占めてゐる。そして、尙二九—三三年の經濟計劃の一つとして、全國の映畫網の擴大運動が實行されてゐる。

ソフキノの本社は例のプーシユキンの銅像のあるツベルスカヤ街の表通から少しはいつたところにある。その正門を入つて右手に發送部があつて、各地から映畫の配給の用件で出て來たらしい人々が見受けられた。

私が、エイゼンシユテインの「ポチヨムキン」「十月」を始めシユウプの作品などを見たのはこのソフキノ本社の立派な試寫室の一つであつた。「ポチヨムキン」と「十月」については、こゝで說明するまでもないと思ふが、私の見た限りではたゞロシア映畫としてのみではなく、おそらく世界の映畫の中での第一の傑作であつたと云つてよいように思はれる。私にとつてさへさうであるから、事實「ポチヨムキン」の思ひ出をもち、「十月」の經驗を共にした人々にとつては、この映畫がどんな感動を與へたかは、私達には想像さへ及ばないものであつたことだらう。この種類の映畫は、普通煽動映畫だと云ふので、何か觀客に無理やりにおしつけるやうな、ギゴチない映畫のようにも考へられ易いが、この樣な力強い題材と密接に結びあつてゐる手法、技術などの點から云つても、私達には驚歎すべきものばかりであつた。

五

作品を見てから、私はますますエイゼンシユテインに會つてみたいと思ひ出した。ウオツクスから彼がモスクワへ歸つて來たのを知らせてくれると、私はすぐその日に彼の家を訪ねることにした。

カブキ（左團次の）の芝居が見たさに「全線」の撮影を一時中止して、二百露里も離れてゐる片田舍のロケーシヨン先から今朝歸つて來たばかりだと云ふエイゼンシユテインは私の手を力強く握りながら、「僕はまだ無妻で、ごらんの通りの生活をしてゐるので何もお構ひすることは出來ないが」と斷つて、「とにかく、くつろいでくれ給へ」を

何べんもくりかへした。彼の住んでゐるのは一間きりの部屋で、そこが書齋であり、食堂であり、同時に寢室であつた。

――「十月」を見てくれたか、あれは「紀念祭」に間に合せようと、いそいで作り上げたので、まだ不滿の個所も少くない。しかし、とにかく、あれだけに仕上げることが出來たのは、ソヴエート當局の何ものをも惜しまない後援と、またいかに小い仕事にたたづさはつてゐた人々も、決して個人の仕事だとは考へないで、全力をあげて働いてくれたからだ。

――たとへば、「十月」のあらゆる情景はすべて、十年前のそのまゝを出さうとしたのだが、それは決して、少數の個人の手で出來ることではなかつた。政府はその當時のオローラ號を出動させてくれたし、多數の軍隊も喜んで援助してくれた。ことに、あの勞働者街と市の中心地を遮斷する爲に橋をつり上げるシーンを撮るには、八日間にもわたつて、毎朝電車の往來を止めた外、實際にあの白馬を二匹まで殺してしまつた。街の人々もこの間の不便を忍んでくれたわけだ。「十月」は殆んど全部が夜間撮影だつたので、超感光フイルムを使つたが、その當時にドイツのアグファから飛行機で取よせたものだつた。

――僕は、ソヴエートの若い監督として、映畫の最も正しい道を歩かなければならぬと云ふことを常に考へてゐる。言葉で云ひ表はされるものは、おそらく、まだほんとの映畫であるとは云へないだらう。僕は、吾々が考へることが出來るものは、すべて映畫で表はすことが出來ると思つてゐる――あらゆる思想、あらゆるスローガンを。したがつて、僕達の任務は非常に重い。

――僕は所謂「映畫劇」と云つたものは、絕對に認めない。しかし、また一般には、やはり劇的なものが歡迎されてゐるのは事實だが。その意味で、プドフキンなどは、ロシアでも一番評判のいゝ監督の一人だらうと思ふ。僕達は、革命後の新しい生活の中から育てられ、新しい敎育を受けた、若い監督達に、一番期待をかけてゐる。

――だが、ロシアの映畫自身が若いのだから、監督達の中にも、「昨日の藝術家」と云つていゝ人もゐることはゐるだらう。

――映畫の材料はいくらでもその邊にころがつてゐる筈だ。實際、なにも革命の動亂のシーンだけが映畫の材料では決してない。現に吾吾のロシアは、建設の時代に入つてゐる、新しい藝術は絕えず生れたがつてゐる。カフエーの隅にも、公園にも、街にも、或は都會から遠く離れた農村にも。吾々は題材に苦しむことはない。――少くとも、そこに、何らかの意味での鬪爭が行はれてゐる限りは……

「だが、まあ映畫の話なんか後廻しにしてゆつくり苺でもたべやう」と、さつきからの話の間に女中さんらしいのが苺とミルクをふんだん

に運んで來たのを私にもすゝめた。カプキの話などをしながら、その苺を片づけてしまつた頃には、モスクワの街にもすでに夜の燈がついてゐた。

六

ソフキノでは今モスクワの郊外に新撮影所を建築中で、こゝには最新の設備がそなへられるとのことである。今のモスクワの撮影所は革命以前からのアトリエらしく、グラス・スタヂオをある程度まで改造して使つてゐる。私が、こゝを訪ねたのはたしか城戸四郎氏と一緒だつたと思ふが、丁度ある若い監督が、何か移動の場面を撮影中だつた。私は、こゝで最初からエイゼンシュテインと働いてゐるアレキサンドロフとカメラ・マンのテイッセに會つた。彼はかつて、カメラをもつて赤色パルチザンに加り、或はペジョミインスキイの騎馬隊に參加してゐたと云はれてゐるが、ロシアの若いカメラ・マンの多くは動亂の時代には、所謂「千軍萬馬」の間を往來して來た人々であり、今日でもそれと同じ覺悟で映畫の仕事にたづさはつてゐて、その活動振りはいろんな映畫の中に現はれてゐる。

テイッセは丁度手のすいてゐた數人と一緒に、撮影所の內部を方々案內しながら、ソフキノの現狀について、いろいろ說明してくれた。その話によると、この撮影所に屬してゐる監督は十八人、技師二十三人、專屬の俳優は男優五十人、女優四十人、撮影所に働いてゐる人々は全部で八百人に上るとのことであつた。

この時は十四の組が仕事をしてゐたが、一般に、一本の映畫の製作時間は二ケ月半から半年位が普通で、その一本のネガからは百本から百二十本位迄のコピイーが燒付されると云ふのを聞いても、國內の上映機關がどんなに活動してゐるかと云ふことが想像出來る。二萬一千アムペアの直流を供給する設備をもつてゐるこのアトリエでは、パルボ五十、ペル・ハウエル三十、計八十の撮影機が使はれてゐた。勞働時間は午前九時――午后五時が規定だから、實際は六時間半又は七時間の勞働になる。普通この位の時間內に每日二十から二十六のシーンが撮影されると云ふことであつた。

私は、いろいろ說明をきゝながら、彼等が何らの秘密なく、どんなところでも見せてくれるのに、むしろ驚いた位であつた。これは後の話だが、伯林では、撮影所はやはり實に秘密の多いところだつた。

七

丁度夏の特別なシーズンだつた爲か、私がモスクワにゐる間中は、街の常設館では特にこれと云つて記憶に殘つてゐるような映畫は上映

されてゐなかつたやうに覺えてゐる。しかし常設館は相當立派なものがあり、新しいものも次々に建てられる樣子だつた。私の見たのは、「キノ・コロス」だとか「第一ソフキノ」だとかだつたが、「コロス」の方は夜間四回（五時、六時四十五分、八時半、十時十五分）の上映であり、「第一ソフキノ」のは正午に初つて終夜四回づゝの上映だつたと思ふ。特に私に興味のあつたのは、入場料で、スクリーンとの距離によつて、見にくい坐席ほど料金が安くなつてゐることであつた。たとへば、「第一ソフキノ」では一列目は三十五コペイクで、二三列目が五六十コペイク、九列から二十六列までは均一に一留十コペイクになつてゐた。「キノ・コロス」の樣に二階にもいろいろ坐席のあるところでは、一階の前と二階の後の方が安くなつてゐるといつたわけであつた。又晝間は均一にして三十コペイク位にしてゐる常設館も少くなかつた。そして、私の見た常設館では、大抵相當な圖書室を備へてゐて、勞働者風の靑年達が熱心に本を讀んでゐるのをよく見かけたものだつた。

八

ある日、たしかツペルスカヤ街だつたかと覺えてゐるが、小さな常設館で、（その時見た映畫はどうしても思ひ出せないが）偶然、十四五人の「ソヴエート映畫友の會」（オドウスク）の會員達に會つた。この「友の會」と云ふのは、云ふまでもなく、ソヴエート映畫の發展と向上のために協力しようと云ふ組織で、今日では各地に數萬の會員を持つて居り、製作の方面でのあらゆる援助、作品に對する批評と希望、製作者と觀客との密接な聯絡、などの仕事によつて、今日のソヴエート映畫の發展に貢獻するところが少くなかつたと云はれてゐる。私はこの常設館の二階での「友の會」の集會を見て、その討論の內容ははつきり判らないが、細かい問題にわたつて、きはめて熱心に論議してゐることだけは、だんだん熟して來るその場の空氣からも察することが出來た。今試寫した作品について、どんな個所が觀客にうけたか、それはなぜであるか、この映畫の缺點はどんなところであるか、そして、更に觀客はどんな映畫を要求してゐるか、等々が主な論題であつた、と會員の一人が說明してくれた。彼等は、この討論の結果を、ただちに製作者側に報告するのであつた。映畫博物館の仕事をしてゐるポルチヤンスキイも會員としてこの席にゐたと思ふ。「友の會」が云はば映畫の觀客の側の組織であるのに對して、映畫の專門家達は「アルク」（革命映畫勞働者協會）を組織してゐて、古くから特別の機關雜誌を發行してゐる。アルクの主な仕事は、專門家の間の連絡と相互研究、一般の討議、個々の作品の批判指導といつた方面にあつた。

この樣にして、ソヴエートの映畫事業は、あらゆる合理的な地盤の上に進められてゐる。そんな意味からも、私はモスクワの映畫專門學校（G・T・K）を一度は參觀したいと思つてゐたが、合憎夏休み中で生徒達の大半は實習に出かけてゐたので、その實際を見ることが出來なかつたのを殘念に思つてゐる。

ロシアでは、專門家として映畫の仕事に從事するためには、今日では監督、技師それぞれ四ケ年、俳優三ケ年の特殊な大學教育を受けねばならぬことになつてゐる。エイゼンシュテイン、プドフキン、ロオムなどもその教授をして居り、一般的な課目としては、政治經濟、コンポジション、映畫歷史、美學、藝術史、樣式の歷史から運動、ダンス、表情に至るまでの廣い範圍にわたつてゐる。

九

モスクワからおよそ半日の旅程を距てゝゐるレニングラード、こゝでも、モスクワと同じやうに對外文化連絡協會の人々が、心から歡迎してくれた。旅行者が是非一度は見なくてはならぬ宮殿や博物館、記念碑なども少くない。街を歩いてみると、エイゼンシュテインの「十月」で見覺えのある橋や建物や街角などが目につく。そして映畫のシーンを思ひ出しながら、その實際を見てみると、かりにカメラ・アングルだけを云つても、今更ながら彼が實にすばらしい才能をもつてゐることがわかる。

レニングラードのソフキノ撮影所は、私の記憶に間違ひがなければ、これまで見た中で、大きさから云つても、設備の點から云つても最も完備したものであつた。こゝでも昔のレストランだつた時代の名殘を見ることが出來る。大きなホール二つをアトリヱにして、ホールの廻りの二階に監督室、技術室にならんで俳優の部屋がある。また、電氣、大道具、小道具、のみではなく、撮影に必要なものは、トリック用小道具製作場、ライト其他機械類の修繕工場、等々すべての部門がこの建物に集められてゐる。現像部は、郊外の以前の別莊地帶に理想的なものを建築中であつた。私の訪ねた時は、コヴインチェフとトラウベルグの二人が、巴里コンミュンの紀念映畫「新バビロン」を撮影中で、その編輯の仕事も見せてくれたが編輯部屋の充分な設備には感歎の他はなかつた。そして、この編輯部屋を、一人一人の監督達がもつてゐることだけは、いかに編輯の仕事を重く見てゐるかと云ふことを示すものであると同時に、あくまで個々の監督の獨立性を保護してゐるその方針がうかゞはれた。普通の映畫では六萬呎のネガから一萬呎位を使ふのだと說明してくれた。尙この撮影所で特に氣がついたことは、大ぜいの人々が、單なるエキストラに至るまで、實に元氣で

熱心に傾いてゐることで、何事にも研究的な態度は、私もアトリヱを見物してゐて、しばしば若い人々から日本の映畫に就て、また日本人としての私の見たロシア映畫の批評についての質問を受けた位であつた。彼等の一人は私の手を握り乍ら、吾々にとつては、どんなささいな仕事でも、國家の仕事であり民衆の爲の仕事である事を力說した。

一九二八年九月一日、私はこのロシアの舊都をあとに、バルチック海を船で伯林へ向つた。

十

伯林の生活の愉快な點は、この都會が丁度ヨオロッパ諸國の一つのクラブの樣になつてゐて、いろんな人々が集つて來、またいろんなものを見ることが出來ることであつた。殊に市内の常設館に、時々ロシア映畫が上映されるので、そんな時は友達を誘ひ合せてよく見に出かけたものだつた。ロシア國内で評判になつたロシア映畫は一通り伯林でも上映されると云つて、差支へないようだ。

私が伯林で二年の間に見た主な映畫を思ひ出してみても、エイゼンシュテインの「ポチョムキン」「十月」「全線（土への闘争）」、プドフキンの「母」「セント・ペテルスブルグ」「アヂアの嵐」、ロオムの「ベットとソファ」「歸らざる女」を初め新進の監督の作品としては、エルムレルの「帝國の破片（記憶を忘れた男）」、トウリンの「トルクシブ」最近ではドフジエンコの「土」などであつた。

この樣な、近頃の作品をみて、まづ氣のつくところは、技術的な方面での進步で、畫面の美しさなども、ドイツの作品に較べて決して劣らないと云つてもいゝことであつた。また、作品の傾向から云つても、全聯邦を擧げて所謂社會主義的建設に力を集中してゐることがうかがはれた。エイゼンシュテインの「全線」（舊と新）は農村經濟の工業化を取扱つて居り、トウリンの「トルクシブ」は、ソヴエート國家經濟計劃の重要問題であるトルキスタン・シベリア鐵道の建設を描いてゐる。そしてこのことは、又同時に映畫に於いての今までの劇的なものに對して「記錄的」なものの新しい領域を示して居り、それらが、無名の三十才に足らない若い監督達によつて作られてゐることは、今後のソヴエート映畫の發展についての私達の期待を大きくさせるものであつた。

十一

私は、ドイツからの歸途は、非常にあはたゞしい旅行をしたので、最近のロシア映畫の實際を詳しく見ることが出來なかつたのを殘念に思つてゐる。伯林でプドフキンに會つた時には、彼のトーキー第一回

作品「人生案内」が今年の一月頃に完成するとのことで、大いに期待してゐたわけだつたが、これはまだ出來上つてゐなかつたが、ソフキノでこの春完成されたロームが作つた試作品とも云ふべき「發聲映畫」と題されたソヴエートの最初のトーキーを見ることが出來た。

例のエイゼンシュテイン、アレキサンドルフ、プドフキン連名の「發聲映畫について」の宣言書が書かれたのは、私が二年前にモスクワを訪ねた頃で、その時にすでに、トーキーが、單な舞臺劇の複寫や、伴奏音樂の機械化のためのものでないことを明にし、音響も映畫全體の効果のために、計劃的に組立てられなければならないことを力說してゐる。そして、このような立場からトーキーをより力強い藝術として認めたロシアでは、技師ターゲルを主として技術の研究に沒頭し、遂にロシア獨特のシステムを完成した。

ロームの「發聲映畫」を見ると、このトーキーの技術の點でもドイツのシステムに較べて遜色のないものであると云つてよいように思はれた。この映畫は、パイプ・オルガンが「インタアナショナル」を奏でるところから始り、續いて、新しい藝術としてのトーキーについて音をもつた映畫の力強さについて、その文化的使命についてのルナチヤルスキーの演舌があり、國家が歩んで來た今日までの多難な道について、赤衞軍司令官のウオロシロフが述べる。(「十月」の斷片などが現はれる)だが今日の困難は別の所にある、疲弊した資材、工業化に對する無理解、今、吾々は全力を擧げて建設しなければならない。レーニンはすでに死んでしまつた、しかし彼の云つたことは尚吾々の内に生きてゐる、五ケ年計劃は完成されなくてはならぬ、それを力說するクイブイシェフ(最高經濟會議々長)。それは信賴することが出來るか、冷笑する人々。だが、工場の笛は鳴つてゐる、勞働者の足どり、うなり聲を上げてゐるモーター。一九二八年、二九年、三〇年、聯邦の電化事業は着々として進んでゐるではないか——(私にも見覺えのあるネガが所々に使はれてゐる)

プドフキンの「人生案内」は、又別な意味で期待されてゐる。

(ロシア映畫について何か書けとの注文だつたが歸朝以來忙しい日を送つてゐるので、材料を整理する時間もないし、何分甚だ不得手な語學での旅行なので、誤解や、聞き誤りも少くないことゝ思ふ。このことは豫め了解を得ておきたいと思ふ。)

——九、一五——

(長谷川如是閑氏より)　本誌九月號所載「非女性主義者としてのバーナード・ショウ」のうち、十三頁下段十一行目『ジッタの贖罪』の下に、左の文句を括弧にして入れることを忘れてゐた旨補遺申込みがあつた。
『ジッタの贖罪』(これは墺國作家の劇を飜譯したものだが、ショウが自己流に改竄したもので、やはり彼れの女性觀の一例として採ることの出來るものだ。)

高利貸巨頭列傳

谷 孫 六

道教の體得者

溺れざるものにこそ犬に喰はれて死ねばよい高利貸であるが、溺るるものには藁以上の救世主たる高利貸である。斯くの如く憎惡と羨望とのカクテルであるところのナンセンス的存在は、世人が之を承認する限り、彼等は飽迄明斷な存在を高調する。

彼等は人爲的情誼の範疇を超越して、法則的理性を機械的に操縱し、冷嚴なる需要供給の支配者となつて跳躍する。蓋し道義的訓練に育くまれた人間世間に、拔群の哲學を所有する徹底的天才と云はなければならない。

古くは德川時代に於ける藏前の札差しから、案内廣告に三行のアドーガンを連發して、信用貸金、恩給立替、電話金融に至るまで、數へれば枚擧に遑なき天才人の群出である。彼等は常に薄暗き帳場格子の中にあつて、藁を求むる溺者を操り、一諾即行、時に數萬の金をも恬然として右行左使する。しかして溢れんばかりの利子を算盤に載せて怪笑一番、窃かに欣快を味ふのである。

支那に未だ儒教の現はれざる時、道教と云ふものがあつた。天下の金を一人で集める法、と云ふものの中に、高歩を取つて貸しつけること、と云ふのがある。彼等はよく道教の意義を體得して、忠實なる遵奉者となつて居る、偉なる哉、でなければならない。

しかるに彼等にも未だ惱みなきでは無い、自ら其營業を否認し、窃かに行はんとする羞恥的逡巡が有る。天才また難きかなと云ふべきであらう。

此間に處して明治大正より現代を通じ斷然金看板を掲げて天才を發揮したものに平沼專藏、木村徳右衞門、乾新兵衞の三人がある。これを日本三羽烏と稱したのだが、平沼專藏既に逝き、木村また世を去

り、今は乾新兵衞只一人、道教の魂魄を吐いて高利貸の代名詞となつて居る。

乾新兵衞

惜しい哉、日本一の大天才、乾新兵衞は過般の渡邊事件から詐欺、横領の罪名に裹まれ、市ケ谷の別莊に一食七十錢の辨當を貪りながら、來るべき靑天白日を夢みて居る。察すれば新兵衞の肚裏、憤滿そのものがあらう。貸した金が回收不能となれば、如何なる手段でも取られねばならぬ、高利貸だからと云ふ理由で貸倒れを當然とするのは當らない、と云つて居るかも知れない。

さるにても顧問辯護士には、常に破格の報酬を支拂ひつゝ、法の研究に餘念なかつた新兵衞が、どんな錯覺であゝしたことになつたのか、千慮の一失とも云へば云へやう。軈て嚴正なる審判の下に、妥當なる宣告は下るであらうが、わが新兵衞に取つては、この機會こそ實際研究の一つであるかも知れない。

新兵衞の生ひ立は語るべく餘りに多く喧傳されて居る。唯彼が發奮の動機こそ、逆に行つたジャンバル ジャンであるだけに興味を感ずる。

彼元より資產家に生れたのではない。兵庫縣川邊郡北野村、小賣酒商前田兵衞の子と生れて與藏と稱んだ。彼十一にして小僧にやられた。其奉公先が堺町の酒造家乾新兵衞の家である。小僧時代から躍進的氣性に富んだ彼は、將來を托すべき運命の選擇に小さな煩悶を續けて居た。彼は樽拾ひ小僧に甘んじては居られなかつた。金融業小野組に走り島田組に走り、只管運命の巢を探し廻つたが、運命に疲れた彼は遂に再び乾家の店隅に一食を乞はねばならなかつた。この頃乾家は舊主夫妻世を去つて、一人娘のおよそと養子新太郎の若夫婦で店一切の切りもりをやつて居た。

與藏は持合はした糞力で樽拾ひに精進した。そのうちに幸か不幸か、主人新太郎が病死した。今年廿一になる御寮人はんは、悲嘆の中にも乾家を主宰して行かねばならなかつた。與藏の努力は店中でも拔群であつた。およそはそれを唯一の力と賴んだ、與藏も義憤に燃えて働いた。賴む力と賴まれる力、彼等は遂に女の子まで作り上げてしまつた。

これこそ泥龜の背中の如き彼が一世一代のローマンスでなければならない。斯くて前田與藏改め乾新兵衞の名が生れたのである。彼にはさかなき雀共が囀づる噂の焦點に立つた。樽拾ひの素丁稚から五十萬の身代へ吹き上げられた。彼は目的師だ、主人を口說いて財產を手に入れた。雜多な評判が彼を包んで、羨望と怨恨の坩堝へ叩き込まれ

た。

乾新兵衞が發憤の動機は實に玆に胚胎する。彼は先祖代々の酒造業を斷然廢止した。推高く掻き集めた現金の中に坐して、彼は世の呪咀と冷笑に酬いやうとした。「金融業」それである。彼の報復手段は蹈襲した財産を何倍かの數字に現はす、そして其金を稼がうと云ふのである。彼この孝道教の一節を知つてか知らずか、高歩取りの秘傳は彼の胸中に搏動したのである。そればかりではない。彼は儲かることなら何でも算盤を彈いた。ボロ船を塗りかへて賃貸することも覺えた。時將に日露戰爭當時、彼は巧みに金的へ天幸一箭の弦を放した。彼は船の儲けで悉く船を作つた。更に歐洲戰爭の好景氣は、彼の圖星へ藹蔚の祝福を贈つた。大正七年、有象無象が未だ黄金の醉に蹣跚としつつある頃、彼は持船全部を金に代へてしまつた。斯くの如くして彼の革袋はハチ切れさうな金貨で一ぱいになつてしまつた。新兵衞徐ろに不景氣な者共を睥睨して、寄らば斬るぞの音無しの構へ、溺れる亡者に藁を與へて、尻子玉を抜く河童の術まで心得てしまつたのである。

それは時めく大宰相、田中義一男に向つて、三百萬圓日歩十錢、手數料二割の算盤彈き、呀ッと云はした事例に徴しても、彼が彼冷笑者の懸酬手段から、遂に第二の天性を與へられ、不世出の大天才と成り了はしたのでは無からうか。

金貸し哲學

彼は常に云ふ。

——一流の大銀行でも、澤山の人から預つた金で融通するので、貸金の回收や貸出しの引締めは、どうしたつて世間の金融事情や事業界の狀況につれる爲め、個人の意志や感情を挾むわけには行かんから、借りる人の方から云ふと、借りた金をもう一年待つて貰ふことが出來れば、その金を借りて居る人の事業は充分に見込みが立つ、しかし銀行ではそれを待つてやることは出來ない、それが個人で融通して居る貸金なら、この仕事は見込があると思へば更に繼ぎ足してやつても其仕事を完成させることが出來る。世人は高利貸を冷酷無情の典型ででもあるかのやうに見て居るが、高利貸ほど人情味のあるものは無い、借手が正直であつて、その事業が確實であれば、金額の高や期限などは問題でない、銀行より利息が高いのは、さうした特典があるからだ——

これをしも牽強附會の哲理と云ふことが出來るだらうか、お座なりの銀行金融と、社會組織のギャップに無ければならぬ彼であるとすれば、彼の言また深刻な一面に存在する眞理でなければならない。

彼は更に云ふ。

――何故高歩の利息を取るかと云ふと、調査の不行屆や、見込違ひの爲めに、思はぬ目に逢ふことは、高利貸だつて神樣でない以上、必ず味はねばならぬことである。滅多に無い貸倒れを警戒する爲めに、利子を高くして置いて、損失の場合に補ふのである。つまりどんな商品でも全部賣れてしまふと定まつて居れば、安くも賣れるが、賣れ殘つたり破損したりする場合の保證に値段で加減するのと同樣である。――

彼はまた自然法則の原理を體得して居る。そして更に彼の秘傳とも云ふべきは

――概して高利の方が貸倒れが無いと云ふ理由は、高い利息の金だと利子に追はれる苦痛と、如何にも胸が惡いから、勢ひ利子の安い借金を後廻しにして置いて、高い方を先に濟ませることになる、かうした心理は萬人が萬人で、百發百中はづれたことが無い――

と、云ふのである。彼はよく人心の機微を捉えて世に處し、巧みに金儲けの網を操つて居る。

斯うした人生觀を會得する迄には相當の犠牲もあつたらうが、天才的閃きは隨所に溢れて居る。天才は生れながらにしてのみ與へられる特權ではない。新兵衞今や三十萬九千五十三圓の所得税を納めて國民の義務を果しつゝ、一億に垂んとする黃金を擁し、四半斤のジャム麭麵に晝飯の腹を滿足せしめて居る。壯なる哉七十有余歲の新兵衞老、願はくば彼に奇天を與へて驚天動地の天才的跳躍を望んで已まない。

馬越文太郎

神戸の乾新兵衞に比肩する天才を探し出すことは困難であるが、其財力に於て彼に及ばずと雖も、其膽力に於て、其實行力に於て彼に劣らざるものは我馬越文太郎翁であらう。彼今や七十二歲の高齢を以て矍鑠、數千萬圓の現金を引摑んで、旋風の如く兜町や蠣殼町に出沒する武者振は天晴れ壯としなければならぬ。

今年の春廿九圓臺を招んで居た期米が、おり〱下りに廿六圓まで來たのは五月下旬であつた。愈々六月の發會となつた時、誰もが廿六圓を割つて靑田聲の崩れ相場が出るだらうと思つて居ると、恰も釘づけにされたやうに廿六圓のところで相場は動かなくなつた。一日二日三日、懶うさうな上げ足を取つた相場は何ごとか思はせずには居なかつた。

突如、七日の先物は廿八圓五十三錢と素晴しい記錄を作つた。同時に各新聞の商況欄には「馬越老人現はる」と云ふ警報的文字が現はれた。これからが彼獨特の擅場である。當限の四萬石を現金と引換へて深川の倉庫に積み上げ、七月限八月限へかけて十三四萬石の買建を押

し進めた。そればかりではない、臺灣米や朝鮮米までへ手を延ばして三萬石四萬石と現物で買込み初めた。蠣殼町は云ふに及ばず、深川の正米市場まで、彼の腕力的買進みには恐く慴伏するより他はなかつた。さうして彼が儲けた金高は百萬圓以上との噂だが、彼元より相場師ではない、三年に一度、二年に三度、何時現はれるか米屋町の豫想を許さぬところに彼の天才が閃めくのである。さうした間に彼の本業とする所は矢張金融業である。つい最近にも七十有餘の會社を有する某大實業家が、約手を發して金融に奔走させた時、何人も之れに應ずるものがなかつた。某ブローカーは直ちに之を引受けたので某氏は不審に思ひ、一體誰に其約手を切らすのかと訊ねると、馬越だと言下に答へた。すると某氏は手を左右に振つて、馬越ならもう借りて居ると云つたと云ふ話がある。ことほど左樣に馬越の金は至る所に瀰流して居る。

　彼安政六年十二月十八日、今治市に生れ、明治十三年家督を受けて地方産業の開發に志を致した。勤勉と努力は彼の標語である。今治商業銀行は彼の手に依つて作られ、自らを驅使する旁ら、金にも一刻の猶豫を與へぬ働かせ振りをした。變態金融に目をつけたのは之れ以來である。いまや養子次郎氏に鄕里一切の事業を一任して東大久保四十九に廣大な邸宅を構へ、依然として變態金融に精進しつゝ、米株界の動靜を窺つて居る。

　彼は云ふ、

——高利貸と云ふけれども、自分は高利貸と云ふ意識は更に無い、たゞ目先の見えぬ銀行共が金の貸し方を知らない爲に、見込をつけて金を貸して居る迄だ——

　彼が新兵衞と異るところはこゝにある。彼未だ天才を得ず、俗臭の中に自らを否認して居る。

——高利貸と云はれるやうな人間なら、震災の時に五萬圓の金は寄附したいさ、今治にだつて十萬圓もの奬學資金を出して居る。昭和三年には紺綬褒賞を頂いて居る——

宜なる哉馬越文太郎翁、紺綬褒賞をして明滅しと云ふ勿れ、これこそ彼の醍醐味として人間的賞讃を送るべきであらう。

——十錢のうどんかけで晝飯の代りにしたと大さう儉約らしいことを云ふ人があるが、十錢だけ米を買つたらうどんかけの何十倍もある、世の中の見榮坊はみんなうどんかけ組だよ——

　彼の處世觀は、かうしたユーモラスが代表して居る。

東京の三羽烏

——蛯原萬吉、山崎武兵衛、梁瀨萬吉——

東京に於ける三羽烏と云へば、武藤三治、山崎武兵衛、蛯原萬吉の三人であつたが、武藤三治凋落し、二羽の烏になつてからは、形勢一變して三萬吉と云ふのが現はれた。然偶と云はうか、奇蹟と云はうか、同名の三人、しかも一代にして産を積み、同一の金融業に覇を爭つて居る。

三萬吉と云ふのは、蛯原萬吉、梁瀬萬吉、上野萬吉の三者で、當代の三傑と並び稱されて居る。

就中、蛯原萬吉の如きは、立志傳中の人として教訓を與へる經歴の所有者である。身を一介の車夫より起してと書くと、紳士録の記事めくが、事實彼は提灯に頬冠りをさせて、上野淺草界隈を放浪した車夫であつた。文久元年茨城縣北相馬郡井野村に生れ、二十五の時に東京へ出て來た。車夫から金を溜めて、人力宿の大親分になるまでの道程には、出世美談として殘されべき涙があるであらう。けれども交通の發達に連れて馬車、電車が勃興すると見るや、數十台の人力車を何の執着もなく賣拂つて金に代へた早業の如きは傑作中の傑作である。

現金を懐ろにして彼は銀行へ預ける代りに個人へ有利に預けることを考へたのである。これ即ち彼が高利貸の第一歩へ踏み込んだ動機であつた。高利貸が冷酷な性格となるのは借手からの教育である。彼は幾口かの貸金に成功して、幾口かの貸金に倒された。茲で賢明な彼は信用の背景に確實な擔保を要求することゝなつた。それが現在の盛大をなす正金商事會社の前身で、恩給年金立替業である。

彼は云ふ。

―長い間貸金業をやつて居るうちに、軍人や官吏で退職した者が金を借りに來る。恩給や年金を擔保に金を融通して貰ひたいと云つて來るが、恩給や年金は擔保にすることが出來ない。それにしても若い人達が退職して、これからといふ働き盛りに、僅かな年金に食ふだけのことで萎縮させると云ふのは人物經濟の上から見ても惜しいものだ。訓練や教育の屆いた若い人達を有利に働かしてやりたい、そこで前貸とか立替とか云ふ名義の下に貸してやることにした―

と、彼に云はせれば、恩給や年金を立替へてやることは有爲の士を世に送る社會奉仕であると云ふ。その社會奉仕が今や數百萬圓に達して居る。社會奉仕料として彼が受取る報酬は年一割二分で手數料は三分乃至五分である。他に比較して割合に高利でないのは何故か、それは百發百中、一文の倒れもないと云ふ理由である。

しかし、規定に依つて定められたる擔保不可能物を取扱ふ危險が無いかと云ふ疑問が起る、それはある、その場合にはどうするか。

彼は云ふ。

―裁判になると必ず負ける、負けるのは覺悟の上だ、何故かと云へ

と、年金證書を預り、委任狀を取つて契約書を取交はすのであるが、此證書は擔保とすることを禁じられてあるので云はゞ秘密行爲である。いざ裁判となり債務者の勝訴となることは當然だが、愈々債務者が其證書を取戻すとなると、債權者の方が渡さない。さうなると債務者は其年金なり恩給なりを日本銀行から取れないやうな手續きをする。これが債務者のつけめなのだ、債權者は默つて其儘五年間据置くことに諦める。すると今度は債權者の方から騒ぎ出して來る。と云ふのは五年間日本銀行へ取りに行かなければ時效になつてしまふのである、結局債務者の方から折れて來て話し合になる――

蛯原萬吉の極意皆傳は之れである。今年七十の老軀何は矍鑠として壯者を凌ぐ概ある彼は、疲勞と云ふものを感じた事がない、朝の八時から夜遲くまで、相手の訪者を引見して、紙背に徹する眼光の下に、一諾再否、當意即妙の鮮やかな天才振りを發揮して居る。

山崎と梁瀨

不動産擔保の貸出しで東京随一と云はれるのは山崎武兵衛である。彼は親代々の商賈であるが、神田猿樂町に事務所を置く資本金十萬圓の東京土地合資會社は即ちそれである。僅少な資本の會社と云ふ勿れ、其實彼の貸出し額は數百萬圓に上つて居る。勿論不動産擔保と云へば銀行や信託會社でも多く行はれて居るが、山崎位巧妙に利子や手數料を儲けてゐるものは少い。

其貸附方法は、普通銀行なり會社なりが時價の五掛又は六掛けに取扱つて居るものに對して、初めから八掛位に貸すのである。手數料利子は年二割で、大概は六ケ月の期限とする、六ケ月目になつて返濟が出來ない場合は延滯日歩を十五錢から二十錢の範圍で取立てる。遂に此高利が支拂へなくなつて來ると土地は完全に彼の手に入ると云ふことになる。

さうした貸出範圍は獨り東京のみならず、日本中孰れの土地でも貸出して居るが、最も多いのは東京及近郊である。

不動産金融の難とするところは、其決濟期間に於ける紛糾である。然るに彼は一人の手代を使ふことなしに、鮮やかな決濟振りを行つて居る。こうした大きな仕事の中に、區裁判所の競賣ブローカーをやつて居る有本といふ男が裏面に有つて助けて居ると云ふのも、此種營業のダークサイドになければならぬもの〻一つであらう。

梁瀨は麹町永田町一丁目三十二番地の自宅を事務所として活躍して居る。彼の白煉瓦の巨然たる邸宅の表門は嘗て開かれたことはない。僅かに右手の潜り門が時々鈴の音を振りこぼして居るのみだ。

あかずの門は秘密の象徴であるか、さうでない、試みに彼の門を潜

つて見よ、玄關に並ぶ赤靴、駒下駄、ゴム草履、列をなして如何に殷賑を極めて居るかゞ判る。人の通ふべき門は開かずとも、犬の潜る門を排して出入する人の如何に多きか、世相のナンセンスを遺憾なく物語つて居る。現金持ちとして東京第一の梁瀨萬吉當年取つて七十八才、數十の手代番頭を叱咤して東奔西走せしめる、絕倫の精力は壯者を凌ぐ活躍振りである。貸出しは蛞蝓と稍々似て居るが、重に不動產擔保に傾いて居る。勿論信用貸し、約束手形の日步取り、何れ擇はぬ高步の亂取り、目にも止まらぬ鮮やかな藝當に日が暮れる。

幸あれかし民衆金融業者諸君、さうして此不景氣の關を排し、明るき世界の現出に努力されんことを望んで止まない。



五文叩き（一幕）

長谷川伸

（一）老衰先生と空腹剣客。
（二）五文叩きの大繁昌。
（三）殴られる専門の先生。
（四）熊と剣客と睨めッこ。

人物

簗川　庄八郎。
苫山　半兵衛。
その妻　折江。
矢柄段右衛門。
穴倉　同心齋。
若づくりの妻。
金　八。
甚太郎。
熊　吉。
権　七。
魚屋虎松。門人、老若男女、娘、銭太鼓、伯楽、熊の膽賣り、熊、その他。

中央に軒傾ける草葺の家がある、そこは大圓形相流の劍法指南者、苫山半兵衛が年古く住む家だが、どうした事か雨戸が悉く閉めてあるので、空家の感じが強い。

家の左右には徑があり、畑、田などが一方に見え、一方には

宿場の家並がやや遠く見え、ここが宿場の片外れにあたる往來だといふ事が察せられる。

春の農閑季の或る日で麗かに晴れてゐる。

家の前に旅の飴賣りが出てゐる。飴が或る程度に賣れると、餘興に錢太鼓をやつて見せる、今は或る程度に賣れたので、錢太鼓をやつて見せてゐる。

老若男女が集つて見てゐる、その男の中に道場通ひをする者がゐて、この邊の若い衆の間には劍道を學ぶ慣ひがあるのが判る。

錢太鼓。お釋迦さんでも戀路に迷ふ、まして凡夫は尙迷ふ、こらさのさツさの、よやさのこらさ、こらさこらさと艪櫂を押せど、迷ふほど尙屆きやせず、こらさのさツさの、よやさのこらさ、こらさこらさと、やつとこさと口說く、返事の代りに叩かれた、こらさのさツさ、よいさツさのさあ。へえどうも有難う。

見物の老若男女が思ひ思ひに去る。先程、通りかかつて見物に混つてゐた伯樂が、家の前に立ち停つて怪み見廻はす。

伯樂。やれやれ、この家もたうとう空家になつたか。(行きかける)。

錢太鼓。へ? ここの家は空家だと思つてゐたが、違ひますか、もし、人が住んでるとすると、こんな處で商賣したのは惡かつた。

伯樂。良過ぎて惡い耳の人だ、空家になつたのか、といつたんだ。(燧袋を出して煙草の火を打つ)。

錢太鼓。ああさうですか、ぢや良いんだ。もつとも人間が住んでれば、晝日中こんなに戸を閉め切つとく譯がない。よく見るとこの家は大分古い、人間でいへば爺さん婆さんだ。一ツ火を貸してくださいまし、私も一服いたします。

伯樂。さあ、その爺さん婆さんがこの家に住んでゐた、夫婦かけ向ひでね。

錢太鼓。隱居所にしては間口が廣過ぎるが。

伯樂。劍術の師匠さ、いやもうはやらないの何のではない、一年にも半年にも竹刀の音一つ聞いた者がないといふ位はやらない先生さ。されば爺さん婆さん青菜の鹽漬みたいに、いつ

通つてみてもしほしほとしてゐたが、可哀さうにたうとう立退いたと見える。

錢太鼓。息子も娘もないのですか。

伯樂。娘はないが息子は一人あつたさうだが、何かで世を儚み、行方知れずになつたんださうだ、今居れば四十幾つ、やがて五十といふ男ださうだ。ここの先生も元は隨分はやつたものだ、わし抔が子供の時分は、劍術といへばここにゐた苫山先生の事と、赤ン坊だつて知つてたものだ、それがお前、この先の宿場へ穴倉先生といふのが道場を出した。この先生、腕よりも人間が如才なく、立廻り方が悧巧だつたから評判がいい、だから人氣をすツかり取られちやつたんだ。本當はここにゐた爺さん先生の方が、腕は出來るのだが人交際がうまくないから、弟子をみんな穴倉先生に吸ひ取られちやつたんだよ。

錢太鼓。品物は良いのだが買ひ人がないといふ譯ですね、よく世間にある奴だ。

伯樂。だからここにゐた日にはドドの詰りは餓死だ、今までは永年の間、賣り食ひをしてゐたらしいが、この頃では賣り盡してもう何もなからうからね、この家だつて二番抵當にはひつてるといふ噂だからね。

二人の話の內に旅修業の矢柄段右衛門、魁偉な面魂の見るから强さうな、しかし、至つて粗笨な劍士がやつて來る。

矢柄。おい〱、この邊に大圓形相流とかいふ劍法指南者で、苫山牛兵衛武常とかいふ者がゐるさうだ、それは何處だ。

伯樂。苫山先生ならここに住んでゐたんですが。今はどうですか。

矢柄。ああさうか、ここか。これは面妖な、戶を白晝閉め切つて、不景氣な道場だなあ。ふむ、さては早くも身共が來るのを聞き知つて、先手をつかつて居留守をつかうか、その儀ならだ。（節穴を見付けて覗き込む）。

伯樂。（興味を持ち）。ゐますか。

錢太鼓。空屋でせう矢ツ張り。

矢柄。（二人を顧み、居るぞといはぬ計りに微笑を見せ、戶を叩く）。お頼み申す。

伯樂。（節穴を覗き）。ほう成程。爺さんと婆さんと、猫背を並べ

てションボリしてゐる。

錢太鼓。へえゝ、ぢや空家ではないので、惡い事をしてしまつた。

矢柄。お頼み申すお頼み申す。拙者、武藝修業の爲、諸國遍歷の者でござる。一手御指南にあづかりたい。お頼み申す、お頼み申す。

錢太鼓。(伯樂に)。このお方は强さうだが、いゝやらない年寄りの先生では、とても勝負にはなりますまい。

伯樂。病氣だとか何とかいつて斷はるだらうが、それでは面白い物が見られない。

錢太鼓。さうです共さ。

内から戸が開かれる、老衰した劍士苫山半兵衞が現れる。

半兵衞。何でござる。(暗い處から光りの下を見るので、眩しげに手庇をして)。はゝあご入門か。(喜び勇む)。

矢柄。入門でござらぬ、身共は。

半兵衞。(耳にも入れず)。それは千萬忝けない。先づ先づ。婆殿、有難や入門の方が見えられた。戸を開けなされ。

矢柄。勝手にいたせ、爺め。

折江。(もう一枚戸を開ける、半兵衞の老妻、入門者と聞き急に元氣が出てゐる)。どれどれ。これはこれはようこそ、先づ、先づ。爺殿、入門の方を見るのは久々振り、何とけふはよい日でござらう。只今、戸を皆、開けまする、先づ先づ。(戸を開けるが、ヨタヨタとして捗どらぬ)。

矢柄。見てはゐられぬ、拙者が開けて進ぜる。(威勢よく戸を開けてしまう)。

錢太鼓も伯樂も、丁度、うしろの戸を開けられ、ウうわツ……といつて左右に別れ、別々に家の脇の方へ行き、成行き如何と見てゐる。

家の中は直ぐ板の間の道場だが、頗る古色を帶び、門人連の名札はガラ空きとなり、上段も慘憺たるもので、賣り食ひしたる形跡が歴然としてある。外した看板が無雜作に立て掛けてある。

半兵衞。(上段で、古袴を穿いてゐる)。

折江。(戸を開けてくれた謝意を表し、一禮する)。

矢柄。(眼もくれず)。さあ戸は悉く開いた。や、これはこれは

悲風慘雨の道場ぢやなあ、これを貰つたのでは却つて迷惑だ。

半兵衛。道場は汚ないが、この腕は、老い年とつてはをり申さぬ。(發止と二の腕を叩く、重心を失つて危ふく倒れかかる)。いやこれは物の機み。およそ機みと申すものは昔、源の九郎判官義經、牛若丸と申せし頃、夜な夜な鞍馬の山に於て。

矢柄。(腐れ床を踏拔き)。あッ。(膝をつく)。

半兵衛。や、お怪我はないか。

矢柄。痛い。(脛をさすつてゐる)。

折江。お危ぶなうござります。

半兵衛。さて門人。

矢柄。え？ 門人？

半兵衛。天晴れの骨柄、どこで今までご修業か存ぜぬが一と通りはご鍛鍊と見受ける。よくぞ見えられた。そも我が大間形相流と申すは、神世の昔、天地混沌たりし頃。

矢柄。(押ッ冠さるやうに)。身共、修業の流名は天神地神流、流祖は岩見重太郎先生の子孫、岩見重五郎宗岸大先生。今日、身共の參堂は、見らるる如く武藝十八般の蘊奥を極めんとて、諸國あまねく遍歴いたし、各流各派の諸先生に指導を蒙り。

半兵衛。(漸く感違ひを覺り)。お待ちくだされ、ご入門と思ひの他。

矢柄。他流試合をいたしに參つた、拙者が勝てば當道場をその儘貰ふ、もし又負けたら金三兩、誤まり料に差出す。拙者、姓は矢柄、名は段右衛門、諱は猛虎、年は。

半兵衛。婆殿、違うたわい。

折江。けふも又、悪るい日でござりましたか。

矢柄。しかし、この道場では貰つた處で甚だ詰らぬ。

半兵衛。お恥しいが他流試合とは思ひもよらぬ。

矢柄。さもあらう。

半兵衛。夫婦共に衰弱甚しく、起居の程も心許なき昨今、とてもとても。

折江。そのすき腹で試合に立つては、目が眩つて倒れませう。

半兵衛。何を申す、すき腹にしてゐるのは病氣の爲、米はまだある筈ぢや。

折江。え、ありますか、そりや有難い。

半兵衛。えゝ何を申す、慪め。
矢柄。試合を恐れる卑怯者、懲めの爲に表の看板を剝ぎとり參るぞ。
半兵衛。きのふまでは出してゐたれど、いよいよ引込めてござる。
矢柄。あ。表に看板木札はなかつたかな。
折江。ここにござれど、これは、今度、米が手にはひつたら薪にいたす心算、なう爺殿。
半兵衛。誠に。あ、米が懷しい。
矢柄。(愛想を盡かせ)。もうこの邊に武藝指南者はござらぬか、相成るべくば良い道場を持ち、多くの弟子を持つた——。
半兵衛。はて、拙者を知つて彼の人をご存じないとは不思議。
矢柄。手頃なのがござるか。
半兵衛。自在別流の指南者、穴倉同心齋と申し、四十四五歳の人物、身の丈およそ五尺四五寸、食ひ肥つて羨しき肉づきのよろしさ、手許も至つて豐な仕合者がござる。
矢柄。それそれ、それへ參つて稼ぐといたさう。(戸外へ出る)。
老夫婦。(顔見合せて落膽してゐる)。

伯樂。これから穴倉先生の道場へ入らつしやるんなら、どうでせう、私にご案内させてくださいませんか、その代り試合を見せてくださいまし。
矢柄。よい共見せてやる。(老夫婦に)。いや、さらば。(輕く一禮して、伯樂に案内させて去る)。
錢太鼓。(慌てゝ荷を擔ぎ)。私もご案内いたします。こんな面白さうな物を見損つて耐るものか。(行かうとする)。
服裝はちよつと出來てゐるが、いらぬ物は賣拂つた態が見える旅人の簗川庄八郎。絕食三日目、饑渇と奮鬪して步きつづけてゐる最中、ここに通り合す。
庄八郎。おいおい。物は相談、何か知らぬが食へる物なら與れまいか、その代り半刻ばかり、その荷物を擔いでやる。
錢太鼓。笑、笑談いつちやいけません。(急いで矢柄等のあとを追つて去る)。
庄八郎。慣れぬ事とて、かういふ掛合ひは頗る不得手だ、弱つたなあ。ひもじいなあ。(柱に思はず凭れる)。
半兵衛。(折江に)。かく成る上は是非もなし、武士らしく最後はせめて華やかに。なう婆殿。

折江。生きて詮なき浮世を棄て、來世へ急げばもしヒヨツト、行方知れずの我が子がゐて、待つてゐるかも知れませぬ。

半兵衞。表が開いてゐるが、閉める氣力も最早ない、ええ、棄てて置け。（刀を抜きかけ）。飯は食へねど刀は錆ぬ。

折江。貧に心は曇れども、嗜みの懐劍は、花嫁の頃と變らぬ光り。

半兵衞。だれに見せる的はなくとも辭世の歌を一首づつ、血潮のそばへ置いてみようか。

折江。はい。爺殿よりは心得のある三十一文字。では、辭世を。

老夫婦は辭世の歌作に耽らうとする。

庄八郎。（聞くともなく聞き、我を忘れて家へ飛び込む）。おツ。（床板の腐れを踏抜きて倒れる）。

半兵衞。（吃驚して折江を庇ふ）。

庄八郎。待たれい待たれい。何故の生害か存ぜねど、先づ相談を拙者に掛け、それでゆかずばとも角も。待たれい待たれい。

半兵衞。見慣れぬご仁。旅の人か。

庄八郎。何故の生害か仔細は仔細は、その仔細は。

半兵衞。（當惑して）。さあ。（老妻と顔見合す）。

庄八郎。一言にては盡し難き、深く長き仔細澤山ありとは重々察し入るが。

半兵衞。いや極く手短く聞せる儀でござる。

庄八郎。承はらう。そも何事。

半兵衞。恥かしながら、食へぬのでござる。

庄八郎。食へぬ？ あ、食へぬ。（頭を抱へて）。參つた。

半兵衞。貴殿もさては。お見受けすれば血氣のお年、それで、老衰いたした我々夫婦同樣に。

庄八郎。面目ござらぬ。空腹にて目下七顛八倒、動けば餘計いかぬと知れど、當所に家なき旅人ゆゑ、據どころなくうろうろいたす。同じ食へぬとは申せ、とも角も家のあるご夫婦と、比べてみれば拙者の方が、一段哀れでござるか知れぬ。

半兵衞。しかし、貴殿はまだ若い。若い癖に空しく腹をすかしてゐるとは、ははあ、格別、能がないのでござるか。

庄八郎。能はあつても腹がヘツては、思慮才覺も他愛なく空に返る。

半兵衞。ご名說ぢや、いかにも左樣だ。

折江。爺殿、歌はどうなりました。

半兵衞。このご仁に妨げられてまだ出來ぬ。どれ、一世一代の名吟を吐くか。

庄八郎。腹が空つて愚に返へるでは尋常茶飯だ、愚に返へらずに賢くなれ、さらずばただの人間以下だ。

半兵衞。默つてゐてくだされ。ええと、浮世かなぢや、さて、(節をつけて)浮世かなとは云ふものの。

庄八郎。(膝を叩いて)。あるぞッ。

半兵衞。ええ、驚かせるご仁ぢや。

折江。大きな聲は禁物でござる。

庄八郎。ご夫婦は食へぬのでござるな、拙者も同樣食へぬ。食へぬ處へ食へぬ奴が轉がり込んでも、差引勘定は食へぬと出る。

半兵衞。(歌を案じてゐる)。

折江。それがどうぞ致しますか。

庄八郎。拙者を當分、置いてくだされ。

半兵衞。飯が食へぬのでござるぞ。

庄八郎。そりやご同然、仔細ござらぬ。

半兵衞。ふうむ面白いご仁ぢや、で、どうなさらうと申さるる。

庄八郎。武藝指南の看板を出すのでござる。

半兵衞。そりや駄目ぢや、前車は既に覆つてござる、即ち拙者ぢや。

庄八郎。後車が覆つても尤々でござる。

半兵衞。は、成程。

庄八郎。一兩日の間、生害なさるを延期なされ、よい都合になるかも知れぬ。

半兵衞。惡い都合になるかも知れぬが。

庄八郎。それだとて尤々でござる。

半兵衞。は、成程。婆殿、どうする?

折江。ここまで凌いで參つたもの、あと一兩日ぐらゐは何んのその。

半兵衞。では、次手に生きてゐて見るか。

折江。それがよろしうございませう。

庄八郎。然らば、早速、看板を出したいが。

半兵衛。あの看板では役に立たぬか。

庄八郎。（一瞥して）。とても駄目。硯と筆はござらぬか。

折江。屑屋が買はぬ筆と墨なら。

半兵衛。硯の代りは土鍋の蓋、これでは役に立たぬのでござるか。

庄八郎。それにて結構。（筆墨、土鍋の蓋を持つて表へ出て、雨戸を一枚持ち出す）。

老夫婦。（ヨタヨタと表へ出て、代る代る墨を摺る。疲勞が早いので直ぐ交代する）。

庄八郎。（雨戸へ字を書く）。

半兵衛。何々。劍法お相手所。はてな。

折江。一つ、小手、胴、面、同値段、一叩き五文。（肝を潰して見る）。

半兵衛。武家はこの限りに非ず、强つての所望は眞劍の事。はてな。何。天上天下唯一獨流。簗川庄八郎。こりやご本名か。

庄八郎。流名などは、よくそこらにある通り、思ひつきの出鱈目でござる、姓名だけは正眞正銘。さあこれでよい。

折江。こりや教へるのではないやうに見受られまするが。

庄八郎。一叩き錢五文。若くて丈夫な體を資本に、當分の米代をつくる心算でござる。

半兵衛。ううむ。年寄りでは出てこぬ智慧ぢや。

折江。出てもあなたでは體が保たぬでございませう。

半兵衛。こりやちと亂暴無法に過ぎたる考案だが。

庄八郎。ご心配ご無用、叩かせるのは拙者でござる。蚊、とんぼが打つ竹刀、何の事がござらう。いや木劍で打ちたいといふ奴がないとはいはぬ、竹刀と違つて痛いから、（再び書く）。一つ、右は竹刀なり、木劍は倍錢。

半兵衛。木劍で一叩き十文か。

庄八郎。ちと廉過ぎる嫌ひがある、五の字を入れて（書く）。五倍錢の二十五文、よからう。

穴倉同心齋の門弟、といつても若い衆連中の金八、甚太郎、熊吉の三人、行衛を晦ました穴倉先生を探しに走り來たる、穴倉同心齋は矢柄投右衛門に脆く打ち負け、逃げ出したのである。

金八。（走りながら）先生、穴倉先生。（走り去る）。

甚太郎。(金八に遅れ、戸袋板を見付ける)。おやツこりやどうだおいおい、これを見ろ、可笑しい事が書いてあるぞ。

熊吉。(甚太郎を追越したが、聲をかけられ戻つて來て)。へツ、こりあいい。一叩き五文づつだから、狼籍の起つた時はここへ來て五つひツ叩いても五五の二十五文だ。

甚太郎。試しに二つばかりやつてみようか。

熊吉。今はそれ處ぢやなからう、先生を見付けなければ、あの武藝者がこの道場は勝利を得たる身共の物だと頑張つてゐて、來月になつても居殘りさうな權幕ぢやねえか。

甚太郎。さうさう。先生。先生。どこへ隱れちやつたんだらう。(走り去る)。

半兵衛。あいや穴倉殿ご門人、穴倉殿がどうぞなされたか。

熊吉。こりや先生でしたか。他流試合が來ましてね、負けたら道場をよこせ、勝つたら三兩やるといふので。

半兵衛。ほう、それで。

熊吉。虫が知らしたのか先生は、氣が進まないやうでしたが、試合になつてみると相手の奴は恐しく強く、散々に毆り倒して勝ちましたので、先生は、無念といつて飛び出したつきりで、だから身共手分けして搜してゐるので。

半兵衛。ほう。それは氣の毒千萬。

熊吉。先生。先生、先生。困つちまうな、先生。(走り去る)。

この話の內に、折江の好意で庄八郎は食べ殘りのお鍋のかゆを貪り食つてゐる。

庄八郎。(土鍋の中を苦心して掬つて餘瀝まで食べてしまう)。

半兵衛。仕合せ者と思ひの外、穴倉同心齋も不運になつてきたらしい。や、殘りのかゆを皆食はれたか。ふうむ。(落膽の色をやがて心付いて隱す)。

庄八郎。今にもあれ一叩五文の叩みがあり次第、上り高は總て進上いたす。やれ、かゆ腹とはいひ元氣が少々ついて參つた。

折江。(半兵衛に)。餘りの空腹、見るに見かねて。

半兵衛。武士は相見互ひ、まあよいわ。さて簗川氏、貴殿、何として貧乏をいたされた。

庄八郎。いや早や埒もない事でござる。路用の金をつかひ果し、進退窮したるはたまたま天の試練と心得、どのくらゐ食はずに頑張れるか、出來る處までやつて見ようと今日が三日目、

が！日ごろ大食いたすのが災となり、僅々三日でかくの通り、面目もない有樣でござる。これに懲りて、この後は、一年四五回、一日二日づつ斷食修業をいたし、いざ貧乏といふ時の、要意を怠らぬ心算でござる。

半兵衞。三日も絶食なされたのか。

折江。それではかゆで丁度よかつた。

半兵衞。冷飯茶漬であつたなら、今頃は七顛八倒命を失ひかけてゐたらう。

庄八郎。さう云はれて氣がついた。絶食者に食餌の法は、武士はだれでも知つてゐる筈、知つてゐながら忘れるとは、老人ご夫婦、空腹といふ奴はよくよく魔物でござるなあ。

三人、話に耽る、庄八郎は武藝の話をしてゐるらしく見える。

家の外では一方から穴倉同心齋がそツと現れ、一方からは穴倉の妻で若づくりの年上の女が、うろうろと現れる。

穴倉。（妻を手招ぎする）。

年上妻。あなた。（泣きさうになる）。

庄八郎。（人の氣配に）。そりやこそ客だ。（飛び出し、遊ふので呆氣にとられる）。

穴倉。これはこれは若先生。お歸りとは先刻承つたばかり、いづれ近日更めて參上、ちとお話に。（妻の手を曳き急いで去る）

半兵衞。（呆れ返つて見送る庄八郎に）。あれが穴倉同心齋でござる。婆殿。むさんやな穴倉夫婦、當所を驅落いたすと見える。

折江。やれやれ、向ふ樣の沒落が一足先でござりましたか、世の中の事は判らぬものでござりますなあ。

庄八郎。あれが自在別流とかの先生か、拙者は山伏が遊山に出歩いてゐるのかと思つた。あんな奴に劍法を敎はるとは、敎はる奴が愍然千萬。

半兵衞。まことに同感。が、貴殿は？

庄八郎。確に強い。

半兵衞。左樣か。（心許なさうに）。

通行人がある。

庄八郎。（戸看板を指さし、無言の勸誘を試みる）。

通る男。（怪しみ驚き、振返りつつ去る）。

庄八郎。（失敗を殘念がる。背後に寺詣りの婆さんがくる、さてこそ客よと看板を指さし、顏を見て驚き、苦笑する）。

老夫婦。（かゆ腹を押へて失笑する）。

婆さん。（肝を潰しうろうろして行く）。

——暗黑、直ぐ照明。

同じ場所。

家の中程は雨戸を閉め、左右に入口、出口の區別をつけ、入口の方には若い衆が夥しく列をつくつてゐる、中には竹刀持參の者が尠くない。順番破りが現はれ押し出されて頭を搔きながら後尾へ付く。入口に近き者は口を開いて家の中を熱心に見てゐる。中程の者は爪立つたり、前の者の頭を押し下げたりして、見ようとしてゐる。後の方の者は、出口から出て來た者に、樣子を聞いて嬉しがりなどする者がある。

以上の中に金八、甚太郎熊吉及び後に出る門人連が混つてゐる。

出口からは一叩き五文を幾つかやつて、喜び溢れて次々に出てくる、中にはもう一度やる爲に入口の列の最後尾に付く者がある。

入口、出口の中程の雨戸の陰では、盛んに一叩き五文が行はれてゐる、その聲、その音が聞こえる。

入口の列が段々に押合ひ揉み合ひ、遂に「わッ」「わッ」と聲をあげる。

——暗黑、直ぐ照明。

けふは戸が悉く開かれてある。繁昌の結果が道場内の設備に現れてゐる。

上段には半兵衞、その少しうしろに折江、夫婦とも見違へる程元氣になり、前よりいゝ衣服を着てゐる。

庄八郎も前より良き衣服を着て、元氣頗る旺盛に道場に下り立つてゐる。その一方に、新入門の甚太郎、熊吉、金八、その他の者が數名、並んでゐる。

庄八郎。では、ボツボツ稽古を付けるといたさう。どなたでもお出なさい。（門人は「俺が」「俺が」と先を爭ふ）。さう先を爭つては果しがない。ではと。五文叩きに一番熱心に通つたのはどなただ。

甚太郎。（手を擧げ）。あたしあ五度通ひました。

金八。(兩手を舉げ)。何をいつてやがるたつた五度か、俺あ九度び通つた。

熊吉。(突ツ立ち)。十二返!

庄八郎。それでは、熊さん、こつちへ出なさい。

熊吉。へえ出ますがね先生。お手柔に願ひます。十二返も通つた位だから、隨分、先生を叩いちやつたんで。この野郎ッてんで、酷くひッ叩かれちやつたら痛えでせうからね。

甚太郎。ひッ叩かれない中は味が判るもんか。

熊吉。默つてろい。

庄八郎。五文叩きと稽古とは別々だ、安心してよろしからう。

金八。その野郎はね先生、今度こそは五文先生をキャツといはせるとて、ひッ叩く工風をして通つたんですから、けふの處はミッチリひッ叩いた方がいいんですぜ。

熊吉。やいやい金公、くだらない事をいふな、先生をケシ咬ける奴があるかい。

庄八郎。工風して叩きに通つたとは勉强な事だ、どうりで少し痛かつた。

熊吉。先生のお稽古を願つてゐる內には、ひッ叩かれても痛くない、あの方の術も習へるんでせうか。實の處は喧嘩の時に都合がいい。毆られたとて此方は痛くなしの、先方ばかり痛いと來たら、鬼とだつて負けませんからねえ。

甚太郎。さうださうだ。

庄八郎。ははあ、それで弟子にしてくれと申されたのか。道理で五文叩きの方は滅切り足が遠くなつたと思つた。

熊吉。ぢやあ、ソクソク願ひませうか。

庄八郎。さあ來なさい。

熊吉。ねえ先生。穴倉先生の處では道具を付けてやりましたが、先生の流義では素面素小手がいいといふので、この通り頭も手もムキ出しですから、打込む時は充分にお手柔にどうぞ。

庄八郎。心得てゐる、その代り拙者の方へは充分に打つてこい。

熊吉。へい。

立合ひが始まる、始めは熊吉が威壓を感じてゐたが、思ひ切て打込むと庄八郎の樣子が存外弱さうなので、無二無三に打込み、たうとう庄八郎を打ち倒す。

熊吉。(なあんだといふ顔をして下がる)。
庄八郎。(起きあがり)。やあ、ちよつとやるな。次、出られい。
甚太郎。は。(出て立向ふ)。
庄八郎。(又、打込まれる)。これも、一寸とやるな。次、出られい。
金八。おツ。(輕蔑の態度が大分露骨になつてゐる)。
　門人連中は熊吉、甚太郎を中心に、私語も盛んになり、居住ひを崩し、見世物を見てゐるかの觀に變つてくる。
庄八郎。(又、負ける)。
門人。(無遠慮に起つ者、無作法に笑ふ者、拍手する者がある)。
老夫婦。(この珍な稽古を見てヤキモキしてゐる、半兵衛は幾度か、代つて稽古を付けんとするを、折江が宥める)。
庄八郎。次、出なさい。
權七。(鮟鱇のやうに肥つた若い衆、のつそりと立つ、碌に禮もせず立合ふ)。
門人。(いよいよ粗雜になつて見てゐる)。
——暗黑、直ぐ照明。

　前よりも多くの門人が詰めかけ、まるで寄席の中入り時間の如く、胡座、立膝、寢そべりなどする者もあり、ワイワイと談笑してゐる。熊の贔屓の男四五人、陸に入れた熊を車にのせて曳く。その男達は小さな繪紙を撒いて行く。
　權七が血相變へて驅け來たる。
權七。大變だ大變だ。
門人。(總立ちになる)。
權七。何しろ我々が三人減り五人減り、殘つてゐる者はホンの僅だから、先生カンカンに怒つてるんだ。俺は六倉同心殿を打ち負かし、約束によつて道場を門人付きで讓り受けたのだ、然るに門人共はドシドシ一言の斷りもなく五文叩き先生に入門とは、奇ッ怪の至りだつて怒つてたのは皆も知つてるだらう。
門人一。そんな事いつたつて無理だ、矢柄投右衛門先生と來ちや、錢は遠慮なく取る、敎へるのは少しだ、おまけに稽古だかひツ叩くのだか譯が判らねえ。ここの先生のやうにひつ叩かせてなんかくれやしねえぢやないか。
甚太郎。そこへ行くと、ここの先生はひツ叩かせるばかりで、

滅多に門人をひつ叩きやしないから話せる、こんな面白い先生が又と二人あるものか、なあおい。

門弟二。さうとも。五文叩きだとすると、一度來て五つ叩けば二十五文、それが門人になると、日によつては十も十五も、時の拍子で叩けないものでもない。みんな弟子になる譯だ。

甚太郎。算盤づくで弟子になつたのか。ヘツヘツ。俺だつてその組だね。

權七。みんなが勝手に喋舌つては、わしのご註進が聞こえないではないか。そこで矢柄段右衛門先生だ、ここの先生をその儘には差し置かぬといふのだ。(門人連中、びツくりする)。武士の面ばれ、試合して叩ツ殺すといふので今やつてくる。

金八。今だあ? 大變だこれは。

熊吉。だが、面白い見物だぜ。

甚太郎。しめしめ、どの位ここの先生が毆られるか、賭けをしようか。

權七。やあ來た來た。

門人連中『わあッ』と道場の外へ出て、家の左右へ隱れる。

庄八郎。(臺所らしい處から飛び出す)。何事でござる。あれツ、門人が一人も居らぬ。

矢柄段右衛門、憤怒の絕頂に位したやうに押かけ來たる。

矢柄。(庄八郎を睨んで立つ)。

庄八郎。(平然として氣にも留めず、濡れ手を拭く)。

門人。(家の外で左右からそツと出て覗いてゐる)。

矢柄。五文叩きの先生とは貴殿か。他流試合を速刻只今、所望でござる。拙者をご存じでござらう天神地神流の修業者、矢柄段右衛門でござる。

庄八郎。他流試合、詰らぬ事を、お止めなされい。

矢柄。斷じて止めぬ。止めろとは命が惜しいからか、ここなあの卑怯者め。

庄八郎。命の惜しくない生き者が世にあらうか。きのふも泥鰌を食はうと掬ひに行けば、ひたすら逃げ廻つて一生懸命、僅にとれたは三匹故、元の田甫に放して參つた。

矢柄。武士たる者を泥鰌に喩へるか。

庄八郎。いや、拙者を泥鰌に喩へたのでござる。

矢柄。勝負しろ。

庄八郎。道場での勝利敗北が何になる。斬つても突いても命に疵がつかぬと判れば、竹刀はいくらでも華やかに振り廻せる。

矢柄。(逆上氣味となり)。他流試合だ。厭といつても拙者は不承知、參るぞ。

庄八郎。道場のわざは所詮お座敷藝、他流試合は畳水練の鉢合せ。

矢柄。お座敷藝に眞劍をつかふか。身共の所望は斬れる刀でする勝負だ。

庄八郎。君父の讐でもなし、面目玉踏み潰したる喧嘩でもなし、眞劍沙汰には及ぶまい。

矢柄。ええ。問答無益。(眞劍勝負の準備にかかる)。

庄八郎。(始めて本氣になる、どことなく眞の力が漲つてくる)。やるか！

矢柄。勿論。

庄八郎。來いッ。

門人。(金八、甚太郎、熊吉、權七が左右の二ケ所で先頭に立ち、次第に道場に近づき固唾をのむで見てゐる)。

矢柄。えいッ。(斬つてかかる)。

庄八郎。(引ッ外し、鮮に敵の刀を奪ひ、矢柄を峰打ちする)。

矢柄。(斬られたと思ひ)。だあ！(倒れる)。

庄八郎。(矢柄を引起し)。おいおい。死んだ心算か氣の早い。拙者は斬らぬ、刀を返して峰打ちだつた。起きろ起きろ命に疵はまだないぞ。

矢柄。げッ。(肝を潰して起き、體を探り)。あ、あ、いかにも、何ともござらぬ。

庄八郎。更めての眞劍勝負、刀を持つてくる、待つてゐろ。(上段へ刀を取りに行きかける)。

矢柄。いや、それは。いや、それは。ご免。(刀を擔いで逃げ去る。)

門人。(鳴りを鎮めて道場へ入り、下坐に就き謹愼して平身低頭する)。

庄八郎。何でござる、はあ、今のを見てゐて急にこの態か。さあ、ではボツボツ稽古にかかるか。けふの一番はだれでござる。

甚太郎。私で。しかし、けふは。(もぢもぢするのを皆が押出

す。

庄八郎。さあ、よろしいか。

甚太郎。へえ。（やつとこさ打ちかかるが、位負けして例の如くに行かず、あしらはれて平太張る）。參つた。

庄八郎。おや。こりや例と勝手が違ふ。次、出なさい。

熊吉。へいッ。（これも打込まれて痛がる）。

庄八郎。あれッ。いよいよ以つてけふは順序が狂つてゐるわい。

魚屋虎松、威勢よく駈け來たる。

魚屋。ご免ねえ。あッしや一昨日ここへ歸つて來た江戸の魚屋で虎つていひますが、話を聞いて怺へられなくなり、飛んできました。直ぐ、やつて貰へませうか。

庄八郎。入門を望まれるか。よろしい。

魚屋。ぢやあ一つ。（金包を出し）。何分の處は聞いて參りまして、用意してきました。

庄八郎。老先生ご夫婦はお寺へ參られご不在ゆゑ、拙者がお預りいたして置く。

魚屋。へええ、あの爺さん婆さんは、ここの家の人かね。あの人は今、泣いたり笑つたりの最中だ。

熊吉。どうしてよ。

魚屋。二十何年とか行方知れねえ倅が、えらい坊主に出世して、近い内にここへやつて來るとよ。そんな事はどうでもいいや。俺の力は（竹刀を借りて手に唾をつけ）さあ先生もういいかい。

庄八郎。さうか。そりや老人夫婦にとつてはこの上もない目出度い話だ。

魚屋。皆さん、お先へご免を蒙りますぜ。いいのかね先生。

庄八郎。あゝ、よろしい。

魚屋。そら來た！

庄八郎。（前のやうに、手もなく打負かされる）。

門人。（びッくりして、思はず）。はあてな。

庄八郎。（苦笑してゐる）。

魚屋。何だ、はあてだね。先生もう一度やつてもいいかね。

熊吉。さあ判らない。眞劍だとあんなに強い人が、何故、竹刀だと弱いのだらうなあ。

甚太郎。はあてなあ。

その他の門人も同樣に譯が判らなくなる。

庄八郎。判らないなら考へるな、拙者にもよくは判らぬ。もう少し修業したら、何とか理屈が見付かるだらう。(魚屋の相手にならうとする)。

老若男女が、狼狽して逃げて通る、一二名だけ以前の熊の膽賣りが、顚けつ轉びつ逃げて通る。

熊吉。何だ何だ。(外戸へ出やうとする)。

娘。(逃げながら)助けて、助けて(道場へ飛び込む)。

魚屋。何だ何だねえや。

娘。熊が暴れ出したんですよ、多勢人が喰ひ殺されさうだ。あ、大變だ助けて助けて。(逃げて行く)。

魚屋。熊だと、畜生の癖に、よし來たッ。(戸外へ飛び出したが、熊を近く認めて)。あッ來やがつた來やがつた。(道場へ駈け込む)。

門人。(怖々、獲物を持つて道場の中で行列してゐる)。

庄八郎。(門人の背後から割つて出て、戸外へ出る。熊が來たる。熊と睨み合ふ。凄氣横溢する)。

門人。(縮みあがる)。

熊膽賣。(二三人にて檻を持ち來たり、熊のうしろへ置き、竹にさした肉を檻へ入れて持つ)。

熊、遂に睨み負けて引返し、檻の中へ肉に釣られてノコノコはひる。

庄八郎。(門人の嘆賞敬服をうしろにして戸外に立つてゐる。その足許には熊の膽賣りが土下坐して拜禮してゐるが、それには眼もくれず、手拭で腋の下の冷汗を拭ひ、びッしより搔いた顏の汗をベロンコと拭ふ)。幕。

ドレフュス事件

大佛次郎

一

「シュワルツコッペン様――

人の一生の間には、人道の永遠の利害なり、眞理や正義が危くせられて、社會生活の慣禮も顧みてゐられぬやうな大切な場合があるもので御座います。あなた様をまつたく存じ上げない私で御座いますが、失禮を顧みずとこの手紙を差上げるように致しましたのは、今日こそさう云ふ大切な場合だと存ぜられるからで御座います。

私が何のことを申上げようと致してをるかは御推量のことゝ存じます。もとよりこれは、たゞ今佛蘭西に起つてゐる事件についてで御座います。私はもう老年で御座いますし、この世紀に起つたさま〴〵の事件にも立合つてまゐりましたし、自分の仕事も、するだけのことはして終つたと信じてゐる女で御座います。けれども、從來名譽と呼び正義と稱へてゐたものに今日佛蘭西で加へてゐるやうな侮辱が後々まで罰せられずに勝ち誇つて行くことを思ふと、私の一生の最後の眠りも安らかに眠れぬように思はれるので御座います。

あなた様おひとりが、この事件の黑白を明らかに出來るので御座います。人の噂では、あなた様はあの卑しむべきエステラージーに彼を裏切らぬようにお約束遊ばされたと申すやうに傳へてをります。よし、その御誓約をなされたとしても、今日となれば神の前人の前にそれを反古と遊ばされても宜しいので御座います。たゞ今では問題は個人から離れてをります。氣の毒な惡魔島の囚人のことさへ考へなくて宜しいので御座います。國籍も政治的な反省も問題の外に置かれなければなりません。たゞ、眞理と正義に勝たせるか、あるひは逆に惡意と虚僞に勝たせるか、これだけのことになつたので御座います。勇氣をお持ちくださいまし、堂々とお振舞ひくださ

いまし。犠牲が如何に大きくとも、たとへあなた様が地位を失はれるものであつても。――

世界は、眞理を護るためには一切を擲つ勇氣のある人々の出るのを待つてをります。私はまた獨逸の皇帝陛下が寛大な御心を以てあなた様の行動を嘉されること〻固く信じてをります。どうか、全世界の前にお立ち遊ばされて、眞實の犯人を仰有つてくださいますように。たとへその人間の黒幕になつてゐる人々の名が出るにしても、御遠慮なさることはありません。たゞ、その前に、お手もとにある證據を佛蘭西の政府にお渡しになつてはいけません。そんなことをすれば、また隠滅されるのにきまつてゐるので御座いますから。お言葉は嘘のからくりを粉碎して二度と起らないやうに決定的な力を持たせて、御發言にならなければなりません。

不幸な犠牲者とその家族の者を第一にして、その他にも佛蘭西にもなほ殘つてゐる正しい人々は無論のことで御座いますし、全歐羅巴の人々があなた様にお禮申上げることで御座います。

末筆ながら私につきましては、フオンビューロー大臣御夫妻にお尋ねくださるとおわかりくださいます。

やがて私の心からの尊敬と感謝をお捧げ出來ること〻信じて、

千八百九十八年五月七日

羅馬にて、

マルヴイダ　ドウ　マイゼンブーク

これはドレフユスの罪の證據となつた密書の出所とせられる前の獨逸大使館付武官シユワルツコッペンが受取つた手紙であつた。マルヴイダ　ドウ　マイゼンブークは獨逸の知名の女流作家であつたが、大佐にはまだ面識のない婦人であつた。

ドレフユスのために、正義のため眞理のために、かうしてシユワルツコッペン大佐が起つて證言を與へるように望んで來たのは、この優しい手紙の筆者だけではなかつた。ドレフユスの兄マチウの古い友人でアルサスで實業に從事してゐるサンドスと云ふ男などは熱心に大佐を手紙で追ひ廻してゐて、やがて大佐からも誠意のある返事を貰ひ、遂には行つて大佐と會つて話しまでした。

同じやうな手紙は白耳義からも來た。また佛蘭西でもマチウ・ドレフユスやラボリ辯護士などの當事者のほかに、遙々と書を寄せて大佐にこれを希望して來る者があつた。その中には「千八百七十年役に於てメッツの聯隊に屬し閣下の敵たるの光榮を有した」退役軍人からの手紙もあつた。

倫敦のナショナル・レヴユウ、デイリ・ニユウス、オブザーヴア、紐育のユナイテッド・ニユウス、白耳義のアンデパンダンス・ベルジユ、巴

里のフイガロの諸新聞が事件に對する大佐の聲明を得ようとして躍起となつてゐたのは怪しむに足りない。

　これに對して大佐は、獨逸の軍人として、さう容易に自由な行動を採れない立場に在つた。八月二十九日にフイガロの通信員がランヌの軍法會議の討論に對して意見を求めたのに對して、從來も繰返して來たとほり自分はこの問題について意見を發表する自由を持つてゐない。たゞ自分はドレフュス大尉については面會は愚か、人の話すのを聞いたこともない。直接にも間接にも何の交渉もなかつたのであると述べ、九月八日紐育ワールドが電報で、「人道と正義の名に於て、ドレフュスは有罪なりや否や、亞米利加人のために眞相電報にてお知らせ乞ふ」と問ひ合せて來たのに對しても「九月八日の獨逸政府の聲明のとほり。」と答へただけであつた。獨逸政府の九月八日の聲明と云ふのは、ドレフュスと如何なる獨逸外交官とも何等交渉がなかつたと官報で發表したものであつた。

　その聲明にどれだけの影響を期待出來たかは別として、ランヌの軍法會議が兩大陸の注目の的となつてゐたことは爭はれない。また佛蘭西人の一部分を除いて、人がドレフュスの無罪を信じてゐたことは云へる。――殊に倫敦へ逃げたエステラージーが新聞記者の追及を受けて「無論」の筆者が自分だつたのを認めた記事が掲載せられた後のことであつた。

　ランヌの判決は堂々と、この期待を裏切つたのである。世界は愕然とした。諸外國の新聞の論調は急に熱して來た。佛蘭西の同盟國の露國の新聞さへも、この攻撃に參加せずにはゐられなかつた。

　情状を酌量すべき賣國奴――この判決のやうな賣國奴が一體あつたものだらうか。

二

　ドレフュスは、生きた死體を獨房の中へ横たへてゐた。

一つの意志だけが殘つてゐた。それは死ぬまで鬪はうと云ふことであつた。死ぬように鬪ふと云つてもよいのかも知れない。この絶望に近い鬪爭が、やがては、限りある氣力を衰へさせて行くだらうからである。

　九月九日に再審を願ひ出た。無駄とは知つてゐた。が、さうしないではゐられなかつたのである。

　九月十二日の朝のことであつた。兄のマチウがこの獨房へ面會に來た。思ひだすだけで慄然とするやうなあの判決を聞いた瞬間からのこ方、最初に兄弟が顏を合せたのであつた。

不思議と看守も立會はなかつた。これは陸軍大臣のガリフエ將軍が

許可を與へたからである。それだけでなく、兄のマチウは何か重大を話を持つて來たやうな顔色だつた。

最初に口をひらくと

『お前、特赦になる。』

と、兄は云つた。

ドレフュスは、兄の言つたことがすぐ吞込めないらしかつた。無表情に近い顔色で兄を見詰めるのみであつた。白髪頭の蓬々としてナイフで傷をつけたやうに皺の深い疲れたやうな顔色が、外見では兄と弟とをまつたく轉倒させてゐたのである。

『大統領閣下がお前を赦して、こゝから出してくださるのだ。』

兄は、いゝ知らせを齎した悦びに耐えぬらしく、段々顔色を輝かして來て、から繰返し、ドレフュスの肩に手を置いた。

弟がずつと兄の顔を見詰めてゐた目が急に鋭どく光つた。荒み切つた感じの、凄い笑顔であつた。

『私がですか？』

『さうだよ、お前が特赦になるのだ。』

『罪のなかつた人間が特赦になることはないのです。それとも、私が濡衣を被せられてゐた私は正しい人間だつたと認めてくださるのでせうか？　五年前のとほりの私にして返してくれると云ふのですか？』

兄は、弟の心持を察つて、躊つた。しかしまた勵ますやうに云つた。

『さうではないのだ。まだ、そこまでは行つてゐない。けれど、この間の裁判できまつたことを赦してくれるのだ。つまり……お前が正しい人間だつたことを大統領閣下が認めてくださるわけなのだが……お前は、あと十年もこんなところにゐることはなくなつた。これで話さへきまれば外へ出て自由の身になれるのだ。それにはお前が出した再審の願ひを下げなければいけないのだ。』

兄が特別の許可を受けて面會に來たのは、實にこの使命をもたらしたのであつた。

『兄さん、あの願書を下げると云ふのは、前審の判決を認めたことになるのです。そのくらゐなら私はこゝにゐた方がいゝ。私は何も知らなかつたのです。ちよッとも後暗いことをした覺えのなかッた人間です。今まで、あんなにされて來て、今になッて、そんな風に負けたくない！』

『もつともだ。』

兄も暗然、默然、よりほかはなかつた。――今になつて特赦なんて、人を馬鹿にしてゐるものなのだ。いたましく、老人のやうにやつれた弟の姿を見てゐると、マチウも胸中に怒りを感じて來るのだつた。

ラボリ辯護士の話ではルーベ大統領も内閣も、軍部がドレフュスをまた有罪にしたのを心から憤つてゐる。今度の特赦は大統領が軍部の仕事に對する抗議の意味でされるわけだが、まつたく現在の共和國の狀態ではこれ以上如何とも出來ないのだ。ドレフュスを無罪にすれば軍部の面目はまつたく潰れて、當然に責任者を出さなければならなくなる。さうなれば、今でさへ軍部を中心に過激になつてゐる王政主義者や國粹黨に内閣から挑戰するやうなもので現在以上に國が分裂して左右兩黨の衝突が尖鋭化する。軍隊が王黨のものになつて共和國を危くするやうなことは、一片の空想でなく、充分の可能がある。既にドレフュスが無罪のことは、ドレフュスの敵でさへよく知つてゐることなのだから特赦がたとへドレフュスの軍人としての名譽を回復しないものであつても、大統領と政府の苦衷は買つてやる必要がある。いろいろの點で、これ以上のことは今のところ期待出來ないだらうと思ふ。――この意見は、ラボリだけのものでなく、ジョオレスも同感なのであつた。

それに、この、何と云つても頷くことをしない頑冥な敵との闘ひに、味方も疲れて來てゐたことは事實であつた。

『アルフレッド。』

とマチウは云つた。

『何よりも私たちはお前の體のことを考へるのだ。今のやうに衰弱してゐて、この上牢屋に暮らすなど云ふことが出來るものではない。とにかく、外へ出た方がいゝのだと思ふ。』

『いやです。』

ドレフュスはかう云ひ放つて面てを蔽つて泣いた。

こんな執拗なところは昔のドレフュスになかつたのだ。マチウは暗い顏付になつて弟を見まもりながら、なほ熱心に特赦を受けるように勸めた。遂には、リュシイのことや子供たちのことまで云つて。――最後にドレフュスも承諾した。

特赦は九月十九日の大統領令を以て公布され、ドレフュスは翌日に出獄した。その日に彼は覺書を作つて聲明した。

『共和國政府は私に自由を與へてくれました。私にとつては、名譽を伴はない自由は無意味なのであります。今日たゞ今からも私は引續き前裁判の過誤を正して貰ふように闘つて行くつもりであります。今もなほ私はその犧牲となつてゐるのでありますから。

私が無罪であつたことを決定的な判決に依つて全國に知らせなければなりませぬ。全然他人が犯したものである醜悪な罪を私のものだと誣いる者が一人でもある間は、默つてゐられないのであります。』

ドレフュスが出て來るのを待つて暗殺する企てがあると云ふ風說があつたので、周圍の者がどこに彼を落着けるか心配した。そのために前日から名前入りのトランクを全然別の方角へ運送させたり、出獄後もわざ〱馬車を途中で乘捨てたりする苦勞をした。けれども、世間は、大統領が特赦を與へたのでほつとしたやうな感じだつた。罪のない人間が苦しめられてゐると云ふので人はその苦痛を自分のものにして熱狂してゐたのであるが、その苦痛が終つたと知ると、事件そのものが時の經過とともに人の心から薄らいで行くのであつた。ドレフュス事件は本人のドレフュスから離れて國家に於ける軍部の地位の問題と置き替へられ、政教分離の問題となつて、近代の政治の重要な宿題となつた。問題がこゝまでひろがつて來るとドレフュスの名は、海にそゝいでから川が見えなくなるやうに、人の注意から消えてゐたのである。ゾラの葬列の中に幽靈のやうに立つてゐるのが人目を惹いたぐらゐのものであつた。それから三十年後の今もドレフュスが巴里に生きてゐて、世間がまつたく忘れてゐるとしてもこれは仕方がない。たゞ當人はこの事件のために青春を失ひその後の半生を費したのだ。出獄の聲明とほり、引續き彼は鬪つた。そして人が漸く事件を忘れかけて來た千九百六年になつて無罪だつたことが判決せられ、軍籍に戻つて少佐に昇進した。

少佐になつてから、引續き軍隊にゐたかどうか、調べたいにも手もとに材料がない。これはその內儀が巴里へ行つて當人に會つて親しく尋ねて見るつもりである。(終)

文藝時評

大森義太郎

二科會所見

二科會を見る。繪を見るのは好きで、以前にはよく展覽會にも出掛けたもんだが、この兩三年は何かと妨げられてほとんどその機會がなかつた。二科會を見るのも久しぶりである。

ながらく見ない間にどんなになつたかと、ちよつと期待する氣持で會場に入つた。その私は、しかし、いかにも沈滯してゐるのに驚かされた。殊に幹部連、例へば石井柏亭、正宗得三郎（氏の『或日の午後』はちよつといゝが）山下新太郎、黑田重太郎などゝいふ人々は、私の兩三年前の記憶からすると、どうも見劣りがする。なんと乾からびて、そして、なんといぢけてしまつたことだらうと思つた。それから、私が全體から受けた印象は、焦立たしい動揺と焦燥である。自分の境地に安住できないで、しかも目標なく、新しさを求めてゐる。その結果は會場を見渡してなにより眼につく數多くのけれんとなつて現はれてきてゐる。馬と裸女をつき合したり龍と裸女をからまして見たり、時に怪奇な線と強烈な不快な色を用ゐて見たり、トタンで額縁を作つて見たり、そしてまた、おとなしく寫實ふうの畫筆をはこんでゐる繪はいかにも不味いのである。この點は注目すべきだと思ふ。會場全體において、多かれ少かれ裝飾ふうの（廣い意味で）繪が支配的であるが、場内でのとにかくうまい繪はそれらのうちにあるので、寫實派ふうのものゝうちにはない。例へば、安井曾太郎氏の『婦人像』は場中の白眉であらう。幹部達の間でもこの人だけはさすがに若い連中の企及できない正確と生動とを保持してゐる。その安井氏の繪でも裝飾ふうである。少くも氏の少し前の作と比べてより裝飾ふうになつてゐる。もちろん、氏の畫風はひどくアンリ・ルソー張りになつたり（その代表的なものは『新緑』と題されてゐたと記憶する）幾變轉を經て

ゐるやうに見受けられるが、數年前（大正八年？）最も喝采を博した氏の作『樹蔭』を取つてこの『婦人像』と比べるならば、私が上で云つたことは頷づかれると思ふ。

　このやうに、寫實派からひろく云つて裝飾的な手法への轉化は日本ばかりでない。といふよりむしろ、日本の西洋畫は依然としてフランス繪畫の模倣であるが、そのフランス繪畫についても、いま云つた轉化の跡を辿ることができる。いふまでもなく近代フランス繪畫の歴史は印象派の歴史である。そこで、まづ、印象派において初期のマネー、モネー達と後期印象派のセザンヌ、ゴーギヤン達とを比べて見るがいゝ。その發展にはいろいろな點を擧げることができるが、最もわれわれの注意を惹くものは寫實主義から裝飾的な手法への轉化ではないか。さらにセザンヌをマティス――その影響は今日の二科會においてなんと多いことか――と比べて見るがいゝ。その畫學生の時代にデッサンの正確さにおいてパリのすべての研究所に並ぶものゝなかつたといふ、そして嘗つてルーブルの名畫の模寫を命じられたほどに充分な寫實的な手腕を具へてゐたマティスについて、しかし、最初から人の注意を惹いたものは『全體の裝飾的な聯關の要求に對する纖細な感受性』であつた。現代のフランス畫壇において『モダン・リアリスト』といふものを擧げる人がある。しかし、これに屬する畫家がデューフイであり、フリエズ、デュフレーヌであり、ヴアン・ドンゲンであることを知るならば、この『モダン・リアリスト』といふ言葉は、むしろ現代の繪畫がいかに裝飾的であるかを最もよく示すものであらう。

　このやうに近代の繪畫は、大ほまかにいへば、寫實ふうから裝飾ふうへ變化した。――これに對して、それはむしろ、對象の內的な精神を描かうとする意味でリアリズムの徹底であるといふ議論がある。これは意味をなさない、が、それについては此處では述べない。この變化は、いつたい、何を物語るであらうか。それは明白に、對象に働き掛け、またそのために對象を現實的に把握しようとする態度から、對象を離れて、たゞ陶醉的な美に浸らうとする態度へと移つたことを意味する。そして、この態度の移り變りには複雜な社會心理の變化が對應してゐるであらう。が、根本的には、資本主義の衰頽によつてブルジョアジーが進歩的＝積極的から停頓的＝消極的になつたこと、その階級心理の變化を映してゐるものでなければならぬ。

　この意味で、現代の繪畫における裝飾的な要求の支配は――それを私はまた二科會において充分に見た――決して繪畫における進歩を意味しない。それだからこそ、私が最初に云つた動搖と焦燥があるのである。また、われわれは多くの若い畫家達から行きづまりの嘆聲を聞

かされるのである。

では、眞實に新たなる繪畫はリアリズムに向ふべきであらうか、といふより、リアリズムに立つことによつて繪畫は今日の沈滯から明日の發溂へ進むであらうか、もちろん新たなる階級と共に？　それは問題である。私はむしろ繪畫（『純粹繪畫』）そのものゝ行きづまりが來てゐるのではないかと思ふ。そして、『純粹繪畫』ではなくポスターだとかビラだとか、或は挿繪だとか、そんなものゝ方へ發展するのではなからうか。もちろん、これは非常に大膽な云ひ方である、なほ多くの考察を必要とする。

「機械」を評す

横光利一氏は、今月、二つの作品を發表してをられる、――『鞭』（中央公論）および『機械』（改造）。後者の方が質においてはるかに大きいばかりでなく、より力の入つた作品である。ところで、こゝでは『機械』を私の批評の對象にする。

この作は、氏は今年になつて『高架線』『鳥』およびいま云つた二つと總てゞ四つの作品を出してゐられるが、そのなかで最もすぐれてゐるばかりでなく、氏の全作品においても注目すべきものゝひとつであらう。

『機械』は、一般的にもまた氏の作としても、いちじるしい異色をもつてゐる。

まづ、文章の點からいつて、句切の全く少い、そして、ひとつひとつの文章が句讀がなくて非常に長いといふ形をとつてゐる。同じことは、すでに『鳥』にも見られた。が、其處では一人の獨白といつたふうで、話された言葉の感じが濃くて、別に變つた印象を強くは與へられなかつたし、それぞれの文章はむしろ短かつた。さらに、こんどの作では、いはゆる新感覺派ふうな表現が全くなくなつて――それは氏においてだんだん薄れてきたものだが――、非常にわかりいゝ、あたり前の表現になつたことも注意しておきたい。いづれにしても、氏の嘗ての作『春は馬車に乗つて』などゝ比べれば、非常な違ひである。多彩な、譬へればポアンテイリスト ふうの手法はなくなつて、くすんで然しねばりづよく迫らうとして見える。

文章ばかりではない。作品の構造においても『機械』はまた異色をもつてゐる。これは、特別な發明をもつたネーム・プレート製作所のなかでの事件を取り扱つてゐるのだが、さうした製作所の描寫といふやうなものは極めて僅かしかない。作者は、そんなことは抛つておいて、ひたすら人間の心理の動きだけを描かうとしてゐる。黑い幕を垂れて、そこへたゞ心の動きだけを見せる、とでもいふやうな構造をと

つてゐる。なるほど、製作所の主人、それから輕部といふ男など、全然話が浮きあがつてくるが、それも、いま云つたやうに、それらの人物の心の動きが描寫されることによつてゞある。かうした構造は從來も横光氏について見られたところではあるが、それがこんどのは頂點に達してゐる。

それからして、この作に描かれる人物が、その心理が、實に不思議なものである。作者は『それは鹽化鐵の長年の作用の結果なのかもしれない』と作の中の一人に考へさせてゐるが、ともかく、われわれがこゝで讀むものは全く異常な人間、その心理である。例へば、製作所の主人はどんなことしても持つた金を落してしまふといふ『財布を細君が紐でしつかり首から懷へ吊しておいてもそれでも中の金錢だけはちやんといつも落して』ゐる。そんな人達である。

ところで、この作品の面白さはどこからくるか。それにはいろんなものを區別できると思ふ。

第一に、逆說の論理の面白さである。例へば、……無機物内の微妙な有機的運動の……』。『……この馬鹿かと思つてゐたのも實は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思はしめるやうにまでなつて來た『いやな仕事、それは全くいやな仕事で然もそのいやな部分を誰れか一人がいつもしてゐなければ家全體の生活が廻らぬと云ふ中心的な部分に私がゐるので僕は家の中心が細部にはなく私にあるのだがそんなことを云つたつていやな仕事をする奴は使ひ道のない奴だからこそだとばかり思つてゐる人間の集りだから默つてゐるより仕方がないと思つてゐた。全く使ひ道のない人間と云ふものは誰にも出來かねる箇所だけに不思議に使ひ道のあるもので、……。』

逆說はそれだけでは決してわれわれに快さを與へるものではないが、ちようど不協和音がある場合に、特に近代的な感覺に魅力を與へるやうに、それはときとして異常な面白さを與へる。横光氏の『機械』はさういふところをもつてゐる。

いつたい、逆說の面白さは横光氏のすべての作品の主要な面白さを構成してゐたと思ふ。初期のものにすらも認められるし、いま云つた『春は馬車に乘つて』にも、或は、これも氏のもののうちですぐれた作品である『眼に見えた虱』にも、昨秋の上海を題材にしたシアリズにも、いな、すべての作品に、多少の度合は異にしても、常にある。いはゆる新感覺派的な表現そのものすらがその魅力の大半を逆說の面白さに掛けてゐるとも考へられよう。

かうした逆說は『機械』においてはまさに縦横に驅使されてゐる。こゝでは、小さな、ひとつひとつの部分が逆說になつてゐるばかりでなく、それの集つたより大きな部分がまた逆說になつてゐる。例へ

ば、物語の主人公と輕部とそれから屋敷といふ三人の男が殴り合ふところがある。始め、屋敷が輕部に殴られてゐる。それをやめろと主人公が輕部に云ふと、こんどは、主人公が輕部に殴られる、これを殴り返してゐると、屋敷が輕部を殴り始めて主人公にも一緒に輕部を殴れと命じるが、そのとき主人公は輕部を殴るのをやめてしまふので、こんどは屋敷が主人公を殴りつける。この全體のなかで、その部分の三人の心理の動きが、また逆說的である。まさに逆說は重疊層をなしてゐる。横光氏は巧みにこれをさばいてゆく。それは、もちろんはなはだしく趣を異にしてゐるけれど、例へば谷崎潤一郎氏のあるものに見られのと同じうまさ、筆力の強さである。讀者は、第二に『機械』における横光氏のこのうまさに感心させられるに違ひない。

いま述べたことから明かな筈だが、『機械』の面白さは、ひとつには、構成の巧みさからもくる。逆說の積み重ねのことはすでに云つた。しかし、それ以上に、結末までいや應なく讀者を引つぱつてゆく伏線の張り方、全體の布置に、作者はすぐれた構成の力を示してゐる。一例をあげれば、二回の喧嘩、主人公の夢をもつてくるところなどである。

それからして『機械』は全體にひとつの雰圍氣を醸み出させてゐる。讀者はこれに心を惹かれる。それは、こゝでは不氣味な、いびつな味をもつたものであるが。この雰圍氣を出すといふことは、横光氏の從來の作品、『靑い筆』、『草の中』、『妻』のやうな小品にすらも見出されて、氏の藝術家としてのすぐれた素質を——形づくつてゐたものである。

最後に、私は『機械』のもつ面白さのひとつとしてその心理解剖の、精緻と擧げようと思ふ。人間心理の、特に他人に對する動きが、細部にいたるまで執拗に追求されてゐる。それは心理學書のごとく精細であり綿密である。しかも、決して抽象的ではなく、いはゞ心にさす影を描くといふやうに、具象的である。讀者は決して煩はしさを感じさせられないで、作者と共に人間の心の動きになみなみならぬ興味をそゝぐのである。

そこで、『機械』において横光氏はいつたいどういふことを意圖してをられるであらうか？作者の置く重點は何處にあるであらうか？それが、いま云つた最後の點、人間心理を描き出すにあることは多くの說明を必要としまい。さらに云へば、こゝろを通じて『人間の運命』を『科學そのものと等しい嚴密さを以つて』(文藝時評における氏の言葉)明かにするにあつたでもあらう。その意味では、注意までに云へば、『機械』における人間心理は極めて異常なものであるが、作者はこの異常なものゝ裡に正常なものを眼ざしてゐる。

さて、この作者の意圖は所期の効果を擧げてゐるであらうか。

これに對しては、私の上の分析が解答を與へた筈である。それは相當に成功してゐる、——私が『機械』のもつ面白さの最後の點で述べたやうに。そして、またさきに云つたこの作が渾然たる雰圍氣を醸し出してゐるといふことも、この成功のひとつの證左ともならう。けれども、決して充分な成功ではない。この作は、ほんとうに人間を描いたものとして、われわれに迫つてこない。

それには理由がある。そして、こゝで作者の狙つた第二の意圖が現はれる。それは構成の巧妙さ——この作では特に逆説を中心要素とした——である。この横光氏の『機械』における第二の意圖は、そのものとしては、たしかに効果を奏してゐる。これも私がすでに述べたやうに、讀者は構成の巧みさに充分面白さを感じる。しかし。これら二つの意圖は、また二つの効果は決して融合してゐない。それどころか、第二の意圖は第一の意圖に反逆してゐる。横光氏は『機械』において、人間を描かうといふリイヤルな目標をもちながら、同時に、構成の巧妙さからくるディコラテイブな美にも注意を奪はれてゐられる。こゝにこの作の不充分な効果の原因がある。

このことはもう少し説明を必要とするであらう。私は横光氏の作品には、常に、リアリスティックなものと裝飾的なものとが交錯してゐると思ふ。また作品目録的にいつて、氏の最初の作『蠅』を代表とする初期の作はより多くリアリスティックであり、その後の氏が意識して新感覺派的な表現をとつたころの作品は裝飾ふうである。例へば、『春は馬車に乘つて』のよさは、華かな表現、均整のとれた構圖、リズムを具へた文章をもつて、いはゞ裝飾畫の美しさである。最近の氏はむしろ強くリアリスティックな行き方に傾いてきた。『機械』は『春は馬車に乘つて』よりも『蠅』にはるかに近い。氏の文章が新感覺派的な表現を棄て、非常にわかりいいものに變つてきたことなども、ひとつにはこれを意味すると思ふ。しかし、氏は依然として裝飾ふうな態度を棄てきつてをられない。そこに矛盾がある。そこにまた『機械』のもつ限界がある。

われわれは『機械』のもつ効果の不充分さの原因をもつと深いところに求めることができる。私は最初にこの作の特異な構造として、作者が人間の心だけを取り出して描いて見せてゐることを述べた。かうした構造も、簡をいへば、これほど強くない度合では、これまでも横光氏の多くの作に見られたものである。横光氏は常に『心』に興味をもつてをられる。たゞ、さきにも云つた上海を場所に取つた昨秋のシアリズでは、これから幾分離れて、客觀物に、對境に向ふ傾向が示された。それがこんどの『機械』では前へ戻り、前より一層強くなつ—

ゐる。

『心』は心として、それだけで立つてゐるものではない、――わかりきつたことだが。われわれが『機械』における心理解剖の精緻と深刻にもかゝはらず、なんとなく宙に浮いた、幻想的な感じを與へられるのは、逆説の面白さや、構成の巧妙さからくる裝飾的な印象によつてばかりでなく、實にこゝに存する。作者は、かうした題材を選んだこと其のことについては云はないとして、心の動きの土臺に、背景になつてるもの丶描寫にもつと――私はこれが全然缺けてゐると云ふのではない――力をこめるべきであつたらう。さうしてこそ『人間の運命』は、『機械』はほんとうに描かれるであらう。このとき横光氏は、心こそが總てゞあると云つて、嘗つて『文藝時評』において一端を示された唯心論的な世界觀を私に提せられるであらうか？　私は此處ではそれについて述べてゐる餘裕を與へられてゐない。たゞ、一作品『機械』の缺陷は、根本的には、其處からきてゐると私は思ふ。

『作家の世界』

私は十一谷義三郎氏の文藝時評『作家の世界』（本誌前號）をば非常に面白く、なによりも非常に氣持よく讀むことができた。これは混り氣のない藝術至上主義の主張である。しかし、あの新興藝術派とかいふ人々の夜店の緣日商人の口上のやうな藝術論とはちがつて、これは作者の純一の氣持から發せられてゐる。私もこころよくこれに耳を傾けることができる。氏が援用する、文學はなにものの役にも立たぬといふ芭蕉の夏爐冬扇の說と、『諸君』の眼を開かせることを念願としてるジョウゼフ・コンラドの言葉と、このふたつのものの矛盾について云ふ必要はない。また、『キネマは、キネ魔だ』といふ映畫論に對する氏のいはれなき偏見を責めようとも思はぬ。

それよりも、こゝにおける氏の主張の最も根本の、主要の點について、私は氏と完全に一致することを述べたい。氏の全章は、『流行に甘へ、社會に甘へ、階級に甘へてゐる』作家に對する、また、さうした時潮に對する嫌惡をもつて貫かれてゐる。このことに關しては私は氏と完全に考へを同じくする。かうした惡弊はプロレタリア文學にすらも及んでゐる。いはんや、ブルジョア文壇においては、それについて言葉を費すことが魯鈍に見えるほどの勢である。そのなかにあつて、十一谷氏が、こゝで述べられたやうな淸高な態度を持してゆかれることに對しては、私は敬意を送るに躊躇しない。

さらにもう一歩を進めてもいゝと思ふ。氏は『大衆の爲の文學』『階級の爲の文學』、『人の爲の文學』、ひろくいへば最初からして何事かのために役立てやうとする文學を排斥してをられる。これに對しても

また、われわれは決して一から十まで反對ではない。まづ十一谷氏の云はれるところは創作過程に『作家の世界』に關してゐる。そして、こゝでは、氏の云はれる通り、作家はひたすらよい文學を創ることに精進すべきであらう。そのことはプロレタリア作家においても變りはない。たゞ、十一谷氏の考へられるよい文學とプロレタリア作家の考へるそれとは、同じものではない。

のみならず、われわれの『階級の爲の文學』の主張は、プロレタリア作家が階級のために役立たせるといふことを機械的に考へて、文學の條件を無視して無理をすることを要求するのではない。そのやうにしては、極めてぎこちない、一言でいへばはなはだ不味い作品しか創られぬであらう。そして、それは藝術作品としては却つて階級のために役立たぬであらう。(いふまでもなく、文學作品として以外にそれが階級のために役立つことは充分に可能である。われわれは、かゝる効用を、文學作品として以外だから、從つてゼロだと云ふことはできない。文學が、藝術が一切ではないのだから。)

いま上で述べたことは、その間に大分相違があるが、理論の場合においても同じである。これらの關係でおそらく最も問題になると考へられてゐるマルクシズムの理論について考察して見られるがいゝ。マルクシズムの理論は『プロレタリアートの解放のための——實にこの『爲の』——の理論である。だからといつて、この効用のために理論の條件を無視して無理をすることは、『階級の爲』に役立つやうに都合よく理論を築いたりすることは、われわれの徹底的に排斥するところである。理論は純粹の理論、といふ意味は正しい理論であることをなによりも要求する。さうあつてこそマルキシズムの理論はプロレタリアートの解放のために役立ちうるのである。われわれが研究の際に正しい理論を追求するやうに、作家は創作の際にすぐれた文學をこそ心掛くべきであらう。

十一谷氏の云はれるところが、右のやうな輕卒な『階級の爲の文學』を排斥することにあるならば、われわれはなんら反對でない。むしろこれを強調したくすら考へてゐる。今日のわがプロレタリア文學においてこのことがかなり誤解されてをり、その誤解の結晶たるいくつかのプロレタリア文學の作品が存在するのを見て。

しかし、もし氏がこれ以上に亘られるならば、もし氏が、藝術は他の一切のものから獨立してゐることを、藝術はたゞ藝術のために存することを說かれるならば、それは全くの誤謬である。藝術は獨立でもなんでもない。決して『夏爐冬扇』ではない。しかしこれについては私はもはやわれわれの理論を繰り返へす必要を見ない。

ひとつの知識階級論

最後に私は例の新興藝術派をちよつと野次つておかうと思ふ。讀者或は、野次るなど丶いふ私の不謹愼を詰られるかもしれない。けれど私は、芝居狂言、フワースに對しては襟を正さないことをもつてむしろ禮儀と心得てゐるものである。

さて、新興藝術派の可憐な喇叭卒雅川滉氏については、かねがね、私はそのあどけなさに心を惹かれてゐる。その雅川氏は今月『批評家P氏の講演演題「日本文壇の展望」』といふ論文を發表してをられる(『近代生活』九月號)。恐ろしく廻りくどい標題だが、『批評家P氏』とはもちろん雅川氏のことで、これは氏自身の考へを述べられた論文にほかならぬ。それにしても、『P氏』とは、これはまたなんと正直な名乘り方ではないか！　なぜつて、このPは英語のPoor＝貧弱の略字であること疑ないからである！

ところで、わが批評家貧弱先生は右の論文で私に觸れてゐる、――『しかし人々の迷蒙は、それのみにとゞまらない。人々は是等の妥協精神によつて、知識階級といふ文化擔當者を、僅かに資本主義社會の寄生虫として沒落するものとしか理解出來ぬのである。前講師と同樣に、經濟學者であり、且つ前大學教授である、大森義太郞といふ人ですら、知識階級といふ名前の下に(沒落するもの)と吹聽することに得々然としてゐるのだ。しかし勤勉なる科學者は沒落するか、それと等しく優秀なる文藝家は沒落するか。經濟組織の上に立つ知識階級の沒落性と、文化擔當者としての知識階級の非沒落性との間に、全然區別がつかないのである。……』(傍點―大森)。これは、私が本誌先々月號の文藝時評で新興藝術派を批評した場合に、その社會的地盤を訊ねて、『沒落する知識階級』にあることをば、雅川氏の言葉を引用して、皮肉に明かにしたことに關する批評である。せつかくの御批評であるから私もお答へしておかうと思ふ。それに、知識階級に關するこれと同じ考へを、雅川氏は嘗つても(『藝術派宣言』)述べてゐられたから、筆のついでに、この貧弱先生の知識階級非沒落論の正體を暴露しておかうではないか。

わが批評家貧弱先生の右の議論は三つの論點をもつてゐる。(一)『經濟組織の上に立つ知識階級』と『文化擔當者としての知識階級』とを『區別』すべしといふこと、(二)後者すなはち『文化擔當者としての知識階級』は沒落しないといふこと、(三)私(大森を指す)は誤つてゐる、そしてその誤謬は、第一に上の區別を知らないこと、第二に、從つて『文化擔當者としての知識階級』をも沒落するものと考へてゐること、の二つにおいてである。

われ〱は貧弱先生の第一の論點から點檢しようではないか。こんな馬鹿げた『區別』の仕方といふものはない。『經濟組織の上に立つ知識階級』といふ場合には、知識階級の成立＝存在の基礎について云つてる。ところが、『文化擔當者としての知識階級』といふ場合には、この階級の職能について述べてゐる。『區別』の標準が全然違ふんである。こんな『區別』が意味をなさぬことは說明するまでもなからう。例へば、犬について『區別』する場合に、犬には哺乳動物としての犬と番犬としての犬とを『區別』しなければならぬと主張する男があつたとしたら、諸君は噴き出すより、もう呆れ返つてしまひはしないか。しかしそれがわが批評家貧弱先生の『區別』である。かういふ『區別』を立てることに『得々然としてゐ』られたんではどうにもやりきれない。

　これよりもつと滑稽なのは雅川氏の第二の論點である。こゝで、氏は知識階級は文化擔當者だと云ふ。この言葉は、知識階級は文化の擔當者のひとつで、知識階級のほかにも文化擔當者があるといふ意味にもとれる。が、さうではない。雅川氏は別の處で（『藝術派宣言』）、『藝術が知識階級の所產であり』『藝術理解も亦、その當時の知識階級の上にある』ことを述べてゐる。この場合、藝術は文化の代表的なものであり、產出し理解するとはその擔當者たることを意味するのは明かである。そこで雅川氏によれば、文化擔當者は知識階級以外にないのである。そこでかうだ、――知識階級すなはち文化擔當者である、文化擔當者と知識階級は全く同じものだ。讀者諸君はまづこのことを頭に入れて置かれるがいゝ。

　ところで、文化が常にあることは疑ひない、從つてその擔當者の常にあることも疑ひない。つまり、その意味では、文化擔當者は沒落しつこない譯である。

　こゝで讀者諸君は雅川氏の先きの『文化擔當者としての知識階級の非沒落性』といふ命題をあらためて吟味される必要がある。この命題はいまや次のやうに書き替へることができる。沒落しないもの（文化擔當者）としては知識階級は沒落しない！　もうひとつ、さきに明かにしたやうに知識階級は、文化擔當者と全然同じであるからして、さらに次のごとく書き替へることができる。沒落しないものとしては、沒落しないもの（文化擔當者＝知識階級）は、沒落しない！　これは完全な同語反覆だ！　エー馬は馬で、牛は牛で、雅川氏は雅川氏で……こんなものは證明にならぬ。萬一證明になるとすれば、貧弱先生の名にふさはしい雅川氏の頭の貧弱さを證明するだけだ。

　第三に、私に對する雅川氏の批評だが、これはもはや私に代つて雅川氏自身が答へてくれてゐる。私が知識階級の二つの『區別』を知らないといふことは、この區別そのものが成立たぬのだから、問題にな

らぬ。さらに、私が知識階級を沒落すると考へてゐる點について云へば、雅川氏の『文化擁護者としての知識階級の非沒落性』といふことは無意味になつたのだから、そこで雅川氏の主張で殘るところは『經濟組織の上に立つ知識階級の沒落性』だけだから、つまり知識階級は沒落するといふのだから、雅川氏自身が私のため雅川氏の批評に對して答へてくれてゐるではないか。いやどうもありがたう！

これで私に對する批評への反駁は完全に濟んだ。しかし、讀者諸君のために——批評家貧弱先生のためにではなく——われわれ自身の知識階級論をこゝで述べておくことを義務と考へる。が、それにはすでに向坂逸郎君のすぐれた論文『現代インテリゲンチヤ論』（中央公論、三月號）があるので、こゝでは極く簡單に述べておく。

知識階級は、一定の階級、正しくいへば社會層である。そのかぎりにおいて、知識階級は今日の社會の一定の經濟關係に基いて成立＝存在してゐる。そして、資本主義社會の文化の發展は——その原動力は、もとより、ブルジョアジーの手にあるが——直接にはこの層に負うてゐた。資本主義文化も、一定の段階までは、進歩的である。その意味で知識階級は進歩的な役割を務めた。けれども、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級對立が表面に表はれ、その相剋があらゆる領域において激烈になるや、資本主義文化は全く反動的なものとなる。それと共に知識階級の務める役割もまた全く反動的なものとなる。それはもはや、文化の發展を司どるといふ意味の文化擁護者ではなくなる。われわれが知識階級の沒落と云ふ場合には、第一にかうした事實を指してゐる。第二に、資本主義社會内における階級關係の展開は知識階級のうちの上層を全くブルジョアジーと結びつかせ、これに反して、中層、特に下層をばプロレタリア化さしめてしまふ。知識階級は沒落する

知識階級はいま現にさうした形勢のうちにあるといふことを、われわれは云ふのである。

しかし、知識階級の沒落といふことは、知識階級のうちのある層、殊に知識階級のある成員、つまりひとりひとりのインテリゲントが、沒落を免れるといふ事實を否定するのではない。それどころか、『インテリゲンツヤの或者がプロレタリアートの側に立つ限り、即ちこの無限なる進歩の擔ひ手であるものの側に立つ限り、彼等は社會的進歩に對して、その科學と藝術とを以つて協力するであらう。』（向坂氏の前記論文）。

ところで、わが貧弱先生の論文の他の内容だが、これにはわざと觸れないでおく。雅川氏の親友阿部知二氏の報道するところによれば、雅川氏はやがて大いに私に應酬するといふ話である。で、それまで、齋戒をしながら、待つとしよう。

（九、六、三〇）

慶應大學教授 法學博士 瀧本誠一著

歐洲經濟史

近世の部

菊判索引共三二八頁
口繪四枚
定價二圓八十錢
送料十八錢

新裝第四版

瀧本博士の歐洲經濟史は烱眼なる史觀を以て論斷を試みたる名著として許すでに定るものがある。舊版は中世の部と近世の部を合して一冊となせしがこの新版に於ては特に學生諸彥の便宜の爲めに中世、近世の二部を各々別冊とし詳細なる索引を附してある。而して近世の部に於ては「科學及國家の產業に對する關係」及世界大戰後に於ける歐洲の政治經濟事情を要領よく明說せる「大戰後に於ける世界各國の概況」の新章を加へ、又第一章、第六章、第八章等へ更に數節を增し、且つ書中隨所に米國若くは東洋に關する記事を掲げた。之れ近世史上の重大事件は國際間の交涉問題に關すること多ければ、他大陸の事に言及せずして單に歐洲の歷史のみを述ぶることは啻に不可能である許りでなく眞に彼我の經濟的關涉を詳にせずんば一貫せる歐洲經濟史の理會を得られないからである。されば本書は獨り專門學校程度の教科書として適當と言ふに止らず外交史、政治史等に從ふ方々も本書によつて多大の啓示を受けられるであらう。

發行所 東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戶 京都 名古屋
横濱 福岡 仙臺 札幌
（東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル）

新選名作集

四六判並製

各冊壹圓

送料各廿錢

好評嘖々

本集は『現代日本文學全集』の姉妹出版であつて、同全集に編入せざりし名作を悉く網羅し、八ポイント二段組にて各卷五百頁以上七百餘頁に及び『現代日本文學全集』と併讀せば、僅か壹圓で巨匠の大全集を讀むことが出來る譯だ！

書名	版
新選 谷崎潤一郎集	0版
新選 菊池寛集	52版
新選 菊池寛集(續篇)	最新刊
新選 前田河廣一郎集	24版
新選 前田河廣一郎集(續篇)	20版
新選 永井荷風集	18版
新選 藤森成吉集	24版
新選 葉山嘉樹集	22版
新選 北原白秋集(詩歌篇)	34版
新選 北原白秋集(散文篇)	20版
新選 吉田絃二郎集	40版
新選 吉田絃二郎集(續篇)	20版
新選 森鷗外集	14版
新選 横光利一集	21版
新選 長田幹彦集	14版
新選 岡本綺堂集	14版
新選 小山内薫集	12版
新選 久保田万太郎集	14版
新選 宇野浩二集	14版
新選 里見弴集	10版
新選 近松秋江集	10版
新選 豊島與志雄集	10版
新選 夏目漱石集	20版
新選 山本有三集	14版
新選 久米正雄集	10版
新選 室生犀星集	20版
新選 德田秋聲集	10版
新選 相馬泰三集	10版
新選 島崎藤村集	20版
新選 西條八十集	20版
新選 宇野千代集	10版
新選 岸田國士集	10版
新選 佐藤春夫集	新刊
新選 池谷信三郎集	新刊
新選 大町桂月集	新刊
新選 武者小路實篤集	14版
新選 佐佐木茂索集	10版
新選 林房雄集	近刊
新選 金子洋文集	新刊

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



ママ先生とその夫

岸田國士

奥居町子　聖風學園の經營者
同　朔郎　その夫
花卷篠子　變死せる兒童の母
有田道代　教師
富　樫　篠子の甥と稱する男
尾　形　囑託醫
角さん　小使
たい　その妻
かず　篠子の女中

その他男女の生徒多勢

東京に近いある新開田園都市の一隅。赤松の自然林を切り開いて、木造平屋のバラック大小二棟と、二階建の住宅一棟――これが、奥居町子の經營する聖風學園とその附屬建築物である。

屋外の授業場——四人共同の腰掛と机が並び、その正面に黒板が立てかけてある。黒板の前に立ち、白墨の字を消しながら、十人足らずの生徒に話しかけてゐるのが、教師の有田道代である。二十四五の目立たない女。

道代。それで、黒白辨ぜずといふ意味はわかりましたね。もう一度云ひますが、黒白といふのは物事の善し悪しといふことです。黒が悪い方で、白が善い方……。いゝですか。お腹が黒いといへば、性のよくない人間といふことになるでせう。心に穢れがないことを潔白と云ひます。潔白ですね。それでは、今日の授業はこれで終ります。今からお晝の鈴が鳴るまで、ママ先生のお話があるさうですから、しばらくさうしていらつしやい。

生徒は十歳から十三四歳までの男女であるが、何れも所謂「良家の子弟」らしき風貌を具へ、中には、一見低腦兒と見える某子爵の三男も交つてゐる。教師の話がすむと、あるものは起ち上り、あるものは隣へ悪戯をしかけ、筆筒をガチャガチャいはせ、「先生！ 御不淨へ行つてもよろしうございますか」と問ひ、いつ時、騒然となるが、やがて彼等にママ先生と呼ばせてゐる奥居町子が、靜々とそこに現はれる。

町子。（道代に目禮を返したる後）さ、皆さん、少し靜かにして、ママ先生のお話を聴いて下さい。なんです、晃さん、鉛筆なんか咬へて……そんなにお腹が空いたんですか？ それではと……。今日はちよつと六ケ敷いお話ですから、ぼんやりしてるとわかりませんよ。皆さんは、この學校のお兄さんお姉さん組でせう。さうすると、もうそろそろいろんな理屈がわからなければいけません。しかし、これからママ先生がお話ししようとすることは、眞子さんや栗雄さんのやうに小さい方には、まだほんとによくわからないかも知れません。それはそれでよろしい。今にわかるやうになります。さて、皆さんは、町の子供たちが、よくこんな歌を唱つてゐるのを知つてますか。——男と女と豆煎り、煎つても煎つても煎り

きれない……──（笑聲）可笑しくはありません。さういふ歌です。ところで、これはどういふ意味でせう。──男の子と女の子とが一緒に遊んでゐる。可笑しいなあ──といふ意味です。どうして男の子と女の子とが一緒に遊ぶと可笑しいんでせう。この學校では、男生と女生と、なんでも一緒です。勉強も一緒、遊戯もおほかた一緒、御飯も一緒、たゞ、お風呂にはいる時と、寢るときだけ別々です。ですから、男の子と女の子と、一緒に遊ぶことはちつとも可笑しくない。それを可笑しいなんていふ方が違つてゐるのです。たゞ、男の子でありながら、男の子と遊ぶより女の子と遊ぶ方が好きだつたら、これは可笑しい。また女の子でありながら、女の子とは遊ばないで、男の子とばかり遊びたがるのは、どうかしてゐます。これは人に笑はれても仕方がない。そこで、皆さんによく云つておきますが、男の子と女の子と仲善しになるといふことは、つまり、その、男の子が、女の子に……。

　この時、町子の夫、朔郎が、汗を拭きながら外から歸つて來る。町子のそばへつかつかと歩み寄る。

朔郎。もう濟むんですか。

町子。えゝ、もうぢき……。

朔郎。ちよつと急ぐ話があるんだがなあ。

町子。では、皆さん、さういふわけですから、よく氣をつけて、間違ひのないやうにしなければいけません。

　小使の角さんが鈴を振りながら傍らを通りすぎる。

朔郎。おい、おい、もうちつと靜かに振れよ。

　角さんは聞えないふりをして去る。

町子。有田さん、ドクトルが見えたら、すぐこの組から始めていたゞきますから。

有田。さきほどおみえになつてましたが……。あ、おいでになりました。

學校の囑託醫尾形ドクトルが現はれる。

尾形。よく晴れましたなあ。昨日の工合だと、風は止んでも雨はどうかと思つてましたが、しかし、道はひどいです。自轉車の輪が半分めり込む始末です。そこへもつて來て、今朝は珍しく下痢患者が三人もやつて來ましてな。一人は赤痢の疑ひで、目下檢便中です。こちらは、お變りありませんか。昨日鼻血を出したお子さんは、もう元氣ですか。

町子。では、早速、お願ひいたします。ざつとでよろしうございますから……。有田さん、高さんの體温表をもつて來てお目にかけて御覽下さい。

醫者が子供たちの健康診斷をはじめると、こつちでは、町子と朔郎とが、何か小聲で話し合ふ。

朔郎。僕はいやだよ、そんなことは……。

町子。だつて、あんた……。

尾形。どらどら、口を開いて御覽。はゝあ、この齒は、ちよつと困つたなあ。

朔郎。僕は絶對、さういふことは御免だ。しかし、今日は、マダムの來る日だよ。君だつて、外へ出るわけにやいかないよ。

尾形。(女の子が何か小聲で云ふのを聽き取らうとして)え？ え？ え？

有田道代が體温表をもつて來る。町子と朔郎との話を、聽くともなく聽いてゐる。

町子。それぢや、もつとよく考へませう。有田さん、そこにゐたの？ 今日はマダムのみえる日ですよ。よく氣をつけてね。食堂へいらつしやるかも知れないから、あんまり散らかしとかないで……。

有田。はい。これでもう何週間目ですか知ら……。だんだん忘れ勝ちになりますわ。でも、またお顔を見ると、泣かされるにきまつてますわ(さう云ひながら、もう涙を拭いてゐる)

尾形。(診斷を終り)さうすると、別に異狀はありません。た

だ。この大將の蟲齒は、ひとつ、今のうちに東京へ歸つて直させないといけませんよ。それから、休養室にゐる、この間はひつて來た、何んとかいふ坊つちやん、そら、ビリケン頭の……。(子供たちの笑聲)

町子。そんなことおつしやつちやいけませんよ、先生。大隅博士の坊つちやんですか。六里さん……。えゝ、それが……?

尾形。あの容態では、やはり、自宅へ引取つてもらつた方が安全でせう。こゝは療養所ぢやないんですからなあ。どうも、親達は、此處を誤解してるやうです。林間學校と云へば、元來、普通の健康兒に、最も健康的な生活をさせるのが目的で、病弱な子供に消極的な治療法を講じることは、他に適當な場所と施設がある筈です。

町子。さ、皆さんはもういゝんですよ。食堂へいらつしやい。

(兒童たち去る)

朔郎。有田さん、泣くのはよしてくれ。

尾形(道代から體温表を受け取り、それに目を通しながら)あなただつて、先生と看護婦を兼任ぢや、なかなか骨が折れるでせう。

道代。あたくし、お子さんたちのお世話は好きですけれど、何時か見たいなことがあると、恐ろしくつて……。

尾形。ちよつと雨にあたつたからつて、すぐに肺炎を起すやうな子は、こんなところへ預けるのが無理なんです。奥居さんの御主旨には反するかも知れませんが、ある程度以上虚弱な子供は、絶對に受け附けないやうにしてほしいですな。

町子。そんなことおつしやつたつて、丈夫な子供を、わざわざ家庭から放して、こんな田舍へ寄越す人もゐますまい。無料で預るつていふなら別ですけれど……。定員三十人が一人缺けても、經營は困難なんですからね。さう希望者の擇り好みはできませんよ。

尾形。なるほど、わたしは別に、經營方面に喙を容れる資格もなし、與へられた仕事を精一杯やつてゐればいゝわけですが……どれ、向ふの組をひとつ……。

道代。もう食堂にはひつてるかも知れません(先に立つて歩き出す)

朔郎。(二人が去るのを待つて、町子に)ドクトルの云ひ分は至極尤もだよ。僕だつて、子供のお相手をする柄でもないし、

たまに遠足に引つ張つてくと、それが因で死ぬ子供ができるし、自分で責任は負はないにしても、寢覺めがわるくつてしやうがない。君は二口目に、僕の健康のことを考へてこの仕事を擇んだんだつていふけれど、僕に必要なのは良い空氣ばかりぢやないんだ。

町子。それはわかつてます。だから、あんたは、なんにも心配して下さらなくつていゝんですよ。

朔郎。……。

町子。此處がうるさければ、晝間だけ何處かの離れを借りてあげます。(腰かける)

朔郎。今の場合、君にそんな負擔をかけるわけに行かないよ。君は、なんでもさういふ風に、ひとりで決めてしまふからいけないんだ。僕が、だんだん生氣地なしになるばかりだ。

町子。だつて、あなたに相談してちや埒が明かないんですもの。それになんと云つても、あたしの方が姉さんなんですからね。

朔郎。……。

町子。さういふと、あなたは變な顏をなさるのね。自尊心を傷けられるやうにお思ひになるんでせう。でも、仕方がないわ。あたしたちの間では、それが大きな問題ですし、いろんなことが、そこから始まつてるんですから……。

朔郎。いろんなことつて、なにさ?

町子。なにもかも……。例へば、あたしの義務つていふやうなもの……。

朔郎。下らない……。

町子。下らなかありません。ぢや、云ひませうか。あなたの我儘が、あたしには、だんだん有りがたくなつて來るんですよ。必要でさへもあるやうな氣がするんです。おわかりになる?

朔郎。……。

町子。あなたの缺點といふ缺點に、だんだん惹きつけられて行くのは、どういふわけでせう。あたしがこんなことを云ひ出したので、却つて愛想をおつかしになつちやいやよ。

朔郎。よさうよ、もう、さういふ話は……。甘つたるい感情を、今更こね返してみる氣にはなれないよ。僕は……。それより、死ぬか活きるかつていふ仕事にぶつかつてみたいん

だ。かういふ手應へのない生活は、もう御免だ。

町子。だから、丈夫におなんなさいよ、丈夫に…………。さうしたら、なんだつて出來るぢやありませんか。あたしがゐて邪魔だとお思ひになるなら、しばらく別々になつてゝもかまひませんよ。そこは聽きわけがようござんすよ。

朔郎。そんなに先廻りをしなくつたつていゝさ。何時、君がゐて邪魔だと云つた？ 君がゐなければ、僕は食へないんだからなあ。どんな人間でも、良心の何處かに眼かくしをしなけれや、滿足に生きて行かれない時代だ。僕は、その點、君には頭が上らないよ。

町子。なんとでもおつしやい。

朔郎。君は實際家のやうにみえて、ほんとうは空想で生きてゐるんだ。僕には實行力こそないが、なんでも裸にしてみる癖がある。僕たちの關係が、どんなもんだといふことは、僕にわかつてるほど、君にはわかつてないんだ。君は、自分の年のことなんか氣にしてるらしいが、年ぐらゐどうだつておんなじさ。君がもう十若いか、僕がもう十、年を取つてゐたところで、君が不滿なところは不滿だらうし、僕が得をするところは得をしてるんだ。お互に、もう、二人のことで、餘計な神經を使ふことはよさうぢやないか。初めもなく終りもないつていふやうな夫婦があつてもいゝ筈だよ。

町子。初めがないつていふのは、どういふわけ？

朔郎。結婚式を擧げた時には、もう結婚してゐたといふわけさ。

町子。ぢや、結婚した時は？

朔郎。そんなこと訊く奴があるかい。兎に角、それ迄の一年間、僕たちは、世間からもう特別の眼で見られてゐたぢやないか。世間の眼ばかりぢやない。自分たちでさへ、めいめいの位置を忘れてゐたんだ。何時からともなく忘れてゐたんだ。

町子。それ御覽なさい。さういふ歷史がちやんとあるぢやありませんか。

朔郎。初めのない歷史だ。

町子。どんな歷史でもさうね。まあ、初めはそれでいゝとして、終りがないといふのは、どう解釋したらいゝの？

朔郎。言質を取らうつていふんだね。

町子。困るでせう。

朔郎。困らないさ。

町子。何時の間にか終つてゐるつていふ風な終り方は、あたし、いやですよ。あなたの心の中で、自分の領分がだんだんに狹められ、もう一人の女の領分が、だんだん擴がつて行くのは、見てゐて苦痛ですわ。

朔郎。もう一人の女つていふのは誰のことだい？

町子。……。

朔郎。さういふことを、今頃口に出すのは不謹愼だよ。それが君の實際的にみえて案外空想家たる所以だ。僕とその女とを並べてみて、誰がそんな疑ひを起すもんか。

町子。いろいろ考へてゐたくせに、いざ云ふとなると、へまなことしか云へないのね。空想つて云へばそれまでゞすけれど、あたし、もつと、そのことについて、はつきりした意見をお話しておきたかつたんです。でも、今日はよしませう。

朔郎。僕の眼の前に新しい女が現はれるたんびに、君はなにかしら不安めいた態度を示すけれど、今迄、一度だつて、なにか間違ひを起したことがあるかい？ 有田君が此處へ來た當座、僕が戲談口をきくから、それが危いと云つて、君は警戒してゐたね。十年一日の如く、僕はあの人に戲談口をきいてゐる。そして、これが、どうもなりはしなかつたぢやないか。花卷夫人は、向ふから僕に馴々しく言葉をかけるが、僕の方は、だんだん、あの女に親めなくなるばかりだ。あゝして、毎週、此處へやつて來ることだつて、僕は、不愉快なんだ。子供を不意に亡くした母親の悲しみを、あゝいふ方法で慰めるといふのが、抑も氣障だ。初めのうちは、自分の責任感も伴つて、同情もしたが、今ぢや、義理にもお愛想は云へなくなつた。それを、君がどうして、あんなに大事に取扱ふか、僕は不思議なくらゐなんだ。

町子。お金があつて美しい未亡人つていふものは、あんなことでもしてゐなければ日が過せないんでせう。あたしは、この學校の評判をよくしたいのよ。

朔郎。それはわかるさ。僕だつて、君の仕事を邪魔する氣はない。あゝいふ失策を取返すといふ意味でも、あの女の御機嫌取りは相當にやつてゐるつもりだ。それを君が、かれこれ云ふのは可笑しいぢやないか。

町子。さういふ表面のことは問題にしてやしません。もつと拔

目なくやつて欲しいくらゐですわ。たゞね……。

朔郎。たゞ、なんだ！」

町子。たゞ、しつかりしてゐて下さればいいのよ。

朔郎。それは、あの女に限らないことだらう。僕は、元來、そんなにしつかりしてる方ぢやないからね。僕が、假に今、引つかゝるとしたら、有田君でもなく、花卷夫人でもないよ。

町子。それぢや、だれ？

朔郎。民子だ。」

町子。……」

朔郎。小磯民子さ。

町子。十三の……。戯談云ふと承知しませんよ。

「この時、自働車の音が聞え、それが門前で止る。やがて、花卷篠子が供の女中を連れて現はれる。運轉手が大きな紙包みを抱へて、その後に從ふ。

町子。あら奥様、やつぱりお見えになりましたのね。今日はどうか知らつてお噂をいたしてをりましたの。

篠子。お晝に間に合ふやうにつて急いだんですけれど……。なんなら、おやつにでもね。

町子。また頂戴ものですか。そんなに遊ばさなくつても……。

篠子。これが楽しみなんですから、まあ、さうおつしやらずに……。(運轉手に)あんた、ちよつとそれを何處かへ置かしていたゞいて……。

町子。(朔郎に)お晝の最中でせうから、有田さんにでもさうおつしやつて、あなた……。

朔郎。(運轉手を案内して)ぢや、どうぞこつちへ……。

篠子。(女中に)かずや、お前もお手傳して、……。

三人は食堂の方に去る。

町子。奥様のやうにわたくしの仕事を理解して下さる方ばかりですと、ほんとによろしいんですけれど……。あんな取り返しのつかないことをしてしまつて、一時は、全く、眼の前が眞つ暗でございました。奥様のさういふ寛大な、氣高いお

志に對しても、飽くまでこの事業を完成させたいと存じますわ。」

篠子。さうおつしやられると、却つてあたくしが困つてしまひますわ。あたくしはたゞ、自分の氣持だけで、こんなことをさせていたゞいてゐるんですから……。亡くなつた子供のことを思ひ出すのに、此處ですと、あの子の、元氣な、樂しさうな顏ばかりが浮んで來るんですの。それに、あの子が、仲良く遊んでいたゞいた同じ年頃のお友達は、やつぱり、餘所のお子さんのやうな氣がいたしませんわ。

町子。今日はお辨當を御持參ぢやいらつしやいませんの。

篠子。無論、御持參です。また何處かお邪魔にならないところで……。

町子。やつぱり、外がおよろしいんでせう。

篠子。えゝ。あたくしたち、勝手にいたゞきます。どうぞおかまひなく……。

町子。では、わたくしも、ちよつと濟まして參りますから、どうぞごゆつくりと……。（行きかけて）あ、お茶は……？。

篠子。御座います。

町子去る。運轉手が歸つて來る。

篠子。あつちのバスケットをこゝへ持つて來て頂戴な、魔法壜とね。

運轉手。はあ。（自動車の中から運んで來る）

篠子。（子供のベンチに腰をおろし、あたりを見まわす。運轉手去る）

そこへ、小使の妻たいが現はれる。手に、子供の帽子と靴を持つてゐる。

たい。毎日お暑いことでございます。

篠子。ほんとに、でも、よくお精が出ますね。

たい。いゝえ、もう年が年で、生氣地がございません。それはさうと、これはお宅の坊つちやまのぢやございませんでせうから知……。何時ぞや、雨で濡れたものを一緒に乾かしといて、取込む時にこれだけ紛れてしまつたんでございますよ。

奥さまがいらしつたら伺はう伺はうと思つて、そのまゝになつてしまひました。

篠子。あゝ、さうです。いたゞいて歸りませう。どうもお世話さま。(受け取つて、しばらくそれを見つめてゐる)

女中が歸つて來る。

女中。みなさま、おほよろこびでいらつしやいます。これ、お開けいたしませうか。

篠子。あゝ。

たい。では、御免なさいまし。

篠子(會釋する。やがて)今頃、こんなものを返してよこしたよ。

女中。…………。

篠子。人が折角、勝手な空想をしてゐたのに……。これで、坊やが、食堂でチエリイをたべてゐないつていふことがはつきりしてしまつた……。

子供たちのがやがやいふ聲が近づいて來る。すると、一人づゝ篠子の前に現はれ、さも、今誰かに敎へられたといふ風に、ぴよこんと頭を下げながら、「小母さま、御馳走さま」と云つてひつ込んで行く。篠子は、はじめ、笑顔を作つてこれに應へてゐるが、だんだん堪へられなくなり、いきなり、ハンケチで眼をおさへる。

篠子。(片手を振りながら、涙聲で)もう、よろしいのよ、みなさん、もうよろしいのよ。

二

事務室風のガランとした部屋。中央に丸テーブル。その周りに椅子が四脚。部屋の兩隅にデスクがそれぞれ一つ。その上に書類が散亂してゐる。壁に書棚、地圖、標本の額など。

町子が、デスクの一つに向ひ、何か調べものをしてゐる傍らへ、朔郎が椅子を引寄せて坐る。

朔郎。僕はなんて返事をしていゝかわからないから、君、出て

くれよ。

町子。だから、そんなことは知らないつておつしやればいゝぢやありませんか。

朔郎。さう云つたさ。しかし、それぢや、花巻夫人が、なんの目的で毎週、こゝへ來るのか、それを話せつて云ふんだ。この學校で子供が死んだなんて云つてもいゝかい。云ひ方によつちや、あとがまづいだらうと思つてさ。ほんとの事を云ふにしても、君の方が穩かな印象を與へるよ。マダムが此處を密會の場所にしてゐるなんていふことは、云はゞ口實で、この學校の內幕を探りに來たのかも知れないからね。

町子。その相手はどんな男だか訊いて御覽になつた？

朔郎。訊かないうちに向ふから云つたよ。なんでも、死んだ主人が世話をしてゐた同鄉の苦學生らしいつて……。

町子。苦學生……？それやまた、變な噂を立てられたものね。ちや、兎に角、あたしから話してやりませう。

朔郎。金でもやればすむのかも知れないが、こつちへ來るのは、ちつとお門違ひだ。尤も書かれやうによつては、いゝ宣傳になるかも知れないさ。

町子出て行く。ピアノに合せて生徒の歌が聞える。朔郎は、肱をついて考へ込む。

開け放された窓に、雨が降り込んでゐるのに氣づき朔郎は、起つて行つて窓を閉める。小使が土瓶をもつてはひつて來る。

朔郎。おい、角さん、お前はなんでも人の知らないことを知つてゐる男だが、花巻の奧さんが此處から歸る時、眞つすぐに家へ歸るかどうか知つてるか？

角さん。さあ、そいつはわからねえ。たゞ、この前、一人で來なすつた時、歸りがけに、小聲で「何時ものとこ」つて、運轉手さんに云ひなすつたやうだつたが、間違つてるかも知れねえ。

朔郎。先週だね。

角さん。それから嬶の話だからあてにならねえが、その前の週、丁度嬶が土手の上を歩いてたら、奧さんが若い男の方と一緒に、渡しに乘らうとしとんなさるところで「おや」と思

つたなんて云つとりましたよ。

朔郎。此處へ來た日かい。

角さん。さうですよ。今日は急ぐからつて、お晝をあがられずに歸りなすつたけが……。

朔郎。さういふことは、もう二度目だ。すると、まんざら嘘でもないな。

角さん。今のお客さんも、そんなことをわしに訊きなすつたが、なにか奥さんのことで、あつたんですか。

朔郎。奥さんがさういふことで、噂を立てられてるらしいんだ。なるべく餘計なことは人に云はない方がいゝよ。もういいから、お神さんをちよつと呼んでくれ。

角さん。へえ(出で去る)

朔郎はちよつと廊下に出てみるが、やがてまたもとの席に戻り、その邊の書きれに何か樂書をしはじめる。唱歌がまた聞えだす。

やがて、角さんの女房たいが現はれる。

たい。なにか御用でございますか、旦那さま。

朔郎。もつとこつちへ來てくれ。(たいが不審げに、部屋の中ほどで立ちすくんでしまふので、自分で起つて行つて近づく)お前、花卷の奥さんが渡しに乘らうとしてるとこを見たさうだね。それやほんとかい。

たい。ほんとだと、どうなんでございませう。

朔郎。そんなにびくびくしないでもいゝよ。そん時、若い男が一緒にゐたさうだが、顔を覺えてるかい。

たい。お顔なんか、遠くでよく見えませんでした。

朔郎。どんな風をしてた?

たい。白い洋服を召して、眼鏡をかけて……さあ、なんて申しますか……。

朔郎。もうよし!(彼は、さう言ひ放つて、たいに背を向ける。が、思ひ出したやうに、また踵をかへし)そんなことは、誰に訊かれても默つてるんだよ。人の内證事は秘してやるもんだ。

たい。(この時丁度テーブルの上の茶碗を片づけてゐたが、その手をすべらして盆を下に落す)

朔郎。おい、おい、靜かに頼むぜ。
たい。眼が惡いもんで、どうも………。
朔郎。お前は一體、幾年だつけな。
たい。六十三になります。
朔郎。へえ、すると、爺さんは………
たい。五十九でしたか知ら………。」
朔郎。爺さんの方が若いんだね。
たい。旦那さまんとことおんなじでございます。
朔郎。なるほど、不思議だな。爺さんは浮氣をしないかね。
たい。しても、わたしにはわからないやうにいたしますから………。
朔郎。心掛がいゝな。お前も、それで文句はないんだね。
たい。（これに返事をせず、さつさと部屋を出て行かうとする）
朔郎。おい、婆さん、今日はまた奧さんの來る日だがね、若し、來たら、默つて此の部屋へ通してくれ。今、應接間は塞つてるからつて、さう云へばいゝ。外にゐるつて云つても、なるだけ、さうさせないやうに………。今來てる客と會はさない方がいゝんだ。

たいが出て行くと、間もなく自動車の音が聞え、朔郎は窓ぎわに行き外を見る。また唱歌がはじまる。」
やがて、花袋篠子がたいに案内されて現はれる。

篠子。生憎、降つて來て、困りましたわ。」
朔郎。長いことはないでせう。
篠子。今日は、ちよつとお邪魔して、すぐ歸らうと思ひますの。例のものは、あちらへ持たしてやりました。
朔郎。ありがたう。家内は、今、ちよつと客があつて………。
篠子。さうですつてね。かまひませんわ。ぢや、あたくし、これで………、あなたにさへお目にかゝれば、それでよろしかつたんですの。それでないと、あんまりね………。
朔郎。そんなにお急ぎですか。でも、家内がきつとお話したいことがあると思ふんですが………。
篠子。來週でも、ゆつくり伺ひますわ。どうも近頃は落ちつかなくつて閉口ですの。あなたにこんなこと申上げたくないんですけれど、立つても坐つてもゐられない日があるんです

よ。悲しみが或る程度を越すと、人間の心はこんなに荒れて
「しまふもんでせうか……。

朔郎。……。

篠子。今はたゞ、何かに縋りつきたい氣持でいつぱいです。自分を支へてくれる力が欲しいんです。あら、こんなことを自慢らしく云ふなんて、どうかしてますわね。

朔郎。……。

篠子。あなたの奥樣のやうに、心の鍊へられた、御自分を制御なさることのお出きになる力を見ると、うらやましくなりますわ。

朔郎。……。

篠子。さ、お待ちをしてないで、失禮しませう。でも、なんでせう、一體、そのお話つていふのは……。

朔郎。今、實は、あなたのことを、いろいろ訊ねに來てゐる男がゐるんです。あとで、あなたがお聞きになれば、なにか御參考になると思ふんですが……。

篠子。さうですか。こちらへ何を伺ひに來たんでせう。新聞記者ですか、秘密探偵ですか。

朔郎。新聞です。小さな夕刊新聞ですけれど、割合にお宅の事情を精しく知つてるやうですから……。

篠子。その上なにを知りたいんでせう。あたしが會つて、なんでも話してやりませうか。

朔郎。そんな必要はないでせう。もう暫くお待ちになつたらどうですか。

篠子。ぢや、さうしますわ。今日は連れがあるんですのよ。車の中に待たしてありますから、こちらへはひるやうにおつしやつて下さいません？ あゝ、あたくしが行きませう。

朔郎。かまひませんよ（出て行かうとするが、篠子は、それを制して自分で出て行く）

小使が茶を運んで來る。

朔郎。そこへ置いてけばいゝ、角さんは、幾年の時に今の婆さんを貰つたんだい！。

角さん。えゝと、二十一の年でしたかな。

朔郎。ふうん。すると、婆さんが二十五か。ずつと圓滿で通し

たかい。」

角さん。へゝゝゝ。」

朔郎。その笑ひ方ぢや、先づ圓滿だね。奥さんの自動車を食堂の裏へ廻しとくやうに云つとけ。

角さんと入れ代りに、篠子が白い洋服を着た男を伴つてはひつて來る。

篠子。あたくしの甥ですの。富樫つて申します。學校時代、ランニングで鳴らしたんですわ。こちらが、園長先生の旦那樣……。學校の先輩よ、あなた……。

富樫。始めまして……。

朔郎。やあ……。まあ、お掛けなさい(二人に椅子をすゝめる)

篠子。(朔郎に)御用がおありになるんでせう。どうぞ、おかまひなく……。

朔郎。さうですか。ぢや、ちよつと仕かけた仕事がありますから……。あ、お晝はどうなさいます。

篠子。まだよろしいんですの。

朔郎。あつちの話も、ぢきすむと思ひますから……(出で去る)

篠子は、富樫に片眼をつぶつてみせる。富樫は固くなつて坐つてゐる。彼女は、そのそばに椅子を引き寄せ、耳もとへ何か囁く。富樫、顔をそむけて微笑する。」

篠子。それに、こないだんとこは、おいしくないから、今日は何處か、ほかにしませうね、どうしてそつちばかり向いてるの。

富樫。もつと離れてませうよ。

篠子。そばへ寄つたつて、どうもしやしないわよ。

富樫。あなたの出鱈目にもあきれるな。

篠子。(眼をつぶつて子供たちの唱ふ歌に耳を澄ます)

長い沈默。

町子がはいつて來る。二人の姿を見ておどろく。

町子。ちつとも存じませんで……。

篠子。今日はすぐお暇する筈でしたけれど、なんですか、あたくしにお話があるとかつて……。

町子。御聞きになりました？ では、早速ですけれど……（躊躇して）こゝでよろしいんでせうか。

篠子。かまひませんわ。さうね、でも、なんなら、この人、ちよつと、向ふへ行つてゝもらつてもようござんすわ。あ、これはね、あたくしの甥で、富樫つて申しますの。死んだ坊やの代りに可愛がつてますのよ。

富樫。（會釋した後）ぢや、僕……（起ち上る）

町子。いゝえ、あたくしたちが、あつちへ參りませう。こゝは出入りがありますから……あなた、それぢや、こゝで……御免遊ばせ……（先に立つて出る）

篠子。あの標本でも見てらつしやい。退屈しちや駄目よ（町子の後について行く）

二人が出て行つた後、富樫は、窓ぎわに倚つて外を見る。

やがて、朔郎がはひつて來る。

朔郎。お一人ですか。

富樫。御差支なければ、學校の中を見せていたゞきたいんですが……。

朔郎。お安い御用です。しかし、御目にかけるやうなもんぢやありませんよ。規模といひ、設備といひ、お話にならないほど貧弱です。これでよく文部省が認可したと思ふくらゐですが、なにしろ、日本は、珍しいことでさへあれば、少しぐらゐ與太は通用する國ですから、結構なもんです。別に羊頭をかゝげて狗肉を賣るつもりもないんですが、萬事、理想からは距り勝ちです。

富樫。あなたもやはりお教へになつてゐるんですか。

朔郎。僕は、園長から特に役目を與へられてゐません。顧問ともつかず、舍監ともつかず、秘書ともつかないやうなことをやつてゐます。時には看護人にもなります。

富樫。そのことは奥さんからも伺ひました。奥さんは、非常

あなたに感謝してをられます。

朔郎。それは不思議ですね。恨まれるのがほんとですが……。

富樫。あの人には、さういふところがあるんです。

二人とも、何時の間にか腰をおろしてゐる。

長い沈默。ピヤノの單調な行進曲が聞えて來る。

朔郎。あ、授業が濟んだやうです。

富樫。これからお晝ですね。

長い沈默。

富樫。僕は長くあの人の家へ出入をしてゐますが、近頃、あの人の變りやうと來たら、全くひどいですからね。原因は無論、子供を亡くしたことでせうが、あゝいふ變り方をする人も珍しいと思ひます。」

朔郎。御自分でもさう云つておいでゝすね。それも、我儘のできる身分だからでせう。

富樫。僕は、誰に頼まれたわけでもないんですが、暫くからの誼みもあり、見るに見兼ねて再三忠告めいたことを言つてみたんです。全然効目がありません。丸で子供扱ひにされて駄目です。

朔郎。それやさうでせう。

富樫。さつき、姪だなんて紹介されましたが、あれは出鱈目です。

朔郎（苦笑する）

富樫。僕は、ある程度まで自分を犠牲にしてかゝつてるんです。それには、勿論、戀愛に似た感情も手傳つてゐます。しかし、あゝいふ狀態では、眞面目にこつちの氣持を打ち明ける氣になりません。僕は、遊戯は眞平です。

朔郎。（また苦笑する）

富樫。そこで、ひとつ、先生にお願ひがあるんですが、なんとかして、あの人の魂を入れ替へさせていたゞけませんか。もつと眞面目な態度で、この試練を受けるやうに導いて下さいませんか。

朔郎。（苦笑しながら）そいつはどうも、僕の柄ぢや……。

富樫。宗教の力でも駄目ですか。
朔郎。僕には、さういふ信仰はありません。
富樫。でも、先生はクリスチヤンでせう。
朔郎。さう見えますか。
富樫。でも、さうぢやないんですか。
朔郎。さうぢやありませんな。
富樫。さうでしたか。僕はまた……さうだとばかり思つてました。失禮しました。
朔郎。いや。
　長い沈默。
朔郎。近頃も、運動をおやりですか。
富樫。あゝ、あれも出鱈目です。たゞ、學生時代に、新聞配達をやつたゞけです。
　そこへ、町子と篠子とが笑ひながら歸つて來る。
篠子。さ、もうお話がすんだから、失禮しませう。
町子。まだ、およろしいぢやございませんか。あなた、奥さまから、大層な御寄附をいたゞきましたよ。（小切手を見せる）
篠子。あら、大層だなんて……。（富樫に）さ、もう歸るんですよ。では、また來週……。どうも、お邪魔さま……。
町子。それぢや、お氣をおつけになつて……。お車は……？
（さう云ひながら、先に出て行く）
　篠子と富樫、これに續く。
　朔郎は、戸口のところで立ち止る。
　有田道代がはひつて來る。デスクの上に生徒の圖畫らしきものを置いて、すぐ出て行かうとする。
　朔郎が、その路に立ち塞がる。道代、笑つてそれをよけようとする。朔郎は、兩手で道代の肩を押へる。
朔郎。そんなに逃げないだつていゝぢやないか。
道代。あら、逃げやしやせんわ。
朔郎。ぢや、ぢつとして給へ（かういひながら、左手をうしろ

に廻し、顔を相手の顔に近づける）

道代。（驚いて眼を見張るが、だんだん引寄せられるやうに丈のびをし、呼吸をはづませて、つひに相手の腕の中にからだを投げかける）

朔郎。（素早く唇を盗む）

この時、足音がするので、二人は急に離れる。が、もう既に、小使の妻、たいがそこに立つてゐる。

すると、何を思つたか、道代は、平手で朔郎の頬をいやといふほど打つ。そして、今度こそ、逃げるやうに出て行く。

朔郎は、拍子抜けがしたやうに笑ふ。

たい。（歩き出しながら、朔郎を横眼でにらみ）何か御用はございませんか。

朔郎。ないね。（茶碗を片づける）

たい。お晝をどうぞ……（出て行く）

朔郎は、しばらく茫然としてゐる。

そこへ、町子と道代とがはひつて來る。

道代は朔郎の視線を避け、朔郎は町子の眼附を讀まうとする。

道代。（デスクの上の圖畫を町子に示し）これとこれとが一番よろしいやうですが、どちらを張出しにいたしませう。

町子。さうね。これはだれ……。民子さんでせう。こつちも、なかなかよく出來てるわね。さあ、どうしたもんだらう。色の具合なんか、面白いぢやないの。

朔郎。どら、どら……。僕が決めてやらう。（二つを交る交るに指で指し）ドッチニショウカナ……。こつちだ。（道代に渡す）

町子。駄目ですよ、そんなこと……。

朔郎。君たちに繪のよしあしがわかるかい。そんなあやふやな撰び方できめるくらゐなら、眼をつぶつてやつた方がましだ。

町子。あなたは理屈だけ云つてらつしやい。聴くだけ聴いてる

げますから……。それぢや、こつちにしませう。この方が、天眞爛漫なとこがあつていゝわ。

朔郎。天眞爛漫か……。

道代。午後は、晴れましたら、散歩に連れてつてよろしうございますね。先生もいらつしやいますか。

町子。あたしは行きません。ちよつと東京へ出掛けて來ますから……。

道代、會釋して去る。

朔郎。口止料千圓は奮發したね。だが、その金は一體何に使ふんだい?

町子。あなたに、しばらく旅行をさせてあげるわ。好きなところへ行つてらつしやい。

朔郎。それや有がたいな。

鈴を振る音が聞える。

町子。その代り、一と月たつたら歸つて來るのよ。三百圓あれば足りるでせう。

朔郎。足りるけれど十分ぢやないな。

町子。ぢや、四百圓……。

朔郎。五百圓出し給ひ。さうしたら、一日置きに繪端書を送らあ。

町子。繪端書はどうでもいゝから、「面白かつた」つて歸つて來て頂戴。

朔郎。五百圓でね。さあ、そいつは大分おまけだぞ。

町子。それはさうと、マダムの連れて來た若い男ね。やつぱり、噂の男らしいわ……。

朔郎。マダムが白狀したかい。

町子。甥だなんて嘘らしいわ。今日もこれから、何處かへ行くらしいわ。

朔郎。さうか。はつきりさう云つたかい。

町子。だけど、わからないものね。あの奥さんがあんな男と……。

朔郎。はつきりさう云つたかい。

町子。はつきりもなにも、現に、誰が見たつてわかるぢやありませんか。あれぢや、どんな噂を立てられたつてしかたがないわ。

朔郎。そんな批判は、この場合、通り越してるさ。君は、あゝいふ問題を、何處からみたらいゝか、それを知らずにゐるんだ。つまり君の眼は、事件と一緒に進行してないんだ。時計で云へば、針の遅れてる時計だ。

町子。憚りさま。人間には、自分で自分に云つて聴かせる言葉つていふものがありますからね。あんたのやうに云つてしまへば、人間の本音は永久にわからないんです。覘ひを定めて物を言ふばかりが能ぢやありませんよ。

朔郎。さういふと、僕は君の揚足を取つたことになるね。僕には、さういふ辭もあるにはあるが、今のはさうぢやないんだ。君は現在どう思つてるか知らないが、僕は、あのマダムといふ人を、案外面白い人だと思ひ出したんだ。自暴自棄と云へばそれまでさ。しかし、その自暴自棄に、何處か人の眞似られないところがありさうだ。

町子。誰にだつて人の眞似られないところはあるもんですよ。それこそ、雑駁此の上ない議論ぢやありませんか。兎に角、あんたは、あのマダムに興味をもつてるといふんでせう。噂の相手が、あの男でなく、自分だつたらなんていふ空想もしてみたんでせう。

朔郎。當つたね。しかし、それが自然ぢやないかと思ふんだ。あの女と一緒に、どん底へ落ち込んでもよし、また、一緒に天上へ舞ひ上つてもよし、さういふ義務と資格とを同時に備へてゐる男は、ちよつと外にあるまい。いや、今のは戯談だ。僕は、あの女を絶望から救ひ出せる自信があるんだ。

町子。どういふ方法で……？

朔郎。さあ、そいつは考へてみないとわからない。その答案を生み出すのに旅行はもつて來いだ。早速出かけるから、早く金を取つて來てくれ給へ。

町子。……。

朔郎。なぜそんなに僕の顏を見てるんだい。

町子。……。

朔郎。早くしてくれ。

町子。さういふ旅行なら、お金は出せません。

朔郎。さつき出すと云つたぢやないか。
町子。さつきはさつき、今は今です。
朔郎。出さないんだね。
町子。出しません。
朔郎。よし、そんなら、僕が出て行く。
町子。何處へ行くんです。
朔郎。何處へ行かうと、僕の勝手さ。
町子。お金がないぢやありませんか。
朔郎。マダムのところへ行つて貰つてくる。
町子。あんたは、そんなことをするんですか。
朔郎。君がくれなけれや仕方がないぢやないか。
町子。（キツパリ）さ、これを持つてらつしやい。（小切手を渡す）みんな持つてらつしやい。何處へでも行つて、どういふ風にでも使つてらつしやい。
朔郎。みんなはいらないよ。
町子。いゝから持つてらつしやい。かうしておいて、あなたがどうするか、あたしはみてますから……。
朔郎。（默つて小切手を受け取り）ぢや、貰つてくよ。一と月たつたら歸つて來てもいゝね。
町子。よござんすとも……。
朔郎は、わざとゆつくり出て行く。
町子、怒りに滿ちた眼でそれを見送つた後、靜かにデスクに向ひ、何か書きはじめる。

三

町子の居間――すべて普通の家庭の内部である。夕方の七時頃。
町子と道代とが長火鉢をはさんで向ひ合つてゐる。
道代。さういふお話、今はじめて伺ひますわ。でも、朔郎先生は、きつと、ママ先生のお氣持がわかつてらつしやると思ひますわ。あの奥さんだつて、ママ先生に顔の合はされないやうなことをなさる氣遣ひはありませんわ。
町子。それはどつちでもいゝの。たゞ、今日歸るか歸らないが問題なのよ。一と月たてば歸るつていふ約束なんで

の。こんなことを、あなたにまでお話しするのは、よくよくのことなのよ。意地にでも默つてゐたいんだけれど、あなたは、若いに似合はず、人の心の中を見拔くことがお上手だから、うつかり喋舌らされてしまつたんです。さうです。あたしは、今日、一生涯を通じての心配事があるんです。」

道代。汽車の都合とかなんとかで、一日ぐらゐお延びになることだつてありますわ。

町子。あの人のことだから、一と月は三十日と限らないなんていふかも知れませんね。それならそれでい丶んです。たゞ、明日歸るか歸らないかゞ、同じやうに氣がゝりです。知らずにゐればなんでもないことが、うつかり耳にはひるから、こんなみじめな苦しみ方をするんですよ。

道代。なにかお聞きになりましたの。

町子。それをまだ云ひませんでしたね。實は、何時か奥さんと一緒に來た若い男の人ね、あの人が、つい二三日前、あたしを訪ねて來たでせう。

道代。え丶。

町子。その話では、奥さんは今、あの人と一緒に、ある温泉に行つてゐるらしいんです。勿論、今日も、行き先を突き止めたものもなし、奥さんが家から姿を消したといふその人の話と、朔郎先生があたしに寄越した繪端書とを結びつけて想像してみたゞけですが、その想像が當つてゐるかゐないか、もう一度突込んで調べてみる勇氣もないくせに、あたしは、こんなに焦れてゐるんです。

道代。こんなこと伺つては無禮かも知れませんけれど、朔郎先生が、あの奥さんなら奥さんを、たゞ追ひまわしていらつしやるのと、兩方でほんとに愛し合つていらつしやるのと、どつちがい丶とお思ひになりますの。

町子。その、どつちでもなければ一番い丶ですがね。さうね、強いて云へば、後の方でせうか知ら……。たゞ追ひまわしてゐるだけなら、何時かまた歸つて來るやうに思へますけど、あたしのやうな女は、それほど勘定高く出來てないせいか、自分の夫が、ほかの女に飜弄されてゐるのを見るより、しつかりその女をつかまへてゐてくれた方が、何か氣強いやうな氣がしますね。しかし、こんなことは、いささうなつてみないと、しつかりしたことは云へませんね。あなたはどうな

の。假に旦那さんがあつたとして……？

道代。さあ……。それぢや、もう一つ伺ひますわ。でも、可笑しいから、よしませう。

町子。おつしやいな。

道代。では、朔郎先生が――お名前を云ふ必要はないんですから、一般について云ふんですから、夫つていふことにしますわ。今假に、自分の夫を、自分よりも總ての點で優れてゐる女に奪はれた時と、その反對に、自分よりも劣つてゐる女に奪はれた時と、どつちが諦めいゝでせう。

町子。あなたはどつち？

道代。あたくしは、自分より劣つた女に奪はれる方が諦めいゝと思ひますわ。さういふ女に眼をくれるやうな男なら、さつさと縁を切つてやりますわ。

町子。それやさうですとも……。あなたもやつぱり、さういふことでいろいろ考へてるんですね。考へておいていゝことでせう。たゞ、相手の女を、公平に判斷することは、さういふ場合、なかなか困難ですね。まあ、ほんとから云へば、自分の立場からでなく、その夫の立場から判斷すれば間違ひはないでせう。夫が、何を求めてゐるか。平生知つてゐるわけですからね。今日は、全く、あなたから、分別の緒を見つけ出して貰つたやうなものです。お禮を云はなくつちや……。

道代。あら、いやですわ、ママ先生。あたくしね、實は、一週間ほど前から、御相談したいことがあつたんですけれど……つひ今日まで申上兼ねてゐましたの。ほんとに、あたくし、どうしていゝかわかりませんのよ。できれば、ママ先生から、どうしろつていふお指圖をしていたゞきたいんですの。

町子。よござんすよ、云つて御覽なさい。

道代。あたくし、ママ先生には、それはそれは御恩を受けてゐますし、自分が一生師事していゝ方だと思つてゐますし、かうしてお側へ置いていたゞけることが、どんなにうれしいか知れないんですの。ですから、道に外れたことは、誓つてしないつもりでしたのに、たうとう、こんなことになつてしまつたんですわ。(泣く)

町子。おや、おや……。何んにも云はないうちから、もう泣くんですか。しつかりなさいよ。あたしで、お力になれることなら、なんでもしてあげます。さ、云つておしまひなさい。

道代。順序が變ですけれど、この手紙を先に見ていたゞきたいんですの。(封筒から中身を出して渡す)

町子。(默讀する)

道代。お驚きになつちやいけませんよ。

町子。(愕然として)なんです。これは……朔郎の手紙ぢやありませんか。朔郎が書いたんですか。朔郎があなたに寄越したんですか。

道代。御覽になる通りですわ。

町子。(兩手を膝について、ぢつと道代の顏をのぞき込む)

道代。(次第に顏を伏せ、つひに卓の上に泣き伏す)

町子。この手紙の內容を、先づ二つに別けて、一つ一つ解決をつけて行きませう。

道代。(突つ伏したまゝ)どうぞ……。

町子。第一に、これです。――「先日は、あんなことをして失禮しました。しかし、あなたは、最初、僕の與へるものを拒まうとなさらなかつた。その點、僕は、自分の心があなたに通じたものとして感謝してゐます。ところが、運惡く、あの娘がはいつて來ました、あなたが、その時、憤然僕に與へられた皮肉な刑罰は、聊か僕を面喰はせました。何れにせよ、あなたの超人間的機轉は、あなたを、不幸な汚名から救つたのです」これは、どういふ意味でせう。

道代。(涙聲で)その先をお讀みになつて……。

町子。その先はその先で、あとから……。まづ、この一項の說明を聞きませう。

道代。說明の必要はございません。その通りなんです。

町子。その通りとは……?

道代。あの方が、あたくしに……。

町子。何を與へたんです。

道代。脣ですわ。

町子。あなたが、それを……。

道代。拒むことができなかつたんです。

町子。なぜね。

道代。お察し下さいませ。

町子。よろしい、これはお察しすることにしませう。これから、この「皮肉な刑罰」といふのは……。

道代。これは申し上げられません。

町子。どうして？

道代。あんまり恥かしくつて……」

町子。恥かしいこと……。何んでせう。

道代。女らしくないことですわ。

町子。どこか蹴りでもしたんですか。

道代。いゝえ、かうして、おぶちしましたの。

町子。何處をね。

道代。お顔を……。

町子。朔郎先生の……？　やれやれ、可哀さうに……。それで、朔郎は面喰つたと……。よろしい。ところで、それがあなたを、不幸な汚名から救つたといふのは……？

道代。ママ先生のお耳にはひつても、あたくしの方は……。

町子。被害者ですむといふわけですね。それが今日まで、あたしが知らずにゐて、結局、朔郎が毆られ損をした。それで、第一項はよくわかりました。第二項にうつりませう。――「僕は今、自由な旅を續けてゐます。ママ先生は、恐らく、僕が例のマダムの御機嫌を取つて、日を暮してると思ひ違ひをしてゐませう。その點は、あなたから辯明をしておいて下さい。成る程、僕は、一時義俠心を起して、彼女を自暴自棄の生活から救ひ出さうとも考へた。しかし、それは、餘計なおせつかいだといふことに氣がついたんです。それよりも、路傍に忘れられた野菊のやうなあなたに（道代の顔をちらと見て）滿腔の愛と、力ある慰めを與へ得てこそ、僕は生甲斐があるのだと覺りました。これからすぐに、僕のところへいらつしやい。ママ先生には、少し氣の毒ですが、あの人は、自分の仕事をもつてをり、自分で自分の力を信じてゐる人です。心配しないで、僕のところへおいでなさい。それから、將來のことをゆつくり御相談しませう。」

道代。どうしたらよろしうございませう。

町子。泣かなくつてもよろしい。えゝと、「その點は、あなたから辯明しておいて下さい」……これはもうわかりました。「成るほど、僕は、云々」も、よしと……。この「路傍に忘れられた野菊」はどうです。あなたのプライドは、この形容詞を受け容れますか。

道代。野菊だなんて、勿體ないくらゐですわ。

町子。「路傍に忘れられた」はどうです。

道代。それに違ひございませんもの………。この年になるまで、男性の力から、さういふ優しいことをおつしやつていただいたことは、一度だつてございませんわ。

町子。「満腔の愛と力ある慰め」……。

道代。どちらも、あたくしに必要なものですわ。

町子。それで、あんたは、これからすぐに、あの人のところへ行く氣がありますか。

道代。ママ先生さへ許して下されば、あたくし、參りたいと思ひますわ。

町子。あたしは、「少し氣の毒ですが」、「自分の仕事をもつてゐる」さうですし、「自分で自分の力を信じてゐる」さうですから、それはかまひますまい。(唇をふるはせながら)さ、行つてらつしやい(手紙を投げ出す)

道代(それを拾ひながら)ほんとによろしうございますか。

町子。いゝですとも………。

道代。すみません………。(手紙を懐へしまふ)

町子。あやまらなくつたつてよござんす。

道代。お清書の點を、まだ半分ほどつけ殘してございます。

町子。かまひません。

道代。では、これで失禮いたします。ママ先生も、おからだをお大事に………。

町子。あなたもどうぞ………。

道代は、しほしほと起ち上る。

そこへ、思ひがけなく、ぱつたり、朔郎が歸つて來る。

朔郎。只今………。

町子と道代は、それぞれ、緊張した面持で、そこへ立ちすくむ。

朔郎。どうしたの、二人とも………?

町子。………。

道代。………。

朔郎。默つてはひつて來て、わるかつたかな。

町子。まあ、そこへおすわんなさい。

朔郎。（坐りながら）有田君は、また泣いたね。

町子。どうして泣いたか、訊いて御覧なさい。（出て行く）

朔郎（あつけに取られたやうな風をして）どうして泣いてるの？　おこられたね。

道代。御免なさい（朔郎の膝に顔を伏せる）

朔郎。（もぢもぢして）知れたのか。

道代。あたしがみんな云つてしまつたんですわ。

朔郎。さうしたら……？

道代。お許しが出ましたの。

朔郎。もう遅いよ。

道代。え？　どうして？

朔郎。なぜ、すぐ來なかつたの？

道代。でも、あんまり、急なんですもの。

朔郎。一日考へれば澤山だ。僕は、一週間、待ち續けた。待ち續けた揚句、待ち草臥れて歸つて來た。外に行くところはないんだ。

道代。やつぱり、ママ先生のおそばへお歸りになりたかつたのね。

朔郎。さう云へばさうさ。君だつて、僕よりママ先生を力に思つてるんだ。

道代。違ひます。たゞ、お許しを受けたゞけです。

朔郎。一週間迷つた末にね。

道代。迷つたんぢやありません。なかなか云ひ出せなかつたんです。

朔郎。云ひ出したら、すぐ許したか？

道代。えゝ。あなたのお手紙をおみせしたら、いちいち文句を吟味なすつた上「それは、かまひますまい」つておつしやいました。

朔郎。文句を吟味した上で「それはかまひますまい」……。どうして、先生、さう簡單に許したらう。君、そのわけがわかつてるかい。

道代。えゝ。わかつてますわ。ママ先生は、自分の夫が、ほかの女を追ひまわすだけでなく、その女からも愛されてゐれば、その方が、なにか氣强いやうな氣がするつておつしやいました。それから、自分よりも劣つた女になら、何時でも夫を渡してやるつていふ意見に賛成なさいました。

朔郎。誰の意見、それは……?

道代。あたしの意見ですわ。

朔郎。君の意見……。すると、僕は、だんだん……。さうか。さういふわけか。しかし、その意見が、實際に行はれたかどうか、君たちにはわからんよ。よし、もうなんにも云ふことはない。君がママ先生より劣つてゐる女かどうか、僕が試驗をする役だ。君には、第一に、若さがある。第二に、控え目といふ美德がある。第三に、涙を節約しない。第四に、第五に……いや、總て、ママ先生のもつてゐないもの、僕の餓ゑてゐるものをもつてゐる。それだけで澤山だ。

道代。そんなら、やつぱり、あたしを愛して下さいますの?

朔郎。愛するなんていふ言葉は、今の場合不用です。僕は、あなたの前に、ママ先生を跪かせよう。それが僕の義務だ。

道代。後生ですから、そんなことをなさらないで……。ママ先生は、お氣の毒なんです。

朔郎。氣の毒なのはわかつてゐる。僕は、みんなに氣の毒なんだ。みんなを氣の毒な目に遇はせてゐる。氣の毒と氣の毒とを相殺するんだ。その方法を、僕は考へ出したんだ。ちつとして給へ。ママ先生は、自分の力を信じてゐる。僕が結局、こゝへ歸つて來ると思つてゐるんだ。縛らずにおいて縛らうといふ戰法だ。それもよからう。現に、僕はかうして歸つて來た。現に僕は、また縛られようとしてゐる。君は一體なんだ。猿廻しが、猿の腕に抱かせる人形だ。

道代。あたしがですか。

朔郎。さうさ。

道代。いやです、いやです。そんな人形はいやです。

朔郎。いやでも仕方がない。しかし、僕は、その人形の方が欲しいんだ。それはたしかだ。

道代。たしかですか。

朔郎。うん、たしかだ。しかし……。

道代。そんなら決心をして下さい。

朔郎。駄目だ。僕は、なんでも、自然に決められるものは自然に決めたい。撰擇をする力がないんだ。自分で撰んだものは、きつと後悔するんだ。ある感情を制しても、制しなくても、同じ分量の苦しみと戰はなけれやならないんだ。所謂善も、所謂惡も、僕には、同じ程度の魅力、同じ程度の恐怖だ。

どつちを取るのにも、同じ疑ひが起り、同じ勇氣が必要なんだ。
道代。そんなら、あたしはどうすればいゝんですの。
朔郎。ぢつとして給へ。
道代。こゝに、かうしてゞすか。
朔郎。うん。
道代。ママ先生のおそばでゞすか。
朔郎。さうだ。
道代。そんなことができますか。
朔郎。できなくつてもするんだ。

　この時、町子が靜かにはひつて來る。默つて緣側の障子を開け放つ。暗い庭に、生徒一同が列を作つてゐる。

町子。みなさんが長らくお世話になつた朔郎先生と、有田先生が、今度、この學校から、餘所へおいでになることになりました。お二人の御幸福を祈つて、お別れの御挨拶をいたしませう。
生徒一同。朔郎先生、有田先生、御機嫌よう。

　朔郎と、道代とは、しぶしぶ、同時に起ち上る。

朔郎。はい、ありがたう。みなさんも御機嫌よう。
道代。(涙をおさへ)これからも……どうぞ……マ……マ……ママ先生の……ママ……ママ……(遂にその場に泣き伏す)
生徒一同。朔郎先生、有田先生、さよなら……。
朔郎。はい、さよなら……。
町子。では、みなさん、寢室へお引取りなさい。

　生徒一同は、ぞろぞろと歸つて行く。

町子。(しばらくして)さ、二人とも、車の用意ができてゐますよ。

──幕──



邪靈

岩藤雪夫

1

目の前には饑餓だけがあつた。

妻と娘は行衛不明だつた。絶望が垢まみれの皮膚の割れ目から食ひこんだ。

――棄身になれ！　棄身になれ！――

彼は鑛物の斷面のやうな眼玉で呟やいた。

そして跛の左足で乾いた夜路を蹴つた。

人間は不幸な境涯に沈むとそれよりもつと悪い場合か、正反對の側の誇りかのどつちかを考へたがるものらしい。だがそれは「のつぴきならない」破目に陥り込んだ自分への空ツ景氣に過ぎない。

一年振りで石炭くさい本所に歸つて怖はごはと自分の家をのぞいてみると知らぬ他人が住んでゐた。表札がちがつてゐた。

悲しみも怒りも全部そこにぶちまけやうとして歸つてきた彼はガツカリし

た。松葉杖と跛と醜の傷に氣後れがして、近所の昔馴染の神さんたちにさへ妻の居所を質ねられなかつた。

通りかかつた娘が、

『風祭さんちは品川へ越したんですよ……』と囁ずきらしく教へて與れた。『小父さんは何處かへ行つちまつて、小母さんはササラ賣りですつて、ええ、品川の靑物横丁とかいふ話です……

……』

彼は跛でない方へ頭を下げて禮をいふと品川へ鼻つ面を向け更した。もう一度自分に言つた。

――娘と女房は饑ゑてゐるんだぞ――

二日間も水より上等な食物を送らなかつた胃袋は二十歩毎ぐらゐにぐふぐふと食道をきめつけた。街には夕飯の燒肴の匂が漂つてゐた。唇はパクパクと空氣を食つた。

彼は「毎月五十圓は送つてやらあ、心配すんない！」とタンカを切つて出發したのに一回しか送らなかつた。彼は妻の目が恐しかつた。ササラ賣りをしてゐる妻に濟まなく感じた。女の姿さへ見ると女房に似た體格恰を探した。

『あら、お前さん』

と何處かから出て來やしないかといふ空だのみもあつた。

電車の線路は夕暮れの街に冷く曲つてゐた。彼は世の中にヒケ目を感じてゐる人間のやうに下を向いて歩いた。目の下で人間並の左足と跛の方とが無格恰に松葉杖と絡らみ合つた。

彼は足首の動きをあざ笑つた。

彼は戰地へ行つて片足を捥り取られた友人を知つてゐる。彼は若い頃、戰爭を好んだ。軍人の繪を聞いては壁に貼り空想の翼をのばすのを樂しみにした。しかし鐵工場で一人前の仕上工になつた頃、シベリアに出征したその友人が跛になり肩を怒らかして凱旋したのを見せつけられてからは戰爭も軍人も嫌ひになつた。

最初の間こそ在鄕軍人會や近隣の人々から「名譽」の負傷としてもてはやされたが、時の經つにつれて本人の方からヒガんだ、不具で仕事にありつけなかつたからだ。二年後には松葉杖をついたその友人は芝の怪やし氣な宿に閉ぢこもつて、澤山の不具者たちと藥の行商を始めた。友はそれから、人の目を眞直に見られない、白い齒ばかり出して話をする男になつて終つた。「征露丸」といふ袋入の藥を賣りながら「自分達が如何に戰

地で××××××××を殺したか」を千斷れた腿を叩いて孤兒院の物賣りのやうにかこつのであつた。

『態あみやがれ！』と其時彼は腹の中で友人を毒づいた。『乙に××の×××で××しやがつたくせに……』

今はそれと同じ氣持で自分の跛を輕蔑した。

『態をみやがれ、大威張りで北海道くんだりまで出かけやがつて！』と。

獨り言をぶつぶつ言つて歩いてゐる三本足の汗臭い跛に街の人は流し目を投げつけた。すると彼は周圍の凡ゆるものに唾を吐きかけたくなつた。

走る電車、にこにこして行く人間、奇麗な街、流し目、自分の跛、杖、みんな小癪にさはつた。立派な衣服を着てゐる人に逢ふと尊敬と怖れにかられた。それは彼が子供時代から植ゑつけられた癖であつた。彼はそのケチな癖にさへ唾をかけたかつた。自分の體中に沁みこんでゐるどんなものにも嫌氣がした。

——ヘッ！　片足と命を取換つこしやがつてこの野呂間野郎！

と彼は空に唾をした。唾は顏にかかつた。そのまま下を向いた。無ざまに動いてゐる兩足と杖とがそこにはあつた。彼は或る不思議さを兩足に覺えた。足を變ちくりんなものだと思つた。どちらの足が完全なのだか彼は解らなくなつた。足の上には歩く度にちんちく歪む胃の腑の縮んだ胴體が、次には傷だらけの二十八才とは受け取りにくい顏があつた。

彼はふと「呪」といふ言葉にけ躓いた。それは親の代から傳へられて二十八年間何の考へもなく信じてきた「道祖神」と呼ぶ宗教だつた。

「道祖神」とは祖先よりもつと一代先の氏（族）の先祖を御神體としてゐた。

幼い頃から彼は朝晩兩親の後に坐り「道祖神」の神棚に額いた。そして

「トヨアシハラミヅホノクニ……」の冒頭から「……ツツシミテモーサク……」

までを讀み上げ一家の安全を祈願することを教へられた。それをしないと撲られたり、をどかされたりした。

だから彼は親の拳骨に要心することばかり覺えた。從つて未來を恐れた。

熱い飯が嫌ひな彼が、茶碗に盛つた飯を必ず一寸舌の先で舐めてみてからでないと、箸をとらなくなつたのもそのせいであつた。

その癖は妻子ができても治らなかつた。

この宗教は世の中のどんな罪悪をでも完全に靈の存在を以て說明した。六道リンネといふことも認めてゐた。

世ニ三種ノ靈アリ。

母胎ニ宿レルトキ憑ケルモノヲ第一靈ト稱シ天眞爛漫タリ。母胎ヨリ生レ出デタルトキ憑ケルモノヲ第二靈ト稱シ智ヲ掌ル。

長ズルニ及ビテ憑クヲ第三靈ト稱シ邪靈ト神靈トノ二種アリ、邪靈ハ杳冥之世界ニ住ミテ臭ヲ好ミ惡ヲ掌ル。

神靈ハ靈界ニ住ミテ美ニクミシ正ヲ掌ル。

と經文の主文にあつた。

道祖神會の說教師は、

「心さま惡しく身體不健康のものは必ず第三靈の乘ずる所となりて惡業をなす。例へば××時に於て萬引などを冒す婦人の罪惡の多くは臭を好む邪靈に乘ぜられた所以のものである……」

などと說いて信徒を感心させた。しかし第三靈を見たものはゐなかつた。

彼も邪靈に憑かれて不幸に落ちないやうに長いこと祈り、二倍になつて戾るといふ言葉を信じて說教所への寄附を續けてきた。

然し、失業した。跛になつた。饑餓に追ひかけられた。歸つてみると妻と娘は行衞不明だつた。

2

譯はかうであつた。

大正十二年九月一日の關東大地震の際に、時の政府は銀行企業家のために「凡ての仕拂ひを一ケ月猶豫す」る所のモラトリアム(仕拂猶豫令)といふ制度を布いた。

若し損をしたら政府が保證する約束の下に日本銀行は各銀行や資本家にどしどし金を貸した。それは資本家を倒さないやうにとの政府の魂膽からであつた。所が昭和二年四月までに日本銀行は五億圓貸出をしたが半分以上が戾らなかつた。

足らないくらゐだから企業家は金を動かさうとしなかつた。勞働者は賃銀を拂つて貰へなかつた。小工場や中小資本家が枕を並べて倒れた。失業者が殖えた。

然し政府は失業者に職を與へることをしないで、日本銀行に五億圓と、危い臺灣銀行のために二億圓を都合してやつて呉れと議會に提案した。樞密院の禿頭連がそれを蹴つた。經濟界が動搖しかけた。すると慌ててそれが議會を通過した。

そのどさくさまぎれに渡邊銀行といふ奴が潰ぶれた。彼は渡邊銀行の大株主が經營してゐる東京瓦斯電氣工業の下請けをしてゐた小さい街工場に働いてゐた。銀行が潰ぶれたので瓦斯電氣も事業を縮少した。街工場は仕事がなくなつた。その工場主が夜逃げをした。

五月の末のことだつた。

三十七人の職工が勢揃ひして「何とかして下さい。」と所轄署へ嘆願に押しかけた。

署長は入口の扉に立つて呶鳴つた。

『何んだものものしい、大勢で押しかけやがつて、工場主が居ないのに我々にどうしろといふんだ。法律とはそんな勝手落ちのものではない……』と。

彼は署長のその態度に怒つた。でもどうしていいか方途がつかなかつた。

今から考へれば「もつと我無シャラに押しを利かせ」ればどうにかみんなも助かつたのぢあないかと思はれた。例へば警察の前で三十七人が夜明しでもして頑張れば。

職工たちは仕樣ことなく又工場へ戻つた。

工場では執達吏と債鬼とが騒いでゐた。競賣が行はれた。契約者もなく印鑑届もしてない職工たちには配け前にあづかる資格がなかつた。三十七人は一文もとれなかつた。

これが「道祖神へ祈りの足りなかつた罰だらうか。」彼は邪靈に逢ひたいとさへ思つた。若し祈禱や寄進が足りないなら、なけ無し財布の底をはたいてもしようと決心した。

だが歸り路の彼は月島の繩のれんで電氣ブランに赤くなつてゐた。

彼はそこで意氣な船員に出くはした。

『はあん、君も陸に愛想がつきたつて顔附をしてますね。パ

ツトの吸口を喰ひちぎつたりして、』と船員は話の中途で笑
つた。
『船にお乘んなさいよ、歐洲航路を一回やれあ二千圓は殘りま
すよ、それに世界中乘り廻つてごらうじろ、日本なんか忘れち
まふさ。もうやめられるこんぢやないで……』
彼にはそれが「米櫃」の心配も女房子供への苦勞もなく生き
られるといふ風に聞えた。
『ふんとかね君、どうせれあ乘るれかね。』
『嘘か本當か乘つて見れあ知れる、芝浦あたりに行きや「船員
紹介所」てのが澤山あるよ。あそこで聞き給へ、さよなら、又
逢はふよ。』
船員は甲板を渡る足取りで出て行つた。
月島の大橋から見える海は灰色にむくれて夕陽を落してゐ
た。
「水平線の向うには二千圓の金が轉つてゐるといふことだ。」
彼は親の膝を離れた子供のやうに胸一杯に海の空氣を吸つ
た。
本所の家に歸つて「歐洲航路」の話をすると妻は夫の部厚い
胸を睨んで云つた。
『金ばかりは手に入つて見ねば解らんもんだし、ふんとにそん
な口でもあつたら行んだがええだし』と。
彼は翌日芝浦をぶらついた。
マドロスのカスリ取りの海員紹介所を一軒々々尋ねたが、歐
洲航路の口なんかちつともなかつた。
『然し若えの、お前、身を落す氣があるなら、安上儲かる口が
あるぜ、』
と一軒の鬚むくぢやらの主人が歸りかけた彼を呼び止めた。
『ありますか』彼は顏をほぐした。
『ある、歐洲航路見たいなひよんな仕事ぢやねえよ、積取船ち
ふて、北海道からカムサツカへ鮭の稼ぎだあよ、二ケ月と半分
で五百圓は掴めるに、どうかな……函館までの旅費があればえ
えに。』
二ケ月半で五百圓なら、一ケ月二百圓だつた。
『えらい上等な稼ぎですね、どうか頼みます。』
彼はエンヂンの吸入瓣のやうに頭を下げた。
『それで若けえの、行くなら契約書の手數料が十圓いるぜ、え

えか……』
『十圓、十圓と』彼はどうにかなると思つた。『へえ大丈夫、明日でも持つて参じますに、』
『さうかい、ええ覺悟だ。』
と鬚むくぢやらは奥へ入つて、簡單な契約書を持つてきて見せた。それは契約書といふより辭令と雇傭契約の混血兒みたいのものだつた。
姓名、生年月日、現住所を書入れる空間の次に、
右者月給二十五圓を支給す。とあつた。
雇傭者側の方には、××海運合資會社
とあつた。
『さあ、書きこみねえ、若けえの、名前とそれから……』
彼は耳たぶを引つぱりながら「少し話が違ふ」と考へた。
『いや若けえの、無理もねえさ、是はかういふ譯なんだよ。』と鬚むくは手ぶり顔振り話し初めた。『月給二十五圓ちふのは東京の契約でよう、函館へ入港してお前漁業會社と契約する時にあ二ケ月半五百圓となから約束がきまるのさ、つまりたんさ船ぐるみ傭はれるのさ、』
『へえ、で間違ひなけれあ、行きたいんですが。』
『おおさ、金輪際なもんだ、この俺は界隈で評判の正直ものよ、何處へ行つて尋ねても知つとる、さ、書いた書いた、儲かつたら北海道の土氣さ頼むぜ……』
鬚むくぢやらの主人は筆の先を嚙み嚙み硯を出した。
彼は、指定された箇所に姓名生年月日等を書き込んだ。
『では、』と主人はそれを眺めて言つた。『これは契約手數料と引換へに上げるでのう、明日持つてき給へ、そんでこの契約書を持つて函館の出張所へ行くんぢや、そいてうちの會社の小田原丸ちふのへ乘つて、後はそれ五百圓、手取りよ、丸で話みたいな話よ。』
彼は主人の話上手につりこまれながら遂に約束をした。
そして元氣に小砂利を蹴り蹴り本所へ歸つた。
話を聞いた妻は、
『西洋なんか行くより、日本で稼げるならその方がええだし』と喜んだ。『ぢや、私の嫁入の時の長襦袢を形に旅費を都合しよう、この子の嫁入の時に又、何かにしようと考へてゐたんだけど』

『うん、さうしてくれ、』と彼は女房と小さい娘を見交しながら笑つた。『こいつには、儲けていいものを買うたるわ、なあ……』

『そいぢや、今夜は何ぞ御馳走せにあ、明日は赤マンマ炊かにあ……』

と妻は少しはしやぎ氣味に臺所で働いた。

六つになる娘は「赤マンマ、赤マンマ」と叫んで嬉しがつた。

彼は新しい運の向いて來た事を「道祖神」に告げて、燈明を捧げた。

そして、

「トヨアシハラミヅホノクニ……」

を拍手を打つて大聲に讀み上げた。

夕飯がすむと妻はもう暖くなるからと自分と亭主の冬物と、例の長襦袢を持つて通ひつけの質屋へ行つた。

二十六圓ばかり都合できた。

翌朝の飯は赤マンマだつた。

『お前さん、旅に出たら御飯前に舌で舐めることだけは止めた方がええだし』

と妻は夫をたしなめた。『意氣地なく見えて人にナメられるよ、少しは熱くても我慢せにあ……』

『さうだな、止めるよ、ふんとに……』

と彼は答へた。

娘は小豆を拾つて食べた。彼も充分に腹を拵へた。

芝浦の紹介所の鬚むくの所へ行くと契約書に印を捺して待つてゐた。

十圓の手數料と契約書が取換へられた。

『では、船は小田原丸と、行先は、ええか何かに書いとけや、函館山下町今屋ぢや、六月の五日頃までに向うへ着くやうにな……』

彼はその通りを紙切れに書いた。

契約書を懐に威氣揚々と歸つた彼にどんな邪靈だつて取りつけさうにも思はれなかつた。

3

『毎月五十圓は送つてやらあ、心配すんない、』

と彼は妻に怒鳴つて出發した。

六月三日に函館に着いた。

下宿屋といふのは船宿だつた。××海運の室にはもう十四五人の失業者が汗臭い蒲團にごろごろしてゐた。

壁には虱か蚤を潰したらしい血の跡が一ぱいあつた。男のくさみがむんとした。

腦味噌の輕さうな朝鮮人がドンブリで饂飩粉をねつてゐた。

監督か親方らしいのが安火鉢を陣取つてヤニ下つてゐた。

『私はかういふもんです、どうぞよろしく。』

と彼は契約書を見せて挨拶した。

『ふん、』と親方らしいのは顎鬚を抜き抜き答へた。『そこらへ、へたばつてござれ。おーい、ボースン新規だぞう……』

彼は鯱鉾ばつて隅へゐざつた。

『おい、新規の』と片隅の朝日奈髭が目玉だけを動かした。『われどつから來たあ……にしは北前かのう。』

『へえ、私は風祭平助と申します。』

『はあて、縁起でもねえ名前のもんが船へのりよる、何もわかんねえとみえるな、俺はボースンちや、にしはホンマチの地獄をせにあたんねえぞ……北前ちふのはな、日本海岸の人間かちふ事さ……』

『いいえ、私は東京の者で……』

『はあん、江戸もんかい、そんでぁ、ハバが利かんよ。』

『ニーア、マラカピー』

と隅の方で叫んだ。

それは馬鹿にした調子を含んでゐる支那語か朝鮮語らしかつた。

『ニーア、マントン、シンジョウ……』

寝る前に人のよささうな支那人がうどん粉のマントン(饅頭)を呉れた。

彼はぺこぺこ頭を下げてそれを食べた。

その夜は恐ろしい眠られない一夜であつた。

それに二枚の蒲團で差しに寝るので、相手の足の裏のむれた匂がつんつん鼻にきた。ブラッシのやうな毛脛が頬をこすつた。

虱と蚤が股から腰を食ひ廻つた。手をやると砂のやうに指の股をくぐつた。

彼は「道祖神」の經文を唱へて五百圓を腦味噌の中に押しつけた。

そして五百圓の金で買ひ得る凡ゆる品物を數へた。娘が普段から欲しがつてゐた「寢かすと目を閉ぢる人形」と鏡臺と簞笥の玩具、妻にはちつと小ざつぱりした銘仙に下駄……それから動物園にでも遊びに行く……

目を閉ぢるとそんな事が考へられた。開くと油氣のない仲間の横顏が空想をぶつ壞した。

要塞山の雜木が海風に鳴つてゐた。海鳴りも聞えた。それは彼の未來の生涯を呪つてでもゐるやうに響いた。

彼は時どき起き上つては、眠りこけてゐる人々の顏を見た。誰も彼も生れ落ちた時のやうに有りのままの顏をしてゐた。みんな五百圓を稼ぎにきたんだな、と思ふと淚が流れた。

次の日、彼は二人の仲間ができた。木戸と北見だつた。北見は函館の人間で、毎年夏になると漁場稼ぎをして、冬の半年を寢食ひする習慣に染みこんだ殖民地風な頑丈な季節勞働者であつた。三十五才だと言つた。木戸は矢張り新規で、失業して淺蟲からきた二十五才の讀書ばかりしてゐる青年だつた。

『儂あ、××漁運の小田原丸は之で二度目だが、あの船長の奴と來たら船長とは名だけで××漁業の株主だとよ、その上自分の持船と來てやがる。』と北見は彼と木戸を連れて函館の辨天町を見物する時に語つた。『金も儲かるには儲かるが、ホンマチ稼ぎが荒くつて下駄ばかりはく（漁業會社に内密に漁村に寄港して小使取りをする）から新規や老人が可哀さうなんだ……』

北見は又色々の注意を二人に與へた。

「北前」には餘り強く當らない事。

いい顏ばかりしてゐるとナメられるから身體を張つて見せる事。

カツパラヒは天下御免になつてゐるから注意する事。等であつた。

その他前借は二百圓位できるが出來るだけ使はないで家へ送れと注意した。

彼の語る所によると、二ケ月半の稼ぎ高は五百圓でなく四百五十圓が普通だつた。それも鮭を船に一ぱい滿しての話だし、全部が一人頭四百五十圓とは配分しない。船長が二人分、水夫長が一人五分、コータマスターが一人二分、普通のが一人分、新規は八分から七分、ボーイが四分といふ割合ださうだ。

『そんでもな、役徳があるからな』と北見は最後に附け加へた。『ホンマチ稼ぎ、これあどんなことか口では言へん、本當は是で儲かるんぢやから、我慢せにあたらん。』

彼は翌日、監督に「二百圓借してくれ」と頼んだ。監督は「百五十圓にせえ」といつて十圓紙幣を十五枚よこした。彼はシャツ、煙草、石鹸、砂糖、梅干をふんだんに買ひこんだ。そして五十圓だけを東京へ送つた。

『ふむ、君は感心だ』と北見は言つた。『俺りは餘り後家（淫賣）さへ買はねばええに……』

これは米を食ふなといふのに似た少し無理な註文だつた。他の仲間は毎日毎日、街へ出て顔をてらてら光らせて歸つて來るのに、彼や木戸だけが朝から晩まで大して面白くもない醜つ面を睨らみ合つてゐられるものではなかつた。二人も遂に出かけて世帯もちの後家と遊んできた。後家は二人にそれぞれ寫眞をくれた。

『ハハア、行つたかい、とうとう』と北見は黄色い歯を見せて笑つた。『それで思ひ殘すことは有るまいさ……後は、坊主に騙されないことさ……』

彼と木戸にはそれだけは解らなかつた。が、出帆間際になつて判斷出來た。

それは、カムサツカ行の漁場の漁夫や蟹工船などの人夫を攫り取つてゐるのが、決して漁業會社や中間の受請人ばかりではないといふ事であつた。

函館中の寺がそれだ。ロシアの×××勞働者が「寺院を××しろ！」と叫んだのも無理もない話だ。

函館の各寺院はお守札を賣つてゐた。

危險な作業にでかけるカムサツカ行の人夫は皆そのお守札を買つて行く、お經文づきお守札を。

人夫は寺院の受附へ行つて、

『どうぞお札を一枚いただかしていただきたいんでございますが……』

と申し出る。

『こちらへ。』

と小坊主が本堂へ案内する。

『で、如何程の所に致しまするですか』

と商店へ行つた時のやうに訊かれる。

『如何程つて、一枚です……』

小坊主は笑つて、

『十圓です。』と答へる。

生命を守る札だから高い筈である。十圓を仕拂ふと、金襴の袈裟を着た和尚が現はれてお守札を須彌壇に捧げ、香をたき經文を唱へる。そして十圓では鐘を一つと太鼓を一つきりついて呉れない。二十圓なら二つづつ叩いて呉れる。

といふ事が解つた。

彼は流石にお守札を買はなかつた。その代り「道祖神」を熱心に拜んだ。

五日目に小田原丸は函館に投錨した。

多くの者は六七百噸の汽船を想像してゐたのに、それは五百噸に足りない腰巻ペンキ（船側下部の赤塗の部分）のはげた帆船であつた。補助機關もなかつた。

『小さなインダラ船だなあ』

と或者は感心した。

『當り前だあ、石炭代を儉約するために帆船を使ふんだっ』

『一ケ月二百圓の稼ぎだもん、生命がけよ……』

みんな自分の親を惡口つくやうに小聲で囁き合つた。

『だが辛抱しな、メンコイ若いボーイがゐるぞ……今年も××の念物講だい』

と片頬をゆがめるのもゐた。

二十人の人夫はすぐ乗り込んで準備にかかつた。大掃除をした。ペンキ塗りがあつた。××漁業との契約が終るまでには二週間かかつた。契約が終ると鮭の腹につめる鹽叺をデッキ一杯に積んだ。

三等米と野菜とタクワン樽などが食料として積みこまれた。

支那人たちは前借金でマントン川のうどん粉を買つて寝箱に持ちこんだ。

そして積取船は切出船と名が變つた。

何故、切出船と云はれるか誰も知らなかつた。人夫たちが身を削つて稼ぐ船だからさう呼ばれるのではなからうか。

鮭をとる親船から中積船が鮭をとり、中積船からこれを受け取つて函館に持ち歸るのが切出船の任務だつた。

揚化粧と鹽積みが濟むと船舶検査だ。

當地海事局から出張した船舶検査官は、船舶檢査の前に船長室で

與市リンゴとビールをふるまはれた。

酸化した舷側はペンキの上塗りで誤間化してあつた。吃水保險マークも塗りつぶした。檢査官は小型ハマアで船中の梁を叩いた。縱横の梁はぬれたボール箱ほども鳴らなかつた。

『ハウ、セー』

と船長は氣取つて訊ねた。

『さやう、内地航路なら未だ五六年は大丈夫ですね』と檢査官は首を振つた。『海岸線に沿つて歩けば大丈夫ですよ……』

檢査官が歸ると會社の汽艇がきた。

五百噸滿載	一人分	四百五十圓也

と漁業會社からの達しがあつた。

船は四百五十噸だつた。

『ヘツ、暴化を食やあ、土左衛門だ……』

『さうさ、鮭取りか命取りかわかんねえや』

人夫はそんな減らず口を叩きながら、三本マストの帆をしぼつた。

『ええい、棄身になるんだ！』と彼はその時から考へ初めた。

帆布はハタハタと悲し氣に風に鳴つた。

彼はその時、魚くさいベッドの上でどれ程力をこめて「道祖神」を祈つたか知れない、經文を百數十回繰り返して讀み上げたやうに覺えてゐる。

それを馬鹿にするやうに天井から南京虫がこぼれた。

それでもホンマチ稼ぎで彼は跛になつた。

邪靈はどこかにゐるのだらうか。

小田原丸は港の少い西海岸に沿つて進んだ。

4

夏の日本海岸一體が暴化るのは珍らしくなかつた。

船長は唸る帆布の間から、羅進盤と雲行きと水平線を交りばんこに睨んでゐた。

水夫は船長の濁み聲に從つて舵輪をぶん廻した。

東南風を斜に受けた小田原丸は一時間毎に、秋のやうな氣候の中に乘りこんだ。

東側には荒削りの海岸線が、西には黑い潮の展がりが丸窓の中を動いた。

彼と北見の寢箱は隣合せだつた。

北見は妻と二人の子供の寫眞を枕元に貼りつけて軍隊毛布にくるまつてゐた。向側の木戸は浪の音と競爭するやうに本を讀んでゐた。

慣れた漁夫達は鼻唄を歌ひながら持込み酒をのんでゐた。

人夫附きのボーイは×××××××××××。

もう鼾をかいてゐるのもゐた。

船は搖れた。彼は醉つた。醉ふと梅干をかぢつてはゲーッとはきさうになるのを堪えた。

低い天井からぶら下つたカンテラが赤い焰を細長く吹いてゐた。粉の見える油煙はそこら中をのた打つた揚句に床に落ちた。

狹いベットで人夫に××××××若いボーイはとき折り「×××」だの「下道奴！」などと獨りで力んだ。それは人夫たちに擽ぐられたり抓られたりするからだつた。

『やーい、半端人足奴！　ちつと長すぎるぞ……』とボーイを待ちくたびれたのがど鳴つてゐた。『ボーイ早く來いよ……』

少し眠りかけると南京虫が這ひ出してきて首筋や向脛をかぢつて逃げた。その痕は二ケ所とも赤く膨れ上つた。搔くと皮が裂けて血が滲んだ。爪の間に臭い匂が殘つた。あつちこつちの寢箱でぼりぼり體を搔く音がした。

船は絶え間なく軋み、波は心臟が四十と打たない内にデッキにぶつかつては又寄せた。

その度に壞れかかつたバタアフライ・ドアの隙まから潮水がとびこんだ。船は水犬のやうに身體を戰はせながら進んだ。それは大暴風雨の日に掘立小屋にすんでゐるやうな不安さを起させた。

彼は時どき後悔に似た感情が腦の片ッ端を走るのを意識した。その度に

「この意氣地なし奴！」

と自分をどやしつけた。

そして妻子の事が氣にかかり出した。北見のやうに女房と二人の子供の寫眞を枕元に貼りつけてすやすやと寢られるのが羨しかつた。

妻の留守に娘が甘えて自分の小さな乳首を吸つたことなどが頭に浮んだ。

「下旅館に行つた時に「ホンマチ稼ぎの地獄をせにやならんぞ」とからかはれたことなどを思ひ出すと、姉のやうな未來に譯のわからぬ恐ろしさが湧いた。

幾度も「道祖神」に祈つた。船に乗つた事を後悔して見ては自分を叱りつけた。

その内に疲れて眠つた。

眠ると子供を抱いて遊んだ夢を見たりした。

カムサツカの西海岸に到着するには三晝夜かかつた。

××漁業の赤ちやけた大旗をマストに揚げた中積船が沖に澤山ゐた。二千噸級の親船が沖で建網を下ろしてゐた。

中積船の周圍に積取船が鹽の荷役をしてゐた。

一面に魚の臓腑の匂が流れてゐた。

海には鮭の血油が漂つてゐた。

小田原丸もその日の夕刻鹽の荷役をした。

『鮭は何處にあるだべ……』

と木戸は鹽叺を運びながら呶鳴つた。

『何處だべと、海だべよ、鹽がすんだらすぐ鮭だべ……』

中積船のデツキでは人夫頭が鐘のやうに手を振つてウヰンチのハンドル係に指圖をしてゐた。

大きな布を持つたウヰンチの腕が灰色空をつ斫つて動いた。

「ヒーボーイ、ヒーボーイ！　スライス、スライス、チョイスライ、チョイスライ、オーライ、レツコレツコ……」

それは「揚げた、あげた、下げろ下げろ、一寸下げろ〳〵、ヨーシ、落とせ落とせ！」といふ意味であつた。

その合圖に從つて人夫が蜘蛛みたいに布の周りへ散つたり集つたりして鹽の荷役をしてゐた。

『何たらコケだべ、』と木戸たちの聲を聞いた水夫が叫んだ。『鮭は海にゐるんだぞう。』

『江戸もん、鮭は是からお前たちが海で捕るんだぞう、』

と他のが又叫んだ。

その通りであつた。

次の日から、沖がかりした本船から二十人の人夫は半島の漁場へ通つた。寒いオルゼナア河のからつ風を横なぐりに受けて吹きさらしの泥炭層に坐つて雑役をした。

稚内奈縄のボースンがそれを監督した。

そして政府への屆出時間は十時間であつたが、正味の勞働時間は十三時間以上であつた。
こわ張つた防水服を着て、鮭の腹を裂きねばつた臟腑をかき出して鹽をつめるのだ。歸る折には鱗が體にねばりついて男の人魚のやうになつた。魚油にふやけた指はたゞれてナリン坊みたいだつた。掌の皺に染みた魚の匂はこすつてもこすつても消えなかつた。
四百五十圓の中にはこの作業賃銀も含まれてゐた。然しその四百五十圓も鮭を滿載して函館へ歸港した上での話だ。運惡く「牝馬の尾つぽ」雲（暴風雨の前兆）でも出て不漁にでも出喰はさうものなら一人頭が、契約の五分か六分かに當るかも解らない。その中から前借を差引けば幾何も殘らう筈がない。
その豫防策として別な稼ぎ、船長命令のホンマチ稼ぎがあつた。
それは何時頃から始つたのか解らない。北氷漁業の船乘仲間で公然の秘密として行はれる收獲の掠奪を意味してゐた。
ホンマチ稼ぎの度に誰かゞ怪我をした。少しでも怪我をすると誰でも苦しさうに唸つた。それは「明日一日またオルゼナヤ河の空つ風に吹かれるのは堪らない」といふことを含んだ唸り聲であつた。
中でもナメられてゐる支那人たちが一番危險な部署につかせられた。負傷しても誰もかまつてやらなかつた。
夜になると彼等は「アイヨーアイヨー」と傷口を撫でて支那語で泣いた。
彼は第四回目ホンマチの嵐の夜の出來事を忘れられない。
三回目までは他の會社の漁業區域へ傳馬を忍ばせ建網を盜み上げては鮭をかつぱらつた。かすめとつた鮭は、腹を裂き函館から廻航する時、あらかじめ匿して置いた鹽をつめ、各自等分して寢箱の下の凹みに貯えた。
それは函館へ歸る途中で西海岸の村々へ高値に賣り捌くのである。漁夫はこれを下駄をはくと言つた。
とても波が高い晩で、雪のやうな泡がスクーナア型帆船の舷りに渦卷いてゐた。傳馬などを下ろせさうにも見えなかつた。
カムサツカの陸が夜目に黑く浮いてゐた。
晝の勞働に疲れた人夫たちは、それぞれの寢箱に摑み出された臟腑のやうにへた張つてゐた。ギヤン拳で勝つたものだけ

例によつて若いボーイ××××××ゐた。

『おーい、起きた起きた。』

と夜中に船長が毛皮外套を着こんで船室へ呼びに來た。『さ、起きた、ホンマチだ、歸りにいい下駄をはくんだ、村のめんこい女子を抱けるぞな……』

『船長、今夜は、止めやうで』と朝日奈髭を剃つた水夫長が呟いた。『きんのの晩、××漁業の建網を狙つたで、とても警戒が嚴重ぢやげな。』

『ええい、なんぢやと、乳くさいこんだ、』と船長は鮭の頭ほどの拳を顏の前で振つた。

『××漁業が駄目なら岡へ行け、××漁業は切出船が來んので、岡へ紅鮭を山と積んであるわ、あれぢや……』

『さうけえ、あれをやるのけ、』

水夫長は思ひ切りよく立つて防水着の仕度をし始めた。

彼は細目をあけて見てゐた。

水夫長は眉一つ動かさなかつた。そして拳骨をかためて腕中の筋肉を叩いてゐた。

『欲張らすにしは鬼みたいのう、』

と船長は笑つた。

『ふふ、にしも鬼みたいに儲けることよのう、』

と水夫長はつんけんどんに言つた。

そして二人は鷄鳥のやうに笑つた。

『さあ、さあ、寒うて氣の毒ぢやけんど起きてくれあ』

水夫長はそれぞれその夜の番にあたる名前を呼んで起した。

水夫長を加へて總勢六人であつた。北見も木戸も彼も中にゐた。

合羽張りだらけの防水着を着た五人はゴム靴をはいてデッキに走つた。船は波と同じ傾斜に搖れてゐた。

水夫長と船長は、眉の邊に掌をかざして遠く岡を眺めた。

月の下にトロッコのレールが蒼く光る盆地があつた。盆地には三角形の鮭の山がピラミッドのやうに並んでゐた。

『あれだ、傳馬を二回往復すれあ、しめたもんだ。』

『ようし、行け、四丁櫓を立てろ、ボースン……』

船長は水夫長に何か渡した。水夫長はそれを後ポケットに入れた。

傳馬は幾度か波に覆へされさうになりながら、潮渦の捲いて

ゐる船側に漸やく降ろされた。
北見と水夫長が先に乗つて船側から下ろしたロープを握つてゐた。波の來る毎に二人は眞白い潮しぶきをかぶつた。
木戸や新規の彼は山猿のやうにロープを傳つて傳馬に降りた。降りると底板にしがみついた。
他の二人も乗り移つた。
『タクランケ奴！』と船長はデッキから北向きの鬼瓦なみに怒つた。『ハンカ臭い姿をすんな、そんでホンマチ稼ぎがでけるかい、』
その中に北見と水夫長が聲を合はせて櫓を切つた。外の二人も櫓チンに櫓をはめた。
波頭は大きいうねりの肩をうんと持ち上げた。傳馬は浪の谷をめがけて走つた。四丁櫓が軋みながら「エイサ、エイサ、」と押された。傳馬は波しぶきにまごまごして進んだ。三角波のてつぺんに上がる時水についてゐるのは傳馬の尻だけで、空中に飛んちまふのではないかと思はれた。
四人は悠悠と漕いだ。
空は暗く固たい風を孕んでゐた。
彼と木戸は生きた心もなく底板にへばりついて、闇に白い穂をとばす浪の山を見上げてゐた。
三十分も漕ぐと船底が砂に當つた。當つたと思ふとうしろから寄せる浪に乘つて傳馬は渚に滑り上つた。
『シツ、身を伏せろ！』
と水夫長は囁いた。
遙か彼方にオルゼナヤ河が銀色に光つてゐた。
『櫓を纏つとけ……』
六人は砂地に下りると喰物を覘ふ蜘蛛のやうに爬ひつくばつた。
『静かに、番屋に灯がともつてるか見てこい！』
と水夫長は命じた。
彼は傳馬も漕げないし、新規なんだからこんな時に働かなければあ皆に濟まないと思つて、最先に走つた。
砂地を爬つて十間程行くと、鮭山の影に掘立ての番小屋があつた。灯はなかつた。
彼は引返して報告した。
『よし、始めろ、四人……一列に二、三間をきに縦に並ぶんだ

ぞ。』

　四人は水夫長の命令通り三間位の距離を置いて並んで進んだ。

　先頭が北見、木戸、石川、四番目が風祭、殿が水夫長であつた。それは鮭を上手に傳馬に抛りこむためであつた。

　一人は、スワと言へば逃げられるやうに、渚の波に濡れて傳馬を突張つてゐた。

『オーライ、レツコ……』

と水夫長は低く叫んだ。

　先頭の北見は抱へられるだけ紅鮭を抱へて戻つた。木戸もさうした。

　四人が鮭を抱へて走り歸つては傳馬に抛りこんだ。そして又鮭山に馳つた。水夫長がそれをカサばらないやうに手際よく船底に並べた。

　みんな小學生のやうに馳足でやつた。

　それは上杉謙信の「車掛り」の陣備へみたいにすばやいやり方であつた。

　見てゐる間に傳馬の胴の間は紅鮭で埋れていつた。

　彼や木戸は面白くなつてゲラゲラ笑ひながら運んだ。

『シッ、囀ずるな……』

と水夫長は砂を蹴つた。

　暫らくたつと、北見が立止つた。

『水夫長、走るのは面倒だ。それに足音がする。』

『それぢやあ、手渡しか。よしみんな手渡しだ！』

　五人は又、一列に並んで手渡し作業にかかつた。

　鮭の山を崩してゐるのが二匹づつ取つてはひよいと投げる。次のがそれを受けて三番目に投げた。紅鮭は生きてゐるやうに暗に飜つて運ばれた。

　みんな双手の掌を並べて、首も胴も腰ももろに搖つて、

　　ヨイショッ、ソラキタ
　　ホイトコ　ホイト
　　ホンマチ　ホイトダ
　　ホンマチ　ヨイショッ

と掛聲を合せて運んだ。

　傳馬の胴の間に落ちる鮭はぴちやッ、ぴちやッと美しい音を立てた。その櫂の手のやうに浪と嵐が愛嬌もなく鐵砲をまくし

立てた。

みんなの顔にとんだ飛沫が汗と一緒に流れた。厚い防水着もごわごわと鳴つた。

この自然も人間も荒くれた北國の夜中に、しかもタツタ一つの生命をかけた地獄稼ぎのうちに、こんな愉快な瞬間があらうとは誰だつて知らないだらう。

彼は何かしら自分たちが人間以上のものになつたやうな氣持がした。

そして隣の木戸の顔を見てぷつと笑つた。木戸も紅鱒を投げながら目を細くした。北見は唇をとんがらかしてゐた。みんな剽輕に目を見張つたり舌を出したりして道化のやうに體を動かした。

それは曲藝師などが、藝の最高調に達した時に。自分から昂奮するのによく似てゐた。

雲にかすれた月がそれを照した。

傳馬の胴の間は腹の桃色な紅鱒で一ぱいになつた。

『もう少しだぞう……』

とボースンは嬉しい時にする舌打ち繰返した。

然しボースンの目は犬鷲のやうに鋭く四方を睨つけてゐた。

四人は

ヨイショコ　ホイト

ホイトコ　ホイト

ホンマチ　ホイトダ

と元氣よく手渡ししてゐた。

5

『ドサだ！　逃げろ！』

と先頭で鱒の山を崩してゐた北見が叫んだ。

彼には「ドサ」の意味が明つきりとは解らなかつたが、良いことではないと思つた。

そして鱒を持つたまま逃げ出した。

『早く傳馬に乗れ！』

と水夫長は身をこごめて傳馬の舳を押した。傳馬にはもう一人が棹をつつ張つてゐた。傳馬はするすると渚を離れた。

北見を尻に四人は波打際へ走つた。

ヴオンと銃の音がした。又續いて二發鳴つた。

彼に「トヨアシハラミヅホノクニ……」を一心に唱へながら傳馬船の後を追つた。木戸と二人で打寄せる波の中をざぶざぶと歩いた。

水夫長は拳銃のやうなものを闇に向つて打ち打ち後向きに波の中を歩いてゐた。

闇から銃の音が續いた。そして硝煙の匂ひが浪のしぶきを縫つて流れた。

『早く、早く』

と傳馬の中の水夫はせつかちに呼んだ。

『北見、北見。』

と水夫長は片手を喇叭にして叫んだ。

『おうい、大丈夫だ……』

と北見の聲がした。

傳馬はもう胸の深さまでに漕ぎ出してゐた。

木戸と石田と彼は潮にむせながら傳馬を追つた。

――生捕り……――

といふ聲らしい聲が闇の方で聞えた。

『北見さんぢやないか……』

と彼が振り返つた。

『さうだべか、』

と木戸も立止つた。

立止ると、浪頭の飛沫が二人の顔にかぶさつた。鼻の孔に潮が入つた。二人は岸の方をむいてケツケツと咳をした。

省ると石田は傳馬に縋りついて半身を海にひたしてゐた。

『早く、早く逃げろつて……』

水夫長は泳ぐやうに走つて來て二人を突きのめした。

『北見さんは？』

『もう駄目だ、やられたかも知んねえ……』

潮が三人にじやれた。

『おーい、早くせえよ……』

と傳馬から聞えた。

『それ、早く……』

三人は胸までの波の中をよちよちと歩いた。水夫長は泳ぐやうにして先に辿りついた。次に木戸が乘りついた。

彼が漸やく傳馬の舳に縋らうとすると急に海が深くなつた。

『あつ、沈む……』

と彼は沈みながら叫んだ。

水夫が櫓を外して水の上に差し出して呉れた。彼はそれにしがみついた。

もう御經文どころの騷ぎではなかつた。

『さあ、めつちやと掴んでくれよ。』

水夫はさう言つて櫓をずるずる引いた。

傳馬が浪に揺れる度に彼の體は潮に叩きつけられたり、宙ぶらりんしたりした。

すると又、渚からヴオンと一發聞えた。

『早く漕げ！』

と舳に立つたボースンの叫びが流れた。

三本の櫓は押された。

「エイサ、エイサ」

と掛聲が響いた。

闇の銃は尚つゞいた。

と、彼は、左足の何處かにちくつと痛みを覺えた。

然し夢中で櫓にしがみついて傳馬へ上つた。

『どうむないか、風祭……』

とボースンは訊ねた。

『足を怪我しました。』

『じつとしとれ、本船に歸つてからだ、何事も。』

傳馬は横浪を食つて傾きながら舳を沖に向けた。

海には凸凹な三角形突起がもれ上つては砕けた。

彼は傳馬の棒の道（船側の通路）に座りこんでやつと心を落つけた。ゴム靴を脱いで左足を見た。踵の後の筋が砕けたやうに血に染んでゐた。潮水に洗はれた白い筋も見えた。一發やられたに違ひなかつた。ぢつと膝のふるへる痛みを我慢した。だが、親指が動かなかつた。

それを感づくと急に痛みが強くなつて來た。

闇を眺めると數本の松明が焔をなびかせて動いてゐた。渚の白泡も妖しく輝いた。

『北見さんはどうしたんでせうねえ』

と彼は誰にともなく言つた。

『もう、そげんこと言ふな、でけた事は言ふてもせうむないでのう……』

とボースンは闇の中で續けた。傳馬が低くふて行くにはいろい

ろの事があるわい』
ボースンは、屹度いつもの通り眉一つ動かさないで漕いでゐるに違ひなかつた。
そして、かういふ男は、自分のやうにじめじめしてゐるのと違つて、撲られても撲られても頭を持ち上げて進んで行く人間だらうと思つた。目茶苦茶に生きるといふのはこんな人間をいふのだ。彼は耳たぶを引つぱりながらさう思つた。
彼は帆船に着くと眞先にロープで吊し揚げられた。デツキに降されるときイヤツといふほど顔を擦りむいた。
『痛いッ！』
と彼は泣いた。
『えーい、江戸もん奴、默つて泣きあがれ……』
と船長は叫んだ。
傳馬も舳と艫と棒の道の鉤にロープをかけてウヰンチで引き揚げられた。
『上手にやつたなら』
と船長はこんもりした紅髭を眺めて笑つた。
『いんや、ドサを食ふたで』と水夫長は二の腕を叩いた。『北見が可哀さうに捕つたで今頃は生捕りにされてリンチぢやらう』
『さよか、可哀さうにのう。風祭の他には怪我はないかな……』
『船長！』とデツキにへた張つたゐた彼がその時いつた。『足を怪我しましたから見て下さい、』
『ふん、』と船長は笑つた。『にしの足はもう駄目ぢや。びくびくもんで世渡りするもんにあ碌なことあないぞ……にしの左足は先刻見たがアキレス腱が切れたんぢや、ズドンとやられたんぢやらう。貫通傷ぢや、』
彼はアキレス腱を知らなかつた。
『で、癒りますかしら、』
『函館に歸らんと解らんが騙すといかんで言ふが』と船長は重い口調で言ひ切つた。
『アキレス腱が斷れれば大方は跛よなう……』
船長はそのまま惡いことをでも犯したやうに自分の室に飛びこんで終つた。
『濟まなかつたね、』と木戸は自分が負傷させたやうに謝つた。
『自分だけ勝手に早く逃げちやつて……』
『うゝん、船長が惡いのさ……』

と彼は船長室を睨んで木戸の言葉をさへぎつた。

彼は木戸に連れられて人夫の船室に戻つた。そして防水服を脱いで薬を施し繃帯をして貰つた。

船の薬はアルコールとヨジトムチンキ位のものだつた。その全部が彼の足にぬられた。

薬と鹽水が混つて傷口が痛んだ。

『えらか目に逢ふたのう』と傳馬にヅックを被せてから水夫長が入つて來た。『さえがのう生捕りになつた北見と較べてみい、命ふためぢや』

他の連中はぐつすり寢こんでゐた。端れの寢箱の毛布から四本の足がはみ出してゐた。若いボーイの白い脛と××××××鬚むく男の黒い脛とであつた。

こんな時に同情したやうな顔をする人夫はゐなかつた。又下手な憐憫の言葉なんか糞の役にも立ちはしない。

彼も「道祖神」の經文が跛になるだらう所の斷れたアキレス腱を癒して呉れるとは考へられなかつた。

彼は默つて北見の寢箱を見た。妻子の寫眞は何にもなかつたかのやうに枕元にあつた。

彼は寢箱にもぐり込んで北見と自分の身の上を睨みつけた。二人とも大して幸福らしい人間ではなささうだつた。

『木戸君。』と彼は自分を見つめてゐる友に話しかけた。『私たちは一生涯忍ばにあなりませんかねえ、この張り合ひのない世の中に……』

『生れた時から貧乏人だべ、しかしよ、一生涯忍ぶなんてことあ、つまらんなあ……君もそげんこと考へてゐたんか……』

『いや、私はたつた今考へたんです……』

『さうだべか、忍ぶつちふ奴あ、古い良心だべ』

『へえ』

木戸にかへす返事を頭の中で探したが無かつた。

『さう思はんかな、古い良心だべ』

『へえ』

『儂あ何時か貧乏人も堪忍袋の緒を切るだべと思つとる』

『さうすると』

『いや、君にいいものを讀んで上げやう』

木戸は、ビール箱の椅子を彼の寢箱の傍に引きよせて一冊の古本をめくつた。

『これはね、今へなくなつて盜賊をした人の監獄の中の日記なんだよ、』といつて木戸は唇に力をこめて讀み初めた。

船の搖れるごとに木戸の體も前後左右に傾いた。

『「不幸な人間の喜びよ！

苦しくつて仕方のない時は、別なことを考へないで不幸な人間の喜びよ！　と小聲で言つて見る。

すると忽ち氣が晴ればれとなつて、誰か仲のいい友人の所へでかけて、そつと泣事を言つて見たくなる。

「俺たちの生活、これが果してほんとうの生活だらうか、ねえ君？　これが生活だらうか、」と。

だがそれが俄に馬鹿馬鹿しくなる。そして誰かに、棒か何かで矢鱈めつたに叩いて貰ひたくなる。

俺は誰にも、一萬仲のいい友達にでもこの「不幸な人間の喜びよ！」を話したことがない。そんなことは恥しいからだ。俺はそんなことは知らないといふ風に、心の奥にかくしてきた。

ほんに時々、ちよつときり想出さない。つまり不幸な人間は、何んでもできるといふことなんだ。これ以上どんなことをしたつてこれ以下にこそなれ以上にはならないといふことなんだ……』」

木戸は讀み了つた目をじつと彼に向けた。

彼の瞼はぬれた。その涙は悲しい涙ではなかつた。「俺だつてそんなツマラナイ人間ぢあないんだ」といふ喜ばしい涙だつた。

木戸は本を片づけるとそれつ切り寢て終つた。

彼は足の痛みを堪えながら東京の妻子へ想ひを走らせた。

彼はその日から「道祖神」の經文を唱へることを止めた。

歸つたらこの跛の足で神棚をぶち壞してやらうと覺悟した。

それは七月上旬だつた。

彼は七月から十月の半頃までずつと汗と垢にまみれて寢箱にゐた。

木戸が洗濯から、便所の行き歸りまでの世話をやいてくれた。暇の時間には本を讀んでくれた。

晝間、船長以外の漁夫が全部作業に出かけた留守は、船の軋みや、南京虫の匂だけの中に暮らした。そしてち切れたアキレス腱は牛乳みたいな膿をもつて腐つていつた。乾大根や味噌ばかり喰つてゐるので肉はちつとも上らなかつた。

退屈するとよく錆びた鐵鋲に人間の顔を書いてみたりした。

波の音にも風の唸りにも彼は慣れた。彼は自分たちが生きてるといふことは唯「石ころがある」のと同じことであることを發見した。

船倉に鮭を滿載し終へて函館に歸港したのは九月末だつた。

その航海中に彼は「ふんとの生き方」ばかりを考へ通した。

船は途中で澤山「下駄」をはいて儲けた。

彼も木戸も歸港すれば直ぐ約束の金が貰へるものと思つてゐたのに、船長は

『鮭の賣れ口が規まつて荷役が濟むまでは金を拂へん……』

と頑張つた。

『幾日位待つんですかい……』

ときいた。

『こーつと、十日間は間違ひなうかかる……』

と船長は答へた。

水夫長の話によれば、「漁業會社だつて現金はあるんだが、すぐ仕拂ふよりも賣れ口を見つけてそつちからの手金で仕拂つた方がいいんだ、現金は銀行で利子を生んでゐるんだからな。」とのことだつた。

他の切出船も次々に歸つて來た。

函館の街は一時に活氣づいた。歸港すると三四日で仕拂ひを濟ました船もあつた。一ケ月も賣れ口がなくつて碇泊してゐるのもゐた。小田原丸は十六日間碇泊した。

杖をついた彼は木戸に案内されて、外科醫の所へ出かけた。

『もう手遲れですね、どうしたんですか。』と醫者は彼の踵を眺めて訊ねた。『手術してもいいですが、もつとも爪先がから突つ張つて終つて歩き憎いですよ。』

彼は、犬のやうに片足を持ち上げながらどんなにでも手術して貰ひたいと言つた。

そして三日入院してアキレス腱といふ奴を接いだ。すると親指と膝はうまく曲るが、爪先は脛から伸び放しだつた。

歩く時には先づ右足を前へ出し、次に思ひ切り肩を持ち上げて左の爪先を前方へ運ばねばならなかつた。

最初はさうして歩くのが恥しかつたが、遂にぐつと目を見張つて「仇はどいつだ」といふやうな顏附きで歩くやうになつた。

ひまた人夫たちは
『チン平、チン平』
と呼んでは
『アンヨは上手』
とからかつた。

一（四）一

すると擦り傷だらけの顔に皺をよせて、
『へいすけ、へいすけ』
と彼は笑つた。
船長は手術料の三十餘圓を仕拂つてくれた。
人夫たちは、仕拂前借をしては毎日飲んで打つた。
負けると又、借りて自棄酒を呷つて後家を買つた。一つは勘定拂ひの遲い無遮苦遮腹からでもあつた。

一（五）一

小口の前借なら毎日させた。それは二十人全部に借してでも一日に五百圓とはかからないからだ。そして細かくなし崩しにしようといふ會社の策戰らしかつた。
だから木戸や跛の彼すら一日に十圓平均を使ひ果した。然し彼には終りに借さなくなつた。殆ど働かなかつたからだ。その後は木戸が金を出して呉れた。

若いボーイまでがアルコール組へ走つた。
ケチン棒の支那人たちは一合八錢位の酒を呷つてはデッキで歌つた。
「ジョーチャラ、チアーデー
エーエーヨーヨー
ハイスコー
ハイスコー」と。
人はそれを日本の都々逸と同じやうなものだと言つてゐた。
醉ふと彼もその聲に合せて踊つた。
彼は時どき、五圓、三圓と爲替をくんで東京へ送るに過ぎなかつた。
この分で行けば、歸るまでには貰ひ分が殆どなくなることは解り切つてゐた。それでもみんな飲んだ。
『チエッ、生命がけの仕事をして來たのにノホンと寝て暮せるかい……』
と人夫たちは誰にともなくが鳴り立てた。
二十人が二十人その腹で飲んだ。
この有樣が十五日續いた。

十六日目の朝、仕拂があつた。一人一人船長室へ呼ばれた。

會社の事務員がにこにこして黄色い狀袋を、

『御苦勞樣でした』

とみんなに渡した。

歸つて來ると、

『いくらだい』と中身を見せ合つた。

それは自分の提供した勞働力に相當した賃銀が滿足に仕拂はれたかといふことより、誰がどれ程船長の「おぼえ」めでたく澤山と歩がついてゐるか、といふ意味の競爭であつた。

彼の前借差引の貰ひ高は十二圓だつた。

『お前は、働かない上に只食ひしたんだから、娑婆のやうに見舞金はやらねえよ』

と××漁業の株主である船長は言つた。

彼は一言もなく跛を引いて下がつた。

「道祖神」への寄附は二倍になつて戻らなかつた。

『いくらだ、』

と木戸が尋ねた。

『十二圓さ、』

彼は泣きさうな顔で答へた。

『なんだつて、本當なら約束高の倍貰つてもいいんだべ！』と木戸に似げなく怒つた。

『よし、君、一緒に來い、俺が交渉してやる……』

唇をとんがらした木戸は眞先に立つてメンマストの下の船長室へ押しかけた。

『あいつ、變な奴だな……』

といふ囁きが人夫の中でした。

彼は木戸の後に從つた。

『船長、貴樣は人間ぢやねえな！』

木戸は扉を開けるなり喉をふくらました。

『漁場で失敗した爲の怪我なら尚更だべ、風祭のは何の爲だつたんだべ、會社が出さんなら貴樣が出せろ、せんど下駄はきくさつて！』

『何を寢言を吐かすんど、人間ぢやねえなら、人間並の事をしねえや、』

船長も一癖ある文句を吐いた。

實際、船長や、漁業會社の重役は人間らしい事はしてゐなか

つた。

例へば、四百五十噸の帆船に生命がけで滿載して來た五百噸の鹽詰鮭は、百噸當りに二萬圓の賣價だから十萬圓は賣り上げがある筈だ。四百五十圓づつ二十人に支拂ふ九千圓と、諸經費を差引いても八萬圓は儲つてゐる、しかも十數隻の帆船を傭つたのだからその利益はすばらしいものだ。

作業中に古いものに聞いたから木戸も彼も凡てを知つてゐた。

それを知りながら彼は扉の外で自分の態度に困つてゐた。

『何を？』

『何をとは何だ？』

船長室では賣言葉に買言葉が始つた。

そのうちに器物の落ちる音や、瀨戸の破れる響がした。

犬の喧嘩のやうな呻めき聲も起つた。會社の事務員らしい悲鳴も聞えた。

彼は跛をひきひきうろうろした。

船室にゐた他の人夫が馳せつけた。

『この下遊奴！』

『何、このケダモノ……』

人夫たちが木戸を引ずり出した。

木戸は歸り仕度に買つた新しいナッパ服を引裂き片袖をぶら下げて出てきた。そして唸つた。

『船長、岡でやらう、岡まで來い、船を下りれあ、人間一匹同士だ……』

すると忠義顏をした一人の人夫がつつかかつた。

『何だ、この青二才奴船長に向やがつてやい』

『何を、この北海蛸奴！』

取組合が初まつた。

他のが止めた。

木戸は又止めた奴にぶつかつた。喧嘩が段々大きくなつた。

水夫長は船にも似合はない脊廣を着込んで朝日奈鬚を剃つて澄してゐた。

彼は「なだめて呉れ」と言はんばかりの目を水夫長に送つた。

『ケツ、』

とボースンは顏に唾をして船室に歸つて終つた。

木戸は忽ち生命綱でがんぢがらめに縛られマストにくくりつけられた。

そして一時間程たつて海上警察に渡された。

彼は默つてそれを見送つた。

工場主に逃げられた日、署長の一喝に縮み上つて歸つた折と同じ口惜しさが湧いた。

彼は自分が子供の頃から「撲られたり」「威かされたり」したために下だらない恐怖ばかりで生きて來たのを知つてゐた。だから自分は本當の怒りも悲しみも知らないつまらない人間だと思つた。

彼は連絡船で青森へ渡ると徒歩で東京へ向つた。途中で拾つた幾本もの棒切が左足を助けた。

妻子は行衛不明だつた。

6

本所から品川の矢津山橋まで三本足でも三時間餘りかかつた。午后十時半を廻つてゐた。

矢津山橋から青物横丁を探すのに一時間は經つた。

彼は、猿廻しや法界屋などが巣食つてゐる木賃宿の露路を尋ねた。

『二十七八の女と六つ位の娘とが此の邊に住んでゐないでせうか』と。

『まあ、お前さんは旅の人だね、可哀さうに』

『この邊の宿は、商賣人ばかりだよ……かたぎの者はゐないよ……』

『青物長屋を尋ねてごらんな……』

と木賃宿の人たちは教へて吳れた。

八百物市の青物横丁長屋を一軒殘さず根氣よく訊いて歩いたが知る人はゐなかつた。

彼は二度ガツカリした。疲れがきた。

彼は半年間の徒歩旅行のおかげで、どんな場所にでも上手に寢る要領を心得てゐた。中でも自動電話のボックスに古新聞を寢床に、胡座をかいて眠るのが一番樂でよかつた。夜の十二時過ぎれば大槪は人がこないから見附からなかつた。

彼は又、自動電話のボックスを尋ねに大通りへ出た。

十二時近い時計の二本の針は殆ど一直線に伸びかけてゐた。

晩春の夜の露が汗と脂に汚れた彼の破れ洋服をしっとり重くした。

細い十字路の自動電話を見つけた。そして枕を斜かひに肱附きにして古新聞を敷くとすぐ眠りに落ちた。

明方近く、巡廻中の警官につかまつた。取調らべられた上、浮浪罪として拘留になつた。

生れて初めての留置場であつた。

眠るには割方いい場所らしかつた。翌日は只で飯が食へた。彼はもう舌で飯を舐めやうとはしなかつた。半年の間に昔の癖をすつかり忘れてゐた。といふより生きて行くにはそんなことは不必要だと知つたからだつた。しかし、一日膝を組んで市松格子に向つて坐らされるのには閉口した。

腹がくちくなると目玉の上づるほど體慾が襲つた。彼は人指指で臍をまさぐりながらじつとそれを忍び續けた。

彼は木戸に讀んで貰つた「不幸な人間の喜びよ！」を憶ひ出した。そして幾度も「これが人間の生活だらうか、」「これが人間の生活だらうか、」と自分に質ねた。何とも答へずに目は彼の足を眺めた。

「不幸な人間の喜びよ！」「不幸な人間の喜びよ！」と繰返しくりかへし呟やいてゐると何時か「喜びよ！」といふ聲が出なくなつてしまつた。

「不幸な人間の……不幸な人間の……」

彼は底無し穴をのぞきこむやうな目附きで虚空の一點を探ぐつた。

暗い怒りがそこには燃えてゐた。

『不幸な人間の……』と乾枯びた唇は又ほざいた。

彼は明日にでもこの留置場から抛り出されることを知つてゐた。然しもう二度と不景氣な顔をして街をほつつくまいと決心した。

『お米をくれ！　お錢をくれ！』

と××××××立てばいいんだと思つた。

十軒に五軒は「でないよ！」といふ家があつても自分の目を睨み返す人間は一人もないだらうといふ自信が湧いた。

二日目の晩であつた。

彼の隣りの留置場の前へ女が引ぱられてきた。

目蓋をつつぱらした彼は、片手をついて鼻と耳をひくひくさせた。

格子の間から赤い色にまつはる白い足が見えた。これが目を強く刺した。彼は舌の根元で生唾を呑み下した。

女は彼の妻のやうに矢張り女であつた。

『こら、××××、』

佩劍をがちやつかせた巡査が××××手をかけて呶鳴つた。

『いやだよう……』

女は風つぴきみたいな聲でごねてゐた。

『こら、とれつたらとれ……』

『いやだつたら、いやだよ』

『ここな地獄女郎！　にツ！』

×××××、どさつと三和土に倒れる氣配がした。

『強情なアマだ、貴樣、引ぱりこんだ××××××××××、氣取りあがるな……』

『當り前さ、それがどうしたんだい……』

『口返答するか……』

又×××××××××××。

『大きなお世話だよ、××××××××、新しい女さへくると「玉が入つたさうだね」なんて變ん所の主人×××につけこんで只で遊んで行くぢやないか……客にだつてさうしたんだ。』

『何ツ、この淫賣、たけだけしい、法を知らんか、法を……』

××××××女のシャツクリのやうな泣き聲がそれに續いた。

控室の方から退屈してゐたらしい巡査が二人走つてきた。

『生意氣な淫賣だ、しめてやれ、少し、』

『やれ、やれ……』

と彼は叫んだ。

空氣が羽虫のやうに唸つた。×××××××××××××××。女はヒーッと叫んだ。

彼は思はず格子の間から鼻と目をつん出した。

廊下に漂ふ女の肌の匂が鼻から目にぬけた。

白粉をぬりたくつた女が、兩腕で顔をかばひながら倒れもがいてゐた。×××××××××。

空氣が又唸つた。×××××××××。女はヒーッと……

いた。そして一振り腰をくねらせるとこちらへ體をころがした。

『妾が……妾が悪いのかい……』と女は眞赤な口で叫んだ。『畜生！ 畜生奴！ ××、×××××！ 忘れないぞ、イーヒッ、忘れてたまるかい……』

五燭の電燈の光で顔が見えた。

彼は喉がつまつて、頭をがつくり下げた。額が掴つた格子にぶつかつた。

彼はもう一度顔を上げて泣いてころがる女を見つめた。

××××××××××。

白粉の顔に赤い筋が走つた。

女は「忘れないぞ、忘れるかい！」と泣いてころがつた。

彼は留置場の格子を熊のやうに棄身になつてゆすぶつた。四寸角材の格子戸は三人や四人の力ではなんぼ棄身になつてもたたつ壊されない程に嚴丈作りだつた。

そこら中の監房から黄色く光つた目玉がのぞいた。

××××××××××××。女は奥齒をキリキリ噛んだ。

邪靈の仕業だらうか。

彼——風祭平助——が弱いのだらうか。

7

留置場を追つぱらはれた彼は妻と娘を探しながら東京中を歩き廻つた。だが妻と娘とにまだ廻り逢へないでゐる。邪靈にやられたのかも知れない。

木賃宿に泊る金がなくなると、それ程小さくもない××押しかけた。そして××××立つて、

『×××……』

××××××××た。

彼の豫想通り、十軒に五軒は「この跛奴！」と鹽をばら撒く家はあつても、彼の眼光を見返へす人間はめつたにゐなかつた。睨み返へすことの出來るのは彼と同じ有樣の人間たちであつた。×××××握ると彼は悠悠として立去つた。

餘分の收入のある時は木賃宿の仲間に分けた。

『もう此頃は、私の仲間がだんだん殖て來ましたよ。……』と彼は力んでゐる。



卑怯者去らば去れ

中本たか子

1

空は曇つてゐる。風がある。寒さが足先から沁み込む。龍枝は霜柱を踏み砕き乍ら道を行く。朝――

橋の袂の手前、荒物屋の角から左の路次にはいる。ごみ〳〵した家々が茸のやうに群がつてゐる。路次の中程にある水道のところから奥まつてゐる二階家の裏――これが今日の會合所だ。

裏口から龍枝は默つて戸を開いた。土間に約束の赤い鼻緒の下駄が揃へてある。彼女はそれを疊んで座敷へ持つて上つた。茶の間の火鉢を圍んで緊張した顔が集つてゐる。シズ、ハナヱ、トキノ、チヨ達――洋モスの女工達だ。龍枝は皆の顔を一わたり見廻すと、一寸微笑を投げて、その間に割り込んだ。一人足りない――キクだ。龍枝は凍えた手を揉み乍ら、眉を寄せて皆にきいた。

「キクちやんは如何したの？」
「さあ、如何したのか、まだ來ない。」
シズが細い眼を瞬いて答へた。
「可笑しいね、キクちやんが來ないのは。」
トキノが大きな眼を瞬いて首を傾けた。いつも先登に立つてやるキクが、この會合——組合の最高幹部會へ來ないのは、一同の元氣をかなり奪ふことになるのだ。皆は寄宿からすぐこゝへ來たのだが、キクは通勤なので消息が知れない。
「キクちやんはこの頃、めつきり元氣がなくなつたやうね。」
ハナヱは一同の顔を顧みて呟いた。
「さう、如何かしてるわ。」
チヨが色の白い頬にぽーつと赧みを浮べて相槌を打つた。
龍枝は組合——××××××される××——の組織者だ。彼女も皆が云ふやうに最近のキクの動靜に不審を持つてゐた。以前とは全く變り、打沈んで龍枝に寄り附かなくなつたし、アジビラを撒く時は止めたり、逃げたりする。以前のキクは決してこんな娘ぢやない。この組合を組織し出したときも、一番先に來たのはキクだつた。そのキクが今日の會合に出ないのは——？
今、組織を次第に擴げつゝある時、キクに逃げられることは大きな痛手である。龍枝は心がぽつそりした。
そこへ、ぽと／＼と臺所から戸を打つ。
「一寸、龍枝さん。」
呼ばれた龍枝は立上つて、臺所を覗いた。眇のをばさんが手拭を被つた儘、顔をこは張らせて突立つてゐる。龍枝は一寸胸を打たれて小母さんに近づいた。
「あのね、一寸耳を藉してお呉れ。」
龍枝は屈んでをばさんの口邊へ耳を近づけた。をばさんは手を蔽うて聲を低めて囁いた。
「二三日前から變な男がこの近所をうろ／＼するよ。そして時時家を覗いては、この家にはよく女工が集るさうぢやないか——と訊くんだよ。」
龍枝はひやりとした。そして、ぐつと下腹に力を入れた。
「どんな男なの？」
「中折帽を被つた洋服の男で、眼が變に凄い男だ。」
「さう——では？」
では、×××だな——と龍枝は頷いた。ぢや、今日はここで

會をやつてゐるのは×××。早く移轉しなければならない。龍枝は皆のゐる方へ引き返して來た。そして表面穩かに落着いて一同を見廻した。
「みんな周章てちやいけないよ。×××××。今日こゝでやる會は他の處へ移してやることにしようね。」
そして、龍枝は移動するわけと行先を話して聽かした。
「好いかね、上野公園の西郷さんの銅像の前に行つて立つておいで。私は少し遲れて行くから。」
女工達は頷いて立上つた。そして二人づゝに分れて家を出た。龍枝は少し遲れて家を出ると、途中で稻荷鮨や蜜柑を買つた。これは公園の芝生の上で喰べるのだ──遊びに來たと見せるため。
電車に乘つて龍枝はじつと考へる──早自分達の組織が×××××鼻に匂つてゐるのを知る。情勢が迫つて來た──工場内ではやがて來る一割五分の操短と六百人の馘首と工場閉鎖の問題が構へてゐる。外では××××××殘虐な迫害が手を延ばさうとしつゝある──ぐつと腹を据ゑて龍枝は眼を閉ぢる。冷い落着が下腹に溜る──

午後二時が職場の交替時間だ──
一時になると、キクは黒い工場着を附け、上に絲の上着を被て家を出た。小路の曲り角の炭屋の横へ來ると、
「おい、──一寸」と呼びかけられた。彼女は何か考へてゐたので、ぎくつとして立どまつた。聲の主は炭屋の板壁に身を寄せてゐた洋服の紳士だつた。キクはこの場に立どまつた儘、瞬いて紳士を見直した。茶色の中折帽の下から光る眼が凄い──それに鼻の下に貯へたチョビ髭が臭い。キクは思はず胸を押へて走り出さうとした。
「おい、待てよ」
紳士はむづと腕を延してキクの肩を摘み上げた。そして自分の方へ引き寄せた。
「何も逃げなくつたつて好いよ、穩かにしろ。別に手荒なことをするんぢやない。一寸、訊くんだがね──」
紳士は一寸口を切つてキクの顏を眺めた。キクは眉の下に眼を深め、おど／＼と肩を震はせて紳士の顏を見上げた。紳士は

笑を含んでゐる——キクは稍安心して、唾をごく〳〵と嚥み込んだ。

「私は工場に出るんです。もう時間だから——」

キクは紳士の腕を遮つて又行き過ぎようとした。紳士はキクに跟いて來ながら訊いた。

「お前が豐田キクか。」

キクは又ぎくりと胸を突かれた。

「えゝ。」と答へたが、それや可笑しいと思つた。そしてやつと頷いた。——これが×××といふ奴だな。——彼女は足が竦んで錨をつけたやうに重くなつた。戰慄が脊筋に冷く走つた。急にキクがおど〳〵し出したのを×××は隙かさず見納めた。

「さうか、どうも失敬した。」

洋服の紳士は踵を廻へして後返つた。キクは一度後を向いて紳士の脊中を眺め、工場へ急いだ。紳士に別れると、始めて温かい血がどく〳〵と大きく流れ出した。だが、まだ身體の震へが止まらなかつた。×××は早、自分達のやつてゐることを嗅ぎ出したんだな——これ迄話に聽いてゐた×××××あらゆる××が彼女の身體に迫つて來る。キクは胸騒ぎを鎭め得ず、唇の色を失つた儘職場へ出た。

午前の組と交替して運轉に就いてから三十分經つた頃、組頭の杉山がキクを呼びに來た。そして本所の××署から呼び出しを傳へた。——正月から行衛不明になつてゐる弟のことに就いて、先月から三度目の呼び出しだ。昨日までは××署だつたのに、今日は××署——ちと怪しいな。キクは首を傾けながら、すぐ運轉を止めて、工場から出て行つた。家に歸つて着物を着換へ、急いで本所の××署へ行つた。扉を押して中に這入り、受付のあたりをうろ〳〵してゐると、先刻道で遇つた洋服の紳士がにや〳〵し乍らやつて來た。——×××？

「よく來たね。先刻は失敬した。」

彼は赤い唇を押し擴げてにやりとすると、キクを連れて外に出た。

「少し、そこらを歩いて來よう。」

さう言つて、×××はキクに歩調を合して歩き出した。キクは小く縮んで彼に從つた。機械の中へ身を嵌めたやうにすつかり身體が堅くなつて、肩がこは張る。キクは恐しいもの〻豫感に怯えた。×××はキクの肩を叩いて笑つた。

「何もさう堅くならないで好いよ。たゞこちらの問ひに素直に答へて呉れゝば好いんだ。」

さう言つて彼はどん／＼錦糸公園までキクを連れて來た。公園の中はがらんとして所々で子供達が遊んでゐた。×××は緩り歩いて、穏やかな聲でキクに訊いた。

「お前は×××といふものを知つてゐるか。」

キクはぞつとした。びくつと頬が顫へた。彼女の頭の中が急にぐら／＼入亂れて來た。彼女は何と答へて好いか、迷つた。自分は最近の組合の會合へ出ない。併し、それは辯解にならない。

「×××つてものを知つてるだらう。知らん筈はない？」

ぐさつとキクの心に鋭い刃が刺さつた。キクは更にグツと詰つた。××××××、×××××××××知つてるんだな――彼女は急にどしんと谷間へ突き落されたのを感じた。

「おい、返辭をしろよ、何とか。」

キクは又どぎまぎした。そして、遂に答へた――聲を喉許に詰らせて、

「えゝ、話できいたことがあります。」

「話だけでなく、實際知つてる筈だ。」

キクは亦ぐつと詰つた。あらゆる××の場面が彼女の身體に、のしかゝつて來た、彼女は第一に失ふ戀人――坂本が頭の中で一ぱいにぼやけた。キクは思はず身慄ひした。×××はキクを鋭く見下して、から／＼と笑つた。

「ハハハハ……どうだい、よく當るだらう、俺の云ふことは？」

×××は隙かさず言ひ被せた。

「お前は日本人だね、さうだらう？」

キクは内心で突張つてゐた力が急に見る隙もなく消えて行くのを知つた。大きな恐怖がどつと身體に乘り移つた。何故だ――？たゞ、彼女には坂本の顏のみがはつきり腦膜にこびり附いてゐる。

「×××なんて、ありやロシヤや支那のやることだ。二千五百年も續いた歷史を持つ日本で、×××なんて不心得なものに味方するのは國賊だぞ！」

キクはたじ／＼と後退つた。危くよろめく足を踏みしめて内心の動搖を隠さうと努めた。×××はじつとキクの上に眼を据

ゐて眺めた。そして大きくにやりとした。

「國賊に對して死刑が控えてゐるのをお前は知つてゐるか。當り前のことだ。──だが、お前が今、すぐ心を改めてしまへば、別に此方は手荒なことはせぬ。何も好んでお前達を虐めるのがこちらの役目ぢやないからね。それで、さあ、すつかり言つて見ろ、お前達のやつたことを。」

キクは何故か反抗出來なかつた。こんな自分ぢやなかつた──と思ふが、水の中で藻掻くやうに少しも自由がきかない。彼女の頭の中で絶えず坂本の顏が瞭りこびり附いて離れない。──キクは遂に×××に訊かれるまゝに組織に就いてのことを全部白狀してしまつた。

公園の口でスパイに別れると、キクは獨りとぼ〳〵と道を歩いて家へ歸つて行つた。彼女は工場を休むことにした──。とても、出て働く氣になれない。たゞ恐しかつた。自分で解せぬ程膽つ玉が小く縮んだ。家に歸ると、西の窓へ赤い夕陽がさし込んでゐた。彼女はじつとそれを見詰めて、座敷の中に突立つた。そして、始めて×××××自分の行爲に戰いた。彼女は膝を抱へ込むと、どつと粗末な机の上に身を投げつけた──

3

龍枝はキクの態度が不審なので、夜になると彼女の家を訪づれた。キクは敷つ放した寢床の上に蹲んで蒼ざめてゐた。キクの深い吐息には何か譯がある。龍枝はキクを誘つて家を出た。

雪もよひの空。風がない、家はじつとして寒さに震へてゐる。龍枝はキクと肩を並べて歩く──暗い裏通り──暗い横町──暗い路次──そして川緣に出た。靜かに流れる水。一段と冷い空氣が二人の縮つた唇に沁みる。

こんなに肩を合して歩くのに、龍枝はキクとの間に隔りを感じた。以前の二人はぴつたり合つて、最初の困難な組織の基礎をやりとげた。だのに、キクのこの頃の悄化方は？ 龍枝は多少憤しくさへ感じた。

「ねえ、キクちやん、あんたが今何を考へてゐるか、話してお呉れ。すつかり元氣を失つてゐるよ。」

「わたしは今滅茶苦茶なの。今日で三度も警察へ呼び出されたわ。正月から行衞不明になつた弟にも嫌疑がかゝつてゐるので。」

「弟のこと？　勿論、それは捨てゝ置けないことだ。併し、あんたの後に千人の女工さんが唸つてゐるよ。それをあんたはこの頃忘れたね。」
「で、千人の女工さんと一人の肉身の弟とに就いて考へるんです。時々かつとして來て、頭がぼーつとなるの。」
「さうぢやない。それより、もつと別のことをあんたは考へてゐる。分るよ。」
　龍枝はずばりとキクの心臟を突き刺した。キクは一寸默つた。彼女は今日××に呼び出されたのを龍枝に告げるのを迷つた。歩いてゐると、それは次第に喉の奥に引込んでしまつた。
　鐵橋の上を轟然と汽車が渡つて行く。それを機會にキクは咳をして、その場を塞いだ。汽車の音が遠ざかると、キクは喉に聲を絡ませ乍ら低く呟く。
「何か變に考へてるわ、龍枝さん。」
「ま、好い。」
　龍枝は別にキクへ逆はうとしなかつた。それは今無駄だ。キクは今すつかり××のことを念頭から拂つてゐる。彼女の頭に一ぱい詰つてゐるのは何だ？　龍枝にはそれが直に分る——あの社會民主主義者——A染布職工の坂本との戀。龍枝はむつとして唇をかみしめたが、又思ひ返した。彼女はこの上歩くことを止めて道を引き返した。
「今晩、家へ泊りに來ない？　キクちやん。緩りお話して見たいことがあるの。」
「えゝ。一度歸つてから。」
「さう。では待つてるよ。」
　風呂屋の角で二人は道を別れた。龍枝はその儘家に歸つた。
　十一時頃、窓を叩く音がする。龍枝は立つて、戸を開けた。外の寒風の中にキクの姿が悄然と立つてゐた。招き入れて、龍枝とキクは一つの蒲團の中に寢た。身體と身體をじつと屈附け合つて。蓄い感情が蘇る——最初、××を始めた頃、二人はかうして幾度も寢食を共にして來たのだ。キクは今××から離れて行かうとする——龍枝はぐるりとキクの方へ向いた。
「ねえキクちやん、かうして一緒に寢るといふ間柄だもの。今のあんたの本當の心を打明けてお見れよ。我々の組織にとつては、時によると百人の大衆を失ふよりも、一人の有能な者を失

ふ方が損が大きいことがある。今、あんたは我々の××から離れて行かうとしてゐるね。その譯を包まず話してお呉れよ、お願ひだ。」

「わたしはたゞ疲れたの。あんまり考へることが多すぎるので。」

キクはその後で、ほーつと長い息を蒲團の襟に吐きかけた。龍枝はきりつと齒を喰ひしめた。そして、きつとなつてキクに向つた。

「あんたは女工さんぢやないの。生え拔きのプロレタリアぢやないの。それが今からこの位のことに疲れて如何なるか。我々の前には大きな仕事が構へてゐるよ――××と××だ。そんな弱音を今から吐くなんて、實際情ないね。二ケ月前のあんたの意氣はどこへやつたの。あんたを賴つてゐる第一工場千人の女工さんの手前に恥なさい、あんたは今、何を考へてるの？　何をしてゐるの？　あんたよりも遲れてゐた女工さん達の方が、うんと先に行つてるよ。やがてあんたが氣が附いた時には、皆は遙か××の戰線に立つてゐる。その時あんたは獨りとぼとぼと誰もゐない道を行かなくちやならない。それでも好いか。それでもあんたは恥かしいと思はないか。」

キクはぐつと押し默つてゐた。龍枝も少時默つてゐた。キクは龍枝の前に出ると、彼女の持つ××の熱意に壓倒された。彼女はかすれ聲で弱々しく吐いた。

「本當のことを云ふと、私は今、坂本さんに結婚を申込まれてゐるの。それで何としたら好いかと迷つてゐるの。」

「勿論、結婚はしなくてはならない。でも、我々の結婚は、同じ主義で、同じ道――眞實のプロレタリアの爲に働く男とでなくちや駄目だ。」

「えゝ。それに私は今結婚すべき時ではないと思ふの。私にとつて大事なのはこの××だ。」

キクはぐん〳〵龍枝の持つ強い力に牽かれて、つい心にもないことを言つてしまつた。

「さう。××の方が大事だよ。自分よりも先づ大衆の方から解決して行かなくちや駄目よ。ぢや、あんたは坂本さんとの結婚はどうするつもりなの。」

「斷らうと思つてるの。けれども、いろんなことがあつて斷り得ないの。」

「それぢや、あんたはまだみんなを見捨てたのぢやないね。まあ嬉しい。」

龍枝は思はず歡びの聲を立てた。そして、

「ちや、私は、あんたに言ふわ、あんたが正しいプロレタリアの前衛として千人の女工さんを率ゐて立つには、先づ××となることだ。」

キクはぶるつとした。頭から冷水を浴びた感じが全身に走つた。今日公園で×××の言つたことがまざ〳〵と蘇る——恐ろしく強い力が横毆りにぐわーんと彼女の頭を毆りつける。彼女は唯低く唸つた。そして藻搔いた。坂本と結婚するんだと何故あつさり打ち明けなかつただらう——彼女は深い悔恨に責め苛まれた。龍枝はあまりキクが默り込んでゐるので臂で小突いた。

「どうしたのよ、キクちやん。プロレタリアにとつて最も××なことは××になることだ。わたしあんたを××に××しようと思つてゐるよ。」

キクは益々默つた。彼女は身體の慄へを相手に感づかれないやうに、そつと反面向きに身體を廻した。そして、ギユーツと[illegible]な嘆息と低い呻きとが六疊の間に一ぱいに交流する。

4

春木芳子は洋モス第一工場の寄宿「菊」の寮長だ。晝食をすまして自分の室で寛いでゐると、寄宿の主任武藤に呼び出された。彼女はそれで又すぐ、又あの×××野村だなと分つた。春木は武藤に從つて應接室に通つた。そこの卓子に傲然と腕を張つて控えてゐるのは、まさに×××野村の顏だ——落ち窪んだ險しい眼と赤い唇を持つてゐる。

×××野村はにこ〳〵して春木に向つた。

「度々、お邪魔しますね。」

春木は遠い所で椅子に腰かけ、たゞもぢもぢして手を揉んだ。×××が度々春木を訪づれるのは、春木の友人高山チヅヨが第二工場の寮長として潛入して組織に努め、暮から突然行衛を晦ませた爲、それを訊き糺さうとしてゞあつた。今日は、×××はとても慣々しい態度で春木をあしらつた。彼は今日は別に高山に就いて質問しないで、自分が家庭に惠まれないことや、自

分の才子ぶり等を話してきかせた。そして春木には、彼女の家庭や、彼女が失戀したことなどを訊いた。春木は×××××××すつかり乘つた。×××なんて商賣はやつぱり人間味のあるものだなと思つた。そして、すつかり野村を信賴して來た。そこで野村は隙かさず春木に對して、×××の××とデマゴーグとを吹き込んだ。

　春木芳子は女子大を出たのだが、あまり裕でない家庭だつた。そこで、彼女は若し×××に××して、ばれた時、あらゆる物を失ふことを考へた。それは彼女にとつて最も大きな恐しさであつた。彼女はこれまで少しばかり組合を支持し、女工達の外出を大目に見て來てゐたが、急に怯氣がさして來た。彼女は戰慄した。×××はじつと考へ込んで來た春木の樣子を見逃さなかつた。彼は隙かさず春木に言ひ被せた。

「あんたが高山さんに引きづられて×××に××するなら、僕は斷固として處分をとらなくちやならない。假令個人的に××××××持つてゐても、國家權力の前には仕方がない。あんな馬鹿げた者の味方をするよりも、自分の身の安全を考へた方が利功です。それに鄕里の兩親を考へてごらん。」

言はれる儘に春木は鄕里の兩親を回想した。貧しい家庭の中から、强いて女子大に學ばせた親達を思ふと、彼女はすつかり步を飜へした。幸、春木をこの工場に世話して呉れた友人高山チヅヨはゐない。もと〳〵女工達に味方顏を見せるのも高山チヅヨへの手前だつた。して見れば、もはや誰に遠慮もない。そこで、春木はすつかり×××と妥協してしまつた。×××が命じるまゝに、彼女は寄宿舍内の女工の動靜を探つて、彼に報告する役を受持つた。

　早番なので、ハナヱは二時に寄宿へ歸つた。自分の室で足を投げ出して、他の女工達と、來るべき產業合理化による賃下や操短や、床下に積るストツクに就いて話し合つてゐた。そこへ世話係春木芳子がやつて來た。細長い顏を障子の間から覗けてハナヱを呼んだ。

「ハナヱちやん、一寸。」

　ハナヱは立上つて、春木のゐる廊下へ出た。春木はハナヱを引つ張つて廊下の隅まで連れて行き、耳に口を寄せて、

「今月、これからどこかへ出て行くの。」

「いゝえ。」

ハナヱはどきりとして春木を見上げた。彼女はレポーターをやつてゐる。それを春木は知つてゐたので。

「恰度好いわ。それぢや五時までに外出の支度をして待つといで。」

「何處へ行くんです？」

ハナヱは春木の細い鼻を打守つた。

「五時に武藤さんが、どこかへあんたを連れて行くと言つたわ。」

えゝ？……ハナヱは更にびくつとした。武藤に連れられるとは大變に違ひない。ハナヱは思はずたじ〳〵と身をひいた。

「好いね、解つた？」

春木芳子はハナヱに念を押して、帳場の方へ折れて行つた。大變なことになつたぞ――ハナヱは身體の血がすーツと全部足に下つて行くのを覺えた。

五時になると、再び春木がハナヱを呼びに來た。ハナヱは神妙に友達のメリンスの羽織を借りて支度してゐた。春木はハナヱを伴つて帳場に來た。そして主任の武藤にハナヱを突き出した。ハナヱはすぐ武藤の横に腰かけてゐる胡散臭い紳士を認めた。いやに凄い眼、そして妙に威壓を持つた顔付――が、ぐつとハナヱの心を押した。ハナヱはすつかり小くなつた。武藤は傍の紳士を顧みて、

「これが五島ハナヱです。」

「さうか。これかい。」

紳士は唇を尖らせ、顎を突き出して、ハナヱをじろ〳〵と眺めた。

「おい、お前はこれから俺と一緒に行くんだぞ！」

横柄に顎でしやくつて紳士は言ひ下した。ハナヱは答もなく頷いた。紳士は悠然として煙草に灯を點けると、ハナヱを伴つて工場を出た。外は雨になつてゐた。ハナヱは雨に打たれ乍ら寒々と紳士の後に從つた。紳士は彼女を連れて城東電車に乘り、市電に乘り換へて、或石造りの家までハナヱを連れて來た。そこは警察だつた。ハナヱは始めて今の紳士が×××であることを知つた。×××はハナヱを警察の暗い一室へ連れ込んだ。狹くて汚い室――刑事部屋だ。そこで、×××は机に頰杖を突いて、ハナヱをじつと瞶めた。ハナヱの手足はたわいもな

く慄へた。唇をひき締めようとするが、色を失つた唇はただわなわなと打震へてゐる。ハナヱはすつかり怯氣づいた——こゝには法律といふものがある。法律に從はなくてはならない——

そこで、ハナヱは×××に訊かれるまゝにすつかり吐いてしまつた。××のこと、自分がやつてゐたレポのこと、上部から來る男のこと——などを。

後で×××は天丼と菓子をハナヱに奢つた。

夕方食堂で、キクが辨當を開いてゐると、晝業一操で歸つたナツが傳へて來た——ハナヱが引かれて行つたことを。それは自分が×××爲だと思ふと、キクはぢつとしてゐられなくなつた。運轉についても彼女はもはや仕事が手に着かなくなつた。あらゆるものが頭の中で顚倒してしまつた。彼女は自分の×に戰いた。彼女はぐつと股を抓つて見た。便所の中に這入つて頭を壁に打つつけて見た。一度、自分が××××××次第に大きく破れて行く樣を眼の前に描いて見た。すると一方では、彼女の心臟を掴んだ大きな情熱が身體の中をのたうつ——坂本の力強い抱擁。これが常に自分を反對の方へ引つ張つて行く。キクは身體中一ぱいに冷汗をかく。手足がこは張つて動かなくなる。もはや堪らなくなつて、職場の外に出た。少時闇の中に突立つて、冷い雨が頰を打つのを許した。

渦巻き復る職場の中の機械の音が、キクを嘲ける。それをじつときいてゐると、

「×××、×××」と叫ぶやうだ。

十一時にひけて、歸り途。灯を落して寢鎭まつた街をへうへうと風雨が打つ。キクは風に押されて家へ歸る。途中で足を向け換へて、龍枝の家へ寄つた。龍枝はまだ起きてゐて、組合ニュースの原紙を切つてゐた。ヤスリ板に當る鐵筆の音が低く夜の底にじり〳〵這入つて行つた。龍枝は冷靜にキクを顧みた。キクはいきなりどつと座ると、肩を慄はせて龍枝を見上げた。

「どうしたの。」

龍枝は落着いてさういふと、又鐵筆を動かして行つた。

「た、大變です。ハナヱさんが警察へ引つぱられて行つたんです。」

「さう?……それだけ?」

龍枝は眉も動かさず、手も休めない。

「××がやがて來るでせう、用心して下さい。」

龍枝は默つて原紙を切りつゞけた。キクはそれだけ云うと、あたふたと歸つて行つた。

龍枝はキクがあまりに周章てゝゐるので、ハナエが引つ張られたのは嘘だらうと思つた。屹度彼女の陰謀に違ひない、一つ彼女の淺薄なたくらみの裏をかいてやらうと考へた。そこで、龍枝は夜の明けるのを待つて、寄宿の世話係春木を訪づれた。龍枝は同志高山チヅヨを通じて春木を知つてゐる。

洋モス第一工場の入口で、龍枝は用意して來た新聞記者の名刺を出して春木芳子に面會を求めた。門衛のゐる粗末な一般面會所に龍枝は長く待たされた。やがて春木はやつて來ると入口で立停つて此方を眺めた。龍枝の姿を認めると、彼女はさつと顔色を變へた――蒼くなり、やがて次第に赤くなつて、龍枝の側へ來た。龍枝は原稿紙と鉛筆をとり出して、表面春木へ新聞種をとめるやうに粧ひ、時々紙面に要件を書いて筆談した。春木はたゞおどおどとして、少しも要領を得ない。龍枝は一寸口を切つて、ぐいと春木を睨みつけた。龍枝のきりゝと眼尻の吊上つた、射るやうな眼を見上げて、春木はすつかりとち迷つてしまつた。ギユーツと自分の弱點を相手に握りしめられて息も立てられない――彼女は益々蒼くなつた。龍枝はそれですぐ、春木の××を感づいた。

「こりや飛んだ所へ踏み込んだわい。」

龍枝は舌打してそこを出た。雨の中、泥濘の道に眼を落して歩き乍ら、龍枝は考へた。

「キクが逃げる春木が裏切る。そして、ハナエは一體如何したのだらう。」

5

午後、客間から龍枝の許へレポが來た「ハナエが連れて行かれて、まだ歸らない」と。

龍枝は隙かさず、そのレポーターを通じて、客間にゐるシズ、トキノ、チヨへ非常召集を命じた。

夜になつて龍枝の家へ來たのはシズ獨りであつた。龍枝は嘆息をぐつと嚙みしめてシズに訊いた。

「他の人たちは如何したの？」
シズはおど〳〵して、白けた面持で龍枝の濃い眉を窺つた。
「みんな、頭が痛いとか、寒いからとか云つて來ない。」
「來ない？　う――」
龍枝は熱い息を下腹に押し込んで唸つた。
「如何して來ないと云ふんだね。」
龍枝は疊みかけるやうに訊き返した。
「ハナヱちやんは引つ張られたので、みんなすつかり怯けてしまつたの。それにキクちやんがしばらく組合を止めて、白粉を附けたりして××××をごまかさうと云つてる。」
「ふーん、キクちやんがね。」きいてゐた龍枝の脣が忽ち歪んで來た。一體キクは何を言つてゐるのだ？　工場の先覺者、工場の知識分子たるキクが――この顚落ぶりは？　龍枝は腸にしみ込む熱いものを痛く感じた。
「まさかシズちやんは、キクちやんが白粉を附けたり、男と一緒に歩いたりするのを見習はうとしまいね。あんたの後には千人の女工さんがゐる。××××××××××××××××××××××、×××××××××。シズちやんの爲には×××××××××好いとまでなつて來るんだ。今、あんた達の背中には××××××××、六百人の馘首と操短による賃下と工場閉鎖の問題とだ。シズちやんは如何します？」
シズは兩腕を握つて、視線を疊の目にじつと落して考へてゐたが、
「さう、ぼんやりしてはゐられない。やるわ。うんとやるわ。キクちやんがあんなことを云つた時、オラも少し迷つたが、もう何も×××ない。馬鹿だつた。」
「シズちやん、×××！」
龍枝は唸り乍ら叫ぶと、晴々と眉を上げて微笑した。
「平生職場で死ぬ目に遇はされてゐるあんた達だ。×××××××××××××この儘でゐたら、みんなはどうなる？　ねえ、××××××××××。さあ、二月十五日をめがけてストライキの準備をやらう。シズちやん、元氣をお出し、しつかりやらう、一つ速力を出して突進だ。」
「えゝオラもう、何も×××。」
シズはその平つたい顏に強張つてゐた影をすつかり解いて龍枝を見上げた。龍枝はいふ。

「ごらん、第二工場はもはや完全な××が出來て、常にぐんぐん××をやつてゐる。そして常に勝つてゐる。此方も負けないでやらうよ。今、俺達はとても力が弱い。これはまだ頭數が少いからだ。」

「オラ歸つて、みんなによく言つてやる。」

シズはすつかり元氣をとり戻して、いそいそと寄宿へ歸つて行つた。

十二時頃、裏口の戸がすつと開いて、座敷に上つて來る者がある。龍枝は机に縋つて、書き物をしてゐた。きゝ慣れた足音はキクだ。龍枝は眉を寄せて、後を振返つた。キクは悄然と肩を垂れて座敷へ通ると、龍枝の側にどつと坐つた。

「一寸、そこまで來て下さい。坂本さんが、あんたに會ひたいと言ひます。」

「用件は何？」

「何だか、會つて見なくちや分らない。」

「ま、行つて見よう。」

龍枝は澁り乍ら立上つてキクについて家を出た。龍枝と同じモスリン横町の路次――上水のあるところからの奥の二階。そこが坂本の住居だ。キクの案内するのに從つて龍枝は坂本の部屋に通つた。裏向きの三疊の間。小じんまりして茶道具があり、活動女優のプロマイドに並べて××××の寫眞が壁に貼つてある（畜生、××××を何と心得てるか）。そこで坂本は雜誌を讀んでゐた。龍枝が通ると坂本はのつぺりした長い顏をいやにしやくつて氣難しく口を結んでゐた。龍枝は睨むやうにして坂本を眺めた。

「實はキクちやんの話だがね。」坂本はいやに口の兩隅を下げて龍枝の顏を見守つた「この人が言へないといふから僕が代りに言ひます。」

クソツ！　と龍枝は腹の中で叫んだ。何でこの男が我々の××に嘴を入れる權利があるか？　龍枝は鋭い眼をぐつと剝いて、坂本とキクの上に射た。キクは首垂れて膝頭を撫でゝゐた。坂本はつゞけた。

「キクちやんは少時組合から身を引きたいといふんです。それは今××××××××××××××××××。この人は××××××××に呼び出され、今日も亦呼び出され、全く

弱りきつてるんです。明日あたりはあんたに手が廻るでせう。もう先方には此方のことがすつかり分つてゐるんです。女工さんの一人々々の名前もみんな上つてるんです。それであんたはこれからすぐ、此處から身をひいて下さい。」

　きいてゐる中に龍枝は急に激しい憤怒が胸に詰つて來た。そして思はず叫んだ。

「馬鹿ッ、それでわざ〳〵私を呼びつけたの、あんたは。止して下さい、我々の××から全然外にあるあんたに、とやかく言はれる何物も持ち合せてゐませんよ、私は。」

　坂本は長い鼻をヒヒンと歪めて、

「ま、さう怒らないで下さい。あれ程一生懸命に夜も晝も身を砕いてやつてゐたあんたに對して、こんなことを言ひ出せば怒らすより他はないと知つてたんだ。だが、この際、あんたを失ふことは×××××××××××損失だ。だから僕は大衆の爲に敢て言ふんだ。」

「チエツ、大衆は自分達を捨てゝ××××××何で望んでゐるもんか。今、洋モス四千の女工さんは脊中に火がついてる狀態だ。それを捨てゝ、×××××××、××が來ると云つて××××××××××××。あんたも勞働者の群に何を言つてるんです？」

　くるりと身體を廻して、龍枝は坂本から離れて坐つてゐるキクに向つた。

「キクちやん、もはや餘計なことを私は訊かない。たゞ、あんたは心からあんなことを言つたの？　え、どう？」

　キクは益々頭垂れて默つてゐたが、やがて膝頭の上にぽとぽと涙を落して來た。龍枝は一切を諒解した。腸の底から熱い塊がむくむくと湧き上つて來る。龍枝は喘ぎつゝ、唸りつゝぐつと歯を喰ひしばつた。そして、

「さうか、失ふべき何物かゞある時は恐いもんだ。キクちやん、假令、今傍道へ外れても、あんたが女工さんである間は十二分の信頼をおくよ、私は。私はちつとも忘れてゐないよ、去年の大晦日の夜、除夜の鐘をきゝ乍ら、××のために二人で泣き乍ら街をうろついて諫め合ひ、誓ひあつたことを。それからずつと最初の困難を共にして、一組の蒲團を引つ張り合つて寢み、一ぱい五錢のうどんかけを二人で突つき合つて過した時を——。あの頃のあんたは一生懸命だつた。傍の見る目も、いぢら

じい程組合のことで胸一ぱいにしてゐた。あの頃のあんたと、今のあんたとは何といふ變り方だらう。でも、私は待つてゐるよ。眼のさめた時はいつでも歸つてお呉れ。私はあんたの爲にいつでも溫い胸を擴げることを拒みはしないだらう。」

龍枝は一寸言葉を切つた。腸の底が煮えくり返る。胸の中がたぎる。キクは遂に牀の上に泣き伏して、おい／＼と聲を立てゝ來た。坂本はじつと頭を垂れ、眼をとぢてゐた。龍枝は眼頭が次第に熱くなるので立上つた。

「キクちやん、これだけは瞭り考へておゝき、勞働者××××の道は何であるかを。ぢや、さようなら。」

龍枝は溢れさうな眼頭を抱へて、どん／＼階段を下りてそこを出た。寢鎭まつた街を、ギリ／＼齒を軋しませて家へ急いだ。家へ歸ると、兩手を懷にさし込んで柱に凭れた。熱い涙がとめ度もなく溢れて來る。殘念だ！　いや、キクを責めるのを止さう。まだ、自分のやり方が足りなかつたのだ。愚者は眞理××によつて語らせる。×を見て始めて分るならば、敵で自分は肉彈ともならう、××××××——龍枝は懷から短刀をとり出して、ぐさつと柱に打ち込んだ。

6

ハナヱは留置場に二月入れられた。二月廿日の夕方、ハナヱはレポにゆくことになつてゐた。午後六時、×××は彼女を連れて警察を出た。外は旣にたそがれてゐた。空は暗く曇つてゐる。雪になるだらう、寒い。

レポの地點——本所緑町の活動寫眞館——に近い所へ來ると、×××は足をとめてハナヱを振り返つた。そこはガードに近くて暗いところだ。ハナヱは一寸怯えて足をすくめた。×××はハナヱの肩を叩いて、

「お前は今日レポに行くんだつたね、恰度その時間だ。さあ、これから行つて連絡をつけて來い。」

と命じた。ハナヱは默つて×××を見上げた。

「たゞ連絡を附けて來りや好いんだ。そして、先方からビラでも何でも渡すものがあつたら、此方へ持つて來るんだよ。」

ハナヱは頷いて、命じられるまゝにレポの地點へ行き、上部から來るものを待つた。活動寫眞館の前はひどくさびれてゐる。人影はない。煌々たる電燈が目を欺く程白く道を照す。

その光に曝されてハナヱは少時そこの前に立ち竦した。黑いマントを着た小柄な男が來た。これが上部からのレポーターだ。ハナヱはそれに近づいて何氣なく彼に訊いた。

「今日は何か用がある？」

黑いマントの男はハナヱを連れて横町の方へ折れた。

「今日は別に渡すものはない。工場ニュースは今謄寫版をとり上げられて、もう一週間延びると傳へて呉れ。そちらの方は、工場で何か變つたことはないか。」

「變つたことはない。」

ハナヱはきつぱり言つた。彼女は自分が××××ことをこの男へ告げたくなかつた。何故ならば、それはどうしても自分××××××××××を曝露せずには濟まないから。マントの男は首を傾けた。

「別の方できいたが、君達の方では××××××と云ふんだが、ほんとに變りはないか。」

「えゝ。ほんとに變りはない。」

ハナヱは遂に白を切つて通した。そして××××。

「さうか、そんなら大丈夫だ。それで、これから歸つたら龍枝さんに、この次のレポの日にこゝで逢ひたいと傳へて呉れ。」

男は別にそれ以上を追求しようとしないであつさり信じ込んでしまつた。かうなると、ハナヱは飛んでもない方へ陷つて行く自分をはつきり知つた。最後に彼女に殘つた唯一つの感情はこの男を××××××××××といふことであつた。彼女はおづ〳〵と、

「龍枝さんは今晩あんたに遇ふさうです。江東橋の根に待つてるつて——」

「さうか、時間は？」

「此處の濟み次第、すぐそちらへ來て下さいつて——」

この男がそれからすぐもとの道へ引き返せば、×××××××××××××。だからハナヱは反對の方へ一寸この男を×××××××突嗟の間に考へついたのだ。

「よし、ぢや、今日はこれきりだ。」

マントの男はすぐハナヱと別れて、江東橋の方へ歩き出した。ハナヱは少時、角の飴屋の隅に立つて、遠ざかり行く男の後姿を見送つた。ひた〳〵と胸に冷い思が迫る。せめて××××××××××。不甲斐ない自分だつた。何といふだらしな

い自分であつたらう——味方を賣つた悔恨が一時に彼女の胸を押して、責めて來る。ハナエは肩を垂れて、×××の待つてゐるガードの下へ歸つて來た。

「如何だつた？　巧くやつたか。何か渡したか。」

×××はハナエを覗き込んで訊いた。

「來ないの、どんな人も。どうしたのか。」

「さあ、まさか、お前の××××が、××××××ゐないだらうが——」

　スパイは仕方がないといふ風に、手を振つて煙草の吹殻を投げ棄てた。そして、

「ぢや、もう、これで歸つて好い。歸つたら、××××××××云ふんぢやないよ。どこか姉さんの處へでも行つてたやうに言ふんだ、好いか。」

　それで、やつとハナエは釋放になつた。彼女は×××に別れて、とぼ〳〵と暗い道を寄宿へ向つた。

　龍枝は今日のレポを案じて、至急にシズを呼び出して、彼女をレポーターにした。そして自分もレポを見屆けに出かけた。

二人は別々に本所の活動館の前へ行つた。龍枝がついて見ると、シズはまだ來てゐなかつた。龍枝は道の向う側にあるそばやの横に佇つて、待つた。やがてシズが來た。彼女は默つて、シズの動作を眺めた。シズは活動の看板を見上げたり、館の前を行き來したりする——それらしい影は來ない——三十分待つた。まだ影は見えない。べた〳〵白いものが前髮に降りかゝる。雪だ——愈々雪になつた。

　龍枝はそばやの横の闇の中から出てシズを呼んだ。そして、彼女を連れて近所のしるこやへ這入つた。シズは寒さに凍えた手を揉んで、運ばれたしるこを甘さうに平げた。龍枝はいとしさうにシズを眺めて、

「失望しちや駄目よ。シズちやん。かういふことはよくあるんだ。××られ、××××れ、お負けに雪さへ降つて來た。何をしても、日和ばかりはないよ、雨も降る、雪も降る、風も吹くさ——かうして我々の××が次第に大きくなり、強くなるんだ。シズちやん、大丈夫かい？」

「大丈夫、オラ、もう、眞直ぐに進んで行くことが出來るこ」

「うれしいね、シズちやん。しつかりやつてお呉れ。ほんとう

のプロレタリアは××××××××。×××前へ進むだけだ。」

熱い汁粉で舌を焼いて、二人はそこを出た。外は雪で眞白だ。冷い白い綿が重くぼとぼとと續いて行く。足許がずつかり泥濘んで、草履を引ずり込む。龍枝とシズは肩を寄せて歩いた。

「それぢや、歩いて歸れないね、よし、圓タクを奢らう。今日、新聞者から貰つた原稿料がある。」

龍枝は街角に立どまつて、走り來た圓タクに手をあげた。圓タクはすぐとまつた。それへシズを押し込めて、龍枝はその中へ這入ると、悠然と命じた。

「龜戸の東洋モスリン裏まで。」

タクシーは緩く車體をくねらせて方角を定めると、雪に消されようとする街を吹つ飛ばして驀進する。龍枝はシズの耳に口をよせ、

「これぢや、まるで凱旋將校だ。ね、豪勢な景氣ぢやないか。ハハハハ……。」

二人はスピードを早めるタクシーの振動に搖れて次第に心が大きく育つた。——×××××××××××××××。

二人の唇から×××××××××洩れて來た。

「卑怯者去らば去れ、×××××××——」

運轉手の前では、雪を拂ふ眞鍮の棒が半圓を描いて振動する、タクシーは更にスピードを強めて、橋を渡り、街を曲り、雪の中をひたすらに突き進む。

8

工場に歸つて翌日、ハナヱはすぐ龍枝を訪づれて組合脫退の意志を告げた。やがて龍枝のところへ寄宿舍からレポが來た

「キクとハナヱが仲よくなり、春木芳子もその方へついて、他の人達が組合に這入るのを妨げる」と。

龍枝は極度に憤激した。もはや、×××のグループに對して容赦してゐられない。これと徹底的に鬪爭しなくては——。そこですぐ幹部會を開いた。集つた者はシズ、トキノ、チヨ達——正味ばかりだ。彼女達も×××に對しては心から憤慨した。

「×××××××、××たりした奴×××××置けない。」とシズが齒軋りした。

「さうさ。×××奴はみんなの前で×××××××××やる

んだ。」

トキノが顏を赤くして叫んだ。

「お負けにあいつ等はグルになつて此方の組合を壞さうとたくらんでる。一刻も早く工場から叩き出すんだ。」

温良なるチヨが眼をぎら〳〵させて言つた。

龍枝は一同を見廻して叫んだ。

「よし、やつてやるぞ。みんなで頑張らう。」

早速、皆で、組合員全部にこの度の××××××××ビラを刷つて、配つた。

反響はあつた。各職場から××××××× 憤慨が湧き上つた。シズ、トキノ、チヨ達は各職場で組合員を集めてアヂつた。組合員は事毎にキクやハナヱや春木に突つかゝつて行つた――寄宿でも職場でも。

更に龍枝は、表面洋モスに地盤を張つてゐる××同盟の龜戸支部を訪づれた。そこの幹事河田やそこでまだ忠實に働く女工イクノやフユやタネ達を說いて共同戰線を張つた。キクやハナヱがすつかり××同盟に近づかないのに反感を持つてゐたイクノやフユやタネ達は、龍枝のアヂに乘つて、キク達に對する反感を高めた。

キク、ハナヱ、春木に對する不評と反感は、此方の組合――××の洋モス分會からも、組合同盟からも湧き上つて來た。×××××××××××××××。そして、龍枝達は次第に新しい組合員を獲得した。

一方、龍枝は住所を移つた――或二階の貸間、これからは××××××。そして、××××××××、新しい鬪爭――操短に對するストライキ――の下準備に向つた。



實朝の死

武者小路實篤

人物

實朝（二十八歳）
義時
大江廣元
政子
仲章
公曉
長尾
雜賀
其他

第一場

（將軍家の廣間、始め誰も居ない。義時、廣元登場）

義時。廣元殿！

廣元。何か御用で御ざりますか。

義時。あんたはなんで御用でこゝにゐらつしたのですか。
廣元。明日の御儀式の事で參りました。
義時。それは結構なことで御坐る。どうぞ御遠慮なくお通り下
　されい。
　（廣元ゆきすぎやうとする）
義時。廣元どの。あなたはさはらぬ神に祟りなしと云ふ言葉は
　御存知ですかな。
廣元。存じてをるつもりです。
義時。それは結構なことで御ざる。
　（廣元又ゆきすぎやうとする）
義時。廣元どの。
廣元。はい。
義時。貴殿は御賢明な方で御ざるな。あはゝゝゝ。
廣元。恐れ入ります。
義時。この家の壁には耳がありますぞ。用心なされい。
廣元。はい。
義時。それではこれで失禮します。又のちほど御逢ひしませ
　う。（退場）
　（廣元、恐れと不快に義時のあとを見おくる。實朝登場。）
實朝。廣元！
　廣元は氣がつかない）
廣元。（おどろいて）はい。
實朝。（大きな聲で怒つた調子）この家には壁に耳ありだな。
廣元。はつ。
實朝。恐ろしい家もあるものだな。はゝゝゝ。
廣元。……
實朝。廣元！　お前は臆病風にやられたのか。それともこの實
　朝を、意久地のない男とでも思つてゐるのか。
廣元。いえ、そんなことは。
實朝。何か恐れてゐるな。わしだつて恐れてゐた。そちが恐れ
　るのも無理はないわ。だが恐れてゐてもきりはないぞ。男子
　は大膽でありたいものだ。廣元、お前はさうは思はないか。
廣元。右大臣殿！
實朝。壁に耳ありか。だが壁の耳を怖がらぬものは一人だけで
　なければならないと云ふことはあるまい。わしだつて、恐れ
　ないでもいゝのだ。昨日迄は恐れたかも知れぬ。今日の

は恐れはしないのだ。

廣元。（小聲で）よくわかつておりますが。

實朝。わかつてゐればそれでいゝ。昨日までわしは小さくなつてゐた。おどかされどうしに、おどかされてゐた。手も足も出せなくなつてゐた。わしは誰にも心をゆるすことが出來なくなつてゐた。だがそれは昨日のわしだ。今日のわしはもう誰も恐ろしいとは思はぬ。恐れても死ぬ時は死ぬのぢや。恐れないでも死ぬ時は死ぬのぢや。せめて生きてゐる間、朗かに生きてやりたいと思つてゐるのだ。

（廣元。涙ぐむ。）

實朝。廣元！　お前もしつかりしたければならないぞ。恐れてゐては切りがないぞ。今日までは恐れてゐたのはわしの方だ。だが明日から恐れるのはわしではなくなる。

（廣元。何か云ひたいが云へない）

實朝。廣元。お前はいゝ齢して、まだ生命がおしいのか。はゝゝ。このわしはこの齢でもう生命は惜しいとは思はぬ。壁の耳を恐ろしいとは思はぬ。いひたいことをのこらず云つて死ぬ時は安心して死ぬつもりだ。廣元。お前はわしよりもなほ恐ろしいものがあると見へるな。わしに人殺しが出來ないと思つてゐるのか。怖がらないでもいゝ。わしには殘念ながら人殺しは出來ない。今になつてわしは兄君のことを思ふ。兄君は偉かつた。わしは今になつて兄君があれ狂ふやうな行ひをなぜされたかがよくわかる。あれは蜘蛛の巣にかゝつた蜻蛉のやうなあばれ方だつたのだ。あばれてはいけないと云ふものが、わるいのだ。今になつてわしは、わしより兄上の方が、源氏の血を多くついでゐられたのを知る。わしに兄だけの力があつたら。だがその時は、今日まで、生かしてもらへたかどうか。廣元、この右大臣はな。生かしてもらつてゐるのだぞ、生きてはゐないのぢや。昨日迄、わしはそれで歎ばかりつくつて、馬鹿な顔してゐた。そしたら少しは永く生かしてもらへるかと思つてゐたのだ。所がそれも愚かもの丶夢だ。わしのつくらした船が大きすぎて海に浮ばなかつたやうに、このわしはこの國には少し大きすぎたので、浮ぶことが出來ないと見へるわ。廣元、だがわしは、もうそれを恐れてはゐない。それで廣元、今日、お前を呼んだのは。（小聲で）實は公曉のことだが。

（この時不意に襖あく、義時、長尾新六、雜賀次郎を兩側に
すへて其處に傲然とひかへてゐる）

義時。右大臣殿。明日の用意出來ましてござりますか。

實朝。お前の方こそ、すでに用意出來てゐるだらう。

義時。それはどう云ふことで御座りますか。

實朝。それはお前とわしだけが知つてゐることだ。

義時。なんだかわかりませぬ。

實朝。わからぬか。わしにはわかつてゐるぞ。

義時。何がでござります。

實朝。なんだかね。

義時。明日の仕度は出來まして御座いますか。

實朝。それはわしの方でき〻たいのだ。

義時。私はか〻りでは御座りませぬ。

實朝　お前のか〻りの方のことは用意が出來たかと云ふのだ。

義時。はい私のか〻りの方はまちがひなく用意が出來ておりま
す。

實朝。それをきいてわしも安心したぞ。

義時。畏れ入ります。

實朝。義時、わしは隨分ながい間、お前の世話になつたな。

義時。改めてなぜそのやうなことをおつしやるのです。

實朝。人の生命はわからぬものだからな。

義時。そんな緣起のわるいことを、おつしやるものではありま
せん。

實朝。一人の人の緣起のわるいことは、他の人には緣起のい〻
場合がよくあるものだ、心配しないがい〻ぞ。

義時。今日は不思議なこと許り、おほせになりますな。

實朝。お前は蜘蛛の巣にか〻つた蝶が何と云つたか知つてゐ
るか？

義時。そんなことは存じません。

實朝。敎へてやらうか。

義時。……

實朝。敎へてやらう。もつとこつちに出て來い。

義時。はい。

實朝。蝶はかう云つたのださうだ。（義時のそばに近づき）わし
が蜂だつたら、お前は生かしてはおかないぞ。

（義時を刺さうとして、義時に手を握られる）

義時。何をなさるのです。

實朝。お前に殺される前に、お前を殺さうと思つただけだよ。

義時。あはゝゝ。あなたには私は殺されません。あなたは蝶でゐられますから、女、子供を相手に、歌をつくつてゐられるのが、一番、あなたには似合つております。

實朝。それなら一思ひにわしを殺せ。

義時。私はあなたに手向はうなぞとは思つておりません。

實朝。お前が手を下さないでも、もつといゝ方法があるとでも思つてゐるのだらう。そしてその用意がもうちやんと出來てゐるのであらう。

義時。あまりにひがんでゐられます。

實朝。お前達の心がこのわしにわかつてゐないと思つてゐるのか。廣元、世の中には恐ろしい男もゐるものだな。このわしを手足も出ないやうにして、自分はいゝ顔をして、わしが殺されるのを待つてゐるのだからな。このわしが、武術をならひたいと思つても、そんなことは必要ない、劍をつかふのは家來のすることだと云つて、このわしの内にも父上や、叔父上の血がながれてゐるのを知つてゐるために、武術をならはせず、たまにならふことが出來たと思ふと、その先生は、わざとまけて許りゐて、わしが、いくらすきを見せても、打つては來ない。そして、わしが三べんも出鱈目に打つて行けば、三遍目には必ず頭をうたしてくれると云ふやうな代物許りだつた。たまに硬骨な男があるかと思ふと、それはまもなく、殺されてしまう。わしはすぐれた男が、何人となく殺されていつたのを默つて見て來た。それは將軍家に手向ふものではない。北條家に手向ふものだ。それは不思議に殺されてゆく、そしてその殺さした男は、他のものではない、このわしなのだ。わしが、愚かにもわしの手や足を自分で切つてゐると世間では思つてゐるだらう。こんな馬鹿氣た話が何處にあるか。兄上を殺したのも世間ではわしだと思つてゐる。わしはどんなに兄上を愛してゐたか、別當公曉も、わしを讐と思つてゐる。わしは、あの子を限りなく愛してゐるのだが、そのわしの意志はあいつにはつたはりやうがないのだ。あの子だけが源氏の血をついでゐる。あの子を立派に育てゝくれるものがあつたら、あの子は立派な將軍になれる男なのだ。わしは公曉に逢つてわしの心を知らせたいが、それはもう出來な

いことだ。

義時。そんなことは御ざりませぬ。右大臣殿は誰かの讒言を御信じになりすぎてゐられます。

實朝。明日になれば分るだらうよ。公曉がわしを親の讐とねらつてゐることは、誰でも知つてゐることだ。知らないものがあれば、義時、お前一人だらうよ。

義時。あまり御言葉がすぎますぞ。

實朝。すぎたのがどうしたと云ふのだ。

義時。おためによくないと申し上げるのです。

實朝。之れ以上、わるくなりやうがないではないか。

義時。今迄、御無事でお育ちになり、將軍は勿論、右大臣の位におのぼりになれたのを幸福なことゝは思はれないのですか。

實朝。お前達が居なかつたら、わしは幸福だつたかも知れぬ。

義時。私を惜んでゐられるのですね。

實朝。元よりだ。惜まずにゐられるか。自分を弄り殺しにしようと思ふものを惜まずにゐられるか。誰かこの義時をつかまへて獄にたゝきこむ者はないか。さう云ふ男が出て來たら、その男を將軍にしてやつてもいゝ。

義時。あはゝゝゝ。おそばにゐる武士は、お氣の毒ながら、皆、あなたよりは、私の云ふことをきゝまする。

實朝。そんなことを知らないと思つてゐるのか。母上はまだ御存知あるまい。だがこの實朝は、それ程の馬鹿ではないわ。

義時。それが、あなたの御不幸なのです。もつと馬鹿でゐられることを、私達はのぞんでゐるのです。

實朝。馬鹿にでもなつてゐれば、いつまでも生きられるならば、馬鹿にもなつてゐやうが、どうせなが生きは出來ない身の上だ。さう馬鹿にはなつてはおれぬ。

義時。馬鹿におなり遊ばせ。さうすれば、いつまでも大事にして上げます。

實朝。……（怒りに身をふるはせるが、どうにもならない）

義時。さあ、もう音なしくおなりになつて、女子供とでも御遊びになる方が、面白くつてようございます。政治のことは一さい私達がいゝやうにやりますから、どうか御心配なく。

實朝。義時！

義時。なんですか。

實朝。わしは矢張りお前には勝てないことを知つた。だから、わしは歌許りつくつて政治の力はのこらず今迄通り、お前達に任せるから、せめてわしを三十五六迄でも生られるやうにしてくれ、さもないとわしは歌人としても、恥かしい歌より他に、この地上にのこすことは出來ない。わしには矢張りそれが一番氣になる。だからわしはなが生きがしたいのだ。そのわしの氣持に同情してくれ。

義時。右大臣殿、私はあなたの臣下で御座ります。私はいつまでも忠勤をつくしまして、百歳のよわいをお重ねなさるやう、祈つております。

實朝。それをきいて安心したぞ。之からはわしは心のなかではお前を主人のやうに思ふやうにする。そして、一筋に歌道をつとめるつもりだ。

義時。それがおよろしゆう御ざいます。

（實朝退場）

義時。廣元どの。

廣元。何でございますか。

義時。あなたも、私が怖いと見へますな。

廣元。生てゐるものは、皆、あなたを恐れております。御尊父よりも、もつと恐れております。

義時。私の恐ろしいのがわかれば結構です。まさか、公曉の處へ逢ひにはゆきますまいね。

廣元。勿論ゆきません。公曉は本當にやるつもりなのですか。

義時。さうらしいです。

廣元。誰もとめないのですか。

義時。右大臣の御評判はあまりおよろしくないのです。

廣元。あなたは、一つの石で二羽の鳥をやつつけるおつもりですか。

義時。さうですよ。廣元どの。それがわるいことですか。人民はそれを望んでおりますぞ。

廣元。少しお氣の毒ではありませんか。

義時。本當に氣の毒に思はれるのですか。

廣元。そんなことはありません。

義時。あなたは生てゐたければ、又お國のため、民のために一層御働きになりたいならば、私達の味方にならなければなりません。あなたはお利口だから、萬事おわかりでせう。それ

とも、今、死にたく思はれますか。私の刀はこの頃少し血にかつゑております。どうですか。生てゐられたかつたら、北條のために、忠勤をおつくし下さい。あなたのやうな方が味方について下されば、私達は天下をとつたも同様です。こんなうれしいことはありません。あしたこそ源氏が亡び、北條が天下を握る日なのです。私はどんなにそれを待つたでせう。

（政子腰元達をつれて登場、義時の態度すつかりかはる）

政子。右大臣殿をお見かけしなかつたか。

義時。さつきまでこゝにゐられました。お呼びまうして來ませうか。

政子。あゝ、呼んで來ておくれ。

義時。はい。

（義時退場）

政子。廣元！

廣元。はい。

政子。とう〳〵明日になつたね。

廣元。左様でございます。

政子。私はうれしくつて仕方がない。わが子が右大臣になられるとは夢のやうだ。明日の御行列はどんなに御立派だらう。なが生きするものだね。こんなうれしい日に逢へるのだからね。

廣元。本當で御座います。

政子。私はあの子がどうしてか可愛いくつて仕方がないのだよ。皆に死なれてしまつたので、あの子だけはなが生きさせたいと思つてゐる。私より前に死なれては私はそれこそ大へんだからね。義時にもよく云つておくれ、お前も氣をつけておくれ。

廣元。畏まりました。

（義時、實朝登場）

義時。おつれ申して參りました。

實朝。母上、何か用ですか。

政子。明日の御装束を一度つけて見せてくれないか。

實朝。つけて見てもよろしい。

政子。（腰元に）すぐ御装束を持つておいで。

腰元。はい。

(腰元退場)

政子。いよ〳〵明日になつたね。私はうれしくつて仕方がない。右大臣殿にもさぞ御うれしいでせう。

實朝。(怒つたやうに)それは嬉しゆう御ざいます。

政子。明日の行列はさぞ美しいだらうと皆、大さわぎしてゐるさうですよ。

實朝。きつとおどろくことでせう。

政子。それは驚くにちがいないね。いくら皆が想像したつて、右大臣殿のお考へには及ばないからね。さぞ明日は立派だらうと私も内々おどろかしてもらへると思つてたのしみにしてゐるのですよ。

實朝。私の一生一代の行列をお目にかけませう。

政子。是非見せておくれ。

實朝。母上。明日どんなことが起らうともお驚きになつてはいけませんよ。

政子。何か私をおどろかさうと思つてゐるのかい。

實朝。はい。

政子。私はいくらでもおどろかしてもらいたいよ。

實朝。さうですか。

(腰元等、裝束を持つてくる。實朝着る)

政子。(見とれながら)どうだ? 義時? この御立派なことは。

義時。本當に御立派で御座います。

政子。御父上よりもなほ御立派だね。

義時。左樣で御ざいます。

政子。ね。皆、御立派だとは思はないか。

老女。思はない處では御ざいません。

政子。私は本當に嬉しいよ。嬉しくつて恥かしいが、涙が出て來た。父上にお目にかけたかつた。私は今迄隨分苦勞して來た。早く死んだ方が羨やましいこともあつた。だが今日は、ながい生き出來たことをうれしく思ふよ、ながい生き出來た御かげで、こんな美しい御姿を拜見することが出來たのだからね。

老女。本當で御坐ります。私もありがたくつて涙が出ました。

實朝。母上。私にもし萬一のことがありましたら、――これは何年さきのことか知れませんが、その時は公暁を私のあとに

つけて下さい。あの男は、源氏の血をうけた、立派な若者です。うまく育てたら、父上や、叔父上にもまけない武將になつてくれるでせう。私だけ時めいて、あの子を不幸にはしておきたく思ひません。このさい母上におたのみしておきます。どんなことが起りましても、母上のお孫さんの公暁を私のあとつぎにして下さい。よし私を殺すやうな大罪をおかしても、彼を私のあとつぎにして下さい。

政子。右大臣殿の御言葉ですが、私には腑におちません。あなたはまだ〱御若い、之からこそ立派に生てゆかれる方だ。私こそいつ死ぬかわからない老ぼれの身です。しかし私の心をさつして、公暁をあとつぎにすると云つてくださるのは本當にありがたい。義時、萬事いゝやうにはからつておくれ。

義時。畏まりました。

（實朝、急に泣く）

政子。どうしたのだ。

實朝。いえ、別になんでもありません。私は不意に、御先祖のことを考へたのです。お父上のことを、兄上のことを、そしてあの叔父上のことを。

政子。叔父上のこと？

實朝。さうです、あの衣川でなくなられた叔父上のことを。私達の上には呪ひがかゝつてゐるのです。靜御前が生んだ、生れてすぐ殺された叔父上の子の血が、私達の上にかゝつてゐるのです。私には今、それがはつきりわかります。

政子。なにをおつしやるのです、氣でもおくるいになつたのではないのですか。

實朝。母上、私は氣がくるいたい。（泣く）

（幕）

第二場　鶴が岡八幡宮石段の場

（實朝の行列通る。實朝の後に義時劍をもつてついてゆく、そのあとに仲章從ふ。あと大ぜい。）

（義時不意に倒れやうとするのをわきにゐた仲章に助けらる。行列とまる。實朝冷然と見てゐる）

仲章。どうかなさりましたか。

義時。不意に目まいがいたし、思はぬ不覺をいたしました。

仲章。御劍は私が代つてお持ちします。お歸りになつて、御

生なされたらおよろしいでせう。

義時。ありがたう。ですが大丈夫です。

(歩かうとし、又倒れる)

義時。殘念ですが。それではかはつて戴きます。

仲章。承知しました。御心やすく御養生下さい。

義時。ありがたう。

(實朝、意地のわるい位に一言も云はない)

義時。右大臣殿、それでは失禮さして戴きます。

實朝。義時、わしが思つてゐた通り病氣にかゝつたな。あはゝゝゝ。

(義時何か云はふとし、實朝の顏を見る)

實朝。義時!

義時。はつ。(思はず威光に打たれ平伏する)

實朝。義時お前はさぞなが生するだらうな。あはゝゝゝ(沈默)それでは行列を進めえ。

仲章。はつ。

(行列石段を上る。義時急いで退場。公曉大いてふのかげから、あらはれる)

公曉。親のかたき、思ひ知れ。

實朝。公曉か、早やまるな。

公曉。今になつて生命が惜しいか。それなら父上や兄上の生命を返せ!

實時。お前には云ひたいことがあるのだ。

公曉。何を。

實朝。わしはほんとにお前を愛してゐるのだぞ。

(公曉、實朝を切る)

實朝。大たわけものめ!

公曉。(實朝の首を切り、それを持ち上げながら)公曉、父の讎を打つた。義時、義時はゐないか、公曉、右大臣の御首をあげた。

(この時、始めて我に歸つたやうに武士達さわぎ出し、公曉に打つてかゝる)

公曉。義時はゐないか、義時はゐないか。

(舞臺一度空になる)

(武裝した義時、長尾新六、雜賀次郎等五六人と戻つて來る)

義時。公曉は殺してしまはないといけないぞ。生けどつてはいけないぞ。よくわかつてゐるだらうな。

長尾。よくわかつております。

義時。つかまへたら何を云ひだすかわからない。又姉上が厄介だ。殺してしまへ。

雜賀。承知いたしました。

義時。相手は、何しろ源氏の血がつゞいてゐる。最後の源氏だ。存外強いから、そのつもりでゐろ。

長尾。承知しました。

義時。それではなるべく早く殺せ。

長尾。
雜賀。}は。それでは失禮。

(義時の他退場)

義時。之でやつと北條の時が來たと云ふものだ。隨分手數をかけたな。

(人が來る氣合に、義時一寸身を退く思ひ入れ)

(はげしき切りあいの音公曉一人血にそんで實朝の首を持つて出てくる)

公曉。義時はゐないか。義時はゐないか。

義時。こゝにゐる!

公曉。逢ひたかつた。義時、さあ、わしを助けてくれ。そしてわしを約束通り將軍にしてくれ。

義時。あはゝゝゝ。公曉殿、氣が狂はれたな。右大臣殿を殺した者が、生きてゐられると思はれるか。人々、逆臣を殺せ。

公曉。貴樣はおれをだましたのだな。

義時。自分がだまされたのだ。

公曉。叔父上、今になつてあなたの最後の御言葉の意味がわかりました。(首を拜し下におき)

義時を切らうとする。長尾、雜賀達あらはれる。はげしき切りあひ。公曉長尾雜賀にやられる。憤怒の相)幕。

編輯だより

◇この尨然たる大册でこの廉價、五十錢の特大號は初めてだ。內容は絕對一粒選り、秋の讀書界を瞠目せしめる偉容だ。ごうごうたる百萬大衆の歡呼を思浮べるは喜悅の至です。

◇我が國の社會情勢は愈ゝ益ゝ深刻の度を加へつゝある。本誌ここに、社會經濟時評の名の下に以後連續數回に亘り、刻々の緊要問題を舉げて猪俣津南雄氏の批判を乞ふこととした。「經濟危機の成熟」はその劈頭の文字。

◇本號に於て特に讀者に誇り得る記事は「思想家總覽」と「世界情報」である。前者は本誌獨特の調査、現代日本の指導者を一覽の下に知ることを得る。「情報」は今後每號掲載され、その嶄新なニユースと紹介は「改造」をして世界の縮圖たらしめるであらう。

◇大好評を博して來た「ドレフユス事件」も遂に終りを告げた。大佛次郞氏は更に筆を改めて、近くより興味ある讀物を執筆せらるる筈。

◇中條百合子女史「子供のモスクワ」を寄せらる。情熱と叡智の女史の海外印象記は專ら定評のあるところ。最近歸朝の衣笠貞之助氏の「ソヴエート映畫記」と共に得難き讀物。

◇創作は岸田國士氏(七十枚)、岩藤雪夫氏(七十五枚)の大篇に、武者小路、中本爾氏の力作。加ふるに論壇の麒麟兒大森義太郞氏の文藝時評、大衆文學の寵兒長谷川伸氏の戲曲等、堂々たるオン・パレードだ。

◇古典的日本婦人の最後の典型九條武子女史の誰にも知られてゐない逸話が、生前親交厚かつた柳原燁子氏によつて語られた。武子女史の秘められた一面が如實に躍動してゐる。

◇『日本文學全集』は、九月、「社會文學集」を配本した。收容せる諸著作は、出版當時それぞれ洛陽の紙價を高めたものであるが、近時容易に手に入り難い珍本もある。我が國の社會主義的文學が、如何なる地點に於て發足し、如何なる發展の經過を辿りつゝあつたか、プロレタリア文學の盛なる今日、之を回顧して再吟味するは、興味あると共に極めて意義あることである。

◇『經濟學全集』の九月配本は「財政學」上卷。例に依つて力作揃ひで、既刊「財政學」下卷と共に、財政學の體系は完成全しと稱してよい。

◇ストロングの『ボローヂン脫出記』とヴアン・ダインの『僧正殺人事件』は、果然秋の讀書界に渦卷を起した。

◇マルクスの大著でマルクス主義經濟學の大城廓たる『資本論』(高畠素之譯)は、新進の學徒によつて再募集を促がさるること䔍しいので、今秋之を決行することにした。讀者の膠援を俟つ。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和五年九月十八日　印刷納本
昭和五年十月一日　發行

定價五拾錢(郵稅三錢五厘)

東京市芝區愛宕下町四ノ四〇
編輯兼發行兼印刷人　山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ四〇　改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一一二〇・一一二一・一一二二・一一二三・一一二四

『現代日本文學全集』の特殊卷

社會文學集

（内容）

中江兆民篇

一年有半

酒井雄三郎篇

「クー、デ、ター」及國安　社會問題（一、二、三）　社會黨の運動　五月一日及び總擧同盟罷工　『社會問題』と『近世文明』との關繫に就きて

矢野龍溪篇

新社會

安部磯雄篇

地上の理想國瑞西

幸德秋水篇

社會主義神髓

雜纂

自由黨を祭る文　平凡の巨人　理想なき國民　義務の念　排流行論　婦人問題の解釋　ドレフュー大疑獄とエミール・ゾラ　トルストイ翁の非戰論を評す　自殺論　修身要領を讀む　論文の三要件　翻譯の苦心　文士としての兆民先生　緑雨に就て　人物　世田ヶ谷の襤褸市　東京の木賃宿　新年の歡喜　歌牌の娛樂　夏草　手束　漢詩

堺利彦篇

堺利彦傳

木下尚江篇

火の柱

大杉榮篇

自叙傳

日本脫出記

出づ！堂々六百頁!!

『改造文庫』に不景氣なし!!

改造文庫

百頁・十錢

最新刊

○約百頁を單位として拾錢とし頁數に應じ拾錢、二十錢、三十錢、……以下之に倣ふ。
○書名下の數字1は拾錢、2は二十錢、3は三十錢……送料1は二錢、2は四錢、3は六錢

全譯 金融資本論	ヒルファディング著 林要譯	7
財產進化論	ラファルグ著 荒畑勝三譯	2
マルクスの歷史社會並に國家理論	クノー著 鳥海・森谷・濱島共譯	7
經濟地理概論	プレブス編 菊川忠雄譯	3
社會進化と生物進化	アーサア・リュキス著 荒畑寒村譯	2
近世封建社會の研究	本庄榮治郎著	2
勞働價値說の擁護	ヒルファディング著 麻本三吉譯	2
無政府主義と社會主義	プレカアノフ著 百瀨二郎譯	2
哲學概說—物と我—	桑木嚴翼著	3
エミール(上卷)	ルソウ著 內山賢次譯	4
エミール(下卷)	ルソウ著 內山賢次譯	4
金融資本論	豬俣津南雄著	4
日本開化小史	田口卯吉著	2
日本經濟論	田口卯吉著	1
日本經濟學說の要領 經濟的帝國論	瀧本誠一著	2
日本商業史	横井時冬著	4
日本工業史	横井時冬著	4
經濟學の實際知識	高橋龜吉著	2
リッケルト論文集	リッケルト著	2
財產起原論	レヴィンスキー著 貫島克已譯	1
組織論	レーニン著 鈴木厚譯	3
三民主義	孫中山著 金井寛三譯	3
唯一者とその所有	マックス・スティルネル著 辻潤譯	6
我國近世の農村問題	本庄榮治郎著	3
プレブス經濟學	プレブス・リーグ編 田所輝明譯	3
マルキシズム國家觀	マックス・アドラア著 山本琴譯	5

マルクス主義經濟學	河上肇著	3
現代哲學思潮	桑木嚴翼著	3
嬰兒殺し	山本有三著	3
倫理と唯物史觀	カール・カウツキー著 堺利彥譯	2
マルクス經濟學大綱	ボルハルト著 田中九一譯	2
帝國主義論	ボグソン著 石澤新二譯	5
エルフエルト綱領解說	カウツキー著 三輪壽壯譯	5
奈落の人々	ジャック・ロンドン著 和氣律次郎譯	3
爭鬪	ジョン・ゴルスウォシイ著 和氣律次郎譯	2
洋服簞笥	トーマス・マン著 六笠武生譯	2
シラー詩集	小栗孝則譯	4
イプセン全集(一)	河野養博・永田衛吉・小寺融吉譯	3
イプセン全集(二)	大山廣光・大關柊郎・中村吉藏譯	5
サニン	アルツイバアセフ著 武林無想庵譯	3
少年の悲哀	國木田獨步著	2
横瀨夜雨詩集	横瀨夜雨著	5
一週間	リベヂンスキー著 池谷信三郎譯	2
佛蘭西家庭童話集	ボーモン夫人著 長松英一譯	3
佛蘭西家庭童話集(二)	ボーモン夫人著 長松英一譯	5
愛慾	武者小路實篤著	2
死の舞踏	ストリンドベリイ著 山本有三譯	2
どっこいおいらは生きてゐる	エルンスト・トラー著 瀨木達譯	2
修禪寺物語	岡本綺堂著	5
室生犀星詩集	室生犀星著	6
經濟學概論	ボグダーノフ著 林房雄・木村恭一譯	5
社會意識概論	ボグダーノフ著 林房雄譯	4

東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番

アンナ・ルイズ・ストロング著
淡徳三郎譯

ボローヂン脱出記

（四六判二七七頁 寫眞三十二葉入）

定價壹圓 送料十八錢

武漢政府の顧問ボローヂンがモスクワに引揚げる時、支那奥地より蒙古と前人未踏の地を自動車で踏破した。一行に加つたストロング女史の此の旅行記が、自然他方面の興味を盛る稀有の文獻となつたのは當然だ。支那風土の興味津々たる描寫、民族的特質、文化及風俗の記述は民俗學的冒險的の好讀物であり、支那及び蒙古の經濟的政治的關係の、偏見なき明澄な客觀的叙述は、共産軍活躍し農村ソヴェトの擴がりつゝある今日、絶好の新支那研究資料である。挿入した三十餘枚の寫眞は本文と相俟つて印象を鮮かならしむ。

最新刊

〔内容〕

漢口を去る○馮玉祥の客となつて○鐵路の終點まで○西安への道にて○陝西の山越え○甘肅及び黄河○憧憬の寧夏○ゴビの沙漠の邊りにて○ゴビ沙漠を横斷す○赤色の活佛が戰つてゐる國○白亞の圓○新蒙古の創造者達。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.



東京秀英舍印刷



改造十一月號目次

（新刊）

送料廿七錢

八版

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯

處世哲學

偉大なる哲學者『人間を知れる者』としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを挙げて、**人間處世の妙諦を說き**、人生に於ける**明暗**、**幸不幸**、**安危**、**得失**等の根源を論じたるもの、譯文亦明快を極む。

四六判總布製
定價 **貳圓八十錢**
郵稅十二錢

上卷十九版・下卷十版

慶應大學教授 戶川秋骨譯

エマーソン論文集

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンである。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁句々みな座右の銘とするに足る。譯文亦精確、苟も靈性の向上を志ざすもの、必ず一讀すべき名著である。

四六判總洋布製
定價 △**上卷 參圓** △**下卷 貳圓・五拾錢**
郵稅各十二錢

四版出來

安岡正篤著

東洋倫理概論

現代人の生活不安の根柢となり背景となつてゐるものは深刻な靈魂の飢渴である。此書はこの惱みを救はんが爲めに在來の處世訓式、乃至西洋の飜案的倫理學に慊らず、深く先哲の學に參して得た原理と確信とを細やかに系統を立てゝ論述し人間生涯の大道を明らかにしたもので、東洋人生哲學の寶藏を近代人の爲に開く無二の秘鍵である。

菊判總布函入
紙數三百餘頁
定價 **貳圓四拾錢**
郵稅十二錢

東京本鄉
西片町

玄黃社

電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

農家の慘狀と藏相の斧

一日の勞働賃金がたつた四錢——本夏の繭を廿錢に賣つた一壯年は吐息しつゝ絶望的に語つた。なるほど廿錢のうちから種紙代も拂はなければならぬし、肥料代、税金、地料も拂はなくてはならぬのだ。一食だつて十錢はかかる。それだのにこう云ふ狀態では眞に絶望的になる筈だ。繭の値段、生糸の價格の慘落で疲弊のドン底にある農家に又しても豐年による悲みが重なつて來た。朝鮮、臺灣をこめて一千萬石ゝ增收があるといふ本年の米作。都會のプロレタリアや、俸給生活者には天來の福音だが全國人口の三分の二を占むる農家にとりては豐作が却つて大凶事となり、米價の下落から肥料代も拂へぬ、兒童は廢學させる、納税はできぬ、そして農村は悲しくも將棋倒しに沒落の運命を辿らなくてはならぬやうになつた。そして昨今の米穀取引所は頻々と立會停止となる。この後教員、役場員等の俸給はどうして支拂はるるか、學校はどうして維持されて行くか、思へば寒心にたへざる痛嘆事である。その必然の歸結として肥料會社は倒れやう。否明年以後においては農家で肥料を購買する力のあるものは殆んどなくなつてしまう。そして生産の減退となる。開墾事業に助成金も出せねば、又開墾に從事するものもなくなる。かく想ふとき農家の士氣は銷沈の極に達するだらう。我濱口內閣はこれに對しいかなる對策を準備しつつあるか。なまなかな買上にてはこの難局を拾收することはできまい。特に米價維持のためには出來得る限りの方策を講じてやる必要がある。そして鐵道運賃や、低資の融通及償還延期、又外國輸出にも農家の要望をいれて統制ある働きを示さなくてはならぬ。この困難な秋、海軍省が五億萬圓以上に達する補充大計畫を掲げて大藏當局と鎬を削つておるのは非常識の行動といはねばならぬ。そして濱口內閣が中外に聲明せし陸軍々制改革も宇垣陸相病氣の故を以つて改革が遷延し、來年度の豫算には師團減少による二千萬圓內外の削減豫測が鐚一文も計上さるるに至らざるべしと聞く。一體誰のための軍備だ。我々の陸軍、我々の海軍でなくてはならぬ。我國の海陸軍でなければならぬ筈だ。七千萬大衆のための國防であるべきではないか。これを思ふて井上藏相は斷乎國民のための大きな斧を振り上ぐべきだ。井上君その人は個人としてはたいして力が強くないかも知れぬが、しかし七千萬合力の金剛力を振ふべきだ。學校にも出されぬ、食ふべき何ものもない人々が數百萬人もある。黙々孜々として働いても離々分散して行く農家現狀の慘を見て藏相が大きな斧の振へぬ理由がない。



マキアヴエリズムとレーニニズム

――思想問題對策に就いて――

蠟山政道

一

この夏の休暇に、各地に於いて、思想問題に關して憂心に滿てる多くの人々に接した。殊に、小學教育に當れる人々が、この問題に對して眞劍な態度を以て考へてゐるのに逢つた。それらの人々は、私等の如き、中央に居る者には、何か特別の意見でもあるかと思つて、わざわざ招かれるのである。招かれた私は何物も寄與し得なかつたが、私自身は非常に多くのものを學んだ。

就中、日本の學校教育に、好かれ惡かれ從來存して來た指導精神が、漸く頽廢し始めたのではないか、と思はせる節が多かつた點である。さうして、それに代はるべき新たなる原理を求めるの心が、偶々思想問題に關聯して現はれ始めたのではないか、と思はれる。

思想問題なるものは既に古くからある。歐洲戰亂から日本に輸入された社會思想に關する諸問題を指すなら、それは既に十數年からある。しかし、それは新らしい思想に關する問題といふ意味で、言はば知らざるものを知りたいと云ふ好奇の念か、又は知つて究めたいと云ふ究理の心に發するものかであつた。何れにしても、そこには興味・關心といふことが本位であつたやうに思はれる。その態度も亦個人の趣味に傾いてゐた。

それ故、學校敎育は、社會思想の變化にも拘らず、從來の指導精神の下に、その指導精神への反省もなく、大體技術的、專門的部分の研究を重心として進んで來たと言つて差支ない。思想が變つたと云つても、それは極めて表面的な、皮層的なものであつた。

ところが、時は變化する。既に、思想問題が問題とされて來たこの十數年の間に、問題の對象たる思想自體に非常な變化が生じて來た。一切の思想が問題なのではない、或る特定の思想のみが問題であるといふことになつた。又その思想の解說とか講義とかが問題なのではない。その思想をどうかしなければならぬといふ問題なのである。曾つての如く、興味ある者丈けが知つて居ればよいと云ふ丈けでなく、敎育そのものに關與する限り、制度の問題として考究しなければならなくなつた。

文部當局が思想善導といふ形式で考究してゐるのは、飽くま父長主義（パターナリズム）の色彩を濃くしてゐるが、實際は自己の制度そのものが問題になつたのである。又、公民敎育と謂ひ、政治敎育と叫ばれるのは、一面に於いて、從來の指導精神への變革を要求せずには濟まぬ制度改革の要望である。

この變化を齎らしたものは、マルキシズム殊にレーニニズムの影響であることは云ふまでもない。今日の思想問題の所在は、この持異性ある思想を中心としたものである。その問題の內容は、この思想の何たるかを知ることでなくて、寧ろそれに對抗する自己の思想を造り出さうとする點にあるやうに見える。

去月二十二日文相官邸で開かれた「學生思想問題協議會」に於ける諸意見として、新聞紙の傳ふる所に依れば、次ぎのやうな諸項目がある。

一　現在の大學敎職員は思想問題に無關心であるから、學生生徒の思想善導に當るには今少し思想問題についての研究指導力の養成が必要だ。

一　教職員の地位にあるものが思想問題の研究をなす必要上適切な施設をして欲しい。

一　マルキシズムを研究してゐる學生に對してはこれが指導の地位にある教職員には更にマルキシズムの理論的研究とその發表をうながす必要がある。

一　在來の唯物論的偏重が今日の弊を生んだのだから今少し高等學校における基礎學として哲學、倫理、歴史等を徹底的に教授する必要がある。又社會に對する批判力を涵養することが必要である。

一　最も根本的な對策は要するにマルクス主義體系に對抗し得るだけの構成をもつ思想體系の樹立である。

一　在來の學校には理想が缺けてゐる。理想の缺除は國民一般の無理想に所以するから國民としての信念を植ゑつけることが肝要である。

これらの諸項目には、それ〴〵の意見者の説明を聽かなければよく了解され得ぬ節もあるが、その言はんと欲してゐる所は理解できる。それらの諸意見の特色は、それを考慮し實行するのには一々制度に觸れなければならぬ點である。さうして、その新たなる制度の背後にマルキシズムに代はるべき思想が積極的に樹立され、それによつて制度を動かさねばならぬことが主張されてゐる。

かうした意見が將來如何に發展するかは暫く別問題として、單なる個人の、思ひ〴〵の關心に過ぎなかつた我國の思想問題が、かくの如き教育制度の改革指針の樹立にまで發展され、促進されて來たことは、甚だ注目に値する。それは、確かにマルクシズムやレーニニズムの直接に豫期しなかつた效果であると言はねばならぬ。

二

マルキシズム殊にレーニニズムの思想と實踐とは、單に教育制度のみの問題でない。それは單に思想問題としてのみ取扱ふべきものではない。思想問題として表現するのは甚だ便利であるが、思想の意義のとりやうによつては狹く解せられる危險がある。私は、寧ろこれを一箇の世相風尚の問題であり、人々の志向態度の問題であると稍廣く解したい。さうして、思想の問題はその純化され、理論化された表現に過ぎない。

換言すれば、この特異な思想體系と尖鋭した實踐理論と雖も、その基礎として、それを培ふ漠然たる廣汎なる世相人心と時代風尚の沃土を有してゐないならば、それ程大きい問題とはならない。又それの影響もこれ程大きいものとはならぬ。從つ

て、從來の制度と對立するには至らなかつたであらう。

思想問題の根柢は單に經濟・社會問題ではない。それは經濟社會問題から始まつたでもあらう。しかし、我國最近の思想的變遷の重心が如實に示す如く、その尖端的思想はあらゆる人間心理と行動に觸れてゐる。哲學と文學との方面に重心が置かれる時もあらう。しかし、それも一時である。技術と藝術との方面にも現はれるであらう。それも亦、所詮一つの現はれに過ぎない。つまり、それは結局人間生活とその活動の所産との綜合的表現である文明の問題なのである。

この思想に體系があると云ふのは、つまりそれが文明問題まで包含してゐる、といふ意味である。單に社會科學の體系だけであるなら、それほどの問題でない。それが、人間生活とその環境に對する包括的理論であり、政策であるが故に魅力がある。特異の形式に於いて、全體を把握する思想であるが故に、それが一部に適用された時に力强いのである。或マルキシストが個人として或る行爲を犯したとする。その個人とその行爲丈けを取り出して批判する時に、それを批議することは極めて容易である。例へば虛僞を語るといふやうなことは何人から見ても明かに批難に値する行爲である。ところが、その明白な批難が、彼自身に對しては何等の說得力を持たない場合がある。それは、その虛僞を語ると云ふことが、單なる一手段であつて、その背後に包藏してゐる目的から正當視される、と云ふ論理を有してゐる爲めである。

その目的の實現を論證する彼の思想は、或る特定の行爲だけを切り離して、既存の法律尺度に依り、又道德の準繩に從ひ、又宗敎の力によつて裁かうとする者に向つて、逆にそれらの尺度自體を包括的に批判する立場を與へてゐる。マルキストが努めて原理的な立場を求めるのは、かやうな武器を得ん爲めである。又、この武器を得た者と雖も、その適用に就いて、個々の場合に誤る場合がある。それは、マルキシストも認めない譯には行かない。しかし、それを認めしむる者は、彼れらの同志のみであつて、立場を異にする者ではない。かくして、彼等には仲間の自己批判のみが意義あることゝされ、他を顧みない。

かくの如き思想傾向と實際行動とが、或る程度に於いて社會風尙として、又時代志向として廣く浸透し來ると云ふことは、極めて重大な現象である。それは獨り學校敎育のみの問題でな

いことは勿論、國家全體の問題である。さうして、やがて現代文明そのもの、運命に關聯して來る。從つて、その對策の意義は極めて重大でなければならぬ。いま、漸く、その重大性と困難なる理由が明かにされ始めた。

かうした現象は、人類の歷史に於いても、さうザラにあるものでない。少くとも、最近一世紀の間には見當らない。少くとも、それは世紀を距て、發生する現象であつて、文明そのものの變動期に隨伴する現象なのである。從つて、その對策も——それが眞の對策たる限り——そのスケールも世界歷史の進行又は創造に依存してゐると言はなければならぬ。

その意味で、私はここに五世紀以前のルネッサンス文明の末期に於いて、一人の思想家ニコロ・マキアヴェリの名によつて知られてゐるイズムを拉し來つて、その思想の特異性を明かにし、それが如何に人心を支配し、結局如何に克服されたかを語らうと思ふ。マキアヴェリズムの演じたスケールよりも、更らに大なるものが現代のレーニニズムである。レーニニズムの克服は恐らくマキアヴェリズムの場合よりも一層大事業であらうと思ふ。

しかし、マキアヴェリズムに對する批判と克服とが結局如何にして行はれたかを見るは、數世紀を經て、現はれた一層大規模にして包括的なるレーニニズムへの對策を考ふる者への一大教訓となるであらう。

三

マキアヴェリズムの特異性の第一は倫理と政治（又は法律）との岐別にありとされてゐる。倫理との混同を免れなかつた從來の政治論が彼に於いて始めて區別された。かくて、リアリステイツクな科學としての政治學が彼れに於いて樹立し始められた。總ての革命論が、さうであるやうに、彼に於いてもリアリズムが高唱されてゐる。

政治論は當然に二個の問題を含まねばならぬ。即ち科學である一面と倫理である他面とを含まねばならぬ。しかるに、その一方のみを意識的に取り上げ、他を表面に現はさない所に、この種の思想の特異性が存する。なぜなら、その思想家個人は價値の問題を意識しないのではない。彼自身個人的には倫理と道德とを無視してゐない。ただ政治の現實と倫理とを同列に置か

ない、別々のものとして見る。從つて多くの場合政治は倫理道德の拘束を無視して差支ないと云ふ立場に立つ。かくの如く、政治に於いて倫理的考察を排するマキアヴェリズムは、目的の爲めには手段を擇ばず、目的に比すれば手段の問題は倫理的批評の外に立つ、と云ふ主張である、とされるに至つた。

　マキアヴェリが、暴力、慘酷、詐術等を政治的に利用することを是認した場合に云つた言葉は翫味に値する。彼が『君主論』第八章に於いて、シラキユース王アガトクレスが苛酷な手段を以て低い平民の地位から王國を征服し、長い間外敵からも內政からも、その政權を維持し得た理由を說いた時に、『それは一にその苛酷な手段をうまく用ゐるかまづく用ひたかに依る』（"Se del male e lecto dire bene"）と言つた。

　この政治目的の爲めに用ゐられる手段は、倫理的評價の外に立つもので、その手段の評價は、一に政治目的の實現に對する効果からのみ批判されてゐる。その際倫理的批判は政治に對して何等獨立の立場を有しない、極めて第二次的なものと見做されてゐる。然らば何故に政治は倫理を無視し得る權能を有するのであらうか。

　マキアヴェリ自身の思想の研究に就いて、後世の學者の明かにした一つのことは、當時の道德や宗教が無力で、實際に人の行動の規範たる機能を失つてゐたことである。だから、彼は、倫理や宗教の影響から獨立にその政治哲學を構成したのである、と。これは、極めて皮相な觀察である。それでは、倫理道德の消極的な無視と云ふこととの說明にはなるが、積極的に政治が倫理や道德や宗教の無視を敢てすべし、と云ふマキシムの說明にはならない。

　この點が後世の反マキアヴェリ思想に於いて問題とされた所である。即ちマキアヴェリ個人が不道德な人間であつたのではないか、と云ふやうな誤れる疑惑まで持ち出されて、マキアヴェリ排撃の文書と云ふものは山積したのである。この點に關する批評を二つのカテゴリーに分けると、それは最初の時期に現はれた批評に見られる。一つは既存の宗教、道德及び法律が政治の遂行に規範とならねばならぬ、とするジャンティレの批評（一五七八年）と政治は自ら新たな規範に從はねばならぬ、とするジャン・ボーダンの同年の批評とがある。マキアヴェリの「君主論」に描かれたやうな專制君主が、歐洲全體の一般的狀

治制度となりかけた當時に於いて、發表されたこの二個の批評は、後年になつても絶ゆることなきマキアヴェリ反對論の二個の雛型を示すものである。而してボーダンの如き思想が發展して、後世の立憲政治思想となつて終りを告げたのである。この終りには、次ぎの新たなるマキアヴェリズムが續いてゐた。

レーニニズムの場合に於いても、政治に於ける倫理や道德や宗教の問題は、確かに外形的には正にマキアヴェリズムである。この新たなるマキアヴェリズムへの反對も、既に種々なる方面からなされてゐるが、この倫理や道德や法律との關係も議論の一つである。この點に關し、曾つて河合教授は『マルクスより出でてマルクスを克服するもの』なる論文に於いて、かういふ批評をしたことがある。曰く『筆者はマルクス主義の現代學生に於ける功績をみる毎に、ゲーテの「ファウスト」中のメフイストの言を想起する。メフイストは汝の名は何なりやと問はれて、余が名か、余の名は惡……彼の惡と稱して屢々善をなす彼の惡であると答へた。此の一語は含蓄深き言ではあるまいか。善なるものは善の名に於いてなさるゝと共に、ある場合に却て惡の名に於てなさるゝことがある。惡の名に囚はれて善のなさるゝを看過するものは、洞察の乏しいものである』と。『しかし』、教授は續いて云ふ『惡の名に於てするに非ざれば、善がなされずとすれば、それは畸形であり、變態である。善の名に於て善がなさるゝと云ふその善なるものに、何等かの欠陥がある場合にのみ、此の逆説は許されるのである。』と。

マルキシズムの包藏するパラドツクスは、他に多くの人によつて剔抉されてゐる。この論理としての逆説が果して許されるや否やは、一にかかつて、今日の實際社會に行はるゝ「善」の內容に存することになる。マルクス主義の逆説を許さぬ爲めには、現實の善を依然として善の名に於いて改良して行くことが可能なることを實證しなければならぬ。この實證を爲し得るならば、現存秩序たる資本主義社會の否定としてのマルキシズム以外に立場の存在する根據があり得る。

しかるに、レーニニズムにとつては、この種類の立場を認めない論據として、資本主義の善は惡の名においてのみ行はれねばならぬと主張する。この點がマキアヴェリズムの上に百尺竿頭一歩を進めたところである。この場合惡とは政治的手段である。レーニンは云ふ『若し社會主義の創造のためには一定の文

化的水準が必要とされるとすれば、何故に吾々はまづこの一定の水準のために前提を革命的××によつて獲得することから始め、しかる後、勞働者＝農民の權力とソヴエト秩序との基礎の上に、他の諸國民に追ひつくために前進してはならないのか？』と。デボーリンは、これを說明して曰く、『社會主義は文化革命なくしては、缺くべからざる『文化の水準』なくしては實現されない、といふのは正しい。しかし、文化的變革が常に政治的並びに社會的變革に先行せねばならぬ、といふのは決して正しくない。政治的および社會的變革のみが一定の歷史的諸條件の下に於いてのみ文化的變革のための前提を作り出すこと……その獲得の道具となり得るといふことを忘れてはならぬ』（『レーニンの唯物論と辨證法』（直井武夫譯、二一五頁）と。このレーニン、デボーリンの所論は、恐らく諸國のエピゴーネンの金科玉條とする所であらうが、要旨は政治的手段によつて一般の文化的水準を擧げることの主張である。その主張の反面には、一般の文化的水準が或る特定の具體的場合に、政治的手段によらなければ上昇せしめ得ないものと云ふ認定がある。この認定の正當なる限りに於いて、政治が獨特の過程に於いて、現存の法律、倫理、道德の如きもの丶拘束を無視し得る、と云ふ解釋が横つてゐる。

かやうな解釋を或は自己の主觀的經驗に依り、或は客觀的な論證に依つて根據づけてゐるのが、レーニストのイデオロギーである。從つて我國に於ける、彼等の思想や主張に對する批判が勉むべきは、その經驗と論證への批判でなければならぬ。現代に於けるマキアヴエリズムは、曾つての粗樸なるマキアヴエリズムと異なり、政治と一般文化との關係をかくの如く、相當複雜に理解してゐる。從つて、その對策・批判も自ら粗樸なるを許されぬ道理である。

四

マキアヴエリズムに於ける第二の特異性は一種の運命的歷史觀である。彼れの思惟方法が歷史的であることは、既に述べたリアリスティックな點と共に注意されねばならぬ。彼は主として希臘羅馬の史實を參照して、當時の伊太利の政情を分析した。さうして彼れの個人的經驗を、歷史の舞臺から投げられる光に照らして、一定の原理的な形式に表現した。この點も、多

くの革命論が史實にその原理的支持を見出さうと努めるのに相似てゐる。

　しかし、彼れの歴史觀は、社會の運動法則としては、嚴密な意味に於ける法則の發見ではなくして、一種の運命論の過重に終つてゐる。この運命論は、彼が歴史的現象の因果關係を嚴密に明かにしなかつたことに歸因してゐると言はれてゐる。從つて、後世の學者は、彼れの歴史的方法は、彼れが現實の尖い觀察者であり、鋭い分析家であつたことから規定されたものである、としてゐる。即ち彼れの結論は必ずしも歴史から求められたものではなく、寧ろ現實自體から得られたのであるが、たゞ歴史の光に投影されて一層根據づけられたものである。

　さうして注意すべきことは、この運命論が反つて個人の意識的役割を重要視することになつた理論的連關である。歴史的方法は、歴史の流れに於ける個人を見るものであり、社會の分子としての個人を考へるものであるから、個人の役割を過少視する傾向も生じ得る。しかし、彼れの歴史的方法の考察からは、個人の意識的行動が重大となつて居る。これは如何に說かるべきであらうか。

　これは、歴史的段階に於ける、或る特殊の時期に於いては即ち社會の混亂時に於ては、冒險的個人の成功が可能なる史實によつて說明される。即ち彼れの運命的歴史觀は、かゝる特定の時期に於ける原理的な法則を提供してゐるのである。然らざる時期に於ける政治史は、社會的條件や傳統等の力や偶的宿命の事件によつて充されてゐる。しかし、歴史の或る段階に於いては個人の運命は結局冒險によつて——それがどんなに計畫的豫料によつて行はれようとも——決定される。この史實を一般的に法則化したのが、マキアヴエリの歴史哲學なのである。

　マイネツケの『國家術數論』(Die Idel des Staatsräson)に依れば、マキアヴエリズムを以て、一七八九年からナポレオン帝政の沒落に至る佛蘭西革命の發展を說明し、若しマキアヴエリをして之を見さしめたならば大に祝つたであらうやうな公式を以て說いたものもある。(Nizeres, De Machiavel et de l'influence de sa doctrine sur les op inions, les moeurs et la politique de la France pendant la Revolution, 1816)

　又、最近のファシズム伊太利に於いては、人々はマキアヴエリに於てファシスト革命の先驅者を見出し、或者にして改めて

マキアヴエリの教說を研究してゐる者が多い。かやうな事態は、正にマキアヴエリの教說に於ける歷史主義が、革命動亂期に於ける公式的理論たることを證する數多くの事例の一、二である。

この點から、我々がレーニニズムの歷史哲學である所の唯物辯證法に對して、一縷このマキアヴエリズム的歷史主義に通ずる或物を認めたとしても決して不當ではあるまい。勿論唯物辯證法の結構は、マキアヴエリの歷史的方法と比較にもならぬ程、考へ拔かれた壯大なものであることは云ふまでもない。しかし、この社會の運動理論に對して、普通の十九世紀的社會の進化理論と撰を異にする或物が認められるのは、一にそれが混亂期又は轉換期を最もよく說明する思想的道具たる點に在る。殊にレーニニズムが、マルクス・エンゲルスの手より、この武器を受け繼いで、一向にこの一縷を磨き上げた點は、正にその特異性である。

屢々紹介され、言ひ陳された點であるが、デボーリンは『革命的辯證法論者としてのレーニン』の中で云ふ。曰く『發展については二つの概念がある、とレーニンは言つてゐる。その一つの進化概念は發展を增加および減少として觀察する。この概念は生命のない、死んだ、乾からびたものである。第二の概念は、發展の基礎を對立物の統一と、統一の分裂とに見る。この概念のみがすべての存在の自己運動を理解する鍵である。』と。これは、正に大膽なるアドヴエンチユーアへの好箇の理論的基礎を與へるものでなくてなんであらう。

この、レーニニズムの「飛躍的進化」、「漸進性の中斷」、「對立物への轉化」と云ふ歷史理論は、マキアヴエリズムの中世的運命論と比較するならば、その哲學的構想に於いて天地の相違がある。が、その思想の作用から見るときは、不思議にもその軌を一にしてゐる。哲學も歷史論も、その主張者の自敍傳たる反面を有する、と云ふ言葉の眞理を想はざるを得ない。」

五

マキアヴエリズムの第三の特異性は、理論鬪爭の價値と政治術策の創造性とを主張した點である。これは、既に述べた二つの特異性の理論的構想の實踐的側面たるに過ぎないが、それ自身吟味に値する問題を包藏してゐる。

一般に世相風尙が變兆を示し、善惡の評價が衰へ、人々は道義の念を重んぜざるやうになる時は、理論が鬪爭的形態をとるやうになる。これは甚だ見易い事理である。ただ、その機會を如何に用ゐるか、によつてこの理論鬪爭の價値が定まる。その價値を意識し、その機會を把握する仕方のみが、その主張に特異性を與へる。マキアヴエリの「君主論」に於いて特色の存する點は、彼れが一般世間の道義の標準を皮肉に無視した點に在るよりは、寧ろその政治上の論爭をして效果あらしめる必須條件を鮮かに描いた點である。

レーニニズムの流行以來、我國に洪水の如く氾濫されたブルジョア機構、制度及び人物の暴露文書やブルジョア科學、社會民主主義者の論議に對する鬪爭論文の效果は、決してそれらが眞理を闡明した點にあるのではない。それらが齎らした效果は、別の方面に存する。

一般に、純心なる靑年や虐げられたる地位に在る勞働者や中立的地位にある中產階級には、粗樸ながら又漠然たる正義心がある。この正義心は、これらの文書や議論によつて始めはその正義心を激しく燃され、昂揚される。が、やがて、さうした論議に慣れて來ると、その最初の不平、苦惱を除去し、匡正すべき努力に於いて、彼等の攻擊し、非難したと同一の不正義を犯して敢て闘せざるに至る。かうした革命文書の理論鬪爭の心理的效果の一つがここに在る。かくの如き國民が遂に高き道義心に動かざるに至るのはこれが爲めである。マクドナルドが、社會主義を民衆に宣傳するに當り、憎惡と敵愾心を喚起することの非を唱へたのは、彼れの理論鬪爭に對する見解がレーニニズムと根本的に異る點である。

理論鬪爭をマキアヴエリ流に應用することの他の結果は、その鬪爭の目的たる「眞理」の作用に現はれる。かくの如き仕方に於いて宣布し、把握せしめられた所の眞理は、その眞理が民衆を解放に導く光明たるよりは、未だその眞理を把握せざる又は欲せざる親しき人々をも苦惱せしめて尙且つその人々の爲めにその眞理を行つてゐるのである、と云ふ自覺を持たしめる。これは所謂今日の階級的自覺に立てりと稱する少數のインテリゲンチヤとプロレタリアの間に見るまざまざしき現實である。それは正に「聖なる狂氣」と言はねばならぬ。

レーニニズムの社會科學とその理論に就いて、その包有する

「眞理」の何たるか、と云ふことは一つのことである。と同時に、その眞理が如何にして大衆のものとなつたかは全く別のことである。マルキシズムとレーニニズムの眞理はある程度まで今日の社會に於いては共有財産である。しかも、その「眞理性」は右の如き條件の下に把握され、又されねばならぬものとするならば、そは飽くまでマルキシズム又はレーニニズムが他と區別さるべき特異性である。

レーニニズムに對する思想對策にして誤らざらんと欲するならば、この點を區別する必要がある。我々が斷乎として反對せねばならぬのは、必ずしもその眞理性に存しない。寧ろ、その多くはかくの如き特異性を伴つた「眞理性」たる點に存する。世のいはゆる對策中この「眞理性」そのものとこの「特異性」とを區別せず、それを混同してゐるものが存しないだらうか。

政治技術の創造性に就いても同樣なことが言へる。マキアヴエリは國家の前に支配あり、との眞理を把握した政治理論家の最初の一人である。國家の外延を問題とするよりも、その內包の中核に權力の存することを明確にした社會學的考察の先驅者である。而して、その支配と權力の行使を技術的に考究した點に、他の何れの理論家よりも先んじてゐた。彼は、略同時代の宗教改革家サボナローラの武力を具へざる革命を笑ひ、彼自身新式の軍隊組織を工夫し、「戰爭論」を書いた。勿論彼れが實踐的成績は寧ろ失敗であつたが、彼れの議論は、革命的戰略家の先蹤となつて、後代に大きい影響を與へた。

權力的技術を重要視することは、確かに、一面の眞理を把握したものである。アクトンが、彼を評して『現代に於ける或る生ける動力を、最も早く意識し明白に論唱した一人である』と言つたのは當つてゐる。しかし、權力的技術は、雙刄の武器である。それによつて自己を傷つけざらんとすれば、常に敵を切ることに努めなければならぬ。即ち敵が自己に向つて行ひ來ることを難じ乍ら、同じことを敵に向つて行はなければならぬ。

惟ふに、權力が創造的な作用を有することを說くことは、權力に依つて生み出される支配と統治の質量の向上を說くことである。而して、この質量を生み出す爲めに敵の權力を奪はねばならぬと說くことによつて現在の犧牲をジヤスティファイしようとする。だから、本來は權力の爲めの權力といふ思想を否定

しながら、換言すれば目的の實現を企圖しながら、遂に手段の爲めの手段と化す危險がある。それは權力を保持する道義上の根據よりも實力を重んずる結果である。

ムツソリニーは「伊太利人は自由を求めたることなし、單にパンを與ふればよい」と豪語して彼れの獨裁を辯護した。レーニンがシベリア流謫中に、農民の土地を求むる飢餓の狀を見て、慧眼にも××××を革命的權力の維持と結び付ける案策を描いたと言はれるも、權力技術の創造性を理解した好個の例證である。その創造性の發揮の爲めに行はれる手段は如何なる犧牲が伴はれても肯定されることになる。さうして權力は權力の爲め意義づけられる危險が生れて居るのである。

六

右の如き三個の特異性を有する古きマキアヴエリズムとその現代に於ける新らしきレーニニズムとの類似の比較は、兩者の間に介在する數世紀の距たりを無視して、後者を前者の再現なりと單純に斷言する譯には行かない。しかも、兩者の間には蔽ひ難き類似點がある。この類似點を分析し、究明することは、世界史の研究として興味あるばかりでなく、現實の思想問題對策として有益である。

なぜなら、古きマキアヴエリズムすら、それの眞實の意味と含蓄とを理解する時、それに答ふる對案は決して單純容易なるを得ないからである。況んやレーニニズムをや。しかし乍ら、歷史は既に古きマキアヴエリズムに對して、事實の上でその答解を與へた。十九世紀に於けるデモクラシーの勝利がそれである。それは如何にして行はれたか。

第一に、マキアヴエリズムもそれ自身の主張の中に、後代の歷史によつてその誤謬が存することが明かにされた。フロレンスに於ける、武力なきサボナローラの宗教改革は失敗したが、その次代に於けるカルヴインはゼネバに於いて成功した。これ、反亂の歷史論と哲學說とは自らその條件によつて限定されるといふ所以である。ナポレオンとビスマークの歷史も亦、或る意味に於いてマキアヴエリズムの眞理を語るが、他の反面に於いてはそれを裏切つてゐる。

ボルシエヴイキー革命とその後の推移に於いて見るも、僅か十數年の史實ではあるが、レーニニズムの外交政策は明かに失

敵である。ワルソウ、ベルリン、北京、ロンドン、ジエネバと考へて見るならば、ロシア外交は明かにレーニニズムの戰略戰術によつて指導されたとしても、そこには幾多の違算と過誤に充ちてゐる。その內政方面は外交方面に比して成功してゐると言はれてゐるが、その五ケ年計畫にしても、今後の成績に俟たねばならぬ。プロレタリア解放の理論と戰術として、之を措いて他に何物もないと感ぜしむる程の成績では斷じてない。少くとも、「將來レーニニズムに依らざる社會主義實現が豫想できぬ、と云ふ斷定は毫も根據が無い。

第二は、暴力と詐術との意義を認め、目的の前には手段の何たるかは問ふ餘地なし、とするマキアヴエリズムは反面の眞理でしかないことが證明される。十七、八、九三世紀を通じて、その手段の性質によつてその目的の大義が傷つけられた例證は少くない。ジエスイット教團の目的と貢獻とは結局明かにその手段の爲めに傷つけられた。資本主義國家の帝國主義が未開地人民の物質的幸福を齎らし乍ら、遂に人民の信頼を博し得ない所以のものは、その手段にある。そこに道義の薄弱なるものがある爲めである。

されば社會主義の實現の機會として、資本主義の行詰りを說き、帝國主義戰爭に依る崩壞を說くはよい。然も、それをその×××遂行の機會の到來と關聯せしめて說く所にマキアヴエリズムが存する。社會主義が資本主義にとつて代るべきより高き道德的意義あることを人々に納得せしむることに依らずして、敵の「危機」を見て、その「崩壞」を狙つて、之を倒さんとする手段は、明かにその目的の何たるかを傷つけるものである。斯くの如き哲學と戰術とに依らずして、社會主義の實現が早晩可能となることを將來の歷史家は語るであらう。

第三に、マキアヴエリズムの弱點を示した最も有力な事實は英國に於ける近世のデモクラシーが、小さき人類の集團に於ける自由なる言論討議の形態より發したことである。各人の意思の表現とその承認とを基礎とした宗教的社會の自治の形式がやがて議會制度として國家統治の形式となつたことである。

自治は各人の統治能力と責任心との涵養に缺くべからざる要素である。現代の高度資本主義が、如何にこの自治の精神を蝕み、國家をして資本家支配のカラクリたらしめようとも、社會主義は敵の武器をとつて直ちに敵に擬してはならない。なぜな

ら、かくすることによつて味方の自治能力を衰へしむるからである。今日の如き社會情勢に於いて、强大なる支配の權力を組織されたる少數者たる政黨に集中し、その目的の爲めに思ふ存分揮はんとするが如きは、一見誘惑的である。しかし、そは遂にマキアヴエリズムでしかない。

立憲主義又は議會主義の旗を蹂躙して「プロレタリアの獨裁」なる旗の下に立つことは、人民大衆の自治能力の伸張に資する所以でない。それが、國民教育の發達と普通選擧の下に旣に多少なりとも自治能力を發揮し來れる我が國民の赴くべき道に非ることは明白である。ただ、今日の我國の場合の如く權力への道が、未だハツキリしてゐない場合、焦燥のインテリとプロレタリアとにとつてはレーニニズムは迎へられるであらう。しかも、それが總ての大衆にとつての利益と厚生への道でないことは、この一文の趣旨の力强く主張せんとする所である。

農業恐慌の性質、行方。農業合理化の階級性

八木澤善次

一、はしがき

『農業問題』の著者カウツキイは『一般的には、恐慌は資本主義の意味に於ける現存所有關係の變革を齎らすに過ぎない』と言つてゐる（二七四頁）。農業恐慌問題を取扱はんとするに當り先づ想ひ出されるのは此の言葉だ。

私はこゝには農業恐慌問題一般に就いてゞはなく、日本の今現に襲ひつゝある農業恐慌に就いて考察して見たいと思ふが、勿論限られた紙數の範圍内に於いてゞある故、其の現次の日本農業恐慌に就いても主として之れが農民財産（農地）と農業生産とに及す影響を中心として若干の考察を加へる以上に出ないであらう。

斯く範圍を限局して農業恐慌問題を考ふる時必然的に頭に浮んで來るのは、今次の農業恐慌が如何なる性質のものであり、それは其の結果として農業生産の破壊を導き來たすか否か？　それともたゞ、カウツキイの、そしてマルキシズムの言つてゐるが如く、農業財産――現存所有關係の變革を齎らすに過ぎないだけか？　といふ問題である。

二、現時の農業恐慌の性質

我々は先づ第一に今次の農業恐慌が如何なる性質のものであり、如何なる原因によつてゐるかを吟味するの要がある。若しもこの吟味探究を怠るが如きことあらむか、遂に今次の農業恐慌の實相を知らずにしまうであらう。

我々は今次の農業恐慌、といふよりは資本家的生産制の下に於いて現はれる農業恐慌は殆んど例外なしに商品生産としての

農業生産の危機、換言すれば農産物の市場價格が急低落して、生産費を到底償ひ得さうにもないといふことに出發するものであつて、其の限りに於いてそれは先づ商品恐慌の形態を取つて現れて來るものであるを今更事新しく說く要がない。從つてそれは自足的封建時代に於けるが如く農作物の凶作即ち饑饉の形態をとつて現れるものではなく、之れとは反對に農産物の供給過多、從つて農産物市價の暴落による農業所得の大減退、大不足を中心として起つて來る農家經濟の破局的現象である。

今現に我國を襲ひつゝある農業恐慌に就いて一瞥を加へるならば、其の原因は、また其の連鎖關係は、しばらく別問題として、それは先づ世界大戰後に始まり、年を逐うて漸次深刻となり、金輸出解禁によつて急速に激化した農産物價格の異常なる低落。從つて農家所得の減退。農家負債——地代即ち小作料、借金の元利、公租等の辨濟不能。農村金融の逼塞。農業財産——農地の價格低落。等、等、が一聯の連鎖關係となつて現れて來てゐる。——それはカウツキイが夙に道破せる如く、土地私有制と資本家的商品生産とが農業に課したる重荷を消費者大衆に轉嫁することが不可能となつて、農業それ自身が『自ら是れ等(これらの重荷)を負うて行かなければならない』(農業問題二百三十九頁)といふことを意味してゐるものであるが。しかも後來說くであらう如く、農家が既に負へる借金とか、また負擔せる租税とか子弟の教育費とかいふが如き重荷は殆んど全く減退せず、收入又は所得のみが著しく減少せるに過ぎない故、是等の重荷の重壓力は一層の强化をして農家に迫つて來る結果とならざるを得ないから、それは將に個人的、私的生産を以て其の特質としてゐる農家經濟の破局的現象であると云はざるを得ない。

然らば斯くの如き農家經濟の破局現象とも看做すべき農業恐慌は如何なる原因によつて生じて來てゐるのであらうか?すくなくも現に我國を襲ひつゝある農業恐慌に關する限りに於いて、それは他の國々とは無關係に、即ち國際的農業經濟關係から獨立して別個に我國獨自の關係からして生じて來てゐるものであらうか?

之れに答ふるがためには我々は我國農業の國際性如何を探究すると同時に今次の我國農業恐慌の過程に就いてすこしく過去に遡つて考察することを必要とする。

我國の農業は周知の如く、また次表によつて數字的に明白に示さるゝが如く、米作を以つて中心として來てゐる。而して米は食糧品として小麥其他の麥類程には國際的性質を有してゐない。殆んど東洋に限られてゐると言つてもよい程であるのにかてゝ加へて、我國の米は其の市場を全然國内にのみ求め、其の限りに於いて全然國際性を持たぬと云つて過言でない。從つてそれだけ國内的事情の如何によつて之れが市價は變動をする場合が多く、市場が狹隘なるだけそれだけ變動の度數も亦頻繁であり、其の率も烈しいと言はざるを得ない。

價格別日本農産品表（農林省調査）

品目	昭和二年（千圓）	昭和二年（%）	同三年（千圓）	同三年（%）
米	一、七六四、三三七	五一、九一	一、六三三、〇〇九	四八、九三
繭	四九六、九二三	一四、六三	五五一、六七九	一六、五三
麥	二七五、一二九	八、〇九	二七〇、七〇五	八、一一
食用農産物	二二七、七一四	六、七七	二二五、三一七	六、七五
蔬菜及花卉	二四八、九三八	七、三三	二五六、一一〇	七、六七
果實	七七、八八三	二、三〇	八一、〇八四	二、四二
工藝農産物	一一一、一六七	三、二六	一一七、一六七	三、五二
茶	三一、一二四	〇、九二	三二、六三三	〇、九八
林野産物	一三八、〇五〇	三、八一	一三八、四六九	四、一五
綠肥用作物	二七、九九七	〇、九一	三一、〇九三	〇、九四
合計	三、三九九、二七二	九九、九三	三、三三七、二七六	一〇〇、〇〇

然しながら價格の點から見て米に次いで重要性を有する繭は言を俟つまでもなく生糸の原料であり、生糸は我國輸出品の大宗であつて、大正十五年より昭和三年に至る三ケ年間の平均輸出額七億九千一百五十三萬圓にのぼつてゐる。而して農家中養蠶をなす戸數は昭和三年に於いて二百十六萬五千戸を數へ、同年度に於ける全國農家戸數五百五十七萬六千戸の約三十九パーセントに當つてゐる。しかも此のパーセンテージは大體に於いて最近數年の全國農家總戸數對養蠶家戸數のパーセンテージと見て差間ない故、又此等の養蠶家によつて生産せらるゝ繭の大半は市場に出づるものであつて、米麥の如く市場に出ですして自家消費に當てられるものは極めて微々たる數量に過ぎず、之れは重大視する要を見ない程である。果して然りとすれば繭の市場價格の高低如何は直接我國農家二百萬戸に對して甚大なる影響を與へるものと云はなければならない。之れを昭和二、三年の兩年度に就いて見るならば全農産品價額の約一五パーセントを占めてゐるに過ぎないが、米は價格に於いてこそ、昭和

二年には十七億六千四百萬圓、同三年には十六億三千三百萬圓といふ素張らしい數字を示してゐるが、實際に市場に出づる米は生産總額の五五パーセント弱（大正十三年より昭和三年に至る五ケ年間に於ける中庸の年柄の狀態に付いて農林省農務局の調査したる米穀販賣見込狀況によると産米高が五千九百八十萬石にて其の中販賣せらるゝものが三千二百七十萬石即ち五四・七パーセントである）にしか過ぎない。しかも實際の農家即ち自小作農等農業生産階級が直接市場に販賣するものは全産米高の約三分の一に過ぎない。從つて農業生産階級から云へば金額の點から云ふと繭の場合と殆んど變りがないのである。しかも繭の場合は前述の如く其の殆んど全部が市場に送り出され、それは生産者たる養蠶家それ自體によつて直接販賣せらるゝものであり、一戸當り平均は昭和三年にあつては二百五十五圓弱にのぼり、農家の現金收入として甚だ重要なものと云はざるを得ない。然るに周知の如く、本邦生糸類の主要消費地は米國であつて、米國の生糸市場の如何は直ちに我國の生糸市場に影響を及し、我が國內生糸市場の好不況は直接重大なる影響を生糸の原料たる繭の生産者たる我が國農家に及す。

果して然りとすれば市場生産としての我國農業は生糸、從つて繭を通じて國際經濟に直接參與するのである。而して繭の加工業としての製糸工業は我國工業として甚だ重要なるものであり、大正十三年から昭和三年に至る五ケ年平均八億八千七十萬圓の蠶糸類を生産し、紡績業に次いで生産價額が大であり、且つ五十一萬七千人弱の男女職工を擁して來てゐる。

從つて米國市場に於ける生糸の賣行き面白からずして生糸市價低落するが如きことあらむか我國の製糸業は鋭敏に其の影響を受けて不振を來たし、それに連れて繭の市價も亦著しく低落するに至り、生産階級たる農家は忽ちにして屛息せざるを得ないのである。このことは養蠶收入が本邦農家の現金收入として最重要なるものであること——それはまた養蠶が豐饒にして繭價また良好なる場合には內地工業品の荷捌き甚だはかばかしく、然らざる場合は全く之れと相反すると從來云はれてゐることからも察知せられる——を想ふならば直ちに理解せられ得るが、このことから內地工業、特に國內消費品製造工業の消長……それは軈て全工業、從つてまた全産業の消長となるのであるが——に製糸業が重大影響を持つものなることが理解せられ得

ることゝなる。

しかも製糸業の盛衰は、今日までのところ、米國の生糸需要増進或は減退によつて直ちに決せられ、米國の生糸消費の増減如何は其の産業界の好不況如何を常に反映してゐる。然るに米國は今や世界の工場(ファクトリイ)であり農場(ファーム)であり金庫(バンク)である。從つて米國産業界の振不振は國際的經濟狀勢を指示するものであるといふことが出來る。斯くして我國の農業は生糸によつてアメリカを通して國際經濟に直接參加する。其の限りに於いて我國農業は部分的ではあるが甚だしく濃厚なる國際性を有する。

三、恐慌原因としての國際農業恐慌と金輸出解禁

事情斯くの如くなるを以て今次の農業恐慌――勿論我國の一は生糸――繭を通して直ちに國際農業恐慌に通ずる。實に今や我國經濟界、從つて一般社會を重壓して一種言ふ可らざる陰慘の空氣を漂はしてゐる農業恐慌は單なる國內的經濟狀勢の人爲的、糊塗的變化によつて減退し去るものでない。

その證據に特殊的な國內的經濟事情にのみ殆んど依據するところの米、然り我國農業の最重要生產物たる米に就いて見るに、大正十三年から昭和三年に至る五ケ年平均に就いて我國に於ける米の消費額は六千七百六十一萬二千石であり平均生產額は五千八百九十七萬四千石で、其の不足額約八百六十四萬石は輸移入米によつてゐるのであり、而して昨昭和四年に於ける米收穫高は五千九百六十六萬八千石にて決して豐作なりと云ふを得ないのであるが、而してまた內地の强敵たる朝鮮米は昨年は暴風雨等のため決して豐作にて特に內地米を壓迫するといふが如き事情が發生しはしなかつたが、しかし、其の價格は次表の示す如くジリジリ低落を示して來てゐる。

正米標準平均相場

4.10	東京深川		大阪堂島	
	最高	最低	最高	最低
4.10	31.20	30.40	33.90	32.50
11	30.40	28.40	34.00	31.60
12	28.60	27.00	31.00	29.30
5.1	27.20	26.50	28.80	28.10
2	27.60	26.90	28.50	28.40
3	27.40	26.40	28.50	28.30
4	27.30	26.70	27.80	27.60
5	27.60	26.60	27.90	27.80
6	27.80	26.50	28.30	27.90

「エコノミスト」第八年第十五號ニヨル

之れによつて見るも米作の過剰によつて上記の米價下落は現はれて來た譯でなく他の事情によつて低落して來てゐることを知り得る。それは一般物價の歩みに連れてゐるものであつて、斯かる米價下落原因は他になければならない譯である。而して我々は之れを先づ生糸市價に求めて見よう。生糸の市價は米國の需要如何に依存する。飜つて米國の生糸消費狀況と生糸市況とに就いて見るならば、

昭和4—5年度生糸統計

日次	米國消費量	日本生糸輸入高	横濱生糸相場 最高	横濱生糸相場 最低
	俵	俵	圓	圓
7	51.624	87.756	131.20	124.50
8	59.704	57.303	131.60	125.90
9	53.274	51.960	135.70	129.40
10	57.489	53.283	130.70	125.30
11	50.442	54.103	125.50	118.10
12	44.159	47.913	120.90	114.00
1	57.686	36.562	118.00	112.20
2	49.852	36.915	116.70	109.40
3	50.863	31.850	112.40	105.80
4	41.584	27.339	109.50	99.60
5	40.823	16.201	103.50	88.20
6	29.396	14.614	85.80	70.50
合計	586.393	465.827		

一、米國生糸消費量及日本生糸輸入高は米國絹業協會調査による。
二、横濱生糸相場は横濱取引所清算生糸先物相場表による。

といふが如く昨昭和四年十一月米國を襲つた經濟恐慌の後を受けて米國に於ける生糸消費量は急角度を以て減退し、また日本生糸の輸入量は我國の金解禁聲明の十一月を最高として爾來甚だしき減退を示してゐる。殊に本年五月に入るや日本の對米生糸輸出は一萬六千二百俵と一九二〇年—二一年——世界大戰後第一次の世界的農業恐慌時代に示して以來嘗てなかつたところの不振狀態を呈した。之れは直ちに本邦生糸相場に反映し、春蠶の上簇期に當つてゐる翌六月には實に横濱相場最高が百圓台を割つて八十五圓八十錢といふ未曾有ともいふべき暴落をなした。從つて昨年の春蠶は一貫目約七圓六十錢の相場だつたものが今年は四圓〇二錢といふ慘憺たる狀勢を呈したことは世人の周ねく知る通りである。而して今年の夏秋蠶繭は、昨年のそれの六圓に對して、二圓四五十錢といふ暴落——農家にとつては泣くことさへ出來ない激落振である。

斯かる慘憺たる繭市場狀態は勿論生糸輸出の不振にかてゝ加へて産繭額の增大があつたといふことに歸着しなければならない。即ち左表によつても瞭かなる如く、生糸の輸出の異常なる不振にも拘らず、生産額は春蠶のみにて昨年よりは一割一分增

加してゐる。從つて昨年度春蠶繭價額は三億二千四百六十九萬圓であつたにも拘らず、收繭高に於いて一割一分の増加を以てして本年春蠶繭價額は昨年のそれの五十九パーセント（即ち昨年より四割一分減）にしか過ぎない二億一千二十九萬圓といふ有様である。

最近六ヶ年繭生産統計

	養蠶戸數（千戸）	春蠶繭（千貫）	夏秋蠶繭（千貫）	計（千貫）
大正十三	一、八九〇	三九、四七七	三四、三四〇	七三、八一八
十四	一、九四八	四二、九二七	四一、八七二	八四、七九九
昭和元	二、〇六一	四四、一五五	四二、五六九	八六、七二五
二	二、一〇三	四六、二二八	四四、六三三	九〇、八六二
三	二、一六五	四九、五六一	四四、二九七	九三、八五八
四	二、二一六	五〇、五九四	五一、四九八	一〇二、〇九三
五	△二、〇九五	五六、〇八三		

昭和四年度までは農林省編「蠶絲業要覽」蠶絲統計表による。
△は春蠶掃立戸數にて本年九月十三日農林省發表による。

既に述べたる如く繭價格の落潮は生糸輸出の激減に原因するのであるが、然らば生糸輸出の急激なる減退は何に原因するかと云ふならば、昨秋十一月急角度的に現れ且つ擴大して來てゐる米國の經濟恐慌——其の背後には米國の農業恐慌、而して更に其の背後には世界農業恐慌、が横はつてゐるが——從つて米國の生糸消費の減退に之れを求め得ることは前述の如くである。

然しながら經濟不振による米國の絹糸消費の減退のみが、本邦生糸の對米輸出激減の唯一の原因かといふと必ずしもさうでない。それには金輸出解禁も手傳つてゐることは爭ふの餘地がない。それは左表の如く本年二月以來金輸出解禁によつて輸出に不利な状態に置かれてゐる日本生糸が急激に減退しつゝあるに然らざる歐洲糸及び支那糸が寧ろ増大しつゝあることが之を

米國の生絲輸入高

月別	日本絲 一九二九—一九三〇	日本絲 一九二八—一九二九	歐洲絲 一九二九—一九三〇	歐洲絲 一九二八—一九二九	支那絲 一九二九—一九三〇	支那絲 一九二八—一九二九
一一	五四、一〇三	四三、五〇一	一三一五	五七一	七、四五[illegible]	五、〇六六
一二	四七、一九三	三九、七四三	一三四八	五六三	九、三一六	三、八三三
一	三六、五六二	五一、二二〇	九九六	三八四	五、六七七	六、七八六
二	三六、九一五	三八、八九五	一〇四五	四九七	四、五七四	三、九三三
三	三一、八五〇	四三、〇五四	一八五六	三〇六	六、三三四	四、七七一
四	二七、三三九	四一、三九六	二三六一	五三九	七、八四九	五、八二三
五	一六、三〇一	四一、七八六	二〇六八	一、四〇四	四、三三七	六、七〇一
六	一四、六四四	四四、四四三	二二〇一	一七八四	五、六六四	七、八〇〇

物語つてゐる。前年同期と比較して見るならば其の間の關係はより一層判然と理解せられるであらう。

	四月 五年	四月 四年	五月 五年	五月 四年	六月 五年	六月 四年	七月 五年	七月 四年
小麥	円 一五、六三	一六、〇七	円 一四、五三	円 一五、七八	—	一五・七八	—	一六、七〇
鷄卵			七、二六	八、七九	円 七、四二	八、二三		九、二四
春蠶繭			五、〇〇	七、七一	四、二六	七、四七		
馬鈴薯	〇、二〇三	〇、一八七	〇、三七五	〇、五二〇	〇、一五〇	〇、二八七	〇、一〇三	〇、一九〇
茄子 上	〇、〇七・八	〇、一一・五	〇、〇五・五	七・五	＊九三	＊一、九五	△三、四七	△六、四三
茄子 中	八・五	〇、一〇・二	〇、〇六・〇	一二・〇	＊六〇	一、四五	一、六九	四、八七
茄子 下	六・五	〇、〇七・九	〇、〇六・〇	九・三	＊三九	六六	一、五六	三、二五
西瓜 上					一、三五	二、二五	〇、七二	一、六六
西瓜 中					一、二三	一、五五	〇、四四	〇、七九
西瓜 下					〇、六四	一、四一	〇、三〇	〇、四四
胡瓜 上	〇、〇四・五	〇、〇四・七	＊二三五	＊二三六	〇、七〇	＊一、〇九	〇、三五	〇、五八
胡瓜 中	〇、〇三・八	〇、〇四・三	＊一七〇	＊一九一	〇、四九	一、六八	〇、一八	〇、二五
胡瓜 下	〇、〇三・三	〇、〇三・八	＊一〇一	＊一七〇	〇、三〇	〇、九五	〇、三二	〇、二四

（一）、小麥は茨城三等一石當、鷄卵は大箱大玉平均、春蠶繭は沼津相場、

（二）、馬鈴薯は一貫當り、四月は北海道物、五月以降は相州、近在物

（三）、茄子は五月迄は温室物にて一個當り、＊は土佐物石油1/4箱當り、△は近在物五〇〇—三〇〇個入籠）

（四）、胡瓜四月は一本當り、★印は土佐物（石油1/4箱）、△印以降は近在物（約七〇本入籠）

今更其の詳細に亘つて說く必要がない程多くの方面に於いて繰返し論ぜられてゐる如く、本年一月實施せられたる金輸出解禁は生糸の輸出に不利な條件を與へたばかりでなく、經濟原則に從つて一般輸出商品を不利ならしめて逆に輸入を促進するが如き條件を作り出し、引いて我國生產業を極度に不振ならしめてゐる。このことは現に我々の目擊してゐるところであるが、之れは農業にも甚大なる影響を及して農業生產品の需要減退を來たし、或は農業生產の增加に比例して之れが需要增大せず、歐洲大戰後小起伏はあつたが殆んど絕ゆることのなかつた農業恐慌を急速に發展せしめて、農產物價格の激落を招致し、今夏以來、繭を筆頭に其他諸種の農產品が明治以來嘗てなかつたやうな低價格狀態を次々に示して來てゐる。その激落狀態が如何に甚しきかは次の帝國農會調査による小麥、鷄卵、春蠶繭、青果等の市價を見るならば一目瞭然するであらう。

即ち青果の如き六、七月に於いては前年同期に比すれば孰れも五、六割の低落を來たしてゐる。之れによつて見るも農家即ち農業生產者階級が如何に苦境にあるかゞ知られるであらう。

然し青果其他の農產品が今夏に於いて斯くの如き暴落狀態を示

した理由は本年度に於ける生産が特に増大したことにあるのではなく、金輸出解禁の影響を受けて事業界極度に不振に陥り、從つて都市に於いては工場の閉鎖、事業縮少等が各種部門に相次いで現れ、ために失業者群が街に溢れる一方勞働者賃銀や從業員俸給低下して消費力——購買力を極度に減退せしめたことが有力な原因となつてゐることを看過すを得ない。兎に角諸種の機構を通じて金輸出解禁の影響が直接的、間接的に今次の農業恐慌に作用し、之れを尖鋭化し、惡化し居ることは疑ひ得ないところである。

於玆乎我々は今次の農業恐慌を以て其の本質は世界的農業恐慌に根ざす、世界的農業恐慌の一聯環たるに過ぎないが、しかし之れに偶々金輸出解禁のあるあつて、之れが重要なる重壓力となつて居ると斷ぜざるを得ない。

四、農業恐慌の行方

以上かなり長きに亘つて今次農業恐慌の性質を明かにし、農業恐慌の重點を以つて農業生産品の破局的價格低落にありと斷じたが、此の農業恐慌は我國農村經濟の上に如何なる影響を與ふるであらうか？　それは我が農業經濟を何處へ引張つて行くであらうか？

第五次農林省統計表によつて大正十三年から昭和三年に至る五ケ年間に於ける年平均農産品價額を計算して見ると（單位百萬圓）

自大正十三年至昭和三年　年平均農産物價格表（單位百萬圓）

米	一、九一六	果實	七九・〇	牛乳	二七・八
麥類	二九七	果樹苗	一一・一	鷄	四〇・七
食用農産物	二四九	茶	三三・四	鷄卵	七七・〇
蔬菜及花卉	二〇一	桑苗	一〇・四	合計	三、八〇七・二
工藝農産物	一二一	繭	六六七・二		
綠肥用作物	三三	蠶製品	四三・六		

大約三十八億七百萬圓である。即ち我國の農家は每年大約三十八億七百萬圓を生産してゐる譯となるのであるが、しかし之れがためには勞賃、農業資本利子（地代をも含む）を加算せず、肥料、種苗、蠶種、家畜、飼料、農具農舍消耗だけでも約十一億九千三百萬圓の生産費を必要としてゐる（那須皓博士推定）。

果して然りとすれば三十八億七百萬圓から十一億九千三百萬圓を引いた殘り二十六億一千四百萬圓が農業利子、農業勞賃、

農業利潤に分配せられる譯である。而して同期間に於ける農家平均戸數は五百五十五萬五千戸である。之れを思ふならば農家所得が如何に僅小なるかゞ理解せられるであらう。假りに是等の全農家が自作農であるとするも一戸當り平均年所得五百圓弱である。然るに其の多くは小作農である。我國耕地の四割五分八厘即ち二百七十八萬二千町歩程は小作地となつてゐる。また同期に於ける三百八十二萬戸の農家は多かれ少かれ小作をしてゐるのである。從つて其の所得、右の如き僅小なる所得から小作料とかなりの部分が支拂はなければならない。

かるが故に若しも農産物市價にして之れ以上に下落することあらむか、農家即ち農業生産階級はそれでどうして生きて行くのかと疑はれる程僅小な所得に其の生命を托する外なくなるのである。之れを以つて見るも農家に取り農産物市價の下落が如何に恐慌的なものであるかが、察知せらるゝであらう。それは單に利潤を小ならしめるといふことではなく、既に利潤を失つた經營に於ける農家の自家用勞働の勞賃——既に普通の平均勞賃率を遙に下つてゐる勞賃をそれだけ低下せしめるといふことである。そしてそれは同時に農家の生活を根柢から動搖させるといふことである。

一ケ年五百圓未滿の所得しかない農家が一戸當り平均九百圓の負債を背負つてゐるといふことは、其の擔保物件たる土地が如何に過大評價を一般的に受けて來たことが有力なる原因なりとは知つてゐるにせよ、一見如何にも不思議に考へられるであらう。しかし今述べて來た如き農家所得狀態に於いて、一朝病氣、災難等があつた場合、また農産物價格の低落のあつた場合、農家は何によつて是等の費用を支辨し、肥料代農具、種苗代と支拂つて行くべきであらうかを考へるならば落付くところ負債のほかなく、從つてまた斯かる過大なる負債に陷つてゐることの不可思議でないことが理解せられるであらう。

最近帝國農會調査による農家負債總額五十億圓なる數字は決して過大でない。長野縣北佐久郡横島村は大正四年一戸當り九十六圓の借金だつたのが昭和二年には四百圓となり、本年には八百圓となつた云々と九月四日の報知新聞は報じてゐるが、之れは會々農家負債の發達過程を實相的に示すものといふことが出來る。

今日農家が四十八億乃至五十億の負債を持つてゐる以上、年

一割（事實は決してこんな低利ではないが）とするも約九億の利子を支拂はなければならない。一方三十八億七百萬圓の農產品を生產するために消耗品費用として十二億圓を必要とする。而して此の費用は生產着手前、すくなくも着手期までに前拂へせられるべきものであつて生產後、即ち收穫後に支辨すべき性質のものでない。從つて農產品價格の變動に從つて其の高を變ずることが出來るといふ性質のものでない。かるが故に是等のものは孰れも今年の如く農產品市價の暴落を來たしても殆んど之れが影響を受くることなく依然として其の額を變ずることなしに農家經濟を壓迫してゐると云はざるを得ない。

　農產物價格の下落、從つてまた農業收入或は農家所得の減退にも拘らず、之れに比例して低減せざる農家支出に此の他、農家の公租公課（稅金、水利組合費、耕地整理組合費其他）、子女の敎育、地代、諸交通費、醫藥費電燈料等がある。いな其の他農家の購入する諸用品の價格も農產品價格が下落したからといつて共れに連れて下落するものでなく、從つて農家收入は減退したにも拘らず農家支出はさして低減しないと云はざるを得ない。而して過去に於ける實際の事情はこのことを以て普通としてゐる。かるが故に農家製品――農產品の價格の低落は實質的には農家の負擔を甚だ增大せしめると云はざるを得ない。

　今是等の關係を瞭かにするために農林省農務局調査に掛る昭和二年農家經濟調査を例に取つて示すならば次の如くである。

農家經濟概表（單位圓）

	A農家收入	B農家經費	差引農家所得	家計費	諸負擔	Aに對するBの割合
自作農	二、六三〇	一、二〇九	一、四二一	一、三一〇	一、一七六	四六・〇
自小作農	二、三四〇	一、一四八	一、一九二	一、〇九三	八九	四九
小作農	二、一七四	一、一八九	九八五	八八五	三〇	五五
平均	二、四〇三	一、一八三	一、二二五	一、一二七	一〇五	四九・二

（圓以外四捨五入）

　今農產物價格が一割下落して農家收入平均が一千九百二十二圓となつた場合に於いても農家經費は決して之れに比例して低減するものに非ざる故假りに一割下落して一千六十五圓になつたとするならば、農家收入に對する農家經費は以前の四割六分に對して五割五分と約九分の增加となり、それだけ實質的には增加したこととなる譯である。

　今年の如く農產物價格が暴落して昨年の半值にも滿たぬ作物が隨所にあるばかりでなく、繭の如き重要農產品すら昨年春

繭の一貫目當り平均價格六圓五六十錢したものが今年は四圓〇二錢と約四割弱下落し、また昨年六圓をした夏秋繭が二圓四五十錢しかしないといふ慘落狀態を呈し、また十月二日農林省發表の第一回收穫豫想による六千六百八十六萬石といふ未曾有の豐作を傳へられ、朝鮮米の收穫一千九百三十萬石といふ異常なる增收を傳へられてゐる米は其の收穫時に於ける價格はどこまで慘落するか？　到底其の豫想を許さないが、今日（十月二日）既に期米市場に於ける先限十七圓（一石建）と大正六年四月以來の新安値を呈するの慘狀である。此の報を耳にして農家は恐らく豐作を怨んでも之を歡び得ないに相違ないが、實際其の場合に於いては農家支出は從來の二割と減じ得ないであらう。果して然りとすれば今冬に於ける農家の苦境は想像に餘りある。我國の米の生產費は大正十四年に於いて玄米一石當り自作農三十二圓五十二錢、自小作農三十四圓九十六錢、小作農三十五圓三十三錢となつてゐる、（帝國農會調査）。今日如何に諸經費が低減してゐるからといつて五割と生產費が低下してゐる筈がない。しかも米は出來秋には十五圓代を示さむとしてゐる。生產者たる農家階級の沒落避けむとするも到底避くるを得ない。

　しかも斯かる農產物價格が生產費を割つて遙か低位にあることは米に於いて初めて見るのではなく、既に殆んどあらゆる農產品に於いて今夏以來見てゐるのである。從つて農業生產階級は七八月の候在米薄のために獨り高を示してゐた米價（一時は三十一、二圓を示した）に僅かに希望をつないでゐたのである。其の米價の慘落は今述べし如くである。農民は此の米價慘落によつて二重に打のめされ、到底浮ぶ瀨がない狀態に置かれるや必せりである。此處に於いてか我々は今次の農業經濟が先づ第一に行くであらうところの落付き先きがおぼろ氣ながらわかつて來たやうである。

　其れは農業生產階級、特に從來經濟價値以上に社會價値を附與せられて爲めに過度の負擔能力を持つてゐた農地を所有してゐた自作農等が此の農地を抵當として負債を起し、現に之れを負ふてゐる農家の沒落は火を看るよりも瞭かである——勿論地主の中にも擔保に提供してゐた土地の沒收によつて沒落するに至るものが多々あること必せりである。彼等は農業恐慌の過ぎ去つた後に於いては全く其の財產——土地から離れて農村プロレタリアと沈落し去つた自分を見出すに相違ない。蓋し（一）は彼

等はインフレーション時代に既に銀行其他から實際能力以上の借金をなし、殆んど利子さへも十分に辨濟せず今日に及んでゐるからであり、(二)は金輸出解禁によつて通貨は極度に縮少し、農村金融は高度の梗塞逼迫を告げ、新に起債せんとするも起債能力缺乏の故に不可能なるのみか、反對に債權銀行或は個人債權によつて從來の融通金の辨濟を要求せられて進退谷まるに相違ないだらうからである。

我國の金融資本の維持のためには金輸出解禁を必要とした。從つて之れがためには金融資本の代辯者×××をして×××××××××をさへ敢ておかさせしめてまで準備を行つた。その準備のために地方銀行の整理と合同とを強制的に行はしめて來てゐるが、その整理、合同の對象となる銀行は從來主として地主の金融機關となつてゐた群小地方銀行である。此等の銀行は本來的性質は普通銀行即ち商業銀行なるにも拘らず、不動産を擔保として所謂不良貸をなして來てゐるのであるが、政府の銀行合同强制によつて否應なしに斯種貸付の整理を行はざるを得なくなつた。而も經濟界一般極度に逼迫してゐる折柄とて債務者は資金辨濟をなし得ず、止むなく債權銀行は抵當地の所有權を獲得しなければならない破目に立つたのである。其の際銀行は極めて安く手に入れることは勿論である。而してここに金輸出解禁は副次的に銀行地主なる新しい地主を生み出すに至つたのである。昭和元年末現在に於いて大藏省銀行局の調査したるところによると全國の普通銀行及び貯蓄銀行は田畑を抵當として二億六千七百五十六萬餘圓を農業者に貸付けてゐるが、更に同年度末現在に於いて日本勸業銀行、府縣農工銀行、北海道拓殖銀行等が、直接農業者に貸付けてゐる額は四億四千八百四十萬圓餘にして其の殆んど全額は不動産物に田畑を抵當としてゐると看做して差閊ない故、之れを合すると金融機關たる銀行の農業者直接貸付額は七億一千六百萬圓弱に當り、是等の貸額に包まれたる農地が金融恐慌に當つて、また特に昭和二年の金融恐慌以來政府が强行してゐる地方銀行整理、地方銀行合同によつて如何なる運命を辿つてゐるかは説明を俟たずとも理解せられると思ふ。

地方銀行整理は否應なしに是等擔保農地の處分を促す、しかも一方に於いては農村金融梗塞と農産物價格暴落とは土地購買慾を極度に萎縮せしめてゐる。其の結果は地價の急落となり、

抵當流れとして銀行が是等の土地を結局は捨値同樣にて手に入れることになる。されば數年を經て何等かの形に於いて經濟界が安定した時には新しい種類の地主——銀行地主の擡頭進出を見るに相違ない、恰も松方大藏卿の下に斷行せられた明治十四年の紙幣整理——それこそ明治に入つて以來の第一金融恐慌であつたが——が金貨地主なる新しい地主を生んで、其の手中に明治維新が折角小農に分配した農地をあらかた集中せしめて、新しい資本主義的、明治地主を造り上げた如く。

五、明治十四年の農業恐慌

既に述べたる如く今次の經濟恐慌が金輸出解禁によつて甚だしく重壓せられてゐる如く農業恐慌も甚だしく其の影響を受けてゐるが故に、かゝる顯著デフレーション政策、すくなくも一般經濟界に急激なる震動を與へたデフレーション政策の歴史をたづねて農業との關係を闡明すれば今次の農業恐慌の行方を知る上に甚だ便宜であると思ふが、過去に於いて一般經濟界に强大なるショックを與へたのは後にも先きにも明治十四年の紙幣整理である。

其の時の景況を東洋經濟新報編「明治金融史」によつて數字的に示すと次の如くである。

年次	東京物價指數	年末現在流通紙幣額	銀貨百圓の紙幣相場
明治一四	一五一、九	一五三、三〇二、〇一二圓	一六九、六四
一五	一四〇、五	一四三、七四五、三六三	一五七、一
一六	一一四、一	一三二、二七五、〇一二	一二六、四
一七	一〇一、九	一二四、三九六、一七五	一〇八、九
一八	一〇二、八	一二二、一五三、七五七	一〇五、五
一九	九五、三	一三六、三二八、一〇九	一〇〇、〇

(一)指數は貨幣制度調査會の調査によるものにして明治六年の分を一〇〇とす(銀貨價格によつて算出したものを更に當時の紙幣相場によつて時價に換算したもの)。
(二)流通紙幣額には政府紙幣及銀行紙幣の兩者を包含す。

斯くの如き金融狀勢なりし故、紙幣整理の反動は十四年より現れ、商品の賣行は止まり、物價は低落して、市場不振に陷り、資金固定、金融逼迫漸く大となり、十五、十六年漸次激烈となり、十七年に入るや、恐慌其の極に達し商業會社、銀行等にて倒産する者指を屈する暇ない有樣にて、十五年に於いて五千一百萬圓に達した商業會社の資本は十七年には一千七百萬圓といふ十五年の三分の一に激減してしまつた。このことは勿論

農村經濟に影響せざるを得ず明治十四年に於ける全國の土地負債高は一億四千百萬圓であつたものが、同十七年には二億三千三百萬圓に激增し、之れに連れて土地の賣買が激增したことは當然である。今之を第七統計年鑑によつて數字的に示すと、

土地賣買高

	賣買金高	地價百圓に付き賣買價格
明治一七	五五、六九〇千圓	一〇〇、〇二圓
一八	五九、三三三	九三、八四
一九	六二、四三八	八八、四一

而して當時に於ける平均地價は一段歩四十圓であつたことを記するならば如何に多くの土地が農民の手から離れ去つたかゞ想像せらるるであらう。而して是等の土地が小農の土地であり、之れを其の手中に收めたものが少數の地主であつたといふことは次の數字が示してゐるであらう。

地租五圓以上を納むるものゝ減少割合比較

年度	五圓以上拾圓未滿 選擧權を有するもの 人員	前年より減少割合	拾圓以上 被選擧權を有するもの 人員	前年より減少割合
明治一六	八七七、四九六		八四〇、五四二	
一七	八三三、一七五	五、〇%	八四九、二四四	（十）一、〇
一八	七九六、一七二	四、〇	八四〇、九六五	〇、九
一九	七二二、〇七二	九、〇	八〇九、八八〇	三、〇
二〇	六八五、一三二	五、〇	八〇二、九七五	〇、八

（第八統計年鑑による）

即ち地價四百圓以上の地主は明治十七年に百分の一を增して減じた場合に於いても僅に百分の三にとゞまる、之れに反して二百圓以上四百圓未滿の地主は尠なき年にも四分（百分の四）多き年は九分を減じ、實に十六年から見るならば二十年には十九萬二千四百人を減じてゐる。また地價四百圓以上の地主も十七年から二十年までの間に四萬六千三百人を減じてゐる。從つて全體として此期間に二十三萬八千六百余人が姿を消し去つてゐる。以て見るも此期の農業恐慌が如何に深刻だつたかゞ察知されるであらう。

更に之れを農地に限つて小作地の增加に就いて見ると、

	明治十六年	明治二十年	增加實數	增加割合
自作地	二、一〇八、六〇〇町	二、七九五、七〇七町	六八九、一〇七町	三二、八%
小作地	一、三五五、一〇八	一、八一三、四三五	三五八、三二七	二六、五

といふが如く絕對數は自作地に於いてより增加してゐるが相對的には小作地の方が遙に增加してゐる。しかも自作地が增加

したのは從來の小作農が土地を購入して新に自作農となつたと云ふよりは耕地を失つた農民が舊來荒地として農業に役立たなかつた土地を新に開墾して農業に役立たしめるといふ傾向が甚だしく現れ、其の結果として自作地の増加となつたに違ひないのであつて、そのことは明治二十年だけでも開墾其他によつて耕地が十三萬六千七百四十町歩増加してゐることからも推知せられる。

而してまた明治十六年より十八年に掛けて×××農村不安を思はしめるやうな幾多の農村民爭動があつたことが記録に誌されてゐる。

然り！　今次の農業恐慌を除いて恐らく最も深刻なりし農業恐慌は此の明治十六七年の農業恐慌であつたと云ふも過言に失しない。而して舊時のそれは紙幣整理を直接原因とし、今次のそれは金輸出解禁による或は之れがためのデフレーションが與つて大なる力を有してゐる。其の性質が甚だ似てゐる。しかも舊時のそれは金貨地主を而して今次のそれは昭和の金貨である銀行をして地主たらしめんとしてゐる。何といふ好個の對象であらうか！

六、銀行地主の發生と中小地主の沒落

我々は農地所有關係がどうなつてゐ、またどうならむとしてゐるかを次の數字によつて窺はふ。

自作小作別耕地（單位町）

	自作	小作
大正十三	三、二七九、四二四	二、七八五、七四一
一四	三、二八六、四一七	二、七八〇、五九一
昭和元	三、二九五、九七〇	二、七八四、〇八二
二	三、二九八、一一一	二、七八二、〇四四
三	三、〇六二、一二九	二、八三五、九六七

昭和二年までは農事調査の農事統計に同三年度は九月一日現在によつて内閣統計局と農林省との協力の下に行はれた農業調査の結果概要による。

銀行地主の發生、即ち債權銀行たる銀行への土地集中現象は既に強く現れてゐるのであつて、どの位の強度を有してゐるかは容易に知るを得ないが、ここ一兩年來日本勸業銀行を中心として不動産擔保による金融を營める銀行、信託會社等の間に土地抵當證券發行の問題が喧しく論ぜられたばかりか、相當の程度其の具體的な案まで定められてゐる所以は銀行への土地集中が銀行それ自身に對して重大關心問題となつてゐ、集中後如何に之れを處分すべき乎に秘に悩んでゐるからであらう。しかし

銀行地主の出現は日本ばかりの現象ではなく、アメリカでは一九二一年の農業恐慌以來年々農家に破産者が續出し一九二八年までにて十萬以上の農家が破産して、其の土地は銀行、保險會社の掌中に歸し、銀行で直接農業を經營するものさへ出てゐると云はれてゐる。イリノイス州だけで一九二八年末には斯かる農場が十五もあり、デカトゥールのシテズンス・ナショナル・バンクの如き一萬エーカーの土地を耕しゐるといふことである。

日本の金融資本が農業に對して今後如何なる態度をとるか？は殘された問題であるが、兎に角今次の農業恐慌——金輸出解禁に伴ふデフレーションの與つて力ある農業恐慌によつて、我國の農地所有關係は一新するであらう。農村に於る中小地主は大地主の如く諸他の産業方面に進出する資力もなく、また甚だ保守的であつて其の明敏さもなくして全く土地を守つて來、土地のみを愛し、無理算段をしてまでも土地を集めやうとして來てゐたゝめに今次の如き動きの取れぬ農業恐慌に直面すると、彼等の唯一の所得源泉たる地代が米納制であるだけそれだけ、苦境に立ち急角度を以て沒落過程を辿り、其の財産は多く彼等の金融機關たりし群小被整理銀行を通じて中央有力銀行——大金融資本機關に集中せられるであらう。最近に於ける農村爭議の傾向として地主の土地返還請求に基くものが急激に增加してゐることは將に中小地主の經濟的逼迫が彼等をして單なる地代所得者として生活することを許さなくなり、農業生活に參加せざるを得なくなつたといふ悲痛な事情を暗示するものと云ふべく、之れは直ちに彼等の沒落過程を物語つてゐる。今農林省の報告によつて之れが實際數字を示すと次の如くである。

年次	小作地返還に關する爭議件數	總爭議件數に對する割合
大正十三	二五	一・六三%
十四	一七二	七・八〇
昭和元	三一六	一一・四九
二	四三二	二一・〇五
三	四六一	二四・七一
四	六一四	三一・五〇

而して本年は地主の土地返還請求に基くものが其の大半を占めてゐる小作契約繼續を原因とする爭議が昨年の六百二十件に對して、六月まで既に五百七十二件にのぼつてゐる。之れを以て見るも中小地主の沒落が如何に迫つてゐるかゞ想像せられるであらう。中小地主の沒落と云へば今夏來、或は全國町村長會

議に於いて呼ばれる所謂『農村の叫び』教員俸給の値下げ、農家負擔の輕減、米價の維持、等、々はより中小地主の利益代辯であつて、其度に中小地主沒落の苦悶の搔きを感ずる。水に溺れる者は藁でも掴む、彼等が焦燥の極救ひの手としつかり掴んで來たものが却つて彼等を窮地に陷らしめるものでないか？また現に掴まんとしてゐるものがさうした性質のものではないか？ 若し然らずとすれば彼等のために乾杯しやう。

七、自作農沒落の最後の搔きとしての農業合理化運動と之れが金融資本性

中小地主の沒落は反面に於いて自作農の沒落を意味してゐる。農地所有者といふ點に於いて彼等は中小地主と同一利害を有する。其の土地は經濟價値を遙かに凌駕する社會價値を有し、從つて過度の信用力を有つてゐた。其れ故に彼等は之を利用して出來るだけ負擔を起して來てゐる。それがこのデフレーシオン時代には極度の重壓力となつて彼等を壓迫してゐる。

しかも彼等自作農は一種の商品生産者である。商品たる農産品の處分は彼等の常に關心するところである。而して地主の如くそれはたゞに米ばかりでない。我國の農業は米穀中心とは云へ、既に多種の農業品を生産してゐる、常に市場を目掛けて。從つて自作農は窮境に立たされゝば立たされる程商品生産者として目覺め、資本主義的生産の長所たる經營組織化の優越性を認識するに至つて、窮境打開策として農業經營の組織化に留意する。市場に於いて先づ重要なことは販賣者として組織化することである。農業生産階級の尖頂に立つ彼等自作農は先づ販賣の組織化を企て、之れに着々として成功して來てゐる。農産品販賣の組織化運動は兩三年來飛躍的進出を遂げ、將に農業革命――産業革命といふやうな意味に於ける――を遂げんとしてゐる有樣である。帝國農會斡旋所を中心として系統農會の運動として起つた農産物協同販賣は之れである。又他方に於いては産業組合中央會の別動隊として漸く重きをなし、飛躍的進展を遂げむとしてゐる全購聯（全國購買組合聯合會）の肥料配給の如き中間搾取層としての肥料商を排除せんとする自作農の指導の下に行はれてゐる農業生産階級の協同化、組織化運動の一の現れと云はなければならない。

而して我々は斯種運動を農業合理化と稱する。農業合理化

は、この簡單なる說述によつても知られるであらう如く、所謂產業合理化が產業恐慌に對する工業生產家が對應策として策せる工業家の窮境打開策であると同樣に、自作農の窮境打開策の一である。それは中間搾取層——商人の排除を目標とする。「直接生產者から直接消費者へ」のモットーは中間商人の排除を意味する以外の何物でもない。

而して農業合理化に對する金融資本の利害は?、農業合理化行き詰つた農村經濟の打開策である。しかし勿論根本的永久的な打開或は「農村經濟解放運動ではない。飽くまでも資本家的な、資本主義經濟組織肯定の上に立つた運動である。それは農產品販賣、農家用品購買に於ける農家の組織化であつて、從前の如き小量販賣小量購入の弊を除去せんための大量販賣大量購入運動である。其の意味に於いて農業經濟に於ける封建的殘物—中間小賣商人の淸掃、農業經濟純粹資本主義化であると云つても差支ないかも知れない。それは資本主義經濟機構內に殘存する封建的殘物、或は封建的勢力の排除の一役を演ずるものであつて、資本主義經濟社會の延命——若しも資本主義經濟の金融資本主義化、高度資本主義化が資本主義の延命であるとするならば——に役立ちこそすれ、今日の如きフォルムで甘んずる限り、それは資本主義經濟社會の否定では斷じてない。然り—農業合理化は資本家社會の高度資本主義化——金融資本主義化の動因の一をなすものである。金融資本は從來中間搾取層——商人、地主等を通じて農業生產階級を搾取してゐた。しかし今や斯種中間搾取層を通じて農業生產階級を搾取するの要なきまで金融資本家自身及び被搾取農民生產階級は成長した。啻にそればかりか農民大衆の階級的自覺、成長は意外にも强力にて資本主義社會それ自體の牙城に迫まらんずる程でさへある。それは資本主義領袖の驚畏でなければならない。之れを靜めむとして一方では彈壓、一方では懷柔。それが彼等の道筋である。懷柔には何物かを犧牲にしなければならない。それには資本主義機構として機能を失つた或は甚だ稀薄ならしめられて資本家的生產の障害とさへ思はれるもの——此場合に於いては地主、及び中間商人階級が選ばれる。

資本主義の發展過程は×××××の×××××である。資本主義の奥の院—××××××××××××。金融資本とプロレタリアートとの直接對立への道に横はる一切の

中間層は其の切迫の度合に應じて時々刻々清算せられ排除せられて行く。而して農業生產階級と金融資本家階級との對立に至るまでに所謂「都鄙鬪爭」として知らるゝ中間搾取層としての中間商人と農業生產階級との對立がある、また中間搾取層としての地主と小作農との對立がある。此の兩者が清算せられて初めて農業プロレタリアートと金融ブルジョアジーとの對立に進む。しかもそれは搾取率によつて測定せられる搾取關係によつて現はされてゐる。

今や農業生產階級は商品生產者として組織化し、その組織を通じてのみ行動せんとしてゐる。從つて農產品配給の上に於て中間商人の必要なからしめんとしてゐる。一方中間商人は生產者としての農民大衆、消費者としての農民大衆の二つの方面に於ける農民大衆の搾取に依存し、自分達が上層搾取階級によつて課せられる搾取を農民大衆に轉嫁させてゐるものである。從つてそれは地主に劣らざる高率なる搾取によつて農業經濟を壓迫してゐる。しかも金融資本家階級は其の故に特に大なる搾取率を擧げてゐる譯でない。たゞ其の搾取を保障して呉れたゞけである。かるが故に若し中間搾取層としての中間商人の要なくとも安全に農民大衆から一定率の搾取が可能であるならば、中間商人の排除、解消は何等の痛痒でもない。而して農業協同組合運動は主として中間搾取層としての中間商人否認排擊運動であつて之れ以上の何物でもない。金融資本の搾取を現下に於いては何等脅かしはしない。いな寧ろ中間搾取層としての中間商人の排除によつて免かれる重壓力の故に切迫せる資本主義の沒落を一時救ふ可能性さへもある。

金融資本の農村協同組合運動——農業合理化を是認し援助する所以はこゝにある。產業組合中央金庫に對する政府の一千五百萬圓の出資、其後に於ける低利資金の融通、產業組合中央會の別働隊としての全購聯を通して肥料の公正なる分配なる名目の下に肥料の協同的配給を行はしめるために資金の提供、思へば近時に於いて金融資本と農業生產階級との直接的接觸の斷面が如何に增大したことであらうか？

余は此處に敢て本年三月の政府の附與せる三千萬圓の生絲補償金の問題をあげつらいはしない。今や非常な勢で擡頭しつゝある農業合理化でさへもが金融資本性を多分に帶べることを述べるならば十分であらう。

今次の農業恐慌は金輸出解禁と相俟つて一方にては舊來地主から農地を取り上げて銀行——金融資本家の手に集中せしめ、一方にては中間商人に代ふるに農業協同組合を以てし、斯くして農業に於ける封建的分子の淸算を促がす結果となるであらう。しかもそれは決して農業生産を害ねはしないだらう。舊來の多分に封建的傳統を帶べる農業生産組織を急速力を以てより近代的な純乎たる資本主義的農業組織にまで驅り立てるであらう。所有關係の變革が齎らせられる、中小地主、續いて自作農の沒落が、一方では農村に於ける中間商人層の沒落が急角度を以て現れて來るであらう。農地の價格は經濟價値にまで下落するであらう。最後に其の農地は金融資本の手を通じて恐らくは今日とは似ても付かない所有制度に變革するのではないだらうか？

マルクスは「資本論」第三卷の中に於いて云ふ、『資本制生産方法は、一方に、社會の最も未發達的な部分が單に實驗の上から慣行し機械的に傳へて來た手續としての農業をば、總じて私有に伴ふ社會事情の內部に於いて可能なる限り、農經營の意識的な科學的な應用としての農業に轉化せしめ、他方には土地所有をば主從關係から全く解放せしめると同時に、勞働條件としての土地をば土地所有及び土地者——彼にとつては、其の所有地は、獨占によつて産業資本家たる小作農者から徵收する一定の金納租稅以外の何物をも代表するものでない——から全く分離して、スコツトランドに土地を所有する人がコンスタンチノープルで一生を送り得るといふやうにしてしまふ。……土地所有は斯くして、資本制以前に生じた一切の政治上並に社會上の裝飾、及び混合物を脫却することに依つて……凡ゆる傳來的附屬物を脫却することによつて、純經濟的な形態を與へられること。一方には、農業を合理化して、其の社會的經營を可能ならしめたこと、他方には、土地所有の不合理なる所以を信ぜしめたこと、之れ實に資本制生産方法の殊勳である』と。

（以下三十八字削除）

（一九三〇、一〇、四日、未曾有の米豐作が傳へられ豐作饑饉の聲國內に高まりし日）

蠅を飼ふ話

駒井卓

一

「小春日や我は蠅飼ふ男かな」

　或秋の一日ふとかやうな俳句贋ひのやうなものが私の頭の中に浮び出た。

　私は蠅を飼つてゐる。これが私の日々の仕事の最も主なる者だ。私ばかりでなく同學のC君、學生の二三の人々、手傳のS孃の日課だ。C君などは四年餘り前、永年勤めた某縣の女學校の教頭さんの地位を惜まれ乍ら振り捨てゝ京都に出て以來、明けても暮れても、照つても降つても、年が年中蠅を飼つてばかりゐる。

　吾々の室には棚の中と云はず、机の上と云はず、蠅飼ひの壜が林立してゐる。皆で幾千本もあるであらう。らつきやうの漬物を入れる厚い硝子で造つた口の大きな恰好のわるい壜だ。それでも蠅飼ひには形と云ひ大さと云ひ持つてこいのものである。其底の五六分のところに白い羊羹のやうなものがはいつてゐるのが蠅の餌だが、これは麹を寒天で固めたものでC君の發明に係るものだ。壜の口は綿の栓がしてある。

　この壜の中に雌雄一對の蠅を入れておくと、一二日の中に底の餌の上の周りなどに小さな卵が産みつけられる。それから又一二日すると、餌の中に蠢く小さな蛆があらはれる。蛆は其中にトンネルを造つて日に日に目立つて成長する。餌の表層に近いところに重なり合つて、全半身を活潑に伸縮し乍ら、盛んに食つてをるのは中々威勢のいゝものである。それが四五日もして蛆の身長が三四分位になると發育が止つてやがて動かなくなつて茶色の蛹になり、壜の周圍などに並んでくつつく。それから又一二日もすれば蠅が孵つて壜の中をブンブン飛び歩くやうになる。

　かやうにして出て來た蠅を私共は毎日エーテルで麻醉させて顯微鏡の下で調べて數を讀む。それを帳面に記錄してしまうと、いらぬやつ

は筆の先でアルコール壜の中に掃き込んでしまふ。いらつきやうの蠅が次から次へと片附けられてゆく。こんな事が吾々の日課なのである。

蠅は夏でも冬でも飼ふ。そのために吾々は一つの定温室を持つてゐて夏は其中に氷塊を入れ、冬は電氣を通す。さうして蛆の發育に一番良い攝氏二十五度位に室內を保つて、其中でどんどん蠅を孵してゆく。

二

私がこんなにして蠅を飼ふのは數年前米國に居た時からの事である。尤もそれより十數年も前からそれをしたいしたいと思つてゐたのであつた。ところが震災の年に文部省の留學生として米國に先づ渡ると、こゝに永年の希望が實現される事になつたのであつた。私は見物もしたり講義も聞いたりしたが、それと同時に始終研究室や自宅で蠅を飼つてゐた。

向うで知合になつた人がよく毎日何をしてゐるかと聞く。「蠅を飼つてゐる」と云うと變な顔をしない人はない。ある時かう云ふ事があつた。それはマサチユセッツ州の海岸のウッヅホールと云ふ有名な臨海實驗所に居た時の事である。そこにある大きな食堂で毎回同じ食卓に坐る紐育の老辯護士があつた。獨身者の音樂狂で、平生はあまり口を利かぬが、オペラの話などになると、俄に老眼鏡の奥の眼が輝き始めて、のべつにしやべり出す。メトロポリタン・オペラハウスの豫約席の中央に近い方に一つ席を移すのに、親子二代かかつたと云ふやうな事も此人から聞いた話であつた。其後紐育についてからシアリヤピンのボーリス・グドノフを見る事を得たのも、此人の好意に依るものであつた。此人が或日改つて「處であなたは遙々日本から來て毎日何をしてゐる」と聞いた。私はいつもの事だから「蠅を飼つてゐる」と素直なつもりで答へた。處が爺さんしげしげと私の顔を見つめて「Breeding flies? Why, we have enough flies!」と云つた。

又其後紐育で懇意になつた某教授の老妻があつた。教授は新約聖書の世界的名聲ある大家で夫妻とも典型的の蘇國人である。そして紐育に住み米國の學校から月給を貰ひ乍ら、ひどい米國嫌ひで、毎年夏休には太西洋を二度渡つて蘇國に歸らなければ収まらぬ程のバンカラのおもしろい人たちである。それで米國嫌ひの反動からか吾々に非常な厚意を持つてよく親切にしてくれた。其奥さんから例によつて「あなたは毎日何をしてゐる」と聞かれた。それで私が蠅を飼つてゐる由を答へても中々ほんとうにしない。とうとう或日コロンビア大學の動物學教室の四階の私の室まで見屆けに來た。そして私の云つた事がうそでない事を知ると、根掘り葉掘り色々の事を尋ね出した。それに私が

まわらぬ英語でともかく一通り說明を了した。それでもう大抵分つてしまつたらうと思つた頃に、

「然しKさん after all こんな事をしてゐるのは何のためなの？」と來た。

三

實際此人たちがふしぎがるのも無理もない事である。然し元より私共は醉狂に蠅を飼つてゐるわけではない。又貧乏な政府から學資を貰つて米國までいつて迄蠅飼ひ術を習つたのは道樂半分など云ふ事は毛頭ない。私共はこれでも遺傳學の勉强をしてをるのである。

現に此蠅飼ひは私たちだけがやつてゐる事ではなくて、今日では殆んど全世界到る處の生物學教室や研究所でやつてゐるのである。米國内でも此蠅に就て遺傳學の論文が恐らく三百も書かれたであらう。此蠅の御蔭で博士になつたのは幾十人もある。今は英國でもドイツでもロシアでも、又支那でも多くの學者が之を飼つて年々多くの論文が出版される。實に一九一〇年頃コロンビア大學に居たモーガン教授が此蠅を始めて遺傳學の研究材料に用ゐて以來、二十年間に遺傳學は此蠅の御蔭で面目を一新した。それは生物學の歷史あつて以來の著しい事件の一であつた。そして此蠅を材料として知られた遺傳學の根本原理はそのまゝ人類の遺傳を說明する材料として用ゐられて誤のない事も明かになつて、吾々人類の素質とか云ふやうな問題に對する考へも昔に比べて甚しい相違を見るやうになつたのである。

かう云へば蠅飼ひの仕事も中々馬鹿にならぬ事が分つて貰へると思ふ。

處で早く斷つておくべきであつたのは、今まで唯蠅と無雜作に云つてをつたが、此らつきやう壜で吾々が飼つてゐるのは、臺所などに居る黑い家蠅やきたないものにたかる銀蠅とは別のものである。もつと小さなかわいらしい蠅である。よくバナヽやリンゴ等の皮を捨てゝおいたりするとそれに集る。又酒倉などにもたくさん居る、酒倉に多いので猩々蠅と云ふ名が昔からある小蠅である。英語では fruit fly 即ち果蠅、又は vinegar fly 即ち醉蠅、獨逸語では Taufliege 即ち露蠅、等と俗稱するが、學名で云ふ Drosophila の名は、今生物學の一端をかぢつたものは先づ知らぬものはないと云つていゝ程の有名なものとなつた。

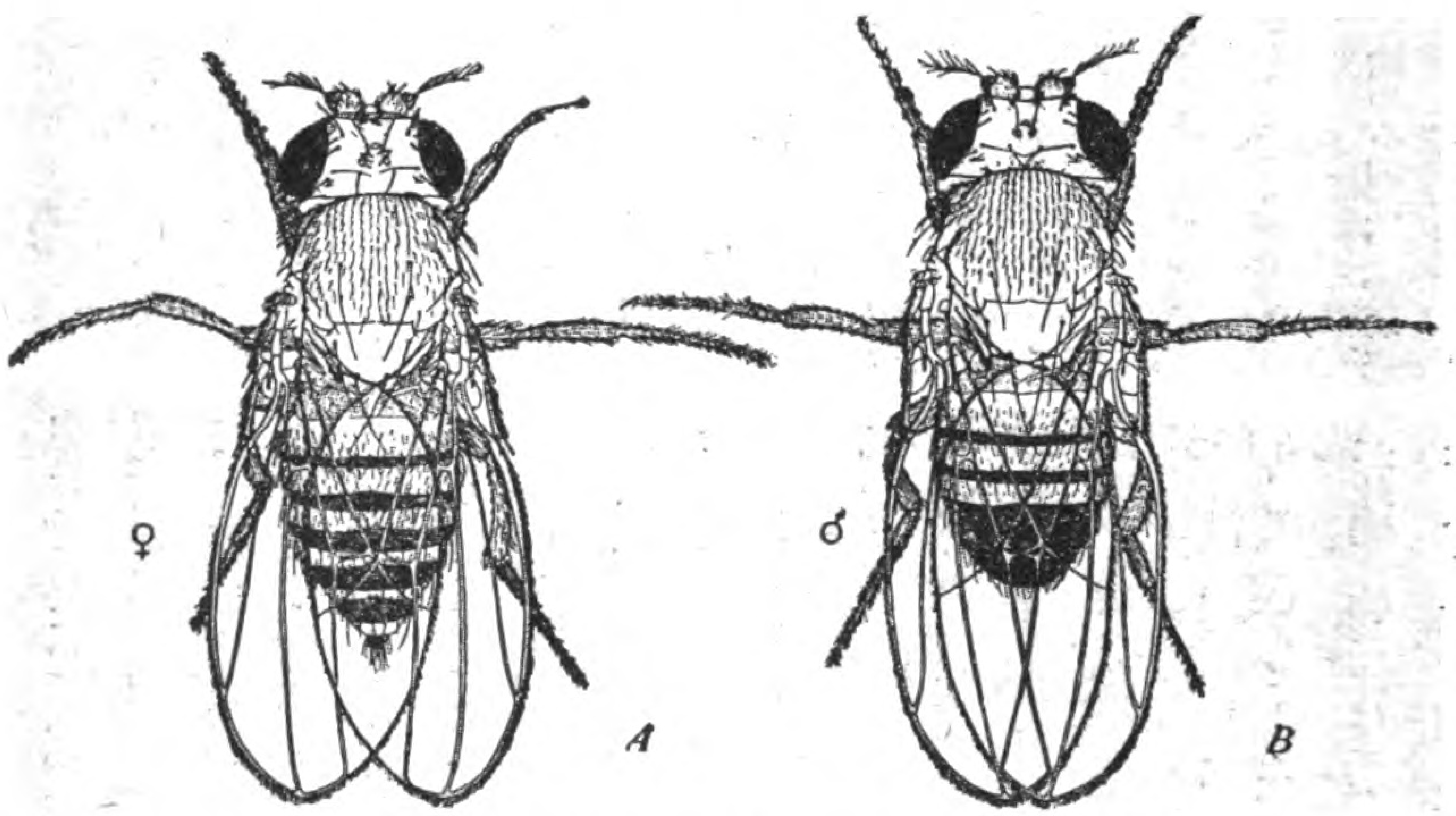
此猩々蠅には色々種類がある。吾國に普通なものも數種はあるが、此遺傳學の研究に最も多く用ゐられるのは、世界至る處、吾國にも最も普通に見出される灰黄色をした、頭の先から疊んだ翅の尖迄一分程の、そしてルビーのやうな美しい眼を持つ、きれいな小蠅である。

それではなぜ此小さな蠅がそれほどまで遺傳學など云ふやかましい學問の研究に用ゐられて、其進歩に貢獻したか。それは凡そ次のやうな理由によるのである。

四

多くの人か知つてをるやうに、遺傳に關する研究は昔からあつたものであるが、これに一時期を劃したのは、一九〇〇年メンデルの法則なるものが發見された事件である。實にこれ以來始めて遺傳學が實驗科學の體を具へるやうになつた。此頃之に刺戟されて多くの生物學者等は永年仕馴れた研究を惜しげもなく打捨てて、爭つて此新しい遺傳學の開拓に從つた。ちやうどそれはカリフオルニアの金鑛が發見されて、利を追ふ人々が吾も吾もと押寄せたのに似て居た。

彼等は思ひ思ひの材料を使つて、メンデルの法に倣つて遺傳の研究に取りかゝつた。動物學者等は鼠や兎や雞や豚や蝸牛などを飼つた。植物學者等はエンドウやスヰートピーやキンギヨサウ等を植ゑた。それで爭つて其結果を發表したので、遺傳學は年一年と急速な進歩をなしたのであつた。



第一圖　猩々蠅（廓大）左雌右雄

かくして凡そ十年を經る間に、メンデルの知らなかつたやうな事實がどしどし發見されて、色々の新しい重要な附け加へが此遺傳の根本法則になされた。此新機運の先頭を切つたのはベーツソン等を中心とする英國學派とコレンス、バワー等を指導者とする獨乙學派であつた。

處が此頃から此指導的立場が俄に太西洋を渡つて米國の方に移つて往つた。それはコロンビア大學のモーガン教授が其猩々蠅の研究を矢繼早に發表し始めた事に因る。なぜ教授の仕事が此遺傳學の指導者の御株を海の向うから奪つて來たか。それは全く此蠅が研究材料として他の何れの動植物に比べても、遙に

優れたものであつたからである。

第一に此蠅の一世代はせいぜい一週間か十日である。それだから條件さへ良ければ一年間に二十代でも三十代でも繰返す事が出來る。人間ならば頼朝公以來の系圖が二年か三年で譯なく完成する。鼠や兎や雞などのやうな割合に便利な材料でも、一年にせいぜい二三代か五六代のものである。此點で蠅の方にとても比較にならぬ便宜がある。それから一對の雌雄から生れる子の數が非常に多い。都合よくゆけば五六百位は普通の事である。そのほか體が小さいので取扱に頗る便利である。一本のらつきよう壜から二三百位は譯なく孵す事が出來る。そして割合に丈夫で取扱ひ易い。らつきやう壜と同じ口徑の小壜の口にしたコルク栓の裏にくつつけた綿にエーテルを浸ませて、其中に蠅をたゝき落すと、卽座に皆麻醉されて、ころころと倒れて五分位は動かずに居る。そして一通り檢査がすんだ時分には、又平氣で動き出す。全く世話のかゝらぬものである。

五

モーガン教授は此蠅をつかまへて遺傳の研究を始める前は、實驗形態學の大家として知られてゐる。そして其方面の仕事を續々と出す間も何か良い材料はないかと、その鋭い眼を動かし乍ら絕えず諸方面を物色してゐたのであつた。處が一九〇六年頃ハーバード大學の動物學者たちが此蠅を使つて近親婚の影響に關する實驗をしたのが發表された。教授の炯眼は主に其結果よりも寧ろ其材料の非常に貴重である事を觀破した。

それから先づ之を盛んに飼つて、其中から新しい變りものを造り出さうと種々工夫した。それは其頃特に注意を引かれるやうになつた、ドフリースのツキミサウを材料にする所謂偶然變異の研究から刺戟されて、動物でも同じやうな仕事をやつて見ようと云ふやうな考へからであつたらしい。それで蠅の蛆の食物に色々の薬品、酸やアルカリや毒物を混ぜたり、高溫や低溫の下で飼つて見たり、X線などをあてゝ見たりした。

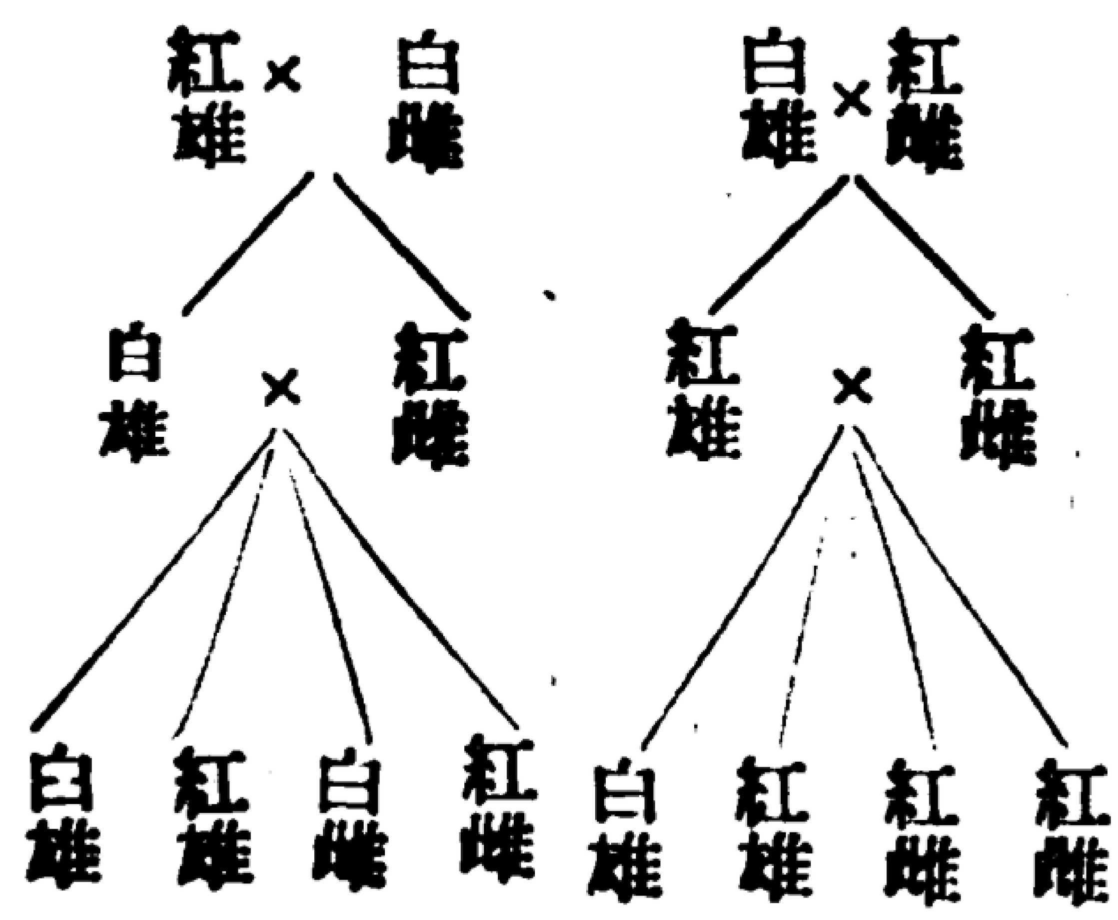
教授の試みは全然徒勞であるが如く見えた。此等の外的影響は蠅の素質に何等變化を與へず、いくら孵しても孵してもまるで普通と變らぬ蠅のみ續々と出て來た。處が或時偶然唯一匹の雄の眼の他と全く違つた色をしたものが見つかつた。普通の猩々蠅の眼は前にも云つた通り、美しいルビーを二つ並べた如き、美しき紅色をしてゐる。ところが此變り物だけはオパルのやうな白い眼であつた。教授は心を躍らせ乍ら、此一疋の蠅を大事にかけてそれに子を産ませた。もちろん其相手の雌は紅眼のものであつたが、子は皆紅眼になつた。卽ち白は紅に

對してメンデル式で云ふ劣性である事が分つた。次に此の紅眼の子の雌雄をかけ合せて孫の代に孵すと、其中に白眼のものが交つてゐた。メンデル式遺傳ならば孫の全數の四分の一が白眼になり、四分の三は紅眼になる筈である。此場合にもその通りになつた。ところがこゝに注意すべき事は、此白眼のものは全部雄で雌は一疋もなかつた。紅眼には雄も雌もあつたが、數から云ふと雌が雄の二倍あつた。

教授は面白いなと思つた。

それから此孫の中の紅眼の雌と白眼の雄とをかけ合せて、曾孫の代を孵して見た。そしたら今度は白眼の雌が始めて得られた。

次に此白の雌に最初の紅の雄をかけたら、子の中の雄は皆白眼になり雌は皆紅眼になつた。此子の雌雄から孫の代を孵すと、雌も雄も半數づゝ紅と白とが生れた。



六

此結果は通常のメンデル式遺傳とは別物である。そしてそれは前から人間に於て知られてゐた特殊の遺傳現象に似てゐる。

即ち人間にある色盲の遺傳と同じ型である。一たい色盲は西洋人でも日本人でも、男には百人の中四五人位の割合にある。處が女には非常に珍しくて、多くてせいぜい千人に四五人しかない。それから其遺傳の狀態を見ると、父は色盲でも男子は決して色盲にならぬ。又此男子の系統には色盲は傳らぬものである。之に反して父が色盲であると、其娘――これも自身は色盲ではないが――の生む孫の中で男は半數色盲になる。又若しかやうな娘が色盲の男に結婚すると、其生む孫の中男女とも半數づゝ色盲になる。それだから、男の色盲は其母方の祖父が色盲であると、半數だけ出來る譯だが、女子のは父も色盲であり母方にも色盲の素質がなければ出來ない者である。それでこれ程珍しいのである。

そこで前に云つた蠅の白眼の遺傳の狀態と、此色盲の遺傳の狀態とを注意して比べて見ると、此二つが全く同じ型の遺傳の型式を取る事が直に分る。讀者願はくは前の表の白の代りに色盲を、紅の代りに健眼を置き、そして上の色盲の遺傳の記述を讀み直されたい、何れにし

ても此等はメンデル式とは違つた、雌雄男女の性によつて、遺傳の型式が影響される特別のもので、之を伴性遺傳と稱へる。

教授は此面白い發見に大分力づけられて、一層此蠅を大事がつて、まつしぐらに研究をつゞけていつた。さうするうちに、後から後からどしどし新しい變り物が出現した。

此等の變り物には或は眼の色變りのもの、翅の短いもの、翅脈に異狀のあるもの、肢の曲つたもの、毛の形の違ふもの等樣々あつた。又眼の色變りと白の他に樣々のものが出て來た。そして此等の遺傳の模樣を前の白と同じやうに調べて見ると、中には白と全く同じ伴性遺傳をするのもあり、又中には通常のメンデル式遺傳、即ち雌雄の性に一向關係なく子孫に傳へられてゆくものもあつた。

七

月日が經つ間に新事實は後から後へと加はつていつた。研究報告は矢繼早に公にされた。「實驗動物學雜誌」等は毎號モ教授の名の出ないのはない程になつた。それに刺戟されて若い優れた弟子たちが教授の許に集つて來た。蠅を飼ふ牛乳壜——米國の牛乳壜は日本のらつきよう壜と形大さ迄同じ位だ——の數は初に幾層倍した。顯微鏡下に全身隈なく檢められる蠅の數は日々幾千幾萬と云ふ夥しいものになつた。世界の生物學界は驚異の眼を擧てゝコロンビア大學動物學教室の古びた建物を仰ぐやうになつた。いつの間にか Drosophila（ドロソヒラ） の名はモ教授の名と共に彼等に最も親しいものとなつた。同時に遺傳學の指導的重量の錘が大西洋の向う側に滑つていつた。

コロンビア大學の動物學教室の建物と設備は、始めて訪ふ人の期待とあまりかけ離れてゐるので、驚されないものは全くない。其校庭の片隅に立つじみな古典的の煉瓦造の建物の一つ、而も其四階のみが動物だから、古くて狹くて汚い事甚しい。其一室に教授を初め其幕僚連が、村役場にでもいつたやうに、押すな押すなと机をぎつしり並べて控えて居る。そして世界の遺傳學者の誰知らぬもののない高名の弟子連は何れも先生と同じ蓬頭垢面の梁山泊然たる輩である。或惡口屋の若い生物學者が鐵道工夫の溜りへいつたやうだと筆者に云つた事があるが、大きな眼玉に翼の擴がつた鼻の下にいつでもマドロスパイプを離さぬ Sturtevant（スターテヴァルト） 赤い猿のやうな顏をして風狂の如き Bridges（ブリヂエス） 頰に大きな傷痕のある Muller（ムラー） 此等は何れも其山賊の頭目の如き風采のモ教授の一味たるに恥ぢない風采をしてをる。こんな先生達が光の都紐育の眞中に陣取つてをるのは、周圍と實に面白い對照である。

然し彼等がこゝで十幾年、紙屑と塵とに交つて、遠慮のない無駄話に大笑をし乍ら牛乳壜の底をはたいて居る間に遺傳學は斷然其面目を

一新したのである。詩人は一莖の草でも之を殘りなく究め盡す事が出來たら、天地の秘密が分ると歌つたが、全く其通り、此一種の見すぼらしき小蠅もそれを詳しく研究する事によつていかに多くの自然界の機微が露はされたか、後より顧る時は唯驚きあるのみである。

さり乍ら之等を詳細に紹介する事はとうてい今私の能くなし得る處でない。こゝにはたゞ其極めて梗概を、而もかやうな專門的事項に親まれぬ方々にも語り得る程度に於て、述べるに止るは亦已むを得ぬ次第である。

八

モーガン教授及其一黨の此猩々蠅を材料とした研究によつて、遺傳學界に貢獻した著しい事實だけを拾つて見ても、第一に遺傳の事實を所謂染色體としつかり結び附け、從來よほど神秘的に考へられてゐた遺傳の現象に確固たる物質的基礎を與へた事は頗る注意に値する。

教授等が蠅を孵しては殺し、殺しては孵しする間に、前に云つたやうに色々と新しい變り物が見出された。其數は數年を出でぬ間に幾十となり、十年餘もたつ中は二三百の夥しいものになつた。夫等の遺傳の狀態を調べ、殊に其相互の間の關係を究めて見ると、いろいろの面白い事實が分つて來た。

此等の中には前に述べた白眼などのやうに伴性遺傳をするものも多くあつたが、通常のメンデル式遺傳即ち雌雄の性を度外視して考へていゝやうな遺傳の形式を取るものも少くなかつた。

例へば體の色の煤けたやうになつてをる變り物所謂黑などはそれで之を通常の體色即ち灰の蠅とをかけると、子は皆灰になり、孫は雌雄の別なく四分の三が灰、四分の一が黑になる。眼の色の變り物緋なども同じ事で、之と通常の紅との雜種の孫の代は紅三、緋一と云ふ割合に分れる。そこで此體の色と眼の色とを同時に取つて其間の交渉を見る。例へば紅眼灰體の雌と緋眼黑體の雄とをかけ合せると子は皆紅灰になるが、之から孫を得ると、それ等は紅灰九、緋灰三、紅黑三、緋黑一の割合に分れる。或は又此紅灰の子を緋黑を所謂かけ戻しをすると、紅灰、緋黑、紅黑、緋灰の四種の孫が同數づゝ現れる。要するに體色と眼色と此場合には相互に何の交渉もなく子孫に傳へられるのである。

これだけはメンデルが已に古く其エンドウの實驗によつて見出した事を新材料で證明したに過ぎない。

處が此場合に體色の黑と組合せるに、緋を以てする代りに同じ眼の色でも紫と云ふ緋や紅とは一見して區別されるものを取る。即ち例へば紅灰と黑紫とをかけ合すとする。さうすると子は紅灰となる事、前

の場合と同じであるが、此子より孫を得ると、其數の割合は前の黒と緋とを組合せた場合と全く別になる。即ち九、三、三、一と分れる事は決してなくて、五〇、一六、一、一に近い數となる。即ち紅灰と紫黒とが非常に多く、紫灰と紅黒が甚少い。又かけ戻しの場合を取るに、紅灰の子の雌に紫黒の雄をかけると、孫は四種同數となる代りに、やはり紅灰と紫黒とが多くて、此等が全數の九十四パーセント許を占め、殘り六パーセントだけが紅黒或は紫灰になる。

九

此現象はメンデルの知らなかつた事であるが、果して之は何によるか。

蠅に於てモーガン教授が之を見出す前に、英國でベーツソン等が同樣の事實をスヰートピーの花の色と花粉の形との遺傳に於て知つてゐた。教授は此場合に用ゐられた說明を應用して次の如く蠅の場合を解釋した。

即ち前の緋と黒とであると、此相互の性質は互に何等の交渉もなく、恰も路傍の人の如く自在に離合する者であるが、緋の代りに紫を取ると、紫と黒との兩因子は夫婦親友の如く相互に伴隨して容易に離れ難い關係にある。それ故孫の中の紫黒並に之に相當する紅灰の組合せが甚だ多くできて、紫灰又は紅黒は甚だ少いのである。之を遺傳因子の結合現象と名づける。



第二圖　猩々蠅の染色體　左雌　右雄

そこで此結合現象を基として今迄見出された二三百の新しい變り物を遺傳學的に調べて見ると、それ等が明かに四つの群に分れる事が分つた。即ち先づ前の白眼以下の伴性遺傳をするものは互に結合されて子孫に傳へられる。之等が總計數十種もある。其殘りは又三つの群に結合してをるが、其中の二群は大きく何れも數十種以上を含む。その一群は今述べた黒や紫を含むもので、他の一は緋などの屬する者である。後の一つだけは他の三群に比べると、非常に小さくして僅に四つか五つの因子のみが屬してなるに過ぎぬ。

處がこゝに又一つ面白い事が別にある。

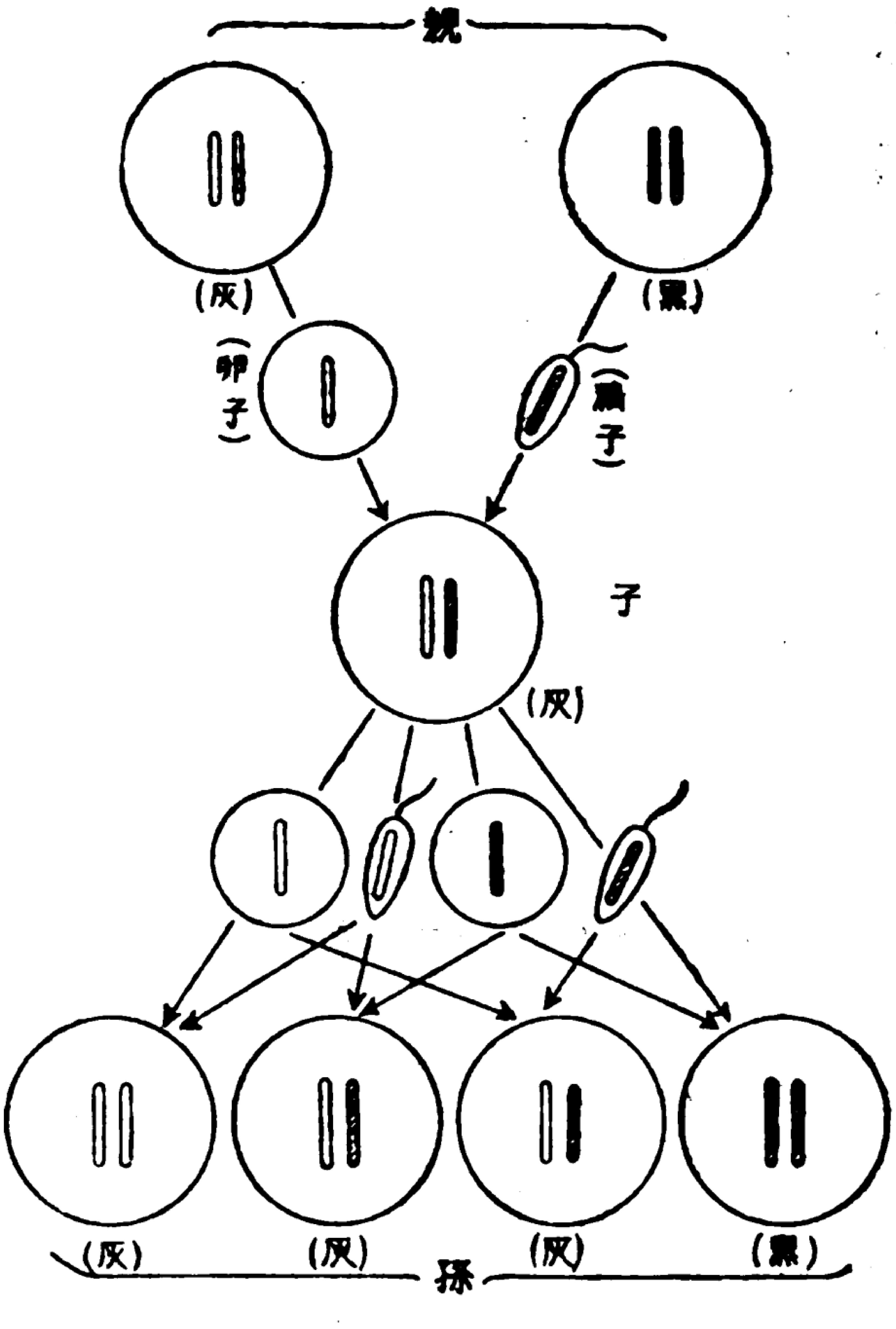
それは一方顯微鏡の下に此猩々蠅の染色體が檢査されて、其狀態が分つて來た。染色體とは各種動植物の細胞の核の中に入つてをる奇妙な物質で、それが核の分裂毎に一定した、そして動植物の種類毎に固有の形及數をなして現れる者である。

此猩々蠅の染色體の狀態を見ると圖の如くである。即ち總計四對八

個あつて、其中一對は小さくて點狀をなし、殘りは細長くて線形である。處が此三對の中で一對は稍短く、ほゞ眞直であるが、二對は長くして稍弧狀をなしてゐる。

そこで前の結合の關係による遺傳因子の群と此顯微鏡の下に觀られる染色體の狀態とを比較對照して見ると、そこにふしぎな一致を見出すのである。即ち四群と四對、數が同じであるばかりでなく、其中一は甚小さく他は大きい。大きい三の中にも一は特に他と違つた特徴がある。

これだけの事實があれば、誰でも遺傳因子は染色體の中にあると云ふ事に氣附くであらう。モ教授がこの事實を見逃すわけは無論ない。



第三圖 通常のメンデル式遺傳の說明圖

(黑と灰の例)

一〇

それでは此等の遺傳の現象はいかに染色體と結びつけて說明されるべきか。

此蠅の體の細胞にある染色體は、今云ふ通り八つあつてそれが四對になつてをるが、雌雄の生殖細胞即ち精子又は卵が出來る時には、それ等の中四つだけ、即ち一揃だけが其中に入る。從つて精子や卵にある染色體は四つである。それが受精即ち精子が來て卵と合する時に一所になつて、又八つ——四對に戻る。

之は動植物界一般に行はれる通則に從つたものであるが、此四種の染色體の中で一つ即ち中位の長さの眞直なものは之は性染色體と稱へて、雌雄の性を決定するのに關係のある染色體である。そして其中に伴性遺傳をする諸因子が含まれてをるものと考へられる。

そこで前の遺傳の事實を此等染色體と關係附けて、どう考へたらよいかと云ふに、例へば前の體色の黑の遺傳で云うと、(第三圖參照)、此性質を代表する因子は、長い二對の染色體の中の一對に含まれてを

る。ところが通常の灰の蠅には、黒の因子はなくて其代りに灰の因子がある。それから精子又は卵が發達するときには、何れも一對の染色體の中一本だけが其中に入るから、黒の蠅の生殖細胞には此一本に黒の因子が入り、灰の蠅のは灰の因子が入る。

そこで灰の蠅と黒の蠅とのかけ合せを行ふ時には、灰の蠅からは灰の因子が來、黒の方からは黒の因子が來るから、子の體の中では此灰と黒との因子が同居するが、灰の性質の方がいはゆる優性だから、子の外觀は灰になる。次に孫の代を造る時には、かやうな雜種の灰から出來る卵又は精子の或ものには灰の因子が入り、或ものには黒の因子が入る。それが卵でも精子でも同じ事が行はれるから、受精の結果は灰と灰と出會ふ場合一、灰と黒との場合二、黒と黒との場合一となる。處が灰黒は灰灰と外觀上區別ができぬから、蠅の外觀から云へば灰三、黒一と分れるのである。(第三圖)。

更に二種の性質を同時に考へる場合はどうかと云ふと、前の黒と緋との如く互に沒交渉に遺傳されてゆくものは、二種が全く別の對の染色體にある場合である。だから生殖細胞では緋と黒と、紅と灰と、緋と灰と紅と黒と共在するチャンスが全く等しく、從つて前述べた如き結果になる。(孫にかけ戻しの場合を考へると、理解し易い)。

處が紫と黒と云ふ如き結合をなす因子は、同一染色體の中に共在する者である。それで常に相伴つて傳へられてゆくのである。

かやうに説明すると、蠅の飼育によつて得た結果が染色體とちやんと關係づけられて、はつきりと理解されるのである。

二

尚右に述べた説明は次に云ふやうな染色體の異常の場合によつて確實な裏書きを得る。それは生殖細胞の生ずる際には、各對の染色體が一つづゝ別になつて各生殖細胞に入るわけであるが、稀に二つとも入つたり、又二つとも入り損つたりする。さうすると妙な事が起る。

例へば一ばん小さな群に屬する性質で無眼と云ふのがある。之は全く蠅の眼がなくなつて盲になつてしまつたり、又は甚だ小さくなつてしまつたりするものである。之は劣性だから、通常の有眼の蠅と無眼の蠅とをかけ合せると子は皆有眼になる。ところが稀に此有眼の蠅の精子或は卵子に點狀の一ばん小さい染色體の無いものが生ずる事がある。かやうなものが受精に與ると、其子は有眼と無眼との雜種であるに拘らず、有眼にならずに無眼になる。

此事は一方に於て遺傳の實驗の上から、又他方では細胞學的に顯微鏡の下で、證明せられる事で、此兩方から疑ひなく此無眼と云ふ性質の因子が點狀の小染色體に存在すると云ふ事實を確立すると共に、一

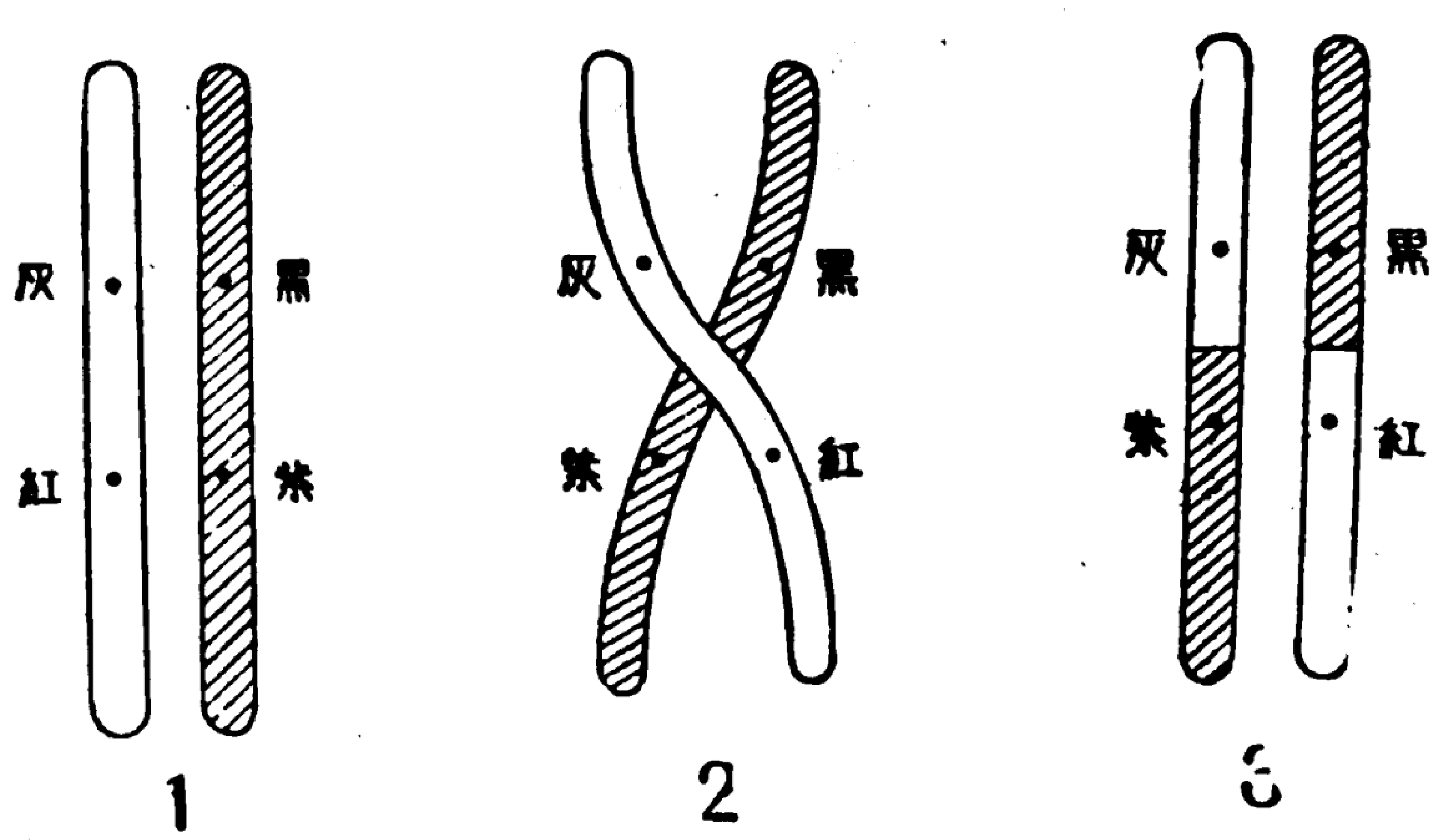
體に遺傳因子の或特定の染色體中に存する事を證明する者である。

同じ樣な事は性染色體にも起り得るが、此說明は後に性の事を述べる際にする方が便宜である。それより前に述べかけた結合の事に就いてもつと云ふべき事がある。

結合と云ふ現象は二種以上の遺傳因子の伴隨する事であつて、それは此等が同じ染色體に在るためである事は前に述べた。ところが此伴隨又は結合は絕對的のものではない。此等因子は一つの體の手と足とのやうに切り離せないものではなくて、夫婦又は友達のやうに時として別々になる。それだから前の例の紫と黑でも少數乍ら紫と灰、紅と黑と云ふやうな組合せもできたのである。此時々の分離は果して何に因るか。

モーガン教授等はかう考へる。

それは生殖細胞の生ずる際に染色體が切れて又つながるためである。即ち此黑と紫との因子は一本の絲のやうな染色體上にそれぞれ違つた位置を占める。そこで對をなす二本の染色體が或時期に恐らく其中間の處で切れ、そして半々づゝが初めと違つた組合せに再びつながる事が起るのであらう。例へば染色體がAとBとあると、Aはaとa'とに、Bはbとb'とに切れ、それがつながる時にはab'、a'bと云ふ風になる。(第四圖)其結果、黑と紅と、及び灰と紫と云ふやうな新しい組合せが出來るのであると。



第四圖　交叉の模型圖

此說にはまだ確かな細胞學的の根據はない。然し染色體が二本づゝ一定の蛇のやうに絡み合ふ有樣は比較的たやすく顯微鏡の下で見える。たゞそれが途中で切れて又つながると云ふやうな事は實見されて居ない。然しあり得べき事だと多くの人は考へてゐるのである。

何れにしても、かやうに遺傳因子の間に入れ違ひの起る事を交叉と名づけてをる。

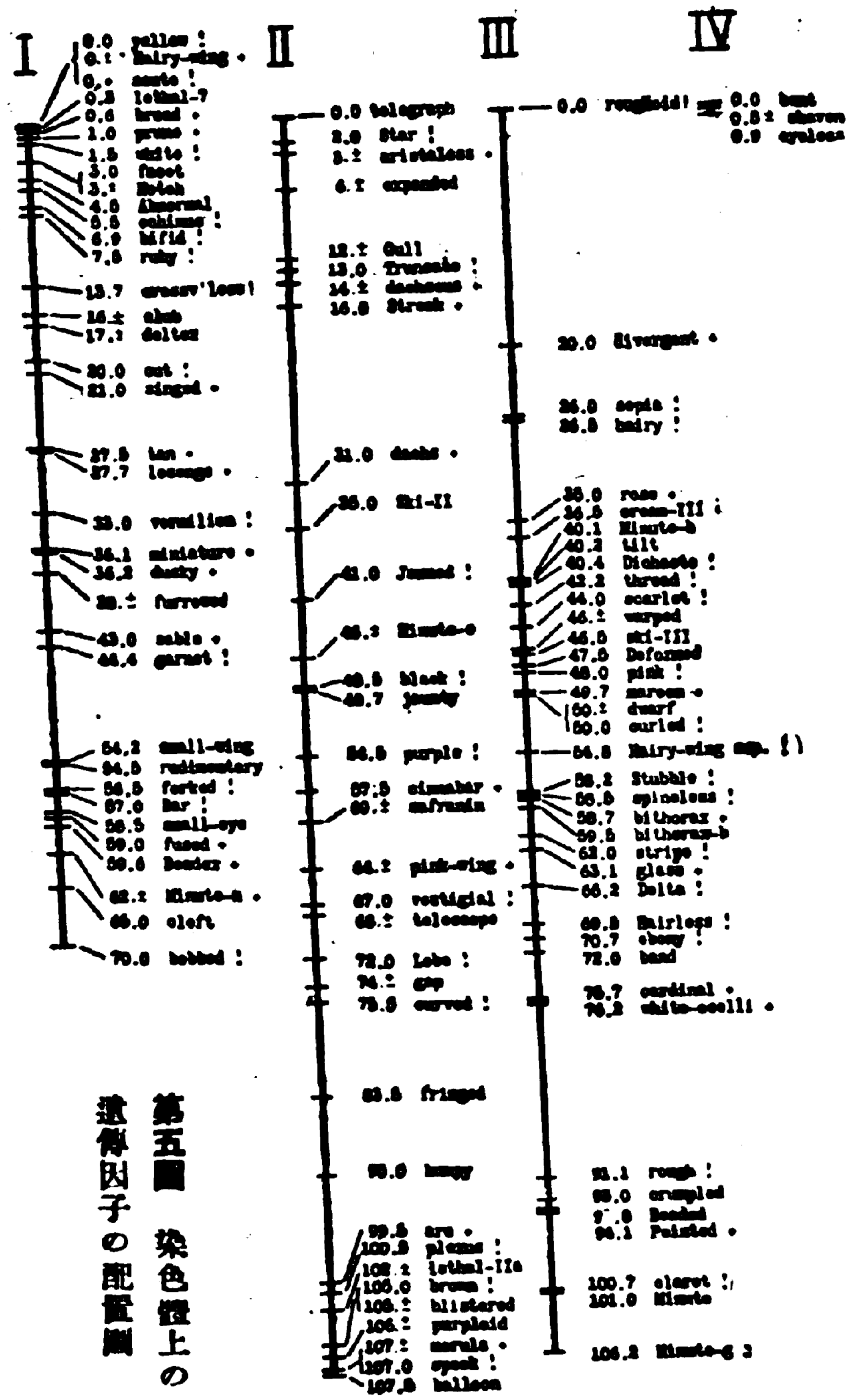
一二

そこで此交叉の現象は結合の關係になつてをる因子間にはいつでもある事であるが、注意すべきは、此交叉の起る頻度が因子によつて一定で、全數に對する百分比が常に等しくあると云ふ事實である。例へば黑と紫ならいつでも前に述べた六パーセントの交叉がある。そして因子の組合せが違ふと値が違ふ。たとへば同じ染色體にある因子で眼の

朱色になる者がある。之と黒とを取つて見ると、其間の交叉價は九である。又別の因子で翅を非常に小さくするものがあるが、之と紫との間の交叉價は十二である等々である。

之は何に因るかと云ふに、恐らく此等の因子の染色體上に於ける位置の相違によるものであらう。卽ち若し二種の因子が染色體の上に極めて接近して並んで居るとすると、其間に交叉は容易に起らぬに違ひない。卽ち其間の交叉價は極めて小であらう。之に反して互に相離れてあれば此事は起り易く、其價は大となるであらう。

そこで若し染色體の各部分に同じやうに切りつなぎの現象が起り得るものとすると、因子の間の交叉の價は卽ち其位置の距りを表はすものとなるわけである。此考へを基として、又右の假定の上に、染色體上に於ける因子の位置を、ちやうど鐵道線路の圖の上に停車場の位置を描くやうにして描いたのが第五圖である。



第五圖　染色體上の遺傳因子の配置圖

元より此圖の作製は前述の如き假定の上になされたものであるから、實際とは大分違つて居るかも知れない。

それにして右述べた如き決して無理でない假かばかりの假定の上にできたもので、從來雲を掴むやうであつた遺傳の現象にこんなに精密な物質的の根據が與へられるに至つた事は、昔に比べると實に著しい進歩であると云はなければならぬ。

又かやうな配置圖がいゝ加減のものでないと云ふ事の證據の一として、次のやうな事實がある。卽ちこゝにAとBとの二つ、並にAとCとの二つの交叉價が、共に實驗の上から分つたとする。さうするとこ

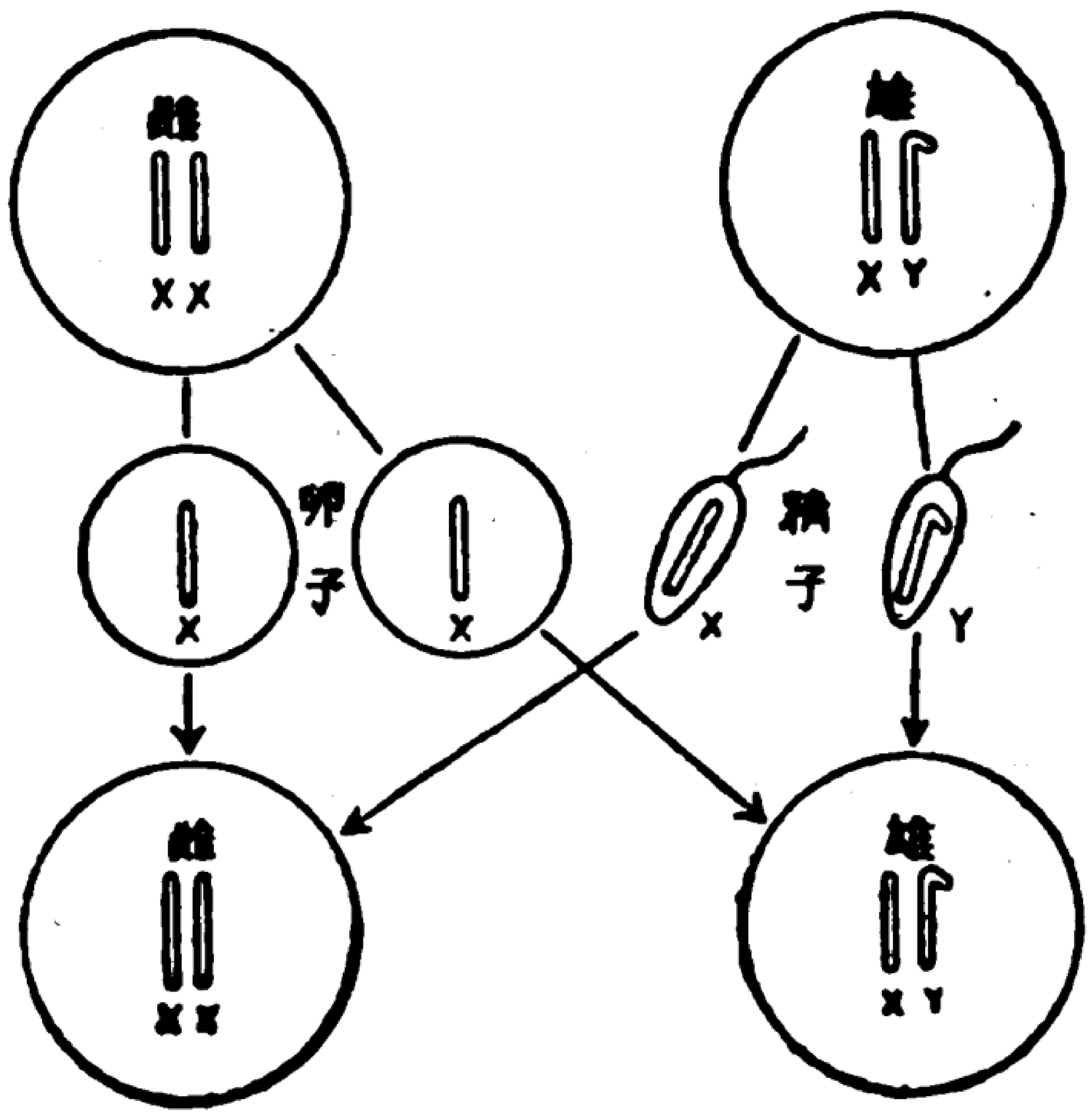
れだけの事を材料として、ＢとＣとの間の交叉價を机の上で算定する事が出來るのである。卽ちそれはＡＢ及ＢＣの價の和であるか又は差である。云ふ迄もなくＡＢＣの順序に並ぶ時には和となり、ＢＡＣと云ふやうな順序である時には差となるわけであるが、之は實驗上から直に證明せられる事で、此事實は前の圖のあるやうに置かれた因子の配置が、恐らく自然のものとあまり違はないものであらうと云ふ事を示すものでなければならぬ。

三

なほ此蠅を材料として研究され發見された遺傳學上の事實の多くあるうちに、最も重要なるものとして雌雄の性の決定に關する事がある。

生物の性がいかにして定るか、之は大昔から學者も非學者もが等しく抱いた疑問であつた。處が此世紀の初頭、メンデル法則の發見と前後して此事が大第に明にされ、今日では殆んど疑問を殘さない程度に迄至つた。

卽ちそれは專ら生物の染色體によつてなされるのである。今昆蟲等の染色體を一々に就て良く觀察すると、其一群の中に他と一種違つた形大さの、そして、其擧動迄違ふものが見出される。而かもそれが雌の細胞と雄のとで多少趣が違ふ。時とすると雌にはさう云ふものが一對あるのに雄には一つしかない、或は一つと今一つ之と違つた大さの小さなものであつたりする。かやうな染色體の本性は最初の程は分らなかつたのでＸ染色體と稱へられた。そして之と不對の小さなものがある時には之をＹと稱へた。後になつて之が雌雄の性の決定に重要な役目をする事が知られて、之等に性染色體の名が與へられるやうになつた。



第六圖　雌雄の性の決定法を説明する圖

猩々蠅では前述べた八個四對ある中で中位の長さのが此性染色體である。それでそれ等は雌には明かに同形同大のものが一對あるが、雄では其一本が少し違つて其端が僅に曲つて多少Ｔ字形をしてをる。これがＹであつて、眞直なのがＸである（第二圖）。

そこで性細胞の出來る時には、雌だとＸが一對あるから、それが一つづゝ卵細胞に入る。處が雄だとＸとＹとが一種の對をなしてをるので、精子の出來る時には其半分にはＸが入り、半分にはＹが入る。そして受精の時に此Ｘを含んだ精子が卵に入れば、雌が生じ、Ｙのある精子が入れば雄を生ずるのである。

通常の場合の此蠅の雌雄の性はかやうにして決定せられる。一口に

云へば卵は皆一樣で、精子に二通りある。つまり精子に雄を生ずるものと、雌を生ずる者と二種あつて、性の決定は之によつてされるのである。

此事は人間でも同じであつて、人間でも女の卵巣から出來る卵子は性の點では一樣であるが、男の精巢より發達する精子には二種あつて、其半數は男子を生じ、半數は女子を生ずるのである。

それならば精子の染色體の中の何が之をするか。一寸考へると、XとYとの性染色體のみが之に與るやうであるが、さう簡單にはゆかない事は次の事實を見られたい。

一四

前にも云つたやうに、通常の蠅は四種の染色體が一對づゝある。但し性染色體は雌にはXが一對あるが、雄にはXとYとある。ところがモ教授門下の秀才ブリヂエスが、四種の染色體とも三つづゝある變り種を見出した。そして之は立派な雌であつた、又四つづゝあるものも發見された。之も雌であつた。

其ほかに妙なやつが見つかつた。それは雌ともつかず、又雄ともつかぬやつである。

一たい此猩々蠅の雌雄は一見して人間の男女よりもはつきり區別される。第一に色が違ふ。大きさが違ふ。雄には交尾の時に雌を捉へる道具がある。然し一ばん著しいのは尾端の交尾器の違ひである。そこで此妙な蠅――吾々は雌雄の中間だから、間性と云つてをるが――は此等の點が雌雄の中間になつてゐたり、或は或點は雌で或點は雄だと云ふやうな狀態になつてをる。

ところが此等間性の蠅の染色體を調べて見ると、各種三揃づゝあつてたゞXだけが二つしか無いと云ふよほど變則な事になつてをるのである。

これだけの事實を基にして考へて見ると、少くも此蠅では雌雄の性がX染色體と他の染色體との量的の比で定るらしく思はれる。即ち通常のものでは、雌では染色體は皆二つづゝあるから、此比は一對一である。それから雄はXが一つしかないから、通常の染色體を一とするとXは二分の一である。ところが間性は之等が三揃と二つだから此比が三對二となる。又四種各三揃づゝあるもの又は四揃づゝある者は、此比が一對一に等しいが、此等は總て雌である。

若し此說明が誤でなくば、通常の染色體が二揃とXが三つある場合はどうなるか。此場合には比が一對一半になる。即ち雌の場合より大きくなる。或は此反對に通常の染色體が三揃でX一つの場合はどうであらう。之では比が一對三分の一である。即ち雄の場合よりも小さい。

前の勘定を押してゆけば、前の場合は雌以上の雌即ち超雌とでも云ふべきやうなものになるし、又後のは雄以上の雄即ち超雄とでも云ふべきものになる筈である。事實かやうな變則な蠅は何れも少數乍ら見出されてをる。そして性的には一方は雌の特徴を具へ、一方は雄であるが、其他の點では通常の雌雄とはいろいろ違つた點もあり、殊に最も著しい事は何れも生殖力を失つてをる。即ちあまり極端に雌らしく又雄らしくなつた事が、終に其雌たり或は雄たる本質を失はしめる如き事になつたものであるらしい。然し何れにしても此等は超性と呼ぶべきものである。

通常の染色體とXの比	性
1 : $1/3$	超雄
1 : $1/2$	雄
1 : $2/3$	間性
1 : 1	雌
1 : 1.5	超雌

一五

此蠅の性の問題に就てはまだ奇怪な事がある。

それは前からたびたび云ふやうに、此蠅の雌にはX染色體が二つある。これは發生の初めからの事であつて、即ち最初Xを一つ含んだ卵にやはりXを含んだ精子が來て受精した瞬間に必然的に定る事である。それからかやうな卵、所謂受精卵が分裂して發育し、孵つて蛆となり蛹となり、終に蠅となるのである。そしてかやうな卵からは必ず雌蠅が生ずる。

ところがどうかしたはずみに、此卵の分裂の初期にX染色體が一つ迷子になる事がある。假に第一回の分裂の時にこれがあるとすると、二つの細胞の中一にはXが二つあるが、一にはXが一つしかない事になる。そしてそれにも拘らず兩細胞ともどんどん分裂を續けたとする。そして終に蠅の體ができたとする。

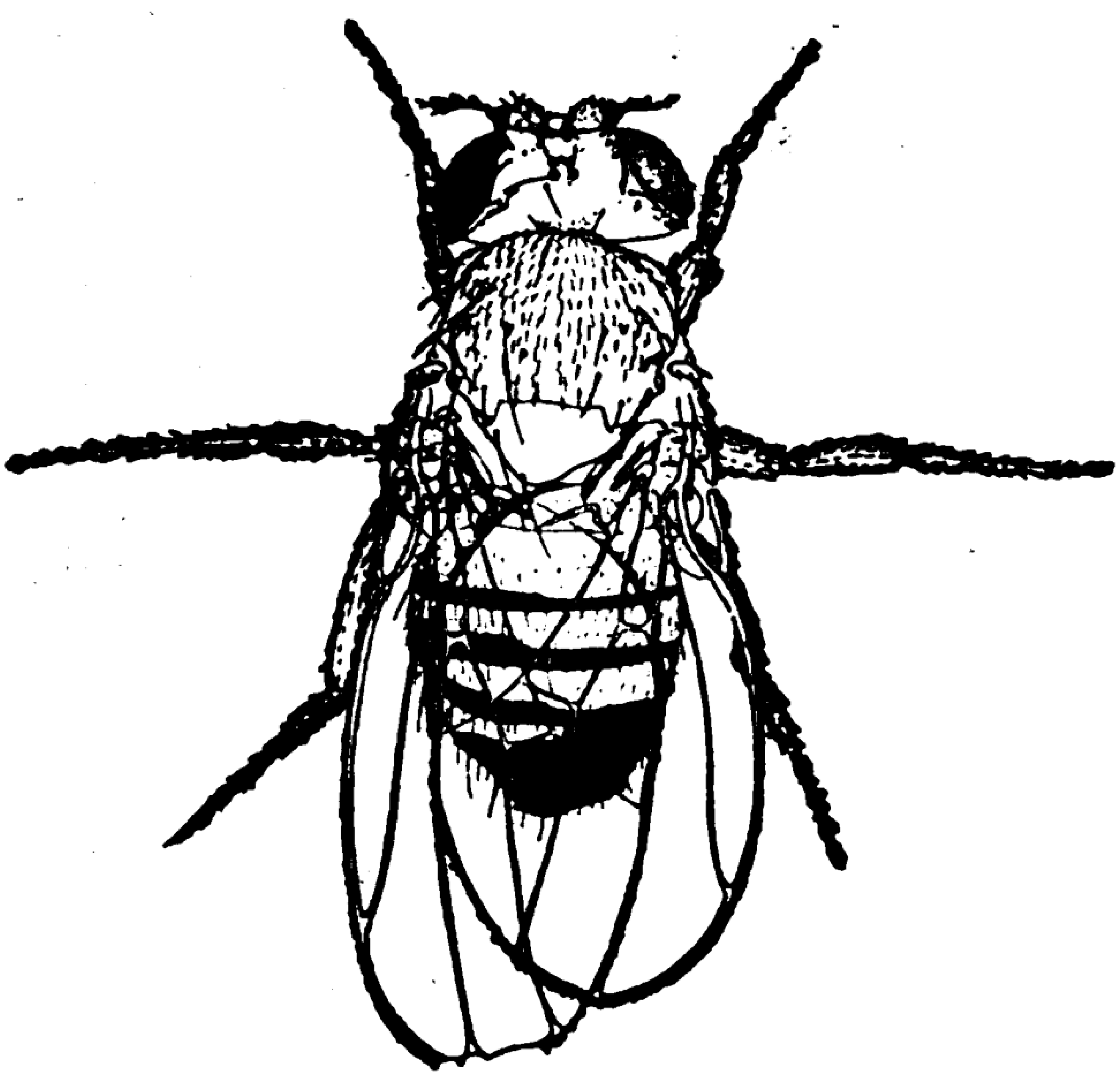
さうすると、Xが二つある細胞から發生した部分はもちろん雌になるが、Xが一つしかない細胞から生じた部分はどうなるかと云ふに、これにも通常の染色體が二揃づつある。さうすれば之とXとの比は一對二分の一だから、前の勘定からゆくと、此部分は雄になるべきである。實際まちがひなくさうなるのである。

即ちかやうな變則な卵から發生した蠅は體の一部分が雌になり、一部分が雄になる。時として蠅の頭から尾端までの正中線を境にして一方が雌で、一方が雄である事もあるし、或は體の四分の三位が雌で四分の一程が雄だつたりする。これは右に云つたX染色體の迷子になる

時期の關係である。

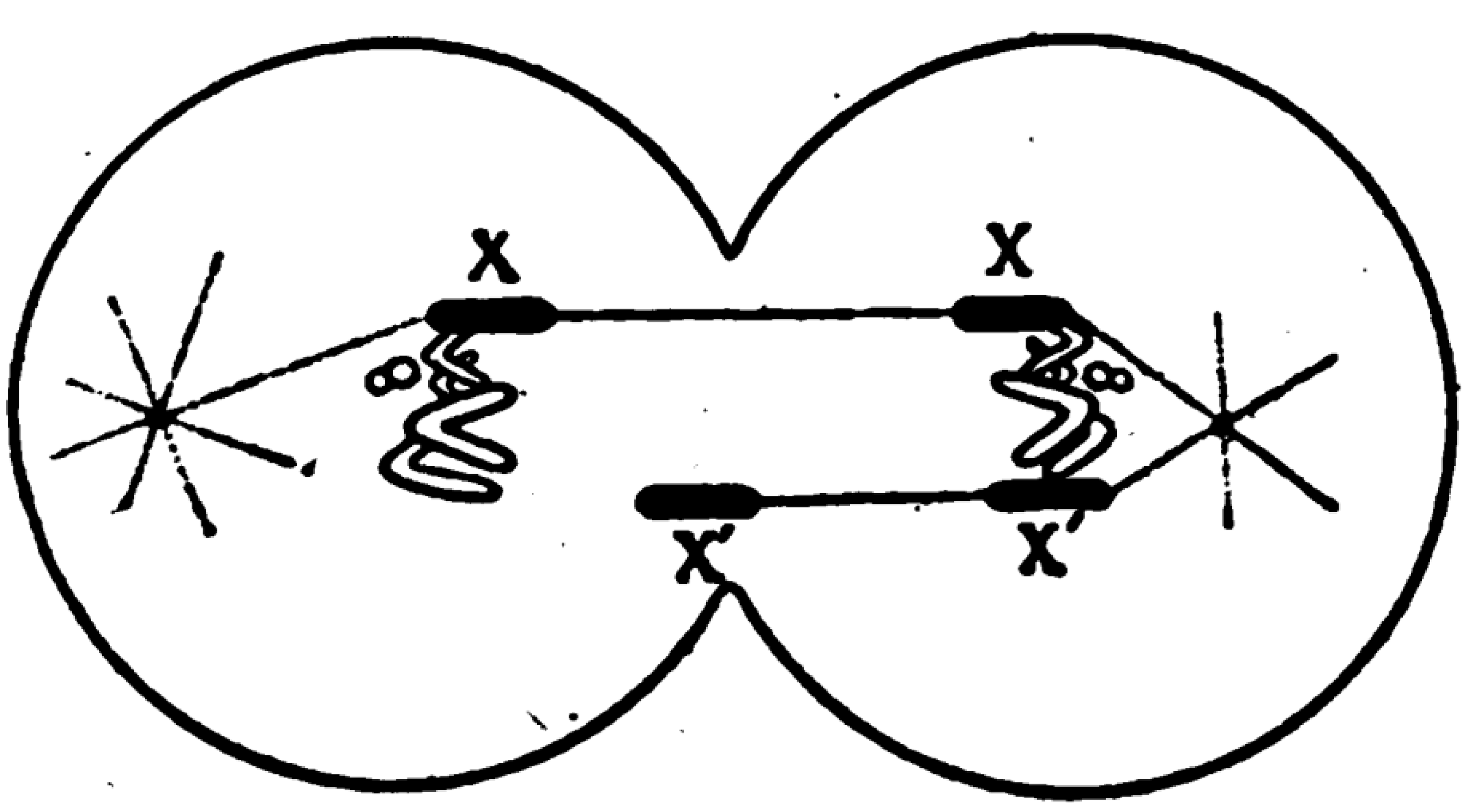
かやうなものを合性と云ふ。これは完全な雌でも雄でもないと云ふ點では前の間性と似てゐるが、性質は之と少し違つたものである。即ち間性は體の各部分が雌と雄との中間なのであるが、合性は部分的には完全な雌又は雄なのである。

かやうな合性は此蠅ばかりでなく、從來蝶蛾とか蜂蟻とか又は鳥などでも稀に見出されてをる。そして其發生の原理は蠅の場合に似てをると考へられる。



一六

モーガン教授が初め此猩々蠅の遺傳學の研究に絶好の材料である事を見出し、自身が他の仕事を放棄して專心此研究に沒頭して以來、十數年を出でぬ間に、かやうに多くの事實が明かになつた。此等は其一つ一つが生物學界への重要な貢獻ならぬはない。然るに今より二三年前に至つて、教授の舊門下で、今は南方テキサスの大學に教鞭を取るムラー等によつて、更に一つの注意すべき研究が公表された。



第七圖　合性の一例（左半が雌、右半が雄）並に其生ずる原因となる卵の第一分裂

それは從來此猩々蠅には前に述べた如く、幾百種の新しい變り物が發見され、其遺傳の狀況が委細に究められたのであるが、此變り物の新に生ずる原因經路に就ては全く分らなかつた。たゞ突然に多くの仲間に交つてひよつくり一疋又は數疋の變つた奴が出現したのを拾ひ上げたに過ぎない。ましてや此變り物を人爲的に造り出す事など全くできない事であつた。尤も前述の如く當初モーガン教授が此蠅を材料に選んだのは、これから新しい變り物を人爲的に造り出したといふので、之に種々の外的の影響を與へたりして見たのであつた。然し此點では全く研究の成績は上らず、却つて仕事は他の豫期せざる方向に發展したのであつた。

ところがムラーはモ教授のなし得なかつた、此人爲的に新形質を造

り出す事に成功した。即ち蠅の孵りたてのものを適當の强さのX線に或時間曝すと、其次の代或は又其次の代になつて種々の新しい變り物が現れる事を見出した。此變り物は從來知られてゐたものと同じやうに、或は眼の色、翅の形、翅の脈、毛の形、體の色の變りなど種々あつた。中には又所謂致死作用、即ち蠅の形には格別變化なく、たゞ其性質が重つて純粹になると、其蠅は其發育をどの時期かに停止せられて死ぬと云ふやうなものも多くあつた。元より此等の性質は一代限りのものでなくて、それぞれ一定の法則に從つて、代々の子孫に遺傳せられた。

此研究は多くの對照材料も使つたものであり、且其後蠅以外の他の材料にも試みられたものでもはや少しの疑惑もない。又X線の外ラヂウムを用ゐても似たやうな結果が得られたのである。

それでは何故X線やラヂウムでかう云ふ新形質が生ずるか。元より詳しい事は分らぬのであるが、恐らく此等の放射線の作用によつて、遺傳の原質構造に根本的の變化を生ぜしめるためであらう。かくして今や遺傳の現象の研究は益々微に入り細を穿ち、且其根本原理に肉薄しつゝあるのである。

モ教授は二年許り前其一黨を率ゐてカルフオルニア州パサデナの新研究所に移つた。曾て教授の許に集つた若い研究者たちは米國の全土は勿論、世界の各地に擴つて、皆蠅を飼つてをる。其飼育場の底から、之より後如何なる驚くべき眞理がたゝき出されるか、蓋し刮目に値するであらう事を記して此篇を了る。

海軍補充計畫と財政

牧野輝智

(一)

豫算は政府の政策經綸を具體化し計數化するものである。每年菊の花の咲く頃は、豫算編成の高潮時で、或は白熱化することもあるが、今年も亦、今正に其の時期に遭遇してゐるのである。本年は歳入の激減がある。國庫剩餘金は使ひ盡されてゐる。それだけでも明年度の豫算編成は容易でないが、更に豫算編成を困難ならしむるものとして海軍の老大なる補充計畫要求がある。ロンドン條約の成立に關聯して當然履行せなければならない減稅の公約がある。(一)不景氣になる歳入の自然減、(二)補助艦艇補充計畫の問題、(三)減稅の實行、此の三つの問題を如何に調和し按排して財政計畫を樹立すべきか。是は經濟問題としても政治問題としても現下の重大問題である。

目下問題となつてゐるのは明年度の豫算案であるけれども、豫算案は明年一ヶ年のことのみを考へて編成すべきものではない。歳入の自然減は明年度一ヶ年限りにて恢復すべきものではない。海軍の補充計畫は今後六ヶ年に亘りて每年巨額の出費を要するものである。減稅に至りては今後永きに亘りそれだけの減收となる可きは勿論である。それ故に問題は寧ろ明後年以後の財政計畫に存するのである。目下の不景氣による明年度の歳入減が何程に達するかは明確でないが、最近の歳入の實績を基礎として推算すると、歳入の豫定額に對し少くとも一億二千萬圓の減收は免れ難い狀態であるといふ。億を超へたる歳入減は豫算編成上の大打擊であつて、明年度にありては一切新規事業を認むる餘地はない譯であるけれども、國家は活動體である。經費がないからとて一切の新事業を認めないといふ譯には行かぬ。現に失業對策としての經費、その他社會政策上の新施設は今日のやうな場合に特にその重要性を有するのである。そこに豫算編成上の苦心がある。それ

に就ては既定經費に對して思切つて斧鉞を加ふることが最も肝要である。財界不況の爲め物價は激落してゐる。失業者續出のため勞働力の利用は容易である。斯かる場合に既定事業費を改定し歳入減に應當せしむるは當然のことだと云はねばならぬ。

(二)

歳入の自然減が甚しいに拘らず、而して既定經費に對して大斧鉞を加ふるの必要があり、新事業は殆ど一切峻拒するの外ない事情にあるに拘らず、海軍の補充計畫をも他の新規事業と同視して此の際は一切引込ましむべしと云ふ譯には行かぬ。嚴格の意味に於ける補充費は國防上絶對的の必要費であつて、所謂新規事業とは其の性質を異にするからである。たゞ問題は如何なる程度の補充が絶對の必要であり、且つ我財政の堪へ得る所かといふことである。減税に至りては今日の場合如何なる犧牲を拂ふても實現させねばならぬ程の必要に迫つてゐる。今日の財界不況を更生せしむるためにもその最も有意義の方法は國民負擔の輕減である。況んやロンドン軍縮條約の成立したる今日、之によりて得たる剩餘金を軍縮會議開會の第一の目的たる國民負擔の輕減に充てるは當然のことなるに於てをや。此の事は濱口首相の公約がなかつたにしても必ず實行す可きことである。不景氣による歳入の自然減に藉口して其の實行を躊躇す可きでないこと勿論である。

斯の如く明年度豫算編成問題としては歳入減に對する歳出減は如何に解決するか。海軍補充計畫を如何に決定すべきか。減税の金額及種目を如何に定む可きかの三つの大問題があるが、歳入減に應當すべき歳出減の問題は暫く省略し、玆には主として海軍補充計畫と財政との關係に就て陳べたいが、此の問題には常に減税の問題が伴ふてゐる。現下の財政問題として減税問題を離れて補充計畫を論ずるは不可能であり、又補充計畫を無視して減税のみを語つてもそれは空論に過ぎない。だから私は本文に於ては海軍補充計畫と財政との關係に減税問題を結付けて、明年度豫算編成の問題を考へて見たいと思ふ。

(三)

海軍補充計畫といふのは補助艦艇の建造費、航空隊擴張費の問題である。而して本問題を了解するには本年のロンドン條約の補助艦協定の内容を知る必要があるが、我國は同會議に於て補助艦全體として七割、大巡七割及び潜水艦の現有勢力保持を要求したのであつたが、それは容れられなかつた。成立した協定は比率の外形に於ては對米六九・七五％となり、要求の七〇％に對して僅に〇・二五％の讓歩に過ぎないが其の實質は我が希望に反するものが少くなかつた。ロンドン條約

に於ける日米の補助艦噸數を示すと左の如くである。

	米國	日本
大型巡洋艦	一八〇、〇〇〇噸	一〇八、四〇〇噸
輕巡洋艦	一四三、五〇〇噸	一〇〇、四五〇噸
驅逐艦	一五〇、〇〇〇噸	一〇五、五〇〇噸
潜水艦	五二、七〇〇噸	五二、七〇〇噸
計	五二六、二〇〇噸	三六七、〇五〇噸
日本比率	六九・七五%	

我が海軍側がロンドン協定に不滿を抱く第一の點は大型巡洋艦（八吋砲巡洋艦）の對米比率が六割に過ぎない點である。是では國防上不安だといふのである。第二は潜水艦の現有勢力七萬七千八百四十二噸が對英米と同一に五萬二千七百噸に制限されたことである。我國の海軍國防に於ては潜水艦を大に利川し大型巡洋艦の劣勢（對米七割の要求が貫徹しても三割の劣勢）を補はねばならぬが、パリチーの潜水艦では大巡の劣勢を補ふ譯には行かぬ。だから比率の外形では對米六九・七五%で要求の大部分が通つたやうであるけれど、實質に於て甚だ遺憾とすべき點があるといふのである。加藤前軍令部長の辭職、海軍最高會議（軍事參議官會議）の開會は主として此の點に關係を有し、樞密院の軍縮條約諮詢も亦此の點に深い關係を有してゐたのである。

（四）

海軍の今回の補充計畫はロンドン條約による國防上の上記の缺陷を補ふ爲めに必要だといふのであるが、今回提出の補充計畫案の可否を判斷するに先ち軍縮成立前に内定してゐた補助艦補充計畫の大綱を知るの必要がある。是より曩き補助艦艇の建造に就て、大正十二年度から昭和六年度に亘る繼續費が議會を通過し豫算として成立してゐた。それによると總額六億七千六百餘萬圓、その内昭和四年度までの支出濟が三億二千二百萬圓、昭和五年度分の豫算が八千八百萬圓、昭和六年度豫算が六千八百餘萬圓である。（尤も昭和五年度の實行豫算では八千八百萬圓中八百萬圓を次年度に繰延べ、六年度の年度割に加算することになつてゐる。）此の補充費は昭和六年度にて終了するので、既に田中内閣の頃から昭和十一年度に亘る艦艇補充費の問題が海軍當局と大藏當局との間に交渉されてゐたが、其の内に内閣の更迭があつた。然るに海軍の要求は八億七千萬圓といふ巨額に達してゐた爲め議が却々纒らなかつたが、結局昭和五年度から同十一年度に至る七ケ年の繼續費として五億一千二百九十萬圓の財源を海軍の補助艦艇飛行機等の建造のため保留することになつた。是が今日補充計畫の問題に就て既定の保留財源と稱せらるゝものであるが、その年度割は次の通り

である。

昭和五年度	六、〇〇〇、〇〇〇圓
同　六年度	一八、〇〇〇、〇〇〇
同　七年度	八七、〇〇〇、〇〇〇
同　八年度	八七、〇〇〇、〇〇〇
同　九年度	八七、〇〇〇、〇〇〇
同　十年度	一一五、九〇〇、〇〇〇
同十一年度	一一二、〇〇〇、〇〇〇
總　計	五一二、九〇〇、〇〇〇

右の保留財源に就ては昭和五年度の豫算編成の當時海軍側からは正式に繼續費豫算として決定し置く可く要求があつたけれども、大藏省側では既に倫敦の軍縮會議參加出席することが決定してゐた場合であるから、其軍縮條約の成否を待つて、正式の豫算となすが適當であるとて豫算には組み込まなかつたといふことである。其の後倫敦の軍縮條約はいよ／＼成立したが、その結果は我國が要望とするところと同一ではなかつた。前に陳べた通り大型巡洋艦の噸數の七割要求、潜水艦の現勢力維持等は容れられなかつた。海軍側で稱するロンドン條約による國防上の陷缺補充といふのは主として此の兩點の讓歩に對する補充を云ふのであるが然らば如何なる程度に如何なる方法にて補充するかといへば海軍側でも內部の意見はまち／＼のやうである。斯ういふ場合に海軍の軍令部とか陸軍の參謀本部とかいふ國防作戰の本元からいふと、少しでも大なる要求に成功する程海軍又は陸軍からのみ見た國防は有利である。だから財政事情などには頓着なく無遠慮に大きな計畫を持ちかけるのが普通である。現に昨年の內約にて留保されてゐる昭和五年度以後十一年度に亘る補助艦建造費の五億千萬圓にしたところで最初の軍令部案は十億圓であつたといふことである。それを大藏省に提出に先ち海軍省が軍令部と折衝し、八億七千萬圓に讓歩せしめ、更に海軍省と大藏省の折衝の際五億一千萬圓に讓歩しそれが今日の所謂留保財源となつてゐるのだといふ。海軍々令部案からいへば半額になつてゐる。海軍々令部では恐らく最初の案を國防上必要缺く可からざるものと稱したであらうが、結果は半額になつた。それでも國防上の責任は採れないといふ聲は聞かなかつた。

（五）

然らば今回の補充計畫はどうかといふに、その內容は秘密にされてゐるから、軍令部の原案も海軍省との妥協案も正確なことは分らないが、傳ふる所によると最初の軍令部案は八億圓に達してゐたさうである。即ち艦艇補充費が六億圓、航空隊擴張費が二億圓、合計八億圓と

いふ老大なものであつたといふ。しかし流石の軍令部もそれをそのまゝ要求することは氣兼して海軍省に要求した時の案は五億二千萬圓程度のものであつたと云はれてゐる。それにしても昨年の財政當局との約束で留保してあるものを全部新計畫に使用することになるのである。其の後海軍省との折衝に於て四億五千萬圓程度の案を作製し、之を軍部の案として大藏當局に交付し目下海軍大藏兩省の事務當局に於て折衝中である。問題は海軍の要求中何程の額を新補充計畫として容認し何程の額を減税に充當す可きかの點である。海軍の要求をそのまゝ容るれば減税は殆ど出來なくなる。相當額の減税をなすには海軍の要求を思切つて削減せねばならぬ。總額は極まつてゐる。それは保留財源の五億一千萬圓である。此の內から假りに軍部の要求通り四億五千萬圓を容認すれば減税に充當される額は僅に六千萬圓、之が昭和六年度から十一年度に至る六ヶ年の分であるから一ヶ年の減税額平均一千萬圓に過ぎないことになる。

謂ふまでもなくロンドン軍縮會議の第一の目的は造艦制限により、國民の國費負擔を輕減することである。その內主力艦の休艦延期は我國のみにて約四億圓の節約になる計算であるけれど、それは現在の財政計畫からそれだけの餘剩を生むといふのではない。ロンドン條約が成立せなかつたならば主力艦だけで今後五ヶ年間に四億圓の新經費を要することになるがそれを要求しないで濟むことになつたといふだけであるから其の節約は消極的であつて別に積極的に餘剩を生むのではない。補助艦の制限はそれと異り軍縮の趣旨を實行するに於ては積極的に剩餘金を生み出し得るのである。然しながら軍部のいふ如く軍縮剩餘金をロンドン條約の制限以外の兵備に使用し彼等の謂ふ所の國防の缺陷を補充せんとするに於ては國民が期待する積極的の負擔輕減は實現し難いことになるのである。

（六）

一體國防の缺陷とは何を標準としていふのであるか。ロンドン條約で潜水艦の現有勢力が對米と同噸數に減ぜられたからそれを補ふ爲めに航空隊の擴張が必要だと云ふけれど、潜水艦と航空機は性質効能を異にしてゐる。航空機急增しても潜水艦の代用にはならぬといふ樣な論は軍部の內にも主張されてゐると聞く。軍部の云ひ分は國防のことは素人の知る所でないといふのが常であるが、その必要最小限度といふのに非常な駈引の存することは新國防計畫の提案される度每に遭遇する事實である。軍部當局は軍備充實の程度のみを見て國防の安全を判定する唯一の條件の如く重大視してゐるけれども、兵備に伴ふ財力がなければ眞の國防は存立し得ない。獨逸が大戰に負けたのは結局は

經濟力が及ばなかつたからである。今日國を擧げて不景氣に惱み、其の打開の一策として減税論が頻りに提唱されてゐる場合に減税を阻止し、財界の更生を阻止し、それで國防の安全が成立し得るであらうか。

又補充計畫と稱して條約に於ける制限以外の艦艇其他を頻りに製造するの計畫を立つることは、外に對しては列國を刺戟して再び造艦競爭を生ぜしめ、內には國民負擔を加重せしむるのである。だから此の際一種の擴張計畫を立つる如きは愼まねばならぬ。是等の點から考へて軍部の要求案は思切つて削減するの必要がある。更に又物價が數前の基準に著しく接近したことに考へて、製艦費其他補充計畫の全體に亘り單價を引下げるの餘地も十分にあると思ふ。

（七）

一方減税問題に就ては政友會は總選擧の際から五千萬圓程度の減税を行ふ旨を聲明し、最近の犬養總裁の政友會大會に於ける演説にも之を繰返してゐる。現政府として一千萬圓位の減税で國民の期待に添ひ得ないこと明かである。又その位の減税では財界の更生に何等の貢獻をもなし得ないのである。勿論減税の財源は海軍軍縮剩餘金のみから求むべきではないけれども、陸軍々制改革の効果を擧げる爲にも今日の場合軍縮剩餘金から相當の減税財源を得ることは先決問題として必要である。軍縮剩餘金が殆ど全部海軍の新補充計畫に充當さるゝ樣では、陸軍の經濟化などは到底望まれない。私の見る所では五億圓の保留財源の中その半額を海軍補充計畫の財源に充て、他の半額を減税財源に充つることが適當ではないかと思ふ。それにしても一ヶ年の減税平均額は四千萬圓に過ぎない。卽ち補充計畫は二億五、六千萬圓に止め、他の二億五千萬圓は減税財源に充當するのである。減税問題にはそれを如何なる税種に振向けるかも重要問題であるけれども、先決問題は軍縮剩餘金の何程を減税に振向け得るかである。國防は海軍々人のみの國防ではない。國民全體の國防である。だから國民の希望が那邊にあるかを十分に考察し、ロンドン條約成立の意義を國民負擔の上に實現せしむることが肝要である。此際民力の休養經濟力の更生が、國防充實の根本を培養する所以であることが海軍當局者にも十分理解され、補充計畫對減税の問題が公平に解決され、困難なる明年度豫算が堅實に編成されることを希望して已まないのである。

——昭和五・一〇・八——

陸軍軍制改革は何處へ行く？

安富正造

◇

先以て近き過去に於ける陸軍軍縮は何處へ行つた？

大正十一年加藤友三郎內閣の下に山梨陸相の手にかゝつた陸軍軍縮はその要綱次の通りである。

（イ） 現役及豫後備召集を通じ八十七日減

（ロ） 人員六萬二千二百餘、馬一萬二千六百餘卽ち平時編制約五箇師團分減

（ハ） 節約せる經費約三千二百萬圓餘

乍併、國防兵力は絕對に之を減少せずとの建前にて、陸軍は（一）特科部隊の擴張又は充實、（二）新兵器裝備及改善を實行して巨額の新規經費を計上したから、前記の縮小は名義だけの縮小に止まり財政上に餘裕を與へるものとはならなかつた。況んや當時第四十五議會に衆議院の全會一致を以て可決せる陸軍縮小整理の建議は、（イ） 陸軍兵卒の現役年限を一年四箇月に短縮すること、（ロ） 陸軍經費より年額現實四千萬圓を節減することであつたから、大正十一年の實績は國民の總意に適應するどころか夫れより遠く懸け離れたものである。

次に大正十三年加藤高明內閣（護憲三派）の下に宇垣陸相の斷行せる陸軍整理は大體次の要領であつた。

（イ） 現實四箇師團及諸部隊の廢止に依り減員約三萬七千二百人

（ロ） 減員に伴ふ國防兵力低下の補充たる意味にて新兵器裝備その他に要する新規經費計上の結果、差引得たる節減額約六百萬圓

（ハ） 特科部隊の充備及新式兵器の裝備のためにする所謂「國防充備費」は其後の追加及改定に依り累增し且右の臨時費のみならず之が維持のため經常費を年々著しく增加する

本年七月末日締切の國庫現計に依る昭和四年度決算を見れば、實行豫算の削減にも拘らず陸軍費の經常費は一億七千八百八十九萬八千餘圓

に達し、之を前年度分一億六千七百六十一萬九千餘圓に比較すれば約一千百二十七萬八千圓の增額である。又右に依る陸軍省歳出總計は彼の實行豫算編成換の結果約二億二千七百萬餘圓に壓縮せられ、之を大正十一年度約二億三千萬圓餘に比すれば約三百萬圓の減額であるが、昭和四年度の原豫算（但し支那事件費二百四十萬圓及その他の追加豫算を含まず）を見れば二億三千二百萬圓餘であつて、それでは第一次整理實施前の大正十一年度決算に比し約二百萬圓の增加に相當する。

之を要するに、從來我陸軍の整理なるものは縮小を旨としてゐないのであつて、國防兵力の全體を不動とし、新規要求の代償として舊式兵備を改廢することに依り、以て當面の經費を捻出したる形態であつて當座は聊か縮小らしくも見えるが、その新施設に對する所謂國防充備費繼續費は、爾後の追加改定に因り累增し且維持費をも隨伴遞增することを國民は知つて置かねばならぬ。

乍併、國民大衆の要望するところは現實に負擔を輕減することであつて、形の上に於て四箇師團減少しやうと、實員に於て五箇師團分削除しやうと、それは國民大衆の實益にはならぬのである。大衆の關心する點は經費その物に存して居るのであつて、軍の內部編制如何は專ら軍部當局の計畫に屬すること勿論だ。先般來議論としては統帥權問題が賑々しかつたが國民の大多數に取つては實生活に即せざる閑葛籐に過ぎない。我陸軍が「縮小」といふを忌みて小細工を弄し文字上「整理」と言はうが「軍制改革」と言はうが、何にせよ今次の處置に於ては經費の盥廻しを斷然止めなければならぬ。そして現實に且相當長期間に亘り國費を節約するの誠意を示すがいゝ。然らざれば好んで國民を離るゝ陸軍になりはすまいかと陸軍自體のためばかりでなく國家のため惜しみ又懼れる。

◇

陸軍は縮小とか整理とか稱しつゝ毎回末廣がりの充備計畫（充備と云ふは擴張の別名に過ぎぬ）を伴ひ、初年度分は巧みに人目を眩惑し得るも期年たらずして正體を暴露すること既に前述の通りであつて、國民一般から見れば僞瞞政策にさも似たるかの如き感じに打たれる。大衆は近き過去に於て陸軍縮小整理の糠喜びを二度味はゝされたが、この苦杯を三度重ねしむることは罪惡である。然るに陸軍の慣用手段は戰場に於ける軍さの駈引を對內的にも地で行くのにあるか、國民に與ふる發表又は宣傳でも虛々實々、何となく油斷の出來難きを反つて覺えしめる。例へば國費に對する軍事費の百分比を示す場合の如き、國庫の歳出總計と陸軍省歳出總計との比較を以てせずして、特別會計を加へたる純計豫算に對する陸軍費の百分比に依りてその割合を故意に過小視せんとする。しかも之を列國の國費對陸軍費の割合と對照す

るに至つては沙汰の限りである。特別會計の本質から言つて不合理なるのみならず客觀的條件に於て國有鐵道とか、官營製鐵所とか製絨所とか、工廠會計とか大學會計、或は屬領會計の如きものを包括せる殆ど無意義の數字――單なる數字として集計せる結果を基準に取りて軍事費の歩合を算出し、それを列國の歳出比較と對比することは笑殺に値するだけである。現代の民衆は斯かる無理な算法に瞞着せらるるには目が明き過ぎて居ることを陸軍では知らないのであらうか？

又、兵力比較に於ても民衆は眉唾物といふ感じに打たれる。折角の軍制調査會は整理縮小に就いて何等の改革成案をも示さゞるに、同會委員は半途に於て大部分更迭し特に中樞的地位を占めて囑望された人物すら閑職に移され、今や小田原評定を重ねてゐる間に最初の目的から歪められた方向に――經費節減より充備計畫に轉じそうな情勢がほの見ゆる。その反面に陸軍側は日本陸軍軍備が列强の夫れに比して劣勢なるかの如く數字的に宣傳して居る。蓋し縮小運動を暗に抑制せんとする目的からであらうが、國民は之等の數字を素直に受取り兼ねるのである。

即ち陸軍の宣傳に從へば露國の平時兵力正規軍六十九萬人、之に民兵部隊を加算し百十萬が中華民國を除く世界第一である。然るに國際聯盟の調査に依れば露國の赤衛軍は五十六萬二千とある。次にフランス陸軍は平時兵力五十六萬五千人として我が陸軍側から傳へらるゝも新編成に依るフランス陸軍の本國人は三十七萬四千人に過ぎない。安南兵とかアフリカ人部隊を加へて比較することは、我國に朝鮮人兵とか臺灣人兵の存在しない場合に釣合の取れぬ次第である。第三にイタリア陸軍の平時兵力は我陸軍の發表に依れば三十九萬人であるが、六萬五千人の憲兵（我國の憲兵は約二千二百）を除けば三十二萬五千となる。しかも國際聯盟では三十萬三千七百と計算して居る。以上の三國はその接壤國關係より所謂陸軍國であるから我國よりも優大なる陸軍を常備するのは當然であらう。中にも露國の如きは對內的軍備としての必要が我國などゝ趣を異にする。第四は我陸軍の順位であると言はねばならぬ。本年二月現在として我陸軍の平時兵力は第七位に置かれ約二十萬人といふことに發表されたが、他の文書に依れば將校一萬五千五百七十人、准士官以下二十萬五千八百五十人、合計二十二萬有餘となる。次に英國は我陸軍の宣傳に從へば平時兵力三十四萬人といふが、その內で正規は約二十一萬、尙その中約六萬人は印度財政の負擔に於て印度に駐屯する故實際英國本土の歳出に屬する常備軍は十五萬人である。併し空軍が獨立して居るのだから其兵力三萬二千への過半二萬人を陸軍に加算するとし尙合計十七萬人にしか達しない。第六にアメリカ合衆國であるが、我陸軍は米國陸軍の平時兵力を三十一萬

六千人と宣傳するけれども、それは民兵(ミリシア)をも含めたる結果であつて、正規軍は國際聯盟の發表の如く十三萬三千餘と認めざるを得ぬ。最後に苦々しき我陸軍の宣傳は獨逸の平時兵力に關するものである。我陸軍に依ればドイツの平時兵力は條約の規定に從ふ十萬人に警察力十五萬を加算し二十五萬人といふが、之は矢張り「ヴェルサイユ」條約通り十萬人と看做すのが至當である。外國陸軍に就きては豫備軍（豫備役に非ず、）民兵、其他軍隊まがひの人員を算入しながら、日本陸軍の平時兵力は嚴格に査定して過小に見積るとは何とした事だ！　軍隊類似のものをも陸軍兵力に入れるならば、我國に於ても警察官、青年團青年訓練所等の人員をも加算せねば公正を失ふ。皮肉なる哉、國際聯盟發行の軍備年鑑には日本陸軍兵力の部に約六萬の警官數を併記してあるではないか。

◇

奇怪にも我陸軍方面からは折に觸れて絶對軍備といふ語が放送される。中華民國とかロシアの如き國に於ては對内的の軍備も必要であらうが、普通の一流文明國、殊に現代日本に在りては軍備は對外的のものたること疑ふの餘地が無い。對外的であれば全世界を敵とするの覺悟が無い限り想定敵國を假設して我が常備兵力を案畫せざるを得ぬ。故に彼我の間に相對的關係が生ずるのであつて、相對性が實在すればこそ軍備競爭も生じ、又國際協定に依る軍縮及制限も行はれ得るのである。之を反證するためには考へても見よ、我國の軍備は瑞典とか丁抹などに對し沒交渉であり、フランス或はイタリアとも無影響と看做される。

我が國際關係の現狀に於て、必然的想定敵たる大陸軍は存在しない。支那二百萬の陸軍が近隣に居るなどと冗談にも口にすれば好個のお笑草である。露國赤衛軍の極東作戰なるものは既に昨年東支鐵道の爭奪戰で以て試驗濟となつた。露國の反革命分子の潜勢力と西部國境の不安とを認識の外に逸してはならぬ。しかも大陸軍國たるロシア、フランス、イタリアに對する我陸軍の平時兵力は數量の劣差が其筋より宣傳せらるゝ程度に大ならず。次位のイギリス、アメリカ、ドイツに對しては宣傳とあべこべに我陸軍の平時兵力が遙かに優越することは前陳の通りである。

然らば此平時兵力と我國の地理的地位とより推算して我陸軍は一時に數箇國を敵に廻し戰ひ得るのであらうが、國民の願望する所は世界の中に活きて世界を友として世界と共に世界の公敵を擊つことであつて、我國が孤立して數國を同時に敵とし若しくは全世界を敵に廻すことでは無い。素より軍費の調達、貿易のバランス、國民生活の維持、軍需品調辨等の實際問題を一考せば輕々に戰爭が出來る筈もない。畢

しこ如何なる作戰を目標とする大陸軍であらうか？　明治時代の日露作戰の如き國民的共鳴は今日實在しないのである。

　國民的共鳴無くして、然して國家總動員の完全なる組織的機能に須たずしては、現代の大戰に到底勝ち難きこと既に過ぐる世界大戰に於て明證された。國家が如何に外的發展を偏重して平時その陸海軍備の强大を誇るとも、內在的の國力に缺くる所あつては有事の際の國家總動員は不具以下のものにしか成らない。國の安全を軍備の上ばかりに期待する迷妄を打破せよ。軍隊と兵器の增勢に依りて優越感の喜悅に浸る者を憫殺せよ。國家の自立繁榮のためには何より先づ內的發展が重大である。今日破滅に瀕する中小商工業者に更生の道を發見せしむることも必要に相違ないが、國防上の觀念から當面の最も緊急事は農村山村漁村の振興である。漁村は暫く措き特に農村山村の疲弊困憊せる現狀が我陸軍當局の明智を以てして理解されぬとは言はれまい。

　卽ち陸軍軍制改革は現實に經濟的効果を擧ぐるに非ざれば、それは眞の改革として國民的意義を成さぬものである。改革方針が依然舊殼を脫せず全體的國防兵力の不變更に固着してゐては、過去の累積を繰返し國民の失望感は怨嗟を招くに留まるべきは明かだ。國本の培養、國力の充實のため、軍備の經濟化と國家總動員の堅實化に方針を定め軍備を能率の增進に置き、國防兵力の標準を斷然變更する の 外 は な い。是が國防の合理化といふものである。

　陸軍側の宣傳に從へば、我陸軍の要求する新施設は歐米諸國が戰時中に改良充實せる新整備に追及するために過ぎぬとのことだ。追隨外交の非難はよく聞くが之はまた追隨軍備であつて決して對等な競爭軍備に非ざるを憾む。何故なら、他國が既に先んじて行へる所を後より模倣して居ては我國に勝目はない。我國の追及前に再び先んじて他國は更に進步する筈である。むしろ先廻りして他國の未だ施設せざる新機軸を創案する位に非ざれば國民は安んじて軍部當局に信頼するを得ない。

　顧みれば世界大戰中には前代未聞の創意が次々に具體化して人々を驚かした。民衆知識の範圍に於ても陸戰に關しては、巴里砲擊の長距離砲、塹壕戰の迫擊砲、タンク、毒瓦斯、飛行船及飛行機の飛躍的發達等數へ切れないものがある。海戰の兵器及所業上の發明を加ふれば尙更ら驚くべき次第であつた。飜つてこゝ僅か數年間に怖るべき長足の進步を遂げ來れるラヂオの趨勢を何と見る？　文明生活に於ける利用價値のみを指すのでは無い。海軍に在りては電波の力を藉りて無人の艦船を操縱し、或は同じく電波の作用に依りて魚形水雷を左右するの實驗を試みる迄になつた。學者は既に電波を應用して晴雨の自由を得んとし、農夫は電波の影響に因る耕作を體驗するの域にまで進みつ

つある。次の大戰は人類の大不祥事として排斥すべきものだが、若しそれが行はるゝことあらば、飛行機は電波のために墜落し、飛行船は電撃に依りて爆發し、交戰國民（或は非交戰國民及生物全部）は殺人光線と毒瓦斯とに苦しめらるゝことを豫期して差支へない。

我陸軍當局が遠大なる眼識を以て眞に軍制改革を志すとせば、從來の囚はれたる觀念を虚心坦懷に一掃して掛らねばならぬ。我國は征年露國と戰ふに十年の臥薪嘗膽を嘗歷した。現下差迫りたる戰爭原因は無いが、若し有つても國家の悠久なる生命に比すれば二十年待てぬ筈は無い。國家の大策を籌畫する者は少くも二十年位の前途を目安とすべきである。國の内外に共通なる現代機械文明の世界的動向、外は國際紛爭の平和的解決に關する機構の發達、内は我國の内的發展の緊急なる事情、之等の重大要素を直視し兵力標準を變更するなら、前に吟味したる我陸軍の平時兵力を半減して、その得たる餘裕財源を以て一半を國民の負擔輕減に充當し、殘額を以て主として理化學的研究實驗費又一部を當面の新式裝備費に供し、眞に劃期的なる効果的軍制改革を實現することが出來る。（五・一〇・一〇）

國防と陸軍整理

佐田國雄

第一　高級將校の整理

一、從前歩兵聯隊には上長官六名ありしが現時に於ては著しく增加し、勿驚、實に十名乃至十一名の多きに至つた。即ち聯隊長大佐一、聯隊附中佐三、聯隊附少佐三、大隊長少佐三、聯隊副官少佐一、而かも中隊附士官は現在一人半乃至二名である。船頭多くして舟山に上るの奇現象である。而かも其聯隊本部附中少佐の業務たるや、至て輕易にして嘗て大中尉が易々として執り來れるものである。

過剩將校と認むべき者は中佐三人の中二名少佐三の中一名、聯隊副官の少佐は不都合なるを以て、之を從前の如く大尉とす。歩兵聯隊以外の部隊官衙學校、其他配屬將校を合する時は莫大なる過剩將校が、而かも少佐以上の將校が徒に高祿を食して煙を吹かして居ることに一驚せざるを得ない。從五位勳三等月給三百圓の過剩中佐が、中少尉にて充分間に合ふ簡易業務に從事する現狀を見ては更に國家財政上驚歎せざるを得まい。

二、恩給年限二十年を越えたる將校は、最小限度に留めて斷然整理するを要す。在職二十年の者は概して少佐以上の上長官である。少佐にて退職するも其恩給は約一千三百圓、中佐にては一千六百圓、大佐にては二千三百圓となり、一般官民の勞銀に比して決して少しと言ふを得ない。

三、概して二十年を越えたる將校中には、老衰せるもの多く、(以下八十字削除)高潔なる眞の軍人は去り要領好き××阿諛將校が蔓る亦宜ならずやである(以下百五十九字削除)其隊長は之を得としてか非行を掩はんとしてか、非常識極まる行動を以て部下に威張散らし、一方師旅團長の檢閲のみを無暗に恐れて、戰々兢々たる有樣である。自己が檢閲すべき各期の教育檢閲を想定も場所も部隊も檢閲時と同樣にして一週日以上も豫習を行はしめて所謂約束檢閲を白晝貪つて實施し(六字削除)師團長の讃辭を得んことにのみ汲々とし、×××師團長も(以下廿字削除)口を極めて賞讃す。之に味を覺えたる本人は第一期の檢閲にさへも此手段を取りて師團長を××す。一(以下四十三字削除)如斯部隊長は(以下十字削除)多く之を見る。試に過去現在者に就き具さに觀察すべし。思ひ當ること蓋し多からう。

故に先づ部隊長の人格を詮議して淘汰を適確ならしむるを緊要とする。

四、大尉以下の停年滿年にて退職するものは一般昇進し待命とするを可とするも、上長

官以上は進級待命とするの必要はない。從來之を行ひたるが爲めに恩給額増大するのみならず、徒に上級將校のみが増加し在郷軍人會の圓滑を缺き、戰時の活動力を減殺し、國防上より見るも不利である。就中大佐以上の老幹部を濫造するとは百害ありて一益もない。

第二　將校の退職賜金の廢止

退職賜金を頂戴するは個人としては誠に有難きことである。然れども苟も之を國家的に考察するときは、單に過分の頂戴物なるのみならず之有るが爲めに却つて平素に於ける行爲質實剛健を缺き、殊に前記妻女の如き奢侈輕薄に流るゝの患なしとしない。恩給年額三千圓所得ある少將が退職に際し、約一萬圓の現金を涙金として受くるは、今日の世相と矛盾しあらざるなきか。退職將校一年三百名と假定せば約百萬圓二百名とするも約七十萬圓而かも該退職手當なるものは大藏省の認可せるものにあらず、陸軍省内の人件費の流用である。現に陸軍に於ては靑年將校の充實を見合せて其費用を老朽將校の退職涙金に充てて居るが如き、國軍編成上よりするも默認し難き事に屬す。國家財政殊に經濟難の今日に於ては無論廢止すべきものと信ずる。

第三　武官の俸給整理

1 大尉以下は現行額を以て適當とす。
2 少佐の二、六〇〇を二、四〇〇中佐の三六〇〇を二、五〇〇より三、〇〇〇大佐の四六〇〇を三、六〇〇より四、〇〇〇に低減するを適當とす。
3 將官は現行法を適當とす。

第四　武官の年末賞與の廢止若くは整理

元來武官は賞與の爲めに勤務するものではない。質實剛健以て國家に忠勤すべきものである。國家は武官に對しては特別の方法を以て之を待遇しあり、即ち恩給年限、叙位叙勳扶助料等すべて一般官公吏に比し優遇されてゐる。

若し之を廢止せずとせば、其支給方法を整理するを要す。即ち從來の上長官、一三割、尉官一五割、准士官以下一九割の比率を少くとも准士官以下二〇割以上、尉官一五割、上長官一〇割に改正するを要す。

又缺勤せるものには相當減額せざれば能率は上らない。要するに現行法にては部隊長に其支給方を委任し、部隊長は平等に分配し、缺勤多きものも晝夜精勵するも同一額を與へつつある、整理を要す。

第五　學校配屬將校の整理

大尉を適當とする中等學校に少佐中佐を配屬するは國家經濟上は勿論軍隊學校双方の不經濟である。又學校長は年俸二、三〇〇配屬少佐は二、六〇〇、配屬中佐は三、六〇〇誰が見ても奇妙なる現象である。要するに中等學校には、大中尉、專門學校は大尉少佐、大學には、少佐中佐にて充分である。

又一校一名に限らず二若くは三校に一名を配屬せしむるも一方法なりとす、研究を要すべき問題である。

難路に立つ現内閣の財政・經濟策

軍國主義豫算の編成

鈴木茂三郎

一

資本主義の一般的恐怖と資本主義に從屬する農村恐怖のまつたゞなかにあつて、濱口失業政府は來年度の豫算編成に着手した。わが豫算は軍事費を中心として歲出が分配される軍國主義豫算であつて、中華民國の民國一七年の戰時豫算は歲出のうちに占める軍事費は四八パーセント二億九百万元であるのに、同年のわが軍國主義豫算の決算によると、民國の戰時豫算に次いで軍事費は三〇パーセント弱を占めてゐる。かゝる軍國主義豫算は、恐怖による歲入への强力なる壓迫を受けつゝ、（削除）軍縮會議後のあらたなる戰略にもとづく第一年度の軍事豫算を、ここに編制せんとするのである。非常なる困難に遭遇するであらうことは當然であつて、困難の第一にきたるものは所謂財源難であらう。資本主義恐慌が其の歲入の五〇パーセント强を占める租稅の源泉を奪ひ、二七パーセントに及ぶ官業收入の國家資本産業を脅やかしつゝあるところに財源難がある。

だから政府は鐵道運賃、煙草値段、郵電料金等は物價の一般的下落に先驅し又は追從して之れを引き下げることが出來ない。また、一×××××、×××に對して、政府は斷乎之れを「不穩な計劃」として鎭壓せざるを得ない。でなければ國家財政は破綻するであらう。然し乍ら鐵道、煙草、郵電等の國家資本産業は其れ自身が獨占トラストであるから「獨占」の價格と料金を防衛し得るであらう。しかし×××××に至るとこれを防衛すべき手段がない。政府は×××××に對して「治安警察法により彈壓を加へること」といふ訓令を發してゐる。そして訓令は過酷に實行され、全國大衆黨の生活防衛鬪爭の指令や農村窮破運動の違示は即日押收・禁止された。一

だが地主團體の帝國農會でさへが×××××

×を公然と決議しなければならぬほど、それほど大衆の×××源泉は涸れ果て、さうした訓令や法令は今や無力化されたのである。それ故に斯かる情勢の増大は、やがて編制される歳入豫算に當然盛られる水膨れ即ち査定の過大による豫算と實收との差額と共に、豫算の實行に支障をひきおこす惧れを孕むと同時に、此のことは編成に際してもまた障害である。さうして租税と官業收入の一般的な減收に、かてゝ加へて斯うした副次的な障害が重荷されるのである。

そこで政府には非募債主義の旗をおろして財源の不足を預金部又は市場から公債によつて補はんとする下心がある。下心だけではなく三井の池田成彬、三菱の串田万藏を招致してすでに諒解済みであるから、政府はとくに決意してゐると思はれる。決意だけではなくもはや決意は實行にうつされたとも見られる。何故なら失業救濟に名を借りてどし〳〵地方債の發行に認可を與へてゐるなど明らかに非募債主義の一部の崩壊でなければならぬ。元來が非募債主義なるものは金融資本のために狹隘化した起債市場を保護し、國債の値下りを防衞せんとする濱口政府の傳統的方針であつたのだが、それも今は果敢なく泥土に沒せんとしてゐる。

然るに起債市場は益々狹隘化し國債の市場價格は愈々暴落しつゝあるとき、募債の餘地は少ない。我々はいかに少額な募債であつても資本家救濟のための失業救濟事業や海軍の軍備擴充のためにおこされるところの、民衆の當然負担に歸すべき公債には反對せざるを得ない。

二

財源難の必然の結果として既定經費の節約が主計局の日程にのぼされてある。義務費を除く基本額の天引二割一億二千萬圓を浮かせるといふにある。なるほど機密費にしても一般、特別會計を通じて五百萬圓ある、補助費にしても八千萬圓ある。年金恩給の一定額以上のものを廢止すれば七八千萬圓は浮かせることが出來るのである。だが二割の天引に對してさへ血眼で主計局を押つとりかこんで爭ひ合はねばならぬほどで、かうした節減など幾何も期待出來ない。例へば物件費にしても四億圓あつてこれの二割とすれば八千萬圓の節約となるが、官廳へ納入する御用商人とその背後の産業資本家は之れを承知しないのである。實は役人が血眼になるのではなくて血眼になるものは××××××××資本家である。さうしてこれに關聯して現在おこなはれてをり又今後も目論まれるであらうところの失業救濟事業に關して、我々は注意を喚びおこす必要を覺える。これらの新規事業は失業者の要求に基いておこされたのではなくて、生産恐慌に襲はれてゐる獨占資本の強要の結果である。セメントカルテルの全生産の

消費別比率によると建築に二割二分、港灣に三分、道路橋梁に五分九厘、土木一般に九分一厘、製鋼カルテルの全生產の約二割四分は土木建築に使用される。そこでこれらの獨占資本や土木產業資本は、政府や府縣知事や市長に强要して失業救濟土木事業をおこさせるのであるから、失業救濟ではなくて、資本主義產業の救濟である、從つて失業救濟事業の土木事業費のほんのいくらかのものが失業勞働者に對する過酷な勞働に對して支拂はれてゐるに過ぎない。我々はここで、失業手當法による緊急處置をさへ斷然拒否せる政府の失業救濟事業のカラクリをあばかんとするものではないが、右のやうな事實の一端をとつて考へてみても經費節減の困難さがわかる。經費の節減は資本家自からが縊ることである。

三

然るに他方にはまた軍備の擴充がある。金融資本の指導のもとに制限される豫算にとつては、失業者の救濟や民衆の生活や農民の窮乏よりも軍備の擴充が重大問題として提起されるのである。陸軍の軍事費輕減などが軍國主義豫算に實現されやうなどとは、我々は夢想だもしない。過去に於ける鳴物入りの軍縮によつてさへ、第一次に一九六九萬圓、第二次一五七一萬圓、第三次二四六二萬圓、第四次二〇五八萬圓これを合はせても八〇六〇萬圓に過ぎないのである。そして現在計畫されてゐる軍制改革は軍備の縮少でも軍事費の節減でもなく、改革の目標は新兵器の擴充とこれに基く編制の改廢であつて、それも來年度豫算に間に合はせないやうに宇垣陸相の病氣は順調につゞけられてゐる。從つて來年度の軍國主義豫算に光輝をそへるものは當然軍縮條約による留保財源引き當ての海軍補充計畫でなければならぬ。安保新海相は海軍の要求額は五億一千萬圓だと、新聞紙を通じて吹つ掛けてゐる。海軍にすればロンドン海軍條約を破棄して現在の兵力量を以つて××××の××××××さへいつたんは決意したほどの問題である。條約の有效期間の終る一九三五年を目標として××××××する補充計畫の實現に死力を盡さねばならぬであらう。かゝる態度、熱意こそは職業軍人としての職分を盡す所以であり、又斯くてこそ飽く迄も××××××××なる所以でもあるが、金融資本にすればロンドン條約をめぐる政府と樞密院の葛藤をさばいて政府を勝利せしめた。この勝利は××××を一應は五ヶ年の先きへ繰り延べたかに見えるが、しかし其れにもかゝはらず地球を押し包んでゐる××××××は、いつ、どこで、爆發しないとも限らないのである。ロンドン條約はかゝる危機に對して五ヶ年を必ずしも保障し得ない。と言ふかゝる狀勢は確かにわが金融資本にとつては重大な狀勢であつて職業軍人の立案し、主張する補充計畫が充分尊重さるべき理由がある。

それ故に濱口政府は來年度豫算に尨大なる補充費を繼續費として計上するであらう。その場合、財源難のために、大藏、海軍當局のあひだに激しい折衝や双方的な讓步がおこなはれたとしたところで、來年度豫算が××××××××××新たなる軍事費を計上せる軍國主義豫算たる本質にかはりない。

さうして民衆に眼潰しを與れるために、軍縮留保財源のうちから吊鐘に對する提灯ほどのいくらかを租税の負擔輕減にも振り向けるであらう。

かくて鮮銳なる軍國主義豫算は勞働者、農民、無產大衆の反擊の嵐のなかにやがて一應の編成ををはるであらう。

甚だしき財政の歪み

太田正孝

一

立憲的豫算は、これを文字どほりに編成するにおいては、別段むづかしくもなく、苦しみのあるべきはずもない。たゞ、無理をしたり虛僞を隱さうとすると、なか／＼手もつけられないことになる。西洋の諺に、一つのウソを本當にするには、十のウソをつかねばならぬといふことがある。私たちは、現內閣の正につくり上げようとしてゐる昭和六年度の豫算を見て、そんな感じに打たれてゐる。

また、かうも考へる。いはゞ火の燃えついてゐる家のなかで新しい家の計畫を立てゝゐるとでも形容したいのが、いまの豫算編成者の心ではなからうか。なぜかといつて――。

昭和五年度の豫算そのものも、本當にいくらの歲入減ですむのやら見當のつかない狀況にあるからである。私たちが特別議會で批難したやうに、現內閣によつてつくられた昭和五年度の實行豫算には、少なからぬ無理がある。ウソがある。當時、義務敎育費國庫負擔の增額のために、歲入の減少を見積ることを少くしておいたのが惡るい。政府當局者としては、もしも正直に多くの歲入減を見積つたならば、消極政策の看板に不釣合ひなこの增額が批難されると思つたからであらう。たゞ酒稅と關稅と森林收入とに合計千三百萬圓の減額を見込んだのにすぎない。そこに、無理がある。所得稅の如き前年の實績によつて課稅するものがあるとはいへ、本年度が前年度よりも收入の多かるべきはずがない。酒稅にしても、酒造組合が造石高一割減を決議し、實際は七八分減であるといふのに、政府の見積は四分減にしか見てゐない。關稅も、金解

禁の後をうけて輸入はずんと減ずべきに、それも少く見積つてゐる。私たちの攻撃に對して、濱口首相も井上藏相も、念を入れて心配は無用である旨をくりかへし述べた。しかも酒税の如き、淸酒は當時すでに大部分の仕込みを終つてゐたにかゝはらず、ひた隱しに隱して質問にさへ答へなかつた。しかるに、事實は當然かつ正直に彼等の言を裏切つてゐる。否、彼等は、その事實を知りつゝ、多數に擁してゐる下院は勿論、理筋で通さねばならない上院をも欺きとほしたのである。しかし、事實はどうすることも出來ない。政府は議會閉會後わづかに二十日にして、豫算の編成替へを餘儀なくした。物價の下つたことなどを口實として行政の經濟化を企てたのも、世間體を粧はうとするにすぎなかつた。第一ウソをつくらふための第二のウソである。非立憲的態度である。しかも、八千百萬圓の歳入減を見込んだが、六千五十萬圓の節減しか出來ない。しかも、眞の節約は千九百四十餘萬圓で、繰り延べは四千百萬圓である。このうへは、四年度から五年度へ繰越した歳出の四千萬圓にも手をつけようとさへしてゐる。笑止のいたりだ。

二

しかし、本年度の現實の歳計が、再度變更された税度の歳入減で落ち着き得るであらうか。個人所得税や營業收益税は、もうすでに決定してゐる。これらには、隨分非人情な決定が行はれたと傳へられてゐる。帳簿のないのを責めたうへに、このくらゐの賣上がなくて家計が賄つてゆけるかといふやうな態度で臨んだのである。もと〳〵税法は、規則どほりに行つてはやりきれないやうにつくられてゐる。それを行ふのであるから、不況にあえいでゐる國民は、やりきれない。當局者は、誤謬訂正と滯納とが多かるべきことにも頓着せずしてやつたのであるから、大膽不敵である。法人課税の如きも、いままで未決定で溜つてゐたものを、この際纏めてとらうとするのであるからたまらない。また、酒税も淸酒の造石は確定してゐる。さうして七分減石の事實をみとめたであらう。かやうな決定された税以外のものについては、四五二ヶ月分の收入狀況を基として改訂減額を見積つたといはれてゐる。そこにも見當ちがひがある。關税の如き、下半期は輸出超過になるといふ平凡な樂觀のもとに見込を立てゝゐるのではなからうか。郵便電信電話收入も、意想外に減少の道を辿つてゐる事實を認識しないではなからうか。森林などは、隨意契約によらなければ賣れなく、賣れたとしても到底見積り價格では捌けないではないか。不用地拂下の如きも、どこに多量の買手が見出され得るであらうか。この意味で、私たちは、八千百萬圓の歳入減を少ないと見てゐる。さらに三千萬圓ぐらゐは見込むべきではなからうか。五年度

豫算は、こんなにまで追ひ詰められてゐる。火の燃えてゐる家のなかで豫算をつくつてゐる氣分ではないかと察したのも、そこにある。しかも、政府の歳入見込減の八千百萬圓も、これに相當する歳出の削減に成功せず、眞の節減額としての千九百餘萬圓以外のものは、明年度に更にその財源を見出さねばならぬものである。繰り延べの四千百萬圓も、今年度だけに役に立つにすぎない。要するに、いまのやうであつては、果して本年度豫算が文字どほりに實行し得らるゝかさへ疑はざるを得ないのである。そして、政府は、第三第四のウソを考案しつゝあるのではなからうか。

三

本年度豫算は、かやうに歪んでゐる。どうして、昭和六年度の豫算を組むのであらうか加ふるに、ロンドン條約の本質的問題として財政的解決をすべき國民負擔の輕減と補充計畫とがからんでゐるといふのに。

一體、六年度の歳入は、どう見込んだらよいか。糞も味噌も千遍一律にした消費節約を宣傳し、極端なる緊縮政策を續けてゐる現内閣は、その深刻なる影響を明年度豫算において丸ごと受けるわけである。また、いままで國民に忍從を強ひて來た現内閣は、こんどは財政上の苦難をみづから嘗めることになるのである。今年よりも不況はさらに悽慘を極むべき豫想のもとに、明年度の豫算を編成するのである。

租税收入上景氣の指數をあらはすともいつてもよい所得税は、本當に金解禁の全結果を數字に現はすことになるであらう。營業收益税にしても、同樣である。私が先きに丸ごとといつたのは、これら前年の實績によつて課せられるものが、現内閣の經濟財政政策の結果を反映して來るからである。解散と減資と減配と倒産と慘ましい形をみせてゐる財界をながめつゝ、明年度の所得税や營業收益税を見積るのである。關税の如きも、輸入額は益々減ずるばかりである。おそらく、三割減にもならうか。それは價格についていふのであるが、關税の八割見當は從價税であるから、その點も勘案して二割減と見ても、減收は二千九百萬圓に達する。また、酒税はどうか。當業者は、淺はかにも、金解禁が行はれたならば景氣が來るといふ見込みのもとに本年の減石も七分しかしないものが多いとのことである。しかるに、豫想は外れて、賣れゆきはよくない。さらばとて、灘や伏見に轉賣しようとしても、これまた駄目である。從つて昭和五酒造年度の造石高は減ずべく、假りに一割五分減とみても三千四百餘萬圓からの減收になる。その他砂糖税・織物税・印紙收入・通信收入・森林收入などの歳入狀況も樂觀して、結局六年度は五年度の實行豫算にくらべて一億七八千萬圓の歳入減となるではなからうか。非常なよい條件でも現はれないかぎり、

その邊に見當をおくべきではなからうか。尤も、政府筋では、租税收入九千萬圓、印紙收入九百萬圓、通信收入二千五百萬圓、森林收入五百萬圓の減收と見、合計一億三千萬圓見當と踏んでゐる。しかし世間には二億圓の減收とみてゐるものもあるから、兩者の中間も大體上記の數字に落ち着くことになるのである。さうすると、剩餘金の一文もない今日は、それだけの額を既定經費の現實の減縮によつて收支の辻褄を合す外ない。加ふに恩給をはじめ義務費などの當然增加として四五千萬圓を見込まねばならぬ。さうすると、さきの行政の經濟化による節減額二千萬圓を差引いても、なほ二億圓見當の財源をしぼり出さねばならない狀況にある。

政府當局者は、煙草元賣捌制度を廢することにより、延納關係や在庫品買上げや制度廢止に伴ふ慰勞などのことを考へてみて、千五百萬圓の財源を得るといはれてゐる。また、營繕事業を統一することによつて五百萬圓を生み出さうとしてゐる。役所の物品買入れの不經濟を改むることによつても四百萬圓、旅費を削ることによつても六十五萬圓を得るといはれてゐる。かうしたものを合せても高々二千萬圓にすぎない。しかも、なかには一年かぎりの財源にしかならないものもある。このほかに、前內閣時代から殘つてゐる減債基金一億六千萬圓を公債政策のためにつかつてしまつたといふから、その利子拂ひがそれだけ少なくなるわけである。しかし、そんなことでは追ひつかない。そこで最近傳へられてゐるのが、大々的の節約案である。それは、皇室費や義務教育費や恩給費や警察費のやうな純然たる義務費には手を觸れないが、繼續費の二億圓は組替へ改訂をし天引三割五分を行つて七千五百萬圓を、物件費の三億圓は物價下落の關係から一割から三割の天引をして六千萬圓を、補助奬勵費などの準物件費と見るべき一億圓は一割天引して千萬圓を、機密費や調査會費などにも手を入れて一千萬圓をそれ／″＼しぼり出し合計一億五千萬圓に達せしめようといふのである。尤も、そのうちには例の行政經濟化による眞の節減二千萬圓も含まれてゐるとのことである。それにしても一億三千萬圓の巨額の節減が、さう机上でソロバンを彈くやうに簡單に行はれるであらうか。ましてや、かうした節約見込額の五分の二は陸海軍省所管のものであるといふから、なか／＼手輕るに片付けられないにおいておやである。陸軍の委任經理もやめたならば六百萬圓を國庫に繰り入れることが出來やうなどと、わづか一年の財源を、しかも經濟的に行はれてゐるものまでも改めやうとしてゐるほどである。あるひは震災復舊費の打ち切りとか、植民地への補充金の削減といふことなども噂されてゐる。しかし、私たちは、そんなことでは埋らず、結局辻褄を合はすことが

困難であつて、やつぱり相當歳入の過大な見積りをすることと、繰延べを非常に多くしてゆくより外ない結果となるではないかとおもふ。

そこにもう一つ考へ出されるのは、前に火のついた問題として何とかしなければならない失業救濟の仕事がある。政府は、國勢調査による失業者の實數によつて方案を立てるといつてゐる。巷間には、調査の結果は、或は現在の推定失業者數より少なくなるではなからうかといつてゐる。政府は、そこにも、財源のないときのよい口實を見出さうとするかも知れぬ。しかし、それにしても、現在の地方本位の救濟事業では目的を達することが出來ない。押しつけられた地方とても、もう力一ぱいである。そこで内務省も、道路や治水や港灣の改修について、公債を財源として失業救濟をしようとする復案をもつてゐるといふ。しかし、假りにこれを實現するとしても歳入減のために繰り延べを餘儀なくされた部分と差引いてみれば、事業そのものとしては分量的にも増さないであらう。或は却つて減ずることになるであらうとおもふ。從つて失業は、今日以上に救濟されないことになる。これは特別會計の關係においても、同様のことが見出される。とくに鐵道の如きは、建設工事はもちろんのこと、益よ金を財源とする關係において改良工事も減縮されることになるにちがひない。それはさておいて、こゝに公債財源をもつてするといふことは、現内閣としては、失業救濟についてはかねて聲明してゐるとほりであるから何等政策の變更ではないといふかも知れない。けれども、問題は、歳入の激減に伴つて繰り延べを多くし、その埋め合せに失業救濟の名をもつて事業を持ち込むところに欺瞞が潜んでゐるといふ點にある。言葉をかへていへば、實質的には、從來普通財源でやつてゐたものを公債によつてやることになるのである。政友會内閣時代の公債政策といへども、一般會計においては震災善後公債のみであつたのに對して、現内閣は何の政策自衛の辯解をなし得るであらうか。公債政策を財政政策の中心としておきながら、減債基金の巨額の實行によつて市價を保たうとしてもその効なく、さらに地方債に名を籍りて公債を増發し、いままた歳入減少の補塡のため失業公債を募らねばならないといふのは、まさしく政策の破滅を語るものではなからうか。筋が通らない。さうして、いくつか目のウソが重なつてゆく。しかも、他の一面には、現内閣成立以來一億六千萬圓も事業を繰り延べたらうへに更にその額を増大せんとするのであるから、財政の將來は益々壓められてゆくことになるのである。

四

問題は、別途計畫としてのロンドン條約にもとづく減税および補充問題についてもあ

る。いはゆる海軍々縮に伴ふ保留財源の幾何であるかは、特別議會においては發表しなかつたが、昨今傳へられるところにおいては、五億七百萬圓あるとのことである。それは、六年度において千八百萬圓、七年度八年度九年度において各八千七百萬圓、十年度において一億一千五百九十萬圓、十一年度において一億一千二百萬圓となつてゐるとのことである。私たちは、この數字の配列についても疑義を抱いてゐるが、それはこゝに說かない。たゞ、この五億七百萬圓が、そのうちの幾分を減稅と補充財源とに振り向けるかといふことだけを見る。現內閣が、一方に國民に對して、負擔の輕減をすることを宣傳してゐることも久しい。しかも、他方に軍部に對しても樞密院に對しても、その場しのぎに、然るべく充補計畫を行ふこと、もしくはかやうに解せられるやうな言質を與へてゐる。私たちは無論國民負擔の輕減の多いことを望んでやまない。しかし、これまでの政治の經過からすると、國民に約束したことを行ふまへに、軍部に對する前言の實行をどうしてゆくかといふことになる。否、軍部よりも、國家的見地に立つていはゆる國防の安全と經濟化とが實現され得るかといふことにある。私たちは、これらの點についても、いろ〳〵の虛僞の事實を見せつけられてゐる。かうして、この問題についても第一のウソを第二のウソで歪めつゝあるのを見るのは忍びない。

× × ×

要するに、明年度の豫算は、ひどく歪んでゐる。たとひ形式的に計極を合せ得るとしても、その實現性が怪まれる。また、公債政策も、歳計の總額は減じても、一の理筋が通らない。減稅（軍縮財源は別として）は一つも行はれない。失業救濟の分量も多くならない。依然として國民經濟の萎縮に伴ふ緊縮豫算たる意味において景氣の恢復に力を與へず、却つて不景氣を今日以上に深刻ならしめるものであるといはねばならぬ。私たちは、歪んだ財政をなほし、不況を轉回せしめんとする立場から、また、失業を眞實に救濟せんとする立場から、こゝに政策の轉換を主張してやまないのである。──昭五・一〇・七──

現內閣の經濟的破綻と金輸出再禁止の必至

高橋龜吉

一

濱口內閣は、いまや、文字通り、その經濟政策に行詰り、刻々と破綻の淵に押し倒されつゝある。その金看板の「衡平價金解禁」と「消費節減」との二大失敗のために、我が經濟界は極度の衰弱に暴露せられ、これだけで已に重傷狀態に陷れる所へ、更に、世界的不景氣の大打擊を蒙つたからである。

濱口內閣が經濟的にいまや全く行詰るに至つた實相は、二つの側面から容易に之を窺ふことが出來る。一つはその金看板の緊縮政策が、如何なる矛盾にいま陷りつゝあるかだ。一つはその政策のために、我が經濟界が如何なる破綻に脅かされ、乃至は破綻を示してゐるかだ。先づ前者から一瞥しよう。

周知の如く濱口內閣は緊縮政策を一枚看板として出現したが、その論據は井上藏相のパンフレットに明記してある如く、日本經濟の病根は收入以上の消費をして國富を喰潰してゐると云ふ點に在つた。卽ち「消費が過大」であるから政府は率先して財政的事業を極力中止し、經費を節減して以て國民に範を垂れ、民間の消費を減少せしめると云ふに在つた。だが、井上藏相が斯く、國富に喰込と云ふことを直ちに商品の消費過大と見たことは、取返しのつかぬ致命的錯覺であつた。

何となれば、國富の維持増進のためには、第一には、工場、鐵道道路、治水港灣、船車家屋、等々の生產設備を益々完備し、人的生產力を愈々向上充實させねばならぬ。然るに井上藏相は、新たに商品を消費することを、極力阻止する政策を採つた。この結果、それ等設備の風雨に由る腐朽使用に由る磨損等はそのまゝに放置せられた。第二には人口の增大、社會の進步發達に伴ふ生產設備の進步改善並に新設が必要であるが、これも又中止繰延べられた。

此の結果、國富は腐朽磨損して枯渇し、剩へ、生產設備の新設改善は阻まれて時勢後れの老廢朽化し、且つ人的生產力は失業して荒廢と喰込とに委せられ、こゝに民政黨の緊縮政策は國富の喰込防止を初め標榜して採用せられ乍ら、卻つて、刻々と國富を大規模に喰込むと云ふ矛盾極る結果を激成するに至つた。しかも矛盾は右に止らぬ。斯く、生產設備(直接間接の)の修復と新設改善が中止せられた結果、こゝに、商品の生產用需要は激減し、消費過大を絕叫する濱口政策の下に於て、商品市場は何れも「生產過剩」のため瀕死の重態に陷ると云ふ混亂である。かくて、井上藏相は一方に消費過大──消費減少化の必要を叫びながら、一方に生產過剩──「生產制限」の必要を絕叫してゐると云ふ支離滅裂に陷つてゐる。

濱口內閣經濟政策の行詰と矛盾化とは、更に、その金融策に現はれてゐる。初め、衡平價解禁、緊縮政策を斷行した主目的は、之に

由つて、從來の放漫なるインフレーション政策、資本家救濟政策を打切り、文字通り之を「緊縮」し、以て經濟界の病根を芟除せんと云ふに在つた。然るに、その緊縮政策の結果は我が財界に甚大の大打擊を與へ、各所に、破綻續出し、經濟恐慌の危機は極度に脅かされるに至つた。こゝに於て、濱口內閣は、啻に初めの緊縮政策、卽ちデフレーション政策を中止するのみならず、逆に、インフレーション政策を放漫なる資本家救濟とを濫用すると云ふ政策の自殺に陷つてゐる。例へば、蠶絲補償、中小商工者への救濟貸出、米價救濟、日銀の公債買上、郵便貯金利下等々何れもさうであるが、就中、瞩目に値する現象は、他の銀行で引受不能の不良手形、事業資金等々を、興業銀行の總裁を取替へまでして之を興業銀行に引受けしめ、日銀が之を再割引を行ふと云ふ一般的「非常救濟」手段まで採用するに至つたことだ。斯くの如きは、井上藏相自ら、我が財界は已に、「××××」に在ることを實踐的に確認せるものであつて、濱口經濟政策の全然破綻せる事を告白せるものだ。何となれば、斯くの如き金融政策は、×××××××手段としてのみ初めて認容せられるものであるからだ。加之、右の如き危機の下の有價證券の暴落するや、之を救濟すべく更に日銀利下を斷行すると云ふ、緊縮政策逆行政策を累加してゐる。

二

濱口內閣の經濟的行詰は又、その政策の遂行が各種の經濟的破綻に脅かされ、しかも、その何れの破綻も內閣の致命傷である。と云ふ側面からも之を窺ふことが出來る。試に、いま濱口內閣が脅かされてゐる經濟的破綻の重なる斷面を見れば左の如くである。

(1)失業者激增と其の生活窮迫化に基く社會的破綻

(2)農民、中小商工業者の破滅的窮乏化に基く破綻

(3)重要事業の收支關係が大部分「損失」連續に陷り、その結果、收益力消滅と資金難から、多くは破綻暴露の危機に立つてゐる。

(4)輸出の大宗たる生絲の暴落(昨年は平均千三百數十圓なりしものがいまや五百圓臺である)のため、此の內地大不景氣にも拘らす、輸入超過の克服は愈々至難となり、金解禁維持は益々困難となつた。

(5)右の結果、銀行は、その貸出の多くは回收不能に陷り、手持公社債株券は暴落して多額の損失を蒙り、斯樣にして損失莫大なところへ、預金は、(4)の貿易入超と國民の喰込みのため巨額の引出に逢ひ、現在のまゝでは金融的破綻は刻々と迫りつゝある。

(6)加之、その緊縮政策と世界的不景氣のため、財政の歲入は激減せるにも拘らず、

行政及び軍費の整理は不能にて、此の方面からも破綻は極度に脅かされてゐる。而して、此の破綻の危機は、中央財政に於ても甚大だが、ヨリ以上地方財政に於てさうだ。

ところで、右の各種「破綻」を凌駕する道は、現内閣の政策の下では、到底、之を發見することが出來ないのである。例へば、右の(1)以下(3)を効果的に救濟して、その破綻を防止するがためには、第一には、(5)の入超を愈々増大し、それでなくてすら危機に在る金解禁の維持を愈々强烈に脅かすことゝなり、第二には正貨の流出と、公債暴落とで(5)の金融的破綻を激化する。而して、此の金融的破綻は更に(6)の財政的破綻を公債で彌縫する場合にも激化する。又、(4)の入超連續に由る金解禁の破綻を効果的に防止せんがためには、愈々民政黨の「緊縮政策」の徹底を必要とするが、そのためには、啻に、(1)以下(3)に對する應急施設が不能となるのみならず、更に進んで、その破綻を愈々激化する。加之、通貨收縮政策と(1)以下(3)の破綻の結果、(5)の金融的破綻の危期を大規模に激成するであらう。又(3)の事業破綻と(5)の銀行破綻を防止する政策をとるがためには、一方に(1)及(2)の破綻を愈々激化せしめ、一方には放漫政策の救濟手段を必要とする故、(4)の正貨流出と金解禁の破綻の危機を益々大ならしめるであらう。

斯様にして濱口内閣の經濟政策は全く行詰り、チットしてゐても、何れに行つても、共に、破綻必至の窮状に陷つてゐる。これ、流石の井上藏相も、最近のパンフレットで、世界景氣がそのうちには立ち直るからそれを待て、と云ふが如く、全く、責任者としては無責任極る、而して無能無策を告白せる、聲明を吐かざるを得なかつた所以である、と考へる。

三

しかしながら、現在世界大不景氣の性質に鑑み、急速に景氣が回復するとは到底考へられない。果して然らば、以上第二項に述べた各種の破綻は、遠からず、その何れかの一端に於て最後の爆發を見るものと云はざるを得ない。又、第一項に述べた緊縮政策と其の結果の矛盾激化は、要するに、第二項已述の諸種の破綻の彌縫を愈々不可能にするものであつて、いよ〳〵、右述の如き破綻爆發の危機を激成するものである。かゝる場合、之を拾收する道は、好むと好まざるとに拘らず、金輸出再禁止――新平價出直しの外ない。

いかにも、右の如き破綻の爆發は、弊害多き彌縫政策で一時――と云つても永くて數ケ月に止るが――之を喰止めることが出來ないではない。だが、かかる彌縫政策は、黨利黨略のために、國民大衆の利益を、恣に蹂躪するものであつて、その結果は病勢をいよ〳〵内攻せしめ、我が經濟力を益々衰弱致死に導

き、最後の破綻の打撃を愈々甚大にするものである。

而して、斯くの如き破綻が、社會的でなく經濟的である場合、政府——それが民政黨内閣であれ、將又政友會内閣であれ——の全力を擧げる拾收策は、あらゆる救濟手段を講じて、資本家の存立維持を圖ることであるが(それは去る昭和二年の金融恐慌に際して最も代表的に示されてゐる)、その主なる手段は二つだ。一つは大資本家、政商等に金銭的救濟を與へて、中小商工業者其他を淘汰し、愈々大資本の支配を擴大することだ、一つはその破綻「恐慌」の渦卷きに乘じて、勞働者及俸給者に對し「徹底的整理」の斧鉞を資本家に振はしめることだ。賃銀俸給の引下、大規模の解雇、勞働時間其他勞働條件の低下、等々がそれだ。現に、最近、不景氣の壓迫甚だしく大となるや、×××勞働運動(賃銀引下及び解雇反對の)に對する態度は激變して、「著しく壓迫化しつゝあるが如き、その先驅的現象だ。然り、資本家階級の多くはかう絶叫してゐる。折角、多大の犧牲を拂つてこゝまで來たのだ。いま一息で、これ迄手のつけられなかつた勞働者俸給者の整理が大ぴらに出來るのだ。それ以前に、金輸出再禁止——新平價出直しなどを決してやつてはならない、何となれば、かくては永久に勞働者俸給者等々に對する「徹底的整理」の機會を逸する、と。而して、新鋭な資本の大攻勢——恐慌と云ふ非常の渦卷に乘じて行はれる——に對し、之に抵抗し得る組織と實力は、いま、我が無產階級には殘念ながら無いのである。果して然らば、今日の行詰をその最後の破綻にまで導くことは無產大衆の立場からも亦決して利益ではないのである。否、多大の脅威であるわけだ。」

四

然らば、現在の此の經濟的行詰と財界破綻の脅威を發揚する効果的方法如何。金輸出再禁止——新平價解禁出直しが即ちそれだ。日本今日の政治事情と經濟狀態の下に於て、急速に實行性のある對策としては、此の外に方法はないのである。だが、新平價金解禁出直しに由つて、今日の不景氣の全部が打開出來ると云ふのでは決してない。新平價出直しはそんな萬能膏では決してないのである。

日本現在の不景氣は、色々の原因から成り立つてゐる。いま、當面問題としてゐる見地から之を大別すると、(一)世界的不況に原因するもの、(二)日本經濟機構の劣悪弱少、濫用等に基因するもの、(三)亂暴な舊平價金解禁に基くもの、此の三つに分けることが出來る。而して、新平價出直解禁は、右の三つの中、最後の(三)を主として克服し得るのみであつて、(一)のそれも、(二)のそれも之を全部(或る程度までは克服し得るが)克服し得るものではない。いま、之を一の比喩を以て云

へばからだ。

現在日本の殺人的不景氣は、例へば、肺結核と百日咳と赤痢との三病併發で、健康著しく衰弱し、ために瀕死の重態に陥つてゐる患者に似てゐる。こゝに、肺結核とは日本經濟の根本的缺陷に基く不景氣だ。百日咳とは世界的不景氣のそれだ。赤痢とは舊平價解禁のそれだ。若し、此の病人が、肺結核も赤痢もない健康體の場合に百日咳に罹つたのだつたら患者の病狀はさう迄心配なくてすんでゐたであらう。又、肺結核だけのところへ、百日咳にかゝつたのであれば、直ちに、兩者への手當を十分にすることが出來て、二つの病氣を克服するあらゆる手段を採ることが出來、瀕死の危急にまで追ひやることは無かつたであらう。然るに、その上に赤痢をやつて了つては、肺結核の治療にはウント滋養物を攝取する必要があると如何に分つてゐても、先づ赤痢を根治しない限り、そんな對策は出來ない。之は又、百日咳に對してもさうだ。かくて、百日咳及び肺結核に對する抵抗力の如何も亦、如何に早く赤痢を根治し得るか否かにかゝつて來るのである。斯様にして、何は措いても、先づ赤痢を根治する事が、此際、病人の危機を克服する唯一の方法だ。而して、それは同時に又、肺結核に對する根本的治療のためにも、百日咳への抵抗力とそれの根治のためにも前提的な治療法だ。

いま、新平價出直論の主張は、右の如き危機に際し、先づ、赤痢を根治するのが何よりも緊要だと叫んでゐるのである。いかにも、その効能は、平面的に見れば、患者衰弱の他の二大病根に毫も觸れてゐないかの如く見える。だが、實際には、それの根治なくしては到底他の二大病根を退治することは出來ないのである。のみならず、他の二大病根あるがために、然らざれば耐へ得る舊平價解禁の打擊に對してすら、病人は、そのために危機に瀕してゐるのである。

此際、金輸出再禁止──新平價出直しを斷行することが、不景氣打開、國民大衆の犠牲輕減等のために如何に効果があるかを明かにするためには、更に、右の比喩を具體的に說明せねばならないが、已に與へられた紙數の制限を超過してゐるので、此等の點に關する詳細は、最近の拙著「金輸出再禁止論」──先進社版──を參照せられんことを願ふ外ない。最後に繰返して云ふ、現在の日本經濟の破滅的行詰を打開する前提的な基本政策は、金輸出再禁止──新平價出直しであると、而して、假りに此の政策が採用せられずして、經濟界が遂に破綻したとせば、その後仕末は好むと好まざるとに拘らず金輸出再禁止──新平價出直しより外ない。卽ち何れになるとも結局、落ちつく先きは金輸出再禁止──新平價出直しである。」



井上・山本・武藤のデマ

——デフレーションと金融資本——危機のモメントの激化
——「解禁」政策の破綻——農業恐慌の尖鋭化——

猪俣津南雄

デフレーションと金融資本

(1)

日本金融資本の政策としての金解禁は、三つの主要スローガンをもつて始まつた。それは、緊縮＝消費節約、——整理＝合理化、低物價＝低原價であつた。しかるに、消費節約は間もなく國産愛用に置代へられた。「買ふな」が「買へ」に變つたのだ。それと共に、緊縮政策の中軸たる非募債主義はだん〳〵影が薄くなつてきた。そして合理化に至つては、もう掛け聲すらも聞えない。代つて吾々が耳にする細々とした聲は、たゞ「就

制し――その意味は生産制限をやつて價格を釣り上げよ！――否定と陰蔽とにも拘らず――、經濟及び政治に於ける決定的優位を獲得したのみならず、來るべきデフレーション恐慌の衝擊にも堪え得るであらうほどに自己の繩張りは固めたからである。

どうしてさうなつたのか？ それは全く、デフレーションの矛盾の展開によつて餘儀なくされたのだ。

金解禁はもちろん金融資本の政策であつた。しかし金融資本は、どんな政策をも勝手にうちたてることなどは出來ない。金融資本の政策を決定するものは、資本主義の發展そのものである。

戰後六、七年間の、世界及日本の資本主義の發展は、日本金融資本の特異のインフレーション政策を破綻に導いてデフレーション政策への轉換を不可避ならしめた（大正十四年――十五年）。そして、破綻の大團圓としての金融恐慌と爾後の發展は、金解禁＝デフレーションへの轉換を全く命令的にした。（拙著「沒落資本主義の第三期」第四章一一三――一四三頁）。かくして與へられた諸條件の下に始めて、金解禁は、金融資本の政策となり得たのだ。なぜ、なり得たといふか？ けだし日本金融資本は、同じく戰後資本主義の發展の一面として、恰度その頃までに――當時の小ブルヂョア的理論家高橋龜吉氏等の蹶起の否定と陰蔽とにも拘らず――、經濟及び政治に於ける決定的優位を獲得したのみならず、來るべきデフレーション恐慌の衝擊にも堪え得るであらうほどに自己の繩張りは固めたからである。

かくして金融資本は、沒落資本主義の一聯環としての日本資本主義の發展によつてデフレーションへの轉換を强制されつつも、力關係における彼等の優越の故に、金解禁とデフレーションを利用して自己の利得と制覇を强めんとする諸方策を樹立し得た。

(2)

では、金融資本は、金解禁とデフレーションから、どんな利益を吸ひ取らうとしたか？ 吸ひ取り得ると思つたか？

一、爲替相場の安定化――それによる貿易利潤の增進。日本の金融資本コンツエルンは、世界に類例なき巨大商業の部門を持つ。そして金融上の力と相俟つて、日本の貿易を獨占し、支配してゐる。

彼等はまた、爲替相場の安定化によつて、海外放資の利得を增すことも勘定のうちに入れてゐた。」

二、金解禁をやつてデフレーション=物價下落をひきおこし、それで商品の生産費を切下げて世界市場における競爭力を大ならしめ、輸出の增進によりて累年の輸入超過を克服する。さうして涸渇に瀕した保有正貨を擁護する。——此の、×××××の不斷危機を持つ沒落期資本主義の世界において、保有正貨が際限もなく減少するといふ事態は、支配的金融資本——帝國主義ブルヂョアジー——にとつては致命的だ。金解禁をやれば、當座の正貨流出は免れぬが、その「一時的犧牲」を忍んで正貨防衞の「根本策」を講じよう、——と彼等は考へた。そして彼等は、解禁による「一時的な金流出」は僅かですむと思つてゐた—

三、輸出增進を中心とする貿易全體の增大によつて、貿易利潤を大ならしめる。と同時にまた運賃收益をも增大させる。——即ち貿易外の受取勘定を多くして保有正貨を擁護する。おまけに海運業の繁榮によつて、造船・鐵・石炭等の重工業の利潤を增大させる。周知の如く、日本の船舶と重工業は、金融資本の直接支配下にある。

四、物價下落=信用收縮によつて弱體企業を窮地に突き落し、整理・合同を通して金融資本の勢力範圍を擴大する。

五、物價下落=貨幣價値騰貴は、自働的に債權者を利益する。言ふまでもなく金融資本は、最大の債權者であり、代表的な債權者である、——即ち貸付資本の集中的所有者として、公債や社債の最大の所有者として、等、等。

六、正貨の「一時的」流出によつて通貨收縮=金利高を實現する。これは「特融」後の、預金の大銀行集中による變態性金融緩慢=金利安=銀行利潤低下を克服することになる。即ち一口に言へば、高利金による銀行利潤の高率化。

七、正貨現送による利潤。——一つには彼等の巨額の在外借入金を返して利子の負擔を免れ、銀行の資金コストを切下げて銀行利潤を高める。二つには正貨現送による利鞘稼ぎ、等。

八、金解禁見越しの爲替投機による投機利得、商品價格や株式價格の急角度下落に際しての投機利得。

およそこれらが、日本金融資本の試みたところの「取らぬ狸の皮算用」であつたのだ。

(3)

だが、彼等の此の「算用」は必然的に大きな誤算たらざる

を得なかつた。誤算の一――、金解禁を契機として起る物價下落は、彼等が考へたやうに單に貨幣價値の變動によるものでは決してなくて、生産過剩恐慌の物價下落であることを、彼等は少しも豫見し得なかつた。此の種の見透しを缺くといふことは、殆どすべての恐慌を前にしたブルヂョアジーに共通な、特徴的な事態である。もう一つの誤算は、まさに來らんとしてゐた「第三期」世界恐慌の暴風雨の、ほんの豫感すらも彼等は持ち得なかつたからである。これは、――「米國の繁榮」に絕對的な期待をかけ、世界資本主義の一時的相對的な安定化を、新しい資本主義的上昇の始まりだと信じ込まずにはゐられなかつたところの、彼等の意識の階級的限度を現はしてゐる。從つてそれは、此の沒落期資本主義の時代における支配的ブルヂョアジーに共通な、全く特徴的なことであつたのだ。

最も聰明ではないまでも、最も博識なブルヂョア政治家の一人である井上藏相――彼は金解禁敢行の政治的立役者であつた――は、解禁による物價下落の程度は爲替の騰貴する程度以上に出ないと言ひ切つてゐた。また、さう信じてゐたに相違ない。彼は更に、この「第三期」世界恐慌の一大導火線であつたところの米國取引所の恐慌が爆發した時も、それの本質と、その世界史的意義とを、微塵も理解し得はしなかつた。彼は、告白的にかう述べてゐる――『御承知の如く亞米利加は、戰後引續き繁昌を續け、一昨年頃から株の相場が非常に高くなり、それが昨年十月の末に反動が來まして急激に株が下つたのであります。恰も大正九年の日本の財界の反動の如き狀態(!)でありました。その時は唯單に有價證券市場の恐慌である、亞米利加全體の經濟狀態には何等重大なる變動を與へるものでない、譬へて申しますと、人の身體の何處かに腫物が出來て、それが潰決して膿が出たと云ふやうな次第でありまして、其人の身體全體には何等狂ひのないものである、斯う云ふ觀測をし、我れ人共に左樣信じて居つたのであります。』(「世界不景氣と我國民の覺悟」一四頁)

こんな馬鹿げた見透しの上に立つ「皮算用」を盛り込んだところの、金融資本のデフレーション政策は、しかし容易に彼等の指導下に立つ資本家「大衆」の支持を得た。產業資本家は、解禁によらうと何によらうと、價格の下落はよろこばぬ。しかし彼等は、長い〳〵慢性的不況に悩みぬき、わけても金融恐慌

で度膽を抜かれてゐた。そして、それも畢竟、金輸出禁止といふ「變態經濟の惡作用」だと信ぜねばならなくなつてゐた。ところへ彼等は、金解禁の物價下落はほんの一時の我慢だと敎へられた。その我慢さへすれば、日本經濟は「常道に復す」のだと敎へられた。最も忠實に、しかも「權威」をもつて金融資本を代辯した濱口首相や井上藏相は、金解禁さへやれば今にも景氣が立直りさうなことを言ひ、忽ちにして入超轉じて出超となりさうな印象をふり撒いた。然るにまた、それ自身帝國主義的な、日本の產業資本家達は、正貨擁護にも決して無關心ではあり得なかつた。爲替安定、生產費低下による輸出增進といふ展望は、彼等としても結構に違ひなかつた。

財政整理による恐慌不安一掃もわるくなかつた。產業の「合理化」も、魅力を持つた言葉だつた。「變態性金融緩慢」の克服による銀行利潤の高率化が、慾の皮のつつぱつた銀行資本家一般を動かしたことに不思議はない。――かくして、產業資本家も弱小銀行も、こわ〱ながら金解禁を讃美した。お太鼓役のブルジョアヂャーナリズムは、今ぞとばかりに囃し立てた。そこでデフレーション政策は、金ブルヂョアの政策となつたのだ。

が、言ふまでもなく、此の金融資本の政策は、二三の條件が充たされる時にのみ、一應の成功を收めるのだ。

第一には、政策遂行のための犧牲と負擔をば、ブルヂョアジーと×對的な階級關係にある勞役者大衆に轉嫁すること。――急激な物價下落は生產制限を餘儀なくさせる。その場合、それに應じてたやすく勞働者サラリーマンを馘首して失業者を多く出すことが出來れば出來るほど、そして殘る就業者の賃銀や俸給をひどく切下げることが出來れば出來るほど、ブルヂョアジーの懷勘定は樂なのだ。そしてそれだけ、デフレーション政策は、勞役者大衆の犧牲と負擔において遂行されるのだ。かくすることは、ブルヂョアジーにとつて最も重要な目標でなければならなかつた。何故なら、問題の根本はそこにあるのだし、おまけに彼等の意圖したことは、輸出商品の競爭力の增大にあつたから、單に日本の物價を世界的水準にまで引下げるだけでなく、その上に尙ほ「合理化」による生產費低下をやるつもりだつたのだ。此の合理化による生產費低下が、いかに失業と賃銀低下の犧牲においてなされるかは、今や周知のことである。（但

じ、狭義の合理化は、生産技術上の合理化で、これには巨額の資金が要る。そこで彼等の目指した「合理化」は、整理・合同を意味するものに過ぎなかつた。即ち金融資本の勢力範圍擴大の意圖——それに彼等は「合理化」の名を與へたのだ。

勞働者やサラリーマンの外に、デフレーション政策の犠牲と負擔をしよはされる大衆は、中小商工業者であり、わけても農民である。彼等はまづ、債務者大衆である。金融資本が、物價下落=貨幣價値騰貴によりて自働的に我物とする巨大な利益は、自働的に此の債務者大衆の損失とならねばならぬ。それから、勞働者・サラリーマンの賃銀引下げをやるのには、生活必需品の價格をぐつと引下げねばならぬ。そこで、犠牲と負擔は、またも、生活必需品——わけても食糧品——をつくる農民その他の小生産者大衆に轉嫁される。等、等。

もう一つは、金融機構の防衛である。金融資本は、急激なデフレーションが、金融機構を危險に導く虞れあることを知つてゐた。またも取付騷ぎや「特融」で「折角の」デフレーション政策が埋葬されては堪らない。——金融資本は、出來るだけブルジョアのために、總ての犠牲と負擔を勞役者大衆に轉嫁しようと企てる。しかし、それが不可能な場合には、先づ自分自身のために、犠牲と負擔の若干を商工資本家や地主にしよはせる。

(4)

かうした金融資本の政策を、國家・國民の名において遂行することが、濱口・井上などの民政黨政府の役割であつた。

そこで彼等は、「強く正しく明るき政治」「財界安定國運發展の根本的政策を遂行する」「國民は協力一致國家の借金を返さねばならぬ」「金解禁の斷行により國際經濟の常道に復す」「解禁は財界甦生の第一歩」「産業合理化の提唱」「失業對策に萬全を期す」、等、等、ありつたけのデマを飛ばし、金融資本から引き出した「淨財」をばら撒いてかき集めた投票で議會の絶對多數を占めることに成功した。その彼等が、いかに忠實に金融資本の政策を遂行したかを見よ。

彼等の「強く正しく明るき政治」は、徹頭徹尾次の四項を目標として强行された。

一、集中的債權者金融資本を利するため、ならびに生産費を切下げるための、低物價の實現。

二、金融資本の制覇のための整理・合理化の促進。
三、金融資本のための金融機構の防衛。
四、デフレーション政策の一切の犠牲と負擔を、勞役者大衆への轉嫁。

彼等の第一歩は、解禁準備と稱して爲替相場を釣上げて、巨額の××××金を使ふことにはじまつた。その穴埋めは誰がする？租税及び官業收入の八割を負擔する勞役者大衆そのものだ。

「緊縮小唄」まで作つて騒ぎ立てた緊縮・消費節約の政策は、何を目的としてゐたか？（一）物買ふな、政府も買はない、とさう言つて、物價をぐつと引下げるためだつた。（二）そして金融資本のために當面の金流出をなるたけ少くするやうに、輸入を減らすためだつた。（三）と同時に、勞働者・俸給生活者・農民大衆に必要品も買はさぬやうにしむけて、それを、大馘首・賃銀切下げ・借金加重化をやる前提たらしめるためだつた。

財政緊縮の負擔をいち早く下級官吏大衆にしよはせようとした政府の腹は、「官吏減俸案」ですつかり見え透いた。

では、緊縮政策の中軸をなした非募債主義とはなにか？——

金融資本は十億の公債を持ち、銀行全體では二十五億といふ巨額の公債を持つてゐた。だから、不況時に公債を増發して、公債全體の値を下落させれば、金融資本の大損となり、金融機構はぐらつき出す。濱口・井上の非募債主義こそは、金融機構防衞の最大支柱だつたのだ。

郵便貯金の利下げは何のためだつたか？ それは、デフレーションで銀行の預金が減り、金融機構が危くなるのを防ぐために、サラリーマンや小生産者大衆の虎の子の貯金の利息を引下げてしまつたのだ。彼等は、こんなにまで細心に、負擔の轉嫁を企てた！ その彼等が、窮乏の中小商工業者や中小農民に數千萬圓の低利の金を貸すのだと大々的に宣傳した。むろん、誰も借り手のないやうに七面倒な融通條件を規定して！

絲價補償法とは何だつたか？ これもまた、銀行が製糸資本家に貸して回收不能となつた巨額の金を、銀行の損にさせまいとしてしたことだ。と同時に、製糸資本家には、生糸の損失を養蠶農家に轉嫁する時間と餘裕を與へんが爲にしたことだ。おまけに、銀行の損失を政府が尻拭ひすることにより、結局の尻拭ひを××以下の×××大衆にやらせようとする！

彼等は、かうしておいて他方では、金融資本のためにはいち早く「産業合理局」を拵らへた。そして金融資本が有利に整理・合同を押進め得るやうにと、會社株の暴落はそしらぬ顔で眺めてゐた。金融難に追ひつめられた「弱體會社」の泣き付きも、頑としてハネつけた。『企業會社が多すぎる。整理を徹底させたい』——これが井上藏相の言葉だつた！（商業會議所總會の演說——五月廿七日の東日。）

だが、金融資本政府の政策の本質は、その「失業對策」に最もするどく現はれた。彼等の或者は、『合理化によつて假りに（！）失業者が出るとしても取るに足らない（！）』と演說した。（俵商相、同上）。或者は、『今日の經濟組織では……今日の人間の力では、失業者は防げません』とすましてゐた。（井上藏相「改造」討論會）。更に他の者は、『無能と言はれやうが無策と言はれやうが、當分はジーッとして居つて、（！）この失業問題の趨勢を見よう』とするのだと公言した。（安達内相、同上）。また、事實において、彼等は何一つしなかつた。否な、たゞ一つだけはした、——彼等は失業者に歸農を強要した。そして犧牲を農民に轉嫁せんがために！　かうやつて彼等は、非募債主義を頑守して金融資本への忠勤を勵んだのだ。

此の「失業對策」（！）の埋合せとして、彼等は大掛りな八百長劇をやつてのけた。勞働組合法案のゴタ〳〵がそれである。彼等は、一方では資本家總動員で猛烈な反對運動をやらせ、他方では社會局の指導を仰ぐ社會民衆黨の改良主義者等を動員して政府案を支持せしめ、いかにも政府が勞働者階級の味方であるやうな顏をした。此の八百長劇は、議會期になればまた蒸返されるだらう。そして八百長劇の見事な正體暴露に終るだらう。

救濟を欲する「弱體企業家」の群や、反對黨の政友會や實業同志會は、盛んに民政黨政府の無爲、無能を攻撃したが、しかし此の無爲、無能こそは、金融資本の解禁對策として最も有爲、有能なものだつたのだ。

だが、彼等は決して無爲でもなかつた。見よ、金融資本支配下の造船、海運業に與へた奬勵金や融資はどうか！　金融資本獨占下の貿易に對する運賃拂戻制や輸出補償法はどうか？　金融資本のために有利な投資の道をひらく、電話その他の官業民營案はどうか？　郵貯利下げや糸價補償法については述べた。」

かくて彼等は、その施設が金融資本擁護に關するものたる限り、デフレーションに逆行することさへも厭はなかつたのだ。

最後に、民政黨政府によるデフレーション政策の遂行は、未曾有の陰險さを持つ彈壓主義で貫かれた。大新聞の買收と同時に加重されたニュースの××、全面的なスパイ政策、（スパイの群は今や兜町にまで入込んでゐる！）飢餓線上の農民の××××、×××××の要求に對する極度の壓迫、だが、なかんづくプロレタリア前衛に對する猛×××迫害——。

——およそこれらが、五百萬の投票を民政黨に與へた被抑壓大衆が、民政黨政府によつて報いられたところのものなのだ。

(5)

金融資本とその政府の、これらすべての意圖と努力とにも拘らず、彼等の「皮算用」は、今までのところではまだ大部分皮算用に終つてゐる。

なるほど爲替は安定狀態を得た、デフレーションは實現された。物價は下落した。しかしそれらを通じて獲得さるべき筈の巨大な利益の夢は、激成されたデフレーションの深大矛盾によつて打碎かれた。

むろん彼等は、正貨現送により、外債投資により、爲替や株や生糸や米の投機によつて、數百萬圓の利得を懐ろにした。けれどもその他の種々の利潤勘定の「豫想外の減り方」をどうすることも出來なかつた。「向うから外れる」ものゝ多いのをどうすることも出來なかつた。

貿易の減退（一月乃至九月）は三〇％以上に出で、大正十年の減退レコードに接近した。從つて彼等の貿易利潤は、增大どころか、ひどく減少した。彼等の支配下にある海運、造船、製紙その他も、ひどい不況に捲きこまれた。

保有正貨はどうか？ 解禁による正貨流出は、年内に二億見當といふ井上藏相の豫想を全く裏切つて、上半期にすでに二億二千五百萬圓に達した。そして出超期においてさへ流出は繼續し、最近には早くも次の入超期に備へる正貨現送がはじまつた。彼等は、いかにも輸入を減らすことには成功したが、しかし輸出減退の激甚さのために、貿易勘定はたゞ全體的に引下げられた水準において微弱な改善を見たにすぎない。海運の悲況は運賃收入を激減させ、貿易尻における僅かばかりの改善を埋沒す

る。彼等の目指した國際貸借勘定の改善は、實現どころの騒ぎでない。

いかにも通貨は收縮し、金利は高まつて來た。だが、それは變態性金融緩漫の克服だつたらうか？銀行利潤の増大だつたらうか？全くあべこべだ。この恐慌性金融梗塞は、回收不能の泥沼に銀行を突き落した。おまけに、擔保及び手持有價證券の莫大な値下り損——。×××、利潤の増加どころか、×××××に瀕してきた。

物價は激落し、それだけ貨幣價値は騰貴した。しかし、集中的債權者たる金融資本が、それによつて得る筈の利益は、まだ大部分、可能性に止まつてゐる。それの現實化は、彼等が公債・社債の償還を受けた時、貸付を回收した時に完全に生ずる。しかるに、國家財政は極度に窮迫し、大事の減債基金は今や、暴落する公債の防戰買ひに使はれる。そして社債の回收や貸付の回收は全く絶望的になつてきた。（それでも、五大銀行中の三井・三菱だけは、相當巨額の資金回收を強行したが、しかしまさにそれによつて産業企業を金融地獄に突き落し、×××な××のモメントを激化させてゐる）。

デフレーションの進行と共に、産業資本の、銀行資本への依存はます〱甚だしくなつて來た。これに乘じて金融資本は着々としてその支配力をおし擴げて行つた。（三井による、富士製紙・日本製粉の獲得、東京電燈・東京瓦斯への統制力擴大。三菱による、日魯漁業・磐城セメント・日本郵船の獲得、日本鋼管・昭和工船・富士紡績への勢力擴大、等。郵船に關しては——東洋經濟新報社「株界二十年」一七頁によれば——三菱は昨年五月末に宮內省所持の郵船新株二十萬株を譲り受け、これに對して宮內省は三菱銀行舊株三千株を買ひ上げてゐる）。更にまた、金融資本家及び金融資本政府の企圖した整理・合同も進むには進んだ。本年上半期における諸會社の減資は一億七千萬圓に達し、解散はほゞ二億圓に達した。そしてこの解散資本二億圓のうち、合併解散は四八％を占めてゐる。減資の金額は記錄的に大きい。しかし、解散の金額は、總體においても、合併解散においても、昭和二年や三年のそれよりも少ない。全體として、整理・合同は未だ大して進んでゐない。（エコノミストによれば、九年恐慌——震災直前の三ヶ年半の期間における減資解散は二十一億餘圓、震災——金融恐慌の三ヶ年半の期間における

それは三十億圓、金融恐慌――四年末の二ヶ年半の期間におけるそれは十九億餘圓であつた)。一般的に、整理・合同は、金融資本の意圖するそれの恐らく十分の一にも達しないのみでなく、特に彼等の狙ふ電氣や纖維工業への進出もまだ果さないといふのに、金融資本は早くも進出的な整理・合同戰の一應の打切りを餘儀なくされ、却つて自家救濟的な合同――例へばあの製鋼合同――を考へねばならなくなつてきた。深まる恐慌の激流の中に彼等自身の足元が氣づかはれてきた！――經濟危機の成熟――。

井上・山本・武藤のデマ

(1)

日本資本主義經濟それ自體が持つ解禁恐慌は、「第三期」世界恐慌の巨浪と合し、全面的に異常な深刻さを帶びてきた。そして八月から九月にかけて、全狀勢は一段と險惡化してきた。恐慌は、新しい發展段階に進入した。旋風中心は、價格の部面から金融の部面に移行した。正貨流出＝金利昂騰＝公債下落の不安の三位一體は、危機のモメントとしてはつきりと表面に現はれてきた。(本誌前號の論文參照)。この不安の增大は更に諸價格の下落をひきおこし、産業企業を打撃する……。預金の減少と貸出の氷結――銀行の流動資金の缺乏――それによる銀行業態の惡化――銀行手持公債の賣却――公債市價の下落――更にそれによる銀行業態の惡化と不安の增大――諸價格の下落――等、等。まさに一つの螺線狀展開の過程！

かうした物的過程の進行は、また、イデオロギーの醗酵を促さずにはゐなかつた。

無對策の對策によつて、最も忠實に金融資本の政策を遂行してきた井上藏相は、危機の成熟が、その政策をヨリ以上押進めることを困難ならしめるや否や、いち早く「國民」に訴へた。彼は「世界不景氣と我國民の覺悟」を書いた(八月六日)。すると間もなく、政友會總務山本条太郎は、反對黨を代表し、「經濟國策の提唱」を書いて「國民」に訴へた(八月十五日)。次は、第三黨實業同志會の首領武藤山治の番である。彼れのパンフレット「井上藏相の錯覺」も、數日ならずして現はれた(八月二十日)。

彼等はいかにして「國民」に訴へようとしたか？「國民」

は、何を彼等から訴へられたか？

(2)

井上藏相は、先づ、金融資本と自分の爲めに、金解禁を辯護しなければならなかつた、—解禁の結果は大變よろしい(！)と。『國民の多大の犠牲と努力によつて金解禁も決行せられ、その後何等の支障なく、順調に進捗しつゝある』(前掲書五三頁)。

いかに善良な「國民」でも、これには一寸面喰はずにはをられまい。たゞ、金融資本の政策を忠實に遂行せんとする井上等にとつてだけは、すべてが『順調に進捗してある』のかもしれぬ。だが、必ずしも、さうでもないのだ。いかにも金融資本は、緊縮・收縮・物價下落によつて、産業企業を相當に困らせ、整理・合同（合理化）をやつて失業者を出し、賃銀を切下げ、且つ中小商工業者や農民にも出來るだけ負擔を轉嫁しなければならぬと考へてはゐる。けれどもまた、このデフレーションの「薬が利きすぎて」、××・××に導くことはおそろしい。しかも、薬は明かに利きすぎた。そこで井上藏相は、『今日の經濟組織はかなり複雜で、一々國民にこれを理解せしめることは非常に困難な事柄である』のを利用して、『何等の支障なく順調に進んでゐる』といふ大デマを飛ばしたのだ。」

同じ動機から彼は言ふ——、

『不景氣といふものも決してさう長く續くものではないのであります』(六〇頁)。『また米國財界の現狀（七月末）は、フーバー大統領の言ふ如く、すでに底入であると信ずべき理由が多いのであります』(三四頁)。

だが、事實は井上藏相より遙かに雄辯だつた。米國は、その後またずつと大きな恐慌深度に落込んだ。日本は、現に吾々の見てゐる通りだ。恐慌の隱蔽と前途の「樂觀」とが、いかに現在の沒落ブルヂョアジーの特徴だとは言へ、井上の場合は餘りにも典型的である。彼は、米國取引所恐慌は何でもないと言つてゐた。彼は、解禁による物價下落は爲替の騰貴率以上には出まいといつてゐた。(いかにそのことが金融資本の願望であつたにもせよ)。彼は、正貨流出は二億圓見當で止まるだらうと言つてゐた。彼は、四月末に生糸の在米ストックの減つたのを見て、生糸の市價は持ち直すだらうと言つてゐた。(その後生糸は慘落した)。今や彼は、この第三期世界恐慌の一成素として明白な原因を持つ國際農業恐慌を、『實に世界を通じて一つの不思議

な現象（ー）といつて宜い位なことであります』などゝ言ひふらすのだ。そしてこの紛れもない世界恐慌を『世界不景氣』などゝごまかすのだ。同じやうに彼は、本質上の生產過剩恐慌である此の解禁恐慌下の日本の現狀を、「不景氣」といふ言葉で糊塗してゐる。しかし、彼が×××××××××××××××。その時に、もう一度彼は、『我れ人共に（たゞの不景氣だと）左樣に信じて居つたのであります』と言ふだらうか？ ――だが、その時にはもう「國民」は、恐らく藏相井上の聲を聞くことは出來ない。

だから吾々は、彼れの最後的な叫びを聞いておくのもよい――、

『今日は世界の隅々まで不景氣の爲に苦しまない所はないのであります。苦しんで怨聲を發し悲觀することは、其國民の最も愼むべきことであります。寧ろ斯の如き事態に遭遇したならば此時局をよく理解して各々の立場に於て大いに努力を惜まず國民的に一致協力して此難關に處するといふことが最も肝要なることゝ考へるのであります』（五九頁）。

この言葉を彼は、世界恐慌＝解禁恐慌の激浪のために飢餓の渚にうちあげられた數千萬の農民・小市民・勞働者・サラリーマン・失業者に向つて投げつけたのだ――。

たしかに「國民」は、「覺悟」を强めるだらう、――だが、×××××××××××××××。

(3)

では、政友會の政務調査會長山本条太郎は、どんな「經濟國策の提唱」をやつたか？

彼は、欠伸の「增產」を目指して書いたかのやうな四百頁の著書を、破產した政策の粉飾をもつて埋めてゐる。吾々は、そんな粉飾をいちく\とりあげてなんかゐられない。『提唱』の眼目は何か？　答、――インフーションによる國產振興＝輸出增進＝輸入防遏。だが、これこそ、近時の日本資本主義經濟に適用されて立派に破產したしろものではなかつたか!?

彼は、製鐵、製油、肥料、化學製品、機械、自動車、電力、等の重要產業を大いに振興するのだといふ。それが爲に、大いに保護政策をとるのだといふ。そして、必要な資金は、特殊銀行の擴張により、日銀の保證準備擴張をもつてする紙幣の增發により、低金利政策により、だが就中、大いに「生產的」公債を發

行することによつて、何程でも供給することが出來るといふ。善哉！ いかにも、――たゞ出すだけならば紙幣はいくらでも出せるだらう。公債だつていくらでも出せよう。だが、さうやつて産業を振興するといふことは、無制限の信用――融通――を與へることによつて産業を振興せよといふことだ。しかし信用は、生きた人間の誰れかゞ與へなければ決して與へることは出來ない。國家が與へるといふのは形式だけのことだ。國家は打ち出の小槌ではない。一體、誰がその信用を與へるといふのか？ 「人件費」の節約――賃銀切下げと馘首――に沒頭し、減税を叫んでゐる資本家か!? 飢餓線上を彷徨する勞働者、農民か!?

政務調査委員長は言ふ――、大量生産をやらなければ、大いに生産を増進しなければ、コストの切下げは不可能だ、――だから盛んに資金を供給して大いに産業を振興せよと。善哉！ だが、只生産のために生産する資本家はない。山のやうに増産されるその商品は、抑々誰に買はせようといふのか？ 支那の農民は、野垂れ死かソヴィエットかの岐路に立つ。印度は外資ボイコットだ。滿洲は、關税を高めても高めても金が流出する。そして今や、合理化と大量生産による幻想的な巨大生産過剰が、全世界を恐慌に捲き込んでゐるのだ。――誰が買ふのか？

山本の「輸入防遏」策の奥の手は、關税の引上げだ。重要原料の大部分を輸入する日本においての、關税の引上げだ！おまけに、――たとひ山本その者を總理大臣とする反動政府でも、外國が報復的に關税を引上げるのを禁壓することは出來ない。外國が引上げたら、日本でもまた引上げるか？一體、何千メートルほど引上げれば、輸入防遏―輸出増進になるといふのか!?

最後に山本は、鐵や石炭や石油のやうな原料なら、滿洲にいくらでもあると言つてゐる。

――たしかにあるだらう。なぜ早く、行きつけの三井にでも言うて、算盤をとつて買はないのか!?

彼れの書いた四百頁を――根氣ある者は――讀んで見よ。たゞ、言葉、言葉、言葉だ。その「言葉」によつて、重要なものは總て隱蔽されてゐる。×對的な階級關係の一切が隱蔽されてゐる。日本資本主義が持つ矛盾のすべてが隱蔽されてゐる。帝國主義世界の尖り切つた對立が隱蔽されてゐる。東洋諸國の反帝國主義的××××の火の手が隱蔽されてゐる。「第三期」世界

恐慌のもろ〳〵の現實が隱蔽されてゐる。かやうに、一切の至要な現實から切り離された眞空の中で、日本資本主義經濟はゴム風船のやうに膨脹する。――それが山本の「經濟國策」の全風景なのだ。

(4)

山本の「經濟國策」の眼目は、その後、政友會の「新經濟政策」に盛り込まれた。それは、當面應急對策――不景氣對策――として、『今後五ケ年を期し、國內生産の自然增加は別とし、年額十億圓の新たなる生産增加を圖り、もつて國民經濟を充實し、併せて輸入を防遏し、輸出を增進し、もつて根本的に正貨流出の防止を期す』といふのだ。そして此の、買ひ手のない商品を增産せんがために、政府は六億圓餘の資金を供給し、信用の與へ手もない公債をウンと發行して、それに充てるのだといふ。資本主義制度の番卒共が、その政策の名稱だけを、社會主義ロシアの「五ケ年計畫」に眞似たといふことは、時節柄、滑稽といふよりは寧ろ悲慘である。

國産振興＝輸出增進＝輸入防遏の三位一體は、日本金融資本が當面のデフレーションを通じて實現せんとしてゐるものであることを吾々は見た。政友會のデマゴーグも、民政黨のそれと同じく、金融資本の意圖・政策以外のものをかつぎはしない。また、かつぐことも出來ない。政友會も、正銘の金融資本黨以外のものでない。それは、彼等が「新經濟政策」によつて實現せんとするものが同じ三位一體であることによつて明白なだけではない。彼等は、民政黨の金解禁のやり方にはケチをつけても、金融資本の當面の政策であつた金解禁そのものには決して反對しないことによつても明かだ。

二つの政黨は、同一目的の實現を目指してゐる。民政黨は、その實現の手段として、此の一年餘りをデフレーションで進んできた。しかるに、態度極めてあいまいだつた政友會は、今や、當面の不景氣對策をインフレーションで行かうとはつきり言ひ出した。おまけに、民政黨と反對に、關税の引上げも大いにやると言ふ。

これは不思議でも何んでもない。日本金融資本は、日本資本主義が持つ深大矛盾に應當して、絶えず矛盾した諸要求の間を動搖する。支那××においては武斷的方法と經濟的方法、勞働者農民の支配においては議會主義的方法と××××的方法、

等、等。と同じやうに、最近の彼等は、生産費低下のためには高關税を排斥し度い、しかしかう海外市價が暴落しては關税も要る。整理・合同を押進めるのにはデフレーションでなければならぬ、しかし危機を避けるのにはインフレーションも要る、等、等の一聯の矛盾に落ち込んだのだ。しかも、この矛盾は、危機の成熟と共に加速度的に強まつてきた。そこに、政友會の「不景氣對策」出現の根據がある。

同じ理由から、「金輸出再禁止＝平價切下げ」を持ち出してきたのは、武藤山治である。（彼は前には解禁支持者だつた！）溫情主義のデマの沒落で一段と有名になつた此の「人物」の、今度のデマはどんなものか？

彼によると、まづ一時、金の輸出禁止をやつて見る、『而して世界不況の或期間を經過し、適當の機會が來た時には、そこで舊平價解禁に導くか、或る程度の平價切下げを行ふか、又は永久に金爲替本位制を確立するかは、その時の内外の事情によつて徐ろに決定したら好いのである。』と（前掲書八四頁）。

吾々は、彼に、かう反問するだけで澤山だ、――いつたい諸君は再禁止をして、その先き貨幣價値をどう定められるか全く解らずにマゴ〳〵してゐる期間、君の商賣をどうしてやつてゆくつもりか!?と。

いくら彼でも、それ位のことは知つてゐるに違ひない――。ところが彼は、平氣でかう言つてゐる――、『この事を實行すれば、今日我財界に舊平價解禁が與へた苦痛は一朝にして拭ひ去ることが出來る（？）』（八五頁）。『太陽の光は、富豪の家をも、貧乏人の家をも、無差別に照して其恵みを分つが、我々の主張する此際の爲替引下（金輸出再禁止による）は、恰も此太陽の光に等しく、萎縮混亂せる我財界の隅々までを普遍的に救ふのである』と（八八頁）。――だが、諸君、これは大道商人を思はせないか!?

ついでながら、もう一つ――金輸出再禁止論を振り廻し始めた彼が、たゞその辻褄を合せるために、どんなでたらめでも言ふことの見本――。金解禁をやつた井上等は、日本現在の恐慌を隱蔽して不景氣といふ言葉でゴマ化すのみならず、その不景氣をひとへに「世界不景氣」の影響に歸さうとする。金輸出再禁止論者は、日本現在の恐慌を認めるやうなことも言ふが、しかしその原因を專ら貨幣價値の變動に歸し、生産過剩恐慌を隱

蔽する。ところが武藤は、百尺竿頭一歩を進め、世界恐慌までを貨幣價値の變動に歸してしまつた！ 曰く『世界的不況そのものも、…生產過剰でなく、貨幣價値の變動によるものだ』と(エコノミスト十月一日號六七頁)。

だが、科學的な意味でもつと面白いのは、彼が、矛盾した要求の間を絶えず動搖する日本ブルヂョアジーの心事を無意識に告白してゐることだ——、

『經濟問題は日々變化するものであるから、曾つて斯う云つた、或は斯うしたからとて、それを永久に固執することは不可能であり、又非常の間違である』。『金解禁問題の如きにも、此誤つた考へが尠からず禍をなしてゐる』。『前に引用せる「貨幣錯覺」の著者フイツシヤー教授が近頃發表した米國株界に關する新著の序文には、經濟問題に就ては、新事情の發生と共に寧ろ其說を變改するの可なる所以を說いてゐると聞いたが、さすがに公正なる學者の態度である』(七五頁、七七頁)。

沒落期のブルヂョアジーが、沒落期のブルヂョア經濟學者に教へられる！ 資本主義の一般的危機が深まれば深まるほど、諸國のブルヂョアジーの政策は、ます〳〵永續性のない、一定期間の一貫性を缺くものとなるのだ。

當面の恐慌期における武藤＝實業同志會の「對策」は、獨立性を喪失した產業資本家の立場をもつて特徴づけられる。彼等は、或はよろこんで、或はいや〳〵ながら、金融資本の尻についてゆく。武藤とその實業同志會が、創立當時の鼻息にも似ず、ます〳〵政友會の別働隊の如く行動したのは偶然でない。金融資本は、金輸出再禁止の泥沼に落ち込まぬやう、有ゆる努力をするだらう。だが、明かに彼等は、それにも拘らず餘儀なくされる場合がます〳〵ありさうなことに氣づいてきた。政友會はすでに再禁止論に傾いてゐると時事新報は報じた(九月八日)。しかし政友會はまだこれを發表してはゐない。事實において、「まあ一つ當つて見てくれ」の役割を仰せつかつてゐるのが武藤である。それは、當分政權をとる心配のない政治家の「役德」である。

三人はそれ〴〵に、矛盾した要求の異る面を代表しても、結局において皆金融資本の政策を代表すること、×對的な階級關係を隱蔽して國民の名において語ること、從つて經濟過程に關しては、恐慌を隱蔽し、生產力と消費力との矛盾を隱蔽し、且

つ日本を世界經濟から切り離して「國民經濟」の觀點に身を置くこと、死滅しはじめたブルヂョアジーの動搖常なき政策、多かれ少なかれ現實から遊離することの當然の結果として、いづれも俗惡なユートピアを欺瞞の道具に使ふこと、――これらが、井上・山本・武藤のデマに共通な、特殊の特徵の二三である。

危機のモメントの激化

(1)

井上・山本・武藤等のデマ、樞密院と民政黨政府の喧嘩、金融資本の支持ある政府の前に樞密院の慘めな屈服(これは、吾々があの若槻內閣敗北の當時早くも論定したやうに、半封建的・絕對主義的な樞密院は最早や獨立の階級的基礎ある存在ではなくて金融資本ブルヂョアジーの帝國主義的支配の一機關に變質しつゝあることを決定的に立證した)、――政治の場面にはさうした動搖を見せた八月・九月から十月初旬にかけて、經濟危機のモメントは容赦なく激化した。

八月の物價は下落頓坐の傾向を見せたが、それは吾々の指摘した通り、單なる外觀にすぎなかつた。九月の指數は一七一・五で、八月より更に四・一の激落を見た。しかし、小賣物價指數はちつとも下らなかつた。卸物價と小賣物價の開きはます〳〵大きくなつた。なかんづく、米を除いた食糧品その他の生活必需品の小賣値段が下らない。四五のものは却つて騰貴した。

諸産業は、依然として高率の操業短縮を續けてゐる。紡績、生糸、石炭は、制限率擴大の方向にある。紡績カルテルは、十月からの採短擴張に關して紛擾を起し、かなりに强い動搖を見せた。銅鐵カルテルは、二タ月のあひだカルテル價格を設定し得なかつたほどの混亂狀態の揚句、丸銅の値段を一擧に十三圓(!)も引下げて「ベラ棒な安値」にしてしまつた。セメント・カルテルでは、二大會社の喧嘩はやゝ緩和されたが、ダンピングは利かなくなつた。

株價は、六月大暴落のあとをうけて七月に小康を得たが、八月から再び低落し、九月の下落はひどかつた。東洋經濟新報の株價指數によれば、八月末の六六・三から、九月末の五九・四に落ちてゐる。一〇%四一の暴落！　更に十月に入つては、米價の暴落に抑されて下げ續けた。わけても、銀行株の下落がひど

い。これは、恐慌の旋風中心が金融部面に移行したことをはつきりと反映する。

銀行株の暴落

	興銀	第一	正金	勸銀	日銀
九月十日	二七・七〇圓	六九・六〇圓	一五三・八〇圓	六四・九〇圓	四九一・〇〇圓
十月七日	一九・五〇	五九・一〇	一四七・〇〇	五八・七〇	四八四・〇〇

正金銀行はとう〳〵正貨現送をやり出した。(九月二十六日)ために、爲替相場は漸騰し、最近には半ポイントほど爲替現送點を超えた。

しかし、このレートは永く續きさうもない。貿易の惡化はます〳〵甚だしい。年初から六月末までの貿易總額は、前年同期に比して三〇%の減少であつたが、その後の三ケ月間の加速度的な惡化のために、一月――十月十日の貿易總額の前年同期に比する減退は、つひに四〇%に達した。かくて、資本主義日本の貿易史上における最大の貿易減退率とされる大正十年の三六%はつひに突破された。それと共に、井上藏相の解禁後の「順調な進捗」の一例證として誇つてゐたところの入超減少は全く消滅し、代つて入超増加が現はれた。

本年の出超期から入超期への轉換、及び對前年入超増加は、今や、急速に起りさうに見える。市價暴落のために先きへ〳〵と遲らせてゐた輸入棉花の買付が遂に始まつたやうだから。――正金銀行は、九月二十六日以來、すでに三回にわたつて一千二百五十萬圓の正貨を現送した。金流出は續くであらう。

正貨準備高は、八億六千五百萬圓に低下した。これは、『大正八年十月末以來十一年ぶりの最低記錄』である。この正貨準備額は、世界主要諸國中の第七位に落ちてゐる。通貨は、九月半ばには九億九千七百萬圓にまで收縮し、大正十年以來の記錄を現した。最近は十億圓臺にある。

(2)

金利は昂騰を續けた。これは主として危險プレミアムの昂騰を意味してゐる。單名手形の決濟難は、八月中からすでに現はれてゐたが、今や普通の商業手形までが切替困難を來たすに至つた(十月六日の中外商業)。割引日歩は、次表の如く高まつてゐる。

割引日歩の昂騰

	七月廿六日	八月十六日	九月六日	九月廿七日
最高	1.97	2.00	2.01	2.04
最低	1.54	1.51	1.83	1.62

銀行は、單名手形貸其他の貸出の回收に全力を傾注した。ために、貸出しの預金に對する比率は少しよくなつた。

しかし公債が暴落した。公債の下落は、吾々が前號で豫測したよりもずつとひどかつたし、また早く來た。代表的な甲號五分利公債は、七月一日の九一圓七〇錢から、十月三日には八五圓六〇錢に落込んだ。急激な下落は、九月下旬から十月初に來た。これは明かに銀行が手持公債を賣り始めたからである。新聞は、そのなかに大銀行のあることを報じてゐる。また、九月上旬には、日銀が某銀行から一擧に三千萬圓餘の公債を直接に買ひ取つたとも報道された。十月初における公債市場の暴落に對して、日銀の買出動は無力に近かつた。そして、差迫つた爲替資金の要求その他に壓倒されてゐる日銀は、今後における公債市價維持の能力を危ぶまれてゐる。

公債下落の程度は、現狀における銀行の堪へ得る限界線に近づいた。金融機構防衛の最大支柱×××。これは銀行にとつての大きな打擊だ。しかし、金融における事業會社の狀態は、銀行よりもつとひどい。拂込徵收による資金獲得や、社債による融通は全く絕望化した。滿鐵の六分といふ高利社債でさへ、大部分引受銀行のしよひ込みとなり、東洋拓殖會社すらが、社債發行に失敗した。注目すべき手形不渡處分のケースも現はれた。（服部製作所——十月十日讀賣）。最後に、海外市場が甚だしく惡い。井上藏相等が賴みにしてゐる米國が惡い。重要商品市價は續落、十月六日のニューヨーク株式は暴落した。スチール株の下落は三ドル、アイルランド・ケミカルは二〇ドルの慘落、等、等。世界恐慌の深度は深まつてゆく——。

デフレーシヨン政策破綻の諸徵候

(1)

デフレーシヨン、政策の破綻の徵候は至る所に見えて來た。止まらうともしない正貨流出、金利續騰、公債暴落、際限もない商品市場の惡化、——かうした螺旋狀展開の過程のうちに、決算期、歲末金融期が迫つて來た。時も時、米價の暴落に

よる農業恐慌の尖鋭化が加つた。人氣は一段と險惡化した――。かうした新狀勢は、「徹底的整理」の金融資本の旗の下にあくまでも「救濟」を排斥して來た井上藏相等をして、「應急的救濟」への急旋回を餘儀なくさせた。

救濟促進のために、興銀總裁は更迭された。さきには銀行の安全のために、浮動的な單名手形の整理が要求されてをつたのに、今や「弱體」事業會社のために、積極的な單名手形融通が要求されてゐる。銀行聯盟も、興銀と共に、救濟への方向へ積極的に動き出した。「弱體」資本家の一味は實業有志會を結成し、年末資金や配當資金の獲得のために狂奔しはじめた。日銀は市中金利昂騰の大勢に逆行して、鐵から棒式の値下げを發表した。日銀の貸出しに對する擔保品の緩和が要求されてゐる。日銀は日銀で、限外發行稅率の引下げを要求する。井上は井上で、いやそれよりも補償準備擴張の方がよからうと言ふ。――救濟のためのかうした狂奔は、いかなる形容詞がそれに冠せられやうと、事實において徹底整理主義の放棄であり、デフレーション政策の打切りであり、インフレーションへの轉向である。

(2)

銀行も此の方向轉換の大勢に取殘されまいと焦つてゐる。あれ程金解禁を謳歌して解禁鬪爭の前衞の役割をつとめた銀行が、今や、公債市價の維持のために、日銀は此際少くも一、二億圓の公債を買上ぐべきだと主張するに至つた。こゝにも大きなインフレーションへの推進力！

しかるに一方、この銀行資本家達の要求と對角線的な矛盾において、非募債主義の放棄を迫る諸勢力の進出がある。失業者の增大、歲入の激減と海軍補充計畫遂行の强要とによる、絕望的な豫算編制難。――事實において、非募債主義は、なし崩し的に放棄されて來た。例へば、失業救濟のためにする地方起債の緩和を見よ。最近の數字は、地方起債の著增を示し、しかもそのますます大なる部分を、政府は失業救濟以外の目的に許可したことを示してゐる。――だが、非募債主義の放棄は、一方ではインフレーションとなり、他方では公債の下落となる。しかも放棄は、ますます不可避的に見えてゐる。そして、インフレーションこそはまた正貨流出に拍車をかけるのだ。

デフレーションの矛盾の展開は、經濟危機の成熟にまで導い

た。金融資本の利益を意味したデフレーションが、今やその反對物に轉化せんとする。デフレーションがデフレーションを否定せんとする。

ひとり徹底的整理の放棄だけではない。デフレーション政策の一成素たる低物價政策も、「價格統制！」のスローガンの不可避的な出現によつて埋葬されつゝある。あれほど鮮かな旗じるしであつた合理化は、いまや全く忘れられて居る。産業合理局は何一つしなかつた。いや出來なかつた。大きなものに對しては統制が利かない。小さいものは餘りに小さすぎて、合理化線の彼方にある。金融資本のリードする産業調査會は、形勢觀望の陣形で、今のところたゞ、産業企業と銀行との間に警戒線を引いてゐるだけのやうである。そしてまた、現行の高率生産制限の下において、事實上の合理化を行ひ得るものは、絶無でないまでも稀有であらねばならぬ。

デフレーション政策の破綻が強まるのに比例して、金輸出再禁止論は勢ひを增すだらう。吾々は、この方向への追跡はこれを次の機會に讓らなればならぬ。

だが一つのことは明らかである。米價暴落による農業恐慌の尖鋭化は、恐慌の深度を更に〲深めるといふこと……。

(一九三〇・一〇・一〇)

アンナ・ルイズ・ストロング著
淡徳三郎譯

ボロージン脱出記

（四六判二七七頁 寫眞三十二葉入）

定價 壹圓
送料 十八錢

武漢政府の顧問ボロージンがモスクワに引揚げる時、支那奥地より蒙古と前人未踏の地を自動車で踏破した。一行に加つたストロング女史の此の旅行記が、自然他方面の興味を盛る稀有の文獻となつたのは當然だ。支那風土の興味津々たる描寫、民族的特質、文化及風俗の記述は民俗學的冒險的の好讀物であり、支那及び蒙古の經濟的政治的關係の、偏見なき明澄な客觀的叙述は、共産軍活躍し農村ソヴェトの擴がりつゝある今日、絶好の新支那研究資料である。挿入した三十餘枚の寫眞は本文と相俟つて印象を鮮かならしむ。

最新刊

〔内容〕漢口を去る○馮玉祥の客となつて○鐵路の終點まで○西安への道にて○陝西の山越え○甘粛及び黄河○憧憬の寧夏○ゴビの沙漠の邊りにて○ゴビ沙漠を横斷す○赤色の活佛が戰つてゐる國○白亞の國○新蒙古の創造者達。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造社版 經濟學全集（全四十七卷）

經濟學原理流通篇（上）

法學博士 福田德三著

故福田博士の遺著『經濟學原理流通篇』はここに新裝なつて諸君に見える。博士が蘊蓄を傾けて完成された本書こそは我學界の世界に誇り得る唯一の偉著であり本全集讀者のみの有する無二の嬉びであつた。卷頭に博士最後の肖像を揭げ博士の創案になつた書庫の寫眞を附して生前の面影をしのんだ。

第二十五回配本
第三卷　十月中旬配本

第二十三回 統計學（上）
第二十四回 財政學（上）

一回	經濟學原理	十二回	財政學（下）
二回	經濟學大綱	十三回	社會政策（上）
三回	日本社會經濟史	十四回	經濟學特殊理論（下）
四回	唯物史觀經濟史	十五回	マルクス主義經濟學の基礎理論
五回	各國經濟史	十六回	特殊問題
六回	經營經濟學	十七回	產業革命史
七回	經濟學前史	十八回	經濟政策（下）
八回	マルクス經濟學說の發展（上）	十九回	現代日本經濟の研究
九回	商業學（上）	二十回	經濟學特殊理論（上）
十回	租稅論	二十一回	產業合理化
十一回	現代日本經濟の研究	二十二回	日本經濟史

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二一番

日本地理大系（第九回）配本開始

奥羽篇

石器時代の昔から文明の尖端を行く進取の氣性が東北人の血に流れてゐる。蝦夷の酋長藤原氏の豪奢、伊達侯、津輕侯のモダーニズム。雪の國傳説の國として今なほ蝦夷の面影を殘す奥地にも至る處近代式が浸潤して行く。モンペ姿の農夫がネオンサインの光をあびてアスファルトの歩道を悠々と横行する様は到底他では見られない。質朴剛健容易に他を容れない氣風も東北人の一特長ではある。極端と極端との錯綜、七百に余る寫眞は之等奇異な風物を諸君の前に展開する。

本文執筆者 東北地方に殘る家族制度の種々相——中川教授。雪の東北——柳田國男氏。切支丹遺趾——高橋博士（以上特殊問題）。自然地理概説——高橋博士。東日本側地形——青木助教授。西日本側地形——大橋教授。火山・湖沼・温泉——田中館講師。地震・津波——中村博士（以上自然地理）。人文地理概説——高橋博士。農業——門前博士。林業——上村博士。畜産——久合田教授。工業——國井工藝指導所長。鑛業——大橋教授。水産——奥津青森縣水産試驗場長。交通——和田仙鐵保線事務所長（以上人文地理）。沿革——喜田博士

次回配本 **中部篇**（十一月中旬）

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番

マスター・オブ・アーツ 河合譲譯（上巻新刊）

菊判上製 五百六十餘頁 定價四圓五拾錢 送料卅六錢

ヴィンデルバンド 西洋哲學史

哲學史中の哲學史
人類最高智のコンデンス！

哲學の研究は結局哲學史の研究に外ならぬ。哲學史としての本書の價値はヴィンデルバンドの名其物が既に明示して居る通りであるが、リッケルト教授が本譯書の爲に態々長文を寄せて「最良の哲學概論」と推奬せることは更に本書の價値を二重に證明するものでは無からうか。苟も哲學の妙奥を探らうとする士は此の鴻儒の聲に聞き其神韻に觸れることを忘れてはならぬ。

〔**内容の一部**〕 哲學の名稱及び概念。哲學及び哲學史の分類。希臘人の哲學。宇宙論的時期。存在の概念。認識の概念。人性學的時期。倫理性の問題。體系的時期。唯物論の體系。觀念論の體系。アリストテレスの論理學。希臘羅馬の哲學。倫理的時期。機械論と目的論。意志の自由と世界の完全性。眞理の標準。精神と物質。世界史の問題。中世哲學。内的經驗の形而上學。普遍論爭。身體と靈魂との二元論。意志又は悟性の優位。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

信用ある書店案内

改造案内

横七分、縦一寸五分、一枠金五圓、指定料二割増

どんな本でも絶對安心して賣買の出來る店は「神田神保町 停留所前 **稲垣書店**（電話神田一三三九）（振替東京四六六九〇）」

古本、種類不問奮闘的高價買入 御報次第即時參上、圓本歡迎

本の御用はすべて

本郷森川町 帝大正門前 **大橋書店**へ

電話小石川85三七四六 振替東京三五八三六

◎新刊書籍 雑誌販賣

◎古本特別高價買入

御報直に參上

書架御整理の際は是非當店を御利用あれ

種類不問 最高價買入!!

信用本位 **東書店**

神田區通神保町一 電話神田25二九九三

御報直ニ參上

どんな本でも御照會は先づ「**大雲堂書店**」へ

神田、神保町、停留所際 電話神田(25)三六八四番

誠實本位

販賣は店内自信ある正札付、買入は御一報次第多少に不拘速時參上

古本の御用命は**成進堂書店**へ

神田區通神保町一 電話神田一三五六

和漢洋書類一般。特に新刊書は定評ある絶對高價買入、一報參上。古本の御註文は迅速に取計ひます。御不用本との交換特に歡迎致します。

古本 和漢、洋書誠實高價に御買受いたします

御不用の節は御通知次第遠近多少に不拘參上御評價申上ます （地方出張）

東京市本郷區森川町八十九番地 帝大正門前 **南陽堂書店** 電話小石川(85)一九四八

古本の御用は賣買共に弊店に御相談下さい

地方の方は書面で御問合せ下さるならば親切に返信申上げます

東京市小石川區白山上 古本屋 **窪川精治**

古本の花 七月一日發行詩歌書、俳書明治時代文藝雑誌等の特種書類目錄實費五〇錢

新古書籍販賣 古本誠實買受

◉賣買共に最も誠實なる弊店へ御用命を願ひます

東京神田通神保町 **三光堂書店** 電話神田(25)四四一〇番

古本買入 御一報參上

●和漢洋書類●

前野書店

●誠實高價買入●

電話牛込五二四七番 振替東京五六八一四番 東京早稻田大學前

古本 買入・交換

―當店を信頼下さい―

東京早稻田（グラウンド上） **大觀堂書店**

電話牛込三三五六番 振替東京五二三七一番

圓本全集販賣目錄（送料共各冊） 古書籍目錄 拾錢

本の御用は何なりとも仰せ付け下さい。極力御滿足を計ります。

東京神田神保町 **森田屋書店**

振替東京五八一九七番 電話神田一二一一番

内外新古書籍雑誌買入。販賣。取次

市内。近郊。御一報次第參上。

新古書籍

島崎書院

東京帝大赤門前 電話小石川二四〇二番

日、英、獨、佛其の他一般社會科學文獻古本誠實勉强買入

地方御註文は特に迅速勉强を旨とす

清少納言

丸木砂土

性的風俗史として

「枕の草子」は第十一世紀の日本文學であるが、そこに描寫し盡された宮中貴婦人の生活は、淫媚、機智、怠惰から見て、佛蘭西十八世紀のサロン生活に近い。恐らく「枕の草子」に描かれた生活は、平安朝を代表するモダン・ソサイチイに相違ないであらう。

僕は「枕の草子」を、この平安朝の性的風俗史として讀んで見た。この時代の男と女の夫婦關係は、今日から見れば友愛結婚でもあり、試驗結婚でもあらう。或は結婚といふものは、形式としてのみ存在してゐたに過ぎないかも知れない。驚くべき淫亂の時代である。これは淫亂と呼んではいけない。全く自由なる性的交渉である。從つてその內容は、少しも惡魔的なもの、廢頹的なものを含んでゐない。「枕の草子」の戀愛は、どこまでも清朗であり、明快であり、自由濶達だ。男が毎晩のやうに女の許に泊り込みにゆく風習は、今日でも日本の田舎には殘されてゐるが、そこには遊蕩といふものがない、怪奇がない、暗黒的なものはない。僕等が今日甚だ好色的だと考へる事は、唯媚かしく美しきものと解せられてゐる。

それ丈に性的風俗史としては、甚だ興味が少い。僕等が性的と解するものが、「枕の草子」では、性的でなくして、自然であり、道德だからである。僕はこの「枕の草子」を通じて、戀愛婦人としての清少納言を覗いてみた。

宗教と肉欲

「枕の草子」が性的風俗史として、肉慾的香氣に乏しいのは、濃厚な宗教の背景を缺いてゐるのも、その一原因である。清少納言の宗教觀は、甚だ漠然としてゐる。「何事のおはしますかは知らねども」の程度

と見ておいて、差支あるまい。佛に對してさへも

佛は、如意輪は、人の心をおぼしわづらひて、つら杖を突きておはする。世に知らず、あはれにはずかし

と言つてゐるのを見ると、慈悲觀音の御像も、淸少納言には少し艶迦々しいやうである。奈良朝佛像に見る濃艶な媚態には、心を寄せてゐない。そこで歐洲中世紀にあるやうな、僧侶と貴婦人との色慾關係は、殆ど「枕の草子」には現れてこない。歐洲中世紀の僧侶は、懺悔、懲罰、祈禱を利用して、盛に宮中の貴婦人を犯して、歐洲風俗史に於ける愉快な肉慾的插話を夥しく殘してゐるに拘らず、かういふ情景は、「枕の草子」には見えない。宗教儀式に於て、最も女を恍惚無我の意識に陷れ、宗教と肉慾とを漂渺たる狀態に交錯せしめて、屢々女を犯す機會を作るのは、祈禱調伏の際であるけれども、淸少納言はこの祈禱をすら、唯單純に優美な情景としてしか見てゐない。

修法は佛眼眞言など讀み奉りたる、なまめかしうたふとし

男女放縱の生活にあつた平安朝貴婦人が、宗教に冷淡であつたのは、當然である。それならば此の時代の僧侶が全く女に興味がなかつたかといふとさうではない。「こと〴〵なるもの」の中で、淸少納言は明に僧侶の苦しい生活に同情し、「女などのある處をも、などか忌みたるやうに、さし覗かずもあらん」それをも安からずといふ」と書いて、僧侶が女の部屋を覗くのも、男として當然だと斷言してゐる。殊に「今やうは安げなり」と、その時代の坊主の現代化をひやかしてゐるから、相當に女犯の僧侶はあつたものらしい。唯法王宮殿を以て妓樓に變ぜしめた奸僧アレキサンデル六世又は十八世紀「黑い彌撒」の如き迷信が、貴族社會を犯した形跡のない平安朝の好色生活は、甚だ波瀾のない淡白なものに終つた觀がある。この時代の坊主は、病人の枕許に祈禱の讀經をし乍ら、居並ぶ美人の見舞客を、横眼で見る位が關の山であらう。「目をくばりつゝ讀み居たるこそ、罪や得らむと覺ゆれ」と淸少納言は冷笑してゐる。怪奇な宗教のない處には、又怪奇な性欲生活もない。

性的風習

「枕の草子」全卷を通じて、特殊な性的風習と見られる唯一つのものは、卷頭の「ころは」の一節だ。

十五日は、もち粥の節供參る。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかがふを、打たれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに・・・

この一節を讀むと、正月十五日には宮廷では無禮講で、粥を焚く薪で拵へた杖又は粥をかき混ぜた杖を、××××××××、これを以

て、若い女や新婚の男の尻を打つて戯れる風習があつたこの×××××××××粥棒を以て、女の尻を打つのは、子供の出來るまじなひとして、土俗的風習であつたといふ事だが、それが宮廷にまで行はれたのである。新婚の夫婦特に若い女に對して、古い桃を投げつけたりする性的風俗は、今日でも諸所に見受ける處だが、この平安朝の悪戯はそれに比べられない位に極めて露骨で、明に性的刺戟を目的としてゐる。僕は之に關聯して、「五月の御さうじのほど」の一節に

二月ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君「いかにぞ、手づから折りたりといひし下蕨は」との給ふを聞かせ給ひて「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙の散りたるに、したわらびこそ戀しかりけれ、と書かせ給ひて‥‥

とあるのを讀むが、これは宰相の君が、下蕨のやうな妙な物又は下品なものを思ひ出した言葉を、中宮が笑はれた意味だが、この場合に僕の疑問は、この下蕨の意味に何か性的意味でもありはしないかと思ふ事である。下蕨が味覺の上から、或は形狀の上からでも、この一節に現れた下品なもの下等なものの意味だけに止つてゐるか、又は今日のアスパラガスとか人參とか胡瓜のやうに、もつと性的風味を隱してゐるので、中宮が宰相の君の言葉を、妙なものを思ひ出した、と笑はれたのではあるまいか、僕は一つの疑問として、もう少し研究したいと思つてゐる。

清少納言の好きな男

清少納言は三十女として、宮中生活をした。この間の男に對する性的趣味を、突き止めるのには、僕も苦心したが、肝心の處へくると、いとをかし、でぼかしてしまふ。

清少納言は肥つた男が好きか、痩せた男が好きか。

よきをのこも、なほ若きほどは、さる方なるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからむとみゆ。(こころゆくもの)

から率直に書いた清少納言が、雑色隨身等の護衛兵、雑役夫は痩せた方が好いと言つたのは、勞働が輕快に見える點からであらうが、身分の上のものでも、肥つた男は、眠さうでいけぬ、と言つてゐる。

小舍人はちひさくて、髪のうるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりて物など言ひたるぞ、らうらうじき

これも若い男の美の敏速可憐を愛した言葉だ。この肥つたといふ程度も、眠さうに見える程度の男であれば、脂肪的の感じで、到底三十女の倦怠な趣味には合ふまい。寧ろ輕快な忠實な青年の姿の方が、中年の女の心に適ふ事は、今日の中年の女の趣味から見ても同じである。それで見ると、若い男に對する清少納言の趣味は、有閑夫人とし

て、まづ普通である。ところが他の一節には

わかき人、ちごなどは肥えたるよし

とあるが、この若き人は青年の意味たらうか、少年の意味であらうか。僕には判明しない。これは少年と解釋しなければ、淸少納言の艶笑趣味に矛盾が起る。肥つてゐる、健康潑溂たる少年は愛すべきものだ、といふ簡單な意味であらう。尤も相當の身分年輩の男は、艶な顏付をしてゐる方が好い。

受領などは大人だちぬるも、ふくらかなるぞいとよき。あまり瘦せからめきたるは、心いられたらむとおしはからる

とあるから、四十前後の男の瘦せたのは、淸少納言の氣に入らない。然しこれも淸少納言の性的感情からきてゐるものではなくして、一般の女らしい感覺に過ぎない。中年の男の瘦せこけてゐるのは、神經質らしくて厭だといふのである。淸少納言が男の細い眼を嫌つた事は、若い男の肥つたのが、眠さうに見えるといふ一節にも明であるが、「おほきにてよきもの」にも、「をのこの目、あまりほそきは女めきたり。又かなまりのやうならむはおそろし」と言つてゐるから、矢張りぱつちりとした、明快な、目千兩の趣味を愛したに相違ない。

ことなることなき男の、ひきいれ聲してえんだちたる

平凡な男が、女のやうな聲を出して、氣取つてゐるのも、淸少納言の氣に入らない。かういふ諸點から見ても、淸少納言は特に男の性的魅力には、變つた見方をしてゐないやうだ。

藤原行成は、淸少納言より五六歳年少の青年であつたが、この女に愛せられてゐた。行成の風采人物について、淸少納言が自ら描いてゐる處によると

いみじく見えて、をかしき筋などたてたる事はなくて、たゞあるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、なほ奥ふかき御心ざまを見知りたれば

と書いてゐるが、極めて純眞率直で、特に女の媚を求める事はしない男であるから、多くの女には氣に入らなかつたやうである。風流めいた事も進んでしなかつたが、淸少納言はこの澁いやり方が餘程氣に入つたらしい。淸少納言の言葉から想像すれば、行成は男が見て、甚だ男らしい、さつぱりした人間である。行成は曰く

女は目はたてざまにつき、眉は額におひかゝり、鼻は横ざまにありとも、たゞ口つき愛敬づき、おとがひのした、頸などをかしげにて、聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき

と女に對する趣味を述べてゐるが、かういふ皮肉な美人觀を口に出してゐては、普通の女に嫌はれるのは、當り前である。淸少納言は鋭敏な子供でも見るやうな目で、行成を愛したものらしい。もとより女

の方から仕掛けた事は當然である。男が清少納言に顏を見せろと言つたら、美人ではないから見せないと答へた。そんなに醜ければ見ない方が好いと男は答へたが、遂に清少納言の寢てゐる處を隙見して「女は寢起きたる顏なむいとよき」と遠慮なく女の局の簾の中へ入るやうになつたといふ事だ。餘り惡口が好きで、遠慮がないから、ほかの女に嫌はれてゐる青年を愛する清少納言も、決して戀愛には得意な女ではなかつたやうだ。

清少納言が和泉式部その外に比べて、決して大膽な好色な三十女でなかつたのは、自分の顏が綺麗でなかつた爲であらうか、餘りの才智に男が寄りつかなかつた爲であらうか。說教の講師の美男を極力稱揚する處を見ると、男好きの下心は十分ある。然し行成以外に、愛する男との嬌態に言ひ及んでゐる處は、殆どない。それとも多くの男とは、單に性的に交渉のみあつて、戀愛らしい事をしない程自由放縱な女であつたのであらうか。

寢姿

「枕の草紙」の中で、最も大膽で精彩のある男女痴態の描寫は、「七月ばかりいみじく暑ければ」の一節である。清少納言のおもしろい特徴は、男女の寢姿又は寢顏に興味を持つてゐる事だ。例へば「すさまじきもの」の一節に、「孫どもありさうな好い年の親が晝寢をしてゐるのは醜いと罵倒し、子供の心にさへ、親の晝寢は頼りないと、機微さうがつた一節がある。女の寢起きの顏が美しいと、男に言はしてゐるのは、清少納言自身そのしどけない、眠さうな、可愛い顏の柔さを愛したものに相違ない。そこでこの夏の曉の極めて濃艷な一節が出來たのである。

七月の曉方に、同衾してゐた男を歸へして、暑いから明け放したまゝで、女はまた一寢入りやつてゐる。女は紫の着物を着てゐるが、その下から濃い紅い腰紐が、長々と尾を引いて、その邊にだらしなくなつてゐる。これは××××××解いたのが、締め直さなかつたものらしい。それに頭から冠つて寢てゐる着物の傍には、長い髮の毛がうね〳〵してゐる。あたりはまだ薄暗い夏の曉である。霧さへも立ちこめてゐる。

此處へひよろ〳〵やつて來たのが、同じく女の處から歸つてゆく狩衣を着た男だ。鬢も亂れてゐる。それがこの道筋で、格子の明いてゐるのに、起きてゐるのかと思つて、簾の端から覗くと、疲れた女が、とり亂して寢てゐる。枕許には扇が開いたまゝ落ちてゐる。

人のけはひあれば、衣の中より見るに、うち笑みて、長押におしかゝりてゐぬ。……「こよなき名殘の御朝寢かな」とて、簾のうちに、なか

らばかり入りたれば・・・・

すると男は、女の枕許の扇を、自分の扇の手を延ばして搔き寄せた。男が自分の懐へでも入つてくるのではないかと思つて、女がどきどきして、小さくなる。男は女が固くなつてゐるので、じれつたがつてゐる。其處へ、あたりも全く明るくなり、さつき自分の處から歸つて行つた男から、もう使の者が手紙を持つて來たので、その悪戯男も歸り乍ら、自分が今別れて來た女の處へも、よその男が來て戯れてゐるのだらうと思ひながら行くのである。

この一節は「枕の草子」の中で、もしくは戯笑的な場景である。今日もしかういふ場面を想像するならば、殆ど娼樓の内部位にしか考へられない。清少納言はかういふ生活を自分もし、且つ宮廷貴婦人として之を文章に書いて、唯「をかしかりぬべし」と微笑してゐるのであるから、平安朝の性生活が、いかに明快で、astringent なものであつたかゞ想像される。「枕の草子」にこれ程の柔艶な場景がある事は、案外世の中では知らうとしないのが不思議だ。これは決して obscene の場面ではないか、現代作家に求めたら、この詩的情趣は僕の知る限りシュニッツレルのものである。性的趣味はこれに道徳的假面をかぶせやうとする時、悪魔化し、暗黒化する。この取亂した女の寝姿の美さは、清少納言の趣味である。これはどこまでも高婉で微笑的な、挑発的ではない、優雅な色情生活である。何等悪魔的たものも、暗黒的なものもない。清少納言は三十女として、露骨な性的趣味を持つてゐないで、好きは好きでも、年甲斐もないとすぐくしよげてゐるが、その潑溂たる戀愛的傾向は爭へない「男も女も淸げなるが、黒ききぬ着たる」を愛した清少納言の趣味は、戀愛趣味としては、美しい抒情詩を持つてゐる。

女の寝姿のしどけなさを、殆と男の眼で見てゐる清少納言は、男との別離の情趣も、甚だ事務的な、用事をすましてさつさと歸らうとするやうな男の態度を嫌つて、

指貫なども居ながら着もやらず、まづさしよりて、夜ひと夜いひつることとのこりを、女の耳にいひ入れ、何わざすとなけれど、帶などをばゆふやうなりかし

と言ひ、後朝の別れのつらさを愛してゐる。この纏綿たる情趣は、殆ど三十女とも見えない程若々しい風流である。女の處から歸らうとする男が、暗い中で自分の物をがさがさ音を立てゝ探したり、いきなり共寝の寝床から起きて、その邊を歩き廻つて、袴の腰紐をきつく結び、何でもかんでも自分の懐へおしこみ、扇なんぞをぱたぱた使ひ作ら、暇乞ひしてゆくやうなのは、清少納言の嫌ふ男である。「にくしとは世のつね、いと愛敬なし」である。やはり女が心配してせき立

て、妻戸まで送つてやる男の可愛らしさが、清少納言には心に惹かれる。然しこの纏綿たる戀情は、決して近代的な中年女のものとは言へない。

同衾と姦通

「枕の草子」には、同衾した後の女のしどけない寢姿を描寫するのに、甚だ濃艶な筆を用ひてゐるが、同衾の有樣を書くのは、ごく淡彩的な描寫であるに拘らず、男女が互に口説の揚句に喧嘩をして、夜具の中でもぢ〳〵し合つてゐる姿が、實に巧妙にユウモアに富んで書かれてゐる。「ねたきもの」の一節に

　すずろなる事腹だちて、同じ所にも寢ず、身じくり出づるを、しのびて引きよすれど、わりなく心ことなれば、……

とあるが、恐らくこれも清少納言の經驗の一つであらう。女が蒲團の中から軀を拔け出すのを、男が引き入れやうとしても、女はすねて入らない。男は肝癪を起して、そんならどうともしろ、とすねて、蒲團を冠つて寢てしまふ。女は一人で起きてみやうかと思ふが、寒い夜でもあり、着てゐるものも單衣だ。あたりの部屋でも、皆寢てゐる。一人でもぢ〳〵してゐる内に、方々で何か物音がして、怖い。思ひ餘つて、また男の蒲團の中へもぐり込むと

　やをらまろび寄りて、きぬ引きあぐるに、そらねしたるこそいとねたけれ

男は狸寢入をやつてゐて、夜具の中へ入つて來た女に「もつと強情を張つてゐ給へ」などとひやかす。女は、ええ、くやしい、と思ふ。

　この一節の如きは、爲永春水の「梅ごよみ」か、三代目豐國の錦繪にでも見る情景であり、男女同衾の場面としては、「枕の草子」の中で唯一である。「梅ごよみ」ならば、鐘の音が鳴るか、火の番の拍子木が聞え、床の間の椿が落ちる場面である。春水も「梅ごよみ」卷之一、第二齣で、男女戀情を叙して「流石女が筆の妙なるかな」と感心してゐる。

「枕の草子」の男女の戀愛は、未婚既婚を問はない。清少納言は平安朝の戀愛は、この點に於て今日僕等の考へてゐる以上の自由な境地であるが、「枕の草子」に姦通を書いてゐる事が殆ど無いのは、僕の了解に苦しむ處だ。姦通といふ今日の道德違反は、概念としてまるで存在してゐなかつたものかも知れない。妻のある夫が、よその女を相手にして、これが操縦に苦心してゐる點は、「成信の中將は」の一節に

　物見知り思ひ知りたる女の心ありと見ゆるなどをば語らひて、數多いく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげうしもえ來ぬと……

ところから、一人で盛に多くの女と關係し、正妻もあり乍ら、わざと雨の晩に女の處へやつて來て、女に眞情を見せやうとするものらしい。清少納言は雨の晩にわざ／＼くるやうなら、やつぱり男の心掛すべしと同感してゐる。然しかういふ場合に、相手の女が人妻であるかどうかは、「枕の草子」の文字では判明しないやうだ。然し姦通は姦通として存在せず、殆どルイ十五世治下の佛蘭西貴族と同じ自由な夫婦生活であつたらう。唯平安朝の自由は本能的新鮮さがあり、十八世紀華麗時代の自由は、退屈凌ぎの廢頽であつた。

戀愛

僕等は今日「遠くて近きは男女の仲」といふ言葉が、清少納言が西暦一千年頃に書いたものだとは殆ど忘れてゐる。多くの人は落語家の常套文句位にしか考へてゐない。この短い警句は、源氏物語幾卷にも匹敵し得る。僕は清少納言の戀愛觀を、「枕の草子」から逐條的に拔いてみよう。

一、清少納言と雖嫉妬は感じてゐる。「にくきもの」の中に、今自分の戀してゐる男が、昔關係した女の事を云ひ出したり、その女を褒めたりするのは、既に過去の事でも厭である。まして現在では勿論だが、然しある場合には必ずしもさうでない場合もある。「されどそれは、さしもあらぬなどもありかし」。昔の馴染の女の惚氣も、今の可愛い男から聞かされて、反つてその男を今把握してゐる誇りを感じるのも女心である。これは單に粹な清少納言の見方だといふに過ぎない。

二、年をとつた女が、若い愛人を持つてゐるのは、不似合であるが、その若い愛人が若い女の處にゆくのを嫉妬するのは、「にげなきもの」だと言つてゐる。清少納言自身年下の男を愛してゐたが、これはもつと年寄の四十女、五十女の意味であらう。然し若い愛人の戀を拒否してゐないのは、清少納言のあきらめであらう。この點からも、清少納言の戀愛觀は、徹底したものではない。

三、清少納言は遠くて近きは男女の戀情であると喝破し乍ら、決してこの戀愛を永遠的のものには見てゐない。

　男も女も法師も、契り深くかたらふ人の、末まで中よき事かたし

と言つてゐる。

四、清少納言の戀愛觀は、淡彩的な、意氣な、通人的なものに近い。或は之は清少納言の罪でなくして、時代の罪かも知れない。そこで美しい男が、美しい女を女房にしないで、醜い女と夫婦になつてゐるのが、不思議でならないとは、「枕の草子」の中で繰返して疑問としてゐる處である。僕はこの章句を讀んで、清少納言の甚だ物分りの好いさうな、意氣な戀愛觀は、清少納言が決して一途な熾烈な情火に燃えた經

驗なく、その運命を逆した爲に、空想的、憧憬的文學少女的なものを多分に抱くに至つた結果ではないかと思つてゐる。戀愛秘術家としての清少納言は、甚だ近代味の少い婦人である。

及ぶまじからむきはをだに、めでたしと思はむを、死ぬばかりも思ひかゝれかし

自分の臆には、手の屆かないやうな女でも、好きだとなつたら死ぬ思ひで愛してみろ、と教へるが如きは、全く憧憬的な衝動に過ぎない。男は美人を愛すものに決めてゐる清少納言は、甚だ小說的であるが、性欲的ではない。「女の目にもわろしと思ふを思ふは、いかなる事にかあらむ」と言ふが如きは、戀愛經驗にも、性慾生活にも、清少納言の淺薄なる智識を暴露してゐるに過ぎない。殊に美人でもあり才能もあり乍ら、男に顧みられない女が、徒らに泣いてゐるのを見て、人事ながら腹が立つ、と怒つてゐるのは、男の橫暴といふよりは、男の性的心理を洞察する力が、清少納言に乏しい爲である。あれほど自由亂淫な平安朝にあり乍ら、こんな少女的な戀愛觀を抱くに至つたのは不思議である。清少納言が一面粹なおばさんに見えるのは、悲戀悲歎の苦しい經驗をした揚句の清澄たる心境ではなくして、男に寄り付けないで、しかも男に屈するのが厭さに、わざと超然とした、わざと物分りの好いやうな、おばさん的態度をとつたものかもしれない。さうしてみると、清少納言の「一泣くて泣きは」の一句は、極めて平凡な意義だけしか持つてこない。又一面から考へると、愛人行成の如きも、どうも大して見られた男でもなく、女に嫌はれるのが當然のやうで、清少納言なればこそ相手にしたものであらうかとも考へられる。

男こそなほいとありがたく、おやしき心ちしたるものはあれ

の一節は、清少納言が戀愛觀に馬脚を露はした失敗の文章である。その戀愛觀が甚だ少女的である證據には、「むかしおぼえて不用なるもの」の中に、「色好の老いくづをれたる」を數へてゐるにも分る。好色老人の老衰した姿を、清少納言は疊の古くなつたのや、屏風の表の破けてゐるのと一緒にしてゐる。けれども西鶴の持つてゐた好色老人に對する廢頽した小說的情趣は更に顧みない。「色このむ男の心のうち」を「はづかしきもの」に數へてゐるのは、ユウモアであらうか。

戀愛風景

清少納言の戀愛が、甚だ抒情詩風なものである結果、近代的色彩は缺いてゐるが、戀愛風景としては、極めて美しい、香氣の多いものが多くある。その二三を拔いてみよう。

一、「忍びたる處にては、夏こそをかしけれ」の一節に、冬の寒い晩愛する男と同衾をしながら、頭から夜具を冠つて、鐘の音を聞き、又

け鷄の聲の次第にはつきりと聞えてくる順序を書いてゐる處は、徳川時代の文學にもないしめやかさである。

二、夜更けに忍んで來た男を、部屋の中で衣摺の音をさせて、思はせ振でじらす惡戯もある。「うちの局は細殿いみじうをかし」の一節。

三、「吹きものは横笛」の條には、女と別れて行つた男が、枕もとに笛を忘れて行つた趣が書いてある。

四、「常に文おこする人」の一節には、男からの手紙を待つ心。

五、「十二月二十四日」の月の夜に、車の中で男に抱かれた女の媚態。

月かげのはしたなさに、うしろざまにすべり入りたるを、引寄せあらはになされて、わぶるもをかし

着てゐる衣裳も、無論しどけなく亂れてゐる。

六「ある所になにの君」に、月光の下に戀する男と女の別離。

名殘思ひ出でられむと言の葉を盡していづるに、今はいぬらんと遠く見送る程にえもいはず艶なり

男は歸るやうに見せかけて又立ち戻り、女の家の戸に寄り添ふと、女は外を覗く。

かしこより五すばかりをさりて、火ともしたるやうなる月の光

この一節は、歌舞伎の舞臺そのまゝだ。清少納言は歌人ではない。しかしユーモアを忘れない戀愛風景詩人である。

三十女

清少納言は遺憾乍ら、僕の求める三十女の馬の如き肉慾は持つてゐないやうである。

忍術の祕傳

大澤休象

世界に於ける忍術の發生

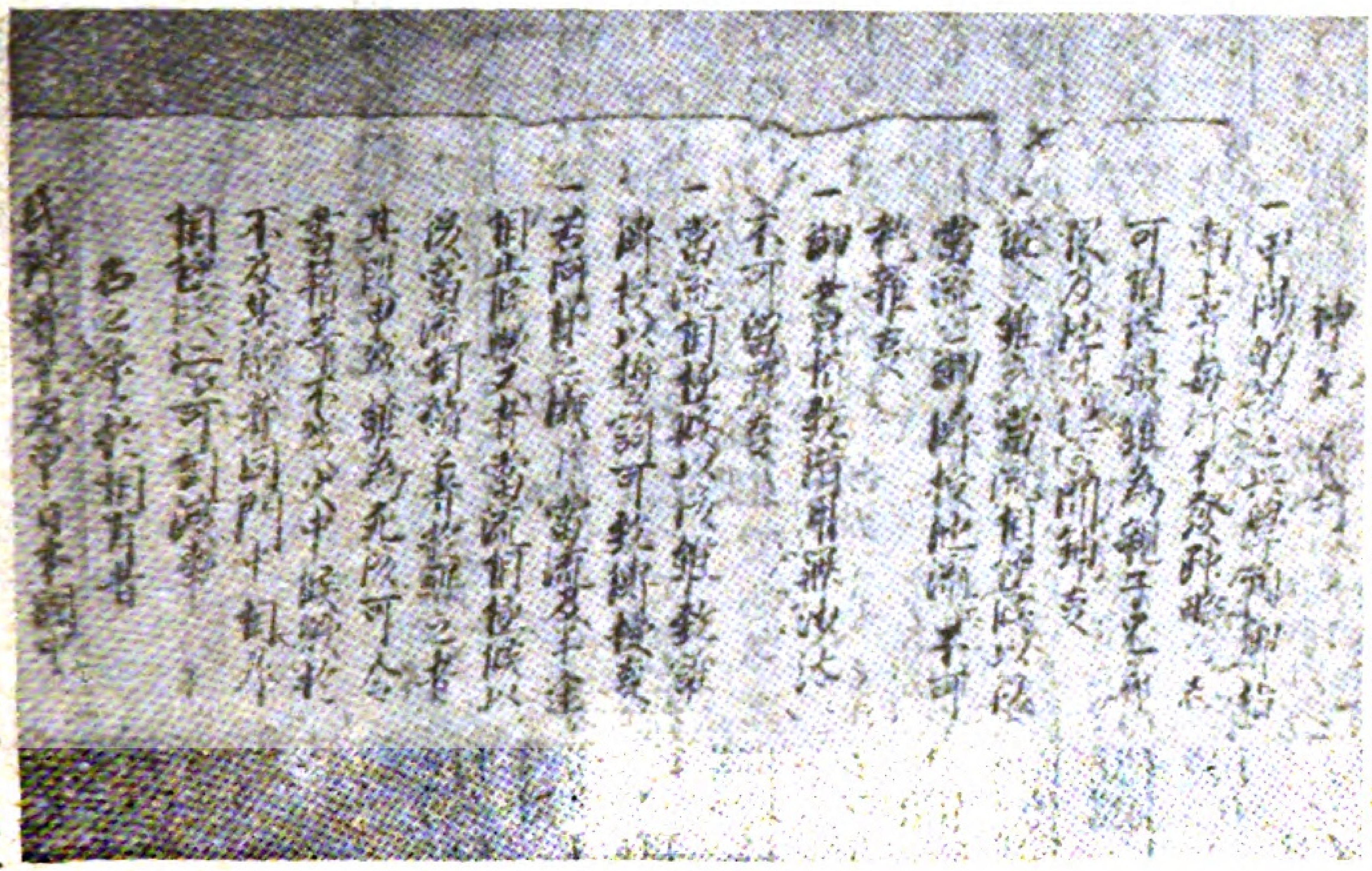
吾々人類の祖先が、いまだ原始生活をしてゐた時に、大自然の脅威と、猛獸毒蛇の害をまぬがれむ爲めに、火を燃やすことを發明し、火を蓄へることを工夫し、火を利用することに依つて難を避け、更らに進んで、對手を征服したのが、人類文化の芽生であると同時に、一面、忍術火遁の濫觴と見るべきで、夫れは、埃及でも、ギリシアでも、印度でも、將アイヌでも、其他孰れの民族でも、噴火山や、雷電を畏敬し、崇拜する宗教、或は、火を盜む世界中のあらゆる神話傳說によつて窺知することができる。又、水遁の術は、支那太古の傳說に現はれてゐるし、日本古事記にも忍術とみるべきことが載つて居り、伊賀流、甲賀流の忍術家は、少名毘古那神と、印度の摩利支天とを祭祀つてゐる。少名毘古那神は、天の蘿摩の船に乘つて、鵝の皮を全剝にしてお着しになり、掌の俣から洩れ落ちて行衛知れずと傳へられ、摩利支天は、インドラや、アグニと共に、日光を神化したる尊で、よく諸呪を出し、有情をして身を路上に隱さしめるといふ。印度は遉がに古るい國だけあつて、忍術に似た事もさまぐ\ある。日本の忍術を研究するにも、印度の古代を調べねばならぬ。例之 Apte の梵語辭典 Yoga の部に、軍事、マジック、スパイ等とも書いてある。而し斯様な詮索は興味深い代りに、やゝもすると獨斷、自慰に陷る危險があるから止めて、爰には極めて堅實なる手近の伊賀甲賀流忍術の古文書を提起して、一檢討を試みると同時に、其秘術の生粹を僅かな活字と寫眞に依つて闡明したいと思ふのである。

凄い掟

我邦に於て、一番忍術の盛んであつたのは、應仁以來、戰國時代を通じ、德川初期までゞあるが、武力を以て萬事を解決してゐた時代に非常な發達をしたものだから、社會的事情と、政治的關係から、絕對秘密を嚴守したもので、若し、忍術者の仲間うちで、秘法を他に漏洩する者のあつた場合は、掟として直ちに誅戮する。本人は元より、夫

れを聴いた者も容赦はしない。況んや他人が竊つと偸み知らうとする氣配でもあれば、瞬く間に殺して仕舞ふ。其術法は父子相傳、或は、よく〳〵蘊奧を極めた弟子でないと允可を與へない。萬一、授くべき適任者の無い時は、一切の書類を火中に投じて焚き棄てたものである。

　夫れほど大切に秘密の城を護つてゐたものであるから、忍術といへば伊賀流甲賀流と誰れでも知つてゐながら、偖その起原、系統、方法、トリック、器械道具等に就て、本當の事を解つてゐる者は一人も無く、どうしても其眞相を掴めないから、嚴正なる史家は自他をあやまる事を畏れて筆を染めず、自由奔放、何等の拘束も享けない小



忍士神文之章

說家や戲曲家達は、絕好の題材として旺んに空想を逞しくし、忍術を採り入れて描くと必ず當る。之れ忍術が正史の表面に現はれずして、芝居や映畫に幅を利かして來た所以である。

忍術十一流

　甲賀五十三家の一、山中山城守國俊の末裔が襲藏して居られる古文書の術法上下の上卷に、忍術の名手十一人を記るして、野村の大炊孫太夫、新坐の小太郎、下柘植の木猿、同小猿、楯岡の道順、上野の左り、神戸の助八、音羽の城戸、『以上伊賀』神山の太郎、同次郎、同太郎左衞門『以上甲賀』右の者各々一流を立て、後ち岐れて四十九流となり、其他更らに一段上手あれど態と書き現はさず、所在も姓氏も一切晦ましてゐる方が上忍であるといふ意味が書いてある。因みに音羽の城戸氏の子孫一人は三重縣廳に、一人は伊賀上野女學校長、僕と懇意の仲である。

　さて、神戸鄕の助八と、上野町の『左り』といふ人を除いて、ほか九人の住所は孰れも伊賀と甲賀と接觸した處で、地圖を見ても、伊賀の上柘植、下柘植、新堂、楯岡、丸柱村の音羽、近江信樂の神山と交錯して居り、あの邊、山勢峻嶮、溪谷幽邃、長い加太トンネルのある左右で、忍術修業には屈竟の場所とみるべく、殊に、伊賀の山火事が近江の紫香樂宮に達ぶとある位だから、最初忍術に伊賀流も甲賀流も

截然たる區別は無かつたのであるが、環境によつて其手段も自然に術の扱ひ方も變つて來たもので、甲賀流は姑らく措き、伊賀流を知る爲めに、伊賀國を調べ忍術の發達を繹ねたい。

地勢及經濟

伊賀國、東北三面は伊勢近江に至り、山嶺を以て相限る、南西二面は大和（宇陀、山邊、及添上）諸郡と交錯し、村落相雜る、東西凡七里、南北凡十里、四山攅合し沿河の地稍平坦也。今人口……面積約四十七方里、地勢を以て之を觀れば、木津川（淀川支源）の上流に居り、當に畿内に屬すべし、而て其北域は舊伊賀、阿拜、山田の三郡にして全く伊賀川の一溪也、其南域は、舊名張郡にして、宇陀山邊の諸水、西南兩面より之に亂注し、境界甚不整なり。明治廿九年伊賀名張を合同し名賀郡と改め、山田、阿拜を合同し阿山郡と改め、境域益不整なり。縣治は三重に屬す。是れ津藩藤堂氏の故習に依る者也。

伊賀伊勢は平氏の營て據る所也。壽永の亂、平賀惟義（信濃人）守護となり、平氏餘黨を討平す。其弟、朝雅、子惟信、相襲で州職を賜り、大内氏と稱す、佐藤師光又州守に任し、其子孫伊賀氏を稱す。南北朝の際、足利氏、仁木義長をして伊賀伊勢を兼知せしめ子孫に傳ふ。應永の初め、足利氏地を割き北畠滿泰（南伊勢の國司）に與ふ、勢州軍記に、「伊賀四郡者、仁木家の領地、雖然、名張伊賀二郡の侍、[illegible]也、永正の末、仁木氏衰へ、諸侍相分れ、天正七年、北畠信雄（織田氏）[illegible]す。十一年、信雄、秀吉と隙あり、秀吉の臣、脇坂安治、上野城を奪ひ之を取る。十二年、秀吉大和國主、筒井定次を伊賀に移封す（八萬石）以て慶長十三年に至る。徳川氏其封を改め、之を藤堂高虎に賜ふ。藤堂氏世襲、上野に鎭將を置き之を治めたり。下略（大日本地名辭書）

右のうち勢州軍記を引いて、伊賀四郡者、仁木家の領地、然りと雖へとも、名張伊賀之侍 之れに從はず、とある點に注意すべく、尚天正七年、北畠信雄擊て諸族を滅すとあるが、夫れは誤謬で、事實は信雄伊賀の忍兵に惱まされ大敗して後に、信長に叱られたのである。最初信雄は臣、瀧川三郎兵衞勝政に命じて、伊賀郡に丸山城を築き居らしめたが、土豪の襲ふ所となり、防戰に力めたが、火を放たれ、城陷り、勝政身を以て逃れた。この土豪といはれた者が忍術に長けてゐたのである。藤堂元甫の書いた三國地誌に、丸山城環り七百九十六間、本丸、天守、矢倉等の趾今尚存すとあり、又勝政の營塞は丸山より三丁北、[illegible]の營塞は丸山より二町西とあり、大體伊賀といふ[illegible]け狹い國に堡趾が多く、一郡丈けで數へても四十五の堡趾がある。

こゝに掲げたのは、僅に石川五右衞門の師匠と云はれる、百地丹波の堡趾で、他は五右衞門に就ても充分調査したが略する。

扨伊賀の侍は、そんなに保壘を構へねばならなかつたかといふに、伊賀といふ國は南朝に盡した忠義な人もあるが又かなり惡黨の蔓こつた所で、熊坂長範も伊賀の生れ、伊勢三郎義盛も叔父を殺して後ち伊賀に隱れてゐたし、東大寺衆徒愁狀だの、黑田ノ庄（名張郡）惡黨人交名注文だの、內保ノ庄、惡黨亂入神人刄傷事だの、悽慘な記錄が澤山あつて、養和、壽永、元亨、建武、曆應のむかしから慶長年代まで續いて居り、殊に、足利末期に、南都東大寺の領地を奪つて伊賀に割居した群雄が所謂、土豪鄕士となり、四方山に圍まれた狹い土地で、經濟上の關係から互に鬪爭をつゞけたのが自然忍術といふ特種の戰法を案出し發達せしめた原因とみるべく、その鄕士の一部が、天正十年六月、德川家康、本能寺の變に遭つて、河內の飯盛山から三河へ逃げ歸へる途中、甲賀の多羅尾から鹿伏兎越をして伊勢の白子まで警固して行つた功に依り、後に江戸表へ召し出され、特別の役向を仰せ付かつた者貳百人、夫れをリードしたのが、鬼半藏と唄はれた服部半藏で、伊賀衆を統率して居つたところ、知行や待遇の事で貳百人の伊賀者が不平を鳴らし、四ッ谷の大木戸附近、笹寺に集合して、幕府に反抗せむとし、白晝に辻斬を行つたので、服部半藏責任を感じて改易となつた。慶長聞書と少し異つた話であるが別に詳く事とし、爰には、僕が二十三年間に蒐集研究した秘傳書百廿餘卷、原稿にして一萬枚以上あるが、其中のエッセンスを。と、考へたが、テクニックばかり羅列しても面白くないから、誰れでも普遍的に相當の概念を有つて居られる忠臣藏に託して忍道の眞髓を語る。

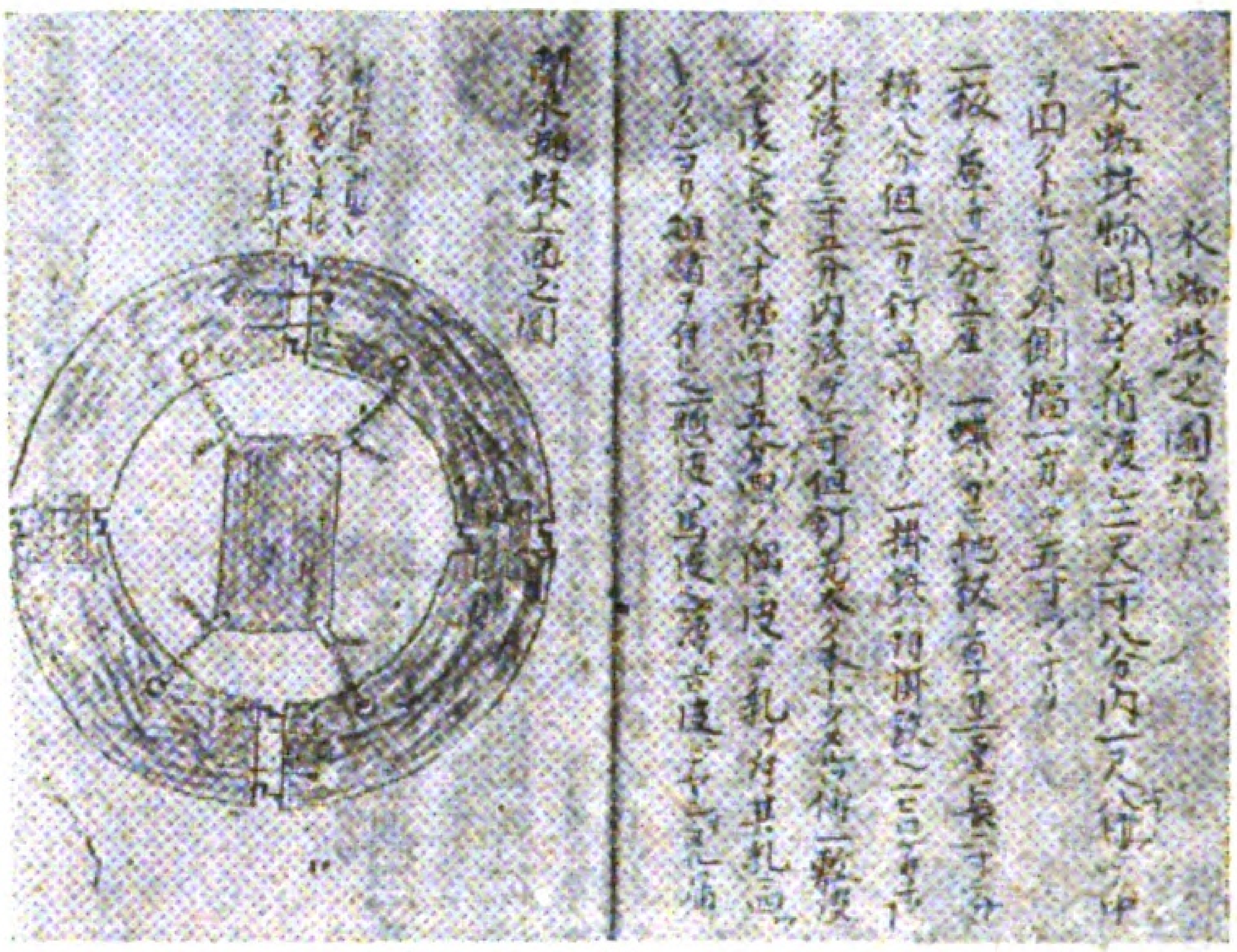


百地三太夫屋敷趾

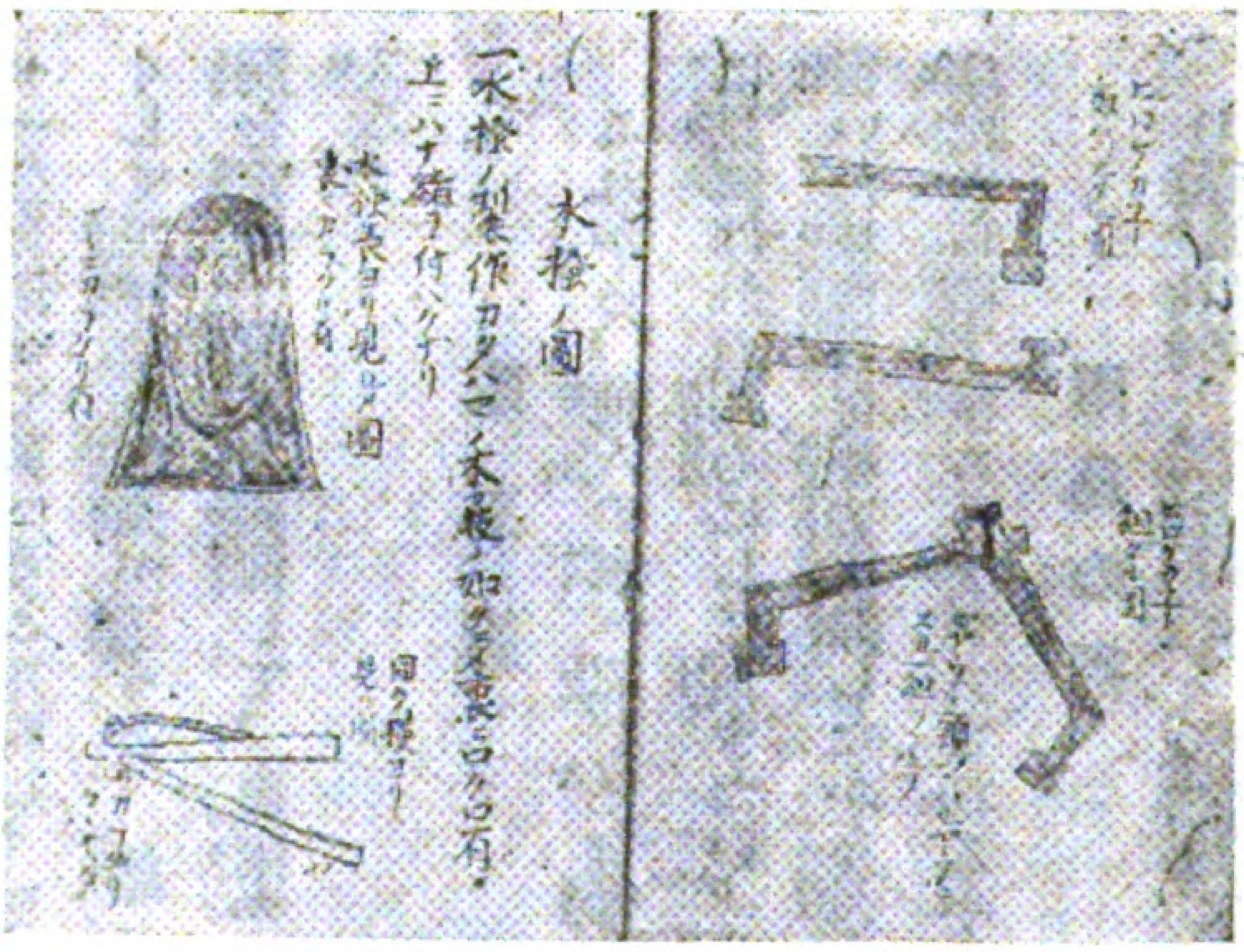
忍術忠臣藏

赤穗浪士、大石良雄の行り方は、いふまでもなく山鹿流の兵學から出たもので、素行先生は無論支那の兵書にも通じて居られたから、忍術の奥義に徹してゐたと謂ふべきである。其理由は、支那に於ける忍術の書として第

一に擧ぐべきは、孫子の用間篇で、夫れには、太公望が周の爲めに自ら間となつて殷の紂王を騙かり政治を亂して亡ぼしたとある。その太公望が忍書七十一篇を著はした事、太宗問對といふ書に載つてゐる。靖曰く太公謀七十一篇也云々、註に、謀とは間事也。とあり、この間事とは忍術の事で、吳の國では間といひ、春秋の時代には諜と稱し、戰國以來、細作、遊偵、姦細、六韜には遊士、李筌の陰經には行人、我が國では、三つ者、軒猿、饗談、しのび、等々いろ〳〵あり、由來支那人は一切の事を五行の說に當てはめて解きたがる癖があつて、五雜俎といふ書に、忍術のことを記るして、其法五あり、金遁、木遁、水遁、火遁、土遁、其物を見れば則ち隱るべしとあるから、瀧澤馬琴も夫れを信じて犬山道節火遁の術を描いたのだが、彼れは本當の忍術を知らなかつた。支那の陣形に、木火土金水の五行に象どり五行の陣備へあるが、



水蜘蛛の圖



水搔の圖

大將がそれを如何に扱ふかに依つてやや理屈づけられぬ事もない。而し、日本の伊賀甲賀流の忍書には一向五遁といふ文字は無く極めて合理的な方法ばかりである。尤も、火遁の術とは書いて無いが遁走する時に火藥を用ひ、水を潛るには鰍といふ器械を使ひ、海峽や湖水を渡るにはブイを、池や城堀や沼を越すには、浮沓だの、橇たの水搔だの種々な道具があり、趁はれた時に水へ入つて遁れるを狐隱の術、木に登つて敵の目を掠めるを狸隱れの術。又豫め土を掘つて置いて逃げる法もあるが、金遁といふのは少しも無い。只、黃金の力に依つて免れるのだと解釋すれば初めて五遁揃ふのだが一寸ユーモラスのセットが出來上る。

察氣

甲賀流忍德の卷、或は察氣之章に、遠方から敵味方の動靜を洞視する法が書いてあり、其根本として木火土金水の五氣と宮、商、角、

徴、羽、の五徴に依つて千里眼の如き事を行るのだが、いかなる原理であるか、獨逸にも知覺の交感的要素と色調に就ては左の如き評がある。

Das Farbenhören und der synästhetische Faktor der Wahrnemung

Von Anneliese Argelander.

發行者 Jena

Verlag von Gustav Fischer 1927.

我邦にも大槻快尊氏著實驗心理學93ページ、或は哲學辭典三八一ページ『色聽の部』心理學大集成二六三ページ圖說、其他西洋にはいくらもあらうし、又僕の實見したのでは、內藤湖南博士の令息耕次郎氏が其能力を有つて居られる。而し之を詳述して居ると迚も長くなるから專門家の研究に俟つ事として、孫子用間篇中、五間の事をみて、大石良雄の行り方を點檢すると一々忍術に適つてゐる。例へば同志の者を、八百屋だの蕎麥屋だの色々に變裝させて、吉良の様子を偵はせると共に、敵のスパイを逆に用ひて効果を擧げてゐる。祇園、島原、黑染の浮大盡『うきさん』、之は忍術で袋翻の術といふ。

忍術では最初ことを行ふに先きだち、始計先考術といふ事をする。つまり偵察の第一歩で、名を變へ姿を變して敵地に入り、主人はじめ家族全部、出入の人達まで其氣質性癖を探り弱點をみいだすと同時に、邸宅城堡の構造と室數高低廣狹、樹木、築山、泉石の配置、近隣との關係、攻め入る時の足場と引き上げるに際して都合のいゝ退き路、等々細大洩さず緻密なる見取圖と模型『忍術では土を以て作り』土圖といふ。次に飼犬の數と牝牡を調べ、時機を見て燒飯一つに×××一分を混ぜて與へると死ぬし、又狗子の啼を涸らす藥物もある。斯くして正確なる調査が了ると、愈、味方の人數と持場と、合圖、合詞を定め、天候を觀測して、風雨か大雪の夜、濃霧の晩を撰んで忍び入る。

家忍篇

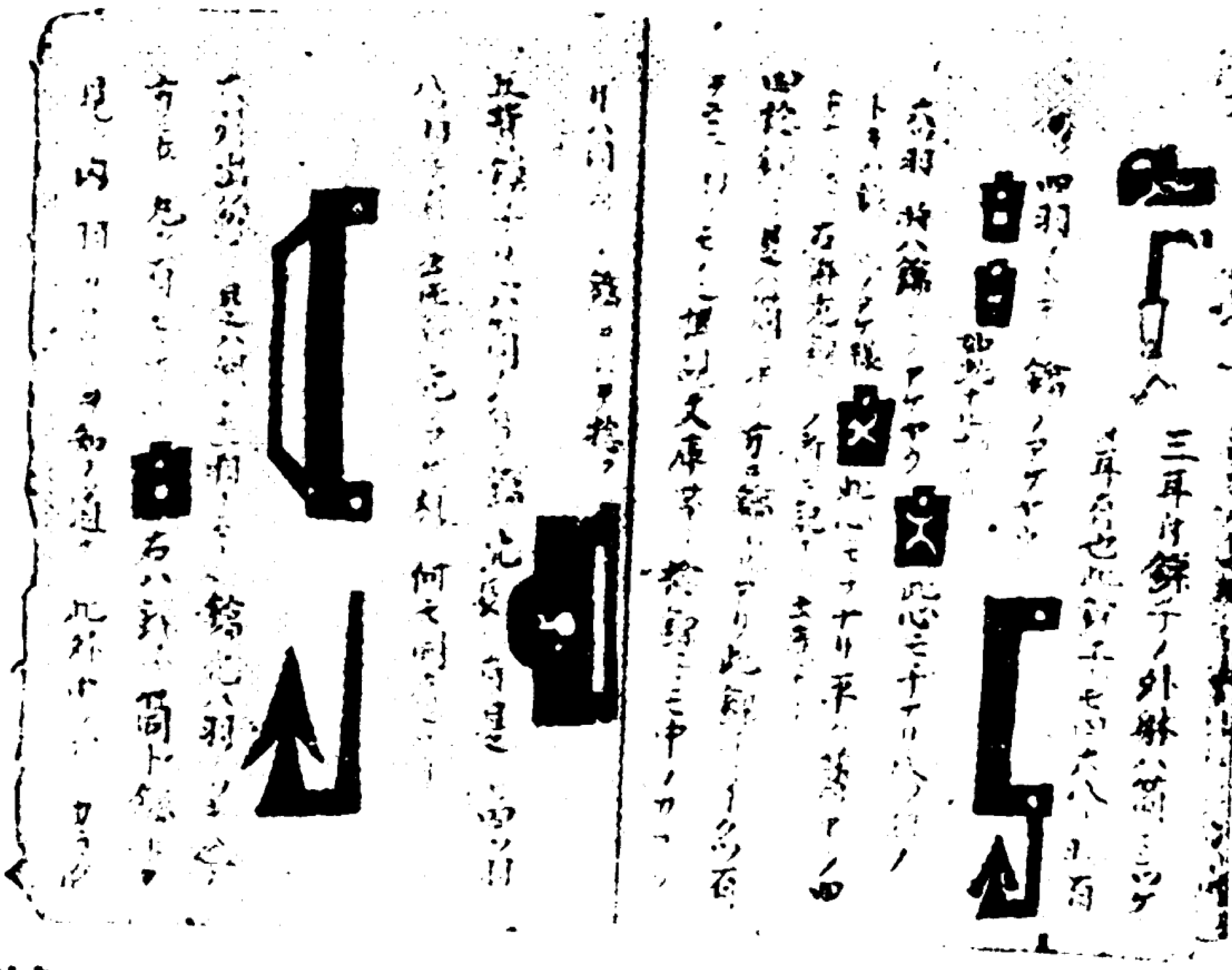
これから、他人の家へ忍び込む術を述べる。少し物騷だが、強竊盜に見舞はれぬ用心にして頂きたい。尙豫めおことはり。反復叮嚀に書いた秘傳書を極力壓搾したから足らぬ所は想像願ふのと、危險な文字だから讀了後スクラップされるやう。

雨鳥の術

(1)春夏秋冬、老若男女、各體質により睡眠覺醒の時刻は凡そ定つて居る。夫れを考へる事、(2)祝言の後、病人看護の疲れ、近火、普請の心勞等虛隙を覗ふ。(3)小風雨の夜は心落着き、夏涼しく冬暖なれば熟睡す。雨夜に忍び入るを雨鳥の術といふ。

除景音の術

月光は外よりさし込み、燈火は内より放射す。己が影法師に注意すること、風上は覺られやすく、風下は敵の匂ひ及び動靜『音』を知るに便あり。



地下六寸道あり

開戸篇を閲ると、鎹前、掛鐵、尻差、樞など戸締りを外す方法が委しく記してあるが、面倒な時は地を掘つて忍び込む。忍術では地下六寸道ありと書いてある。

二人忍

××或は××から入る法、一人は××の脇、又は××の傍に吸ひ着き居り、一人は表門をホトゝ叩く、敵の僕、くゞりを開けるを少し離れて××××××口上を述べる。僕もどかしがり外へ出て近寄る。××××××××××××××。或は一人先きに×××××、×××××××××××、一人は×××叩く。僕、母家から出て來る。×××××××××××。

機

忍び入るには敵の動く機を見る。忍術は劍術の理に異らず、敵へ劍を打ち込むこと、敵の入らざる時には劍を打ちこむ事ならず、敵の入るる時うち込む也。喩へば、敵劍を打ち出す時を避けて、其劍の下りたる所を打つ。又其劍の上る時に付け入る。是れ敵の入るる時に劍を入るる理也。未熟の人は敵の入れざる時に打ち入れんとするに依つて敵を打つことならず却つて自ら打たるる也。

蚫、蚤

忍術者は種々な動物を使ふが、忍び入つた後、座敷を窺つて、灯がともつてゐて邪魔な時は、竹筒に入れて携帯してゐる、蚫・蚤を座敷へ入れると燈火を消す。

地期取

仕事にかゝる前に、人に見咎められては大變だから、地を片腕の入る程ほつて、夫れへ耳を當てると四五十間四方の物音が聽える。之を地期取といふ。

合詞

赤穗浪士討ち入りの時の合詞は山と川だが、忍士は逆に敵の合詞を

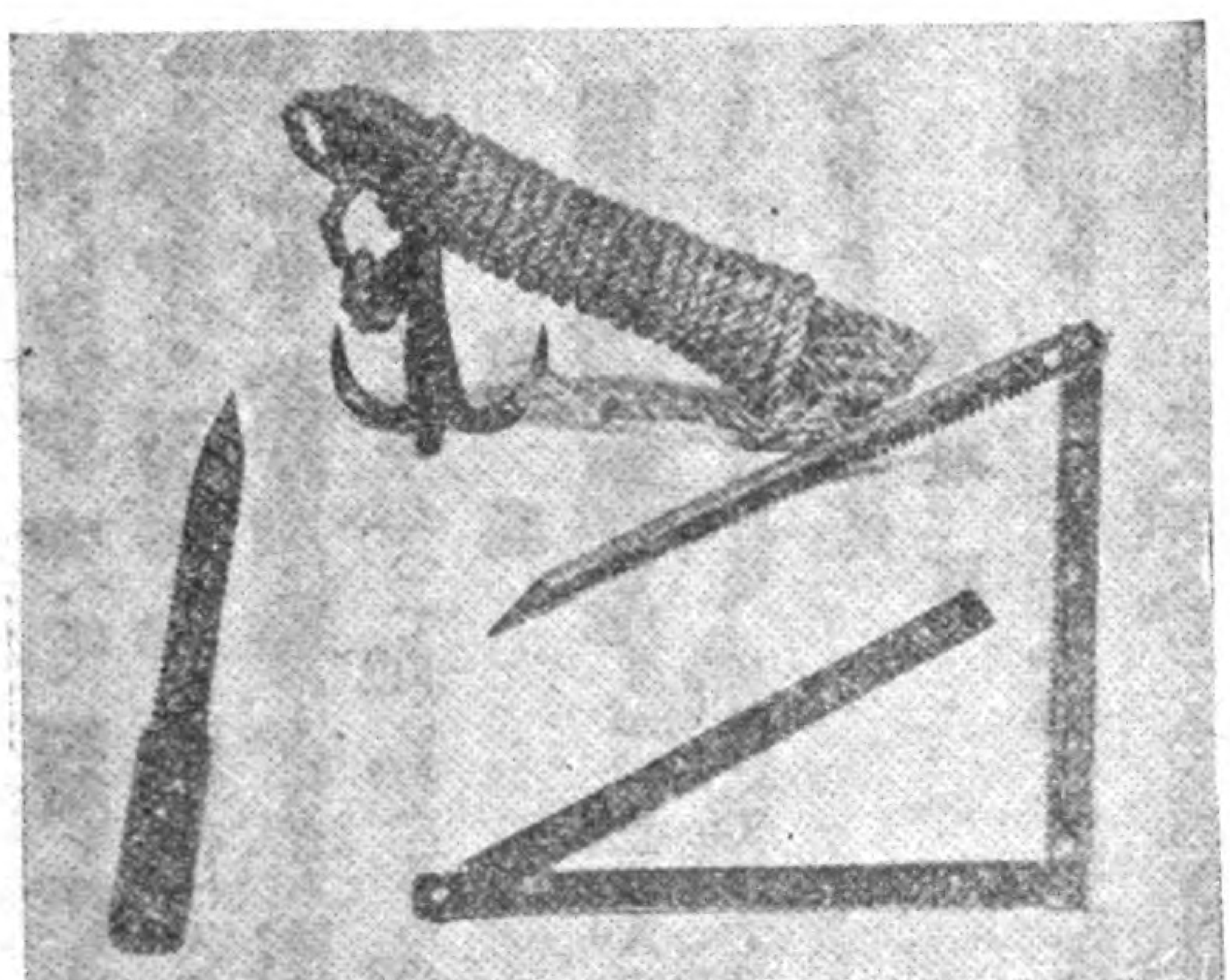
研究して、忍び込んで若し敵に逢つた場合、敵の問に對してなるべく疎く、問所と同じ答をする。或は、山か林、森か里、谷か水、海か鹽、花か實、火か煙、松か緑等々いくつも用意して居るが要するに自ら馬鹿をよそほひ、鈍漢の如く思はせるが、味方同志は堅く約束して、畑か淺間、雪か富士、花か吉野、萩か宮城野、月か更科、梅か難波、蛙か井出、鶉か深草と云つた風流なもので、他に木の葉を合印ともする。

鈴火

四十七士が、吉良の邸へ押し寄せた時、大石良雄が、山鹿流の陣太鼓を、一つ二つや三流れ、或は五鼓切り返へす、十二陰陽たうたうと打ち鳴らしたといふが飛んでもない不所存で、敵に用意を促す愚である。忍術の夜討には、先きへ忍び入つた一人が小高い所に登つて鈴火といふもので信號をする。小さな風鈴と少し青みがゝつた紙燭の如き火であるから他人に氣付かれない。鈴火の製法略す。

登器

下の寫眞にある、鈎繩の錨は二寸餘りの小さなもので二丈九尺の麻繩が付いて、登り下りに用ひ、又池や河を渡る時、暗夜には低く引つ張つて味方はぐれぬ樣に、或は敵を躓づかせる爲め、場合によると捕繩にもなる。(登器の種々次頁挿圖參照)



鈎繩(上)　錏(左)　刄曲(右)

錏

寫眞。ナイフの如くに見えるが、鋸で、六寸斗り、尖端は錐、柄は竹で、忍士仲間では天王寺と符諜で呼ぶ。

刄曲

折り疊めば一本の棒の如くなるが、伸せば四尺餘、鋸であるが鍵前を外すにも便利である。

戸閉

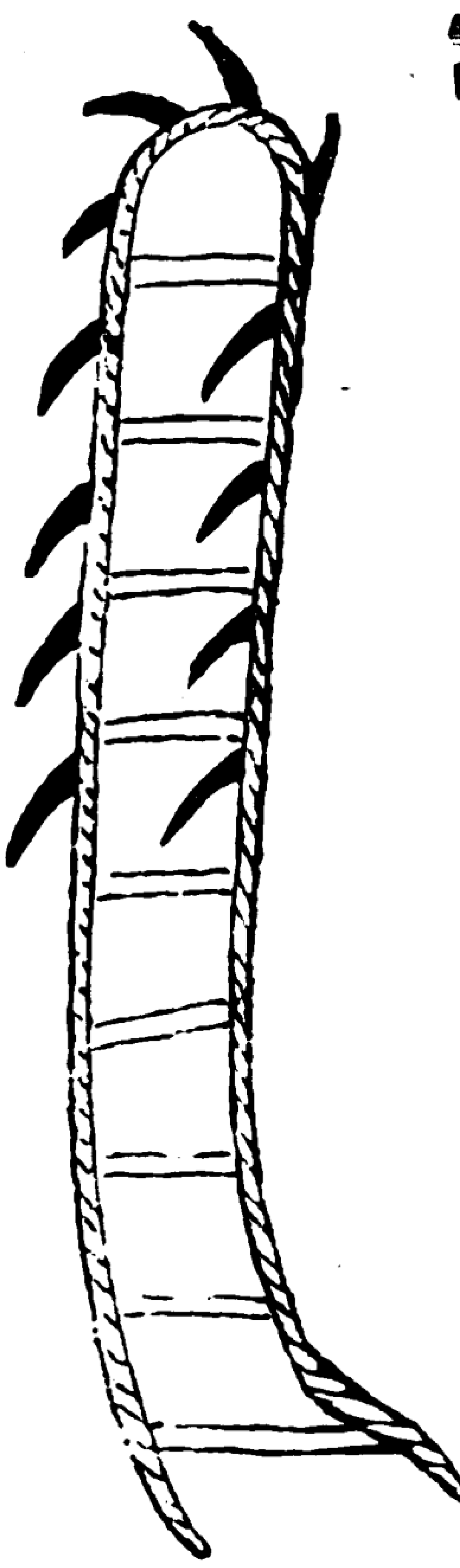
大石良雄は仁者であつたから、女子供の逃ぐる者は助けてやれと命じたが、忍術では敵を鏖殺にする爲め戸閉といふ物を鐵にて鍛へ太さ二三分程(以下四十七字削除)

戸閉器

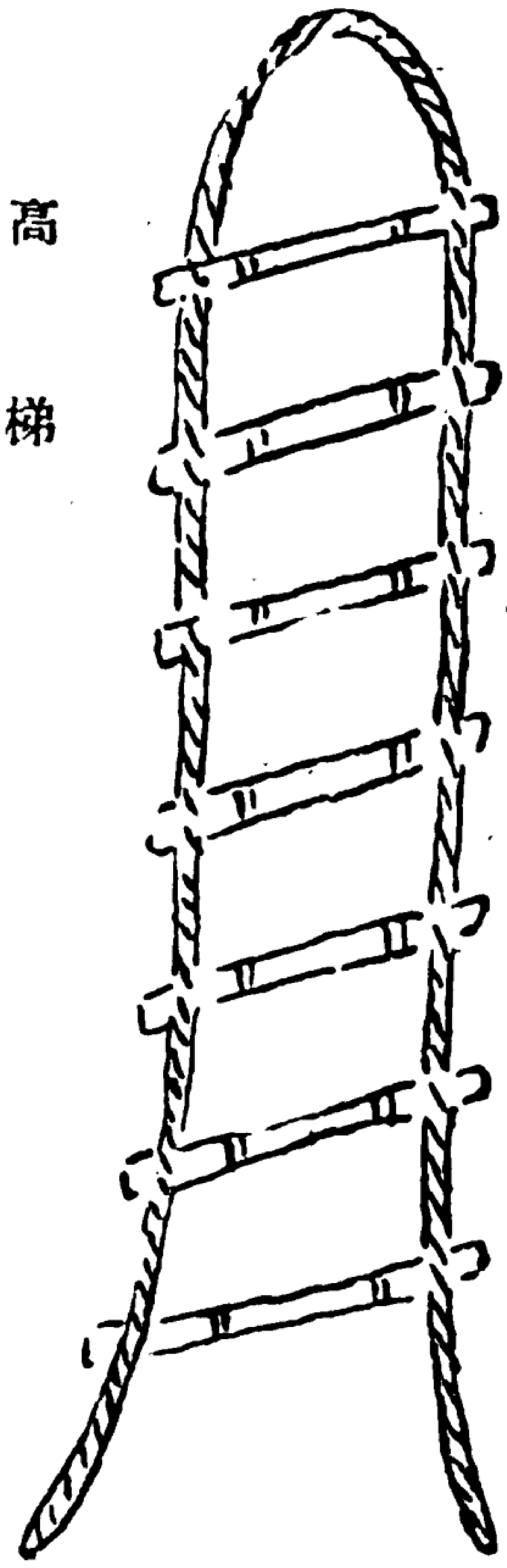


鉤梯

長さ貳丈五尺、横六寸、麻縄又は棕縄にて製す、鐵鈎圖の如し。巖石等險しき上に木立ある所に用ふ。

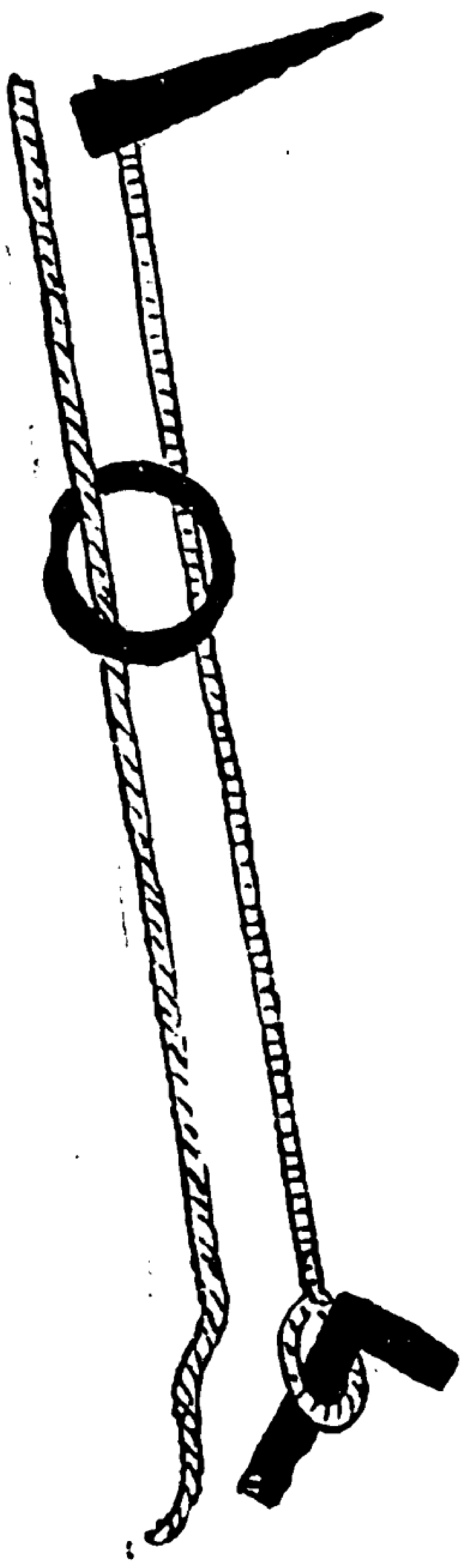


巻梯　長さ七尺位



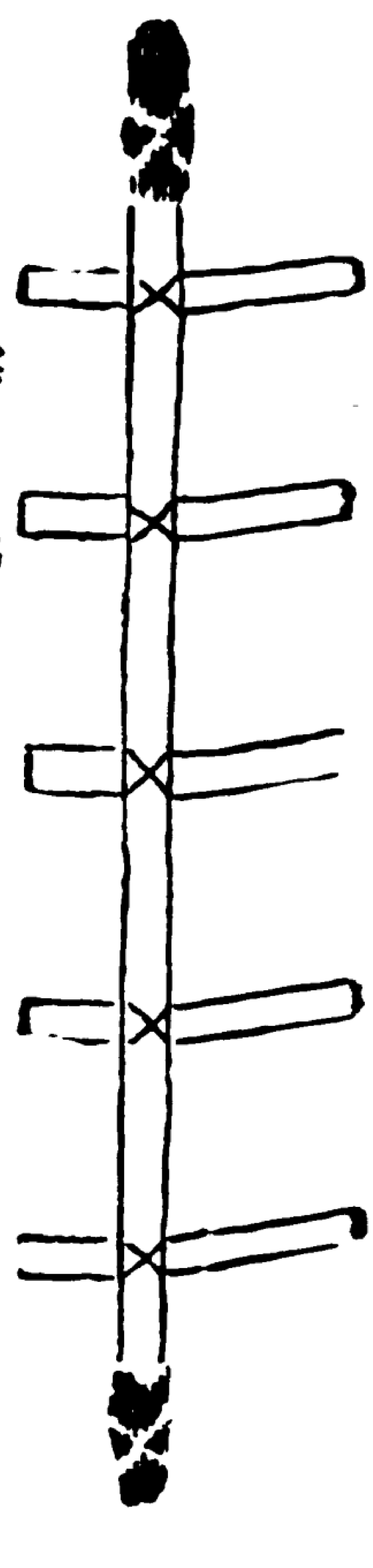
高梯

鐵輪圖の如く縄を付け一筋は輪の中に入る、之忍器を通する器也。



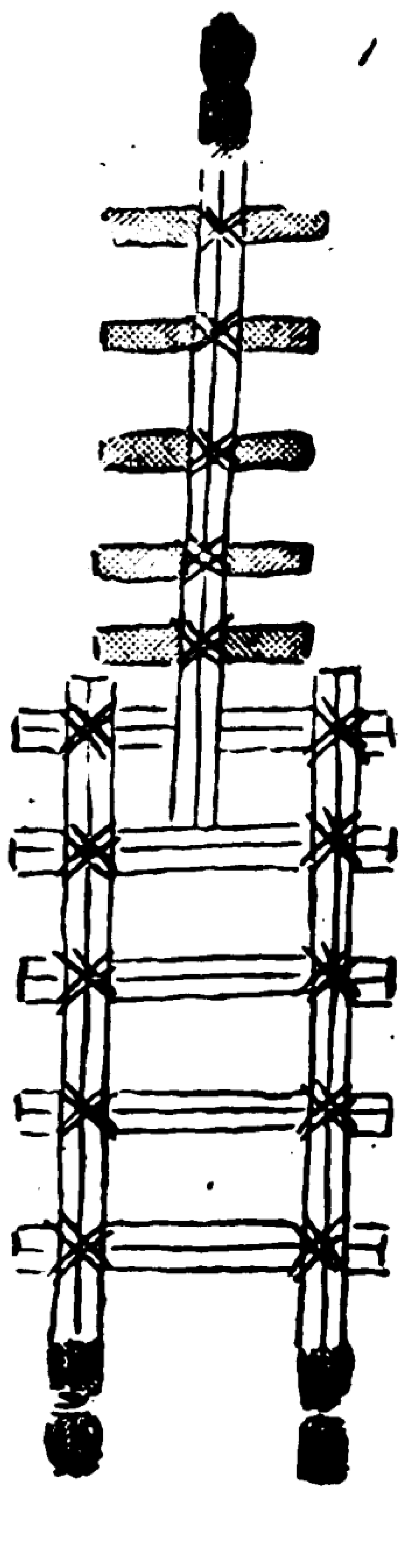
飛梯

大竹を割合を作る。上下藁にて包む。



雲梯

之は結梯と飛梯と二つ合せしもの也



を使ふ。敵が大勢で、味方の人數の足りない時、圖の如きもので雨戸を閉らかぬやうにし、一枚だけ、逃げ路として外づして置き、座敷へ火を放けると狼狽して逃げ口をさがし、開いてゐる所から逃れ出るのを待ち構へて斬るので、餘り戸口に近付いて居ると斫り外すから四五尺離れて斬る。

くノ一の術

あまり殺風景だから今度は妖艶な術を說く。敵の無戒嚴重にして忍び込めぬ場合、くノ一の術を使ふ。之は智者も學者も踏み迷ふ道で、

くノ一の三字を一字にせよとあり、由比民藏と共に天下之大讐討の一、狩場の曙に、曾我兄弟が、この術を使つたと、忍道樹陰論和漢忍利證語抄といふ、忍士の書いた寫本に載つてゐる。忍士の説によると、十郎祐成は決して虎御前に惚れてゐたので無く、大磯は海道筋であり、仇敵工藤が伊豆より鎌倉へ通ふから、十郎は常に大磯の虎の屋形に入り浸つてゐて、工藤が若し遊君に馴れる事があれば、虎と朋輩の交誼だから、其遊君のツテで?! と思つてゐたところ、案の錠、富士の御狩の時、工藤は手越の少將といふ遊君を招いたから、少將に手引をさせて忍び入つたと書いてある。

假妻假子

女をスパイにする事は、現代世界列強孰れも行つて居り、くノ一に大切な軍機の密書を盜まれて有爲の將校が自殺を遂げた例もある。敵國の女を妻とし、養子を貰つて、夫婦に子供の鎹があれば誰れでも油斷する。其子供を人質に入れて仕事をする。

隱れ妻の術

之は僕が解説するより秘傳書その儘かく方がいゝと思ふ。

たちからにては入り難く思ふ時、くノ一の術を用ふべき也。凡そ、くノ一は其心蕩搖にして、智も心も淺き者なれば、例へば ●○○二つ●●●●○●●●●●にても見届けざる者は無用也。若し見届けたる者あらば、誓紙を堅く致させ、能々合圖約束を云ひ聽かせ、其後、宜しき方便を以て敵方深く庭へ遣はすべし。其從者の從者となりとも、以下口傳

隱蓑の術を以て入るべき事、言は、彼の、くノ一と合圖を成しての上也。くノ一奧方へ申すべきは、宿に預け置たる木櫃を取り寄せたしと、あさ／＼といふ。此者陰謀あらんとは、たとひ智謀世に勝れたる士にても聊も思はず、まして奧方をや、故に必ず其事を免す者也。其時、門々の番衆へも初より、ことはりを述べ置き、彼の木櫃を入るゝ時、其内へ入り行くべき也。但木櫃は二重底にして、上には衣裳を入れ、下の重さが宜き也。二人して荷なふ樣にするぞ。

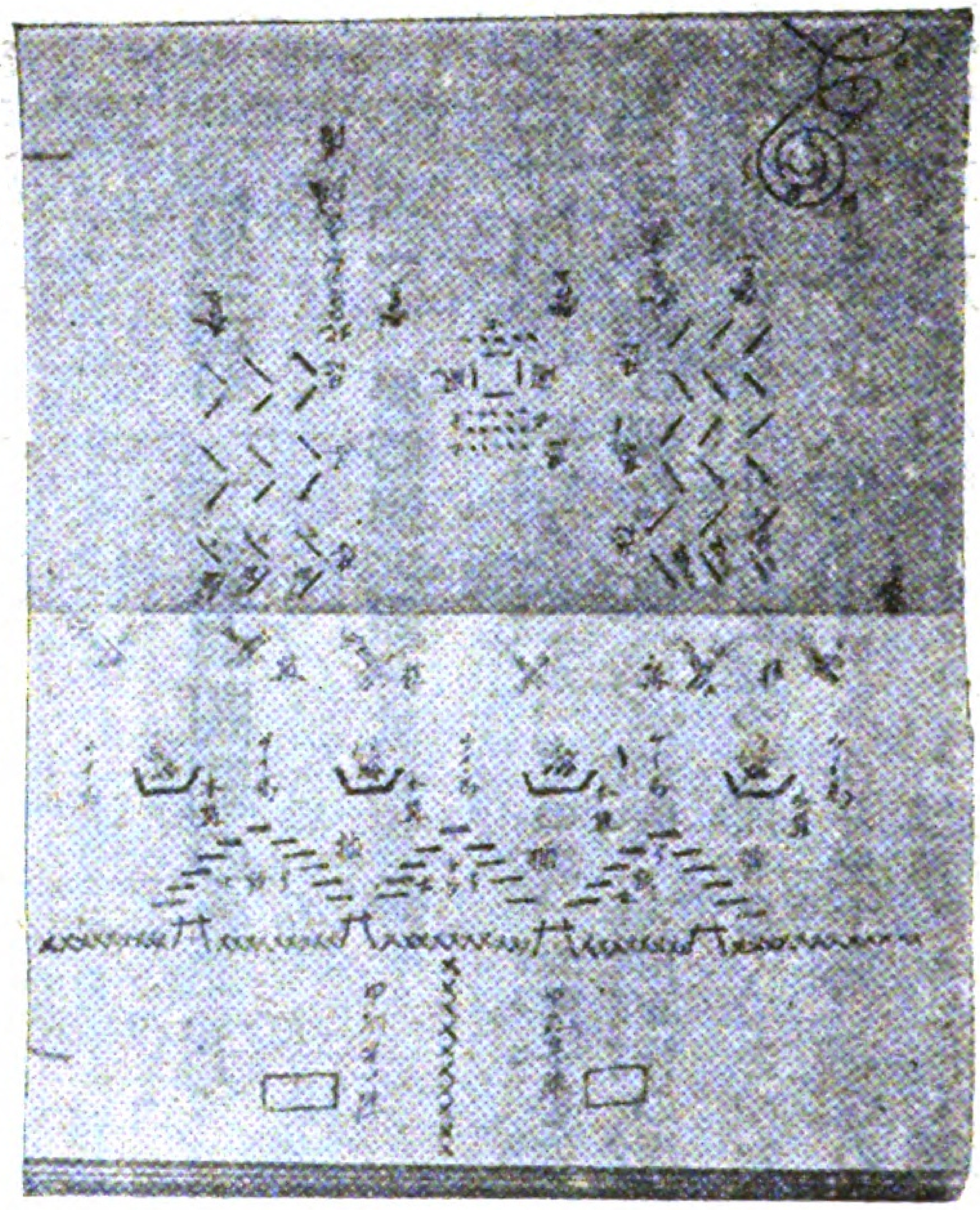
右隱れ鎹の術は敵方我を知りたる者多くして別の方便行ひ難き時の謀計也。至極の秘也。

右の術を能く用て忍ぶ時は、守り嚴しき名城にても忍び入らずと云ふことなけれども、隱形の術なくては徘徊ならぬ也。

隱形術初步

隱形術の初步だけ述べると、忍術者は、素柿色、鼠色の衣服を着て、環境の色彩により生物の保護色と擬態を真似る。つまりカムフラーヂである。頭は、擬装と暗色によつて、敵の注意を轉換し、心耳を

眩惑して、神出鬼沒の如く想はせる。擬音と聲色の名人は現代でも居られる。某宮殿下の御前講演をして動物の聲聲を三百三十五通りされた横濱の田澤嘉聲君と、小禽の習性を研究する爲め生物學者を深森に案内して口笛を吹く、富士吉田口米屋旅館の高田翁、其他二三侯の知つた人で妙手がある。一人にて數人の囁きをしたり、戸の外に居ながら内に居る如く聞かせたり、鳥獸の鳴聲、樂器の音調など機に臨み變に應じて發するのである。



忍び夜討の陣備

忍び夜討

上に掲げた圖は、彦根侯の秘書中にあつた忍び夜討の陣備へで、富士大宮の接戰を現はしたものだが、風間と記るしたのは、忍術に似た仕事をする用兵、亂破と稱する一隊で、其頭目、風摩或は風魔と呼ばれた男は、身長七尺、容貌魁偉、叱咤の聲、五十町の間に響き渡つたといふ。

現代二大富豪の閨閥網

白柳秀湖

第三篇　三菱閨閥網の巻（下）

『一』　岩崎彌太郎と其妻喜勢子

大三菱の創業者、岩崎彌太郎が、その妻、喜勢子を迎へたのは、文久三年の春の初め、彌太郎が恩師、吉田東洋の復讎を斷念して、上方から郷里井口村に歸つて間もなくであつた。

文久三年と云へば、彌太郎はちやうど三十歳、花嫁の喜勢子は弘化三年二月十日生れとあるから、此時やつと十八歳、番茶も出花といふ嫁入盛りであつた。今日から云へば男三十に女十八は、ちようど似合の夫婦であるが、昔は男の三十は晩婚の甚だしきもので、年の十以上も違ふ夫婦といふのは稀らしかつた。此花嫁喜勢子は、岩崎家の戸籍で見ると高柴陰盛といふ人の妹分になつて居る。高柴といふ人のことは、審かにせぬが、明治年間法制局の參事官であつたことだけは確かである。明治の初年には身分を拵へる爲に戸籍を改竄することが、可なり自由であつたから、喜勢子の素性もよく分らぬ。

但し喜勢子の家柄が取立てて云ふに足るほどの家柄でなかつたことは、彌次郎の妻お美輪の生家、小野氏をめぐる諸星座が、三菱閨閥網の中に燦然として光を放つて居るのに對し、喜勢子の生家が、杳として聞ゆる所のないのに徴してもそれと察せられる。

それは何れにしても、十八歳といへば、南國の女はモウ成熟しきつて居たらうし、花婿は名にし負ふ勢力絶倫の人とあつて、喜勢子は間もなく姙娠して翌元治元年二月には後の加藤高明夫人春治子が生れ、更に其翌慶應元年八月には久彌氏が生れ

て居た。

慶應三年の夏彌太郎が、長崎の留守居後藤象二郎の招きをうけて高知に出で、福岡孝悌に會つて用談を濟ました後、直に待合せて居た兵庫丸に乘込んで、長崎に向け出發した時には、妻子は郷里井口村に殘したまゝであつた。後藤は彌太郎が長崎に着船するのを待つて土佐藩の經營にかゝる長崎商會(註の一)の殘務を彌太郎に引繼ぎ、六月十日の前後、藩船水蓮丸で坂本龍馬と相携へて京都に出で、十四日河原町なる藩邸に入つて岩倉を中心とする薩長下士階級聯盟の擧兵討幕運動に働きかけることとなつた。

此間に後藤は、岩崎彌太郎を老公容堂に推擧して馬廻格に昇せ、仕置役に任じ、更めて長崎商會の全權を委ねることとした。安藝郡井口村の地下浪人の子で、當時失意のドン底にあつた彌太郎が一躍して、土佐藩二十四萬石の勝手元を切つて廻す重役の班に列したのであるから、如何に時勢が切迫して財用の急を要するものがあつたかゞ察せられる。

(註の一)長崎商會の名稱は大江卓の懷舊談及び「大江天也傳記」による。山路愛山の「岩崎彌太郎」には「長崎商法所」とある。

「二」 大阪長堀時代の岩崎一家

慶應四年五月、彌太郎は藩命により、長崎を引揚げて大阪に入り、長堀の藩邸内に起居して、土佐商會の經營に任ずることとなつた。是より先、土佐商會は大阪の内淡路町にあつて、眞鍋榮三郎といふ人の經營に委ねられて居たが、彌太郎の赴任する少し前長堀の藩邸に移された。

明治二年には版籍奉還の事があり、各藩主は知藩事として、朝廷から更めて藩の行政を委ねられることとなつたが、此時彌太郎は藩廳から小參事を命ぜられ、大參事後藤を輔けて財政の樞機に參與することとなつた。土佐藩の歴史に暗い人が、彌太郎を裸一貫から叩き上げて、僅に十年ほどの間に日本一の大船主となり、三菱王國の基礎を築いたものの如くいふのは途方もない誤りである。勿論それは幕末のドサクサ紛れではあつたが、彼は慶應三年中、既に土佐藩の仕置役として、長崎商會の管理を委ねられて居たし、明治二年には藩の小參事として、大阪長堀の藩邸を管し、併せて土佐商會の經營に任じて居た。彼はこれが爲に土佐藩の債務も負はされたけれども、二百幾十年

間、二十四萬石餘の大勢力によつて培はれた富と力とは、遺憾なく之を利用することの出來る重要な地位をその出發點としたものであることを忘れてはならぬ。

彌太郎は長崎から大阪に移つたのを機會として、それまで郷里井口村に殘してあつた父母妻子を大阪に引取つて扶養することとした。それは恐らく明治二年のことであらう。大阪へ引取つたのは父彌次郎、母お美輪、妻喜勢、長女春治、長男久彌などで、弟の彌之助も無論一緒であつたに相違ない。

明治四年には版籍奉還の結論として廢藩置縣が斷行せられ、舊藩主が完全にその曾て領有した土地人民から分離された。彌太郎が後藤、林等の斡旋で明かに藩の財産分の一部であつた土佐商會の土地建物及び之に屬する汽船その他一切の附屬物を私有に移したのも此時である。それらに關する詳細の敍述は本篇の目的とする所でない。不日改造社から出版される筈の『岩崎彌太郎傳』に讓るとして、茲には明治四年の廢藩置縣を機會として土佐藩の土佐商會が、岩崎彌太郎の九十九商會となり、間もなく三ツ川商會と改稱せられ、廢藩置縣の後、更に三菱商會となり、土佐商會時代の權利義務が一切彌太郎個人に引繼がれたことを承知して置いて貰へればそれで十分である。

かくて土佐商會の徽章であつた山内家の三つ柏が、それに擬はしい人字形三菱の徽章に取かへられた記念すべき明治四年六月には、彌太郎の妻喜勢子が又一女を擧げて、それが磯治と名づけられた。

『三』 彌太郎の酒癖と其家庭生活

彌太郎は三菱商會の旗揚げをすると間もなく、其航路を馬關及び横濱に擴張し、東京に支店を開いた。東京の最初の支店は、鍛冶橋の土佐藩邸前に置かれた。それは後に中央旅館といふ宿屋のあつた場所で、曙樓といふ料理屋の跡であつた。彌太郎はそれを買收して東京支店とした。明治七年の征蕃役は三菱會社の歴史に一時代を劃したものであるが、その時はまだ五郎兵衛町の支店で事務を執つて居た。征蕃役によつて、大跳躍を遂げた三菱會社は、愈その本店を東京に移すこととなり、五郎兵衛町の支店を引拂つて、茅場町に移つた。茅場町の河岸に立並んだ七棟の三菱會社はその頃まだ稀らしかつた赤煉瓦の洋風倉庫で、自由黨がその主力をあげて三菱攻撃をした時には藩士

が之を國民の膏血に擬へて、聽衆の血を沸かせたものである。明治三十一年文集館發行南海漁人の『岩崎彌太郎』には表紙に此として、茅場町にあつた赤煉瓦の三菱會社が描出されて居る。

彌太郎の父彌次郎は明治六年大阪で身まかつたが、母お美輪は本社の移轉と共に東京に伴はれて、明治三十三年三月十四日八十七歳の高齢で本郷切通しの本邸に身まかるまで達者で土佐風を立通し、多くの孫達に、昔の苦しかつた時代を一つ話にして聽かせて居たから、喜勢子が『御後室様』として、兩岩崎家の上に實權を振つたのは、其後のことと見てよい。

明治七年、征蕃役の前後から、三菱會社は郵便蒸汽、太平汽船、ピー・オー汽船、共同運輸などいふ内外の強敵を次から次へと對手取り、血みどり血がひになつて極東海上の覇權を爭つた。本社を東京に移してからの彌太郎は戰線に於ける部下の督勵と、作戰計畫との外には何ものをも顧るの餘地がなかつた。左右搏撃、縱横馳突、彼の叱咤怒號を聽かぬ時は、彼が酒にその焦悶を忘れて居る時であつた。而も彼の脈管には明かに父彌次郎から傳へられた酒亂の血が流れて居た。飲めば必ず醉ひ、醉へば必ず怒罵八方に當り散らして、狂暴殆ど手のつけやうもなく、醫學博士、樫村清徳が屢く家人の怪我の手當に聘せられたとさへ傳へられて居る。子爵石井菊次郎氏の繼室たま子（明治十四年八月生）は、樫村氏の女である。

彌太郎が醉つて暴れ出した時は、喜勢子夫人でさへ之を鎭めることは出來なかつた。一家は閴寂として墓場の如く、其處には唯、恐怖と戰慄とがあるのみであつた。此間にあつて、長崎の留守居時代に馴染んだ丸山の遊女、老松（岩崎家では青柳と呼ばれて居た）だけは纎手よく彌太郎の狂暴を制することが出來た。彌太郎の側には、老松の外に六七人の妾が居た。中には姉妹にしてその寵を爭ふものもあつた。秀彌（註の二）康彌、正彌、富子、雅子は戸籍に登録された庶子で、別に郷純造の四男昌作が、豊彌と改名して、養子に迎へられて居る。

（註の二）岩崎秀彌は彌太郎の庶子で明治十三年二月二日生れである。ケンブリッヂ、シカゴの兩大學に學び、歸朝して富士瓦斯紡績株式會社に勤務して居たが、幾もなく病死した。尚ほ秀彌以外の庶子女のことはそれ〴〵其閨閥網の敍述中に加へてある。

『四』　彌太郎系の諸星座

（一）伯爵、加藤厚太郎——加藤高明の嗣子で母は岩崎彌太郎の長女春治子、明治二十八年一月生れ、大正十五年父高明の死によりて家督を相續した。高明は舊尾州藩の士族、服部重文の二男で萬延元年正月三日、父及び祖父作助の任地であつた尾張國海東郡（現に海東郡）佐屋代官所の手代屋敷で生れた。母は久子、同郡須成村（現に蟹江村）の神官、寺西伊豫守家職の長女である。幼名を總吉といひ、明治五年十三歳の時、同藩の士、加藤武兵衛に養はれて其姓を冒し、明治六年、父重文の妹婿安井讓一（司法省權大錄）の世話で上京し、外國語學校に通學中、安井の勸告に從つて名を高明と改めた。

明治八年七月、高明は當時の大學登龍門であつた外國語學校を卒業して九月東京開成學校に入學を許可せられた。明治十年高明は開成學校を卒業して東京大學法學部の一年級に編入され、明治十四年、北海道開拓使官有物拂下問題の沸騰して居る最中に、法學部を首席で卒業して三菱會社に招聘された。彼の初めに任ぜられたのは調役といふので、その同僚には近藤廉平、吉川泰次郎、末延道成などの面々が居た。

加藤が調役として勤務したのは僅々三ケ月であつたが、彼はその間に大岩崎にその人物を見拔かれて、直に神戸支社の一事務員として戰線に送られた。明治十五年三月には、神戸から小樽出張所に轉任を命ぜられたが、間もなく神戸支社に復歸し、大阪詰となつた。さうして其年の暮には本社の本務課勤務を命ぜられて翌年一月、東京に歸任し、大岩崎の眼識で、四月英國留學の途に上ることになつた此時高明は漸く二十四歳であつた。

高明の英國留學中、共同運輸會社と三菱會社との競爭は全く白熱した。さうしてそれが兩社の共倒れに終らうとした時、彌太郎兄弟は巧に手を廻して小西鄕を抱込み、小西鄕を通じて薩派と和睦した。その結果品川が農商務省を逐はれて兩社の合同がなり、日本郵船會社が成立した。併し彌太郎は此合同の成立を見るに及ばずして明治十八年二月七日、五十二歳を一期として癌腫の爲に倒れた。高明はロンドンの客舍で大岩崎の訃に接し直に歸朝の途に就いた。同年八月十八日、彼は本社副支配人に昇格し、月給百圓を給せられることになつた。間もなく三菱會社と共同運輸との合同問題が起ると、彼は三菱側の代表者、莊田平五郎、岡本健三郎の二氏を助けて合同計畫に參與した。

日本郵船會社が成立すると、彼は三菱側を代表して入社し、

庶務課の副支配人として月給百三十圓を支給されることになつた。彼の日本郵船會社在勤は一ケ年四ケ月であつたがその間彼は社長森岡昌純の事實上の秘書役で社長と外國人との折衝にはなくて叶はぬ絶好の通辯であつた。

彼と春治子との縁談が事實となつて現れたのは、彼が日本郵船會社の庶務課副支配人として、百三十圓の月給を、社の不況から一時百圓に減ぜられて居る間のことであつた。日本一流の大富豪、大岩崎の總領娘、春治子も、曾ては月給百圓の會社員の奥さんであつたのだ。

初め岩崎家に春治子の結婚問題の起つた時、先づ加藤高明を名指したのは、亡兄彌太郎の後をうけて、大三菱に總司令の任にあつた岩崎彌之助その人であつた。彌之助の母美輪子も亦熱心な高明黨であつた。併し春治子を加藤高明に娶せることは、大岩崎在世中からの既定方針であつたに相違ない。其處で岩崎家の相談は一決し、豐川良平と内田耕作とが、高明の身許しらべに取かゝり、最初に藤井諸照氏がそのことを高明の許に持込んだ。かくて春治子は明治十九年四月八日、駿河臺鈴木町なる高明の家に迎へられた。媒酌人としては、内田耕作氏夫妻、新婦側の親戚代表として彌之助夫妻、新郎側の親戚代表として五代龍作博士、その他に後藤象二郎伯夫妻、川田小一郎、豐川良平、水野遵成などの御歴々が列席して極めて盛大な式が擧げられた。

(イ)**上野季三郎**——氏は、伯爵加藤厚太郎氏の夫人、富美子(明治三十四年三月生)の父で現に宮内省に大膳頭の任にある。元治元年三月秋田縣士族中田直慈の弟として生れ、先代彌平に、養はれてその姓を冒した。明治二十三年高等商業學校を卒業し、領事館書記生を振出しに二等領事、總領事、宮内大臣秘書官、式部官等に歴任して、現在に及んだ。その家督を相續したのは大正七年一月である。夫人トク子(明治二年六月生)は養父彌平の長女で、季三郎氏との間に三男五女を擧げた。加藤厚太郎氏夫人富美子はその三女である。

(ロ)**子爵　岡部長職**——氏は舊和泉國岸和田の藩主(五萬三千石)である。その夫人坻子(慶應三年三月生)は侯爵、前田利嗣氏の大叔母で、長男長景氏(明治十七年八月生)の姉、エツ子(明治二十一年一月生)は加藤高明の長

女である。岡部家は長職氏の次女榮子が三井辨藏氏に嫁して居る關係から云つても、長職氏の夫人扺子が前田侯爵家の出である關係から云つても、明かに三井家の閨閥網に屬するものであるが、加藤家を通じて、岩崎家とも間接に姻戚關係を結んで居る。但し三井家と岩崎家との血は岡部家を境にして完全に切斷されて居るわけで、岡部家が三井家にも、岩崎家にも姻戚關係を繋いで居るといふことが、必ずしも、三井家と血脈の相通ずることを意味するものでないことは勿論である。

(二) 木内良胤――氏は故、木内重四郎の長男で、現に在佛公使館付書記官である。父重四郎は、岩崎彌太郎の次女、磯治子の婿がねとして選ばれた人である。木内氏はもと、千葉氏の一族で、千葉家四家老職筆頭の家柄である。即ち木内氏、鏑木氏、原氏、圓城寺氏の四家がそれである。天正十八年千葉氏が亡びた時、その一族長臣は皆房總の野に土着して農に歸した。豐臣氏から關八洲に封ぜられた德川氏は、古來關東の人心の兇嶮にして統治に困難なる事情に鑑み、千葉氏の舊臣は多く之を擇して各村の名主に任じ、苗字帶刀の事を許した。世にこれを房總の千葉黨と稱し領主と土民との間に介在して、日本の社會史上に特殊の地位を占めて來た。下總佐倉の一揆で人口に膾炙して居る木内宗五郎の如きも、木内氏の一支族である。

木内重四郎は重郎兵衛の二男で、慶應元年十二月二十日千葉縣山武郡千代田村に生れた。加藤高明より五歳の弟に當る。重四郎は明治二十一年、二十四歳で東京帝國大學法科を卒業した。同大學に特待生制度が始まつて第一回の合格者である。卒業後先輩の勸告に從つて大學院に入り研究中、東海道官有鐵道拂下處分の失當を論じて『東京日日』に投書し關直彥氏によつて同紙の論說欄に揭載された。此論文の爲に拂下も沙汰止みとなり、彼は時の法制局に入り參事官試補に任ずることとなつた。三菱から磯治子の婿料として選ばれたのは多分そんな關係からであらう。何れにしても之が官途の振出しで、間もなく各國の議院制度調査の爲に歐米に派遣せられ、歸朝後貴族院書記官、農商務省參事官に歷任し、正七位に叙せられた。

明治二十六年には井上が内務大臣となつたについて内務書記官となり、[illegible]を兼ね、同三十年行政裁判所評定官に任じ、[illegible]人に[illegible]されて[illegible]更に商工局長に

選み、正五位に叙し、明治三十二年勲四等に叙せられた。日露戦争後、韓國統監府の設置せらるゝや、伊藤の抜擢をうけて農商工部長官に任じ、鑛山の開發に、水利の指導に[illegible]に、植林の奨勵に業績の見るべきものが頗る多かつたと云はれて居る。

是より先、明治三十三年九月、伊藤の擴げた大傘下に集まつた政友會の構成分子には二つの系統があつた。その一つは舊自由黨（憲政黨）系で、他の一つは三菱系であつた。三菱系の代表者としては創立委員の中に鶴原定吉があり、之は紛れもない彌之助の腰巾着であつた。政友會が成立すると、山縣が不意討的に內閣を投出して第四次伊藤內閣が成立し、その外務大臣には、態々英國から迎へられた加藤高明が坐つた。之で三菱が政友會の重要な構成分子の一つであつたといふことはよく分る。

間もなく伊藤は政友會の總裁を辭さねばならぬこととなり、西園寺公が代つてその後を襲つた。日露戦争が終つて統監府が設けられ伊藤が初代の韓國統監として赴任する時、西園寺內閣には加藤高明が外務大臣として要位を占め、統監府には鶴原定吉が總務長官として事實上の副統監であつた。さうして磯治子のお隣さんである木內重四郎が[illegible]のことは既に述べた通りである。處が世の中のことは却々註文通りには行か[illegible]しい勢力と舊い勢力とが入亂れて其衝突が頻々と起る。

內閣では鐵道國有案を中心として三菱系の加藤高明が舊自由黨系の閣僚と正面衝突をする。統監府では、兩者の緩衝地帶ともいふべき總務長官鶴原定吉の辭職をキッカケとして、三菱系の木內重四郎一派と、舊自由黨系の岡喜七郎一派とが火の出るやうな喧嘩を始める。

明治四十一年には彌之助が顔面腐骨症で歿し、明治四十二年には博文がハルビンで斃れ、政友會と三菱との間をシッカリと繋いで居た因縁の絆は一時に切つて放たれた。鐵道國有に反對して第一次西園寺內閣を辭去した加藤高明が、二度まで政友會內閣の毒殺を遂行したと噂される第三次桂內閣に外務大臣として現はれた時、大正の政變は爆發した。

三井と三菱、政友と同志、薩閥と長閥、海軍と陸軍、慶應と早稻田、天下の有りと有らゆる對立的勢力は、敵と味方とに分裂して[illegible]の巷に走つた。[illegible]の帝都に血を流した二箇師團[illegible]

設問題の燒打騷ぎは、翌年直にシーメンス事件に憤激して崛起した民衆の暴行によつて復讐された。三井物産の重役を三人まで珠數繋ぎにした軍艦金剛の建造に絡まる不正事件の暴露は、同じく二箇師團增設問題に絡む大浦事件の告發によりて復讐され、尙ほ飽足らずして、大正七年には京都府知事木內重四郎を府會議員買收事件の被告として獄裡に呻吟させた。

木內重四郎の起訴は事實、大正五年の冬京都府通常議會に於いて、木內が女子師範學校農林學校等の移轉に關する議案を通過させる目的で、私財を割き、直接に或は間接に府會議長、郡部會議長及び多數の議員を買收したといふにあつた。檢擧したのは京都地方裁判所の司法官憲で事の起りは七十幾通の多きに上る匿名の投書にあつた。固より司法權の範圍に屬することであるから、政權の移動に關係のあらう筈はないのであるが、時の內閣が大正政變以來、三菱に對して燃ゆるが如き復讐の念に驅られて居る政友會內閣であつたことは、後世史を談ずるものの、考慮の中に加へて置かねばならぬことであらう。

京都府の疑獄事件は、大正九年十一月三十日、京都地方裁判所の公判廷に於て木內氏始め被告人全部無罪を宣告せられ、木內は追訴事件によつて罰金五十圓に處せられた。

木內は公判で無罪の宣告を受けたけれども、七十七日の在監中に全くその心身の健康を害し、事件落着の後も、門を閉ぢ、一容を謝して、多く世に出でず、大正十四年一月九日心殘りの多い生を畢へた。それでも護憲內閣の成立を見たのは未だしもで、慾をいへば一家水入らずで成立した三菱內閣（大正十四年八月二日）の顏振れだけでも見せたかつた。重四郎の死後、間もなく磯治子もその跡を追つた。

（三）故早尾惇實——彌太郞の妾腹に富子（明治九年九月三日生）雅子（明治十四年十二月十八日生）の姉妹があつたことは前に述べて置いたが、其中姉の富子は明治三十二年二月、千葉縣山武郡大富村早船の人、早尾惇實に嫁いだ。早尾との緣は勿論同じ千葉縣人である木內重四郎が取持つたものである。

早尾はその帝國大學に學んで居た時から學校の成績が非常にすぐれて居たといふので、同縣人の木內に見込まれ、親しく木內邸に出入して居る中に富子さんの婿がねとして撰ばれたわけである。結婚後岩崎家から洋行させて貰ひ、歸國後、三菱合資會社の長崎支店長を勤めて居たこともあつたが、間もなく病死

した（[illegible]中）

（四）男爵、幣原喜重郎——氏は大阪府北河内郡門眞村の舊家、新次郎の二男で、明治五年八月に生れである。文學博士、幣原坦氏はその令兄に當る。明治二十八年帝國大學法科を卒業して翌年外交官及び領事試驗に合格し、仁川・倫敦の各領事館補・アントヴェルス・釜山の各領事・外務書記官・外務省取調局長・米國・英國各大使官參事官、・和蘭・丁抹兼任全權公使・外務次官・米國特命全權大使等に歴任し、大正九年勳功により特に華族に列し男爵を授けられた。翌ワシントン會議に全權委員として列席し、大正十三年護憲內閣の成立した時初めて外務大臣に任ぜられ、爾來引續き加藤內閣、若槻內閣に外務大臣の椅子に在り、昭和四年七月、現內閣が成るに及んで、四たび入つて外務大臣となり、現在に及んで居る。夫人雅子は彌太郎の女で、明治十四年十二月十八日生、今年五十歳である。氏との間に道太郎、重雄の二男がある。

（五）岩崎豐彌——氏は郷純造の五男で、現に財界の幡隨院長兵衛を以て目されて居る男爵、郷誠之助氏の弟である。郷純造には温（嘉永六年八月生）を頭として、次に誠之助氏（慶應元年一月生）次に破魔太郎氏、次に幸子（明治五年五月生）次に力三郎氏（明治六年十一月生）次に昌作氏（岩崎豐彌）明治八年一月生）次に舛氏（明治十年八月生）次に潔氏（明治十二年九月生）次に芳男氏（明治十三年十一月生）次に英子（明治十九年八月生）等の多くの子女があつた。右の中温氏は早く分家し、誠之助氏が嗣を繼ぎ、破魔太郎氏は愛知縣士族中島孝行に養はれ、力三郎氏は波多野承五郎の女、みね子（明治十七年四月生）を妻として分家し、昌作氏は岩崎彌太郎に養はれて豐彌と改め、長女幸子は川崎銀行の創業者川崎八右衛門の長男金三郎（慶應二年四月生）に嫁し、次女英子は大東海上保險の專務取締役、北川彦三郎氏に嫁して居る。

郷家は先代純造から現はれた。一體維新草創の功によつて華族に列し、爵位を授けられたものが數ある中に、神田男爵家と、郷男爵家とに關しては、その何が故に授けられた榮爵であるかを知らぬ人が頗る多い。最近物故した神田乃武氏の先祖が、神田孝平と云つて幕府の蕃書掛であり、次いで開成所の教授を命ぜられ、維新前後に於ける随一の新知識であつたことは、明治文化の研究などで、近頃若い人の間にも漸く知られて

設問題の燒打騷ぎは、翌年直にシーメンス事件に憤激して蹶起した民衆の暴行によつて復讎された。三井物産の重役を三人まで珠數繋ぎにした軍艦金剛の建造に絡まる不正事件の暴露は、同じく二箇師團増設問題に絡む大浦事件の告發によりて復讎され、尚ほ飽足らずして、大正七年には京都府知事木内重四郎を府會議員買收事件の被告として獄裡に呻吟させた。

木内重四郎の起訴は事實、大正五年の冬京都府通常議會に於いて、木内が女子師範學校農林學校等の移轉に關する議案を通過させる目的で、私財を割き、直接に或は間接に府會議長、郡部會議長及び多數の議員を買收したといふにあつた。檢擧したのは京都地方裁判所の司法官憲で事の起りは七十幾通の多きに上る匿名の投書にあつた。固より司法權の範圍に屬することであるから、政權の移動に關係のあらう筈はないのであるが、時の内閣が大正政變以來、三菱に對して燃ゆるが如き復讎の念に驅られて居る政友會内閣であつたことは、後世史を談ずるものの、考慮の中に加へ置かねばならぬことであらう。

京都府の疑獄事件は、大正九年十一月三十日、京都地方裁判所の公判廷に於て木内氏始め被告人全部無罪を宣告せられ、木内は追訴事件によつて罰金五十圓に處せられた。

木内は公判で無罪の宣告を受けたけれども、七十七日の在監中に全くその心身の健康を害し、事件落着の後も、門を閉ぢ、一容を謝して、多く世に出でず、大正十四年一月九日心殘りの多い生を畢へた。それでも護憲内閣の成立を見たのは未だしもで、慾をいへば一家水入らずで成立した三菱内閣（大正十四年八月二日）の顏振れだけでも見せたかつた。重四郎の死後、間もなく磯治子もその跡を追つた。

（三）故早尾惇實——彌太郎の姿腹に富子（明治九年九月三日生）雅子（明治十四年十二月十八日生）の姉妹があつたことは前に述べて置いたが、其中姉の富子は明治三十二年二月、千葉縣山武郡大富村早船の人、早尾惇實に嫁いだ。早尾との緣は勿論同じ千葉縣人である木内重四郎が取持つたものである。

早尾はその帝國大學に學んで居た時から學校の成績が非常にすぐれて居たといふので、同縣人の木内に見込まれ、親しく木内邸に出入して居る中に富子さんの婿がねとして撰ばれたわけである。結婚後岩崎家から洋行させて貰ひ、歸國後、三菱合資會社の長崎支店長を勤めて居たこともあつたが、間もなく病死

した。(前靜岡縣知事)

(四)男爵、幣原喜重郎──氏は大阪府北河内郡門眞村の豪家、新治郎の二男で、明治五年八月生れである。文學博士、幣原坦氏はその令兄に當る。明治二十八年帝國大學法科を卒業して翌年外交官及び領事試驗に合格し、仁川・倫敦の各領事館補・アンヴエルス・釜山の各領事・外務書記官・外務省取調局長・米國・英國各大使館參事官、・和蘭・丁抹兼任全權公使・外務次官・米國特命全權大使等に歷任し、大正九年勳功により特に華族に列し男爵を授けられた。翌ワシントン會議に全權委員として列席し、大正十三年護憲内閣の成立した時初めて外務大臣に任ぜられ、爾來引續き加藤内閣、若槻内閣に外務大臣の椅子に在り、昭和四年七月、現内閣が成るに及んで、四たび入つて外務大臣となり、現在に及んで居る。夫人雅子は彌太郎の妾腹で、明治十四年十二月十八日生、今年五十歲である。氏との間に道太郎、重雄の二男がある。

(五)岩崎豐彌──氏は鄕純造の五男で、現に財界の幡隨院長兵衛を以て目されて居る男爵、鄕誠之助氏の弟である。鄕純造には溫(嘉永六年八月生)を頭として、次に誠之助氏(慶應元年一月生)次に破魔太郎氏、次に幸子(明治五年五月生)次に力三郎氏(明治六年十一月生)次に昌作氏(岩崎豐彌)明治八年一月生)次に舜氏(明治十年八月生)次に潔氏(明治十二年九月生)次に芳男氏(明治十三年十一月生)次に英子(明治十九年八月生)等の多くの子女があつた。右の中溫氏は早く分家し、誠之助氏が嗣を繼ぎ、破魔太郎氏は愛知縣士族中島孝行に養はれ、力三郎氏は波多野承五郎の女、みね子(明治十七年四月生)を妻として分家し、昌作氏は岩崎彌太郎に養はれて豐彌と改め、長女幸子は川崎銀行の創業者川崎八右衛門の長男金三郎(慶應二年四月生)に嫁し、次女英子は大東海上保險の專務取締役、北田彦三郎氏に嫁して居る。

鄕家は先代純造から現はれた。一體維新草創の功によつて華族に列し、爵位を授けられたものが數ある中に、神田男爵家と、鄕男爵家とに關しては、その何が故に授けられた榮爵であるかを知らぬ人が頗る多い。最近物故した神田乃武氏の先祖が、神田孝平と云つて幕府の蕃書掛であり、次いで開成所の教授を命ぜられ、維新前後に於ける隨一の新知識であつたことは、明治文化の研究などで、近頃若い人の間にも漸く知られて

來た。

當時神田と並んで明治政府の財政的智嚢と呼ばれたものに郷純造がある。純造は美濃國黑野の人郷清三郎の三男で文政八年四月二十六日に生れた。幼名を嘉助といひ、明治元年徵されて會計官出納司知事となつたのが、任官の初めで、大藏少丞となり、大丞に進み、明治十八年の官制改革以來、四代の內閣に大藏大臣であつた松方正義の智嚢として財政の燮理に任じ、諸般の制度を定むる上に貢獻する所が大きかつた。世間に松方の功績として傳へらるる所は大抵純造の仕事である。その大藏次官であつた時、岩崎彌太郎が見て大にその手腕に服し、有り餘る程男の子が多い中へ、四男昌作氏を貰ひうけて、名を豐彌と改め、岩崎家で育て上げた事情に徵しても、當時純造の財政上に於ける勢力が如何に著大であつたかを知るべきである。

純造は明治二十四年貴族院議員に列せられ、同三十二年八月、錦鷄間祗候を仰付けられ、同三十三年五月、勳功により華族に列せられ、男爵を授けられて身まかつた。

豐彌氏を通じて、岩崎家と郷家との間に結ばれて居る緣の絲は、更に郷家と松方家との關係を通じ、松方家と後藤（象二郎）家との關係を二重に固く結びつけて居るわけである。何故となれば、後藤家と岩崎家との關係は姻戚關係を別にしても既に上來述べて來た如く、緊密なものであるからである。

(イ)**男爵、郷誠之助**——氏は郷純造氏の長男で岩崎豐彌氏の兄、現に財界の元締役として澁澤榮一氏、故和田豐治氏の後繼者を以て稱せられて居る。但し其元締役も、政友會が政界の壓倒的勢力として存在した間、換言すれば、三菱王國の財力を背後に負ふ民政黨が、その對立的勢力として確乎不拔の勢力を政界に占めて來るまでは驥足を伸す餘地のなかつたことも考へて見なければならぬ。勿論、郷氏の出馬は第十五銀行の破綻に際し松方家の舊誼に酬ゆる爲でもあり、同時に三菱の爲に盡す積りでもあつたであらう。それにしても、氏の人氣が一時に經濟記者の間に高まつて來たのは大正十四年第二次加藤內閣が成立してから後のことである。それほどの手腕あり、力量ある郷氏が、何故に大正の晩年に至るまで、一般的にはその存在さへも知られずに過して來たか。之は考へて見なければならぬことである。郷氏には定まる正室がなく、養子朝雄氏（明治二十五年九月生）に稻葉子爵家から英

子（明治三十五年七月生）を迎へて婿として居る。剛雄氏は父純造の九男である。

（ロ）伯爵、柳澤保恵——氏の養父、故、伯爵柳澤保申は舊大和國郡山（十五萬千二百八十八石）の藩主で、明治十七年伯爵を授けられた。保恵氏は子爵、柳澤光邦（越後黒川藩主—一萬石）の弟で、明治三年十二月を以て生れ、保申に養はれて、明治二十六年その家督を相續したものである。氏は明治二十七年學習院大學科を卒業して獨逸に留學を命ぜられ、ベルリン大學で、統計學、社會學、國家學等を専攻し、ストラスブルグ大學に轉じ、墺太利、白耳義に學び、現に本邦統計學界の權威として推され、中央委員會特別委員長で、英國欽定統計學院名譽會員、柳澤統計研究所總裁である。夫人秀子（明治十三年八月生）は、保申の長女であつたが、病死し、其妹悦子（明治二十年九月生）が醫學博士、朝倉文三氏に嫁し、同須賀子（明治二十三年十一月生）が、遠山景久氏に嫁し、同武子（明治二十四年八月生）が前記岩崎豐彌氏に嫁した。

（六）醫學博士、松山陽太郎——氏は岩崎彌太郎の庶子、康彌氏の夫人とし子の兄で、先代松山棟庵の長男である。彌太郎の子女中康彌氏と正彌氏とは双生兒で、明治十五年七月生れである。素性は明かではないが、明治の初年、彌太郎が、盛に活躍して居た頃、姉妹で岩崎家に召抱へられて居た姿があり、兩氏はその妹なる人の腹であると傳へられて居る。康彌氏は高等師範の附屬中學を中途退學して、駒込富士前の別邸に閑藝を事として居たが、明治三十九年九月、芝三田、松山病院の院長、松山棟庵の四女とし子を娶り、大正五年三月分家した。現在では東京毛布の取締役をして居る。陽太郎氏は明治六年四月を以て生れ、明治二十八年東京慈恵醫院醫學校を卒業後、獨逸に留學し、同三十三年歸朝して母校教授となり、大正十二年醫學博士の學位を授けられた。陽太郎氏及び其弟陸郎氏の醫界に於ける地位には、後藤、松方の兩家を通じ、岩崎家と二重の姻戚關係にある長與家の勢力が與つて居るやうに思はれる。

（七）能勢基章——能勢氏は岩崎正彌氏夫人、こま子（明治二十一年十一月生）の實家である。正彌氏は高等師範の附屬中學を卒業して、米國のモルガン大學に學び、歸朝後は久彌男の經營にかゝる岩手縣盛岡の小岩井農場を預つて居たが、今では

東京イー・シー・工業株式會社の常務取締役となつて居る。康彌氏と同じく大正五年六月分家して一家を立てた。能勢兆章氏はこま子夫人の伯父に當る。

『五』久彌氏をめぐる諸星座

男爵岩崎久彌氏は、彌太郎の長男で、三菱合資會社の現社長、男爵、岩崎小彌太氏の從兄に當り、慶應元年八月二十五日を以て土佐國安藝郡井口村に生れた。久彌氏が初めて教育らしい教育を受けたのは三菱商業學校である。此學校は三田の福澤先生の門下で、其後慶應義塾の塾長に擧げられたことのある岩下岩楠といふ人の創立したものである。岩下は、明治の初め、藩閥政府に對して燃ゆるが如き反感を抱いて居た舊和歌山藩士の一人である。人も知る如く舊和歌山藩は維新前後、陸奥宗光などを介して、土佐藩と特に親密な關係のあつたものである。岩下が岩崎彌太郎に用ひられて居たのはそんな關係もある。或る日、岩下はレオン・レヴイーの商業史を讀み、富豪グラハムが、私財を抛つて學校を創立したといふ條を讀むに及んで大に感激し、之を岩崎彌太郎に說き、商業學校を起させたものである。

彌太郎は此學校で自分の子弟を始め、將來三菱會社の柱石ともなるべき幾多有爲の人材を養成しようと目論んだ。久彌氏は先づ此學校で教育をうけ、次いでその後身である明治義塾に入つて勉強した。

三菱商業學校は初め神田錦町に設けられ、後明治義塾と改稱した。その創立には主として豐川良平が相談に與り、大石正巳、馬場辰猪などもこゝに教鞭を執つて居た。その明治義塾と改稱したのは、教師が多く福澤先生の門下であつた處から慶應義塾の姉妹塾と云つた心持であつたらうと想像される。

久彌氏は此學校で、十六歲から二十二歲に至る七年間、大石正巳氏を塾頭とする寄宿舍內に起臥し、一般學生と共に粗衣粗食に甘んずるの風を養成された。此間彼は自らその衣袴の破綻を繕ひ、日用品は自ら出でて之を市に求めるといふやうな、一般市民風の極めて簡素な生活に慣らされた。彼はまた一方で家庭教師デニングに就いて英語を學び、南摩羽峰、秋月秋緻などに就いて漢學を修めた。

かくして久彌氏は彌太郎の發作的な日常生活によつて醸され

た陰慘な、陰惡な、家庭の空氣からは隔離されて居たとはいへ、闘志そのものともいふべき豪傑彌太郎の子として似合はしからぬ、ハムレット型の細心な引込思案の人格は、何れほどかこの荒涼たる家庭の空氣に影響されたものと云はねばなるまい。

彼は明治十八年二月、父の死によりて家督を相續し、翌十九年二十二歳にして米國に遊學し、ペンシルヴアニア大學に入つて研鑽六年、明治二十五年、バチエラー・オブ・ローの學位を得て歸朝し、叔父彌之助の譲りをうけて三菱會社の社長となつた。父彌太郎の勳功により華族に列し、男爵を授けられたのは明治二十九年のことである。大正六年三菱合資會社々長の椅子を從弟小彌太氏に譲り、業務擔當社員の地位に退いた。

夫人寧子は舊上總國飯野の藩主、從五位子爵保科彈正忠正益の長女である。明治七年五月九日に生れ、明治二十五年華族女學校を首席で卒業した。寧子さんは當時同窓間に評判の美人であつた上に、成績も拔群であつたので、持する所も非常に高く、日本一の金持か、大臣になるほどの男でなければ夫に持たぬと云つて居たものださうである。

一體岩崎家は嫁を迎へるにも、婿を取るにも是まで學校の成績を標準にして選擇した形跡がある。加藤高明、木内重四郎、早尾惇實、幣原喜重郎氏など皆それである。婿にはなり損ねたが、増島六一郎氏もその一人である。婿たることを拒絶したが、崎川才四郎もその一人である。一體學校の成績を標準として人物を選擇するといふ方法は、大過なきを期する上には大へんよいことであるが、その人間に積極的の業績を望むことはむづかしい。岩崎家もそれでは相當、苦い經驗を嘗めて居る筈である。

それはそれとして保科寧子さんは確に岩崎男爵夫人として恥かしからぬ才色兼備の女性であつた。

久彌氏と寧子夫人との間には彦彌太氏（明治二十八年九月生）を頭として、隆彌（明治二十九年十二月生）恆彌（明治三十一年五月生）美喜子（明治三十四年九月生）澄子（明治三十六年二月生）綾子（明治四十一年七月生）等の諸子女がある。その中で最近隆彌氏が池田成彬氏の女としい子を迎へて婦とし美喜子が鳥取縣人澤田廉三氏に嫁して居る。（註の三）

（一）子爵、保科正昭——氏は岩崎久彌氏の夫人寧子の弟で、

明治二十一年父正經の死によりて家督を相續した。正經は嘗て上總國飯野（二萬石）の藩主で、祖先は信濃源氏で代々伊那郡に住み、彈正忠正俊の時に至り武田信玄の被官となつた。正俊は槍彈正として驍名を馳せた。正俊の子正直の三子正貞が上總の飯野に封ぜられ、七代を經て正經に至つた。正昭氏は即ち正經の三男で初名を盛之助といひ、明治十六年十月を以て生れ明治四十二年東京帝國大學理科大學鑛物學科を卒業し、主殿寮、帝室林野管理局御用係、朝鮮總督府技師等に歴任し、大正九年農商務省鑛山局技師に任ぜられたが、幾もなく退官して現在に及んで居る。夫人武子（明治二十三年三月生）は、北白川宮永久王の御叔母君である。保科家は此關係から、竹田宮家と縁戚の光榮を負うて居る。

(イ)伯爵、佐野常羽——氏は岩崎久彌夫人寧子の妹倘子（明治九年九月生）を妻として居る。佐野家は謠曲で人に知られて居る佐野源左衛門常世の後である。常世十四代の孫常貞が、鍋島家に仕へ、代々相續へて先代常民に至つた。常民は嘉永五年藩命により、海軍編輯、汽船建造の事務を管し、夙に歐洲の事情に通じた。後、西洋諸國の商工業を視察して歸朝し、農商務大臣、樞密顧問官等に歴任し、日本赤十字社の社長に擧げられた。明治十七年子爵を授けられ、同二十八年伯爵に陞された。氏はその三男で明治四年七月を以て生れ、同三十四年家督を相續した。現に海軍少將である。

(ロ)侯爵、小松輝久——侯は故北白川宮能久親王の第四子で、明治二十一年八月を以て御誕生遊ばされ、明治四十三年七月請願により一家を創立し、小松の姓を賜はり、侯爵を授けられた。保科家に御降嫁遊ばされた武子女王は侯の御妹君にて在した。侯の夫人薫子は、公爵島津忠承の姉で男爵、岩崎小彌太氏の夫人、孝子と同一門の出である。

(ハ)伯爵、上野正雄——氏は小松輝久侯の御弟で、明治二十三年七月を以て生れ、同三十七年華族に列し、伯爵を授けられた。現に海軍大尉である。夫人恵以子（明治二十七年一月生）は伯爵伊達興宗の叔母である。

(ニ)伯爵、甘露寺受長——氏は甘露寺義長の長男で、明治十三年十月を以て生れ、大正六年家督を相續した。明治四十一年東京帝國大學法科を卒業し、嘗て東宮侍從であり、現に侍從の職にある。夫人滿子（明治十八年十月十九日生）は[illegible]

川宮能久親王の第一王女で保科正昭夫人の御姉君に當る。

（ホ）伯爵、二荒芳徳――氏は侯爵伊達彰の叔父で、明治十九年十月伊豫國宇和島に生れ、同四十二年先代故伯爵二荒芳之の家督を相續されたものである。大正二年東京帝國大學法科を卒業し、靜岡縣の理事官となり、同六年歐州に遊學し、同十年東宮御外遊に供奉した。夫人擴子（明治二十八年五月生）は北白川宮能久親王の第五王女で保科正昭夫人の御妹君に當る。

（ヘ）有馬頼寧――氏は伯爵有馬頼萬の長男で明治十七年十二月を以て生れ、同四十三年東京帝國大學農科を卒業し、同農學部助教授、農商務省囑託等を經て大正十三年には福岡縣から推されて衆議員議員に當選したことがある。氏の夫人貞子（明治二十年八月六日生）は北白川宮能久親王の第二王女で、頼寧氏を助けて熱心にその社會事業に盡力して居られることは人の善く知る所、保科正昭夫人の御姉君に當る。

（『六』彌之助系の諸星座。『七』小彌太氏をめぐる諸星座、をもつて次號完結）

ソウエートロシアの無指揮者交響樂團

――ペルスイムファンスの誕生とその意義――

中根弘

ソウエート聯邦の藝術界に於ける各分野を通じて、マルクシズムを基調としたプロレタリアート藝術運動の最も顯著な現れは、文學や演劇や映畫に最も多くこれを見ることを得可く、本質的の意味に於ける音樂藝術の世界に於て最も稀薄であるといふ事實は、音樂藝術そのものの有する特異性に徴してむしろ當然の現象であるかも知れない。

但しこの場合の稀薄といふ言葉は、文字通り他の藝術に比してあまり濃厚でない現狀の形容であつて、決して貧困とか不可能を意味するものでない。ソウエート當事者は新しい社會組織、新しい生活のため當然そこに生れて來なければならない新しい音樂を創り出すことに營營の努力を續けて居る點、他の藝術の場合と變りはない。たゞこの藝術の特異性が、他の藝術の場合に於けるやうた目ざましい躍進をゆるさないだけのことである。新しいソウエート舞踊、新しいソウエート歌劇はすでにその新鮮な姿を見せてゐる。彼等の大衆の音樂化運動は色々の方面にすばらしい展開を示して居る。音樂に對する五ケ年計畫は、作曲、演奏、樂譜出版、樂器製作の各目標に向つて、當初のプラン以上の速度を以て實際にすゝめられつゝある。

然らば何を以て稀薄だといふか。それは、從來音樂藝術の本質的價値の基準となつて來た純音樂――絶對音樂を如何に處分するかといふ最後の問題が未解決であるからである。

『在來の純音樂の中樞を成すところの高踏的な室內樂や交響曲は、プロレタリアートを中心とする社會組織には不必要だ。それは過去の貴族藝術の代表的產物に過ぎない。モーツアルトやベエトホヴエンを捨てろ!』といふ聲をわれ〳〵は聞かぬでもない。

しかし、現下のソウエートの樂壇では、ベエトホヴエンを既に演奏



ペルスイムフアンスの練習（洋琴獨奏者はプロコーフイエフ）

してゐる。

室内樂や交響曲の演奏は非常にしば〳〵行はれてゐる。

この現象は『われわれは出來得る限り舊文化を研究することを以て義務とせねばならぬ。然らずんば前進は思ひもよらぬ』プロレタリア文化は或る天才プロレタリアの出現によつて突然創られるものでなく、文化遺産をばわがものとしそれを批評的に改變することによつてのみ、ほんたうに成長せしめることが出來る』……といふレーニンの言葉が特に音樂の場合に於て最も適應されねばならぬことを實際に物語つてゐる。

新しいプロレタリアート音樂の完成は舊文化の遺産を檢討する若干の準備期間を當然必要とする。その期間は他の藝術に比して特に長い。そして今がその期間の最中である。

やがて間もなく、彼等自身の手に成つた彼等自身の新しい交響曲や室内樂が生れるに違ひない。

◇

が、こゝに注目す可き一つの重大な事業の完成がすでにわれ〳〵に示されてゐる。

それはペルスイムフアンス（無指揮者交響樂團）の發生とその輝かしい進展である。

ペルスイムフアンスの出現は、實に世界の音樂演奏史上に、全く前例のない一の大きな時代を劃した。音樂演奏史上に成就されたこれほど大きな革命は、全く他にその例を見ない。

『ペルスイムフアンス』の誕生―この一の偉大な事業の完成運動は、

ソウエートの藝術戰線に在つていささか立おくれの感がするといはなければならない音樂陣に於ける最尖端を行くものであるのみならず、それは他のあらゆる左翼藝術運動に比して最も尖銳化されたユニークなものであることを忘れてはならない。

◇

近代交響曲の演奏は、十九世紀から二十世紀に輩出したヨーロッパの交響曲作家のすぐれた多くの作品の影響をうけて、著しい進歩の跡を見せた。ベルリオーズが理想とした夥しい樂員を要する馬鹿馬鹿しく老大な管絃樂團は竟に實現されなかつたとしても、今日の標準的な常設交響管絃樂團は最少八十人から百五十名に近い樂員とこれに必要な多種多樣の管絃樂器、打樂器を要求するのを常としてゐる。

これらの交響樂團の演奏は、原則として一人の指揮者の指揮の下に行はれる。近代交響曲の演奏に於て、多くの樂員の合奏を統整指導する指揮者の存在は、もはや動かすことの出來ない定則となつた。

指揮者は原曲に對する自己の解釋に基き、銳敏な感覺、豐富な智識と經驗、正しい理解等を以て多數の樂員を誘導し、多種多樣の樂器の個性を失ふことなしに、これを自由に指揮することによつて、渾然たる一のきはめて有機的なアンサンブルを完成する。……

この場合、樂員は全然指揮者の命令通りに動かねばならぬ。如何なる大家でも如何なる名手でも自己の主觀、自己の個性の發揮は絕對にゆるされない。たゞ各自の所有する技術を通してその擔當する樂器の個性を樂譜に從つて指揮者の意思と感情通りに表現することのみがゆるされる。即ち百人にあまる樂員は、宛然一箇の『生きた樂器』の集合體であると見ることが出來る。

交響曲の演奏は、原作曲者が五線紙上に書き遺した樂譜を基調として指揮者の頭と胸を通して、初めて現實的な音樂として實現される。——即ち、指揮者は百人から成る『生きた樂器』の演奏者であり、同時に、交響曲の演奏は、指揮者の演奏であり、藝術的表現であるといふことが出來る。

かくして、交響曲演奏の場合に於ける指揮者の職能と地位とは、絕對專制的であり、純然たる一の英雄的存在となつた觀がある。

われ〳〵は、近代交響曲演奏の世界的市場に、多くの『英雄的存在』を識つてゐる。彼等の多くは、音樂者としてすぐれた天分、深遠な智識、豐富な經驗の所有者である。同時に、彼等はその裏面に於て多くの場合社交界に對する敏捷な技巧と手腕、管絃音樂團の樂員に對する懷柔策や機嫌とりの人知れぬ苦心を要するとはいへ、外面的な人氣と勢力は實にすばらしいもので、到底作曲者流のそれとは同日の比でない。

一度名を成した指揮者の地位こそは正に樂壇の王者である。彼等の名聲は演奏會にレコードの吹込に、忽ち全國的となり世界的となる。

然らば何が指揮者をかくまで華々しい地位に向上させたか。

それは音樂が作品として五線紙上に印刷されただけでは實在の音樂に成らないからである。特に交響曲の場合に於て、作曲者が如何に五線紙上に巧妙な樂器と音響の構成、複雜な主題の取扱ひを企圖しても、所詮指揮者の手にかゝらなければ、その作品は音樂として永久に存在しないからである。音樂に於ける演奏が實にその作品以上のすばらしい魅力と強大な權威をもつ所以である。

◇

ペルスイムファンス誕生の意義は、近代交響管絃樂の演奏に於て、かくの如く重要視される指揮者の存在を否定することにある。

即ち、交響曲の演奏をして、唯一人の指揮者の演奏に了らしめる更りに、それを交響管絃樂團そのものの演奏たらしめること、――彼一人の演奏を彼等一同の演奏たらしめることにある。

ペルスイムファンスは、指揮臺上の英雄の存在を無視する更りに、演奏上の成功と失敗の責任を直接に彼等自ら擔當し得るところの彼等自身の演奏を實行して、今日に到つて居る。

以下にその發生の過程とその實體について紙數のゆるす範圍の紹介を書く。――



ペルスイムファンスの創立者提琴家エル・ツエトリン教授

ペルスイムファンスは第一交響合奏團（First Symphonic Ensambl）の露語の略稱である。その誕生は、一九二二年二月十三日、モスクワ職業組合圓柱講堂に於ける第一回公開演奏の記念す可き日、ツエイトリン（國立音樂院提琴教授）、タバーコフ（トランペットの大家）、スターネク（フアゴットの大家）の三人の音樂者の創設にかゝるものである。

指揮者無しの交響曲演奏は、可成り以前からロシアに於ける一部の音樂者及び音樂學者によつて考へられてゐた。提琴家ツエイトリン教

授はその中心的存在であつた。一九一七年の大革命によつて彼等の生活組織が變つた。同時に革命の爭亂や國内戰、相繼いで起つた大飢饉のために國民の生活は極度の困窮に襲はれたため、ロシアの有名な藝術家の多くが外國に去つた。モスクワの管絃樂團は代表的の指揮者を失つた。革命後一九二二年までモスクワにゐた有名な指揮者クセヴイツキーも遂に外國に去つた。(クセヴイツキーの後にはエミイル・クーペル一人が殘つた)モスクワの三大交響管絃樂團、タセヴイツキー、フイルハアモニー、大劇場管絃樂團の數百人のすぐれた樂員達は、數人の指揮者を失つたばかりに正式の練習も演奏も出來ない立場に陷つた。數人の指揮者の不在のために、數百人の第一流樂人が仕事をすることが出來ない。……

ペルスイムフアンス誕生の動機の一はこゝにあつた。

ツエイトリンは、同志タバーコフ、スターネクと相圖つて、こゝに音樂史上前例のない無指揮者交響樂團の創立に着手した。

一九二二年二月十三日、職業組合圓柱講堂及び二月二十日國立音樂院大講堂に於ける第一回第二回公開演奏の豫告ポスターがモスクワ市中に突然貼り出された時のセンセーションは非常なものであつたことはいふまでもない。この記念す可き最初の公開演奏はベエトホヴエン・プログラムで序曲『エグモント』作品六十二の提琴協奏曲、交響曲第三『英雄』で、提琴獨奏はツエイトリンが擔當した。

この最初の公開演奏の際には、未だペルスイムフアンスの名稱は附されず、國立アカデミツク大劇場管絃樂部員(舊クセヴイツキー交響樂團員を中心とした)による無指揮者交響管絃樂團第一回公開演奏として發表され、人員は第一提琴ツエイトリン以下五十六名であつた。

第一回第二回の公開演奏は意外の好成績に終るし、その支持者を狂喜させたことはもちろん、反對論者をも驚嘆させた。これに力を得た彼等は、同年六月十九日に第三回(チヤイコーフスキー・プログラム)を、六月二十六日に第四回(リームスキイ・コルサアコフ・プログラム)、……と回を重ねて秋のシーズンに入り十二月三十一日の國立大劇場に於ける特別演奏會を經て翌一九二三年二月十三日の創立第一週年記念音樂會までに四十一回の定期演奏會を開き、十回の特別演奏、夏季の屋外演奏等を併せて實に一年間に八十四回の公開演奏會を開き、バハ、ベエトホヴエンからシトラウス、ドウビユツスイー、スクリヤービンに至る古今の大家の代表作演奏に至上の藝術的效果を擧げた。

◇

かうして、彼等は幾多藝術上、經濟上の困難に遭遇しつゝ、それに打ち克つて益々結束し牢固たる集團を形成して人員を増しその演奏を續け、一九二五年三月二日には創立三周年祝賀演奏として反對論者から

疑問とされてゐたベエトホヴエンの第九交響曲（合唱附）を指揮者無しで見事に演奏し、一九二七年二月十四日には國立大劇場で創立滿五週年祝賀演奏を催し、席上ソウエート人民委員會から『共和國功勞藝術團體』なる集團として最初の稱號を贈られた。

この五ケ年間に於ける彼等のペルスイムフアンスイズム運動に對する努力は實に驚く可きものがあつた。最初の一年から彼等は極度の經濟的難境に在つた。當時の極度に低下したルーブル相場は無價値に等しいものであつた。（場席券一枚三十萬留から二百四十萬留をとつても彼等の收入は殆ど皆無であつた）二回の練習と一回の音樂會で九十七カペークだけにしかならないこともあつた。モスクワの恐ろしい寒さの中を、暖房裝置無しの練習所と會場で、彼等は防寒外套を着たまゝで練習し、公開演奏をやらねばならなかつた。彼等は一章の演奏が終る度毎に、長い間自分の體温で凍てた手を暖めなければならなかつた。防寒外套にくるまつた熱心な聽衆の身邊には吐く息が白く棚引いた。

彼等は生活費を得るために、フイルハアモニーの演奏や國立大劇場の管絃樂部に參加した。日曜日の午前十時から十二時までペルスイムフアンスの練習、一時から四時までフイルハアモニーの演奏、午後四時半から六時半まで革命劇場に於けるペルスイムフアンスの演奏會、夜の八時から十一時まで大劇場に於けるオペラやバレーの上演參加。――世界にこんな激しい勞働を長時間に亘つて續け了せた音樂家がゐるだらうか。しかも彼等は一日の勞働を了へてから、もう電車も通はない深夜の凍てた街路を重い樂器を抱へて遠い家路に歸らねばならなかつた。この怖ろしい窮迫と苦難の中でさへ、彼等は勞働者のためにしばしば無料演奏會を開いた。

創立一週年祭の時には、過る年餘の苦闘の結果、重い病を得た創立者ツエイトリンはギブス・コルセットを身につけたまゝ病床から壇上に起ちベエトホヴエンの提琴協奏曲の演奏を見事やつてのけた。

◇

ペルスフイムフアンス誕生の當初は、ソウエート内にも多くの反對論が起つた。まして外國の音樂界には幾多の批難の聲が起り、その成功を否定した。しかし一度彼等の堂々たる合理的な無指揮者演奏を聽いたものは、何れもその見事な演奏振りを讃嘆した。

多くの反對論者の否定したところを總括して見ると、要するに指揮者なしの演奏は不便であり至難であるといふにとゞまり、どれも不可能といふ結論には達してゐなかつた。

事實、彼等は多くの不便と至難に直面した。しかし彼等の何物をも貫徹する熱意は竟にこれら幾多の支障や苦難を排して竟に五ケ年間に前例のない大事業を達成した。

彼等はこれらの困難と闘ひながらその間に驚く可き愼重な研究的態度を採つてその練習を續けた。創立第一年の秋には代表者ツッケルを獨逸に派遣して、彼地に於ける世界的に著名な指揮者の下に演奏される第一流の樂團の演奏を比較研究させた。またフイルハアモニーがモスクワに招いだオツト・クレムペラーその他の大指揮者の演奏に親しく參加してその比較研究をすゝめた。そして理論的に實際的に無指揮者演奏のすゝむ可き道を決定した。彼等はまたプロコーフイエフ、以下内外の著名な獨奏家を招いで、無指揮者演奏（ペルスイムフアンスの伴奏の下に）をしば〲行つた。

第一回演奏の曲目練習を十一回も行つた彼等は、漸次その演奏法樂器配列法に研究を加へ、二回の練習でスタリヤービンの『法悦』や『火の詩』を容易に演奏出來るやうになつたのである。

『各自は各自相互と全體を、全體は各自相互を聽かねばならぬ。しかも各自と全體は一瞬時も無活氣狀態に在ることはゆるされぬ』……

これが彼等の演奏上の法律である。

『協同の精神、集團の意識がよく訓練統一され徹底され、集團の機能が協同の運動となつて、そこに集團の反映——集團の力が現れた。』……それが百四十人のすぐれた樂人から成るペルスイムフアンスである。

——（一九三〇、九、二一）——

新刊紹介

◇**開國秘譚**　池長孟著。明治初年の神戸を舞臺とした長篇戲曲。隨筆紅熱錄を添ふ。（大阪市東區備後町一ノ三弘文社・價二圓）

◇**プロレタリア短歌集**　短歌前衞社編一九三〇年版。（東京小石川小日向臺町一ノ五一（マルクス書房・價四十錢）

◇**井上藏相の錯覺**　武藤山治著。（東京牛込天神町六　東洋經濟出版部・價三十錢）

◇**骨**　杉江重英詩集。（東京神田區表猿樂町二五天平書院・價一圓）

◇**世界プロレタリア映畫物語集**　新興映畫社編の主としてソヴエート映畫物語集。（東京京橋築地三築地ビル世界の動き社・價一圓）

◇**釣りと魚**　佐藤惣之助著・釣魚隨筆と詩。（東京小石川目白臺武藏野書院・價五十錢）

◇**抗爭**　美木行雄著プロレタリア歌集。（本鄕森川町一紅玉堂書店・價五十錢）

◇**貨幣の意義**　ウヰザース著・岩田百合治譯・金融の基礎知識を修得せんとするに手頃の書。（東京牛込早稻田大學通り廣文堂書店・價一圓五十錢）

◇**七部集[illegible]**　校註俳文學大系の第十二卷で本卷で同大系十二卷豫約配本完結。（東京下谷區上野櫻木町五〇大鳳閣書房）

◇**庭と木**　室生犀星著・庭と木を中心の許に庭と木を眺めてゐるやうな小品隨筆集。（東京小石川目白臺武藏野書院・價六十錢）

◇**口語六法**（民法篇）　吾孫子勝・水谷幸二郎共著・六法中先づ現行民法を口語に意譯し術語や特殊用語には註釋が施されてゐる。（東京京橋銀座西一ノ三實業之日本社・價二圓）

プロレタリア短歌運動の陣容

渡邊順三

一

一九二八年十一月結成された「新興歌人聯盟」は、既成歌壇の封建的因襲に對する自然發生的な反逆者の集團であり、謂はゞプチ・ブル的自由主義者の集りであつたことは、當時聯盟が掲げてゐたスローガンを一瞥すれば何人も首肯くことが出來る。果然「新興歌人聯盟」の發會式に臨んだもの丶中の急進分子は、その掲げるスローガンの生温さにあきたらず、聯盟成立と同時に脫退を聲明した。脫退組は大塚金之助、伊澤信平（新アラヽギ）、渡邊順三、淺野純一、會田毅（藝術と自由）坪野哲久（ポトナム）石塚英之助（青垣）等であり、これらは卽時「無產者歌人聯盟」を組織し、雜誌「短歌戰線」の發行を計劃したのである。

雜誌「短歌戰線」は一九二八年十二月創刊號を出した。中村孝助、岡部文夫、井上義雄等は「短歌戰線」發刊前後に於て聯盟に加入してゐる。この「無產者歌人聯盟」の結成はプロレタリア短歌運動の具體化した最初の團體であり、正にわが短歌史の上に特筆さるべき出來事であつたのである。「短歌戰線」一九二九年五月號は發禁の厄に會ひ、そしてそれと同時に廢刊された。一方當時の歌壇にあつて、次第に左翼的な傾向に進みつゝあつた雜誌に、田邊駿一夫妻の「黎明」があり、更に「新興歌人聯盟」を解散して新らしく雜誌「尖端」を發行した石榑茂、前川佐美雄、五島美代子等があつた。一九二九年六月、以上三誌の代表者の會合が行はれた結果、急轉直下三誌の合同が成立し、こゝに現在の「プロレタリア歌人同盟」が組織され、輝ける「短歌前衞」は同年九月その第一號を世に送つたのである。

二

「プロレタリア歌人同盟」の結成は、既成歌壇に對して異常なセンセーションを捲き起したことは云ふまでもない。そして我々の運動主張に對して、彼等既成歌人が意識的な惡罵嘲笑、あらゆるデマゴギーを飛ばしたことも云ふまでもない。しかも彼等の惡罵や嘲笑は畢竟彼等の階級的立場を曝露し、如何に彼等歌詠み人種は現實の社會狀勢に對して無智であり、歷史の發展に對して盲目であるかを自白してゐるに過ぎない。試みに歌壇の所謂大家と稱する人々、例へば齋藤茂吉、北原白秋

太田水穂、佐々木信綱等々、そしてそれらに追隨する凡百の既成歌人共の夥しき作品を見よ。どこに我々の當面する一九三〇年の現實の世界があるか。

現在我々の當面する客觀的狀勢は、資本主義第三期の最後的恐慌の發展、それに伴ふ×××××××××、資本家本位の產業合理化による失業者群の驚くべき增加、農村に於ける貧農階級の絕望的な貧窮化等々、これを一言に云へば資本主義の矛盾の激化による階級對立の尖銳化、それに從つて×××××××著しき發展成長である。この現實の世界に全然無關心である——或はあらうとする既成歌壇人は、百年一日の如く短歌は「もののあはれ」であり「寂び」であり「幽玄」であり「靜けさ」であると云ふ。彼等の云ふ短歌的なるものとは、要するに、個人的な詠嘆であり情趣であるに過ぎない。そしてこれらの詠嘆や情趣は、斷じて新興階級[illegible]產大衆の意識感情ではあり得ない。

我々の解するところによれば、從來の短歌形式は、畢竟封建的イデオロギーの所產に相異ない。即ち舊短歌は、封建的遺制に花咲く古典的藝術であり、かくて我々によつて嚴しく批判され、揚棄せられる對象となるものなのである。短歌も他の藝術と同じく、一の社會的歷史的生產物として理解する我々は、當然短歌形式の歷史的限界性を主張する。即ち内容の變革は同時に形式の變革を餘儀なくし、新らしい内容は必然にそれに相應した新しい形式を生み出す。從來の所謂短歌的なるものとは根本的に異るプロレタリア短歌は、當然三十一音の短歌形式を破壞すべきであつて、そこにこそ短歌の歷史的な發展が約束されるのである。

一切のものが流れ動き、發展變化する中にひとり短歌だけが未來永劫變化することのないものと幻想する既成歌人は、次第に社會から隔離され、現實を遊離し、固定した觀念世界に靜座して、只管風流三昧に耽溺してゐる。それらの歌人によつて制作される短歌なるものは、全然時代性を失つた枯死的な存在であり、傳統の惰力によつて殘存する骨董品に過ぎないのである。結局既成短歌は時代と共に歷史の彼方へ沒落する運命を負ふものに他ならない。

三

「短歌前衛」の初期に於いて、短歌の特殊性定型律短歌形式の歷史的限界性、プロレタリア短歌の形態問題等を課題として、既成歌壇の批判檢討に努めたものに、伊澤信平、會田毅井上義雄、それに雜誌「まるめら」から加盟した浦野敬等がある。又優れた作家としては、田中一郎、田邊一子、淺野純一、坪野哲久、等を記憶しなければならない。「短歌前衛」は號を逐うて次第に初期的な誤謬と曖昧さとを清算し、眞にプロレタリア藝術運動の一分野

としての短歌運動の正しき方向へと成長した。

　プロレタリア短歌運動の著しい發展成長は既成歌壇に未曾有の混亂動搖を發生せしめ、各結社内の尖鋭分子が、次第に我々の陣營に移行するに至つた。その主なものは、林田茂雄、南正胤、美木行雄、室町三郎、南信乃、等々を數へることが出來る。しかもこの他に既成短歌に對しては何らの興味も關心も持ち得なかつた勞働者農民の中から、無數の優れたプロレタリア短歌作者を生み出したことは云ふまでもない。

　プロレタリア歌人同盟の成立後二三ヶ月にして、楠田敏郎がその主宰した雜誌「文珠蘭」を解體して「新興短歌聯盟」なるものを組織し、機關誌「新興短歌」を發行した。我々の歌人同盟に對立する如きこの存在は、しかし何等對立の理由はなく、我々の理論的發展の後に追隨してゐたに過ぎなかつた。このことは我々の解するところによれば、プロレタリア短歌運動の飛躍的な發展に對して、楠田敏郎がジャーナリストとしての敏感さから、單に流行を追ふ心理から、プロレタリア的な結社を組織しただけであつて、楠田敏郎自身には、何等の階級的な意識もなく、プロレタリア短歌運動に對する正しい理解もあつたのではないのだ。云ふまでもなく、プロレタリア短歌運動に對する正しい理解があれば、既に嚴として存在した歌人同盟——事實に於て正しくプロレタリア的な方向への歩武を進めつゝあつた歌人同盟を無視して、對立的な組織を持つなどといふ誤りは犯さなかつた筈だからだ。そして彼の馬脚は間もなく曝露されてゐる。それは彼に非階級的な行爲があつたといふ理由で、新興短歌聯盟を脱退するの餘儀なきに至り、彼を脱退せしめた聯盟は、其後歌人同盟に合流した。その主な人々は、佐藤松平、正賀滋、山口博、杉本覇等の諸君である。

四

　資本主義第三期の一般的狀勢の變化に伴つて、我國藝術運動の戰線にも著しい方向轉換が行はれてゐる。このことは最近のナップの××××××化の傾向によつて知ることが出來る。このナップの××××××化の方向は、後れ馳せながらわが短歌運動の上にも反映して、歌人同盟内部の自己清算が果敢に行はれ、從來の日和見的、社會民主々義的傾向を克服し、××××××短歌確立の問題が具體的に論ぜられてゐる。この短歌運動の方向轉換へのよき示唆を與へた理論家として淺野純一、由比正道、林田茂雄等を擧げなくてはならない。

　從來プロレタリア短歌に對するよき理解者であり、よき支持者であるかの如く思惟した人々が、近來の急激な左翼化への發展の過程に於て、到底我々に追隨することが出來ず、

次第に脱落してゆく幾人かの歌人がある。楠田敏郎、丸山芳良などをその中に數へることが出來る。そればかりでなく、曾てはプロレタリア短歌運動の先驅的な役割を成した人々の中からも、次第に右翼的傾向への沒落者を見出すことが出來る。前川佐美雄などこの著しい例であらう。だが、かくして我々の陣營は漸次曖昧な分子を清算し、眞に正しくマルクス＝レーニン主義の道へと歩武を進めつゝあるのだ。プロレタリア短歌運動の主體であり、勿論唯一の存在であるプロレタリア歌人同盟は、質的にも量的にも近來急速な成長を遂げつゝある。このことは又當然「短歌前衞」の上に彈壓の手が伸び、三、五、六、七、九月號と文字通りツルベ打の發禁に見舞はれてゐる。だがこのことは決して我々の運動を挫折せしめることにならないのみか、却つて運動の擴大强化に役立つであらう。

大熊信行を盟主とする雜誌「まるめら」は所謂新興短歌運動の發生期に於て、啓蒙的な役割を果してゐる。大熊信行外遊のあとを繼承する浦野敬は、わが歌人同盟に緒を有するものであるが、近來何等の理論的發展を見ずやゝ低迷するかの如く見えるのは如何なる理由によるか？　更に石川啄木、土岐善麿を繼承して、所謂生活派を主張した西村陽吉は、このごろアナキズム短歌（！）へと轉換してゐるが、これはかの新藝術派短歌などゝ共に沒落するプチ・ブルジョアのイデオロギーを反映したものであつて、無論プロレタリア短歌運動として取扱ふべきでない。この他プロレタリア的な歌論をなすものとして、逗子八郎、安田義一、井手逸郎等があるが、いづれも單なる理論のための理論家であり、事實に於て大衆と有機的に結びついてもゐなければ、具體的現實の上に足をおろしてゐるのでもない。要するに書齋派的なインテリに過ぎないのだ。

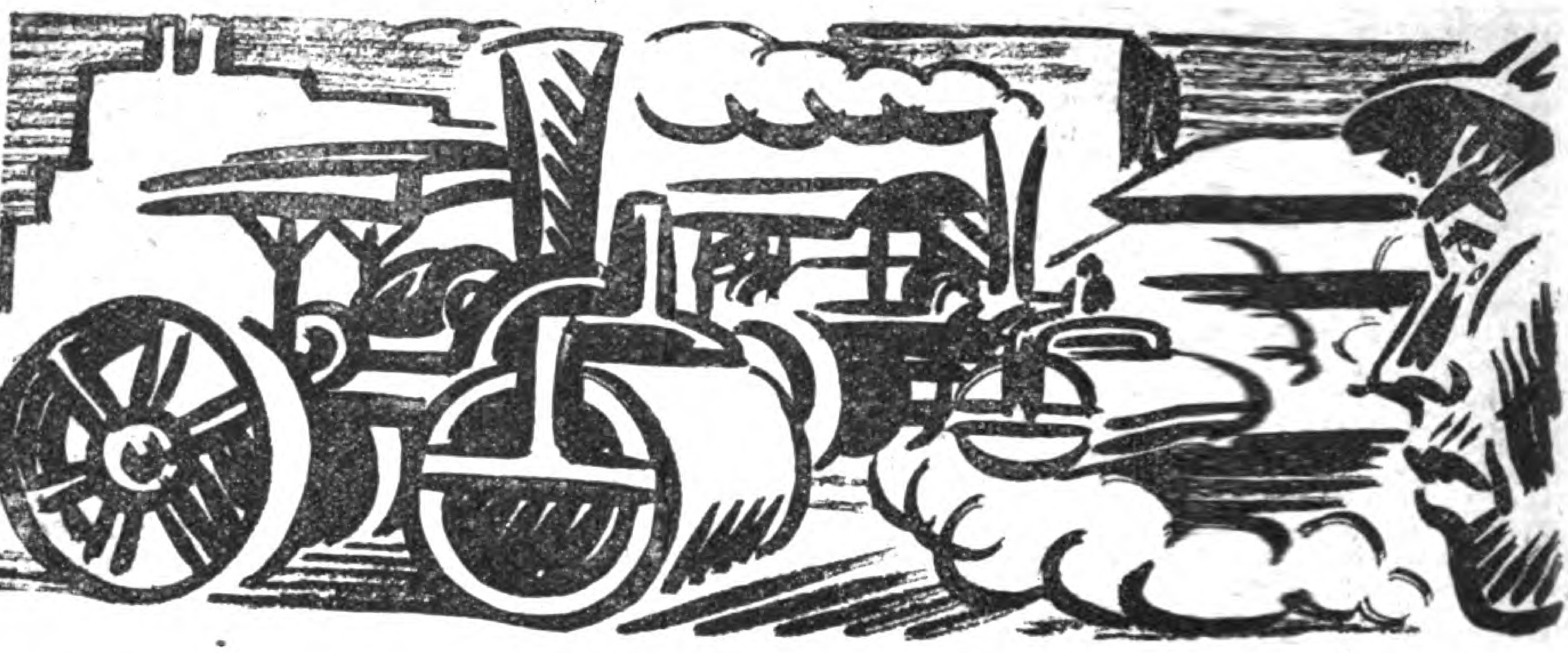
かくてプロレタリア短歌運動は、歌人同盟を主體として今後益々廣汎な全プロレタリアートの闘爭に結びつき、眞のプロレタリアートの短歌、即ちマルクス主義的短歌の確立へと積極的な努力がつゞけられるであらう。

（一九三〇、八、六）

五

プロレタリア短歌運動の全陣、我が歌人同盟によつて固く結束されてゐる。坪野哲久、田中一郎、南正胤、南信乃、赤石茂、山根秀一、小原猛雄、等々は最近に於て優れたるプロレタリア歌人として注目さるべきであり、理論家としては、林田茂雄、室町三郎、伊澤信平、高橋福次郎、浦野敬等々多士濟々といふ可きだらう。佐藤松平、正賀滋、杉本翺、宮城研一、白石雄二、新津亨等の諸君に多く期待するところあるを附記して擱筆しよう。

（一九三〇、八、六）



世界情報

内容

なぜ金はフランスに流れるか？

—フランス經濟最近の情勢—

フランスでは今日もなほ金の流入がやまない。たかだか五〇〇萬圓か一〇〇〇萬圓程度の兌換・正貨現送にすらも大騷ぎをするわが國に比べると、フランスは全く『特異』である。これはどうした譯か？

フランスの政府および中央銀行の金保有高は、アメリカ聯邦準備局の數字（一〇〇〇ドル）によれば、左の通りである。

1913年末		678.858
1914	〃	802.583
1915	〃	967.950
1916	〃	652.886
1917	〃	639.682
1918	〃	664.0[illegible]9
1919	〃	694.817
1920	〃	685.517
1921	〃	690.141
1922	〃	708.403
1923	〃	709.480
1924	1	710.394
1925	〃	710.968
1926	〃	711.106
1927	〃	954.000
1928	〃	1.253.500
1929	〃	1.633.402
1930年7月末		1.777.000

世界大戰中の一九一五――一九一六年における約三億ドルの減少は別とすれば、不斷の增加である。もつとも、一九一九――一九二〇年すなはち大戰直後の動搖期には若干の減少が見られたが、それも單に一時的にすぎなかつた。そして一九二七年以降における增加の勢は全くものすごい。なにしろ、一年に三億ドル、四億ドルといふ增加である！

これは特に說明を必要とする現象である。が、それに對する一つの答は、フランスにおける政治經濟の安定、秩序の恢復である。具體的に云へば、一九二六年七月以來掌閣に立つたレイモン・ポアンカレの擧國一致內閣によつて採用された資本主義擁護政策の結果である。資本課稅の惡靈が退散した。間接稅の增徵による直接稅の輕減、公債の整理が行はれた。一言で云へば、『資本』のための安定の確保である。二四〇フランにまで奔落した對英爲替相場は、鋭敏にこの情勢を反映して漸騰を續け、一九二七年を通じて一二四の釘付け狀態を呈した。この年をもつてフランは事實上の安定を得、殘るはたゞ法律上の安定だけになつた。こゝで問題の說明に對する第二の答が始まる。かゝる情勢は外資――主として投機資金――の流入を促す。わが國にも、かつて、一億――二億に上ぼると云はれた國際投機資金が流入したことは、讀者諸君記憶してをられよう。あれと同じことが、フランスにも起つたのである。けれども、これは極めて小さな部分であり、しかもフラン安定前に限られることは云ふまでもない。それならば、溢れてゐるフランスの金の主たる部分は何か？　フランス資本の『故國歸還』である。戰後におけるフランス資本の『國外逃避』――この文字もまた近頃わが國でも用ゐられてゐる！――は極めて有名であつた。戰前の海外投資は約四五〇億フランすなはち約九〇億ドルと註されてゐる。これは、フランスの利子衣食者その他の所有として、有價證券の形で保持されてゐた。ロシヤその他の諸國に投資されたものは無價値になつたとは云へ、全體としては、左程大なる減損を來さなかつたといふ話である。これに加へて、戰後早くも『節約』と『蓄積』による新資本の形成は目ざましいものがある。これらの『資本』が、フランの下落と先きを爭ひつゝ、算を亂して『國外逃避』をしたのである。この額をば數字をもつて明示することは不可能であるが、いかに巨額のフランス資本が――よし短期資金としてゞあらうとも――海外にあるか

は、次の事實からも理解されると思ふ。昨年八月一〇日の『ステーティスト』誌は、フランスに對する英國の浮動負債を『最高二億五千萬ポンド』當時の見積りを『一億五千萬ポンドから二億ポンド』の間となしてゐる。すなはち十億ドル近くの資本が存在する譯である。

八月三〇日の英國『エコノミスト』誌は一九二九年のフランスの入超および貿易外收支を擧げてゐるが、そこでも、一七九億フランの支出に對して三一〇億の收入であり、かくして、一三一億フランの受取超過となつてゐる。このうち、八五億金フランが昨年中に流入したのだから、殘り四六億フラン（約三億七〇〇〇萬圓）がなほ海外投資として存在してゐる勘定である。フランスにおける金の流入の豐富、從つて貸付資金の豐富は、將來もまた明るい前途をもつかに見える。さればこそ、世界的高金利のたゞ中にあつてフランスだけはながらく三・五%の低利を維持し、さらに今年一月には三%、遂に四月には二・五%の劃期的低金利を實現しえたのだ。さればこそ、アメリカ、イギリスに拮抗して世界金融市場の中心にならうとする努力が試みられてゐるのだ。そして現に、ポーランド、ルーマニヤ、ユーゴー・スラヴイヤなどの『歐洲植民地』を初め、アフリカその他の本來の植民地のための巨大なる資本輸出があるのだ。

しかし、この明るき面は、暗き面によつて裏打ちされてゐる。否、暗き紐によつて縊ひつぶされようとする傾向にすらある！　さきに揭げた支出一七八億のうち、一〇〇億は入超であり、二五億は在フランスの外國人勞働者の送金である。入超と勞働者、——かくして我々は山吹色の金を去つて灰色の產業の分析に赴かねばならぬ。さらに他方、收入三一〇億のうち、最大の項目たる遊覽外國人の費用が八五億、フランス銀行による手持外國爲替の賣却が六五億である。（序でながら、ドイツからの賠償金が六六億）この二つを合すれば一五〇億となつてさきの受取超過額一三一億を超ゆること一九億になる。外國人の遊覽が減ずれば、それだけフランスの收入は減ずる。そして、どれだけ遊覽外人が減ずるかは、世界經濟・產業の好況と不況にかゝる。また、賣却すべき外國爲替の分量はフランス產業の海外進出にかゝること、云ふまでもない。

いまや、世界經濟の一環としてのフランス經濟が明かにされねばならぬ。

戰前のフランスは廣大な植民地と巨額の海外投資を有する帝國主義國ではあつたけれど、極めてものやさしい資本主義であつた。といふのは、人口の過半はなほ農業に從事してゐた。工業は國內における生產手段の需要を充す力をもたなかつた。生產力の低劣な農業、重工業を有しない工業——それは世界市場におけるフランスの地位を特殊な

ものにした。流行の中心パリをもつ國にふさはしく、精巧な織物、贅澤な衣服、香水、花、果實、野菜、コニャック、シャンパン――これがフランスの主要貿易品だつた。

大戰後のフランスは面目を一變した。鋼鐵の帝國主義にまで發展した。この發展は最初は戰爭の必要に促されたものだつたが、大戰の終了、フランスの戰捷はこの國に、エルザス＝ロートリンゲンと共に一七〇〇萬の人口から成る新な勞働力を加へたのみならず、農業と並んで、鐵鋼業、木棉工業等の産業設備、鐵鑛、石油、加里等の資源をも供給した。そして、このことは、工業品自給の問題を解決したにとゞまらないで、世界市場におけるフランスの地位を著るしく強化した。なぜなら、右の諸産業は國內市場を超えて必然的に海外市場にまで躍進せざるを得ないから。そこへ、インフレーションの作用が働いた。フランスが戰費の大部分を公債および銀行借入金によつて賄つた結果猛烈なインフレーションが起つたことは周知の通りである。これは、外國爲替の低落によつて、輸出奬勵金を下附するのと同一の結果を生み、いよいよますます外國貿易を、從つて工業を發展せしめた。一九二一――二七年の間に一五〇萬人の外國人勞働者が流入した。その後金解禁が實行された。この際、もちろん他にもいろいろな人爲的手段が講じられはしたが、商業に對する打撃が少いやうに、それところか却つて商業に有利なやうに、實勢よりもより低くフランを法定することによつて、安定恐慌と名づけるほどの不況にも見舞はれずに濟んだ。珍らしく、一九二四、五、六、七と四ヶ年に亘つて入超を見なかつた。そこへもつて來て、前述のやうに資金は豐富であり、利率は低かつた。かくしてフランスの經濟はまことに前途洋々であるかに見えた、見えつゝあるのでもある。

しかし、一方では、フランス資本主義の弱味もまた時と共に發展しつゝある。一つは農業である。農民が人口の半數を占めてゐるフランスにおいては、『政治』は農民の利益をより多く顧みなくてはならない。農産物關税はその現はれである。通常の場合、フランスの農産物が世界市場價格によつて支配されるならば、フランスの農民はやつて行けない。かくて關税が課される。國內で凶作の場合には、この關税その他の施設の結果として、農産物の輸出があつてもなほ國內價格は世界市場價格よりもそれだけ高價になるやうに仕組まれてゐる。過去二、三年に亘り、再三關税引上げがあつた。このことは勞働者の生計費の騰貴を來たし、それだけ勞働賃銀の騰貴への運動を生ぜしめる。これは、資本家にとつての生産費増加となり、それだけ對外進出を阻む結果となる。そしてまた、フランスの物價は、かの割安に定められたフラン相場からの影響を食ひつくしてしまつた。ちやうどその時世

界恐慌の進行と共に、世界市場の物價水準は下落の方向を示して來た。フランスの今年七月の指數を一月に比すれば、內國品は一$\frac{1}{3}$%の下落にすぎないのに、輸入品は一一$\frac{1}{2}$の下落、さらに、一九二八年平均と今年七月を比すれば、前者は三$\frac{1}{2}$%、後者は二〇%の下落である。これはフランスの海外における競爭力の低下にほかならぬ。然り輸出は極めて不振であり、從來から惡かつた紡績業を始め、自動車、鐵鋼、石炭はいづれも不振である。先月報道した北フランスのストライキは全國的に擴大しつゝある。

各階級はそれぞれの要求をもつて政府に迫らんとしてゐる。タルヂユー內閣はこの冬をもつまいと云はれてゐる。

イギリス勞働組合の極端なる右翼化

イギリス勞働組合の第六二回年次大會がこの九月一日ノッチンガムにおいて開かれたことはすでに日本にも報道された。イギリス資本主義を根柢から搖がしてゐる經濟恐慌、あらゆる對策にもかゝはらず絕望的に增大する大衆的失業——このイギリス資本主義の經濟政策の完全な破綻に當面して、イギリス資本主義の運命に關してひとつの決定的要素である勞働組合はどういふ態度に出るか？この大會は異常なる興奮をもつて迎へられたことは當然である。

すでにスワンシー大會の決議によるモンド・ターナー會議の支持以來『產業平和』は、イギリス勞働組合總會議の標語となつてゐた。こんどのノッチンガム大會はこの標語により忠實に、解決すべくもない失業の問題、一方において賃銀および價格引下げの要求と他方賃銀および消費の增進の要求との矛盾、深刻な危機に立つ合理化運動の進展に對して、ひとへに健全な理性の支配することを誇りとするといふイギリス勞働組合は社會主義への道から資本への完全なる奉仕の道へ決然と轉向することを宣言するにいたつた。大會における議長ジョン・ビアードの開會演說こそはこの轉向を最も端的に最も明白にそれは實にある意味において劃期的な意義をもつものである。我々はこれを傳へようと思ふ。

彼は演說の冒頭において問うた——

『社會主義は我々の時代において來りうべきものであるか？勞働運動のうちにおいてさへ嘗てかくの如きことを期待せしむるものがあつたか？』

彼はこれに答へるに『否』をもつてした！そしていふ、——『資本主義的生產の排除は今日においては國民の社會經濟生活の激烈な破

想となるであらう。我々の時代における社會主義は意味なき標語となり終つた。社會主義への道の建設に當つては我々は産業と貿易との機能を阻害してはならぬ。』

ビアードによれば、いまや社會主義は資本主義の破綻を救ひ、これに代るべきものではない。資本主義的破綻は資本主義的に再建されねばならぬ。勞働者階級のあらゆる社會主義的諸要求は資本主義の再建のために放棄されねばならぬ。すでにスワンシー大會においては階級鬪爭を棄てたイギリス勞働組合總會議はノッチンガム大會においては社會主義をも棄てたのである。そして、ビアードの言葉は、それが資本への奉仕を意味する限りは、勞働者はあらゆる犧牲に堪へねばならぬといふことを勞働者に要求するものである。

かくて大會は進んで、イギリス銀行家の保護貿易決議の後僅かに二ヶ月、この銀行家宣言を勞働組合總會議の宣言とすることをビアードの口を通じて表明してゐる。『自由貿易といひ保護貿易といひいづれも共に決定的な原理ではない。このことを解せざるものは何人たるを問はず誤れる經濟家であり誤れる社會主義者である。自由貿易はこれを偶像視せらるべきものでもなければ、保護關税はこれを産業上の疾患の萬治藥として考へらるべきものでもない。しかしいまや二百萬人の失業者をもつ國家の經濟的運命は危機に迫つてゐる。區々たる斷片的企圖は價値なく無益であらう。遙かに威大な、勇敢な科學的且つ精悍な解決がこの問題に對して爲されねばならぬ』。

この威大な、勇敢な科學的且つ精悍な解決は何であつたか？　それは大會二日のビーヴァーブルックの大英國自給自足案となつてあらはれ、さらに最近の大英國繁榮の爲にする勞資共同の覺書きとなつたのである。なんと立派な解決ではなかつたか？　しかしそれはたゞ資本家階級のために立派である。斷じて勞働者階級のために立派ではない。

我々はこのイギリス勞働組合總會議の極端なる右翼化に反對する少數派運動の勢力のあることをも忘れてはならぬ。この、總會議の幹部達によれば甚だ不健全なる分子はヨークシャ羊毛工場爭議の際のマクミラン裁決事件を例示して、勞働黨政府の勞働者階級彈壓を大會が糺彈せんことを要求した。この案は少數で敗れた。しかし、それは組合大衆に勞働黨内閣が果して誰の味方であるかを曝露した。

今日、イギリスにおける失業の加速度的な增大、勞働者の生活條件の惡化は、勞働大衆をしてますます戰鬪的なしらめつゝある、——爭議は異常な勢で增大しつゝある。かくて勞働大衆は總會議の幹部の命に從つて、はたしていつまでも資本への奉仕に甘んじるであらうか。それむはしろ少數派の擡頭に力を與へはしまいか。

トーキーにおける國際カルテルの成立

活動寫眞がトーキーを主とするやうになつてから、活動寫眞企業には二つの顯著な傾向が現れた。その一つは、トーキーの撮影には巨額な資本が必要であるところから、資本力に弱い活動寫眞企業は、資本力の大なるものに併合せられ、活動寫眞企業における資本の集中が著しく促進せられたことである。その二は、トーキーの撮影には、電機技術が絶對必要となり、その結果電機製造會社が活動寫眞企業と密接に關係するやうになつたことである。しかも、その際、電機製造會社は資本力の大なるものが多く、且つ、そのトーキーに關する技術は特許によつて法律的に保護されてゐるために活動寫眞企業に對して支配的地位を占めるやうになつた。

世界でトーキー撮影の最も盛んな國は、いふまでもなく、アメリカである。ところで、アメリカにおいて、トーキーの撮影並びに映寫に關する技術について獨占的地位をもつてゐるのは、ジエネラルエレクトリツクおよびウエスティングハウスによつて支配されてゐるラディオ・コーポレーションとウェスターン・エレクトリツク會社である。兩者はさらに包括的なる特許の交換、生産分野に關して、一九二六年以來協定を結んでゐる。

これと同じやうに、ヨーロッパ大陸においても、トーキーに關する技術についてはほゞ完全な獨占が成立してゐる。こゝでは、トーキーに關する廣範な特許を有してゐる大會社としては、獨逸およびオランダの資本に屬するトーンビルド・シンヂケート株式會社（トビス、）キユッヘンマイシュターコンツェルン、クラング・フィルム株式會社（A・E・G、シーメンスの支配に屬する）がある。これらの三會社のうち後の二つ、すなはちトビスとクラングフィルムとは利益協同契約を結んでをり、キユッヘンマイシュターはトビスの資本金の約六八%を所有してゐる。かくして上述の三會社は相結んで、ヨーロッパにおけるトーキーの撮影並びに影寫に關する獨占的地位を確立した。そこで當然にこの大陸の資本とアメリカの資本との間には闘爭が起らざるをえない。まづ特許戰が開始された。例へばアメリカのウェスターン・エレクトリックは、同會社の製造した映寫機を、ドイツのみならずその他のヨーロッパ諸國においても使用することを禁んじ、また、同會社の方法に從つて撮影された映畫上映を拒絶したのである。

この特許戰で最も困つたのは、映畫上映會社であつた。上映會社は自分の國で撮影された映畫だけしか上映できなくなつたが、それでは

客が來ない。また、撮影會社も弱つた。といのは、その映畫を外國に輸出することがむづかしくなつたから。そこでこれらの連中は極力特許戰の終了に努力するにいたつた。前に述べたやうに、電機製造會社自身これらの上映會社、撮影會社に深く關係してゐるのであるから、この兩者の間に利益の背反がある譯のものでない。茲に、去る七月半ばにパリーにおいて國際トーキー會議が實にこのやうな特許戰の休戰を議するために開催された。

　この國際トーキー會議では幾多の議論があり一時は決裂に瀕したが、七月末にいたりともかく協定が成立した。同協定に調印したのはアメリカ側ではウェスターン・エレクトリック、ラディオ・コーポレーション、パラマウント、メトロ・ゴールドヴイン、ユーナイテッド・アーテイスト等であり、ドイツ側では、トビスおよびキユッヘンマイシユター、クラングフイルムであつた。

　同協定はその存續期間を一五ケ年とし、トーキーに關する技術の交換を完全に保證したものである。すなはち、撮影會社はドイツおよびアメリカにおけるあらゆる撮影技術を利用することができ、撮影せられたる映畫は、いかなる映畫機械をもつても上映することができることとなつたのである。さらに映畫機械の供給については、販賣地域の分割が協定された。ドイツ側は、ドイツ、ザールおよびメンメル地方、オーストリア、ハンガリー、スウイス、チェコ、オランダ、蘭領印度、デンマルク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、南スラヴイア、ルーマニヤ、ブルガリアに對する供給を獨占し、アメリカ側はアメリカ合衆國、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、ニューフアウンドランド、海峽植民地、印度、ロシアに對する供給を獨占することとなり、その他の地方は兩國の競爭地域として殘されたのである。

アメリカを支配する人は誰か？

　ドイツ駐在のアメリカ大使として、また、最近パンフレットを公にして、そのなかでローザミア伯およびビーヴァーブルック卿の『イギリス帝國内の自由貿易、外國とは保護貿易のための十字軍』に強く賛意を表したことで有名になつたジェイムズ・W・ジエラードは、『アメリカを支配する人々』六四人の人名表を作つて發表した。

　この表はアメリカにおいては勿論のこと、さらに海外諸國においても、半ばはその中に含まれた人名により、半ばは却つてその表に漏れた人々により、異常の興味をもつて迎へられてゐる。

ジェラードの表にロックフエラー、モルガン、ヘンリー・フオード等の世界人が擧げられてゐることは勿論である。さらに、ヤング案の起草者でもあるジエネラル電氣會社々長オウエン・ヤング、大藏大臣メロンがある。その他には、――ジェネラル・モーターズの支配者たる火藥王のデュポン一族、ロックフエラーの後繼者スタンダード石油會社々長テイーグル、金融資本家チアールズ・ミッチエル、新聞王ハースト、鋼鐵王シュワーブ。變つたところで、パラマウント活動寫眞會社々長アドルフ・ヅーカー、ワーナーブラサース活動寫眞會社々長ワーナー。そしてこのジェラードの表がアメリカ勞働總同盟會長――彼れは勞資協調實行者として『グリーン商會』社長としてよく知られてゐる――ウイリアム・グリーン、總同盟副會長のマシュウ・ウオルを擧げてゐるのは、甚だ興味深い。なぜなら、ジェラードが『アメリカを支配する人々』といふ、その『アメリカ』は帝國主義アメリカである。いまジェラードによると、勞働總同盟のグリーンやウオルはアメリカ帝國主義を倒す人々の代表ではなくて、逆にモルガンやロックフェラーと一緒にアメリカ帝國主義を支持し支配する人々である。六四人の他の人々の名前は省略しておかう。

六四人の平均年齡は五八歳餘であるといふ。すなはちジェラード表中の人々は、平均して一八七二年生れとなる譯である。最高は一八四〇年生れのファースト・ナショナル銀行の會長、『金錢製造機械』の異名あるジョージ・ベイカーで、最低はアメリカ電話電信會社々長ウォーター・ギフォードの一八八五年生れ。その出身地について云ふと、五人の外國出身者と、カリフォルニア出身の三人を除けば他はすべてミゾリー河以東の出身者である。西南部諸州は一人も出してをらぬ。

誰れしも不思議に思ふのは大統領フーヴァーがこの表から漏れてをり閣員はメロン以外一人も揭げられてゐないことである。しかし、これに對してはジェラード自身はちやんと說明を加へてゐる。彼の選び出した六四人の人々こそが、これらの政治家を『決定するものである』と。これは卓見ではないか！

これを見てもわかるのだが、ジェラードの表の何よりの特質は、その選擇が全く人々の產業界における位置を基礎としてゐることである。彼は、金融の支配者、主要諸原料の支配者、交通の支配者、輿論の支配者、そして最後に特に勞働の支配者を加へて選んだのだ。いま、六四人のうち六〇人について正確な分類を試みると、かうである。金融一四、交通および自動車一六、諸原料の生產および管理二〇、新聞および活動寫眞八、勞働二。重點は原料生產およびその獲得に置かれてゐることがわからう。いはゆる輿論指導の任にあたるものとして、新聞および活動寫眞が擧げられてゐるが、その場合、それ

らの事業における資本家のみが選擇され、出版業者、著述家、演劇監督、俳優、美術家、音樂家、宗教家、教育家、哲學者、ラジオ講演者、ラジオ出演者、アナウンサーなどは一切顧みられてゐない。これはなかなか鋭い觀察である。なぜならこれらの男或は女の仕事の價値がドルをもつて計れないことは確かであらうが、しかし、帝國主義アメリカの今日もつ地位がこれらの人々の活動よりも、鐵、銅、木材、石油、銀行資本、自動車および鐵道等々の企業に、從つてその所有者に決定的に依存してゐることはあまりにも明白である。その意味ではジェラードの選擇は全く正鵠を得たものと云はなければならない。

もうひとつ、ジェラードは科學者の名を全く掲げてゐない。例へばアルバート・マイケルスン教授、ミリカン教授、アレクシス・カーレル博士の如きを擧げなかつた。これに對しては、これらの疑もなく人智の發達に貢獻した人達、またそればかりでなく、彼自身および人類の經濟的利益と幸福を増進した人々の存在を無視するなどは怪しからぬと云つて、非常な非難である。しかし、ジェラードの表中に掲げられた人々の會社は多くは世界最大の、そして最も成績をあげてゐる理化學工業の研究、實驗所の設備を所有してゐる。今日これらの諸研究所以外に何處にいかなる有用なる――帝國主義アメリカにとつて――研究が行はれてゐようか。またよし偶然にも、單なる一個人によつて驚くべき研究發明がなされたとしても、獨占資本主義組織のもとにおいて、ジェラード表中の支配者の力をからないで、誰れがその發明を工業化し、收益をもたらすことができるであらうか。ジェラードが科學者を平氣で無視してゐるのは、むしろ正しい。

總選擧後のドイツ政界

ドイツの政治は今や一の回轉期に立つてゐるものの如くである。一九一九年一月に行はれた國民議會構成のための總選擧以來、都合六回の總選擧が行はれたのであるが、從來はその時々の鬪爭題目が何であれ、基本的にはデモクラシーと議會主義とを中心とした帝政派と共和派との抗爭であつた。ワイマールの國民議會において多數派を結成した社會民主黨とドイツ民主黨（急進的ブルジョア黨）と中央黨（日和見的ブルジョア黨）のブロック、いはゆるワイマール聯合は神聖なる共和制の擁護者であつた。これに對してドイツ國權黨を中心に重工業のドイツ國民黨（ブルジョア右黨）その他の小黨は帝政派の一群をなしてゐた。この鬪爭の中心から幾らか離れて、右翼に國粹社會黨が左翼にドイツ共産黨がそれぞれの活動範圍を占有してゐた。これが最近十年間の共和制下における政治的勢力關係の素描であつた。

ところが十年間にブルジョア・デモクラシーは早くも行き詰つた。

ヴエルサイユ條約からドウズ案を經てヤング案に發展する過程は、一面には手足を切斷されたドイツ舊帝國主義から共和制下のドイツ新帝國主義への轉化であると共に、他面、大衆の負擔の苛重、搾取の强化の過程であつた。現狀（ブルジョア共和制）維持が大衆の間に疑はれはじめた。勢力關係はその基礎において推移しつゝあつた。

今度の總選擧は前號においてすでに我々の指摘しておいた如く、これを惹き起すにいたらしめた議會解散への道程からしても、デモクラシーと議會主義とのための最後的選擧戰であつた。換言すれば、政治鬪爭の中心が『帝政か共和か』といふ問題より『ファシズムかソシアリズムか』といふ問題への質的變化を示してゐたのであつた。

選擧戰は激烈であつた。ブルジョア諸黨にとつてはもはや個々の黨の消長は問題でなかつた。ブルジョア新聞は一勢に『ブルジョア黨に投票せよ』といふスローガンを掲げた。前の民主黨、いまの國家黨の機關紙『ベルリン日報』さへ『選べ！國家黨を』といふ代りに、『破壞者に反對せよ！』と叫んでゐる。共產黨が『赤い犬』と罵詈されるのはいまに始つたことではないが、それにしてもある信用の高い大ブルジョア新聞さへ、國粹社會黨は何處から資金を引き出してゐるかといふセンセイショナルな標題を掲げ、前のパリー駐在のロシヤ大使館參事官ベッセドヴスキーの告白だとして、驚くべきことにはその資金はコンミンテルンの委員ラヂックを通じてモスカウから來てゐるのだと、誠しやかに報道したものだ。洗つてみるとパリーのロシヤ亡命客の發刊するボーリヤ紙からのたわいもないヨタ記事の轉載だ。さうかと思ふと選擧日も押し迫つた九月十一日には、ドイツにおけるハーストといふ異名を頂戴してゐる新聞王にして最近國粹黨のヒットラーと氣脈を通じてドイツ國權黨を乘取つたフーゲンベルクの主宰するロカール・アンツァイガー紙は、ニューヨーク特電として、ドイツの選擧の結果を緊張して待つてゐるウオール街の意向では、右翼が勝利すれば結構だが、左翼の勝利にでも歸さうものならニューヨーク市場でのドイツ債券の發行は當分見込が立たないやうだといふ記事を載せた。眞赤に怒つたベルリン日報は『厚顏なる僞造』といふ表題を第一面につき出して、ロカール・アンツァイガーは故意に『保守派』を『右翼』に、『過激派』を『左翼』にすり換へてゐる。そもそもウエブスター大辭典によれば保守派とは一國の政治的、社會的もしくは宗教的關係の變更に反對するものをいふのだ……などときめつけるといふナンセンス的挿話までできた。かくして金曜日のスポート・パラストにおける共產黨の花々しい大集會を頂點として、九月十四日（日曜日）の選擧日が來た。

選擧戰がいかに激烈であつたかは、棄權率の少ない點において窺ふ

ことができる。一九二八年には棄權率は二五%に上つたが、今度の選擧では投票者三四、九四三、四六 であつて、棄權率は二〇%以下である。現在（一〇月四日）我々の入手しえた九月十六日附のベルリンの新聞によつて選擧の結果を一表にまとめれば次の如くである。

	一九三〇年九月の總得票（千票）	同上總票數に對する比率（%）	一九二八年に於ける總投票に對する比率（%）	一九三〇年における獲得議席數	一九二八年の獲得議席に比しての增減
共産黨	四、五八七	一三・一	一〇・六	七六	(十)二二
社會民主黨	八、五七二	二四・八	二九・八	一四三	(一)一〇
國家民主黨（舊民主黨）	一、三二二	三・八	四・九	二二	(一)三
中央黨	四、一二八	一一・八	一五・一	六九	(十)九
バイエルン國民黨 1)	一、〇五八	三・〇		一八	
ドイツ國民黨	一、五七六	四・五	八・七	二七	(一)一八
經濟黨	一、三六〇	三・九	四・五	二三	(十)一〇
保守國民黨 2)	三一三	〇・九	一四・三	五	(一)二七
國權黨	二、四五八	七・三		四一	
國粹社會黨（ヒツトラー黨）	六、四〇一	一八・三	二・六	一〇七	(十)九五
その他の諸黨	三、一〇八	八・九	九・五	四五	(九)一七
合計	三四、九四三	八〇・〇 3)	七五・六	五六七	(十)八五

註 1) バイエルン國民黨は選擧においてはバイエルンにおいて獨立の黨として活動するも本來は中央黨の一部にすぎない。
2) 元のドイツ國權黨の首領ウエスタルプ伯がフーゲンベルグに逆ひ出されて獨立黨せしもの
3) 選擧權者約四千三百萬に對する投票者數の比率

元來ドイツの選擧法によれば、ドイツ全國は三十五の大選擧區に分たれ、投票は黨に對して投ぜられる仕組になつてゐる。そして得票數六萬票に對して一議席が與へられ、各選擧區において生じた端數は投票の意義を尊重する趣旨から、黨ごとにこれを全國的に總計し、その總計について再び六萬票毎に一議席が與へられるのである。たゞしこれがためには、小黨分立の弊を避けるがために、少なくとも一選擧區において六萬票以上を獲得した黨でなければならぬといふ制限がある。例へば一九二八年の選擧において、左翼偏向として共産黨より除名されたゴルケ夫人、ウルバーンス、シユーレムの左翼共産黨は全國において合計八萬餘票を掻き集め得たが、どの一選擧區における得票も六萬を越えたものがなかつたので、一議席をも與へられなかつたのである。

ところが今度の選擧では、小黨が整理され、他方では有權者の自然增加に加へて、棄權率が少なかつたので、各黨の獲得した議席總數は一躍五七六に達した、從來の最高記錄は選擧戰の激烈だつたことで知られてゐる一九二四年一二月の選擧結果が占めてゐるが、それでもなほ四九三である。だから六七席の大增加である。そこでインフレーシ

ソで苦い經驗のあるドイツではこの大增加を代議士のインフレーションだと騷ぎ立て、三九七席の包容力しかない議場の大擴張をやらねばならぬとこぼしてゐる始末だ。

さて選擧結果を見るに、中央黨が僅にその舊勢力を維持しえたにとどまり、他のブルジョア諸黨はいづれも慘膽たる凋落の姿をまざまざと見せてゐる。ストレーゼマンなきあとのドイツ國民黨はその得票を半減し、金融資本を背景とするドイツ民主黨はドイツ國家黨と名稱を一新して立ち現はれたが、黨勢を止めることをえなかつた。いまや議會内の勢力は、三分の一が共産黨と國粹社會黨に、同じく三分の一が社會民主黨と國權黨とに、殘りの三分の一がブリューニング内閣の手にある。新議會は一〇月一三日に招集される。政府は與黨の他になほ社會民主黨にかもしくは國粹社會黨にか渡りを附けなければならない。おそらくは國粹社會黨との提携が成立するだらうと見られてゐる。いづれにしても獨逸における議會主義の終焉は近づいた。一定の過渡期の經過のうちに政黨間の種々の聯合が行はれやうが、その道は決定的な階級鬪爭へ向つてゐる。

この情勢のもとにおいて、ヒットラーの國粹社會黨の擡頭と共産黨の强力化は注目に値する。ブルジョア・デモクラシーの行詰りにもかゝはらず、なほその技術的機構としての議會主義に依然としてしがみついてゐたブルジョア諸黨は漸く黨としての機能を失ふにいたつた。勢力關係の推移は、直接的に武裝せるブルジョア獨裁の樹立を計るヒットラー運動を前面に押し出した。もはや帝政派も共和派もない。ブルジョア支配の確保のためには、デモクラシーはもはや何の役にも立たない。もつと直接的な、もつと武力的なブルジョア獨裁制度が樹立されなければならぬ。ヒットラーはこの運動の指導者に他ならぬ。彼は一九二三年ドイツの各地に卷き起つた大衆の革命的蜂起の鎭定された後の一一月八日ミュンヘンにおいていはゆるヒットラー・プュッチを企てたが、翌日忽ち鎭壓され五ケ年の禁錮に處せられた。だが一九三〇年においては彼はもはやドイツ南隅のバイエルンのムッソリニではなく、全ドイツのムッソリニだ。行詰れるデモクラシーをよりブルジョア的に打開する使命は今では彼の雙肩にかゝつてゐる。ドウズ案＝ヤング案施行下における大衆負擔の一層の重課と搾取の一層の强化とに對する反抗から立ち上つた大衆の一部には、その階級的政治意識の混濁と現狀打破の熱意とから、ヒットラー運動に投じたものも少くないやうである。だがヒットラーの指し示した『第三國』が、奴隷と鞭をもつ主人との國であることは、間もなく大衆全部の動かすべからざる認識となるであらう。

共産黨は左右の偏向と鬪ひ、精力的なその組織活動は一選擧毎にそ

の方針の正しさを實證した。二八年の大勝よりも今度はさらに百三十餘萬の得票增加を示した。議席も前の五四に對して七六席と增加した。これは立黨以來の空前の記錄である。新に八十萬票はこれを社會民主黨より奪取した。これは社會民主主義的勞働者に對する働きかけの有効さを立證するものである。他の五十萬票は之を新投票者から獲得した。これは黨の活動が大衆に接觸してゐることを證するものである。何よりもまづベルリンで七十三萬九千票を得て始めて社會民主黨を抑へた事實は記憶されねばならない。ルール地方を始め大工業都市における黨の强化擴大は得票數の上に明に反映してゐる。しかもポンメルンやオーバー・バイエルンなどの農業地方においてさへも七〇—八〇%の得票增加を示した。黨はいまや工業地方から農業地方への進出に驚異的な成功を示しはじめた。共產黨の勢力はもはや拔くべくもない。否、その勢力の急速なる增大は否定すべからざる事實であらねばならぬ。

ブルジョア・デモクラシーの行詰れる今日、この勢力關係の下において現狀の打破は必然的である。これが如何に打破されるか。ヒットラー運動によつてか、共產黨によつてか。だがいづれにしても深刻な鬪爭なくしては、このまゝには濟まされないであらう。重大なる危機を目前にして、ドイツ政治はまさに一回轉期に立つてゐる。今度の選擧の結果はこの時期における勢力分布の關係を示す指標として十二分に吟味しておかねばならない。（十月四日）

アメリカ印象記

柳宗悦

一

「アメリカ印象記」から云ふ題で何か書く樣にとの注文である。誰とても多かれ少なかれ印象は受けるから、何か書く事はあるものゝ、一般に「印象記」と云ふものは面白くとも頼りないものである。外國人の書いた「日本印象記」は、數へれば既に數百種にも及ぶだらうが、扨とり分け價値あるものが、どれだけあらうか。眞を傳へる筈の筆が、誤りを傳へる爲に使はれてゐる方が遙かに多い樣である。日本を善く見る場合でも惡く見る場合でも、印象以前に結論がきまつてゐる場合が多く、どうも信賴が有てない。尤も獨り勝手な空想的な物語として見れば、とりどりに面白い。併し少しでも客觀性を求めると幻滅を感じない場合は少ない。

私も其轍は踏みたくない。その爲には出來る限り公平でありたい、獨りよがりの見方に陷つたり、環境に囚れて自分を無くなして了つたりしては何もならない。元來外國に行く人は大體から云つて、三つに分れる。一方は無闇に西洋を有り難がつて、崇拜とその模倣とを土産にして歸る連中がある。それのみか積極的に自分の國を嘲り、顔や毛の色に迄悲觀する人達がある。一方には反動的にとても西洋嫌ひで歸る仲間がある。こんな馬鹿な所には二度と來ない等と言明する。ゆかたやどてらの味で勝つた氣でゐる連中がある。さうして此ほかにもう一つ何も感ぜずに歸つてくる人がある。感覺が鈍く泣く事も怒る事もないのである。

だが此三つの範疇はどれもこれもよろしくない。第三の場合は語る必要がないとして、第一の場合は盲目的であり淺薄である。第二の場合も淺薄たる事に於て等しく、其上頑迷である。易しい事の樣ではあるが、是を是とし非を非とする事は、難かしいものと見える。併しそ

れが出來ない間、印象は片手落ちである。「おゝ眞白な富士やま、赤い鳥居に提灯、人形の樣な藝者ガール、お夢の國！」こんな風に書かれたらゾッとする。「狡猾な人種、人眞似ばかりしてゐる日本人、小さな國、みすぼらしい家」、から讀んできたら腹が立つ。だが「西洋印象記」とても、皆似たりよつたりである。アメリカニズムを有り難がつてゐる連中、どこ迄も毛嫌ひする道德家。新聞や雜誌を見てゐると、どうやら皆是等の範疇を出ない。「オー・ケー」等と通がる輩、「彼等の淺薄皮相なる淫蕩生活」等と嘲すち立てる者、何れもみつともない事に於ては等しい。

二

外國への見方は、ほゞ年齡によつてきまる。若いうちは、よく云へば受容力が強く、惡く云へば影響に罹れ易い。年とると批判力はあるが、受け容れる力が足りない。私は餘り若いうちに外國に行く事を勸めない。なぜだと云ふと、た易く西洋かぶれがして了ふからである。自分が出來上つてゐない内に出掛けると、無批判的に西洋に漬つて了ふからである。さう云ふ人達は日本に歸つてきても調子が合はない。私は巴里に出掛ける幾多の若い畫家を知つてゐるが、滯在中は刺戟があつて相當の仕事は出來ても、歸つてから大概は縮んで了ふ。それは日本に感興が有てないからである。西洋を知つてのみゐて、東洋を味へないと云ふ事は、致命的な悲劇になる。

之に反し私は餘り年とつてから外遊する事を同時に勸めない。それは受け容れる力がなく、排斥する心が強いからである。それに感情や意志が弱くなつてゐるから、ものの見方が鈍く冷たい。東洋に堅まつてゐる爲西洋に交る自由さがない。何れも一得一失である。西洋にゐて、西洋に來る東洋人を見てゐると大概は是等の型を出ない。

それで、若くて西遊しても、東洋にも反省を有ち得る人か、さもなくば年とつてゐても受容力の多い人か、是等二つの場合のみに、外遊が活きてくると思ふ。

普通印象と云ふと、善い印象、惡い印象の二つに分れる。併し一つの惡い印象に廻り逢つたとて、それで全體を評する事は出來ない。又善い印象を受けたとて、それで凡てを賞めるわけにゆかない。ほんとうの印象は、印象を越えた世界に見出すべきだと云つてもいゝ位である。正しく印象を受ける爲には、私達には相當心の準備が要る。もともとどんな國でも美醜の二面を持つてゐるのであつて、日本だとて同じである。特に米國の樣な國はその對立がひどい。それであるから更是非の二面をよく分けて見る必要がある。此場合缺點を知るより、美點を見て來る方が一層吾々の心に役立つのは云ふ迄もない。かぶれ

ろ人は缺點にかぶれ勝ちであるから用心が入る。いゝ點悪い點のけじめがつけば最上である。之は易い様でゐてむづかしい。

三

私は英國から米國に渡つたので、第一印象と云へば、自然その差違であつた。既に太西洋を渡る船の中で經驗した事は、米國人の英語と英國人のそれとが、てんで違ふ事だつた。さうしてロンドンの言葉に耳慣れてゐた自分には、米國人のものゝ言ひ方や音がいたく下品に聞えた。かうも違ふものかと驚いたのである。兎も角品格と云ふものに乏しく下すばつてゐる。私は米國人に此事を語したら、さうに違ひないと云つて正直に承認した。

どうしてさうなのか、色々の原因を擧げる事が出來よう。國が新しいので自から落ちつきがないのである。各國の人種が寄り合つてゐるので言葉が不純になるのである。それに古く米國等に渡つた連中は教養ある人達ではない。云はゞ田舎言葉が通つてゐたのである。それに最近商業が進んできて、物質的になり、ゆかしい情緒等は段々無くなつてきたのである。全體の氣持ちそれ自身が格の高いものではない。言葉づかひが國民性を一番如實に示してゐる以上、米國の品格はまだ上等とは云へない。

それに實際又實際の國であつて、何も效果第一の問題、言葉も段々簡略になり、古典的な英語は驅逐されつゝあると云つてゐる。あと半世紀もしたら、英語と米語とはくつきりと分れるのではないかと思ふ。綴り等の變化は誰も氣づく通りである。YouがYuになり、更にUに轉じてゐるのを見る。Through Neighbour 等云ふ字から gh は邪魔ものにされてゐる。'Certainly, sir.' 等と英國風に云ふものは殆どなく、'sure' と妙な下すばつた音で答へる。それに文法もいたくくづして了つてゐる様に思ふ。之を聞いてゐると、東京者が大阪辯を聞いて、下等に感じるのと同じである。慣れたら忘れて了つたが、始めのうちは閉口した。

それから歐羅巴にあつて米國に缺けてゐるものゝ一つは、何と云つても土着の古い建築や美術や工藝に乏しい點である。之はいたく物足りない感じがした。古くてせい〳〵コルニアル時代に溯るので、比較にならない。京都奈良あたりから北海道に行つた感じである。自然には中々雄大なものがあるが、人間の歴史がなく、私の様なものには甚だ物足りなかつた。尤もその缺を贖ふ爲、盛に美術館を建てゝ歐洲のもの東洋のものを無税制度で入れてゐる。此十五六年間に於ける美術館の膨脹は大變なものである。まもなくルーブルや大英博物館を尻目にかけて進むであらう。

四

併し亞米利加は英國や獨逸等と比較して、非常に居心地のいゝ點がある。それは人間が卒直で飾り氣がなく、從つて誰にも心置きなく友達の樣に話する事が出來る。それも舊知の人と始めての人とに區別がない。ぶつたり、えばつたりする事がなく、至極安直である。外國から行く者には、此事は氣持ちがいゝ。甚だ平民的である。

亞米利加と云ふと排日を想ひ出すが、同じ亞米利加でも西と東とは大變に異ふ。四日四晩かゝらねば着かない程の遠さである。一概に同じ米國と見て了ふのは氣の毒である。排日は殆ど西海岸に限る。その排日も半分は日本人が責めを負つていゝのである。ロサンゼルスあたりの日本町を歩くと、行儀のいゝものではない。いやがられる色々の原因があると思へる。尤も日本人の發展への嫉妬や、人種的偏見が事をそこに導いてゐるにはちがひない。さうして日本人にとつて癪にさわる事は數へきれぬ程多いであらう。或宿屋、或劇場、或料理店等は一歩も日本人を入れさせない。考へても腹が立つ事が多い。併しそれは地方的な出來事である。東海岸では大變事情が異ふ。私は寧ろ親切さに浴し過ぎた位であつた。見ず知らずの人からさへ泊りに來てくれのお茶に來てくれのと色々厚意をうけた。さうして一ケ年の滯在中不愉快な目に逢つた事はなかつた。それに米國人ははにかんだり、よそよそしくしたり、堅くなつたりする事がなく、何處も卒直であり對等である。

人間と人間との關係が上下ではなく、左右である。言ひ換へれば官僚的でなく、平民的である。生活は上役につかへる事でなく、友達として活きる事である。何でも官僚的な日本から行くと、急にゆかたでも着た樣な感じがある。日本の官僚式だけは改めたいものである。もう官尊民卑の時代でもあるまい。いつ迄も役人がえばつてゐる樣では、萬事が不景氣になる事うけあひである。能率第一の米國では、そんなものは流行しない。事務の澁滯ばかり來すからである。

人間が平等的關係にあるから、協力が行はれ易い。悪くとれば協力する方が得がゆくからと云ふ現實的目的からだとも云へるが、それにしても民主的な性質が此事を可能ならしめてゐると云へる。亞米利加の力は一つには協力から來るのである。今日滅び行く民族を見ると皆協力心に乏しい。朝鮮人の今日は小さな黨派の絶えまない爭ひが大きな原因である。協力を知つてゐる猶太人だけが富んでゐるのは面白い現象である。日本人には此協力心がまだ乏しい。軍艦七割で國防はすむかも知れぬが、協同心のたつた一二割の持ち合せでは、文化の競爭は出來ない。

五

之につれて想ひ出されるのは人材登用である。日本でも此言葉を屢屢聞くが事實はさうでない。さうであつても程度はひくい。米國は此點では上々である。シカゴ大學の今の總長は三十幾才かの青年である。こんな事をする勇氣は日本の大學には決してない。私の在米中米國の工科大學で一番大きいケムブリッヂの所謂「テク」で、總長の更迭があつた。「テク」は日本の海陸軍や大學等から留學生を斷えず送つてゐる大學である。その新總長は四十歳を越えたばかりの物理學者である。幾多の先輩の老教授連が皆之に賛成するあたり、日本では考へられない態度である。年齡順とか官等順に總長になる制度とはいたく異つてゐる。大學の立場としては、遠大な計畫を立てる爲、頭腦明晰な年少の精力家が總長と云ふ事務に一番適すると考へたのである。さうして何年計畫かの大仕事を開始する。之は金ばかりで出來る事ではない。さうして老教授連は安じて各々の專門の學術に精進してゐる。「おれを總長にしないとはけしからん」等と野暮な事は云はない。年若い新總長をいたく大事にしてゐる。此國際的な所置と雅量とは、相待つて仕事の能率をどれだけ増す事であらう。

リンドバークとかバードとかゞ一足飛びに躍進した事等は誰も知る通りである。さうして各國へ派遣する大使等の撰擇も極めて自由である。外務省の外に一歩も出ない日本とは趣きが異ふ。適材適所は能率を齎らす所以だと云ふのが米國式の考へ方である。

何も能率々々で進んでゆく。見ようによつては靜けさがなく、いたく現實的で潤ひがない。併し之が米國の力である。之だけでは正しい文化は成り立たないだらうが、同時に之なくしても成り立たない。日本の官僚制度は凡そ能率の上らない組織である。私は米國で幾多の美術館を見て來たが仕事を大にしてゐる。之は金だけで出來るものではない。日本や朝鮮の美術館は既に年齡が久しいが、仕事の割合がいたく貧弱である。私の考へでは官僚がたゝつてゐるのである。事勿れ主義の弊害である。貧乏だけが仕事を阻止してゐるのではない。否、貧乏の一原因は實に官僚制度そのものにあるのである。

それが爲に、日本では美術館と市民との間に何も有機的な關係がない。然るに米國では市民の後援が厚く、且つ市民への開放が非常に自由である。誰も行き易い氣持ちが持てるので、樣々な人が研究に出かける。特に此頃は縣廳とか市廳とか云ふ樣なものから獨立して市民とのぢかの交渉で美術館を育てる傾向に進んでゐる。此事は慥に一發展と云つてい。

六

米國の町で先づ代表的なものは、何と云つても紐育と市俄古とである。代表的と云ふのは他の國で見られない都市と云ふ意味である。さうして都市を代表するものは、何と云つても其れが有つ建築である。さうして亜米利加建築と云へば四角な丈の高い建物なのは誰も知る通りである。たしか六十階を越えたかと思ふ。私は紐育に着いてそれ等のものを興味深く眺めた。建築界では評論の的であるが、私の得た結論はかうである。それは正に實際的な亜米利加生活の象徴であるから、その生活が力ある意味に於ては建物も力強く、潤ひない意味に於ては潤ひがない。私はその個々を美しいとは感じない。併しハドソン河の上から、朝の光につゝまれて紐育全體を見る光景は偉觀である。あの平な紐育が一つの丘陵とより見えない。大小高低の建物が積み重づて、山を築いてゐる形がある。それは確かに一つの力の表徴である。もとより私はその力を深いものとは考へない。誰かそれをゴシック大伽藍を讃美する意味で讃美し得よう。併し集團としてのその建築は何ものにかに突き進む力である。そこに生活の落ち附きはない、只前進がある、それ故建築それ自身も最後のものではあり得ない。

私はその亜米利加建築の内部を見るに及んで様々な箇所を見出し興味深く感じる。多くの人はそれ等の建築の室内から、あらゆる過去の調度が驅逐されてゐると想像するであらう。併しそこに住む人々はその潤ひ無きに堪へないと見える。私は幾多の中世代の家具の模造品が愛用されてゐるのを見た。あのキンゾアー椅子の如き寧ろ使用の廣いのに驚いたのである。それ等の建築は事務本位であつて生活本位の建物ではない。一度生活に轉じると更にゆとりが欲しいと見える。否、事務を取らす時には、心を柔らげる美しいものが必要だと云つて、事務室に多くの骨董品を備へようとしてゐる人すらある。年々歐洲及び東洋から米國に入る骨董品の數量は驚く程莫大である。

私が米國に來て不思議に感じた一つは、少し都市を離れると、おとなしい十八世紀風の二階建の木造建築の多い事だつた。白色のペンキ塗で緑の窓である。ニュー・イングランド地方では特にそれが目立つ。日本のアメリカ屋等で建てるバンガロー式のものは何も米國の民家を代表しない。もつと遙かに古風である。ロザンヂエルスの郊外住宅は殆ど全部スペイン式である。紐育の高層建築は只都市に見られるに過ぎない。而もワシントンの如きは、それを禁じて建てさせない。此頃はコロニアル時代の民家を買つて住む事が流行する。何か生活に息ぬきが欲しいのである。

七

米國人は全體としては趣味が低い。此點日本の如き世界の何の國よりも進んでゐる。それは傳統の力が何人にも潜在的に働いてゐるからと云へよう。米國の様な新しい國では此力がない。それに現實的な雰圍氣は、情操を暖めない。朝から晩までジャズが響いてゐる國である。ジャズにも旋律の美しさはある。特にその泉であるニグロの歌は美しい。併し一旦米國化されて了つた今のジャズは品格の高いものではない。演奏者がどこ迄も俗ぽくやる。又それでないと米國民にはもてない。淡い味等は遠い世界である。それは一般の空氣が低下してゐるのである。先に云つた米國語も同じ現はれに過ぎない。此頃はベジヤマ趣味が流行する。何も同一程度の趣味である。人間には下品な趣味を享樂する一傾向がある。日本迄今その罠にかゝつてゐる。

今度の私の外遊の一つの目的は、各國の工藝を見る事にあつた。殊に米國に來てからは、機械製品を見る事にあつた。なぜなら米國程工藝の世界に機械を進出させてゐる國は他にないからである。さうして機械が何をなし、どう云ふ方向に進むかを見たかつたのである。特に機械品がどれだけ美しさを示してゐるかを見たかつたのである。

近來工藝問題として此機械美の事がやかましい。當然新しい時代は、機械美に現はれるべきだと云ふ説を成し、手工品等はもう過去のものだと評する人が多い。とも角若しさう云ふ新しい美が機械から生れるなら此上もない事である。それでどう云ふものがあるかに留意した。

併しその結果、私は次の様な判斷に逢着せざるを得なかつた。機械の主人たる資本家は製品に美を齎う等と云ふ事を心掛けてはゐないのである。一番心掛けてゐるのは利得である。それで製品は賣れる爲に單なる化粧をほどこしてゐるに過ぎない。それも競爭に勝つ爲何か斬新な姿をと目がけてゐる。それが美であらうと醜であらうと、どつちでもいゝ。眼目は人を引きつけるにある。それも見る刹那に人を引かうとする。賣るのが目的故、用も美も二次になる。

所で買手はどうかと云ふと、決して美などを眞面目に求めてはゐない。安くて見てくりがよければいゝのである。長持ち等されては迷惑である。なぜなら時代は急速に前に進む。新しいもの／＼がいゝのである。流行おくれは生活に滿足を與へない。一つのものを長く愛玩すると云ふ事は性に合はない。

それ故物は誠實さを含めて製作されない。餘り弱くともこまるが、丈夫では尚こまる。物は消費物であつていゝ。それでこそ澤山作れるし、又度々變へられる。

私は一二の實例を加へよう。機械製產で此頃は一枚のシャツを十仙で賣る。所が洗濯代は十五仙である。シャツは一々棄てる方が經濟である。かう云ふ現象は段々にふえる。女の着物は二三度クリーニングにでも出すと、その代で一寸したものが買へる。否、二三度出すともう切れてくる。物は早く棄てるのが得策である。此頃紐育には澤山のアパートメントが建つ。併し話によるとそれ等の建物は凡そ二十年限度のものゝ由、永久な建物は、日進月歩の生活には合はない。一時にまにあへば目的は達する。さう云ふ樣な建物に始めから美が考へられてゐるわけがない。それで機械美を人は說くが、機械の方向は「新しい美」等をねらつてはゐないのである。

先日も電球は長持ちしない樣に作つてあると云ふ話を聞いた。さもないと電球會社はつぶれるからである。惡醫者が藥代をとる爲に、病氣をわざと早く直さない樣にするのと同じである。一般の機械製品は正にさう云ふ惡資本家の犧牲である。機械美に新しい美がある等と簡單には云へない。

それで製品に誠實がないから、物を大切にするとか、長く愛するとか云ふ氣持ちはない。まして棄てるのは勿體ない等と云ふ感じは、今の社會では流行らないのである。併し「有り難い」とか「勿體ない」とか云ふ感じの消滅は、社會の幸福にはならない。物に對する敬念や情愛の喪失は、人間の情趣を低下させ、道德を稀薄にし、社會の空氣を粗惡にしてゐる。

それに今日の趨勢を見ると、米國は大資本家國であるから、益々機械が要求される。併し機械は人の手を驅逐するから、それが發達するにつれて失業者が增加する。米國の樣な金持ちの國で、どうして何百萬と云ふ失業者があるのかと不思議がつて聞く人があるが、それは主として機械の爲である。今云つた樣に人間が要らなくなるからである。それにいゝ機械程製產能率が大きいから、すぐ製產過剩になつて、賣れなくなるのである。賣れなければ不景氣となつて益々人員を陶汰する。それに强ひて賣る爲には安くする。安くする爲には粗惡になる。機械讃美はもう「新時代」等と云ふ痲醉劑では、きゝめがなくなつてゐる。

想ふに社會の制度が正しくならない限り、當分機械製品が美を產む機緣は到來しないであらう。機械の改良と共に機械のコントロールと云ふ事が當然問題となるにちがひない。それは軍備縮少の問題と甚だ似てゐる。(九・四)

性の祭禮風景

齋藤昌三

性器崇拜は一種の迷信として蔑視されて居るが、學問的の研究としては未だその一端に過ぎない。然し遠い原始民族時代の純朴なこの思想は、文化の發達した今日も猶、あらゆる形式乃至傳統的慣習によつて遺されて居るのは不可思議な事實である。その一部は建造物とか造庭術の上の法則、宗教上の儀式乃至マーク、民間生活樣式の上等に歴然と現存して居るが、それ等は何れも進化した形に依つて現はされて居るもので、然らざる地方行事の內、就中神佛の祭典には未だに原始的の俤を傳へて居るものが尠くない。

殊に農業本位の我國としては、農作物の豐穰を祈願した關係上、勢ひ古代からの性器崇拜事實は、地を母とし天を父とし、この天地の作用によつて萬物を生成したものと信じて來たのであつた。この豐穰を祈る行事が祭典として傳へられたのであるから、農作と生殖、生殖と祭典は密接不離の關係に在つたのであるが、この祭典と農作との關係は、軈て時代と共に進展し分裂して、人類の生殖祈願となり、相手を求むる禮讃となり、緣結びから性病治癒祈願、厄除け、殖産といふやうになつて今日に迄るに至つたのである。

今、左に性と最も因緣深い祭典の代表的なものを二、三種拾ひ出して、スピード文化の時代に猶、悠々たる民間傳統の根強い存在を、何等かの參考までに紹介して置かうと思ふ。

因に、印度では男性のものをリンガ、女性のものをヨニーの語を以て現はして居る。

豐念祈願の祭典

遠い我等の祖先は前述の如く農作物も亦生殖作用によるものとし、豐穰を祈願して神を和める爲に、神前に夫婦の態をしたり、閨中の樣式を演じて憚らなかつたのであるが、祖先の信じたそれは、如何にし

て殖すべきかの生殖器で、決して現代人の赤面するやうな淫具ではなかつたのである。此の原始的行事の現在に遺る地方の闇祭、雨乞ひ祭、田供養の類は農作に最も深い祭事で、東京市外府中町の大國魂神社は、國幣社中著名な闇祭が行はれてゐる一である。例年舊五月五日の宵、全氏子の燈火を消して御輿の渡御が行はれるが、この夜は氏子を初め近郷近在の青年男女は、この廣い境内乃至附近に集合し來つて、×××××××××× 有名である。これは他にも大分有る例で、「御幣合せの神事」とか、或は「姫神迎への神事」と稱する儀式に、祭典に參加の名の下に神に倣ふ者で、古代の女子共有や雜婚時代の名殘りとも云はれて居るものであり、この際、青年男女に田畑を荒さるゝ場合も相當あるといふが、それも農作豐穣の前兆と喜ぶ所もあるとか。餘り詳細に亘ると神罰を冒瀆するから差控へるが、猶この神社には七月二十日のモモ祭なる農作祭と、八月一日に角力祭がある。前者は女性的の祭であり、後者は男性的の祭である。モモ祭は五月の闇祭の夜半に擧行されるものに對して、これは暑い盛りの日中の行事で、本來はすもも祭と稱すべく、往古は多く李の實を境内で賣つたものであるが、現今では桃が大半を占めて居る。

桃祭に就ては康平六年、源頼義、奧州征伐を終へた際の、前九年の役の古例が傳へられてゐるもので、天下太平五穀成就の祈願を目的とはしてあるが、モモは賊徒退散を祈つた古事を示したものであらう。

それよりも、當日の主眼とされてゐるものは社司から授かる烏扇の一本宛である。この扇子は男女二樣あつて、共に扇面には一羽の烏が描かれ、その肩に神璽が押してあり、裏面には鳥居の一部に杉の神木が描かれて、府中町鎭座の朱印が肩の方に押されてゐる。これは稻作に害を及ぼす蝗を拂ふといふ「古語拾遺」に由來したものである。その一節は、

太古神代の時分に、大地主神が、田を作られた日に、牛の肉を部下の百姓に食せられた。折柄、御歳神の子が其の田に來て、自分に奉られた饗膳をも汚穢として却て唾を吐きかけて還つて仕舞つた。そして其の樣子を父神に報告した。そこで御歳神が、怒られて蝗を其の田に放たれたから、稻苗の葉は忽ち枯れ損じて、篠竹のやうになつた。仍て大地主神は、片巫、肱巫をして、どうしたわけであるかを占はせた所、御歳神が祟をなさつたのであるから、白猪、白馬、白鷄を獻つて、其の神怒を解くがよい、と云ふとであつた。此教通りに、御歳神に謝罪した。すると御歳神は答へて云はれるに、こは實に吾が意である。宜く麻柄で桛を作つて蝗を掃ぎ落し、さうして其の麻の葉で掃ひ、天押草で押し出し、烏扇で煽ぎ出す

がよい。若しこのやうにして倘出きないならば、宜く牛肉を溝の口に置き、倘男莖形の一物を作つて溝へ立てよ。是れ其の神の心をまじなひ、和める所以である。薏子、蜀椒、吳桃の葉及び鹽とを、其の畔にばらまき置けよ、と。それで其の敎に從つたので、苗の葉は復茂り、米穀は豐稔であつた。是れ今でも神祇官が、白猪、白馬、白鷄を供進して、御歲神を祭る事のいはれ因緣である。（加藤玄智博士校訂文）

この社から出す鳥扇には右の一節を拔粹した緣起書が添へてある。この鳥扇は古名で、今のひあふぎである。これで見ると社家から出すものが本來の形式にちかいものであるが、群衆の大半は一本大二十錢の扇は求めずに、境內到る所の露店に並べられた遊うちは式のものを求めて行くのは皮肉である。社家のに比して露店ものは僅に五錢である所に民衆的な所がある。土地の者に云はせると、うちは面に「宮の內一と刷り出してあるので、それで虫害も充分に除き、病者を煽げば諸病も平癒すると信じて居り、境內で賣るものなら露店のものでも效驗に異りはないとしてゐる。

右の男莖を溝口に立つる俗信は、今日でも倘、削り掛として各地の農家の一部に行はれてゐるのである。

この外、近江の多賀神社の大幣合せの祭、足穗の祇園社の橋上の御幣重ね、陸前遠野地方の風雨祭、阿蘇神宮の五穀を生む神婚式等至限にあるが、奈良縣下の纒向村と織田村とで行ふ綱掛の神事は殊に露骨である。中山太郎氏の著に「纒向の春日神社は男神で、これを象徵する爲に一反歩の藁を用ゐて長さ一丈余の男莖形のリンガを、織田の市杵島姬神社は女神で同じくこれを象徵する爲に藁で一丈余のヨニーを作り、毎年陰曆一月十日の例祭に神官村民總出となり、春日社前の神木にこの二つを掛け、×××××××××××××××××。此の奇怪なる神事は明治になつてから一度中止されたが、その年疫病が流行し農作物が凶損したので、又再興することゝなり、大正の今日でも白晝公然と執行されるのである。」（土俗私考六一）と說明してある。

この春日社と軌を同じくする豐穰祈願祭で、更に著名なものは愛知縣幡豆郡福地村字熱池の村社八幡社に行はるゝテンテコ祭で、矢張り一度禁止になつたのを、數百年來の風習であるといふので再び行はれてゐるのである。例祭は十月十四日であるが、テンテコ祭は舊一月三日午後二時から始まる、一名を豐年祭と云ふ。この附近は淸和帝の貞觀元年に悠紀齋田に定められた古い土地であるが、氏子としては僅かに四十二戸の一寒村である。

岡崎驛から西に走る西尾線で一色口驛に下車して六七丁で八幡社につく。石の鳥居の左右には神明形の石燈籠があり、東面の拜殿から渡

り居を經て神殿があり、左手前の大神社の前には此の祭典に要する藁灰が山積されてゐる。

神社から約二丁距つた家で行列一切の準備をなし、先頭は水色の衣冠束帶の神官、次に區長、氏子總代、次に此の年厄年に當る青年が唄子になる。唄子は三人で三人共赤色の袖付腰下までの着物を着、赤色の布で頰冠りをし、腰の後ろの尻の上部に大根で××××××××リンガ、其の左右に同じ大根を圓丸形にしたものをつけ、割竹でこの三つを貫き通し、繩で結び帶となして付ける。三人目の男はリンガの尖に笹葉を付ける。三人の内の一番目は締太鼓を左の肩にし、右手にムチを持ち、二番目は赤色の布で造つた風呂敷へ徑一尺深さ六寸位の飯櫃に、御飯を入れて脊負ひ、三番目は笹葉付の竹二本、長さ六尺位を千鳥に兩端へ笹を出し棒となし、此の前荷は楕圓形一尺五寸に七寸位、深さ四寸位の手桶の中へ餅を入れ、又長さ一尺五寸太さ三寸位の注連を釣り、上より稻穗を五寸許り下げ、注連へは幣紙と藁が挾まれ、二尾の鰡が兩肉を採つて、只頭と胴骨に尾の付いたのが釣り下げられてゐる。これは何の意味かは不明である。後荷は普通の風呂敷で酒樽を結び包んで釣り下げてある。此の男の大根のリンガの尖に笹の葉が插してあるのである。以上の三人の次には、赤色の頰冠り丈をして(着衣は普通)、長さ六尺位の笹の葉の付いた竹箒を捧持する者三人が續き、其の後は一般の人々である。

此の列が鳥居先へ來ると神官が修祓の式を行ひ、次でテンテン、テンテコテンと太鼓の拍子を合せて三人の男は××××××××××××××××××××××××、實に奇妙な格好である。一行が拜殿に上り左右に着座すると、神官が神前で禮拜し一同も禮拜すると、唄子三人箒持三人は拜殿より降り、箒持は藁灰の後に佇立し、唄子三人は夫々の持物を持ち、太鼓の拍子に合せて腰振面白く右より藁灰と石燈籠の間へ進み、鳥居の右柱の外から左廻りにて中央に入り、此の間始終踊り腰で三回半目に、急に拜殿に馳け込むと同時に、箒持は灰を箒で撒きちらすので、境内は灰だらけとなり、見物人は左右へ逃げ出す。これは田へ肥料を施す意で、此の灰が掛ると禍があると云ひ、又逆に厄が免ると云ふ二説がある。

此の式が終ると一同は拜殿へ復座し、大根のリンガは前の柱に上中下三段に結びつけ、神官は再び神前で祝詞を奏す。此の時區長を始め一同は一本の赤色扇子を擴げ、左廻りに千秋萬歲を唱へて三度宛廻り、交々に經て神官も元の座へ復し、是より徑三尺位ある大太鼓に拍子を合せ、田植歌を唱ふのであるが、其の歌は少しも解らない。昔は十二句あつたが今は四句を三度繰返して十二度とし、此の間に鳥居際の門松の松葉を十二度拜殿へ投げ込む。これは早苗打の儀である。

是で祭は終り神饌を撤し、村中の者は先の飯、鱠を頂けば夏病をせぬとて競つて受ける。又例の大根は乾して置き、子供のオコリの病に效驗があるとして、三本のリンガは貰ひ手が頗る多い。

この八幡社の祭事は素朴そのものであるが、より合法的であり近代的であつて、更に露骨を極めて居るのは尾張國春日井郡味岡村の田縣神社である。この社の祭典は毎年舊一月十五日で、農作物豐穰を祈るリンガの奉納物の多いのも奇觀であるが、祭日渡御の男神は、木製丹塗のリンガに馬乘りした藁人形で、一種の神幸祭であり、この種の最も代表的なものとして著名であるからこれは省いて置く。

長野縣小縣郡根津村の根津大明神といふのは、自然的配偶狀の陰陽石であるが、同郡の鹿教湯温泉の笠岩樣も知られてゐる。神社は温泉場から西へ十數丁行つた所で、神體は岩石であるから遠方からも望むことが出來る。頂上笠の直徑は四五尺といふリンガの雄物である。この岩續きに右手に女岩があつて、中央に不規則な細長い孔がある。その傍に小祠がある。土地の人は今でも敬虔な信仰を有し、毎年十月五日に祭典を行ひ、笠の部分に結び張らされてゐる太繩を新たに換へるので、各家から藁を持寄つて作るのである。一般的に下の病ひや子を祈つて居るが、特に雨乞ひに効驗があると云ふのは、生殖と雨乞ひ即ち農作との關係を說明する一例である。

以上のやうな事實は、拾ひ出すと際限がないから此の位として次に移る。

男性美の裸體祭

何日の時代でもさうだが、殊に原始時代では健康體が唯一の武器であり、財產でもあつた。生殖の上から云つても、健康體な男性美は多くの異性をひきつける魅力であつた。勿論他にもいろ／＼な理由はあらうが、古來からの裸體祭は、男性の優越を誇る一種の、裸體讃美の表現であらう。この裸體祭は多くが極寒期に行はるゝ點から見ても、この意義の含まれて居ることは想像に難くはない。

千葉縣下の小高村に八坂神社といふ一村社がある。汽車は八日市場から入る。多古町街道への途中で、路傍にまでリンガはごろ／＼してゐる。近年鬼熊事件のあつたのもここからさう遠くはない。

八坂神社といふから祭神は須佐之男命であらうが、いつか道祖神と混淆して、一般には小高の天王樣として知られてゐる。その起原は往昔九十九里の海中から出現した、約一寸大の陽石を、勸請したのが始めであると傳へられてゐる。拜殿は四間に二間、本殿は奥行五間半の村塀に圍まれ、方一間の精巧な建築で、萱ぶきも厚く壯麗なものである。

この本殿には新しい銅製のリンガも奉納されて居るが、將棋の駒若しくは紙熨斗式な長五角形の、高さ五寸內外の軟石に「八坂大神」と刻んだものが多く奉納されてゐる。これは日光の諏訪宮と共通の形どつたもので、日光のは飛車とかいて、向ふこと速かなるの謂だと傳へられてゐるが、茲のは石の頭部の人形を利用して、八坂大神の八によつて、前途の山形を受けて陽形を象徵さしてあるかに見える。ここは舊くは盛んに石のリンガを奉納した事實から推して、この駒形を引き延した物に變化したことは、少し研究的に視れば誰にも諒解出來る底のものである。

鳥居に並んで左手に古井戶があり、年々舊六月十日に井戶開の神事がある。この井水で正月の寒行が行はれるのである。この井の反對側に小塚が在つて石のリンガが林立して居り、その左側に間口九尺に二間の小屋が在つて、板で內部を見えぬやうにしてあるが、これは集つたリンガの始末場である。

舊六月十五日の祭典には、二十餘年前までは二タ抱へもある松材をリンガに刻んで、樽御輿式に村內を練り廻つたといふが、近年は遠慮させられて單に軒神燈をかゝげ合ふ丈の寂しい祭になつた。然し、舊一月十四日の寒中行事は今も依然執行されてゐる。

この行に參する者は、村內でも消防組に列して居る壯者丈で、前記の井水を浴る裸體祭であり、前も夜半十二時前後の寒冷の頂上で行はれるのである。女が祈願があれば裸體參りをするといふが、男性の行事には列せぬことになつて居る。村民は文化の程度から云へばかなり低い者である丈に、この神を崇拜すること頗る篤く、附近の女はリンガを見ても、吾々との會話にキカイと稱して、何等猥褻視して居ないのである。

石の小高の寒行に比して更に壯烈なのは、陸中黑石村の蘇民祭と岡山在の西大寺の會陽である。兩者共外觀は近代的の佛教化されたものではあるが、黑石では陰曆正月七日の午後四時頃、二十歲前後から三十五六歲までの壯年血氣の者で、各村から集つて來て皆裸體となり、藥師堂の前の氷結して鉄のやうな溪水を腕力によつて碎き蛙のやうにザンブ／＼と飛び込み、ジヤツサ／＼と叫びながら水行して、その濡れ鼠のまゝで本堂に參詣し、又水垢離しては參詣する。近來は若い女も湯具一つになつて肌を寒風に曝し、平氣で溪水に浸つてジヤツサジヤツサを唱へて居る。堂內には寺僧が控へて居り、水から上つて來る男女に二三粒づゝの米を與へるを口中に受けて、又水に飛び込むこと都合三十三回。

この間に、お堂の兩側には妙齡の女が袴々と列を爲して並び、丁度女護島の女の再來の如く、彼女等にも必然にあつて振らたく／＼よ山

内揃うた、上には妙見、下には藥師」と聲を揃へて唄ふ。この蘇民祭の夜に、東の白むまで唄ひ續けると美音になると信ぜられ、音曲をやる女は競うて來る。

かくて九時になると火燒上りと云つて、材木を高く積み重ねて火を焚く式となる。この火の消えかゝるを合圖に、鉦が鳴り別當上りといひ、藥師の別當が本堂に上つて式を開始する。この鉦の鳴る頃は水垢離は殆ど終り、若者は我れ先きに別當の家に押寄せる。別當は群衆に向つて長さ二尺餘の棒を五十本餘蒔く。この棒を拾ひ得た者丈は別當を警護して本堂に登り得られる。次で鬼子上りと稱し、父母の健在な七才の男兒二人、壯者の脊に負はれて堂に登る。群衆は此の式を見んと潮の如く寄せて來る。別當は小兒を受取り神前に祈禱した後、木製寸餘の蘇民將來を袋に入れて群衆に投げ與へる。これを得た村の當年は豊作であると傳へ、ジヤツサ〳〵の聲を揚げて奪ひ合ふのである。

岡山の西大寺も右と大同小異で、夜中の寒河に浸り裸體を互に相觸れ合つて、全身から湯煙りを立てながら堂の内外にもみ合ひ、一本の神木を奪ひ合ふ式であるが、共に勇壯とも壯快とも評しやうもない。これ等、棒といひ、蘇民といひ神木といふは、研究家の間でいふリンガの變形である。

右と反對に、ヨニーを象徴したかに思はるゝ玉を奪ひ合ふ祭は、九州箱崎八幡宮の玉取祭として知られて居り、これも寒中の正月三日に行はれてゐる。これ等は何れも祈禳の爲めにした性慾生活上の闘爭的遊戲を形式化らしむるもので、性器崇拜時代と多少の時間的距りをも考へられぬこともないが、蘇民といひ神木といひ、佛教化した祭事ではあつても、いづれも習合化されたもので、其の裏面には牛頭天王乃至素戔嗚が附會されて居り、共に性崇拜に起源して居ることは明白である。

生殖を祈る尻叩き

右は壯烈とは云へ男性的な方面に傾き過ぎたので、次には女性的な祭典を拾つて見る。農作と女性、女性と生殖、當然に關聯する問題であり、女性を中心とした性崇拜乃至祭典も相當に遺つて居るが、中でも面白く感ずるのは、これ等の近代化された、京都市外岩倉の尻叩き祭、滋賀縣坂田郡の筑摩の鍋祭、富山縣下の鵜坂神社の尻打ち祭、靜岡縣下伊東町の尻摘み祭等で、いづれも女性を主とした、一種の變態的な野蠻讃美の祭典である。勿論尻を叩く行事は、生殖祈願から來て居るもので、近代人のやうに變態的に行はれたのではないが、中には産ませんが爲に叩くのではなく、懲罰の意から打つのもあり、何祭も同一の主旨から起つた祭典である。

岩倉の八幡明神の祭典は九月十五日で、「滑稽雜談」によれば「神事夜に入りて神供を献ずるに、一村の内にして新婚の女はとくに婚姻の時長を辭して、神供の器に入れて、頭に戴きて神前に進む。一村の老若、小さき枝を以て、件の嫁しもの尻を打つ也。件の女[illegible]打れ

とて走るを立廻てうつ也」とあるが、これは今も行はれて居るかどうか、兎に角この場合の尻叩きは多産を祝ふ意から打つのであるが、鵜坂神社の尻打祭は全く相反したもので、道徳化した不貞の戒として打ち懲すものであり、前者の原始的なに對して後者は頗る近代的である。然し、この鵜坂の尻打祭も、祭日に神官が柳の枝で、女が關係した男の數だけ尻を打つて、その不貞をいましめたといふのであるが、今日ではそんな固苦しいことは通用しないといふので、廢されたといふ。だが、男せし數だけ打つたといふのは前にも云つた近代の改革で、舊くは矢張り原始宗教的な意味から多産祈願を念とした尻叩きであつたものと思はれる。それは柳の枝といふのが、多産を祈る粥杖の一種であるからで、さうとすれば、鵜坂の祭神は何神で在すかは知らないが、神意に反する仕打ちであると云はねばならない。この祭は舊くは、しもとだちの祭、しりだちの祭とも云つたとか。

筑摩明神は孝安帝の時の創立で、有名な鍋祭は、矢張り女訓的にされた一で、始めはこの祭に、相知つた男の數だけの鍋を奉納したのであつたが、今は廢れて、その俤を傳へる程度に、毎年四月八日八人の少女が紙作りの鍋を被り、神供を饌するの式に變つたのは惜しい行事である。『雜和集』に「近江國につくま明神と申す神おはします、其神の御誓ひにて、女の男したる數に隨ふて、鍋を作りてその祭の日奉るなり、男あまたしたる人は見ぐるしがりて、少し奉りたどしつれば、物のあしくて病みなどしてあしければ、數のごとし一個ればなほりなんどするなり。

あふみなるつくまの祭はやせなんつれなき人の鍋の數みむ」

若し少女の淫を犯せば其の鍋は破れたといふので、破れ鍋にとぢ蓋の諺は出たといふが信じ難い。

兎に角祭事としては異つて居るので、この鍋祭は近年よく舞踊や戲曲に作られ上演されてゐるが、今日のモダンガールに強制的にやらせたら痛快でもあり、鍋成金も續出することであらう。

伊豆伊東町の内に玖須美といふ村落がある。此處に豐玉姫命を勸請した音無明神といふ小社があるが、一説には、往時この地に流寓して居た源頼朝が、伊東入道祐親の女八重姫と情を通じ、しば〳〵音無の森で密會して居たので、父祐親は大に驚き、當時平氏全盛の時代であつたから、流し者の頼朝と自分の女が關係して居ると知れては一大事と、無慘にも娘を殺害して仕舞つたので、夫れを後に音無の明神と祀つたのであるともいふ。

この明神の祭禮は毎年十一月十日の夜で、神前には一切燈明類を捧げることも拂禮することも禁じ、その代りに線香を立てゝ、闇の中に螢火の如くし、その火を便りに、眞暗な神殿に氏子を集めて、神官から神酒を頂かせるのである。闇中で次から次に土器を廻すのであるから、殆ど盲の行で、隣席に在る人の尻を抓つて土器の受授をし、手探りに戴いて又次に送り、一廻りして式を終るので、當日は村内でも歌舞音曲を禁じ、明神の一の鳥居を潜る者は、知るも知らぬも無言になつ

て、尻を抓つたり抓られたりするのが祭典の式であるといふが、これも闇祭りの轉化した一種であらう。

緣結びの現代化

現代の、殊に大都市の女性は、男性同樣性の解放を當然のやうに心得るに至つた今日、然るに地方の若い女性はその配偶を求むるに苦しんで、良緣を祈願する者が今でも相當にある。

磐越線會津若松から新潟への途中に野澤といふ所がある。此處から約二里の南に、俗に山の神といふ大山祇神社があつて、冬は雪が深いので到底登れないが、舊曆九月九日の秋山の大祭は參詣者で大混雜を來すのである。新潟の近くへ出る阿賀川の上流只見川を下る筏師や山師が非常に信仰して居り、會津方面では良緣を得るといふので、殊に若い女の信仰は盛んである。この神社に詣る山道は約一里半で、その半分は廣い道路であるが、三十丁許りの間は二人が漸くすれ違ふ位の狹い徑で、處々一人でもやつと通る個所もある。この道を若い男女が上下するのであるから、本來の信仰よりも、この途中が參拜の標目とされて居るやうなものである。

去れば、この祭典中に野澤町の宿屋は一年の生活費をとるといふ位で、會津方面からの人は遙々オコゼの干したのを、背の處へ糸を通して一匹宛持參し、その奉納されたものは神前に箕のやうに垂れ下つてゐる。この夜、蒲原邊から一夜泊りで來る男女は、老若を問はず、又面識の有無もなしに合宿して、何處の宿屋も滿員、廊下までも溢れる盛況であるから、夜半の騷ぎは又一ト通りでなく、當夜に限つて××××とされてゐる丈に、宛然たる一大歡樂境を現出するに至るのである。

この類の緣結びの神佛や祭典行事は、拾ひ出せば未だ〳〵無數に遺つて居る。古來からある筑波山の嬥歌や、三河山中村で每年春季に行はれるオヤマと稱する、青年男女の見合の山遊びの如きは、いづれも古い嬥歌の遺風の變化して傳はつて居るもので、共同婚から女子解放への過程を語る一資料である。この反對に、各地に遺る泥かけ祭、水祝ひ、聟いぢめ、お腹くお等の如き、新婚の男に苦痛を與へる風習は、共同の女性を獨占した爲に負はされる制裁の記念で、隨て初夜權の貴さを來たすに至つたのである。

×　　×　　×

これ等性を中心とした崇拜、讚美の事實も後には時代の力に融和し、又附會をも生じて、性病治癒の祈願となつたり、增殖祈願の現代的なものと化して、大阪の十日戎、東京の酉の市の如き利欲中心の祭事となつたのもある。然し依然として傳統的に傳へられてゐるこれ等太古の遺風の、嚴守されてゐると思はるゝもの丶內、祭典を離れては、民家では建築乃至庭園の約束であり、各地に名勝として遺る公園の石の配置、花柳街と神社との關係等、一々具體的に說明して見たいとも思ふが、大體要求された紙數に不足を來しさうになつたので、遺憾ながら他日を期す。（五、九、六）


眼に見る吉相
呼べば答へる不景気の声
五十銭
五十銭
五十銭
五十銭
看板に偽り有りゃ
独身女指のモダーン酒場
サーヴイス百パーセント
酒豪の変遷
ジョッキの大杯


我輩は野獸派
である
文明人
のグロ見本
時間を超越した
彼女
手
の
腕時計
顔を、
かくして足
かくさだ

ヴァン・ダインの作風

平林初之輔

一

S・S・ヴァン・ダインは、数年前彗星のやうにアメリカに出現して、一挙に、数あるアメリカの探偵小説作家の中で、群を抜いて王座をしめた作家である。

「ベンスン殺人事件」「キヤナリ殺人事件」「グリイン殺人事件」「僧正殺人事件」その他に近作一つと都合五つの長篇小説を著はし、他に若干の短篇小説がある。

そのうちで前の三つは既に映画化され、ウイリヤム・ポーエルの主演で、三つとも日本へ輸入された。三つともトーキーであつたが、最初に来た「キヤナリ殺人事件」は日本にまだトーキーの設備の出来ない時分だつたので、サイレントで興行されたと記憶してゐる。

もともと探偵小説の映画化は、困難であると見えて、シヤーロック・ホームズ物にしても、リュパン物にしても、かつて成功したためしがない。トーキーは、その点で、サイレント映画よりも多少の便利をもつてゐる。けれどもヴァン・ダインの作品の映画化は、どれも大して成功とは思はれなかつた。それだのに、映画会社が、引きつゞき彼の作品を三つまで映画化したといふことは、彼の人気が、どれ程異常であるかを知るに足る。

二

探偵小説に限らず、一般の通俗小説に於いては、アメリカの小説は、イギリスやヨーロッパ大陸の小説に比らべて、馬鹿げた筋や、劍戟的なテムポや、千篇一律なハッピイ・エンドにいつまでも低徊してゐて、芸術的価値の乏しいものが多い。殊に探偵小説に於いてさうで、私も、一時探偵小説が好きで、大分新刊雑誌のものなどを読み漁つたことがあつたが、これはと思ふやうな作品にはめつたにぶつかつたことがなかつた。

かうした中にあつて、S・S・ヴァンダインの作品は光つてゐる。

ことに彼は一作毎に新しい趣向をこらしてゆくので、駄作といふやうなものは一つもない。どれを見ても、物語の構成から、犯罪捜査の手法から、それを表現する文章に至るまで、一分のすきもなく、しつかりしてゐる。

海の彼方のイギリスには、いま、エドガア・ウオレースといふ探偵小説の流行児がある。彼はその多作の点に於いて、如何にも楽々と大作を次から次へと発表してゆくエネルギーに於いて私たちを驚歎させるが、少[illegible]り一般

プーをとつて見ると、ゆるみがある。イージーに書きなぐつた形跡を蔽ふことができない。どうも私はは、ウオレースをアメリカへもつて來て、ヴアン、ダインをイギリスへもつて行つた方が、所を得てゐるやうに思はれてならない。それほどヴアン・ダインはアメリカ作家の中で異彩を放つてゐる。

三

ヴアン・ダインの探偵小説があれほど讀書界の人氣を獲得した理由はどこにあるのだらうか？ 私はその心理的分析にあるのだらうと思ふ。彼の作品は架空的な物語の筋を圖式的にこんぐらがらせ、發展させて行つただけのものではない。それに充分な肉附きを與へ外的事件の過程とゝもに內的心理の過程をも見逃さないやうにしてゐる。



ヴアン・ダイン氏

しかもそれは單にトリックに必要なためにさうしてゐるのではなくて、それが彼の全體の作風となつてゐるのだ。こゝに彼の作品に、一味の現實味とまた藝術性とを與へてゐる理由がある。それと同時に、馬鹿々々しいアメリカの探偵小説界に於いてあれだけの人氣を博した理由がある。人氣といふものはちよつとしたことが機緣になるもので、あまり讀者をあまく見て、讀者の人氣に故意に投じようとしたつて決して生れるものでない。

ちやうど大佛次郎氏の「赤穗浪士」が日本の大衆文學界で人氣を集めたのもこれと似てゐる。氏はこの作に於いて、大衆文藝の從來のレヴェルを少し高めて、それに藝術性と現實性とを與へた。それが人氣に投じた。しかし大佛氏の作品はまだ〳〵妥協的であるが、ヴアン・ダインの探偵小説には妥協がない。全身的だ。低い讀者を頭の中においてゐるやうなところがない。そこが彼のよいところである。

四

彼の作品にはわざとらしい伏線がない。そのかはり、第一頁から犯人があがるまで全體が伏線のやうなもので、どの一頁、どの一行、登場人物のどんな一言一行でも、漫然と讀んでゐるわけには行かない。犯罪に關係のないことは書かないといふのが彼の主義である。それでゐて、一見犯罪とまるで關係のなささうなこと、關係があるとすれば、互に矛盾してゐて、どうにも論理を辿つて行けないやうな事柄を彼は、樣樣に、ぎしぎしと詰めこんでゐる。

「グリイン殺人事件」の中で、素人探偵ファイロ・ヴァンスは、犯跡搜索の手がかりとなるやうな事項を二百近く列擧してゐる。二百近くである。しかも、それが一見互に矛盾しあつてゐるのだ。大抵の探偵小說では、手がかりは二つか三つ、せいぜい五つか七つである。それを彼は二百も列擧して、その間の關係を數へるのだ。そのうちのどれを省略しても手がかりは不十分といふことになる。

私はかつて、彼の作品を一つ飜譯したことがあるが、紙數の都合で、約四分の一ほど切り捨てねばならなかつた。普通の探偵小說では、切りすてるといふことは容易である。冗漫な描寫や、わき道へそれたところなどは却つて捨てゝ壓縮した方が効果的になる場合すらある。ところが、ヴァン・ダインの場合はさうではない。何しろ彼は、物語の本筋に關係のない描寫は探偵小說には禁物なりといふことを信條としてゐる作家である。だから、どこを切りすてゝも、犯人を見つける上の手がゝりをなくしてしまふおそれがあるので弱つたものである。

彼の作品は悉く「殺人事件」であり、またその形式はいづれも、作者のペン・ネームと同じヴァン・ダインが巨附隨に記錄して行つた日記の形式となつてゐる。探偵は皆、ファイロ・ヴァンスといふ作者の友人の形式になつてゐる。これ等のうちの或るものは彼の獨創とはいへないが、これらの形式を綜合したところに、しつくりした彼獨特のスタイルをつくり出してゐる。

新刊紹介

◇**プロレタリア政治學**　ウォロビヨフ著・小山低譯・マルクス主義的政治敎育の通俗階梯書として恰好の書。(東京神田表神保町一〇天入社・八十錢)

◇**ドイツチエイデオロギー**　マルクス・エンゲルス遺稿・河上肇、森戸辰男、櫛田民藏共譯・本書は同標題の第一篇フォイエルバッハ論及ひフォイエルバッハに關するテーゼの飜譯で、マルクス主義に於ける至重の文書の完譯。(東京府下中野七三我等社・價六十錢)

◇**黎明を待つ人々**　野邊愼一著・三部曲九篇の農村と農民を描いた新人の戯曲集。(東京神田三河町東京旭印刷會社出版部・價二圓)

◇**失業救濟事業概要**(自大正十四年度至昭和三年度)　事業調節委員會編(非賣)

◇**人間一茶の生涯**　吉松祐一著・俳人一茶の傳記で其の作品及び諸家の一茶觀等を蒐し全一茶を描く。(東京神田一橋通三・大同館・價一圓八十錢)



ラグビー漫談

宇野庄治

ラグビーが今日の様に盛んとなり、運動に興味を持つて居る人々の話題に上り、試合の見物人も萬を以て數へる様になつたことは全く驚くより外はない。

僕などが三高に入學した當時は今と同じく野球丈が盛んで、觀衆なども殆んどラグビーに興味を持つて居ないで、可成り面白い試合でも二十人か三十人位の見物人しかなかつた位であるから、今と比較すると全く隔世の觀がある。

丁度僕が三高に入學した時に、英國プリンス・オブ・ウエルス殿下が三高の校庭へ成らせられ神戸外人團と三高の試合を御覽遊ばされた。

ハーフタイムで殿下に御歸りになられたがその時神戸外人が五對三で勝つて居た時だつたので、結局は八對五で三高の勝利となつたが後から三高の選手が口惜しがることは大變なものであつた。

その時殿下に書いて頂いた自署が三高ラグビー部の寶となつて居る。

由來ラグビーなるものはギリシヤで生れたものであつて、競技の方法も足ばかりでやつて居たのであつた。それが間もなくノルマン人が英國侵入と共に海を越えて渡り、遂に日本の角力の如く國技となつたのである。それまで足ばかりで行つて居た此のラグビーが、ラグビースクールのエリス少年がゲーム中餘り熱狂した結果ボールを持つて走つたことが許されて現在の様になつたのである。

一體外國の選手がすべてさうであるやうに英國のケンブリッヂ或はオックスフォード大學のラグビー選手は風采學識品行方正が第一の條件として居るから、單にラグビーの選手であるとさへ云へば丁度軍人が金鵄勲章を持つて居ると同じ様にそれ丈でその人格が分りどんな上流社交界へにでも自由に出入することが出來る特權が與へられて居るのである。

斯の様に英國のラグビーは多分に國家的要素を含んで居るから自然と我が國のそれと趣を異にして居ることは云ふ迄もない。

毎年シーズン終りに行はれるインターナショナルの試合には英皇帝ジョージ五世陛下がグラウンドに成らせられ、親しく選手一同に握手を賜ることゝなつて居るが、この出場選手の面目も偏へにこゝにあるものと云へる。

我が國でも之れに倣つて秩父宮殿下を總裁に頂いて東西對抗試合には大抵御臨席を賜ることゝなつて居るが、彼我の風習が違つて居

るが握手を賜る恐れ多いことは思ひもよらぬことである。

秩父宮殿下で思ひ出したが、僕は殿下の御前で大失敗をやつた經驗を持つて居る。それは昨年十月關西の大軌電車花園グラウンド開きに全日本オールド・ボイス對全日本學生軍の試合があつた。

その時慶應出の木下氏がオールド・ボイスの、僕が學生軍の主將であつた。

試合開始前殿下に選手を一人一人御紹介する事になつたからしつかりやり給へと僕は杉本副會長から云はれた。がそれを聞いた僕はさあ大變とばかり味方の名前を覺えるのに忙しかつた、と云ふのは京大の連中ならよく知つて居るから好いが關東の方の選手に二三人はつきり知らない人があつたからである。若し間違つて申上げれば大變だから淺野君（立教）の名前などはしつかり腦に疊み込んだ積りだつたのだが、それがはつきりとしなかつたのであつた。

失禮な云ひ方ではあるが淺野君の名前と顏をその時初めて知つたわけであまり印象に殘らなかつたものであるから不覺にも殿下に選手を御紹介申上げる時にほつて忘れて仕舞つたのである。

先づオールド・ボイスの方から始まつて學生軍の方へ廻つて來たが既にその時僕はボウとして居たから、京大の選手は問題ではなかつたが、淺野君の前へ行つた時どうしても思ひ出せない。僕が選手の名前を殿下に申上げれば、殿下は一歩右へ御進みになつて次の選手の眞正面にお立ちになるのであるが、肝心の僕が御紹介申上げないから次ぎに御進みになる事が出來ず、一方淺野君はと見れば直立不動の姿勢で口をモグ〱させて「僕…淺…」「僕…淺…」と云つて僕に知らせる積りであつたのであるがなんのそんな事が聞えて思ひ出す程冷靜であればこんな大失態を演じないのであるが、如何せん何を云ふにもカッと上氣して居たから分る道理がない。

やがて關西協會の人が來て「淺野君です」と云つて呉れてホット一息繼ぐ間もなく次の番である。到頭終りの米田君（京大マネジヤー）の名前までも忘れて唯單に「マネジヤーです」と申上げて仕舞つて散々な不首尾であつた。

この苦い記憶を持つた試合がすんでから數日後になつて友人に賴んで撮つて貰つたシネコダックの寫しを見たが、殿下が丁度淺野君の前で長い間立ち止まつて居られるのをアリアリと見て今更ながら冷汗を流したことがあつた。何故あの時淺野内匠頭と覺えて居なかつたのだと考へたが……。この話は之れ位にして次に僕が三高に入學した時分の事を話さう。

僕は中學で野球、ア式フットボールの二つを稍、多とやつて居た關係上、入學試驗中動

勸誘しに來たラグビー部と野球部の人にシッカりやりますと答へて置いた所が、入學して見れば中學と違つて各部の間が圓滿でなく殆んど選手爭奪競爭と云つた樣ににらみ合つて居たので全く驚いて仕舞つた。

野球部の方からは前年一高に敗けて居るから早く練習に出て呉れろと云つて來るし、ラグビー部では早くラグビーに入部しろと丁度僕の室長がラグビーのマネジャーである關係上何時も寢る時に勸められるので、本當に困り孝ならんと欲せば忠ならずと云つた樣に進退谷まつて仕舞つた次第である。

こんな狀態で何時まで居ても仕方がないから雙方の主將の前でハッキリと返事をして呉れとの事であつたから僕は思ひ切つてラグビー部にはいりますと答へた。すると野球部の主將高瀨君が涙を出して「人の心ほど賴みにならぬものはない」と怒つたがそれが動機となつて遂に三高の野球部とラグビー部が提携して行くことになり両極端へ引張つて居ためて圓滿に進んで居る。

九月から愈ラグビーをやつたがなにをやつて居るかさつぱり分らない。此の分らない者を、スリークオーターでも難しいセンターを初めからやらされたからウイングの内藤氏などは殆んどパスを貰つたことがないと云ふ有樣で噛みつかれる程叱られたものだつたた。

その内に日が進んで愈東征する前晩（十二月三十一日）に僕等は割引の活動寫眞を見に行つた。恐らく忙しい大晦日に活動を見に行つた人は尠いだらうと思ふが最近では失業者が多くなつたから今年などは分らないと思ふが……。

東京へ來て慶應、早大、東大、横濱外人と試合を行つたが先づ慶應の試合では新進の僕にトライをさしてやらうと云ふ有難い先輩の思召しによつて七年間にトライを許さなかつた慶應に對してトライをさして貰つたことは非常に嬉しかつた。

早大とは三對三の引分。その時の早大メンバーの中には日活の谷岡信夫氏などが居て戸塚グラウンドには約五十人位の見物人があつた事を覺えて居る。

東大との試合の前晩から雪が降つてその日ラインが引けないものだから雪を取つてライン代りとした事があつた。所謂白皚々の中でラグビーをやる程愉快なことはない。だから敵が蹴つたボールなどに生中手を出せば落す心配があるから放つて置けばポツリと音を立てゝ雪の中へ落ち込んで仕舞ふ。それをよく拾つたものであるがあの時ほど面白い試合は近頃滅多と見られないし今一度やつて見たい氣がする。

横濱外人とは外人グラウンドでやつたがスリクオーターのウイングに、フオレストと云て百米十一秒フラットで走る素晴らしいラ

ンナーが居るから用心しろと先輩から云はれたが、試合をして見れば大したものでもなかつた。

此の時僕等のフルバックに眞鍋三郎と云ふ人が居たがキックにタックルが非常に上手で、外人にグレーテスト・フルバックと云ふ賞讃の辭を貰つた事があつたが、眞鍋氏は腰を痛めた事からカリフエスになつて今だに全快しない。全く惜しい名フルバックであり今だにもそのプレー振りが目の前に浮かんで來るのである。

一體ラグビーは傍で見て居れば肉と肉とが相薄つ試合であり、タックルなどは少し氣の弱い婦人などは恐がるがその割合に怪我はしないものである。

僕が今迄で一番大きな怪我と思つて居るのは昭和二年全國高校ラグビー大會に大阪高校と浦和高校との試合があつた。それまでフォワードがスクラムを組む時には先づ双方の間を開けて一緒にワイショ／＼と進んで組み、丁度ラッセル車が進むのによく似て居たから僕達は之れをラッセル車と呼んで居たが、此のラッセル式スクラムを組む時地面が濡れて居たから組む瞬間大阪のフッカー（名前を忘れて仕舞つたからAと假りに呼んで置く）Aが辷べつたその上へ浦和方が倒れたものであるから首筋の神經が切れて仕舞つた。

傍で見て居た僕などは驚いて飛んで行つたが神經が切れて居るから顔は笑つて居るが首から下の部は冷たくて全く感じがない。之れは助からないと思つてその儘帝大病院へ擔ぎ込んだが、發達した醫術の御蔭で輕く助かつた。

まあ之れ位なところが我國ラグビーが始まつて一番大きな怪我と云へるがこんなことは本當に稀れで、小さい負傷でも仲々しないものであるから傍で見て居る程亂暴な運動ではない。

ラグビーと名のつくものに英國ラグビーとアメリカンラグビーがある。

現在アメリカのカレッヂスポーツで一番盛んなのはラグビーとボート位のもので、野球は職業選手が居るから學生には餘り歡迎されて居ない。學生スポーツの中で野球全盛の觀ある我が國と大した相違である。だから今度來朝したシカゴ大學などはミシガン、イリノイ等のリーグの中で第五位と云ふ噂はあるが大したものではない。アメリカの學生野球の片鱗が覗ふ事が出來るわけである。

アメリカンラグビーはアメリカ人一流の負け嫌ひから英國ラグビーから一派を編み出したもので十五人でやるところを十一人でやり、そのプレーも仲々勇壯猛烈を極めて言語に絶するものである。

だから米國學生選手がアメリカンラグビーで死亡するものが一年間に二十名程あると云ふから驚く。

蹴球の方は試合中補缺は許されないがアメリカの方は負傷すればドシ／＼と代りを出すことが出來る。勢ひ出場選手も思ひ切つて働くから死ぬ様なことになるのである。

ある人が故ウイルソン大統領に前途有爲な學生が死亡する様な過激なラグビーは法律を以て禁止して欲しいと願つた處、温厚を以て聞えたウイルソン氏が

『成る程學生が死亡することについては充分考へる餘地はあるが、いやしくもアメリカ人である以上はかほどのスポーツ位やらなければアメリカは決して强くならない』と答へた相である。なんとふるつた答ではないだらうか。ラグビーの名前が違つて居ても同じ熱を持つて居ることはラグビーも變りないのである。

日本のラグビーも今後益々發展して今後十年もすれば野球のお株を奪つて仕舞ふだらうと思ふ。とくと見れば現在全く行き詰りの觀がないでもない野球に較べて、ラグビーはその底には興味津々として盡くる處を知らないと云つた様なものがある丈に、ラグビーを理解することは可成り難しいことではあるが、一度吹雪するグラウンドで汗を流しながら右往左往に走る姿を見かけるならば、年寄つた者は若い時を戀しく思ひ、若い者は定めし血潮に胸を躍らせることであらう（一〇、三）

新刊紹介

◇**案頭のハリウツド**　上山草人著・ハリウッド人草人のハリウッド觀であると同時に、ハリウッドに於ける彼の自傳でもある。寫眞や挿畫多數入。（東京京橋銀座西一ノ三實業之日本社・價一圓五十錢）

◇**地球一瞥**　北村兼子著。（大阪市西區阿波座下通二ノ三六改美社・價五十錢）

◇**ロンドン會議・統帥權問題**　若槻、永井、尾崎氏等の演說集。（東京麴町内幸町二ノ四虎ノ門ビル第一線同盟・價一圓）

◇**アメリカの悲劇（上）**　ドライサー著・田中純譯・アメリカ文壇唯一人者の重厚な長篇作家の傑作、アメリカの社會を解剖して精透を極む。（東京芝櫻田鍛冶町三友ビル大衆公論社・價一圓八十錢）

◇**綜合ヂャーナリズム講座第一卷**　内外社の處女出版で全十二卷（一册一圓五十錢）の豫約本、長谷川如是閑、下田將美氏のヂャーナリズム總論を卷頭に新聞ヂャーナリヂム、雜誌ヂャーナリズム、出版ヂャーナリズムに分ち各專門家が細分擔して編輯、經營、記事、出版等を論じてゐる。千葉龜雄、大宅壯一兩氏の氣の利いた編輯。（東京京橋桶町八内外社）

◇**女百貨店員**　吉行エイスケ著。モダン・ナンセンス・エロ派の尖端作家の短篇十九を收めた新興藝術派叢書の一。（東京牛込區矢來町新潮社・價五拾錢）

◇**都會地圖の膨張**　佐々木俊郎著・主に左翼的農民小說二十三篇を收む。（東京京橋築地三築地ビル世界の動き社・價壹圓）

◇**日本商業史**　菅野和太郎著・類書の刊行甚だ少き時本書の出現は學校等では喜ばれる事だらう。（東京丸ノ内昭和ビル日本評論社・價一圓八十錢）



大『松竹』を殺す者

邦枝完二

善惡二筋道

僕らが子供の時分に、好んでした遊びに「泥棒ごッこ」といふのがあつた。數人の子供が、刑事と泥棒とに分れて、互ひに亂鬪し合ふ、極めて奇怪な遊戯だつた。が、この遊戯を開催する場合、子供達は十人が十人、いづれも善良なるべき刑事に扮することを嫌つて、泥棒を志願したものだ。おそらく當時はまだ、五寸釘の寅吉とか、清水定吉とかいふ、英雄的兇賊のほとぼりが、冷め切らなかつたのにも因るであらうが、更に主なる原因は、威勢の惡い刑事などに扮するよりも、深みの知れないお泥棒樣に扮して、思ふ存分芝居氣分を滿足させたいといふ、一種の英雄心理が動いてゐたからに相違あるまい。つまり、賊は賊でも、徒らな惡黨ではない。惡に强けりや善にも强い、俠賊を以て、自ら任じてゐた子供心に外ならないのだ。

四五年前までの芝居者（僕は敢て芝居者といふ。劇場人などのなまぬるい文字は遣ひたくない。）は、その九分九厘までが、刑事よりも泥棒になりたがる子供心と、同様な心理狀態に置かれてあつたものだ。――惡いことはしてゐる。（それをするのが、泥棒の商賣だからだ。）が、良いこともしてゐない譯ではない。（民衆の娯樂を、一手に引受けてゐるといふ誇りがそれだ。）で、善惡二筋道を股にかけて、大上段に振りかぶつてゐたのが、三百年の傳統と因襲から生れた、芝居者の正體だつた。その正體は、時勢と共に次第に衰へたが、それでも、しつッこいのになると、幽靈にさへなつて、ついこの間まで、樂屋の隅にうろ／＼してゐたのだから空恐ろしい。いや、これはこの間までではない。今でも、あすこに一人、向うに一人と、薄い影と鋭い眼光を、千燭光の電燈下に光らせてゐるのだ。（斷つておくが、これらは決して、廊下ッぱの芝居者ではなくて、相當幹部級の地位を占めてゐる

者の中の存在である。)

例へば、××座の表方主任といふのがゐるとする。給料は、せいぜい二百二三十圓、正當のほまちを加算しても、三百圓は出てゐない人だ。これが、一ヶ月の半分を妾宅に暮し、待合に起居して、粉頭酥胸を擁してゐるとしたらどうであらう。素より恒産の有る譯ではなく、下級事務員から叩き上げて來て、今日を成した人物なのだ。

泥棒ごッこは、子供の遊びには罪がない。が、大人の遊びとしては、少しあくど過ぎはすまいか。大體「ごッこ」の意味は「模戲」或は「眞似」に盡きてゐる。これを大人が、自分を利するためにやつたとしたら、やられてゐる會社なり劇場なりは、隨分飽棒な次第ではないか。

一大トラストを決行した大松竹の内部に、かうした人物がゐるといふ説を、僕は肯定する者ではない。が、さうした前世紀の幽靈が、全然ゐないと斷ずる程、劇界の玄人でもないのだ。幸にして、昨今斯界にかまびすしい「大松竹危し」の聲が、これらの人物が因をなしての現れでないやうにと、僕はひそかに祈つてゐる。

一九三〇年、——今更幽靈の出る幕でもあるまい。善惡兩面の手形を持つて、關所を通る場合には「善」を出し、他人の眼が屆かぬと知つては、直樣「惡」をひけらかすなんざ、いくら芝居者にしたところで、既に「手」が出過ぎる。古い云ひ草たが、火のない所から煙は立たない。松竹は、社長を初め重役達が、一顧るに足りない「聲」に對して、も少し眞劍になるべきではないか。

大トラストの非哀

劇界の太閤を以て、自ら任じてゐた大谷竹次郎氏が、去年の暮に到つて、唯一の他人の小屋であつたところの「帝劇」を手に入れた結果、劇界トラストを完成し得たことは、さぞかし滿足だつたに相違あるまい。苟くも俳優と名乘る程の者ならば、松竹の息が掛らなければ、やりたい芝居もやれないといふまづ以て大谷氏にして見れば、功成り名遂げた感の、深きものがあつたに相違ない。

が、その「榮華の夢」が、果していつの日まで安らかであつたらうか。半歳を出でぬ間に、(再びいふが、半歳を出でぬ間にだ。)氏並びに氏の周圍の所謂幹部達は、周章狼狽の極、上は幹部俳優から、下は下足番の末に至るまで、一切に二割乃至三割の減俸を、敢行せねばならぬ結果に立到つた。

驚いたのは、啻に俳優ばかりではなかつた。大松竹王國の統制成つて、今後は貧乏ゆるぎもするものではないと、喜び勇んでゐた數千の従業員並びにその家族は、餘りのことに、怒りもならぬまでに茫然た

るものがあつたが、それかと云つて、憤慨の餘り辭めるにしては、如何にも時勢が悪い。第一、俳優として立たうとする以上、松竹の旗下から去つたのでは、現在踏むべき舞臺がないのだ。で、幹部俳優はともかく、それ以下の連中は、泣く子と地頭には勝たれねえといふ、日頃自分達が舞臺で使ふセリフをそのまゝに、諦めるより外はなかつた。

しかし、諦めはしたものゝ、問題は顎の下に懸つてゐる。「憚りながらおれの足の裏にや、檜舞臺の匂が、骨の髄まで沁み込んでるんだ」などゝ、いゝ氣なタンカを切つてる譯にも行かず、とどのつまりが、恥も外聞もなくなつて、食はずにやゐられねえ、といふところから、やれ結束だ、それ總同盟加入だといふ、藝術本位の芝居道から見れば、まつたく以て、江戸ツ子の面よごしを、背に腹は換へられずにやつて退けてしまつた。

そこで遂に、演藝畫報誌上に於ける、大谷氏の聲明となり、井上常務の從業員に對する了解となつて、陣頭將に馬を進めて、總軍を指揮しようと身構へた大谷氏は、この士卒の足並に、自らも抜いた太刀の納め場がなく、悄然として、落日下の居城に引上げねばならなかつた。百年の夢富に眩れて、唯我獨る劇界の廣野は、時雨の裡にゐる有樣とはなつたのだ。

顧れば明治四十三年の春、前の座主前田房之助氏から、金四萬圓を以て、新富座を手に入れたのを手始めに、一年後の歌舞伎座の開場式、更にその翌年の明治座の經營と、相次いで順風を孕むこと二十有二年。お家安泰無事息災を謳ぎつゝあつた大松竹の家の子郎黨も、時代の嵐には敵し得なかつたのであらう。隊伍は亂れて、今や大トラストの重荷の下に、きのふの夢を懐しむより外に術がなかつた。

或る人はこれを指して、金解禁がもたらした、不況の結果だと云ひ、或る人は、吹き捲る世界の不景氣が原因だともいふが、それにしても、粥をすゝるにさへ事を缺いて、たとへ下廻りにもせよ、役者の名の付く人達が、内職に「衞生箸」の袋貼りにまで成り下らなければならぬとは、時世時節とは云へ、餘りにもみじめなことではないか。

噫、劇界大トラスト！歌舞伎、東劇、明治、帝劇、演舞場、本郷、新歌舞伎と、錚々たる大劇場をその掌の裡に握りしめて、時こそ到れりと見得へた、劇壇の巨人大谷竹次郎氏の夢や如何に。

巷間傳うるところに依れば、去る九月十日の夜、采女町なる大谷邸に集合した松竹の幹部井上、向山、木村、遠藤、城戸の諸氏が、從業員減俸の件を議した時、大谷氏は、藝術家たる俳優の減俸を心から悲しみ、ひそかに涙を拭うたといふことだ。假令、その眞僞を知らずと雖も、また一掬の同情を禁ずるを得ない。

すまじきものは興行師か。一將功成って萬卒枯る。が、その萬卒たる新舊中輸以下の俳優を枯らしたのは、果して大谷氏の罪であらうか。僕は敢て言ひたい。罪、彼に無し。寧ろ副將以下の將官に有るのだと。

あの頃の松竹

京都夷谷座の中賣から身を起した白井大谷の兩兄弟が、一は關西に覇を築き、一は東都に城を固めて、能くその覇業を成し遂げたことは、講談社式の物語に依らずとも、正に立派な出世美談に相違ない。關西の覇王たる白井氏の事は暫くをき、東京に於ける大谷氏の事跡を語るならば、氏が笈を負うて上京した明治四十二三年頃の東都の劇界は、既に團、菊、左の巨頭連は亡かつたもの〻、しかも未だ銷沈ならざる歌右衛門（芝翫）の人氣は四邊を壓し、加ふるに梅幸、羽左衛門、幸四郎（高麗蔵）中車（八百蔵）段四郎（猿之助）等の活躍は、好劇家が垂涎おく能はざるの時であつた。

大望を抱いて上京した大谷氏は、もとよりこれら人氣俳優の興行を、己が手に左右したい希ひに、外ならなかつたのではあるが、如何にせん、東都の劇界には、その人ありと知られた巨星田村成義が、智謀深略至らざるなく、歌舞伎座の城塞を脚下に踏へて、巖然と控えてゐたし、かて〻加へて、江戸ッ子を以て任ずる俳優達に、何んぞそれ上方の小屋者に、指一本指させるものかとの頑張りを続けてゐた爲めに、流石の風雲兒も、徐ろに機を見るより術がなかつた。

折から、興行難に陥つて、賣物に出たのが新富座だつた。——新富座。明治の名興行師守田勘彌が、俠客新場の小安の援助を得て、俄然猿若町の片隅から、東京の中央へ乗出した、由緒の深い新富座。しかも曾ては、米國の大統領グラント將軍が、守田勘彌に羅紗の引幕を贈つたことのある新富座。夜間は面明りに依つて演ずるより外に、方法のなかつた舞臺に、晝を欺くばかりの花瓦斯を點じて、當時の觀客を恍惚たらしめた新富座。——その劇界の先驅小屋たる新富座は、中村傳九郎から前田厚長に渡つて、海鼠塀の上に揚げられた櫓と共に、今や聊か持て餘しの形になつてゐた時だつた。

大谷氏に取つて、これ程もつけの幸はない。前にも書いた通り、彼は金四萬圓を投じて、この幸先のよい小屋を手に入れると同時に、大阪から延若を呼び寄せて幕を開けた。これが四十三年の四月であつた。珍らし好きの東京人は、歌舞伎座をそつちのけにして、つッ掛けた。斯くして松竹の名に於ての初興行は、まづ東京に於ける最初の勝運を贏ちうることが出來た。

が、大谷氏の希望は、勿論こんなことで滿されろ譯はなかつた。目

指す本山は、劇場は勿論だが、それよりも俳優の上にあつたのだ。何とかして歌舞伎座並びにそこに據る俳優を、自分の手のものにしたい、と望んだ。しかもこの彼の希望は、一歩一歩、力強く達せられて行つた。それは翌四十四年の、火災後に於ける歌舞伎座の開場式以後の、二興行がそれだつた。(ついでだから記すが、この時の檜造りの歌舞伎座の普請は、僅かに八萬五千圓で竣工したものだ。今から思ふと隔世の觀があるではないか。)

大谷氏は考へた。自分が歌舞伎座並びにその俳優を陷落せしむる爲めには、須らく歌舞伎座の大株主たらざるべからずと。そこで專心株の買占に取掛つたのであるが、さてそれを敢行するには、總株の少くとも三分の二を、己が手に收めねばならない。しかも一番困難のことは、松竹なるものに對して、多大の反感を持つてゐるところの俳優が、この大株主であることだ。彼等を如何にして説得せしむべきか。これが當面の一大問題でなければならなかつた。

一方、田村將軍は、松竹のこの形勢を見て取ると、盛んに俳優の背後へ廻つては、煽動し始めた。

「上方贅六に、歌舞伎を乘ッ取られるやうなことがあつたら、それこそ江戸ッ子の面汚しだぜ。日本一の歌舞伎座だ。指一本だつて指させちやいけねえ。」

もとより俳優達の氣持も同じだつた。誰が一枚だつて、こつちの持株を讓つてたまるものか。と力み返つてゐた。

この時既に、價格にして一萬八千圓ばかりの株を集めてゐた大谷氏は、手を換へ品を換へて大株主なる俳優の説得に努めたのであるが、ヘソに反感を持つた彼等は、實以て梃でも動きさうにもなかつた。

が、田村將軍は、たとへそれだけの株にしても、現在松竹の手へ這入つたとなると、心は平らかでなかつた。そこで、何とかしてその株を買戻してしまへとばかり、當時の社長井上角五郎を説いて、「あの贅六から、どうか持株を買戻して頂きたい」と迫つた。

井ノ角も、尤もな云ひ分だと思つたのであらう。早速築地の香雪軒で、大谷と會つて、持株を二萬圓で賣つて貰ひたいと交渉した。勿論、大谷がその申出を拒むことゝ豫期してゐた。が、大谷氏の答へは、全然豫期に反したものだつた。

「我々兄弟が歌舞伎座の株を買つたのは、何んとかして歌舞伎座を、自分の手で開けて見たいと思つたからだ。株を買つていやがらせをしたり、その上株を、高く買戻して貰ふためにしたのではない。よろしい。そんなに欲しい株なら、綺麗さつぱり熨斗を附けて、歌舞伎座へ寄附しませう。」

このセリフが、關島鼠人井上角五郎、ならびに江戸ッ子田村將軍の

竪ノ若を、相當以上にひやりとさせたのはいふまでもなかつた。——彼は堂々と大手を振つて、開場式以後の興行を、二回續け打ちすることが出來たのだつた。

それ以後の松竹が、順風に帆を揚げた形だつたのはいふまでもない。四十五年には、木村錦花が左團次一座を引具して加盟し、大正二年の十二月には、大谷氏の單獨初興行として、六代目の元右衛門で、歌舞伎座を開けた。（當時の左團次は、明治座の座主として、甚だ不如意の時代に在つた爲め、明治座を松竹が經營するといふだけの條件の下に、身ぐるみ松竹に舞込んだのだつた。）

かくて、さしも強硬だつた田村將軍も、歌舞伎座を辭して市村座に據つた頃からは、大谷氏に對する反感もまつたく失せて、屢々分興行を打つやうになつてゐた。大正四年に於ける市村座の六代目、新富座の吉右衛門などは、田村將軍と大谷氏とが、同じふところで打つた見本のやうなものだつた。

歌舞伎座が、完全に松竹合名會社の物になつたのは、大正四年の春からであつた。この時初めて「松竹合名會社專屬俳優」なる名が生れて、歌右衛門を筆頭に、歌舞伎の幹部以下が帝劇の梅幸以下と相對して、堂々の陣を張つたのだつた。

假令天地は崩るゝとも、歌舞伎劇の殿堂には、千筋程のヒビも入ることはあるまい。——さう信じてゐたのは、獨り大谷氏とその股肱の人達ばかりではなかつたであらう。

大松竹を殺す者

僕は曾て震災の直前、自分の主宰してゐた「劇壇春秋」なる小誌に俳優の給料の餘りに高價なるを說破して、今にして善處せざれば、興行者は必ずや悔あるべしと爲したことがあつた。が、當時芝居道の全盛は、恰も奔馬の花野を驅るに等しく、僕如き一介の書生の言は、寧ろ憐むべきものとして、一顧だもされなかつたのは勿論、それがために、心なき俳優には恨まれ、戲曲の上演は體よく拒絕されて、甚だ埋まらぬ結果を招いたものだつた。

しかも、當時馬耳東風的の態度を持してゐた松竹ではあつたが、今や己が袂に火の移るを見るに及んで、果然策の採るべきを知らぬ結果、漸く慌しき減俸問題に觸れ、劇界空前の大騷動を惹起するに到つたのは、今更ながら、智慧なき沙汰と云はねばなるまい。

一興行の給料一萬二千圓也。假令そこに直接支給すべき門弟を持ち、番頭、男衆等を使用しつゝあるにもせよ、二十二日乃至二十五日間の彼の所得が、一萬圓以上と聞いては、それが如何程名人上手の藝だとしても、金を取つて客を呼ぶ興行である以上、興行者は引合ふ譯

がないではないか。まして、名人でもなければ上手でもなく、徒らに家柄に因つてのみ、七千、八千といふ給料を貪る俳優があるに至つては、豎子復何をか爲さんやと云はずにはゐられない。

「おれが取る金だ。と同時に、興行師が出す金だ。たとへいくら取らうと、お前なんかの世話にやならねえよ。」

彼等の九分までは、おそらく斯う云つて啖呵を切るに相違あるまい。なる程、興行者が出して役者が取る金だ。高からうが安からうが、僕の口を挾む問題ぢやないかも知れない。が、ちよいと待つてくれ。これが競馬で勝つた金ならば、取引は、倶楽部と馬券所有者の間だけで、事が濟むに極つてゐよう。ところが、芝居には「觀客」といふ厄介な者があるのだ。この厄介者を差し置いて、興行師と相對づくだなど〻ほざくのは、飛んだ思ひ違ひぢやあるまいか。

彼が出るために、入場料の高くなることはある。が、彼が出るために、入場料が安くなつたといふ話は、一度も聞いたことない。大體今時、一人頭六圓といふ入場料が、如何に高價であるかは、考へるまでもあるまい。この高價の入場料が生み出される第一の原因は、果してどこにあらう。贅を盡した大道具、華美を極めた衣裳、もとよりそこにもあるであらう。が、最大の原因は、幹部と稱する俳優の給料にあるのは、論ずるまでもないのだ。

抑々俳優の給金ほど不合理のものが、今の世の中に、二つとあらうか。他人に對しては絶對秘密である上に、上下の隔ての、餘りにも遠きことは、一重役と小使以上ではないか。下廻り俳優（十才から七十才までを網羅してゐる）にして、一興行よく五十圓の身上を取る者が幾人ゐるであらう。おそらく、百人に二人を算することの困難な事は、言を俟たぬではないか。

假に、一芝居に百人の俳優が働くとして、その三分の二は、二十圓から高々五十圓までの身上だとすれば、三分の一、或はそれ以下の俳優に依つて、大枚の給金は壟斷されてゐるのだ。——敢て大枚の給金といふ。現在歌舞伎座の一興行に費すところの、八萬何千圓の給料は、斷じて安いものではない。この給金が入場料に掛つて來る時、觀客は如何に望んでも、安い芝居を見ることは、不可能だとせねばなるまい。

去月、松竹の當事者は、俳優並びに從業員の給金を下げるに當つて、これを「民衆のため」だと云つた。何ぞその言の卑怯なる。民衆のためにするならば、何故これを、二年三年以前に於て行はなかつたのか。賣店や食堂の貸借賃を引上げて、觀客に粗食粗品を賣らせるの愚は、誰が爲したる業かは知らず、「民衆」に名を藉りて、從業員の減俸を行ふならば、よろしく幹部俳優の給金を半減して、以て下級俳優

を扶助し、而して相當無理ならぬ入場料を取つて、民衆を滿足せしむべきではなかつたか。

この不況時代に於て、芝居が立ち行かぬのは、解り切つてゐることだ。しかも單なる噂にもせよ、松竹危しと聞けば、僕と雖も素より同情なき者ではない。が、行はんと欲せば、敢然として行ふべく、苟くも卑怯な振舞は、斷じて不可とせねばならぬ。

傳ふる者あり。松竹は寶塚の小林一三氏の手に落つべしと。——僕、その眞僞を知る者ではない。が、かゝる噂だけでも、これを聞く大谷氏の胸中は、如何ばかり寂寥たるものであらう。

二十餘年の榮華の夢に生きて來た、この大松竹を殺す者は、果して何人ぞや。俳優か。重役か。將又從業員か。大谷竹次郎氏自身か。僕、金的を射るの術を知る。しかも落陽を仰ぎて之れを爲すは、君子の道ではあるまい。口を緘して過ぎゆく風雲を眺めんのみ。

（十月九日夜）

新刊紹介

◇**世界經濟（總論）**　世界經濟研究所編・專門編輯員が分擔して世界經濟概觀、生産消費、金融、物價貿易、勞働賃銀失業、カルテル・コンチエルン・トラスト、世界經濟統計の諸項目に分ち各國別に多くの統計表入で概觀され引續き續刊さるゝ筈で一般學徒の研究に好手引となるだらう。（東京市京橋區第一相互館千倉書房・價一圓五十錢）

◇**豫算の知識**　前田美稻著・日本の豫算制度の解説で國民常識の啓蒙書だ。（發行所同前千倉書房・價一圓五十錢）

◇**未明童話集**　小川未明著・未明氏の童話の持ち味は已に定評がある、四十數篇を撰收し初山滋の繪入で美本。（東京日本橋通二丁目丸善株式會社・價參圓）

◇**羅馬開催日本美術展覽會に就て**　横山大觀編・同展覽會の復命書ともいふべく卷末に伊太利人の展覽會評を收む。（非賣）

◇**都市の氾濫**　永島不二男著・プロレタリア詩集。（東京本郷曙町二素人社・價五十錢）

◇**水枕**　稻森宗太郎歌集。（東京市外大井町八二五地上社・價二圓三十錢）



哈爾賓散歩

林芙美子

一

散歩のことを、上海語で、白想と云ふ。白想！　まことに懷かしく、私の遠い散歩に、此字こそ適當な言葉はないだらう——。

哈爾賓から上海までの旅を思ひ立つて、何の用意も、何の心がまえもなく、私はまづ、北滿洲へ、最初のコースを取つた次第である。

神戸の波止場を出て數日、日本の雲を剪ると、雨に濡れた大連の埠頭に、私はいつもながらの無鐵砲さに、いゝやりばもない穩な、悔ひを擴げずにはゐられなかつた。言葉の通じない、風俗の違つた土地、そして用意の旅費も手薄な私が、うらる丸の赤切符を捨てると、いつその事、もいちど赤切符を買ひなほして、日本へ歸へろうかしら……と、私はざんざ降りの雨に濡れながら、焦心を抱いて埠頭に立つた。

鋸で齒を刻むやうな、行詰りを感じ、うんうん唸つてゐた內地での私が、地圖の上でひらつた支那の、あの漠々と野方圖もなく廣い面積を見ると、ひよいとしたら、あんなに大きいのだから、片隅ぐらい此小さい女にくれないとも限らないと、不思議な秋夜の空想から、旅立ちをケツイして、うらる丸の燒けつくやうな船室に、何日か私は海と語りながら遠い支那を思つた。

「行つてしもた
行つてしもた
皆笑ろてる間に
皆行つてしまひよつた」

大阪者の小供が、三等の小さい圓窓から海を眺めて、こんな事を唄つてゐた。なる程、皆行つてしまつた。日本の波止場も日本の空も——。

白想の氣持ちで旅をしやう。生か！　死か！　こゝまで乗り出して來て、こんな事をとやかう考へるのは馬鹿らしい事だ。そこで私は、

とてつもなく大きい支那地圖を、寢そべつた女達の白い足の上に擴げて、ハルビンまでの都會に朱線を長く引つぱつてみた。

群れた女の酢つぱい體臭！　汐の匂ひ、干大根と油揚げ、南京米に潮風呂、あゝ拾九圓の旅愁である。



高粱の穀を刈る晩秋の滿洲

2

太陽だらうか、月だらうか！　原野と空が赤く燃えて、黄昏の森のかなたに、玉轉がしのやうに、火がまつて落ちる。「夕陽です。」食堂車でお茶を呑んでゐる私の耳に、こんな優さしい言葉が聞えた。振り返へつて見ると、食堂の女給仕、露西亞女だけど、日本語が大變うまい。むき出しの白い腕に產毛が金色に光つてゐた。「夕陽ですよ。」あれが夕陽かしら、暗色になりかけた野原の果てに、狂人女が笑つてゐるやうな落陽の赤い炎、古ぼけたザンゴウの跡が、ところどころ走り去る。

内地で聞いた馬賊の話もこゝでは昔話かも知れない、滿洲で强いものは、人間よりも自然だ。どこへ行つても、果てしもない空と原野、ところどころの森、鐵道の沿線には、今こうりやんが茶色にみのつてゐる。何町おきか？　日本の守備兵が、一人二人列車の窓から見えたが、内地の波止場でよく見た、滿洲行きの兵隊が、こんな茫漠とした廣い野原を背に鐵道を守つてゐる姿、胸が熱くなる。長春の終點で降りたのが夜更け、ホームを歩くと自分の體中に、靴の音がコトコト響いて來る。

鳥居龍藏博士夫妻も、此汽車に乘つてゐらしたのだが、どこか途中で下車されたものと見えて、降りられた模樣もない、薄暗い待合室には、露西亞人と支那人の巡邏が、居眠りをしてゐるし、私一人日本人

かと思ふと、飛んでもないところにやつて來たものだと、心細くなつてしまつた。

幸ひ助役西川氏の好意がなかつたら、私はハルビンまで行けたかどうか、大連の滿鐵本社では、長春までのパスをもらうのに、個人の場合は駄目だと云ふ事で、やむなく、一晩大連に泊り、朝、十河理事にお願ひして、やつと、長春までの二等切符をもらうまでの、あの佗しい氣持ちとくらべて、夜更けの長春驛で、しかも汽車の出るまぎは、何も云はないでパスを下すつたお心づかひ、私は一生忘れないだらう。

どうしてから電鐵が暗いのか、待合室のぼんやりした椅子に、泥のやうになつた苦力の群や、辮髪を卷いたお百姓、爪の長い支那紳士の家族、賣店の陳列箱の前では、露西亞人のみすぼらしい男達が、荷物を片手に、紅茶をフウフウ吹きながら呑んでゐた。

東支鐵道列車、これはもうすばらしいものだ、滿鐵列車も内地のよりはるかに乘心地がよくて、三等は皮張りの椅子だつたり、とに角、北から南への汽車は皆樂しい乘心地だつた。

國際列車に乘つて、寝臺室の横の細い廊下をコツコツ渡つて行くと、遠く來たものだと思はざるを得ない。私の寝臺券はナンバ拾九號、寝臺は一室に四つ。私の十九號の寝臺には、でかい露西亞女が、[illegible]のやうな顔をしてもう居眠りしてゐた。老いた列車ボーイが綺髭に肩をゆすつて起してくれたのだが、わざと狸寝をして起きてくれないので、二階のやうに高い上の寝臺に這ひあがつて、私はやつと旅の着物を拔いだ。

朝。

三姓毛と云ふあたりで眼の覺めた私は、窓を開けると、點々と散つた美しい露西亞人の農家を見た。霧の流れてゐるあつちこつちの百姓家の庭には、コスモスが水々しく咲いてゐた。

ボーイが扉を叩いて行く。

「グッドモオニング！」

朝のあいさつは朗らかだ。昨夜の寝臺を乘り取つた彼女は、濡れたブラシで子供の頭髪をといてゐた。

「グッド・モオニング。」

おしやまな、赤いガウンの子供は靑い瞳で笑ふ。

言葉の通じないつて事は、とても愛嬌だ。

廊下の小さい引出しテーブルで、紅茶とパンをたべながら、窓を覗くと、顧郷屯と云ふ小驛が走つてゐた。次がハルビンだ。日本人の顔は一人も見えない。支那人と露西亞人と、少數の亞米利加人らしいのと、ハルビンに降りたら、どんなふうにして宿をさがそうか知ら。宿[illegible]さがうまく見つかればいゝが、紅茶の硝子コップの底に、拾錢玉を

入れておくと、ボーイは眼をみはつて喜ぶ。

ハルビン！　なつかしいハルビンに着いた。

「ヤポンスキーマダム！」

これが最初に聞いた、私への言葉だ、驛には三々五々麗はしい華美な、ドレスを着た、いはゆるハルビンの露西亞女が、花のやうに、群れてゐた。中には、こんなにも貧しい服を垢抜けて着られるものかと思ふ程な、キリッとした勞働者や、ジプシーの男や、コオカサスあたりの百姓婆さんが、空の澄んだ靑さと一緒に混つて、全く小さな憂鬱なんて、どつかへ吹つ飛んでしまふ。私は口笛でも吹きたくなつた。

「ヤポンスキーマダム！」と呼びかけてくれた運轉手の汚れたオープンの自動車に乘つて、私が第一番につかつた露西亞語は、

「ヤポンスキーホテル！」

窮すれば通ずと云ふ言葉は、こんな時に用ひるのかも知れない。

「ヤポンスキーホテル？　ハラショ。」

街を剪り街を剪り、がたがたなどらいぶ。舗道を行く馬車の古風さ、馭者は赤いルパシカの上に黑いチョッキ、白い馬を持つたのなぞは、實に春は馬車に乘つての感が深い。何と云ふ古風な街だらう、空も美しいが、中央寺院の圓屋根、煙草のスマートな繪看板の廣告、支那料理店の軒には、ぼたんばけのやうな房が朝風に埃をヤリヤリ揚つてゐる。

私のうろ覺えた露西亞語で泊つたのが、埠頭區川地街の北滿ホテル、北向きのバザール市場の軒を見はらした、金參圓也の部屋、ベッドは少々脊が高すぎる。

何から先きに落ちつかうかしら……。

こゝは日本人の宿なので、宿代は勿論日本金の參圓、露西亞人のホテルだと、二ドルも出せばいゝ部屋が借りられると云ふ事だ、すると日本金に換算して、壹圓いくら、何と良い時季にやつて來たものだらうか、此ホテルの階下はキャバレーで、夜明まで唄聲が聞える。

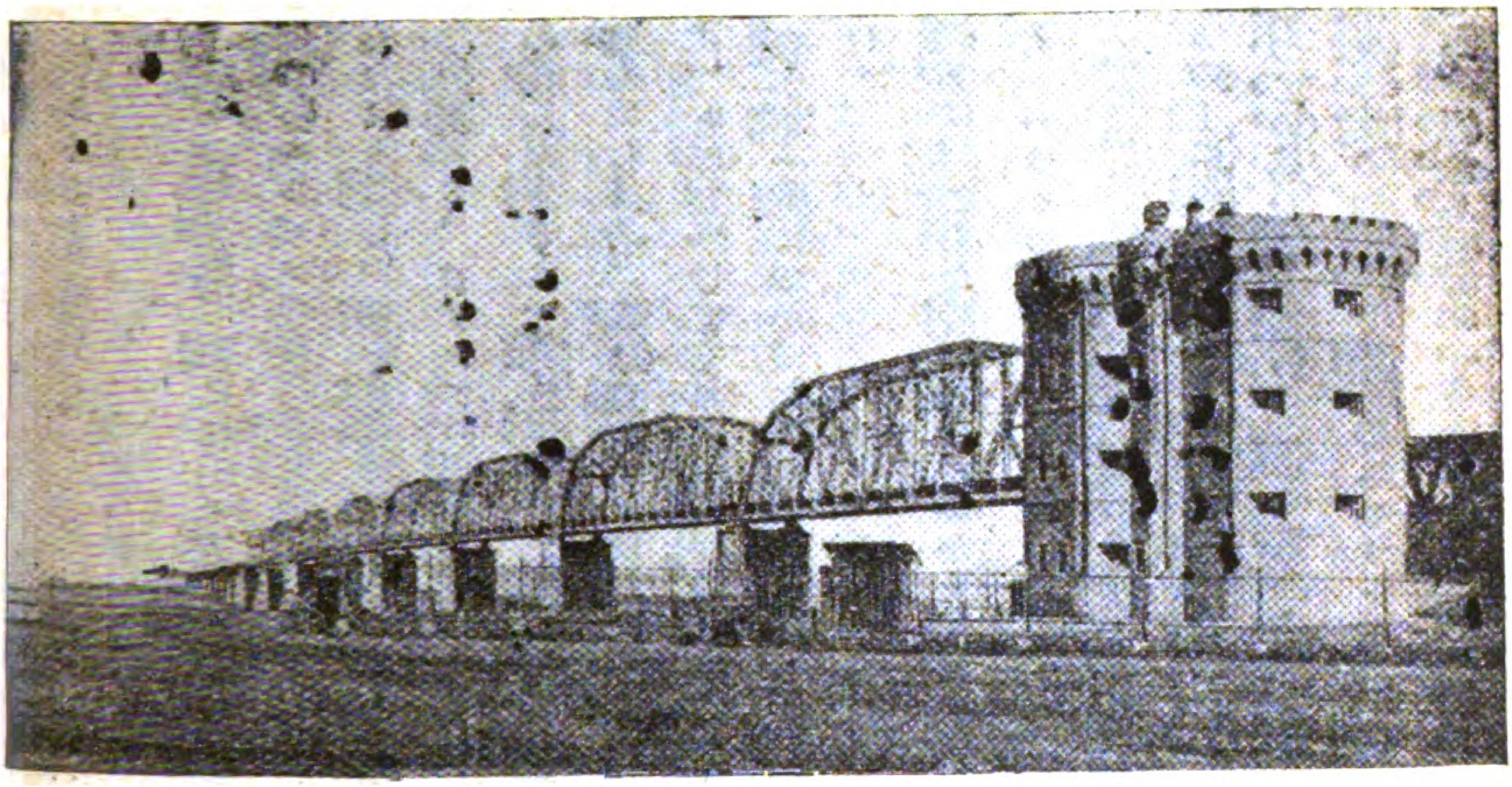
ホテルで御飯を食べる位馬鹿らしい事はない、二三十センも出せば、キタスカヤあたりで、素晴らしいアペード（晝飯）が食べられる。辻々には可愛らしい小店があつて、酒も煙草も賣つてゐるし、煙草は數えきれない程、豐富な種類がある。日本の切手一枚で買へる安煙草でさえ、內地のバットとはヒカクにならない。

トロイカ、これは紫色の箱の中に、薄い紙で巻いた薄かな女煙草。モスコウ、茶色つぽい箱の色が、秋に吸ふにふさはしい男の煙草、何と何と嬉しい事か！　パンは勿論甘美しい、丸太石の舗道に影をつくつたニレの樹、その木影に靴みがきの男が、素晴らしく弓を張つた乳色の女の足を抱いて、銀色の靴に粉をふりかけてゐる。何と何と、

悲しい風景。

　起ると、やかんをさげて辻へ湯を買ひに、そこでは、パンも腸詰も、トマトも、煙草も、新聞も、清潔な朝の御飯。郊外の家を覗くと、庭の芝生で、紅茶とパンと瓜を食べた子供は、朗らかに唄つて學校に行つてゐる。

　臺所から解放されたハルビンの女、夜の舗道は、お父さんも子供も娘も母親も、唄をうたつて御散歩だ。



ハルビン松花江の大鐵橋

3

私は十日あまりの間に、ハルピンでは色々な人に會つた。

チエホフの好きな、日露協會學校の水谷先生、日本の「改造」がすらすら讀める、同校のアムプリーフウドスチエンコフ、こんな方達にも、お話をする機會を持つた。

アムプリー先生は　又わざわざ通譯の勞も取つて下すつて、赤色系詩人（名前を失念した）とお會ひする時、馬家溝の靜かなお部屋も提供して下すつた。

夕方。

アムプリー先生の簡素なお部屋の中で、私は、現在實力のあるソヴエートロシヤの女流作家について、此赤色系詩人とお話する事が出來た。非常に體格の大きな、沈默家で、私は何か彫刻でも見てゐるやうな感じだつた。

現在のソヴエートロシヤの女流作家と云へば、まづ次にあげる四人位であるが、まだまだ後から若いひとが、出て來てゐると云ふ事だつた。

アンナ・カラワーエワ、此女は、西比利亞生れの女流作家で、最近

の例として、一茶漂泊を書いたものに、「[illegible]」と云ふのがある、日本にも譯されてゐないでせうか、譯されてゐたら、ぜひ讀んで見る必要がありますね、と云ふことだつた。

マリエッターシヤーギニヤンは、現在は熟練紡績女工であるが、詩人で長編作家で、美術學博士と云ふ肩書きがある。日本にもかう云ふ作家の一人位は出ていゝものだ。

セイフーリナー彼女は、日本の女流作家のやうに若かくから出た人ではなく、三十四五の時から偶然に物語りめいたものを書き出して、有名な作品としては、「ウヰリネーヤ」といふのをあらはしてゐる。ウヰリネーヤと云ふのは女の名前で、此本は佛語に譯されてゐると云ふ事だつた。

ニーナスミルノーワ、此女は西比利亞のハムスンと云はれてゐる、色々な生活體驗家で、マダム・ハヤシの好きそうなものを書くことですと、以上四人の女性作家について、くわしく話してくだすつた。

「貴女は大變一本筋で、矛盾を殺し得ない人ですね、矛盾と耳の垢は取つた方がいゝですよ。」

後日、私の詩集を送る事を約して、馬家溝のアンプリー先生の家を出た。熱い握手と矛盾と耳の垢の事を私は忘れないだらう——。

その外露人で紹介された人に、ヴエラ・ヴシリエヴナ・ラチノバ、美しい薔薇のやうなお孃さんで、チユウリン西伯利亞の近かくの[illegible]の娘さん、勿論お父さんは白色系に違ひない。レオニド・タルゲエッチ・アスタホフ（司斯塔霍夫）ザリヤ新聞を發行して、大變日本贔屓の人ザリヤ紙の三分の一を、私の事についての感想で埋めてくれたせいか、街の靴屋の主人が、「マダム・ハヤシ！」と呼びかけてくれた時、驚いた事があつた。

アレクセイ・アレクセイエヴッチ・ゲリゾフは、青年詩人で、ペンネームをアチヤイル——菊の花咲く國のフミコ・ハヤシへ、雪の國の男アチヤイル——こんな署名をした詩集を私は此人からデジケートされた。

エスチニア・ウラヂミロヴナ・クルゼンシテルン、これはハルビンで一番話のあつたグンバオの女記者だ。明るい氣のきいた短篇がうまくて、いま日本に關した小さい小説を書いてゐた。彼女の結婚觀を聞くと、一度破婚した彼女は、男の友達だけで澤山、結婚するにしても、お婆さんになつて、牧師さんとでも一緒になりませうよと笑つてゐた。

4

ハルビンは夏がいゝと聞いて行つたが、此分では冬も大變いゝらし

い。松花江の廣い沿岸には、水を眺めに來る人達でにぎあふし、モータボート競漕のある日には、街の女の話題が花火のやうに散る。大きなステージ付のヨット倶樂部のそうれいさ。

私の泊つてゐるホテルの前が、キヤバレータベルナ、まづ三流どころだが、一ドルも踊り子に握らせれば、いつも親切なパアトナになつてくれる。

チチハル生れの踊り子が、ステージの隅で、唄ひ出すと、どんなにさはいでゐる踊り子でも、シイツシイツと叱聲を上げて、落ちついて耳をかたぶける。

私は處女で憂欝なのよ！
摘んで欲しいと待つてはゐるが
私は野花
摘まれてしまへばおそろしい。

木靴と、腰のひだぎれをはづすと、彼女は裸姿で、椅子の間を踊り拔く。拍手の雨、拍手の嵐、底冷えのする屋外に出ると、俥と、馬車が、街燈の下に客を待つてゐる。ニッツアも人に連れられて行つて見たが、これはコッケイの至りだ、日本人と云ふものは、こんなものを、見物の一つに數へてゐるのかも知れないが、千代紙細工のやうに踊をペンキでベタベタ塗つたあくどい部屋で、人絹のギラギラしたハッピイコートを着た、露西亜女がかつぽれを踊るのだ。日本のお女郎屋みたいなんだが、味も實もない遊び場所、部屋の隅にはピアノが一台、レコードにあはせて裸になる段になると、ブルッと身ぶるいが來そうな。美しい女の裸姿ならまだしも、グロッスそこのけの裸で、タンゴダンスを踊るに至つては、もう逃げ出すより仕方がない。

「あんたいくつ？」

「私十八です。」

十八のニッツ女が、腕には一九二三年のいれづみをして、男のイニシアルが二ツも三ツも。動物のやうに紅く塗つた唇から、そう面白い話も出ない、まるで彼女達は煙だ。

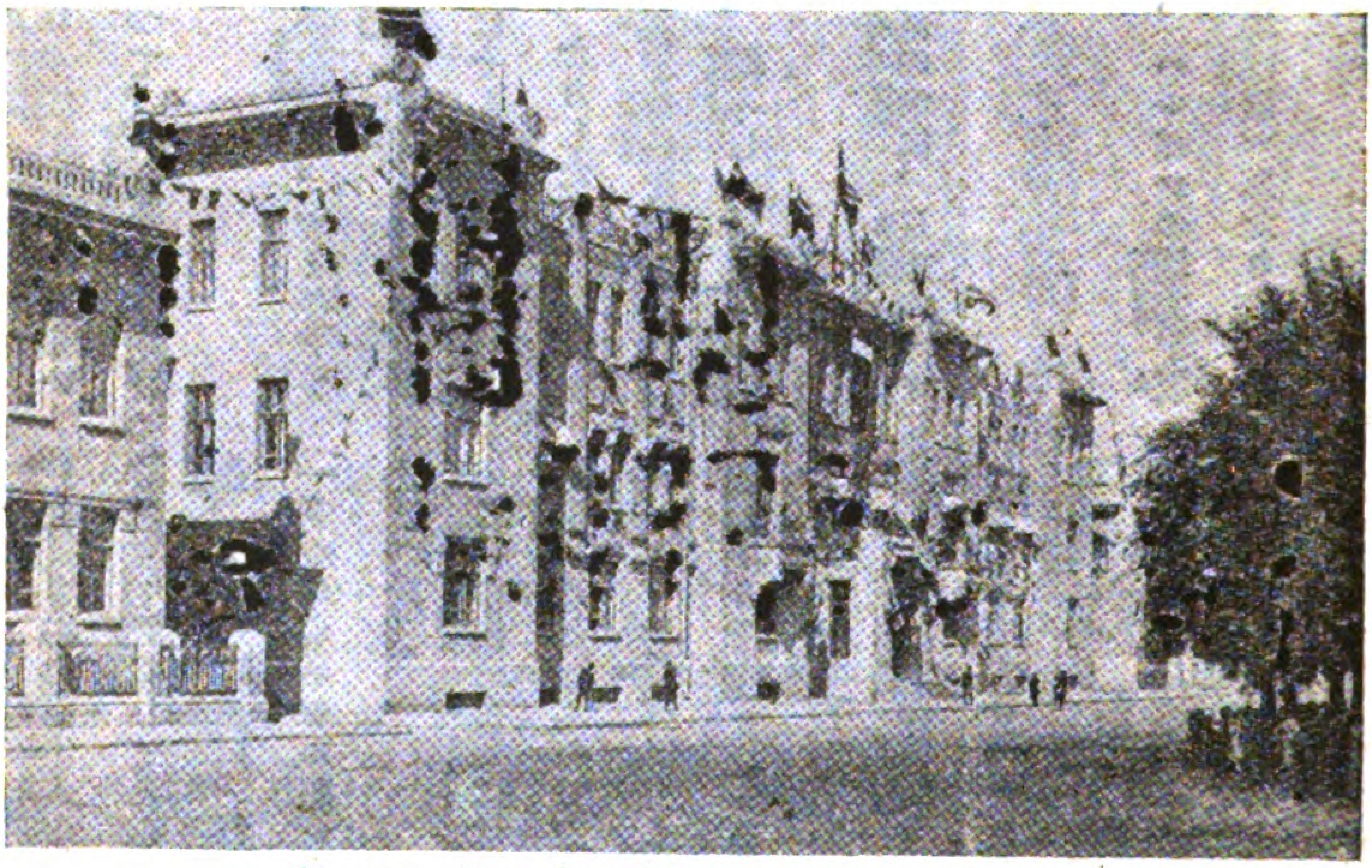
堤の上の線路を越したナハロフカ（貧民窟）の町へはいると、日本の貧民窟のやうに悲惨でもない。この街からキヤバレーに通つてゐる踊り子達もゐる。支那人の野菜屋の屋上には、何を考へてか、青天白日旗が長閑にヒラヒラしてゐた。支那に雇はれたロシヤ人の巡査が、煙草を噛りながら歩いてゐる。ナハロフカの辻々の町名札には、暗黒街とか、黒鷲街とか、まるで、探偵小説の表題だ。水があんまり良くないせいか、ハルピン女に露西亜人も支那人も[illegible]てゐる。

ヤタスカヤの街は東京の銀座、ホテル・モデルンの活動を觀くと、〃〃故郷なき人、〃〃女權將軍、タイトルは露西亞語と支那語、說明がないので、言葉の判らない私は、フイルムの遠い幻を追つて、いゝ音樂に聞きとれてゐた。

ハルピンは女の國だが、私の前にゐる暗がりの女は、煙草のあいまあいまに、男に唇をさしよせて接吻だ。これはけつして見ないやうに、明るくなつた場内には、煙草賣りの娘が、何世紀前かの美しい服裝で、笑ひをこぼして行く。

ハルピンのシネマも、レヴユーを入れなきや、流行しないのか、音樂が二つばかりあつた。赤い服の街の令孃が、素人のままの姿でステージに出た時、その初々しさに、嵐のやうな拍手がおこつた。

夜の長いハルピン、夜の美しいハルピン、房々としたニレの樹蔭に、パンを積んだ馬車の男が、ヌイヌイ……窓



ハルピン東支鐵道廳

の娘に唄をうたつて聞かせてゐる。

5

松花江の河邊の低地に發達した傅家甸の夜、活氣のあるあの支那街も忘れられない。ハルピンは、舊哈爾賓、新市街、埠頭區、傅家甸此四ツからなつた街だが、一番活氣のあるのは、支那街の傅家甸だ。何か歩いてゐると、火事のある街を行つてゐるやうに、往來がヒンパンで、キタスカヤの露西亞人の街とくらべて、二三の識者の話では、これからのハルピンは、傅家甸が中心になつて行くでせうと云ふ事だつた。

「美味しい西瓜だ！　食つて厭だつたら金はいらない！」

アセチリンガスのチロチロした灯影を浴びて、河のそばに、西瓜賣りが吐鳴つてゐる。食つてみて厭だつたら、何と面白い言葉だらう、此、傅家甸を案

内してくれた朝鮮銀行の小串氏と、ヤポンスキームゼイの柏木氏は、共にハルピン通で、美しい青年紳士だ。あんまり夕焼が赤かつたせいか、苦力の進め上手か、私達は各々ボートに乘つて、西瓜やとうきびを頰ばつた。

私が着く前、とても長雨が續いて、河向ふの松花江は、ゴミのやうに水につかつてゐた、滿洲は廣ろすぎる。險しい流れを見てゐたら首が痛くなつた。何だか、旅費が心細くなつて、妙にそんな事までが身にしみ、もう歸へられなくなるのぢやないかと思つたりした。

水上船の下を通るとき、支那の水上巡羅に鐵砲をむけられ、ヅシンと膽が沈むやうな氣がしたが、日本人は、圖々しいものだ小串氏も柏木氏も、平氣で漕いで行く。

陸へ上つて、傅家甸の百貨店に行くと、菓子部の中に、日本のキヤラメルが、硝子の箱へはいつてゐた。

昨年の東支問題があつてから、支那はかなり、ハルピンの權力を取りもどしてゐる。日本人の街は、モストワヤ(埠頭區)あたりにあるんだが、大した勢力はないらしい。

邦字新聞も三ツ四ツあるが、こゝの新聞記者は、勉強家が多い、それに割だし、あんまり不快を感じなかつた。

馬家溝は郊外で靜かな學者町、丁度帝展製作に來てゐた私の友人中埜仁代さんの御主人中出三也君が、此靜かな馬家溝の露西亞人の離れを借りて勉強してゐらつした。百號あまりのもので、モデルは下宿の娘、ニレの樹蔭に、露西亞の百姓女の姿で、とてもいゝ畫材だつた。一ドル半もモデル料を出せば、いゝつて聞いたが、素直な美しい娘さんだつた。

この中出三也君には面白いエピソードがある。はるばる來た私を御馳走すると云ふので、日露協會學校の學生さんと三人、東支倶樂部にアペードを食べに行く、三人ともあんまり言葉が判らないので、手眞似ばかりで注文したのは、カツレツとスープ「テ、ヘツ! ハルピンのカツレツは林さん柔かいよ、ホラ。」くしやりとカツレツの眞中を突きさした中出君の天眞さには笑ひ出してしまつた。日本で野獸のやうなカツレツでも食つてゐたのか、柔いカツレツを發見して、中出さんは子供のやうに喜こんでゐた。畫描きと云ふものは百パアセント仙人性を持つてゐる、幸にしてハルピンでものしたコオリヤさんの繪が、帝展の會場で、サンゼンと光り輝やく事を願つてやまない。

ハルピンで一番好きだつたのは寺院だ。寺の中へはいつて行くと、どの墓にも花があふれてゐた。そして碑台の表には、短い詩が刻んである。—貴方の部隊が無事に還つて來ます。愛嬢のたむけた詩が、露

ぐましいひとくさり。白色系露人の墓は十字架で、赤色系のは、赤い丸太ん棒が突きさしてあるきりだ。たまに、こんなところへ來て、散歩したら、心がせいせいするだらうに、ハルピンで見た寺院は、露西亜寺院と、猶太寺院、回々教寺院、こんなものであつた。

ハルピンは國際都市とは云つても、白色系露人の避難民の街と云つた感じが強い。これで家賃さへ高かくなかつたら、とても住むにいゝ樂土だ。男行くべし！　夕方のキタスカヤの舗道は美しい娘であふれる、軒並にアスター（えぞ菊）の花を賣る支那人、それを買つて、一寸どの男にウインクしやうか？　十一時頃の冷い石畳にアスターの花が散つてゐる。

ケープをつけた娘さんは、どんなに美しくても、ちよいと後から振りかへつて見ること、東京も此秋は、ケープのあるドレスが流行してゐるが、それは多分せむし女が發明したのだらう。ハルピンで見た二三のせむし女は、皆背にケープをヒラヒラさせてゐた。何と何と怪し氣な美しさ。

走つてゐる自動車は心配なく乘るがいゝ。露西亜人の人の好さは、子供のやうなところがある。上海で乘つた自動車のやうに、ボリもしなければ、づるい事もされない、寶石も多いが、イミテーションが多

い。

いい馬車に乘つて、横光氏の言葉を拝借したくなるほど、ハルピンの街は、馬車の鈴と馭者の「チョウッ！」と馬の尻を叩く呼び聲から、實に童話めいた天眞さを感じる。

そこで、私の覺えた露西亜語は、どこへ行つても通用する「スパシイヴォオウ！」

6

大連から直路北滿洲へ！

ハルピン・長春・奉天・撫順・大連・金州・三十里堡・青島・上海・杭州・蘇州・私はわづかな旅費で、これだけ白想をこゝろみて來たのだが、とても上海までは書きゝれない。

奉天で、スプリングを見せられて驚いた事、長春からの時間表を私は間違へてしまつて、奉天驛についた時は、夜の十時頃だつた。宿引きに連れられて、大和ホテルに宿を取る。とても大きいホテルなので、出やうと思つたが、今さらアドレスを書いてしまつた以上、引込みがつかなくなつて、バス付の間の美しい部屋に一夜の雨露をしのぐ。天井から紗の圓い蚊帳がさがつてゐて、私には少々ぜいたくすぎる部屋だ。

奉天はどんな街だらうか！　ハルピンをたつて以來、こんなに早く寢た事がないし、ベットはとても寢心地がよささうだし、ハルピンで買つたトロイカ煙草を吸つて、東京での生活をフッと考へてみた。

一がいゝからつて、二も三も良いとはきまらない。奉天での私の見物はたしかにみじめであつた。

第一奉天のツウリスト・ビウロなんて、あつてもなくても同じ事だ。領事館で聞いた通り、俥をかつて、相談に行つて見ると、木で鼻をくくつたやうな冷かな人情、女の一人歩るきを氣味惡るがつたのかもしれないが、「お一人の場合案内料も高いし、自働車でまはつても拾圓近いですよ。」ツウリスト・ビウロには滿鐵から金が出てゐると聞いたんだが、こんなに冷い案内所ならむしろ無い方がいゝ。

宿を引きあげた私は、行き場がないので、驛の近所の日本壽司屋にはいる。二拾錢の壽司を食つて、茶を吞んでゐると、ぼんやりと涙がこぼれた。

「正直な俥ゐませんかしら、城内と北陵を見たいのですが。」

そして壽司屋できめてくれたニイヤンは、城内から北陵、娘々廟を見て七拾錢でいゝと云ふ。私は俥に乘つて息をついた。

「城内は女子はん一人ではあぶないかなあ……。」

私は元氣に笑つて、大きなトランクを膝近にはさんだ。

「ユイヤン！北陵知道か？」「知道！　知道！」

日本人の街をつゝきり、城内へはいると、とても愉快だ。大きな百貨店の前に來ると、私はおぼろげな支那語をつかつて、俥を止めた。

「ニイヤン！少々漫々で、看々！」

百貨店の中へはいると、四方から店員が私を呼びかける。鞋を買はうか、お母さんへ支那繻子買つてやらうか。

「シナジス、ヒスイ、いゝのあります。」

支那人の商賣上手にはかなはない。支那繻子を擴げて私を吊つてゐた店員が、私を陳列の奥へ引つぱると、子供の赤い金時さんを持つて來て買へと云ふ。

「私、子供ないからいらない。」

「子供ないから、買ふよろし。」

ニヤニヤ笑ひながら店員が、金時さんの前をめくると、これはグロテスクな支那の×畫だ、不意打ちだつたので面食つた私は、何だかポッとして、「プヨオ！　プヨオ！」と叫んだ。

「プヨオ？」店員は笑つて奥へはいつた。

滿洲の日中はとても暑い。

7

城内のゴミゴミしたお寺のそばで、怪やし氣なアイスクリームを賣つてゐるお爺さん。ニイヤンが暑さうなので、少々漫々を連發して俥を止め、アイスクリームを御馳走する。どうして食はないかと云ふから、舌を出してゲッとしてみせたら、腹をさすつて眉をひそめて心配してくれる。人種は變つてもこんなに優さしい人情、私は壹圓やらうと思つたのだが、もう五十錢やる事にきめた。

拾錢玉で拂ふと、五圓札のおつりだ。間違ひぢやないかと、何度も札を叩いてみせたが、間違ひぢやないらしい、すると奉天の城内の五圓も、あんまりありがたくないものらしい。アイスクリーム屋の爺さんは、日本で云へば何百圓と云ふ札束を煤けた板の上に出してゐるが、五圓が五錢玉一ッなら、そんなにたいしたものぢやないらしい。

ニイヤンの飛び散るやうな汗を見てゐると氣の毒になつて來る。腹がすいたかと手眞似で聞くと、腹がすいたと云ふ。拾錢玉二ッ出すと、一ッ取つて、いゝいゝうどん粉で出來たおやきのやうなものを買つて來た。五錢おつりを私に返へす。ニイヤンの食べてゐるのを見ると、まるで風呂敷を食つてゐるやうだ。私にも半分たべないかと出したが、又舌をゲッと出して見せる。

張學良の別莊も、北陵へ行く路で見る。三四日ゐらつしやれば、何とか、紹介の勞をとりますがと、領事館の方が云つて下すつたのですが、どうも中立派張學良には興味がない。北陵は美しい。黄瓦朱壁の建築物が珍らしく、奥の隆陵には清の太宗文皇帝の寢園があつた。一人でコツコツ石像の豹や獅子や、馬や、駱駝や象の間を歩いてゐると、胸がドキドキ鳴つてゐるのが聞える。陵の入口で待つてゐるニイヤンと、サイダーをわけあつて呑む。

とてもいゝ日だつたにちがひない。ニイヤンは、又私を日本寫眞屋の前まで連れて來て降ろしてくれた。日本金二圓包んでやると、「ホウ！　ホウ！」ニコニコ笑つて、今晩は女房に、なまこと、豚の脂を食はせるのだと喜こんでゐた。

段々手薄になるふところを氣にしながら、大連の埠頭で、あんなに、日本へ歸へりたい事なぞ、ケロリとして、上海行きの苦力船に乘つた。勿論三等旅行だ。滿洲は金のない旅だけに、とてもいゝところだつた。

日露戰爭の跡もみて來たかつたが、小心者の私は、戰爭があんまり好きぢやないので、旅順の二百三高地へは、わざと行かないで止めてしまつた。

滿洲では北がいゝ、勿論その中にはハルピンがあるから、又來年は冬を見に行かうと思つてゐる。——一九三〇、一〇——

新進女優の話

池谷信三郎

ずうつと以前に、築地小劇場のパンフレットに獨逸の新進女優の事を書いた事があつた。それはみんな舞臺の女優の事であつた。あの頃は獨逸の映畫がまだ今日程に盛んになつてゐなくて、從つて『アスファルト』のペテイ・アーマンや『ニーナ・ペトロウナ』のブリギッテ・ヘルムのやうな魅力のある映畫女優が現れてゐなかつた。とてもグレテ・モスハイムに匹敵するだけの女優は銀幕の上には姿を現はさなかつた。それは恐らく今でも變りはないであらう。舞臺女優と映畫女優とはやはり修業の上に於いて大きな違ひがあるであらう。それは映畫女優が、興業政策と、その映畫の持つ大衆性とに依つて、餘りの短日月に、修業の邪魔をする人氣と云ふものを得て了ふからであらう。そして、悲しいことに、その人氣と云ふものが殆んど決定的の勢力を、映畫女優の上に持つてゐるからであらう。

だから、批評の興味を餘計に感じるのは、舞臺の女優の方である。所が、悲しい事に、日本の演劇の現狀と云ふものは、段々買ひ溜めた家具調度が邪魔になつて、どうにも新しい家へ引越しが面倒になつて了つてゐるのである。少し元氣のある者が、何かの新しさを求めて、新劇運動を起すと、忽ち第一回の公演で熱を失つて了ふのが例である。そして結局は、日本の演劇の興業的組織の中に、幾分の安定を得ると、それで仕方なく滿足して了ふのである。所がその興業的組織なるものは、頗る排水工事が完美してゐないので、水は直ぐ臭つて了ふのである。

ただ左翼の演劇團體だけが、これらの演劇的スランプの中で、やゝ潑溂としてゐるのだが、あの潑溂さは、演劇そのものの潑溂さではないのである。

そんな譯で、再び悲しい事には、今の日本の舞臺には、近來著しく躍進したと云ふ目ざましい女優は見當らない。從つて、新進女優の

詞と云ふ點で、假名を書くとすると、新映は電映女優の事になつて了ふのである。

それでその事を書かうと思ふのであるが、凡そ新進と云ふ字位、解釋のむづかしい字はないのである。

文學の方でも、それは可なりでたらめである。大學を出たばかりで目ざましく、進出して來たやうな作家を指す場合は、その言葉は、前途を祝福する花環であるが、中には文壇生活十五年、齡四十になつても、まだ新進作家と呼ばれる場合もあるので、さう云ふのは、『いつまで經つても偉くなれない』と云ふ意味なのであらうか。するとこの言葉は舌を出してゐる事になる。

殊に、映畫女優の生命と云ふものは隨分と短かく、そしてそれは益益短かくなるであらう。人々の速力に對する感覺が變つて來てゐるせいもあらうが、それよりも、會社の宣傳一つで、昨日のワンパスガールは忽ち今日のスターになるのである。下からどしどしスターがせり上つて來るので、上にゐる幹部は大幹部になり、今に超大幹部となるであらう。それは丁度現代の兵器の進歩のやうに目ざましいのであつて、うつかりドレッドノートなどを最上級の代名詞には使えないのである。

その目まぐるしい新陳代謝の中で、新進などと云ふむづかしい意味の言葉を使ふのは、實にやゝこしい次第なのであるし、それに僕は日本の映畫を餘り見てゐる方ではないので、誰がどの位有名なのだか、かすかな常識的の知識しかないので、僕の選はひどく的外れになると思ふ。しかも、この稿を書くので、泥繩的に見て廻つた數少い映畫に依つて、批評するのだから、批評される方も迷惑かも知れない。だが、僕は演劇の方ではいろいろ苦勞した事もあるので、かう云ふ役に合はない人はあゝ云ふ役にいいだらうと云ふ位の察しはつくのである。

それからもう一つ、批評する爲めに、僕は各女優の年齡とか略歷とか、そんな豫備知識を得て置き度いと思つて、この間滿洲へ旅行に行つた留守に、或る文筆婦人會の人に、その事を賴んで置いたのだが、その人はそれを餘り藝術的な仕事でないと考へたと見えて、僕が歸つて來て、締切りが迫つて了つたのに、まだやつといてくれなかつたのである。從つて、これから擧げる五六人の人達に就いては、僕はさう云ふ知識はちつともないのである。尤も女子大を出たと云ふ學歷を讀んだ所で、銀幕の上で、その風貌や姿態や動作が無智であつたら、映畫女優としてその人は無智なのであらう。

作家はその人が貧乏が平氣だとか、多作をしないとか、いろいろの所謂作家的態度の立派さで、作品までが評判のいい事もあるが、映畫を見る人の多くは、批評などと云ふものを餘り讀まない人が多いのだらうから、何よりも先づ、銀幕の上に現れた印象が良くなかつたら駄目である。

よく寫眞顏のいい人と云ふのがあるが、映畫には殊にその事が必要であらう。

以下四五人の名前を並べて、極く印象的な短評を加へて行かう。



高津慶子（帝キネ）

この人はもう、新進などと云ふと、あの細面の顏を少しふくらませるかも知れない。

『何が彼女をさうさせたか』と云ふこの人の出た映畫は、日本映畫として近來の出來であつた。少くとも原作よりは遙かに良かつた。

凡そ一人のスターが出來上るまでには、そこにいろいろの複雜なものがあるのであらう。彼女は先づ監督の氣に入らなければいけないであらう。カメラマンが意地惡い事をしても、彼女の映畫の顏はアレて了ふであらう。雜誌や新聞の映畫記者が來れば、いくら齒の痛い時でも笑顏を作るであらう。さう云ふいろいろの心遣ひは、彼女達をきつと神經質なものにして了ふのに違ひない。

それらの苦しみが機會である。

本質的には、先づその顏なり動作なりに、通俗性があると云ふ事である。誰が見ても、少くとも癪に觸らないと云ふ程度の普遍性がなくては駄目である。

その上に何か一つ、特に深く人を惹きつける點を持つてゐたら、申し分無いであらう。

その魅力にはいろいろの種類があると思ふ。可憐と云ふ事も一つの魅力であらう。足も一つの魅力であらう。ＩＴと云ふ事も勿論その一つであらう。淋しさ、華やかさ。それぞれ魅力を持つてゐやう。

眼と後姿と動作は多く感情的の魅力を表すものだし、足とか耳とか云ふものは、官能的な魅力を持つてゐるものである。

所で高津慶子の魅力である。

ちよつと斷つて置くのであるが、女性と云ふものは、例へば眼とか、色とか、身體の一部分に就いてのみ褒められると云ふ事を、餘り欲しないものである。だが、これは間違つてゐる。全體としていいものは、どこかに部分的にいいものがあるからである。

高津慶子の眼はよく動く。

僕は『ニーナ・ペトロウナ』を見て、あれは眼の映畫だと思つたが、高津慶子にも意識して、あゝ云ふ映畫がうつせると思ふ。

頰は可なりふくらんでゐるのにかかはらず、細面の感じのするのは、一體に小柄なせゐであらう。

足はすつきりと細くいい形をしてゐるが、やゝつめたく、官能的な魅力はない。どちらかと云ふと植物性である。

足並びに姿勢の點では、いつだつたか中川紀元氏が褒めてゐた入江たか子は、はつきりと飛び拔けてゐる。

僕はいつでもさう思つてゐるのだが、日本の女性は、丙午を境として、斷層のやうにくつきりと、その姿態の美しさを取戻してゐる。あれは小笠流の輕蔑と、洋服のせゐであらう。

夏の海岸でつくづくとその事を感じる。

高津慶子は所謂新しい女性などをやつたら、駄目であらう。それにお化粧をしたら駄目であらう。

無雜作な、受身な、自分は快活で、それでゐて、人に淋しい感じを與へるやうな女性を演るのが一番適つてゐると思ふ。



濱口富士子（日活）

この人の顏は實によく變る顏である。見た時の角度で、品よく見えたり、意地惡く見えたり、明るく見えたり暗く見えたりする。

これは、表情と動作がよく動くせゐであらう。その動かし方が少しでたらめな所がある。あれをもう少し意識して整理したら、もつといろいろと効果が上る事だらうと思ふ。

一體に、何か希望してゐるやうな、どこか明るい樂天的な所があつて、それが近代的な感じを與へるのであらう。

これは監督の問題になるのだが、舞臺と違つて、映畫の表情は動きに依つて一番効果的に表現され、進行するのであるから、從つて、一

枚の平面に映寫される畫面に於いて、縦に動く動作より横に動く動作の方が遥かに多く、大きく、重大である事は明らかであるから、更に從つて、今度は俳優の問題であるが、彼等及び彼女等は、殊にその横顔の表情に注意す可きであらう。

女優は合せ鏡と云ふものをするであらうから、こんな事は余計な話ではあるが、それでも正面の表情を氣をつけても、中々横顔の表情は粗末にするものである。

濱口富士子には殊にその缺點が眼につくのである。ひよつとした拍子に、その横顔の中に、それまでにずうつと續いて來た好い印象を醸すやうな感じが、チラッとする事がある。あれを氣をつけたらいいだらうと思ふ。

峰吟子（日活）

この人など、名前の上から云つたら、所謂新進女優として應はしいのであらう。『この太陽』の蘭子をやつて評判だつたさうであるが、僕はその映畫を見てゐないから、少くとも僕の見た『新東京行進曲』では、餘りすつきりとした演技も演つてゐない。だから、あれ一つで批評するのは氣の毒だと思ふ。ただ明るく、無反省で、勝氣なあゝ云ふ種類の女性を、その程度に出してゐるのに過ぎない。



まだ自分と云ふものを出すまでには、カメラに慣れてゐないのだらう。だが、今の日本の映畫には、きつとカフェの場が出て來るのだし、又あゝ云ふ型の女もよく登場するのだから、その點で、いろいろと使へる女優になるであらう。

兎に角、僕の見た映畫一つでは、まだよく、いい所があるのだか、無いのだか、それさへも解らない程度であつた。

櫻富士子（東亞）

この急行列車のやうな名前を持つた人は、いつも眞面目な顔をしてゐる。

淋しい感じのする人が、眞面目な顔をすると益々その感じが澄んで來るが、華やかな顔付きの人が眞面目な顔をすると、油繪具の乾き切

らない話のやうな氣がするのである。

この人の寫眞顔は實に綺麗である。輪廓がはつきりとして、眼は圓らかで大きい。動きも近代的で直線的である。

それでゐて彼女の名聲を邪魔してゐるのは、あの眞面目な顔付きであらう。あれは頑固な個性である。

映畫俳優が個性を持つてはいけないかどうかと云ふ事に就いてはいろいろ議論もあらうと思ふ。

僕は演劇の方からの經驗として、俳優が自分の個性をどう云ふ所に發揮したらいいのかと云ふ事をよく考へた事がある。

ストリンドベリイの言葉に、いや何もこんな所でわざわざストリンドベリイなどひつぱらなくつてもいいのだが、僕の言葉よりいくらかクラシックに重々しく響くと思ふので、それに丁度適當な言葉があつたので引用するのだが、それにかう云ふのがある。

つまり俳優はその特質として、ファンタヂイを持つ可しと云ふのである。即ち、演ず可き役の人柄になり切る事であり、一種の陶酔状態で、全く自分を忘れ、自分を離れる事である。この自己の個性をなくなすと云ふ問題は、俳優にとつて全く迷惑な、それでゐて最も重大な問題である。俳優がいかにして自分の個性を處理したらいいか、何故ネエザンの言ふ如く、個性を持つてはいけないか、と云ふ問題は、俳優の藝術自身が獨立性を持つてゐない事に起因してゐる。

再びストリンドベリイの言葉を引くと、

「俳優の藝術程從屬的なものはない。俳優は彼の創つた藝術を分離し、形を示し、さうして「これは自分のものだ。」と云ふ事は出來ない。……」

これは勿論演劇に就いて云はれた事ではあるが、映畫の方にも通用する事であらうと思ふ。

俳優の藝術は、丁度天體の諸星が、微妙な引力の關係で、相互の調和を保つてゐるやうに、實に微妙に、他の俳優、その他の藝術と調和を保つて行かねばならない。俳優が個性を發揮し得る點は、あらゆる異れる個性(戯曲又は映畫なら、そのストリイの中の人物の種々な個性)を自己獨特の形式で表現すると云ふ範圍である。

だから、俳優は頑固な個性の捕虜になつてはならないと思ふ。……

議論が大分やかましくなつて、中間讀物としての使命から離れて了つたやうだが、しか程左様に、櫻富士子の頑固な眞面目さは、僕に、ストリンドベリイだの、藝術だの、個性などと云ふ言葉を想ひ出させるのだ。

これをくだいて云へば、表情が固いのである。ほんとはこれだけの

一行の批評で事は足りてゐたのである。

岡田靜江（東亞）



この人は一度會つた事はあるが、映畫では無憂華にちよつと顔を出したのを見ただけであるから、これは批評する資格がこつちにない譯であるが、その時の感じでは、何か成長して行くものが感じられた。姿態も調和がとれてゐるし、近代的なタッチもあるし、監督と會社の方針一つで相當に伸びるであらう。

ただこれと云ふ特徴がないのが缺點である。だがこれは又、それだけに普遍性を持つてゐるのだから、度々映畫に現れてゐるうちに、段々親しみを集めて行く事であらう。

高津慶子と同様に、少し特徴のあるお化粧を研究する事が大切である。映畫の上に表現される自分をもう少し複雑に印象的に彩色する事を忘れてはならない。

川崎弘子（松竹）



この人も亦、どこと云つて、取り上げて云ふ程の特徴のない人である。それでゐて柔く人を惹きつける力を持つてゐる。

カフエの場面と共に、薄給のサラリーマンの新家庭などと云ふものは、日本の映畫の一つのセンチメントで、よく使はれる要素である。從つて、そこの、幸福乍ら、生活に疲れて行くやうな、可憐しい新妻をやるやうな役所として、暫くこの人は重寶がられるであらう。

この人は一度見た時より二度三度と見た時の方が、段々好きになれる人かも知れない。

どちらかと云へば平凡な感じであるが其平凡さが退屈ではない。

光喜三子（松竹）

この人はまだあんまり有名ではないやうだ。それでも『ザッツ・オー・ケエ』と云ふナンセンス映畫の兎に角主役をやつてゐるのだから、これから大いに賣り出すのであらうし、それに、きつと賣り出すのに違ひない。

顔も綺麗であるし、動きもスマートであるし、それに何よりも、全體の感じが、我々のテンポにぴつたりと適つてゐる。

僕は『マン・トラップ』を見た時、クララ・ボウに就いてこんな事を書いた事があつた。

クララ・ボウは瀧のやうなものだ。彼女の人氣が明日凋落して了つてもそれは問題ではない。今日の瀑布の水が、明日は大海の中に流失して了ふのと同じである。しかも瀧は依然として存在する。クララ・ボウにわれわれが求むる所のものは、クララ・ボウと云ふ一人の個性ではない。彼女の動きにつれて揺れる時代の空氣である。風の存在はカアテンの動きに認められる。クララ・ボウはカアテンである。

一本の棒で夜の海を攪き廻すと、今迄氣がつかなかつた夜光虫の存在が、華やかな光の模様となつてわれわれの目を驚ろかす。そこで、クララ・ボウは都會の底を攪き廻す一本の棒である。棒は竹の棒でも木の棒でも構はない。この棒でコンー とやられると、全くＩＴである。……

僕は何も、光喜三子を見て、クララ・ボウと比較するつもりではない。事實二人はちつとも似てゐやしない。

ただ、光喜三子も亦、さう云つた、一つの雰圍氣を持つた女優であると云ふのである。

和服を着ても洋裝でも、田舍にゐても都會にゐても、きつちりのその額縁の中に納つて、よく周圍と調和して、或る雰圍氣をかもして行く所がいいと思ふ。

この人はきつともう直き、人氣者になるだらうと思ふ。

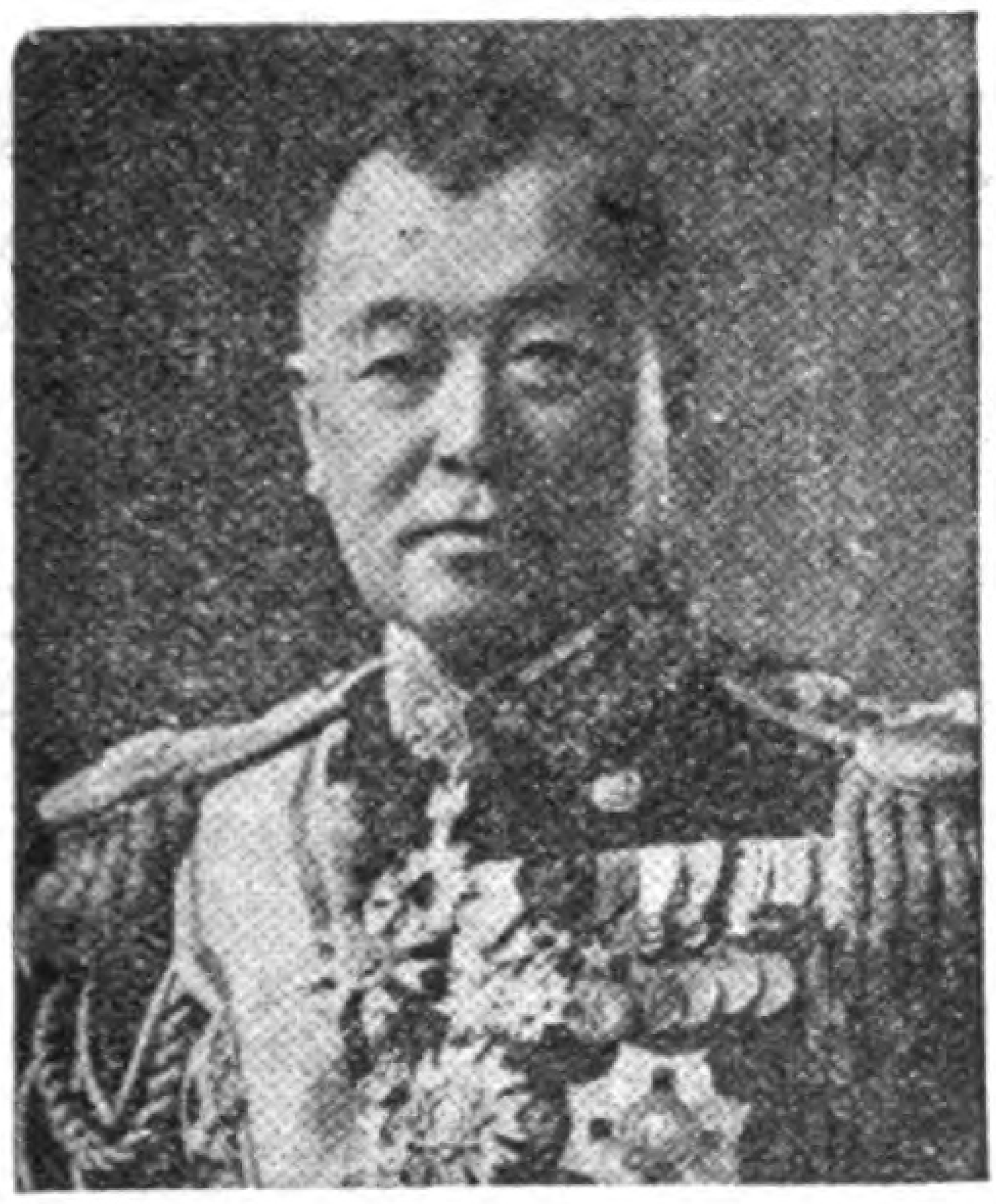
もう大分書いて來て、いささか大人氣のない饒舌をやつて了つた後のやうな氣がして來たので、この位で打上げる事にしやう。

人氣の大事な女優達の事であるから、大に褒め過ぎる程褒めた嫌ひはあらうが、何もやつきになつてやつつける程の事もなからうと思ふ。

これを要するに、女優が人氣を集めるのは、何か一つきゆつと人の心をつかむものを持つてゐるか、又は漠然と或る雰圍氣を感じさせるかであつて、それはそれぞれの素質に依つて初めから分れて了ふ事であらう。

火中の栗を拾ふ新海相

水野廣德



安保清種氏

倫敦會議以來財部前海相の取りたる態度と行動とは、軍人として見るも、政治家として見るも、徹頭徹尾「なつちよらん」の一語に盡きる。素より半政半軍の水陸兩棲動物たる彼の境遇に對しては深く同情に値するものがないではない。天下事無ければ大臣大將の名譽を双肩に飾る日本の陸海軍大臣ほど權榮に惠まれたるものは少ない。だが問題一たび起れば、軍部に從はんか頑瞑固陋と輿論の烙印を捺され、政府に聽かんか軟骨腐腸のレッテルを軍人から貼られる。若し態度を曖昧にせんか鳥獸戰に於ける蝙蝠同樣裏切者の非難を双方から受けねばならぬ。進退兩難すまじきものは宮仕への悲哀は獨り歌舞伎の松王のみではあるまい。

左れば財部の引退は久しき以前より既定の事實であつた。それは必ずしも加藤前軍令部長との喧嘩兩成敗の意味ではない。又必ずしも三大原則とかを破つて倫敦條約に調印したる故でもない。唯彼が倫敦會議に臨むに先ち、身は海軍々政府の長でありながら三大原則を以て國防の最少限度であるなど、聲明したる輕卒なる言責の爲めである。我等は惡意なき好人物たる彼が滿身瘡痍の狀を見て、せめて引際の淸からんことを心私かに彼の爲めに祈ると共に、誰が彼の後を襲うて既に火中に埋められたる補充計畫の栗を拾ふであらうかを大なる興味を以て眺めて居た。

財部前海相が倫敦條約御批准成るの日を以て疾風迅雷的に辭職を決行したるは誠に其の機を得たるもので、政府が電光石火に其の後任を定め得たる機敏さとに對しては共に賞讃の意を表する。財部に代つて海軍大臣となるべき者を現役中より物色すれば、軍事參議官岡田啓介及び安保淸種の兩大將と橫鎭長官大角岑生中將との三人の外にはない。岡田は黨員ではないが前政友會内閣の大臣である。議會の絕對多數を誇る現内閣の面目としても反對黨大臣を臨時拜借といふ譯には行くまい。

大角は本省高級副官、軍務局長、次官を勤め上げた大臣學の卒業生で經歴才腕最も適任ではあるが、唯幾分若いので我武者の軍事參議官などに對して押へが利き兼ねるのと、既に補充計畫が表面化したる今日前途多望の身を此の難局に投じて自ら傷つくの愚を爲さぬであらう。そこに至ると殘るは獨り安保大將のみである。彼は倫敦會議の顧問ではあつたが、條約案に對しては反對の態度を取つたので財部と責任を分つ必要もなく、且つ硬論者として部内の氣受も惡からず、殊に財部よりも一足後れて歸朝したる爲め、海軍部内のゴタゴタや、政府との關係に於て全然白紙の狀態に在る。政府としては此際能不能の詮議や適不適の贅澤を言つてる場合でない。兵は拙速を尙ぶで何でもかでもと閃電的に白羽か黑羽か知らぬが狙の矢が彼に向つて番はれたのであらう。谷口が軍令部長になつて居なかつたら殿ケ關無電臺下の主は或は谷口に御鉢が廻つたかも知れぬ。谷口軍令部長、小林次官の廣島出身に加ふるに更に安保海相の廣島人を以てす、海軍は今や廣島の天下である。先代の故加藤友三郎も恐らく地下に『うい奴』と微笑を洩して居るであらう。

安保新海相は男爵である。彼は明治二十四年の兵學校卒業で、前軍令部長加藤寛治大將とは同期生である。六十一名中加藤が首席で安保は十一番であるから頭腦は先づ水線以上と言へるであらう。しかも彼の上席者の中五名迄も戰死其他で若死したので、彼としては大分德をして居る譯である。彼は生れは九州佐賀であるが小供の時に父の友人なる安保清康に貰はれて養子となつたのである。この安保清康は廣島縣向島の船頭の息子であつたが祖先の瀨戸內海賊の血が傳はつて居たと見え、早くから洋式海軍術を習ひ鹿兒島に招かれて同藩の海軍を創設した人である。鹿兒島海軍が明治海軍の母であるならば鹿兒島海軍を起した清康は勝海舟や榎本武揚等にも劣らざる日本海軍の大恩人である。海軍中將となつて早く引退して居たのを日清戰爭の時召集されて吳鎭の長官となり、その功で男爵を授けられたのである。

新海相安保と前軍令部長加藤とは性格の相反せる好對照である。加藤の頑剛不屈にして鼻つ張りが荒く、向ふ意氣が強く、軍人式猛突主義なるに對し、安保は圓轉滑脫にして物腰和かに人障り良く、純然たる英國式好紳士の風がある。加藤が賑やかな宴會式なら安保はしんみりした內儀中流である。加藤が大杯を傾けて醉うては枕す妖嬈美人をやつてる間に、安保は意氣な音〆の爪彈きに熱燗をチビりくと舐める方である。加藤は徹底的意氣の人で安保は寧ろ常識の人であらう。

彼ほどの才能と家柄と資産と風采とを兼備すれば、ペタ金に三つ櫻の大將となるには必ずしも先輩の庇護を要せぬであらうが、彼が

同郷の先輩故加藤友三郎の厚き知遇を得たといふことも亦與つて力なしとは言へない。加藤と彼に就いては一つのエピソードがある。日本海々戰の時海軍少佐の彼は東郷長官の旗艦三笠の砲術長で、加藤友三郎は聯合艦隊の參謀長であつた。海戰の當日、彼我の艦隊が既に指顧の裡に迫り、三笠の艦橋には長官參謀長以下の幕僚と三笠の幹部とが悉く集つて、かの大膽不敵なる敵前回頭の機を窺つて居た。此の回頭こそは『東郷の大投機』と言はれる如く回頭瞬刻の運命が直に勝敗の大局に關するのである。距離測定係の候補生はレンヂファインダーを覗ひて間斷なく敵艦隊の距離を報告して居るが確かな距離が定まらない。敵は刻々に近づいて來る。しかも距離が定らないので回頭の機を決することが出來ない。流石に冷靜なる加藤參謀長も焦ら立ざるを得ない。傍に居た安保砲術長に向つて「自分で距離を測れ」と命じた。砲術長は聲に應じて命に從ひ候補生に代り自ら測程儀に就いた。少尉か候補生かのする仕事を平氣で少佐の砲術長に命ずる所に加藤友三郎の氷の如き面目が躍如として居ると同時に、職位をもせず唯々として其の命に從ふところに安保の從順性が窺はれる。戰役中途にして加藤が島村速雄に代つて聯合艦隊參謀長にたつたのは、島村は溫情的にして人間味に富み部下を窮地に死せしむることを懼るも、加藤は冷然として夫を得たが爲めであるとも言はれて居る。

日露戰爭後安保は英國に留學して同國の海軍大學を卒へ、さらでだに貴公子然たる端麗たる風貌と溫雅たる態度とは更に英國式の磨きをかけて、部内に於ける當年ハイカラの尖端を切つたものである。爾來累進して歐洲戰爭の際には少將で大使館付武官として英國に駐在し、アドミラル・バロン・アボの聲名を倫敦社交界に恣にし、又觀艦武官として英國大艦隊に乗組んだこともある。

歐洲戰爭後列國海軍を吹き捲くりたる華府軍縮の大嵐にも、先輩僚友の多くが枕を連ねて首切られ伏屍累々たる間に、彼は好運にも好く生き殘り、國際聯盟海軍代表、艦政本部長、海軍次官、軍令部次長、鎭守府長官等の要職を經て軍事參議官に納まつたのである。次官として軍政を習ひ、艦政本部長として艦政を學べば海軍大臣たるの資格は充分である。殊に彼に期待するところは、彼が國際聯盟海軍代表たりしが爲め、現代世界の空氣の動きと、現代社會の思想の流れとを知れることである。彼の風采よりするも、彼の性格よりするも、濁浪滔捲く陣頭に立つて艨艟を指揮する如きは恐らく其の能でなく、赤煉瓦の大臣室に納まつて盲判を捺す方が寧ろ適任であらう。もし夫れ瀟洒たる夜會服にレディの腕を擁せしむれば蓋し滿足である。

安保新海相が守成の人であるや否やは知らぬが少くも創造の人ではない樣である。既に

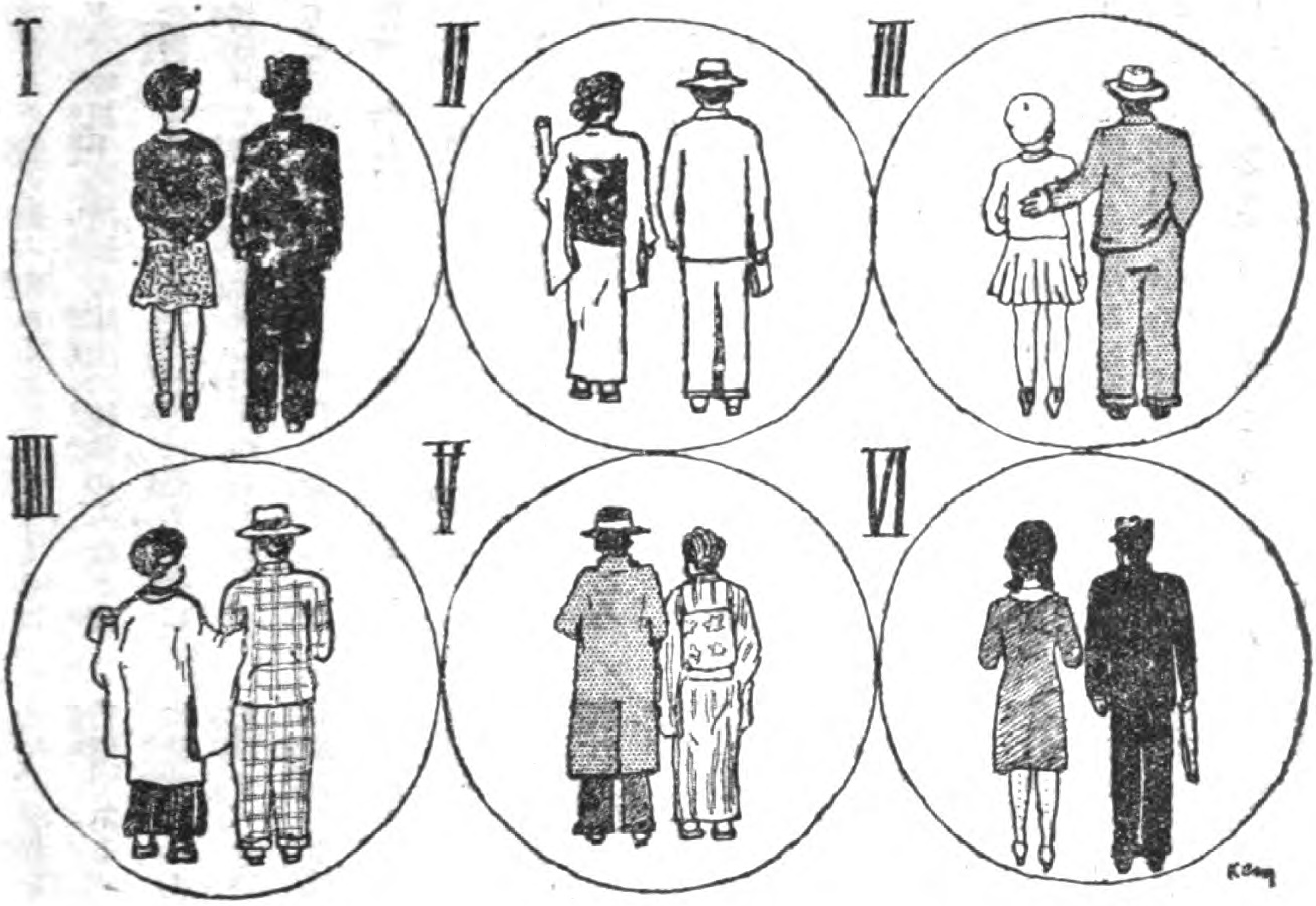
無圭角なる性格からして創造の人たるには温厚過ぎる。彼の踏み來れるところ遺すものは何ぞ、唯机上の指紋と床上の靴跡のみなど皮肉な評をする者もあるが、是等は恐らく彼に首切られた者の怨言讒誣に過ぎぬであらう。要するに彼は與へられたる職務と命ぜられたる任務に對し、孜々汲々御役大事と勤めるところ誠に勤勉なる良吏、忠良なる軍人である。我等國民は今の日本の海軍大臣に向つて創造も守成も望まない。唯彼に求むるところは海軍よりも國家を重じとせんことである。海軍々人よりも國民を愛せんことである。我海軍には創造に其人を缺かない。現に補充計畫を創造して政府と國民とを惱まして居る。

今回の海軍補充計畫は軍事的には或は相當の理由があるかも知れない。併し政治的に見れば此位不當不合理なる愚案はない。國際平和と國民負擔輕減の精神と目的とを以て軍備を縮少しながら、縮少に依つて生ずる缺陷を新に補充するなどは右に削つて左に加ふるもので、世界を欺き國民を愚にする不信極まる行爲である。若し國家が眞に倫敦條約の精神に忠實ならんには補充計畫の如きは正に一蹴打破すべきである。斯る不合理なる補充計畫が國民の共鳴と支持を得ざるは當然である。

政府が之に對して如何なる態度に出づるかは知らぬが政府と海軍との主張には相當大なる距離があるらしい。海相の強硬に依つて海軍の主張が通るとせば、彼は部下の信賴をかち得んも海軍は國民の怨府となるであらう。之に反して海軍の主張が通らなければ彼は無能として最早や海軍に止まり得ぬであらう。何れにしても彼は海軍補充計畫の人身御供に擇ばれた觀がある。玄人跣足と言ふ彼の得意の隱し藝たる手品の奇術で、如何に三味線太鼓で囃やし立てたとて、ハンケチから軍艦や飛行機を取り出す譯には行くまい。

此の難局を承知しながら彼が海軍大臣就任を應諾したのは、素よりイヤ〳〵ながら義理に迫られてのことであらうと信ずる。併し田舍の盆踊の歌にも「娘十七八〇〇〇盛りイヤよ〳〵で子が出來た」とある通りで、大臣就任の交渉を受けて斷然肱鐵を放つた者は昔から、あまり無いと云ふことである。乞食三日すれば止められぬと云ふが、大臣一日やれば死んでも良いと言ふ政治家もある程だから心の中は判らない。衆議院に二百七十の與黨を有する我黨内閣のことであるし、女房役の次官には小林といふ才物が控へて居るから、議會の答辯は少し位要領を得ない方が却て仕合せかも知れぬが、軍事參議官や軍令部あたりの姑小姑の無理難題を果して押し切り得るや否やが疑問である。補充計畫の火中の栗、首尾よく拾ひ上げたら御手拍子、若ししくじつたら名字の濁りが消えるであらう。御得意のシンコ細工の軍艦でも拵へて樂しんで居られる方が御家の安全保障だつたろに！

第一圖



戀愛考現學

—現代生活に於ける戀愛的場面の採集報告—

吉田謙吉

一

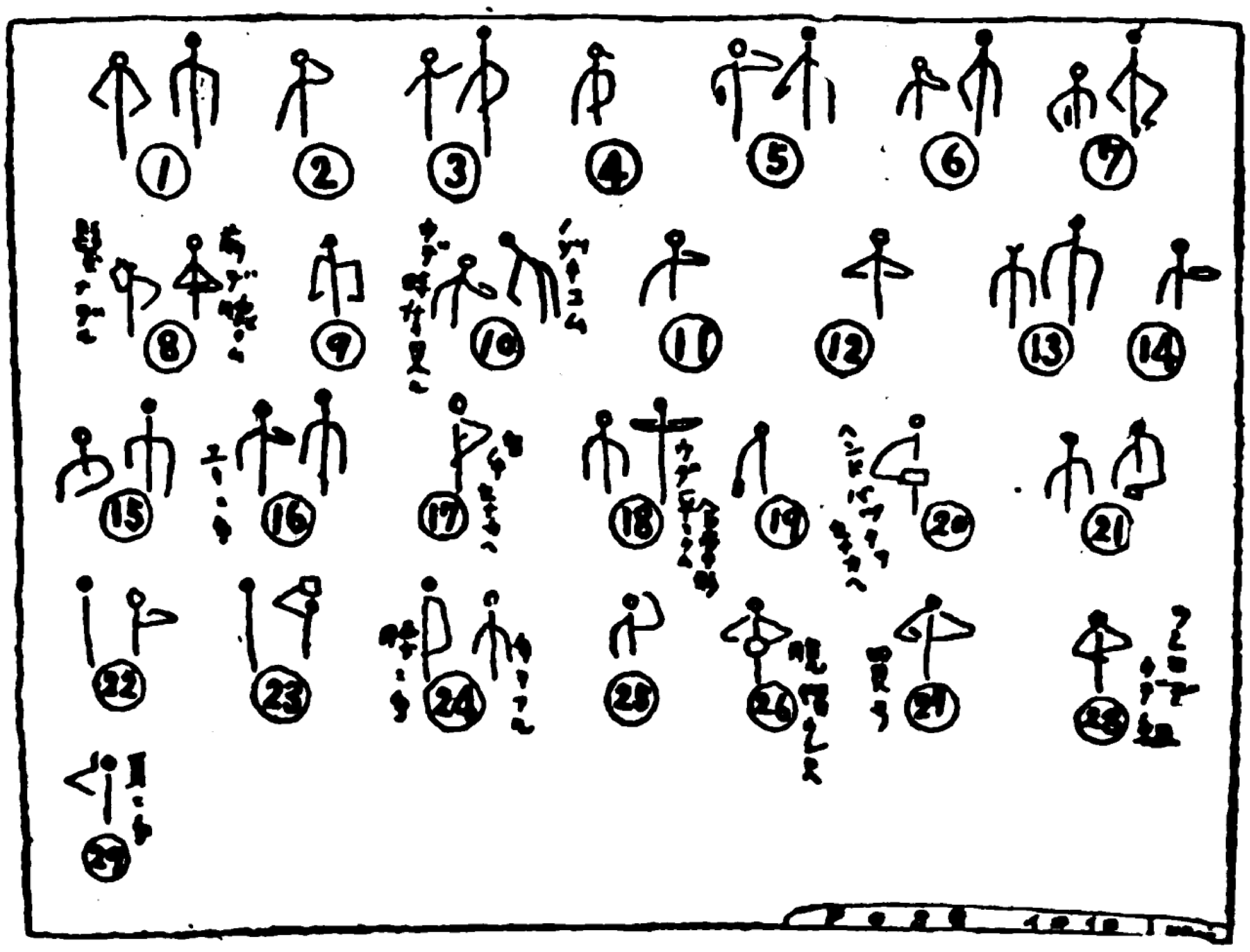
タイトル代りにお目にかける第1圖は、最近の銀座、その人出構成の中から私の採集した6組の『彼と彼女』のうしろ姿です。

私の採集ノートには、この圖の服裝一々の色合、採集時間等々に就いてまで書き入れてあるのですが、この圖中の幾組かの『彼と彼女』は、第2圖以下で考現學資料として——現代人の生活振りの報告資料としては活躍してもらつてゐるので實在の『彼と彼女』の爲めにそれらの細微な書き入れを特に秘させていたゞき、この圖では『彼と彼女』の風俗姿態について單純に眺めてをいていたゞきたいのです。

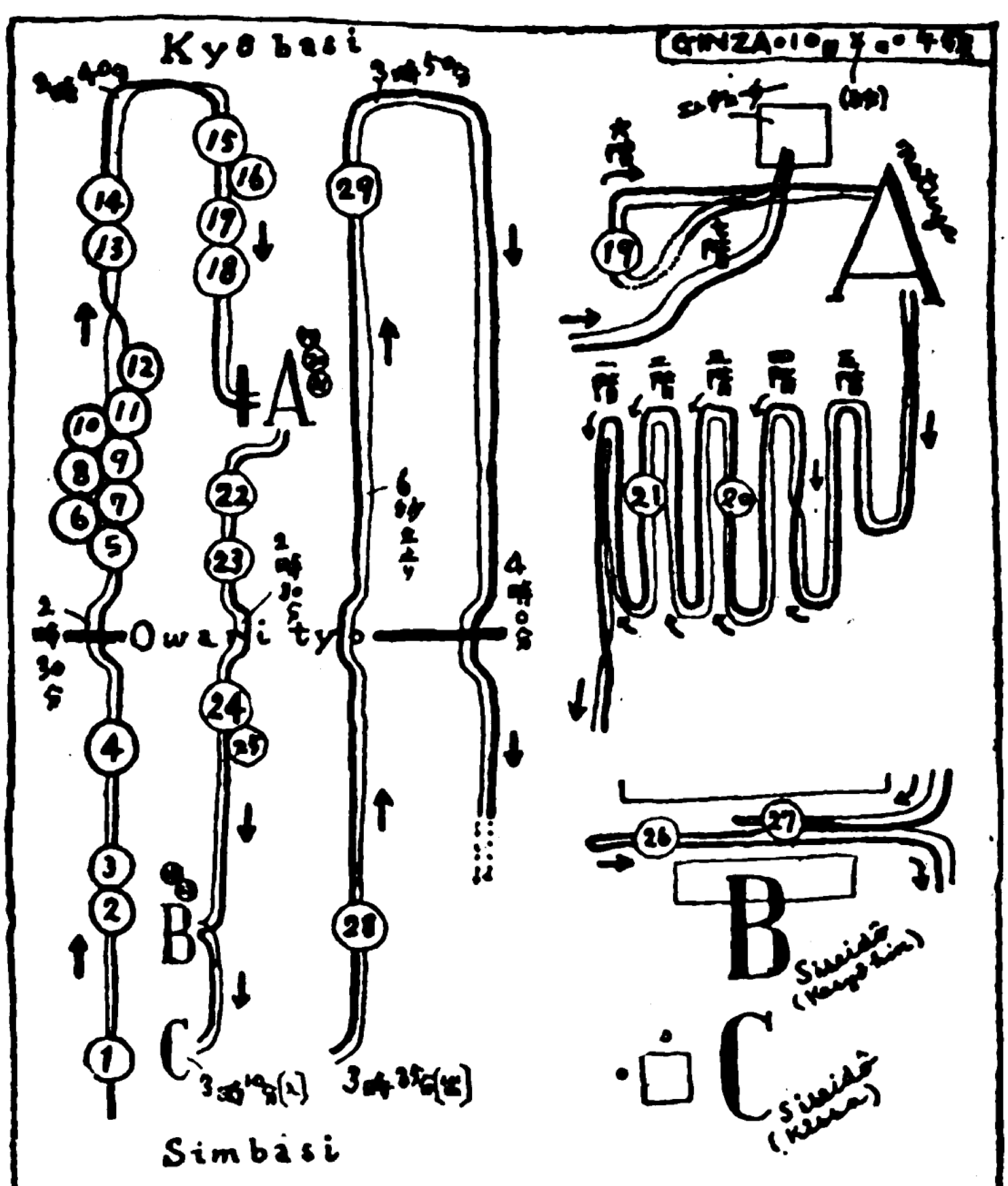
玆に申し落してならない事は、この圖に於ける『彼女』が果して『彼』の『彼女』であらうか、また『彼』が正しく『彼女』の『彼』であらうかとの認め方に就いてです。卽ちその客觀的認識への何事かゞ提示され

ない限り、第2圖以下のさらぬだにみみつちい調べ事が一層生氣をなくしはしまいかとの疑念です。

しかし私の調べ事への目的は、喧しくプライヴェーシーの扉をうち叩く事ではなしに、その何處までが開かれてゐるが、何處までが閉されてゐるかの有りの儘の狀態をつぶさに記錄して見る事から始めて見てゐるのです。從つて圖中の『彼女』が『彼』の『彼女』でなかつたとしても第2圖以下の私の調べ事は現代世相に於ける戀愛的あらはれの記錄としてお月にかけられるといふ事になるのです。更に附け加へて申して置きたい事は、戀愛的あらはれを求めるならもつともの凄い場景がいくらでも集められるではないかと云はれさうな事です。そんなにもの凄くない迄も、例へば郊外へ一歩出るなら時に月光を浴びた戀愛風景幾つかをたやすく採集し得る事でせう。然しそれからそれへの調べ事は獵奇的興味へと滑つてゆく事でしかなくなる危險性が充分にあり、社會全體の普遍的な習慣風俗の



第三圖（右）



第二圖（下）

狀態の記錄ではなくなり個人的なものへのみつながつて行つてしまふのぢやないでせうか。

2

そこで第2圖をご覽願ひます。これは散步に於ける戀愛的なるものの一採集としてお目にかけるので、卽ち一組の『彼と彼女』の銀座に於ける散步コースを記錄して見たのです。この一組の『彼と彼女』は第2圖の何れかの一組なのですがそれ以上服裝に就いての話は申し上げられません。散步區域は新橋京橋間、時間は午後二時二十分頃から同四時過迄約二時間半に涉つてゐます。勿論かうした調べ事の常として偶然のきつかけからの記錄で、新橋の角に佇んでゐた私の前を通過した二人をそのまま後を追ひつつ記錄したもので、私と前の二人との間隔は十米乃至十二三米を保つて行く事にしました。

圖の太い線が『彼』で細い線が『彼女』のコースです。勿論二人のコースは大體平行して行つてゐますが、運動具店前の野球放送への人だかりの爲めのコースの亂れと買物の際『彼』が待遠しげに十五六步勝手に步いたコースが記錄されてあります。約二時間半內に新橋京橋間二往復、その間にデパート一巡(A)と買物一軒(B)喫茶休憩(C)が挾つてゐます。步速度から推測しての戀愛的あらはれは特別には無いやうです。新橋尾張町交叉點間、尾張町交叉點新橋間何れも約十分で、極めて當り前の散步速度だからです。二人の間の會話の內容に據る步速度の急緩も無かつたやうです。近づいて會話の斷片なり聽いて記して見ようかとも思ひましたが、それよりもこの記錄では『彼と彼女』の散步に於けるポーズのあらはれを探つて見る事にしました。第3圖がそれで、第2圖のコースに於ける番號と照り合せて御覽を願ひます。番號を打つてない個所のポーズは『彼』は兩手を下げ『彼女』は右手を下げ左手でハンドバックを抱えてゐるポーズの連續及び繰り返しです。

その他動作の特徴としては、『彼』は後に手を廻して上衣の裾のあたりを時々指先でつまむ事、數回繰返し、『彼女』はしきりにスエーターの襟を氣にして上に上げる事及び髮の側面を掌で時々押えたり撫で下ろしたりする事でした。

二人の列び方に就いて申しますと、最初新橋では二人に向つて右が『彼女』で左が『彼』でしたが尾張町を過ぎて入れ代りました。一般的に男女二人連れの場合の右左の列び方はいろいろ考察資料となるので特に戀愛的場面としたならその列び方の入れ代りも偶然ではないものの如く考へられるのです。圖の二人の場面の入れ代りに於ても、動機は人混みの爲めでしたがその儘京橋まで入れ代つたままで續き、更

に京橋から逆行の際にまた舊に復して『彼女』が向つて右になりました。勿論それには個人個人の持つ何とはなしの習癖もある事でせう。私の銀座と神樂坂の人出の中での集計では男女の二人連れの列び方左右は相半してゐる狀態です。中には習癖もなく極めて氣樂に街の眺めのまにまに、例へばショウウヰンドウや露店のある側へと『彼女』が列んだりしてゐる狀態もあるやうです。また極端に習癖を強く持つてる人達は一時人混み等で入れ代つても直ぐ舊に戾らうとする狀態が見られます。圖の『彼と彼女』の場合ではあまり氣にせずにデパートを出るやまたも入れ代つたりしてゐます。一たいに既婚者の方にさうした習癖のあらはれが多く見られるのぢやないでせうか。さうしたいつとはなしの行動の捕はれが出來てくるのぢやないでせうか。

それからコースと動作との關係で氣附いた事は、通りを步いてる時とデパート內とでは『彼女』の動作に違ひが生じてる事です。即ちデパートに入るや『彼女』の手の動かし方に頗る活潑なるものが表はれました。通りではハンドバックは小脇にちやんと抱え續けてゐたのに、デパートに入つてからは手にぶらさげたりそれを持つたまゝ首の邊に手を上げたりした事です。デパートを出てから交叉點まで少しの間はさうした動作が繰り返されましたが、やがて直きに舊に戾つてしまひました。これなども一つの戀愛的なもののあらはれとは見られないものかと思はれます。

因みに『彼と彼女』はデパートでは買物をせず、いきなりエレヴエーターで七階まで昇り直ちに階段を一つづつ降りてそのまま側面の出口から出たのでして、玉轉がしの樣にたわいのないコースです。デパートの中では通りの時より二人の間の會話は少なかつたやうです。列べられてある品物の何かの故でせうか。それともそんな不都合な推測は『彼女』に叱られる事でせうか。

この記錄の最後の個所は二往復目の尾張町交叉點から少し新橋寄りの處で消えてゐます。それは（困つた事に）パッタリ會つた久濶の友人と立ち話の間に『彼と彼女』を見失つてしまつた事なんです。第3圖の『彼と彼女』のポーズ態々に就いて記錄の所々に書き入れた小註からも戀愛的な何かを發見していたゞきたく御覽を願つてをきます。

3

第4圖は東京驛二等待合室に於ける採集。午後三時四十分から約十五分の『彼と彼女』の動きの大體を書き添えてをきました。この時間に於ける周圍の狀態を記してをく爲めに待合室全體の人達の男女別の星打ちもしてをきました。●は男○は女ですが入口に田舍風の娘さんがマゴマゴしてゐたほか女の人は『彼女』の他には一人もゐなかつた

のでした。×印は筆者の位置です。

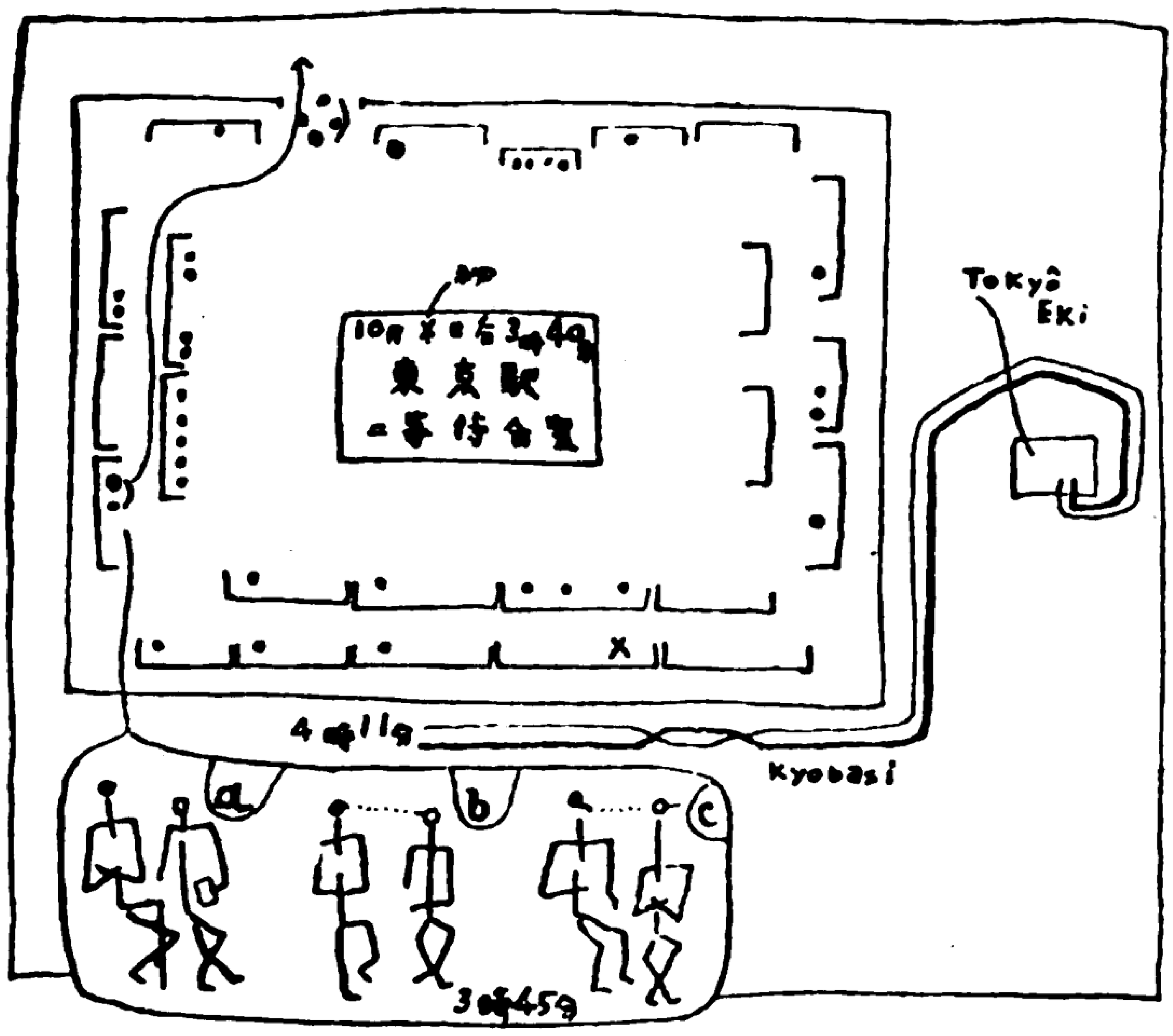
そこで『彼』はサラリーマン風廿四五才、紺背廣茶ソフトレーンコートをキチンと疊んで膝にのせてゐました。『彼女』は娘さん風十九か二十位、着物縞銘仙、赤モス帶、腕時計、フエルト桃色ハナオ草履で『彼女』の方が『彼』へといくらか首を傾けて會話してるのでした。『彼』はしきりに兩切タバコの灰を膝の邊りで落します。其他會話の際のポーズ首の振り向け方手の置き方等圖で御覧を願ひます。

やがて『彼と彼女』は徐に立上つたのです。それからのコースも圖に示して置きました。この記錄の最後も第3圖と同樣、友人との出會によつて『彼と彼女』を見失ひました。『調査從事中』といふ札でもぶら下げて歩かない限りかうした結果はまねき易いやうです。人出の個所、特に銀座では。

圖にはありませんがこの二人が東京驛の待合室を出てから銀座に至る間の動作の特徴としては、『彼』は會話の度毎に『彼女』の方へと上部の姿勢を傾けます。『彼女』はそれに答へるに首だけをくるつと向ける事屢々であります。即ち『彼』の方が常に『彼女』に話しかけてゐるものの如くでした。途中で入れかはつてはゐますが二人の列び方は向つて右が『彼女』である事が原則の如くです。

コースとしては尾張町交叉點を越してからはやゝ並行コースが亂れ『彼女』だけが鋪石際の飾窓を一寸のぞき込んだりした事件もありました。

第四圖



4

喫茶店に於ける戀愛的風景を第5圖でお目にかけます。

左圖に於ける『彼』は學生服ハトロン包みレーンコート『彼女』は銘仙着用、フエルト穿き。持物はコートを疊んで膝の上にのせ傍に赤風呂敷包みと玉蟲色のパラソル。

この喫茶店に於ては圖の『彼と彼女』の位置のボックスが一般的に『彼と彼女』の爲めにあるものの如くで、この記錄の翌日もまた一組の『彼と彼女』を同じボックスに發見したのでした。ボックス內に於

ける『彼と彼女』との座り方はこの圖に於ては『彼』が奥で『彼女』が入口に近くです。此處でのそれに關しての集計的な數字を得る暇がないので殘念ですが、他の喫茶店に於ける私の集計ではこの圖の如く『彼』が奥に就く事が優勢の如くです。即ち入口からなるべく『彼女』が見えないように計られるものの如くです。しかし『彼女』だけが一人で『彼』を待合せてる場合はその逆の樣です。

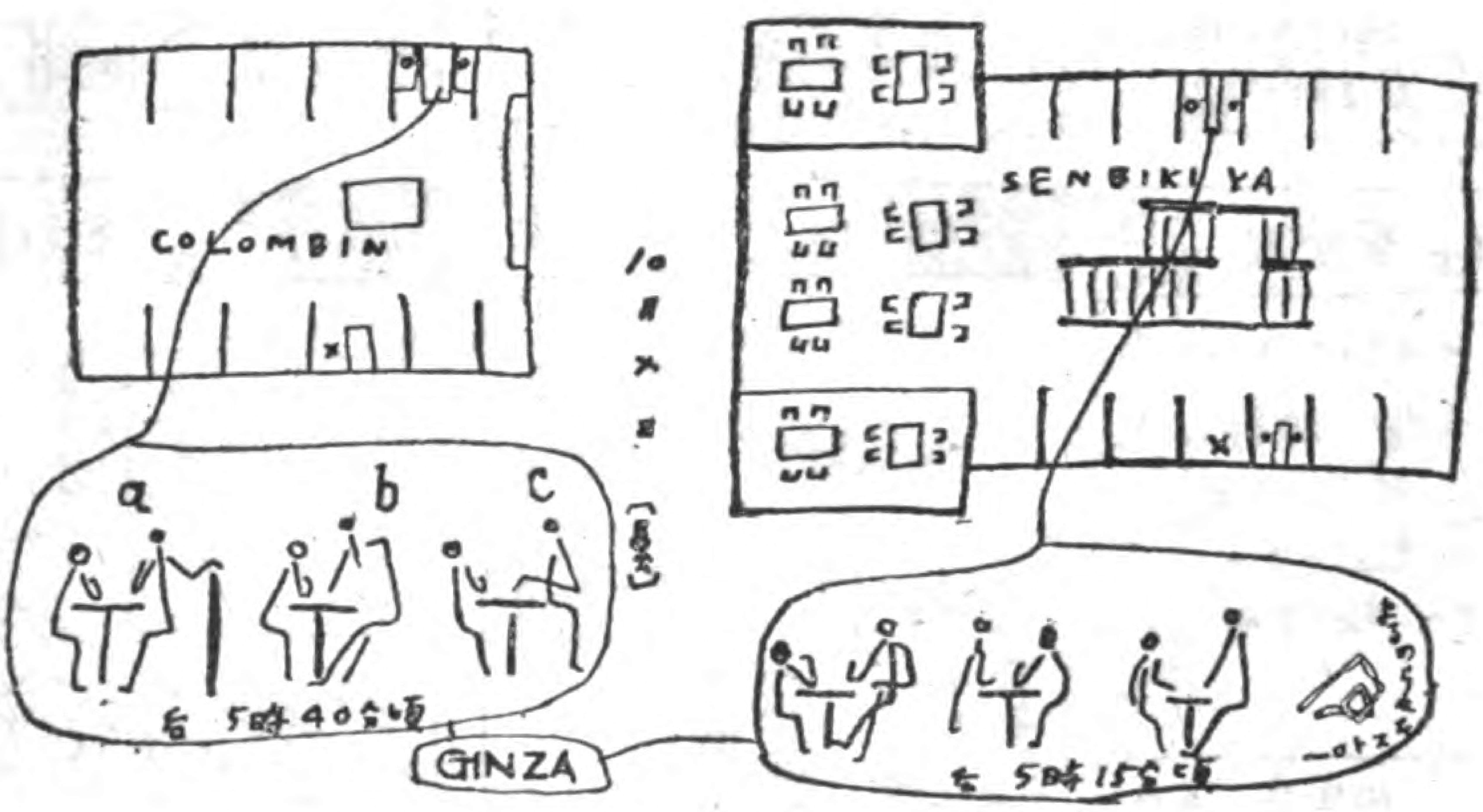
圖に於ける『彼と彼女』の戀愛的風景のバロメーターはあまり上昇しない事は、圖に示す如くボーズがあまりにファミリアルである事からと、サンドウヰッチの堆積の減り方が相當活潑である事からわかる樣です。

先に立つて出て行く『彼』が一寸『彼女』の方を振り向いてからいつたと同行の友人Nが聞かせてくれました。

『忘れものはない?……』

向つて右の圖は、別の喫茶店に於ける別の『彼と彼女』です。

第五圖



ボックス内の座り方はやはり『彼』が入口から奥の方に就いてゐます。『彼は』和服セルハンチング、『彼女』は黒洋裝映畫女優と推斷。

午後五時四十分から三十分間以上話してゐます。飲み物は『彼』も『彼女』もホットレモン。

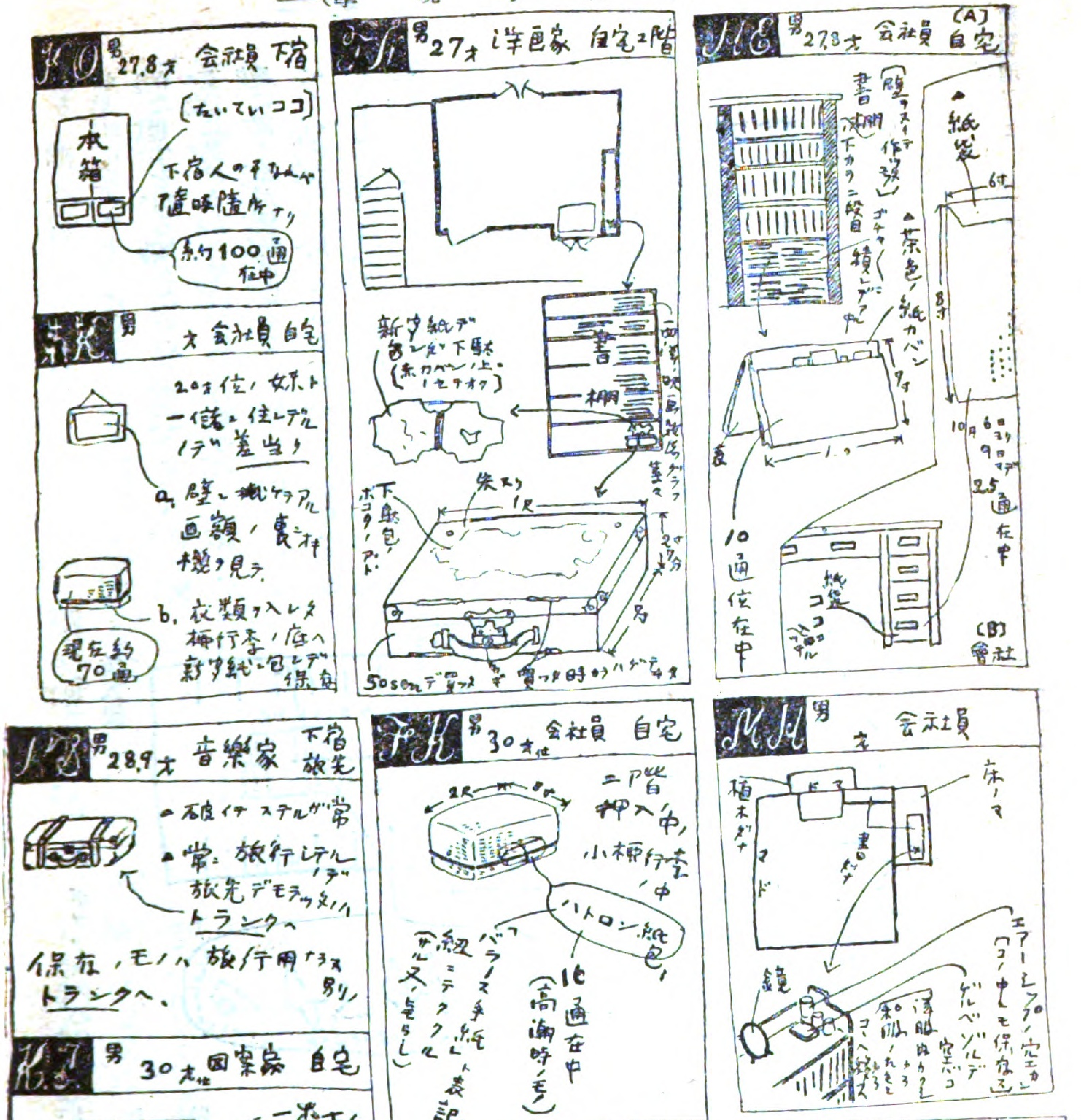
會話は聞えないのですが動作の特徴としては、──

『彼』の煙草に『彼女』が『彼』のライターで火をつけてやつた事

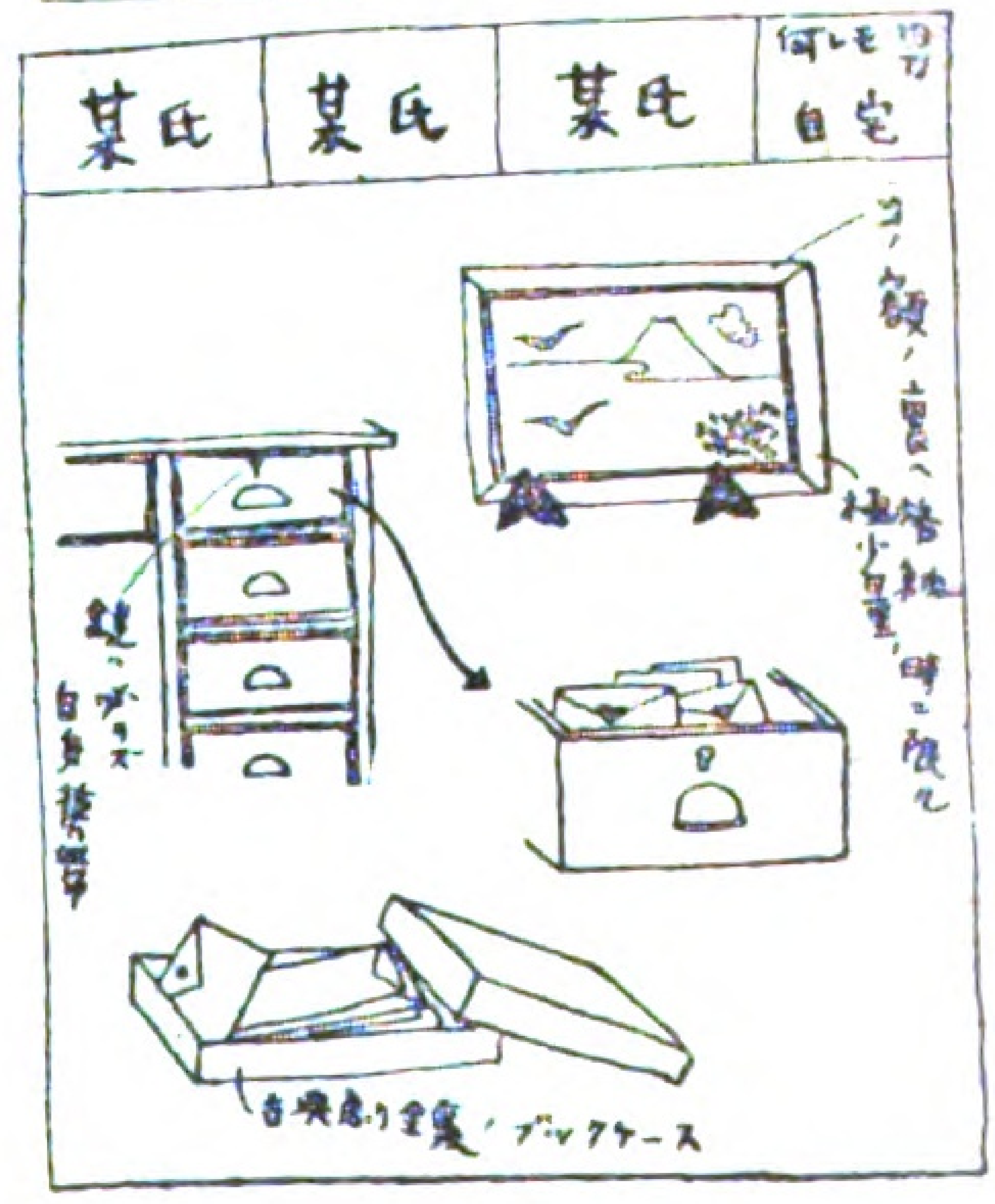
『彼女』が紙ナプキンの切端(長さ二寸幅五分)を『彼』に渡し『彼』がそれを丸めて再び『彼女』に渡した事

『彼女』はコップからストロウを取り出し指でヘナヘナに折つて丸めてテーブルの上にすてゝおいた事、その最後の形のスケッチが圖に入れてあります。

5







「ラブレタア」とあつさり言つてしまへばそれまでの事のやうですが、戀愛的手紙に就て――とから書き出して見ますと、その態々なあらはれに於てスタンダールからコロンタイまでの精神文化の飛躍に對して戀愛的物質文化はどうなんだらうなんて飛んでもない事を考へさせられます。例へば經濟的意圖で書かれたも

のと戀愛的のそれとのすばらしい差異、――つまりわが考現學ではとこの邊で始めて私は乘り出るのですが、その封筒の破き方の差違を精細に調べて見たくなつたりするのです。また一人の『彼』が或は一人の『彼女』が『彼と彼女』にまで到達せんがためになされる戀愛的手紙の生産率は？　ラブレタアの數量は、重量は？　とわれわれの興味は苛酷にまで『彼と彼女』の間に噴出しつゝある熱量の計算へいそしもうとしたりするのです。嘗て今和次郎氏によつてなされた「新婚家庭品物調査」に於ける其場の主人と夫人との間にかはされた手紙の數量が測られた事があります。即ち婚約から結婚までの間一九二四年五月から十月迄半歳の間に三百三十六通で、その目方六百二十一匁とあります。即ち一ヶ月五十七通といふ事になり、平均して凡そ一日一通宛になるやうです。目方平均一通二匁弱といふ事になります。

・話は變りますが、かつてある音樂會の濟んだ後で學生達が會場を掃除した際に驚くべき多量の戀愛的手紙が破棄されてゐたのを發見したのです。同一ヶ所に棄てられてあつたもので勿論同一人のもので『彼女』から『彼』にあてたものでした。學生達の中の特志家が丁寧に一通一通その皺を伸ばして、スクラップブックに貼り込んで立派なアルバムにしてしまつた事があります。それはたしか「考現學資料」として保管されてある筈です。

またかつて村山知義君が、意識的諧謔派の作品として『彼』にあてた『彼女』からの手紙をいつぱい引つつけて展覽した事があります。

さうなるとプライヴェーシーのプライヴェーシーまでが打破られる事になり、常識の埒内から隙見ばかりしてる生活者は引出しの鍵を掛つた儘けし飛んでしまふでせう。つひ餘談を挾みましたが、さて戀愛モデルノヂオの最後の特質として、戀愛的手紙の處置、その始末はどうするか。燒くか棄てるか。永久に保存して措くものか。もし保存しておくなら何處へ。

勿論人それぞれの個性がその始末をてんでんに、恐らく他の如何なる所有物よりも自由に裁くであらうと思はれるのです。こゝに友人知己十二氏のそれへの回答を第6圖でお目にかける譯です。

會社員HE氏のそれは、圖の如く自宅と會社と二ヶ所に保管するのだそうです。但し、あまり好きでない人、迷惑な人、誤字の多い醜態な手紙等は讀後直ちに破棄する由。そして手紙の始末のよい方でないので、諸々に投げやりの事多く、時々ボロを出すと正直な回答です。

同MH氏は、着物のたもとや洋服の内ポケットへそつと忍はす由、なほ目下會社の方の保管部に盛んに貯へられつつあるさうなんです。從つて極めてシーリアスな一通しか惠まれてゐませんとの事、それからの保存は圖の如く本箱の上の煙草の空箱及び空罐利用、若し空罐か

幾つも重ねられてそれから、しかしその時は『彼女』がその容器を『彼』と一所に數へる時でもありませうか。

ＦＫ氏は既婚者。ですからこれは卒業證書や寫眞手紙等と一所に柳行李の底に藏つちまつてあるんださうです。それは『彼女』から『彼』にあてたものばかりで十六通。かつて『彼』から『彼女』にあてた大量のものは結婚後旬日を出でずして『彼女』の手文庫より取出し燒却の由。

クリスチヤンの某君はＦＫ氏の間接報告によるもので、博愛的戀愛主義者の由で、その妹に來た手紙を整理して到着順にNo.をつけてやつたりしてゐる苦勞のたい男なる由。

會社員ＫＯ氏はラブレタアといふものの限界不明のため數量も不明だとの報告をその儘。

同菜Ｋ氏の額椽の裏に入れる手は、別圖にも一口あり、然し繪を入れ換へたりする時うつかり滑べらせたりする事があるんださうです。

畫家ＴＮ君はさすがに凝つたものです。最初からその目的で買つた朱塗のカバンをこれにあててゐます。圖は特別に實測させてもらつたのです。内容は手紙約百通位の見込の由。その他、メモリアルなハンケチや寫眞等々が入つてゐるのださうです。全部同一人の『彼女』のものださうで「やつぱり三種類は一所に入れて置かれない」さうです。目方は二貫餘りあるようで「モウこれでは小さい」などと聽かされました。勿論「非常持出」ださうで、その上にのせてある下駄も由緒のあるものださうで……。

音樂家ＨＳ君は新歸朝者。和文のは破き、歐文のだけを保存してをくといふ特異例。其他圖に就て御覽を願ふ事にして戀愛モデルノロヂオ、そのあらはれを採集圖說だけで一ト先づ打切つてをきます。

（一九三〇・一〇・一〇）

文藝時評

大森義太郎

共同製作の戲畫――『1930年』

諸君が假にちつちやい小供に《東京つてどんなところだい?》と訊いたとし給へ。小供は答へるに違ひない。動物園があつて、觀音樣の近りには玩具屋が並んでゐて、自働車が走つてゐて、電車がとほつてゐて、それからお汁粉屋があつて、……得々として、およそ東京にあるものを秩序なくたゞ並べ立てるに違ひない。

いま、もつたいらしく『共同制作』と銘うつた『1930年』(『中央公論』一〇月號)の作者達淺原六朗、久野豐彦、龍膽寺雄――からABC順に並べなくてはいけないさうだ!――の三氏は一九三〇年を描くのにあたつて、ちつちやい小供とまさに同じ考へ方をしてゐる。勞働爭議、レヴイユ、ビルデイング、野球、アパート、銀行、貧民窟、貴族クラブ、共産黨の運動、麻雀、飛行機製作工場、ダンスホール、水力發電所、競馬、華族のサロン、カフエー、高原の避暑地、本牧の淫賣窟、サラリーマン、勞働者、タイピスト、伯爵、資本家、共産黨員……一九三〇年の日本で見られる事件と人物とをだらしなく並べたてゝゐる。私は讀みながら、終りに近く、火山の爆發があつて作中の二人の人物が死んでしまふ處へきて、とうとう聲を立てゝ笑ひ出してしまつた。なるほど『一九三〇年』の日本には淺間山の噴火があつて、なんでも人が死んだつけなあ!

かうした『一九三〇年』の題材の選び方について正宗白鳥氏は『一九三〇年の日本を寫すには、カフエーだの、工場だのタイピストだのを持たさればならぬやうに思ふのは、淺薄なので、……』と云つてをられるが(『東朝』、文藝時評)そのとほりである。その淺薄さは、カフエーだのタイピストだの淺間山の噴火だのを無暗と羅列するにいたつて極つてゐる。しかし、これは龍膽寺氏等のやうな人達にとつてはむ

しろ必然であることを、われわれは忘れてはならないであらう。現象をたゞ表面的に羅列的にのみ把握するといふのはブルジョア・イデオロギーの特質である。しかもこの特質はブルジョア社會制の衰頽期にいたるやますますはなはだしくなる。

かうした題材の把握の仕方は、さらに、この『共同制作』においては、特に別な理由によつても裏づけられてゐるのである。讀者諸君はこの小說の頁をひるがへしてたゞちに氣づかれるであらうが、二三頁おいて必ず一行づつの空きがある。そして、この一行空きと共に場面が變るのである。例へば、『東洋內燃機製作株式會社』の敍述がある、一行空いて、『神保伯爵の邸』となるといつた具合に。これはなんのためだらう？　場面が變るにつれて三人が執筆を交替するためである。かうして、龍膽寺氏等が、上のやうな內面的聯關を缺いた、雜多な題材を掻き集めたのは、これによつて、それら題材の切離されたおのおのを、三人がそれぞれ別に書く便宜からも出たのである。

このことは『一九三〇年』の作者達が『共同制作』なるものをいかに理解してゐるかを示す。氏等によれば、いくつかの題材をお萬子でも分けるやうに三人に分配して、三人がおのおの得意（！）の場面を書きさへすればいゝ、それを持寄つて機械的に寄せ集めれば、そこに忽然として『共同制作』が出來あがるのである。（かくして出來た『一九三〇年』には統一もなければ連絡もない。誰れが何處を書いたかすぐわかる。例へば、銀行員の間の不景氣議論の會話がある。長たらしい經濟論が出てくる。たどたどしい、わかりにくい、書いてゐる人の頭の惡さを示す以外にはあまりに意味のない文章。こゝは久野豐彥氏の筆である。やがて一行空く（一二四頁）。たちまち、アパアトの朝『カルセオラリヤの鉢』と『真ッ赤な縞のピジヤマ』をもつて龍膽寺氏が登場してくる。『自動車の中で花房納子の膝は伯爵の膝と、多量な接觸面をもつてゐた』といふやうな通俗小說を淺原六朗氏が書いてゐると思ふと、一行空き（一三六頁）、『資本金一千萬圓の東洋內燃機製作株式會社』の經濟狀態になつて、漢字がごつごつと並ぶ。久野豐彥氏が筆をとつてゐる。同じ女の會話でも淺原氏と龍膽寺氏はすつかり違ふ。おまけに御丁寧に、龍膽寺氏が書くときには『まア。……』、『……でも、』と『……』を使つて、ハイ龍膽寺が書きました、と區別してゐる。

例へば、いかに統一がないかは、もつと簡單に、次のことを舉げただけでもいゝ。この作品で最も大事な同じひとつの會社の名が『東洋內燃機株式會社』であつたり（一一六頁）、『東洋內燃機製作株式會社』（一二一頁、かく嚴格に記すことによつて久野豐彥氏は自分が經濟學を學んだことをひけらかしたつもりである。）であつたり、たゞ『內燃機製作會社』（一一〇頁）であつたりするのだ。『ブルジョア』が登場した

り、ブルジョワ』がひつこんだり『マルキシスト』久野氏はドイツ語なんか見たかある（資本家のことだ）マルクシストでさへ今時およそこれを知つてゐる）が『マルクス主義者になつてしまつた』り。

川端康成氏はこの『共同制作』について、氏のやうに『楽屋を知つてゐるもの』には駄目だが、素人には『大體統一された一個の作品と感じられるだらう』と云つてゐられた。（『讀賣』文藝時評）しかし事實は私のやうな素人にも右のやうにこの作品は全く統一を缺いてゐる。もし川端氏のやうに『楽屋を知つて』ゐたなら、この『共同制作』は壊された寄木細工よりも支離滅裂であらう。もちろん一篇の統一した作品としてなどとうてい見られた代物でない。これが『共同制作』でとはるなら、龍膽寺氏の『アパートの女達と僕と』淺原六朗氏の『ビルデイングと小便』久野豐彦氏の『ボール紙の皇帝萬歳』をいゝ加減に綴ち合せて、ヘイ『共同制作』でございとさし出した方がいゝ。いや雑誌『改造』の創作欄の頭に『共同制作』と書きさへすれば、そしてただ『共同制作……に就いて』といふ宣言だけ厳めしい奴を書きさへすればよからう。

『共同制作』かどうかは別として、たゞひとつの作品として見ても、愚劣かぎりないものである。

いや會社の名前をところどころで取り違へることを云つたが、この作品のチヤチさ加減はお話しにならぬひどいものである『資本主義者』なんか見たかある（資本家のことだ）マルクシストでさへ今時およそこれが帝國主義と資本主義の結びついてゐるところなんだ』と云ふ（資本家）者は帝國主義とは獨占資本主義だぐらゐは誰れでもしつてる、こんな馬鹿な會話は君等自身以外にやる奴はない）。それから共産黨員が警察のことを『ポス』といふ（アメリカの悪漢團と間違へちや困る）しかしこんなことはどうでもいゝと云へば云へる。が、タイピスト『章子』は『江東』に住んでゐながら『有樂町』の銀行に通ふのに『省線電車』を利用するんだから恐れ入る、いつのまにか深川本所あたりに『省線電車の停車場』ができたと見える。それよりも讀者諸君はこの共同の書き出しから眼をパチクリさせざるをえないであらう。まづ『黎明が迫つて』きたかと思ふと、すぐに『章子』は『お母さん！もうお疑みにならない！』と云つてゐる。かと思ふと『目ざまし時計』が鳴る。後の方へ行つて、『銀座』はもう『颱風』に見舞はれてるが、さう遠くもなささうな『高原地』には颱風がやつと『接近』してゐる。ダメを押したらきりがない。

われわれはそんなことを捨てゝ進まう。白鳥氏はこの作品の通俗小説味を攻撃してをられたが、これほどに低劣な通俗小説を發見することは、今日、さう容易でない。共産黨員が銀座のカフエーでスパイを刺して雨の中を逃げる、その男が本牧の『怪しげなハロＴＥＬ』で一晩

いビールを重ねて』ゐる、と刑事が『きわめてにこやかな顔で』這入つてくる。かうだ！ それから前に云つた淺間山の噴火だが、以前最もくだらない活動寫眞に、例へばある少女が外國人をピストルで打つたとか地中海で陸地が引きあげられたとかいふことがあると、たちまちそれを筋に仕込むのがあつた。龍膽寺氏等のやり口はまさにそれである。讀者諸君、記憶されるがよからう、これが『新興藝術派』ださうです！

この作品の構成などを問題にしたところで始まらないが、めちやくちやである。例へば、最初は中心の人物になつてゐる『源一』と『章子』と『顯吉』は一七八頁までは出てくるが、後は全く消えてどうなつたか皆目わからない。

繰り返して云ふ、これほど低劣な作品を他に發見することは難事業である。

いつたい『新興藝術派』のこの三人が『共同製作』をやるといふことが出鱈目である。『新潮』九月號の座談會では『文學に於ける個性』の問題が論じられてゐるが、そのとき、德田秋聲、中村武羅夫、加藤武雄、近松秋江の諸氏等はしきりに藝術における個性の重要性を主張してをられる。この主張は、絶對的命題としてはもとより誤りであるが、ブルジョア藝術の立場からは當然の主張で、右の諸氏の主張はその立場に誠實なものといふことができる。龍膽寺氏等は、いふまでもなく、ブルジョア藝術の擔當者である、そのうへに、藝術派をもつて任じてゐる。氏等においても個性があくまで重じられねばならぬのは明白なことである。事實、例へば龍膽寺氏はこの『共同製作』と同時に書かれた舊の『新興藝術派の文學理論』(『若草』一〇月號)で『われわれの感情生活』における『個人的特殊性』が藝術にとつて決定的に重要であることを力說してゐる。しかもその同じ龍膽寺氏が『一九三〇年』においては平氣で『作家のもつ、獨特な藝術的雰圍氣を、一體(『一體』にせよ何にせよ問題は同じだ、ごまかしてはいけない——大森)制限』する『共同製作』をやつてゐるのだ。龍膽寺氏が冗舌を續けてきた藝術派の主張はどこへ行つたのか！ われわれはこれによつて共同製作といふやうなものが氏等のごとき立場に立つ人々によつてとうてい成し遂げられるものでない——『1930年』はこれを實證する——ことを知るばかりでなく、進んで氏等がいかにその立場に對して不誠實であり、無節操であるかを見うるであらう。

氏等の無節操はこれに盡きない。龍膽寺氏等の『新興藝術派』がプロレタリア文學に對して揚言したものは、氏等が作品の對象、『內容』の力に依らないといふことではなかつたか？ だが、これはどうだ！ 野澤富貴の描寫である、其處では新見が出てきて、本間が出てくる。い

や、そんなことを持ち出すまでもなく、私が上で紹介しただけでも、いかに『一九三〇年』の作者達がたゞひたすら對象のもつ魅力によつて、『内容』の力によつて讀者を繋いで行かうとしてゐるかを十二分に示してゐるであらう。氏等の平生の主張などは吐き出した唾よりも顧みられてゐない。

そればかりでない。藝術を政治的な要求から解放するといふことは、これまた、龍膽寺氏等がプロレタリヤ文學に對して『新興藝術派』の立場として主張したところであつた。作品『1930年』における事實はどうか？　この中に續々として出てくる經濟論を見るがいゝ。それは例のダグラスの理論である。そんなものを出してくる技巧上の必要は少しもない。今日のサラリーマンはダグラスの經濟理論たんぞを語りはしない。しかもそれは最も露骨な仕方で說かれる。最も下手糞な映畫監督がすべてを字幕で語らせるよりももつと拙劣な仕方で、無理に會話として或は作中の人物の感懷として、なかなかと語らせてゐる。たゞたゞダグラシズムを宣傳しようといふんである。《もつとも實際にはダグラスの誤譯、曲解で、全くのとんちんかんで、少しもダグラスの理論を宣傳する役には立つてゐないが。》『1930年』の作者は進んで作品のあらゆる機會にマルクシズムを傷けようとしてゐる。マルクシストの勞働者『驍吉』がタイピストの『章子』よりも『批判する力』のないことを云つたり、銀行員『志村』に『今日のマルキシストなどが、遠い未來の理想にばかり狂奔して』ゐることを輕蔑させ、市電ストライキを批評させたり、『不景氣問題』に對する『講壇マルキシスト』の『無爲無策』を笑はせたり。もちろんこれらは作品構成の上からはなんらの必要も見出されない。たゞマルクシズムをやつつけよう（と欲するだけだが）がためである。これで藝術の政治的要求からの解放だ！

かくのごとくに龍膽寺氏等の態度は無誠意であり、無節操である。《われわれは誠意について、特に『新興藝術派』の場合に、語る必要はない。しかし讀者諸君のうちには『藝術派』といふユニフオームのゆゑに、彼等が眞面目に藝術に精進してゐると考へてゐる人が萬一あるかもしれない。》

われわれは、いまや、龍膽寺氏等がなにゆゑに、『共同製作』を試みたかを知ることができる。『新興藝術派』は行きつまつてしまつた。《淺原氏はみづからこのことを『讀賣』の文藝時評で云つてゐる。》なによりジャーナリズムに置いてきぼりを喰ひさうだ。こりや大變だ、なにか眼新しいとこを覗はなくちやならない。そこで『共同製作』！　平生の主張なんかどうだつていゝ、なにあれだつてたゞ方便だ。それから先鞭をつけてあつと云はせる必要がある、作品を彫琢し

てゐる閑なんかない、チャチでもかまはない。かうして『1930年』は書かれ、さうして『中央公論』に持込まれたのである。

それは、昨晩は新規賣出しの化粧品を、今晩は鼠取りを、明晩はちよいと氣の利いた菓子をといふ夜店商人の態度である。

諸君、これが『新興藝術派』だ、『新興藝術派』の『共同製作』の正體だ！

……………

共同製作としては別に『文戰』の青木壯一郎、鶴田知也、里村欣三の三君の『工場閉鎖』が讀賣新聞に連載されてゐる。まだ終つてゐないのだから、批評は後の機會に讓らねばならないが、しかし、今日までのところでも『1930年』などとは比べものにならないことは云ひうる。共同製作といふやうな、藝術生産の新しい形式に眞に成功しうる者が誰であるかを知ることができよう。

映畫ふたつ三つ

今月は十月といふので、雜誌が特別號だ。それに『近代生活』、『文學時代』『文學風景』など新進作家を總動員して書かせてゐるので、惰讀の數は大變なもんである。もちろんみんな讀んだわけではないが、でも、時評の筆を執るといふとなにか義務を感じて、ずゐぶん讀んだ。しかし、ありていに云ふと、あまり感心したものがない。それよりあんまりたくさん讀んでうんざりしてしまつた。で、涼しくなつたのを幸、映畫を少し見て歩く。

まづ『ハッピイ・デイズ』と『パラマウント・オン・パレイド』を見た。兩方とも典型的なレヴイユ映畫。肩が凝らないで、綺麗で、見てゐて面白い。ふたつのうちでは『パラマウント・オン・パレイド』の方がよかろう。『ハッピイ・デイズ』は一貫した筋をこしらへたのが無理で、始めから筋なんかもたず第何景で並べて行つた『パラマウント・オン・パレイド』の方が利口だ。それに馴染みの役者で見物を呼ぶことを主眼にしたかうした映畫では、スタッフの貧弱なフォックスは始めからパラマウントに負けてゐる。『パラマウント・オン・パレイド』のヴイクタ・ミルナとハリー・フイッシベクの撮影が『ハッピイ・デイズ』のルシヤン・アンドウリオトのそれよりいゝことも、かうした種類の映畫にとつてはかなり重大なことであらう。

しかし映畫的にはもちろんどちらも問題にならない。『ハッピイ・デイズ』ではアン・ペニト、ンの出る『スネークス・ヒップ』とかいふ踊りの場面が見られるくらゐ。『パラマウント・オン・パレイド』では堀つて——これは皮肉ではない——紹介部のフラッシバックのところがいさゝかすぐれてゐる。

私は見て面白いと云つたが、實は多分一般のお客には面白いんだらうといふんである。なんしろ、この不景氣の際に非常な興行成績のやうだ。殊にパラマウントの方は、私自身は大分退屈してしまつた。トーキー始つて以來、『フォックス・ムーヴィトーン・フォリーズ一九二九』を始めとして、レヴイユ映畫なるものをずゐぶん數多く見せられたが、どうも千遍一律で倦き倦きする。ひとつ見れば澤山だ。アメリカでもそろそろ下火だといふ話、實際トーキーもこんなところにうろうろしてゐたんでは仕様がない。

『バード少將南極探險』はよかつた。誰れかゞこれをサウェート映畫『トゥルクシーブ』と比較して、『バード少將南極探險』はアメリカ帝國主義の表現であると云つてゐたが、それはそのとほりに違ひない。この南極探險がアメリカ帝國主義と結びついてゐることは疑ふべくもない。事實、バード少將はキャンプをなすやまづ星條旗をへんぽんと風に靡びかす、いよいよ飛行機で南極の上を飛ぶやまた星條旗を投じる。しかし全體としては見てゐてアメリカ帝國主義の宣傳をさう露骨に感じない。その不愉快さは割りに少い。

見事な撮影である。氷の崖、南極近くの山々、殊に夜の撮影など立派である。實寫ものとして、エディティングもうまい。最初長いバード少將の演說が（トーキーで）あるのは感心しないが、その後はいい。巧みに探檢者達のキャンプ生活を入れたり、時りはてゝもなは橇の先頭を努めようとする犬を、却つて可憐いさうだからといふんで銃殺する挿話をはさんで變化をつけるなど。（こゝのところで、ピストルをもつて犬を引つぱつてゆく男を見せ、後は氷の上の靴跡だけにし、やがてピストルの音を聞かせる、他の犬の驚きを見せ、行つた男の歸つてくるので終る技巧はうまい。サウンドの巧みな使ひ方だ。）殊にすぐれてゐるのは飛行機の上からの撮影の場面である。

『バード少將南極探險』は私が最近見たいちばんよい映畫である。少くもレヴイユ映畫なんぞより遙かに見應へがした。

最後に『ラヴ・パレイド』を見た。これは少々期待して出掛けた。アメリカで非常な喝采を博してゐるので、もつともアメリカでの評判はどうも當てにならない場合が多いが、ともかく久しぶりの、そして始めてトーキーのルービッチ物として少々期待したわけである。

この映畫もまた見物に受けるであらう。筋は女王の、臣下の伴侶とのラフエール・ダムール。その伴侶に扮するシュヴァーリエの腕が開かれて、おまけに女王にたるジャネト・マクドウナルドの際も綺麗で。ナンセンス味があつて、エロテイシズムは豐富だ。『パラマウント・オン・パレイド』と同じヴイクタ・ミルナの、輕い調色の美しい撮影。全體がすつきりして氣が利いてゐる。そこらのインテリゲンツィヤの

若い男や女を喜ばせる條件が揃つてゐるわけだ。

私は、映畫技巧においては全く鍊達の士であるルービッチがこの映畫でどこまで『音』を使ひこなしてゐるか、また、サイレントで見られた彼の從來のうまさをどこまで『音』に對して守つてゐるかに興味を掛けた。

さて、『ラヴ・パレイド』を見て、私は技巧家のルービッチに相當感心した。彼は私がこれまで見たどの監督よりも巧みに『音』を支配してゐる。例へば。會話のとき、一方の男だけをバストなり何なりで出しておいて、對手の方は出さない。さうして、對手に喋らせて、その聲だけを聞かせ、シーンに出てゐる一方の男の表情をこれに適應させる。最も感心したのは、最後に近く、女王が伯爵——いまは彼女の夫——とオペラに出席することになつてゐる。が、その前喧嘩してしまつたので、いよいよとなつて女王だけが出席する。こゝでルービッチは女王席の二つ並んだ椅子のひとつだけは空いてゐるのを出す、そして、臣下の見物人達が下の席で伯爵が來ないのを不審がつてざわめき囁しあつてる樣子を、その方へカットせず、たゞ音で表す。これなど實に巧みな音の使ひ方である。その他においてもルービッチは音に左右されないで、これをひとつの映畫作品の構成のうちに織り込まうと努めてゐる。かなりの成功を收めてゐる。

ルービッチが音の侵入にもかゝはらず、その從來のうまさを保つてゐることも認めなければなるまい。ルービッチの得意とする場面轉換のうまさは依然として『ラヴ・パレイド』にも見られる。終りの方のシュヴァーリエとマクドウナルドの對話の間に舞台のステージのダンスの俯瞰撮影を入れた前後など、この例である。全體としても、檢閲によつて大分きられたにもかゝはらず相當に（この點は後に論じる）いつもの、滑かなリズムを出してゐる。

（右の私の云ひ方は一應説明を必要とするであらう。といふのは、私の擧げた點はコンティニュイティの巧みさで、監督ルービッチに歸せられるべきでなく、コンティニュイティ・ライター——この場合でいへば、アーネスト・ヴアイダに——歸せられるべきだと云ふ人があるかもしれない。或はさうかも知れない。しかし、われわれはルービッチの映畫が、例へばよしコンティニュイティ・ライタがポール・バーン（『マリッチ・サークル』）でも或はハンス・クレイリ（『フオアビッドゥン・パラダイス』）でも、常に同じやうな場面轉換のうまさをもつてゐることを知つてゐる。その意味でこれをルービッチに歸していゝ筈である。）

ところで、この『ラヴ・パレイド』を例へばルービッチの第一の傑作であろ『マリッチ・サークル』と比べると誰しも『ラヴ・パレイド』が映畫としていちじるしく見劣りすることを認めるであらう。これは

何處から來てゐるか？　一と言でいへば、シュヴァーリエの、それからマクドウナルドの歌を聞かせようとしてゐるからである。いたるところで歌を聞かせようとしてゐるからである。この意味ではルービッチもトーキーの音に左右されてゐるからである。

このことは、第一に、構成の無理を生んでゐる。大して必要もないのにたゞシュヴァーリエの歌ふ機會を作るために、伯爵を庭へ出したり、マクドウナルドに歌はせるために餘計な近衛兵の閲兵をやらしたりである。さうして歌になれば場面が固定するから、場面轉換の速度は落ちてルービッチの得意のリズムは出なくなる。部分をとつて説明すると、例へばシュヴァーリエとマクドウナルドが長椅子に腰掛けて對話するところが前後二回ある。ルービッチはバストの場面の巧みな轉換でこれを描いてゆく、かうしたところはルービッチの最もうまい個所なのだが、『ラヴ・パレイド』ではそれが切角のところで、シュヴァーリエとマクドウナルドの歌になつてめちやめちやになつてしまふ。もつとも、ルービッチはこの點でもほかの監督には多く見られない用意と苦心をしてゐる。例へば最初の伯爵がパリを去るときのシュヴァーリエの長い唄のところでは、このシーンの不自然さを避けるために、また場面轉換のために、その歌を聞いてる女達を出してくる。が、それでも缺陷は完全には補はれてない。かうして結局、ルービッチの全盛におけるリズムは『マリッヂ・サークル』などに比べれば、『ラヴ・パレイド』では大いに劣つてゐる。

しかし、かうした『ラヴ・パレイド』の缺點についてはパラマウントはたゞシュヴァーリエの歌を中心にして、他の映畫的効果などどうでもいゝ、ひとつの映畫を製作しようとしたので、それを一篇の『フォト・プレイ』にまで高めようとしたルービッチの苦心をむしろ買ふべきかもしれない。それにしてもひとつの映畫作品『ラヴ・パレイド』がまづいことに變りはない。

ところで、私が『ラヴ・パレイド』に對して指摘した缺陷は今日のトーキー映畫のすべてに共通してゐる。今日のトーキーは面白くない、と云つてわれわれはもはやサイレントに滿足はできないが。トーキーが映畫として面白くないのは、『ラヴ・パレイド』において示されたやうに、たゞ音を聞かせよう、たゞよい音樂を複製しようとしてゐるところにある。それはちやうど映畫發達の初期において、運動や動作が映せるといふところから、映畫においてたゞよい舞臺の演技を複寫しようと努めて、そのために映畫が、映畫作品としては、面白くなかつたと同じことである。トーキーも今日のやうに、音、音樂に囚はれてゐるところから脱しなければ、いゝ映畫作品をわれわれに示しえないであらう。しかしまた、サイントの發達の跡を見れば、トーキー

について私の云ふやうな進歩は充分に可能な筈である。いまのトーキーでトーキーそのものを棄てることはできない。

マルクシズム文學史の必要

さきごろ、メーリングの文學論が纏められて刊行された。その全集のうちの二卷としてである。わが國ではあんまり問題にされないやうである。いつたいメーリングはわが國ではどうもてはやされない。これには、その難解晦澁な、しかし、われわれにとつてははなはだ讀みにくいドイツ語の文章が第一の原因であらう。同時に、リャザノフがメーリングのマルクス傳のある個所についてかなり手ひどい攻撃を加へてゐるところから、なんであれメーリングをもち出したりするとなにか日和見主義でもあるやうに、わが國の若いマルクシストの間に考へられてゐるのにもよらう。しかしこれなど最惡の僧侶主義だ。メーリングには間違つたところがある。けれど、それだからといつてメーリングの他の多くの點における正しさ、卓越を否定することはできない。卒直にいふと、私など、メーリングのマルクス傳の方が、マルクシズムに對する理論的把握においては、リャザノフのマルクス＝エンゲルス傳よりもすぐれてゐると思ふ。

いづれにしても、少くも文學＝藝術理論におけるメーリングの功績は實に大きい。こゝにも批判すべきものはあらう。しかし、プレハノフと並んで彼の活動がなかつたなら、われわれの藝術理論は今日の水準に達しえなかつたであらう。

しかし、いま私はメーリングの文學＝藝術理論における意義・貢獻といふやうなことを詳論しようとするのではない。

私はメーリングのこの書を前にして、彼の文學史論的な仕事に感嘆した。もちろん、Zur Literaturgeschichte と題されてゐて、さういふ方面のものが主として集められてゐるのだが、それにしても、ドイツ文學については古典文學の先驅者の研究から始まつてゴェーテ、シラーはもとより、ロマンテイークから自然主義と新ロマンテイークにまで及んでゐる、そして、さらに西歐の他の國、北歐の文學の研究もある。隨意に作家の名を擧げて見給へ。レッシング、クライスト、グリルパルツアーでもいゝ。或は、ゾラ、イプセン、ゴルキーでもいゝ。われわれが頭に泛ぶほとんどすべての作家について、メーリングの研究をわれわれは此處に見出すことができる。いかにメーリングが作家とまた作品に對する文學史論的な研究に努めたかゞ知られる。

こゝで私は思ふ。わが國のマルクシズム藝術理論家はこの方面の仕事をあまりに怠つてきはしなかつたゞらうか。なるほど明治以後の作家についての文學史論的な研究はないではない。が、それとて極めて

嚴かである。いはんや、それ以前の例へば德川文學の或は王朝文學の作家と作品に對するマルクシズムの立場からの研究にいたつては、全然ないと云つてもよからう。

もとよりこれには理由がある。わが國の一般の無産者運動の急速なあわただしい發展は藝術の領域における任務を擔當するマルクシズム理論家をもこちらへ動員して、それらの人に時間を與へなかつた。のみならず、藝術の領域そのものにおいても、藝術運動を組織する事業、わが國においてマルクシズム藝術理論を一應確立する――これは當然にブルジョア藝術理論家との鬪爭の形をとつた――仕事に迫はれた。文學史論的な研究に多くの余裕を與へられなかつたのである。

然し文學史的な研究は重要である。殊にマルクシズム文學＝藝術理論の充分なる確立に對して徹底的に重要である。我々の藝術理論は、形而上學的な美學の場合と異つて、特に事實に、藝術史的の事實に基礎づけられてゐなければならない。メーリングの場合と違つて、我々はそのメーリング自身の、又プレハノフのさうした研究を既にもつてゐる。然し今日においてはそれのみでは不足である。われわれは日本の特殊な具體的な文學＝藝術史的な事實による基礎づけを必要とする。

さらにいへば、われわれはこの方面においては特に輝かしい成果をあげる可能性を保證されてゐる。いま述べたごとくメーリングとプレハノフによつてすでに見事な模範を與へられてゐるばかりでなく、眞に科學的な文學＝藝術史を書くことは、史的唯物論に立脚するマルクシストのみがなしうるからである。この意味では、マルクシズム藝術論の正しさをひとびとに確認させる上にも、最も有效である。われわれは文學＝藝術史論的な研究にもつと努めねばならない。

この點では私はしばらく前に出た淺野正一氏の『紫式部論』（『中央公論』八月號）を非常に興味深く讀んだ。この論文の內容自身には私はかなり不滿をもつ。第一、筆者は從來の國文學史的の造詣――その深さには感心はしたが――に囚はれすぎてゐる。頁數の制限によらうが、當時の社會情勢に關する叙述が不足である。さらに、筆者の史的唯物論に對する理解が充分に深くなく、そのために考察が機械的である。それにもかゝはらず、かゝる種類の研究のほとんど最初のものとして非常な意義をもつものであり、またわれわれにとつて極めて有益であつた。私は同じ筆者にその後の研究を期待する。さうして、かういふ仕事がマルクシズム文學理論家にとつて必要である。

進んでは、例へば紫式部に關する從來の國文學者の議論を批判するといふやうな、ブルジョア的な文學史の克服の仕事もなされなければならない。近刊のドイツ版『マルクシズムの旗のもとに』でパウル・ライマン――この人について私は知識をもつてゐない――が例の有名なグンドルフの『ゴェーテ』を批評してゐる。議論の內容がどこまで正しいかは別として、意義のある試みと云はなければならない。われわれもまたかういふ仕事を日本文學の領域において果さねばならぬと思ふ。（一〇・六・一九三〇）

黒人迫害物語

前田河廣一郎

涙香小史と會つた黒人

アメリカといふ國は、不思議な國である。

九人の白人が通つたあとには、きつと一人の黒人が歩いて來る。十人の女の中には、必ず一人の眞つ黒な女が混つてゐる。九人の色の白い子供が遊んでゐる傍には、眼の大きい、脣の厚い、縮れ毛の黒ん坊の兒が立つてゐる。……かうして、アメリカ合衆國政府の統計局の報告から、私達は、一億二千萬の人口のうち千二百萬の黒人々口の在ることを知るのだ。

日本では、横濱や神戸あたりの埠頭に三四人ほど見受けられたり、活動やギニヨール人形や、ジヨセフイン・ベーカアの肉慾的なダンスの話ぐらゐで知られてゐる黒人といふものは、一歩アメリカへ這入ると、驛々に列車のポーターとなつて、その異様な相貌をもつて私達を脅かすのである。——都會へ入ると、黒人の數があまりにも多くて、時には、歴史で習つた、アブラハム・リンコルンの黒奴解放の演説をさへ想ひ出すのである。次第に黒人の混つたアメリカの生活環境に慣れて來ると、最初忽然として黒魔のやうに眼の前に現れて私達の判斷力をすつかり狂はしてしまつた『黒ん坊』といふものは、決して、バルザックの云ふやうに『惡魔は描かれたものほど黒いものではない』といふ事實に基いて、何等恐るべき、或ひは憎むべき人種ではなくて、寧ろ憐れむべき——悲しい境遇の中に在る不幸な人種であることを知るのだ。

『白人と日本人とが戰爭するやうになつたら、俺達あお前さん方へ加勢するぜ！』

こんなことを、白人の背後で囁いて、奴隷賣買時代からの本能的な諧默を私達に漏すこともあるのが黒人種なのである。

どういふつもりであつたか、まさか或る種の軍國主義的策謀からではあるまいとは思ふが、歐州大戰直後にニユー・ヨークへ來てゐた故黒岩周六君が、『インターナシヨナル・リーグ・オフ・ゼ・ダーカア・ピープルス』といふ名前だけは堂々とした集團へ顔出しをして、麗々しくワルドルフ・アストリアの一室で五六人の代表と撮つた寫眞が私の手許に在るが、ここへ複寫するにはあまりにもぼやけてゐて、役に立ちさうもないのが遺憾である。恰度、媾和談判の席上へ日本代表が人種差別撤廢問題を出してゐた頃であるから、山氣の多い涙香小史が小細工をしようとしたのであつたかも知れない。

　私の興味は實はその點にはない。席上寫眞の最左端にゐるエー・フイリツプ・ランドルフといふ黒人代表のその後の經歴がもつと面白いから、わざわざこんな



黒岩周六氏と會見した黒人代表達

古い寫眞を引つ張り出して見る氣になつたのである。この有色人種國際聯盟の代表者として黒岩君と會見したランドルフは、黒人の間にも仲々顔の良い方の男で、一時は相應に黒人覺醒運動のリーダーとして幅が利いたのであるが、最近、自分の率ゐてゐる黒人の勞働者集團を米國勞働總聯合（ゴンパース）へ根こそげ賣り渡して、おまけに、白人の警察へ援助を頼んで、左翼的な黒人組合の解散に從事したり、或ひは機關紙を通じて一流のソシアル・ファシスト的攻撃を試みたり、もはや黒岩周六君と會見した當時のやうな有色人種國際聯盟どころの騷ぎではなく、純然たる反動となつてしまつたのである。――

　これはほんの一例で、私は、黒人勞働者や農民が、それ自身の人種的覺醒

と階級意識をより多く持つやうになれば初期の改革運動者が次第に押され押されて、かういふデマゴーグになる、それだけ一般運動の水準も高くなりつつあるのだといふ反證を示したに過ぎない。

黒い奴隷船

今日アメリカに黒色地帶を形造つて散在する千二百萬人の『黒ん坊』達は、次第に階級的に、人種的に、アメリカの大ブルジョアジーと抗爭をする線へまで押し寄せて來たことは事實だ。

それは、この七月一日、ロンドンで世界中の黒人種の赤色大會を開かうとして、マクドナルド内閣からはねつけられ、七月七日夜ハンブルグでその會を開いて、大いに氣勢を擧げたといふ一つの現象だけをとつて來てもわかるのである。

——が、かう云つてしまつただけでは、恐らく讀者には、黒人種の運動といふものはどういふものか、一體黒人種そのものがどういふ生活をアメリカでしてゐるかさへも判明しないことと思はれるから、ここに簡單な研究を試みたいと思ふ。

歴史的に云つて、黒人種が奴隷としてアフリカからアメリカへ賣り渡されるやうになつたのは、アメリカの建國當時白人種間に勞働力のひどい缺乏があつたためだとなつてゐる。當時は、ひどい工面をしてヨーロッパや英國から人間を入れたもので、ウエルスなどの云ふところによれば囚人團をどしどし送りこんだこともあるさうである。だがそれでも足らないので、一六一九年、最初のアフリカ沿岸から連れて來た黒人の船が、南方綿や米や煙草の大地主や、北方の伐材業や造船業に從事した新興資本家の需要に應じて、アメリカへ歸つて來た。それから、一八六三年迄、この不思議な人身賣買はずつと續けられた。

この奴隷船といふのは、奴隷の數が、つまりその需要供給の市場が多くなるに從つて、最初のゆとりのある積荷狀態から惡化し、黒奴を全船海中鐵鎖で集團的に繋いだまゝ一寸も身動きをさせなかつたところから、その惡臭が甚だしく、五浬も遠くからの奴隷船の臭ひが嗅がれたといふほどである。又、奴隷を載せた船は、あまりにも汚くて、大概四回か五回のアフリカ行きののち、それを破壞してしまはねばならなかつたさうだ。この商法でアメリカへ賣り込まれた黒人奴隷の數は、十八世紀の終末から十九世紀へかけて、奴隷販賣業の繁榮期には、一箇年十萬人からの取引があつたといはれてゐるから、前後二百五十年、その間、アメリカへ轉賣された數は想像もつかぬほど夥しいものに相違ない。かうして、リンコルンの解放令の出た一八六三年現在には、アメリカ中に住んでゐた黒人總數は、四・五〇〇・〇〇〇人と云はれ、もつと委しい内譯をすれば、ニグロ（全黒）三・八五三・四

六七人、ムラト（半黒）五八八・三六三人（合計四・四二一・八三〇）といふ當時のアメリカ人口の七分一を示すほどであつた。

何故に奴隷賣買業は斯くも繁昌したものか？——莫大な利益があつたからである。

スピーアスの『アメリカ奴隷賣買』によれば、『投資事業としてもこれほどの利益のあるものは空前であつた』といふことで、當時、三四百人の奴隷を收容し得る船を造るには、一艘三萬五千弗で上がつた。それが一航海するごとに三萬弗から十萬弗の利益を收め、一艘大概四五航海はやつてのけたものである。——そして、原料は、殆ど只も同然だつた！

これらの奴隷の市場は、黒人著述家デュボア博士によれば、主として、ニュー・ヨークにあり、ボストンとポートランドもこれに劣らぬ取引場があつたそうである。一定の買手がついてから、この鐵鎖に繋がれ、鞭で柵の中から追ひこくられた不氣味な商品は、どこへ行つたか？——主として、南方アメリカ諸州の大農耕地へ送られたのである。

北方アメリカ諸州では、農工等も進歩的で盛んではあつたが、ごく少數の黒人を家僕として採用した以外には奴隷を集團的に使ふといふことは稀であつた。北方のアメリカ人は、黒人奴隷を使役する代りに、その北方から莫大な富を握たのである。南方の諸地方と北方のそれと大部分を異にして、甘蔗、米、煙草、棉などといふ農產物を大規模的に生產してゐた。そこの大地主の富は、それらの收穫のどれをなりとあてて他地方へ賣り込むことにあつた。黒人奴隷は、この農園や耕作地に働いたのである。南北戰爭勃發當時の統計によると、米の耕作に從事した奴隷は總數の5％、麻2％、甘蔗6％、煙草14％、棉花73％といふ風に分布されてあつた。それから、一七九三年に發明された棉繰紡織機の輸入は、黒人奴隷を棉布工業部門へ驅り立てた。

これらの大農耕地は、アメリカのどの州にあつたかといふに、ヴアージニア、南北兩カロライナ、ジョールジア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、ケンタッキー、テニッシイ、アーカンソオ、ミゾーリ、テキサスの十三州であつた。いづれも南方アメリカ諸州で、そこへ黒人奴隷を集中した理由は、一は氣候とか食物とかの地理的關係もあるが、根本の原動力は、資本經濟關係の制限性によるものである。

この奴隷、最良品で、時價正に千八百弗！

紙の上の解放運動

一個千八百弗以下に取引された四百五十萬人の商品は、はたして自

分の生命、生存、移轉、富の生産の諸權利について考へたかつたらうか……デモクラシー過信のアメリカ市民には封ぜられてあるアメリカ暴動史が、歴々黒人叛逆國の蜂起を私達に内職させてくれる。黒人の解放運動として、宗教的に現はれたものは、十八世紀末のジョージ・リール、アンドリュー・ブライアンなどの指導のもとに發達した。次ぎには、猶太人のシオニズムと同性質を帶びた黒人種のアフリカ歸國を目標としたポール・カッフ一派の運動も起つた。一八〇〇年、ヴァジニアのガブリエルの叛亂一八一六年、カロライナ州の暴動、一八一九年、ジョールジア州の暴動、一八二二年、南カロライナに起つた陰謀などは、その人種的自覺の封建的色彩を帶びた反逆事件の數々であつた。

一八三〇年には、フイラデルフイアに全國黒人大會が催された。ブルジョア文化が進むにつれて、黒人の搾取者である白皙人種の政治狀態に、著しい矛盾が生じて來た。汽船や汽車や電信の發明と共に、北方のアメリカ諸洲を開發すべく移民の洪水がヨーロッパから流れ込んだ。これ等の大陸移民は、北方のアイオワとカウイスカンスンとか、ミネソタ、オレゴンなどの地方に農民として移住し、フランス革命以後の新思想を持つた見地から、南方諸州の奴隷使役に對して手激しい抗議を申込んだ。これ等の代議員は、上院と下院とを通じて、奴隷使役禁止法案をも通過しかねまじき勢ひであつた。しかも、北方の新興資本主義と對蹠的地位にあつた南方の大地主や富農達は、いつとはなしに合衆國聯邦からの分離を說くに到つた。彼等は、メキシコから西印度へかけ、パナマ地方までの一大奴隷國を建設しようといふ腹黒い夢をさへ抱くに到つた。この黒人奴隷を壇としての政治鬪爭は、カンサス州を一線としてアメリカを二つに別けた。一八六〇年のアメリカ大統領選擧戰は、實にこの黒奴廢止か、それ共南北分離か、を決定する政治戰であつた。一八六一年には、新に選擧されたアブラハム・リンコルンを大統領と戴いたアメリカに、もう一人のジェッフアソン・デーヴイスといふ大統領を持つやうな奇觀を呈した。僞大統領デーヴイスの背後には、武裝した精兵を持つたミシシッピー、フロリダ、アラバマ、ジョールジア、ルイジアナ、テキサスなどの諸州が控へてゐた。かうして、有名な南北戰爭が開かれ、一八六五年四月九日の媾和迄續いた。名義は黒奴の解放といふことに在つたこの戰爭に、最も鬪はせられたのはその黒奴であつたといふことに、ブルジョア政治鬪爭の皮肉が潜んでゐる。

かうして、アブラハム・リンコルンの骨つぽい手に握られたペンから、アメリカ四百五十萬人の、唯働く、ものを考へない、頑丈な肉體を持つた機械が、歴史の表面にからりと釋放されてしまつたと思ふ

なら、それは錯誤である。南北戰爭は、決して黒人奴隷が不憫だとか、非人道的だとかいふ『アンクル・トムス・キャビン』的動機から戰はれたものではなくて、實は封建的なアメリカと新興資本のアメリカとの經濟的へゲモニーの地位を確立するための闘爭であつたのである。

であるから、戰爭が濟んで、南北統一後の恢復期に當つて、黒人を擁護した筈の中央政府には、黒人に對する投票權の賦與と共に、合衆國憲法に在るその他の權利と、それが衝突するではないかといふ議論が勃興した。戰爭後釋放された黒人の數は四百萬と云はれてゐるが、彼等の大部分は在來迄の境遇の關係上當然無智であり、財産もなかつた。わづかに南部諸州で働かせられた農奴としての習練があつただけである。そこで、北方の企業家達は、殘存した南方の富農主義に對する策略として、黒人に土地を與へ、教育を施すためのフリードマンス・ビユローを建てた。しかし、同局の勢力範圍は、黒色地帶の奥までは届かなかつた。自由勞働契約を主義とする北方のアメリカは、名目だけは黒人生活向上など〻云つて、その實、南方アメリカの恩情主義にも劣る酷使と搾取とを無能な黒人の上に加へた。法文上では自由人であつたが、經濟上には何等の地位も持たない彼等が、事實上再び奴隷の境遇に置かれたことはいなまれない。

唯、彼等の頭上を、法律といふフートボールみたいなものがそつちへ轉ろげ、こつちへ蹴飛ばされただけの話である！

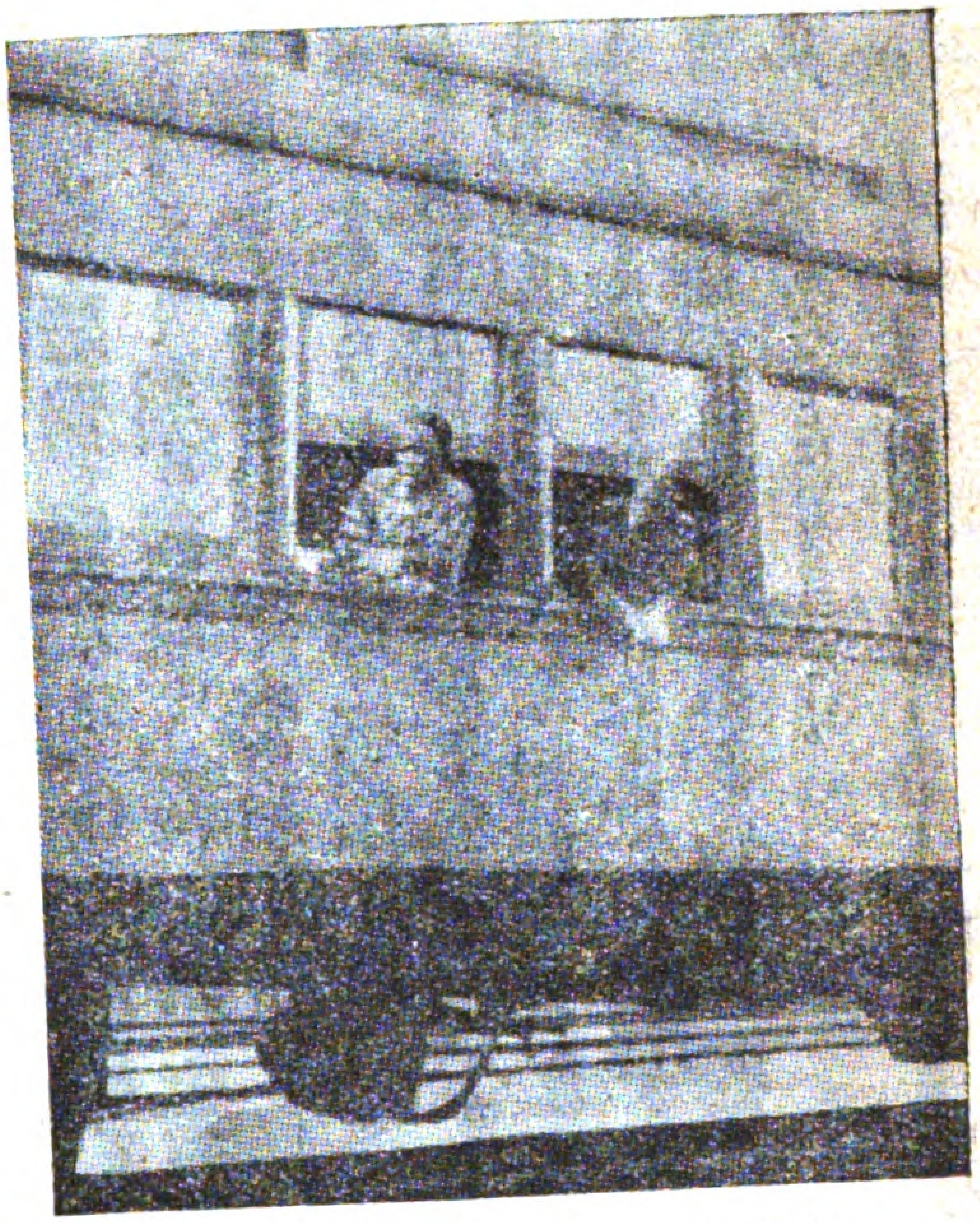
黒人代議士や上院議員が、わづかの間なりとアメリカの政治史の上に出現したのは、一八六八年から一八七九年までのことである。いつの間にか、南カロライナ州々議會を占領した七十六人の黒人代議員や、九人の上院議員などは、背後の白い魔の手に突き擦りおろされて姿を消した。中央議會に下院議員として黒人の現はれたのは、一八六九年のことで、その最後は一八九九年であつた。

一八九〇年から始まつて、南方諸州には、そろそろ政權奪取の法律が現はれ始めた。それ等は、第一項『無學』から始まつて、第八項『國家成立の理由に對する理解』にまで終る八箇條の手厳しい身許調査のために約四百萬人からあつた二十一歳以上の黒人男子の手から、秋風落葉のやうに投票權を吹き拂つてしまつた。白人デマゴーグの夢も、黒人解放運動者の合法的政權獲取の希望も、この空文の出し入れの前に——非現實性を暴露した。

アブラハム・リンコルンも惡戯者であつた！

私刑

リンチのことは、日本にも知られ過ぎるほど部分的に知られてゐる。たしか内田魯庵氏の『獏の舌』にも生々しい情景が描かれてゐ



黒人列車ジム・クロウ車（一五三頁参照）

る筈である。これほど明白な白人の暴力統治が、世界のどの歴史の表面にも現はれたことがない。一面、人種問題の色彩を帯びながら、多分に群集心理を支配しながら、黒人の汎國家的掠奪と搾取とがこれほど露骨に永續されることは古今未曾有のことである。

私はこの一見自然發生的に見えるテロリズムに就いてあまり多くを語るまい。唯、スコット・ニアリング氏によつて『黒いアメリカ』に引用された二つの事件を轉載することでその一端を報告しよう。

ヘンリー・ローレイといふ黒人は、アルカンソー州に住んでゐて、當人は四十歳、妻と六歳の娘の子があり、クレーグといふ大地主のもとに働いてゐた。フランスの諺に『黒人のやうに働く』とあるが、このローレイは實にその諺の忠實な奉仕者であつた。

過去二年ばかり働いてゐて、クリスマスも近づいたので、黒人小作人は給金を貰ひにクレーグ方へ立ち寄つた。クレーグ家では食事中だつたので、料理人のベッシーがその由を傳へた。すると、クレーグ氏は、邸宅へ入つて來るなと云つて棒切れを擲げつけた。そこへ息子のデイック・クレーグといふ不良青年が出て來て、ローレイが玄關を下りるところをピストルで撃つた。あまりのことに憤激したローレイは、自分もピストルを出すと老クレーグと娘とを射殺し、二人の息子に負傷させた。

彼はテキサス州のエル・パソ迄逃げて逮捕された。アルカンソーから二人の警官が來て、ローレイを汽車に乗せて連れ歸つた。すると、ミシシッピー州のサーデイスといふ町まで着いた時、數台の自動車が列車を襲うた。自動車から現はれた五六人の壯漢が、警官の手錠を外づしてローレイを奪ひ去つた。

一九二一年二月二十六日のことである。その日の『メンフイズ・プレス』の最終版は法律の手から奪ひ去られた黒人小作人が、その日ど

ういふ風にして私刑に處せられたかを詳しく報告してゐる。二百人以上の人間が、黒人が徐々と黒ろ焦げにされるのを見戍つてゐた。中には數人の婦人も混り、クレーグ及びウイリアムソン夫人の死の復讐を行ふアルカンソー農業者達の間に姿を見せた。殺人者は、思ふだに身の毛のよだつやうな私刑を施されても、一言として憫れみを乞ふたりしなかつた。人達は、黒人を杭に繋ぎ、その脚部に木の葉を撒き散らした。木の葉の上にはガソリンが灑かれ、それで宣告の用意は出來たのである。(以下百十七字削除)一度か二度、彼は自分の死を早めるために燒けた灰を口の中へ入れようと試みた……』

『メンフイス・ニユース・シミター』紙の特派員は、一九二五年の秋起つた私刑事件についてかういふ報告をしてゐる。

『私は、怒つた群集が彼を鐵の棒へ縛りつけるのを見てゐた。私は、彼等がその不自由な體のまはりに薪を積むのを見てゐた。(以下百二十八字削除)黒人の苦しみ悶える聲が聞えた。――おお、神樣! おお、神樣! 私がしたんぢやない。許して下さい!――炎は飛び上つた。黒人は身悶えした。踵から鐵鎖を蹴落ばしたが、まだ手首と首は離れなかつた。(以下廿一字削除)――許してくれ、私がしたんぢやない! 私がしたんぢやない!――彼は叫び續けた……急に何も云はなくなつた。死んだにちがひない。(以下四十五字削除)……數人の男が、もぞもぞ動き始めた。――おい、おしまひにしちまへ。――と、忽ち十二人の人間が躍り出した。(以下六十八字削除)群集が歩き出した。私は、その眞つ先に、一人の婦人を發見した。どちらかと云へば若い女で、どうもかういふタイプの女について見別けはつかないが、田舍の女らしく強く健康であつた。しつかりした足どりで、男のやうに歩いて行つた。見ようによつては美しくさへもあつた。群集は靜かに解散しかかつた。誰かがこんなことを云つた。――俺あ腹が空つた。何か食はうぢやないか。――』

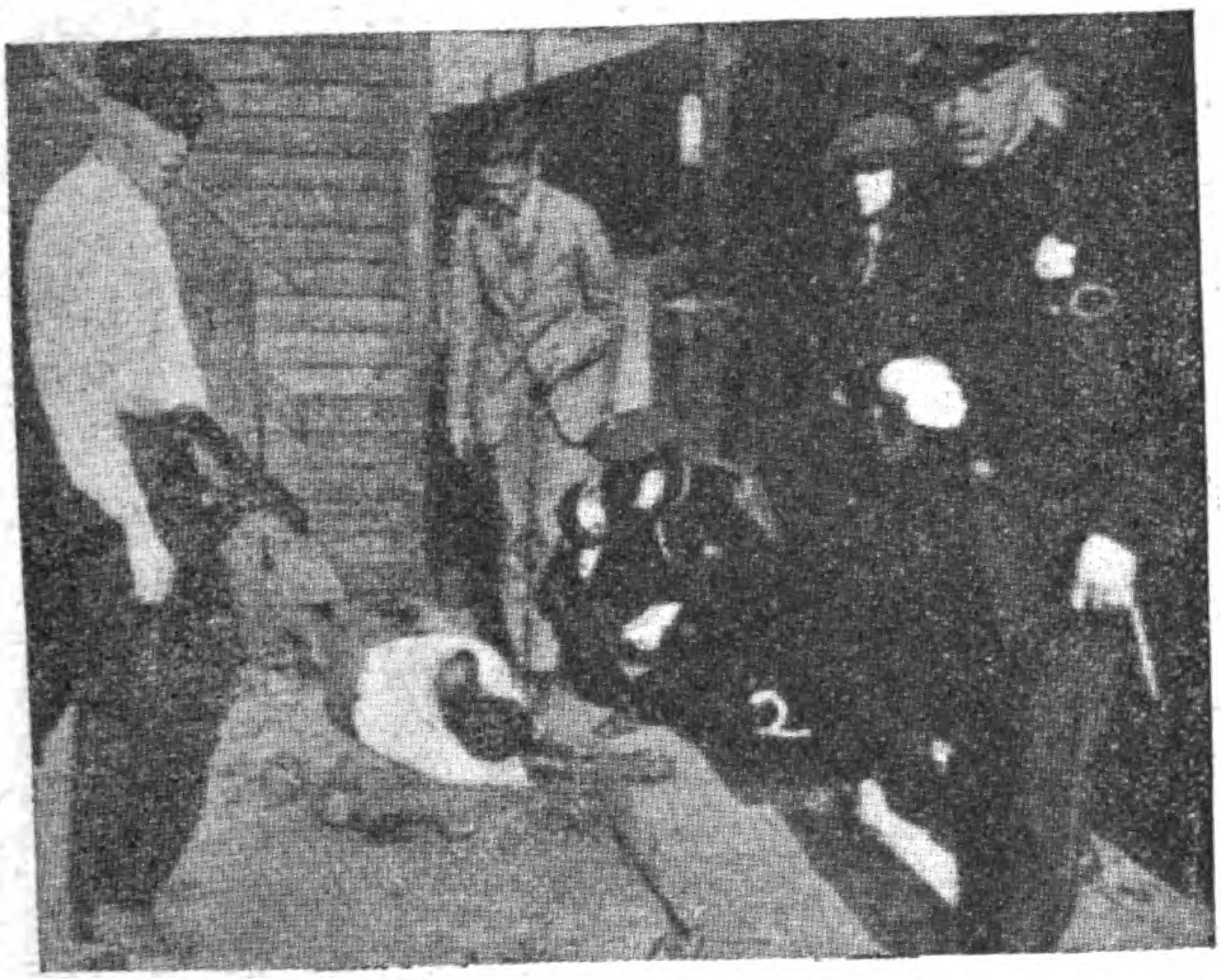
一八八九年から一九一八年まで、三十年間に私刑に處された黒人の數は二千五百三十二人である。そのうち五十人は黒人の女。

一般に知られてゐることは、私刑に行はれる黒人の大部分は、白人の女を強姦したといふ廉によるものだといふ迷信である。ところが、以上の數字のうちに、九百人は殺人罪、四百七十七人が強姦罪、二百三十七人が婦人に對する惡戲等々になつてゐる。それから百四十二人の被私刑者は、全然無罪で私刑されてゐるのである。

どうして黒人と白人との最初の闘爭が始まるかは、シカゴ大學の出版部から刊行されたレポートによつて報ぜられた一九一九年度のシカゴ暴動事件について見ればわかる。この暴動には、三十八人の人間が殺され、五百三十七人の人間が負傷をした。そのうち、十五人の白人

死者、百七十八人の白人負傷者を除いては悉く黒人であり、暴動の結果千人からの黒人が家を失つた。

もとを質せば、それこそ水掛け論で、ミシガン湖の水浴場に、白人と黒人とが脚を間違へて泳いだといふことに始まるのである。四人の黒人が、白人水泳場で泳ぎ始めた。それを白人達が詰責して、喧嘩の最中に石を投げた。黒人達は一旦黒人水泳場へ引き返して仲間を鳩合して、論爭を始めた。その際傍らに泳いでゐた十七歳の黒人の子供が、白人の追跡に會つて水底に影を沒した。黒人達は、そのボーイに對して白人側からの投石があつたと主張する。騒ぎがやかましくなつたので警官が出て來て取り鎭める。すると、群集の中から黒人警官に對つて發砲した者があつた。黒人警官は直ちに對手を狙撃して殺した。これが端緒とつて、ストツクヤード附近の黒人街は忽ち市街戰となつてしまつた。それが翌日の晩まで續き、白人は自動車に乘つて黒人街を最大速力でドライヴしながら盲目滅法に鐵砲を街へ浴びせた。事件は三日目まで續き、その四日目には軍隊が出動して戒嚴令を敷いた。……



シカゴ市一九二五年の黒色人種戰の犧牲

かういふ突發事は、何等確實な動機がなくて起るところの人種的反目であると解釋されてゐるが、もつと冷たい社會的事情に、いつでもこの種の暴動の勃發する深い原因が潜んでゐるのである。歐洲大戰當時からかけて、肉類製造業のストツクヤード附近へは、約十二萬五千人からの黒人勞働者が密集したのである。勢ひ白人勞働者との職業の爭奪戰が起らないわけにはいかない。最も悪いことは、黒人勞働者がストライキ・ブリーカアとなることである。そのストライキ・ブリーカアの背後には、より安い給金で勞働を搾取しようとする資本の魔手が動いてゐることは云ふ迄もない。人種的迫害といふ原始的な本能をそそることによつて、近代產業の大資本は、黒白兩人種のプロレタリアを搾取して、蔭で笑つてゐるのだ。

シカゴの暴動は、たしかに擴大された私刑であつた。しかし、この私刑には、黒人側も十五人の白人を死刑に處してゐる。……

ジヤッツの道化役



詩人ラングストン・ヒユーズ

一般に輕い見方をするアメリカ人にとつては、黒人とジヤッツとは不可分離な餘興の道具立てだと思はれてゐる。又、半面には、さういふ白人の見方に迎合する黒人達もゐないことはない。南北戰爭以後、半黒のギルドが出來て、全黒を排斥し、自ら『青い血管のサークル』と誇稱したさうである。これなどは、白人の黒人隔離策に對する臆病な逃避方法の一つであると共に、黒人種階に生じたわづかの富の支配權を誇る成金根性の現はれとも云ふべきであらう。もつと露骨に黒人種が白人社會に分業的地位を開拓しようとして職業的に惡化されたものは、黒人社會の寄生虫である若干のインテリゲンツイアと職業的『笑ひ』製造社の群れであらう。これなどは、悲しむべき喜劇である。

私は、どこかで、普通アメリカのヴオードヴイルの舞台に立つて、日本の落語のやうな掛合話をする黒人達の面白おかしさうな落し話は、その實黒人達のものの考へ方の非科學性から來てゐる企らまざるユーモアである、と云つた觀察を讀んだ記憶がある。

カール・ヴアン・ヴエヒテンといふ小說家の書いた『黒人の天國』と云ふ小說の中に、小唄を插入してゐるラングストン・ヒユースといふ黒人詩人などはその一人であらう。

この男の話をする前に、私達は先づその『黒人の天國』といふ小說がどんなものであるかを、アプトン・シンクレーアのアメリカ文學の批評を試みた『金が書く！』の一節から引用して見よう。

『この話は、今アメリカのダンスと音樂との二つの要素を供給してゐる、ハーレムの黒人達の話である。小說の半黒の女主人公は、いかに

も純潔で善良で、ルイザ・アルコットの小說からでも出て來さうな女である。但し、すべてのヴァン・ヴェヒテンの女達のやうに、高尙な變態性の文學を漁りまはるといふ特種な性癖を除いては。女主人公マリー・ラヴは圖書館從業員で、市のエレヴェーター・ボーイや黑人女給の文學的嗜好を高めようと努めてゐる娘である。悲しいかな、彼女は、アルドアス、ハックスレーやカペルやコクトオやプローステトモーランの代りに、ゼーン・グレーやハロルド・ベル・ライトなどといふ俗惡な作家が好きなのである。小說の最後に行つても、まだエレヴエーター・ボーイは機械を上降し、女給は卓に給仕してゐるのに、マリーの文學的嗜好を贊成した戀人の主人公は、或るカフエーの亂醉の場面で、もう一人の黑人を打ち殺すことになつてゐる。そこで、この小說にも道德的敎訓があることと思はれる——と云ふのは、人間はアドラス・ハックスレーや、カペルや、コクトオや、プローストや、モーランなどを讀んぢあいけない——それに、ヴァン・ヴェヒテ！ムも』

といふ小說の中に、こんな小唄を挾んでゐるのが、黑人詩人として流行の月桂冠を戴いてゐるヒユースなのである。

『おほ、わたしあ戀にこがれてゐる！ わたしに小さな鳩があり、
いつも、クウ、クウ、クウ、クウ、と戀をする……』

『お前の女子に氣を許すな。
いつも心配絶えやせぬ、
お前の女子に氣を許すな、
いつも心配絶えやせぬ、
女子に友達持たせちやならぬ、お前外へ出りや、男が這入る！』

これを、グロ調で小唄らしく書くのが『進化』せる黑人詩人なのだ。しかも、『黑人の天國』の如き、ブルジョア專制の見地から、黑人種を劣等動物らしく書き立てる流行作家の長編の隨所に、十七篇も！

黑人インテリゲンツィアも、ここまでＫ・Ｋ・Ｋに屈辱されたなら、白人に文句のある筈はない。

ゴールト・スター事件

今年七月十一日、私達は階級的に自覺した黑人達のアメリカ資本主義政府に對抗する闘爭組織の結成を、ゴールド・スター事件に宣言するものである。

『ゴールド・スター』といふのは汽船の名前で、これは歐洲大戰で戰死した黑人兵士の母を弔ふべく、アメリカ陸軍當局が、戰死者の

母親達を載せてフランスへ渡航させようと試みた時、黒人兵士の家族だけは、白人婦人達と差別して、ごく粗末な『ゴールド・スター』といふ廢船に乘せようとしたのであつた。四百人のニグロ婦人達のうち、三百三十九人は、同船へ乘ることを拒んだ。乘船拒否者のうち、五十五人は、當局に對つて、

『ジム・クロウ主義であり、差別待遇を蒙り、侮辱されたものである。』

といふ抗議書を提出した。

この事件は、忽ちアメリカン・ニグロ・レーバア・コングレスの取り上げるところとなつて、『第二次世界大戰の準備をするに當つても、黒人はジム・クロウされる！』といふスローガンのもとに、猛烈な反對運動と黒人失業者及び勞働者に對つてのアッピールが發せられた。ジム・クロウといふのは、昔から南方アメリカで黒人が電車汽



階級意識に覺醒した黒人達のアメリカン・ニグロ・レーバア・コングレス

車に乘る時、いつも黒人だけの車輛を設けて、甚だしい差別待遇を行ひ、今日も猶それを續けてゐることを指さすのである。それと前後して、黒人鬪士ジエームス・ダブリユウ・フォードを委員長とする國際黒人勞働者大會は、ロンドンに於て開催される筈のところを、英國官憲の彈壓によつてドイツ・ハンブルグに開かれ、赤色インターナショナル勞働組合へ祝辭を發したり、ハンブルグ港のドック從業員及び會員と手をつないで大會を開いたり、盛んにその氣勢を擧げた。

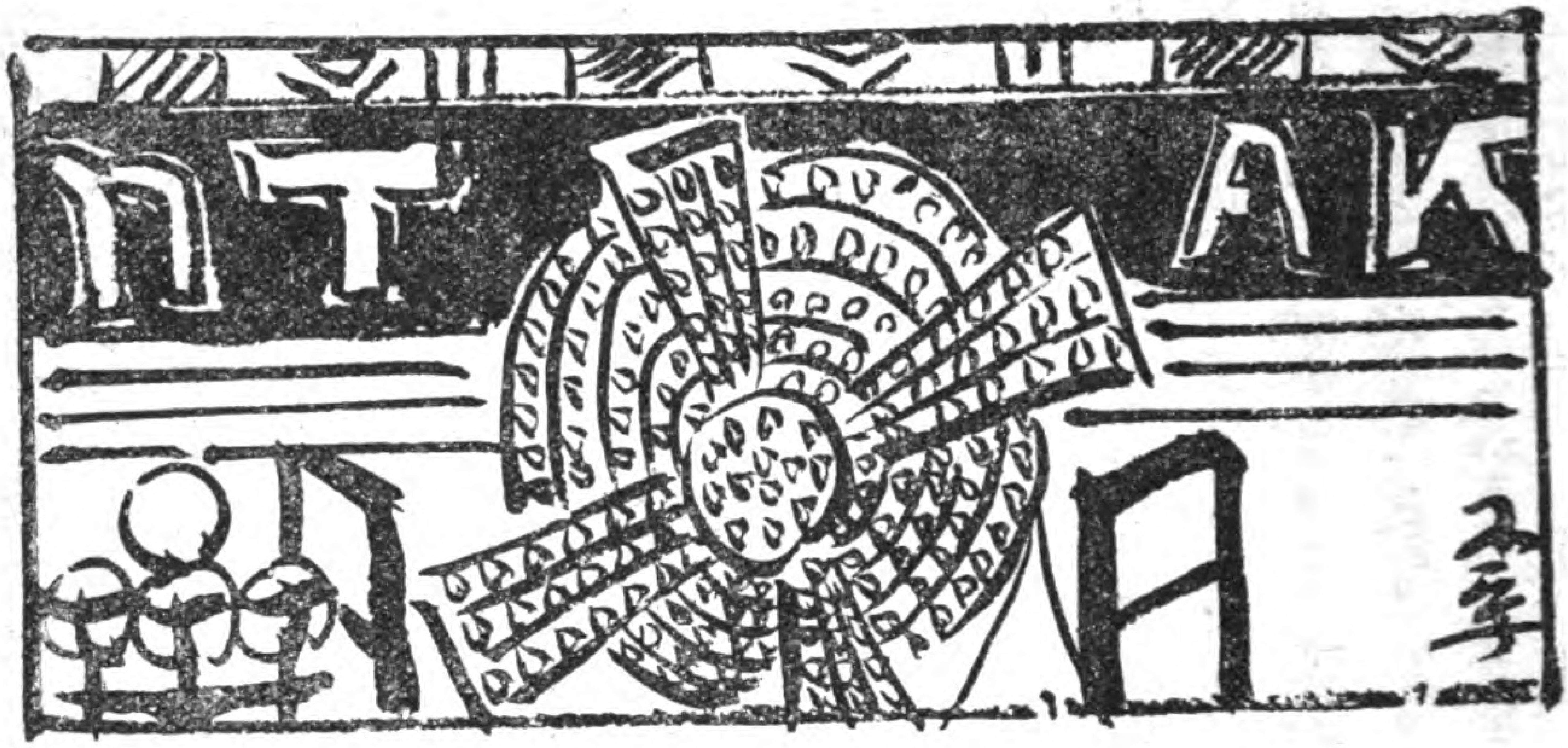
フォードの聲明書によると、いかに第三インターナショナルが、世界で最も酷使された民族である黒人種に對して、その人種的自虐を抛つて、敢然白人勞働者と同一戰線に立ち、（以下十七字削除）鬪爭を挑むことを救濟の唯一途と明示したかがわかる。

フォードによれば、黒人勞働者の世界的叛逆の第一聲は一九二八年アフリカに起つたと云はれてゐる。フランス帝國主義の中央アフリカに對つての侵略を、黒人勞働者達は始めて武裝的に叛逆した。次ぎには、フランス帝國主義が軍備擴大のためにオーション・コンゴー鐵道の完成に慌て始め、同地方の銅山を發掘しようとし、『黒人軍團』を編成しようとした時に、ガードに立ち上つた鑛山勞働者一萬八千人はストライキを宣し、（以下廿五字削除）砲門を逆に向けた。これは、大虐殺のあとでわづかに鎭壓された事件であるが、遠くアフリカの奥地にまで黒人の民族自決、帝國主義戰爭反對の火の手が擧つたことを證明する。すでにアフリカ内地にはガダリエ一派の第二インターナショナル系の直屬の勞働組合は失脚して、第三インターナショナル系の非ヨーロッパ・トレード・ユニオン聯盟が出來上り、ダルバンに於ては官憲との闘爭が勃發して、黒白勞働者の共同戰線を敷いたのであつた。

一方、アメリカに於ては、南方黒人勞働者の固い組織をつくつて、トレード・ユニオン・ユニテー・リーグの指導下に置いた。これ等の黒人勞働者は、南米ハイテ、リベリア、サン・ドミンゴ等の植民地に於ける、又、アフリカの内地に暴威を揮つてゐる英佛ベルギーの帝國主義者と抗爭すべく、ここに世界の黒人種勞働者を糾合して大會を開いたのである。會期十日間、さらぬ資本主義崩落の前兆としての失業時代にさしかかつた黒人達は、ここに北方六萬五千四百九十二人の組合員を結束し、その他の凡ゆる組合員を合して、約十萬強となつて、始めて正面切つて二百年來の暴君白人資本家と闘爭の火蓋を切るに到る大勢を形づくつたのである！

ハンブルグに於ける大會の報告はまだ手にする機會を持たないが、一九二八年十月二十六日、モスクワのコムミニスト・インターナショナルから發せられた『アメリカに於ける黒人問題』の決議について見るも、如何に人種を超越して（十字削除）が萬國のプロレタリアートに對して僞くことを知らぬ暴虐の手を伸べようとしてゐるか、そして、それに對して、地球始まつて以來一番愚弄と嘲笑と迫害と虐殺の對照となつて來た『黒ん坊』といへども、結束して闘爭を開始するに到つたかを知ることが出來る。

世界に複雜な人種系統を數へるブルジョアジーは、やがては、（九字削除）しかないことを教はるであらう。（了）



大阪今昔

木村荘八

(一)

此の文章の(二)以下は元來昨年執筆したものですが、机邊に埋もれて、今まで未定稿のまゝでした。例に依つて六月は春陽會展覽會が向うにあるから、今年もそれにつれて、六月十九日から十日間ばかり大阪へ行つて來ましたが、從つて昨年の此の書きものを片付ける感興を感じます。――僕は本誌に、まだ岸田劉生が關西にゐて遙々會遊した頃のこと、大阪所見と云ふ文章を書いたことがありますので、時は隔てましたが、これを續きとして、大阪今昔と題しました。

現大阪の一番の面白さは、恐らくこの點で海内一だらうと考へられますけれど、截然としたる「新」と、依然たる「舊」とが、指呼の中に至るところ併列し相呼吸する紛糾狀態です。然も只併列するだけのことならば、珍らしくもないが、新・舊負けず劣らずに凡て世相の現役として活氣潑溂とする點が面白い。海内一とする理由で、その最も代表的な一例を擧げれば、四ツ橋の文樂座に見る通りのもの、試みに今その筋

背本を開くと、「西側別館の階上階下に大食堂と喫茶室、酒場が御座います。」「文樂座指定の女優タクが新車を揃へて玄關にお待してゐます」、或ひは、「文樂座の御宴會。スピード時代の尖端を行く。絶大なる御好評にお應へして大衆的に進出せる新樣式、B、金四圓也。A、金五圓也。」――

　こんなことが廣告頁の方に澤山印刷してあります。――もう少しわざと所謂えげつない穿鑿にすれば、「洋食堂、西館階上。スピード・デイナー一、五〇　文樂スペッシアル・ビーフステーキ一、〇〇」。

　酒場には「文樂カクテル〇、七〇」と云ふのもあるわけで、然るにそのスピード・デイナーを食らひ文樂カクテルを含んで、何を見聞するかと云ふ、筋書本の本文の方には、「諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と云ひやる、諏訪法性の御兜を盗み出だせと云ひやるのは、扨てはあなたが勝頼樣」と云ふのです。――解題して、「この浄瑠璃は、云々……初演は明和三年正月興業の竹本座」とあるから、於古百六十四年此の方の概觀だ。

　そんなわけで、更に例へば、僕は霖雨の一日、町外れの天下茶屋の方角から自動車を拾つて、心齋橋筋へ出やうとしましたが、偶々途中で夕立に出逢ひました。と、奇觀だつたのは、その時通りかゝつた今宮界隈の女衆に、揃ひも揃つてみんな赤い腰卷で雨中を驅け出す光景を見たことです。――何も女衆が夕立に出逢つて、腰卷を現はして駈けたからと云つて、それに不思議はないけれども、僕のその場合出逢つた偶然か、或ひは、大阪の一部の女衆は今でも腰卷を赤と決めてゐる必然の成す業か、恰かも、去る明治年間の小林清親が圖繪を現前した樣にも見えてをかしかつた事實は、ぱら〳〵と四五人の婦人が雨中を駈け行く、それが、殘らず、掲げたるは一定の赤の腰卷と云ふわけだから奇妙でした。俄かに昔懷しい樣でもあり、又、甚だしく時代錯誤にも感じられて、不圖借問するのに、婦女子の腰卷が赤きは何ぞや。所詮は、化政末以來の、婦女子町人を奴隸玩弄視したる、從つて又、隸屬視されたる側では物悉くを我れから淫卑化せる、その歴史的記念を最も雄辯に物語る殘存物、象徵物の僕ではありませんか。それでなくとも婦女子とあらう身を、身自ら腰邊へ、色もあらうに眞紅の布を卷くと云ふこととは！

勿論斯樣の論には、一應觸れたく、眼前有體の事實は、由來赤は腰卷と相場が決まつてゐるからそれで女給が卷いて出た、偶々夕立に出逢つたからそれを高々と捲つたまでの、何の變哲も無き出來事です。左樣、變哲無さすぎるから、却つて眞劍にヘンな結果となるだけのことでした。

東京では近頃滅多に赤の腰卷を見ません。東京のみに限らず、一般の世相風俗から云つて、今日既でに「赤」は腰卷に非ずして、過激派を意味するでせう。お蔭どんと踊もデパートへ行つて薄色のスカートを買つて穿く。

と、さう云ふわけで、天王寺の町外れで、眞晝中、女風俗の舊樣に驚いたのに、それから盛り場へ出て、日のくれに、ぼんやり道頓堀の赤玉カフエーと云ふのへ見物にはいると、レヴィユーを上演してゐました。――尤も土地の定評？達は、別段ステーヂのレヴィューには關知しない工合でしたが――その場數が進んで、「女十八花恥かしや」とか云ふ外題の幕にたります。と見る、何れもきつちりと股間へ〆め付けた、曲馬の猿又の樣ないでたちの裸か女が四五人立並んで、その猿又のふくよかな眞正面、彫刻家の所謂デルタ面へ持つて來て、黑々と、相當大きくハート形を描いたのに出演しました（更にその次の幕では、同じデルタ面へ、此度は麗々しく　？　を金糸で縫取りした一團が現はれて大いに輪舞しました。）

まあ、この邊を、尖端的と云ふのでせうが、惜しむらくは尖端にして大阪地方的です。少し新らし過ぎる。

丁度町外れの女給の赤い腰卷が、その由來は元々美しき昔の淫卑でありながら、今は時世粧として古すぎるから、淫卑でも何でもなくなつて、只――何となく氣の毒めかしい――飛んだ時勢後れの舊物にしか映じない如く、爾く道頓堀の尖端的イットの方は又、これこそ最新最鋭のイット本願でかゝつた智恵が、これでもかくと、餘り元値も懸値もさらけ出して理解するので、等しくその効を失ふ――

否、片端からから論評して了つてはいけませんでした。

面白いのは、その新舊双方共に、仲善く、世相の現役として、嚴として彼地には在るところ之れを見ることが出來る點――

（二）

實は何かしら用事もあるので、僕は此の五七年をかけて、何

年大阪は――一日二日の場合もあれ――年に一度は必ず訪ねる例となりましたが、曾て、富田屋の建物に感伏して、大分あの家を、その木組みや格子の工合など、うろ〳〵と檢索したことがあります。又は、我れながら手柄と思つてゐるのは、二ツ井戸津ノ清の、幕末と明治と、どつち付かずに融け合つて面白かつた店構へを、早晩消滅の危險ありと感じたので、寫生し、うまくはなかつたが、寫眞に寫して來たことです。果せる哉、今はその折りの面白さは有りません。

頃來殊に梅田の驛に降り立つて感じるのは、そして、渡邊橋から肥後橋へと渡り來つて、益々感ずる色は、此の大阪こそは、日本一の實地の文化的坩堝だと云ふこと、或ひは、その尺度計の代表的現場だと云ふことです。若し東京に、地震が無かつたとすれば、依然「坩堝」としての實地のたぎり工合乃至「尺度計の現場」とする熱つぽさでは、やはり關東方がむさむざと關西勢に負くるとは思へない。けれども、去る大正十二年にて「坩堝」としての東京は、殘りなく、その舊様の方を壞されて了ひましたから、その後は滿都改新せられつゝある、或ひは改新の度を以つて云つたならば、明らかに日本一ではあらうまでも――

假りに今、不思議な億兆の金滿紳士が現はれるとして、より巍然たるビルディング街を何所かの無人島へ建てる場合があるとすれば、それでも出來る。改新の都だけのことならば。東京の震災で亡くした小網町、横山町、一ツ橋界隈、深川木場、向島……等は、未來永劫、億兆を億兆倍する金力あらんとも、二度とは出來ません。

我々關東人は、それで、片輪車の土地に住んでゐます。

然るに、大阪へ行くと、近頃ではやはり新東京にも決して負けぬ程のビルディングを持つと同時に、街の行きずりに、猶彼の「小網町」有り「横山町」有り、――指呼の中に文明の來し方行末を示して、街に沽券があります。

現東京は復興盛んなりと雖も頓に新店の觀あるを蔽へないのに、大阪は悠然として、古ながら、容氣ながらに、過去數百年の地です。老舗です。

その道頓堀筋は昭和當代好みのエロ・グロによからうけれど、又、そこから僅か一二町、ほんの心齋橋筋を東西へ切れても、津々としてその邊の家並みに認めるものは、祖父以來の地

「大阪」或ひは謂ふ「川樓」で、從儀上ちへ北へあゆめば我宿をひとめに見るも見かへらん、たどちのゆく〱へ女房のあはれを胸におしつゝみ、南へわたる橋々のかずもかぎらぬ家々を、いかに名づけて八軒家——!

と、水牛の彈の音が、座ろに幽氣の如く聞ゆる。爾く古い文明を營々引き從へて、今までに來たり、猶今後行かんとする、有るがまゝの大都會です。——羨望の念に堪へないものがあります。

で、ほんの食後の散歩の行だりにも、街に昔日あり、直ちに今日ある、これを好個の文化の坩堝だと云つたわけながら、彼の在りし日の東京の新橋驛を思はしめる、今は斉然とした、梅田驛の直前に、昨年の春竣工したばかりと云ふ、極くモダン好みの巍然たる阪急驛が聳立してゐる景を見ます。——これを繪師畢見に一まなこしあげますれば、梅田驛をバックとしては、我が明治大帝の御姿をここ謹寫奉るべし。明治の御代に梅田驛の有つた廣大の喜びは、大帝の御稜威に依るところだからです。

然しながら、今上陛下を寫し參らせんには、御祖父君明治大帝を蒜ぎまつる梅田驛々頭の闘よりは、より觀ふさはしき、今や到る處の活潑なバックだある。直ちに阪急ビルデイングの前に謹寫し奉るべし。肥後橋に謹寫し奉るべし。云々。

東京こそは滿都漸く　今上陛下のものです。益々新々都會としては、どしく改善せられるだらうと思ふけれど。

——遺憾ながら、明治の思出は、殆ど亡失しました。

新しく熾んなるばかりが土地並びに都會の權威ではない。

それにしても、過去數世紀の間、日本の文明の中に巍然として一敵國を成し、既にその「舶來の味」にも完成し盡したと思はれた大阪が、——これは、隣る「京都」から思ひ合せると、聊感慨多少のものがある譯です。大阪から突然京都へ移つて、閑寂たる烏丸通りなどを行くと、その家並みの靜けさ、低さ、おほけなさ。然しながら、同時に堪へぬ感じのする「ねむさ」。これを見て我れながら奇異にして心外のことには、昔紅毛人が初めてニッポンを見たならかうも感じたらうかと、その、かうもと云ふ感じを我等の眼が感じることです——然も大阪は、時と共に、如何に決して衰へないことだらう。

刻々益々「新大阪」を形成しつゝ行くでせう。——街にそのエ

ネルギーのある根強さを感じ一愉快です。

僕は毎度、大阪へ行く度びに、過ぐる明治の美感の粋を集めて堂々乎とした——殊に故郷の東京にそれが亡くなつてから以來は——本町筋を好んで、必ず散歩をしますが、多少懐古低徊趣味的な氣のする、只、懐しさに至つて、丁度、父親に逢ふ様なうれしさは佯れません。藏造りの三層より成る大問屋建。そのふんだんにアカを葺き廻したる小屋根と云ひ、黒くつやつやと研ぎ出しに塗つた寛濶な壁。重き鬼瓦の飾り、可愛き避雷針。——一寸した忍び返しの細工にもブリキ屋を飾り屋と云つた時代の情愛が籠つてゐますし、カナモノの天水桶の鷹揚さ。から拭きをかけたる格子戸、打水する敷石、云々……

かう云ふ家々のしやわいは、極く涼しいのです。子供の時分、よくそんな冷々とした片影に親しんだものだつたが——

と云ふ様な一時代前の家々がそつくり町の兩側に居並ぶ、大阪本町筋の漫歩を喜びますが——と、今愕然と(この字は大袈裟の様だが、と云つて、此の字以下ではありません)したのは、本町三丁目のところ、それを北から、都市計劃線の三休橋筋が十文字にぶつかつて來る、その交叉點の現在の風致です。恰かも白い蛇が、それに新時代の氣を乘せて、黒く重い「昔」の本町筋文明を食ひ盡さんと、伺ひ寄る樣に見えます。事實、刻々と伺ひ寄りつゝあるでせう。——この北から舊市街へぶつかつて來る三休橋筋の新街路に立ち並ぶ程の家々は、決して大家屋ではなく、殊に、美點と云はんよりは缺點——その第一は無裝飾なること——のみ目に立つ、云はゞ、モダン長屋の稀薄で、一體が大阪と云ふ土地には、その土地個有の色感として、從來、黒ずんだ茶褐色の調子に、町の空氣がありました。(と云つて、これをいつ迄も固執的に讃美する意味ではないが、少くとも、)それで美しいことは確かだつたものです。本町筋の如き、以つて宛然として畫中の家です。

然るに北から走つて來る都市計劃線の新道路は、その色が、ぬく〳〵として白い。白いと云ふよりは色が無いと云つた方がよく、その意味で、白い。何か妖氣のある生の蛇が、舊市街へ潜入せんとする不思議を見る樣に感じるのです。

ところが之れを倖忽に附し難いと思はれる點があるのは、此の舊文明から抜け代つたばかりの街の白蛇——例へて云へば、今歐大陸へ進入したてのゲルマニ族——が、猶一定の審美は持

たないかも知れない代り、只、賑々たる活氣は持つてゐることだ。活氣だけは如何なる美しい新市街よりも段違ひに持つて進み來ることとです。

その三休橋筋とは別に、梅田から難波へと、同じ都市計畫線の、然も、二十四間道路が渡らうとしてゐます。地面を掘り返しつゝあります。――と、之れは例へば東京の横町線を、大阪地圖の上へ强引に敷かうとするにも似て、ここに天爲とするよりは、より以上人爲問題の危險？があらうと思はれる點は、東京の場合は、新しき道を焦土の上に通します。大阪はさうでなく「昔在りし家」そのものゝ上へ、今將にドシ〱通さうとすることです。屢々、我れから舊を壞して、新を置かうとしつゝあるでせう。隨分到る處で。

例へば筋違橋から、南方呉服橋の方を見ても、その暗く、情趣めかしい(如何にも大阪式な)町中のよどんだ川筋へ、いきなりもう一本向うの京町橋が、白皚々としたモダンの石橋で今現はれつゝあります。――と、そこで美の各樣式が痛々しく相衝擊して、相衝擊するのはそれが直ちに現在の世相一般だから、面白いと云へば、それつきりのもの、――これを何とか善處したいのは、少くも、無考へには改新のみ貴しとしたくない。言葉を代へれば、今指摘した風景の歷然たる不調和は、これを調和だと人にかりそめにも誤解はさせたくないものです。――あの川筋の、大阪の名譽の爲めに。

僕は「昔在りし家」の悉くを善しとする、或ひはそれを保全しようと云ふ、さうばかりの極右論ではないのです。例へば、新町筋の裏の、通りの狹い、家並みも極めて低くそれが陰氣に、左右前後櫛比したしもたや(？)筋の如きは、伴らずに云つて、彼所を今ドイツボックスの短靴か何かで歩いてゐると、いつか息苦しくなります。僕舊弊なりと雖も、心齋橋筋から戎橋へとつて返して、やれ嬉しやと思ふ。――又は、高津神社の社殿なり環境が、今日猶、明治二十一年の十月の日附で主田文齋と云ふ人が銅版畫の大阪案内に寫した時と寸分違はずに殘つてゐる、この大阪の一面。敢て云ふに、うつかりすると南京蟲に刺されさうなる古物堆積の一面。――これには感服しません。

そこは要するに程度があるので、――心齋橋筋を南北上下しながら東西の筋々を覗くと、步每の右左りに、前かた問屋町

の、整然とした「昔」の文化仕立てそのまゝ、幾年月もかゝつて富貴に出來た街の幾流れかを見る。あれは到底、一朝一夕には出來ない、つまり、町の沽券だから、壞したくないと云ふ意味です。無闇には。

然し決して手を觸れるな、改善するなと云ふ意味ではない。改善はこれに越さないが、只、難かしいことだから、願はくは無考への土木工事だけではやつて貰ひたくないと云ふ。

南北御堂の傍をやがて二十四間道路の御堂筋線が貫くことゝなりますが、焦土ではない、ぎつしりと舊物のある上を通して貫くことになるから、何れはこれがより大なる三休橋筋の白蛇と同じになるばかりは好まない。貫くに愼重の考慮を以つてしたいと云ふ。昔「四ツ橋を四つ渡りたる」涼しさは幾重にも重んじて、それから、橋を架けたい。無闇に橋ばかり架けても「涼しさ」——土地の匂ひ——を消しては、名負れだ、と。殷鑑遠からず、今の東京の柳橋を御覽なさい。

（三）

僕は本町筋の鷹揚な舊大阪を好むと云ひましたが、又、漫歩の都度、家々の小ものゝ町家装飾を見るのを喜びました。四つ



橋通りにから云ふ電燈が出てゐます。と、この、中の明りを通して、どつぷりと紙なりガラスなりへ誌した太字の屋號や商品を讀ませる仕組は、大阪の至るところに見かける獨得の装飾美感で、より古風のものを探すと、南郊天下茶屋あたりの宿屋の提灯に



から云ふのがあつて——如何にも彼の長町裏に近く、この提灯

にして電燈を入れずに、蠟燭だつたならば？　その邊の泥溜で、さぞや、義平次は、團七九郎兵衛にむごく殺されたことだつたらうと感じる。

試みに同じ樣式のものをモダン化すると、道頓堀の



となる。

時代と樣式は變れ、美感に至つては同じことです。

或ひは町の電化装飾を見ると——

僕は初めて大阪へ行つたのが明治四十四年のことでしたが、

（次頁挿繪參照）

然も今日大阪へ行つても夜に入つて變らぬ一種の美感は、戎橋から眺める町の、家々の双方から無數に電燈の手を出した鈴蘭と云ふ装飾法に示されるものだ。

（此の武田さんの案に成ると云ふ街筋の電氣装飾法は、各地に傳波して、東京にも方々に見かけますが、面白いと思ふのは、東京では屢々この鈴蘭の弧線を大阪とは反對のカーヴに取り付けるか、又は腕木を曲線でなく直線にしてゐます（上野仲通り、或ひは裏神保町等）然るに燈光はかうすると強氣になつて、此の装飾法の發祥の地にはそれでは向くまいが、關東にはこの方が似合ひます。一體誰が變化させるものでせうか。爭はれぬものです。）

或ひは昔日と同じ心齋橋畔の電氣装飾。之等に昭和年的手法ありと見れば、新世界の電氣装飾に大正年度の手法及び器具を見ることが出來るし、松島に明治を偲ぶことが出來て、而して、與へる美感の起承轉結に至つては、何れも決して變らない。つまり、大阪なるもの、これが個性です。

所詮、土地には個性あり氣負ひあり、云はず語らざる諸式なるものがあるから、殊に大阪の樣に古い文明を負ふ都會は、變轉するとも、決して無闇に何地やらわからぬ植民地文化の樣な


中將湯
クラブ白粉

ものになる――と、この恐れは、無いでせう。
試みに此の稿のカットに、最もモダンと思はれるカフェーの電氣装飾設備を寫して見ましたが、この中央の五色燈の矢車が絶えずぐる〳〵と廻る仕掛けで、大阪ならではのこつくりとした味がするものです。

僕の思ひ過ぎではなからう。千日前の雜踏、その「音」そのものを座ろに聞いてゐても、あの、淺草仲見世の喝音とは何所か違つた音律の中に、大は紋下津太夫の沼津でも聞く樣な、よく嫋ふ、纏綿悠揚とした大どこの味があり、或ひは之れを小にしては、吹け〳〵ドン〳〵の、誠にえげつない下人の音色が忍びます。――之れを大阪に蔽ひ隱すことは出來ない。

況や、滅し去ることは出來ないし、さうしてはいけない。破壞してはいけない。

大阪は實に刻々と變りつゝある。昔作りし家の最中へやがて作らんとする家がどし〳〵勃興してゐます。然も、街の或る部分には、悠乎として、去りし文化文政さへ有る、面白の都會です。――若し好事の人があつて、二十四間道路の進捗しつゝある工事を、その進捗しつゝ行く順に、丹念に活動寫眞に寫すとすれば？ 願つても無い、絶好の、幕末、明治、大正、昭和……四代に亙る活世相史の參考圖をそこに現出することでせう。強ち斷者の徒らなる空想とばかりは考へません。以上。

（昭和四年初夏於東京初稿、五年九月再稿）

皮膚病の簡易療法

皮膚は體軀の第一防禦戰であるだけに、ともすれば障害に犯されがちで初期に於て適當の手當を怠ると瘢痕を殘したり甚だしきは全身に瀰漫して少なからず惱まされる。又血行障害等の餘病を誘發する事も少なくないから、之が治療は斷じて閑却すべきではない。皮膚病に對し、絶對無刺戟で而も殺菌力適度に收斂、消炎の作用最も良く、深達滲透の點に於ても間然するところのない皮膚病退治テーム水の如きは苟も皮膚病に惱む何人も安んじて推奬に値するものである。現今は男女を通じて洋裝が多くなり、スポーツも盛になり食餌も肉食が多くなつたので、皮膚病の原因も自然殖るが之が手當も簡易迅速で効化の適確たる方法を採らなければならぬ。此の意味からもテーム水は最も理想的であると言へる。

樺太の友へ送る手紙

――見物印象記に代へて――

末弘嚴太郎

××兄

旅行中は色々お世話になつて誠に難有う。歸つたら早速「樺太見物印象記」のやうなものを書く約束をしたが、愈々歸つて見ると公私の雜務に迫はれて多忙を極め、到底秩序立つた印象記をまとめるだけの時間がない。しかしぐづ／＼してゐると、冬の早い貴地のことだから夏の見物印象記なぞもう眞平だと言はれるに違ひない。仕方がないから君だけへの私信として不取敢茲に印象の一端を書いて置く。君が之を一般に發表されるや否やはすべて君の適宜の處理にお任せする。

此夏樺太を訪れた人々の内既に見物印象記のやうなものを公にされた人が二人ある。一人は碧梧桐、もう一人は松田拓相だ。其中碧梧桐の分は流石俳人には俳人だけの見所があるものと一通り感心しながら一讀した。所が「改造」の十月號に出た松田拓相の「樺太視察所感」は――期待の大き過ぎた關係もあるが――非常に物足りない感じがする。君等はさう思はないか。あれだけ大袈裟な視察旅行をして置きながら、其「所感」だとして發表する所は極めて平々凡々たる樺太紹介書の拔萃に過ぎない。吾々が彼から聽きたいのは政治家としての所感であり經綸である。材木が何本あるとか小麥の製粉歩留がどうだとか言ふやうなことは統計書を見るなり技術家の話をきゝさへすれば解ることで、今更大臣閣下を煩はすまでもないことだ。然るに松田拓相の「所感」の中には唯萬事を有望だ／＼と言つてるだけで、一として政治家らしい經綸が述べられてゐない。まるで下僚の奉る書類に盲判でも押してゐるやうな調子だ。全く以ていやになる。君等はさう思はないか？

僕今度の旅行は講演ついでの單純な見物に過ぎない。だから科學的に價値のある視察報告なぞを書く資格はない。しかし僕は確に僕の目で自ら見、僕の頭で自ら考へて來た。「觀察」の名の下に實は「聽察」

若くは「觀察」に過ぎないやうな見物をすることだけは慎んだ積りだ。アメリカのデウキー教授は其ロシア印象記の中で、「曾てアナトール・フランスが露西亞を訪問した時、彼は一切統計や資料の蒐集を爲さず、又所謂調査をなすことなく、自ら街路を歩いて道行く人の身振、顏色から人々の心持を讀まうとした」と記してゐるが、僕はこれを非常に面白いことに思つてゐる。觀察と稱して海外旅行をする役人なぞが、行き當りバッタリ在留の邦人から聽いた話を勝手にまとめて如何にも立派らしく見える視察報告を作り上げるやうなのに比べると、如何にもその人らしい立派な態度ぢやないか。無論僕にはアナトール・フランスのやうに「道行く人の身振、顏色から人々の心持を讀む」だけの力がない。しかし僕は僕自らの目で見得るだけのものを見た。少くとも見ようと心掛けた。以下その見て感じたゞけのことを正直に書き綴つて御覽に入れやうと思ふ。こちらに歸つてから屢々受ける質問は

樺太產業の將來

をどう思ふかと言ふ質問だ。秩序立つた研究をしてゐない僕には無論之に對して科學的に自信のある返答を與へる資格がない。しかし大體に於て僕の得た感じは樺太の產業は今や極めて重大な轉換期にあると言ふことだ。

　今までの樺太は無秩序な資本主義的掠奪の對象であつた。殊に世界大戰以來の世界的經濟の好況は資本主義的掠奪に對して極めて好都合な條件を作り與へてゐた。だから樺太の森林も魚類も豫期されたより遙に早く掠奪の慘禍を暴露した。殊に一兩年此方の世界的經濟不況は思つたより早く資本主義的掠奪の經濟的行きづまりを原因した。あれだけ豐富な森林を控えたパルプ工業さへ、動ともするとカナダのダンピングによつて脅され勝ちであると言ふこと、明かに樺太の資本主義的掠奪の行き詰まりを示しつゝあるものと言はねばならない。嘗ては吾國蟹罐工業の中心地であつた眞岡其他西海岸地方も今では濫獲の爲年々の漁獲高に非常な差等を生ずるやうになつて資本主義的生產は最早殆ど不可能となりつゝある。

　だから今や樺太は產業上萬事を考へ直さねばならない重要な轉換期にあると思ふ。無論世界的經濟の狀況が少しどうにかなれば、樺太に於ける資本主義的企業ももう少し息をつける時期が續くだらう。しかしさらばと言ふて樺太を今のまゝ永久に資本主義的掠奪の對象たらしめて置くことは絕對的に不可能だ。

　實際今までの樺太は資本主義的掠奪の對象たる以外の何物でもなかつた。樺太廳も住民も敎育施設も專ら其手足であり附屬物であるに過

ぎなかつた。人々は唯天然を掠奪することを知るのみであつて、此土地を愛しつつ此土地と共に生きることを考へなかつた。だから森林は出來るだけ伐り魚は又出るだけ捕へて仕舞つたのである。眞に樺太の天地と共に生きる積りならば樺太の天地を愛せねばならない。愛するが爲めには研究せねばならない。樺太の自然を理解して、之と共に生くべき道を研究せねばならない。だから僕の貴地滯在中最も愉快に感じたのは

小沼の中央試驗場

を訪問したときだ。多分君は覺えてゐるだらう。自動車から降り立つたとき、眼の前に、見渡す限り展開してゐる耕された土地を見た瞬間に僕が心から叫んだあの叫聲を。實際僕は其時心から「樺太に來てからこれ程愉快なことはない。樺太に來てから自分の見たものはすべてが天然の掠奪であり破壞であつた。然るに今此所に來て初めて樺太でも人が自然を愛し自然と共に生きようとしてゐるのを見ることが出來た」と叫び且喜んだ。僕でなくともあのすき透るやうな澄み渡つた青空の下に廣々と見渡す限り耕された土地が内地でも容易に見られない程立派に成長した麥類や甜菜や豆類を育てゝゐるのを見た人は必ずやすべて同じやうに喜ぶに違ひない。それ程に小沼の試驗場はすばらしいのだ。

しかし考へて見ると、樺太廳が最近漸く目醒めて、かうした研究試驗の方面に注意を與へるやうになつたと言ふことは、樺太の天然そのものが既に無秩序な資本主義的掠奪に堪へなくなつたことの反映に外ならない。これも亦樺太の經濟が今や重要な轉換期に在ることを證據立てる一の現象に外ならないと僕は考へる。これからの樺太はいかにして之を吾々同胞の安住し得る土地たらしむべきかを主たる目標として經營されねばならない。樺太は最早資本主義的掠奪の對象たる役目を勤め終へたのだ。此れからは吾々が此土地を愛して此土地と共に生きる道を講ぜねばならない。それには先づ研究により試驗によつて此土地を理解する必要がある。その意味に於て私は此中央試驗場の仕事の極めて重大な價値を認めざるを得ない。

事を資本的にのみ考へる限り、如何に——松田拓相の言ふやうに——製粉歩留に於て外國産優良品に劣らない小麥が出來ても、又反當り生産額に於ても乃至含糖率に於ても優に北海道産を凌駕する甜菜が出來るとしても、世界經濟の見地から見て採算上成り立たない限り、之によつて製粉業も起らないし又製糖業の起り得る見込も絶對にない。ロシアを初め諸外國は遙に安い小麥を世界市場に提供し得る。諸國の製糖業はすべて世界的の生産過剰に苦しんでゐる。此事情を考へ

合はすこともなしに、技術的可能から直に經濟的可能を推論して安價な楽觀論を述べるが如きは絶對的に間違つてゐる。

之に反し、樺太の土地を吾々同胞の安住し得べき土地たらしむることを目標として研究し經營する限り、樺太の將來には尚大に有望なるものがあると思ふ。しかしそれには一般の考へ方を根本的に變へてかかる必要があると思ふ。例へば、

衣食住

にしても、現在の樺太は、餘りにも内地延長主義の生活を營んでゐる。此土地に於て内地と同じ生活を營む限り、少くとも小樽大泊間の運送賃は必然に彼等の生活費の一部をなさねばならない。彼等日常の生活費が内地に比して高いのは當然である。彼等は内地の米を食はねばならない。其他日常生活の需は殆どすべて内地の生産品を以て充してゐる。だから彼等の生活費が高いのは當然であり、勞銀が内地に比して高いのも當然である。

假に、此土地に落着いて此土地と共に生きる積りならば、原則として生活を自給自足の基礎の上に樹立する必要がある。殊に農家の生活に於てさうである。僕は君に別れてから知取町の近郊北遠古丹に於て個人經營の小さい農場を見せて貰つた。それは此地方に於て最も成功したと言はれてゐる農場で、其栽培するものは專ら蔬菜類だ。現に僕が行つたときにも、夏季氣溫の餘りに高くない此地方にも拘らず茄子や胡瓜が相當立派に出來てゐた。此農場の成功した理由は近くに東海岸第一の都市知取町を有することだ。知取と言ふ大きな消費者をもつが故に商品としての農産物を作ることが可能なのだ。又一年の大半が低溫度である爲めに充分に分解し得ない有機物を多分に含有してゐる此土地を耕す爲めには、廐肥のやうな醱熟性の肥料を用ゐることが非常に有効であるらしい。其必要な廐肥を此農場では比較的容易に知取町から手に入れることが出來るらしい。だから此土地で成功した――商品生産としての――蔬菜栽培が樺太のいづれの土地に於ても同樣に成功するとは限らない。既に此農場の若主人すら近來彼に見習つて附近に同樣の農場を經營するものが大分出來て來たから、數に限りのある知取町の消費者を相手にして商品生産をする限り自分の農場の將來は間もなく行き詰まるだらうと言つてゐた。だから此若主人は一日も早く自分の農場を自給自足の基礎の上に置くやうにしたい。せめて自分の食ふものだけは自分で作るやうにしてゆきたい。それにはもつと土地を手に入れる必要もあるし、牛馬を飼ふ必要もあると言つてゐた。此土地に永く住まうとする人の心掛けとして誠に尤もなことだと思つた。

これを考へて見ても、樺太廳が内地から移民を招くに付いても、從來よりもつと彼等日常生活の自給自足策を考へてやる必要があると思ふ。それが爲めには、例へば耕地の外に山林や牧草地をつけてやることも必要だらう。現に土人に許してゐると同じやうに或程度まで漁獵を自由にしてやることも必要だらう。さうして彼等に對して自給自足の生活を可能ならしめると共に、かくして生活すべき道を敎へてやる必要があるのではあるまいか。現に或る移民は、自分の農場を半農半牧畜の經營にする方がいゝとは自分にも充分分つてゐるけれども、何分内地と違つて冬が長いから冬の爲めに可成り澤山の牧草を貯藏する必要がある、それが現在の狀態では不可能だ、と言ふやうなことを私に話してくれた。これも至極尤もなことだと思ふ。無論實情に精しくない僕には具體的の方策が何であるかを語る資格がない。それは寧ろ君等土地の人々に考へて貰ひ、實行して貰ふべきことである。しかし根本の考へ方に於ては僕にはどうしてもこれより外にないと考へらるるのだ。君等は果してどう考へて居られるのだらうか。

偖衣食住の話のついでに、一冒旅客として旅宿や料理屋で食つた食物のことを言ひ添へて置きたい。僕は旅行にゆく前樺太へ行つたら定めし、新鮮な鱒が食へるだらうとか燻製鮭の旨いのがフンダンに食へるだらうと内心大に樂しみにしてゐた。所が實際行つて見ると案外にも料理はすべて内地延長主義だ。恐らく餘程南方から來たと思はれる半ば變色した鮪のさしみが何所へ行つても必ず出ると言ふ始末だ。色色御馳走になつて置いて小言を言ふのも變だが、あれには全く驚いた。無論宿の主人なぞに聞いて見ると、内地から來られた方に變なものを差上げては失禮と存じましてと言ふやうな返事だ。だが此所にも樺太の人達が成るべく内地と同じ生活をしようと努力してる氣持が何となく現はれてゐるやうに思はれてならない。樺太では出來るだけ樺太のものを樺太らしく旨く食ひ旨く食はせてこそ料理道の眞髓が發揮されるので、料理の内地延長主義は間違ひだと思ふ。だから今度の旅行中今でも思ひだす程旨かつたのは、樂磨の水産試驗場で頂いた鰊鮓と海馬島産の生海膽、登帆の宿屋にお願ひして漸く食はせて貰つた鱒の眞子や半燻製の鱒、それから敷香の宿屋で食つた多來加鮒の洗ひなぞだ。登帆の宿屋にお願ひして漸く食はせて貰つたと言ふ話はまだ君の耳に入れなかつたが、實は突阻山に登る爲めにあの海岸の寒村に泊つたとき、夕飯前に海岸を散歩して見ると不漁とは言ひながら歸つて來る船も歸つて來る船も新鮮な鱒を四五十尾位づゝ積んで來る。風呂に入らうとし納屋のやうな所を通ると如何にもうまさうな鰊鮓がブラ下つてゐる。夕食には定めしあゝしたものを食はせてくれるものと樂みにしてゐると、出されたものは此所でも亦内地延長主義。落膽し

た心をとり直して漸くお願ひして見ると、あゝしたものは內地の方々のお口には合ふまいと言ふやうな返答。がともかくと言ふので食はせて貰ふと旨いの旨くないの。殊に鱒の半燻製に至つては天下の逸品。土地にゐる君等もまだあんな旨い物を食つた事はないのぢやないか？

扨て話は變るが、料理の內地延長主義に閉口した僕は、

法律の內地延長主義

に對しても多大の疑ひをもつてゐる。樺太を成るべく速に內地化し內地と同じ法域にしようとする努力に對しては無論一應敬意を表するけれども、あれだけ天然の異つた土地に全然內地と同じ法律を行はうとするのは無理ではあるまいか。例へば金融機關の不完全な樺太のことだから金利の高いのは當然だ。內地と同じ貸金取締法を行つて同じやうに金利を制限しようとしても無理にきまつてゐる。だから現在の實際では取締の任に當つてゐる警察が然るべく手心して制限外の利息を許してゐると言ふぢやないか。漁業や森林のことでもさうだ。いらく魚をとるな木を伐るなと言うても、あゝした環境の下に住む人達が魚を獲りたがり木を伐りたがるのは人情の自然でもあり生活の必至的需要でもある。無論內地から態々やつて來るやうな大仕掛な濫伐や密漁は大に取締るべきが當然だけれども、土地に定住してゐる人達殊に無產者の爲めにはも少しゆとりを與へてやつて然るべきではあるまいか。樺太の犯罪統計によると、漁業や森林關係の犯罪者が非常に多いと言ふことだが、僕にはどうしても其點について犯罪者だけを責める氣になれない。法律の方でも少し自省して讓歩すべき餘地があるやうに思はれてならない。內地のやうにコセ〳〵した排他主義の法律をそのまゝ行つたのでは、土地の人は定めし住み憎くて困るだらう。住民をして眞に樺太の土となるだけの決心をもたせる爲めには、あの土地を住み良い土地にしてやらねばならない。所が內地風の排他主義の法律は無產者等に對して充分に天然物を利用することを許さない。農業移民等をして自給自足の生活を立てしむるについても、此點を能く考へることが絕對的に必要だと思ふ。

扨て終にこちらに歸つてから色々の人にきかれるのは、

樺太の見物價値

如何だ。どうだ面白かつたか、おれも一度行つて見やうか、と言ふのだ。樺太の山水は大體に於て平凡だ。特別にこれはと言ふやうな絕景はないやうだ。しかし、夏の樺太の氣候は實にいゝ。溫度も無論低いが、その上濕氣がない。だから、土地に慣れた君等にはさうでもないらしいが、吾々旅行者には何とも言へないすが〳〵しい氣持がする。現に大泊で講演した時なぞ土地の人は皆浴衣をきたり扇子を使つたりしてゐるのに、二三時間も立て續けにしやべる僕は四五月頃の間服を着てゐて汗一つかゝなかつた始末だ。だから夏の樺太は避暑旅行の土地として實にいゝと思ふ。その上これと言ふて特別の絕景はないとは

言ふもの丶、內地では容易に見られないやうな原始的な森林や夏でも何物のやうな色をしてゐる淺綠の中に織り込まれて桃色の柳蘭が燒跡の山野を幾里も幾里も打續いて咲き亂れてゐる景色は一寸他所では見られない美しさだ。柳蘭の美しさは碧梧桐か上手に書いてゐたが、あの美しさを見るだけでも樺太に來た甲斐があるやうに思つた。

それから君に勸められて登つた

突阻山

は豫期したより遙に良い山だつた。高さこそ六百米に足りないが、他にも餘り高い山のない樺太のことだし、その上緯度の高い關係上標高の割合には頂上近くが高山的な相貌をしてゐるので、登つた氣持は非常にい丶。ハイマツ帶から上には珍しい高山植物が岩角岩蔭なぞに可憐な美しさを競つてゐる。頂上に立つて眺めると、斷崖は直に多來加灣から切り立つて、東方にはオホツクの海が果てしもなく續いてゐる。又山の位置が丁度南樺太の中央部に位する關係上北西南の諸方面には樺太の殆ど主な山を見ることが出來るし、西海岸をさへかすかに見ることが出來る。先づ〱登行價値百パーセントの絕景だと思ふ。その上、白石澤驛から馬群潭の濱に出る約一里の山路、馬群潭濱から山傳ひ崖傳ひに登帆に至る海沿ひの山徑、其他登路及び頂上から近幌驛に降るまでの原始林等、旅行者の目を樂しましむるに足るべきものが充ち〱てゐる。

海豹島

も確に態々來ただけの價値があると思つた。何と言うても、何萬と言ふオットセイが自然の生活を營んでゐるのをありのま丶に見るのは大したことだ。彼等の赤裸々な性慾生活、母性愛の發露、吾々は思はず時の過ぎるのを忘れて彼等の生活に見入つた。その上周圍十町にも足りない此島には數十萬のロッペン鳥が棲んでゐる。さうして不絕ガア〱と氣味の惡い鳴聲を立て丶ゐる。海岸ではオットセイが吼える、崖の上ではロッペン鳥が鳴く、かくして他に類のない交響樂が絕え間なく打續く。それは丁度ラジオの早慶野球戰で大安打球が飛んだときに聞かれる騷音に類似したもので、あれを更に何倍かに擴大したと思へばい丶程すばらしいものだ。君も折角樺太にゐる以上一度は是非共見るべきだと思ふ。

　それにしても、これだけ見るべき場所をもつてゐながら、信賴するに足るべき案內記もなければ、相談相手となるべき案內所の設備もないのは、獨り旅行者にとつて不便千萬であるのみならず、樺太それ自身にとつても非常に損だと思ふ。例へば、樺太旅行の日程中に海豹島見物を加へやうとする人は一體何所に相談すればい丶のか？　其簡單なことを知る途さへ現在の東京其他內地には全く存在しない。又例へば突阻山に登つて見やうとする人は何所からどう登ればい丶のか、又どの位時間を要するのか？　此單純なことを相談すべき場所は樺太に

來てさへ全然發見し難いのである。成程樺太廳は「樺太鐵道案內」なる册子を作つてゐる。しかし例へばあの案內記を信用して近幌驛から突阻登山を企てる人があるとすれば恐らくは登山の目的を達し得ざるのみならず、極端な場合を考へると生命の危險にさへ遭遇するかも知れない。案內記を見ると如何にも近幌驛から登つたらよささうに見えるけれども、實際近幌驛と突阻の頂上との間には殆ど登路がないのである。樺太廳がもしも內地から旅客を誘致する氣があるならばせめて旅客が精確な旅行日程を樹てるについて必要な案內記を作つて置く必要がある。も少し贅澤な註文が許されるならば、稚內から大泊に行く八時間の航海中に旅程萬事を相談し得べき案內係が船中に一人位置かれてゐてい〻、又若くは東京に其位の相談所を置いて置いてもい〻と思ふ。さもないと、旅行者は特に知人の世話にでもならない限り、殆ど日程を樹てることが出來得ない。

も一歩進んで言ふと、今後の樺太廳としては觀光客の爲めにも少し特別の施設をしてもい〻のではなからうか。先づ第一に現在豐原にある博物館はもつと規模を擴大すると同時に科學的分類を正確にして觀光客に先づ最初の正しい印象と智識とを與へ得るやうに設備されねばならぬ。次に樺太に特有な天然を見せる爲めに國立公園的な天然博物館を設けることが必要だと思ふ。今年丁度僕と時を同じうして樺太を訪れた某觀光團の如き、時間が非常に切り詰められてゐた關係もあるけれども、あれで果して團員一同に充分の滿足を與へ得たであらうか。無論それは一には觀光計畫を樹てた人々の無責任若くは無智に原因してゐると思ふけれども、態々東京から樺太見物に出掛けて、大泊豐原眞岡あたりの市街的部分を見て樺太を見たと思ふのは非常な間違ひだ。せめて東海岸に出て知取邊まで行く必要がある。所がそれにしても現在樺太の鐵道その他觀光施設は一般に不完全で短時間に樺太の大體を見得るやうに設備されてゐない。一つ突阻山あたりを中心として國立公園的なものを作り、途中登帆あたりに一泊すれば、山にも登り原始的な森林も通り鰊網も見る等豐原あたりの町では到底見ることの出來ない樺太の他の一面を簡易に見せる設備を作つてはどんなものだらうか、又少し時間の餘裕をもつてゐる觀光客に對しては今よりもつと容易に海豹島を見物し得るやうな施設を考へてはどんなものであらうか。かうして多數の內地人を樺太に引きつけることはあらゆる意味に於て樺太の將來にとつて極めて有利だと思ふ。今までの樺太廳は內地の資本家や利權屋の相手をすることばかり考へてゐたやうに思はれる。此際一つ考へ直して樺太と內地との關係を民衆的に密接ならしめる爲めにこんなことを考へてはどんなものだらうか？

まだ聞きたいことは色々あるけれども、餘り長くなるからこ〻らで筆を擱かう。色々無遠慮な批評をしたがこれも君等の樺太を思へばこそのことだ。惡く思はないでくれ給へ。樺太はもう間もなく冬になるだらう。どうぞお體をお大事に。僕も是非一度スキーを持つて君等の自慢した粉雪を味ひにゆきたいと思つてゐる。皆さんによろしく。

米價慘落とその對策

緊急對策と根本對策

杉山元治郎

本年九月二十日現在に於ける第一回米作豫想收穫高は六千六百八十六萬七千五百三十石であつて、前年の收穫高に比較すれば七百三十一萬四千二百五十八石（一割二分三厘）の大增收、此の豐年ぢや滿作ぢやの報一度傳はるや各地の米穀取引所は大混亂を來し、投げに次ぐに投げ、先物拾七圓臺を破るが如き暴落を呈し遂に立會休止の已むなきに至つたのである。正米も亦期米に連れて低落し、出來秋には或は石拾五六圓になるのでないかと危ぶまれてゐる。

若し今の豫想價格は眞實になるとするならば昨年の價格に比し約半額である。一割二分三厘の增收に對して價値の五割減は餘りに甚しい低落と云はねばならぬ。是には米本來の性質上海外輸出の充分でないと云ふことにも依らうが、又一面今日の取引所關係の缺點所謂投機に偏らるゝ點も多々あるのである。此の偏りを耕作農民にのみ負はせることは益々農村を貧窮化せしむるものである。だから此處に於て其の對策の講ぜらるゝのは當然である。

併し米穀對策の問題は甚だ面倒複雜なる事柄であつて、生產者に都合よく價格の吊上げを行へば一方其反對に立つ消費者を壓迫することになるのである。だから生產者側の立場にあつて考へるのと、消費者側の立場にあつて考へるとにより其の對策は各々異なるのである、私は先づ農民の立場に立つて其の對策を考究せんとするものであるが、其の前に當り政府なり、帝國農會等の取らんとしてゐる對策に付き一言批判することにしよう。

政府は本年の大農作に直面して總動員を行ひ對策に狂奔してゐる、新聞の報ずる所によれば農林省の方針は

一、政府米の海外賣却

一、外米輸入制限令の延長

一、外米關稅の引上
一、低資融通による買止め
一、內地米の買上
一、鮮米の移入制限
一、滿洲粟及び滿洲米の輸入防止
一、朝鮮人の鮮米需要喚起

等々である、是で果して七百萬石の過剩米を註文通り消化し得るや否や疑問である。うまく行かなければ米價の維持が出來ないのは當然である。政府の獻立によれば二百萬石を海外に賣り、內地及び朝鮮への輸入外米豫定額百五十萬石を防止し、三百五十萬石を買上げると云ふものである。さう問屋が卸せば需給のバランスが取れうまく行くのであるが、然う豫算通り行くものではない。例へば政府所有の古米約二百二十萬石を石十圓即ち消費地の外國米と同樣の値段で輸出しようと云ふのであつて、輸出仕向地は支那、南洋、インド歐洲等であるが、支那は十年來の豐年でありドイツも可なりの豐作だと稱へられてゐる。又南洋及びインド方面で使うてゐる米は大部分下級品で日本米は却つて其の嗜好に適さないのである。だから稍々僅かに望みのあるのは歐洲であるが、此處に從來からラングーン米は輸入せられてゐる。ラングーンと競爭するには白米とする必要があり、日本には遺憾ながら大量を其程に早急に精白する精米所の設備がないのである。如何に石十圓と云ふ捨値で輸出するとしても左程に簡單には行かないのである。又朝鮮に對して外米は愚か滿洲粟の輸入を喰止めて、厭應なしに購買力を越えてゐる米の消費を強制することは無理な相談である。斯く考へ來れば政府の數量調節に困難が伏在してゐる。恐らく破綻するであらう。今日まで米價の吊上げに幾度か米の買上が繰返された、其の都度一時的に幾らか昂騰は見たが、忽ちにして舊態に復したのである。だから結局政府の望んでゐる樣な價値は平年作以下の凶作に巡り合はさない限り到底六ケ敷いのである。米穀法運用の如何に無能力であるかは過去の經驗に徵し二億數千萬圓の損失によつても明かであるが、米國の實例を見ても知ることが出來る。彼の膨大な資本を以つてして猶ほ農產物價格吊上げ策は失敗である、況んや日本の樣な僅少なる資本による米穀法の運用の如きは何等の用をなさないのである。

(甲)緊急對策

一割二分三厘の增收によつて約五割減の價格は耕作農民に取つて大打擊である。肥料代の支拂にも、稅金の納入にも事缺くのである。だから當面の緊急對策としては耕作農民に對し米作損失の補償をしてやることが大切である。前途の如く賣れない處に賣らうとして損失をするよりも其の損失を耕作農民に直接補給してやる方が農民は浮ぶし又最も賢い方法である。從來の米穀法運用の如き之を取

扱うた一部商人と地主の或者が儲けて實際の耕作農民は何等の恩典に浴しないのである。其よりも如何に小額でも直接耕作農民に補給することは眞の救濟になり、且つ消費者側にも悪影響を與へないですむ最も賢明な策であるまいか。

第二は籾の貯藏獎勵と補助金の交付及び低資の融通である、是は與黨の或者も進言してゐる樣であるが、三百五十萬石の新米買入はいろ〳〵の點に於て仲々困難である。現在所有してゐる古米を手放なさない限り資金に於ても亦倉庫に於ても差支へるのである。其で地方の農業倉庫に貯藏すると云ふ意見もあるが、地方の農業倉庫に持つて來ると賣止め處か却つて賣急ぐことは過去の事實によつて明かである。だから寧ろ各個人に於て籾の儲貯藏せしめ、其等に對して相當の補助金を交付すると同時に、一面資金を要するものには其を擔保として低資を融通する樣にすれば幾分か投賣を防止し米價維持或は吊上げに多少の効果を齎らし得るのである。政府の買上案や帝國農會あたりの稱へてゐる賣止策に勝る萬々である。

其他小作料の半減、稅金の支拂免除或は延期、農業倉庫倉敷料の免除、借金の支拂猶豫肥料代の支拂延期等は直接米穀對策の問題ではないが、是等を履行する時は引いて耕作農民の出來秋に於ける肥料代稅金其他のために投賣することを阻止し一面賣止めの働きをなし、いやが上に低落せんとする米價を維持する一策となるのである。

（乙）根本對策

近年日本內地に於ては少々の不作であつても從來の如く米價は昂騰せないのである。何故であるか、其は需給關係を無視せる朝鮮及び臺灣に於ける米穀增收計畫の結果である。だから本年の如く內地は勿論臺鮮に於て豐作が一度報へられるや現在の如き大暴落である、故に臺灣米及び朝鮮米の處分案がうまく解決の付かない限り、今回の如き事件は幾度も〳〵繰返され、農民生活の基調が脅かされるのである。是に對する根本對策は何と云ふても米穀の專賣である、其の專賣案に就ては他日稿を改めて精しく申述べるであらうが、根本基準は先づ耕作農民の生活を保障するに足る價格を以つて購入し、一方消費者に對しては生活を脅かさぬ程度の價格を以つて販賣することである。斯くすることによつても國家は大なる負担とはならないのである。或は米穀法の誤用による損失よりも少ない費用で出來るであらう。

若し米專賣が不可能と云ふならば農民自身の自覺による組織を持つことである。從來農家は余りに政府を信賴し過ぎ、何も彼も政府がしてくれることと思ひ、所謂政府に任せ切りの態度は今度の如き狀態に立至つたのだと信ずるのである、先づ第一に米國に於ける穀(グレーン)

物組合の如く、或は加奈陀に於ける穀倉組合の如く耕作農民は固く團結し、農業倉庫を持ち、金融機關、運輸機關、市場等のあらゆる機關を握つて農民自身が生産物の價格決定權を握る樣にすることである。斯くなるならば如何に定期師が相場を立てても、正物は生産費に近い價格にまで昂らぬ限り倉庫の扉が開かぬのである。日本には産業組合も村々に普及してゐる、農産倉庫もあり、信用組合もあるが皆な天下り式である、農民の自覺によつて下から積み上つたのでないから駄目である。だから私は米穀問題の根本對策として農民の取るべき道は、前述の如く農家自身で販賣組織を確立すべきであると信ずる。特に日本の樣な小規模な農業經營形態の國では一層共同組織が必要なのである。

其外米價の變動により直に農家經濟に非常な影響を及ぼさない樣に多角的經營等も必要であるが、此處には精しく述べることを省略する。最後に一言附記したいことは、米が農作で困ると云ふ一面に、飯が食はれないでゐる多くの失業者が都市に溢れてゐることである。石十圓位の捨價値で海外に賣出す位ならば此の失業者の群に飯を振舞うてやることである。彼等の多くは決して浮浪の徒でない。純良なる失業者である。「おかん」の群に居りつゝも「子供等には乞食はさせられません」と云ふてゐる人々である。此の人々に食を與へることが出來たならば米の海外投資をするよりも一石二鳥の良策である、失業者に政府所有米を開放することを私は提唱するものである。

米穀法受難時代

那須　皓

一

内地に於て六千六百八十餘萬石、朝鮮に於て一千九百三十餘萬石と云ふ空前の收穫豫想が發表せられてから、米價はつるべ落しに慘落し、今や此の大豐作と、それに基づく米價とをめぐつて論議の渦が全國的に卷き起つて居る。問題は消費者の側からよりも寧ろ主として生産者の側から、或ひは古米二百二十餘萬石を抱へ米穀法運用資金の殘存額七千萬圓を保有するに過ぎざる政府の立場から論ぜられる。消費者側からすれば米は潤澤であり其の代價は僅に一二ヶ月の中に約三分の一を減じたのであるから、固より文句の附けやうはない。若しありとすれば唯將來採らるべき對

策についてのみだ。ところが生產者たる農民側から見れば、現在の米價は正に殺人的相場である。それは生產費の約半額にしか當らない。今、內地米總生產額中、果してどれ丈けが農業者又は小作米收得者の手から市場へ賣却せらるるかと云ふに、正確なる數字は判明しないが、農林省の推定によれば大正十三年乃至昭和三年の五箇年平均に於て、地主の販賣額、年に約千二百四十萬石、自作小作者の販賣額約二千三十萬石、合計約三千二百七十萬石との事である。今、假りに之を基礎として計算すれば本年の豐作を受けたる今秋十一月以降の米穀年度に於ては約三千七八百萬石少なくとも三千五十萬石位は僅に農業者及び地主の手から販賣せられ得るものと見ねばならぬ。而も斯く販賣數量に於て一割又は二割を增加せりとするも、米價に於て三四割或ひはそれ以上の低落をなすならば、米賣却による農村の現金收入は昨年に比して三億、或ひは四億をも減ずるであらう。

卽ち昨年產米の賣却代金は九億圓內外に及んだものが、今年產米に於ては五六億圓にしか過ぎないことになるかと懸念される。之は農村に取りて由々しき大事である。此の中、地主に關する部分を除き、實際の耕作者のみの手取りを見ても尙且つ約二億圓の收入減にならう。本年は繭價暴落の爲め農家の收入は昨年に比して三億數千萬圓を減じて居り、又蔬菜類暴落の爲め同じく二三億の收入減を來して居る矢先きである。之に加ふるに米價安を以てしたのであるから、今の狀態でゆけば今春より明夏へかけて農村現金收入の減ずべきこと農產物價格低落に基づくもののみで正に九億乃至十億に及ぶであらう。農民だけの收入減でも僅に八億に達するかと思はれる。之を一戶當平均にすれば約百五十圓內外である。更に農村の子女が不景氣の爲め工場其他へ出稼ぎて勞賃を獲得する途を閉されたるものの多きと、又、居村に於ても仕事缺乏して勞收入の激減せると等を考慮に入るれば、農家の現金收入減一戶當り二百圓以上に達したと見ても過大な數字ではない。一方、地主は如何かと云へば引續きの收入減に惱める所へ、小作米一俵六圓內外では、其收入の殆と全部が租稅公課に引き去られて生活費に充つべきものは殆ど一文も殘らぬことになる地方が少なからぬ。農業者、地主兩者を擧げて農村に喧々の聲の起つたのも無理からぬのである。

一方かゝる情勢は政府當局に對して至難の問題を提供する。米穀法は、かゝる時こそ活用せらるべきであるが、奈何せむ其の資金に於て既に窮乏を告げて居る。尙數千萬圓を殘せりとは云へ、今迄に年々一千萬圓以上の缺損を重ねて來たことを考ふれば、殘金の全部を直ちに使用し盡くす譯にはゆかない。僅々數千萬圓を以てして此の米穀の大洪水に當面しては眞の燒石に水の感なきを得ぬ。然も手持米二百二十餘萬石は刻々に經費を喰ひつゝあるのである。如何に此の米穀法を運用すべきか。

繭安、蔬菜安のみですら既に地方の納稅成績は著しく惡化し、小學校教員減俸問題などの火の手が擧げられてゐるのである。急進主

農とは頗る趣の違い帝國農會ですらも地租延納の聲を擧げて居るのである。今後の米穀對策その宜しきを得なかつたならば、如何に困難面倒なる事態が發生せぬとも限らぬ。他面失業者の增大は一の社會的危機をすら孕むで居る。當局者の責任は誠に重且つ大なりと云はねばならぬ。而も諺に云ふ如く無い袖は振られぬのであつて、米穀特別會計のみが窮乏して居るならば未だ始末がよいが、日本の財政全體が收入減で四苦八苦の際なのである。玆に當局者の惱みがある。米價調節の基準案によりても今や當然、當局の買出動に向ふべき時期は來れるものと推せられるが、其の資金は充分でないのみならず、買上後の經費、手持古米の處分、今後に於て米穀特別會計の被るべき損失等につきても再思三省を要するものがある。正にこれ米穀法受難の秋である。豐年飢饉の歎聲は、今や耕作者、地主階級の口からのみ洩るゝにあらずして、農務當局その人の僞らざる心境を吐露するものと云つてよい。

二

玆に筆を轉じて目下焦眉の問題たる過剩米處分案につきて一考する。抑も新年度に生ずる過剩米の數量は幾何石に達する見込であるか。最近本邦內地の米消費量は年に約七千萬石であるが之に對して、內地生產米約六千萬石朝鮮米移入約五六百萬石、臺灣米移入高約二百五十萬石、外米輸入約百五十萬石が充てられ、尙足らざる所あれば繰越米を以て補ふと云ふ狀態になつて居る。繰越米は、米穀年度昭和四年の始めに於て約七百八十萬石であり、昭和五年度の始めに於て約七百萬石であつたが、それ以前數年間は五百萬石乃至七百萬石の間を上下して居つた。今秋に於ては、それは約六百五十萬石內外でないかと想像せられる。そこで今、米穀年度昭和六年分の內地供給可能米穀數量を列記して見ると、左の如くである。

前年度繰越米	六五〇萬石
內地產新米	六六八〇
朝鮮米移入可能額 （昨年度の移入額五四〇萬石に本年度の增收見込額五六〇萬石を加へたるもの）	一一〇〇
臺灣米移入可能額	二五〇
外米輸入額	一五〇
合計	八八三〇

之より消費見込額七〇〇〇萬石、輸移出見込額約百萬石（輸出は近年は僅々數萬石に過ぎぬが移出は五十萬乃至百萬石に達す）を控除しても尙且つ千七百萬石餘を次年度へ繰越す事になる。斯くの如くんば例年の繰越米に對して約一千萬石を追加することになり、これが金利關係、倉敷料、品損じ等の爲めに祟り累はるゝならば米價の慘落は彌が上にも甚しからざるを得ぬ。而も米價は永く其の頭を抑へらるゝに相違ない。

そこで上記の供給米數量を減少する必要が感ぜられるが、先づ第一に採るべき手段としては米穀法第二條による外米の移入制限が考へられる。之は內地のみならず朝鮮、臺灣にも適用せられ得る。之によりて內地に於て百五十萬石、朝鮮臺灣に於て合計五十萬石、總

計二百萬石の外米輸入を防ぐことが出來る。朝鮮、臺灣の外米輸入禁止はそれ丈け兩地より內地へ移入し得る米の數量を減ずることになるから、結局之によりて內地市場への米の供給二百萬石を減ずることが出來やう。上掲の一千七百萬石より例年の繰越高約七百萬圓及び玆に述べたる外米二百萬石を減じたる殘餘八百萬石を以て、新米穀年度に於て處分を要する過剩米と看做すべきであるまいか。

次に供給量減少の第二策は主として滿洲より朝鮮に輸入せらるゝ粟百六十萬石の輸入を適當の税率によつて防ぐことである。これは昨今の粟代金が石十五圓內外なるに鑑みて今日の米價よりすればさまで朝鮮の粟消費者に苦痛をかけずして行はれ得るのでないかと思ふ。之によりて朝鮮に於ける米消費力を假りに粟輸入と同數量丈け增大し得たとするならば、鮮米の內地移入額は減じ從つて內地の供給過剩量も上記八百萬石から六百四十萬石に減少する。

更に政府の所藏米約二百二十萬石を海外に投賣するとすれば、過剩米は玆に四百二十萬石に減ずるであらう。然らば其の賣上代金及び現存資金を以て此の殘存數量位は買上げられぬことはない。併し乍らかくする時は米穀法は運轉資金涸渇して運用上多大の困難を感ずべく、又金利、倉敷、品損み等による國庫の負擔も頗る大であらう。且つ實際問題としても本年は支那も米が豐作であり、其他の諸國に對しても食味、運賃等の關係から日本米を歡迎せぬから價に乘賣りせざる以上は、急速に日本米の大量的海外輸出は絕望である。又假りに多大の犧牲を拂つて之を投賣し得るとしても、本年の如き順當なる天候に惠まれる大豐作は年々引續いてあるものでないから近く兩三年の中に必ずや米の供給量不足し、外米を今日の邦米乘値以上の高價を以て輸入すべき時機至るべきを疑はぬ。然らば我が國民經濟に多大の損失をかけてまで無理に賣りいそがねばならぬ必要は何處にあるのであるか。貯藏米の金利、倉敷料、品損みであるかはた、貯藏量が米價上昇を阻止する傾向あるからであるか。此等二點に對しては別に考案が立てられぬものであるか。私は何とか別に途があるのではないかと思ふ。

偖て政府手持米海外投賣は不可とすれば、六百四十萬石の過剩米を如何に處置すべきや。米穀特別會計は今、之を購入する丈けの資金を有せぬ。假りに資金を都合つけたりとしても政府が九百萬石近い米を所藏し、其の一切の金利、倉敷料、品損みを負擔するに於ては、在來の經驗より推して、年々の損失額恐らく三千萬圓を突破するであらう。政府が正米相場師とならぬ限りは此の損は免れ得ない。而もかゝる負擔は目下の我が財政が之を許さぬと思はれる。

玆に於てか財政的負擔を可及的に輕くして米價調節を圖るべき方策が考案されなければならぬ。農務局立案として新聞紙上傳ふる所の低資融通案は正に其の一である。之によれば低利資金三千六百萬圓を融通して農業倉庫に玄米三百萬石を、又低資千二百萬圓を融通して農家に約二百萬石を貯藏せしめむとする

ものであつて、合計四千八百萬圓の低資融通をなさんとするのである。而して玄米は來年二月まで保存し以後月別販賣をなさしめ、籾は明後年まで之を保管せしむるのである。融通限度は新米庭相場一石十五圓と見て其の八掛の十二圓、籾七圓五十錢と見て同じく六圓までとするのである。

之は確かに一の良案たるを失はない。併し乍ら貯藏米全部を玄米に換算して四百萬石に止るのであつては尙過剩米二百四十萬石を殘すことになる。殊に貯藏玄米が明年二月より賣り出さるゝと云ふのであつては、之を以て米價の下放れを充分に阻止することは困難と思はれる。効果ありとしても二月迄に賣り出さるゝは農家の販賣額總量の五割であつて殘餘の米に對してはその効果が及ばぬ憾みがある。これでは米價を或度迄上昇せしむる力を有するや否や疑ひなきを得ない。

そこで私は更に徹底的に擴張し改造したる下案を主張したい。

(1) 地租の籾代納を認むること、田畑地租合計約五千五百萬圓であり、此の中三千萬圓が籾代納となるとせば籾一石七圓五十錢と見て、總量四百萬石に達する。此の籾は資金が許せば米穀特別會計にて購入し農林省の手にて管理すること。

(2) 政府所藏米二百二十餘萬石を籾四百萬石內外と交換すること。以上によりて政府所藏の籾八百萬石に達す。

(3) 別に政府は農家に低資を融通して籾四百萬石位を貯藏せしむること。

(4) 以上の外、政府は必要に應じて玄米又は籾の適當の數量を買上ぐること。

(5) 貯藏籾は米價暴騰せざる限り明後年に至る迄之を市場に出さゞること。

私が玄米よりも籾に重きを置くは籾は貯藏中の品損みが少なくよく數年の貯藏に堪へてさまで變質せざるを以てゞある。而して地租代納を認めた籾は、當該町村に責任を負はしめて之を該町村に於て倉敷料無しに保管せしむることにしたい。

以上の案は外米輸入の制限や、滿洲粟輸入制限と同時に之を行はねばならぬ。更に鮮米の內地殺到を避くる適當なる手段を取る必要あるべく、朝鮮自體にても籾二百萬石位は之を貯藏するやう考慮すべきであると思ふ。此等の方策が徹底的に行はれるならば、私は米價の此上の低落は阻止され却つて徐々に上昇し來るであらうと察するのである。

米穀法そのものゝ改造、農家の農產物販賣組織の改造につきても論じなければならぬことが多いが、今は其の暇が無い。以上に述べた私の對策中には農家の自助運動が擧げられて居らぬが、之は其の必要を認めぬからでなく急場の間に合はぬを恐るゝからに過ぎない。實はこれこそ最も重要なるものである。いづれにしても繭價や米價の暴落に刺戟されて、我が農業政策に一轉換をなすべき時節が到來しつゝあるのである。我々は米價對策を講ずると共に農村不況時代に於ける農村社會の階級的變化、土地所有權の移動、資本主義的勢力の農村侵入等につき注視するところあらねばならない。(十月十一日稿)

世界大衆文學全集

第三十五回配本　二冊（十一月）

(56) クオ・ヴアヂス

センキウヰッチ作　◇　直木三十五譯

基督紀元初年の歐洲史上の一重要楔點を捉へ、其根本思潮――希臘思潮と基督教的思潮――の衝突を、哲學的に歷史的に、著者一流のヒューマニチーを一貫して餘蘊なく剔抉した世界的名著である。此二大思潮の代表に暴君ネロと大使徒ペテロを配し、文武の勇ペトロニウス、麗はしの女性シリア、情熱の青年ヴイニチウス、奸臣チゲルリナス、怪力ウルサス、多淫のニギデアが夫々主要の役割を演じ、其間幾百の人物が飛躍して、羅馬の末路と文〻風俗を精細に叙述し、羅馬闘牛場の大虐殺、豪華極りなき宮廷生活、淫蕩亂舞逸樂の大饗宴、羅馬の大火等々が、クライマックスの幾場面を展開して應接に遑なき興味が、一言一句に躍動する古今稀有ノ大雄篇である。

(60) ソーンダイク博士

フリーマン作　◇　水野泰舜譯

（各冊五十錢）

フリーマンの「ソーンダイク博士」はドイルの「シャーロック・ホームズ」と共に英國探偵小説界の雙璧と謳はれ、世界に最も多數の讀者層を築く彗星的名篇である。

法醫學者ソーンダイク博士が、鋭犀な科學的觀察眼を以つて、迷宮に入る諸種の犯罪事件を片ッ端から解決してゆくところに、盡きぬ獵奇的趣味と偉大な科學の力とが横溢してゐる。本篇譯載の長篇「赤い拇指紋」「謎の靴跡」短篇「青色の甲蟲」「疑問の溺死」「爆發跡の死體」「ベーリング・コートの幽靈」「盜まれた金塊」は、同叢書二十餘冊五十餘篇中から、何れも代表的名作を選擇し、科學探偵ソーンダイクの全貌を窺知し得るまでに努めた。隨つて本書は博士の探偵生活が全部壓縮されてゐると言つても過言でない。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

現代日本文學全集

第二十八篇

抱月・長江・臨川・伸・孤雁集

第四十八回配本 十二月上旬

（內　　容）

島村抱月集

〔評論・紀行〕西鶴論　悲劇論　囚はれたる文藝　沙翁の墓に詣づるの記　ルイ王家の夢の跡　自然主義の價値　序に代へて人生觀上の自然主義を論ず　懷疑と告白　近松の藝術及人生　奈良より　『人形の家』とイプセンの作劇術　メーテルリンク論

〔戯曲〕清盛と佛御前　運命の丘　競爭　復活

〔小説〕山戀ひ　（その他）

中澤臨川集

〔小說〕嵐の前

〔評論〕余の態度　新藝術觀　思想藝術の超然性　感能さまざま　愛は、力は土より　湘南病牀錄　新社會主義への道　（その他）

片上伸集

國木田獨歩論　アーサー・シモンス論　イエーツ論　近代文學に對する疑ひ　思想の力　內在批評以上のもの　現代日本文學の問題　無產階級的文學批評　否定の文學　トルストイの宗教的人生觀　現代ロシヤ文學の印象　ロシヤ無產階級文學の發達　（その他）

生田長江集

〔戯曲〕圓光　青い花　天路歷程　彫刻家とその妻

〔詩〕やや老いし人の蝸牛を見てよめる　ひややかにたちつくし　白躑躅　母逝く　弘前の玩具の山鳩　月明お庭の松の　冬の日　くもり日　月光雜曲　永久の惡魔　二つの祈り　一つの元素　我は一の磁石なり　革命と復古主義

〔評論〕新貞操論　マルキシズムの阿片性　蟲のいい人類　何故鳶が鷹を生むか　（その他）

吉江孤雁集

〔小品〕綠雲（槻の森　車の男　草叢　新綠　夢　春の街　風の日　死　曇天　夏の日　渡鳥　枯林　梅雨　霜月　石地藏　蜻蛉　郊外　都會と自然　高原の村　葡萄園　墓　森の庵　冬の國　信濃高原　橡の落葉）　杜の家（杜の家　切株　松林）

〔評論〕自然美論　藝術の步道　（その他）



記念碑

貴司山治

この話は、何縣何村の事實のやうに書いてあるがそれは嘘で、實は現在の日本全體の物語である。そのつもりで讀んでくれたまへ。

一

大澤村は、冬は雪に埋れる滋賀縣の山の中の村だ。

村は五百戸、人口二千。そしてこの內、村には、故なくして卑しめられる人人が昔は百七十戸あまり、凡そ五百人くらゐ住んでゐた。十何年前、それらの人々は村の西方高地の谷間にかたまつて住んでゐた。そこを「庵谷」と稱し、一番村中からいやしめられてゐた。ところがその頃、この庵谷にラヂウム温泉がわくやうになつた。

庵谷は百五十戸までが小作であつた。猪狩伊兵衛といふのが傳來の、部落の統領で大地主であつた。百五十戸が殆んど全部猪狩の小作であつた。猪狩は小

作料でまるまると太つてゐた。奴は庵谷の人間だといはれるのがいやさに、本宅を京都にうつし、下鴨に、でッかい西洋建築を建て、娘を×の紋のついた女學校へ通はせてゐた。

ラヂウム温泉は、勿論、猪狩の地面にわいたのだ。猪狩は京都からわざ〳〵「博士」を檢分によこした。

博士の、試驗の結果、世界第何番目かの放射能何とかを含むラヂウム温泉だといふことが新聞などにやかましく書き立てられた。そのことが、一年とたゝない間に、庵谷の人間にとつては死活の問題と變じた。

といふのは地主猪狩伊兵衛は、庵谷の持ち地全部を京都で他人に賣り拂ひ、その「他人」共が庵谷温泉土地株式會社といふものを「設立」した。そしてその會社から、不意に百五十戸の小作人に向けて、「所有權移轉通告土地返還請求」の内容證明狀が續々と來た。

勿論、大騷ぎとなつた。約三百人の人間が、折柄の雪を踏んで山を下つた。東海道に出て、瀬田の唐橋を渡り大津に出、そこから汽車で京都の猪狩の邸へのりこんだ。

猪狩は、村方に無斷で土地を賣つたのは惡いが、詫びにかへて、では小作人一同、庵谷の者たちに、金一萬圓を出す、といつた。

一萬圓！　押しかけた連中は、一萬圓におどろいたのだ。先祖傳來の小作地に離れる代りに、めい〳〵の懷中へ、今まで夢にもみたことのない大金が——一人當り平均六百六十圓づゝ——はいるのだ。一同はそれでおさまつた。

けれども、欺されたといふことがわかつたのは、それから三年とかゝらなかつた。みんなは、耕作をやめると、何もすることがなかつた。庵谷にゐては、暮らせなかつた。

「もし困るやうなら、京都へ出て猪狩の工場へ使つてもろたらどないだ。その世話ならわしがしたげる」

自作の筆頭第一で、猪狩家の小作管理者をしてゐた坪井善五郎がかうして約五十家族の部落民を京都へ追つた。かれらは、京都へ出て、深草練兵場の裏手にある猪狩伊兵衛のアニリン染料工場で咽びながら働いた。

大澤村には百戸ばかり殘つた。

庵谷に入りこんだ庵谷温泉株式會社の上方や人足は、かれらのみてゐる前で、もとかれらがわが肌の如く何十年來大事にか

けて手を入れて來た田を、容赦もなく掘り起した。

だんだら染の棒をかついだ男どもや、目つきの悪い爺ゲートルの男などが毎日、毀されてゆく田の畔道を飛び歩いた。田はまたゝく間に道路となり、住宅地と變つた。山林は伐り拂はれて、そこには、洋館の建物が建つた。溫泉旅館だ。

元村（庵谷よりも東海道筋に近い下手の、大溪村の中心地がさうよばれてゐた。）の方には、飲食店や、雜貨店が出來、一二軒の銘酒屋までができた。それらは他所者の勞働者や「會社の人間」によつて繁昌した。

庵谷の者たちは、たゞぢつと居食ひをしてゐた。會社は、居殘つてゐる者たちに對して、その焚きつけにもならない藁屋根の家と、家の建つてゐる地面とを、時價の倍額位で買收し始めた。その又周旋を坪井や、その外の、現にまだ耕作をつゞけてゐる自作たちがやり始めた。

それで、最後の家と地面を賣り拂つて京都へ、又はよその村へ、逃れて行く者がふえて、今は元の小作は八十戸ばかりとなつた。

八十戸の農民は三年目に、凡そ、猪狩から貰つた六百六十圓の手切れ金を食ひつぶしてゐた。

元村は小さな町となり、庵谷には七軒の立派な溫泉旅館が建つた。草津と大津から乘合自動車が元村までくるやうになつた。會社は自動車の通る路を元村と庵谷の間につけ始めた。

「庵谷に七八十軒の×××の家がある間、折角のラヂウム溫泉へも、お客はこんだらう！」

かういふことが元村あたりでいひふらされた。しかしほんとうはラヂウム溫泉が發見されたゝめに百五十戸の小作が全滅しかけてゐるのだ。

大體、ラヂウム溫泉を發見した「博士」の奴がこの災難をまいて行つたんだ。「博士」が何の木につく虫だかは、今ではみんなにわかつてゐる。

「相當の立退料を出すから、共存共榮のため、何とかならないだらうか？」

會社は八十戸に對してから申込んできた。成程多分の立退料を貰つてよそへ行つて小商賣でも始めれば食つて行けるだらうし、會社も部落民がゐなくなつて溫泉地が繁昌するだらう。

しかし、それでは部落民は明らかに「差別」されたのだ。偽

爭の取引なのだ。摑み、鬪はなければならない。

さうした決意をしたのが、自作の中に六人、舊小作の中に四十一人あつた。

「わしらは四十七士だ！」

そして庵谷の四十七士は、大津の滋賀縣水平社本部をみつけ出し、そこに聯絡をとつて、大澤村支部を作つた。

――これに加はらなかつた連中は、立退料千圓、田一反五百圓（その頃の時價は二百圓だつた。）の買收値段に眼がくらんで會社と妥協し、仲間を見すてゝ、村を去つた。

殘つた連中に對して、會社は元村の東の島地といふ草津よりの小字に百町歩あまりの水田を買ひこみ、「庵谷の立退料を三百圓出した上、島地にめいめい百坪の宅地をたゞでやる。そして一戸につき一町づゝの小作を三十年契約でさせる。」と申込んで來た。

會社の代表者は二人づれで「滋賀縣水平社大澤村支部」といふ板看板のかゝつた轟榮吉の家へ訪ねてきて、

「われわれがあんた方の生活について心配し、決してあんた方を差別してゐないといふ證據に、われわれは進んで三十年間もの地主小作の親密な關係をあんた方と結ばうとしてゐる。これでもおわかりになりませんかね。」

四十七人の間に、この會社の案は、大きな問題となつた。三十六人までが會社の申込みに應じようといつた。あとの十一人が反對した。

「庵谷を立退かさうといふ案である限り、どないに變つた案でも、差別問題ぢや。」

かういひ張つて、反對をとなへた十一人は、三島、黒瀬、大澤、小牧、石川等々、みな三十代前後の働きざかりの、中堅分子であつた。そして、この十一人が小作中の一番貧乏な仲間であつた。

「お前らは、家族の事情が違ふから、そないに頑固にいへる。わしらは双親に子供四人の大家内をひきつれとる。どないにして食うて行けるかい。それを考へてくれ。」

支部長の轟が涙を浮かべて十一人にいつた。

「わしちア、九人の家内ぢやぜ。上の娘を大津イおやまにでも賣れば食ひつなげると思て、こないだ元村の醉やんにいうてみた。十四では早やすぎるツちうて、物にならん。この先きお前

ら偸合うて生きて行く積りや。わしらア、早う元の百姓せんと今に餓ゑ死ぬだけぢや。」

岸田のおやぢは洟をすゝつた。

みんな、しいんとなつてしまつた。みんなうなだれてゐた。ひとり、頭を立てゝゐた反對派の三島は、あたりを見渡して靜かにいつた。

「ようわかつた。お前らのいひ分を無理とア思はん。又思へん。足かけ三年越し、よう頑張つてこれまで來た！　わしア、しかし、まだこの上やる積りぢや。みなもいふやうに、家内の事情が違ふだらう。わしア、女房とお母あとの三人きりぢや。土くうても、世の中の奴らに、わしらを××といはさんやうにしてみせる！　もう討論終局ぢや。みんな會社の案に同意する者は島地へ移つて、元の百姓になつてくれ。一人でも、二人でもわしと一つ氣のものはここにのこれ！」

「のこる！」

黒瀬と大澤がすぐに、一緒に、答へた。十一人組だ。

十一人組の、他の連中も一様に顔をあげた。そして靜かに、異口同音にいつた。

「のこる。」

三島は轟の方を視た。

「支部の旗をくれ。」

「うム……」

靜かな動搖の中で、轟の持ち出してきた支部旗が、荊冠旗が——三島の、十一人組の、手に渡された。だれからともなく、すゝり泣いた。

二

かくして、庭谷には十一軒がのこつた。十一軒はしば〳〵、會社の土方たちに襲撃されては犬のやうに亂鬪した。侮辱の言葉をあびせられるたびに、十一人の男たちは束になつて會社へねぢこみ、大勢の土方たちに叩き伏せられて、怪我をした。

滋賀縣本部は、野洲、甲賀、蒲生、愛知の各郡支部から三百人を大澤村に動員して、庭谷の會社事務所を占領した。

「侮辱した土方を即時解傭し、十一人に負傷させた見舞金を出し、謝罪廣告を新聞に出せ。でなければラヂウム温泉のすべての建物を破壊する。」

土方は逃げてしまつてゐた。捕へられた事務所主任や、事務員たちは生きた顔色をしてゐなかつた。しかし、土方を逃がしたといつて激昂した三百人の一部分は既に早く、事務所の窓や建具を××し始めた。

大津と、草津、守山等から、五十人の巡査が庵谷へくりこんできたのはその日の夕方であつた。三百人の示威隊は引揚げたあとだつた。夕闇の中に半つぶれにこはされた事務所だけが白くのこつてゐた。

巡査は十一軒の總檢擧を行ひ、十一人の支部員全部を、繩つきにして草津へつれて行つた。

滋賀縣本部は一齊に草津町へ大衆示威を行つた。京都本部は、庵谷温泉土地株式會社本社と、いつの間にか、そこの監査役におさまつてゐる猪狩伊兵衛の邸宅とに示威隊を送つた。

十一人の内三島、黒瀬、大澤の三人が大津へ廻されて膳所監獄に二ケ月ゐた上「刑法第二百六十條」とかいふ奴で十ケ月の懲役に處せられた。

三人が一年ぶりに庵谷へかへつてきた時、元村には、自動車のガレーヂや瓢簞の料理屋が建ち、三味線が鳴つてゐた。新開地らしい空氣がたゞよつてゐた。

そことは反對側の谷にくつついたわづかな日陰の廣地に十一軒の部落民の家が時世におき忘れられたやうに建つてゐた。それは全く時世におき忘れられたものに相違なかつた。世界戰爭のあぶくに浮んで日本の資本主義が氣狂ひのやうに飛躍しつつ、あらゆる方面に及ぼし與へてゐる「好景氣」の影響から、その一端は完全におき忘れられてゐるしろ物であつたから。

三

それでもその年の京都にひらかれた水平社全國大會へは、旅費を工面して大澤支部からは、三島と大澤の二人が荊冠旗をかついで出かけた。

この大會へ、同志社大學の講師で社會主義者だとの評判の高かつた濱本千藏がきて祝賀演説をやつた。

二人は村へかへつて大會の模樣をつぶさに同志に報告した。

翌年の夏、はつきりいへば一九二一年（大正十年）だ。三島は盆前の共同墓地の大掃除にやとはれて出かける途中、温泉町の、バラスの敷かれた廣い坂道を、浴衣がけでステツキをふり

ふりくろ中年の男を見て、それが去年の大會で祝辭演說をやつた濱本千藏であることを發見した。

「濱本さん！」

三島は、思ひ切つて頰かぶりをとり、よびかけた。

「濱本さんでせうな。わし、この村の水平社の者です。」

濱本はステッキをふるのをやめて、立ち止つた。

「さうですか。どこです？」

ときいた。

「そこです。」

と三島は谷の日陰にかたまつてゐる十一軒の小屋のある方を指した。

「わし、去年の大會へ出ましたんで、あんたの顏を、覺えてゐましたよ。」

「さうですか。僕、そこの滴翠閣といふ温泉宿にとまつてゐるんです。遊びにいらつしやい。」

「ありがたう……」

三島はお辭儀した。濱本は先きへ大股に歩いて離れて行きながら、ふと思ひ出して又立ち止まると、きいた。

「君、何といふ名前です。」

「わし、三島茂吉です。」

濱本はうなづいて、だん〲遠ざかつて行つた。三島は暫く立つて見送つてゐた。

何故、三島が濱本に逢つたことを、わざ〲年號を入れて書いたか？　それにはわけがあるのだ。

濱本は遊びにこいといつたが、三島にはそんなヒマがなかつた。こまかな、安い仕事の日傭人となり、田の草とりの作男となつて、三里も五里も先きまで出かけて歩いた。あの冬中の何十日もの雪を思へば今の內に一所懸命働いておかねばならない。

濱本に逢つた日から一週間目に雨が來た。夜、三島が縁の上にねころんで體をひやしてゐると白い浴衣がけの男がのつそりと、小屋の入口にあらはれた。

「三島君の家はどこです？」

三島は、その聲でそれが濱本だと知ると、とびおきて、がさがさくらがりを手さぐりに、着物を着ながら、

「わしです、こゝです。うちはデンキがないので、くらがりな

んで、大澤の家へ行きませんか、先生！」

三島と、濱本は、電燈のある（十一戸の内、電燈のあるのはそこだけだつた。）大澤虎松の家へ行つた。

大澤の家で濱本と三島と暫く話してゐる内に、大澤が知らせて廻つたので、七人ばかり、男が集つてきた。皆うすぐらい十燭の電燈を中にして車座になつた。

濱本は蓙の上に坐るのが痛さうに、兩足をなげ出して、もう三島を相手にかういふ議論を始めてゐた。

「水平運動はまもなく必ず行詰ります。」

「行詰る？　何故ですか」

「第一、水平運動は差別撤廢といふごく一部分的な封建的遺制の打破にしかすぎない。この目的は十分に達せられると思ふし、現に達せられつゝあるやうだ。その限りにおいて水平運動は正しい。しかし、諸君の生活の全體は、決して水平運動によつてよくなりはしない。諸君が水平運動によつて萬事を解決しようとしたならあと三四年で行詰る。水平運動では結局水平運動の最初の目的だけしか解決されなかつたといふことがわかるだらう。だから今から方向轉換の必要がある。」

みなは十燭の電燈の光りの下に、日にやけて頬ぼねの出た疲れた顔をおの〳〵緊張させながら、濱本の方を見守つてゐた。

「よくわからないやうだね。ぢや一問一答で行かう。一體諸君は何者か？」

濱本は皆を見廻した。

「わしらは、世間の奴らに××だといはれとる人間ぢや。」

大澤が沈んだ聲で答へた。

「たつたそれだけか？　その外には？」

「……貧乏人だ。」

石井か、だれかゞ答へた。

「貧乏人、間違ひなし。そして、いかなる種類の貧乏人か？」

濱本は眼を光らして皆を見廻した。

「…………？」

「？——」

「ではきくが諸君は小作人か？」

「違ふ！　わしらには、田も畑もない。」

三島は古い怨みを思ひおこして答へた。

「さうだ。さういふのを、農業プロレタリアートといふんだ。

日本語でいへば諸君は農業勞働者だ。この階級が農村では一番下の階級だ。諸君の上には、貧農階級がある。五反から一町迄の小作をやつてかつ〲に食つてゐる階級のことだ。この二つの階級が、農村の八割を占めてゐる。即ち米は……」

と濱本は突然大きな聲を出した。

「——米は、貧農と、農業勞働者によつて作られるのだ。地主はふところ手をしてその五割をロハでうばひとる。この地主階級は下は三町五町から上は何千町歩の土地を持つてゐて自分は働かない。奴らの外に二三町の土地を持つて自作する勤勞地主階級がある。これは毒にも藥にもならないからすてておき、われらにとつて、農村から、大地主階級を片づけてしまはない限り、われらがうまく暮らせる道理はないのだ。小作する土地をさへうばはれて一番下積みになつてゐる諸君ら農業勞働者に至つては、まづその土地を地主から獲得しなければならない。つぎに五反百姓はもう五反、まづ一町歩の土地を地主から獲得しなければ生活ができない。そして、折角耕作しても、ロハで五割とられては立ち行かないから、小作料の半減を地主に要求しなければならない。これらの要求は戰はねば獲得できない。戰ふための組織として農民組合が入用だ。全國の、貧農と、農業プロレタリアートが打つて一丸となつた日本農民組合を結成し、共同の綱領をかゝげ、日本中に共同戰線を張りめぐらして、あらゆる農村で、組合は地主に向つて、要求を叩きつけ、容れなかつたら小作料不納同盟で戰ひ、大衆行動をおこして、地主の當然の對抗手段となる「土地取上げ」「立入禁止處分」等と鬪爭するのだ。この鬪爭を起す農民組合の結成こそ貧農の前途をきりひらく唯一の道だ！」

みなの顏はこはばつたまゝ宙にぶら下つてしまつた。多くの眼玉はぎよろりとなつて、叩きつけるやうな聲の飛び出す濱本の唇に向つてそゝがれてゐる。

「——それからだ。農村の地主階級といふものは單獨に橫暴を極めてゐるのではない。かれらは都市の資本階級と密接に結びついてゐる。都會の資本階級はすべての工場を所有し、何十萬何百萬の勞働者を使役して莫大な生產品を作り、それを商品として市場で賣買し、その利益を全部獨占してしまふ。即ち地主と貧農の關係が都會では資本家と勞働者の關係だ。で、都會では勞働者が、勞働組合を作つてストライキを以て資本階級に對

抗し、賃銀値上げ、その他の勞働條件改善の要求を叩きつけてゐる。今、東京、大阪方面の勞働運動は火のやうに盛んなのだ。大阪では毎日二三件の新らしいストライキがおこつてゐる。そして八九分といひたいが九分九厘までは勞働者が勝つてゐる。農民運動は、この勞働運動にずつとおくれてゐる。これを進めて、勞働運動に結びつけ、都會と農村とで、無產大衆が共同の×——即ちくはしくいへば××××××と戰はなければならない。」

濱本は、腕をつき出して眼を光らせたが、ふと咽喉の奧で咽ぶと、俄かに、言葉を切り、ハンカチを出して、唇をおさへた。そして、咳をした。ハンカチには血がはき出された。大澤はびつくりして、水をくみに走つた。あはてて水を茶碗にくんで引返してくると濱本は疊の上に倒れてゐた。三島や小牧、黑瀨などが濱本の背中を、左右から、とりまいて、なでさすつてやつてゐた。

四

翌日、雨の中を三島、大澤、黑瀨の三人が島地の轟たちを訊ねたのは、二年ぶりだつた。

三人は轟の家で半日話しこんだ。きのふの濱本の話をだ。話す三人の胸には、世界がきのふ迄とは違つてゐた。轟たちとの分裂以來の氣まづさも、もう問題でなかつた。

「ようしかし、その、農民組合の話をしにきてくれたな。これといふのも、お前らがあれから三年ごし、水平運動に苦しみぬいた揚句のはてに、この道がわかつたんぢや。もし農民組合がうまく行つたら、お前ら十一人はわしらの恩人ぢや。」

「いや、うまくやらいでか！……わしらの恩人は、わしら十一人ぢやない。濱本先生ぢや。氣の毒にゆうべ血を吐いて、滴翠閣でねてござる。」

「さうか……」

濱本の血を吐いたことに話がふれると、四人は言ひ合はしたやうに、くみ交はしてゐた酒杯を下においた。

「すまん、こりや、やめる！」

轟は、壁に酒杯をなげつけた。

「勿體ない。酒杯はめぐな——わしもやめる。」

三島たちも、相手を制めながら、酒杯を片づけた。

「みな、よんでくるから、待つとつてくれ。」
轟は丸裸の上に雨裝をつけて、笠のひもを頤の下でくゝりながら、雨の中へとび出して行つた。

午後は、轟の家へ二十何人あつまつてきた。無論みな昔の庵谷の仲間だ。轟の家へはいり切らない人数は隣りの岸本の家へあつまつて、そこでのがや〳〵といふ話し聲が雨の中をこえて轟の家まできこえてきた。

夜に入つても人々は散會しなかつた。

庵谷から來た三人が、島地の代表六人と一緒に庵谷へ出向いたのは夜の十時をすぎてゐた。もうその時はかれらの間に「大澤村農民組合」が生れてゐたのだ。

庵谷の滴翠閣には、水枕に頭を埋めて濱本がねてゐた。蓑笠でやつてきた九人の連中は、旅館の仲居たちの眉をしかめさせながら、どや〳〵濱本の部屋に上りこんだ。

仲居たちは階段の下に五六人たまつて、
「何やろ、あの連中、何しにきたんやろ。」
と、懸念だつた。土間には妙な匂ひのする滴だらけの雨裝が澤山ぬぎすてゝあつた。

「大澤村農民組合、萬歳ッ!!」
「萬――歳ッ!!」
「萬――歳ッ!!」

突然、二階の、濱本の部屋の方から、たゞならぬ叫び聲が起つた。仲居たちはうろたへて逃げ、男衆や料理場の連中が血相をかへて、階段をかけ上つて行つた。

濱本の部屋では、浴衣のねまき一枚の濱本が、頬骨のとび出した大勢の連中にとりまかれて、蒲團の上に坐つてゐた。衰へた青白い顔に微笑をみなぎらし、何か非常にこの場の情景が氣に入つてゐるやうであつた。

「なアみんな、おやア一つ、おれが、農民鬪爭歌といふのを敎へようか。……うたふから、覺えるんだよ。いゝかい。」
と濱本は舌なめずりして、みんなの顔を笑つて見渡しつゝ、思ひがけぬいゝ聲で草津節を唄つた。

××××××××××
年貢やらたきや野垂死に

今年三割來年五割
末は小作のつくり取り

農民組合知らんやうな奴に
だれがお嫁に行くものか

九人の男たちは、あつけにとられてきいてゐたが思はず拍手した。

「何だ、何だ？……」

濱本は廊下に立つてゐる宿の男たちにとがめるやうな聲をかけた。

三島が、砂利の坂道で濱本に出會つたことをわざ〳〵作者が年號を入れて書いたのはこのわけである。二人が偶然出會つたのが動機となつて（動機といふ言葉を見落すな、主體は既にあつたのだ。）即ち一九二一年八月（大正十年）——都合では好況時代の終末期に、ストライキが花火のやうに無數に日毎に爆發してゐた年——そして、日本の勞働組合運動が畫期的に飛躍した年——に、滋賀縣の奥の、おき忘れられた山の中では、雨の土砂降りの夜に、農民組合が生れたのだ。

五

七年たつた。この七年間に農民組合は日本全國にひろがつた。滋賀縣では大澤村農民組合が中心となつて、鬪爭によつて、全縣下に三十いくつの組合が作られ、それが悉く左翼の日本農民組合に結集し、その縣聯合會も生れた。それは旋風のやうな發展であつた。

そして、第一次普選の年が來た。

一九二八年の普選は「我國最初の普通選擧」として意味があるのではない。では、どういふ風に意味があるのか？

前年の冬、日本のプロレタリアートが、漸くセクトを脱した○○××黨を持ち得て、「合法黨」としての勞農黨を表面に立てるといふ過渡的な形態でではあつたのだが、この選擧を機會として公然の舞臺に乗り出してきて煽動宣傳を開始しはじめたといふことにある。

大澤村農民組合は、地主たる溫泉土地株式會社を相手に七年間に長い戰ひを三度やつた。そして二十幾人の犧牲者を刑務所へ送つた。その七年間の惡戰苦鬪物語はいつか又別に書かう。大澤村農民組合は戰鬪の中に伸び、力を強め、滋賀縣全體の組織運動の原動力となり、三島や大澤や黑瀨は職業的組織者（オルガナイザー）となつてゐた。

いよ〳〵選擧となると、勞農黨支部聯合會の書記長になつてゐた三島は、本部へ猛運動をして、滋賀縣第×區の候補に、病氣でねてゐる濱本千藏を立たせることに成功した。

選擧期間中、濱本は三分の二はねてゐた。一同演壇に立つと、三日は起きられなかつたからだ。

濱本千藏の選擧區では、恐ろしく「×活動」が目立つた。演說會場には必ず〇〇××黨の傳單がまかれ、あす演說會があるといふ村へは、人馬も通へぬ雪をおかしてどこからどう行動隊員が忍びこんで行くのか戸毎にビラがまかれ、立木、電柱のありとあらゆるところは傳單がはりつけられた。

大澤村農民組合の男たちが中心になつてこの秘密の活躍をしてゐるとにらまれ、彈壓は當然こゝに集中してきた。中には縣察の留置場でひどい拷問にかゝつてそのまゝ起てないものもできた。演說會への官憲の壓力は二月に入ると恐ろしく強くなり、辯士は「われらは何を――」の一と言で中止を喰ひ「諸君、かくの如き×……」で忽ちわらぢばきの警官どもに引き去られ、雪の中を三里も五里も、繩つきで、警察から警察へたらひ廻しにされて行つた。

投票日間近かには、司會者も辯士も總檢をくらひ、しまひには候補者の濱本自身まで持つて行かれた。

しかし、隊員は奮鬪した。

ある山の中の、雪に埋もれた村での演說會に、臨監がくるのがおくれた。東京下りの一人の辯士が逸早く、百人ばかりの大衆に向つて、演壇にのり出し、

「百姓諸君！ 十三個のスローガンつてのを知つてをるか？ けふはお前ら同志に十三のスローガンを話さう！ これは勞農黨のかげにかくれて、指導してゐる××のスローガンだぞ。飛び切り上等だ！ 社民や、日勞黨には持ち合はせてをらん。どだいあいつはイカモノだ。ひとりわが勞農黨こそ、わしら小百姓の利益のために死力をつくす黨だ。何故なればその背後

に、眞に勞働者農民の×××ために××××××を×××とする〇〇×××の指導がついてるからだ。きけ！　おれたちが、地主と資本家の政府に向つて……」

かれはテーブルを叩きながら、その十三のスローガンをかゝげる×のことについて話して行つた。そしてまつさきにその×がかゝげる「大土地×××してそれを貧農に×××」といふスローガンを説いた。この村には鬪爭經驗があつた。聽衆は一齊に拍手し、立上つた。そして遂に勇敢なこの辯士は大衆にとりかこまれた會場の中で、音頭をとつた。

「〇〇××××××!!」

「わーツ！　萬――歳!!」

かれらは叫んだ。選擧前に、大衆團體の中で、×の萬歳が叫ばれたのはこれが初めてゞあつたらう。

しかしこのことは知れずにはおかなかつた。煽動者の若い辯士は大津で捕へられて留置場に入れられ、三・一五となる迄、遂に出てこなかつた。

瀧本千藏は當選した。この出來事はすくなからずブルジョア階級をおどろかせた。

しかし、選擧がすんでも雪はふりやまなかつた。壓迫の手もやまなかつた。縣警察本部は巡査と特高を組合はせたいくつもの部隊を作つて、縣下農民の大檢擧を開始した。

住居は××され、老人、女、子供まで繩で縛られて拘引された。大澤村では島地の組合員の家は一戸に一人の家族も殘らなかつた。家内中持つて行かれて、あとに殘つた中風の老人は、××××××××、自殺をした。自殺者はこの外にも三件ほどあつた。皆××××××××に恐怖と憤激のあまり、首をつるしたり、井戸へはまつたりしたのだ。

これが三・一五前の光景なのだ。そして三月十五日には、一旦かへされてゐた庵谷と島地の連中は、またねごみをおそはれ、自動車にねぢこまれて、守山へ、草津へ、しまひには大津市へ運ばれて五十日も六十日も拘留された。庵谷の三島、大澤、黑瀬、小牧、石川、山口、花井、前坂、山根、小川、山内の十一人は皆起訴された。

滋賀縣下の農民組合はさうした空氣の下で一村一字、全部つぶしに、つぶされて行つた。各組合の目星しい男たちは皆起訴され、あとから／＼膳所の刑務所に送りこまれた。指導者を失は

れたあとの戰線は全縣下に亘つて崩壞して行つた。

六

春はなか〳〵こなかつた。庵谷の十一戸は七戸に減り、七戸が「戸」などゝはいへる代物でない小屋がけにわびしく住んでゐた。老人と、子供と女とだけで、わづかな地坪に芋をうゑたり、麻を育てたり草履を作つたりして露命をつないだ。そこへ刑事と巡査が毎日のやうに見廻つてきた。小川のおかみと、大澤の女房と、黒瀬の妹とが三人一緒にゐる時、元村駐在所へ引立てられた。

「當分の間二人以上集つてはならん。」

島地の方もそれと同じ状態だつた。

かくして、大澤村はもとの「平和な村」となつた。

四月になると、庵谷の温泉土地會社は、新聞に大々的な廣告をして、京都大阪方面の客を吸集した。

七軒の温泉旅館は夏に入つて客が滿員となつた。

夕方になるとみがいたやうに頭のはげた「お上品」な老人が若い女を二人も三人もつれて滴翠閣の門口から出てきたり、丸髷を結つた藝者が乳の下に短いヒゲを生やした太つた男とくつついて歩いたり、洋裝のお河童娘が三人も四人もぞろ〳〵手をつないでお母さんらしい「ご婦人」をとり圍んで山の方へ出かけたり――

それらの「お客」たちは、路上で互ひに挨拶をとりかはした。

「ほんまにこゝの温泉はよろしまんなア。」

「それに涼しイて、よろしアんな、極樂だす。」

會社直營の西洋料理屋ができ、そこの二階からは綠色の玉つき臺のはしがみえ、みなれないぞろりとした若い男が、キューをさかさに立てゝ窓から外をみてゐたりした。自動車は毎日のやうに坂道の砂利をかみながらブーブーブー行つたりきたりしてゐた。

山も谷も濃いみどりにつゝまれた。谷といふ谷、畑も木もがしんとした黒いやうな一樣の綠となり、その中に新しい建物が包まれた村の夕方の光景は、こちら側の谷の日陰にわびしく一とかたまりとなり、ここだけシミのやうに昔の庵谷をのこしてゐる七戸の小屋の中に住む女や老人にとつて一つの烈しい感情

と階級意識をより多く持つやうになれば初期の改革運動者が次第に押され押されて、かういふデマゴーグになる、それだけ一般運動の水準も高くなりつつあるのだといふ反證を示したに過ぎない。

黒い奴隷船

今日アメリカに黒色地帯を形造つて散在する千二百萬人の「黒んぼ坊」達は、次第に階級的に、人種的に、アメリカの大ブルジョアジーと抗争をする線へまで押し寄せて來たことは事實だ。

それは、この七月一日、ロンドンで世界中の黒人種の赤色大會を開かうとして、マクドナルド内閣からはねつけられ、七月七日夜ハンブルグでその會を開いて、大いに氣勢を擧げたといふ一つの現象だけをとつて來てもわかるのである。

――が、かう云つてしまつただけでは、恐らく讀者には、黒人種の運動といふものはどういふものか、一體黒人種そのものがどういふ生活をアメリカでしてゐるかさへも判明しないことと思はれるから、ここに簡單な研究を試みたいと思ふ。

歴史的に云つて、黒人種が奴隷としてアフリカからアメリカへ賣り渡されるやうになつたのは、アメリカの建國當時白人種間に勞働力のひどい缺乏があつたためだとなつてゐる。當時は、ひどい工面をしてヨーロッパや英國から人間を入れたもので、ウェルスなどの云ふところによれば囚人迄をどしどし送りこんだこともあるさうである。だがそれでも足らないので、一六一九年、最初のアフリカ沿岸から連れて來た黒人の船が、南方綿や米や煙草の大地主や、北方の伐材業や造船業に從事した新興資本家の需要に應じて、アメリカへ歸つて來た。それから、一八六三年迄、この不思議な人身賣買はずつと續けられた。

この奴隷船といふのは、奴隷の數が、つまりその需要供給の市場が多くなるに從つて、最初のゆとりのある積荷狀態から惡化し、黒奴を全船中鐵鎖で集團的に繋いだまゝ、一寸も身動きをさせなかつたところから、その惡臭が甚だしく、五浬も遠くからの奴隷船の臭ひが嗅がれたといふほどである。又、奴隷を載せた船は、あまりにも汚くて、大概四回か五回のアフリカ行きののち、それを破壞してしまはねばならなかつたさうだ。この商法でアメリカへ賣り込まれた黒人奴隷の數は、十八世紀の終末から十九世紀へかけて、奴隷販賣業の繁榮期には、一箇年十萬人からの取引があつたといはれてゐるから、前後二百五十年、その間、アメリカへ轉賣された數は想像もつかないほど夥しいものに相違ない。かうして、リンカルンの解放令の出た一八六三年現在には、アメリカ中に住んでゐた黒人總數は、四・五〇〇・〇〇〇人と云はれ、もつと委しい内譯をすれば、ニグロ（全黒）三・八五三・四

六七人、ムラト（牛馬）五八八・三六三人（合計四・四二一・八三〇）といふ當時のアメリカ人口の七分一を示すほどであつた。

何故に奴隷賣買業は斯くも繁昌したものか？——莫大な利益があつたからである。

スピーアスの『アメリカ奴隷賣買』によれば、『投資事業としてもこれほどの利益のあるものは空前であつた』といふことで、當時、三四百人の奴隷を收容し得る船を造るには、一艘三萬五千弗で上がつた。それが一航海するごとに三萬弗から十萬弗の利益を收め、一艘大概四五航海はやつてのけたものである。——そして、原料は、殆ど只も同然だつた！

これらの奴隷の市場は、黒人著述家デュボア博士によれば、主として、ニュー・ヨークにあり、ボストンとポートランドもこれに劣らぬ取引場があつたさうである。一定の買手がついてから、この鐵鎖に繋がれ、鞭で柵の中から追ひこくられた不氣味な商品は、どこへ行つたか？——主として、南方アメリカ諸州の大農耕地へ送られたのである。

北方アメリカ諸州では、農工等も進歩的で盛んではあつたが、ごく少數の黒人を家僕として採用した以外には奴隷を集團的に使ふといふことは稀であつた。北方のアメリカ人は、黒人奴隷を使役する代りに、その取引から莫大な富を得たのである。南方の諸州は地理的に北方のそれと大部趣きを異にして、甘蔗、米、煙草、棉花などといふ農作物を大規模的に生産してゐた。そこの大地主の富は、それらの收穫のどれをなりとあてて他地方へ賣り込むことにあつた。黒人奴隷は、この農園や耕作地に働いたのである。南北戰爭勃發當時の統計によると、米の耕作に從事した奴隷は總數の5％、麻2％、甘蔗6％、煙草14％、棉花73％といふ風に分布されてあつた。それから、一七九二年に發明された棉紡紡織機の輸入は、黒人奴隷を棉布工業部門へ驅り立てた。

これらの大農耕地は、アメリカのどの州にあつたかといふに、ヴァージニア、南北兩カロライナ、ジョールジア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、ケンタッキー、テニッシイ、アーカンソオ、ミヅーリ、テキサスの十三州であつた。いづれも南方アメリカ諸州で、そこへ黒人奴隷を集中した理由は、一は氣候とか食物とかの地理的關係もあるが、根本の原動力は、産業經濟關係の制限性によるものである。

この奴隷、最良品で、時價正に千八百弗！

紙の上の解放運動

一個千八百弗以下に取引された四百五十萬人の商品は、はたして自

と階級意識をより多く持つやうになれば初期の改革運動者が次第に押され押されて、かういふデマゴーグになる、それだけ一般運動の水準も高くなりつつあるのだといふ反證を示したに過ぎない。

黒い奴隷船

今日アメリカに黒色地帯を形造つて散在する千二百萬人の『黒ん坊』達は、次第に階級的に、人種的に、アメリカの大ブルジョアジーと抗爭をする線へまで押し寄せて來たことは事實だ。

それは、この七月一日、ロンドンで世界中の黒人種の赤色大會を開かうとして、マクドナルド内閣からはねつけられ、七月七日夜ハンブルグでその會を開いて、大いに氣勢を擧げたといふ一つの現象だけをとつて來てもわかるのである。

――が、かう云つてしまつただけでは、恐らく讀者には、黒人種の運動といふものはどういふものか、一體黒人種そのものがどういふ生活をアメリカでしてゐるかさへも判明しないことと思はれるから、ここに簡單な研究を試みたいと思ふ。

歴史的に云つて、黒人種が奴隷としてアフリカからアメリカへ賣り渡されるやうになつたのは、アメリカの建國當時白人種間に勞働力のひどい缺乏があつたためだとなつてゐる。當時は、ひどい工面をしてヨーロッパや英國から人間を入れたもので、ウエルスなどの云ふところによれば囚人團をどしどし送りこんだこともあるさうである。だがそれでも足らないので、一六一九年、最初のアフリカ沿岸から連れて來た黒人の船が、南方綿や米や煙草の大地主や、北方の伐材業や造船業に從事した新興資本家の需要に應じて、アメリカへ歸つて來た。それから、一八六三年迄、この不思議な人身賣買はずつと續けられた。

この奴隷船といふのは、奴隷の數が、つまりその需要供給の市場が多くなるに從つて、最初のゆとりのある積荷狀態から惡化し、黒奴を全船海中鐵鎖で集團的に繋いだまゝ一寸も身動きをさせなかつたところから、その惡臭が甚だしく、五哩も遠くからの奴隷船の臭ひが嗅がれたといふほどである。又、奴隷を載せた船は、あまりにも汚くて、大概四回か五回のアフリカ行きののち、それを破壞してしまはねばならなかつたさうだ。この商法でアメリカへ賣り込まれた黒人奴隷の數は、十八世紀の終末から十九世紀へかけて、奴隷販賣業の繁榮期には、一箇年十萬人からの取引があつたといはれてゐるから、前後二百五十年、その間、アメリカへ轉賣された數は想像もつかないほど夥しいものに相違ない。かうして、リンコルンの解放令の出た一八六三年現在には、アメリカ中に住んでゐた黒人總數は、四・五〇〇・〇〇〇人と云はれ、もつと委しい内譯をすれば、ニグロ（全黒）三・八五三・四

六七人、ムラト（半黒）五八八・三六三人（合計四・四二一・八三〇）といふ當時のアメリカ人口の七分一を示すほどであつた。

何故に奴隷賣買業は斯くも繁昌したものか？——莫大な利益があつたからである。

スピーアスの『アメリカ奴隷賣買』によれば、「投資事業としてもこれほどの利益のあるものは空前であつた」といふことで、當時、三四百人の奴隷を收容し得る船を造るには、一艘三萬五千弗で上がつた。それが一航海するごとに三萬弗から十萬弗の利益を收め、一艘大概四五航海はやつてのけたものである。——そして、原料は、殆ど只も同然だつた！

これらの奴隷の市場は、黒人著述家デュボア博士によれば、主として、ニュー・ヨークにあり、ボストンとボートランドもこれに劣らぬ取引場があつたそうである。一定の買手がついてから、この鐵鎖に繋がれ、鞭で柵の中から追ひこくられた不氣味な商品は、どこへ行つたか？——主として、南方アメリカ諸州の大農耕地へ送られたのである。

北方アメリカ諸州では、農工等も進歩的で盛んではあつたが、ごく少數の黒人を家僕として採用した以外には奴隷を集團的に使ふといふことは稀であつた。北方のアメリカ人は、黒人奴隷を使役する代りに、その取引から莫大な富を擭たのである。南方の諸地方は北方のそれと大部趣きを異にして、甘蔗、米、煙草、棉などといふ主要作物を大規模的に生産してゐた。そこの大地主の富は、それらの收穫のどれをなりとあてて他地方へ賣り込むことにあつた。黒人奴隷は、この農園や耕作地に働いたのである。南北戰爭勃發當時の統計によると、米の耕作に從事した奴隷は總數の5%、麻2%、甘蔗6%、煙草14%、棉花73%といふ風に分布されてあつた。それから、一七九三年に發明された棉繰紡織機の輸入は、黒人奴隷を棉布工業部門へ驅り立てた。

これらの大農耕地は、アメリカのどの州にあつたかといふに、ヴァージニア、南北兩カロライナ、ジョールジア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナ、ケンタッキー、テニッシイ、アーカンソオ、ミゾーリ、テキサスの十三州であつた。いづれも南方アメリカ諸州で、そこへ黒人奴隷を集中した理由は、一は氣候とか食物とかの地理的關係もあるが、根本の原動力は、產業經濟關係の制限性によるものである。

この奴隷、最良品で、時價正に千八百弗！

紙の上の解放運動

一個千八百弗以下に取引された四百五十萬人の商品は、はたして自

分の生命、生存、勞働、富の生産の諸權利について考へたかつたらうか？……デモクラシー過信のアメリカ市民には封ぜられてあるアメリカ暴動史が、歴々黒人叛逆團の蜂起を私達に內瞰させてくれる。黒人の解放運動として、宗教的に現はれたものは、十八世紀末のジョージ・リール、アンドリユー・ブライアンなどの指導のもとに發達した。次ぎには、猶太人のシオユズムと同性質を帶びた黒人種のアフリカ歸國を目標としたポール・カッフ一派の運動も起つた。一八〇〇年、ヴアジニアのガブリエルの叛亂一八一六年、カロライナ洲の暴動、一八一九年、ジョールジア洲の暴動、一八二二年、南カロライナに起つた陰謀などは、その人種的自覺の封建的色彩を帶びた反逆事件の數々であつた。

一八三〇年には、フイラデルフイアに全國黒人大會が催された。

ブルジョア文化が進むにつれて、黒人の搾取者である白皙人種の政治狀態に、著しい矛盾が生じて來た。汽船や汽車や電信の發明と共に、北方のアメリカ諸洲を開發すべく移民の洪水がヨーロッパから流れ込んだ。これ等の大陸移民は、北方のアイオワとカウイスカンスンとか、ミネソタ、オレゴンなどの地方に農民として移住し、フランス革命以後の新思想を持つた見地から、南方諸州の奴隷使役に對して手嚴しい抗議を申込んだ。これ等の代議員は、上院と下院とを通して、奴隷使役禁止法案をも通過しかねまじき勢ひであつた。しかも、北方の新興資本主義と對蹠的地位にあつた南方の大地主や富農達は、いつとはなしに合衆國聯邦からの分離を說くに到つた。彼等は、メキシコから西印度へかけ、パナマ地方までの一大奴隷國を建設しようといふ腹黒い夢をさへ抱くに到つた。この黒人奴隷を擁とし、の政治鬪爭は、カンサス洲を一線としてアメリカを二つに別けた。一八六〇年のアメリカ大統領選擧戰は、實にこの黒奴廢止か、それ共南北分離か、を決定する政治戰であつた。一八六一年には、新に選擧されたアブラハム・リンコルンを大統領と戴いたアメリカに、もう一人のジエッフアソン・デーヴイスといふ大統領を持つやうな奇觀を呈した。僞大統領デーヴイスの背後には、武裝した精兵を持つたミシシッピー、フロリダ、アラバマ、ジョールジア、ルイジアナ、テキサスなどの諸州が控へてゐた。かうして、有名な南北戰爭が開かれ、一八六五年四月九日の媾和迄續いた。名義は黒奴の解放といふことに在つたこの戰爭に、最も鬪はせられたのはその黒奴であつたといふことに、ブルジョア政治鬪爭の皮肉が潛んでゐる。

かうして、アブラハム・リンコルンの骨つぽい手に握られたペンから、アメリカ四百五十萬人の、唯働く、ものを考へない、眞つ黒な肉塊を持つた機械が、歷史の表面にからりと解放されてしまつたと思ふ

なら、それは錯誤である。南北戰爭は、決して黒人奴隷が不憫だとか、非人道的だとかいふ『アンクル・トムス・キャビン』的動機から戰はれたものではなくて、實は封建的なアメリカと新興資本のアメリカとの經濟的ヘゲモニーの地位を確立するための闘爭であつたのである。

であるから、戰爭が濟んで、南北統一後の恢復期に當つて、黒人を擁護した筈の中央政府には、黒人に對する投票權の賦與と共に、合衆國憲法に在るその他の權利と、それが衝突するではないかといふ議論が勃興した。戰爭後釋放された黒人の數は四百萬と云はれてゐるが、彼等の大部分は在來迄の境遇の關係上當然無智であり、財産もなかつた。わづかに南部諸州で働かせられた農奴としての習練があつただけである。そこで、北方の企業家達は、殘存した南方の富農主義に對する策略として、黒人に土地を與へ、教育を施すための フリードマンス・ビュローを建てた。しかし、同局の勢力範圍は、黒色地帯の奥までは屆かなかつた。自由勞働契約を主義とする北方のアメリカは、名目だけは黒人生活向上などゝ云つて、その實、南方アメリカの恩情主義にも劣る酷使と搾取とを無能な黒人の上に加へた。法文上では自由人であつたが、經濟上には何等の地位も持たない彼等が、事實上再び奴隷の境遇に置かれたことはいなまれない。

唯、彼等の頭上を、法律といふフートボールみたいなものがそつちへ轉ろげ、こつちへ蹴飛ばされただけの話である！

黒人代議士や上院議員が、わづかの間なりとアメリカの政治史の上に出現したのは、一八六八年から一八七九年までのことである。いつの間にか、南カロライナ州々議會を占領した七十六人の黒人代議員や、九人の上院議員などは、背後の白い魔の手に曳き摺りおろされて姿を消した。中央議會に下院議員として黒人の現はれたのは、一八六九年のことで、その最後は一八九九年であつた。

一八九〇年から始まつて、南方諸州には、そろそろ政權奪取の法律が現はれ始めた。それ等は、第一項『無學』から始まつて、第八項『國家成立の理由に對する理解』にまで終る八箇條の手厳しい身許調査のために約四百萬人からあつた二十一歳以上の黒人男子の手から、秋風落葉のやうに投票權を吹き拂つてしまつた。白人デマゴーグの夢も、黒人解放運動者の合法的政權獲取の希望も、この空文の出し入れの前に——非現實性を暴露した。

アブラハム・リンコルンも悪戯者であつた！

私刑

リンチのことは、日本にも知られ過ぎるほど部分的に知られてゐる。たしか内田魯庵氏の『獏の舌』にも生々しい情景が描かれてゐ



黒人列車ジム・クロウ車（一五三頁參照）

る筈である。これほど明白な白人の暴力統治が、世界のどの歴史の表面にも現はれたことがない。一面、人種問題の色彩を帯びながら、多分に群集心理を支配しながら、黒人の汎國家的掠奪と搾取とがこれほど露骨に永續されることは古今未曾有のことである。

私はこの一見自然發生的に見える白人のテロリズムに就いてあまり多くを語るまい。唯、スコット・ニアリング氏によつて『黒いアメリカ』に引用された二つの事件を轉載することでその一端を報告しよう。

ヘンリー・ローレイといふ黒人は、アルカンソー州に住んでゐて、當人は四十歳、妻と六歳の娘の子があり、クレーグといふ大地主のもとに働いてゐた。フランスの諺に『黒人のやうに働く』とあるが、このローレイは實にその諺の忠實な奉仕者であつた。

過去二年ばかり働いてゐて、クリスマスも近づいたので、黒人小作人は給金を貰ひにクレーグ方へ立ち寄つた。クレーグ家では食事中だつたので、料理人のベッシーがその由を傳へた。すると、クレーグ氏は、邸宅へ入つて來るなと云つて棒切れを擲げつけた。そこへ息子のデイック・クレーグといふ不良青年が出て來て、ローレイが玄關を下りるところをピストルで撃つた。あまりのことに憤激したローレイは、自分もピストルを出すと老クレーグと娘とを射殺し、二人の息子に負傷させた。

彼はテキサス州のエル・パソ迄逃げて逮捕された。アルカンソーから二人の警官が來て、ローレイを汽車に乘せて連れ歸つた。すると、ミシシッピー州のサーデイスといふ町まで着いた時、數台の自動車が列車を襲うた。自動車から現はれた五六人の壯漢が、警官の手錠を外づしてローレイを奪ひ去つた。

一九二一年二月二十六日のことである。その日の『メンフイズ・プレス』の最終版は法律の手から奪ひ去られた黒人小作人が、その日ど

いふ風にして私刑に處せられたかを詳しく報告してゐる。

「五百人以上の人間が、黒人が徐々と黒ろ焦げにされるのを見戍つてゐた。中には數人の婦人も混り、クレーグ及びウイリアムソン夫人の死の復讐を行ふアルカンソー農業者達の間に姿を見せた。殺人者は、思ふだに身の毛のよだつやうな私刑を施されても、一言として憫れみを乞ふたりしなかつた。人達は、黒人を杭に繫ぎ、その脚部に木の葉を撒き散らした。木の葉の上にはガソリンが灑がれ、それで宣告の用意は出來たのである。(以下百十七字削除)一度か二度、彼は自分の死を早めるために燒けた灰を口の中へ入れようと試みた……』

『メンフイス・ニユース・シミター』紙の特派員は、一九二五年の秋起つた私刑事件についてかういふ報告をしてゐる。

『私は、怒つた群集が彼を鐵の棒へ縛りつけるのを見てゐた。私は、彼等がその不自由な體のまはりに薪を積むのを見てゐた。(以下百二十八字削除)黒人の苦しみ悶える聲が聞えた。——おお、神樣! おお、神樣! 私がしたんぢやない。許して下さい!——炎は飛び上つた。黒人は身悶えした。踵から鐵鎖を蹴飛ばしたが、まだ手首と首は離れなかつた。(以下廿一字削除)——許してくれ、私がしたんぢやない! 私がしたんぢやない!——彼は叫び續けた……急に何も云はなくなつた。死んだにちがひない。(以下四十三字削除)……數人の男が、もぞもぞ動き始めた。——おい、おしまひにしちまへ。——と、忽ち十二人の人間が躍り出した。(以下六十八字削除)群集が歩き出した。私は、その眞つ先に、一人の婦人を發見した。どちらかと云へば若い女で、どうもかういふタイプの女について見別けはつかないが、田舍の女らしく强く健康であつた。しつかりした足どりで、男のやうに歩いて行つた。見ようによつては美しくさへもあつた。群集は靜かに解散しかかつた。誰かがこんなことを云つた。——俺あ腹が空つた。何か食はうぢやないか。——』

一八八九年から一九一八年まで、三十年間に私刑に處された黒人の數は二千五百三十二人である。そのうち五十人は黒人の女。

一般に知られてゐることは、私刑に行はれる黒人の大部分は、白人の女を强姦したといふ廉によるものだといふ迷信である。ところが、以上の數字のうちに、九百人は殺人罪、四百七十七人が强姦罪、二百三十七人が婦人に對する惡戯等々になつてゐる。それから百四十二人の被私刑者は、全然無罪で私刑されてゐるのである。

どうして黒人と白人との最初の闘爭が始まるかは、シカゴ大學の出版部から刊行されたレポートによつて報ぜられた一九一九年度のシカゴ暴動事件について見ればわかる。この暴動には、三十八人の人間が殺され、五百三十七人の人間が負傷をした。そのうち、十五人の白人

死者、百七十八人の白人負傷者を除いては悉く黒人であり、暴動の結果千人からの黒人が家を失つた。

もとを質せば、それこそ水掛け論で、ミシガン湖の水浴場に、白人と黒人とが脚を間違へて泳いだといふことに始まるのである。四人の黒人が、白人水泳場で泳ぎ始めた。それを白人達が詰責して、喧嘩の最中に石を投げた。黒人達は一旦黒人水泳場へ引き返して仲間を鳩合して、論爭を始めた。その際傍らに泳いでゐた十七歳の黒人の子供が、白人の追跡に會つて水底に影を沒した。黒人達は、そのボーイに對して白人側からの投石があつたと主張する。騷ぎがやかましくなつたので警官が出て來て取り鎭める。すると、群集の中から黒人警官に對つて發砲した者があつた。黒人警官は直ちに對手を狙撃して殺した。これが端緒とつて、ストツクヤード附近の黒人街は忽ち市街戰となつてしまつた。それが翌日の晩まで續き、白人は自動車に乗つて黒人街を最大速力でドライヴしながら盲目



シカゴ市一九二五年の黒色人種戰の犧牲

滅法に鐵砲を街へ浴びせた。事件は三日目まで續き、その四日目には軍隊が出動して戒嚴令を敷いた。……

かういふ突發事は、何等確實な動機がなくて起るところの人種的反目であると解釋されてゐるが、もつと冷たい社會的事情に、いつでもこの種の暴動の勃發する深い原因が潜んでゐるのである。歐洲大戰當時からかけて、肉類製造業のストツクヤード附近へは、約十二萬五千人からの黒人勞働者が密集したのである。勢ひ白人勞働者との職業の爭奪戰が起らないわけにはいかない。最も悪いことは、黒人勞働者がストライキ・ブリーカアとたることである。そのストライキ・ブリーカアの背後には、より安い給金で勞働を搾取しようとする資本の魔手が動いてゐることは云ふ迄もない。人種的迫害といふ原始的な本能をそそることによつて、近代産業の大資本は、黒白兩人種のプロレタリアを搾取して、蔭で笑つてゐるのだ。

シカゴの暴動は、たしかに擴大された私刑であつた。しかし、この私刑には、黒人側も十五人の白人を死刑に處してゐる。……

ジヤッツの道化役


詩人ラングストン・ヒユーズ

一般に輕い見方をするアメリカ人にとつては、黒人とジヤッツとは不可分離な餘興の道具立てだと思はれてゐる。又、半面には、さういふ白人の見方に迎合する黒人達もゐないことはない。南北戰爭以後、半黒のギルドが出來て、全黒を排斥し、自ら『青い血管のサークル』と誇稱したさうである。これなどは、白人の黒人隔離策に對する陰險な逃避方法の一つであると共に、黒人種間に生じたわづかの富の支配權を誇る成金根性の現はれとも云ふべきであらう。もつと露骨に黒人種が白人社會に分業的地位を開拓しようとして職業的に惡化されたものは、黒人社會の寄生虫である若干のインテリゲンツイアと職業的『笑ひ』製造社の群れであらう。これなどは、悲しむべき喜劇である。

私は、どこかで、普通アメリカのヴオードヴイルの舞台に立つて、日本の落語のやうな掛合話をする黒人達の面白おかしさうな落し話は、その實黒人達のものの考へ方の非科學性から來てゐる企らまざるユーモアである、と云つた觀察を讀んだ記憶がある。

カール・ヴアン・ヴエヒテンといふ小説家の書いた『黒人の天國』と云ふ小説の中に、小唄を挿入してゐるラングストン・ヒユースといふ黒人詩人などはその一人であらう。

この男の話をする前に、私達は先づその『黒人の天國』といふ小説がどんなものであるかを、アプトン・シンクレーアのアメリカ文學の批評を試みた『金が書く！』の一節から引用して見よう。

『この話は、今アメリカのダンスと音樂との二つの要素を供給してゐる、ハーレムの黒人達の話である。小説の半黒の女主人公は、いかに

も純潔で善良で、ルイザ・アルコットの小說からでも出て來さうな女である。但し、すべてのヴァン・ヴェヒテンの女達のやうに、高尚な變態性の文學を漁りまはるといふ特種な性癖を除いては。女主人公ャリー・ラヴは圖書館從業員で、市のエレヴューター・ボーイや黒人女給の文學的嗜好を高めようと努めてゐる娘である。悲しいかな、彼女は、アルドアス、ハックスレーやカペルやコクトオやプローステトモーランの代りに、ゼーン・グレーやハロルド・ベル・ライトなどといふ俗惡な作家が好きなのである。小說の最後に行つても、まだエレヴエーター・ボーイは機械を上降し、女給は卓に給仕してゐるのに、マリーの文學的嗜好を贊成した戀人の主人公は、或るカフェーの亂醉の場面で、もう一人の黒人を打ち殺すことになつてゐる。そこで、この小說にも道德的教訓があることと思はれる——と云ふのは、人間はアドラス・ハックスレーや、カペルや、コクトオや、プローストや、モーランなどを讀んぢあいけない——これに、ヴァン・ヴェヒテ！ムも」といふ小說の中に、こんな小唄を挾んでゐるのが、黒人詩人として流行の月桂冠を戴いてゐるヒユースなのである。

『おゝ、わたしあ戀にこがれてゐる！ わたしに小さな鳩があり、
いつも、クウ、クウ、クウ、クウ、と戀をする……』

『お前の女子に氣を許すな。
いつも心配絶えやせぬ、
お前の女子に氣を許すな、
いつも心配絶えやせぬ、
女子に友達持たせちゃならぬ、お前外へ出りや、男が這入る！』

これを、ニグロ口調で小唄らしく書くのが『進化』せる黒人詩人なのだ。しかも、『黒人の天國』の如き、ブルジョア專制の見地から、黒人種を劣等動物らしく書き立てる流行作家の長編の隨所に、十七篇も！

黒人インテリゲンツイアも、ここまでK・K・Kに侮辱されたなら、白人に文句のある筈はない。

ゴールド・スター事件

今年七月十一日、私達は階級的に自覺した黒人達のアメリカ資本主義政府に對抗する闘爭組織の結成を、ゴールド・スター事件に關聯するものである。

『ゴールド・スター』といふのは汽船の名前で、それは歐洲大戰で戰死した黒人兵士の靈を弔ふべく、アメリカ陸軍當局が、その戰死者の

母親達を載せてフランスへ渡航させようと試みた時、黒人兵士の家族だけは、白人婦人達と差別して、ごく粗末な『ゴールド・スター』といふ廢船に乘せようとしたのであつた。四百人のニグロ婦人達のうち、三百三十九人は、同船へ乘ることを拒んだ。乘船拒否者のうち、五十五人は、當局に對つて、

『ジム・クロウ主義であり、差別待遇を蒙り、侮辱されたものである。』

といふ抗議書を提出した。

この事件は、忽ちアメリカン・ニグロ・レーバア・コングレスの取り上げるところとなつて、『第二次世界大戰の準備をするに當つても、黒人はジム・クロウされる！』といふスローガンのもとに、猛烈な反對運動と黒人失業者及び勞働者に對つてのアッピールが發せられた。ジム・クロウといふのは、昔から南方アメリカで黒人が電車汽



階級意識に覺醒した黒人達のアメリカン・ニグロ・レーバー・コングレス

車に乘る時、いつも黒人だけの車輛を設けて、甚だしい差別待遇を行ひ、今日も猶それを續けてゐることを指さすのである。それと前後して、黒人鬪士ジエームス・ダブリユウ・フォードを委員長とする國際黒人勞働者大會は、ロンドンに於て開催される筈のところを、英國官憲の彈壓によつてドイツ・ハンブルグに開かれ、赤色インターナショナル勞働組合へ祝辭を發したり、ハンブルグ港のドック從業員及び會員と手をつないで大會を開いたり、盛んにその氣勢を擧げた。

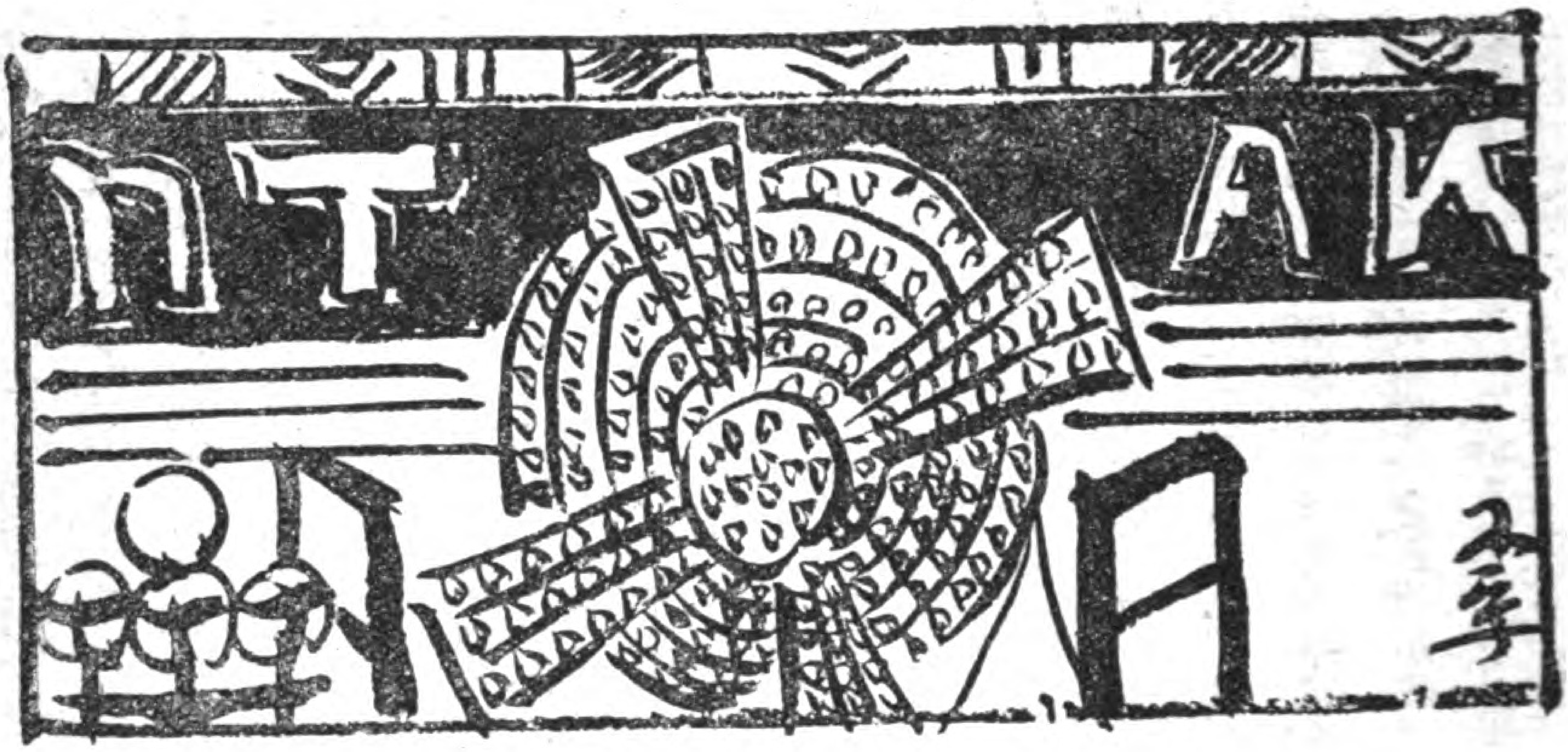
フォードの聲明書によると、いかに第三インターナショナルが、世界で最も酷使された民族である黒人種に對して、その人種的自虐を抛つて、敢然白人勞働者と同一戰線に立ち、（以下十七字削除）鬪爭を挑むことを救濟の唯一途と明示したかがわかる。

フォードによれば、黒人勞働者の世界的叛逆の第一聲は一九二八年アフリカに起つたと云はれてゐる。フランス帝國主義の中央アフリカに對つての侵略を、黒人勞働者達は始めて武裝的に叛逆した。次ぎには、フランス帝國主義が軍備擴大のためにオーション・コンゴー鐵道の完成に慌て始め、同地方の銅山を發掘しようとし、『黒人軍國』を編成しようとした時に、ガードに立ち上つた鑛山勞働者一萬八千人はストライキを宣し、（以下廿五字削除）砲門を逆に向けた。これは、大虐殺のあとでわづかに鎭壓された事件であるが、遠くアフリカの奧地にまで黒人の民族自決、帝國主義戰爭反對の火の手が擧つたことを證明する。すでにアフリカ内地にはガダリエ一派の第二インターナショナル直屬の勞働組合は失脚して、第三インターナショナル系の非ヨーロッパ・トレード・ユユオン聯盟が出來上り、ダルバンに於ては官憲との鬪爭が勃發して、黒白勞働者の共同戰線を敷いたのであつた。

一方、アメリカに於ては、南方黒人勞働者の固い組織をつくつて、トレード・ユニオン・ユニテー・リーグの指導下に置いた。これ等の黒人勞働者は、南米ハイテ、リベリア、サン・ドミンゴ等の植民地に於ける、又、アフリカの内地に暴威を揮つてゐる英佛ベルギーの帝國主義者と抗爭すべく、ここに世界の黒人種勞働者を糾合して大會を開いたのである。會期十日間、さらぬ資本主義崩潰の前兆としての失業時代にさしかかつた黒人達は、ここに北方六萬五千四百九十二人の組合員を結束し、その他の凡ゆる組合員を合して、約十萬強となつて、始めて正面切つて二百年來の暴君白人資本家と鬪爭の火蓋を切るに到る大勢を形づくつたのである！

ハンブルグに於ける大會の報告はまだ手にする機會を持たないが、一九二八年十月二十六日、モスクワのコムミニスト・インターナショナルから發せられた『アメリカに於ける黒人問題』の決議について見るも、如何に人種を超越して（十字削除）が萬國のプロレタリアートに對して飽くことを知らぬ暴虐の手を伸べようとしてゐるか、そして、それに對して、地球始まつて以來一番愚弄と嘲笑と迫害と虐殺の對照となつて來た『黒ん坊』といへども、結束して鬪爭を開始するに到つたかを知ることが出來る。

世界に複雜な人種系統を數へるブルジョアジーは、やがては、（九字削除）しかないことを數はるであらう。（了）



大阪今昔

木村莊八

(一)

此の文章の(二)以下は元來昨年執筆したものですが、机邊に埋もれて、今まで未定稿のまゝでした。例に依つて六月は春陽會展覽會が向うにあるから、今年もそれにつれて、六月十九日から十日間ばかり大阪へ行つて來ましたが、從つて昨年の此の書きものを片付ける感興を感じます。——僕は本誌に、まだ岸田劉生が關西にゐて遙々會遊した頃のこと、大阪所見と云ふ文章を書いたことがありますので、時は隔てましたが、これを續きとして、大阪今昔と題しました。

現大阪の一番の面白さは、恐らくこの點で海内一だらうと考へられますけれど、截然としたる「新」と、依然たる「舊」とが、指呼の中に至るところ併列し相呼吸する紛糾狀態です。然も只併列するだけのことならば、珍らしくもないが、新・舊負けず劣らずに凡て世相の現役として活氣潑溂とする點が面白い。海内一とする理由で、その最も代表的な一例を舉げれば、四ツ橋の文樂座に見る通りのもの、試みに今その節

筋書本を開くと、「西側別館の階上階下に大食堂と喫茶室、酒場が御座います。」「文樂座指定の超タクが新車を揃へて玄關にお待してゐます」、或ひは「文樂座の御宴會。スピード時代の尖端を往く。絶大なる御好評にお應へして大衆的に進出せる新様式、B、金四圓也。A、金五圓也。」――

こんなことが廣告頁の方に澤山印刷してあります。――もう少しわざと所謂えげつない寫眞にすれば、「洋食堂、西館階上。スピード・ディナー一、五〇　文樂スペッシアル・ビーフステーキ一、〇〇」。

酒場には「文樂カクテル〇、七〇」と云ふのもあるわけで、然るにそのスピード・ディナーを食らひ文樂カクテルを含んで、何を見聞するかと云ふ、筋書本の本文の方には、「諏訪法性の御兜、それが盗んで貰ひたい。ヤア何と云ひやる、諏訪法性の御兜を盗み出だせと云ひやるのは、扨てはあなたが勝頼様」と云ふのです。――解題して「この浄瑠璃は、云々……初演は明和三年正月興業の竹本座」とあるから、蓋古百六十四年此の方の[illegible]だ。

そんなわけで、更に例へば、時に流說の一目、[illegible]たの天下茶屋の方角から自動車を拾つて、心齋橋筋へ出やうとしましたが、偶々途中で夕立に出逢ひました。と、奇觀だつたのは、その時通りかゝつた今宮界隈の女衆に、揃ひも揃つてみんな赤い腰卷で雨中を駆け出す光景を見たことです。――何も女衆が夕立に出逢つて、腰卷を現はして駆けたからと云つて、それに不思議はないけれども、僕のその場合出逢つた偶然か、或ひは、大阪の一部の女衆は今でも腰卷を赤と決めてゐる必然の成す業か、恰かも、去る明治年間の小林清親が圖繪を現前した様にも見えてをかしかつた事實は、ばら〳〵と四五人の婦人が雨中を駆け行く、それが、殘らず、掲げたゐは一定の赤の腰卷と云ふわけだから奇妙でした。俄かに昔懐しい様でもあり、又、甚だしく時代錯誤にも感じられて、不圖借問するのに、婦女子の腰卷が赤きは何ぞや。所詮は、化政末以來の、婦女子町人を奴隷玩弄視したる、従つて又、隷屬視されたる側では物悉くを我れから淫卑化せる、その歴史的記念を最も雄辯に物語る殘存物、象徴物の謂ではありませんか。それでなくとも婦女子とあらう身を、身自ら腰邊へ、色もあらうに眞紅の布を卷くと云ふことは！

勿論斯樣の論には、一向頓着なく、眼前有體の事實は、由來赤は腰卷と相場が決まつてゐるからそれで女衆が卷いて出た、偶々夕立に出逢つたからそれを高々と捲つたまでの、何の變哲も無き出來事です。左樣、變哲無さすぎるから、却つて眞劍にヘンな結果となるだけのことでした。

東京では近頃滅多に赤の腰卷を見ません。東京のみに限らず、一般の世相風俗から云つて、今日既でに「赤」は腰卷に非ずして、過激派を意味するでせう。お澄どんと雖もデパートへ行つて薄色のスカートを買つて穿く。

と、さう云ふわけで、天王寺の町外れで、眞晝中、女風俗の舊樣に驚いたのに、それから盛り場へ出て、日のくれに、ぼんやり道頓堀の赤玉カフェーと云ふのへ見物にはいると、レヴィューを上演してゐました。――尤も土地の定連？達は、別段ステーヂのレヴィューには關知しない工合でしたが――その場數が進んで、「女十八花恥かしや」とか云ふ外題の幕になります。と見る、何れもきつちりと股間へ〆め付けた、曲馬の猿又の樣ないでたちの裸か女が四五人立並んで、その猿又のふくよかな眞正面、彫刻家の所謂デルタ面へ持つて來て、黑々と、相當大きくハート形を描いたのに出會しました。（更にその次の幕では、同じデルタ面へ、此度は麗々しく ？ を金糸で縫取りした一圓が現はれて大いに輪舞しました。）

まあ、この邊を、尖端的と云ふのでせうが、惜しむらくは尖端にして大阪地方的です。少し新らし過ぎる。

丁度町外れの女衆の赤い腰卷が、その由來は元々美しき昔の淫卑でありながら、今は時世相として古すぎるから、淫卑でも何でもなくなつて、只――何となく氣の毒めかしい――飛んだ時勢後れの舊物にしか映じない如く、爾く道頓堀の尖端的イットの方は又、これこそ最新最鋭のイット本願でかゝつた智惠が、これでもか〱と、餘り元値も懸値もさらけ出して現前するので、等しくその效を失ふ――

否、片端からから論評して了つてはいけませんでした。

面白いのは、その新舊双方共に、仲善く、世相の現役として、嚴として彼地には在るところ之れを見ることが出來る點――

（二）

實は何かしら用事もあるので、僕は此の五七年をかけて、毎

年大阪は――一日二日の場合もあれ――年に一度は必ず訪ねる例となりましたが、曾て、富田屋の建物に感伏して、大分あの家を、その木組みや格子の工合など、うろ〱と驗索したことがあります。又は、我れながら手柄と思つてゐるのは、二ツ井戸津ノ淸の、幕末と明治と、どつち付かずに融け合つて面白かつた店構へを、早晩消滅の危險ありと感じたので、寫生し、うまくはなかつたが、寫眞に寫して來たことです。果せる哉、今はその折りの面白さは有りません。

頃來殊に梅田の驛に降り立つて感じるのは、そして、渡邊橋から肥後橋へと渡り來つて、益々感ずる色は、此の大阪こそは、日本一の實地の文化的坩堝だと云ふこと、或ひは、その尺度計の代表的現場だと云ふことです。若し東京に、地震が無かつたとすれば、依然「坩堝」としての實地のたぎり工合乃至「尺度計の現場」とする熱つぽさでは、やはか關東方がむさむさと關西勢に負くるとは思へない。けれども、去る大正十二年にて「坩堝」としての東京は、殘りなく、その舊樣の方を壞されて了ひましたから、その後は帝都改新せられつゝある、或ひは改新の度を以つて云つたならば、明らかに日本一ではあらうまでも――

假りに今、不思議な億兆の金滿紳士が現はれるとして、より巍然たるビルデイング街を何所かの無人島へ建てる場合があるとすれば、それでも出來る。改新の部だけのことならば。東京の震災で亡くした小網町、横山町、一ツ橋界隈、深川木場、向島……等は、未來永劫、億兆を億兆倍する金力あらんとも、二度とは出來ません。

我々關東人は、それで、片輪車の土地に住んでゐます。

然るに、大阪へ行くと、近頃ではやはか新東京にも決して負けぬ程のビルデイングを持つと同時に、街の行きずりに、猶彼の「小網町」有り「横山町」有り、――指呼の中に文明の來し方行末を示して、街に沽券があります。

現東京は復興盛んなりと雖も頓に新店の觀あるを蔽へないのに、大阪は悠然として、土ながら、容氣ながらに、過去數百年の地です。老舖です。

その道頓堀筋は昭和當代好みのエロ・グロによからうけれど、又、そこから僅か一二町、ほんの心齋橋筋を東西へ切れても、津々としてその邊の家並みに認めるものは、祖父以來の地

「大阪」は或ひは謂ふ「日本」で、兎角とも北へあゆめば我宿をひとめに見るも見かへらん、子どものゆくへ女房のあはれを胸におしつゝみ、南へわたる橋々のかずもかぎらぬ家々を、いかに名づけて八軒家——

と、水牛の彈の音が、座ろに幽氣の如く聞ゆる。頗く古い文明を營々引き從へて、今までに來たり、猶今後行かんとする、有るがまゝの大都會です。——羨望の念に堪へないものがあります。

で、ほんの食後の散歩の行在りにも、街に昔日あり、直ちに今日ある、これを好個の文化の坩堝だと云つたわけながら、彼の在りし日の東京の新橋驛を思はしめる、今は蒼然とした、梅田驛の直前に、昨年の春竣工したばかりと云ふ、極くモダン好みの巍然たる阪急驛が聳立してゐる景を見ます。——これを給師畢見に一まをしあげますれば、梅田驛をバックとしては、我が 明治大帝の御姿をここ謹寫し奉るべし。明治の御代に梅田驛の有つた廣大の喜びは、大帝の御稜威に依るところだからです。

然しながら、今上陛下を寫し參らせんには、御祖父君明治大帝を壽ぎまつる梅田驛々頭の圖よりは、より御ふさはしき、今や到る處の活潑なバックがある。直ちに阪急ビルディングの前に謹寫し奉るべし。肥後橋に謹寫し奉るべし。云々。

東京こそは滿都漸く 今上陛下のものです。益々新々都會としては、どし／＼改善せられるだらうと思ふけれど。

——遺憾ながら、明治の思出は、殆ど亡失しました。

新しく熾んなるばかりが土地並びに都會の權威ではない。

それにしても、過去數世紀の間、日本の文明の中に斷然として一敵國を成し、旣にその「舊來の味」にも完成し盡したと思はれた大阪が、——これは、隣る「京都」から思ひ合せると、感慨多少のものがある譯です。大阪から突然京都へ移つて、閑寂たる烏丸通りなどを行くと、その家並みの甜けさ、低さ、おほけなさ。然しながら、同時に徹へぬ感じのする「ねむさ」。これを見て我れながら奇異にして心外のことには、昔紅毛人が初めてニッポンを見たならからも感じたらうかと、その、からもと云ふ感じを我等の眼が感じることです——然も大阪は、時と共に、如何に決して衰へないことだらう。

刻益々「新大阪」を形成しつゝ行くでせう。——街にそのエ

ネルギーのある根強さを感じ一愉快です。

僕は毎度、大阪へ行く度びに、過ぐる明治の美感の粹を集めて堂々乎とした――殊に故郷の東京にそれが亡くなつてから以來は――本町筋を好んで、必ず散歩をしますが、多少懐古低徊趣味的な氣のする、只、懐しさに至つて、丁度、父親に逢ふ様なうれしさは伴れません。藏造りの三層より成る大問屋建。そのふんだんにアカを磨き廻したる小屋根と云ひ、黒くつやつやと研ぎ出しに塗つた寛闊な壁。重き鬼瓦の飾り、可愛き避雷針。――一寸した忍び返しの細工にもブリキ屋を飾り屋と云つた時代の情愛が籠つてゐますし、カナモノの天水桶の鷹揚さ。から拭きをかけたる格子戸、打水する敷石、云々……

かう云ふ家々のしやわいは、極く涼しいのです。子供の時分、よくそんな冷々とした片影に親しんだものだつたが――

と云ふ様な一時代前の家々がそつくり町の兩側に居並ぶ、大阪本町筋の漫歩を喜びますが――と、今愕然と（この字は大袈裟の様だが、と云つて、此の字以下ではありません）したのは、本町三丁目のところ、それを北から、都市計劃線の三休橋筋が十文字にぶつかつて來る、その交叉點の現在の風致です。恰かも白い蛇が、それに新時代の氣を乘せて、黒く重い「昔」の本町筋文明を食ひ盡さんと、伺ひ寄る様に見えます。事實、刻々と伺ひ寄りつゝあるでせう。――この北から舊市街へぶつかつて來る三休橋筋の新街路に立ち並ぶ程の家々は、決して大家屋ではなく、殊に、美點と云はんよりは缺點――その第一は無裝飾なること――のみ目に立つ、云はゞ、モダン長屋の種類で、一體が大阪と云ふ土地には、その土地個有の色感として、從來、黒ずんだ茶褐色の調子に、町の空氣がありました。（と云つて、これをいつ迄も固執的に讃美する意味ではないが、少くとも、）それで美しいことは確かだつたものです。本町筋の如き、以つて宛然として畫中の家です。

然るに北から走つて來る都市計劃線の新道路は、その色が、ぬく〳〵として白い。白いと云はうよりは色が無いと云つた方がよく、その意味で、白い。何か妖氣のある生の蛇が、舊市街へ潜入せんとする不思議を見る様に感じるのです。

ところが之れを輕忽に附し難いと思はれる點があるのは、此の舊文明から抜け代つたばかりの街の白蛇――例へて云へば、今歐大陸へ侵入したてのゲルマニ族――が、猶一定の讃美は持

たないかも知れない代り、只、厭々たる活氣は持つてゐることだ。活氣だけは如何なる美しい都市街よりも段違ひに持つて進み來ることゝです。

その三休橋筋とは別に、梅田から難波へと、同じ都市計畫線の、然も、二十四間道路が渡らうとしてゐます。地面を掘り返しつゝあります。——と、之れは例へば東京の槇町線を、大阪地圖の上へ強引に敷かうとするにも似て、ここに天爲とするよりは、より以上人爲問題の危險？があらうと思はれる點は、東京の場合は、新しき道を焦土の上に通します。

大阪はさうでなく「昔在りし家」そのものゝ上へ、今將にドシ／＼通さうとすることゝです。屢々、我れから舊を壞して、新を置かうとしつゝあるでせう。隨分判る處で。

例へば筋違橋から、南方呉服橋の方を見ても、その暗く、情趣めかしい（如何にも大阪式な）町中のよどんだ川筋へ、いきなりもう一本向うの京町橋が、白皚々としたモダンの石橋で今現はれつゝあります。——と、そこで美の各樣式が痛々しく相衝擊して、相衝擊するのはそれが直ちに現在の世相一般だから、面白いと云へば、それつきりのものゝ、——これを何とか善處したいのは、少くも、無考へには改新のみ貴しとしたくない。言葉を代へれば、今指摘した風景の厭然たる不調和は、これを調和だと人にかりそめにも誤解はさせたくないものです。——あの川筋の、大阪の名譽の爲めに。

僕は「昔在りし家」の悉くを善しとする、或ひはそれを保全しようと云ふ、さうばかりの極右論ではないのです。例へば、新町筋の裏の、通りの狹い、家並みも極めて低くそれが陰氣に、左右前後櫛比したしもたや（？）筋の如きは、佯らずに云つて、彼所を今ドイツボックスの短靴か何かで歩いてゐると、いつか息苦しくなります。僕舊弊なりと雖も、心齋橋筋から戎橋へとつて返して、やれ嬉しやと思ふ。——又は、高津神社の社殿なり環境が、今日猶、明治二十一年の十月の日附で北川文齋と云ふ人が銅版畫の大阪案内に寫した時と寸分違はずに殘つてゐる、この大阪の一面。敢て云ふに、うつかりすると南京蟲に刺されさうなる古物堆積の一面。——これには感服しません。

そこは要するに程度があるので、——心齋橋筋を南北上下しながら東西の筋々を覗くと、步行の右左りに、静かな問屋街

の、整然とした「昔」の文化仕立てそのまゝ、幾年月もかゝつて富貴に出來た街の幾流れかを見る。あれは到底、一朝一夕には出來ない、つまり、町の沽券だから、壞したくないと云ふ意味です。無闇には。

然し決して手を觸れるな、改善するなと云ふ意味ではない。改善はこれに越さないが、只、難かしいことだから、願はくは無考への土木工事だけではやつて貰ひたくないと云ふ。

南北御堂の傍をやがて二十四間道路の御堂筋線が貫くことゝなりますが、焦土ではない、ぎつしりと舊物のある上を通して貫くことになるから、何れはこれがより大なる三休橋筋の白蛇と同じになるばかりは好まない。貫くに愼重の考慮を以つてしたいと云ふ。昔「四ツ橋を四つ渡りたる」涼しさは幾重にも重んじて、それから、橋を架けたい。無闇に橋ばかり架けても「涼しさ」――土地の匂ひ――を消しては、名負れだ、と。殷鑑遠からず、今の東京の柳橋を御覽なさい。

（三）

僕は本町筋の鷹揚な舊大阪を好もしと云ひましたが、又、漫歩の都度、家々の小ものゝ町家裝飾を見るのを喜びました。四つ橋通りにかう云ふ電燈が



出てゐます。と、この、中の明りを通して、どつぷりと紙なりガラスなりへ誌した太字の屋號や商品を讀ませる仕組は、大阪の至るところに見かける獨得の裝飾美感で、より古風のものを探すと、南郊天下茶屋あたりの宿屋の提灯に



かう云ふのがあつて――如何にも彼の長町裏に近く、この提灯

にして電燈を入れずに、蠟燭だつたならば？　その邊の泥溜で、さぞや、義平次は、團七九郎兵衛にむごく殺されたことだつたらうと感じる。

試みに同じ様式のものをモダン化すると、道頓堀の



となる。

時代と様式は變れ、美感に至つては同じことです。

或ひは町の電化装飾を見ると――

僕は初めて大阪へ行つたのが明治四十四年のことでしたが、

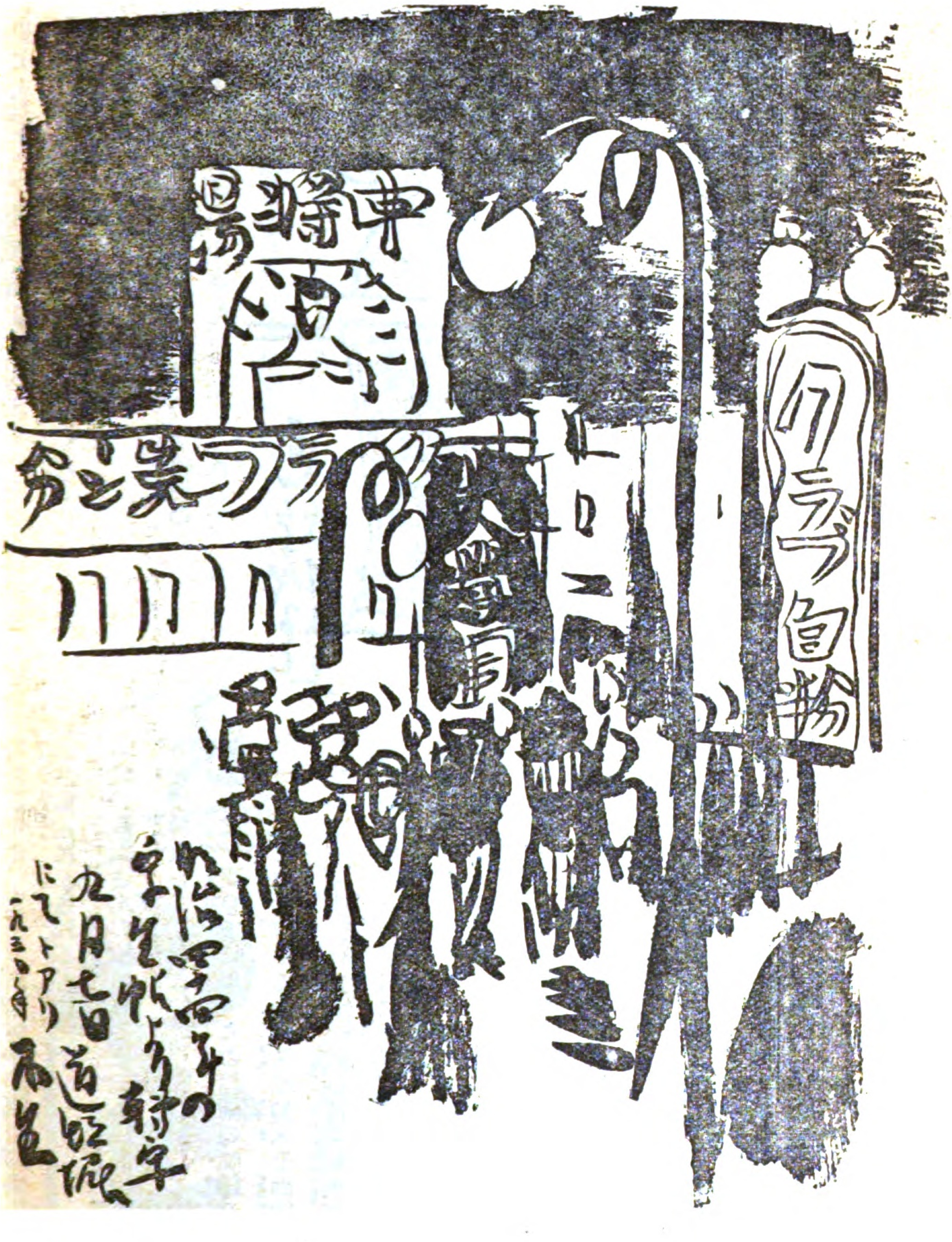
(次頁挿繪參照)

然も今日大阪へ行つても夜に入つて變らぬ一種の美感は、牧橋から眺める町の、家々の双方から無數に電燈の手を出した鈴蘭と云ふ装飾法に示されるものだ。

（此の武田さんの案に成ると云ふ街筋の電氣装飾法は、各地に傳波して、東京にも方々に見かけますが、面白いと思ふのは、東京では屢々この鈴蘭の弧線を大阪とは反對のカーヴに取り付けるか、又は腕木を曲線でなく直線にしてゐます（上野仲通り、或ひは裏神保町等）然るに燈光はかうすると強氣になつて、此の装飾法の發祥の地にはそれでは向くまいが、關東にはこの方が似合ひます。一體誰が變化させるものでせうか。爭はれぬものです。）

或ひは昔日と同じ心齋橋畔の電氣装飾。之等に昭和年的手法ありと見れば、新世界の電氣装飾に大正年度の手法及び器具を見ることが出來るし、松島に明治を偲ぶことが出來て、而して、與へる美感の起承轉結に至つては、何れも決して變らない。つまり、大阪なるもの〻これが個性です。

所詮、土地には個性あり氣負ひあり、云はず語らざる諸式なるものがあるから、殊に大阪の様に古い文明を負ふ都會は、變轉するとも、決して無闇に何地やらわからぬ植民地文化の様な


クラブ白粉

ものになる——と、この恐れは、無いでせう。

試みに此の稿のカットに、最もモダンと思はれるカフェーの電氣裝飾設備を寫して見ましたが、この中央の五色燈の矢車が絕えずぐる／＼と廻る仕掛けで、大阪ならではのこつくりとした味がするものです。

僕の思ひ過ぎではなからう。千日前の雜踏、その「音」そのものを座ろに聞いてゐても、あの、淺草仲見世の羯音とは何所か違つた音律の中に、大は紋下津太夫の沼津でも聞く樣な、よく嫋ふ、纏綿悠揚とした大どこの味があり、或ひは之れを小にしては、吹け／＼ドン／＼の、誠にえげつない下人の音色が忍びます。——之れを大阪に蔽ひ隱すことは出來ない。

況や、滅し去ることは出來ないし、さうしてはいけない。破壞してはいけない。

大阪は實に刻々と變りつゝある。昔在りし家の最中へやがて在らんとする家がどし／＼勃興してゐます。然も、街の或る部分には、悠乎として、去りし文化文政さへ有る、面白の都會です。——若し好事の人があつて、二十四間道路の進捗しつゝある工事を、その進捗しつゝ行く順に、丹念に活動寫眞に寫すとすれば？　願つても無い、絕好の、幕末、明治、大正、昭和……四代に汎る活世相史の參考圖をそこに現出することでせう。——強ち識者の徒らなる空想とばかりは考へません。以上。

（昭和四年初夏於東京初稿、五年九月再稿）

樺太の友へ送る手紙

――見物印象記に代へて――

末弘嚴太郎

××兄

旅行中は色々お世話になつて誠に難有う。歸つたら早速「樺太見物印象記」のやうなものを書く約束をしたが、愈々歸つて見ると公私の雜務に追はれて多忙を極め、到底秩序立つた印象記をまとめるだけの時間がない。しかしぐづ〳〵してゐると、冬の早い貴地のことだから夏の見物印象記なぞもう眞平だと言はれるに違ひない。仕方がないから君だけへの私信として不取敢茲に印象の一端を書いて置く。君が之を一般に發表されるや否やはすべて君の適宜の處理にお任せする。

此夏樺太を訪れた人々の內既に見物印象記のやうなものを公にされた人が二人ある。一人は碧梧桐、もう一人は松田拓相だ。其中碧梧桐の分は流石俳人には俳人だけの見所があるものと一通り感心しながら一讀した。所が「改造」の十月號に出た松田拓相の「樺太視察所感」は――期待の大き過ぎた關係もあるが――非常に物足りない感じがする。君等はさう思はないか。あれだけ大げさな視察旅行をして置きながら、其「所感」だとして發表する所は極めて平々凡々たる樺太紹介書の拔萃に過ぎない。吾々が彼から聽きたいのは政治家としての所感であり經綸である。材木が何本あるとか小麥の製粉步留がどうだとか言ふやうなことは統計書を見るなり技術家の話をきゝさへすれば解ることで、今更大臣閣下を煩はすまでもないことだ。然るに松田拓相の「所感」の中には唯萬事を有望だ〳〵と言つてるだけで、一として政治家らしい經綸が述べられてゐない。まるで下僚の奉る書類に盲判でも押してゐるやうな調子だ。全く以ていやになる。君等はさう思はないか？

僕今度の旅行は講演ついでの單純な見物に過ぎない。だから科學的に價値のある視察報告なぞを書く資格はない。しかし僕は確に僕の目で自ら見、僕の頭で自ら考へて來た。「觀察」の名の下に實は「聽察」

若くは「觀察」に過ぎないやうな見物をすることだけは慎んだ積りだ。アメリカのデウキー教授は其ロシア印象記の中で、「曾てアナトール・フランスが露西亜を訪問した時、彼は一切統計や資料の蒐集を爲さず、又所謂調査をなすことなく、自ら街路を歩いて道行く人の身振、顔色から人々の心持を讀まうとした」と記してゐるが、僕はこれを非常に面白いことに思つてゐる。觀察と稱して海外旅行をする役人なぞが、行き當りバッタリ在留の邦人から聴いた話を勝手にまとめて如何にも立派らしく見える視察報告を作り上げるやうなのに比べると、如何にもその人らしい立派な態度ぢやないか。無論僕にはアナトール・フランスのやうに「道行く人の身振、顔色から人々の心持を讀む」だけの力がない。しかし僕は僕自らの目で見得るだけのものを見た。少くとも見ようと心掛けた。以下その見て感じたゞけのことを正直に書き綴つて御覧に入れやうと思ふ。こちらに歸つてから最も屢々受ける質問は

樺太産業の將來

をどう思ふかと言ふ質問だ。秩序立つた研究をしてゐない僕には無論之に對して科學的に自信のある返答を與へる資格がない。しかし大體に於て僕の得た感じは樺太の産業は今や極めて重大な轉換期にあると言ふことだ。

今までの樺太は無秩序な資本主義的掠奪の對象であつた。殊に世界大戰以來の世界的經濟の好況は資本主義的掠奪に對して極めて好都合な條件を作り與へてゐた。だから樺太の森林も魚類も豫期されたより遙に早く掠奪の惨禍を蒙つた。殊に一兩年此方の世界的經濟不況は思つたより早く資本主義的掠奪の經濟的行きづまりを原因した。あれだけ豐富な森林を控えたパルプ工業さへ、動ともするとカナダのダンピングによつて脅され勝ちであると言ふこと、明かに樺太の資本主義的掠奪の行き詰まりを示しつゝあるものと言はねばならない。曾ては吾國蟹罐工業の中心地であつた眞岡其他西海岸地方も今では濫獲の爲年々の漁獲高に非常な差等を生ずるやうになつて資本主義的生産は最早殆ど不可能となりつゝある。

だから今や樺太は産業上萬事を考へ直さねばならない重要な轉換期にあると思ふ。無論世界的經濟の状況が少しどうにかなれば、樺太に於ける資本主義的企業もも少し息をつける時期が續くだらう。しかしさらばと言ふて樺太を今のまゝ永久に資本主義的掠奪の對象たらしめて置くことは絶對的に不可能だ。

實際今までの樺太は資本主義的掠奪の對象たる以外の何物でもなかつた。樺太廳も住民も教育施設も專ら其手足であり附屬物であるに過

ぎなかつた。人々は唯天然を掠奪することを知るのみであつて、此土地を愛しつゝ此土地と共に生きることを考へなかつた。だから森林は出來るだけ伐り魚は又出るだけ捕へて仕舞つたのである。眞に樺太の天地と共に生きる積りならば樺太の天地を愛せねばならない。愛するが爲めには研究せねばならない。樺太の自然を理解して、之と共に生くべき道を研究せねばならない。だから僕の貴地滯在中最も愉快に感じたのは

小沼の中央試驗場

を訪問したときだ。多分君は覺えてゐるだらう。自動車から降り立つたとき、眼の前に、見渡す限り展開してゐる耕された土地を見た瞬間に僕が心から叫んだあの叫聲を。實際僕は其時心から「樺太に來てからこれ程愉快なことはない。樺太に來てから自分の見たものはすべてが天然の掠奪であり破壞であつた。然るに今此所に來て初めて樺太でも人が自然を愛し自然と共に生きようとしてゐるのを見ることが出來た」と叫び且喜んだ。僕でなくともあのすき透るやうな澄み渡つた青空の下に徐々と見渡す限り耕された土地が内地でも容易に見られない程立派に成長した麥類や甜菜や豆類を育てゝゐるのを見た人は必ずやすべて同じやうに喜ぶに違ひない。これ程小沼の試驗場はすばらしいのだ。

しかし考へて見ると、樺太廳が最近漸く目醒めて、かうした研究試驗の方面に注意を與へるやうになつたと言ふことは、樺太の天然そのものが既に無秩序な資本主義的掠奪に堪へなくなつたことの反映に外ならない。これも亦樺太の經濟が今や重要な轉換期に在ることを證據立てる一の現象に外ならないと僕は考へる。これからの樺太はいかにして之を吾々同胞の安住し得る土地たらしむべきかを主たる目標として經營されねばならない。樺太は最早資本主義的掠奪の對象たる役目を勤め終へたのだ。此れからは吾々が此土地を愛して此土地と共に生きる道を講ぜねばならない。それには先づ研究により試驗によつて此土地を理解する必要がある。その意味に於て私は此中央試驗場の仕事の極めて重大な價値を認めざるを得ない。

事を資本的にのみ考へる限り、如何に――松田拓相の言ふやうに――製粉步留に於て外國產優良品に劣らない小麥が出來ても、又反當り生產額に於ても乃至含糖率に於ても優に北海道產を凌駕する甜菜が出來るとしても、世界經濟の見地から見て採算上成り立たない限り、之によつて製粉業も起らないし又製糖業の起り得る見込も絕對にない。ロシアを初め諸外國は遙に安い小麥を世界市場に提供し得る。諸國の製糖業はすべて世界的の生產過剩に苦しんでゐる。此事情を考へ

合にすこともなしに、技術的可能から直に經濟的可能を推論して安價な楽觀論を述べるが如きは絶對的に間違つてゐる。

之に反し、樺太の土地を吾々同胞の安住し得べき土地たらしむることを目標として研究し經營する限り、樺太の將來には尙大に有望なるものがあると思ふ。しかしそれには一般の考へ方を根本的に變へてかかる必要があると思ふ。例へば、

衣食住

にしても、現在の樺太は、餘りにも內地延長主義の生活を營んでゐる。此土地に於て內地と同じ生活を營む限り、少くとも小樽大泊間の運送賃は必然に彼等の生活費の一部をなさねばならない。彼等日常の生活費が內地に比して高いのは當然である。彼等は內地の米を食はねばならない。其他日常生活の需は殆どすべて內地の生産品を以て充してゐる。だから彼等の生活費が高いのは當然であり、勞銀が內地に比して高いのも當然である。

眞に、此土地に落着いて此土地と共に生きる積りならば、原則として生活を自給自足の基礎の上に樹立する必要がある。殊に農家の生活に於てさうである。僕は君に別れてから知取町の近郊北遠古丹に於て個人經營の小さい農場を見せて貰つた。それは此地方に於て最も成功したと言はれてゐる農場で、其栽培するものは專ら蔬菜類だ。現に僕が行つたときにも、夏季氣溫の餘りに高くない此地方にも拘らず茄子や胡瓜が相當立派に出來てゐた。此農場の成功した理由は近くに東海岸第一の都市知取町を有することだ。知取と言ふ大きな消費者をもつが故に商品としての農産物を作ることが可能なのだ。又一年の大半が低溫度である爲めに充分に分解し得ない有機物を多分に含有してゐる此土地を耕す爲めには、廐肥のやうな醱熟性の肥料を用ゐることが非常に有効であるらしい。其必要な廐肥を此農場では比較的容易に知取町から手に入れることが出來るらしい。だから此土地で成功した――商品生産としての――蔬菜栽培が樺太のいづれの土地に於ても同様に成功するとは限らない。既に此農場の若主人すら近來彼に見習つて附近に同様の農場を經營するものが大分出來て來たから、數に限りのある知取町の消費者を相手にして商品生産をする限り自分の農場の將來は間もなく行き詰まるだらうと言つてゐた。だから此若主人は一日も早く自分の農場を自給自足の基礎の上に置くやうにしたい。せめて自分の食ふものだけは自分で作るやうにしてゆきたい。それにはもつと土地を手に入れる必要もあるし、牛馬を飼ふ必要もあると言つてゐた。此土地に永く住まうとする人の心掛けとして誠に尤もなことだと思つた。

これを考へて見ても、樺太廳が內地から移民を招くに付いても、從來よりもつと彼等日常生活の自給自足策を考へてやる必要があると思ふ。それが爲めには、例へば耕地の外に山林や牧草地をつけてやることも必要だらう。現に土人に許してゐると同じやうに或程度まで漁獵を自由にしてやることも必要だらう。さうして彼等に對して自給自足の生活を可能ならしめると共に、かくして生活すべき道を敎へてやる必要があるのではあるまいか。現に或る移民は、自分の農場を半農半牧畜の經營にする方がいゝとは自分にも充分分つてゐるけれども、何分內地と違つて冬が長いから冬の爲めに可成り澤山の牧草を貯藏する必要がある、それが現在の狀態では不可能だ、と言ふやうなことを私に話してくれた。これも至極尤もなことだと思ふ。無論實情に精しくない僕には具體的の方策が何であるかを語る資格がない。それは寧ろ君等土地の人々に考へて貰ひ、實行して貰ふべきことである。しかし根本の考へ方に於ては僕にはどうしてもこれより外にないと考へらるゝのだ。君等は果してどう考へて居られるのだらうか。

尙衣食住の話のついでに、一言旅客として旅宿や料理屋で食つた食物のことを言ひ添へて置きたい。僕は旅行にゆく前樺太へ行つたら定めし、新鮮な鰊が食へるだらうとか燻製鰊の旨いのがフンダンに食へるだらうと內心大に樂しみにしてゐた。所が實際行つて見ると案外にも料理はすべて內地延長主義だ。恐らく餘程南方から來たと思はれる半ば變色した鮪のさしみが何所へ行つても必ず出ると言ふ始末だ。色色御馳走になつて置いて小言を言ふのも變だが、あれには全く驚いた。無論宿の主人なぞに聞いて見ると、內地から來られた方に鰊なものを差上げては失禮と存じましてと言ふやうな返事だ。だが此所にも樺太の人達が成るべく內地と同じ生活をしようと努力してる氣持が何となく現はれてゐるやうに思はれてならない。樺太では出來るだけ樺太のものを樺太らしく旨く食ひ旨く食はせてこそ料理道の眞髓が發揮されるので、料理の內地延長主義は間違ひだと思ふ。だから今度の旅行中今でも思ひだす程旨かつたのは、樂磨の水產試驗場で頂いた燻鰊と海馬島產の生海膽、登帆の宿屋にお願ひして漸く食はせて貰つた鰊の眞子や半燻製の鰊、それから敷香の宿屋で食つた多來加湖の洗ひなぞだ。登帆の宿屋にお願ひして漸く食はせて貰つたと言ふ話はまだ君の耳に入れなかつたが、實は突阻山に登る爲めにあの海岸の寒村に泊つたとき、夕飯前に海岸を散歩して見ると不漁とは言ひながら歸つて來る船も歸つて來る船も新鮮な鰊を四五十尾位づゝ積んで來る。風呂に入らうとし納屋のやうな所を通ると如何にもうまさうな燻鰊がブラ下つてゐる。夕食には定めしあゝしたものを食はせてくれるものと樂みにしてゐると、出されたものは此所でも亦內地延長主義。落膽し

た心をとり直して漸くお願ひして見ると、あゝしたものは内地の方々のお口には合ふまいと言ふやうな返答。がともかくと言ふので食はせて貰ふと旨いの旨くないの。殊に鱒の半燻製に至つては天下の逸品。土地にゐる君等もまだあんな旨い物を食つた事はないのぢやないか？

扨て話は變るが、料理の内地延長主義に閉口した僕は、

法律の内地延長主義

に對しても多大の疑ひをもつてゐる。樺太を成るべく速に内地化し内地と同じ法域にしようとする努力に對しては無論一應敬意を表するけれども、あれだけ天然の異つた土地に全然内地と同じ法律を行はうとするのは無理ではあるまいか。例へば金融機關の不完全な樺太のことだから金利の高いのは當然だ。内地と同じ質屋取締法を行つて同じやうに金利を制限しようとしても無理にきまつてゐる。だから現在の實際では取締の任に當つてゐる警察が然るべく手心して制限外の利息を許してゐると言ふぢやないか。漁業や森林のことでもさうだ。いらく魚をとるな木を伐るなと言うても、あゝした環境の下に住む人達が魚を獲りたがり木を伐りたがるのは人間の自然でもあり生活の必至的需要でもある。無論内地から態々やつて來るやうな大仕掛な濫伐や濫漁は大に取締るべきが當然だけれども、土地に定住してゐる人達殊に無産者の爲めにはも少しゆとりを與へてやつて然るべきではあるまいか。樺太の犯罪統計によると、漁業や森林關係の犯罪者が非常に多いと言ふことだが、僕にはどうしても其點について犯罪者だけを責める氣になれない。法律の方でも少し自省して讓歩すべき餘地があるやうに思はれてならない。内地のやうにコセ〲した排他主義の法律をそのまゝ行つたのでは、土地の人は定めし住み惡くて困るだらう。住民をして眞に樺太の土となるだけの決心をもたせる爲めには、あの土地を住み良い土地にしてやらねばならない。所が内地風の排他主義の法律は無産者等に對して充分に天然物を利用することを許さない。農業移民等をして自給自足の生活を立てしむるについても、此點を能く考へることが絶對的に必要だと思ふ。

扨て終にこちらに歸つてから色々の人にきかれるのは、

樺太の見物價値

如何だ。どうだ面白かつたか、おれも一度行つて見やうか、と言ふのだ。樺太の山水は大體に於て平凡だ。特別にこれはと言ふやうな絶景はないやうだ。しかし、夏の樺太の氣候は實にいゝ。濕度も無論低いが、その上濕氣がない。だから、土地に慣れた君等にはさうでもないらしいが、吾々旅行者には何とも言へないすが〲しい氣持がする。現に大泊で講演した時なぞ土地の人は皆浴衣をきたり扇子を使つたりしてゐるのに、二三時間も立て續けにしやべる僕は四五月頃の合服を着てゐて汗一つかゝなかつた始末だ。だから夏の樺太は避暑旅行の土地として實にいゝと思ふ。その上これと言ふて特別の絶景はないとは

言ふもの丶、内地では容易に見られないやうな原始的な森林や夏でも尙春のやうな色をしてゐる淺綠の中に織り込まれて桃色の柳蘭が燒跡の山野を幾里も幾里も打續いて咲き亂れてゐる景色は一寸他所では見られない美しさだ。柳蘭の美しさは碧梧桐か上手に書いてゐたが、あの美しさを見るだけでも樺太に來た甲斐があるやうに思つた。

それから君に勸められて登つた

突阻山

は豫期したより遙に良い山だつた。高さこそ六百米に足りないが、他にも餘り高い山のない樺太のことだし、その上緯度の高い關係上標高の割合には頂上近くが高山的な相貌をしてゐるので、登つた氣持は非常にいゝ。ハイマツ帶から上には珍しい高山植物が岩角岩蔭なぞに可憐な美しさを競つてゐる。頂上に立つて眺めると、斷崖は直に多來加灣から切り立つて、東方にはオホツクの海が果てしもなく續いてゐる。又山の位置が丁度南樺太の中央部に位する關係上北西南の諸方面には樺太の殆ど主な山を見ることが出來るし、西海岸をさへかすかに見ることが出來る。先づ〱登行價値百パーセントの絕景だと思ふ。その上、白石澤驛から馬群潭の濱に出る約一里の山路、馬群潭濱から山傳ひ崖傳ひに登帆に至る海沿ひの山徑、其他登路及び頂上から近幌驛に降るまでの原始林等、旅行者の目を樂しましむるに足るべきものが充ち〱てゐる。

海豹島

も確に態々來ただけの價値があると思つた。何と言うても、何萬と言ふオットセイが自然の生活を營んでゐるのをありのまゝに見るのは大したことだ。彼等の赤裸々な性慾生活、母性愛の發露、吾々は思はず時の過ぎるのを忘れて彼等の生活に見入つた。その上周圍十町にも足りない此島には數十萬のロッペン鳥が棲んでゐる。さうして不絕ガアー〱と氣味の惡い鳴聲を立てゝゐる。海岸ではオットセイが吼える、崖の上ではロッペン鳥が鳴く、かくして他に類のない交響樂が絕え間なく打續く。それは丁度ラジオの早慶野球戰で大安打球が飛んだときに聞かれる騷音に類似したもので、あれを更に何倍かに擴大したと思へばいゝ程すばらしいものだ。君も折角樺太にゐる以上一度は是非共見るべきだと思ふ。

それにしても、これだけ見るべき場所をもつてゐながら、依賴するに足るべき案内記もなければ、相談相手となるべき案内所の設備もないのは、獨り旅行者にとつて不便千萬であるのみならず、樺太それ自身にとつても非常に損だと思ふ。例へば、樺太旅行の日程中に海豹島見物を加へやうとする人は一體何所に相談すればいゝのか？　其簡單なことを知る途さへ現在の東京其他内地には全く存在しない。又例へば突阻山に登つて見やうとする人は何所からどう登ればいゝのか、又どの位時間を要するのか？　此單純なことを相談すべき場所は樺太に

來てさへ全然發見し難いのである。成程樺太廳は「樺太鐵道案内」なる册子を作つてゐる。しかし例へばあの案內記を信用して近幌驛から突阻登山を企てる人があるとすれば恐らくは登山の目的を達し得ざるのみならず、極端な場合を考へると生命の危險にさへ遭遇するかも知れない。案內記を見ると如何にも近幌驛から登つたらよささうに見えるけれども、實際近幌驛と突阻の頂上との間には殆ど登路がないのである。樺太廳がもしも內地から旅客を誘致する氣があるならばせめて旅客が精確な旅行日程を樹てるについて必要な案內記を作つて置く必要がある。も少し贅澤な註文が許されるならば、稚内から大泊に行く八時間の航海中に旅程萬事を相談し得べき案內係が船中に一人位置かれてゐていゝ。又若くは東京に其位の相談所を置いて置いてもいゝと思ふ。さもないと、旅行者は特に知人の世話にでもならない限り、殆ど日程を樹てることが出來得ない。

も一歩進んで言ふと、今後の樺太廳としては觀光客の爲めにも少し特別の施設をしてもいゝのではなからうか。先づ第一に現在豐原にある博物館はもつと規模を擴大すると同時に科學的分類を正確にして觀光客に先づ最初の正しい印象と智識とを與へ得るやうに設備されねばならぬ。次に樺太に特有な天然を見せる爲めに國立公園的な天然博物館を設けることが必要だと思ふ。今年丁度僕と時を同じうして樺太を訪れた某觀光團の如き、時間が非常に切り詰められてゐた關係もあるけれども、あれで果して團員一同に充分の滿足を與へ得たであらうか。無論それは一には觀光計畫を樹てた人々の無責任若くは無智に原因してゐると思ふけれども、態々東京から樺太見物に出掛けて、大泊豐原眞岡あたりの市街的部分を見て樺太を見たと思ふのは非常な間違ひだ。せめて東海岸に出て知取邊まで行く必要がある。所がそれにしても現在樺太の鐵道その他觀光施設は一般に不完全で短時間に樺太の大體を見得るやうに設備されてゐない。一つ突阻山あたりを中心として國立公園的なものを作り、途中登帆あたりに一泊すれば、山にも登り原始的な森林も通り鰊網も見る。豐原あたりの町では到底見ることの出來ない樺太の他の一面を簡易に見せる設備を作つてはどんなものだらうか、又少し時間の餘裕をもつてゐる觀光客に對しては今よりもつと容易に海豹島を見物し得るやうな施設を考へてはどんなものであらうか。かうして多數の內地人を樺太に引きつけることはあらゆる意味に於て樺太の將來にとつて極めて有利だと思ふ。今までの樺太廳は內地の資本家や利權屋の相手をすることばかり考へてゐたやうに思はれる。此際一つ考へ直して樺太と內地との關係を民衆的に密接ならしめる爲めにこんなことを考へてはどんなものだらうか？

まだ聞きたいことは色々あるけれども、餘り長くなるからこゝらで筆を擱かう。色々無遠慮な批評をしたがこれも君等の樺太を思へばこそのことだ。惡く思はないでくれ給へ。樺太はもう間もなく冬になるだらう。どうぞお體をお大事に。僕も是非一度スキーを持つて君等の自慢した粉雪を味ひにゆきたいと思つてゐる。皆さんによろしく。

米價慘落とその對策

緊急對策と根本對策

杉山元治郎

本年九月二十日現在に於ける第一回米作豫想收穫高は六千六百八十六萬七千五百三十石であつて、前年の收穫高に比較すれば七百三十一萬四千二百五十八石（一割二分三厘）の大增收、此の豐年ぢややの報一度傳はるや各地の米穀取引所は大混亂を來し、投げに次ぐに投げ、先物拾七圓臺を破るが如き暴落を呈し遂に立會休止の已むなきに至つたのである。正米も亦期米に連れて低落し、出來秋には或は石拾五六圓になるのでないかと危ぶまれてゐる。

若し今の豫想價格は眞實になるとするならば昨年の價格に比し約半額である。一割二分三厘の增收に對して價値の五割減は餘りに甚しい低落と云はねばならぬ。是には米本來の性質上海外輸出の充分でないと云ふことにも依らうが、又一面今日の取引所關係の獨斷所謂投機に偏らるゝ點も多々あるのである。此の偏りを耕作農民にのみ負はせることは益々農村を貧窮化せしむるものである。だから此處に於て其の對策の講ぜらるゝのは當然である。

併し米穀對策の問題は甚だ面倒複雑なる事柄であつて、生產者に都合よく價格の吊上げを行へば一方其反對に立つ消費者を壓迫することになるのである。だから生產者側の立場にあつて考へるのと、消費者側の立場にあつて考へるとにより其の對策は各々異なるのである、私は先づ農民の立場に立つて其の對策を考究せんとするものであるが、其の前に當り政府なり、帝國農會等の取らんとしてゐる對策に付き一言批判することにしよう。

政府は本年の大農作に直面して總動員を行ひ對策に狂奔してゐる、新聞の報ずる所によれば農林省の方針は

一、政府米の海外賣却

一、外米輸入制限令の延長

一、外米關税の引上
一、低資融通による買止め
一、内地米の買上
一、鮮米の移入制限
一、滿洲粟及び滿洲米の輸入防止
一、朝鮮人の鮮米需要喚起

等々である、是で果して七百萬石の過剩米を註文通り消化し得るや否や疑問である。うまく行かなければ米價の維持が出來ないのは當然である。政府の獻立によれば二百萬石を海外に賣り、内地及び朝鮮への輸入外米豫定額百五十萬石を防止し、三百五十萬石を買上げると云ふものである。さう問屋が卸せば需給のバランスが取れうまく行くのであるが、然う豫算通り行くものではない。例へば政府所有の古米約二百二十萬石を石十圓即ち消費地の外國米と同樣の値段で輸出しようと云ふのであつて、輸出仕向地は支那、南洋、インド歐洲等であるが、支那は十年來の豐年でありドイツも可なりの豐作だと稱へられてゐる。又南洋及びインド方面で使うてゐる米は大部分下級品で日本米は却つて其の嗜好に適さないのである。だから稍々僅かに望みのあるのは歐洲であるが、此處に從來からラングーン米は輸入せられてゐる。ラングーンと競爭するには白米とする必要があり、日本には遺憾ながら大量を其程に早急に精白する精米所の設備がないのである。如何に石十圓と云ふ捨價値で輸出するとしても左程に簡單には行かないのである。又朝鮮に對して外米は愚か滿洲粟の輸入を喰止めて、厭應なしに購買力を越えてゐる米の消費を強制することは無理な相談である。斯く考へ來れば政府の數量調節に困難が伏在してゐる。恐らく破綻するであらう。今日まで米價の吊上げに幾度か米の買上が繰返された、其の都度一時的に幾らか昂騰は見たが、忽ちにして舊態に復したのである。だから結局政府の望んでゐる樣な價値は平年作以下の凶作に巡り合はさない限り到底六ヶ敷いのである。米穀法運用の如何に無能力であるかは過去の經驗に徴し二億數千萬圓の損失によつても明かであるが、米國の實例を見ても知ることが出來る。彼の膨大な資本を以つてして猶ほ農産物價格吊上げ策は失敗である、況んや日本の樣な僅少なる資本による米穀法の運用の如きは何等の用をなさないのである。

（甲）緊急對策

一割二分三厘の增收によつて約五割減の價格は耕作農民に取つて大打撃である。肥料代の支拂にも、税金の納入にも事缺くのである。だから當面の緊急對策としては耕作農民に對し米作損失の補償をしてやることが大切である。前途の如く賣れない處に賣らうとして損失をするよりも其の損失を耕作農民に直接補給してやる方が農民は浮ぶし又最も賢い方法である。從來の米穀法運用の如き之を取

扱うた一部商人と地主の或者が儲けて實際の耕作農民は何等の恩典に浴しないのである。其よりも如何に小額でも直接耕作農民に補給することは眞の救濟になり、且つ消費者側にも惡影響を與へないですむ最も賢明な策であるまいか。

第二は籾の貯藏奬勵と補助金の交付及び低資の融通である、是は與黨の或者も進言してゐる樣であるが、三百五十萬石の新米買入はいろ〱の點に於て仲々困難である。現在所有してゐる古米を手放なさない限り資金に於ても亦倉庫に於ても差支へるのである。其で地方の農業倉庫に貯藏すると云ふ意見もあるが、地方の農業倉庫に持つて來ると賣止め處か却つて賣急ぐことは過去の事實によつて明かである。だから寧ろ各個人に於て籾の儲貯藏せしめ、其等に對して相當の補助金を交付すると同時に、一面資金を要するものには其を擔保として低資を融通する樣にすれば幾分か投賣を防止し米價維持或は吊上げに多少の効果を齎らし得るのである。政府の買上案や帝國農會あたりの稱へてゐる賣止策に勝る萬々である。

其他小作料の半減、税金の支拂免除或は延期、農業倉庫倉敷料の免除、借金の支拂猶豫肥料代の支拂延期等は直接米穀對策の問題ではないが、是等を履行する時は引いて耕作農民の出來秋に於ける肥料代税金其他のために投賣することを阻止し一面賣止めの働きをなし、いやが上に低落せんとする米價を維持する一策となるのである。

（乙）　根本對策

近年日本內地に於ては少々の不作であつても從來の如く米價は昻騰せないのである。何故であるか、其は需給關係を無視せる朝鮮及び臺灣に於ける米穀增收計畫の結果である。だから本年の如く內地は勿論臺鮮に於て豐作が一度報へられるや現在の如き大暴落である、故に臺灣米及び朝鮮米の處分案がうまく解決の付かない限り、今回の如き事件は幾度も〱繰返され、農民生活の基調が脅かされるのである。是に對する根本對策は何と云ふても米穀の專賣である、其の專賣案に就ては他日稿を改めて精しく申述べるであらうが、根本基準は先づ耕作農民の生活を保障するに足る價格を以つて購入し、一方消費者に對しては生活を脅かさぬ程度の價格を以つて販賣することである。斯くすることによつても國家は大なる負担とはならないのである。或は米穀法の誤用による損失よりも少ない費用で出來るであらう。

若し米專賣が不可能と云ふならば農民自身の自覺による組織を持つことである。從來農家は余りに政府を信頼し過ぎ、何も彼も政府がしてくれることと思ひ、所謂政府に任せ切りの態度は今度の如き狀態に立至つたのだと信ずるのである、先づ第一に米國に於ける穀

販賣組合の如く、或は加奈陀に於ける穀倉組合の如く耕作農民は固く團結し、農業倉庫を持ち、金融機關、運輸機關、市場等のあらゆる機關を握つて農民自身が生產物の價格決定權を握る樣にすることである。斯くなるならば如何に定期師が相場を立てても、正物は生產費に近い價格にまで昂らぬ限り倉庫の扉が開かぬのである。日本には產業組合も村々に普及してゐる、農產倉庫もあり、信用組合もあるが皆な天下り式である、農民の自覺によつて下から積み上つたのでないから駄目である。だから私は米穀問題の根本對策として農民の取るべき道は、前述の如く農家自身で販賣組織を確立すべきであると信ずる。特に日本の樣な小規模な農業經營形態の國では一層共同組織が必要なのである。

其外米價の變動により直に農家經濟に非常な影響を及ぼさない樣に多角的經營等も必要であるが、此處には精しく述べることを省略する。最後に一言附記したいことは、米が豊作で困ると云ふ一面に、飯が食はれないでゐる多くの失業者が都市に溢れてゐることである。石十圓位の捨價値で海外に賣出す位ならば此の失業者の群に飯を振舞うてやることである。彼等の多くは決して浮浪の徒でない。純良なる失業者である。「おかん」の群に居りつゝも『子供等には乞食はさせられません』と云ふてゐる人々である。此の人々に食を與へることが出來たならば米の海外投賣をするよりも一石二鳥の良策である。失業者に政府所有米を開放することを私は提唱するものである。

米穀法受難時代

那須　皓

一

內地に於て六千六百八十餘萬石、朝鮮に於て一千九百三十餘萬石と云ふ空前の收穫豫想が發表せられてから、米價はつるべ落しに慘落し、今や此の大豊作と、それに基づく米價とをめぐつて論議の渦が全國的に卷き起つて居る。問題は消費者の側からよりも寧ろ主として生產者の側から、或ひは古米二百二十餘萬石を抱へ米穀法運用資金の殘存額七千萬圓を保有するに過ぎざる政府の立場から論ぜられる。消費者側からすれば米は潤澤であり其の代價は僅に一二ヶ月の中に約三分の一を減じたのであるから、固より文句の附けやうはない。若しありとすれば唯將來採らるべき對

策についてのみだ。ところが生産者たる農民側から見れば、現在の米價は正に殺人的相場である。それは生産費の約半額にしか當らない。今、内地米總生産額中、果してどれ丈けが農業者又は小作米收得者の手から市場へ賣却せられるかと云ふに、正確なる數字は判明しないが、農林省の推定によれば大正十三年乃至昭和三年の五箇年平均に於て、地主の販賣額、年に約千二百四十萬石、自作小作者の販賣額約二千三十萬石、合計約三千二百七十萬石との事である。今、假りに之を基礎として計算すれば本年の豐作を受けたる今秋十一月以降の米穀年度に於ては約三千七八百萬石少なくとも三千五十萬石位は優に農業者及び地主の手から販賣せられ得るものと見ねばならぬ。而も斯く販賣數量に於て一割又は二割を増加せりとするも、米價に於て三四割或ひはそれ以上の低落をなすならば、米賣却による農村の現金收入は昨年に比して三億、或ひは四億をも減ずるであらう。

卽ち昨年販米の賣却代金は九億圓内外に及んだものが、今年産米に於ては五六億圓にしか過ぎないことになるかと懸念される。之は農村に取りて由々しき大事である。此の中、地主に關する部分を除き、實際の耕作者のみの手取りを見ても尚且つ約二億圓の收入減にならう。本年は繭價暴落の爲め農家の收入は昨年に比して三億數千萬圓を減じて居り、又蔬菜類暴落の爲め同じく二三億の收入減を來して居る矢先きである。之に加ふるに米價安を以てしたのであるから、今の狀態でゆけば今春より明夏へかけて農村現金收入の減ずべきこと農産物價格低落に基づくもの丶みで正に九億乃至十億に及ぶであらう。農民だけの收入減でも優に八億に達するかと思はれる。之を一戶當平均にすれば約百五十圓内外である。更に農村の子女が不景氣の爲め工場其他へ出稼ぎて勞賃を獲得する途を閉されたるもの多きと、又、居村に於ても仕事缺乏して雜收入の激減せると等を考慮に入るれば、農家の現金收入減一戶當り二百圓以上に達したと見ても過大な數字ではない。一方、地主は如何かと云へば引續きの收入減に惱める所へ、小作米一俵六圓内外では、其收入の殆ど全部が租稅公課に引き去られて生活費に充つべきものは殆ど一文も殘らぬことになる地方が少なからぬ。農業者、地主兩者を擧げて農村に喧々の聲の起つたのも無理からぬのである。

一方かゝる情勢は政府當局に對して至難の問題を提供する。米穀法は、かゝる時こそ活用せらるべきであるが、奈何せむ其の資金に於て既に窮乏を告げて居る。尙數千萬圓を殘せりとは云へ、今迄に年々一千萬圓以上の缺損を重ねて來たことを考ふれば、殘金の全部を直ちに使用し盡くす譯にはゆかない。僅々數千萬圓を以てして此の米穀の大洪水に當面しては眞の燒石に水の感なきを得ぬ。然も手持米二百二十餘萬石は刻々に經費を喰ひつゝあるのである。如何に此の米穀法を運用すべきか。

繭安、蔬菜安のみですら既に地方の納稅成績は著しく惡化し、小學校敎員減俸問題などの火の手が擧げられてゐるのである。急進主

農とは頗る緣の遠い帝國農會ですらも地租延納の聲を擧げて居るのである。今後の米穀對策その宜しきを得なかつたならば、如何に困難面倒なる事態が發生せぬとも限らぬ。他面失業者の增大は一の社會的危機をすら孕むで居る。當局者の責任は誠に重且つ大なりと云はねばならぬ。而も諺に云ふ如く無い袖は振られぬのであつて、米穀特別會計のみが窮乏して居るならば未だ始末がよいが、日本の財政全體が收入減で四苦八苦の際なのである。茲に當局者の惱みがある。米價調節の基準案によりても今や當然、當局の貸出動に向ふべき時期は來れるものと推せられるが、其の資金は充分でないのみならず、買上後の保管費、手持古米の處分、今後に於て米穀特別會計の被るべき損失等につきても再思三省を要するものがある。正にこれ米穀法受難の秋である。豐年飢饉の歎聲は、今や耕作者、地主階級の口からのみ洩るゝにあらずして、農務當局その人の偽らざる心境を吐露するものと云つてよい。

二

茲に筆を轉じて目下焦眉の問題たる過剩米處分案につきて一考する。抑も新年度に生ずる過剩米の數量は幾何石に達する見込であるか。最近本邦內地の米消費量は年に約七千萬石であるが之に對して、內地生產米約六千萬石朝鮮米移入約五六百萬石、臺灣米移入高約二百五十萬石、外米輸入約百五十萬石が宛てられ、尙足らざる所あれば繰越米を以て補ふと云ふ狀態になつて居る。繰越米は、米穀年度昭和四年の始めに於て約七百八十萬石であり、昭和五年度の始めに於て約七百萬石であつたが、それ以前數年間は五百萬石乃至七百萬石の間を上下して居つた。今秋に於ては、それは約六百五十萬石內外でないかと想像せられる。そこで今、米穀年度昭和六年分の內地供給可能米穀數量を列記して見ると、左の如くである。

前年度繰越米	六五〇萬石
內地產新米	六六八〇
朝鮮米移入可能額	一一〇〇
(昨年度の移入額五四〇萬石に本年度の增收見込額五六〇萬石を加へたるもの)	
臺灣米移入可能額	二五〇
外米輸入額	一五〇
合計	八八三〇

之より消費見込額七〇〇〇萬石、輸移出見込額約百萬石(輸出は近年は僅々數萬石に過ぎぬが移出は五十萬乃至百萬石に達す)を控除しても尙且つ千七百萬石餘を次年度へ繰越す事になる。斯くの如くんば例年の繰越米に對して約一千萬石を追加することになり、これが金利關係、倉敷料、品損じ等の爲めに賣り爽はるゝならば米價の慘落は彌が上にも甚しからざるを得ぬ。而も米價は永く其の頭を抑へらるゝに相違ない。

そこで上記の供給米穀量を減少する必要が感ぜられるが、先づ第一に採るべき手段としては米穀法第二條による外米の移入制限が考へられる。之は內地のみならず朝鮮、臺灣にも適用せられ得る。之によりて內地に於て百五十萬石、朝鮮臺灣に於て合計五十萬石、總

計二百萬石の外米輸入を防ぐことが出來る。朝鮮、臺灣の外米輸入禁止はそれ丈け兩地より內地へ移入し得る米の數量を減ずることになるから、結局之によりて內地市場への米の供給二百萬石を減ずることが出來やう。上揭の一千七百萬石より例年の繰越高約七百萬圓及び玆に述べたる外米二百萬石を減じたる殘餘八百萬石を以て、新米穀年度に於て處分を要する過剩米と看做すべきであるまいか。

次に供給量減少の第二策は主として滿洲より朝鮮に輸入せらるゝ粟百六十萬石の輸入を適當の稅率によつて防ぐことである。これは昨今の粟代金が石十五圓內外なるに鑑みて今日の米價よりすればさまで朝鮮の粟消費者に苦痛をかけずして行はれ得るのでないかと思ふ。之によりて朝鮮に於ける米消費力を假りに粟輸入と同數量丈け增大し得たとするならば、鮮米の內地移入額は減じ從つて內地の供給過剩量も上記八百萬石から六百四十萬石に減少する。

更に政府の所藏米約二百二十萬石を海外に投賣するとすれば、過剩米は玆に四百二十萬石に減ずるであらう。然らば其の賣上代金及び現存資金を以て此の殘存數量位は買上げられぬことはない。併し乍らかくする時は米穀法は運轉資金涸渇して運用上多大の困難を感ずべく、又金利、倉敷、品損み等による國庫の負擔も頗る大であらう。且つ實際問題としても本年は支那も米が豐作であり、其他の諸國に對しても食味、運賃等の關係から日本米を歡迎せぬから眞に棄賣りせざる以上は、急速に日本米の大量的海外輸出は絕望である。又假りに多大の犧牲を拂つて之を投賣し得るとしても、本年の如き順當なる天候に惠まれる大豐作は年々引續いてあるものでないから近く兩三年の中に必ずや米の供給量不足し、外米を今日の邦米棄値以上の高價を以て輸入すべき時機至るべきを疑はぬ。然らば我が國民經濟に多大の損失をかけてまで無理に賣りいそがねばならぬ必要は何處にあるのであるか。貯藏米の金利、倉敷料、品損みであるかはた、貯藏量が米價上昇を阻止する傾向あるからであるか。此等二點に對しては別に考案が立てられぬものであるか。私は何とか別に途があるのではないかと思ふ。

偖て政府手持米海外投賣は不可とすれば、六百四十萬石の過剩米を如何に處置すべきや。米穀特別會計は今、之を購入する丈けの資金を有せぬ。假りに資金を都合つけたりとしても政府が九百萬石近い米を所藏し、其の一切の金利、倉敷料、品損みを負擔するに於ては、在來の經驗より推して、年々の損失額恐らく三千萬圓を突破するであらう。政府が正米相場師とならぬ限りは此の損は免れ得ない。而もかゝる負擔は目下の我が財政が之を許さぬと思はれる。

玆に於てか財政的負擔を可及的に輕くして米價調節を圖るべき方策が考案されなければならぬ。農務局立案として新聞紙上傳ふる所の低資融通案は正に其の一である。之によれば低利資金三千六百萬圓を融通して農業倉庫に玄米三百萬石を、又低資千二百萬圓を融通して農家に約二百萬石を貯藏せしめむとする

ものであつて、合計四千八百萬圓の低資融通をなさんとするのである。而して玄米は來年二月まで保存し以後月別販賣をなさしめ、籾は明後年まで之を保管せしむるのである。融通限度は新米庭相場一石十五圓と見て其の八掛の十二圓、籾七圓五十錢と見て同じく六圓までとするのである。

之は確かに一の良案たるを失はない。併し乍ら貯藏米全部を玄米に換算して四百萬石に止るのであつては尚過剩米二百四十萬石を殘すことになる。殊に貯藏玄米が明年二月より賣り出さるゝと云ふのであつては、之を以て米價の下放れを充分に阻止することは困難と思はれる。効果ありとしても二月迄に賣り出さるゝは農家の販賣額總量の五割であつて殘餘の米に對してはその効果が及ばぬ憾みがある。これでは米價を或度迄上昇せしむる力を有するや否や疑ひなきを得ない。

そこで私は更に徹底的に擴張し改造したる下案を主張したい。

(1) 地租の籾代納を認むること、田畑地租合計約五千五百萬圓であり、此の中三千萬圓が籾代納となるとせば籾一石七圓五十錢と見て、總量四百萬石に達する。此の籾は資金が許せば米穀特別會計にて購入し農林省の手にて管理すること。

(2) 政府所藏米二百二十餘萬石を籾四百萬石内外と交換すること。以上によりて政府所藏の籾八百萬石に達す。

(3) 別に政府は農家に低資を融通して籾四百萬石位を貯藏せしむること。

(4) 以上の外、政府は必要に應じて玄米又は籾の適當の數量を買上ぐること。

(5) 貯藏籾は米價暴騰せざる限り明後年に至る迄之を市場に出さゞること。

私が玄米よりも籾に重きを置くは籾は貯藏中の品損みが少なくよく數年の貯藏に堪へてさまで變質せざるを以てゞある。而して地租代納を認めた籾は、當該町村に責任を負はしめて之を該町村に於て倉敷料無しに保管せしむることにしたい。

以上の案は外米輸入の制限や、滿洲粟輸入制限と同時に之を行はねばならぬ。更に鮮米の内地殺到を避くる適當なる手段を取る必要あるべく、朝鮮自體にても籾二百萬石位は之を貯藏するやう考慮すべきであると思ふ。此等の方策が徹底的に行はれるならば、私は米價の此上の低落は阻止され却つて徐々に上昇し來るであらうと察するのである。

米穀法そのものゝ改造、農家の農産物販賣組織の改造につきても論じなければならぬことが多いが、今は其の暇が無い。以上に述べた私の對策中には農家の自助運動が擧げられて居らぬが、之は其の必要を認めぬからでなく急場の間に合はぬを恐るゝからに過ぎない。實はこれこそ最も重要なるものである。いづれにしても籾價や米價の暴落に刺戟されて、我が農業政策に一轉換をなすべき時節が到來しつゝあるのである。我々は米價對策を講ずると共に農町不況時代に於ける農村社會の階級的變化、土地所有權の移動、資本主義的勢力の農村侵入等につき注視するところあらねばならない。(十月十一日稿)

現代短歌全集（全二十巻）

第十四回配本

第七巻　尾上柴舟集　窪田空穗集

配本濟

- 2 宮廷歌人七人集
- 3 落合直文・佐佐木信綱集
- 4 正岡子規・長塚節集
- 5 與謝野寛・晶子集
- 6 伊藤左千夫・岡麓集
- 9 北原白秋・吉井勇集
- 10 石川啄木・土岐善麿集
- 11 若山牧水・前田夕暮集
- 12 齋藤茂吉・島木赤彦集
- 13 古泉千樫・釋迢空・石原純集
- 15 中村憲吉・土屋文明集
- 17 女流歌人五人集

別巻

- 明治天皇御製集
- 昭憲皇太后御歌集

小酒井不木全集

＝第十七回配本（十月）＝

第十七巻　探偵小説中篇集

（内容一斑）

鳥を飼ふ女―得意な容疑者―邂逅―長生藥由來―躓く探偵―初往診―ひすゐの簪―五階の窓―吉祥天女の像―スペートのキング（ドーゼ）―乾板上の三人（ローゼンハイン）

近刊豫告

岡戸武平著　不木の闘病生活

滿天下の闘病術の信仰者に捧ぐ

○裝幀は本全集と同じ。五〇〇餘頁。定價一圓。

○不木の闘病術的實生活の全豹を描きたるもの。

○本書の著者は不木の膝下に四年間の薫陶を受け、不木の闘病的精神力をもつて完全に健康を闘ひ取つた人。本著書に最適の人。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

若山喜志子著（中川一政裝幀）

歌集 筑摩野

四六判上製
布表裝函入
歌數千二百二首
定價貳圓
送料貳拾貳錢

最新刊

著者は信州筑摩野に生れ筑摩野に育ち、あくまでも生一本な熱情に生くる人。歌はもとよりその熱情の所產、人事の歌にも一莖の草花の歌にも、常に脈々と浪うつ熱情の感ぜらるるをその特色とする。牧水氏の歿後實生活に直面するに及んで愈々光輝を增し來り、今や女流歌壇はその歌によつてのみ輝くの觀を呈して居る。本書は著者が「これがほんたうの處女歌集でありまた自分の今までの全集」であるとして、その筑摩野の少女時代から最近の作まで三千首中より精選に精選せしもの、一首々々みな燦然たる珠玉の光輝を有つ。詩歌壇最近の一大收穫として廣く江湖の清鑑を俟つ。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

室生犀星著・最新刊・

定價貳圓
送料二十四錢

薔薇の羹

薔薇の羹一卷

目次

隨筆	百十九篇
小篇	二篇
文藝雜稿	十八篇
詩	十四篇
人物評論	十二篇
發句	十六句
悼文	五篇

室生犀星氏獨特の匂ひ濃いものだ。「天馬の脚」以後更に飛躍した凡ゆる方面の作品傾向を知ることが出來、最もよい意味の美祿「薔薇の羹」だ。これを料理することの出來る作家は當代氏以外には無い。こんなに親しめる、萬人の渇を滿たす書物は一寸は出ない。一讀忘れられないだらう、この文章の味、この批評の骨格、この詩的神韻。新鮮な高雅はここにのみ窺へる。

室生犀星著（隨筆集）**庭を造る人** 定價二・〇〇 送料・一二

室生犀星著（隨筆集）**天馬の脚** 定價二・五〇 送料・二四

東京芝區愛宕下町 改造社發兌 振替東京八四〇二

現代日本文學全集

第二十八篇

抱月・長江・臨川・仲・孤雁集

第四十八回 十一月上旬 配本

（内容）

島村抱月集

〔評論・紀行〕西鶴論　悲劇論　囚はれたる文藝　沙翁の墓に詣づるの記　ルイ王家の夢の跡　自然主義の價値　序に代へて人生觀上の自然主義を論ず　懷疑と告白　近松の藝術及人生　奈良より　『人形の家』とイプセンの作劇術　メーテルリンク論

〔戯曲〕淸盛と佛御前　運命の丘　競爭　復活

〔小說〕山戀ひ　（その他）

中澤臨川集

〔小說〕嵐の前

〔評論〕余の態度　新藝術觀　思想藝術の超然性　感能さまぐ\　愛は、力は土より　湘南病褥錄　新社會主義への道　（その他）

片上伸集

國木田獨歩論　アーサー・シモンズ論　イエーツ論　近代文學に對する疑ひ　思想の力　内在批評以上のもの　現代日本文學の問題　無產階級的文學批評　否定の文學　トルストイの宗教的人生觀　現代ロシヤ文學の印象　ロシヤ無產階級文學の發達　（その他）

生田長江集

〔戯曲〕圓光　靑い花　天路歷程　彫刻家とその妻

〔詩〕やや老いし人の蝸牛を見てよめる　ひややかにたちつくし　白躑躅　母逝く　弘前の玩具の山鳩　月明　お庭の松の　冬の日　くもり日　月光雜曲　永久の惡魔　二つの祈り　一つの元素　我は一の磁石なり　革命と復古主義

〔評論〕新貞操論　マルキシズムの阿片性　蟲のいい人類　何故鳶が鷹を生むか　（その他）

吉江孤雁集

〔小品〕綠雲（槻の森　車の男　草叢　新綠　夢　春の街　風の日　死　曇天　夏の日　渡鳥　枯林　梅雨　霜月　石地藏　蜻蛉　郊外　都會と自然　高原の村　葡萄園　墓　森の庵　冬の國　信濃高原　橡の落葉）　杜の家（杜の家　切株　松林）

〔評論〕自然美論　藝術の歩道　（その他）



記念碑

貴司山治

この話は、何縣何村の事實のやうに書いてあるがそれは嘘で、實は現在の日本全體の物語である。そのつもりで讀んでくれたまへ。

一

大澤村は、冬は雪に埋れる滋賀縣の山の中の村だ。

村は五百戸、人口二千。そしてこの內、村には、故なくして卑しめられる人人が昔は百七十戸あまり、凡そ五百人くらゐ住んでゐた。十何年前、それらの人々は村の西方高地の谷間にかけて、かたまつて住んでゐた。そこを「庵谷」と稱し、一番村中からいやしめられてゐた。ところがその頃、この庵谷にラヂウム温泉がわくやうになつた。

庵谷は百五十戸までが小作であつた。猪狩伊兵衛といふのが傳來の、部落の統領で大地主であつた。百五十戸が殆んど全部猪狩の小作であつた。猪狩は小

作料でまるまると太つてゐた。奴は庵谷の人間だといはれるのがいやさに、本宅を京都にうつし、下鴨に、でッかい西洋建築を建て、娘を×の紋のついた女學校へ通はせてゐた。

ラヂウム温泉は、勿論、猪狩の地面にわいたのだ。猪狩は京都からわざ〳〵「博士」を檢分によこした。

博士の、試驗の結果、世界第何番目かの放射能何とかを含むラヂウム温泉だといふことが新聞などにやかましく書き立てられた。そのことが、一年とたゝない間に、庵谷の人間にとつては死活の問題と變じた。

といふのは地主猪狩伊兵衛は、庵谷の持ち地全部を京都で他人に賣り拂ひ、その「他人」共が庵谷温泉土地株式會社といふものを「設立」した。そしてその會社から、不意に百五十戸の小作人に向けて、「所有權移轉通告土地返還請求」の内容證明狀が續々と來た。

勿論、大騒ぎとなつた。約三百人の人間が、折柄の雪を踏んで山を下つた。東海道に出て、瀬田の唐橋を渡り大津に出、そこから汽車で京都の猪狩の邸へのりこんだ。

猪狩は、村方に無斷で土地を賣つたのは悪いが、詫びにかへて、では小作人一同、庵谷の者たちに、金一萬圓を出す、といつた。

一萬圓？　押しかけた連中は、一萬圓におどろいたのだ。先祖傳來の小作地に離れる代りに、めい〳〵の懐中へ、今まで夢にもみたことのない大金が——一人當り平均六百六十圓づゝ——はいるのだ。一同はそれでおさまつた。

けれども、欺されたといふことがわかつたのは、それから三年とかゝらなかつた。みんなは、耕作をやめると、何もすることがなかつた。庵谷にゐては、暮らせなかつた。

「もし困るやうなら、京都へ出て猪狩の工場へ使つてもろたらどないだ。その世話ならわしがしたげる」

自作の筆頭第一で、猪狩家の小作管理者をしてゐた坪井善五郎がかうして約五十家族の部落民を京都へ追つた。かれらは、京都へ出て、深草練兵場の裏手にある猪狩伊兵衛のアニリン染料工場で咽びながら働いた。

大澤村には百戸ばかり殘つた。

庵谷に入りこんだ庵谷温泉株式會社の土方や人足は、かれらのみてゐる前で、もとかれらがわが肌の如く何十年來大事にか

けて手を入れて來た田を、容赦もなく掘り起した。

だんだら染の棒をかついだ男どもや、目つきの惡い卷ゲートルの男などが毎日、毀されてゆく田の畦道を飛び歩いた。田はまたゝく間に道路となり、住宅地と變つた。山林は伐り拂はれて、そこには、洋館の建物が建つた。溫泉旅館だ。

元村（庵谷よりも東海道筋に近い下手の、大澤村の中心地がさうよばれてゐた。）の方には、飲食店や、雜貨店が出來、一二軒の銘酒屋までができた。それらは他所者の勞働者や「會社の人間」によつて繁昌した。

庵谷の者たちは、たゞぢつと居食ひをしてゐた。會社は、居殘つてゐる者たちに對して、その焚きつけにもならない藁屋根の家と、家の建つてゐる地面とを、時價の倍額位で買收し始めた。その又周旋を坪井や、その外の、現にまだ耕作をつゞけてゐる自作たちがやり始めた。

それで、最後の家と地面を賣り拂つて京都へ、又はよその村へ、逃れて行く者がふえて、今は元の小作は八十戸ばかりとなつた。

八十戸の農民は三年目に、凡そ、猪狩から貰つた六百六十圓の手切れ金を食ひつくしてゐた。

元村は小さな町となり、庵谷には七軒の立派な溫泉旅館が建つた。草津と大津から乘合自動車が元村までくるやうになつた。會社は自動車の通る路を元村と庵谷の間につけ始めた。

「庵谷に七八十軒の×××の家がある間、折角のラヂウム溫泉へも、お客はこんだらう！」

かういふことが元村あたりでいひふらされた。しかしほんとうはラヂウム溫泉が發見されたゝめに百五十戸の小作が全滅しかけてゐるのだ。

大體、ラヂウム溫泉を發見した「博士」の奴がこの災難をまいて行つたんだ。「博士」が何の木につく虫だかは、今ではみんなにわかつてゐる。

「相當の立退料を出すから、共存共榮のため、何とかならないだらうか？」

會社は八十戸に對してから申込んできた。成程多分の立退料を貰つてよそへ行つて小商賣でも始めれば食つて行けるだらうし、會社も部落民がゐなくなつて溫泉地が繁昌するだらう。

しかし、それでは部落民は明らかに「差別」されたのだ。何

苗の取引なのだ。拒み、戰はなければならない。

さうした決意をしたのが、自作の中に六人、舊小作の中に四十一人あつた。

「わしらは四十七士だ！」

そして庵谷の四十七士は、大津の滋賀縣水平社本部をみつけ出し、そこに聯絡をとつて、大澤村支部を作つた。

——これに加はらなかつた連中は、立退料千圓、田一反五百圓（その頃の時價は二百圓だつた。）の買收値段に眼がくらんで會社と妥協し、仲間を見すてゝ、村を去つた。

殘つた連中に對して、會社は元村の東の島地といふ草津よりの小字に百町歩あまりの水田を買ひこみ、「庵谷の立退料を三百圓出した上、島地にめいめい百坪の宅地をたゞでやる。そして一戸につき一町づゝの小作を三十年契約でさせる。」と申込んで來た。

會社の代表者は二人づれで「滋賀縣水平社大澤村支部」といふ板看板のかゝつた轟榮吉の家へ訪ねてきて、

「われわれがあんた方の生活について心配し、決してあんた方を差別しーゐないといふ證據に、われわれは進んで三十年間もの地主小作の親密な關係をあんた方と結ばうとしてゐる。これでもおわかりになりませんかね。」

四十七人の間に、この會社の案は、大きな問題となつた。三十六人までが會社の申込みに應じようといつた。あとの十一人が反對した。

「庵谷を立退かさうといふ案である限り、どないに變つた案でも、差別問題ぢや。」

かういひ張つて、反對をとなへた十一人は、三島、黒瀬、大澤、小牧、石川等々、みな三十代前後の働きざかりの、中堅分子であつた。そして、この十一人が小作中の一番貧乏な仲間であつた。

「お前らは、家族の事情が違ふから、そないに頑固にいへる。わしらは双親に子供四人の大家内をひきつれとる。どないにして食うて行けるかい。それを考へてくれ。」

支部長の轟が涙を浮かべて十一人にいつた。

「わしちア、九人の家内ぢやぜ。上の娘を大津イおやまにでも賣れば食ひつなげると思て、こないだ元村の周旋やんにいうてみた。十四では早やすぎるツちうて、物にならん。この先きお前

ら儲うて生きて行く積りや。わしらア、早う元の百姓せんと今に餓え死ぬだけぢや。」

岸田のおやぢは洟をすゝつた。

みんな、しいんとなつてしまつた。みんなうなだれてゐた。

ひとり、頭を立てゝゐた反對派の三島は、あたりを見渡して靜かにいつた。

「ようわかつた。お前らのいひ分を無理とア思はん。又思へん。足かけ三年越し、よう頑張つてこれまで來た！　わしア、しかし、まだこの上やる積りぢや。みなもいふやうに、家内の事情が違ふだらう。わしア、女房とお母あとの三人きりぢや。土くうても、世の中の奴らに、わしらを××といはさんやうにしてみせる！　もう討論終局ぢや。みんな會社の案に同意する者は島地へ移つて、元の百姓になつてくれ。一人でも、二人でもわしと一つ氣のものはここにのこれ！」

「のこる！」

黒瀬と大澤がすぐに、一緒に、答へた。十一人組だ。

十一人組の、他の連中も一樣に顔をあげた。そして靜かに、異口同音にいつた。

「のこる。」

三島は轟の力を視た。

「支部の旗をくれ。」

「うム……」

靜かな動搖の中で、轟の持ち出してきた支部旗が、荊冠旗が——三島の、十一人組の、手に渡された。だれからともなく、すゝり泣いた。

二

かくして、庇谷には十一軒がのこつた。十一軒はしば〳〵、會社の土方たちに襲撃されては犬のやうに亂鬪した。侮辱の言葉をあびせられるたびに、十一人の男たちは束になつて會社へねぢこみ、大勢の土方たちに叩き伏せられて、怪我をした。

滋賀縣本部は、野洲、甲賀、蒲生、愛知の各郡支部から三百人を大澤村に動員して、庇谷の會社事務所を占領した。

「侮辱した土方を即時解傭し、十一人に負傷させた見舞金を出し、謝罪廣告を新聞に出せ。でなければラヂウム温泉のすべての建物を破壞する。」

土方は逃げてしまつてゐた。捕へられた事務所主任や、事務員たちは生きた顔色をしてゐなかつた。しかし、土方を逃がしたといつて激昂した三百人の一部分は既に早く、事務所の窓や建具を××し始めた。

大津と、草津、守山等から、五十人の巡査が庵谷へくりこんできたのはその日の夕方であつた。三百人の示威隊は引揚げたあとだつた。夕闇の中に半つぶれにこはされた事務所だけが白くのこつてゐた。

巡査は十一軒の總檢擧を行ひ、十一人の支部員全部を、繩つきにして草津へつれて行つた。

滋賀縣本部は一齊に草津町へ大衆示威を行つた。京都本部は、庵谷温泉土地株式會社本社と、いつの間にか、そこの監査役におさまつてゐる猪狩伊兵衛の邸宅とに示威隊を送つた。

十一人の内三島、黒瀬、大澤の三人が大津へ廻されて膳所監獄に二ケ月ゐた上、「刑法第二百六十條」とかいふ奴で十ケ月の懲役に處せられた。

三人が一年ぶりに庵谷へかへつてきた時、元村には、自動車のガレーヂや新築の料理屋が建ち、三味線が鳴つてゐた。新開地らしい空氣がたゞよつてゐた。

そことは反對側の谷にくつついたわづかな日陰の廣地に十一軒の部落民の家が時世におき忘れられたやうに建つてゐた。それは全く時世におき忘れられたものに相違なかつた。世界戰爭のあぶくに浮んで日本の資本主義が氣狂ひのやうに飛躍しつつ、あらゆる方面に及ぼし與へてゐる「好景氣」の影響から、その一諸は完全におき忘れられてゐるしろ物であつたから。

三

それでもその年の京都にひらかれた水平社全國大會へは、旅費を工面して大澤支部からは、三島と大澤の二人が荊冠旗をかついで出かけた。

この大會へ、同志社大學の講師で社會主義者だとの評判の高かつた濱本千藏がきて祝辭演説をやつた。

二人は村へかへつて大會の模樣をつぶさに同志に報告した。

翌年の夏、はつきりいへば一九二二年（大正十年）だ。三島は盆前の共同墓地の大掃除にやとはれて出かける途中、温泉町の、バラスの敷かれた廣い坂道を、浴衣がけでステツキをふり

ふりくる中年の男を見て、それが去年の大會で祝辭演説をやつた濱本千藏であることを發見した。

「濱本さん！」

三島は、思ひ切つて頰かぶりをとり、よびかけた。

「濱本さんでせうな。わし、この村の水平社の者です。」

濱本はステッキをふるのをやめて、立ち止つた。

「さうですか。どこです？」

ときいた。

「そこです。」

と三島は谷の日陰にかたまつてゐる十一軒の小屋のある方を指した。

「わし、去年の大會へ出ましたんで、あんたの顔を、覺えてゐましたよ。」

「さうですか。僕、そこの滴翠閣といふ温泉宿にとまつてゐるんです。遊びにいらつしやい。」

「ありがたう……」

三島はお辭儀した。濱本は先きへ大股に歩いて離れて行きながら、ふと思ひ出して又立ち止まると、きいた。

「君、何といふ名前です。」

「わし、三島茂吉です。」

濱本はうなづいて、だん／＼遠ざかつて行つた。三島は暫く立つて見送つてゐた。

何故、三島が濱本に逢つたことを、わざ／＼年號を入れて書いたか？それにはわけがあるのだ。

濱本は遊びにこいといつたが、三島にはそんなヒマがなかつた。こまかな、安い仕事の日傭人となり、田の草とりの作男となつて、三里も五里も先きまで出かけて歩いた。あの冬中の何十日もの雪を思へば今の内に一所懸命働いておかねばならない。

濱本に逢つた日から一週間目に雨が來た。夜、三島が莚の上にねころんで體をひやしてゐると白い浴衣がけの男がのつそりと、小屋の入口にあらはれた。

「三島君の家はどこです？」

三島は、その聲でそれが濱本だと知ると、とびおきて、がさがさくらがりを手さぐりに、着物を着ながら、

「わしです、こゝです。うちはデンキがないので、くらがりな

んで、大澤の家へ行きませんか、先生！」
　三島と、濱本は、電燈のある（十一戸の内、電燈のあるのはそこだけだつた。）大澤虎松の家へ行つた。
　大澤の家で濱本と三島と暫く話してゐる内に、大澤が知らせて廻つたので、七人ばかり、男が集つてきた。皆うすぐらい十燭の電燈を中にして車座になつた。
　濱本は疊の上に坐るのが痛さうに、兩足をなげ出して、もう三島を相手にかういふ議論を始めてゐた。
「水平運動はまもなく必ず行詰ります。」
「行詰る？　何故ですか」
「第一、水平運動は差別撤廢といふごく一部分的な封建的遺制の打破にしかすぎない。この目的は十分に遂せられると思ふし、現に遂せられつゝあるやうだ。その限りにおいて水平運動は正しい。しかし、諸君の生活の全體は、決して水平運動によつてよくなりはしない。諸君が水平運動によつて萬事を解決しようとしたならあと三四年で行詰る。水平運動では結局水平運動の最初の目的だけしか解決されなかつたといふことがわかるだらう。だから今から方向轉換の必要がある。」
　みなは十燭の電燈の光りの下に、日にやけて瘦ぼねの出た疲れた顏をおの〳〵緊張させながら、濱本の方を見守つてゐた。
「よくわからないやうだね。ぢや一問一答で行かう。一體諸君は何者か？」
　濱本は皆を見廻した。
「わしらは、世間の奴らに××だといはれとる人間ぢや。」
　大澤が沈んだ聲で答へた。
「たつたそれだけか？　その外には？」
「…………貧乏人だ。」
　石井か、だれかゞ答へた。
「貧乏人、間違ひなし。そして、いかなる種類の貧乏人か？」
　濱本は眼を光らして皆を見廻した。
「…………………？」
「？──」
「ではきくが諸君は小作人か？」
「違ふ！　わしらには、田も畑もない。」
　三島は古い怨みを思ひおこして答へた。
「さうだ。さういふのを、農業プロレタリアートといふんだ。

日本語でいへば諸君は農業勞働者だ。この階級が農村では一番下の階級だ。諸君の上には、貧農階級がある。五反から一町迄の小作をやつてかつ〳〵に食つてゐる階級のことだ。この二つの階級が、農村の八割を占めてゐる。即ち米は……」

と濱本は突然大きな聲を出した。

「――米は、貧農と、農業勞働者によつて作られるのだ。地主はふところ手をしてその五割をロハでうばひとる。この地主階級は下は三町五町から上は何千町歩の土地を持つてゐて自分は働かない。奴らの外に二三町の土地を持つて自作する勤勞地主階級がある。これは毒にも藥にもならないからすてておき、われらにとつて、農村から、大地主階級を片づけてしまはない限り、われらがうまく暮らせる道理はないのだ。小作する土地をさへうばはれて一番下積みになつてゐる諸君ら農業勞働者に至つては、まづその土地を地主から獲得しなければならない。つぎに五反百姓はもう五反、まづ一町歩の土地を地主から獲得しなければ生活ができない。そして、折角耕作しても、ロハで五割とられては立ち行かないから、小作料の半減を地主に要求しなければならない。これらの要求は戰はねば獲得できない。戰ふための組織として農民組合が入用だ。全國の、貧農と、農業プロレタリアートが打つて一丸となつた日本農民組合を結成し、共同の綱領をかゝげ、日本中に共同戰線を張りめぐらして、あらゆる農村で、組合は地主に向つて、要求を叩きつけ、容れなかつたら小作料不納同盟で戰ひ、大衆行動をおこして、地主の當然の對抗手段となる「土地取上げ」「立入禁止處分」等と鬪爭するのだ。この鬪爭を起す農民組合の結成こそ貧農の前途をきりひらく唯一の道だ！」

みなの顏はこはばつたまゝ宙にぶら下つてしまつた。多くの眼玉はぎよろりとなつて、叩きつけるやうな聲の飛び出す濱本の唇に向つてそゝがれてゐる。

「――それからだ。農村の地主階級といふものは單獨に横暴を極めてゐるのではない。かれらは都市の資本階級と密接に結びついてゐる。都會の資本階級はすべての工場を所有し、何十萬何百萬の勞働者を使役して莫大な生產品を作り、それを商品として市場で賣買し、その利益を全部獨占してしまふ。即ち地主と貧農の關係が都會では資本家と勞働者の關係だ。で、都會では勞働者が、勞働組合を作つてストライキを以て資本階級に對

抗し、賃銀値上げ、その他の勞働條件改善の要求を叩きつけてゐる。今、東京、大阪方面の勞働運動は火のやうに盛んなのだ。大阪では毎日二三件の新らしいストライキがおこつてゐる。そして八九分といひたいが九分九厘までは勞働者が勝つてゐる。農民運動は、この勞働運動にずつとおくれてゐる。これを進めて、勞働運動に結びつけ、都會と農村とで、無産大衆が共同の×——即ちくはしくいへば××××××と戰はなければならない。」

濱本は、腕をつき出して眼を光らせたが、ふと咽喉の奥で咽ぶと、俄かに、言葉を切り、ハンカチを出して、唇をおさへた。そして、咳をした。ハンカチには血がはき出された。大澤はびつくりして、水をくみに走つた。あはてて水を茶碗にくんで引返してくると濱本は疊の上に倒れてゐた。三島や小牧、黒瀨などが濱本の背中を、左右から、とりまいて、なでさすつてやつてゐた。

四

翌日、雨の中を三島、大澤、黒瀨の三人が島地の轟たちを訊ねたのは、二年ぶりだつた。

三人は轟の家で半日話しこんだ。きのふの濱本の話をだ。話す三人の胸には、世界がきのふ迄とは違つてゐた。轟たちとの分裂以來の氣まづさも、もう問題でなかつた。

「ようしかし、その、農民組合の話をしにきてくれたな。これといふのも、お前らがあれから三年ごし、水平運動に苦しみぬいた揚句のはてに、この道がわかつたんぢや。もし農民組合がうまく行つたら、お前ら十一人はわしらの恩人ぢや。」

「いや、うまくやらいでか！……わしらの恩人は、わしら十一人ぢやない。濱本先生ぢや。氣の毒にゆうべ血を吐いて、滴翠閣でねてござる。」

「さうか……」

濱本の血を吐いたことに話がふれると、四人は言ひ合はしたやうに、くみ交はしてゐた酒杯を下においた。

「すまん、こりや、やめる！」

轟は、壁に酒杯をなげつけた。

「勿體ない。酒杯はめぐな——わしもやめる。」

三島たちも、相手を制めながら、酒杯を片づけた。

「みな、よんでくるから、待つとつてくれ。」
轟は丸裸の上に雨簑をつけて、笠のひもを頸の下でくゝりながら、雨の中へとび出して行つた。
午後は、轟の家へ二十何人あつまつてきた。無論みな昔の庵谷の仲間だ。轟の家へはいり切らない人數は隣りの岸本の家へあつまつて、そこでのがや〳〵といふ話し聲が雨の中をこえて轟の家まできこえてきた。
夜に入つても人々は散會しなかつた。
庵谷から來た三人が、島地の代表六人と一緒に庵谷へ出向いたのは夜の十時をすぎてゐた。もうその時はかれらの間に「大澤村農民組合」が生れてゐたのだ。
庵谷の滴翠閣には、水枕に顔を埋めて濱木がねてゐた。簑笠でやつてきた九人の連中は、旅館の仲居たちの眉をしかめさせながら、どや〳〵濱木の部屋に上りこんだ。
仲居たちは階段の下に五六人たまつて、
「何やろ、あの連中、何しにきたんやろ。」
と、懸念だつた。土間には妙なにほひのする滴だらけの雨簑が澤山ぬぎすてゝあつた。

「大澤村農民組合、萬歳ッ!!」
「萬――歳ッ!!」
「萬――歳ッ!!」
突然、二階の、濱木の部屋の方から、たゞならぬ叫び聲が起つた。仲居たちはうろたへて逃げ、男衆や料理場の連中が血相をかへて、階段をかけ上つて行つた。
濱木の部屋では、浴衣のねまき一枚の濱木が、頬骨のとび出した大勢の連中にとりまかれて、蒲團の上に坐つてゐた。衰へた青白い顔に微笑をみなぎらし、何か非常にこの場の情景が氣に入つてゐるやうであつた。
「なアみんな、ちやア一つ、おれが、農民鬪爭歌といふのを教へようか。……うたふから、覺えるんだよ。いゝかい。」
と濱木は舌なめずりして、みんなの顔を笑つて見渡しつゝ、思ひがけぬいゝ聲で草津節を唄つた。

××××××××××

年貢やらなきや野垂死に

今年三割來年五割
末は小作のつくり取り
農民組合知らんやうな奴に
だれがお嫁に行くものか

九人の男たちは、あつけにとられてきいてゐたが思はず拍手した。

「何だ、何だ？……」

濱本は廊下に立つてゐる宿の男たちにとがめるやうな聲をかけた。

三島が、砂利の坂道で濱本に出會つたことをわざ〳〵作者が年號を入れて書いたのはこのわけである。二人が偶然出會つたのが動機となつて（動機といふ言葉を見落すな、主體は既にあつたのだ。）卽ち一九二一年八月（大正十年）——都會では好況時代の終末期に、ストライキが花火のやうに無數に日毎に爆發してゐた年——そして、日本の勞働組合運動が畫期的に飛躍した年——に、滋賀縣の奥の、おき忘れられた山の中では、雨の土砂降りの夜に、農民組合が生れたのだ。

五

七年たつた。この七年間に農民組合は日本全國にひろがつた。滋賀縣では大澤村農民組合が中心となつて、鬪爭によつて、全縣下に三十いくつの組合が作られ、それが悉く左翼の日本農民組合に結集し、その縣聯合會も生れた。それは旋風のやうな發展であつた。

そして、第一次普選の年が來た。

一九二八年の普選は「我國最初の普通選擧」として意味があるのではない。では、どういふ風に意味があるのか？

前年の冬、日本のプロレタリアートが、漸くセクトを脱した〇〇××黨を持ち得て、「合法黨」としての勞農黨を表面に立てるといふ過渡的な形態でではあつたのだが、この選擧を機會として公然の舞臺に乘り出してきて煽動宣傳を開始しはじめたといふことにある。

大澤村農民組合は、地主たる温泉土地株式會社を相手に七年間に長い戰ひを三度やつた。そして二十幾人の犧牲者を刑務所へ送つた。その七年間の悪戰苦鬪物語はいつか又別に書かう。大澤村農民組合は戰鬪の中に伸び、力を強め、滋賀縣全體の組織運動の原動力となり、三島や大澤や黒瀬は職業的組織者（オルガナイザー）となつてゐた。

いよ／＼選擧となると、勞農黨支部聯合會の書記長になつてゐた三島は、本部へ猛運動をして、滋賀縣第×區の候補に、病氣でねてゐる濱本千藏を立たせることに成功した。

選擧期間中、濱本は三分の二はねてゐた。一同演壇に立つと、三日は起きられなかつたからだ。

濱本千藏の選擧區では、恐ろしく「×活動」が目立つた。演説會場には必ず〇〇××黨の傳單がまかれ、あす演説會があるといふ村へは、人馬も通へぬ雪をおかしてどこからどう行動隊員が忍びこんで行くのか戸毎にビラがまかれ、立木、電柱のありとあらゆるところは傳單がはりつけられた。

大澤村農民組合の男たちが中心になつてこの秘密の活躍をしてゐるとにらまれ、彈壓は當然こゝに集中してきた。中には警察の留置場でひどい凍傷にかゝつてそのまゝ起こないものもできた。演説會への官憲の壓力は二月に入ると恐ろしく強くなり、辯士は「われらは何を――」の一と言で中止を喰ひ、諸君、かくの如き×……」で忽ちわらぢばきの警官どもに引き去られ、雪の中を三里も五里も、繩つきで、警察から警察へたらひ廻しにされて行つた。

投票日間近かには、司會者も辯士も總檢をくらひ、しまひには候補者の濱本自身まで持つて行かれた。

しかし、隊員は奮鬪した。

ある山の中の、雪に埋もれた村での演説會に、臨監がくるのがおくれた。東京下りの一人の辯士が逸早く、百人ばかりの大衆に向つて、演壇にのり出し、

「百姓諸君！　十三個のスローガンつてのを知つてをるか？　けふはお前ら同志に十三のスローガンを話さう！　これは勞農黨のかげにかくれて、指導してゐる××のスローガンだぞ。飛び切り上等だ！　社民や、日勞黨には持ち合はせてをらん。どだいあいつはイカモノだ。ひとりわが勞農黨こそ、わしら小百姓の利益のために死力をつくす黨だ。何故なればその背後

に、眞に勞働者農民の×××ために××××××を×××とする〇〇×××の指導がついてるからだ。きけ！　おれたちが、地主と資本家の政府に向つて……」

かれはテーブルを叩きながら、その十三のスローガンをかゝげる×のことについて話して行つた。そしてまつさきにその×がかゝげる「大土地×××してそれを貧農に×××」といふスローガンを說いた。この村には鬪爭經驗があつた。聽衆は一齊に拍手し、立上つた。そして遂に勇敢なこの辯士は大衆にとりかこまれた會場の中で、音頭をとつた。

「〇〇××××××！！」

「わーッ！　萬――歲！！」

かれらは叫んだ。選擧前に、大衆團體の中で、×の萬歲が叫ばれたのはこれが初めてゞあつたらう。

しかしこのことは知れずにはおかなかつた。煽動者の若い辯士は大津で捕へられて留置場に入れられ、三・一五となる迄、遂に出てこなかつた。

瀧本千藏は當選した。この出來事はすくなからずブルジョア階級をおどろかせた。

しかし、選擧がすんでも雪はふりやまなかつた。壓迫の手もやまなかつた。縣警察本部は巡査と特高を組合はせたいくつもの部隊を作つて、縣下農民の大檢擧を開始した。

住居は××され、老人、女、子供まで繩で縛られて拘引された。大澤村では島地の組合員の家は一戸に一人の家族も殘らなかつた。家內中持つて行かれて、あとに殘つた中風の老人は、××××××××、自殺をした。自殺者はこの外にも三件ほどあつた。皆×××××××××に恐怖と憤激のあまり、首をつるしたり、井戸へはまつたりしたのだ。

これが三・一五前の光景なのだ。そして三月十五日には、一旦かへされてゐた庵谷と島地の連中は、またねごみをおそはれ、自動車にねぢこまれて、守山へ、草津へ、しまひには大津市へ運ばれて五十日も六十日も拘留された。庵谷の三島、大澤、黑瀬、小牧、石川、山口、花井、南、山根、小川、山内の十一人は皆起訴された。

滋賀縣下の農民組合はさうした空氣の下で一村一字、虱つぶしに、つぶされて行つた。各組合の目星しい男たちは皆起訴され一つあとから〳〵膳所の刑務所に送りこまれた。指導者を奪は

れたあとの戰線は全縣下に亘つて崩壊して行つた。

六

春はなか〳〵こなかつた。庵谷の十一戸は七戸に減り、七戸が「戸」など〻はいへる代物でない小屋がけにわびしく住んでゐた。老人と、子供と女とだけで、わづかな地坪に芋をうゑたり、麻を育てたり草履を作つたりして露命をつないだ。そこへ刑事と巡査が毎日のやうに見廻つてきた。小川のおかみと、大澤の女房と、黒瀬の妹とが三人一緒にゐる時、元村駐在所へ引立てられた。

「當分の間二人以上集つてはならん。」

島地の方もそれと同じ狀態だつた。

かくして、大澤村はもとの「平和な村」となつた。

四月になると、庵谷の温泉土地會社は、新聞に大々的な廣告をして、京都大阪方面の客を吸集した。

七軒の温泉旅館は夏に入つて客が滿員となつた。

夕方になるとみがいたやうに頭のはげた「お上品」な老人が若い女を二人も三人もつれて淸翠閣の門口から出てきたり、丸髷を結つた藝者が鼻の下に短いヒゲを生やした太つた男とくつついて歩いたり、洋裝のお河童娘が三人も四人もぞろ〳〵手をつないでお母さんらしい「ご婦人」をとり圍んで山の方へ出かけたり——

それらの「お客」たちは、路上で互ひに挨拶をとりかはした。

「ほんまにこ〻の温泉はよろしまんなア。」

「それに涼しイて、よろしアんな、極樂だす。」

會社直營の西洋料理屋ができ、そこの二階からは綠色の玉つき臺のはしがみえ、みなれないぞろりとした若い男が、キユーをさかさに立て〻窓から外をみてゐたりした。自動車は毎日のやうに坂道の砂利をかみながらブーブーブー行つたりきたりしてゐた。

山も谷も濃いみどりにつ〻まれた。谷といふ谷、畑も木もがしんとした黒いやうな一様の綠となり、その中に新しい建物が包まれた村の夕方の光景は、こちら側の谷の日陰にわびしく一とかたまりとなり、ここだけシミのやうに昔の庵谷をのこしてゐる七戸の小屋の中に住む女や老人にとつて一つの烈しい感情

をまきおこさせた。
「こんなことでどうなるのか。こゝはどだい……あないな何にも知らぬ奴らの、のろ〳〵と遊びにやつてくる場所ではなかつたんぢや。もう庇谷には今は三島も黒瀬も、大澤もをらんのぢやな」
　小川の老人は六十三だつた。かれは腰が曲つてゐたが、農民組合がなければわれらの世直しの時節はこないと信じてゐた。
ある夜、杖にすがり、小屋をぬけ出して、老人は、一里の夜道を島地の瀞の裏口へたどりついた。
「どうぢやこの頃、ケーラ（警邏）はきくさるか？」
「ちよい〳〵くるが、何せわしとこはわしと五つや六つの子供ばかりぢやのでな、きてもしようがないわ。」
　瀞のおかみさんは、こんな遠方をやつて來た年よりを、びつくりして、座敷（避の）へ上げた。
「わしア、島地の若いもンにいひにきたんぢや、何ぼ年榮えの人間があないにやられたあとぢやというて、このまゝ泣きね入りにでけるもンかどうか。」
「おとッつあん、組合の事か？」
「さうぢや、第一、十年前、わしらの村へこの組合の種を蒔いて下された濱木さんにすむまいが……わしアあの時、五十三で大澤の家へよばれて濱木さんの話をきゝにいたわいや。わしにや話はわからなんだが、あれから大澤村農民組合ができたんぢや。つぶされたからとて、つぶされたまゝでは、すむまいがな。」
「そないいうたとて、皆監獄に入つてしもうてはどうにもならん。島地には鐵ッつあん、四郎、安木、春さんなど十六七の子供ばかりぢや。その子らもこないだ揃うて三日の間、草津の警察イぶちこまれたんぢや。ようやりくさるわ。」
　年よりたちの心にも警察に對する――そしてそれを通じて、かれらにはよくわからぬ自分達の×××××××××が燃えてゐた。
「若いもンでどないぞうまい相談がならんけ？會社は今年や、庇谷にお客が滿員ぢや。儲けくさるぢやらう。小作まけさせて、秋のとり入れに……」
「それにやア先立つものは組合ぢや。とつつあん、組合がなけれや何うにも手が出せん！今、三人よつたらすぐに引かれて

行くありさまではどうでけるイ？」

「うむ……」

老人は、何故××が未だにそれ程自分たちを恐れ、壓迫するのか、「三・一五」の經驗でそのわけをよく知つてゐた。×××に農民組合の固い連中が皆はいつて働いたからぢや。×××がもう一度地主の前に立ち現はれてくるのを極度に怖れてゐる。それで未だに……。

老人の腹には「今年三割來年五割、末は小作の作り取り」といふ草津節がしみこんでゐた。それこそ、×××の、山と川との合言葉だ。津々浦々の小前のためにそこまで、考へてくれるものがどこにあらうか？ そのものは滅んではゐない、いや、なくてか。わしア、伜がそのものに加はつて、ついこないだ「死刑」まで新たにかきこんだつちうそのものをなくせんための法律にかゝつたのを、×××やアせん！ ××やアせん。歯をくひしばつて、うなづいてやる。「日傭取りなりやこそ、××ぢや」と、な。

そして、強權は今もまだ血のかはき切らぬ爪を、動かしたがら岩谷や島地をのぞいてゐるのだ。

「さうかや、十七八の子供でもそないなことするかや。鐵や四郎がやられたかや。」

老人は、キセルをふところにしまひこんで足の蚊を拂つた。

七

事實組合の再建は、「十六七の子供」である鐵や四郎、安木、春次などの「遺族」の若者たちの手で何度も企まれた。しかし、かれらの計畫が村中の老人や、女連にまで徹底しない前に、いつも警察にかぎつけられて、秋から冬の間、舊島地ピオニールたちは度々留置場へなげこまれた。

年が逝き、春となつた。岩谷は去年にもまして温泉場が盛んになつた。活動寫眞のロケーション隊までが押しかけてきた。自家用自動車でのりつけてくる金持ちもゐた。知事がやつてきて、その日は大津から藝妓が造花の櫻の枝をかざしてくりこんできた。

三月の初め。――岩谷へは、恐ろしい衝動を與へる事件が新聞によつて傳はつてきた。

東京で濱本千藏が殺された！

庵谷、島地の若者、老人たちは、しーいんとなつた。みながみな、半日は、唯顔を見合せては、默つてゐた。ものがいへなかつたのだ。

――殺したのは黑水團といふ反動團體の壯士である。瀧本は三・一五以來の嵐の中で、唯一人勞働者と貧農階級の代議士としてふみとゞまつてゐた。壯士は瀧本をさうした階級の代議士だといふ理由で刺し殺したのだ。

老人にも、女にも、めい〱自分たちの胸に兇刃がつきさゝれたのを覺えたのだ。苦痛はやがて憤激に移つて行つた。島地の若いもの二十三人、老人連三十八人、女四十人、五つ六つの子供二十九人總勢百二十人あまりが打ち鳴らす半鐘の下に密集し、だれいふとなく庵谷の大澤虎松の家へ行け――と行進をおこした。

大澤の留守宅には女房と女の子二人と、おばあさんとがゐた。庵谷の者もみんなそこへ出て來てゐた。小川の老人もきてゐた。庵谷と島地の總員は、大澤の家の前に、鳥が群がつたやうに屯して、動かなかつた。

「十年前、この家で瀧本先生がわしらに組合の話をしてくれたんぢや。こゝにあつまつて、わしら、殺された瀧本先生の復讐のために……組合を、さい、けん、せんければならん。」

十八になつたばかりのピオニール上りの四郎が大澤の家の横手の松の木に登つて叫んだ。

皆は松の木を見上げた。

元村からは巡査が自轉車にのつてかけつけてきたが、一人の巡査に百何十人では、傍觀するより外はなかつた。

「固まれ！ 固まつて離れるな！ この一年が間、わしらアを迫害しつゞけたのと同じ手先きが、東京に滯在してござつた瀧本さんを殺したのぢや。わしらアもいつ殺されるやら知れんぞ。おうよ、わしはええ、わしは六十四のおいぼれぢや。しかし、たとへ、殺されようとも、うばはれた組合をわしらの手にとり返すのは、特別に若い者の役目ぢやぞオ！」

小川の老人は松の木下で發狂したやうな身振りをして叫んだ。

「大澤村――農民組合――萬――歲！」

四郎と一緒に木に登つてゐる孩がから叫びながら、寒いのに木の上でくるりとはだをぬいだ。かれは、腰にまきつけてゐた

粗末な赤いきれを引きずり出した。組合旗だ。

七年昔にこしらへられたよごれた赤い旗は、かれの手にひろげられた。うばはれてゐる親達の、兄達の、血のしみて、よごれた旗だ。三・一五以來警察にとられまいとして、島地の者が、今迄一所懸命、さがされても〱生命にかへて（笑ひごとぢやない）かくしつゞけてきた旗だ。

「わーッ。」

みなは旗をみて兩手をあげた。巡査は自轉車にもたれて、坂道の方からにや〱と眺めてゐる。

木の上の鐵は、おどるやうな恰好に體をたえずしながら、下の連中にどなつた。

「われら何を欲するか？　われらは勝たなければならない。鬪爭を欲するのぢや。どんな立禁でも、どんな差押へでも、働く者に土地を與へろ――このわれらの叫び聲にかなふものはないのぢやア。」

鐵は十七の少年であつたので、かれの演說はいさゝか讀本の朗讀のやうに、松の木の上から流れた。

そして、松の木のてつぺんには久しぶりに竹竿に結びつけられた組合旗が、風になびいた。

八

その日、はからず、若者たちと老人たちと、女たちの間に、再び「大澤村農民組合」がとり戻された。

しかし、若い、或ひは老いたかれらには、何をどう戰つていいのか、わかつてゐるやうで手がつけられなかつた。心に浮ぶのは獄中にゐる指導者たちのことである。

ある夜、ひそかに組合幹部（若者たちと四五の老人――その中に小川の老人もまじつてゐた。）の會合が巡査のやつてきにくい庇谷の大澤の家で持たれ、不なれな「討議」がたど〱しく行はれて行つた。

「縣聯合會の再建――といふこともわしらの双肩にかゝつとる。」

これは鐵の意見であつた。

「わしは、濱木千藏さんの、お墓、いや記念碑を、この大澤の家の地内に建てることを皆に相談するぞ。濱木さんの葬式が東京でも、京都でも××にひどい目にあうたつちう話ぢや。わし

らが記念碑を建てたら必ず奴めらおしよせてくる。取りこはされるに違ひない。しかし、こはされても／＼、立派にわしらの手で、こゝへ記念碑を建てよう。わしらの腕だめしぢや。」

　これをいひ出したのは小川の老人であつた。みな、固くなつてこの案に[illegible]を集めた。

「やらうッ！」

　みなは、すぐ具體案に入つた。

討議の後、一戸に一個の一とかゝへの山石を求めて來て、それに各自の名前を彫りこみ、全部こゝへ持ちよつて、土臺をつみ重ね、碑をこしらへて建て「大澤村農民組合の恩人濱本千藏記念碑」と石面に彫る。といふことに決議された。

　このことはどこから知れるともなく、やがて警察へ知れた。わらぢばきの大勢の巡査が部長に引卒されて島地の戸毎に手分けしてふみこみ、それ／＼丹精をこめてみがきをかけてゐた一とかゝへ程の大きさの山石を、各戸からさがし出して奪ひとり、表に待たせてあつたトラックで運び去つた。瀞の家にあつた碑石も沒收された。

　皆はもうそれに對して特別に怒りはしなかつた。計畫が、委員會で更に嚴重に再建され、組合員はもう一度、山石を方々からこつそりさがし求めて、床下や、押入れにかくし、夜業毎に、そつとみがきをかけた。

　その間に夏がすぎて、秋に入つた。稻はみのつたが、その頃から組合幹部の檢束が始まり、鐵や四郎たちが十日も二十日も警察へ持つて行かれた。そして、記念碑第二計畫がばれた。又トラックが石ころを押收に來た。

狀勢は小作料減額の運動を到底おこせさうになかつた。これほど露骨に××が地主——温泉土地會社の××となつてゐる光景は、獄中の指導者たちでも知るまいと思つた。

　四郎や鐵は、警察からかへつてくると、この彈壓期をぢつと持ちこたへ、やがてはねかへすために、執拗にもすぐ又記念碑第三回計畫をおしすゝめた。

　幹部は手わけして夜ひそかに又朝早く、家々をみて廻つた。

　三回目の山石はどの家でも前々のより小さかつた。それでも皆一所懸命だつた。かくし場所についても、幹部はそれ／＼工風を授けて廻つた。

　秋が去つた。

大澤村には雪が來た。一九二九年の雪は毎日のやうにふりつづいて少しもやまなかつた。とう〳〵近年にない深雪となつてそのまゝに一九三〇年の雪となつた。

雪にとぢこめられた島地の家では正月になつて、耕作の用が減ると、俄かにめい〳〵の「石」の仕事がすゝんだ。幹部たちは雪の中を雁谷の方へも行つて、仕事の進捗ぶりをみて廻つた。

一番かんじんの碑石は、今度は小川の老人の家にかくされてあつた。鐵が碑面に字をかいた。組合がどこかで目論んで來た僅かに一本のタガネで以て、今年五十九の黒瀬のおやぢが、その字を、とにかくも碑面に刻みつけてゐた。

幹部たちは正月の中頃に一切の手筈が整ふのをみて、みんなのなけなしの金で、苦心さんたんして買ひあつめた三袋のセメント（或者は一袋のセメントを脊負つて雪の中を草津の町から夜どほし村へ歩いてかへつた。）も、ひそかに大澤の家へ運ばれた。これらの努力は一面いかにも子供らしい努力であつた。たとへ、十七八の若者と六十あまりの老人に女を加へてやつた仕事でなくても、子供らしくみえたであらう。かれらは一心に唯共通の××心に燃えてゐた。そしてそれは又實に、今のかれらを團結させる力であり、それらすべての作用は、獄中にゐる指導者たちの殘して行つたものに相違なかつた。

九

正月十六日、新しい雪は風を伴つて吹雪のやうに彦根の方から襲つてきた。

しかし島地の足こしの立つすべての男女は、夜の引きあけぬ内から雪裝束に身をかためた。足には藁の雪靴を穿いた。頭にはカマス頭巾をかぶつた。そして、かれらは自分たちの名前を彫りこんだ大切な「石」をコモにくるんで背負つたり、畚に入れ、二人棒で擔つたりして、三々五々出發した。

先頭の幹部の若者たちの間に、大事な組合旗が、吹雪の中にひるがへつて進んだ。石をになへる部落の者百人あまりは、それにつゞいて、默々と歩いた。藁靴に夜明けの雪をふみしめて――。

おゝ、黎明を、友として

生きとし生ける、農民は
この世の、カテの、生活者
はたらく我等の、血と、汗を
搾りて生くるは、何奴ぞ！

先頭から四五人のいくらか子供つぽい農民歌がおこつた。だが石をかついだものは、女たち、老人たち、默々として、若者の歌の歩調に合せて、進んで行つた。

雪はやまなかつた。

行進隊が元村を通過する時、夜があけかけたが、雪のために、あたりは昏かつた。

元村から麻谷へは坂の登りになる。畚の二人棒や、コモにくるんで背負つたものや、すべての、石を運ぶ者たちは、步調をちゞめた。

さうして、漸く麻谷の、大澤の家に着いた時、朝の冷めたい風と雪の中で、寒さを冒して、汗みどろとなり、小川の老人やその外の麻谷の連中が、碑を立てる場所の雪をかきわけ、地面をもう二三尺も掘りさげてゐた。

掘り下げて、小石、かけ石等で下地をかため、その上に、はる〲運んで來たてんでの石を並べ、積み上げ、セメントでかためて行かうといふのだ。

若者たちが主となつて作業にとりかゝつた。雪はふりやまなかつた。

裾廻り一間四方、高さ五尺位に、上へ狹く積み上げられたてつぺんに、自然石の表をこすりおとし、文字の彫られた、砲彈のやうな碑石が植え込まれ、セメントでかためられ始めた時、降りしきる雪の中で、すべての人々は頭を垂れてしづかにカマス頭巾を外した。

記念碑は生れた。夏以來のこの鬪爭は、今、戰ひとられたのだ。

大澤村農民
組合の父　濱本千藏記念碑

と字配りされた文字を表はした碑面と農民的な一切の表現を具備して、たつた今でき上つたばかりの稚拙なこの記念碑は、雪のふる中に、灰色の重たさをみせて、建つてゐた。

「大澤村――農民組合――萬――！歳―

「全、國、農、民、組、合、萬――歳！」

「全農第一主義を、叩きつぶせ!!」

「××的――青年部萬――歳！」

人々は交々叫んだ。雪が顔にふりかゝる。碑のうしろの方で

それについでだれからともなく、次ぎのやうな叫びがおこり、それが異常な全聲の唸り聲と變つた。

「〇〇×××萬――歳!!　勞、働、者、農、民、×、×、×萬――歳ッ!!」

――この聲のわき返る間、女たちの眼には涙が浮んでゐた。かの女たちは殺された濱本千藏と獄中の自分たちの夫や兄や伜たちをごつちやにして胸に思ひ浮べたのだ。

十

記念碑は雪をかぶつてまつ白になつた。次の日も、次ぎの日も、島地と、瀧谷の農民は、鋤、鍬、棍棒等に身をかためて、毎日毎日、大澤の家へ十人あまりづゝ交替に集つて、雪をかぶつた記念碑を警備した。

冬があけ、雪がとけ始めた。春がやつてくるのだ。光りが雪に添ひ、碑面の「大澤村農民組合の父」といふ所だけ現はれて日に光つた。

警備隊は、二十人にふえた。かれらは雪裝束の藁蓑の下に、××をかくしてゐた。

××××を待つのだ！　（一九三〇・九）



聖家族

堀　辰雄

I

死があたかも一つの季節を開いたかのやうだつた。

死人の家への道には、自動車の混雜が次第に增加して行つた。そしてそれは、その道幅が狹いために、各々の車は動いてゐる間よりも、停止してゐる間の方が長いくらゐにまでなつてゐた。

それは三月だつた。空氣はまだ冷たかつたが、もうそんなに呼吸しにくくはなかつた。いつのまにか、もの好きな群集がそれらの自動車を取り圍んで、そのなかの人達をよく見ようとするために、ガラス窓に鼻をくつつけた。それがガラス窓を曇らせた。そしてそのなかでは、その持主等は不安さうに、しかし舞踏會にでも行くときのやうな微笑を浮べて、彼等を見かへしてゐた。

さういふ車の一つのなかに、死人のやうに蒼い顏をした一人の女が、目を閉ぢたまま、化石したやうになつてゐるのを見ると、

「あれは誰だらう？」

と人々は私語いた。

それは細木と呼ばれる夫人だつたのだ。――それまでのどれよりも長い不動がその贋の死人を奇蹟のやうに蘇生させた。するとその人は自分の運轉手に何か言ひながら、ひとりでドアを開けて、車から降りてしまつた。そのとき前方の車が動き出したため、彼女の車はそこに自分の持主を置いたまま、再び動き出して行つた……

それと殆ど同時に人々は見たのだ、一人の青年が帽子もかぶらずに毛髪をくしやくしやにさせながら、群集を押し分けるやうにして、そのまんなかに漂流物のやうに漂よつてゐるその人に近づいて行くのを。そしてそれからいかにも親しげに笑ひかけながら、その人の腕をつかまへるのを。

――やうやく彼等が群集の外に出たとき、細木夫人は自分が一人の見知らない青年の腕にほとんど凭れかかつてゐるのに、はじめて氣づいたやうだつた。彼女はその青年から腕を離すと、何か問ひたげな眼ざしを彼の上に投げながら、

「ありがたうございました」

と言つた。青年は、相手が自分を覺えてゐないことに氣がつくと、すこし臉を赤らめながら答へた。

「僕、河野です」

その名前を訊いても夫人にはどうしても思ひ出されないらしいその青年の顏は、しかしその上品な顏立によつていくらか夫人を安心させたらしかつた。

「九鬼さんのお宅はもう近くでございますか」と夫人がきいた。

「えゝ、すぐそこです」

さう答へながら青年は驚いて相手をふりむいた。突然、夫人はそこに立ち止まつてしまつたのだ。

「あの、どこかこのへんに休むところはございませんかしら。なんだかすこし氣分が惡いもんですから……」

青年はすぐその近くに一つの小さなカツフエを見つけた。――そのなかに彼等がはひつて見ると、しかしテイブルは埃のにほひがし、植木鉢は木の葉がすつかり灰色になつてゐた。それをいまさらのやうに青年は夫人のために氣にするやうに見えたが、夫人の方ではそれをそれほど氣にはしないらしかつた。木の葉の灰色なのは自分のかなしみのためのやうに思つて居るの

かも知れぬと青年は考へた。

青年は夫人の顔色がいくらかよくなつたのを見ると、すこしどもりながら言つた。

「僕、ちよつとまだ用事がありますので……すぐまた來ますから」

そして彼は立ち上つた――

そこに一人ぎりになると、細木夫人はまた目をとぢて死人の眞似をした。

――まるでお祭りかなんかのやうなあの騷ぎは何といふことだらう。私にはとてもあの人達の中へはひつて行けさうもない。私はこのまま歸つてしまつた方がいいかしら……

それにしても夫人はいまの青年の歸つてくるまで待つてゐようと思つた。何だかその青年に一度どこかで會つたこともあるやうな氣がしだしたのだ。さう言へばどこかしら死んだ九鬼に似てゐるところがあると彼女は思つた。そしてその類似が彼女に一つの記憶を喚び起した。

數年前のことだ。輕井澤のマンペイ・ホテルで偶然、彼女は九鬼に出會つたことがあつた。その時九鬼は一人の十五ぐらゐの少年を連れてゐたが、その少年にちがひないと思ひ出した。――その快活さうな少年を見ながら、彼女がすこし意地わるさうに、「あなたによく似てゐますわ。あなたのお子さんぢやありませんの？」と言ふと、九鬼は何か反撥するやうな微笑をしたきり默りこんでしまつた。その時くらゐ九鬼が自分を憎んでゐるやうに思はれたことはないのだ……

河野扁理は事實、その夫人の思ひ出のなかの少年なのだ。

扁理の方では、勿論、數年前輕井澤で九鬼と一しよに出會つたその夫人のことを忘れてゐる筈はない。

その時彼は十五であつた。

彼はまだ快活で、無邪氣な少年だつた。

九鬼が夫人をよほど好きなのではないかしらと思ひ出したのは、ずつと後のことだ。その當時は、ただ九鬼が夫人を心から尊敬してゐるらしいのだけが分つた。それがいつか夫人を彼の犯し難い偶像にさせてゐた。ホテルでは、夫人の部屋は二階にあつて、向日葵の咲いてゐる中庭に面してゐた。そしてその中

にほとんど一日中閉ぢこもつてゐた。そこへ一度もはひる機會のなかつた彼は、向日葵の下から、よくその部屋を見上げた。それは非常に神聖な、美しい、そして何か非現實なもののやうに思はれた。

そのホテルの部屋は、その後、彼の夢のなかにしばしば現はれた。彼は夢の中では飛ぶことができた。そのおかげで、彼はその部屋の中を窓ガラスごしに見ることができた。それは夢毎にかならず裝飾を變へてゐた。或時はイギリス風に、或時はフランス風に。

彼は今年二十になつた。同じ夢を抱いて、前よりはすこし悲しさうに、すこし瘦せて。

そしてさつきも、群集の間から、自動車のなかに死んだやうになつてゐる夫人をガラスごしに見たときは、彼は自分が步きながら夢を見てゐるのではないかと信じた位ゐだつた。

——そこの混雜によつてすつかり死の感情を忘れさせられながら、九鬼の告別式から歸つてきた扁理は、埃だらけのカッフエのなかに、それを再び夫人とともに發見した。

彼にはそれらのものが何か近づき難いやうに思はれた。そこでそれらに近づくために彼は出來るだけ悲しみを裝はうとした。だが、自分で氣のついてゐるよりずつと深いものだつた、彼自身の悲しみがそれを彼にうまくさせなかつた。そして愚かさうに、彼はそこに突立てゐた。

「どうでしたか?」夫人が彼の方に顏をあげた。

「えゝ、まだ大變な混雜です」彼はどぎまぎしながら答へた。

「では、私、もうあちらへお伺ひしないで、このまま歸りますから……」

さう言ひながら夫人は自分の帶の間から小さな名刺を出してそれを彼に渡した。

「すつかりお見それして居りましたの……こんどお閑でしたら、宅にもお遊びにいらしつて下さいませ」

扁理は、自分が夫人に思ひ出されたことを知り、その上さういふ夫人からの申出を聞くと、一さうどぎまぎしながら、何かしきりに自分もポケットの中を探しだした。さうしてやつと一枚の名刺をとり出した。——が、それは九鬼の名刺だつた。

「自分の名刺がありませんので……」さう言つて、もの怖ぢた子供のやうに微笑しながら、彼はその名刺を裏がへし、そこに

河野扁理

といふ字を不格好に書いた。

それを見ながら、さつきからこの青年と九鬼とは何處がこんなに似てゐるのだらうと考へ出してゐた細木夫人は、やつとその類似點を彼女獨特の方法で發見したのだ。

「九鬼を裏がへしたやうな青年」

――このやうに、彼等が偶然出會ひ、そして彼等自身思ひもよらない速さで相手をお互に理解し合つたのは、その見えない媒介者が死であつたからかも知れないのだ。

II

扁理には、細木夫人の發見したやうに、どこかに九鬼を裏がへしにしたといふ風がある。

容貌の點から言ふと彼にはあまり九鬼に似たところがない。むしろ對照的と言つていい位なものだ。だが、その對照がかへつて或る人々には彼等の精神的類似を目立たせるのだ。

九鬼はこの少年を非常に好きだつたらしい。それがこの少年に彼の弱點を速かに理解させたものだらう。九鬼は自分の弱弱しさを世間に見せまいとしてそれを獨特な皮肉でなければ表はすまいとした人だつた。九鬼はそれになかば成功したと言つていい。だが、彼自身の心の中に隠すことが出來れば出來るほど、その弱弱しさは彼にはますます堪へ難いものになつて行つた。扁理はさういふ不幸を目の前に見てゐた。そして九鬼と同じやうな弱弱しさを持つてゐた扁理は、そこで彼とは反對に、さういふ弱弱しさを出來るだけ自分の表面に持ち出さうとしたのだ。彼がそれにどれだけ成功するかは、これからの問題だが。――

九鬼の突然の死は、勿論、この青年の心をめちやくちやにさせた。しかし、九鬼の不自然な死をも彼には極めて自然に思はせるやうな殘酷な方法で。

九鬼の死後、扁理はその遺族のものから頼まれて彼の藏書の整理をしだした。

毎日、黴臭い書庫の中にはひつたきり、彼は根氣よくその仕事をしてゐた。この仕事は彼の悲しみに氣に入つてゐるやうだつた。

或る日、彼は一冊の古びた洋書の間に、何か古い手紙の切れぱしのやうなもののはさまつてゐるのを發見した。彼はそれを女の筆跡らしいと思つた。そしてそれを何氣なく讀んだ。もう一度讀みかへした。それからそれを注意深く元の場所にはさんで、なるたけ奥の方にその本を入れて置いた。覺えておくためにその表紙を見たら、それはメリメの書簡集だつた。

それからしばらく、彼は口癖のやうに繰り返してゐた。

「――どちらが相手をより多く苦しますことが出來るか私たちは試して見ませう。」

夕方になると、扁理は自分のアパートメントに歸る。

彼の部屋は實によく散らかつてゐる。それは彼が毎日九鬼の書庫を整理するのと同じやうな根氣よさで、散らかしたもののやうに見える。――或る日、彼がその部屋へはひつて行くと、新聞や雜誌やネクタイや薔薇やパイプなどの堆積の上に、水の上の石油のやうに、何か虹色に浮んでゐるのを彼は見た。

それは、よく見ると、一つの見事な封筒だつた。裏かへすと細木と書いてあつた。そしてその筆跡は彼にすぐこの間のメリメ書簡集のなかに發見した古手紙のそれを思ひ出させた。

彼は丁寧に封筒を切りながら、ふと老人のやうな笑顔をした。何も彼も知つてゐるんだと言つたやうな。

――扁理はそんな風に二通りの微笑を使ひ分けるのだ。子供のやうな微笑と老人のやうな微笑と。つまり、他人に向つてするのと自分に向つてするのとを區別してゐたのだ。

そしてさういふ微笑のおかげで、彼は自分の心を複雜なのだと信じてゐた。

扁理にとつて、細木夫人との二度目の面會が、その前のそれよりもずつと深い心の狀態においてなされたのは、さういふエピソオドのためだつた。

細木家の客間は、彼の夢とは異つて、裝飾などもすこぶる質素だつた。決してイギリス風でも、フランス風でもなかつた。そしてそれは彼に何となく一等船室の客間を思はせた。

ときどき彼が船暈を感じてゐる人のやうな眼ざしを夫人の上に投げることに注意したまへ――

だが扁理の心理をそれほど不安にさせてゐるのは、さういふ

ためばかりではなしに、細木夫人と死んだ九鬼の思ひ出を語りながら、たえず相手の氣持について行かうとして、出來るだけ自分の年齢の上に背伸してゐるためもあるにちがひないのだ……

——この人もまた九鬼を愛してゐたのだ、彼がこの人を愛してゐたやうに。(と扁理は考へた) しかしこの人の硬い心は彼の脆い心を傷つけずにはそれに觸れることができなかつたのだ。丁度ダイアモンドが硝子に觸れるとそれを傷つけずにはおかないやうに。そしてこの人もまた自分で相手につけた傷のために苦しんでゐる……

さういふ考へがたえず扁理を彼の年齢の達することのできない處に持ち上げようとしてゐたのだ。

そのとき一人の十七八の少女が客間のなかに入つてくるのを彼は見た。

彼はそれが夫人の娘の絹子であることを知つた。その少女は彼女の母にまだあんまり似てゐなかつた。それが彼に何となくその少女を氣に入らなく思はせた。

彼は自分のいまの氣持からは十七八の少女のそれはあんまり離れ過ぎてゐるやうに思つたのだ。彼はその少女の顔よりも彼女の母のそれの方をもつと新鮮に見出した。

絹子の方でもまた、少女特有の敏感さによつて、扁理が彼女から遠くにゐることを見拔いたらしい。彼女は默つたまま二人の會話にはひらうとしなかつた。

彼女の母はすぐそれに氣づいたらしかつた。そして彼女のデリカシイがそれをそのままにしておくことを許さなかつた。彼女は微妙な注意をしながらその二人をもつと近づけようとした。

彼女はそれとなく扁理に娘の話をしだした。——或る日、絹子は友だちに誘はれるまま生れて初めて古本屋といふものに入つてみたといふ。彼女がふとそこにあつたラファエルの畫集を手にとつて見ると、その扉には九鬼といふ署名がしてあつた。そして彼女はそれを非常に欲しがつてゐるのだ……

突然扁理が言つた。

「それは僕の賣つたもんです」

夫人たちは驚いて彼を見上げた。すると彼は特有の無邪氣な微笑を見せたから附け加へた。

「ずつと前に買つたものを、九鬼さんの死ぬ四五日前に、どう

にも仕方がなくなつて言つてしまつたんです。今になつてたいへん後悔してゐるんですが……」

さういふ自分の貧しさをどうしてかういふ豐かな夫人たちの前で告白するやうな氣になつたのか、扁理自身にもよく分らなかつた。だが、この告白は何となく彼の氣に入つた。彼は自分の思ひがけない率直な言葉によつて、夫人たちがひどく驚いてゐるらしいのを、むしろ滿足さうに眺めた。

さうして扁理自身もまた、自分自身の子供らしい率直さにいつか驚き出した……

III

それまで彼の夢にしか過ぎなかつた細木一家といふものが、急に一つの實像となつて扁理の生活の中にはひつてきた。扁理はそれを九鬼やなんかの思ひ出と一しよくたに、新聞、雜誌、ネクタイ、薔薇、パイプなどの混雜のなかに、無造作に投り込んでおいた。

さういふ亂雜さをすこしも扁理は氣にしなかつた。むしろそれに、彼自身に最もふさはしい生活樣式を見出してゐたのだ。

或る晩、彼の夢のなかで、九鬼が大きな畫集を彼に渡した。そのなかの一枚の畫をさしつけながら——

「この畫を知つてゐるか？」

「ラファエルの聖家族でせう」

と彼は氣まり惡さうに答へた。それがどうやら自分の賣りとばした畫集らしい氣がしたのだ。

「もう一度、よく見てみたまへ」と九鬼が言つた。

そこで彼はもう一ぺんその畫を見直した。すると、どうもラファエルの聖母に似てはゐるが、その畫のなかの聖母の顏は細木夫人のやうでもあるし、幼兒のそれは絹子のやうでもあるので、へんな氣がしながら、なほよくヨハネや他の天使たちを見ようとしてゐると、

「わからないのかい？」と九鬼は獨特の皮肉な笑ひをした……

扁理は目をさました。見ると、自分の散らかつた枕もとに、見おぼえのある、立派な封筒が一つ落ちてゐるのだ。

おや、まだ夢の續きを見てゐるのかしら……と思ひながら、それでもいそいでその封を切つて見ると、手紙のなかの文句は

簡單だつた。ラファエルの畫集を買ひ戻せと言ふのだ。そしてそれと一しよになつて一枚の寫眞が入つてゐた。

彼はベッドの中で再び眼をつぶつた。自分はまだ夢の續きを見てゐるのだといふことを自分自身に言つてきかせるかのやうに——

その日の午後、細木家を訪れた扁理は大きなラファエルの畫集をかかへてゐた。

「まあ。わざわざ持つていらつしつたんですか。あなたのところに置いておけばよろしかつたのですのに」

さう言ひながらも、夫人はそれをすぐ受取つた。さうして籐椅子に腰かけながら、しづかにそれを一枚一枚めくつていつた……と思ふと、突然、それを荒あらしい動作で自分の顔のところに持ち上げたのだ。そしてその本のにほひかなんか嗅いでゐるらしい。

「なんだか莨のにほひがいたしますわ」

扁理は驚いて夫人を見上げた。突嗟に九鬼が非常に莨好きだつたことを思ひ出しながら。さうして彼は見たのだ、夫人の顏が不安なくらゐ蒼くなつてゐるのを。

——この様子にはどこかしら罪人といつた風があるな、と扁理は考へた。

その時、庭の中から絹子が彼に聲をかけたのだ。

「庭をごらんになりません」

彼は夫人をそのまま一人きりにさせて置く方が彼女の氣に入るだらうと考へながら、ひろびろとした庭のなかへ絹子のあとについて行つた。

少女は、扁理を自分のうしろに從へながら、庭の奥の方へはひつて行けば行くほど、へんに歩きにくくなり出した。彼女はそれを自分のうしろに居る扁理のためだとは氣づかなかつた。そして少女のみの思ひつき得るやうな單純な理由を發見した。彼女は扁理をふりかへりながら言つた。

「薔薇の木がありますから、踏むと危なうございますわ」

薔薇の木に花が咲いてゐるには季節があまりに早すぎた。そして扁理には、どれが薔薇の木だかその葉だけでは見わけられないのだ。彼もまたいつのまにか不器用に歩き出してゐた。

絹子は、自分ではすこしも氣づかなかつたが、扁理に初めて會つた時分から、少しづつ心が動搖しだしてゐた。——扁理に初めて會つた時分からではすこし正確でない。それはむしろ九鬼氏の死んだ時分からと言ふべきかも知れない。それまで絹子はもう十七であるのに、いまだに死んだ父の影響の下に生きることを好んでゐた。そして彼女は自分の母のダイヤモンド屬の美しさを所有しようとはせずに、それを眺めそして、それを愛する側にばかりなつてゐた。

ところが、九鬼の死によつて自分の母があんまり悲しさうにしてゐるのを、最初はただ思ひがけなく思つてゐたに過ぎなかつたが、いつかその母の感情が彼女の中にまだ眠つてゐた層を目ざめさせたのだ。その時から彼女は一つの秘密を持つた。しかし、それが何であるかを知らうとはせずに。——そしてただ、それからといふもの、彼女は知らず識らず自分の母の眼を通して物事を見るやうな傾向に傾いて行きつつあつた。

そして彼女は いつしか自分の眼を通して扁理を見つめだした。もつとも正確に言ふならば、彼の中に、母が見てゐるやうに、裏がへしにした九鬼を、だ。

しかし彼女自身は、さういふすべてを殆ど意識してゐなかつたと言つてよかつた。

そのうち一度、扁理が彼女の母の留守に訪ねて來たことがある。

扁理はちよつと困つたやうな顏をしてゐたが、それでも絹子にすすめられるまま、客間に腰を下してしまつた。

あひにく雨が降つてゐた。それでこの前のやうに庭へ出ることもできないのだ。

二人は向ひ合つて坐つてゐたが、別に話すこともなかつたし、それに二人はお互に、相手が退屈してゐるだらうと想像することによつて、自分自身までも退屈してゐるかのやうに感じてゐた。

さうして二人はながい間、へんに息苦しい沈默のなかに坐つてゐた。

しかし二人は室内の暗くなつたことにも氣のつかないくらゐだつた。――そんなに暗くなつてゐることに初めて氣がつくと、驚いて扁理は歸つて行つた。

絹子はそのあとで、何だか頭痛がするやうな氣がした。彼女はそれを扁理との退屈な時間のせゐにした。だが、實は、それは花のそばにあんまり長く居すぎたための頭痛のやうなものだつたのだ。

IV

さういふ愛の最初の徴候は、彼女と同じやうに、扁理にも現はれだした。

自分の亂雜な生き方のおかげで、扁理はその徴候を單なる倦怠のそれと間違へながら、それをば彼女の硬い性質と自分の脆い性質との差異のせゐにした。そして「ダイアモンドは硝子を傷ける」といふ原理を思ひ出して、自分もまた九鬼のやうに傷つけられないうちに、彼女から早く遠ざかつてしまつた方がいいと扁理は考へた。そして彼は彼獨特の言ひ方で自分に向つて言つたのだ。――自分を彼女たちに近づけさせたところの九鬼の死そのものが、今度は自分を彼女たちから遠ざけさせるのだと。

そしてさういふ驚くほど簡單な考へ方で彼女たちから遠ざかりながら、扁理は再び自分の不秩序な部屋のなかに閉ぢこもつて、自分一人きりで生きようとした。するとその閉された部屋の中から、今度は本當の倦怠が生れてきたのだ。しかし扁理自身はその本物も贋物もごつちやにしながら、ただ、さういふものから自分を救ひ出してくれるやうな一つの合圖しか待つてゐなかつた。

一つの合圖。それはカジノの踊り子たちに夢中になつてゐる彼の友人たちから來たのだ。

或る晩、扁理は友人たちと一しよにコック場のやうな臭氣をもつたカジノの樂屋廊下に立ちながら、踊り子たちを待つてゐた。

彼はすぐ一人の踊り子を知つた。

その踊り子は小さくて、そんなに美しくなかつた。そして一日十幾回の踊りにすつかり疲れてゐた。だが、その自棄氣味で、陽氣さうなところが、扁理の心をひきつけた。彼はその踊

り子に氣に入るために出來るだけ自分も陽氣にならうとした。

しかし踊り子の陽氣さうなのは、彼女の惡い技巧にすぎなかつた。彼女もまた彼と同じくらゐに臆病だつた。が、彼女の臆病は、人に欺かれまいとするのあまり人を欺かうとする種類のそれだつた。

彼女は扁理の心を奪ふために、他のすべての男たちとふざけ合つた。そして彼を離すまいとして、約束をして置きながらわざと彼を待ち呆けさせた。

一度、扁理が踊り子の肩に手をかけようとしたことがある。すると踊り子は素早く、その手から自分の肩を引いてしまつた。そして彼女は、扁理が顏を赤らめてゐるのを見ながら、彼の心を奪ひつつあると信じた。

かういふ二人の氣の小さな戀人同志がどうして何時までもうまくやつて行けるだらうか——

或る日、扁理は公園のベンチの上で踊り子を待つてゐる。彼女はなかなかやつて來ない。それには慣れてゐるから彼はそれほど苦痛には感じない。が、そのうちにふと、踊り子とは別の女——絹子のことを彼は考へ出した。そして若しいま自分の待つてゐるのが踊り子ではなくて、あの絹子だつたらどうだらうと空想した……が、その莫迦げた空想にすぐに自分で氣がついて、彼はそれを踊り子のための現在の苦痛から回避しようとしてゐる自分自身のせゐにしてしまつた。

扁理の亂雜な生活のなかに埋もれながら、なほ絶えず生長しつつあつた一つの純潔な愛が、かうしてひよつこりその表面に顏を出したのだ。だが、それは彼に氣づかれずに再び引込んで行つた……。

絹子は、扁理が自分たちから遠ざかつて行くのを、最初のうちは何かほつとした氣持で見送つてゐた。が、それが或る限度を越え出すと、今度は逆にそれが彼女を苦しめ出したのだ。しかし、それが扁理に對する愛からであることを認めるには、少女の心はあまりに硬過ぎた。

細木夫人はといへば、扁理がかうして遠ざかつて行くのを、むしろ、彼に訪問の機會を與へてやらない自分の落度のやうに

考へてゐた。しかし夫人には扁理を見ることは樂しいことよりも、むしろ苦しいことの方が多かつた。さうして時が九鬼の死を遠ざければ遠ざけるほど、彼女に欲しいのは平靜さだけであつた。だから、彼女は扁理がだんだん遠ざかつて行くのを見ても、それをそのままにして置いたのだ――

或る朝、二人は公園のなかに自動車をドライヴさせてゐた。噴水のほとりに、扁理が一人の小さい女と歩いてゐるのを、彼女たちが見たのはほとんど同時だつた。その小さい女は黄色の派手な洋服をきてゐて、何か快活さうに笑つてゐた。それと並んで扁理は考へ深さうにうつむきながら歩いてゐた。

「あら!」と絹子が車の中でかすかに聲を立てた。

と同時に彼女は、彼女の母がもしかしたら扁理たちに氣づかなかつたかも知れないと思つた。さうして彼女自身もそれに氣づかなかつたやうな風をしようとした。

「なんだか目の中にゴミがはひつちやつたよ……」

夫人もまた、絹子が扁理たちを見なかつたことを、ひそかに欲してゐたのだ。さうして、ほんとうに目の中にゴミかなんか入つて彼等を見なかつたのかも知れないと思つた。

「びつくりしたぢやないの……」

さう言つて、夫人は自分の心持苦くなつてゐる顔をごまかした。

V

その沈默はしかし、ながく二人の間に尾をひいた――

それからといふもの、絹子はよく一人で町へ散歩に出かけた。彼女は心の中のうつたうしさを運動不足のせゐにしてゐたのだ。さうして母からも離れて一人きりになりたい氣持や、かうして歩いてゐるうちに、また、ひよつとしたら扁理に會へるかも知れないといふ考へなどの彼女にあつたことは、少しも自分で認めようとはしなかつた。

彼女は扁理とその戀人らしいものの姿を、下手な寫眞師のやうに修整した。その寫眞のなかでは、例の小さな踊り子は彼女と同じやうな上流社會の立派な令孃に仕上げられてゐたのだ。

彼女はさういふ扁理たちに對して何とも云へないにがさを味つた。しかし、それが扁理のための嫉妬であることには、勿論、彼女は氣づかなかつた。何故なら、彼女は扁理たちのやう

な年頃のどういふ二人づれを見てもその同じやうなにがさを味つたからだ。そして彼女はそれを世間一般の戀人たちに對するにがさであると信じた。——實は、彼女はどういふ二人づれを見ても知らず識らず扁理たちを思ひ出してゐたのだが。

彼女は歩きながら、飾窓に映る自分の姿を見つめた。さうして彼女は、いますれちがつたばかりの二人づれに自分を比較した。ときどき硝子の中の彼女は妙に顔をゆがめてゐた。彼女はそれを悪い硝子のせゐにした。

或る日、さういふ散歩から歸つてくると、絹子は玄關にどこか見おぼえのある男の帽子と靴とを見出した。

さうしてそれが誰のだかはつきり思ひ出せないことが、彼女をちよつと不安にさせた。

「誰かしら」

と思ひながら、彼女が客間に近づいて行つてみると、その中から、こわれたギタアのやうな聲が聞えてきた。

それは難波といふ男の聲にちがひなかつた。

難波といふ男は、——「あいつはまるで壁の花みたいな奴ですよ。そら、舞踏會で踊れないもんだから、壁にばかりくつついてゐる奴がよくあるでせう。さういふ奴のことを英語で Wall flower (壁の花) といふんですが……難波の人生における立場なんか全くそれですね」——そんなことをいつか扁理が言つてゐたのを思ひ出しながら、それから彼女はふと扁理のことを考へた。……

彼女が客間に入つて行くと、難波は急に話すのをやめた。が、すぐ、難波は、例のこわれたギタアのやうな聲で、彼女に向つて言つたのだ。

「いま、扁理の悪口を言つてゐたところですよ。あいつ、もう仕樣がありません。くだらない踊り子かなんかに引つかかつてゐて……」

「あら、さうですの」

絹子は思はず笑つた。いかにも滿足さうに。そして笑ひながら自分でも、こんな風に笑つたのは實にひさしぶりであるやうな氣がした。

このながく眠つてゐた薔薇を開かせるためには、たつた一つの言葉で十分だつたのだ。踊り子の一語。——扁理と一しよに

ゐた人はそんな踊り子だつたのか、と彼女は考へ出した。私はそれを私と同じやうな身分の人とばかり考へてゐたのに。そしてさういふ人だけしか扁理の相手にはなれないと思つてゐたのに。……さうだ、恐らく扁理はその踊り子なんか愛してゐないのかも知れない。……もしかすると、あの人の愛してゐるのはこの私ではないかしら。それだのに私があの人を愛してゐないと思つて、私から遠ざからうとしてゐるのではないかしら。さうして自分をごまかすためにきつとそんな踊り子などと一しよに暮らしてゐるのだ。踊り子なんかはあの人に似合はないのに……

それは少女獨特の論理だつた。しかし、大抵の場合、少女は自分自身の感情はその計算の中に入れないものだ。そして絹子の場合もさうだつた。

VI

ときどき鳴りもしないのにベルの音を聞いたやうな氣がして自分で玄關に出て行つたり、器械がこわれてゐてベルが鳴らないのかしらと始終思つたりしながら、絹子はたえず何かを待つてゐた。

「扁理を待つてゐるのかしら?」ふと彼女はそんなことを考へることもあつたが、そんな考へはすぐ彼女の不侵透性の心の表面を滑つて行つたのだ。

或る晩、ベルが鳴つた。——その訪問者が扁理であることを知つても、絹子は容易に自分の部屋から出て行かうとしなかつた。

やつと彼女が客間にはひつて行くと、扁理は、帽子もかぶらず歩いてゐたものらしく毛髪をくしやくしやにさせながら、青い顏をして、ちらりと彼女の方をにらんだ。それきり彼は彼女の方をふりむきもしなかつた。

細木夫人は、さういふ扁理を前にしながら、マニユキユアで自分の爪ばかり磨いてゐた。夫人は、目の前の扁理のだらしのない樣子から、ふと、九鬼の告別式のとき途中で彼に出會つた時のことを思ひ出し、それからそれへと樣々なことが考へられてならないのだが、彼女はそれから出來るだけ心をそらさうとして、一さう丹念に自分の爪を磨き出してゐるのだ。

突然、扁理が言つた——

「僕、しばらく旅行して來ようかと思つてゐます」
「どちらへ」夫人が自分の爪を見つめながら訊いた。
「まだはつきりきめてないんですが……」
「ながく」
「えゝ、一年ぐらゐです」
夫人はふと、扁理が、例の踊り子と一しよにそんなところへ行くのではないかと疑ひながら、
「淋しくありませんか」と訊いた。
「さあ……」
扁理はいかにも氣のない返事をしただけだつた。
絹子はといへば、その間默つたきり、まるで彼の肖像でも描かうとするかのやうに、熱心に彼を見つめてゐた。
さうして彼女の母が、扁理の、梳らない毛髪や不格好に結んだネクタイや悪い顔色などのなかに、踊り子の感化を見出してゐる間、絹子はその同じものの中に彼女自身のために苦しんでゐる青年の痛々しさだけしか見なかつた。
扁理が歸つた後、絹子は自分の部屋にはひるなり、思はず眼をつぶつた。さつきあんまり扁理の赤い縞のあるネクタイを見つめ過ぎたので、眼が痛むのだ。するとその閉された眼の中には、いつまでも赤い縞のやうなものがちらちらしてゐた……

VII

扁理は出發した。
都會が遠ざかり、それが小さくなるのを見れば見るほど、彼には出發前に見てきた一つの顔だけが次第に大きくなつて行くやうに思はれた。
一つの少女の顔。ラファエルの描いた天使のやうに聖らかな顔。實物よりも十倍位の大きさの一つの神秘的な顔。――そしていま、それだけがあらゆるものから孤立し、膨大し、そしてその他のすべてのものを彼の目から覆ひ隱さうとしてゐる……
「おれのほんとうに愛してゐたのはこの人かしら……」
扁理は目をつぶつた。
「――だが、もうどうでもいいんだ」
それほどに彼は疲れ、傷つき、絶望してゐた。
扁理、この亂雜の犧牲者、にはいままで自分の本當の心がす

こしも見分けられなかつたのだ。そして何の考へもなしに自分のほんとうに愛してゐたものから遠ざかるために、別の女と生きようとし、しかもその女のために、もうどうしていいか分らないくらゐ、疲れさせられてしまつてゐたのだ。

　そして彼はいま何處へ到着しようとしてゐるのか？

　どこへ？

　――扁理は突然、汽車が一つの停車場に停まるや否や、そこへ降りてしまつた。

　何かの藥品を思ひ出させるやうな名前をもつた、小さな海岸町。

　そしてこの一個のトランクすらもたない風變りな旅行者は、停車場を出ると、すぐその見知らない町の中へ目的もなしに足を運んで行つた。

　彼は歩いてゐるうちに、ふと變な氣がしだした……通行人の顔、風が氣味わるく持ち上げてゐる何かのビラ、何とも言へず不快な感じのする落書、電線にひつかかつてゐる襤褸のやうなもの、――さういふものが彼に何かしら不吉な思ひ出を強請するのだ。

　扁理は或る小さなホテルにはひり、それから見知らない一つの部屋にはひつた。あらゆるホテルの部屋に似てゐる一つの部屋。――しかし、それすら彼に何かを思ひ出させようとし、彼を苦しめ出すのだ。彼は疲れてゐて非常に睡たかつた。そして彼はそのすべてを自分の疲れと睡たさのせゐにしようとした。

　そのために彼はすこし眠つた。……目をさますと、もう暗くなつてゐた。窓から入つてくる、濕つぽい風が扁理に、自分が見知らない町に來てゐることを知らせた。彼は起き上り、それからホテルを出た。

　さうしてまた、さつき一度歩いたことのある道を歩きながら、さつきから少しも失はれてゐない自分のなかの不可解な感じを犬のやうに追ひかけるのだ。

　突然、一つの考へが扁理にすべてを理解させ出した。さつきから自分をかうして苦しめてゐるもの、それは死の暗號ではないのか。通行人の顔、ビラ、落書、襤褸のやうなもの、それらは死が彼のために殘して行つた暗號ではないのか。どこへ行つても死の影のこびりついてゐる、この見知らない町――それは彼には同時に九鬼の影でもあつた。さうして彼にはどうも、

鬼が數年前に一度この町へやつてきて、今の自分と同じ道を歩きながら、やはり今の自分と同じやうな苦痛を感じてゐたやうな氣がされて來てならないのだ……

この時はじめて扁理は理解した、死んだ九鬼が自分の裏側にたえず生きてゐて、自分を力強く支配してゐたことを、そしてそれに氣づかなかつたことが自分の亂雜さの原因であつたことを。

さうしてこのやうに、すべてのものから遠ざかりながら、そしてただ一人の死人をいきいきと、自分の裏側に、非常に近くしかも非常に遠く感じながら、この見知らない町の中を何の目的もなしに歩いてゐることが、扁理にはいつか何とも言へず快い休息のやうに思はれ出したのだ。

……そのうちに扁理は、強い香りのする、夥しい漂流物に取りかこまれながら、まつ暗な海岸に愚かさうに突立つてゐる自分自身を發見した。さうして自分の足もとに散らばつてゐる貝殼や藻や死んだ魚などが、彼に、彼自身の亂雜さを思ひ出させてゐた。——その漂流物のなかには、一ぴきの小さな犬の死骸が混つてゐた。さうしてそれが意地わるい波にときどき白い齒で嚙まれたり、裏がへしにされたりするのを、扁理はぢつと見つめながら、次第にいきいきと自分の心臟の鼓動するのを感じだしてゐた……

VIII

扁理の出發後、絹子は病氣になつた——

そして或る日、彼女ははじめて扁理への愛を自白した。彼女は寢臺の上に、シイツのやうな顏色をしながら、こんなことを繰り返し繰り返し考へてゐた。

——何故私はかうなのかしら。何故私は扁理の前で意地のわるい顏ばかりしてゐたのかしら。それがきつとあの人を苦しめてゐたのだわ。さうしてこんな風に私たちから遠ざからせてしまつたのだわ。それに、あの人は始終自分の貧乏なことを氣にしてゐたが、(そんなことをいままで一度も考へて見たことがなかつただけ、この考へは彼女を急に混亂させ出した。)それで、扁理は私のお母さんやなんかに誘惑者のやうに思はれたくなかつたのかしら。あの人が私のお母さんを怖れてゐたことは確かだわ。そしてこんな風にあの人を遠ざからせてしまつたのはお

母さんだつて悪いのだわ。私のせゐばかりではないのだ。ひとつはお母さんのせゐなのだ。……

熱と告白とが絹子を、恐ろしい力で未知の感情の中に引ずり込み、そして彼女の顔の上にあつた涙の木理を、いつのまにか狂暴な意地わるさの表情に置き換へてしまつた。それは實は彼女自身に對する意地わるさであつたけれども、絹子にはそれを彼女の、母に對する意地わるさであるかのやうに信じさせながら――

「はひつてもよくつて?」

そのとき母の聲がした。

「いいわ」

絹子は、彼女の母がはひつて來るのを見ると、いきなり自分の狂暴な顔を壁の方にむけた。細木夫人はそれを彼女が涙をかくすためにしたのだとしか思はなかつた。

「扁理さんからはがきが來たのよ」夫人はさう言つた。

その言葉が絹子の顔を夫人の方にねぢむけさせた。今度は夫人がそれから自分の顔をそむかせる番だつた。

――この頃、細木夫人はすつかり若さを失つてゐた。そして彼女には、自分の娘がなんだか自分から遠くに離れてしまつてゐるやうに思はれてならないのだ。彼女はときどき自分の娘を、まるで見知らない少女のやうに、見出した。そしていまもさうだつた。

絹子は、海の繪はがきの裏に、鉛筆で書かれた扁理の不恰好な字を讀んだ。彼は、その海岸が氣に入つたから暫らく滯在するつもりだ、と書いてよこしたきりだつた。

絹子はその繪はがきから、彼女の狂暴な顔を不意に夫人の方にむけながら、

「扁理さんは死ぬんぢやなくつて?」と言つた。

細木夫人は、自分の前の、見知らない少女の狂暴な表情に驚いた。――が、その狂暴な表情は突然、彼女に本能的に、彼女がその少女と同じやうな年齢であつた時分、彼女の愛してゐた人（九鬼）の前に見せつけずにはゐられなかつた自分自身に對する意地わるさの表情を、思ひ出させた。そして彼女は、その見知らない少女がその頃の自分に非常に似てゐることに、さうしてその少女が自分自身の娘であることに、はじめて氣づいたのだ。そして同時に、その少女の狂暴な表情から、少女の思つ

てゐるやうに彼女に對する意地わるさではなしに、かへつて少女自身に對する意地わるさを、一つの眞實を見出した。――娘は誰かを愛してゐる。自分が九鬼を愛してゐたやうに。そしてそれはきつと扁理にちがひない……

細木夫人はその瞬間、自分の中にながく眠つてゐた女らしい感情が、再び自分の娘の苦しんでゐる樣子によつて目ざまされだすのを感じた。以前彼女自身の不幸が彼女の娘の中に眠つてゐた女の感情を喚び起したのと、全く同じ感情の神秘的な傳播作用が、今度は、その反作用でもあるかのやうに起つたのだ。そしてそれは、彼女もまた扁理を、娘と同じやうに愛してゐるかのやうに、彼女に信じさせたくらゐの新鮮さをもつて。

數分間の沈默。――そしてその沈默が、絹子のさつき言つた恐しい言葉を彼女もまた肯定してゐるかのやうに思はれさうになつたとき、細木夫人はやうやく彼女のなかの古い母の感情を取り返した。

さうして夫人はいかにも自信ありげな微笑を浮べながら、

「そんなことはないことよ」と言つた。「あの人には九鬼さんがついてゐるから大丈夫ですよ。あの人はきつと死なないと思ふわ」

――扁理にはじめて會つた時に、扁理の生のなかに九鬼の死が緯のやうに織りまざつてゐることを、そしてそれが扁理を、死を見つめることによつて生がやうやく分るやうな不幸な靑年にさせてゐることを、夫人に見拔かせたところの鋭い直覺が、いま再び蘇つて來ながら、さういふ扁理を自分の娘に理解させるためにはごく僅かな暗示だけで充分であることを彼女に知らせた。さうして事實、夫人のいま言つた數語は、それを言ひながら彼女が浮べた微笑の神秘的な作用によつて、彼女の娘の苦痛を麻痺させだした……

「さうかしら」

さう少女は答へながら、はじめはまだ何處かに苦痛をおびた表情で、彼女の母の方を見あげたのであるが、そのうちにぢつとその母の古い、神々しい顏に見入りだしたその少女の眼ざしは、だんだんと古畫のなかで聖母を見あげてゐる幼兒のそれに似てゆくやうに思はれた。――



生計の道

岡田禎子

西妙寺の和尚　五十過ぎ。
院長大槻氏　四十過ぎ。
妻　さと　卅五六歳。
女兒　文子　六歳位。
其他

大槻犬猫病院の内部。

舞臺は三つの部分から成る。

右端二重は八疊程の座敷。奥は硝子入りの障子で次の間に續く。右手壁に寄せて、藥品、醫療器械等を納めた戸棚。眞中にくゎりんの小卓。莨盆、夕刊等が載つてゐる。

中央は土間。眞中に素木の角机を二脚の椅子が挾んでゐる。正面は硝子戸の入つた出入口。此處で院長は患者に會ふ。

手前に半間の出入口を殘して、壁で仕切られた左端の一廓は病室である。

正面及び左手の壁際に寄せて、檻がずらりと並ぶ。患者は少い。正面の檻に、ブルドツグ一匹、心臓を病つて呻吟してゐる。

時は今、六月末、猫の夜歩きに、鐵葺トタン屋根の鳴る、あの頃。

長い薄暮の中で、雨が降つてゐる。

院長は、單衣の上に診察着を著た姿で、只一匹の患者を診察してゐる。聽診器をあつちこつちと働かして。

妻のさと、大きな風呂敷包みを大事に抱へ、文子の手を引いて右の室に出て來る。雨ゴートで身仕舞つてゐる。文子は一束の繪本を抱いてゐる。

さと。お父ちやん、では行つて參りますから。

院長。う。(檻に戸をさして出て來る)

さと。(文子の取る手を離し)さ、お父ちやんへゐらつしやい。雨が降るんだから……(院長に)一緒に行くつて諾かないんですよ。ほんとにお父ちやんたら、自分の子より犬の方が可愛いゝんだから、子供だつて心細いんですよ。(風呂敷包みを上り框に置く)

院長。(聽診器を土間の卓上に置き、子供を抱く)何うしたね、文ちやんは、え、外はもう日が暮れるのですよ。それに雨も降る。ごらん、ほうら!(正面の硝子戸を開き、子供に雨を見せる)ね、暗いでせう。降るでせう。さゝさゝさゝゝゝ(唄ふ)雨が降ります。雨が降る。外へ出る子は濡れまする。母ちやんお出かけ御苦勞さま。

文子。(稚い發聲で合せて來る)

さと。(その間に奥から、雨傘及び足駄を運び出す。雨の音に)あひにくとまあ、ひとが出ようと云ふ矢先へ……。

院長。どつちへ行くの?

さと。(上り框に腰を下ろし、足駄に足を入れ)あつち、こつち。三軒ですもの。坂上さん、中西さん、アパアト……。

院長。大變だな。

さと。少しおそくなるかも知れませんよ。雨で近道は步かれませんからね。ほんとに、たちまちの足みたいに擴がつた三軒だ。序に、尾上さんへも寄れたら寄つて來たいから。……

院長。停車場前通るね、それぢや。
さと。えゝ──通りますよ。
院長。電話をかけて貰ひ度いんだが。──管井さんだ。
さと。管井さん？（立つ）まあ！ そいぢや、……？（ちつと夫の顔を見る）
院長。うむ。何うも駄目だ。脈が悪い。夕方から頻りに結滞がある。
さと。（病室の入口迄行つて中を見る）まあ、ぐつたりしてますね。（犬を呼ぶ）ホール・ホール……眠つてるんでせうか。顔を上げもしない。（入口を離れ土間の椅子に掛ける）
院長。大儀なんだ。夕飯も口をつけとらん。
さと。急ぐんですか、電話何と云ひませう。もう直ぐですか。
院長。悪い様ですからと云へばいゝ。今直ぐと云ふ事もあるまいが……明日の朝迄は何うかな。
さと。（物思ひに屈して）いよ／＼これでからに成りますね、うちの病室も。
院長。……………（何時も乍ら茫然とする）
さと。いよ／＼來月は、八百屋、米屋に頭を下げるんですね。到々そこ迄來たんですね。
院長。それは何うだかね。來月の月末は、まだ卅餘日の向うなんだ。（戸を閉し、子供を膝にしたまゝ上り框に腰を下ろす）
さと。何ですつて、卅餘日がそんな遠い向うなんですか？ ほんのこの次の勘定日ですよ。病室はがら空に成つたつて、口はちつとも減りやしないんですからね。
院長。ぢや、行つておらつしやいまし、母ちやん。（柔かい子供のおかつぱで喉を撫で乍ら）早く行つて、早く歸つて來て下さい。温順しく待つて居りますから。お土産は何だい、文ちやん？
文子。バナ、よ、あたしバナ、よ、母ちやん。
さと。（立つて）何がバナ、です！ しつかりするんですよ、いくら子供だつて文ちやんのお父ちやんは斯う云ふお父ちやんなんだからね。（上り框の傘と包みを取る）夢にも思ひませんでしたよ、本當に、この年に成つて病室ががら空になるなんて！ だん／＼職も進み、信用も重り、株も張らうと云ふ時に開業以來遭つた事もない様な日に遭ふんだから！……
男。今晩は。（頭を先にして玄關の戸を開ける。自轉車を半分土

間に入れて立てかけ、入つて來る）先生ゐらつしやいますか

院長。はあ、今晩は。（子供を下ろして立つ）

さと。（子供の傍に掛ける）

男。あゝ先生、死亡診斷書を頂き度いんですが。――犬です。

院長。ほう？（無意識に卓上の聽診器をとる。）

男。トラックにやられちやつて。……

院長。何時？　何處で？

男。たつた今です。家の前で遊んでゐる奴を、ふいに横町から出て來やあがつて……！

院長。逃げたんですか？

男。えゝ、逃げちやいました！　なに、ちやんと判つてるんですよ。今時分この邊通つて行くなあ、市場のに決つてますさあ。ひどい事しやがつて……あひにくと店に誰も居りませんでしてねえ、見てた通行人が云つて來て呉れたりする始末で……。

院長。とにかく診ませう。御一緒に參りませう。

さと。（いち早く自分の傘を夫に渡す。男に）ゐらつしやいまし。とんだ御災難でしたねえ、本當に。

男。あ……（そのさとに頭を下げ、院長に）いゝえ、も診て頂くものはないんです。臓腑なんか出しちやつて……（手眞似宜しく）斯う、寢てる所を眞上に來たんですね。ぐたつと、伸びちやつて、それきりなんです。きやんとも云ひません。

院長。（弱々しく笑つて）併し、一度拜見しない事には……診斷書を書くにしても……。

男。不可ませんか。ちやんと判つてるんですが……臓腑が出て冷たくなつちまつてるんですよ。

院長。えゝ、警察が喧しいものですからねえ。――とにかく伺ひませう。御遠方ですか。（出かけさうにする）

男。（押し止めて）いえ。ぢや、連れて來ませう。なに、直ぐ其處なんです。自轉車で一走りして來ませう。

院長。（未練に）少しでも呼吸が有る樣なら、動かさないで置いて、早く診た方が……。

男。（自轉車を戻し乍ら）いえ、もう綺麗にすんでます！　いくら先生にも、もう何うにもなりません。ぢや、直ぐ連れて來ますから……（去る）

院長。（暫く後を見送り、戸を閉して笑つた眼を妻にふり向く）ほうらね、斯うした世の中に成つたんだ、往診料ひとつ、無

駄に出さうと云ふ人は無くなつたのだ。

さと。がつちりしてるよ、本當に。知つてますよ、私あの男。神崎屋の二番息子ですよ、ほら、あの停車場前の果物屋……。

院長。(上り框にかけて)するとあの黒犬だな、死んだのは。惜しくもない年だ。

さと。往診料位惜しんで……大變ですよ、本當に。この雨の中、そんな、臓腑出した犬の死骸運ぶなんて！ あんな大きな店のくせにね。

院長。(寄る子供を抱き上げ)さあ、母ちゃん、行つてらつしやいまし。

さと。行つて來ませう。本當にね、こんな世の中では何う思つても仕方が無いんだから……(溜息を吐いて荷をとる)ぢや文ちやん、おとなになさいよ。(出てゆく)

院長。はい／＼。(門口に立つて見送る)

文子。ね、父ちやん、御本よんで。

院長。う、御本ね。さあさ、御本にしましよ。(戸を閉めて座敷に上り、卓の前に坐る。安坐した膝に子供を乘せ、卓上に繪本を擴げる)さてと、これは……蛙の學校だ。(よむ)ヘビガキタラ、ミヅニモグレ……ほら、大勢生徒さんが習つてゐるでしよ。ヘビガキタラ、ミズニモグレ……怖い。怖い。ヘビは怖い。

文子。ヘビは怖い。(頁を繰る)

院長。ほうら、今度は……(讀む)オセドノ、オセドノ、タケヤブニ、ボツチリアカイヒガツイタ。スズメノオヤドノタケヤブハ……。

硝子戸が開いて、西妙寺の和尚が入つて來る。鼠地の外套に同じ色の宗匠頭巾。茶皮の袋を提げてゐる。

和尚。や、今晩は。(戸口で雨を切つた傘を隅に立てかけ、兩袖の露を拂ふ)

院長。おゝこれはようこそ。誰人かと思ひましたよ。そら、和尚さんゐらつしやい。(子供を其處に坐らせ、挨拶の形を執らせる)

文子。ゐらつしやい。

和尚 おゝ、これはよく出來ました。今晩は。(皮袋から小さく半紙に包んだ乾菓子を出す)はい、和尚さんのお土産。……

院長。(この間に奥から座布團を運ぶ)さ、何うぞ。や、これは何うも。

和尚。何うですな景氣は？(云ひ乍ら病室を覗く)ほう、寂しいぢや有りませんか。(戻つて上り框に腰を下ろす)

院長。何うぞ此方へ。

和尚。いや、さうしても居れますまい。一度落付くと、老人の腰はなか〳〵上り難いものでしてな。此處らで用心しときませう。(袋から煙草入れを出し、煙管で喫む)

院長。それは何うも。(卓上の煙草盆を出す)何ちらへ、この降るのに。

和尚。此方へ。

院長。ほう。——何か御用で？(子供を抱いてゐさり寄る)

和尚。御用聞きに伺ひましたよ、はつはつはつ。

院長。…………？

和尚。いや、呆れた世の中に成りましたな。此方が斯う寂れた事は、貴方にしても初めてゞせう。

院長。(弱く笑つて)さあ、それで氣嫌の惡い事で。妻君小言の斷え間なしです。

和尚。何處も同じ、ですかね。と云つて、死者病者の少い譯は有りますまいがね。內證で濟ませるんですね。病つても放つて置く。死ねばまあいゝ按排だ位で、便所の陰あたりへ埋めて了ふ。……

院長。そんな所でせう。うちも明日からはいよ〳〵からあきです。

和尚。ほう。あすこに何かゐた樣だが……

院長。それが、何うも明日あたりは、和尚さんのお世話にならねばなりますまい。

和尚。え？(はづんで)駄目ですかね。何ですね、病氣は？

院長。ヒラリヤですよ。二週間程ゐたんですが、今夜が危いのです。ひと頃、可成持直してゐたんですがね。

和尚。何うです、まさか、便所の隅で濟ませもしますまいね、此處で死なせる程の家なら。——何處のです？

院長。菅井つて家ですがね。そのステーションの先の。何でも內務省の大分いゝ所の樣です。良いブルドックですよ。

和尚。さう云へば、お宅のは見えない樣だが、あの贅澤なセツター……？

院長（寂しく笑つて）賣りました。

和尚。え〻？　貴方が？　よく手離せましたねえ。

院長。（同樣に）背に腹は變へられずで……餘り妻君が喧しいもので……。

和尚。成程。いかな貴方でも、犬と家庭の平和とは取換へられますまいな。はつはつはつ。

院長。（寂しく聲のない笑ひ）

和尚。それはお寂しからう。五日六日、あすこで世話をしてさへ、別れるのが辛いと云ふ貴方だ。

院長。え〻、一匹は何うしても自分のが欲うござんすよ。預りものは、可愛がつてる手の下から連れて行かれるので……。

和尚。成程、それでなくちやこんな御商賣は出來ますまいな。

院長。だがまあ、そんな贅澤の云つてられる身分では有りますまい。（笑ふ）

和尚。全く、えらい世の中になりましたよ。だん〳〵落ちる許りで、この先一體何う成るものでせう。何ですつてね。これで醫者の寂しいのは、敢へて犬猫病院許りではない。私の經驗に、小兒科やつてるのが有りますが、今年は疫痢なぞ却て非常に少い。

院長。さうですかね。新聞なぞで見ると、不景氣な年は、從來決つて傳染病、消化器系の傳染病ですね、これが多いのが例だから、各家庭で注意を要すなんて……。

和尚。なんの、なんの！やつぱり不景氣で、買ひ喰ひが少いのだらうつて云つてますがね。こりや犬猫なみには見られません。よしんばあり〳〵勘定に困るにしても、子供が今死にか〻つてゐると云ふのを、放つて置く親は有りますまい。そこを呼びに來ないと云ふのは、こりや矢張り病人が無いと見なければね。

院長。成程ね。不景氣のさせる攝生ですか。（笑ふ）

和尚。結構な事ですよ。立場を天下に取れば、ね。はつはつはつ。

院長。やれ〳〵、重いと思つたら眠ちまつた。よいしよ、と……

（子供を其處へ寢かせる）

和尚。お〻、お見かけしないが、母ちやんは……？

院長。（笑つて）御用聞きに出ましたよ、これこそ。（奧に去る）先生面白い挑戰を始めましてね。

和尙。ほう、何か御內職を？

院長。(小布團を持つて出て子供をくるむ)まあ、妙な世の中に成りは成つたもんで……お顧客と云ふのは、大部分其處のアパアトの連中なんですがね。さんざ着汚した着物ですね、これを出して貰つて、解いて、洗濯して、破れを繕つて、仕立てゝ……ま、一人前の着物にして屆けるんですがね。

和尙。ほ、ほう、思ひつきだ。

院長。だつたと見えます。なか／＼繁昌で、この節ぢや少々一人では手が足りない。

和尙。成程。何うしてこりやなか／＼尖端的だ。うつかり院長が犬猫にしがみ附いてるよりは……？

院長。(笑つて)左樣。いつそ廢業して、妻君のために、毎日御用でも聞いて廻らうかと思ひますよ。

和尙。全くだ。人助けないゝ御商賣ですよ。當節アパアト住ひなぞしてゐる若夫婦には、何れ共稼ぎが多いんでせう。なか／＼女房だとて、襤褸迄繕つてる暇は有りますいからねえ。

院長。この邊は又それが多いんでしてね。アパアトでなくとも、共稼ぎする中所の知識階級と云ふのが。

和尙。(頻りに感心して)流石學校出は違つたものだな。賢妻だ、全くお羨しいものだ。うちの大黑殿なぞと來た日には……。

院長(苦笑)いやあ、賢妻必ずしも良妻ならず……。

和尙。何を云ひなさる！賢妻とひとつに成らん良妻なんぞはもう古い。先づ賢く、ですよ。何でも今後は賢妻賢母主義で行かなくつちやあ。そりや男が威勢がよくつてぐつと抑へてゐる日には、何んな掃溜から拾つて來た女だつて、何うやら良妻では居りませうがね、一旦緩急有つた時にぢや。その時、只もう吼える許りが能と云ふんぢや、これからのせち辛い世の中に、うつかり偕老同穴は契れませんよ。

院長。はゝゝゝ。全くこの頃の樣だと、何時なんどき男廢業つて事になるか判りませんからね。何でも斯う云ふ年には、決つた收入の有る者の一人天下なんで……首に心配のない月給取りだの、和尙さんの樣にちやんと得の有る寺の……。

和尙。(烈しく手を振つて)なんの、なんの！私の得なぞが物の數に入る程なら、斯う御用を聞いて廻つたりはしませんよ。又出來るものでも有りますまい。かりにも圓い頭に袈裟

かけて數珠持つ身に……お〻。さう云へば、今夜は折角御用聞きに廻つた甲斐が有りましたよ。（病室へ身振して）あちら、いよ〳〵の曉には、是非愚僧の方へ御紹介願ひ度いもんで……。

院長。あ〻（多少呆れる）大丈夫でせうよ、そりや。このあたりで家畜埋葬場と云へば、もう貴方の所許りなんだから。

和尚。それがね、この頃はとんだ競爭相手が出來ましたよ。皆通の寺でどん〳〵扱ひますんでね。現にあすこの極樂寺なぞ。盛んにやつて居りますよ。いえ、元來これがね、餘り良い家のも困るんで、とかく御寵愛だつたりすると、うちの墓地へ一緒に、なんてことになるんで……すると何うも旦那寺へとられて了ひますんでね。

院長。はあ。（やり切れない）

和尚。やれ〳〵、とんだ坊主だとお思ひだらうが……成程出家が今生を說く樣に成つては、何れ佛敎も終りでせう。又今生を說かなんだ所に佛敎の終らさるを得ん所以も有らうと云ふもので、罰は、まあ自業自得、佛敎には諦めて貰ひませうが、諦めたでは濟まないのが私共出家の身の上なんで、早い話しが私にしてからが、坊主に成つたのが悪いのか、女房持つたのが悪いのか……兎に角寺の得と云ふものはよくして有りますよ。そりやもう、坊主一人の口丈は立派に保證されてゐる。が、女房持たうの、子を育てやうの、そんな俗念に至つてはてんで見向いて呉れるものではない。ちやんとさう寺の組織が出來て了つてゐる。その無駄のない一人扶持の組織の中で、愚僧の樣に子供の五人も持つて、それが各自に喰ひはする、學校へは行く、と云ふんですから、こりやもう家計の破綻は當り前の事なんで、ひとりこの不景氣の致す所許りではありませんよ。そこへ、そら、大黑なんて奴は、こりやまあ和尚だつて然うなんだが、すばしこく社會の裏側へくゞり拔けて、尖端的な内職を捉へて來るなんて氣の利いた藝當は出來るもんぢやない。と斯う成ると……。

綿々たる和尚の咆哮の中へ、限りない院長の顰蹙の中へ、靜かに硝子戸が開く。女が現れる。髮は櫛卷き、野暮な雨コートに鎧つてはゐるが、何處か黑つぽく、なまめかしい。年は一寸判らない。二十七八とも、卅五六とも。

女。（後向いて俥夫の出すバスケツトを受取る。）ちや直ぐ済みますから。（戸を閉めて向き直る）御免下さいまし。先生はお宅でございませうか。

院長。は、ゐらつしやいまし。（立つて土間に下りる）

女。（バスケツトを卓上に置く）先生でございますか。お邪魔いたします。

院長。何うぞ。（そこの椅子を勧める）

女。早速でございますが、あの、少し急ぎますので……（バスケツトを開き、華美な友禪の小布團ぐるみ一匹の猫を出す。猫は皮膚病を病むらしい。それも酷い。頭から背にかけて、一面赤白く剝げてゐる。頼む腹部さへ所まんだらである）

院長。ほう、これは！

女。こんなに成りましたの。眞黑ないゝ毛でございましたのに。（椅子にかける）

院長。大分酷いんですねえ。（猫を抱き取らうとする。猫は尻を引き背を丸め頭を下げて鈍く唸る）お！こりや何うも。（手を退く）

女。（輕く猫の頭を叩き）何ですね、失禮な、先生ちや有りませんか。（院長に）仕方がございません、人慣れませんで。女中と三人きり、淋しい家に暮して居りましたもんで。

院長。大分深窓の育ちですね。（觸らないで猫を見調べ）うむ。こりや酷い。何うして又こんなに……？

女。こんなに成つて歸りましたんでございます。この十日許り、ふつとゐなくなつて了ひまして、毎日もう、何んなに捜しあぐんで居りました事か……。

院長。はゝあ、傳染されて來たんですね。季節でね。

女。今朝になつてひよいと又歸つて參りまして、うつかり見違へる所でございました。餘り情ない姿なんで……（左の示指に卷いた小さな手巾で、そつと鼻のわきを撫でる）

院長。疥癬ですね。よくやられる奴ですよ。

女。野良猫だつて、こんな浅間しい姿のはさう〳〵有るものぢやございません。何處で何をして居りましたことか、ひとりで家出したりなんかして、それには色々事情もございますんですけれど……三年この方ない事なんでございますよ。（猫に）だからこんな酷い罰を受けるんですよ、本當にねえ。（猫の

前脚を撫でる）

院長。（立つて）なに、御心配には及びません。三週間私にお預け願へれば、綺麗に、元通りの毛並に復へしてお連れ致しませう。ぢや此方へ……（左手へ行きかゝる）

女。それが先生！（立つ）その事で御相談に上りましたんです、けれど……。

院長。は。――それともお宅で養生なさいますか。大分人見知りの様で……。

女。それが先生……。

院長。矢張りお預け下さつた方が宜しいでせう。治療に便利でも有りますし、第一斯う穢くてはお宅でも御厄介でせう。

女。あの、私上りましたのは……（詰る胸を押し切る恰好に）殺して頂き度いと思ひまして！（ぱつと袂で顔を掩ふ）

院長。え〻!? お殺しになる!? さうでしたか。そいつあ……

（明かに落膽する）

女。（袂の下から）あの、あの、ちつとも苦しまないで、死なせて頂く方法がございますとかで……。

院長。え〻、それは雑作ありません。一寸注射をすれば、見てる前でゆきますよ。楽なものです。

女。何うかそれを！……（椅子にくづ折れて泣く）

院長。承知しました。（座敷に上り注射の用意をする）

和尚は女が入つて以來。耳と眼に全精神を集注して、この客を觀察してゐたのだが、この時立つて卓子に近づく。相變らず威嚇的に構へる猫を仔細に見調べる。

院長。（注射器を手に下りて來る）では……。

女。は……（立つ。顔の袂をとる）

院長。なに、御心痛には及びませんよ。これでやるからには何の苦しみもありません。ほんの、あの世へ迄ひと眠入り……。

和尚。（その院長を止め）まあ院長。これは見合しなすつたが宜しからう。（首を振り乍ら上り框に行つてかける）

二人。……!（視線を揃へて和尚を見る）

和尚。慥に、その方が無事だ。

女。（疑問の眼を院長に向ける）

院長。あ〻、西妙寺の和尚さんです。あの、家畜埋葬場の。

和尙。左樣。谷口幸道と申します。何うか宜しく。（立つて挨拶する）

女。は、これは……（禮を返へす）

和尙。失禮だが、この猫は殺させませんよ。

女。は……？

和尙。この猫には魂が有る。この眼はまるで人間の眼だ。

女。え、えゝ!? （仰天する）

和尙。左樣。尋常の猫では有りません。

院長。（深い眼をぢつと和尙に注ぐ）

女。ではやつぱり！（急いで卓の上で猫をたぐり寄せる）まあ、さうでございましたか！

和尙。輕卒な扱ひはなりますまいぞ！（上り框に引返へして掛ける）

女。（我子を讃められた母親の笑顔で、早口に）えゝ、仰有る通りでございますわ、和尙さま。そりや賢い猫なんでございます。生意氣に私を守護る心算で居りますんですよ。しよつちう私の側にひつついて居て、お客樣なぞ、少し高聲でも遊ばしませうものなら、むら／＼つと逆毛を立てまして、それはもう跳び掛らない許りに……。

和尙。（烟管をひねり乍ら）左樣。それ位の事は有りませう。

女。（次第に高まる興奮の中に）この間急にゐなくなりましたと云ふのも、少しごた／＼が有りまして、客立ちが多かつたり、私もよく出歩きましたし、たまに家に居りましても、女中相手に忙しく許り致して居りまして、餘りこの子に構つてやれなかつたのでございますよ。構はない許りか、泣き乍ら何處迄も寄つて參りますのを、つひ忙しい紛れに叱り／＼致しましたの。終ひには少し離れた所で泣くのも止めて、ぢつと私のする事を見て居りましたが、それでも呼んでもやれずにゐました所、到々出て行つて了ひましたんですわ。私を誤解したんでございますわね。

和尙。左樣。その位の事は有りませう。

女。私が病ひでも致しますと、それこそもう、夜つぴてまんぢりとも致しませんの、ぢつと枕元に坐つたきり、しよんぼり前脚を揃へて、もうそれは／＼案じ顏に……。

和尙。左樣。それ位の事は有りませう。

女。だもんでもう私、乳呑兒抱へた樣な按排なんでございます

よ。半日と安心して外でも出來ませんの。後でねえやが苦勞致しますんですつて、すつかり部屋の隅つこに引込んで了つて、御飯は頂きませんし、呼んでも返辭もしませんし、うつかり手でも掛けますと、咬みつきさうな劍幕で怒り出しますんですつて。歸へると何時もこぼされますの。

和尚。左樣。それ位の事は有りませう。

女。そのくせ、私が家に居りさへすれば、もう氣嫌よくねえやの手から御飯も頂きますんですけれどねえ。

和尚。兎に角これは奥さん、飼つておやりなさいまし。殺したりなすつては、お身の爲でも有りますまい。

女。は、それはもう……それはもう私に致しましても、今更にこれを殺さねばならぬなぞと、何の因果で……。

和尚。貴方も、院長、その仕事丈は御辭退なすつたがいゝ。

院長。はてね。君はそんな猫かい。(手を出す。猫は依然頑固である)何だ、何だ。まあさう怒るな。(椅子を引いて掛ける)

和尚。僅か三週間と云ふでは有りませんか。お預けなさい。治療をしておやんなさい。いくら業病だからつて、元氣でゐる間いとし可愛いで撫でまはしたものを、いざ病つたから殺すと云ふのでは、こりやもう畜生道にも劣る仕業だ。

女。それはもう……(手巾を眼に當てる)

和尚。治療しておやんなさい。何も御縁だ。院長もせい〴〵腕を振ひませう。三週間が、案外早く快くならぬものでも有りますまい。

院長。さあ、三週間以内と云つては少し難しいでせうねえ。何分酷くやられてゐる。

和尚。三週間が四週間でもぢや。ひとつの魂を救ふのだと思へば決して長くは有りますまい。それもしつかり貴方と結び附いてる魂ですぢや。

女。は……。

和尚。本來なら、これ程の代物をこれ程に飼ひ慣して居られる貴女だ。今この猫の病氣にも、貴女御自身の身體が痛む筈だと思ひますがな。私は寧ろ不思議でなりません。何うして殺さうなぞ平氣でお考へになれるものか……。

女。平氣ではございません！色々思案に餘つた擧句、結局その方がこれのためにも仕合せだと思ひまして……。

和尚。はてね。
女。然うなんでございます　生きて居りましても、もう私と一緒には暮せないのでございます！（音に漏して泣く）
和尚。（兎かく）ほう……？
女。御治療を願ひますにも、今はその費用さへございませんので……。
和尚。御冗談！
女。いゝえ、然うなんでございます。何うか冷たい奴だと丈はお蔑み下さいません様に、……もう何う思つても私とは暮せないのでございます。若し丈夫で居りましたなら、何處かお優しい方に貰つて頂いて、せめて行末の仕合せも計つてやれたのでございませうけれど、こんな姿では人様にお願ひのしようもございません。と云つてこのまゝ置いて參りましたなら、つひぞ苦勞を覺えない子でございますから、人様の様に掃溜あさる術も存じませんでせうし、病つた身に、何んな切ない想ひをするかと思ひまして……。
和尚。（索然として）成程、成程。餘程仔細がお有りの様だ。さうでもなければ、譯の判らない御決心だと思ひました。

默。——
院長。（立つて）殺しませう。まあ、この猫が何う成つたら仕合せかは、御主人が一番よく御存じの筈だ。
女。ま、先生！（ぱつと立つて猫を庇ふ。）まお待ち遊ばして……（考へに沈む。暫く沈默の後決心して）先生にお願ひがございますんですが……？
院長。はあ。
女。何うかこの子を癒してやつて下さいまし。そして、先生のお見込みで、和尚さまにもお願ひ申します、御見込みで、可愛がつて下さりさうなお宅へ、貰つて頂けます樣御骨折り下さいませ。
二人。（はたと困じた沈默に面を見合す）
女。（左の腕の時計を外す。時計は思ひきり小型の金である。錯亂の來た調子に）これを、これを一緒にお預り下さいませ。そんな譯で、今は私も餘裕がございません。今夜これから、神戸の親戚へ世話に成りに參る所でございます。治療費も、

持參金も、附けてはやれないのでございます。(泣く)

二人。(と胸を突かれた沈默)

女。今夜十時の汽車で立つのでございます。折角歸つて來て呉れましたのに……いつそ歸つて來なければ、こんな辛いお別れもしなくて濟んだでせうに……。

二人。……。(敬虔に)

女。お願ひ出來ますでせうか、先生?

和尚。(慌てゝ院長を拔き)宜しい。愚僧法衣に誓つてお引受け致しました。勿論院長はそれが役目、治療を引受けて貰ひませう。その後は愚僧が預ります。何處か良い養子先の見つかる迄。

女。まあ! まあ、有難うございます。(猫を抱いて頰ずりする)運が強いのね、お前は。仕合せな病院へ來合せました。屹度何時迄も仕合せでせう。この時計を持つてお行き。長い間二人でお世話になつた旦那のお形見なんだからね。お前に附けるのなら、屹度旦那もお叱りでは有るまい。怨まないでお呉れねえ。本當に私は酷い事を考へてゐたんだけれど……早くよく成つて、人見知りをせず、皆様に可愛がつて貰つてね……。

正面の戸が開く。俥夫が顏を出す。

俥夫。へいお邪魔さま。まだなか〱でせうか。

女。(吃驚する)あゝさう……待つて貰つてたんでしたね。(猫を下ろす)今參ります。(出した時計を見る。)あら〱、八時四十分もね。すみませんでしたわね。(猫に)ちやもうお別れなのよ。(猫は卓上で女の腹にすり寄つて鳴く)まあ……まあ……お前や……お前や……(泣く)

和尚。(見廻して座敷の卓上の新聞を取る)斯う眼が開いてたんでは、このお別れ切が有りますまいよ。(猫に新聞を冠せて抱き取つて左に去る)

女。あゝ、何うぞ、何うぞ、先生、和尚さま、お願ひ申します!(斷ち切る樣に外に出る)

院長。お預り致しました!(門口に立つて見送る。棍棒を上げた俥に)御氣嫌よく。(そのまゝ見送つて立ちつくす)

和尚。(檻のひとつに、新聞ごと猫を放り込んで戻つて來る。椅

子にかけて）行つちまいましたかな。

院長。（吾に歸へり、戸を閉して上り框に腰を下ろす）行つちまひました。

和尚。（殘された時計を弄び作ら）斯う云ふ物がお判りですか

院長？

院長。（惚けてゐる）え？　あゝバスケット忘れて行つたな。

和尚。一向私共には判らんが、色々考へ合せて……安物では有りませんぞ！

院長。左樣。えらく又小さいんですね。

和尚。そこが價値なんでせう。

正面の戸開き、さとが歸つて來る。行きよりも大きな荷物を持つてゐる。

さと。只今。おやゐらつしやいまし。（上り框に荷を置く。文子を見て）まあ、待ち切れないで……。

和尚。やれ〳〵、お歸へりなさい。

さと。（和尚に挨拶する）よくゐらつしやいました。

和尚。お留守へお邪魔をしてゐます。

さと。（院長に）犬連れて來ました。神崎屋？

院長。來ないよ。そんな事よりまあ、和尚さんにお茶でも汲みなさい。

さと。まあ〳〵本當に、お茶も出てないんですねえ。（荷を提げて奥に去る）

院長。まあ和尚さんお上りなさい。（座敷へ上る。奥へ）兎に角こいつを寢かさなきや……。

さと。（奥から）あゝ、抱いて來て下さいな、濟みませんけど……。

院長。重いんだて、こいつが……（文子を抱き上げる）ほ！　盜んでかれても知らない奴だ。（奥に去る）

和尚。（院長が上り框へ置き忘れた注射器を執り、病室へ入つて猫に注射をする。猫は死んでゆく。見終つて出て來る。丁度奥から出て來た院長に）ほい、これをお仕舞ひなすつて。

院長。あゝ。（注射器を取つて見て驚く）え、藥は？

和尚。（上り框に掛ける）もう濟ませました。

院長。えゝ!?　何を？

和尚。成程結構な藥ですね。樂に死んで往きましたよ。

院長。え丶!? 貴方が? (慌て丶土間に下り、左室へ駈け込む。格子から手を入れて猫を小突いて見る。反應なし。惘然と戻つて來る) 殺すのに反對だつたのは貴方でしたらう?

和尚。(煙草をふかしつ丶)左樣。貴方に入院患者を取つて進ぜやうと思ひましてね。

院長。え、え丶!?

和尚。然うと決れば、生かして置く丈餘計な物入りでせうがな たとひ一日でも。

院長。併し……(ぐつたり椅子に掛けて)併し魄が有ると仰有つたのは?

和尚。まさか! たゞの猫ですよ。――今度はその時計だが、い丶古物商に、お近附でもお有りですか?

院長。古物商? (時計を取つて見る)

和尚。出來る丈い丶値で取引きせねばね。それには此方が無智では困る。早速明日にも天賞堂あたりへ當つて見るんですね それ位の物で、新しいのは幾ら位するものか……。

院長。(露骨に憎惡して) 埋葬料に、御懷中なさらうと云ふのですか。(時計を置く)

和尚。左樣。それから治療代と。

院長。あひにくと私は、手を盡す暇が有りませんでしたよ。

和尚。まあさ。これはひとつ、仲よく半分こする事にしませうや。然うでせうがな、院長。

さと。(茶器の盆を運んで出て來る)まあ和尚さん此方へ。本當に失禮いたしました。(卓の周圍を取り片附けたりし乍ら) あ丶、管井さんがお見えになりました? 直ぐ伺ふからつて事でしたけれど……。

云ふ中にもう幕。――

―一九三〇・一〇・一〇―



國法の罠——二幕——

吉田絃二郎

時　大正六七年ころ

場所　駿河灣に沿うたる砂丘の上

登場人物

醫師早瀨秀作　五十歳
妻　光子　三十七八歳
長女　かつら　十八歳
長男　鐵雄　十五歳
次女　玲子　十四歳
三女　漾子　十歳
次男　富士郎　八歳
女中　たき　二十五歳
請負師藤川權七　四十歳
老僕清水六左衞門　六十二三歳
都會の青年

第一幕

　晩秋の午後。海岸にちかき小高い山の上の古い寺の庫裡の一部分。正面十疊の間。廻り濡れ緣。つゞいて奥の方へ次の間及び玄關がある意。玄關の一部分だけが下手に見えて丸窓などが切つてある。玄關から下手へやゝ歩いたところからうしろの方へ段々があつて、そこを下つて縣道へ出られるつもり。梧桐が玄關の横へ一本、特に目立つ。山茶花が咲いてゐる。上手下手へ緣。上手には築山がある。

　正面に一間の床の間。浪の音が聞える。玲子と漾子が下手に立つて、見物にうしろを見せてゐる。

　白いシイツをかけた夜具がひろげられてゐ、秀作は寢床の上に起きてゐる。長い病苦に窶へ切つてゐる態である。

　かつらと鐵男が父の左右に坐つてゐる。かつらは父が咳をするたんびに父の背を擦る。

　秀作は枕もとの懐中時計を抱へては時間を見る。

秀作　光子、もう追々子供たちは立たないと汽車の時間が心配だよ。

光子　（襖を明けて次の間から登場）お父さんてば、ほんたうにせわしない。子供たちもまだ何時……（ちよつと病人の方を見て涙ぐみながら）何時たづねて來れるかわからないぢやありませんか。

鐵雄　さうですとも、學校なんか一日くらゐ休んだつていゝんですがね。

光子　あゝ……

秀作　學校を怠けることばかり考へてゐる。（かすかに笑ふ。）

　富士郎寺の下の縣道から走つて來る。つゞいて六左衛門。

富士郎　玲ちやん、馬車が來た。濱の方から。

玲子　あゝ、馬車が來ました。

漾子　お母さん馬車、馬車……（玲子、漾子つゞいて濡れ緣から座敷に上る。）

秀作　ぢや、みんな氣をつけて行くがいゝ。

光子　ではお父さんに御挨拶をなさい。

玲子　お父さん、では御大事に。お母さん。……

鐵雄　御機嫌よう。姉さん……

光子　たきや、みんなの荷物を……いゝかい？

たき　はい（玄關よりあらはれる。ショールを掛けてゐる。右

の脚が悪いので多少びつこを引いてゐる。）

光子　たき、何だね、（すこしたしなめるやうに）まるでお婆さまのやうぢやないかね。

六左衛門、子供たちそれ〴〵に蝙蝠や小ひさな手荷物などを提げて、玄關から下手にやがて縣道の方へ下る。たきは最後から跟いてゆく。光子とかつらは下手の籬のところに立つて見送る。馬車の喇叭の音。さよなら、さよならといふ聲。かつらハンカチーフを振る。秀作庭に下り杖にすがりて、上手の築山のほとりに上り子供等の馬車を見送る。）

光子（庭の方へ來て）おやツ。あなた、そんなとこにおいでなんですか。冷えてはいけませんよ。（馬車の喇叭の音聞ゆ。）

秀作　子供たちはまだハンケチを振つてる。おう、もう石橋にかゝつた。まだこつちの方を見てゐる。あのやうにハンケチを……

光子（秀作を介けて築山を下りつゝ）あなたどう思ひなさいます？　たきのことを……

秀作　たきのことゝは？

光子　さつきあんな立派なショールなんか掛けて行つたでせう。かつらだつてあんな上等なショールなんか持ちませんよ。

秀作　自分の給金を貯めて買つたのだらう。

光子　あなたは男だから氣がおつきになりません。あれはあの子の兄の藤川が東京から買つて來たんですよ。藤川だつてごらんなさい今年の六月濱の家を請負はしてやつてからは金鎖の時計は下げるし……、あたしこのごろ變なことばかり考へて心配でなりません。

秀作　今度の家のことについてかい？

光子　えゝ。こゝのお寺の離れだつてほんたうは九月には出なければならぬお約束だつたのですよ。濱の新らしい家が八月の末には出來上つて、あなたもそれに引き越すのを樂しみになすつておいでゞしたね。

秀作　さういへばわしも工事の進行がすこし遅過ぎるやうに思ふ。わづか二千圓のバラックだ。最初藤川の話では仕事は三ケ月でたくさんだ。どんなに遅くとも夏中には新らしい家に住めるといつた。（緣側に腰かける。）

わたくしの魂を打ち込まして良いが上にも良いお家を拵へてお上げいたします。

光子 それはさうです。良い家を拵へていたゞくに越したことはないんですが、何分病人が病人だからねえ。一日でも早くあの新らしい自分の家に入れて上げたいんだよ。(そつと秀作の寝姿をながめ緣側に近づいて)旦那もこれほどにお弱りなすつたのだから、もうこの冬を越すことがどうか知らつて、こないだ東京から來なすつた笹川先生もいつてゐなすつたんだよ。(かつら眼を拭ふ)

藤川 へえ……もうそれほどに御病勢はすゝみましたかなあ。それぢや一日も早く濱のお家を完成しなくちやなりませんな。

光子 さうしておくれ。あたしたちの身にしても、もしものことがあつてはならぬから、一日でも長く旦那をあの新らしい家に寝かして上げたいんだよ。もうあと幾月といふお命なんだからね。御自分でもおれは死ぬならおれの家で遠慮なしに寝て死にたいと、もう三年も四年も前からあれほどに望んでおいでだつたのだからね。どうぞあたしを助けると思つて一日でも早く住めるやうにしておくれ。

藤川 えゝえゝ、大急ぎで仕事をすゝめます。それについて奥さま、今日はすこしまたお金を頂戴いたしたいと思つてまいりましたが。

光子 (驚きて)お金ですつて?

藤川 えゝ増金を五百圓ばかりいたゞきたいのですが、へえ。

光子 藤川さん何かそれは考へちがひぢやない? もうあんたには二千五百圓といふ金がお上げしてあります筈です。

藤川 たしかに二千五百圓はいたゞいてゐます。最初のお約束は二千兩。しかし途中で不足しましたので最初に三百兩、その次に二百兩……たつた二度の増金です、へえ……

光子 だつてもうそれだけでたくさんぢやないの。約束の金より五百圓も餘分に上げたんだもの、

藤川 五百圓もですつて、へゝへゝ……奥さん今度の五百兩だつて何もこれからの仕事に使ふ金ぢやありませんよ。今度の五百兩はこれまでにかゝつた金の支拂ひに使ふんですよ。

光子 (ひどく驚いて)ぢや、家が出來上るまでには何れだけお金を上げればいゝの。

藤川　さあ、まあ千兩もかゝりますかな。(うそぶくやうに)

光子　そんなことが……そんな亂暴なことが……。

藤川　だつて、お金をいたゞかないことにはお家は出來上りませんよ。

光子　でも最初二千圓で立派な家を拵へて上げます。兄妹二人の御恩返しにとあれほど堅く言ひ切つたではないの。

(六左衛門上手の築山の陰からとぼ〳〵と登場。魚を下げてゐる。ぢつと立ち止つて縁側の方を見てゐる。)

藤川　御恩返しをしたいと思へばこそ結構な上にも結構な普請をしてお引き渡ししたいと思ふのです。結構なものはそれだけお金がかゝります。さあ、先生を揺り起して下さい。

光子　旦那さまを……この御病人を？

藤川　旦那にまたすら〳〵と一本お手紙を書いていたゞきたいのです。東京の笹山先生にね。これこれで大工の方から金の請求がある。至急五百圓貸して下さいつてね。わたし今夜八時の汽車でそのお手紙を持つて東京へ飛んで行きます。

光子　だつて笹山先生にはもうこれで七度目の手紙よ。いくら何だつて笹山先生にお金の無心ばかり。

藤川　ぢや、何かお宅さまにまだ結構な南部の釜とか何とかいふものが殘つてゐませんか。

光子　あれほど大切になすつてゐた釜といふ釜は人の手にわたつてしまつて、今ではもうたゞの一枚も殘つてはゐませぬ。あれを御覽、床の間を。鐵雄がいたづらに書いたあんな物を懸けて眺めてゐるくらゐだもの。

藤川　どうでも旦那を揺り起して手紙をもう一本書かしてください。さあ旦那を……

六左衛門　(飛び下りて來て藤川の胸倉を摑むやうにして)これ、藤川さん、あんたは何といふ人間だ。お前さん方二人はこれほど旦那さまの御恩を着てゐたから、お前は人間ぢやない。

藤川　六さん、まあ放つといてくれ。

六左衛門　あのたきの脚を見い。旦那さまはまるで御家のお嬢樣見たいにこの十年といふもの、たきのあの恐ろしい脚の病のためにどれほど御苦勞をなすつたか知れない。一度なんかお前の妹の手術をなすつた翌日から恐ろしい熱がはいつてまる二ケ月も御入院なすつたぢやないか。それでも旦那さま

はたゞの一言も愚痴らしいことも仰つしやらない。あんなもつたいない旦那さまを苦しめて貴樣は……

藤川　お前たちの知つたことぢやない。だまつとれ。

六左衛門　だまつてをれるか。罰あたり奴！

藤川　奥さん、早く先生を搖り起して下さい。ねえ、五百圓の手紙を一本さ。

光子　だつて、あれほどお苦しみなすつて、今やつと落ちつきなすつたばかりのところを……お前も人間ぢやないか。

藤川　そんなことを言つてる場合ぢやありません。今こゝで五百兩の金を出してくださらなけれやお金ができるまで工事を中止して、十日でも二十日でも待つてゐまさあ。その中には雪も降つて來ませう。

六左衛門　えゝ、腹が立つ。八月には出來上る筈の家をこれまで延ばしに延ばして、今になつてまたそんなことを。一層のこと旦那さまをお連れすることができねくらゐならおれが落の家は打ち壊してやらう。（下手へ行きかゝる）

藤川　打ち壊してどうするのだ。いつたいあれは誰の家と思ふのか。

六左衛門　言ふまでもない。旦那さまのお金で拵へてるんぢやからには旦那さまのものぢや。

藤川　お前のやうた爺は國の法律といふやつを知るめえが、まことにありがたいものぢや。法律といふもの〻お影であの家はな、出來上つて引き渡しをするまではおれの所有なんだ。だから手前たちは指一つあの建物に觸れることはできねえのだ。

六左衛門　そ、そんな馬鹿なことが、そんな理窟に合はぬことがあるものか。二千圓のところを旦那さまは貴樣にせびられて二千五百圓といふ大金を出しておいでなさるのだ。この盜人奴が。あれが旦那さまの家でなくて誰の家だ！

藤川　まあ何とでも吠えるがいゝ。國の法律つてありがたいものだ。あの家があのまゝでゐる間はおれのものだ。さあ、奥さん、旦那を搖り起して手紙を一本書かしてください。東京の笹山先生にですよ。

光子　藤川、堪忍しておくれ。あたしたちにどうしてこれ以上のお金が出來るものかね。旦那はお前お知つてる通りこゝの落においてなすつてからさへ五年にもなるのぢやないか。お

前に渡してあげたあの最初の千五百圓といふお金は早瀬家の全財産だつたのぢやないか。お前はそれからもまだ金が足りぬ金が足りぬといつては二百圓、三百圓と……そのたんびに旦那さまは血を吐くやうな思ひをなすつては笹山先生にお手紙を出して金の無心をなさつた。お前、旦那さまはもう後二月か三月の……それだのにお前は。

藤川　でございますからわたくしは建築を急いでをります。それだけ金が必要です。殘りのお金がなければあのまゝ立ち腐れにして置くばかりです。さあ、どうぞ旦那を揺り起してください。今夜の汽車の時間のことがありますで。(寢床の方へ近づかうとする。)

六左衛門　この人非人奴。おのれこの……(藤川に躍りかゝる。秀作半身を起す)

光子　あなた、どうなすつたのです?

秀作　いや何でもない。藤川か!

藤川　はい、旦那さま。またいつもの御病氣で……

秀作　お前はどうでも後五百圓なければあの濱の家は出來上らぬといふのか。

藤川　はい、どうしてもまだ五百圓は、へえ。

秀作　いよいよそれだけあればいゝのだな。

藤川　さうですな。まあ今のところでは……

秀作　おれの一生の賴みだ。今度の五百圓で埒をつけてくれ。お願ひだから。

光子　あなた……

秀作　わしは生きてゐる間にたとへ一日でもいゝからあの新らしい家にはいつて見たいのぢや。あの新らしい家で死にたいのぢや。

藤川　かしこまりました。その五百圓さへ下されますりや。

秀作　光子、硯を……

光子　はい(硯箱と手文庫を出す)

秀作　……(筆を執りぢつと考へてゐる。手ひどく顫へる、胸が痛み輕く呻く。筆を落す。)

藤川　旦那!　どうしたんです。(秀作に近づいて行つて落ちた筆を拾ひ上げ無理に秀作の手に握らせる。)

六左衛門　えゝ、この鬼奴!　人でなし奴!

藤川　旦那、さあお書きなさい。五百圓ですぜ。

秀作 …………（筆と紙を握りぢつと一點を見つめたまゝ苦しさうに呻く）

光子 あなた……（あわてゝうしろから胸を抱く）

秀作 ……………

（靜かに浪の音） 幕

第二幕

前の場から約一ケ月後の夜半

駿河灣に沿うた小高い丘の上に新築したばかりのやゝ文化式を加味した二階建の家がある。靜かな永遠の眠りを聯想させるやうな色と形の家である。階下は低い石段を上つて、ちよつと鐵の門のやうな感じの扉がある。二階には二つの窓が見える。うしろの窓から部屋のなかに月の光りが流れてゐる。たゞし窓はガラスの戸も何も付いてゐない。下手は一段低くなつて海へ下る道があり、伊豆半島土肥あたりの山が月の光りに照らされて海をへだてゝ煙つてゐる。下手に眞つ赤に熟した柿の樹が一本。芒など枯れ枯れの叢。蟲の聲。

六左衞門、つゞいてかつら上手より小急ぎに登場。

六左衞門 まつたく心配なことになりました。

かつら お父さんはどうなすつたのだらうね。

六左衞門 あのおからだでこの夜氣におあたりなさつては……。

かつら あたしたちさへ寒いくらゐだからねえ、もう霜が下りてるやうだよ。

六左衞門 しかし、それにしても旦那さまが藤川の今日の仕草をお怒りなさるのは無理もございません。お孃さまあれを御覽なさい。せつかく旦那さまが三千圓にちかい大金をおかけなすつて、あのやうに御普請なすつたばかりの家を、窓の硝子も、床の板まで引つぺがして夜の明けぬうちに馬車で運び出すなんて、まあ何といふ恩知らずでございませう。

かつら 爺やあたしくやしくて……お父さまの心を察すると耐らない。あれほどたのしみになすつておいでだつたんだからねえ。

六左衞門 それにあんなにお弱りなすつたのではお氣の毒なことですが、いつ……

かつら お父さまは美しい家で死にたいとばかりいつてゐら

つしやるにねえ。

六左衛門　ともかく海岸の方を手つとおさがしいたしませう。奥さまがすぐ後から追つかけておいでなすつたといひますから大丈夫だとは思ひますが……

かつら　お父さまは藤川を殺してしまふつていつてらしつたんだからねえ。

六左衛門　お察しいたします。爺やだつて泣かずにはをれません。この夜寒に旦那さまは……それにしてもあのたきにしてもまる十年といふもの、あの骨の髄まで腐つて行く足を絶えず旦那さまに手術していたゞいて、海山ほどの御恩を蒙つてゐる筈でございます。それだのにあいつまでが一緒になつて旦那さまにこのやうな仕打をするとは……

かつら　爺やあたしたちが不運なんだよ……（下手へかゝる）

六左衛門　はい……（月を仰ぎながら氣拔けしたやうな態にて下手へ）

（藤川とたき家の中からあたりに氣をくばりながら出て來る。）

藤川　六左衛門の爺世迷言をくりかへしてゐやがる。幾らくやしくとも引き渡しをすまさぬ間はこの建物は請負者のおれのものだ。肺病醫者の金を絞つてこの家を建てたが、引き渡しさへすまさなけやおれのものなんだからなあ。國の法律といふやつがちやんとおいらのためをはかつてくれてるのだ。法律つていふやつはありがたいものだ。

たき　兄さん、旦那さまだつて可哀想ぢやないの。

藤川　お前だつておれとぐるでかゝつたのぢやないか。

たき　最初はあたしだつてお金が欲しかつたので兄さんのために便宜をはかつたけど、兄さんがこんなに惡いことをしようとは思はなかつたわ。あたし今日は何だかすこし旦那さまが可哀想に思へて仕方がないのよ。旦那さまは今日はもう二度も血を吐いたわ。もうお長いことはないと思ふわ。

藤川　死ぬにやすぐ死ぬだらう。それが當人のためだ。病の苦しみをのがれるだけでも仕合せといふものさ。

たき　それで兄さんどうするつもりなの？　いつまでも旦那さまに家をわたさないで。

藤川　もう五百圓も金を出したら、いよ〳〵この家を引き渡すことにしようよ。

たき　まだお金を出せつていふつもり。

藤川　知れたことよ。引き渡さないで置けばこつちのものだ。幾度でも金を引き出すんだ。法律といふやつがおれたちの味方だ。

たき　兄さんもういゝ加減にしたらどう。お氣の毒だわ。あんた惡黨みたいね、まるで。

藤川　何が惡黨なものか。惡黨つていふのは法律がゆるさぬことをする人間だ。法律がゆるすことをするのは正しい人間だ。

たき　わたしにはそんな理窟はわからぬけれど……もういゝ加減にした方がいゝわ。おや人が來たやうだ。

藤川　肺病醫者だ！　あのあはれなざまを見ろヒ、ヒ、ヒ……

（二人上手に退場。遠くで笛の音が聞える。浪の音）

（早瀬秀作、光子に介けられ下手より登場。半ば死したる人のやうに衰へてゐる。つまづきて倒れ、しばらくは突つ臥してゐる）

光子　あなた！　どうなさいました。あなた……（秀作を抱き起し

秀作　あゝ光子！（ぢつと新らしい建物の方をながめる。月の光りが家の中へ流れてゐる）

光子　しつかりしてください。あなたにもしものことがあつたらどうしませう。あなた、しつかりなすつてください。

秀作　わたしももう悟つた。わしは何も考へまい。人間といふものは弱いものだ。わしも人並には心の修養も積んだつもりであつた。だがいさとなればあさましいものだ。

光子　無理もありません。（新らしい建物の方を眺める）

秀作　けさ、藤川があの家の窓から床板までも剝がして馬車に積んで行つたことを聽いた時、わしはまつたくあの男を殺さうとさへ思つた。わしはこれではたまらぬと思つた。わしは氣を落ちつけるつもりで碧巖集を出して讀んだ。幾時間讀んでゐたか知らぬ。だがわしの頭には何も映つては來ない。——

（寂しき笑ひ）

光子　あれほどあたしたちを信頼さして置いて……人間のすることぢやありません。あれを御覽なさい。窓も扉もみんなはづして運んでしまつたんです。

秀作　もう何もいふな。わしが[illegible]い人間だつたのだ。わ

しは正しいものは常に勝つと信じてゐた。わしは今でも信じてゐる。わしは今日はじめて警察へ行つて法律といふものゝ矛盾を知つた。あの人たちがいふやうにわしはお目出度い人間だつたのだ。

光子　駄目だといふんですか？　あの家はまだあたしたちには何うする權利もないといふのですか。

秀作　今日の法律ではあの男の要求するだけの金を出して、引き渡しをすませるまではあの男の所有だといふのだ。

光子　だつて約束の金よりか千圓もたくさん渡してあるぢやありませんか。あたたに無理に手紙を書かしては催山先生から金を出さして。

秀作　だけど警察の人たちがいふやうにわしは藤川を信用して契約書を取らなかつたから何うすることもできない。この上あの男にどのやうに責められてもわしはそれを何うすることもできないといふのだ。

光子　契約書がなくつたつてみんながちやんと聞いて知つてるんぢやありませんか。

秀作　法律ではそれは何の役にも立たぬといふのだ。つまり信用したことが惡いといふのだ。お目出度いといふのだ。お目出度い人間は今日の社會では自滅しなければならないといふのだ。

光子　だつてそんな不合理なことが。

秀作　常識上からは千人が見て千人正しいと思はれる者が法律上ではお目出度い人間になるのだ。千人が見て千人不正と認められるものも今日の法律で罰せられぬことになるのだ。

光子　ぢや、あたしたちはどうすればいゝんでせう。こんなひどい目に逢つてもどうすることもできないんでせうか。

秀作　どうすることもできない。お前がお目出度いのだとあの人たちはいつた。

光子　しかし、幾ら法律だつて、そんな不合理なことが。

秀作　わしはさうは思はない。法律といふものはそんなものぢやない。正しい者が正しくない奴に馬鹿者扱ひにされるやうな掟は法律ではない。わしは人間の作つた法律以上の力を信ずる。わしは屹度勝つて見せる。

光子　だつてあたしたちの弱い力では……

秀作　だが、考へて見るとわしも間違つたことをした。わし

があの家を建てようとしたのがそもそもの考へちがひであつた。

光子　だつてあなたはずゐぶん長い間夜も晝も不幸な患者たちのために働きなすつたのです。あなたの病氣もそのために出たといふぢやありませんか。あの家にはいつて、靜かに養生なさらうといふのはちつとも間違つたお考ぢやありません。もう疾の昔に出來上つて、今ごろはあの窓から今夜のやうな晩には月でもながめてゐらしつた筈ですに……

秀作　お前たちがわしの病氣のことを心配してあれほどにまでして家を建てゝくれたのはまことにありがたい。お前やかつらまでが指環まで賣つて五百圓の金を拵へてくれた時、わしは泣いた。あの晩わしは幾度か夜具を冠つては泣いた。わしがはじめてこの濱の丘を歩いたのはたしか五月であつた。こゝいらには一面防風の白い花が咲いてゐた。雲雀も鳴いてゐた。わしはこゝに小ひさな氣持ちのいゝ家を立てゝ靜かに生きてゐたいと思つた。

（笛の音が聞える。やがて都會人らしい青年が笛を持つたまゝ下手から丘の端を上手へ退場）

光子　あたしたちもどんなにかあなたを一日も早くこゝの家へお連れしてよろこばしてあげたいと思つたでせう。

秀作　いや、お前や子供たちまでが何も彼も犠牲にしてわしのために濱の家を建てゝくれてゐるのを見るにつけて、わしの考はかはつて來た。わしは醫師だ。この春笹山君が東京からわざわざやつて來てくれてわしを診察した。わしは笹山君が馬車の中でお前にどんな診察の結果を話したかは知つてゐる。

光子　あなたそんなことを……

秀作　恐らくこの冬を越すことができるか、できないか……わしの命はもうきまつてゐる。

光子　あなたそんなことが……

秀作　いや、わしの病氣についてはわしが誰よりも一番知つてゐる筈だ。わしはお前や子供たちの將來のためにこゝに家を建てゝ置くことは賢明なやり方だと思つたのだ。わしはお前たちのやさしい心を見るにつけても、わしのことを考へてはいけないと思つたのだ。わしはあの陰氣な寺の庫裡で死んでも寂しいとは思はぬ。

光子　だつてあなた。あなたはあの苦しい病氣の間にも藤川に筆を握らせられてまで、笹山先生に金の無心狀をお書きになりました。それを思ふと……

秀作　さうだ、わしは笹山君にちやうど七度金の無心を言つてやつた。笹山君はいつも親切であつた。だがわしはこの世界に生きてゐることのできない人間なのだ。わしはそれを知りながら笹山君に金の無心狀を七度書いた。笹山君はわしの病態を知つてゐる。わしは返濟の目あてもない金の無心を言つてやつた。わしは笹山君の親切に對しても恥づかしい。

光子　あなたがすつかりお癒りにさへなればお金はいつでもかへせるぢやありませんか。

秀作　わしは醫師だ。わしは笹山君に無心の手紙を出すたんびに心のうちでは立派に笹山君を僞つてゐたのだ。

光子　あなた、そんな馬鹿なことが……

秀作　いや、まつたくさうだ。わしの死後保險金の外には一文の收入もないお前たちのみじめな生活を思ふと死ぬにも死なれない。わしはお前たちがわしのために建てゝくれるこの濱の家について考へたのだ。ぜひともわしが生きてゐる間にこの家を建てゝ置かなければならぬと思つたのだ。せめてわしの貧しい遺産の一つとしてお前なり鐵雄なりにこの家をゆづつて置きたかつたのだ。

光子　いゝえ、そんな氣の弱いことを仰しやらずと……

秀作　そしたらお前たちの生活を支へる助けにもならうと思つたのだ。だからわしは七度も金の無心を書いた。わしは笹山君に無心の手紙を書くたんびに自分の心のあさましさに泣いた。金といふものゝ力の恐しさをはじめて知つた。わしはもう死なねばならぬ。だがわしには金が必要なんだ。お前や子供たちのことを考へるとわしは死ぬにも死ねない。金だ！　金だ！　金だ！

光子　さあかへりませう。お冷えになるといけませんから。

秀作　わしは死ぬまでにどんな恥づかしい思ひをしても金を拵へなければならぬ。子供たちのために家を作つて置かねばならぬ。わしは金が欲しかつたのだ。しかしわしのやうな病人には金を産み出すことはできない。唯一つの金を產み出す方法は友情に賴ることだつたのだ。わしは三十年來の美しい友情を金に換へたのだ。笹山君はわしが死んだ後でもわしを信

にこくれるにちがひない。だがわしは笹山君の美しい友情を金に替へてしまつた。子供たちの幸福を思ふ時、わしは人間らしいわしの心を惡魔に賣らなければならなかつた。わしは死にかゝつた今日になつて金のことばかり考へなければならぬことになつた。

光子　もつたいないことでした。あのやうに血を吐いてお苦しみの時でも藤川はあなたに筆と紙とを突きつけました。

秀作　いや、わしには結局藤川のあの殘酷なやり方が仕合せであつた。わしは病氣で苦しんでゐる最中に手紙を書かされたにはちがひない。わしは藤川の冷酷な心を憎んだ。しかし同時にこれこそ友情を金に替へるわしの醜い心に神の鞭が當てられてゐるのだとも思つた。わしはあの時喀血したまゝ打ち倒れて笹山君に金の無心状を書いたことを、せめて笹山君の美しい友情に對しての申しわけだとも考へてゐる。

光子　あなた、さあかへりませう。病氣にさはるといけませんから。

秀作　あゝ……（寂しく上手へ寄る。）

（藤川とたきが上手から登場。たきはカンテラを下げてゐる。）

藤川　ヒ、ヒ、ヒ、……旦那さまですか。

秀作　藤川か。もういゝ加減にして家は引き渡してくれ。わしも病人のことだしするので。

藤川　えゝ、えゝ、お引き渡しいたしますとも。そりや明日にでもお渡しいたしますよ。だが後三百兩はどうでもくださらたくつちや。それだけまた餘分にかゝつたものだから仕方がありません。

秀作　お前はまた同じことを言つてはわしを苦しめるのか。わしがからださへ丈夫ならそりやそれくらゐの金は何とかしても上げようが、このからだでは何もできぬ。藤川、わしが頼ふ、どうぞそんなことをいはないで明日にもあの家はわしに引き渡してくれ。

光子　藤川、お前にしても、妹のたきにしてもこんなことをいふのはをかしいが旦那さまにはずゐぶん御厄介をかけたんではないか。もうお前お金にしても二千圓といふ約束のところを三千圓渡してしまつたんだよ。それも旦那やあたしたちがどんな苦しい思ひをして渡した金と思ふ……

藤川　御恩は御恩、ありがたいと思ひますよ。だが金の問題は

また別ですよ。損ばかりして人様の家を建てたんぢやわれわれ請負師は首でも縊らなくちやなりますまい。

秀作　ともかくわしももうすぐ死ぬであらう。藤川、どうだわしが生きてゐる間にあの家を引き渡してくれ。わしはあの家にはいつて一日でもいゝから安心して死にたいのだ。

藤川　旦那さまにあの家をわたしてしまつて、お金は貰へず、それきりにたつた日にはわたしの方こそ飛んだ災難だ。わたしの方とすれば一日でも早く旦那さまが生きておいでの間に金だけはきちんとお拂ひして置いていたゞきたいのです。

秀作　では、どうあつてもこの上三百圓の金を上げなければ引き渡しはできないといふのか？

藤川　さうですとも。あれからまた餘分に三百圓といふ金がかかつたのですからね。それに御異存がおありでしたら警察なり、裁判なりにお訴へたさい。契約書といふものが口を利く世の中ですよ。——お前がお目出度いのだ——さうでしたね。旦那はあべこべに叱られてゐましたよ。わたしはちやんとさつき警察の窓から覗いてゐましたよ。法律といふものがちやんとわれわれを保護してくれるんですよ。夜も晝も頭をなやまして他人様の家を作り上げたわ、さあ金が貰へぬわぢや請負師はまつたくあがつたりでさあ。旦那、法律といふものがありますんでね、わたしらは安心ですよヒ、ヒ、ヒ……

秀作　お前はそんな不人情なことをいふのか。あの家はたしかにわしの金で拵へた家だ。わしの所有にちがひない。

藤川　御冗談でせう。お引き渡しはまだしてゐませんよ。さあ三百圓のお金を出してください。

光子　藤川、もうお前もいゝ加減にして旦那さまにあの家を引き渡しておくれ。この寒いのに旦那さまはお前があんなことをしたばつかりに警察にまで出かけたすつて……

藤川　警察に行きなすつたところでやつぱり駄目でさあ。法律といふものを曲げることはできない。法律つてありがたいものでさあ。

秀作　ではお前は後の三百圓を增して上げなければ家は引き渡してくれないといふのだた。

藤川　そりや無論のことぢやありませんか。たとへあなたがもしお亡くなりになるやうなことがあつたとして……

光子　藤川、お前はそんなことを——

藤川　いゝえ、萬一の場合でございますが、それにしてもあたしは奥さんにでも三百圓のお金をいたゞかないことには、あの家はお渡しすることはできませんよ。

秀作　お前は畜生だ！　お前はわしの家をこのまゝにして置いてわしの妻子まで苦しめようといふのか。

藤川　まあそんなものでせうかな。あの家さへあのまゝであればたとへ旦那がどうおなりなさらうと、わたしは奥さまなり坊つちやんなりにお金を請求する權利がありますからねえ。

秀作　お前は何といふ人非人だ。あの家をあのまゝにして置いて、わしが死んでも、子供たちまでも苦しめようといふのか。

藤川　あなたも變な罠におかゝりなすつたのさね。

秀作　わしが頭を下げてのお願ひぢや、どうぞもうこれくらゐのところであの家を引き渡してくれ。お願ひぢや。わしはともかく、わしは遺された子供たちまでも苦しめたうはない。わしは子供たちの幸福のためにあの家を建てゝやる考であつたに……

藤川　罠でさあね。法律の罠でさあ。引つかゝつたのが不運さ

ヒ、ヒ、ヒ……！

秀作　藤川、わしの最後のお願ひだ。おとなしく引き渡してくれ。わしはもう明日にも死なうも知れぬ。わしをあの家で死なしてくれ。

藤川　飛んでもない。あの家で死にたけれやもう三百兩の金を出して下さい。

秀作　わしはもうお前には頼まぬ。わしはわしの力ではいつて見せる。わしの家だ。わしの金で作つた家だ。

藤川　旦那、法律の力がゆるしませんや。法律ほどありがたいものはありませんてヒ、ヒ、ヒ、……

秀作　わしは法律の力を恐れはせぬ。わしは正しいものゝ力を信ずる。

藤川　旦那、法律の力に勝てるものがありますかい！　法律の力に勝てるなら勝つてごらんなさい。わし等にとつては法律ほどありがたいものはありませんやヒ、ヒ、ヒ……

秀作　……（突然たきのカンテラを取り、よろめきながら家の中に飛び込み、玄關の戸を中から鎖す。）

光子　あなた、あなた………

（六左衛門、かつら下手より急ぎ登場）

藤川　旦那、馬鹿な眞似をしなさるな。カンテラを提げて二階から月でも眺めるつもりなのかな。まあそれもよからう。しかし旦那もう一度東京の俺山さんに無心の手紙をお出しなさい。金にしてたつた三百兩。それだけで問題は決まるんですからね。

光子　あなた、どうなさいました。あたた（ひどく玄關の戸を叩く）

六左衛門　旦那さま、旦那さま……

かつら　お父さま、お父さま……

（突然家の中から炎があらはれ、黒い煙が立ち上る。）

藤川　ちえツ火を放けやがつたな。いま〳〵しい。（玄關の戸をこぢ明けて家の中へ入らうとする。炎がはげしくて入ることができない。）

光子　あなた、あなた……（上手の窓から飛び込まうとするが炎のために入ることができない。）

かつら　お父さま、お父さま……

六左衛門　旦那さま！旦那さま！（玄關の戸を打ち壞して中へはいらうとする。戸の一部分が壞れる。炎ます〳〵さかんに燃ゆ。）

光子　あなた、あなた……（狂人のやうになつて炎の中に飛び込まうとする。六左衛門、かつら抱き留める。）

（藤川はいま〳〵しさうに突つ立つてゐる。たきは袂で顏を掩ふ。）

（炎ます〳〵はげしく。浪の音。）

幕

編輯だより

◇海軍軍縮による餘剩金の使途が政界の一問題となつた。それは斷乎減税へ。

◇濱口内閣が飽くまで非募債主義で行くのも考へものだ、こんな押しつまつた財界に、そして隨分緊急な施設を要するものが多いのに何もその主張に執着する必要は毫もない。活きた問題は生々した財政觀で行くべきだ。それが名譽といふものだ。而して非募債主義豫算も既に二年度に亘つて實行しているではないか。君子豹變なぞと誰も誹謗するものもあるまい。

◇『改造』十月増大號は壓倒的の賣行きを示したのは愉快にたへない。本月號は長驅して全プロレタリアート信仰の的である「閑士河上」の力作『第二貧乏物語』を大附錄として添付することにした。

◇河上博士が廿年の學園生活を敢然として一蹴し、無産階級の最前線に立つて勇敢なる鬪爭に從事しつゝあることは國民大衆の均しく感激するところ。

◇そしてプロレタリアートの指導理論家として武裝せる筆陣の鋭さにはけ本主義陣營の戰慄する所だ。今回附錄とせる『第二貧乏物語』は本誌に連載せるものに新たに百餘頁を追稿したものだ。本書こそは實質において、聲望においても、その使命においても斷然讀書界に君臨するものであることは萬人の均しく認むる所。

◇我々はこれを劃期として出版界に、雜誌界に一大飛躍を遂げる。

◇近頃讀んだ書籍のなかで「ボローヂン脱出記」が一番おもしろかつた。支那奥地の現勢、思想、ソビエットの雄圖、ゴビの神秘、蒙古の文化、の概觀が看取され、そしてこの民族の歴史的展開かいろいろと考へさせられた。

◇この書によつて我々は蒙古に國家貨幣制が確立し、そしてその金融がソビエットに歸し政治の動きも全然我國なぞとは關係のないことをも知らねばならぬ。

◇そして廿年前は一匹のタルバガンの皮をマッチ一個と交換したが今では三留になり、羊單位が紙幣單位となり、組織勞働者が出來、百五六十の小學、十餘の大學のあることをも知らねばならなかつた。革命兒ドムバドルチの前途とともに蒙古の前途はすべての方面に刮目すべきものがある。此一書により我國としての蒙古を考へて見る氣にもなる。

◇『改造』懸賞創作募集は十一月卅日を以つて必ず締切とする。應募者はこの期日に後れぬこと、そして楷書で丁寧に認めて貰ひたい。應募原稿は幾度も繰返した如く返却は斷じて致しませぬ。

◇『日本現代文學全集』の十月配本は久保田万太郎集、室生犀星集、長與善郎集だ。十一月配本は中澤臨川集、生田長江集、片上天弦集吉江孤雁集とする。十二月は愈々本全集を完璧にする計畫を發表したい。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和五年十月十八日　印刷納本
昭和五年十一月一日　發行

特價八拾錢（送料本誌附錄書籍八錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇　山本三生
印刷人
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ四〇　改造社
振替東京八四〇二
電話芝(43)一二二一、一二二二、一二二三、一二二四

KAIZO

改造

別冊
大附錄

第二貧乏物語

十一月號

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
[illegible]LITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
[illegible]RICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
[illegible]FFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.